現代日本文學全集

PL 838 A88 1927

Satomi, Ton
Satomi Ton shū

East Asiatic Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

里見弴集

佐藤春夫集

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

杉浦非水裝幀

里見弴集

佐藤春夫集

改造社版

LIBRARY
MAR 24 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

PL
838
A88
1927

下、佐藤春夫氏の近影

上、最近の里見弴氏

Digitized by the Internet Archive
in 2010 with funding from
University of Toronto

http://www.archive.org/details/satomitonshu00sato

「里見弴集」目次

卷頭寫眞（照影）
序詞（筆蹟）……四
多情佛心（前篇）……五
多情佛心（後篇）……一四七
椿……二八八
父親……二九一
銀二郎の片腕……三〇三
善心惡心……三一三
年譜……三三五

「佐藤春夫集」目次

卷頭寫眞（照影）
序詞（筆蹟）……三四〇
田園の憂鬱……三四一
都會の憂鬱……三九九
お絹とその兄弟……四七六
星……四九三
女誡扇綺譚……五一二
西班牙犬の家……五三七
窓展く……五四二
一夜の宿……五四八
年譜……五五六

里見弴集

私は飽きて来る心を物を正しく観るの
はっきり感じ、遂に真実の境に迄
突き入り、解らうと思ふ。私は一生を
費すことに捧げ尽してゐる者だ。
従って小説を書く動機もそれで、
解りたい為に書き、解りつゝあることを思へるから
書き、解り得たらそれを人に言はずにはゐられなくて
筆を執ることにあるのだ。

昭和二十年初夏

里見弴

多情佛心（前篇）

序詩

あさ

しら〳〵と明けはなれて行つた。

涼しげに小鳥が唄ひだした。

見渡す草原は朝露にうるほひ、早起の花ども悉く振り仰いだ。

大枝小枝を張つて、欅の老木は思ひきり伸びをした。

まづその梢から、旭に照り映えたと見るまに、空は、深まさり、蒼み亙つた。

勢よく、烏の群が出かけて行つた。

陽の色と、朝の匂に染まつた空氣の、ごく微な流れが動いた。

窪地の古池だけがまだ眠りこけてゐた。鰭には搖れず、蛇にも過られず、翡翠も掠めず、落葉も浮べず、沼氣さへもあぶく立たなかつた。たゞ寂として、もの皆の影を映してゐた。

そこに、緩い傾斜を、男の子が駈けおりて來た。赤い、はち切れさうな頬、圓眼。

續いて女の子は、草露に、ちよいと裾をたくしあげ、あちこち拾つて、ピョイ〳〵と跳ぶやうにしておりて來た。

上の平地に立つてゐる欅は、もう根本まですつかり日射のなかにあつた。それでも、坂を下り、池を渡つて、對岸の土手の上までも、長い影を落すやうな斜光が、子供たちの立ちどまつたところへ、末廣がりの縞になつて、眞正面からさしてゐた。

男の子は、ぢつとその光の縞を見詰めた。池の面から立ち騰る水蒸氣が、そこへはいると、ほのぼのと眺められた。

「あら〳〵、ぐちよ濡よ」

女の子は一目うすべりの色を見てさう云つた。土竈、土釜、錫の鍋や皿、茶碗、どれもこれもせい〴〵大きくてマッチ箱ほどしかない臺所道具が、濡れとほつて、褐ツちやけたうすべりの上に散亂してゐた。なかには、草の葉を盛つたまゝの皿があつた。葉は、ペショ〳〵に、黝ずみ凋れてゐた。

「だからあたし、うちに持つて歸つとかなくつちア駄目だつて云つたのよ」

「ぢア持つて歸りやアいゝのに……」

「だつてほつたらかしといても大丈夫だつて云ふんですもの」

「誰がさ。……僕アそんなこと云つた覺えないよ」

「ぢア美代ちやんだつたかも知れないわ……」

「だつていゝぢアないか。どうもなつてやしないぢアないか」

やつと、光の縞から目をはなして、うすべりの方を振向くと、「ほら、一つだつてなくなつてやしまい？」

「なくなつてやしないけど、これぢア坐れやしないわ」

「いゝよ、今ぢきに乾くよ。……だけど、僕ア今日はいんないぜ」

「なアぜ」

「まゝごとなんてつまんないや」

「あらア……」

「だつてさうぢアないか。まゝごとなんて、男のすることぢアないもの」

「意地惡根性ねえ」

「なにか意地悪たい」
「だつて、昨日まで仲間にはいつてゝ……」
「そいだつて、いゝぢアないか……」
「えゝ、いゝわ」
「なアんだい。なにがいゝんだい」
「だからいゝことよ。今日はなんかほかのことして遊びませう。ねえ？　そんならいゝでせう？」
「……うん……」
「清ちやんみたいに、すぐそんなに本氣になつて怒るのいやだわ。ね？　仲よくしませうね？」
　陽がのぼるにつれて、空はいよいよ色を深め、樹々の若葉は光り輝き、寝坊な池水も、爽かな朝風の訪れに、漣の微笑を反して、もの皆の倒影を、だんだら縞に搖り動かした。つれ舞ふ蝶は、高く低く野花を掠めて、やがて見えなくなる……。
　どこか遠くで鶏が鳴いた。
　男の子は、なんとも云はずに、ふと女の子の眼を見た。女の子もぢツと見返した。
　どこか遠くで、もう一度鶏の聲がした。
　たゞなんとなく、うら悲しいやうな心持になつて來て、男の子は目を野末に放つた。女の子は、膝の上に両袖を重ねて、淋しくそこへ蹲むと、雛の皿をとりあげて、濁れた草の葉を摘み捨てた。皿の中は濡れてゐた。
　ほそん、と吐息をついた。
「いゝ、いゝ、あめんぼうを掬はうか」
　眞面目くさつた顔つきをして、男の子は池の面を見詰めてゐた。
「……えゝ？……ゐて？」
　女の子は、俄かに快活に、立ちあがると、すぐ男の子と肩を並べて、「でも、なんか掬ふものがなくつちやア……」
　細い足のさきにちよつと水を窪ませて、スウイスウイと居どころを變へる小蟲が、ひとしほ少年の心を淋しくしてゐた。
「……うん……」
　今度は、意識的に向き直つて、丁度同じ丈格構の女の子を、正面に見た。
「……？」
　小首をかしげて、娘の子もぢツと見返したが、瞳と瞳とがきツちりあつて、一二秒もすぎないうちに、男の子は、ほとんど渋面をつくつて、
「もう歸らうか」
「……えゝ……」
　と、微に、うち頭垂れて答へ、暫くしてから、「……なんか怒つてるの？」
「うゝん、なんにも怒つてなんぞゐやアしないさ、だけど、……ごめんね……！」
「あら！　なぜあやまるの」
「僕、意地悪いつてごめんね」
「まアいやだ。清ちやん、ちつとも意地悪なんぞぢやアしないわ。それよか、あたしこそごめんなさいね……」
　もう一度、瞳がピタリとあつた。いつどちらから寄つたともなく、二人は、鼻と鼻とが觸れ合ふばかりに近く立つてゐた。
　男の子は娘の、娘の子は少年の、瞳のすぐうらに、自分のとまつたく同じ心を見た。もう羞かしさも何もなかつた。相手と目を見合せてゐるのではなくて、今はたゞ自分を見詰めてゐるのだつた。
　――その自分は、泣きだしたいほど嬉しがつてゐ、淋しくなるほど甘えてゐ、身ぶるひが出るほど眞面目くさつてゐた……。
　紺青の朝空も澄み渡り、楠の老木は葉をふるひ枝を垂れ、池水は汐の如くひき、小鳥の唄も蝶の舞も消え行くよとばかり、世はこゝに、二人の小さな心の上に凝り凝つて、たゞしんしんと耳のはたに鳴つた。そして、これが、夢ではなかつた。……　時が飛び去り、時が飛び來

つた。
　涙がおのづと溢れたと思ふ間もなく、お互の顔がぼやけて行つて、睫につたはる水玉には、大空の光りが映り輝き、硝子の破片から窺いたやうに、滅茶苦茶なものゝ影ばかりが、キラキラと搖れ動いた……。
　それで、少年が恥しいと思つた。
　くるりと背を向けて、手の甲で洟水を啜りあげると、そのまゝ少年は土手を駈けあがつた。風に切れて、涙が揉上の方へ飛んだ。あがりきつたところで、駈けながら振り返つて見た。池を背に、女の子が、ぽかんとこつちを見上げてゐた。いつの間に出たのか、眞ツ白な雲が一つ、くツきり水の面に浮んでゐた。ちよつと立停まらうとして、よして、そこからは、わざと二三歩おきに跳びあがるやうな駈け方をして、榛の木の林の方へ行つた。もとよりそこに、なんにも彼を待つてゐるものがあつたわけではない……。
　後姿が見えなくなると、急に女の子は悲しくなつて來た。ひとり置いて行かれたとか、こつちを振り向いて顔を見合せながら、立停りもしずに行つて了つたとか、そんなことで悲しくなつたわけではなかつた。それどころか、男の子の心持が、——草土手を駈けあがつて行く時の心持が、すつかり自分の胸へも映つて來て、うれしくつて、……嬉しいからこそ悲しいのだつた。
　母親の乳よりも甘い涙が、止めどもなく、あとからあとからと流れて來た。ペタンと草の上に坐つて、袂を顔にあてた。草や濕つた土の匂が、淸々しく鼻の穴へしみ込んで來た。
　いやよ〳〵いやよ、淸ちやんいや、いや〳〵いや！　どこからともなく、さう云ふ言葉が浮んで來て、たゞもうかぶりを振つてゐたかつた。隈もなく滿ち足りた心が、何故か、「いや！」と云ふ言葉を叫び續け、何かもつと辛いことを欲した。そして、悲しさうな涙が止めどなく溢れた……。
　泣けるだけ泣いたあとは、心持が急にカランとして、輕く面白くなつた。すぐ男の子のそばへ行かうと思つた。そんなに遠くへ行つて了はないことは、よく解つてゐた。それでも、目のふちが赤く泣き腫れてゐはしまいかと思ふと、きまりが惡くなつた。袖口で、抑へつけるやうに、もう一度よく目のまはりを拭いてから立ちあがつて、ひよいと上の方を見ると、男の子の頭だけが、土手の上へ出てゐた。
「いやアー」
　思はず大きな聲をだして、うしろ向に、草の上に突伏たが、すぐまた身を起すと、兩袖に顔を隱したまゝ、「ひどいわ、そんなとこから默つてみてるなんて……」
　と云ふ聲に、けれども、喜びが滿ちてゐた。
　少年は、すぐ傾斜の頂きに跳んで出て、駈下りようとした足を止めた。
「あのね、仙ちやん、こつちいおいでな、いゝ花が澤山あるところを見つけたから—」
「あらさう？　ほんとう？」
「嘘なんぞつきアしないよ。……早くさ、早くおいでつたら……」
　促し立てられるまでもなく、もう娘の子は、どん〳〵土手を駈けあがつてゐた。ほとんど鳥瞰的に見おろしてゐた少年の心は、輕く、明るく、そして愉快だつた。草深いところへかゝつて、歩き惱さうに、それでも一刻も早くと、肩を搖つて大股にあがつて來る、——自分ならばひとつ跳びだ、と思へば、ひとりでに微笑さへ浮んだ。
　あがりきつた女の子が、その微笑してゐる少年と顔を見合せると、すぐこれも微笑つて目をそらした。

「おゝ苦しい」
眞ッ赤になつて、ハァ〳〵息をきらしてゐた。
男の子は、迎へよつて、手をとると、いきなり一散走りに驅けだした。首がうしろへガクンとなるほどに、腕が拔けるほどに、力一杯引ッ張られて、女の子も夢中で驅けた、二人の足は、夏草よりも、むしろ宙を踏んで・・。

よる

蒼晴い空に、凍てついた星の數はたんとでもなかつた。
風は凪ぎ、大氣は冷えきつて、轍のあとをそのまゝに、往來が石になつてゐた。
高く低く空を劃つた屋根の下に、家々は大方もう戸を鎖して、藥屋、唐物屋の飾窓、蕎麥屋の腰高障子、小さな煙草屋の、うちから金巾の幕を引いた硝子戸、自動車屋の車置場、――幅をもつた火影とては、さうした店の前にしか流れ出してゐなかつた。濕氣の涸れ果てた空氣には、軒燈や看板の照明はにじみもしずに、ポツンポツンにべもなく續いた。
兩輪はづして立てかけてある手車のそばから、のそりと起きあがつた犬が、用ありげに、電車通りの方へ出かけて行つた。そつちの空には、カアン〳〵と、金槌の音が響いてゐた。
釣鐘マントと、鼻のさきまで肩掛を卷きつけた束髮と、二人の姿が一つに塊つて、五六軒しもた屋の並んだ薄暗がりから、錢湯の、高山の景色を描いた看板を照す五十燭ばかりの灯の下に現はれて來た。首をすくめ、前こごみになつて、小刻みに、薩摩下駄と薄齒の足音が揃つてゐた。束髮の頂が、丁度、深くかぶつた鳥打帽で、いくらか押しひしやげられた耳と、すれすれの高さだつた。
角を一つ曲ると、支那蕎麥の屋臺がズルリズルリ動いて來た。ほんの心もち二人の肩が離れて、すれ違ふとき、脂ッこい肌からでも立ち騰つたやうな湯氣に、生温かく二人の頰が舐められた。
「クフン」
息で鼻の穴を淸めてから、「臭いな」
「えゝ、ほんとに……」
それきりで、二人はまた前の沈默に返つた。
往來は、だん〳〵淋しい屋敷町になつて行つて、薄齒の音が冴え、響き亙つた。
「だけど……」
五六歩も歩いて、まだ男はそのさきを云ひ出さなかつた。
「だけど、なアに？」
「やつぱり僕、送つて行くだけにしようよ」
「あら、なアぜ？」
「惡いもの」
「あら、ちつとも惡くなんぞありやアしないわ」
「だつて、今時分から行つて、寢床やなんか、……小母さんに惡いや」
「ちつともそんな心配いらないわよ。うちぢア、しよッちうお泊りのお客樣があるから、いつだつて二階の押入にちやアんと用意がしてあるんですもの」
「だけどね、なんだか……」
またそれきり默つて了つたので、娘は顏を覗き込むやうにして、
「どうしたの？ そんなこと云つたつて、第一今時分から歸れやしないわ」
「歸れるさ。まだひよつとすれア赤電車に間に合ふかも知れないし、なけれア俥を探すよ。俥もなけれア歩いたつて知れたもんだ」
「あら、歩いちア大變だわ。そんなこと云はないで、泊つていらつしやいよ。歸つたらすぐに電話でうちへさう云つとけばいゝんぢアないの」

「だつて、隣の電話だからね」

「構やアしないわ。まだやつと一時かそこらでせう。あたしなんぞいつだつてほんとに眠るのは二時三時よ」

「それアね、電話なんぞ明日の朝だつて構やアしないんだけれどもね……」

「ぢアなにがいけないのよウ」

娘の聲音は、いかにもじれつたさうだつた。

「だつてさ……」

また云ひ澁つてゐたが、思ひ切つたやうに、あとが早口になつて、「小母さん、へんに思やアしないかしら」

「へんとは……？」

「今ごろ二人ッきりで歸つて來たりして……」

「だつて、それア、あなたが門のとこからすぐに歸つて了つたとしても、あたし阿母さんに話すわよ。今時分一人で歸つて來たなんて云へば、それこそ叱られちまふわ。へんに思はれるどころか、あなた親切だつて、きつとお禮を云はれるくらゐなもんよ。そんなこと、ちつともなんともありやアしないぢアないの」

「お禮を云ひながらだつて、へんに思つてないとは限らないからね」

「ぢアいゝわ、どうでも勝手になさい！ さつき泊つて行くつて云つといて、男のくせに……」

「なんだい、送つて來たり慍られたりしちア合ないや」

「慍つてやしないけど……」

「ぢア、いゝよ、泊つてくよ」

「きつとね！」

肩の丸味で念を押してよこした。

「その代り、へんに思はれたつて知らないよ」

「えゝ、いゝわ、構やしないわ」

「よし！」

と云ふと、青年は、マントの下から手を出して、娘の手を求めた。待つてゐたやうに、すぐ堅く握り合され、「きつとだね」「えゝ」うれしい」「あたしも嬉しい」――そんな風な言葉が掌と掌とで囁かれた。

手を握り合つたまゝ二町行つて、或る冠木門の前に立つた。丸火屋の薄い光の下で、二人は、正面に目と目を見合せた。――すぐ、莞爾とほころびた脣の上に、慍つたやうな眞面目な青年の顔が伏さつた……。

突然、半鐘が鳴つた。

無言で、意味深げな眴を取交すと、急いであけた耳門を、娘から先にはいつて、一二間小砂利を踏んで内玄關へ來た。戸が一枚だけ引き殘してあつた。

「千代や」

格子の鈴を鳴してはいるなり、憚りのない聲で、「ちよいと、火事だよ」

女中が二人とんで出た時には、娘はもう上へあがつて、肩掛やコオトをかなぐり捨ててゐた。

「お歸ンなさいまし」

「阿母さんは？」

「お茶の間においでなさいます」

「堀さん、あなた早く二階へ行つて、どの邊だか見て來て頂戴よ」

云はれて始めて、沓ぬぎに立つてゐる青年に氣がついて、

「あら、……いらつしやいまし」

と、もう一度ぺたんと坐つた女中たちに、

「誰でも、そこのスキッチをひねつて、堀さんをお二階におつれしておくれな」

さう云ひつけて置いて、娘はあたふたと廊下を茶の間の方へ行つた。帽子やマントを一人の女中に渡し、もう一人のに導かれて、青年は足早に梯子段をあがつた。火事のおかげで、いきなり茶の間へつれ込まれないですんだのを、心ひそかに喜んでゐた。

「なに、二つ番だから大丈夫だ」
押入から座布團を出さうとしてゐる女中へともなく呟いて、階段をあがり切つたとツつきの高窓をあけてみた。
「ヤア、燃えてる〳〵」
斜右手の空に、まだ始まつて間もない火の手が、赫々と、鮮かに眺められた。
モク〳〵と力強い弧線を描きながら紅に、朱に、樺に、黄に、紫に、刻々色を移して立騰る煙や、あふりを食ふ度にぱッと捲き起る火の粉の、ちらめく金砂子となつて消えて行く空には、月もなく風もなく、星屑さへも稀に、たゞ寂寞たる冬が凝つてゐた、——半鐘の音が、とんだ慌て者に聞えるほど、寂まり返つてゐた。それだけに、遠い物音、人聲が、たゞひと色に、唸るが如くに聞えて來る。青年は、なんとも云ひ表しやうのない、たゞ(ヤア……)と云ふやうな感動で眺め入つた。なかに一つ、(綺麗だ!)と思ふ心だけは、はつきりしてゐたが……。
「どの邊でございませう」
女中がうしろに立つて云つた。
「さア、××あたりかな、それとも、もうちつと遠いかも知れない」
「見えて?」
勢よく梯子段を駈けあがりながら、娘は聲をかけて、「どのへんなの?」
續いて娘の母親が、しと〳〵とあがつて來た。
薄暗い廊下で、立ちながら挨拶を交せばすむことを、この偶然の出來事に、もう一度感謝しながら、すぐ青年はそばへよつて、
「小母さん御無沙汰いたしました」
「どうも、實さん、お世話さんでございました。もつと早くお暇すればいゝのに……。寒いところを態々送つて頂いたりして……。あなた、今夜泊つていらつしやるね? えゝさうなさい。ほんとうにお氣の毒さんでしたね。……どう? 火事は見えますか」
すぐ話が、どの邊だらうの詮索に移つて、母親を中に、三人首を並べて眺めてゐたが、その見當に住んでゐる知人を思ひ出すと、まだそこにゐた女中に、交換局に聞き合せろと命じながら、一緒に階段をおりかけて、
「おや、今すぐ床を延べさせますからね。あたしは御免かうむつてお先にやすみますよ。……お華ちやん、お前さんいつまでも窓から顔を出してゝ、風邪でもひくといけませんよ」
と、母親は云ひ殘した。
丁度胸の高さの窓に兩肘を置いて、それから暫く〳〵の間二人は默つて眺めてゐた。——火事からうける感動は、決して永くは保たなかつた。もつと盛に燒ければいゝ、さう思ふ心で、やつと自分を紛らさうとした。然し、やがて二人の心は、まつたくそこから離れて了つた。眼だけが、たゞぼんやりと美しい火の粉を見詰めてゐるにすぎなかつた。
……いつの間にか、肩と肩とがぴつたりと押しつけられてゐた。今度は、マントとコオトとの厚みだけへつてゐた。その上、步行によつて動かされなかつた。靜に……靜に、いろ〳〵のことが感じられた。
青年は靴へ戰く足を組み違へ、片一方を爪先立てた。薄べつたい甲が、その爪先の下に敷かれたが、動かなかつた。そろ〳〵と踵から離して、たうとう蹠が、ペタリと重なつた……。決して顔を見合せなかつた。眼は、寂寞を極めた冬の空に舞ひ飛ぶ火の粉を追つてゐた。チラチラと、それは眩暈ばかりだつた。……時が飛び去り、時が飛び來つた……。
青年の腕が、横抱きに娘を抱いた。娘は、脅えたやうに、顫へる息を深く吸ひ、靜にそれを吐き出しながら、むかふ向に、窓框に置いた肘の上に、ぢツと面を伏せて了つた……。

病氣見舞

一

口の贅澤な實業家の常連で、夜よりも晝の繁昌する青嵐亭の食堂も、一時を廻るともう閑散だつた。階段をあがつたとツつきの帽子臺に掛けきれないで、そばの卓にまで積みあげてあつた帽子や外套が、今は數へるほどしかなく、角帶前掛と云ふ變つたこしらへのボオイたちも、まづ一服と云ふところで、カアテンの蔭に姿をかくして了つた。どんよりと曇つた空の光りは、煉瓦地の、明治初年風な、窓の小さい建ものゝ室内を、しめやかに小暗く見せてゐた。

赤い房々とした髭を採みあげながら、外國の紳士が、トイレットルームを出て來て、つれの日本人を促して歸つて行くと、あとはもう一組しか殘らなかつた。――歳尾近い午後の氣配は、荷馬車の轍音にも沁んで、なんとなくあたりがひつそりする……。

「……と云ふわけでね、この取組は、あツしやアきつと面白からうと思つてるんだ―

壁いつぱいに片寄せた小さな角卓子に頰杖をつき、左で、半分以上飮んだホット・ウヰスキイのグラスを弄びながら、かう云つてぢツと相手の顏を覗き込んだのは、色の淺黑い、角刈にした美貌の若者で、素人では、いくら二十七八と見えるその年ごろにしても華美すぎる、赤入の唐棧柄の結城を、羽織だけ少しあらいめに織らして、すらりと延びた體に、ごつく着流してゐた。

差向ひに、これは生のウヰスキイと炭酸水を前にして、薩摩の蚊絣の揃に、ほとんど無地と見える結城の袴を穿き、若白髮のまじつた粗剛さうな毛を、分けたとも掻き上げたともつかずモシャクシャさせ、胃弱らしく青黃色い、彈力を失つた皮膚を脂らぎらせて、少しすわりかけて來た眼で、疑ひぶかく見返しながら、ニヤリニヤリしてゐるのは、つい近頃賣出した劇作家の三好胤夫で、明けて三十にならうと云ふ青年だつた。

「然し、一體君は、それを誰から賴まれたんだい。まさか當人からぢかぢアあるまい?」

「いえ、それアなんですよ……」

「女將さんだらう? 君アあれを覘つてるね? ―」

どうだ、睨んだこの眼に間違ひはあるまい、と云つた調子で、骨太な、厚ぼつたい頤をぐつと椅子の背に反らして、下目に見据ゑたが、相手は、嚙んでほき出すやうに、

「じよ、冗談いつちアいけない! いくつ違ふと思つてるんです」

「年齡の違ひを問題にする市川瀧十郎か知ら」―

云ふなり三好が、甲高い引笑ひに笑ひ崩れるのを、てれ隱しの、さそくの頓智に、ボオイ部屋の方を窺つて、右で、形をつけて抑へ、

「シー。……隱密々々―」

それから急に眞面目顏になつて、「然し、それア先生、……なんぼなんでも、あれアどうも……。それアあんまりひどいや―」

「さうか知ら、そんなに云ふほどか知ら。……君、なんだぜ、別に何も謙遜する必要はないぜ―」

「いけませんよ、揶揄つちア」

「だつて……」

「あツしやア、さうならさうと正直に云ひますよ。そんなこと、先生に隱したつて仕樣がないぢアありませんか」

「ところが……―」

「まアさ、さう云つてお土砂をかけられたら、すなほに、成程それもさうだ、と思ふやうでなくつちア……―」

「なくつちア? どうだつて云ふんだい。粹な

人ぢアないつてえのかい？」
「いゝえ、どういたしまして。…とても出世は覺束ない…」

二

それで、二人聲を揃へて笑つたが、三好はあたりを見廻して、
「なんだか馬鹿に暗くなつて來たね」
濃緑の壁紙が、光りを吸ひとつて、部屋の空氣はしつとりと暗み、早くも夕方が迫つたやうな心持だつた。瀧十郎は、左の袖口をちよいと押しあげて、親指の頭ほどの腕時計を見てから、椅子をずらせて窓近く額をよせた。
「ちつと暖かすぎると思つてたら…、こりやアきつと雪ですぜ」
「さうされえ…」
誘はれて空を見上げながら「同じ降るなら雨ぢアつまらない」
「然し雪だと、またこれでお物入です」
「何を！　役者の云草ぢやアないぜ」
云はれると、有繋にちよいとてれて、瀧十郎は、ホット・ウヰスキーを一口飲んで、
「時に、肝心な話がどつかに飛んでつて了ひましたが、紀尾井町さん、どうでせう、出て來てくださるでせうか」
「それア、うちにゐさへすれア、大將のことだから、大抵出かけて來るだらうけれど、…一體、どうする氣なんだい、こゝへ來て貰ふのかい？」
「さアそいつですよ。どつちがいゝでせう、ぢかに彼方に來て頂いた方がいゝかしら」
「だつて君ア、女將さんに、見舞に來いつて云はれてる人だらう？　さうとすれア、いづれ女將さんの臥てゐる部屋に通される…」
「それをあッしが助けて頂きたいんですよ。すッとお客であがつて置いて、ちよいと二三十分階下に顔出しをして、今日は三好先生と御一緒だから、つて云ふやうなことで、すぐ逃げ出して來よう、――ま、正直な話がさう云ふ意氣なんですから…」
「おい、いゝ加減に馬鹿におしよ。なんぼ俺が附合がいゝつたつて、女よけの呪禁にまで使ふことアないだらう」
「いゝえ、さう仰有るとものに角が立ちますが…」
「どう云つてみたところで、それに違ひないぢアないか。つまり、いろにはなまじ連は邪魔、あれの丁度正反對の場合だアね…」
「ぢア、可厭な女には却つて連が要る、ですか。惡い語呂だな」
「それもいゝが、待つてえ人は、惡くすると階下へ行つて『銀座通りでパッタリ三好さんに出つくはしちまつて、どうしてもまけなかつたから、仕方なしに一緒につれて來た』ぐらゐの嬉しがらせを云ひかねないんだから、こいつ、なんぼなんでも役が惡すぎらアね」
「あ、あれだ！　なんぼなんでも、あッしやアそんな人の惡いまねはしやアしませんよ。それアあんまり殘酷だア」
「ところがね、ほかのことゝ違つて、事ひとたび女に關すると、忽ち友情もへッたくれもなくなつちまふんだから…」
「誰が、あッしがですか？」
「いゝえさ。誰彼と云はないでも、凡そ男つてそんなもんだらうぢアないか」
「それア先生、こつちからかッかと逆上あがつてるやうな時なら、それアそんなこともないとは限りませんけど、何しろ相手があれぢア…。これが妹さんの方なら、またつてこともあるが、こつちでさう思ふ人は、たゞの一遍でいゝから紀尾井町さんに逢はせてくれッてんで、まるで草双紙にでもありさうな惚れやうをしてゐるんだから…」

「あの人、なんとか云つたね」
「お澄ちやん……」

三

「あゝさう〱、お澄さん……」
三好はエアーシップに火をつけて、なにかひとりでニヤ〱しながら、「あゝ見えて、もう二十二三だらうね」
「いゝえ、一ですつて。それであなた、まだ男を知らないつてんだから……」
「そいつアどうも……、なんてつたつてうちの商賣が商賣だし、あんまり當にならないが、先刻の君の話のやうだとすると、兎も角大ぶん古風だね、今時そんな……二十一にもなつて、芝居でたつた一遍見かけたつきりの男を忘れかねて、くよ〱してるなんて娘さんが、今時實際にあるもんかねえ、ちよつと信じられないくらゐだな。おまけに見初められたのが、藤代の信さんとはね……」
「だからあツしやア、この取組はきつと見物だらうと思つて、是非とも今日は紀尾井町さんを引つ張り出すつて云つてるんですよ。どうです、これア先生も賛成でせう?」
「だつてお澄さん、めつたに座敷になんぞ出て來やアしないぢやアないか」
「めつたにどころか、絶對に出やアしませんよ。あれで、あの姉さん、中々やかましいんですからね」
「それぢア、揃つて出かけてみたところで仕様のない話ぢアないか。たゞ晩飯を食ひに行くだけのことなら……、君の前でさう云つちアなんだが、あすこは大してうまかアないぜ」
「それアいつもならさうですけどさ、藤代さんが見えたとなりやア、お澄さんが出てお酌だつてしてくれない限りぢアありませんからね。それアもう女將さんだつて承知だし……」
「そんなやかましやの姉さんが、よくまたそんな浮いた話を平氣でゐるね」
「浮いた話どころですか。さつきも云ふ通り、患ひつかなきアいゝつて、みんなが心配してゐるくらゐですよ」
「本當かい?」
「誰がそんなこと……」
「いや、嘘だとは思はないが、一體君の話は大袈裟だから……」
「ぢアまアよござんす。行つてごらんになれば分ることですから」
「ふん、さうかねえ。ちよいと見たところぢア、健康さうで、相應お洒落で、戀患ひでもしようつて風にア見えないがね」
「兎に角そいぢやア、紀尾井町さんへ電話をかけてみませうか」
「かけ給へとも。かけるくらゐなら、ちつとでも早い方がいゝよ」
「ぢア、勿論先生は附合つてくださるんですね」と、椅子を立ちあがりながら念を押して、「然し弱つたな。あツしやアこのごろ、すつかり奥方をしくじつてる人なんだから……。先生、矢ツ張りあなたの方がいゝや。すみませんが、先生かけてくださいませんか」
「駄目々々! 俺なんぞなほ駄目だよ。細君の信用、ほとんど零だからね。役者と云ふだけでも、君の方がずツとましだよ。それアなんてつたつて、役者の魅力つてものは大したもんだよ、それア矢つ張り君の方がいゝよ」
「へんなこと云ひつこなしにしようぢアありませんか」
「まア〱、そんなこと云はずにやつてみ給へ、きつと大丈夫だから」
苦笑ひをしながら、瀧十郎は立つて行つて、部屋の隅にある電話にかゝつた。

四

やがて先方が出て、取次の女中がひつこむと、

瀧十郎は、大きな目の玉だけをギョロリと三好の方に向けて、

「お宅でしたよ。……もうこつちのもんですね」

と、ニコ〳〵するのを、三好は故意と冷淡に、たゞ鼻のさきでフンと笑つてゐた。

「あ、もし〳〵」

暫くすると、電話口で、いくらか聲の調子をとり繕つて、「えゝ旦那様でいらつしやいますか、手前瀧十郎でございます、誠にどうも御無沙汰ばかりいたしまして……」

片手を懐に、横着な顔つきをしながら、そんな風に言葉ばかり馬鹿丁寧にやつてゐるのを見ると、有繋に三好は、ちよつと可厭な氣がした。まさか賣出しの花形役者が、挨拶の言葉につれて、電話口でピョコ〳〵頭をさげるほど律義であらうとも思ひはしないが、旦那さまだの手前だのと、ふだん顔と顔とを見合せては決して使ひはしない他所行き調子をもち出すにも及ばなからうに、へんな奴だ! ぐらゐの氣持で、苦々しげに目を逸らした。すると彼方の電話口に出てゐる人にも同じやうに感じられ、それを云つたとみえて、急に瀧十郎が大聲に笑ひだしながら、

「……へ、へ、これアどうも……へ、誠に相濟みません。あゝ、相濟みませんもいけないんですか。ぢアもういつそ引拔きになつて、フーさん、あツしですよ、とやツつけますか。……え? えゝ、明日が顔寄です。……えゝ、さうです、今度はわりに樂です。でも、大喜利につかまつてますから……。え? 御冗談でせう! そんな筋があれア……」

やゝ暫くそんな冗口ばかり利き合つてゐたが、潮加減を見計らつて、晩の食事を木挽町のよし野で附合つてくれないか、今は三好と一緒に青嵐亭にゐるが、來てくれるなら、二人ですぐ彼方へ行つて待つてゐるから、と申し出たが、相手はいろ〳〵愚圖ついてゐるらしかつた。

「……なにも、御存知ないうちだつていゝぢやアありませんか。いつかもあたくしから、一度お願ひしたことがあると思ひますよ。そこの女將が大へん贔屓にしてくれますんで……。え? 義理の御附合なんぞ御免だ? そんなこと仰有らないで……。いゝぢやアありませんか、たまにはこんな顔でも立ててくださるもんですよ。……え、分らない? いゝえ、すぐ知れますよ。もしなんなら、こちらからお迎ひの自動車を差上げませうか。……あゝ、さうですか、成程……、また昨夜あたりお宅をおあけなすつたんぢやアないんですか? ……いゝえ、あてになるもんですか。……冗談は冗談として、ほんとに今夜だけは、ひとつあたしに顔を貸してくださいませんか。……あれだ、とてもかなアない! ……ぢやアね、三好先生に出て頂きますからね。……えゝ、とてもあたしぢやア駄目さうですから……。いゝえ、いけません〳〵! ぢア、ちよつとお待ちくださいまし……」

受話機をひツかけるところを、右手で抑へて、振り向くと、

「先生、どうかひとつ……。なんだか知らないが、とても頑強ですよ。あなたにお任せしますから……。懸賞をつけてもいゝ……」

「なんだい。君もまた馬鹿な熱心さだね――」

「えゝ、もうかうなれア意地づく……、腕づくでも……」

五

「電話の腕づくはちつと無理だらう」

云ひながら三好は、さも不承無精らしく椅子を立つて、若い役者の手から受話機をうけとりに行つた。「僕ア然し、一應は勸めるが、もともと局外中立の立場だからね、責任はもたな

いよ」

「あゝ、それぢア困りますよ、先生！」

甘ッたれた調子で、體を揺りよせ、三好が耳にあてがつた受話機のそばへ、自分の耳ももつて行つて、一緒に彼方の言葉を聞かうとした。

ちつとも氣乘のしない顔をしてゐながら、電話口に立つと、三好はなか／＼調子がよかつた。だん／＼形勢を變へて行つた。

「……えゝ、さうですよ、一體萩原なんぞ……」

と、瀧十郎を本名で呼んで、「……萩原なんぞうるさいから、いゝ加減喰ひ荒らしたら二人でうまく消えちまふんですね。……えゝさうですとも、ほんの口をよごしてやりさへすれアいゝんですよ。……えゝ／＼えゝ、それに、今夜はきつと雪になりますよ。夜の雪見はちよつとまたよござんすからね。……えゝ承知しました。ぢア、すぐお出かけなさいませんか。え？ ところですか……？」

「あゝ、それアあッしからよく分るやうに申しあげませう」

いよ／＼來るときまつたので、ほく／＼しながら、瀧十郎は、もう一度受話機を奪ひ返して、よし野の町どころを傳へ、幾度も馬鹿念を押して、電話を切つた。

「あゝ、まアよかつた」

「どうだい、龜の甲より年の功だらう」

さきに椅子に歸つて、半分ほど殘つてゐたウヰスキイを一息にあふると、三好は、ことさらに得意さうな容子をしてみせた。

「いや！ たゞもう恐れ入りました」

「こんなことなら、はつきり懸賞をきめとくんだつけなア。ねえおい、瀧さん、一體懸賞はどう云ふことになるんだね？」

「ようがす。ちやアんと心得てます」

と、立つたまゝ、大きく胸を叩いてみせるのにかぶせて、

「なんだい、こゝの晝飯かい？」

「いゝえ……」

「そんなこつちア濟まされないよ」

「謀略は密なるを以てよしとす。まア、だまつてあッしにお任せください」

「よし！ ぢアこゝはひとつ、俺が拂つて行かう」

「いゝえ、先生、それアほつといてください」

「まアいゝやね。から云ふ安いとこなら、いかに文筆勞働者でも引きうけられるよ。もう一つ露骨に云やア、せめてこんな時にでも……、つてえやつさ」

云ひながら、卓をコツ／＼と叩いてボオイを呼び、まだ愚圖々々云つてゐる瀧十郎を押しのけて、勘定をすませた。

「イワイノリ（祝儀）は？」

「ボウ（一圓）でいゝでせう」

一部の文人の間に行はれてゐる隱語で、そんな風に囁き交すと、剰錢の中からそれだけ殘して、二人は帽子臺へ行き、ボオイに手を貸されながら外套を着た。有繋に役者らしく、瀧十郎は黑天鵞絨の襟卷でふか／＼と顔を包み、褐の中折を目まで引きおろして、ボックスの小型の手提をぶらつかせながら、

「どうもお世話さんでした。いつも永つ尻でお氣の毒さん……」

などと愛嬌を殘して、階段をおりた。

「君ア草履か。いやが上にも僕ばかりヒョロ長く見えるわけだな」

眞新しい八幡黑をすげた柾の細かい駒下駄を、ステッキの先で引きよせて穿くと、三好は先に立つて、硝子扉のそとに出た。

六

燻銀に曇つた空は、陽の在所も見せず、まだ三時を廻つたばかりなのに、――例へば霧雨ほどの光りしか落してよこさなかつた。限性の惡

い三好には、六七間さきは、もうものゝ文色もはつきりしなかつた。で、芝居を見る時とか、夕方や夜そとを歩く時とかに限つてかける、十二度の近眼鏡を、袂のなかに探りながら、

「一體、女将さん、どうしたんだい。病氣つて、……店に見舞に來いと云つてよこすほど重いのか、それとも、さう云つてよこすほど輕いのか、どつちなんだい」

この、ちよつと氣の利いた質問の仕方に、我ながら微笑まれて、眼鏡をかけ終へた目尻に、鳥の足跡のやうな皺を刻んで、人道を押並んで歩いて行く瀧十郎の顏を覗き込んだ。

「ウワツワ、ハウラワウラ」

堅く卷きつけた襟卷の下で、猿轡でも嚙まされた人のやうに、何かわけの分らないことを云つて、それから鼠色の革手袋をはめた指先を鼻の下に突つ込み、堅さをゆるめながら、「ダイシワ、こつちアないんでせう」

「おい、誤魔化さないで、はつきり口を利きねえよ、はつきり」

故意と、江戸前に、二番目がつて云ふと、その時やつと襟卷を顎の下までたくし下した瀧十郎が、子供のいや〳〵のやうに首を左右に振り動かしながら、

「僕誤魔化しなんぞするもんですか。……大したことぢアないんですよ。ねたり起きたりしてゐるらしいんです」

「風邪かい」

「いゝえ、疱瘡……」

「え？　疱瘡？……俺アよすよ、斷るよ。とんでもない話だ……」

「あ、いゝえ、疱瘡は間違ひ……。あの、そら、なんとか云つた……、えゝと、あのウ……、うん、麻疹、麻疹麻疹！」

「麻疹だ？　冗談ぢアない、子供のする病氣ぢアないか……」

「でもさうなんですよ。あれ、大人になつてからでも罹る人がありますぜ。女将さんのは二度目なんですつて。だから、輕いんですつて」

「ふうん、然し麻疹とは、この忙しい歳尾に來て、暢氣な病氣をやつたもんだなア。一體、今度あの人はいくつになるんだい」

「たしか、丁度でせう」

「丁度たア、四十かい」

「いゝえ、それア、なんぼなんでも可哀想ですよ……」

「へーえ！　ぢア俺と同年だ。午の七赤……。へーん！　さうかねえ。だが、とてもそれアさうは見えないぜ。四十は可哀想としても、五つや六つは慥に老けてるよ。……我が親愛なる瀧さんの前だけれど……」

「何もさう一々あッしに結びつけることはないでせう」

「あるかないか知らないけれどさ。……へえ、さうかい同年かい……」

二三度瀧十郎の部屋で一緒になり、その後つい先月、誘はれて四五人づれで晩飯を喰ひに行つてから、大ぶん隔てがとれたとは云ふものゝ、その、ちよいと人を見下したやうな態度が氣に喰はないで、三好にはどうも好きになれない女だつた。それには、年も、先方がずつと上だらう、と云ふやうな氣持が含んでゐたものとみえて、同年と聞くと、急に、なんとなく今までの反感が薄れて行つた。（なアんだ！）と云ふやうな、與し易さから來る好感が湧いて來た。

七

銀座通りの店々は、すつかりもう歳尾の裝ひだつた。無理にも人目を惹かうとする赤や青の大旗小旗は、風の落ちた空に、怠けてダラリと懸つたが、有繫に、（さアこれから一番……）と云つた氣勢は、道ゆく人の胸に、年の瀬の感じ

を催ほさせて十分新鮮だつた。人道に沿つて立てた丸太、上に渡した貫を、手早く紅白の布で巻いて行く仕事師の、いゝ年齢をしたのでも哀げには見えなかつた。右へ左へ行き交ふ人通りのなかには、手廻しよく買物に出た奥さんたちの姿が殊に目立ち、帝國ホテルあたりの客らしい、夫婦づれの外國人が、腕を組んで、午後の散歩がてらに、節季を覗き／＼行くのも、なんとなく、まださう押しつまらない歳尾の風情だつた。

「眞ッ直に彼方にぬけちまはう」

話しながら行くのに、人通りを避けようとして、三好は、ひとわたり右左の賑ひを望んでから、さうつれに聲をかけた。

「えゝ、さうしませう」

都會人の淡泊と落つきとを以て、二人の青年は紛々と電車通りを横ぎつて行つた。食後に四杯まであふつて、ちよつといゝ機嫌になりかけてゐた三好も、冷い外氣のなかに出ては、どんどん醒めて行くのが感じられた。それだけに、汗ばんで、黒鍵がうつすりと曇つた。貪慾に享樂を想ふやうな心が、その薄暗い眼界から湧いて來た。そこには、この場合、——と云ふのは、一口に云つて了へば、かうして瀧十郎とつれ立つて歩いてゐるのでは、だん／＼苛立たしい氣持に誘ひ込まれて行きさうな、へんな豫感が伴つてゐた……。

「しかし、役者はいゝね」

「なんです、だしぬけに」

云つてゐる意味はおよそ呑み込めてゐたが、一應瀧十郎は、さう反問した。いゝ理由を、もう一つはつきりした言葉で言はせてみたかつた。

「一體なんだよ、この世の中に、役者くらゐ怪しからないものはないね」

「おや、今度は、忽ち怪しからなくなつちまつたんですか」

その、おどけた調子にはかけ構ひなく、

「一體、君たちは、なぜ女に騒がれるか知つてるかい？　君なんぞは、自分がいゝ男だからだと思つてるだらうね」

「手嚴しいなア。……さう思ふのは間違ひで、實に大甘なんでせうね」

さうは云つても、然し、ごく心底の自惚は少しも傷つけられずに、たゞ先潜りをして、相手の云はうとするところに阿つた調子が露だつたが、三好は、氣にもとめないで、

「君なんぞはまア、なかぢア、實際にもいゝ男の方だし、その道にかけちア勿論達人だし……」

「よしてくださいよ。それぢア、藝にかけちア大根だか……、と云はないばかりぢやありませんか」

「さうさ。またそれに違ひないぢアないか。それとも、自分ぢア藝にかけては達人で、その道の大根だとでも思つてるのかね？」

「あやまつた！　三好先生にかゝつちア、あッしア、まるでもうなしだね」

「冗談いつちアいけない。なしつてえのはそんなもんぢアないよ。いゝ男で、その道の達人だ、……男として、これ以上結構な褒められ方はないだらうぢアないか」

有繋に瀧十郎は、不懌な顔をして默つて了つた。（冗談にも、凡そほどのあるもんだ！）と云ふやうな氣持だつた。ところが、三好は三好で、存外大眞面目だつた。

八

「それにしてもだ……」

と、三好は言葉を續けて、「それにしても、若し君が素人だつたら、今の四分ノ一ほどでも、女たちにちやほやされるかどうか分りやアしないぜ。つまり個人としての君に惚れるよりも、役者と云ふものゝ魅力に目が眩んで了ふ女たちが可なり多いんだからね。その心理を解剖し

てみると、樂屋に對する興味だ、見てはならないものに惹かれる憧憬だ。女たちの氣持にすれば、役者と樂屋とは、切つても切れない緣で繋がれてゐるんだから、例へば或る一人の役者が、性格的にどんなにあけすけな、平明な、素朴な男だらうと、女の方では自分勝手に、その男の性分なり生活なりに『樂屋』を感じて、奥行や陰陽をつけて、——一口に云へば勿態をつけて、各自の好み／＼で、近づき難くも、面白可笑しくも、または夢の世界の人のやうにも、種々雜多な空想で飾りたてゝ了ふんだ。大抵利口な女でも、表に見えただけをその人と考へることが出來ないで、なんかまだ裏があるんだらう、どこまで行つたら底が見えるのかしらん、……で、『樂屋』につられ／＼て、だんだん興味が深まり、厚意がいつの間にか戀愛になる、——まアざつとさう云つた手順さ。何にしろ、表面のあたりはどこまでも明るく氣さくで、それで肚の底になんかしつかりしたものが感じられる、——さう云ふのが一番今時の女の心を惹くらしいし、また本統にさう云ふ風なら、出來てる人間に違ひないんだが……。ところで役者と來ると、その『肚の底のしつかりしたもの』を、永い傳統をもつた『樂屋』で間に合せることが出來るんだ。勿論間に合せだから結局はくだらないんだが、それでも今の世の中には、一應も二應も通用して行くんだから大したもんだよ。いや、もつと正直にいやア羨ましいもんだよ……」

「へえ、成程、樂屋……ですかねえ」

さう身を入れて聞いてゐもしなかつた瀧十郎には、自分の過去からはつきりした實感は浸みとれなかつた。「樂屋に對する興味」などと云ふ言葉が、安つぽく考へられた。

「するとつまりなんですね、樂屋口にたかつて來て、吾々の出這入りを見物してゐる子守ツ娘ね、——大抵の女が、つまりあの心理なんですね？」

「とも違ふさ。樂屋つたつて實際の樂屋ぢアないぜ。もつと廣く、抽象的に云つた樂屋の意味だね。つまりものゝ裏さ。人間てやつは、男女に限らず、裏の好きなもんだよ、普通ぢア見られないところを見るのが好きなもんだよ。君たちは、自然とさう云ふものをうしろに背負つてゐるんだから、素人と比べると、少くも五六割の得があるのさ」

「それで女が出來なかつたひにやア、人間、半分みたいなもんですね」

これには、三好も、思はず噴飯して了つた。

肚の底に、獨よがりの微笑を湛めて、小憎らしくてたまらない時があるかと思ふと、ふとまた役者子供の理彦に浸れど、馬鹿々々しいほど他愛のないことを云つたり爲たりする、——それでついまたころりとまゐつて了ふ、——沈鬱したやうなことは云つてゐるが、その實三好自身とても、役者の魅力には、可なりの程度にかゝつてゐたのだ。

「どうして、君なんぞは、素人にしたつて一人前は十分だから、つまり一人前半だよ」

「どういたしまして、役者が着物を着て歩いてるんです、萩原政三郎なんてものは、まるでないでさアね」

九

默然になれば、どつちも負けず劣らず、他愛のない應酬を續けながら、いつも辻馬車の往來の多い西豐玉河岸を北へ、周橋を渡る頃には、堀に映る空の色さへ、薄ら冷たく、いきなり頰にぶつかつて行く小蟲にも、いよ／＼ぽつりと來たかと振り仰がれるほどにしぐれかゝつた。動かない水の上に、浮ぶ——と云ふより置き忘れてあるやうな達磨船の艫で、嬰兒をおんぶした女房が米を研いでゐた。眞つ赤になつた手で

堰いて、靜にこぼしてゐる白水は、古綿雲のやうにモク〳〵と、あたりの黝さににじみ擴がつて行つた。ちよいと足をとめて、見おろしてゐた三好が、

「おい瀧さん」

と呼びとめて、「今にプロレタリヤの世の中つてえのが來ると、君のやうな人間か橋の上から、あゝ云ふところを眺めて、あゝして暮すも五十年……、とかなんとか獨白があつて、こんな天鵞絨の外套や帽子や襟卷を、ぽオんと川へ擲り込んで、きツと見得になるやうな芝居が出來るぜ」

「成程、簑掛松の道ですな」

「心氣一轉して筋肉勞働者になる……」

「ところが、今だつてそれに違ひないんですもの」

「なアんてね……、昔なら日本橋の叔父さんに訊いて來たな、つてところだが、『新演藝』かなんかで讀んどいたな」

「兎に角あなたは不謹愼ですよ。あゝ云ふ哀な生活を見て、すぐ芝居に結びつけて考へるなんて……」

「藝道熱心の然らしむるところぢアないか」

「藝術至上主義ですか」

「生意氣にいろんなことを知つてるね」

「それアもう、新時代の俳優は、ですな、須らく……」

「うるさいな」

やがて彼等は、上方風に、石疊の四尺路次を四五間も奥へひつこんだよし野の玄關さきに立つた。すぐに跳んで出て來たのは、髮ばかり綺麗にして、まだ黠口の半纏をはおつた年増の女中だつた。

「まアお珍らしい！　さアどうぞ……」

愛想よく迎へると、正面の階段を駈けあがりながら、ほかの女中の名を云つて、大急ぎで火を持つてあがるやうに云ひつけた。

「お勢さん、まだあとから、もうおひと方みえますからね」

瀧十郎は先にたつて階段をあがると、一番奥の六疊に座布團を並べかけてゐた女中頭に聲をかけて、

「こつちはどうなんだい」

「あゝさやうですか。あたしはまた、お寒いところだとお寒からうと思つて……。ぢア桐にしませうか」

「桐つてどこだつけ」

「あら、桐をお忘れンなるなんて……」

象のやうに細くて柔和な目に、意味をこめて睨みながら、する〳〵と廊下を戻つて來て、「實ツ子は、兎角にどうも薄情になつて困りますね」

「あゝ階下か。階下はちつとどうも拙いな」

「なぜです？」

「女將さんの部屋まで聲が聞えるだらう？」

「あら、聞えちアいけないんですか」

「ぢアね、裏の方の八疊ね、もしお約定がなければアあすこにしてくれない？」

「困りましたね。お約定になつてるんですけれど、他ならないあなた樣のことですから……」

「うまく云つてらア……。ぢア先生、どうぞこちらへ」

振向いてちよつと目で誘つて、まるで我が家のやうに瀧十郎は表の間へ案内した。

十

部屋の隅に外套や帽子をぬぎ捨て、二枚敷かれた座布團の、床前に一方、折れ曲つて瀧十郎と席がきまると、そこに運んで來た手焙を一つづつ各自のそばに置いてから、お勢は座を退つて、あらためて丁寧に挨拶をした。

「いらつしやいまし」

火の氣のなかつた部屋に、冷い絹布團の上に、

急に外套だけが薄着になつて、ぞく／＼する背中を振りながら、——火にかざした手先をこすり合せながら、

「お寒う」

「いつぞやは御世話さんでした。いかがです、いつもお忙しいでせう」

瀧十郎は愛嬌笑ひをした。

「いゝえ、なんですか、それア暇なんでございますよ。あたしなんぞ、こんなうまい風をして」

ちよいと兩手を擴げてみせて、「まだお風呂へも行かないんですよ。眞ツ黒けでせう」

「どういたしまして。肌理の細かな人の白粉ツけなしつてものは、またどうも、なんとも云はれないもんです」

「まア！ 可怕い！」

「可怕いはよかつた！」と、三好は、ポンと横手を打つて、「いや、實に實感が出たよ。ねえ、お勢さん、全く可怕いやうな口ですね。有難にいゝことを云ふよ、あなたは」

「時に……」

瀧十郎はけろりとしたもので「女将さんはいかがです。自分で電話口に出られるくらゐだから……」

そこまで云ひかけて、（まづかつた！）と、はつとしたが、丁度三好が床の間の軸を眺めて、こつちには背を向けてゐたために安心して、さあらぬ態に言葉を續けた。「なんでせう？ もう起きておいでなんでせう？」

「いゝえ、まだねたり起きたり……」

云ひながら、お勢は、眉間のあたりに頻りと稻妻を走らせて、（ちよいとまア廊下へたつて來い）と云ふ意を打電して、「でも、おかげさんで、もう發疹はすつかりひいたんですけど、冷い風にあたるのがいけないつてますから……。ぢアあたしは、ちよつと失禮してお風呂に行つて參りますわ。……あの、召上りものは？」

「えゝ、いつもの通りお任せします。それから——」

「お料理があがるまで、海鼠腸かなんかで一杯めしあがる、——さうでせう？」

「その通り！ 兎に角、つうと云やアかあなんだからね、この人は」

笑つて二人の膝の前から、あいた茶碗をさげながら、お勢はもう一度瀧十郎に目交をした。

「ぢアお銚子をすぐもつて來させます」

「えゝ。それから、なんにしてくださいな、御膳に、お黙つてちやア、とてもそのやうな人には向かない……」

三好がさう口を出した。

「承知いたしました」

茶盆を片手に、お勢が立つて襖のそとに出て、あとを閉て切らうとした瞬間に、

「ちよいと／＼。それからね……」

と聲をかけながら、すぐ瀧十郎は立つて行つて、襖の隙から、するりと廊下へ、お勢を體で押すやうにして、後手にあとをぴたりとしめた。

十一

「女将さん慍つてやしなかつた？」

薄暗い廊下を、階段の上の高窓のそばまで來ると、うしろから肩にかけてゐた兩手で、くるりとお勢の體をこつち向にして、「昨日來るつて云つといたんだけど、つい忙しかつたもんだから……」

「いゝえ、それよりあなた、おつれさんなんぞ引つ張つて來ちやア駄目よ」

「いゝえね、途中ではツたり逢つちまつたんだよ」

「だつて、もうおひと方あとからお見えになるつてぢアありませんか」

「それアお前さん、三好さん……」

と云ひかけて、ちよつとうしろを振返り、一段と聲をひそめて「三好さんなんぞに捉まつたが最後、どうしたつても逃れつこないに極つてらアね。さうとすれア、——どつちみちつれて來なきアならないとすれア、一人も二人もおんなじこつたから、途中で電話をかけて……、あとから來るの、誰だと思ふ？」

「兎に角まア、女將さんの部屋へいらつしやい」

「お冠かい？」

「それだつて、貴方の顏を見れアなんにも云へやアしませんよ」

云ふなり、左に瀧十郎の手を把つて、とんとんと梯子段を輕く踏んで二足三足おりかけたが、振りむいて、「ほんとに、これツきりもうおつれさんは駄目よ。それもいゝけど、文士なんて……、新聞にでも出されたら困るぢアありませんか」

「そんな、新聞に出されるなんてことはないけれど、あゝ云ふ人たちと來たら、とツつかまつたら中々はなれないんだからね。……それよりね、あとから藤代さんが來るんだぜ」

「藤代さんて……？」

「なに云つてるんだい。例のお澄ちやんの…………」

「あらさう。……へえ、ほんとですか」

「ほんとゝも。これが、なんにも知らずにやつて來るんだが……」

「さうですか。ぢア早速さう云つて知らせてあげよう」

「こつちに來てゐなさるんだね？」

「ねていらつしやると、女將さんがもうちよつとの間でも側をお離しンなりませんからね……」

話しながら梯子段をおりて、帳場と臺所との間の暗い廊下を行くとき、お勢は手早く茶盆を配膳棚の上に載せ、酒の支度をしておくやうに聲をかけて、はすかひの渡りでつながつてゐる二三年前に建増した奥の住居の方へと案内した。

「ごめんなさいまし」

襖のそとから聲をかけて、お勢だけ先にはいると、立て廻した六枚折の蔭から顏を出し、膝をついて、「若旦那がお見えなさいました」

「へえ、さう、どうぞ」

廊下まで、——當の瀧十郎に聞えることを十分意識して、何しに來た、と云はんばかりの、ひどく冷淡な響きをこめた女將の聲が洩れて來た。けれども、瀧十郎にとつては、その調子だけが意味ではなかつた。さう云ふ「聞かせ」を使ふ心の奥が讀めてゐたから、却つて北叟笑まれるくらゐのものだつた。一度行つとかなくつちアならないが、可厭だなア、またねち／＼やられるのか、——そんな風にいろ／＼苦にしてゐた氣持などは、かうしていよ／＼と云ふどたん場へ來てみると、却つてさらりと消えて了つた。——衣紋を繕ひながら、瀧十郎は、すつかりもう色事師らしい餘裕や落つきで、隙なく心を甲つてゐた。

十二

「どうぞおはいりくださいまし」

笑顏で振り向いて、廊下に聲をかけながら、押入から座布團を出してよいあたりに敷くと、すぐ下つて行くお勢と入れ變りに、なんの屈託もなげな歩調で、屏風を廻つてついとはいるなり、

「どうもこれア……」

と、瀧十郎は、故意とぶきツちよに頭をさげた。

出入口と並んで半間の違棚、しぼり杉柱で仕切つた床には極[illegible]の横物が瀟洒な表裝で懸つてゐ、折れ曲つた古院くづしの窓から一間、ま

た南側の細い土庇の落縁で、中間は壁、殘つた一方に押入と、袋のたつ水屋をとつた十疊間だつたが、南縁に細く赤松の框を廻し、天井は杉の柾目、面とりの華車な押縁、落懸が胡麻竹、と云つた風で、謂ふところの名古屋普請の[illegible]にかり[illegible]た、新橋邊の二三流の待合氣分に充ち滿ちてゐた。晝の深さにあけ放した障子の中硝子を透して見える、廣くはないが茶がかつた木石の布置には、松の吊枝、下草の霜よけ、敷松葉と、すつかりもう冬の裝ひが施してあつた。その、新春を待つ氣持は、ちよつと惡くなかつた。

床の間に沿つて、出入口から立廻した屏風の方を枕に、寒いほど白い敷布もこんもりと、クリーム色の絹裏を返した夜着布團の友染には、紅のちらつくなかに、ちよこなんと腰まで埋まつて、あらい瀧縞の丹前の袖口から兩の手先を入れて膝におき、珊瑚珠の簪卷に一際ちひさく見える首を、顎を引き加減にちよいと右にかしげて、はいつて來た瀧十郎に、眞ツ黑な瞳をちらと走らせたが、

「いらつしやい」

とばかりで、領き返しもしなかつた、——これが、よし野の主人で名をおもんと呼ぶ。

いくらか褄によせて、間に、華美な絹布團で炬燵の山、並べて桑の小机、その上で書きかけてゐた年賀の葉書を、透き通りさうな指先に揃へて、姉に比べれば餘程大柄だが、然しまづ、中肉中丈の身を起すと、部屋の隅に机を片よせてから、お澄は丁寧にお辭儀をして、

「いらつしやいまし」

今でこそ舊式と云へる束髮、あらい大島の書生羽織に、同じものゝ普段着をわりに裾短に着た容子は、挨拶の手重さと相俟つて、ちよつと山の手のお孃さんとも云ひたい風情があつた。

「お寒うござんす」

と、それはお澄へ、瀧十郎は、すげない女將の容子ツぷりなぞにはかけ構ひなく、靜に鐵瓶の沸つてゐる桑の八角火鉢へ、躙りよると、擦るやうに兩手を揉んで、「どうもすみません。なんですか茲ンとこへ來てくだらなくごたついちまつたもんですから……」

それでも、おもんはまだ默つてゐた。袖口から入れて、膝の上にきちんと置いてゐる手をほどかうともしずに、硝子を透して庭を見詰めてゐた。

「お澄ちやん、これ、おろしちアいけないんですか」

どこまで行つても世話に、瀧十郎は鐵瓶をぶらさげて、あつちこつちへ二三度ふり動かしながら、「なんかかう、おろすものはありませんかね」

枕もとの、置時計、手函、藥瓶の高坏に晒布をかぶせた盆、——蒲團敷に、そのそばに片よせてあつた。おもんは、横目でちらりとその方を見たが、知らん顏をしてゐた。

十三

「あら、ちよつと待つてくださいよ」

姉ほどではなくとも、矢張りどこかつんとして見える顏つきに似げなく、存外可愛らしい口の利きやうをして、枕もとからは誰よりも一番遠くにゐたお澄が、すぐ立つて行つて瀧十郎のそばにより、鐵瓶を受取らうとしたが、

「よござんす、よござんす。それをこつちによこしてください」

「さう？ へえ」

茶の湯の釜敷のやうなやつを近くによせてやつて、立つと、今度はもとの座へは戻らずに、そのまゝするする〳〵と屏風を廻つて、お澄は部屋を出て行つて了つた。

「あなた一體なにしに來たの」

八つ當より少しちひさいかと思はれるやうな、

いやにくつきりした鳥晴を据ゑて、ぢッと男を見詰めながら、おもんは一膝のり出し、肇て手を火鉢にかざした。
「これアどうも……。つい申しおくれましたが、いかがでいらつしやいます」
「よして頂戴！　そんな幇間みたいなまね……」
「ぢア、御病氣はいかがです」
「あなた見舞に來てくれたの」
「…………？」
「それでも、あたしが病氣だつてことだけは分つてたとみえるわね」
「まア、さう皮肉に……」
「あたし惱つてるのよ」
「ですからさ、もう疾にお見舞に來なけれアならなかつたんですけど……」
「それアもう、お忙しいことはよく分つてますよ。何しろ當時賣り出しの……」
「よさうぜ、野暮ッくさい！」
「えゝえ、どうせあたしは……」
「おもんさん、お前さんも、土地で何の某と云はれた人ぢアないか。白粉臭い人間を相手にした時と、代議士かなんかを痛振つてるのとは、ちつたア差異がつけられさうなもんだね。……こんな駈出でも、ちつとやそつとは盆暮のくばりものをする先だつてあるんだから、さう普通の月のやうな具合にやアいかないよ。あたしだつて、歳尾が來りやア人並に忙しいんだよ……」
「だのに、度々電話なんぞかけたりして……」
「すぐさう……」
「えゝ、ひねくれますとも！」
「いゝえさ、だから、あたしも忙しかつたし、今日行く、明日行くつて延び〳〵になつてたのは濟まない。それアあたしあやまりますよ。さア、この通り、手をついて改めてあやまりますよ。……だからさ、ね、もう機嫌をなほしてくださいね？　いゝだらう？　分つたね……？」
手をとつて、掌のうちにぢッと握りしめ、窺き込むやうにされると、おもんはだん〳〵首を垂れて、目には一杯涙をためて了つた。瀧十郎は白い灰に包まれた櫻炭に視線を移して、そつとそのまゝにして置いたが、心のうちでは、扨これからつれのあることを話さなければならないが、なんとかうまい機緣はないかしら、などと考へてゐた。
刻々と、軒端には夕晴が迫つて來た。見ると、松の幹を包んだ藁ばかりが、いやに浮き上つて、いとゞ小暗い八ツ手の茂のあたりに、白いものが三つ四つ、ふはり〳〵輕げに舞ひ落ちてゐた。
「あ、たうとう雪だ」
「あらさう？」
暫く眺めてゐるうちに、女の指に、ぎゆうッと力がこもつて來た……。

十四

それに應へるともなく、瀧十郎も、柔かい骨細な女の手を握りしめて、
「もう喧嘩するのよしませうね、仲よくしませうね」
薄暗く、濕つたやうな部屋の空氣のなかに、おもんは癖の、頸を引いて、ほの白い頰に莞爾すると、面を伏せて、そつと手の甲へ脣を押しつけた。
「隨分おこつてたんだけど、駄目ね……」
ぐツたり横坐りになるのを、そのまゝ胸に引きよせて、額に、目に、それから脣に……。
いく時かすぎて、ぱッと電燈が灯つた。五十燭の、目映い光の下に、すぐ二人は體を離して、なんとなく微笑み交した。
三好だつて面白くなからうし、それにもうそろそろ藤代さんの來る時分だ、と思ふと、瀧十郎も有繫に落つかなかつた、あとはあととして、

ひと先でも、つれの待つてゐる座敷の方へ戻つて行かなければならない、と思つた。

「それアさうとね、實は今日は、お見舞を兼ねて、御飯を頂きに出たんですがね。……いゝえね、……つまりその、お二人ばかりお客様が見えることになつてるんですがね……」

案のぢやう女將が不愕な顏をして、何か云ひかけるのに、おッかぶせて、

「實はね、お一人は藤代さん、……ね？ 分つたでせう。始終御馳走にばかりなつてるし、冗談半分ぢアあるけれど、いつかもお澄ちやんに、今度はきつとおつれして來るからつて、あんなにさう云つてあるもんだしするから、お見舞を兼ねて、……一體、兼ねたりしちアすまないんだけど、もうお一人は、……あ、いつか見えた三好先生ね、あの方にお相客を願つてさ、ちよいと晩御飯だけ附合つて頂くことになつてるんだがねえ……」

「あなたともでお三人ね……」

おもんは、ちよつと考へるやうな口つきをしてゐたが、急に輕快な調子になると、「三人くらゐはいり切れないことはないわね」

と云ひながら、部屋の廣さを目測るのに氣が附かなかつたなら、瀧十郎でも、その意味が、すぐには呑み込めなかつたに違ひない。尤もそれは、思ひもかけない話だつたが、急に突拍子もない考へをもつことの大好きなおもんの平常を知つてゐれば、（はゝア、また始まつたな）と頷けないでもなかつた。咄嗟に、それから起る都合不都合を思ひ測りながら、けれども瀧十郎は、どこまでも驚かないと云つた表情で、

「三人はいり切るつて……？」

「今夜はね、あたしの御招待にさせて頂戴。年忘れやら、全快……でもないけれど、まアお床上げの祝ひを兼ねて、あたしが皆さんをおよびするわ、この部屋で皆さん御一緒に、一杯召上つて頂くわ。ね、いゝでせう？」

「それアもうあッしは、喜んでおうけするが……、三好さんだつて、別になにはなからうと思ふが……」

「藤代さんつて方には、まだお目にかゝつたことがないんだから、いきなりでは失禮かしら」

「いゝえ、失禮つてこともないだらうけれど……、ぢア、もうそろ／＼お見えになる頃だから、兎も角あッしからさう申しあげてみませう。大抵可厭とは仰有るまいと思ふんだが……」

「さうしたら、お澄ちやんにお酌をして貰つて……、あの人たちだつてどんなに喜ぶか知れやアしないわ」

「あゝ、その點は、それアもう非常に興味があるんだがね……」

「あゝ、いゝわ／＼。さうなさいよ、さう決めちまひませうよ」

子供のやうに勇みたつて、おもんは、なんの爲ともなく身を起し、すぐまた坐つたりした。

初雪の夜

一

藤代信之は、自動車のなかで、いまうちを出がけに、細君の朋子と取り交して來た言葉爭に就いて、ぼんやり思ひ返してゐた。——書齋に呼んで、出かけるから何か着物を見て、揃へて置いてくれ、と頼んだのに對して、さして珍しくもないことだが、隨つてまた彼の方でもいい加減それに馴れて了ひさうなものだが、いつもの佛頂面で、碌に返事もしずに出て行かうとしたのが、事の起りだつた。

二三日來の飮みすぎ、夜更で、勞れから來た不機嫌は、自分でも承知してゐたから、うちの者とでも出來るだけ口を利かない算段と、一つ

は年末に重なつて來てゐる家事向の雜用に埒をあけて置かうとして、十一時頃例によつて朝晝兼帶の食事をすますと、前から暖めさせて置いた洋館の書齋に、謂はば自分自身を禁錮して了つたのだ。大鏡の前に、亡き兩親の寫眞や、球を踏まへた獅子の彫刻で飾つた英國製の舊い置時計や、友達の結婚披露に贈られた銀の小函や、三Bのマドロス・パイプや、そんなものが雜然と載つてゐる舊式な、大理石のマントル・ピイスに近く肘椅子をよせて、蠟の色に、また馬糞紙の色に搖れ騰る焰の下から、ほろ／＼ほろ／＼と舌を吐く石炭の火を見詰めてゐると、然しそのまゝもう腰がもちあがらなくなつて了つた。たつた一人でゐる時の信之の陰氣臭さ、不精ッたらしさ、――それは、どれほど彼に親しんだつもりでも、ちよつと想像だにしかねるほどのものだつた。ひとりぽつとものを思ふと云ふことは、彼にあつては、その思考の對象から、一枚一枚衣を剝ぎとることに外ならなかつた。寒く、痩せ細つて行く芯を、容赦もなく、あとからあとからとむいてはむく、……結局は、自分の心が、寂しさに澁面をつくり、寒さに凍りついて了ふまで剝きつゞける。――今日も、煖爐の前にどつかりと腰を据ゑたきり、手を延ばして机の上の手紙を一通とつてみるでもなく、外見からはたゞぼかんと焰の舌を見詰めたまゝ、瀧十郎の電話を取次いで來るまで、凡そ四時間ばかりと云ふもの、景氣よくは欠伸ひとつ出ないほどの陰鬱に耽つてゐたのだ。

電話口に立つた信之は、けれどもまた、全く別人だつた。どれほど不機嫌な時だらうと、――彼のもの思ひのなかで、人間と云ふものが、死神のやうに痩せさらぼへて了ふとか、泥溝のなかの猫の屍骸のやうに、蛆だらけになつて腐りかけるとか、そんな風な場合だらうとも、一旦「そと面」となれば、顏、聲、身振り、どこにひとつ、陰鬱のイの字、不景氣のフの字なぞ、藥にしたくも見出せなくなつて了ふ。勿論、承知するしないは、自らそれとは別問題で、本當を云へばこんな日に、幸好や瀧十郎と逢ひたくはなかつたのだが、その斷り方でも、大抵の人の承知の仕様よりも、却つて元氣よく、嬉しさうで、はたから聞けば、內心行きたいのを、いろ／＼揄揶つて誘ひ手をぢらしてでもゐるとしか思はれなかつた。

偶然、電話室の前に通りかゝつた細君のことにすれば、たまにうちにゐるかと思へば、書齋に引つ込んだきりおやつを知らせにやつても出ても來ないくせに、よそから呼出しの電話がかかつたとなると、うつて變つた機嫌顏で、ヘラヘラとくだらない口を利いてゐるのだから、これは決していゝ心持でなかつたに違ひない。さうなると、斷つてゐるのさへ、そこに通りかゝつた自分への體裁と邪推されて來る……。

正直で、善良な朋子は、すつかり腹を立てさせられてゐたのだ。

二

「おい！」

冷たく、わるく落つき拂つて出て行かうとする朋子の背なかに、思はず叩きつけるやうな聲を放つた信之は、一瞬千里の荒野と眺めてゐた胸のなかに、急に人間臭い「怒り」を感じて、むしろ蘇生の思ひだつた。假令霜に覆はれた舗道だらうと、兎に角それは人里へ導くところのものだし、それに、相手が、妻以外の誰かだつたなら、さう容易くは、怒らせても貰へなかつたに違ひない、――それを思へば、寧ろ有難と歡喜に躍りあがつてもいゝ場合だつたが、一旦踏み込んだ陰鬱の道を、彼は一目散に駈けおりたのだ、――胸の「喜び」を「怒」つて怒鳴り散らしたのだ。

「――なんだ、その態度は！」

それでも、知らん顔で、扉の把手をガチャリと廻はしてあけようとする、――それが、信之には、良人の理不盡を、黙つて「世間」に訴へ、「世間」の審決を待たうとする「公園」のやうに感じられたのだ。

「おい、待たないか！ 俺が口を利いてるのが分らないのか。なんとか返事をしたらどうだ！」

きツと、蒼白んだ顔を振り向けて、

「なんにも御返事をすることはないぢアありませんか」

「心に不平があるならあるで、そんなへんな顔をしてゐないで、はつきり口で云へといふんだ。いやに反抗的な態度を見せて置きながら、云ふことがないもないもんだ！」

「どうもすみません」

その白々と冷たい挨拶で、良人は一層かツとなつた。

「誰があやまつてくれと云つた！ 嘘つき！ もつと肚と口とを一緒にしろ。何故思つてることがそのまゝ口へ出せないんだ！」

「申しあげたところで無駄なことです」

「無駄か無駄でないか、云つてみないで結果が分るもんかな。云つてみろ！」

然し細君は、たうとう何も云はなかつた。さう怒鳴りたてられてまで、云ふべきほどのことでもなく、よし云つてみたところで仕様がないと思つてゐる氣持も、またその不平の原因も、その實信之にはすつかり感じられてゐたのだ。感じられてゐながら云はせてみたく、云はせて置いてやり返してみたく、それで最後に泣きだしでもしたら、自分の方からあやまつて、いたはり慰めてやりたかつたのだ。それほど人里を戀しがつてゐたのだ……。

霞ケ關をおり、日比谷公園を拔けて自動車が走る頃、大分平かな氣持に返つた信之は、自分に對しては寛大すぎるほど思ひやり深く、細君に對してはたゞ〳〵氣の毒に、すべて暖かく、明るくものごとが考へられるやうになつて來た。――眞盛りの桃の花の間に、ぼつ〳〵苫屋根を望むやうな、人臭いと云ふほどでもない里近くまで、どうやらかうやらおりて來たのだつた。けれども、そこも彼には淋しかつた。遠く桃里を望む、と云ふやうな境地は、ちよつとは惡くないとしても、性分なり年齢なりから云つて、到底彼が安住の地ではあり得なかつた。色や音や味や匂や、矢鱈に數多く、滅茶苦茶に混亂し、焦け爛れさうに熱く、烈しく、強く、あたまがグラ〳〵して來なければ、「人の間」に生きてゐるやうな氣がしないのだつた。

……氣がつくと、窓のそとに、我ひとりたそがれの空の光を喚ひがほに、片々と雪が飛んでゐた。初雪、――その初雪と云ふことが、なんとなく、要するに子供らしく、信之の心をはしやがせた。

三

陽氣な遊び仲間を待たせてある方へ運ばれて行く自動車が、尾張町の止まれにひツ掛つたりすると、じり〳〵して、思はず身を起して彼方を見るほどに、信之は急きたつて來た。ともつたばかりの街の灯、――ものゝ哀を知つて二十年、幾千度となく見馴れても、歡樂に誘ふその魅力は、いまだに微かながら心を擽つて、動もすれば、甘く悲しい追憶の緒につれて行かれさうになる……。そこには、心に殘る女の數も、五人や六人ではきかなかつた。影の薄いのは、こんぐらかつた色絲のやうに、どこを紅とも綠とも分ちかねた。その上、今では、さう云ふほどに鮮かでもなかつた。下積の分からだん〳〵に、記憶の叢の塵にまみれ色あせて、綠と云つたところで、紅らしいところを引ずり出してみたところで、どうにも仕樣のないものになつて行つた。大ぶん小切すぎたきらひはあるが、

假に人生を五十と云ふならば、十年前に半を過ぎ、餘すところ十五年、その十五年にも、あともう僅ばかりで手がつかうとしてゐる信之なのだが、今もつて、一埃だらけの緒情を、あとからあとから拵へて行かなければ承知ならないとは……。

ちら／＼と白いものゝ落ちだした灯ともしごろ、禁酒の掟はまだのこと、よしんば世の中がひつくり返らうとも、假令いのちは召されうとも、今宵この、酒と戀とをよそにして、なんの生き甲斐があるものか――と、信之の心は、盃を銜まずして早くも醉ひ、ひとと見えざるに既に恍惚たるものがあつた。……二重廻しの袖を引き合せ、たゞ一人自動車の片隅に小さくなつて、うつとりと目を細くしてゐたのだ。

助手が玄關へ驅けつけて訊くとすぐに知れて、ほどなく彼はよし野の門前に降り立つた。

「お迎へは？」

「いりません」

掛りつけのうちなので、祝儀だけ渡して、すぐ石疊の路次をはいつて行つた。大ぶん繁くなつて來た雪は、外套の袖にかゝり、濡石の上に消え、植込の葉に微な音をたてた。 信之は、たゞもう無上にいゝ心持だつた。

「ごめんなさい」

廊下に二三人の足音がドカ／＼と驅けよると、

「どうれ」

ちよつと鼻にかゝる瀧十郎の聲で「それ、女どもお出迎へ……」

「まア、ほんとに茶目さんね」

二十一二のと、十六七の赤い頰をしたのと、二人の女中をあとさきにして、瀧十郎が飛んで出たが、いきなり疊にへいつくばつて、

「これは／＼、藤代樣には遠路のところ……」

「馬鹿め！」

「おや？ それア、違ふでせう、それア歸りがけの臺詞でせう」

「往復ともに通用するよ、相手が馬鹿でさへあれア」

「あれ、河内山が往復切符を買つてはいつて來ちアいけないなア」

「サウシュるつてね」

「え――？」

「損するつてんだよ」

「それア少し違ふでせう」

「どう云ふことになりますね」

「坊主まる儲け……」

「へ、丁度おあとの支度が……」

右の肩越にちよいとうしろを指さして、頭をさげる容子に、よくは分らないながら、女中たちまでどッと笑ひ崩れた。

四

それには笑ひ顏も向けずに、そゝくさと外套や襟卷をとつてそこに置き、縞目も分らないほどじみな結城ぞろひの背を丸くして、信之は兩手をこすり合せながら、

「まア然し、御案内ねがひませう」

「いや、これアどうも……。あんまり御機嫌がいゝんで、ついうつかりお顏を見入つちまひましたよ」

「それアもう……、雪さへ降りやア……犬ッころ同然で……」

先へ立つて梯子段をあがりながら、瀧十郎が、

「少しはいつてるらしい……」

「とんだこつてす。人樣の御招待を控へて、……そんな……」

「そんな、……なんです」

「そんな失禮なことと、綺麗ごとに云つとかうか、それとも、そんな無駄なこと、といつそざつくばらんにぶちまけちまはうかと思つてね、實はちよいと迷つてたところさ」

云ふうちに表二階に來ると、松の間の襖を指さきでコツ〱とやつて置いてから、瀧十郎があけて、

「さアどうぞ……」

不貞寢れたやうに、ぐツたりと卓袱臺に頰杖をつき、眉の間には不機嫌な皺を疊んで、三好がじろりと目を向けた。

「いや、どうも、これア、ひどく不景氣な顔をしてるね。えー、もうすぐに華魁もお廻りになりますから……、とでも申しあげたくなる顔つきだぜ」

なんとでも、すぐに切り返して來るだらうと思つて、いきなりそんな毒舌を浴せかけながら、信之は、突當りの壁を背負ふ位置に坐り込んだが、どうしたのか、グスリとも云はずに黙りきつてゐるなどは、取捲上手の三好としては、餘つぽど珍らしかつた。よく〱のことがあつたか、さもなければ氣分でも惡いのだらうと思はれた。あとをしめてはいつて來た瀧十郎にも、ちよいと白け返つたやうな容子がみえた。こいつア一つ、なんとかはぐらかして了はなきアならない、と信之は、自分でも決していゝとは思へないのに、それが癖の剽れを出して、早速手近の銚子を取り上げてみたが、冷えきつて、而も大ぶん輕かつた。もう一本には手酌へおあつた。熱燗すきの三好には、ちつとどうかとも思はれたが、景氣よく、

「さア、一つあけて頂かうぢやないか」

「さうですか、どうもすみません」

それでも居ずまひを直して、盃の底に殘つてゐたのを、チャプリと盃洗にあけて酌をして貰ふと、一口に飲んで、すぐ信之に返した。信之は三好の酌でたて續けに三杯のんだが、冷めたいので、却つて身うちが寒くなつた。その間に瀧十郎が呼鈴を押し、すぐまた廊下に出て、手を叩いたりしてゐるところへ、先刻玄關に出迎へた二十一二の大柄な女が、手焙と絞り手拭を持つてあがつて來て、

「いらつしやいまし」

と、入口に手をつき、すぐに信之のそばへそれを運んで來た。

「およしさん、お銚子はどうしたんだ。大急ぎ大急ぎ」

瀧十郎は、いつになく突慳貪な調子で促したてたが、ひよいと振り向いて、膳の形に編んだ手拭入の竹籠を見ると、少しはてれかくしのやうに、「おや、絞り手拭が出ましたね？　贅澤家が來ると、すぐから扱ひが違ふんだから可笑しくなつちやふなア。ねえ、三好先生、貴方は、かう云ふふかしたての振りハンみたいなものは頂戴しませんでしたね」

そんなことを云つて、いかにも自然らしい笑顔を三好の方に向けた。

五

けれども三好は、聞えなかつたやうに、そつちには知らん顔をして、まだそこにまご〱してゐる女中のおよしに、

「おい君、何をしてるんだな、早く酒を持つて來ないか、酒を！」

「はい」

そこに居辛いものらしく、すぐ頰をふくらませたが、瀧十郎の方を見あげると、急に優しくなつて、

「あの、お手拭ももつて參りませうか」

「いゝえ、嘘だよ、冗談だよ。それよりお銚子をね……」

「はい、唯今」

と云ふ時、襖のそとから、およしさんと聲をかけて、細目にあけた隙から、若い方の女が銚子をさし入れた。

「そら、來たよ」

とばかり、瀧十郎はパツと摑むと、下座に突膝

で、信之が前に控へた盃に、「へ、お待たせ申しましてすみません」
「これア一遍三好君に返さう」
「まアどうぞ……」
「ぢア、先生にはこちらを……」
と、瀧十郎は、手早く自分の席の盃臺に伏せてあつたやつを取つて、呪禁ほどに盃洗で清めて、三好に渡さうとした。
「まア、藤代さんにお酌をしたまいな」
「そいぢアお先に……」
辭退しずに注がせ、一口のんで置くと、信之はニコ／＼顔で、「察するところ、これアなんだね、瀧さんは、來るなり奥へ引き取られの、嵐さんひとりで、ぽつねんと今まで待たされたところから、少々ばかりお冠と……、どうだい違つたかね？」
顏を見られて、瀧十郎は、耳のうしろをチョコチョコと掻きながら、故意とらしい卑屈な頭のさげ方をした。
「役者たア附合へねえ」
突然三好が、吐き出すやうに云つた。
「まア何もさう一図に……」
「いゝえ、さうですよ」
「いよ／＼さうだと思ふたら、それア附合はないもよからうが……」
そこまでは、ちよいときつぱり云つて、然し瀧さんも決してよかアないね。御贔屓に對するお勤めか、それとももう少し違つたものか、そのへんのことはあたしも知らないがね、友達の附合を忘れるほどなら、初手から一人で來れアよかつたんだ。友達を誘つて置いて、たゞの一杯お相手もしないうちから消えちまふなぞは、ちつともものを知らなすぎた仕方だぜ。それもさ、實はかう／＼斯々だからと、ちやアんと譯を話して……、三好君、なんとか前にお斷りして立つたのかね？」
「どういたしまして」
「だらう？　それぢやア瀧さん、仲よしの間の恕だて、とは云はれないね。何をされたつて、相手の心持がよく解つてさへすれア、なんとも思ふもんぢアないけれど、そんな奇怪なまねをされりやア、誰だつていゝ心持はしないからね。『奇怪なまね』つて云ふのは、……まアいゝや、そこまで云はないつたつて解つてらアね、解つてるだらう？」
額を窺き込まれるほど、なほ／＼深く首垂れて、瀧十郎は、子供ツぽく二三度合點々々をした。
先刻の盃がまだ空のまゝであるのに氣がつくと、信之は、自分のを乾して三好に獻し、酌をしてから、空のを取つて瀧十郎の前に押しやりながら、
「これアまア、一杯君がのんで、それからのことにしたまいな」

六

「いろ／＼とどうも有難うございました」
とまづ信之に、「誠に失禮をいたしまして申譯ございません」
と、三好に、丁寧に二度頭をさげて呟いたが、その言葉は、瀧十郎としては、いつになく素朴で、大へんよかつたけれど、調子に、信之はなんとなく氣に入らないものを感じた。丁度その時、然しおよしがはいつて來て、盃、箸、海鼠腸と云ふやうなものを、一通り彼の前に並べてから、瀧十郎に、
「あの……」
「お料理ですか？　すぐこゝへ出してください」
「いゝえ……」
「いゝから、早くお料理を持つて來てくださいよ！」
「はい」

御膳に對いて、へんな顔で、すぐさがつて行つた。信之は酒癖のいゝ口もと故に、一層晴々しく見える笑顔を傾けて、瀧十郎の盃に酌をしてやり、すぐ一口にあけて三好に獻したのにも酌をしてやり、それから自分の盃を起して瀧十郎が手で出すのを、「ま、いゝよ〳〵」と拂ひのけて、手酌で注いだが、つい盛あがるほどになつたやつへ、口からもつて行きながら、

「瀧さん、まだ君、なんか隱してやアしないかい？」

と、一口吸つて、「いゝえ、餘計なお世話かも知れないけどさ、もし君がなんか隱してるために、――たつた今あたしにはへんなことを云はれてるし、つまり板挾みのやうな態になつて、君が困りやアしないかと思つてさ。困ることがなけれアそれでいゝんだけど……」

「何しろ、今日は少しへんだよ」

三好が、瀧十郎から獻されたのを返して、酌をしてやりながら、「どうもいつもの瀧さんのやうな具合に、すかッといかないぜ。すつかりしぼついちまつてるんぢアないのかい」

「實はね」

思ひ切つたやうに、ぐつとあふつて信之に獻し、ひと膝のり出して、「實は……」

「どうしたんだい」

と、信之が笑へば、自分でも笑ひだして、

「いゝえ、「實は」と切り出すほど改まつた話でもなかつたもんですから、へんにあとが出そびれちまつたんです。なにね、こゝの女將さんが先ぢうから痲疹でねてたんですがね、もう殆ど全快したんで、その身祝ひなり年忘れといふやうな意味で、あんまり唐突ですけれど、今夜みなさんに一口差上げたいつて云ふんです。これアなんですよ、たつた今あッしがちよつと奧へ顏出しをして、今夜これ〳〵でお二人がお見えになるつて話したもんですから、それぢアつてことになつたんで、決して前々から段取つてあつた譯ぢアないんですよ……」

「誰もさう思つてやアしないよ」

と、三好がやゝ皮肉に口を入れた。瀧十郎は、信之の方へばかり目をやつて、

「で、甚だ失禮ですけれど、自分の部屋へ來て頂いて、うちの者と一緒に、――と云つたところで、他には妹さんが一人きりですが、たゞもう面白くなと晩騷ぎたいつて云ふんです。つまり賑かなことの好きな人でしてね、自分が出られゝば、すぐにもお座敷へ飛んで來るんですが、まだそこまでに快なつてないので、たゞ自分の部屋をお座敷と思つて、ちつとも御遠慮なく、十分に御あがつて頂きたいつて云ふんですがね、いかゞでせう、承知してやつてくださると、どんなに喜ぶか知れないんですがね」

七

聞き終ると、信之は、快く笑顔よく、幾度も無言で頷いた。それは、直感と云へば直覺、あてずッぽうと云へばあてずッぽうだが、ふとそんなことぢアないかと思つてゐたのが、不思議なほどにぴたりと的中つて、我知らずこみあげて來た、無邪氣な得意と滿足との笑ひだつた。

「君も、感心に、可なり露骨に云ひはしたが……」

と、暫くニコ〳〵してゐた揚句に、信之が口を切つて、「つまり、早い話が、二人して取捲いてほしいんだらう？ 無禮講はどんなに無禮講でもかまはないが、兎に角取捲かせたい氣持は十分にあるんだね」

「もう一つ突ッ込んで云やア――」

すぐその尾について、三好が、「信ひとりならそれでよし、つれがあるくらゐなら、いつそ總揚にして了つて、面白可笑しく一晩あそばう……」

「そこまで云つちまつちア、みも蓋もないが、まア〳〵そんなことだ、ねえ、瀧さん、さうだらう？」

「ま、いかやうともよろしきやうに……」

無理やりに笑ひながら、さばけた調子で、無關心な氣持をみせようとはしたが、底の不愉快は隱しきれなかつた。

「だがね、瀧さん、先の喧嘩は今して置け、だよ。それくらゐに思つて置けば、あとでよければ大結構だし、大抵わるくつたつて驚かないですむからね」

「つまりなんだア、この招待をうけるについちア、それくらゐの覺悟が要る、と云つたやうなわけだ」

「兜の忍緒を切つた態ですね？」

兎にも角にも、この容子ならばみんな階下へ附合つてくれさうだと思ふと、急に瀧十郎は、つけ景氣にはしやぎだして、「思ひ切つたる鎧の袖、行きがた知れず――ウ」

「なに、命までとらうたア云ふまい」

その信之の言葉で、すつかりもう話がきまつたことにして了つて、

「有難い！ おア御迷惑でも、今夜は一つ附合つてやつてくださいまし」

と云ふなり、踊り出すやうな恰好をして立ち上り、ポン〳〵と手を拍つてから、今度はまた慌てくさつて呼鈴を押した。

「あんなにも嬉しいもんですかねえ」

信之の方を向いてさう云ふ三好の調子には、まだなんとなく毒々しいところが殘つてゐたけれども、瀧十郎は、洒々としたもので、雀右衛門の臺詞廻しに似せて、

「ま、これが嬉しうなうて、なんとしませうぞいなウ。……ね、三好先生、これからです。これからが大へんなことになつて來るんでさアね。ね、さうでせう？ ね？」

芝居によくある、「な、それ、何ぢやによつて、何々を、なア」と目のくり玉をクル〳〵させながら、露には云へないことを相手に呑み込ませようとする、あのお定りの技巧、――瀧十郎にとつてはお手のもの、技巧を用ゐて、無言で、頻と胸で押すやうな形をしてみせると、忽ち三好はのつて了つて、だん〳〵に先方の意思が通じて來る、愛の役者の技巧を、見眞似にしては器用にやつて、「む、む、むゝ」と呑み込んで了つた。

「なアんだい」

自分に關したこととは、すぐに感じられたけれども、その上さう感じたばかりでもうなんとなくいゝ加減になつて來たけれども、信之は、出來るだけ何氣ない態にさらりと云つてのけた。「餅を咽にひつかけた人が、二人よつて、眼ばかり白黒さしてらア」

八

そこに、すつかりお化粧をして小ざつぱりと着更へたお勢が、二品ばかりの料理と銚子を載せた廣蓋を持つてはいつて來て、信之の前に鄭重に挨拶すると、

「ちつともお構ひ致しませんですみません」

「ほんとだよ、ちつと構はなすぎますぜ。おかげで、いま先生とあッしが、咽へ餅をつかへさせて大苦みさ」

「え、お餅？」

と、顏を見て、すぐ冗談と知ると、「なに云つてらつしやるんですね。……生憎、二三日前からお常さんがうちへ歸つてるもんですから、馴れない人たちばかりで、ほんとに困つちまふんですよ」

「あ、お料理もつて來ちまつたんだね？」

「あら、あなたがこつちに持つて來いつて仰有つたつて……」

「お前さんは、お風呂かなんかへ行つちまつて

て知るまいが、急に女將さんの御招待つてことになつて、これからお居間へ推參に及ばうと云ふところなんだぜ—

—へーえ—

肥つた片頰の笑ひに、知つてゐることは十分に見えたが、「さうですか、さう云ふことになつてるんでしたら、このまゝおさけして……—

—まア折角もつて來たもんだ、それはそれでここで頂戴して、あちらはあちらで、十分にまた頂くことにしようぢアないか。兎に角あたしは初對面だ、生れて初めて會ふ人に、なんの理由もなく御馳走にならうと云ふんだから、いかに圖々しいとは云つても、こいつちよつとてれだよ。お面を被つて行かないとはいり憎いから、もう少しこゝで飲んでからうぢアないか—

—贊成だな—

三好があけて信之に献すのに、いま運んで來た銚子で酌をしながら、

「それアもうお友達同士の方が、どのくらゐお氣が張らないで……—

と、信之の言葉を眞正面から釋つて、存外氣のいゝお勢が、心から氣の毒さうに呟きかけた時に、急に瀧十郎は遮つて、

—ぢアどうぞさう云ふことにして、お料理を並べてくださいな。なんだかあッしアお腹がすいて來たよ。それから、お如才もあるまいが、右の趣を女將さんの方へもよろしくお取次ねがひます—

「承知いたしました—

意味ありげな目で、瀧十郎の方へ笑ひかけながら、小皿ものを各自の前に並べた。それで肇て、酒席らしい情景が調つて來た。氣持の上でも、きまるだけのことはきまつて、どうやら少し落ついて來た。たゞ信之だけは、自分に關したことらしい、先刻の二人の囁し合が、心配になると云ふほどではないけれども、却へ心に殘つてゐた。どう云ふものか、それが女に關することで、而も自分の役廻りは決して惡くない、と云ふ感じが、例へば、どこからともなく微風が載せて來る花の香りのやうに、氣持よく心の面を撫でてゐた。それだけにもう一度そこへ話題を戻すことは未、少しでも氣にかけてゐるやうに思はれるだけでも、自分ひとりの心持として、ひどく恥しかつた。——さう云ふ二重の關心から、平常よりも一層磊達に、自在に、明朗に振舞ひたかつた。

（だが、意識的になつちアいけない、意識的になつちアいけない、虚心に、虚心に……）

さう思へば思ふほど、却つて虚心は彼から逃げて行きさうだつた。

九

二時間とは經たないうちに、いづれも案外の、運ばれた銚子の數も決して少くはなく、一座の興は早くも酣になりかけてゐた。たゞ[illegible]、時々來ては耳もとに口をよせるお勢に、ふん、よしよし、解つてる／＼と云ふ風に、すつかり呑み込んで、頷き返してゐる瀧十郎の快活な立場は、彼自身だけでなく、ほかの二人の酒興をも助けた。遠慮から、[illegible]、ことに露骨になるのだらうと思はれる[illegible]の言葉を、よくは聞きもしずに、握りつぶして、我から、

「まア、もう二三本……—

などと、どこまでも女達の附合を大事に、一生懸命つとめてゐるのが、先刻吐言じみたことを云つてゐるだけに、殊さら信之には氣の毒らしくてならなかつた。

—どうだね、それぢア御遠慮なしに、そろ／＼御招待の席へ罷り出ることにしちア……

たうとう、彼から口を切つた。

—正直いやア、水入らずで、この方が面白いんだがなア……—

三好は、いつかすつかり機嫌を直して、さう云

ふ言葉にさへ、今は少しの皮肉もなく、たゞ正直なところを述べると云ふ風になつてゐた。

「えゝ、ですから、彼方へ行つても、吾々ばかりの氣で、勝手に振舞つてやりませうよ。文字どほり傍人なきが如くにね。……ぢアどうぞ、御案內いたしますから……」

またもや御意の變らぬ間に、と云つた氣持を露骨に、瀧十郎は腰をもたげて、「お勢さん、それぢアすぐ行きますから、奧へさう云つといてください」

これでまアひと安心、と云ふ表情で、お勢もいそ／＼と小走りに出て行つた。

「どりや、座敷を變へて、飲み直さうか」

三好が故意と足もとをひよろつかして立ち上りながら、「どうしても、門弟何の某だな。白ッぽい袴の下から向脛を出してる輩だな」

「一番さきが荒次郎さんで、あとは大抵丈の順に引ッ込んで行きますね」

すぐもう冗口になつてゐる間に、信之は、表に向いた肘掛窓をあけて、ぼんやり立つて眺めてゐた。いつかすつかり白くなつた屋根が、遠く近く濃淡を見せ、暗い空の下に、しみ／＼と靜に、重なり續いてゐた。あけた幅に流れ出た灯のなかを、ちら／＼と、だいぶん大ぶりになつて來たやつが、輕く舞ひ落ちて來た。灯の縞をはづれると、嘘のやうに、その白さが消えて了ふ……。もうさら／＼と木の葉や軒に觸れる音もなく、――全く音がないのに、しんしんと云ふ氣持で、降りつもつて行くのが感じられた。なんとなく、信之には、廣重と云ふ人が思ひ出され、江戶と云ふ時代が胸に浮んで來た……。

「おや、いつの間にか眞ッ白になつちまひましたね」

瀧十郎が、その時、うしろから信之の肩を抱くやうにして、おもてをすかしたが、「これア明日は、とても素敵ですぜ。ところで、こいつが、生憎明日顏寄と來てるんだから、可厭ンなつちやふなア。世の中、よくしたもんだ……」

「行くなら行くで、さつさと行かうぢやアないか―」

立ちながら、手酌で一杯ぐつとやつて、三好は、そとの眺めなどには更に興味がないらしく、促したてた。瞬きもしずに、どこを焦點ともなく、ぢつと「雪」を見詰めてゐた信之が、空洞な心で、

「行かう」

と、呟いて、名殘惜げに窓をしめた。

十

「さア、それぢアどうぞ……」

瀧十郎を先に、信之、三好と並んで廊下へ出た。いつの間に來たか、二組ばかりの客があるらしく、奧の部屋からは盛んな笑ひ聲が聞えたり、女中のおよしが、あいた食器をさげて來るのに行き會つたりした。

「ちよいと路次を一つぬけますから……。大へんなところですよ」

故意と帳場の繁さんと云ふ五十男にも聞えよがしに、そんなことを云ひながら、例の臺所のそばへかゝると、瀧十郎は急ぎ足に驅ぬけ、序でに、「今晚は、お寒うございい」と聲をかけた。

「いらつしやいまし。どうもえらいとこをお通し申しまして……」

筆を持つたまゝの手で、禿げあがつた額をつるりとやつて、帳場が愛想笑ひをした。

「御免なさい」

信之も聲をかけて續いた。

奧の間の廊下まで來ると、俄に瀧十郎は醉漢らしいつくり聲をあげて、

「さア、來ましたよ、來ましたよ！　ど、同勢そろつて闖入しますよ！」

「さア／＼、どうぞ、ずうッとお通りください

まし」
　内なる聲も、十分に愛嬌を含んで、ひどく景氣がよかつた。入口の屏風は、一枚疊んで短くして、そのまゝ立て廻してあつたが、夜具布團や藥瓶、手函などは勿論のこと、桑の小机、炬燵まで綺麗に取り片づけて、眞ン中よりもやゝ床前によせて、三越ものゝ、折り疊みの利く大きな餉臺が出してあつた。眞つ先に跳び込んだ瀧十郎が、
「や、これアすつかり景色が變つちやつて……」
　と云ひさして、慌てゝ口を噤むのを、縞お召のちよい〱着に着更へ、小紋の羽織をひつかけて、うつすり化粧もし直したらしいおもんが、立つて出迎へながら、すばやく目つきで制めると、すぐあでやかな笑顔になつて、
「まア〱、みなさん、折角お酒宴のところを御無理をお願ひ申しましたのに、……よくこそおいでくださいました。さア、どうぞずうツとお通ンなすつてくださいまし」
　云ひながら、入れ違ひに自分は下座にさがり、床前に二つ並べた座布團の方へ、信之と三好とを押しやらんばかりにした。悪く遠慮をしずに、つか〱と通つて、床前の下座の方に信之が坐つた。

「そりやアいけません」
　三好がむきになつて云ふのを、
「まアま、どうぞ先生、そちらへ……」
「あなたまで一緒になつて、先生はないでせう。……ねえ、信さん、ほんとに、あちらへいらしつてくださいなね」
「おんなじこつてさア」
「おんなじこつたから、變つてくださいよ」
　部屋の突きあたり、餉臺から云へば横幅で、一人分の席になつてゐるところへ、自分はこゝと納まつて、それでもまだ突ッ立つてゐた瀧十郎まで一緒になつて、二言三言口を添へると、
「おアまアお年役で、御免かうむりますかな」
　と、信之は、笑ひながら、坐つてゐた布團を裏返して、正座に移つた。
「えゝと、御紹介いたしませう」
　席が定まるや否や、瀧十郎は、巫山戯たやうな眞面目顔で、「藤代さんです。始終もうあたしがお世話にばかりなつてます。……えゝこれが當家の女將、有名なるおもんの方、何分ともどうぞ御贔屓に……」

十一

　故意とらしいと釋れば、一種逆手の傲慢とも見誤られるほどに、初對面の人に對する信之の態度は慇懃を極めたものだつた。が、事實それは、どこか世馴れない、人見知りする性分から來ることだつた。餘程酒でもはいつてゐる場合は別だが、さもない限り、生面はもとより一應の知人でも、一皮ふつ切れた感じがもてないうちは、堅くなつて、へんに取片づけた顔をしてゐるのが常だつた。二階で「お面を被つて行かないとはいり憎い」と云つたのも、決して言葉の面白味からばかりではなかつた。
　つまりは料理屋にあがつた客から、疊に手をさげられると、おもんの方も勢ひ鄭重にならない譯にはいかないで、この挨拶はちよつと、場合と情景とに對して、不相合なほどのものになつた。その代りと云ふのも可笑しいが、慥に、意識の下にはその氣持も働いて、三好と女將との挨拶が、これはまた馬鹿に親しげな、調子のいゝものだつた。
「どうも先日は……。いかがです、ちつとお加減がお惡かつたさうで……」
「まア先生、この年になつて、どうでせうあた、麻疹つてのは……」
「いやそれですよ、有繋はあなたで、取ッ附く病氣までが若々しい……」
「あらまア、狂言でもお書きになるお方は、矢

ツ張り仰有ることが遊ひますわね」

　と、例の顎を引いて優睨みに見据ゑて置いて、急に彈け返つたやうな笑ひ聲をあげ、その笑ひの尾を引きながら、部屋の隅へ立つて行つて、呼鈴を押した。

　一度や二度の馴染で、この應酬は、信之には、また鯱鉾立をしても出來ない藝當だつた。殊に瀧十郎を目の前に置いて、「取ッ附く病氣まで若々しい」は、釋りやうによつては、聊か失言のきらひがないでもなかつた。

「いえね、實はその話で先刻大失策……。麻疹つて云はうとしたやつが、どうしたはずみか、疱瘡と出ちやつて――」

「疱瘡？」

　すぐまた座に戻つて來ながら、袖口をもれる長襦袢の具合をして、「いゝえ、いゝ年をして、やたらと赤いものが好きなところなんぞ、どつちかと云やア疱瘡神に御縁のある方かも知れませんよ」

　總ての好みが、誰が目にもちと華美すぎるだけに、――つまり、あんまり本當のことが云はれてゐるだけに、この言葉は、うまくうけて、なんとかはぐらかして了はないと、一座に白けた空氣を醸さないとも限らない性質を帶びてゐた。たつた今いぢくつた長襦袢に、問題の色がちらついてゐたことが、それ故にこその言葉でもあらうが、同時にまた、かの危險性を一層強めてもゐた。

「へえ、赤い色がお好きですか」

　と、信之が肇て口を開いて、「それア大に……話せる、と云つちや失禮だが……、あたしも同感ですね、赤はよござんすよ。なんてたつて女は赤ですよ。黑い髪の毛に、赤い珠でもよし、赤い手絡でもいゝが、兎に角さう云ふものを用ゐ始めた女は、大した人ですね……」

「巴里の新流行が……」

　三好が言葉を挾んで、「それだつて云ひますね、黑と赤の取合せだつて……」

十二

　そこへ、廣蓋に酒肴を運んで來たのはお勢だつた。女將も、あとの料理のことを囁いたりしながら手傳つて、客の前に並べ、最後に自分の分を取りあげると、

「御免かうむつて、あたしもこちらでお相伴させて頂きます」

「それアもう無論……」

　と、三好がエアシップの煙をモク〳〵と吐き出して、「それから、お妹御さんもおよろしかつたら、御一緒にどうです」

　瀧十郎の方へも、ちよい〳〵目を向けながらさう云ふと、女將は(いゝえ、もうあんな者は……)とでも云つた氣持の笑ひ方をしてから、

「……でもまア、せめてはお酌だけでも……」

　と、これはお勢へ向つて云つた。

「そんなこと云はずに、御免かうむつて、御一緒になにしたらいゝぢアありませんか、ねえ、女將さん、さうなさいな」

「いゝえ、どうせ並べてやつたところで、なんにも頂けやアしませんわ」

　意味をこめた目つきで瀧十郎の方を見やつてから、あとはたゞはたへの「聞かせ」に、「それになんですか、今夜は珍らしくちと立て込んでるやうですから、こつちは、不馴れですけれどあの娘にお給仕をして貰ひませう、それもまた家庭的で却つていゝかも知れませんから」

　ちよつと使ひさうもなくつて、それで云はれてみると、成程使ひたがりさうな、その「家庭的」と云ふ言葉が、男たちの胸のなかで、ちよつと擽つたく響いた。

「ぢやアまアそれならそれで……」

　瀧十郎は、延びあがるやうにしてお勢の肩を捉へて、「早く出ていらつしやいつて。あんまり

いつまでもおめかししてると、却つて出端がなくなつちまひますからつて、あッしがさう云つてたつてさう云つてください」

その間に女將の酌でとうに二人の盃は滿たされ、銚子の口が瀧十郎の方を向いて待つてゐた。

「さア餘計なおせつかいをやかずに、早くお盃をお持ちなさいなね」

「と叱られて……」

自分の床に合せて、盃を差し出し、注がせるとすぐに銚子をうけ取つて、右に持ちかへながら、「さアどうぞ」

「へ、ありがたう」

みんな揃つたところで、信之が、

「ぢア頂きます」

と、克明に挨拶して盃を取りあげた。

「え！ 御全快のお祝を……」

瀧十郎は、洋風の乾盃を眞似た手つきで目の高さまで持つて行つた。

「お芽出度う」

い、はたの二人もそれに和した。

「有難うございます。どうも恐れ入りました」

有繫に心から嬉しさうに微笑みながら、おもんが輕く會釋を返すと、勢としても、みんな一息に乾して了つた。そこに、四つの空の盃を控へて、ちよいと繼穂なく、手持無沙汰の態にならうとするのを、瀧十郎がすばやく銚子を取りあげて、

「と云ふやうなわけで、これでお座着がすむと、すぐトーンと來ますね。……馬鹿だね！」

云ひながら、乘り出して、信之、三好、女將と酌をして廻り、自分のへは、ほんの體裁に手を出す女將にかけ構ひなく、手酌で注いで、「さうすると、急に吃驚するやうな聲を出して、さア、お惚話なさい！……つて云ひますね」

「よくそんな古風な臺詞を心得てるね」

すぐ三好が言葉敵に立つた。

十三

「冗談でせう」

瀧十郎はそろ〳〵用心して、たんとは口へはいらないやうに、巧に盃の縁を吸つて、「今だつてあなた、吉原へ行つて横町藝者なるものに逢つてごらんなさい……」

「それより手ッ取早くいくにやア、席亭に限らアね。お白湯を呑みながら、ひとりでうかれてる氣違ひが、必ず一人や二人は出て來るよ」

「あゝさう〳〵。あゝ云ふ人たちはきつとやりますね。さアお惚話なはい、お惚話なはい、お惚話なすつてお試しなはい！……なんてね」

「この二人はね……」

と、信之が、呆れ顔をしてゐる女將に、「今いふお白湯を呑むと氣のふれる連中に、二人組んでやつてるのがありませう？ つまりあれなんですよ。たゞいくらか口が贅澤になつてて、お白湯よりお酒の方がいゝなんて云ひますがね、その代りには、どんなお座敷でも唯です。いつの間にどこで修業して來たものか、感心によく合せますよ」

「鶴龜いちぬーけだ！ 三好先生あッしアもうよしますよ」

「ひッ腰のねえ、もうちつと辛抱すりやアいゝに」

「べらぼうめ、掛合落語とみられた上からは、窮屈な思ひをするだけ無駄だ。どなたも眞ッ平ごめんなせえ」

「あの通り……」

「あゝさうだ〳〵」

三好が子供のやうに嬉しがつて、瀧十郎へ向つて手を振りながら、「信さんはあれだよ、ほら、なんとか云つた、あゝ、金坊々々！」

「あ、成程、赤い布で頬被をして、太夫の落した毬を拾ふと、これはやり損ひ……」

色氣もなくひよッとこ面で、そつくり身振りまでして見せて、「あ、あれですね。うまくいくと、あの通り……つてやつね」

「まアほんとうに呆れ返つたもんだ」

女將がぬからず、丁度自分の口を出すべき時機を掴んで、氣取つて一つ衣紋をぬくと、「全くこの分でしたら、いつが日役者をやめるやうなことになつても大丈夫ですわね」

「するとあたしも、作者をやめて共稼か。いや、とんだものに抱き込まれたなア」

三好には、調子よく酒が廻りだしてゐた。一座さへはずんで來れば、なかに一人や二人初對面の人が混つてゐたところで、信之もそんなに堅くならずにすむわけだつた。(まづ今夜はうまくいきさうだ)——例の惡い癖の勤氣から、妙な具合にならなければいゝがと祕に案じてゐた心もゆるみ、女將が、豫想されたよりもずツと控目なのも助かつた氣持として嬉しく、潮時をみて成可く早く切りあげ、三好を誘つて、雪のなかを足の向くまゝにほツつき歩いてみようか、などと思つてゐたことも忘れて、どうやらいゝ心持にお神輿が据りさうだつた……。

その時、屏風の蔭を衣摺の音が近づいたと思ふと、なんと云ふわけもなく、信之の心はへはツとして、あらぬ方へ視線が滑つて了つた。

「いらつしやいまし」

はつきりと、落ついた聲に、目をやつた時には、その聲のもつ平穩には似氣なく、なかば女將のうしろに隱れ、丁寧に頭をさげてゐる女があつた。——女、處女だとか、さうでないとか云ふ問題を離れて、唯ほんの言葉の感じだけで、それは「娘」とよりは「女」と呼びたかつた。それと「大人しやか」と云ふ印象を、最初の一瞥が運び込んで來た。

十四

「もう一度御紹介の勞をとります」

瀧十郎は坐り直して、「女將さんのお妹御さんで、お澄さんと申されます。こちらが藤代信之さんで、あちらが三好胤夫先生。おふた方とも、あたしにとつては大先輩、大恩人でいらつしやいます」

その、眞面目くさつて巫山戲てゐる調子に、ちよいと目もとで笑ひ返しながら、けれども禮儀は崩さずに、お澄は、二人に對してそれぞれ丁寧に挨拶した。信之は例の慇懃に、餉臺の前を態々横向になつて、片手だけでも疊へおろした。芝居の廊下で一二度見かけたことはあるが、謂はば初對面の三好も、少くとも信之の程度には鄭重にしなければならなかつたのだが、その通りの形を學ぶのも、なんとなく業腹だつたので、餉臺に兩手を置いたまゝ、それでも出來るだけ頭は低くさげた。女將は、身をよけるやうに振向いて、

「なんだつて丁寧に越したことはないけれど、お前さんの御挨拶もちつと堅ッ苦しすぎるね」

と云つた心持は、いづれ君、僕、失敬に毛の生えたくらゐの連中に、それほどの辭儀を返させたのは、——殊に酒席とは云ひ、内心迷惑だつたらう、との推量からで、むしろ客に對する謝辭だつた。それも解らないではないが、はいつて來るなりそんな風に云はれては、決していゝ氣持はしなからうと、はたで却つて信之の心が痛んだ。そこへ續いて來た沈默は、誰にもちよいと救ひかねた。自分で蒔いた種を、女將が自分で刈るより仕方がなかつた。で、言葉を繼いで、

「から云ふ稼業はして居りますが、この人だけは、つい近所に一軒別にうちをもたせて置きますし、お座敷に出すやうなことは、たゞの一遍だつてさせやアしませんけれど、その故ばかりではなく、あたしとは反對に、この人はまたちつと變屈な方でして、まるでもう素ッ堅氣のお

藪さんみたいなもんです。そのくせ燥ぎだすと、これで中々面白いことを云ふんですけれど」

　そんな風に、目の前で自分のことを云はれながら、ぷりッとしたり、つんと澄したりするほどでもなく、さうかと云つて、どの視線も自分の方へ注がれてゐるにきまり切つた場合を、圖圖しくも目をあげて、ニヤリ〳〵あたりを見廻すやうなことはなほ更なかつたが、その、大人しやかなうちにも、ちよいとされたところのある感じで、一層信之の第一印象、――「娘」とよりは「女」と云ふ言葉で呼びたい氣持が深められた。道樂者の常として、あまり娘々してゐるよりも、女らしいと云ふほどが好もしく、もとより信之も、その好みの故にこそ、一目でそれが感じられもし、今また深められたその感じで、思はず心のうちに「惡くないなア」と呟かずにはゐられなかつたのだ。（成程女將さんの云ふ通り、これなら、どうかすると「面白いこと」を云ひさうだ）そんなことまで考へて、まだ碌すッぽ顏も見ないうちから、早くも信之の心は、お澄に傾きかけてゐた。――俗に「見惚れ、氣惚れ」それからなんとか惚れと云ふ、若しこの階梯が誰にも必ず來るものとすれば、丁度彼れはその第二期にゐるものだつた。

「まアひとつ……」

　出拔に大きな聲で、瀧十郎がお澄に獻した。

「あたくし……？」

　顏中で一番の缺點になつてゐるやゝ厚ぼつたい脣に、不思議なほどの色氣を漂はせて、「まアお酌させて頂きますわ」

　もの云ひは、飽まではつきりしてゐた。

十五

「まア〳〵まア」

　駄々ッ兒のやうに體を振り動かして、瀧十郎が、誰がなんと云つても聽かないと云ふ勢を示すと、微笑ひながら、お澄は、少しも拐うてのした容子もなく、すらりと立つてそばに坐り直した。女將が酌をしてやつて、

「なに、この人は、頂けば、あたしなんぞと違つて、いくらでも飲めるんですよ」

「あら、いくらでもなんて……」

「あ、さう〳〵。いつか、なんの時だつたか、隨分お澄ちやんに飲ませちやつたことがありましたね」

「えゝ、今年の節分の晩……」

「もうそれでいゝわ。あと云つちア可厭ですよ」

「と云ひやアもう……」

　云ひかけて、瀧十郎は、先刻からへんに癖のやうになつて了つた掛合落語の意氣で、相棒の三好の方へ、あとを取れ、と云はんばかりの目を向けると、これがまた忽ち感應して、

「少くも、飲んだことだけは……」

「さうですね、……慥ですね。而も、なんか云はれて困るやうなことがあつたとすると……」

「ま、醉つての上……でせうかね」

「さう〳〵、醉つての上で……」

「もう澤山よ」

　伏目ながら、存外落ちついて云ふと、ちよいと淸めて返す盃を、瀧十郎は受け取らうともしずに、

「いかがです」

　と、顎でしやくつて、その手つきを指し、三好の方へ、

「この、盃洗の水を切つて、かうちよいと絲底へ二本の指がかゝつて……」

「知らないわ」

　トンと盃をそこへ置くと、すぐ立つて部屋を出て行つて了つた。

「え！　慍つちやつたんですか」

「いゝえ、お銚子を取りに行つたのよ」

「あ、さうか、吃驚した！」
「それとも、慍つたのかも知れないわ」
「いゝえ、もう駄目ですよ」
初から訊かないでも解つてゐることだから、なほ更のこと瀧十郎は、洒々としたもので、「中中あんなことくらゐで慍るやうな、……我が、つて云ひますね」
今度は有繫の相棒も、すぐには呑み込みかねて、
「わが……？」
「我がお澄ちゃん……」
「成程、云ひます〳〵。どうかすると、親愛なる、なんてのが挾りますね」
何が面白いのか、そんなことを云ひ合つて、二人はクックと身を揉んで笑つた。附合で、仕方なくニヤリ〳〵してゐる信之に、女將は酌をしてやつてから、
「あたし、今やつと思ひ出したんですけれど、あなたの阿父樣は、東北鐵道の……」
「えゝ、さうですよ」
突然の思ひがけない話題に、みんな聞耳を立てた。中にも信之はさんざ苦勞をかけた揚句、死なれて見ると、一年々々次第に有難味が解つて來た父親のこととて、急に心が引き締つた。
「慥にその藤代です」
「へえ、ぢア矢ッ張り……」
「なんです？」
「さうだと、あたし、あなたにお目にかゝるの、今日が初めてぢアありませんわ」
「へーえ」
そこに、やゝ急ぎ足ではいつて來たお澄と、信之はぴたりと目を見合せた。慌てゝ逸して、もう一度、「へーえ、一體それア、どう云ふんです」

十六

けれども、續いてそこにお勢もはいつて來て、一時飾臺の上が、水焜爐を置いたり鮟鱇鍋をかけたりでごたついたために、すぐには女將の返事は聞かれなかつた。その間にも、お澄が、いま運んで來た銚子を取りあげて、「お熱いのを……」などと、みんなに勸めたり、男同士の獻酬があつたりして、云ふまでもなく、少しの穴もあきはしなかつたが。
「ひとつ差上げます」
手のあくのを待つてゐて、信之から女將に獻した。
「頂きます」
と、うけながら、ひとりでニコ〳〵して、「へえ、さうですかねえ。世の中、ほんとに廣いやうで狹いもんですわねえ……」
「さうまア氣をもたせないで……」
瀧十郎は、信之に盃を廻しながら、「そも逢ひ初めの物語り、聞きたいな〳〵」
「遠くからで御免ください。有難うございました」
女將は、小さな體を浮かして、左にちよつと袖口を抑へ、白い綺麗な腕をのばして、「あなた、それぢやア、市村さんが初て助六をやつた時の芝居、憶えておいでせうね」
「ン、なるほど……」
「東北鐵道が國有になつたお祝で、はなの間ずうツと會社の買切でした。毎日のやうにみんなあなた、白襟の、……紋が可厭ンなつちまふんですよ。あの會社の印が、なんぼなんでもあんまり露骨ぢアありませんか、そつくり汽車の輪なんですものね、帶から何からすつかりお揃ひで、……今から思へば、なんのことはない、みんな藝者が出方代りに使はれたんですわね。お宅の阿父樣なんぞも、毎日のやうに詰ておいででしたわ。それアほんとうに陽氣な、面白い方で……、さだめし今もつてお達者で……」
「いゝえ、死にました。それからもう六年にな

ります」
「さうですか」
と、感慨に堪へぬものゝやうに言葉に力を入れて、「それアどうも、ちつとも存じませんでしたが……」
「なに、年に不足はなかつたんですが……」
「それアまア、……さう申しちアなんですけど、あの時分でもう……、さアおいくつでしたらう、なんでももういゝお年でしたわ」
「然し、羽左衛門の助六の初役と云へば……」
その時三好が、解せぬ顏つきで口を出しかけるのを、女將は、やゝ亢奮して、手つきでも抑へて、すぐにかぶせて云つた。
「さ、ですからあたしは、舊い話になると、いつでも忘れたやうな顏をして、決してきちんとしたことを云つた試しがないんですけど、今夜はもう本當の年齢がばれる覺悟で、あたしの方から持ち出したんです。……政さん、あなた吃驚しちアいけませんよ……」
氣を挫たれて、有繋の瀧十郎も、返す言葉を知らなかつた。
「まア然しそれアいゝでせう」
と、信之け、思ひもかけず遽に緊迫して來た空氣に、いくらかでも餘裕をつけようとして、
「それより、その時にどうしてあたし……」
「いゝえ、それもいますぐお話しますけれど、あたしが譃ンでも云つてある年で勘定すれば、その時分やつと十二三だつたわけですわ……」
「さうですとも。……えゝと、あれは、助六の初役は……」
芝居に關する三好の博覽強記には、驚くべきものがあつた。場合を忘れて、自然とそれの發表慾が動いたのだ。「あれは、三十九年の五月、——東北鐵道の買切なんぞがあつて、初日が二十日すぎになつてるから、一般には六月興行のやうに思はれてるけれど、慥に五月です」

二七

「ですもの、二十七年生れとすれア、まだ子供の筈ですわ。まさか雛妓が白襟で……」
「いや、それアね……」
やつと自分を回復した瀧十郎が、なんとなく苛つた氣持で、「市村の兄さんが初役で助六をやつた時なんて、話にこそ聞いてるが、まだあツしなんざア袖の長い着物を着せられて、たまに舞臺に出れア、『母樣いなう』なんて、このへんから聲を出してた時分ですもの。それだのに女將さんが、藝者の出方に賴まれてるなんて、どうも少し話が合はないたア思つてたんですがね……」
「ですからさ、みんな七つ八つさばをよまれてたのよ」
「イえー」
と、仰山に驚いてみせて、「ぢアあなた、信さんより年上ですか」
「さア、たしかさうらしかつたわねえ」
顎を引いて、流し目にちつと信之を見た。そこには、妹だと、どうかした拍子に浮ぶところのものが、眞にしたゝるばかりだつた。とてもそれとは勝負にならないまでも、なんとか少しは色ッぽい返事がしたかつたけれど、生憎と信之には、全くなんの記憶も甦つて來なかつた。
「どうも、それが、あたしには……」
「まるで形なし？」
「一體なんの話だか、……あたしも、……下等だが、唯なのをいゝことにして、二日か三日行つて、そこらまご〳〵してゐたやうには思ふんだが……」
「腦貧血をおこした憶はありませんか」
「あゝ……」
いゝ、とてつもない聲と一緒に、ピョコンと胸が延び、遠い昔に瞳が据わるのを、おもんはにッ

こり笑つて見やりながら、
「武田家の二階で……」
「あゝ、あなたが……」
　と、思はずのり出して、ふとまた調子をぢつと沈め、「いや、なんでも二三人の方に、大へんお世話になつた憶は慥にあります。何しろ、胸はむかつくし、目の前にはなんだか黄色ッぽいものがもや／＼して來るし、大苦みの最中で、はつきりとは憶えてませんが、……さうですか、その時にあなたもいらしつたんですか」
「あら、心細いのねえ……」
「少しよくなると、親爺の倅ですぐ送り歸されちまつて、碌にお禮を云ふ暇もなかつたんだが、――うちへ歸つて一時間もしないうちに、すぐケロ／＼と癒つて了つて、それがなんだか氣にはかゝつてゐたんですが、きまりが惡くつて、翌日からもうとても歌舞伎座へ出かける勇氣なんかなくなつちまつたんです……」
「三十九年と云やア、信さん、あなたは十九ですね」
「さうさ」
「十九にしちア……」
　と今度は瀧十郎の方へ顏を向けて、「すこうし話が綺麗ごとすぎやアしないかい」
「成程ね、御年十九と云やア既に、……十九ですからね」
「既に十九と云やア、……筈だからね」
「いや、筈であらうがあるまいが、さうだつたんだから仕方がない」
「えゝ、それアもうきつと、今のお話の通りに違ひないわ」
　と、おもんが、ひどく眞面目な調子で、「これは、あたしだからつて云ふ自惚で云ふんぢアありませんよ、だけど、女の方から憶えてゐると云はれて、殿方つてものは、ほんとは忘れてゐても、大抵なんとか調子を合せて、いゝやうに話をなさるもんですよ、それだのに……」

十八

「いゝえ」
　急に信之が遮り制めて、「そんな風に云はれちア恥入りますよ。……一體あたしは忘れッぽい質のところへもつて來て、何しろ舊い話ですからね。……どうもすみません」
　だいぶんしどろもどろの態で、突ツ拍子もなく「すみません」などと、ピョコリと頭をさげたりする容子が、そのまゝ工まない滑稽になつた。三好と瀧十郎とは、すぐ聲を合せて笑ひ、當の相手のおもんは、
「あら！」
　と、寧ろ呆れた顏だつたが、だん／＼その色ツぽい目のうちに、（まアこの人は、なんて子供らしいんだらう）とでも云つた氣持の、さも好もしげな笑が浮んで來た。そのなかに、ひとりお澄は、ぢッと膝を見詰めてゐた。嬉しさとも有難さともつかない涙を、一生懸命おとすまいとしてゐるうちに、大島の絣が、はつきりとは見えなくなつて行つた。信之の目は、けれども、正面に姉の視線をうけとめてゐた。うけとめながら、（こいつは危險いぞ）と思つた。思ふと同時に、自分の方からは逃せない氣持に捉へられて了つた。逃すが最後、その危險は二倍にされる、と云ふ感じで……。圖らずも現はれた子供ッぽさ、それを好もしげに笑つてゐる目に對しては、圖々しくぢッと見返すと云ふことの方が、少くも裏切にはなるわけだつた。
「どうしてあたしはかう忘れッぽいかな」
とは云へその見返しも、さう永くは續かなかつた。三好の方へ、頬の肉の硬直つたやうな、てれ隱しの笑ひ顏を向けて、そんな風にでも云ふよりほかなかつた。
「若耄碌と云ふやつで、つまり[illegible]ですな。いやもう、たゞ／＼お羨ましい御身分ですよ」

調子に、少からず嘲笑の響きがあつたが、むッとでもすることか、信之は、心弱くもそむけた頬を眞ッ赤にして、

「冗談いつちアいけない」

「いえ、まつたく。あなたは少しお愼みなさらないといけませんね」

と、すぐに瀧十郎も尻馬にのつて、ニヤリニヤリ笑ひかけた。

「とんでもない。それア君たちのこつたらう。あたしはそんな…あたしは…」

「ほんとに正直な方ねえ」

助太刀の意味もあつて、女將はお澄を顧みたが、まだ靜に項垂たまゝだつた。よもや涙ぐんでゐようとは思ひもよらなかつたから、隨つてそれには氣もつかなかつたけれど、容子で、てきぱきした返事などは、思ひもよらなかつたので、瀧十郎でも言葉相手にと、目を向けた時、

「いゝえ、どういたしまして、正直どころの騷ぎぢアありません…」

信之にしてみれば、まだ友達の冷かしの方がましだつたから、さう答へながらも、一層面喰つて、ぐッと一息に乾すと、何をどうまごついたものか、自分でも譯わからずに、眞つ直お澄にさしつけて了つた。生れて初ての盃にしては、いかにも機緣がなさすぎて、はたからは、これもちよつと噴飯したくなる仕草だつた。

「お澄ちやん」

姐に注意されて、伏目のまゝお澄は盃をうけた。手近から酌をしてやる時に、どうしたのかお喋りの瀧十郎が、ふと考へ込んでゐた。

不意に、五人の一座に來た沈默は深かつた。……降り積む雪の氣勢が、逆上あがりさうに暖まつた部屋のなかまで、しん〳〵と滲み込んで來た。

無言のまゝ、ちよつと頂いて、お澄が一息にあけて返した。信之の心は、なんとなく綺麗に洗はれた感じだつた。

一　樂屋

今日が初日の春芝居は、一番目がまだ二幕と切れないうちに、客をとめる景氣だつた。赤い顏をして、紋附、袴で、廊下を行き交ふ見物も、芝居は二の次の、廻禮代りに、出會ふ限りの知つた顏に「お芽出度う」を浴せかけ、あはよくば伴れだつて食堂でとぐろを捲いて、夜の宴會までの時間を消さう、と云つた氣持の連中が多かつた。それには、赤いところの大部分が、初日招待の客、役者の家族、表方の關係者などで、ぢツと落ついて見てゐるのは稀だつたから、一層廊下の社交が賑ふわけでもあつた。なかにも、どこの座もきまりで、劇作家、演劇批評家などが占めてゐる東二階は、殆んど幕間を待ちかねての、廊下が忽ち雜談會場になるのだつた。誰も彼も、一風變つた頭の刈り方、整へ方をしてゐるだけでも、この一群は、すぐに見分けられたが、文學趣味の青年たちがよつて來てぐるりを取り圍んで、一生懸命聽耳たててゐるなかで、或はそれによつて得意にされて燥ぎ、或は名士然とした自尊心から注目になり、或はさう云ふ傍觀者をもつたことに煩はされず、虛心平氣に振舞はうと云ふ意識で、却つて虛心平氣になれずにゐるなど、そこの空氣は、慥に文學者らしい個性を十分に漂はせてゐた。劇場の關係者たちは、愛嬌よく挨拶して、そのなかを忙しさうに通りぬけて行きながらも、彼等の、大體から見ての尤物に對する輕蔑と反感とを、隱し終せはしなかつた。白襟、島田で、電話口にでも呼ばれて行くらしい急ぎ足の藝者も、その一群のなかのどれかしらの顏へ、ちよつと目禮を送つて通らないものはないくら

ゐだつた。文學について、爪の垢ほども關知するところのない見物でさへ、そこを通りかゝれば、少くも、何か「公人」の寄集まりだ、と云ふほどの印象はうけて、必ず見返つて行き過ぎた。――さう云ふ一群のなかに、紋附、袴の三好が、柱によりかゝり、腕を組んで立つてゐた。この仲間では、まだ自ら若輩と感じてゐるらしく、一般の話題、――丁度その時には、いま大詰まですんだ新作の史劇の批評だつたが、それには口出しもしずに、とは云へ、無遠慮にそばによつて耳を欹てゝゐる文學青年のやうな熱心はなく、ぼんやりした顏つきをしてゐた。すぐその柱のそばの籐椅子から、小說も戲曲も書いて、既に一家を成してゐる伊庭順作が、ちよいと三好の袖を引いて、低聲に、

「紀尾井町の若旦那、大へんな御亂行だつて話ぢアないか」

さう云つて、ニヤリ〳〵笑ひかけられると、三好は、(はて合點がいかない)と云ふ風に、小首をかしげながら、

「へえ、さうですかしら……」

「隱したつて駄目だよ。ちやんともう種はあがつてるんだからね」

「なんだ、去年の歲尾の話ですか」

「去年たつて、まだ日數にしたら十日と經ちアしまい」

「へーえ、どこから傳はつたらう」

「惡事千里だよ。さう一人占にしないで、たまにやア俺たちにも取捲せるもんだぜ」

大きな平顏を笑み皺めて、伊庭は、惡黨らしい口上には似げなく、クッ〳〵クッと、鳩のやうに可愛らしく笑つた。

「何しろ不思議です。あの人くらゐ女の出來る人は、あたしやア肇てだ」

「當時なんだつてえぢアないか、十割の率だつてえぢアないか。十人あへば十人……」

「まさか」

急に破裂したやうな笑ひ聲で、はたの者も二人の方を見向いた。

二

「なんです」

血色のいゝ、少しは角をとつてあるがまづまづくり〳〵坊主に刈つて、モオニングを着込んだ、なかで一番文學者らしく見えない瀨川と云ふ評論家が、そばによつて來て、「なんだか、ひどく面白い話らしいですな」

「いえ、なに、ちよつと……」

伊庭は、あたりの人と、瀨川とへ半分々々に目をやつて、ニヤリ〳〵笑つた。

「なんです」

もう一度さう云つて、紋附を着た伊庭の肥つた肩に手をかけ、こゞみかゝるやうに自分の耳をそばへもつて行つた。

「いゝえ、金主の御亂行についてね……」

「金主? 信さんですか? 信さんがどうしたんです」

「三好君がお伴なんだ」

聞くとすぐ、今度は、三好の肩へ兩手をかけて、二三度グン〳〵と搖りながら、

「や、この人の取捲きやうは、どうも質がよくない。瀧十郎なんて不良少年と諜し合せたりして……」

「冗談いつちアいけませんよ」

三好は、ちよつと頰を染めながらも、「どうして、なか〳〵彼方の方が、一枚も二枚も役者が上ですもの」

「どうだかな」

「それア信さんも、その道にかけると、中々ぬからないことはぬからないからね」

伊庭は、さう云ひながら、重さうに體を擡げて、「どうです、お茶でも飮みませんか」

さう云ふ聲を洩れ聞けば、誘はれもしないの

に、すぐついて歩きだすやうな人間も、そこらにゐないではなかつたが、三人の容子に、他聞を憚る話をしに行く、と云ふ心持が、露骨すぎるほどに見えてゐたので、すぐもう反感の眼差で見送つてゐた。

　表二階の喫茶店は、いつぱいの客だつたが、それでも隅の窓ぎはに、どうやら三人腰をおろす場所があつた。伊庭が紅茶を誂へて、すぐいゝはたにウキスキイを入れるかどうかを訊いて、みんな賛成すると、追ツかけてそれをも註文した。

「一體どうしたんです」

　瀬川が、出來るだけ好奇心の餌になつてゐる自分を落つけようと、煙草に火をつけながら、徐に口を切つた。

「よし野の話、まだ聞きませんか」

「いゝえ、知りません。よし野つて……？」

「ついこの近くの料理屋ですよ」

「へえ、そんな新開拓があるんですか」

「僕は一度三好君と一緒に行つたことがあるが、もとはと云へば、瀧十郎の贔屓筋のうちなんでせう。ね、さうなんだらう？」

「えゝ、贔屓も贔屓も、ずんと念のいつた贔屓でしてね……」

「成程ね」

　と、瀬川もすぐ呑み込んで、性急にあとを促したてた。「そこで、どんな騷動がもちあがつたね？」

「一遍で、そこの女將さんと、女將さんの妹と、かう二人まゐつちやつたんです」

「誰に？　まさか君にぢアあるまいね」

「ですから、紀尾井町さんの話です」

「で、どつちが瀧のシキメなんだい」

　シキメとは、彼等仲間の隱語で情婦と云ふ意味だつた。

「女將さんの方だつたんですがね……」

「だつた、は可哀想だな。事既に過去に屬するわけか」

　泉でも噴き出すやうに、伊庭は、大きな腹から、クックとこみ上げて笑つた。

三

「しかし」

　瀬川は、そこに運んで來た紅茶に、ウキスキイを割つて掻きまぜながら「一遍で二人ともまゐつたと云ふが、そのまゐり方の度合が問題だね。ちよいと頼母しい人だくらゐのことか、それとも……」

「いゝえ、それが中々そんな程度ぢアないんです。みんなもいゝ加減醉ぱらつちやつてからのことですけれど、女將さんとは、僅にセッゼッまではいつてるんですからね」

　隱語の意味は、「接吻」だつた。自分だけしか知らないことを話す場合の、もの惜みの氣持やら得意やらが、若草色い三好の顏に、ありありと現はれてゐた。

「それア醉つての上のことなら……」

　と、伊庭が云ひかけるのにかぶせて、

「いゝえ、いくら醉つてたつて、その晩初て逢つて、而も自分の……、つまり瀧の見てる前で……それア矢ッ張り、餘つぽど惚れてなきア出來ない藝當ですよ。ねえ、瀬川さん、あなたどう思ひます」

「まあ、それアさうだらうな。ところで、一體どう云ふ機緣からそんなことになつたんだい」

　訊かれて三好は、文學者らしい細かさで、初からの顛末を話した。瀧十郎と女將との關係、お澄が以前に矢張りこゝの劇場で席代を見初めてゐたこと、女將の病氣見舞に二人が誘はれた意味、表二階から階下へ移つての情景、七つ八つ誤魔化してゐた年齡の話、續いて東北鐵道會社が買ひ切つた芝居での出來ごと……。

「一番重大な動機と云へば……」

と、三好は言葉を繼いで、「つまり六七年前に、一度でも顏を合せてゐる、……どころぢアない、詳しい話はたうとう出なかつたけれど、何か少しぐらゐ色ッぽい場面もあつたらしいから、その懷舊の情ですかな。……はたから想像したつて、それアどつちにも惡くない記憶に違ひありませんからね。當時紀尾井町は十九でせう。女將さんが一つ二つ上で、小つまとか云つて盛に嬌名を謳はれてた時分だつて云ふし、折しも五月の下旬、唯でさへ逆上あがるやうな時候を、芝居小屋にゐて、白襟紋附のうよ〳〵してゐる廊下で腦貧血をおこして青白くなる。監査役だか取締役だか、兎に角重役さんの息子だから、これがまた大した扱で、武田家の二階の一間にねかされる。それ冷せ、あつためろで……」

「きまつて葡萄酒を飲ませるやつさ」

吊り込まれて瀨川が、「飮ませようとするが、齒を食ひしばつてゐて中々うまくいかない。その時口うつしに飮ませたのが小つまだつたつてね」（

「すぐさう小說にしちまつちアいけない」

と伊庭が、例の罪のない笑ひ顏で云つて、帳場の方へウヰスキイの代りを註文した。

「いや」

三好は考へるやうにしながら、「さう云へば、その想像は、ぴツたり的中してゐるかも知れませんぜ。コップ酒の荒事になつてから、女將が、信さんに凭れかゝつちやつて、口うつしに飮ませろ、あなたにはさうして貰つてもいゝ義理があるんだ、なんて云つてましたからね」

「へーえ。……で、信さんどうしたい」

思はず瀨川は、卓の上に乘り出して訊いた。

「やりましたなア」

「やつたかい」

「少しも惡びれずに、ゴクン〳〵とやりましたなア」

四

「成程ね、ゴクン〳〵とやつたかね。……然しそいつを見せつけられたんぢア、なんぼ瀧でもちつたアしよげたらう」

「それアあの男のことですから、側からワイワイ云つて囃したてたりしてね、せい〳〵燥いでみせてましたけれど、矢ッ張りどことなく陰鬱にやアなつてましたね。そのくせ、初は、病氣見舞に行くだけのことを、ひどく御難がつてゐたんですがね」

「どういたしまして」

瀨川が噛んでほき出すやうに、「心から可厭となりやア、日に百度呼び出しがかゝつて來たつて、めつたに出かけて行くやうな瀧ぢやアないよ。そいつを、一人ぢア恇はないから、とかなんとか云はれて、のめ〳〵附合ふ氣になつたのは、一生の不覺だね。それとも、君は君で、なんかまたうまいことでもして來たかね」

「とんでもない！　あすこまでやられると、あたしなんざア、側で見てゐるだけで、なんだかから、可怕いやうな氣がして來ますよ」

そこに多少の實感が含まれてゐることも、感じられてはゐるのだが、故意と二人は、（その手で素人をお騙しよ）と云つた表情を見合して、てんで返事さへしなかつた。

「それで……」

伊庭が、三杯目のウヰスキイを仰ぎながら、「結局どう云ふことになつたんだい」

「結局、驚くべきことには、ですな、一方にそんなことをして置きながら、平氣で信さんは、妹のお澄さんの方に餘計好意を示すんですよ。尤もそれア誰が見たつて女將さんてえ人は、なんとなく底の淺い感じでしてね。……あたしに素敵な名評があるんだが、つまり『無智と色氣の象徴』と云やアよく解るやうな女なんです。そこへ行くと、お澄さんは、どつかちよつと手

強いとこがある、一遍や二遍の附合では肚の底が知れないやうなところがある、――いつだつて、信さんが目をつけるのは、きつとさう云ふ質の女ですからね。だから初つからあたしには、結局さう云ふことになるたア睨んでましたがね……」

「理論はそれとして……」

瀬川の、普段から血色のいゝ顔は、もう眞ツ赤になつてゐた。「事實の結末はどうついたね。御亂行の御亂行たる所以は……」

「十二時頃まで飲んで、瀧だけ無理にあとへ殘して、吾々は引きあげちやつたんです」

「どこへ」

「ヒモト(日本橋)へ」

「で、ハク(泊)か」

「それアもう、例のが現はれて、……信さん、ちつと惡醉で、ト(吐)やなんかあつたんですが、介抱いたらざるなく、でね。どつちへ廻つても、あたしと云ふものは、まるでなしでさアね」

「ま、それも御修行のうちでせう」

伊庭が揶揄ひ顔に云つて、あたりを見廻したが、いつか客があいたとみえて、もう一人も客は殘つてゐなかつた。大きく伸びをしながら、窓からそとを眺めると、手を出せばつい届きさうな近くに、積樽の裏がいつぱいの目隱しとなつて立つてゐた。冬の陽は既に落ちて、窓の四角が、菰被りの上に明かるく映つてゐた。

「さアて、そろ／＼出かけるかな」

「どこへ行くんだい」

「どこつてこともないが、いつまで芝居にゐたつて仕様があるまいぢアないか」

「それもさうだが、……困つたなア」

と、瀬川は爪を立てゝガリ／＼頭を掻きながら、「どうだね、三好君、三月號にはきつと書くから、ちつと前借させないか」

「さうですね、今に金主が見えやアしないかと思つて、實はあたしも心待にしてゐるんですがね」

五

藤代信之が、この連中に金主々々と呼ばれてゐる意味は、たゞ飲食や遊蕩に、いつも勘定方を仰つかるからばかりではなかつた。伊庭、瀬川のほかに四五人の同人、準同人をもつた文藝雜誌「高踏」のために、月々の不足を補ひ、經營の一切を引うけてゐる實際の金主だつた。そして彼自身は、文藝に對して優れた鑑賞や、生涯淪りさうもないほどの愛好をもつてはゐたが、一度でも自ら筆を執つてみようなどと思つたことはなかつた。親しい文學者との對談に、たまに極めて控目な言葉で批評めいたことを云ふくらゐがせい／＼で、常には、その道のことは、なんと云つてもその道で苦勞して來た人のやうに、眞底まで解る筈はない、と云つたやうな謙遜な氣持から、所謂門外漢としての自分の立場を堅く守つてゐた。酒席などでも、文學者同士の藝術論が始まると、襟を正して熱心に傾聽する、と云つた風で、時折畫家のハトロンに見かけるやうな、我儘や輕蔑の念など更になかつた。さう云ふ意味で、彼を呼ぶには、藝術の「愛好者」を以てするよりも、寧ろ「尊拜者」とでも云ひたいくらゐだつた。

その尊拜の念は、ほんの子供の時分から彼に芽ざしてゐた。古今東西の藝術、――殊に文學に對する彼の蘊蓄は、第一に永の年月と、生れた家の資産と、飽ことを知らない讀書力などが相俟つて、をさ／＼その道の人にも讓らないものがあつたが、一つの理由としては、それ故に、――澤山立派な作品に觸れて來てゐるだけに、「盲目蛇に怖ず」の丁度正反對で、自分自身が藝術家たり得ようなどとは、夢にも思へなくなつて了つたのだ。そこへもつて來て、都會人らしい爭ひを避けたがる性分から、父親の望むが

まゝに、高等學校、大學と英法科に學び、法學士の肩書をもつてゐるばかりか、辯護士の資格までも得てゐた。それもほんの申譯に、どうやらかうやら卒業證書だけ誤魔化し得た、と云ふやうなのではなく、法律と云ふ學問に對しても、相應の興味はもつてゐた。殊に犯罪學に關する書籍は、それがさして舊い研究でないだけに、殆んど悉くと云つてもよいほどに讀破し、一家の見識も備へてゐたが、博士論文でも書かうと云ふやうな氣にはなれなかつた。辯護士の方も、知人に頼まれゝば意見も述べ、調べるものがあれば調べてもゐたが、一般の依頼に應じる業務とはしてゐなかつたから、知つてゐる人でも、彼が法學士であり、辯護士であると云ふことを、ついうつかり忘れてゐる時が多いほどに、日常の生活は、その方面の色彩なり、雰圍氣に乏しかつた。

七八年前に、或る友達の紹介で伊庭と相知り、それからだん／＼に文學者との交際が擴がつて行つたわけだが、一昨年の秋、伊庭から雜誌を創刊する資金の相談をうけ、それを引うけて以來、急に親密の度が加はつて來たので、それまでは、例の慇懃な言葉使ひなども殘つてゐて、お互にさううちとけた仲ではなかつた。それが、相談會のくづれと云へば、いつもきまつて狹斜の巷へ自動車を飛ばし、醉の中で友情が堅くなつて行つた。――時には、さう云ふことが、ひとり居の信之を、救はれ憎い陰鬱に導きもしたが、ずる／＼と習慣に引きずられて、今ではもう、同人の誰かと顏を合せさへすれば、酒や妓なしには別れかねるほどの、不思議な粘着が生じてゐた。

なかでも、編輯の衝にあたつてゐる三好は、忙しい期間には毎日のやうに、藤代家の洋館の一室に置いてある編輯事務所に詰めかけてゐる關係からも、一番隔がとれてゐた。それでも、三好は、稿料の前借などで、同人と「金主」との間に立つことは、ひどく可厭がつてゐた、――なんとなく、彼にとつて、信之は可怕い人だつた。

六

而もその可怕い人の前に、編輯に關する金錢の出入りで、去年の十月頃から、三好は祕密をもつやうになつてゐた。勿論それは、惡事とは名づけられないほど輕い意味のもので、なければないでもすむのを、なまじ財布にはいつてゐるばかりに、友達を誘つて一緒に晩めしでも食ふことになり、酒がはいれば、そのまゝには別れ憎く、夜が更けてから態々下宿に寢に歸る氣もなくなつて、ついそとで泊る、――そんな風にして、自分のものでない金が、三四百圓費されて了つたのだ。一旦遊蕩の金となると、まるで低能兒のやうにだらしがなくなるけれども、元來信之には、見かけによらない事務の才能があつて、編輯營業の出納なども、中々きちんとしたものだつたから、三月の間に三四百圓と云ふ僅な金でも、少くも七八遍は、三好の口が嘘で穢されなければならなかつた。例へば自分達でやつてゐる雜誌でなく、ほかからの依頼は初てだと云ふやうな、ごく新しい作家で、謝禮などは二の次の、「高踏」に揭載されるのを名譽と心得て執筆したやうな人へ送る筈の原稿料とか、高踏社と近い關係の本屋などから、思ひのほか几帳面によこした廣告の料金とか、堂々たる作家から申込まれた前借金の一部とか、多くはそんな性質の金だつたから、帳簿を誤魔化すのなんのと云ふやうな、巧んでの惡事とは違つて、何か訊かれでもした時に、ちよいと心苦しい思ひをして、嘘の一言二言ついて置けば、さう尻からばれて來るやうな心配はなかつた。その上三好の氣持としては、誤魔化すの私消するのと云ふのではなく、結果からみればつ

まりはさう云ふことになつて了ふまでも、ほんの一時の融通で、自分の作が上演されでもした場合には、その料金のうちから返濟すればすむ、くらゐの釋辯はもつてゐた。とは云へ、もともと可怕い人の前に、さう云ふ祕密をもつたことで、彼の生活氣分が暗くかげつて來てゐたのは事實だつた。殊に、伊庭や瀨川のやうな、「高踏」と切つても切れない緣故をもつた先輩たちが、近頃の彼の、身分不相當な金使ひの話を聞いてゐる、うす〳〵はその金の性質に就いても勘づいてゐるらしい容子なのも、壓しつけられる氣持だつた。そんなところからも、いま瀨川からもち出された稿料の前借を、信之に掛合つてやらうなどと云ふ氣にはなれなかつた。直接自分に關係したことではないけれど、ならうことなら、今の場合そんな話には觸れたくなかつたのだ。——なにがなし目映しい氣持で、舞臺を見るためにかけてゐた例の十二度の眼鏡をはづし、寒水石の卓の上で、三好はカチャリ〳〵とそれをおもちゃにしてゐた。

「だつて、そんなことは編輯人の役ぢアないか。信さんが來るんならなほ都合がいゝや。二割の手數料を出すから、ちよつと百圓かそこら借して貰つてくれよ」

瀨川は冗談とも本氣ともつかない調子で、ねちねちとそんなことを云ひ出した。

「何しろ、なんだね……」

豪酒で有名な伊庭も、立てつゞけに四五杯のウヰスキイをあふつて、大分いゝ機嫌になつてゐた。「われ〳〵編輯同人には、編輯費以外に、月々五六百圓の機密費を出してくれないと困るね。『高踏』の同人と云へば、世間ぢア信さんを食ひものにしてゐるやうに思つてるやつが可なり多いんだから、吾々から云へば、その名譽毀損料としても、信さんから、當然それくらゐなことはして貰つてもいゝ筈だよ」

七

「女にもてすぎる稅金としてだつて、相應出してもいゝ筈ですよ」

三好は、先刻はなしかけてゐて、つい何かに紛れてそのまゝになつて了つたよし野でのもて振を思ひ出すと、そんな風に云つて、もう一度話題をもとへ戻さうとしたが、（なアに、その點ならば俺だつて……）と云つた氣持は、そんな場合すぐ大抵の男の胸には湧くもので、豫期したやうな同感の言葉などが、ましてや、自惚にかけては常に必ず人後に落ちない文學者の口から聞かれさうな筈もなかつた。その默殺されたやうな立場のためにも、三好が押し切つて話しだしたのは、お澄の態度だつた。そこには具體的に、纏つた一つの面白い話柄となるやうな出來事は何もなかつたのだけれど、その代りまた、細い心理を話すとなれば、文學者として大切な武器の一つである觀察力の點で、同時に自分自身をも高く價値づけ、よく役づけることも出來るわけだつた。が、つゞめたところは、女將の傍若無人な振舞で不快にされ、嫉妬をも感じてゐながら、健氣にもそれを抑へ〳〵て、出來るだけ快活に、そして信之に對しては、目立たないやうにではあるが、飽まで忠實しく心を使つてゐた、——あれだけのことが、並大抵の惚れ方で出來るものではない、と云ふやうな話だつた。

「實際あたしも、ちよつと驚いたんですがね……」

と、少し大袈裟にして、いよ〳〵その物語りにかゝらうとした時に、伊庭が、（もう澤山だ）と云ひたげに遮つて、

「なんの稅でも構はないから、せめて一人あて百圓づつもくれないかな。もしなんなら、取捲料の名目でもいゝや」

「つまり太鼓持の御祝儀だね」

瀬川は、自分をも含めて嘲笑ふやうな調子で云つた。

「冗談は冗談として……」

卓に乗り出して額をよせ、伊庭は一段と聲をひそめて、「實際なんとかして、もう少し金を出させる工夫はないもんかね。三好君なんぞは、だいぶんうまくやつてるらしいが、中々僕等までは潤つて來やアしないよ。一體信さんつて人は、ぐうたらなやうで、芯じまりで、芯じまりのやうでぐうたらで、ちよつとわけの解らない人だからな。どつからどう云ふ風にもちかけたら、一番いゝのかしらんと思つて、實は近頃、ひとりで時々それを研究してみるんだがね。どうです、三好君、なんかいゝ智慧はありませんかね」

急に言葉使ひを丁寧にしたところに、輕い皮肉が感じられて、心のうちにやゝどぎまぎしただけ、三好は答へに、露骨な不快を現はさずには置けなかつた。

「うまくやつてると思ふんなら、いつでもあなたに編輯の仕事をお引繼ぎしますよ。それに、どのくらゐあるものか知りませんが、藤代家にだつて、なにも金の生る樹があるわけぢやなし、まア あれ以上と云ふのは、少し不當でせうよ」

「不當だ？ 不當を云ふなら、信さんの所有物の一切が不當だらうぢアないか。第一、なに一つ仕事らしい仕事もしずに、のらくら遊んでゐられると云ふ身分からして不當だらう」

氣色ばんで伊庭がきめつけるのを、瀬川は、ニヤ／＼しながら宥めにかゝつた。

「それアもう、云はないでも、世の中のことは大抵不當だよ。たゞ、親の遺産を食ひへらしてゐる方が、他人の財産を自分のものゝやうに使ふよりは、幾分か不當さが少いと云ふだけのことさ、不當を云ひやア、それア君の云ふ通りどつちも不當だよ。ちよつとした程度の違ひだけだよ」

八

伊庭は、じろりと瀬川を見据ゑた、云はれた言葉よりも、云つてゐる心持をはつきり見極めようとでもする風で……。それから、舌なめずりをしながら、自分で自分を宥めるやうな、また嘲るやうな氣持の微笑を浮かべて、

「可厭なことを云ふなア。理窟らしくつて、氣持で裏を云つてやアがる……」

「さうかしら。僕は君に賛成してゐるんだぜ。不當の世の中だから、大に不當に出させようと云つてるんだぜ」

やゝ阿るやうな瀬川の調子には、相手を醉ぱらひ扱ひにしてゐる氣持もないではなかつたが、伊庭には氣がつかなかつたのか、氣はついてゐても、自分でもうそれ以上角目だつた言葉のやりとりをするのが可厭になつて來たのか、急に目つきを柔げ、幾度も頷いて、

「さうだよ。もつとどし／＼出させなきやア妥だよ。信さんに何か立派な仕事でもありやア格別、色事師みたいな今の生活を續けて行くために、莫大な金を空費させとくのは馬鹿げてるよ。それくらゐなら、俺たちに使はせた方が、まだしもましだからなア」

先刻の劒幕で、ちよいとへこんでゐた三好が、その時、さも平氣を裝つて口を出した。

「色事師とは名評ですな。實際近ごろの信さんには、さう云ふ態がありますよ」

「生意氣云ふなよ」

と、今度は瀬川が、脣を尖らせて、「一體君なんぞが、信さんなんて友達づき合ひにするなア早すぎるよ。あの人は、あれで中々しつかりと生活してるぜ。そこ、行つちア、僕なんぞまだ駄目だよ、薄ツぺらだよ」

そんな風につけ／＼云つても、不思議に瀬川

の言葉にも愛嬌があつた。少くも、相手をさう不快にはさせない響きがこもつてゐた。それにしても、立て續けにやッつけられて、三好は、すつかり面白くなくなつて了つた。（この人たちは嫉妬てるんだ。自分たちと信さんとの間に、俺と云ふものが挾まつて、利益を壟斷してゐるやうに感じられて、その話となると、すぐかういきり立つて了ふんだ。あゝあ、可厭だ〳〵。どうしてかう卑劣なんだらう）そんな風に考へて行つた心は、すぐ自分自身の咽喉輪に手をかけてゐた。――去年の秋以來して來たこと、その事實に對しては、何者の前に出ても、立派に釋辯できるけれど、その事實からうけた心の暗みは、相手が、最近にそれを經驗して來てゐる心そのものである以上、なんと誤魔化しやうもないわけだつた。――三好の心は、急に二重の暗さに鎖されて行つた。

「兎に角、然し……」

その顏色を讀みながら、伊庭はそれが好みの、惡黨らしい調子になつて「かう云ふ内輪の樂屋話は、外に漏れないやうに、十分お互に氣をつけようぜ。それでなくつてさへ、いゝ加減俺たちはブルヂョワのお擁作家のやうに云はれてるんだからなア」

けれども三好には、この言葉が、云はれた意味には受取れないで、自己嫌惡に醉いつてゐる自分への慰めと感じられ、そしてその志が有難かつた。――病人のそばでは、いかに彼が健康であるかを説くよりも、近頃どこそこが惡いと愚痴をこぼす見舞客の方が、樋に喜ばれるに違ひない。さう云ふ灸所に觸られると、三好も忽ち心弱くなつて、胸が熱くなつて來た。（あゝ、友達は有難いもんだ！）そんな感慨で、自己嫌惡の方は、いつの間にかさらりと拭ひ去られてゐた。

九

「樂屋話か……」

暫く沈默が續いたあとで、瀬川が、たつた一言、丁度古池のおもてに、チャポンと小石でも落し込んだやうに獨語ちたが、波紋は、はたの心へも、靜に擴がつて行つた。伊庭には、それが婉曲な非難のやうに響いた。生活に樂屋を必要とするとは……、そんな氣持がいま瀬川の胸に動いてゐるのではないか、と感じられた。三好は、自分の祕密をつッ突かれたやうにひやりとしたが、すぐ云ひ手の表情で、それが自分の考へ過しと解つてやゝ安堵した。さう云ふ岸からまた搖れ返して來る波紋は、微ながら中心の瀬川まで達しないではゐなかつた。彼の心では、いろ〳〵な意味で二重生活の弱味が考へられてゐた。――そんな風に、たつた一言の呟きを眞中に置いて、三人三樣の思ひに耽つてゐるところへ、本家茶屋の女中がはいつて來た。

「伊庭先生、お電話でございます」

「あゝさう。どうも有難う」

すぐに思ひあたるところがあるらしく、先方の名を訊き返しもしずに、慌たゞしく椅子を立つて給仕の娘を呼び、勘定を拂はうとした。

「いゝよ、こゝはいゝから早く電話に出たまへ」

瀬川がニヤ〳〵しながら、自分も立ち上つて勘定場の方へ歩きだしたが、その途中で、伊庭の耳もとに口をよせて、「待つた甲斐があつて、たうとうお座敷がかゝつたね」

「まだ三ケ日のうちだぜ、なんぼ僕だつて一つや二つ……」

「いやもう、いくつになつても、よくお寶れになることで……」

「どういたしまして……」

てれ隱しに、大きな聲で笑ひながら、「ぢア失敬、いづれまた……」

と、二人に挨拶して、茶屋の女中に導かれて、

急ぎ足に出て行つた。あとに、瀬川が勘定をすましたところへ、續いて三好も立つて來て、

「先刻お話のシヤク(借)のこと、お急ぎですか」

と、いかにも編輯者らしい職業的な口調で尋ねた。

「いや、冗談だよ」

と笑つて、背中を一つ叩き、その手でうしろから押しやるやうに廊下へ出て行つたが、そこの窓硝子のそとは、いつの間にかもう眞暗な冬の夜になつてゐた。朦朧と硝子の面に映る自分の顏の赤さを撫で廻しながら、然し瀬川はまた言葉を續けて、「……全然冗談と云ふわけでもないが……。もし四五日のうちに……勿論態々でなくつてもいゝんだが、ひよつとして信さんに逢ひでもしたら、一遍話しといてくれないか。正月早々からあんまりだらしのない話だけれど、實際こゝんとこ、ちよつと手詰つてるんだから……」

「承知しました。きつと明日か明後日にはお目にかゝれさうな氣がしてゐますから、さうしたら、お話してなんとかしといて頂きませう。百圓でいゝんでしたね?」

「まア〳〵そんなわけだが、然し、無論それア、多けれア多いほど結構さ。その代り、三月號にはきつと書くよ」

「えゝ、どうぞ今度は、ひとつ間違ひなくやつて頂きたいんです。今のところ、ほかにまだ一人も極つてない、つてぶふやうなわけですから、ほんとに何分とも宜敷お願ひ申します」

十

雜誌の方の用談をすますと、三好は、便所へでも行くやうな何氣ない容子で、瀬川一人を置ざりに階段をおりた。先刻から彼は、多少とも上手へ向つての、而も文學者らしく纖細に神經を働かせなければならない會話に勞れ、隨つて苛立易い氣持になつてゐた。さう云ふ時に、やゝ下向に、氣樂な話の出來る瀧十郎に逢ひたくなるのは、ごく自然なことだつた。

三好の顏を知つてゐて、手早く麻裏草履を出して貸してくれた揚幕の番人に、五十錢札を二三枚摑ませて、

「や、有難う」

と、草履を突ツ掛けると、さつさと奈落へおりて行つた。舞臺や觀覽席や廊下の華かさ、賑かさのすぐ下に、こんな陰氣な地下道が通つてゐようとは、……まるで地獄極樂のやうだ……、これは、始めてそこへおりて行つた者には、誰にでも必ず起る感慨に違ひない。じめ〳〵と冷たく、黴臭い空氣、へんに褐ツちやけて見える薄暗い裸電燈、汚れて傷だらけな廻り舞臺の束、置き捨てられた藪疊の枯葉の蔭からは、貉でも顏を出しさうで、薄氣味わるいほどだつたが、馴れては、それもちよつと薄ら寒い廊下と云つたほどの感じで通りすぎ、頭取部屋の前にあがつて、そこからすぐまた二階へ、階段からほど近い瀧十郎の部屋暖簾を分けて顏を出した。

「いらつしやいまし、お芽出度うございます」

「や、お芽出度う」

元氣よく、小部屋の男衆に聲をかけて、「ゐますか?」

「どうぞお通りくださいまし」

顏から先に、覗き込むやうにしながらはいつて行くと、奧は、一座の若女形市川左喜松の鏡臺だが、折から舞臺とみえて、大柄な友染の座布團がその前にきちんと直してあり、間に組子の火鉢を隔て、定紋をちらした蠟塗の鏡臺の前から、襟を大きく刳つた綿入のちやん〳〵一枚のもろ肌ぬぎで、瀧十郎は丁度、二番目に出る町家の若旦那の顏をしてゐた。そのそばに、古びた[illegible]、火鉢に手をかざして、連中の幹事

らしい、四十男の先客があつた。

「いらつしやいまし」

次の間から顏を出した三好を、鏡のなかに映してみて、瀧十郎は愛想よく聲をかけた。三杯のウヰスキイははいつてゐたが、俄にその醉をだいぶん誇張した容子なりもの云ひなりで、三好は、簡單に新年の挨拶を取り交し、先客の方へもちよいと頭をさげてから、

「どうです」

「いやどうも……。先夜は……、一別以來ですね」

「少しお氣の毒だが、まづお互にと云つてもよからう、お互に……」

「まつたくひどいことになるもんですね」

さう云ふ僅な言葉ほど、なほお互の肚のなかが解るやうで可笑しかつた。眞つ白に塗りたてゝゐるために、普段はまるで氣もつかない、……どころか綺麗だと思はれるのに、それが急に煙脂だらけの薄黄色に見える齒をむき出した瀧十郎の笑ひ顏は、決して氣持のいゝものではなかつた。おまけに、素顏ではあれほど澄んで見える白眼までが、黄ばんで、血ばしつたやうで、いかにも無氣味だつた。けれども、これも奈落と同じ理窟で、見馴れた三好には、さして著しくは感じられなかつた。

面白さうな、然しさつぱり譯の解らない話を、ニヤ／＼するのも憚れて、伏目になつて聞かぬ顏でゐる先客は、隙をみて、瀧十郎に挨拶すると、急いで出て行つてしまつた。二人は急に氣を樂にした。

十一

合せ鏡をして、頸筋の白粉を、牡丹刷毛でのばしながら、

「あの後、紀尾井町さんにお逢ひでしたか」

「歳暮に雜誌の方の用で二三度事務所へ行つたけれど、お留守だつたり、いらしつても馬鹿にお忙しさうだつたから、ゆつくり話はしなかつたし、元日御年始に伺つた時は、珍らしく御夫婦づれでお出掛になつたあとだつたんで、まだ今年になつてからお目にかゝれないわけさ。だからその後、あの晩の話も出ないよ」

「今日はお見えになりさうなもんですがね」

「さア、僕もさう思つてるんだが……。君は、あれからホウヤ―よし野―行つたかい」

「どういたしまして」

「ぢア、紀尾井町さんが殘して來た印象と云ふやうなものも、まだ聞かないわけか」

「どうもあゝ荒されちまつちやアね」

「へえ、瀧さんでも、そんなことを氣にやむかねえ。あのくらゐはほんの御座興だらうぢアないか」

「さう云やアまアさうですけれど、然し……」

「あんまりいゝ心持はしなかつたかね」

「誰が、あッしがア？ しよ、冗談いつちやアいけません。然し、一體紀尾井町さんつて方はどう云ふんです、不思議な魅力をもつた方ですね」

「まつたくね、いゝ男のことを云ふなら、勿論瀧さんの方が十枚も二十枚も上だし、云ふこと爲すことだつて、別段氣が利いてるつてほどぢやなし、それに女房持でさ……」

「女房子なんぞ、相手がソッジン素人の場合ならどうだか知りませんけれど、却て一家の主人と云ふ方が、重みがあつていゝくらゐでせうよ。それはいゝとしたつて、どうも吾々男の目には、どこに一つこれはと云ふやうな、目立つたところがあるとは思はれませんからねえ。一體男でも女でも、大勢のなかへ出て、なんとなく人目につくつて云ふやうな人なら、きつと色つぽい話が多いもんですが、紀尾井町さんは、どつちかと云やアくすんだ方でせう？ それだのに、忽ちあゝ云ふ景色になつちまふんだ

から驚きますよ」
「ただなんだね、意味のないことだけは確だね、どんな場合でも、決して拵へたところはないからね、その點は、偶々には大へん氣持がいゝが、女なんぞにとつちやア、とても魅力になりさうもないことだからね」
「それア然し、女だつてそのくらゐのことは解かりますよ」
「さうかしら。さうだとすれア、矢つ張り一種人格の力、とでも云ふやうなことになるね」
「結局さう云ふことになるんでせうね。とア、あツしもこれから大いに勉強して、人格の向上を計らうかな」
「初ツから、女を拵へるのが目的でやる人格修養ぢア、まア／＼大したことはないね、安心だね」
「安心……へんなところへ安心を使つたもんですね。あツしに女が出來ると、先生に御心配をかけることにでもなるんですか」
「女は兎に角、君なんぞにさう偉くなられちア敵はないよ。まア／＼今くらゐなところで丁度いゝよ。それア、女に出來られたら、自分だつても困るだらうしね」
「一拍二重！」

だしぬけに瀧十郎が、いやに權柄づくな聲を次の間にかけると、待ち構へてゐたやうに、油が滲みて半透明になつた薄汚い羽二重を持つて、床山が跳んで來た。顏を合せて、……そのとき彼は、一個の熱心な見物人だつた。

十二

羽二重を冠せて貰ふと、それでもだいぶん氣味惡さが消えて、舞臺で見る瀧十郎の俤を偲ぶことも出來た。目を細くして、鏡のなかの顏を見詰めながら、
「どうでせう、ちつと赤すぎますかしら」
「さアね、白すぎるくらゐぢアないかね」
「さうでせうか」
「尤も役者の白粉が、白すぎて困ると云ふ場合は、絶對にないわけかも知れないが……」
「と云ふと、白ければ白いほどいゝんですか」
「さうさ、勿論それア、昔のやうな役者の心理から云つてだよ」
なんだ
と、有繫にちよつと不憚な顏をして、「ぢアもうちつと赤くしませうか」
「なに、その御遠慮にやア及ばないよ。尤ももう二番目になると、白粉は大抵落つちまつてるがね」
「さう云やアね、先生」
と、火鉢の方へくるりと振り向き、煙草に火をつけて、いつになく、初心らしくも、もじ／＼しながら「近いうちに一度ゆつくりお目にかゝりたいんですがね。……と云ふのは……」
「また新情人の惚話でも聞かせようつて云ふんだらう」
「茶化しちまつちやアいけません。實はあツしも、今度はちよつと、先生の前に兜を脱がなくつちアならないはめに立到つてるんですがね……。ちよつと失禮します」
吸みかけの煙草を灰にさし、急に立ち上ると、衣裝方を呼んで手早く支度にかゝりながら、
「まア然し、そのうちゆつくりお話し申しませう」
「へーえ」
衣裝方、男衆の忙しく立ち働く場席をあけるために、主好は、座布團ごと隅の方へ膝行つて、目の前で昔の男に變つて行く瀧十郎を見上げ、だいぶん得意さうに微笑んで、僕に兜を脱いたと云ふと、つまり、ツシン素人にメ女でも出來たとか、出來かゝつたとか云ふやうな話かね？」
はたに人がゐるなかで、隠語まじりに、平氣で

さういふ話が出來るといふ意識で、一層燥いだ氣持にされてゐた。けれども瀧十郎には、出來たら、出來ないたとへと云ふやうな言葉だけでも、勘のいゝ男衆などには、すぐ氣どられさうな氣がしたので、片眼をほそめて、ハチハチと睫を合せて注意した。

花魁の新造とか、藝者の箱屋とか、役者の男衆とか、すべてさう云ふ寄生蟲的な生活をしてゐる人間が、喰ひさがつてゐる者の隅から隅まで悉く掌中に置き、少しでも餘計に榮養を盜み吸ひ取らうとする根性から、油斷も隙もなく、常に祕密の匂に鼻をヒコつかせてゐる事實は、三好も見聞してゐたうへに、瀧十郎の男衆、大橋善太郎が、典型的な寄生蟲根性の男だと云ふことも知つてゐた。惡賢いと云つてもいゝほどで、無論年齢にすれば驚くばかり利口な瀧十郎が、なんとなく、自分の使つてゐる者の前に、始終頭のあがらない態なのも、要するに澤山な祕密を握られてゐるせゐだらうと察しられたし、また大抵のことまでは、――それも「もたれ込み」と云つた風な、一つの手かは知らないが、ズバ〳〵と、少しも隱しだてしずに、寧ろいろ〳〵の助力をうけてゐるらしい容子も目についてゐた。にも拘らず、今その大橋の前を、大慌てに慌てゝ取繕はうとするのは、よく〳〵の大祕密に違ひない、と感じられたので、ぬからず三好は、他事を云つて、うまくその場を誤魔化して了つた。

不良の徒

一

厚いアーチの下の石段に、大勢の足音がこもり響いて、いづれも一分一秒を爭ふやうな氣忙しなさで、眞直に改札口へと頽れて來たのは、大きな手荷物を持つたのが殆ど一人もゐないのを見ても、櫻木町發の上り電車から吐きだされて來た人々に違ひなかつた。

一二等婦人待合室の入口に立つて、脣をとんがらかさずに、僅かな隙から息を漏らすやり方の口笛で、何やらダンス、ミュウジックを口吟みながら、四つ並んだ改札口へ油斷なく目を配つてゐるのは、荒い辨慶縞の鳥打帽を、兩耳が押し曲げられるほど深く阿彌陀に被り、鼠つぽい厚羅紗の、やつと膝まであるかなしの外套に、やゝ流行おくれの茶色がかつた背廣を着た美少年だつた。美少年と云つても、可愛らしいと云ふのではなく、誰が見ても正確に二十歳とは思ふまいほどにふけてもゐるし、丈は四寸豐で、肉は薄く、キリヽとしまつた、凄い質の美しさだつた。茶色の眉毛の下に、眼は深く、鋭く、羅馬鼻で、しやくれ加減の顎にナポレオンのやうな縦の割目のある、すべて道具から云へば、純然たる外國風だが、たゞ皮膚の色が、一種日本人獨特の淺黒さだつた。――獨逸人を父に、日本人を母にもつて、西山普烈と云ふのが彼の名だつた。

今その西山が、探し求めてゐたのは、大勢のなかでも、すぐに目につく筈の者だつた。大黒樣の頭巾のやうな型の、紺色の帽子に、流行の黒羅紗の外套を裾短に着て、成熟しきつた脛の形も露に、はたの視線を平然とうけ流して、踵の高い靴でコト〳〵と小股に歩いて來る中肉中丈の日本人の女がそれだつた。

不思議なやうな話ではあるが、これが、萩原政次郎、すなはち瀧十郎の、胤違ひの妹で、岡島鈴江と云ふ、二十二歳の、文學志望の娘だつた。爭はれないもので、瀧十郎の享けてゐるやうな、皮膚の淺黒さ、滑らかさや、髮の色光澤などは、そつくりまたこの娘のものだつたけれど、顔の道具は、父親似のせゐか、全く別ものだつた。瀧十郎の、役者らしい細面に對して、

これは、どちらかと云へば丸顔で、剃り込んであるとしても、尻下りに長く引いた眉や、並びのいゝ白い歯、人中のさきが心持まくれ上つた薄い唇など、兄にはまるでないところの、西洋人むきの美しさに富んでゐた。
　箸にも棒にもかゝらない道樂者だつた鈴江の父親も、どうやらさきが考へられて來たとみえて、三四年前からは、横濱の或る大きなホテルの主廚夫の位置を、後生大事と勤めるやうになり、昔から仲のよくなかつた母親の手から、娘の鈴江を引きとつて、我が儘のさせ放題に、ただ猫ッ可愛がりに可愛がつてゐた。鈴江としては、氣むづかしい母親や、――彼の女の言葉に從へば、僅かばかりの出世を鼻にかけて、一人でえばり散らす兄の政次郎のそばで、窮屈に暮してゐるよりも、夜よりほかゐたことのない父親の家に、誰からも掣肘を加へられることもなく、思ふがまゝに振舞へる現在の生活を、どれほど喜んでゐたか知れない。現金でこそ、月にやつと三十圓しかあてがはれなかつたけれど、身につけるものなしでねだる分には、大抵のことまでは、聽かれないと云ふためしがなかつた。――一二年以來横濱で、岡島鈴江と云へば、知つてゐる人々には、すぐ微笑や、横を向いてフッと吐きたくなる唾や、北叟笑や、眉間の皺や、その他いろ／＼の表情を催させる名前になつてゐた。

二

　西山は夙に鈴江を見つけてゐたけれども、遠くから合圖をするでもなく、また默つてそばへ行くでもなく、兩手を外套の衣嚢に突ッ込んだまゝ、冷然として唇を鳴らし續けてゐた。空色の切符を、革手袋をはめた指先で改札掛に渡して出ると、鈴江は、キョロ／＼あたりを見廻すやうなこともしずに、そのまゝさつさつと正面の口へ急いだ。やり過して置いて、西山も續いて歩き出し、往來の土を踏む時分には、追ひついて肩を並べた。すまし込んで、そのまゝ二人は二三間芝口の電車通りの方へ歩いて行つた。
「ひどい道だね。タクシーにしようか」
　歳尾の大雪以來、いまだに泥海の壯觀を呈してゐる東京名物の惡道路に、上履をかけない褐革の華車な靴を爪立てながら、鈴江は、男のやうな聲で、そして男のやうな言葉で、肇てから口を切つた。西山の方は、上覆をした泥まみれの靴で、情けもなくピチャ／＼歩いてゐたが、振りむいて、
「一體、どこへ行くんだい」
「なに云つてるんだよ、こなひだ……」
「それア解つてるよ。だから、その人のうちはどこだつて云ふんぢやよ」
「麹町の紀尾井町さ」
「ぢア、乘合自動車で銀座へ出て、ちよつとお茶でも飲んでから、新宿行の乘合自動車……」
「バス／＼つて、いやに乘合が好きなんだね」
「いゝぢアないか、腋臭くさくつて。わしアあの機關の焼けた匂が大好きぢやがねえ」
「わしアあんまり好かんが、銀座に出るのは贊成だから、ぢアバスにしようよ。何しろ、この道は歩けやアしないよ」
「もうちよつと深いと泳げるんぢやが、實に殘念なもんぢやね」
「馬鹿々々、往來を泳いでたまるもんかね」
　有繋に女らしくクックと忍び笑ひをしながら、またあと戻りをして、表玄關の前で乘合自動車を待つた。ほどなくそれが、「腋臭くさい」煙をはき散らして、頭でつかちな一寸法師のやうに、よち／＼搖れ動いて來た。「先づ婦人」の掟に從つて、西山は、氣取つた容子ッぷりで女を助け乘せ、續いて自分も身輕く車上の人となつた。
「おや、暫くね」

低い天井の下に、前こゞみになつてはいつて行つた鈴江は、讀んでゐた雜誌から顏をあけた三好鳳夫を見つけて、すぐから聲をかけた

「ヤア、しばらく……」

三好は、目ざとく續いてはいつて來たつれをも觀察して、ニヤ／＼笑ひかけながら、膝を讓つて彼の女のために席をつくつてやつた。「かけられるよ……」

「有難う」

と、遠慮なく割り込んで、苦しさうに背をかがめ、眞鍮の棒に摑まつて、ふら／＼してゐる西山の方は見向きもしドに、「その後いかがです。カフェエ黑猫の話きゝましたよ」

「なんだい、カフェエ黑猫の話つて……」

「隱したつて駄目よ、あたしが東京にゐなくなつたつて、あつちこつちに澤山手下が配つてあるんだから、……一々ちやアんと報告が來るん だから」

あたりかまはず、例の男のやうな調子でまくしたてるので、一齊に乘合の視線を浴びて、三好の方がたじろいで了つた。それに、早速もち出された話にも、慥に痛痒いところはあつた。

三

同時に、「澤山手下が配つてあるんだから」と云ふ鈴江の言葉にも、ちよつとした意味がないではないやうに、三好には感じられた。——それで巧にも、一緒に乘り込んで來たつれの美少年と自分との關係を、いち早く說明し、彌縫しようとかゝつてゐる氣持が感じられたのだ

この場合、すなほに、その手に乘つてゐた方が無事らしい、と考へた三好は、目立たないやうに、——窓からおもてを見ようとでもするやうに、鈴江の方へぷいと首を振ぢ向けて、耳のはたで微に脣を動かした。

「そこにゐる先生も、ぢア、彼等のうちかね？」

逆手の效果あらたかに、鈴江には、ひどくその問が氣に入つたらしく、

「あゝ」

と、美しい齒並を見せて、にいツと微笑みながら、あまた度うなづきながら、「まづ、さうさね、小頭とか組頭とか云ふくらゐのところかね」

「暫らく逢はなかつたうちに、素晴らしくいゝ顏になつたもんだな」

「それアもう！ 大したもんです！」

「今日は、兄貴ンとこへでも行くのかい」

「誰が！ まだお正月になつてから、お年始にだつて行きやしない。葉書一本出しやアしない」

「澁十、レイコウ鈴江　おん仲不和ならせ給ひ……かね？」

「三好さんは相變らず一緒に飲み歩いてるんだらうね。まア、今日あたしと逢つたことなんぞも、手柄顏に話すこつたらうね」

「あゝあ、それで話すとも……」

それから、もう一度ぐツと耳もとへ口をよせて、混血兒の情夫をつれて歩いてたつてね

云ふなり、自分の言葉で自分がてれて了つた態に、肝心の鈴江の顏からは目を逃して、その時にはもう向側の、運轉手臺に近いところへ席を得てゐた見知らぬ若者の方へ、チラリと視線を送つた。すまし込んで、横向に、自動車の進むさきを見詰めてゐた。で、それだけしてから、やつと鈴江の顏に目を戻した。もしその言葉から、彼女に現はれる表情を待ち、そしてそこに何等かの思考を得ようとしてゐたものとすれば、三好も存外氣が弱いと云はなければならない……。瞬間の表情は、彼女の費した瞬間に消えて了ふ筈だから。

「さうさ、だからあたしが云ふのさ、さぞ手柄顏に喋るだらうつて……」

鈴江は、冷然と、――と云ふより寧ろ事務的に口を利いた。「何しろあなたつて人は、文壇の電信局なんだからね」

「さア、それが可怕けりやア、今のうちになんとか色をつけといて貰ふんだね」

「誰が！」

一旦の弱氣から、三好の頽勢は到底もり返し難くなつて來た。こんな女を相手に……、とは思ふのだが、不愉快を露に口を噤むよりほかなかつた。

竹川町の手前まで來ると、鈴江は、あたり構はぬ大聲で、離れた席の西山へ、

「この次あたりでおりようか」

「うん」

ちよつと見向いて、堅く口を結んだまゝ頷いたが、その眼色に、三好は、自分に對する反感を感じて、一層可厭な氣持にされて了つた。

「藤代さんゐるかしら――」

そのとき突然鈴江が、ごく普通の調子で、「どこへも旅行なんぞはしてゐないでせうね」

四

一體、ほかにもまだきやうだいはあるが、政次郎、鈴江たちの母である萩原お民と云ふのは、新橋に名古屋だねが移入され始めた頃、ほんの下地ッ娘の年齢でつれて來られ、雛妓から一本と、全く土地風に育てあげられたので、まだ江戸ッ兒が幅を利かしてゐたその當時にも、詳しいことを知らない大方の客や朋輩の間で、地方ものとしての輕蔑をうけるやうなことは少く、大していゝ看板のうちでもなかつたが、あたまの働く性分で、座敷は面白く、出先の女將さん女中たちにもうけがいゝと云つた具合で、だんだん約束に入れられるやうになり、遂には、押しも押されもせぬ一流の姐さん株まで漕ぎつけてゐたのだから、若しそれが病の男道樂さへなかつたなら、夙の昔に玉の輿にも乘つてゐられる女だつた。いゝ旦那がついた、今度こそ……と、却つてはたのものが喜んだり心配したりしてゐる間もなく、いつもきまつて情夫ゆゑにしくじつて了ふ。度重るにつれて、御相談に與る老妓連が、「へえ、誠に結構ですけれど、どうもあの妓ばかりは……」と首をかしげるほどになれば、一流と云ふ位置さへも、なんとなく影がうすれて行かないわけはなかつた。それを、あゝあたしが惡かつた、と後悔するには、性分が勝氣すぎた。勢、心持が荒み、自棄じみた行爲が多くなつたが、客と云ふものは妙なもので、それがまた却つて人氣になつて、一時ぱッと咲き返るかとも見えたが、矢張りなんといつても狂ひ咲きの面白味で永もちがせず、いつとはなしに凋落の影がさして來た。その時分にひどく惜がつて、なんとか人氣を立て直してやらうと骨を折つたのが、信之の父、藤代信策だつた。けれども、それは既に手後れで、第一當人の氣に、それだけの張りがなくなつてゐた。

そんなひッかゝりから深はまりした信策は、うちのなかの容子まで知つてみると、その亂脈さは、到底そのまゝ手を引くに忍びないものがあつた。せめて子供たちだけでも、と、殆ど低能兒と云つてもいゝやうな、誰の胤ともよくは知れない長男の勝太郎を、東北鐵道の上野の本社で給仕に使つてやり、その時分やつと小學校に通ひ始めたくらゐの政次郎は、傲慢ゆゑにあまり世に容れられなかつた亡き名優の胤でもあり、殊に常日頃の寝物語りにも、この子は、どうにでもして役者に仕立てゝくれと、歎に唄つてゐた由を聞いて、遠いながら亡父と血を引いた市川□□□に頼んで子飼からの弟子にとつて貰ふやうに盡力もしたのだつた。そんな關係だつたから、以前は、盆暮の用などに、萩原一家のものが、必ず一同揃つて紀尾井町の邸へ御機嫌伺ひに出た。どうかすると、お民の地で、長

男と政次郎との間の娘、——今は流れ〳〵て臺灣にゐると云ふのや、その頃まだ熨斗目の振袖を着、薄化粧をして、ヘナクナしてゐた今の瀧十郎や、大阪へ行つて堅氣の女房さんになつてゐる鈴江の姉にあたる娘やらで、何か短いものを踊つてみせたりした。が、さう云ふことは三四年ほどしか續かなかつた。いま臺灣に藝者をしてゐる長女と、その當時門長屋の書生部屋にゴロ〳〵してゐた學生の一人とが、可訝しな關係になつてゐたことが知れると、若い者どもの風儀のために、と云ふ名目で、以來堅く出入が禁められて了つたのだ。

それまでに、鈴江も一度や二度は、藤代家の閾を跨いでゐたが、瀧十郎にしろ、彼の女にしろ、信之との交際は、なか十數年を隔てゝ、先代信策の歿後、改めて結ばれたもので、それには幾分なりとも、以前からの御贔屓と云ふやうな感じもあつたにしろ、まるでまた新しい關係だつたのだ。

五

盆正月に、萩原一家の者が、ぞろ〳〵と揃つて御機嫌伺ひに出る頃の信之は、剛健な氣風の、勤勉な中學生だつたから、頭からさう云ふ種類の男女に反感をもち、踊が始まるからなどと女中が傳へて來ても、苦蟲を噛みつぶしたやうな顏をして、決して書齋から出て行かうとはしなかつた。殊に、男のくせに薄化粧をした瀧十郎を見ると、その時分の年齡で八つも違へば、所詮相手にならない子供ながら、横ずッぽうの一つもはり飛ばしてやりたくなるほどの氣持だつた。

それが、ほんの三四年たつかたゝないうちに、大へんな芝居好きになつて了つた。最初の動機は、ふと年上の友達に誘はれて、宮戸座の夜芝居に、壽美藏、源之助、訥升、菊四郎と云つた顏ぶれで、鬼神のお松を見たのが始まりで、それからは、交通の不便だつたその頃の東京中を、芝居とさへ云へば、千里を遠しとしない勢で駈ずり廻つた。それまでも、父母につれられて、團菊左の芝居や、小傳次を座頭とした子供芝居もちよく〳〵見てはゐたのだが、決してさう面白く思はなかつたのに、その時機が至つたとでも云ふのだらう、ほんのふとした拍子で、源之助のお松が病つきとなつて了つたのだ。さう云ふ、みいちやんはあちやんにもをさ〳〵劣らず狂氣じみた芝居好きとして、その頃子役のなかの麒麟兒と唄はれ、あつちこつちの芝居から引張凧に買ひに來られてゐた瀧十郎を見逃す筈はない。幼時のよくない印象などは却つて一種の御愛嬌になつて了つて、以前を知つてゐると云ふだけの緣をもひどく嬉しく思ふやうになつて行つた。例の三十九年の助六の芝居を、いかにたゞとは云ひながら、毎日のやうに見に出かけたのも、この凝りかたまりの最中だつたからのことだ。

けれども、さう云ふ熱心はせい〳〵二十歲までで、それからはだん〳〵下り坂になり、二十四五の頃には、全く愛想をつかしてゐた、その空虛を補つたのが、文藝、美術だつた。その時分、身は帝國大學の法科教授でありながら、フロツクコオトで、歌舞伎、新富、明治と、一幕見のかけ持をして歩くほど芝居好きの先生があつて、教室以外で信之と逢つた時に、偶然芝居話に花を咲かせたのがもとで、この人の紹介によつて、瀧十郎や、そのほか四五人の役者と懇くするやうになつたのだ。けれども瀧十郎は、理由は兎も角も、一旦藤代家への出入を禁められた人だつたから、母親お民の注意もあつたのだらう、そとでは逢つても、決して紀尾井町へ尋ねて來るやうなことはしなかつた。そのうち先代信策が死んで、信之の代となり、お互の隔てもすつかりとれ、一緒に旅行もすれ

ば、襖一重でめい／＼が女を買ふ、と云ふやうな亂暴でも、平氣の平左でやつてのける今日に及んだのだ。

　そこで、妹の鈴江の方は、云ふまでもなく初は兄の紹介だつたが、昔から氣の合はないこの二人は、一度でもつれだつて信之を尋ねて來るやうなことはなかつた。度數で云へば、年中忙しい瀧十郎よりも、却つて妹の方が度々遊びに來てゐた。初のうちは、勿論、文學、美術、音樂と云ふやうな話題が主だつたが、だん／＼馴れ親むにつれて、まるでもう滅茶苦茶だつた。ほかに男の友達でも來てゐて、男女間の露骨な話などが出ても、この娘の前でならば、普段禮儀正しい信之も、平氣で大口を叩いてゐた。鈴江は、一體がむら氣で、以前から、來だすと毎日のやうにも來るし、來ないとなれば半年も顏を見せない、と云ふ風があつたが、横濱に移つたために、晩くなれば泊つて行くやうなこともあつたけれど、昨年あたりから、何故か急に遠遠しくなつてゐた。

六

　云ふまでもなく、それらのことも知つてゐる三好だつたから、鈴江が信之の在否を尋ねたからと云つて、別に不思議には思はなかつた。それより、自分を、藤代家のことなら何から何まで承知してゐる、謂はば出入りの書生かなんぞのやうに扱つて、要もないのに、人なかで、故意とそんな質問をするのだ、と感じられて、それがいかにも不愉快だつた。それには、今日にもすぐ紀尾井町へ行くものなら、きつと一應とも自分を誘ひさうに思はれるのに、さうはしず、而も自分の知らない、恐らくは信之だつて知りさうもないつれがあるのだから、訪問する意志など少しもないにきまつてゐる、それを自分に在否を慥めるのは、どうしても殊更人なかで云ふいやがらせとよりほか解れなかつたのだ。

　三好は、聞えなかつたふりをして、ぢッと眞正面に目を据ゑてゐた。

「ねえ、三好さん」

　ちよいと膝をつッ突いて、横から顏を窺き込むやうにしながら、「藤代さん、東京にゐるんですかよゥ」

「さうだらう、僕はまだ今年になつてから逢はない」

「さう？　どうして……？」

　まだ何か云ひかけて、斜向ひの席で西山が立ちかけるのを、視野のはづれに感じると、すぐ自分も腰を擡げ、顏だけ振りむけて、「ぢア、いつれまた……。さよなら」

　徐行になつたところを、身輕に二人は、ヒョイと續いて跳びおり、人道にはいつて、さつさと尾張町の四辻の方へ歩きだした。

「今の、なんだい」

　西山は正面を向いたまゝ、無表情な調子で訊いた。

「雜誌の、……こなひだ話した『高踏』つて雜誌の編輯人で、脚本なんかも書いてるひよつこ文士さ」

　そんな人間には、爪の垢ほども興味がないらしく、さうか、とも云はずに、三四歩行つてから、

「どこにしよう。珈琲はユウロップがうまいがね……」

「いゝだらう、あすこなら、ちよつと話も出來る」

　外國人のやつてゐる、裏通りのカフヱエの椅子に、やがて二人は差向ひに腰をおろした。サンドウキッチと珈琲とを註文して了ふと、鳥打帽の下につぶれた黑褐色の柔かい髮の毛を、頻と後へ高く掻き上げながら、西山は、狡猾さうな笑ひを脣に漂はせて、

「うまく繪圖ひいといたよ」

「どういふ模様だい？ あらまし聞いとかないと、話がとんちんかんになつても困るからね。細いことは、その場／＼でうまくヒントを合せちまふけど」

「いろ／＼歩いちアみたんだが、先づ振られたけ活動寫眞ぢやね、ほかにどうも、わしでやれさうなことがないもの。でも、その人が活動が嫌ひだつていふんだから……」

「嫌ひだつて、めつたに見に行かないつてだけのことで、何も、話を聞くのも可厭だつてほど嫌ひなわけぢアないよ。何か面白い喜劇の筋でも一つ二つ話して聞かせれア、そいつは面白さうだが、今どつかでやつてますか、とかなんとか、すぐのつて來さうな人なんだから……」

「そんなことならお手のもんぢやよ。活動で儲はないとなりやア、あとは萬事わしがうまくやるよ」

「よし／＼、フリッツなら、大抵うまくやれさうだよ」

七

「それで？」

と、西山は、褒められても格別嬉しさうな顏もしずに、「一體、どういふ質だね？」

「さうさねえ、……なんてつたらいゝだらう……」

「正直かねえ？」

「まアさうだらうね、　さうだね、……大へん正直な方だね、上に馬鹿をつけてもいゝくらゐかも知れないね」

「うん」

自分に頷いて、「それから、……」

「なんだい、それから、……なんだよ」

「お前さんは嘘つきだから駄目だね、訊いたつて無駄だね」

「一體なんの話さ。そりア場合によつちア嘘もつくけど、　なんだよ」

「この場合は、嘘をついちアいけない場合なんだ。大きな嘘をつくための材料にするんだから、正直にいはなくちア駄目だよ。どうだね、正直にいふ、どうかね？」

西山は、相變らず堅い、動きのない表情のまま、ぢツと相手の娘を見詰めた。

「なんだい、一體問題はなんなんだよ」

へんにとんがつた感じの、冷い視線を恐れるやうに、しねくねと肩をもぢりながら、上横目にあらぬ方を見る、少しつんとした時の西洋婦人の表情を、鈴江は、そつくりそのまゝ眞似てみせた。

「ちよいとこつちを見てごらん」

「なんだよ」

視線で視線を、ぎゆうつと釘ざしにして置いて、西山は、暫く間をもつてから、

「お前さんとは、關係があつたのかい」

「馬鹿！」

あはれない男が、むしろ嘲の加へられるのを待つ氣持で、ぢツと向けられてゐた視線を、その一言を聞くや否や、ぴイんとはねかへし、ふいとそつぽを向いて了つたが、すぐまた男敢に見返すと、　およしよ、みつともない」

「嫉妬んぢやねえ、金儲けの相談だい！」

低聲ながら、殺氣を帶びるほどに、きつぱりときめつけられたが、卓に片肘たてゝ顎をのせ、例の上横目で、窓から、午後三時頃の、綺麗に晴れた冬の空を見上げたまゝ、鈴江は、組み違へた足の先で拍子をとつて、鼻音で、カルメンの曲を低唱しだした。その、從容迫らず、といつた態度も、然しどこかに、無理に形づくつてゐる生硬な氣持を隱し終せはしなかつた。西山は胴着の胸衣嚢から、薄手な、胸の丸味に反せた銀の卷煙草入を抜き取ると、パチンと開いて、靜に鈴江の前へ差し出した。

「いかがです

—澤山」—

自分は一本脣の間に銜へて、柄の長い西洋マッチを卓の足へ摺りつけた。

「惡黨は惡黨らしく、せめて往生ぎはだけも綺麗にしようよ—

—一旦銜へた煙草を口からはなして、それだけ云つてから火をつけた。

—わしア惡黨は嫌ひぢや—

溜息を吐くのと一緒に呟いて、今度は腕組をし、二三度眉毛をあげさげしてから、卓上の一點を見詰めて、鈴江は、じいん……と沈み込んで行くやうな、陰鬱な表情を拵つた。

—ふうん、……未練が出たかね。

—なんだい?…—

—あゝあ、これだから女はいやさ—

椅子の上で、ぐうッと反りくり返り、顎が鉄を嵌つた形に、兩肘に力をこめて折り曲げ、熊手にした指で、毛をモシャクシャにして、ガリ〳〵音がするほど頭の地面を掻き廻した。

八

—どうもお待たせ申しました

そこに、白い前掛をかけた給仕女が、取次したものを運んで來た。何はとて措いてもしなければならないことのやうに、西山は、椅子をうしろの足だけで立たせて反りくり返つたまゝ、下目づかひに、その女の顔を見た。見る、と云ふよりも、一應審査する、と云つた方がよささうな目つきだつた。續いて眼色に現はれた審査の結果は、落第らしかつた。一息にうんと喫んだ煙草の煙を、若々しい肺の廣さを思はせるやうな力強さで、ふうーッと遠くまで吐き出した。鈴江は、縦に切つた麺麭の上に、燻腿や腸詰を置き並べた獨逸風のサンドウヰッチを引きよせて、早速肉叉を突ッ立てゝゐたが、急にふり向いて、立ち去らうとする女給を呼び止めた。

—あの、電話を一つかけてくださいませんか—

吃驚するほど急に女らしい口の利きやうになると、聲までが、いくらか甲高に聞えた。

—はい、何番におかけいたします?

—えゝと、番町のね、あら、九段に變つたんだつたかしら。

必要以上に大きな聲で、暫くそんなことを獨語ちてゐたが、あゝいゝわ、あとであたしがかけますから……

—それぢア、電話帳を持つて參りませうか

—いゝえ、よござんす。とつくに書いたつたかと思ひますから—

番號を書きとらうとしてゐた帳面と鉛筆を、前掛の衣嚢に突つ込んで、女給は勘定場の方へさがつて行つた。ほかには外國人の老夫婦が一組、隅の方で、ぼそ〳〵と話し込んでゐるきりだつたが、その静かさが、却つて密談の邪魔だつた。

ぢア、「そこは飛ばしといて先へ行かうか」

西山も、飲み食ひに取りかゝりながら、で、まづ一番に、今の日本の活動の會社が、何故くだらないフィルムばかり拵へてるか、その原因を話して、個人經營の、ほんの小さな組織のものゝ方が、きつといゝフィルムが出來るんだし、——これアまた實際の話だからね、それに金もかゝらない。金をかけずにいゝフィルムを造る。いゝフィルムさへ出來れば、もう今の時世なら、賣込は雑作ないんだから、右から左に金になる。——これがまづ第一段だ……」

「駄目々々! それア會社の重役かなんかを相手に廻した時の手だよ。そんな堅いことを云つてたひにやア、相手を退屈させちまふばかりだよ。辯護士つたつて、名ばかりで、その實まア碌々と大した遊びはないんだから、——年中のらくらしてるんだから……—

まア黙つて聞いといでよ、これア大體の骨組で、いざとなりやア退屈させるやうな、まはし

やアしないよ。……それから第二段にはだ、吾輩の友達に、活動の好きな芝居心のあるやつが男にも女にもうんとゐる。こいつらが、みんなたゞで働いてくれる。無論お前さんもわしも役者になつて演るやうに話すんぢや……」

「駄目！ フリッツ、お前こんだはちつと堅くなつてるよ。そんな計畫なんぞ立てゝ行つちアとても駄目だよ。いつものやうに、もつとかう……インスピレエションでいかなくつちやア」

「いつもだつて……」

一語々々に力を入れて何切りながら、「いつもだつて、はたでお前さんがみてるやうな、そんなぞんきなもんぢアないんだよ、ぞんきに見せるまでにやア、裏に相應からくりがしてあるんだよ」

九

「ぢアまアいゝさ」

鈴江は、さも面倒臭さうに、「すつかりそつちへお任せしますから、いかやうともよろしきやうにやつてごらんなさい、だ。たゞね、あんまり買被つて、くだらなく資本倒れにならないやうにと云ふだけのことさ」

「ところが、どうもさうらしくないね。わしやアまだ會つたことはないが、どうもお前さんのすべてるやうなもんぢアなささうだね。存外手強さうな氣がするね。だからこそ、今度の仕事は面白さうなんだよ。ちやアんと繪圖はひいてあるが、場合によつちア、今日はこれんばかりも持ち出さずに、とんでもない見當違ひの話ばかりして歸つて來ることになるかも知れないよ。

――つまりそれも、繪圖のうちだが……」

「あゝ面倒臭い！ 何しろそつくりそつちに荷をおろしちやつたんだから、わしアもう高見の見物ぢや」

放り出すやうにさう云ふ女の顔つきに、ぢいツと目をつけて、

「ものゝ哀れを感じてるな？」

「何を……」

「何をぢアない。とんだ人にレンズを向けたと思つて、今さら後悔してゐるだらう」

「利口で馬鹿の剝身賣り……、ひとりでうがつてやアがる……」

さう罵られても、西山は、すましたもので、上着の襄を返し、左の指先をそこの内衣嚢へつッ込むと、じり〳〵と少しづつ顔を出す鼠色の西洋封筒があつた。

「往生ぎはを綺麗にしようね」

「あッ」

と云ふ叫びは、危く呑み込んだが、然し行繋の鈴江も言葉が出なかつた。ちよいと顔の色が變つてゐた。

「なんてつたつて、お前さんはまだ素人だよ」

はち切れさうに身にぴッちりとあつた上着の釦をかけながら、云ふ文句ほどには毒のない調子で、「だから、あんまり利いた風な口をたゝきなさんなつて云ふことさ」

「だからあたしは、悪黨は嫌ひだつて云つてるぢアないか」

はずむ息をぢッとこらへると、いくらか震へ聲になつた。

「尤も好きだつて、お前さんにやアなれやしないから安心おし」

「まアなんでもいゝさ、もう出かけようよ」

冷くなつて底に殘つてゐた珈琲を、振り仰いでぐつと飲むと、椅子の足を鳴して立ちあがり、女給のゐる方へ、西洋流に手の平を自分の方へ向けたおいで〳〵をして、近づいて來たのに、

「お勘定をお願します……。あゝ、さう〳〵、電話をかけるのすつかり忘れちやつてた」

「ちよつと待つた」

それまでの動作を、冷やかな目つきで仔細に觀てゐた西山に、一秒もすかさず聲をかけられ

て、鈴江は、いま踏み出さうとした足をとめた。そこへ女給が來て、銀色の盆に載せた傳票をどちらに差出すべきか、ほんのちよつとのま迷つた揚句、二人の間の卓上に置いた。

「なに？　お勘定？」

「いゝえ、さうぢアない。電話はかけない方がいゝだらう」

例へば水を銜んだ海綿のやうにボテ〳〵と、いやに重たく呟き、勘定場へ傳票を持つて行つて拂をすますと、すぐ戻つて來て、鈴江に外套を着せかけながら、耳のはたで、「こゝまで來て、大事なお客を電話でおとされてたまるもんか。お氣の毒だが、どうもまだお前さんのやり口は青いよ」

十

然し鈴江は、振り向かうともしずに、そのまゝさつさと出て行つて了つた。あとに殘された西山は、有繋に少し急きこんで、外套の袖に通した兩腕の肘を張つて廻轉させ、肩へ搖り上げながら、續いて階段を驅けおりたが、下足の爺さんに上履をかけて貰ふのにまた手間どつて、おもてへ出た時には、右にも左にも、その横町にはもう鈴江の姿は見えなかつた。慍つたのではなく、慍つたふりをしてゐるのだ、と高をくゝつてゐる西山には、そのまゝ姿を消して了ふ氣づかひはなささうに思はれたが、兎も角もこの場合、まご〳〵したくはなかつた。取敢ず電車通りに出で、見廻すと、向側の日あたりの人道を、數寄屋橋の方へ、早くも秀英舍の前あたりまで行つてゐた。すぐあとを追つて、こちらは日かげの人道を、大股に歩きだしたが、そこへうしろから電車が來たのに氣がつくと、驅けよつてヒラリと飛び乘り、車掌臺の向側へぬけて、鈴江の後姿がほんの見えるか見えない程度に額を覗かしてゐた。日本人にしては、わりに膝の延びた足どりで、とつとと道を急いでゐる遠くの後姿を眺めただけで、西山には、そばで顏の表情を凝視してゐるほどにはつきりと、鈴江の心のなかが解るやうな氣がした。振り返りたい首を無理に正面に向け、耳はただうしろから驅けよつて來る足音ばかりに待ちくたびれながら、（うまくまいてやつた、などと、ことさら自分に呟き聞かせてゐるに違ひない彼の女の氣持が、手にとる如くに響いて來た。

公園の横手を安藝の手前まで來ると、たうとう鈴江は我慢しきれなくなつたとみえて、歩きながら首だけ振向けたが、その容子には、豫想の距離と見當へ、目を向けさへすれば、必ず視野のなかに西山の姿がはいつて來るものと信じきつた氣持が露だつた。而も豫想外の近さまで、豫想外の電車で追ひついて來てゐる西山は、横着にも覗けた額を引つ込めもしずにゐた。鈴江の方では、驅けださないまでも、大急ぎで人道を近づいて來る丈の高い姿、——さう云ふ豫想が、最初の一瞥で裏切られると、だん〳〵に歩みを緩め、遂には立ち停まつて、くるりと後向に、伸び上るやうにしながら、往き來の人を物色し始めた。その視點が、次第に遠く、尾張町の四角の方へ進んで行く時分に、探し覓められてゐる御本尊は、物蔭にも忍ばず、むきだしのまゝで、正反對に、近く〳〵と迫り、たうとう彼の女の眞横を、僅か三間隔てたところまで來ると、胴着の衣嚢から往復切符の片割れを摘まみ出して車掌に渡し、悠々と電車をおりたのだ。

——お待遠さま——

斜うしろからポンと肩を叩かれて、

「あゝ、吃驚した！」

と、思はず本音を吐いて振り向くと、視線がカチンとぶつかつた。いかに負惜みの強い鈴江でも、凱旋將軍に優越を感じてゐる西山の眼色を、とても永くは見てゐられなかつた。早速、いま動き出さうとしてゐる電車に視線を移して、

「あれに乗つて來たね、あれに」
「ま、兎に角行かう」
二人は、數寄屋橋の方へ歩きだした。先刻から殆ど完膚なきまでに、やツつけられ通しの鈴江が、性質の負ン氣を以てして、なほ不思議にも、ギリ／＼齒を喰ひしばるやうな敵愾心を感じなかつた。寧ろ陰鬱になつてゐた。この憎らしい男に對して、一度すつかり冷めきつて了つたつもりの愛情が、やツつけられる度毎に、心の底の底から、搖り動かされて、もう一度目醒めて來さうな氣持だつた。

妾宅

一

近頃になく信之は醉つた。
はつきりものを考へてゐるので、これアまだ大丈夫だ、と思ふと、すぐそのはつきり考へてゐたことも、大丈夫と思つたことも、煙のやうなもの〻なかへ溶け込んで行つて了つた。はつきりものが見えた、が、それが明るい大きな電球だつたり、水飲コップについだ日本酒だつたり、女の顔だつたりで、それとこれとの間にどんな聯絡があるのやら、一向とりとめはなかつた。――さう云ふ混沌のなかに、何か一つこびりついてゐるやうなものがあつた。それにつけても、第一、もうこ〻にかうしてゐてはならないんだ……、と氣がついた。で、ヒョイと立ちあがつた。
「おい、藤代どこへ行くんだ」
「歸る」
「駄目だ／＼。もうちつとそこらで寢てろ」
「俺が自動車で送つてやるからもうちよつと待たないか」
「おい、ちよつと、君、女中さん、藤代を氣をつけてやつて……」
「あなた、おあぶなうございます……」
（なに、なにが、なにがあぶねえんだい。吉田なんぞに、自動車で送られにたまるもんかい。……兎に角假令何がどうあらうとも、嘘をつくなアよくねえや……）
と思つたので、
「兎に角、嘘をつくなアよくねえや」
「まだ云つてるぜ、俥にでも乗つけて歸しちまへ」
「俺が送つてつてやるから、もうちつと寢てないか」
うしろから來て肩をつかまへたのは、聲に木上と分つた。（木上ならまだましだ）と思つたが、
「いやだ、第一今から寢られるかよ」
「よし／＼、ぢア俺ももう失敬しよう、一緒に行くからちよつと待つてろよ」
急に突ツかひ棒がなくなつて、ひよろ／＼とした。
「あぶない！」
「大丈夫！　さア歸らう」
つかまへてくれた女中と、そのま〻腕を組んで廊下に出た……、それからあとが分らない。
玄關の式臺に腰をかけて、
「兎に角、嘘をつくなア……」
「よし／＼、もう分つた／＼。さあ、早く下駄を穿くんだ」
（送られちアたまらない）と思つた。
「穿くと自動車に乗せるだらう」
「穿かなくつたつて、あんまり愚図々々云つてれア擔ぎ込んぢまふばかりだ」
それで、女中たちや下足の半纏着まで、聲を揃へて笑つたのが、遠くの方に聞えた。
「兎に角……」
「嘘をつくなアよくねえや、だらう」
「言ふよ。兎に角、なんだつけな……
兎に角、下駄を穿いて立てよ」

木上に手を把られた。
「いけねえ〳〵、兎に角、……さうだ、兎に角お前さん先に歸つてくれ」
「まだ歸らないつもりか」
「歸るんだ」
「ぢア、うちへ歸らない氣なのか」
「まア、……さうだ」
もう一度遠くで笑ひ聲がした。
「ぢア、どこいでも行きたいとこまで送つてつてやらう」
「澤山だ、自動車は嫌ひだ」
云ふうちに胸がむか〳〵して來た。

二

急いで下駄をつツかけて、石鋪を往來まで出ようとした。石鋪の間が馬鹿に長かつた。たうとう間にあはなくなつて、低い竹垣につかまつて、植込のなかに吐いた。
女中が庭下駄を鳴らして、鹽の微溫湯を持つて來てくれた。
「よるなよ、そばによるとくせえぞ」
「たうとうやつちまやアがつたな」
木上もそばに來てゐて、……木上か女中かどつちか分らないが、背なかを撫でてくれた。撫でられるとまた吐きたくなつた。吐いて、うがひをして了ふと、大ぶん氣持がはつきりした。
「ぢアさいなら！」
そのまゝどん〳〵往來へ駈けだした。
「おい、帽子々々—」
成程、頭が寒かつたが、振り向も答へもしずに、一生懸命走つた。
往來には、まだ可なり人通りが多かつた。少しきまりが惡かつた。……俥夫のたまりを見つけた。
「一臺！」
「へい」
「早く〳〵」
追手でも恐れてゐるやうに、うしろが顧みられた。
「へい、唯今」
はア〳〵息が切れ、足はもげて了ひさうだつた。跳び乘つて腰かけると、尻の肉がジインと痛かつた……。
梶棒をあげながら、
「どちらへ？」
「こかアどこだ」
「御冗談で……」
「まアいゝや、もうちつと呑ませろよ、酒さい呑ましてくれるうちならどこでもいゝや、どこいでもつけてくれ！」
「……」
「ぢア、兎も角歩いてくれ、挽きだしてくれ、駈けてくうちに俺がどつかみつけらア」
「旦那、さう仰有つたつて、どつち向いて駈けだしていゝんだか分りませんやね—」
「ぢア、なんだア、……さうだ、仕樣がねえ、銀座だ—」
けれども、突然の運動で、またぐらツと醉が發して來た。幌のうちから飲み屋を探すところではなく、目をつぶると、ぐーん〳〵と唸をたてゝあたまの壁が廻りだした。
「おい、ほんとにこゝはどこだよ」
と、俥夫に訊いてみようと思つたが、それだけの口を利くすら億劫だつた。ぢツと、あたまのなかの廻るのを感じてゐるうちに、いゝ心持に、また分らなくなつて行つた……。
「旦那、旦那！」
「兎に角……—」
「旦那、銀座へ來ましたよ」
「ぎんざ？……あゝ、銀座か。どうだい、銀座おきてるかね。……一體、今なん時頃だい」
「さうですね、まだ十一時にやアなりますまいよ」

「よし、ぢア呑まう」
「どこいつけます？」
「どこでもいゝや、成可く知つてるやつの來てゐさうもないとこがいゝや」
「てえますと……？」
「だから、どこでもいゝから、俺の知られえやうなところへつれてつてくれよ」
「困りましたな」
「解らねえなア、つまりよ、裏通りのへんてこな、あんまり人に知られえやうなうちがいゝつてこえんぢアねえか」

三

伸はまた、搖れながら動きだした。日本酒の匂が、ふうんと鼻に來た。こいつはちつとこたへるな、と思つた。
「おイ、ウヰスキイがいゝや、ウヰスキイ……」
「ぢア、カフェエにしませうか」
「感心！　すぐカフェエと出るやうなら大したもんだ。是非そのカフェエで、ウヰスキイを……」
もう一度わからなくなつて行つた。
それから、今度は急に狹い酒場にゐた。顋の角ばつた、然しちよいとした女を、信之の醉眼が捉へた。

「おい、君、君、君！　伸夫どうしたい？」
「もう厠に歸りましたわ」
「酒のんでつたかい」
たゞ笑つてゐた。
「君やア齒並が綺麗だな。こつちい來ないか。これ、半分つ呑まう」
「えゝ、頂きませう」
つゝとそばへ來て椅子にかけた。
「君やアこゝの女給さんぢアないね？」
「あら、どうしてです？」
「呼ばれて、一遍ですぐそばへ來てくれるなんざア、失禮だが、雇人ぢア出來ねえ藝當だよ。なんだ、女將さんか、女將さんの妹か、それとも親類の娘か」
「雇人です」
「嘘つけえ？」
半信半疑にさう云ふと、何故かその言葉に繋がつて、思ひ出されることがありさうな氣がした。
「嘘つけえ……」
もう一度さう云つて、ぐたりと卓によりかゝり、両手で頭を抱へた。
「あら、駄目よ！」
白へンキで塗つた安つぽい卓の上を、琥珀色の液體が、盛りあがつて流れて來た。

「もう一杯！」
「いゝえ、もうおよしなさいね」
「もう一杯ツきり！　それを君と半分つ呑むんだ。いゝだらう？」
「いゝえ、もういけません！　それより、そこらまであたしが送つてつてあげますから、あなた、もうお歸んなさい」
「どこい歸るんだい」
「おうちへさ」
「いやだよ」
「ぢア、あなたに帽子を買つてあげるから、あたしと一緒に銀座までいらつしやい」
さう云ふ言葉を、信之は、ぢツと目を据ゑて見詰めてゐたが、
「ぢ、どう云ふんだい、帽子を買つてくれるつてのは、一體どう云ふわけなんだい」
「あなた、帽子をどつかに落して來ちまつたこと知らないんでせう？」
「さうかい、かぶつてゐなかつたんなら、それア落して來たんだらう。それアいゝが、何故お前さんは、帽子を買つてくれるくらゐの親切があつて、ウヰスキイ一杯のませねえんだ！」
「呑ませてもいゝけど、そんなにあなた……」
「醉つてたつて、迷惑はかけねえよ」

外套の胸を押し開いて、懐中に兩手を差し込んだ。衣紋がくづれて、襯衣を着ない肌が、蒼白くむきだしになつた。

「おや？　おや〳〵？」

「あたしがお預りしてますよ」

ポンと帶の上から叩いてみせた。

「なアんで、道理で帽子を買つてやるのなんのつて、いやに氣前がいゝと思つた」

女給たちや、彼方の卓の客からも、笑ひ聲が起つた。

四

けれども、たつた一人、その布哇あたりの土人によくあるやうな、半月形に長く引いた眉や、大きなぱッちりした目もとに、やゝ可怕らしいほどの野蠻美を備へた女だけが、堅く一文字に唇を結んでニッコリともしなかつた。眉間に氣むづかしげな縦皺をよせて、ぢッとその女の目を見返してゐた信之は、何かしら、そこに深い同感が感じられて、急に氣持が引き締つて來た。

もし生醉の程度だつたなら、初からはたの者を笑はせようとしてかゝるほどではなくとも、うつかりやつたのが、存外そこに樂しい笑聲でも起せば、つい圖に乘つて、續いてなんとか樂りを考へるやうなおツちよこちよいに陷り、なかに一人すまし込んでゐる者などがあれば、「なんだこん畜生、生意氣な！」くらゐな反感を抱かせられたかも知れない。ところが、信之の醉は、彼のあたまから、夙にそんな遊びを追ひ出してゐた。泥醉者の生眞面目は、はたの笑聲などには亂されずに、いきなり眞面目くさつた女の目に惹きつけられて了つたのだ。――一目で、そこに、僞りのない好意を讀んだ。

外套の袖をはねあげて、いきなり女の手を摑むと、力いつぱい握りしめた。その握力以外には、「有難う」も「サンキュウ」も「メルシ」も、彼の心の云ひ表しには全く役に立たないものに感じられた。その代りまた、それでお仕舞だつた。それにつけ加へるべき何ものもなかつた。時が永びいてすらいけなかつた。――默つて立ちあがつて、改めて指に力をこめて打ち振りながら、

「ぢア、さよなら」

「お歸りですか」

女も立ちあがると、靜に手をほどいて、帶の間から信之の財布をぬき出し、少しも悪怯れずに、はだかつた內懷ふかく押し込んで、あとをきちんと襟を合せてやつた。

「ヨウ、色男！」

客のなかに、きな臭い嗄れ聲をあげるものがあつた。待ち構へてゐたやうな笑が、その叫聲の尻を掠めて湧き起つた。

「お美津ちやん、御馳走さま！」

「いゝぞ〳〵、とても素敵だぞ！」

續いてそんな風に囃したてたり、指さきを口に銜んで、鋭い口笛の音をあげたりするものがあつたが、日頃のてれ性にも似ず、信之は平然と構へてゐた。

「いくらだい」

「近いうちに、また是非いらしつてください、そんとき御一緒でよござんすから」

女も落つき拂つたものだつた。

「その代り名刺を一枚いたゞきましたが、いゝでせうね？」

「いくらだよ」

いま折角しまつてくれた財布をまたも摑み出して、あやしい手つきで、五圓札を一枚卓の上に置いた。

「この次の時でよござんすつてのに」

「この次〳〵つて、一體こゝはどこだい？」

「分らない？　ぢア、銀座通りまで送つてつてあげるわ」

「斷るよ。……これで足りなきやア……」
信之が、また財布の口をあけかゝるのを、女は、手早く制めて、懐中させながら、
「もう澤山々々！　三圓八十錢ですから、ぢア今おつりを……」
「要らねえ〳〵、ぢアさよなら、また來るよ。俺アお前さんが好きになつたよ。兎に角、……嘘つきはいけねえが、お前さんは正直だからいいや。ぢア、さよなら！」
もう一度手を振つて、それから信之は、ひよろひよろとおもてへひよろけ出た。

五

「あら、どこへいらつしやるの」
砂利を踏んで、左にひよろけたまゝ、ふらふらツとそつちへ歩きだすと、うしろから、カフェエの女に聲をかけられた。振り向いて、四尺ほど觀音開きになつた出入口の硝子戸ごしに、うちから射す明るい光を背負つて、影繪になつて立つてゐる姿を、暫くぢつと見てゐたが、
「お前さん、名はなんてんだ」
「美津枝」
少しもためらはずに答へてから、「あなた、そつちへいらしつちア木挽町の方へ出ちまひますよ」
「木挽町？　ほんとうかい」
「駄目ね、そんなことぢア、とても紀尾井町まではむづかしいわね」
草履をぺた〳〵鳴らしながら、そばへよつて來て、外套の袖を捉へると、「俥をさう云つてあけますから、乘つていらつしやい」
「紀尾井町？　なんでえ、どうして、お前さん、俺ンちを知つてるんだい」
「ですから、名刺を頂きましたつて云つたぢアありませんか」
「あゝ、さうか……、お前さんの名前、なんてつたつけね」
「美津枝」
「うちの名は？」
「カフェエ、シャノアル」
「なんだつて？」
「カフェエ、シャノアルです」
「えゝ？　シャノアル？　それぢアお前さんの名前は、美津枝さんてんぢアないかい」
「ですから、さつきつから、さう云つてるぢアありませんか」
「ふうん、さうかい……」
暗い夜空の下に、ほの〴〵と浮んだ女の顔へ、さしのぞくやうに近々と目をよせて、もう一度、……ふうん、さうかい」
「どうして？　なんか……」
「へーえ、お前さんが黒猫屋の美津枝さんかい。こいつアどうも……、ぢア、さよなら」
「また〳〵！　そつちへ行つちア駄目ですつてのに。銀座に出るんなら、あつちですよ」
「だから、こつちが木挽町だらう？」
「えゝ、だつて……」
「さうかい、美津枝さんかい。そいつアちつとも氣がつかなかつた」
「あら、へんねえ」
「然し、お前さんならいゝや、お前は正直でいいや」
「なによウ、氣ンなつちやふわ」
「いーえいえ、ちつとも氣にすることたアないんだ。どうもいろ〳〵お世話さん……」
また歩きだすと、
「あなた、駄目ですつたら。あたし呼んで來てあげますから、やツ張りお俥になさいな」
「なに、もう見當がついたから大丈夫。これを眞直に行つて、橋を渡れアすぐ木挽町……一丁目だらう」
「えゝ、さうよ。でも、あなた……」
「そウれみなさい、だからもう大丈夫さ。ぢア

さよなら。どうぞよろしく」
「あら、どなたに？」
「間違々々、今のよろしくは間違だ。……でも、女将さんの一番すきな人に逢つたら、さう云つてくれてもいゝや」
振り向きもしずに、そんなことを云ひながら、ふらり／＼とあぶなつかしい歩調を運んで行つた。ぢツとその後影を見送つてゐたが、氣がつくと、いつ歩いたともなく、店の前から七八間も離れたところに佇んでゐる自分を見出して、美津枝は、ひとりでクスリと笑つた。

六

「兎も角、嘘をつくなアよくねえや」
暫くはぼうとして、たゞ、いやにガクン／＼する重い足を引摺つて行つたが、ふとその言葉が唇を滑り出して來たのに、信之は、我ながら（おやツ）と思つた。舌に泥みがあるばかりでなく、それに繋がつて引き出されて來さうな記憶も、つい緒だけは、黒い渦が卷いてゐるやうなあたまのなかにちら／＼と見えがくれしてゐた。
爛々たる大眼玉を光らして、自動車が前方から走つて來た。プツリ、プツ／＼、プツリ、小砂利の上に、南京豆が破裂るやうな音を殘して、夜目にもしるく、もう／＼と埃を捲きあげながら通りすぎて行つた。信之はあぶなく道ばたに身を避けて、
「畜生！　假令何がどうあらうと、嘘をつくなアよくねえぞ！」
さう叫んで、自動車を睨めつけたが、急に醉漢らしい高笑ひになつて、またひよろ／＼と歩き出した。それで、出かゝつた記憶の緒も、そのまゝ絕たれて了つた。
曲り角の度に迷つたり立ち停まつたりするやうなこともなく、――よそ目にはまるで足にまかせた當ずツぽうのやうに、だん／＼と切れ込んで行つたのは、もう人通りも稀な、木挽町三丁目の裏通りだつた。がツくり首を垂れ、手は懷に、外套の兩袖もふら／＼と、駒下駄の尻を引摺つて、更に細い横町へ曲るなり、角から二軒目の、小ぢんまりとした屋根門のくゞりのある扉へ、いきなりどさんと肩からさきに身體をぶツつけた。
「オーイ」
それでも、近所を憚る心か、いくらかはかすめた、然し決して小さくはない生得のどす聲で、
「寢ちやつたのか、オイ！……お直さん……」
それで、ちよいとの間聞き耳をたてたが、コトリとももの音のしないのに、不承無精右手を出し、ぐつたり凭りかゝつたまゝの扉へ、續けうちに七つ八つ握拳をあてながら、ふと、念のため、と云ふ風に、上目づかひに表札を見あげた。丸火屋の軒燈の火影に、小さな木札の、武井富と、まだ墨色も新しく、信之の醉眼にさへ、あり／＼と讀まれた。
「オイ、お直さん、あけとくれ！」
「どなた？」
五十がらみの女の、しつかりした聲だつた。すぐそれに縋りつくやうに、
「俺だよ、……あたしだよ……」
「あら、紀尾井町さんですか」
「さうだ／＼、早くあけとくれ」
「ちよいとお待ちくださいまし……」
貼りついたやうになつてゐた扉から、漸く身を起して、信之は、性急に、くゞりの取手に手をかけて、ガタ／＼やり始めた。
「唯今すぐあけます」
玄關の障子、格子、雨戸と、順に内からあく音がし、二足三足庭下駄が鳴ると、すぐもうくゞりの鍵がはづされた。待ちかねて、信之がバタンと押しあけはいらうとして、蹈むと、急に目の前がクラ／＼とした。

「あぶない！」

うちから手を貸さうとする隙もなく、框に足をすくはれて、見事に石鋪の上へ、ドンとのめつて了つた。

「まア、あぶないこと……」

すぐ元気よく跳ね起きると思つたのが、案外、そのまゝベツたり腹ン這になつたきりなので、女は、あとをしめて置いて、肩に手をかけながら、「どこかお打ちなさいましたか。ねえ、もし・・」

七

けれども信之は、起きあがらうともしず、聲もたてなかつた。

「どうかなさいまして……？」

やゝ不安らしく、顔をさし寄せると、ぷうんとアルコオルの匂ひがした。「まア〳〵、大へんめしやがつていらしつたんですね」

却つてそれで安心して、女が抱き起さうとすると、信之も両手を突ッ張つて、花崗石の甃石から、上半身だけは離したが、そこで微に首をふつて、いや〳〵をした。

「お苦しいんですか」

うッ〳〵と、息をつめて唸り、猫背に丸まつたと思ふと、咽に異様な音をたてゝ吐き始めた。

「あら」

それは殆ど口のうちに、寝間着の胸のあくのも構はず、横からしつかりと抱き据へ、かすめたとは云へ、可なりの大聲で、

「ちよいと！　早く、来てください！」

それと同時に、梯子段をしとやかに、けれども急ぎ足におりて、玄關の框の下に立つたのは、よし野の女将の妹、お滋だつた。

「どうかなすつたの？」

階下の気勢を聞くなり、すぐ普段着に着更へてゐたところとみえて、羽織の片袖を通し乍ら、おもての容子をすかして見ると、躊躇はず沓脱ぎから素足のまゝおり立たうとしたが、その時きッと顔をあげた信之に、

「いけない！　来ちアいけない」

と、まるで叱りつけるやうに、嚴しくきめつけられて、思はずお滋は、ぴたりと足を止めた。

見ると、信之は、まッ蒼になつて、ギョロリと目を瞬いてゐる……。

「……………」

「ちよいと、手をかしてよ！　一人ぢア……」

「でも……。ね、行つてもいゝんでせう？」

「いけない！　断然いけない！」

「ぢアね、お滋さん、おひやをもつて来てくださいな、おひやを」

「要らない！　それより灯をくれないか、燐寸でもなんでもいゝ……」

「はい」

たゞならぬ顔色に、お滋は、なんのためにとも解らぬながら、気を呑まれて、早速奥へ、駈け込んで行つた。そのまに信之は、吐いたものを前に、きちんと花崗石の上に正座した。

「有難う、もう大丈夫！」

さうは云つても、暫く目をつぶつて、肩でついてゐる呼吸の早さが、尋常ではなかつた。

「さ、あなた、早くうちにはいりませう」

腋の下から手を入れて、引き立てようとしたが、どッしり構へて首を横に振る容子には、少しも酔漢らしいところなどはなかつた。

「ちよつと待つて……いま、……今すぐ……」

そこに、お滋が、燭台を持つて出て来ると、

「お直さん、あなたあれを受けとつて、……そいで、お滋は……、お滋さんは、出て来ちアいけない！」

云ふがまゝに、お滋の義理の叔母にあたるお直が、琺瑯鐵器の手燭に火をともし、片手で風を遮りながら戻つて来ると、信之はそれをうけ

とつて、

「ちよいと汚いものを見るんだから、二人ともそつちへいつちまつて、戸をしめといてくれないか」

「あなた……」

「ま、いゝから、あたしの云ふなりになつてゝください！」

仕方なしに、玄關にはいつて、うちから雨戸をたてきつて了つた。

八

星影まれに、風もおちた大空の下に、大都市の夜は、いま沈々として更け亙つた。……信之が右手にかざした裸火の火先は、とろ〳〵と延びあがりながら、霜に凝つて、ほのかな虹をゆらめかしてゐた。

……魚の腐りかけた臓腑を思ひ出させるやうな、なんとも云はれず腥い匂ひが、うツと口腔いつぱいに突きあげて來たとき、信之は全身の血が一時に冷めて行くやうな氣がした。

(たうとう……！)

健氣にも、すぐさう觀念はしたものゝ、しつかり見定めるまではと、まだ一縷の望みは捨てなかつた。下ッ腹にうんと力を入れて、今その決定の瞬間に臨まうとしてゐた。

……靜に、じり〳〵とさげて行つた視點を、膝から二尺ばかりさきの、甃石の上にきツと見据ゑた。薄濁つた液體のあちこちに、三箇所、耳ほどの大きさに、どろりとしたチョコレエト色の塊が散つてゐた。

「あ！」

思はず聲が洩れ、だしぬけに頭をがアんと云ふほど打ちのめされたやうに、ふら〳〵ッと眩暈が來た。けれども信之は、その時、うツと息を詰めて、もう一度下ッ腹の力を入れ直した。二三秒さうしてゐてから、瞬つた目と灯とを一緒に、汚物の上に近よせた。……そこに見たものは、紛ふ方なく、七年前に父の信榮が、枕の上から縁に首を傾けて、日に何回となく金盥のなかに吐いた、あの鵜膽の排泄に相違なかつた。慘しい心で、幾度それを金盥にうけたことだらう。七年が十年三十年と經ようとも、その色、その匂ひ、──烙印のやうな記憶が、少しでも薄れて行かう筈はない、──信之は、からりと手燭を投げ出して、兩手に額を埋めて了つた……。と、玄關の雨戸があいて、お澄と叔母とが跳び出して來た。

「あなた！」

「兎も角、お澄ちやん、うちへ……」

兩方から腕を把つて引き起されると、信之は、戸の隙から末廣がりに射して來る玄關の灯を見詰めたまゝ、無表情な顏つきで、

「なんでもない〳〵」

と呟いて、足は運ばずに、把られた腕を振りほどかうとしながら、「待つてくれ、ちよいと汚いものゝ始末をして行くから……」

「そんなこと……」

「いゝえ、僕が自分でしなくつちアいけないんだ」

「よござんすツたら！　さア、おとなしくうちへはいつてください！」

叱りつけるやうなお澄の調子だつた。

「いや、だけど、好きだから……」

「いけません！」

信之は、早くもの、影が戻りさうになつて來た眼差を、お澄に向けた。ちよつと見交してゐるうちに、蒼白い頬にも微な笑が浮んで來た。

「えばるんだねえ……」

「世話をやかすんぢアないの」

お澄もにツこりして、「さ、うちへはいりませうね」

「だけど、ちよつと……」

「そんなに氣になるんなら……。叔母さん、す

みませんが、あなたちよつと……
「えゝえ、今すぐあたしが綺麗に始末しときますから」
信之がまだ何か云はうとするのを、
「どうしてあなたはさう強情をはるんです」
と云ふとお澄は、片手を背なかに廻して、力のかぎり信之を玄關へ押し込まうとした。

九

信之には、急に意地も張も云つてゐられないやうな疲勞困憊が來た。お澄の手に支へられて、足袋跣のまゝ玄關にあがり、外套や襟卷をかなぐり捨てると、六疊の茶の間へひよろけ込んだ。

一時に醉がさめて、彼のあたまは、いま寒いほど冴え返つて來た。……不思議にも、然しそこには、現在の醫學の力でどうすることも出來ない難病が、既に彼の胃を侵し始めてゐると云ふ恐しい、むしろ絶望的な事實に對して、直接の憂慮や煩擾の影は少しもなかつた。一つにはこの結果が、決して思ひもかけない、と云ふやうなものではなく、二三年前から醫者にも注意され、自分でも、晩かれ早かれ……、とは、凡そ觀念してゐたところだつたからかも知れない。母方の祖母と叔父、續いて父の信策と、親い血族のなかから三人まで癌で斃されてゐる。癌腫の遺傳が、今日の醫學では、まだ不確定な事實だとしても、信之はもとより、醫者に云はせても、それを考慮に入れないわけにはいかなかつた。そのうへ、三四年前までは、これも父親に似て、二升までの酒ならば、翌朝の胃に、さしてこたへなかつたものが、三十三と云ふ年齡から、急に酒量もへり、少し無理をすると、あとで必ず嘔吐する癖がついて了つた。けれども、祖母と父は七十を越し、叔父にしても四十二の厄までは保つたのだから……、と云ふやうな、頼みにもならないことを頼んだり、恐しい宣告を聞かされるのが可厭さに、いくら友達や家人に勸められても、どうしても本式に醫者の診察をうけようとはしなかつた。……さうは云つても、人の世の不思議な魅力には、死もなほ厭はしめないものがある。あながち頼み難きを頼み、眞實を怖れる心ばかりが、信之の攝生を妨げてゐた、とは云ひきれない。短い命にも代へがたく、彼には欲しいものがあつた……。

「お澄さん」

疊の上に、刻煙草の一つまみが落ちてゐるのを、指のさきに吸はせて、火鉢の灰のなかに拂ひ落すとかなんとかしなければ氣がすまないやうな、視力の明かさだつた。空を渡る風の強さに、空中の水蒸氣が吹き散らされて、物象の輪廓から、悉くその柔かみが失はれた日のやうな、すさまじいばかりに、ぎす／＼と鋭いあたまの狀態だつた。——不治の病が、既に我身にとりついてゐると知つての、一種の亢奮ではあらうけれど、その時信之のあたまに浮かんで來たのは、途次いく度となく繰返した、「兎も角嘘をつくなアよくねえや」だつた、その言葉の內容だつた。

——その晩は、帝國大學の英法科を同期に卒業した舊友の新年會で、龜島町の支那料理屋に十二三人の會食があつた。普段會嫌ひの信之が、ふと久振りの友達に逢つてみたくなつて出席してゐた。酒が酣になつてから、ひと塊道樂仲間ばかり集まつてゐた席で、「よし野」と云ふ言葉が、二三度繰返されるのが聞えた。信之は、ふと聞耳たてずにゐられなかつた。

「なんてつたつて腹違ひだからね、そこは女將も水臭いやね……」

こんな言葉が聞えて來ると、信之はもうぢつとしてゐられなかつた、何氣なく立つて、その一塊の放蕩ものゝ仲間に割り込んで行つた。

「なんだか由ありげなひそ／＼話だが、よし野

と云やア、おもんさんのとこだらう？」

十

と云ふやうなことで、だん／＼訊いてみて、信之は、自分の迂濶さ加減に呆れ返らなければならなかつた。が、それで、自分を嘲嗤つて了へない彼だつた。自分だけの間抜な立場は、滑稽味もあつて、そんなに悪い氣持でもなかつたが、しら／＼しくも嘘を並べてゐたお澄だと思ふと、矢ッ張り腹はたつた。

……あの、初雪の日から中二日隔いて、歳尾もぐッと押しつまつて來た或る晩、愛宕下の歳の市に出かけようとしてゐるお澄、お勢、それにその時が初對面のお直と、から三人づれで、熱い飲料や菓子でも、とはいつて來た店つゞきの薬品部の方には、風邪心地の、ピラミドンを買つてゐた信之が、偶然にも、こみ合つた客のうしろにぼんやり突つ立つてゐた。すぐ聲をかけ合つて、一緒にそこでひと休みしてから、誘はれるまゝに愛宕さんの市にもつき合ひ、歸りがけには、また銀座まで送つて出て、吉田で蕎麦を食つて別れた。そこでふと出た芹花の話から、正月の三日の晩、丁度、瀧十郎の出てゐる芝居の喫茶店で、高脇の同人たちとよつて、信之の噂をしてゐた時などには、約束通り、木挽町二丁目の、ついよし野とは背なか合せの裏通に、始めてお澄を訪ねて來たのだつた。

マッチ箱ほどの裏長屋と聞かされて、——もとよりそのまゝ信じもしなかつたけれど、別戸を構へてゐる理由が、第一よし野には部屋もなし、年中あんな騒々しいところにもゐられないから、と云ふやうな話だつただけに、信之も、お澄と叔母のお直とが、女世帯らしく、瀟洒とはしてゐても、ほんの假住居の、小體に暮してゐるものとばかり想像してゐたのに、來て見ると、決して廣くはなかつたが、それも場所柄としては相應に間數もあり、二階二間はあとから載せたお神樂には違ひないにしても、木口なり手間なりに、おろそかならぬ心遣ひや、ギラつかないほどの金目も見えて、よし野の内裏がどれほど豐かには知らないが、兎にも角にもちよつとした小料理屋の女將の妹が住むにしては、贅澤すぎると云へる家だつた。それでも信之は、疑ひの「う」の字もあたまにもたたなかつた　。

その晩は、骨牌に夜を更かして、いろ／＼に引き止められるのを、振り切るやうに、一時頃俥を云つて貰つて歸つたが、言はず語らず、信之には、女の心が嬉しく讀めてゐた。……その後まだ二十日とは經つてゐなかつたけれど、その居心地のいゝ二階で、奥の水神で、逢ふたび毎に、逢ひたさのつのつて行く二人になつてゐた。寢物語に、どうしたつて出なければならないのは、お澄の過去だつた、そして現在だつた。

兩親には夙く別れ、金錢上では姉おもんの、——身のまはり、躾、稽古ごと、そんな方面では叔母のお直に、一方ならぬ世話になつて人となり、十九の年齢に、仲に立つ者があつて、濱町の方の病院に勤めてゐた醫學士のもとへ縁づいたのだが、仔細があつて、一年とはゐないで歸つて來た、——と云ふのが、信之が聞かされてゐる限りの過去の物語りだつた。そして現在は……？

「この年齢になつて、相變らず姉さんの厄介もんですわ。どうせもうこんな疵ものですから、お嫁に貰つてくれる方もありやアしませんし、あたしにしたつてもう懲々ですわ。厄介ついでに、一生姉さんの世話になつて、……いよ／＼食べさせてくれてがなくなつたら、まア、尼さんにでもなんにでもなつちまふんだわね」

十一

屢々そんな風に云ふのを、信之はしげ／＼と顔を見詰めながら聞いてゐた。疵ものだとも、

嫁に貰ひてがないとも、眞實尼になる氣があらうとも、もと／＼、正面の意味だけで聞ける言葉ではなかつたが、されぱと云つて、その蔭にいろいろの秘密が隱されてゐようとも思はなかつた。──むしろ思ひたくなかつた。從つて、根掘り葉掘り、詮索、尋ねこみようともしずに、つい今日まで日が經つて了つたのだ。それには、一年たらずの結婚生活の後に續いた三年間の獨身、──しみ／＼そんなことを思はせられるやうなものを、お澄の心なり肉體から感じてゐる信之として、その疑惑が、どんな言葉よりも確に、現在の彼の女を物語るやうに思はれもしたのだ。たゞ一つ呵責し／＼觸れないこともなかつたのは、どうかして信之を、よし野へ行かないやうにと仕向けることだつた。もとより、こと改めて口止めをされたわけではないけれど、一緒に暮してゐるお直のほかには、二人の仲を知らせまいとする氣持は、言はず語らず通つてゐたが、それとは別に、何かもつと特殊な意味で、姉のおもんにだけは知られたくない、と云ふ容子がみえた。姉と云ふでう、親も同然の關係ではあり、あの料亭の前にしても、酒のうへとは云へ、へんな具合な、角關係が、少しも三人の心にだけは渦を卷いたあとではあり、かたがたこんなことが知れては……、と云ふだけの意味か、或は、何かそこにもつと深い經緯でもあるのか、それは信之には解らなかつたけれど、兎に角よし野へは絶對に行つて貰ひたくなささうだつたし、滅多に逢ふことすら、延いてはおもんとの交渉が生じると思はれるらしく、なんとかかんとか云つてはよさせるやうにする、と云ふ風だつた。

ところが、その頃、同級會の席で、或る商事會社の支配人で、吉田と云ふ、若手ながら相應に顏の賣れた實業家の口から、圖らずも信之は、お澄の今の身の上について、思ひもかけない事實を聞き知つたのだつた。その云ふところに依れば、おもんは昔から有名な手とりで、つい四五年前までは、維新の元勳、田島伯爵の寵愛をうけてゐたのだが、伯の死後、少からぬ財物を贈られて廓内の稼業を去り、ほどなくよし野を始めたのだと云ふ。それにしても、有るにまかせて、大がかりな待合などに手を出さず、全財産の何分の一と云ふぐらゐな資本で、小體な料理屋を始めたところなど、いかにもおもんらしい利口なやり口だ、との評も出た。その、料理屋と云ふ思ひつきも、有名な食道樂で、廓内に馬鹿らしいほど廣い庖廚を設け、料理人とも一流の料理人を[illegible]てゐた故伯の在世中から、[illegible]に通じてゐた若い天狗の料理番[illegible]出て、わ[illegible]手足のやうに働かせようと云ふ、色と慾との二[illegible]かけたもの[illegible]だつたが、その料理番は、[illegible]して[illegible]ないうちに、おもんと烈しい口論をした揚句、自分から[illegible]と出て行つて了つたので、今のよし野の料理は、なんの特色もない平凡なものになつてゐたが。

若い頃に[illegible]いたおもんは、なほその上に、よしや[illegible]の後[illegible]と噂されるやうな、相應な實業家の三人までももつてゐた。[illegible]は云へ、妹の一人や二人、別に家をもたせて、一生ぶら／＼好き勝手をさせて置いたところで、びくともするやうな身上ではないのだつたが、

「それを、あの婆アどこまで慾の皮を突ッ張らせやアがるんだか……」

十二

と、慾と吝嗇にかけては、學校時代から[illegible]してひとに負けない方だつた吉田でさへ、そんな風に言つて憤慨したほどで、おもんは、[illegible]に代つて育てあげた恩をかさに着て、お澄の身體で、資本も利もとりあげようとかゝつたのだ、と、[illegible]吉田の話ではさう云ふことに[illegible]町の[illegible]醫者と云ふのが、これまた[illegible]に似

合はず、おもんに輪をかけた慾ばりで、慾ばりだけが知つてゐる慾ばりの灸所から、うまく／＼と、有繋のおもんも一杯くはされ、一旦は大事なお澄をくれてやつたのだが、あとでだん／＼の嘘がはげて來ると、忽ち引き戻して、その後は自分の目の屆くところで妾をさせてゐる。今の旦那と云ふのは、天下の實權を三分し、自ら進んで經濟界の鐵を掴んだと云はれる故田島伯の乾分の一人で、株式取引所創立の當時から辣腕を揮ひ、今では世に聞えた大實業家になりすましてゐる窪井謹五郎だつた。

「ふうん」

と、たゞ一應の驚愕を現はして聞き過ごして置いたやうなものゝ、信之にとつて、その名は呪ひの言葉なしには口に出來ないほどのものだつた。東北鐵道の國有問題が起つた當時、いろいろの缺點はあつたとしても、清廉剛直の操行にかけては、われ人ともに許してゐた藤代信策をして、殆んど憤死せしめんとしたのは、かれ窪井謹五郎に他ならなかつた。當時まだ十歳にも達しない信之には、詳しい消息は解らなかつたけれども、要するに金の問題だつた。東北鐵道ほどの大會社が、清算事務の帳尻を合す前には、あゝでもよくからでもいゝと云つた性質の金だけでも、決して馬鹿にならない額だつた。問題が、それの處分方法にかゝつてゐたことは云ふまでもないが、信之が眼前見たところのものは、若い頃にあぶなく偏一狂の本式な患者になりかけたこともあるほどの一本氣で、日夜々、憤慨憂悶を重ね、こんなことが永く續いたならばと、母親はじめ一家のうへに、明るい光が鎖されてしまつたほどの、――その頃の父信策の姿だつた。後年信之は、芝居で、仙臺萩の外記とか、あれに類する役をみると、その頃の父の姿と結びついて、はたの人には解らない涙が、止めどもなく落ちて來て、これにはいつも困らされたものだつた。最後の會議に、取締役の辭表を懷に出席した信策は、激論數刻に亙つたのち、窪井を目がけて椅子を投げつけると云ふ狂態まで演じた。もとより社長の前に、續いて辭表も突き出されてゐたのだが、調停に立つ者があつて、信策も我を折り、表面だけは、最後の清算事務を終るまで、書類の調印にも與つたが、窪井一味のものが私腹を肥した、その何十分の一と云ふものも、信策は懷に入れなかつた。

さう云ふ、背徳一生消すことの出來ない記憶のからみついた窪井謹五郎だつた。背景に少し大袈裟に云へば、親の仇だつた。人もあらうに、選りもよつて、その仇が、お澄の旦那だらうとは……。

いゝ加減に廻りかけてゐた信之は、それからがぶ飲みを始めた。老酒と日本酒とをちやんぽんに、めちやくちやに飲んだ。例令どう云ふ動機からでも、――と云ふのは、好意から出たこととは信じられるのだが、それにしてもお澄が、一切さう云ふ事實を隱してゐたことは、氣に入らなかつた。その腹立が、深くあたまに滲みついてゐたものとみえて、前後不覺に醉が廻つてからは、「例令何がどうあらうと、嘘をつくなアよくねえや」が、脣から盃を離しさへすれば、口癖のやうに、幾度となく飛び出して來たのだつた。

十三

長火鉢の前で、兩手を膝にきちんと坐りなほした信之は、自分の生命に、決して逃しッこない遠い爪を、ずぶりと突ッ立てゝゐる[illegible]のことなど、綺麗に忘れ果てゝゐた。茶簞笥の[illegible]島府を把つて、火鉢の向う側に來て、[illegible]り[illegible]し、器用に、すばやくつぎたしてゐる[illegible]の白い手先を、ぢツと見詰めてゐた。[illegible]しいと云へば、むしろその、ふツくらとしてゐて

それで好い、しなやかな五本の指どもこそ恐しかつた……。

「お澄さん」

　もう一度呼びかけて、また黙つて了つた。……お澄には豫感があつた。目に沁みるやうな火氣の上から、顔を擡げられなかつた。「はい」とも「なんです」とも、返事が出て来なかつた。然しそれが、──返事の出来ないことが、一番正直な返事だ、と云ふやうな、微な安心も、どこか心の奥にあつた。

「お澄さん」

　三度目には、答へる暇もなくあとを續けた。

「實はあたしは、今夜あなたのことでむしやうに腹をたてゝやつて来たんです。卑怯な話だが、酒の力をかりても、ふんと云ふだけ云つて、それッきり死んでも二度とは逢はない決心でやつて来たんです。隠してゐた、──なんにも云はなかつた、と云ふことは、理窟で云やア嘘ぢやアない、嘘をついたことにやアならない……」

「いゝえ、あたしは嘘つきです！　ですけどあたし、どんなことがあつても、あなたと別れるのいや！　それがいやだから……」

　お澄もう、正面にぴたりと視線を合せて、立派にそこまでは云つたものゝ、急に胸一杯にこみあげて来て、いくら噛みしめようとしても、眼の前の一切が、忽ちぼや／＼と霞んで行つた。……今夜こそは、いや／＼この次に、と心弱くも延ばし／＼して来たことばかりが悔まれた。こんなことをしてゐるうちには、おそかれ早かれ、どこからか信之の耳にはいることも、その曉の自分の立場も、重々承知はしてゐながらも、あんまり素直に、恰ど子供のやうな單純さで信頼されてゐるにつけ、つい／＼打ちあけにくゝなつて、……たうとう恐れ／＼てゐた今夜が来て了つたのだ。どこまでも自分が悪い。然し、せめては悪意からでないことだけでも解つて貰ひたい。悪かつたのは、たゞ心弱さだけだ……。あゝ何故あたしは、あたしは／＼あたしは……。

「ごめんなさいまし」

　歔欷の間から、やつとそれだけ呟いて、疊の上に突つ伏して了つた。

「いゝえ、あなたが嘘つきでないのは云ふまでもないし、これまであたしに明せずに来た氣持も、よく解つてゐるつもりです。──」

　なんと云はれてもお澄には、……第一、二人きりの差向ひにさん附で呼ばれ、いつものお前があなたになり、言葉尻まで他人行儀に改まつて了つた、──その信之の心根が悲しかつた。それくらゐなら、髪毛でも掴つて引き倒し、打つたり蹴つたりされでもした方が、どんなに嬉しいか知れはしない、もうあたしの氣持なんぞ、通じても通じなくつても構ふものか、とまでにお澄は、悲しみにとりのぼせて了つた。

「これア、あなたの解つたことぢやアないけれど──」

　信之は黙然として目を閉ぢ、静かに、寂しく呟いた。「たゞ不仕合な偶然と云ふよりほかないんだが、またいかにも相手がわるかつた……宮井は、あたしにとつては、親の仇のやうな奴なんでねえ」

十四

　と聞くと、思はずお澄は身を起して、涙に濡れた眼も黒く、ぱッちりと瞠つたまゝ、頓には口も利けなかつた。その容子から、自分の言葉に氣がついて、

「親の仇も大袈裟だが……」

　と信之は、片頰に微な笑を浮べながら、

「兎に角うちの死んだ親爺とは、大喧嘩をしたらしいし、……神様の目でみたら、どつちがどうなのか、本當のことは解りやアしないが、親爺が一生涯悪く云つてた人間に、あたしとしたつて好

意のもてよう筈はないぢアありませんか。それも、たゞ嫌ひだつたと云ふだけぢアなくつて、あいつ、……一人と云ふわけでもあるまいけれど、つまりあいつ等一味の人間には、ひどい目にあはされてるんだ。おかげで親爺は、一遍に三つ四つ年をとつちまふほどの心配をさせられたんだから……。まア然し、そんなこたア、この場合どうだつていゝんです。それどころか、考へてみれア却つて仕合なくらゐなもんで、若しこれがあべこべに、あたしの大好きな人だつたりしてみたがいゝ、それこそ穴へはいつてもおッつかない氣持だらう。……が、これア今になつて、ちつと落ついて考へてからの理窟で、なんてつたつて、あなたの……なにが、窪井、と聞いた時の氣持は……」

「よく解りました」

　とまではきつぱり云つたが、急に膝の上にぽたぽたと涙をおとして、「あとは杜切れ〳〵に、

「夙くにあたしが、何もかも申しあげちまへばよかつたのに……。あたしなんぞ、もうどうなつたつて、ちつとも構やアしませんけれど、あなたに、――なんにも御存知のないあなたに、そんな……、お顏に……、お顏に泥を……、とんだことをしちまひましたわねえ……」

（まるで違つてる、そんな風に考へちやアいけない！）

　とは感じられるのだが、つい今までの、すさまじいばかり冴え返つてゐたあたまが、急にどうなつて來たやうでもないのに、なんとなく信之は、自分の云ひたい氣持が、はつきりと捉へられなくなつてゐた。さう云ふ自分自身に對しても、またさう云ふ自分へ丁度かなつた言葉ばかり並べてゐるお澄に對しても、もの足りなさや苛立たしさが湧き返つて來た。

「あなたが、自分の心に苦しく思ふのは、ちつとも無理ぢアないが、あたしは何も、あなたに詫つて貰はうと思つて來たんぢやアない。……いや、先刻までは、――醉つてた間は、詫らすどころか、場合によつちア何をしでかすか分らないくらゐの氣持も、慥にありはあつたんだが、今は違ふ、今はまつたく別な氣持だ。皮肉でも、負惜みでも、冷淡でもなんでもなしに、あなたが、もうちつとも憎らしくなくなつちやつたんだもの。あなたに惡いことをされたなんて氣持は、これんばかりも殘つてやアしないし、また考へてみれア、實際ちつとも惡いことなんざアしてやアしないんだからね。……もし惡いと云へるとすれやア、あたしを信用してくれなかつたことだ。どんなことを聞かせても、あたしがあなたを嫌ひになるの、厭になるのつてことは斷じてない、――さう云ふ氣持になつてゐてくれなかつたことだ、それだけは、あたしに云はせれば、慥にいゝことぢアなかつた。あたしはあなたに、何もかも話して聞かせたつもりですよ。お喋りだから、初めて逢つた晩から、どんどん喋つて了つたね。それは、あたしが、あなたの心を信じて、ちつとも疑はなかつたからだらう？　それだのに、あなたは……」

十五

　言葉の數を並べれば並べるほど、信之は、自分の氣持と離れて行く淋しさに鎖されて了つた。嘘つきは、お澄でなく、自分だ、――そんな反省も、微に肚の底に動いて來た。

　……一體信之が、飽くことを知らない貪慾さで、この世に探し求めてゐるものは、金でも名譽でもなく、人の眞心だつた。相手が男だらうと女だらうと、事が戀愛に關しようと關しまいと、眞心の光に接し、それが摑めたと思ふ瞬間に、この世を忽ち天國とも觀じる樂天家の彼だつた。同時に、一旦それを見失つたが最後、ひとたまりもなくぺしや〳〵に凋れ返つて、世界滅亡の秋に、たつた一人とり殘されたほどの落

莫を、どう紛らしやうもなくなつて了ふ厭世家でもあつた。嚴しく云へば、己れの心の眞だけでに、安心立命の得られない弱蟲だつた。もう一度云ひ換へると、自分の心をむきだしに、この世の風に晒して置けない寒がりで、常には自分からそれ相應の衣を着けてゐながら、裸な心の温みばかりを戀慕ひ、それに觸れゝば忽ち天上、それを失へば即ち地底と、他愛もなく心魂を搖り動かされて、一生を泣いたり笑つたりして送る凡衆の一人に過ぎなかつた。

……けれども、今の場合、信之の眞心は、お澄の眞心に疑ひをもつてはゐなかつた。そのくせ、人もあらうに窪井の妾だつたことを、今日が日まで祕し隱しにかくされてゐたと云ふ表面の事實には、どうしても拘らずにゐられない氣持も慥にあつた。何を聞いても、少しも心を煩はされずに、默つてお澄の眞心に觸れ溫まつてゐる、と云ふやうなねびまさつた心にもなれず、さうかと云つて、一時の憤怒に前後を忘れて、かツと取りのぼせて了ふほどの若々しい熱情も、酒の醉と共にさめ、そのうへ不治の病が巣喰つてゐる身と知つた今となつては、掻き立てやうもないほどに、さむ〳〵と白け切つて了つたのだ。

……信之には、心で立派に宥してゐる人に、口で出鱈目を云つてゐるやうな、中途半端な自分自身が、だん〳〵はつきりと感じられだして來た。……つまり、それは自分のと云はず、お澄のと云はず、眞心と云ふものに信據する心の怠りで、また力弱さだつた。信之としては、生活の心棒のぐらつきだつた。

……そこへ氣がつくと、疲れ果てた精根も、急にぎり〳〵ツと引き締つて來た。

「だけどもう、これツきりこの話はよさう」

と、言葉を續けて、「なんにも云はないでも、なんにも訊かないでも、お互の心の底はよウく解つてるらアね、ね、ね……」

がつしりした如輪の長火鉢を、兩側から押しつぶさんばかりの力が、思はず腕に走つて、軀が微に震へて來た。

「あたしもう、これきりお目にかゝりませんわ……」

はつきりと、袖のなかから洩れたこの意外なひと言に、信之の胸を衝いた。——とは云へ、昂まつた彼の心には、言葉は、その表面の意味を運んで來るだけの道具ではなくなつてゐた。

「弱いよ、お澄！」

「いや〳〵いや！　弱くつてもなんでも、もう決してお目にかゝりません。歸つてください、今すぐ、歸つてください！」

靜に立つて、信之はお澄のそばに坐り直すと、泣く音をたてまいとして烈しくうち震ふ胸を膝へ抱きあげ、兩手にぐつと力をこめた。忍びかねて、お澄は、子供のやうに聲をたてゝ泣きだして了つた。

十六

急に、信之の心の眼は明るみ亙り、清い涙に潤つた……。

「解る、解るよ、よく解るよ！」

お澄の後悔は、總て己れを憎み厭ふ念ひとなつて、われとわが心にあてる鞭の音が、手にとる如く信之の胸へも響いて來た。

「仕樣がない、氣がすむまで、もつとぶつて！」

さながら、笞刑をうけてゐる軀のやうに、のたうつ脊筋をしかと抱き締め、瞑目端坐、氣味の惡いほどに蒼白んだ信之は、紋服袴のきちんとした裝だけに、深更の冷い空氣のなかに、現世のものとは思へないくらゐだつた。寅の八白と云ふ星の勝氣から、お澄の、己れに加へる鋭い鞭の下に、覆ひ被さり、とも〳〵にその痛みを忍ばうと、懸命に力をこめて齒を喰ひしばる、

と、何に捧げる禮心か、有難涙がはら〳〵と落ちた。

「もうい〻〳〵！　ね、もう氣がすんだらう？……」

ほつとつく息も斷ずむばかりに、

「あたし惡い人、惡い人、ほんとにあたしは……」

「う〻ん、ちつとも惡かアない！　俺が云ふんで氣がすまなけれア、よウく自分の心に訊いてごらん！　眞心にだよ。今お前を虐めてるのは餘計なやつだよ、へんなやつだよ！　眞心に訊きやア、きつと俺とおんなじことを云ふよ！　ね、解るかい？　解るね！」

云はれてお澄は、もう一度聲をあげて泣いた……。

「ごめんなさい……」

その時、遠慮がちな、もの柔かな聲をかけて、お直が襖をあけると、伏目のま〻で、「二階が喧かになつてますから、どうぞおあがんなすつてくださいまし。更けましたせゐか、大へんお寒くなつて來ましたから、お風邪でもめすと……」

「え〻、有難う、行きませう」

「お澄ちやん」

初てそつと目を向けて、遠くから姪の方へ、（これ、お前さん）とでも云ふ風に、招くやうな手つきをした。

「よござんす、今あたしがつれてきますから……。そして、あなたも寝てくださいましね。寒いのに、汚いもの〻始末までさせたりして、ほんとにお氣の毒さんでした」

「い〻えもう、あなた……。さ、お澄ちやん……」

信之の膝からは離れたが、お澄は、そのま〻まだ疊の上に突ッ伏してゐた。

「あたしが、ついつまらないことを云ひ出しちまつたもんですから……」

さう云ひながら信之は、すなほな、てれた笑顔で立ちあがり、ちよいとお澄の肩を叩いて、

「さ、ね、二階へ行かう」

「まア〳〵、お袴をすつかり……」

お直も部屋のなかへはいつて來て、「それだけこ〻へ脱いでいらしつてくださいまし……」

「なに……」

褐ッぽいぢみな仙臺平に、ところ〳〵黑く滲んだ涙のあとをポン〳〵とはたいて、「さア、ここにゐると、いつまでもお直さんが寝られないから二階へ行かうよ」

「どうしたんですよウ、ねえお澄ちやん……」

叔母もや〻氣輕な調子になつて、うしろから抱き起さうとすると、

「いやッ」

と、急に立ちあがつて、「叔母さん、可厭！　擽つたいわ」

涙に濡れた目もとで、お澄は、優睨みに叔母を睨まへながら莞爾した。

半處女

一

丸の中に三の字を染抜いた紺暖簾の、裾長くかれこれ地面まで引いた陰から、ぬッと首だけ突込んで、

「今晩は」

「おや三好さん、お珍らしい……」

檜造りに、ちよいと手間を掛けた屋臺の奥に、磨き込んだ銅の大鍋を控へて、丸三の女房は、二重のキョロリとした眼もとに愛嬌をよせ、無雜作に束ねた縮れッ毛の額で輕く會釋しながら、「まアどうぞ、……ずッとお通ンなすつてください」

「あいてる、あいてる。珍しいな」

「い〻え、この頃は暇なんですよ。旦那お一人

ですか」
「いや」
三好は振返ると、片手に暖簾をかゝげて、「さアおはいンなさい……おでんやに恐れをなす譯でもあるまい」
「自動車、ヤッぱり待つて貰ふことにしましたよ。一時間かそこらなら構はないつて云ふから……」
そとには瀧十郎の聲で、「さア……まア……あなたから、先におはいンなさいな」
「ぢやア御免なさい」
と、髪をかばつて、身を斜にはいつて來たのは、カフェエ・シャノアルの美津枝だつた。
「いらツしやいまし」
女客と見ると、女房はさつそく表情を優しくして、暖簾ごしに裏の方に聲を掛けた。「阿父さん、縁臺を出してあげてくださいな」
「おいしよ」
車道と人道との境に、屋臺と並べて置いた丸三の印の入つた箱車から、何やら取出さうとしてゐた亭主の三吉が、附景氣の返事をした。
「とツさん、手傳はうか」
まだ暖簾のそとにゐた瀧十郎が、聲をかけて近よつて行くと、
「やア、旦那ですか、随分お久振りですね」
「どうも御無沙汰。どうです、相變らず御繁昌でせう」
「大した景氣でさア」
「そりやア何より結構……」
「景氣がいゝから、おでんなンぞ食ひてがないんで暇ですよ」
「旦那！」
と、うちから女房が笑ひながら、瀧十郎に、「そんな人の相手になつてないで、早くこちらへおはいンなさいましよ」
「當時賣出の若手俳優だと思やアがつて、喚め、いやに胡麻をすりやアがる」
「あれだ……」
女房がくツくと笑つて見せるのを、三好は一向可笑くもない顔つきで、
「いやもう、相變らずお仲のいゝこツてす。……瀧さん早くおはいりよ、うかうか相手になつてると、いゝやうに二人に遊ばれちまふよ、馬鹿馬鹿しい……」
「さうさう」
亭主はなほもへらず口を叩いて、「そこへ氣がついたところをもつてみると、三好先生もちよつと苦勞をしましたね……」
「なま[illegible]無駄を云つてゐる手間で、早く[illegible]でも出して來いよ」
「心得た」
二品、三品肴料を、屋臺の[illegible]にあたる[illegible]の[illegible]手に置いて、早速[illegible]の親[illegible]、近所の[illegible]甚商に預けてある[illegible]を取りに行き、瀧十郎は暖簾をくゞつてはいつて來た。

二

「やア女將さん、どうです……」
「いらつしやいまし。旦那、随分御無沙汰ぢやアありませんか」
「いやもうどうも、當時、かう[illegible]と成る可く附合はないことにしてますからね」
瀧十郎は、間に挟んだ美津枝の頭ごしに、三好の方を顎で指して、銚子を注いだ。
「へ、こちらに頂きませう」
女房は、縁の上から手を延してそれをうけとり、序に三好にも、
「旦那のもお預りいたしませうか」
さう云はれても、三好は屋臺の隅にぐつたりと凭れかゝつて、上目使ひにぼんやり一つところを見詰めてゐるので、「どうなさいました。大ぶんもういゝ御機嫌のやうですね」
そこに亭主が、三好のうしろから、小砂利を

がり〳〵云はせて、幅が狹くて丈の高い、へんに腰かけにくい緣臺を押し込んでよこした。

「へ、少々ごめんなさいよ。……ねえ、三好さん、いゝ御機嫌てえのは、そんなぼんやりしたもんぢアありませんやねえ。

「あゝ草臥た！　腰でもかけなきやア口を利く威勢もねえや。……さアみなさん、お手を拜借して、もうちつと前によせませうぜ……

　目白押に三人腰をおろしながら、緣臺を屋臺のそばへずらせた。顏を見るなり手早く女房がつけて置いた大阪風の錫のちろりが、すぐもうそこへ出た。三好が盃洗の盃をまづ瀧十郞から順に、自分まで取ると、やゝ場らての態で、先刻からもぢ〳〵してゐる美津枝に代つて、瀧十郞は、反對に三好の方から順に酌をしながら、

「女將さん、紹介しよう。この御婦人は、銀座のカフェエ、シャノアル、飜譯すれば黑猫亭とでも云ふ洋食屋を、御兄君と二人で經營なすつておいでなさる、柳澤美津枝孃……。いゝかい、解つたね、孃だよ、ミスだよ……」

「あら、いやですわよウ、あたしカフェエの女給なの」

　束髮の鬼ピンにしても、お召のコオトにしても、襟卷にしても、女給にしては贅澤すぎるし、女優にしてはぢみだし、藝者でもなし、奧さんや娘さんにしては、十二時過ぎに男二人とつれだつて步き廻るのもへんだしと、先刻から鑑定をつけかけてゐた丸三の女房は、成程兄妹でカフェエをやつてるとは、さう云はれてみれば、いかにもそれが動かないところだ、と肇て腑には落ちたが、それは氣振にも見せずに、

「あゝ、さやうですか。あたしはまた……」

「なんと見た？」

「あのウ、旦那とおんなじ……」

と、瀧十郞の方へ目を向けると、

「女優さんかい？……あ、これだけの女優さんがゐりやア、あつしやアすぐにも帝劇に買はれて行くね」

「あら！」

　ちよいと睨んだ目を、美津枝はすぐ三好の方へ向けて、「始まりましたよ、萩原さんの十八番が……」

「柔道で云ふと、一級とか二級とか、つまり初段になりかけのところで、やたらにお土砂が使つてみたくつてならない時期なんだからね、まアせい〳〵云はしとくさ」

「まア、お土砂の一級……」

とした面つきで、

　女房がくツくと笑へば、亭主はまたのツそり

「なんです、お土砂つてえなア……」

三

「お土砂か？　お土砂はお前……」

と、三好が、手酌でやりながら、「昔は死人の首に頭陀袋と云ふものをかけて、お土砂と、途の川の渡錢に穴あき錢……」

「それア知つてますよ。なんてつたつて、わツしアあなたより十以上も上だもの……」

「だからさ、そのお土砂は、死人の身體を柔かにするためにふりかけて、殘つたやつを袋に入れてやつたもんだらう？」

「そこまでは知らない……」

「それみろ！　つまりそこで、堅いやつにふりかけて、柔かにするのでお土砂だ。解つたらう」

「解らない」

「えゝ、強情に血の環りの惡い親爺だなア。お世辭のこつたよ！」

「いやだね、お父さんは」

と、鮪をぶつ切に拵へながら、女房もそばから口を出して、「一寸新聞を見てごらんな、六代目さんの噂に、よくお土砂〳〵つて出てるぢ

やないかね
—へん、そんなとこを見てる暇がありやア、加藤さんの演説でも讀まアなー
—へえ、お前は憲政會贔屓かい
—勿論！ わッしたつて、かう見えて、普選即行の……—
—よせやい！ 無產遊興の間違ひだらう。……
それアさうと、今夜ア蝦はないのかい
ほんの屋臺のおでん屋ながら、商賣熱心の上に凝り性な女房が、どこで誰に教つたともなく覺えて來ては、まるきり碌な食物屋のないこの四谷通りに、材料だけでも下町の一流どころにをさ〳〵劣らないほどの、おやッと思ふやうな料理を食はせてゐる丸三だつた。大木戸の友達を尋ねた歸りに、ふと飛び込んだのが緣となつて、信之は、三四年前からの、大した贔屓だつたが、或る時大阪へ行つた序に、そこでは、亭主と料理と共々に一番好きな、富久亭と云ふ小料理屋に譯を話して、丸三の女房を、夏と冬と二度に、半月ほどづつ料理見習ひに住込ませるやうに計らつてやつたこともあるくらゐで、もう近頃では、女房の腕前は、とても屋臺店のものではなかつたが、昔を忘れずに、矢ッ張りおでんの鍋は、始終ゴト〳〵と音をさせてあつた。ふりの客は、それだけ食べて行つたけれど、遠方からでも、態々自動車を乗りつけて來ようと云ふ馴染客は、はいつて來るなり、甘いものねだりをするやうなことになつてゐた。三好や瀧十郎は、云ふまでもなく信之の紹介で、迷惑なほど永ッ尻でも、まづは上顧客の側だつた。
—蝦は生憎みんなにしちやひましたが、虎魚のいゝのがありますから、このあとへ、赤だしにして差あげようと思つてるんですけど……、どういたしませう—
—赤だし結構だな—
と、瀧十郎は、そこへ出た鮪のぶつ切に早速箸をつけながら、美津枝にも、—どうぞ、一生懸命らまがつて食べてやつてください
—へえ、どうぞ、今夜のは、旦那のお好きなお腹の方ですよ
—ねえ、それア誰しも背なかの方よりやア腹がよござんさアねえ—
頼みもしないのに、いつものこととて、運轉手や助手のために、おでんをとつた皿を兩手に持ち、自動車の待つてゐる方へ出て行かうとしながら、三吉が、一面に笑み皺めた顔を振り向けて、そんな捨臺詞を投げつけた。
—助平爺！—
その三好の言葉を機緣に、若いカフェの女將を除いた三人は、どッと聲をあけて笑ひだした。

四

そのなかでも、他愛もなく可笑しがつてゐるやうに見せかけて、瀧十郎の目だけは、前に腰かけた美津枝の顔に鋭く注がれてゐた。が、生憎、丁度鮪を口に入れて、モグ〳〵やつてゐたところなので、その、娘々した豐な頬に讀みとらうとした微笑の影などは、まるで曖昧にされて了つた。もしニヤリとでもしてゐたなら、あとからそこへ話をすいゝけて、十中八九はもうこつちのものとの心の辻占も、それでおぢやんにされたわけだつた……。
初日の樂屋で、三好の前に兜をぬがなければならない事件が起りかけてゐるやうな口吻を洩したのは、實はこの美津枝のことだつた。一體三好は、ひとに誘はれゝば、敢て辭するでもなかつたが、どつちかと云へば、花柳界の女や、そこの情趣には、あまり牽引を感じない方だつた。まづ下から云ふと、底の止りは、素人と云ふ言葉で限られ、同じ素人のうちにも、處女、——處女のうちにも、十六七の娘、——さう云

ふ娘のうちにも、下町よりは山の手の女學生風、——それ以上には、學校へも通はせない深窓のお姫樣、——どうかすると、恐れげもなくまだその上の望みをさへ口外する、と云つた風で、要するに、性的に無智、無教養であればあるほど、三好の理想が滿されるわけだつた。さうは云つても、彼の氣持は、プラトニックな戀でもしようと云ふやうな、そんな淸淨なものでは決してないのみならず、なまじ人工の調味を加へられるより、庖丁一つあてないうちに、生かじりに嚙らうと云つた風な、一種の徹底したエロティシズムから出發してゐた。この强氣には、信之なども屢々壓迫に似た感じを味はされたものだ。自然に卽くと云ふ意味では、ホイットマンを思はせるほどに正々堂々としてゐながら、それを享ける心持の惡魔的な點にかけると、金錢づくで女を自由にするなどは、むしろ可愛らしい仕事とも云へるくらゐで、いつそ自然を歪めずに、有形のまゝ玩具にする。——謂はば自然のしやツ面へ靑痰でもはツかけるやうな冒瀆を、空恐ろしいとも思はない勇氣には、反感よりもさきに震撼を感じて、いつも信之は、口を噤むより他なかつた。ところが、そこへ行くと瀧十郎は、また別の意味での勇者だつた。三好の處女讚美論が出るごとに、それが空想としての價値はあつても、實際にあたれば、全く無價値なものだ、老人にその論者の多いのも、い、あたまの助けを借りようとするからで、その間の消息は、これに徵しても明かだ、三好はきつと、體力に缺けるところがあるに違ひない、などと、平氣で、靑痰の上を土足でふんづけて歩くやうな說を述べたてるのが常だつた。三好はもとより、黃口兒なんするものぞ、と云つた調子で揶揄し論駁する。——かやうにして彼等の交際が始まつて以來、最近まで、兩雄互に堅く執つて降らなかつたのだ。

それが、どうした拍子か、ふと瀧十郎が、カフェエ、シャノアルの美津枝を見染めたと云つて、遽に三好の前に兜をぬいだわけだつた。

——なアんだ、どんな大した代物かと思つたら、たかがカフェエの女なんぞ、素人が聞いて呆れらア——

一週間ほど前の或る晩、芝居歸りに、二人して鳥屋によつて一杯やりながら、初て瀧十郎からその話を聞かされた時に、三好は、一言のもとにさう貶しつけはしたが、なんと云つても自分の畠と云つた顏つきで、いつもの、藝者相手の惚話とは違ひ、親しみをもつて、自分の方から、根掘り葉掘り訊きたゞしたりした。

五

それでは早速これから二人で出かけようか、となつた時には、もう十二時近かつたので、兩方の都合を云ひ合つてみて、結局芝居が千秋樂になつた翌晩の今夜を約束して別れたのだが、

「兎に角、この件についちア、あなたは大先輩なんだから、へんなまねはしつこなしにしませうね」

と、もういよ〳〵腰をもちあげようと云ふ間際になつて、瀧十郎が、微笑ひながらそんなことを云ひだした。

「なんだい、へんなまねてえのは——」

「たつたいま、先生、なんて云ひました、——たかがカフェエの女なんぞ、とか仰有いましたね？——」

——云つたとも。市川瀧十郎ともあらう者がさ、素人々々つて大騷ぎをするにしちア、實際また、あんまり馬鹿々々しすぎらアね——

「よろしい、なんとでも仰有い！　兜をぬいだ上に、今夜から改めてあツしア素人科のお弟子入りをしたつもりでゐるんだから、どんなに馬鹿にされたつて仕方がありません。然し、あツしにア、兎にも角にも立派な素人に思へるんだ

から……」

「兄妹で經營してるなんて云つたつて、その兄貴が、どんな兄貴やら、藝者の兄さんほどにも當になるんぢアなし、勿論處女でないことは知れきつた話……」

「ちよいと〳〵、お言葉の中ですがね、まだ顏も見ないさきから、いかに大先生でも、それアさうは云はせませんよ」

「なんだい、ぢア君は、その美津枝さんとやらが、處女だとでも思つてるのかい?」

「……」

「眞からさう信じられるのかい?」

「それアまア……」

「それアまア?」

「それアなんですよ、づぶの處女とも思ひはしませんがね、まア相撲の星で云つてみれア、つまり半星と云ふやうなところで……」

「ぢや半處女か」

「さう〳〵、それですよ、その半處女ぐらゐな價値はたしかにありますよ」

「ぢアまア、それアそれとして置いて……」

「そこでだ、二十八日の晩までは、お一人でこつそり出かけるやうなことは、まさかなさりやしますまいね」

「そんなこたア僕の自由ぢアないか」

「いゝえ、それアいけませんよ! そんなあなた、素人離れの大先生ともあらう者が、お弟子を出しぬくなんて」

「出しぬくなんてわけぢアないが、たゞちよつと下檢分……」

「下檢分も上檢分もあるもんですか、そんな卑怯なまねをなさるんなら、あツしアもうこれツきり斷然絶交だ!」

「よし〳〵、それほどまでに可怕けれア、慈悲憐愍の情をかけて行かずに置いてやらう、その代りなんだぜ、その晩二人で一緒に行つてだね、……勿論君はお馴染、僕は初てだよ、それで何日僕の方が率がよかつた場合には……」

「そ、そんな馬鹿な話つて……」

「おや! 大した自信なんだね。それくらゐなら、何も態々僕を突支棒に引つはりだすことはないだらう。誰にも内證にして置いて、一人てせつせと通ふがいゝぢアないか」

「意地が惡いつて、ま、およそあなたくらゐ意地の惡い方もめつたにないね。何もさうへんてこにぢや〳〵ばらないたつて……」

「よし〳〵、もうなんにも云ふな、云ふな! 何も附合だ。こゝは一つ俠氣を出して、立派に君に花を持たしてあげるよ」

「よろしい、きつとですね! や、それでこそ三好先生だ!」

六

かう云ふ、冗談のやうな、眞劍なやうな、要するに馬鹿々々しい經緯があつた後で、今夜二人で、有樂座に或る新しい芝居を見物してから、十二時すぎて丸三に現はれるまで、カフェエ、シャノアルで飲んでゐた。そして、いざ歸ると云ふだんになつて、瀧十郎が自動車を呼ばせると、初めのうちいくら誘つても可厭がつてゐた美津枝が、急に自分の方から進んで送つて行くと云ひ出した。

「おや〳〵おや、これは怪しからん……」

牛込横寺町の下宿へ歸る三好としては、赤坂の丹後町へ向つて走り出さうとする自動車には、途中まで、とも云ひ出せない仕儀だつた。心中かなり面白くないのを、出來るだけ氣さくなもの云ひに紛らして、

「さア、さうきまれア俺アもう今夜は、夜ツぴてこゝで飲み明すからさう思つてくれ」

「あら、三好さんは御一緒ぢやないんですか」

「べらぼうめ、かう見えたつてプロレタリヤでえ! まだ、氣違車に乗らなくつちアならね

えほどの罰アあたらねえつもりだアー
「きちげえぐるまー
長く引いた眉を八の字にして、額に深く皺をよせ、口をポカンとあいて、美津枝が、〈まア呆れた！〉と云ふ表情で、その言葉を繰り返した。
――それが馬鹿に瀧十郎には好もしかつた。ひとりでくツくと笑つてゐた。
「おい、瀧さん、俺ア今晩、君ンちに泊めて貰ふよー
「いやだ、斷る！ー
瀧十郎も、故意と突慳貪に答へた。
「あたしも、二人ッきりぢアいやだわー
初ツから、三人一緒とばかり思ひ込んでゐたのに、嘘はなささうだつた。――結局、明るくなる時分まで飲んでゐようとも、ちつとも構はない丸三を思ひついて、あとは兎も角も、ひとまづそこへ落つくことにきまつたのだつた。
「ねえ、女将さん、もつとなんか甘いもんくれよー
カクテルやウヰスキイが混つた揚句の日本酒で、有繋に酒の三好も、大ぶん目つきがトロンコになつて來てゐた。「今夜はねえ、女将さん！　身を入れてこつちの話を聞きねえな！　今夜は俺アどんなに瀧に御馳走になつたつても、いゝ譯があるんだー
「へーえー
女房の目の玉がぬけめなくギョロリ〳〵と、瀧十郎と美津枝との間を往復した。瀧十郎は、然し平氣な顔をして、赤だしを啜つてゐた。
「と云つたところで、何も色ッぽい話ぢアねえよー
〈どうだ、かう見えたつてまだ正氣だぞ、へゝまなこたア云やアしないから安心してろ！〉とでも云ひたげな目つきで、三好は、一人おいて隣の瀧十郎の顔を、ちよい〳〵覗き込みながら言葉を續けて、「つまり俺が、今夜ッから瀧の先生になつたんだ。その學問てのは……、その學問たるや、……大した學問だ。だから、その束脩だと思やア安いもんさ！　ね、解つたかい」
「ちつとも解らないー
三吉は、例の暗闇から牛を引きずり出したやうなとぼけ顔で、「何がなんだか、さつぱりわけが解らないー
「へん、お前みてえな唐變木に云つてるんぢアねえやい。なア阿母ア、阿母アの前だが、お前ンちの爺さんと來たひにやア、よつぽど老碌してるぜ。よせよもう、あんなやつ」
「大きにお世話だー
女房の方に背を向けて腰かけ、三吉は納まり返つて、悠々と一服吸ひつけた。

七

「さてその束脩だ……ー
と、三好はもう水でも飲むやうに、がぶりと盃をあけて瀧十郎へ献し、女房に向つて言葉を續けた。「本來いやア、何しろ學問が學問だから、丸三ぐらゐぢア……ー
「あら、ぐらゐ、はないでせう」
「ヤツ、これは失言！　それアもう、甘さから云やアぐらゐつて言草はないわけだけれど、何しろお前ンとこは安いからね……ー
「お土砂〳〵！ー
ぬからず亭主が半疊を入れた。
「でもまア取敢ず今夜のところは、ほんの手附のつもりで……、束脩の手附も可笑しいが、兎に角なんかもつと甘いもんを食はせろよー
「そんなに仰有らないでも、これからだん〳〵にあげようと思つてるところですよ。……あゝ、あとでね、富久亭圓傳の鮪が丁度漬り加減ですから召あがつてみてくださいまし。紀尾井町さんへも、夕方、少しばかりですけれど、阿父さんに持つてつて貰つたんです」
一紀尾井町さんつてえば、こゝんところ、暫く

お目にかゝらないが……」

瀧十郎は、二人ならばゆつくりかけられる緣臺の幅を、故ら美津枝の方にぴツたりくツついて、時々肩で押し加減にしたりしながら、それでも信之の話が出ると、眞から懷しさうに言葉を挾んだ。

「へえ、さやうですか、なんですか、ちつとお加減が惡くつて、二三日前からおやすみンなつていらつしやるとかつて……、ねえ阿父さん」

そとへ出て洗物をしてゐた三吉が、その答をすぐ客の方へ、

「またなんでせう、いつもの飲みすぎなんでせう、胃だとか腸だとか女中さんが云つてましたから。ワッシも夕方のことで急いでましたし、奥さんにもお目にかゝらずに歸つて來ちまつたもんですから、詳しいことは伺ひませんでしたけれど、なに、大したことぢアなからうと思ひますよ」

「なんだい〳〵、何が大したこつちアないんだい」

兩肘を張つて屋臺に凭れかゝり、トロンコな目を見据ゑたまゝ、うつとりしかけてゐた三好が、そのとき急に頓狂な聲を出した。

「紀尾井町さんが、少し胃腸のお加減がお惡いんですつて。二三日ねておいでださうですよ」

「へーえ、大將どうも、近頃めつきり弱つてるなア。少し餘計に飲みさへすれア、きつとあとで吐く容子だからなア。一度誰か然るべき醫者に診せといたらつて云ふんだけど、中々あれで強情だからね。あぶねえよ、何しろ胃潰瘍がお家のものなんだつてえから……」

「なアに、でもあの元氣なら……」

大ぶもういゝ心持になりかけてゐた瀧十郎は、醉漢らしい心理で、ちつとでも景氣の惡い話なんぞしたくない氣持だつた。「どうして、相變らず御亂行つゞきらしい噂だぜ。何しても結構な御身分さ。吾々と違つて、自分の稼いだ金で遊ぶんぢアないんだから、はたから見たつてどことなくかうゆつたりと、大まかで、たゞたゞお羨ましい限りだよ」

「吾々と違つて……」の一言がはさまつてゐるだけに、丸三の女房も、すぐに同感の言葉で迎へるわけにもゆかず、「たゞ〳〵お羨ましい限りだよ」の可笑しみだけを、咽喉頭から押し出すやうに、輕く笑つて置いた。

八

「大まかもいゝが……」

三好には、多少つツかゝつて行きたい酒癖があつた。いゝひとが右と云へば、無理にも左とさからひたくなるのがきまりだつた。「大まかもいいが、隨分馬鹿げきつたこともあらアね、現に先達もさ、くだらない不良少年にひツかゝつて、ちよろッと千兩してやられてるんだもの、ひとごとながら腹が立たアね」

「へーえ、それアまたどう云ふ話なんです」

三吉が、一週間ほど無精した、顔半分へツとりの髭を撫で廻しながら、さも御主人の一大事と云つた風に、目を丸くした。

「なアに、活動かなんかを種に、みす〳〵嘘にきまつた話を持ち込まれてさ、御當人、活動嫌ひと來てるから、年に一遍も見るか見ないだらう？ そんならそれで、俺ア活動なんぞ大嫌ひだつて、頭から斷つちまへばいゝものを、なんにも解らないくせに、きツと上顎と下顎とぶつかり放題の講釋を、神妙に小一時間も聞かされたんだらうよ。その揚句に、三千圓と吹つかけられたんださうだが、貸すのは可厭だから、千圓だけなら進呈しようつて、馬鹿々々しいぢアねえか、それも初めて來た、やつと二十歳かそこらの小僧ッ子に、その場で小切手を書いて渡したつてんだから、まつたく呆れもされねえや」

「そんな、旦那、なんぼなんでも……」
「なア、それくらゐなら、百圓札で十遍けつでもふいた方がまだましなくらゐだらう、なア、とツさん、さうだらう」
「ふうん、何しろ太え野郎ですね、その不良少年てえのは、一體どこの小倅なんです」
「そんなことまでは知らねえが、なんでも金看板極附の代物だつてえ話だよ」
「そんなやつがまたどうして紀尾井町のお屋敷へ伺つたんでせう、紹介もなんにもなしに、だしぬけですか」
「それア……」
と、云ひかけて、醉つてはゐても、有繋に三好も、はツと氣がついた。現在の兄の前で、まさかに鈴江の名は出せなかつた。大急ぎで盃を口へ持つて行つて、一息に乾すと、ちよつと獻しどころにまごついてから、美津枝の前にさし出した。
「わたくし？　とてももうそんなに頂けやアしませんわ」
「まア、いゝさ〳〵」
と、無理に持たせて酌をしてやりながら、「それア、いづれ紹介する人はあつたんだがね、ただ逢つて話でも聞いてる分にやア差し支へないが、……一體不良少年に限つて、それア實に話がうまいもんだよ。そいで、大抵はあたまがよくつて、器用で、……ひとかどの不良少年と云はれるにやア、矢ツ張り馬鹿ぢア出來ねえんだね。……だからあいつら仲間の、珍らしい變つたことでも、誠そらごと取りまぜて面白可笑しく話すのを聞いてる分にやア、こつちが暇な時なら丁度いゝ相手さ。だけど、そんな小僧ッ子の口車に乘せられて、初對面の日に、いきなり千兩してやられるなんざア、信さんにも似合はねえ、あんまり馬鹿げた話だアな、どうも大將、近頃ちつと燒が廻つたぜ」
「ありがたう」
言葉の切れ目に、美津枝は盃を返して、「先刻から、紀尾井町さんて仰有つてるの、もしや藤代さんて方ぢアないんですか」
「えー」
瀧十郎と三好とは、兩方から女の顏を覗き込んで、思はず意外の驚きを聲に立てた。

九

「お前さん、知つてるのかい」
「どうしてまた……」
三好と瀧十郎との言葉が、兩側から、殆ど同時に放たれた。急にその場の女主人公になつたやうな氣持で、美津枝は輝かしく微笑んで、
「えゝ、存じてますわ」
「いつ？　どこで？」
瀧十郎が、氣忙しなく疊みかけて訊くのを、ぢツと見返した目のうちには、揶揄するやうな色さへ浮かんでゐた。
「ずつと先から……」
「え？　どこで……？」
「嘘よ、ほんとはつい一昨々日の晩……」
「ふうん、一昨々日の晩、君ンところへ現はれたのかい」
「えゝ、大へん醉つていらしつたわ」
その時まで默つて聞いてゐた三好が、急にさもさも感に堪へた容子ツぷりで、
「これア、恐れ入つた！　實にまめなもんだなア。いやもう寧ろ呆れ返るよ」
「と云ふと……？」
「實ア俺がすつかり喋つちまつたんだがね……」
「え？　信さんに？　いけないなア、先生！　それアいけないや……」
「まアさう恨みがましく云ふなよ。なんぼ大將でも、まさかそこまでは手廻るまいと思つてたんだが、……へーえ。さうかなア。

「そいで、なんかあッしの話が出たかい？」

「いゝえ、なんにも知らずにいらしつたらしいわ」

「そんなわけアないよ。現に俺が……」「えゝと、なんだッけ、さうだ！　非常なシャンがゐるつて、君のことを話しといたんだもの」

「あらいやだ！　あなただつて、今夜初ていらしてくだすつたんぢアありませんか」

さう云ふ美津枝の顔つきは、何故かぷッと噴飯しさうに、笑ひをこらへてゐた。

「でもさ、噂くらゐは聞いてゐたよ。……ねえ、おい瀧さん、ちつと呆れるね」

「どうもね、心掛が違ひますね」

「その心事たるや、むしろ憐むべきものがあるぢアないか」

「えゝ……」

と、曖昧には云つたが、瀧十郎も、心のうちでは、なんとなく面白くなかつた。口止めこそしなかつたけれど、三好にだけのつもりでした話が、忽ち信之に傳はり、その信之は、早速もう出かけてゐるとは……

「それで、一人ッきり？」

「えゝ、まるでもうぐでん／＼で、俥から轉げ落ちるやうにはいつていらしつて、俥夫を相手に飲むんだなんて……」

「へえ、そいから？」

「その上にまたウヰスキイを四五杯もめしあがつて、あぶなくつて見てゐられないほど、ひよろひよろしながらお歸ンなすつたんです」

「どうしてまた、君は、そんな初ての客の、名前まで知つたんだい」

美津枝は、鍋の上から、丸三の女房の方をちらと見て、出合頭に視線がかち合ふと、すぐあらぬ方へ逸して、そのまゝ默つて了つた。

「ねえ、君、どうして名前が分つたんだよ」

瀧十郎は、執拗く訊いた。

「あのね、藤代さんは、うちにあなた方がお見えになるなんてことは、まるで御存知なしにいらしつたんですよ。前から御存知だつたとしても、そことは思はずにはいつていらしつたの、全く偶然だつたの。あたしの名前を申しあげてから、やつとなんか思ひ出したやうな御容子でしたわ、それアほんとですよ」

顧みて他を云ふ、と云ふやつで、美津枝は、狡猾らしく、けれども一生懸命に、それを云ひ張つた。

十

「そんな筈はない」

と、瀧十郎はてんでうけつけようともせずに、ニヤリ／＼笑ひながら、美津枝の顔を覗き込んで、

「あの人はね、……まアよしとかう」

「何故よすの、云ひかけたことなら仰有いな」

「ちよつと色魔つてとこがあるんだよ」

ものをとつて投げつけるやうな調子で、三好が云ひ放つと、丸三の女房は、目を丸くして、

「あら、さうですか……」

「冗談いつちやアいけねえ」

けれども亭主は、落つき拂つて客席の方へ向き直ると、威儀を正す、と云ふほどではなくとも、やゝきつぱりして、「三好さん、あなたそんなこと云ふもんぢアありませんよ。謂はばあなたは、あちらへ出入する人ぢアありませんか。ちつとでも御恩になつてる人のことを、蔭であなた、色魔だなんて、……紀尾井町さんがこゝへいらしつてたつて、あなた方の話でも出た場合に、これンばかりでも蔭口なんぞ仰有つたためしはありアしませんぜ。いつだつて、……なア阿母ア、……面と向つちアどうだか知らないけれど、それア蔭ぢアなんとかかんとか褒めてばかりいらつしやらアなア」

「えゝ、それアほんとですよ。正直な話、あた

したちがなんか惡口みたいなことを、ちよつとでも云ひかけると、すぐ慌てゝそばから揉み消して了ふやうになさるくらゐですもの……」

「なんでえ、お前たちは、どうせ信さん贔屓だから、そんな風に云ふんだらうが、なんでえ、あつちにもこつちにも女ばかり拵へて、色魔と云はれたつて、ぐうの音も出せねえ筈の身もちぢアねえか。そんなことまでは知らねえなら知らねえで、默つて引ッ込んでりやアいゝんだ！」

「それアね」

と、親爺は、中々默つて引つ込んでゐなかつた。「それアそこらにゐる人のやうに、女のけつばかり追ッかけ廻しても、出來ない人にやア出來ねえし、出來るとこにやアまた、大人しくおい、てをちやんと膝の上に置いてゐたつて、先方からお膳を据ゑに來るんだもの。幾人女があつたからつて、それで色魔と限りやアしませんや」

その言葉の間にも、女房は幾度も筒ッぽの肘を引いたり、およしよ、と云ふ風なことを云ひかけてもみたが、そこまで來ると、もうとても默つてはゐられないと云ふ風に口を出して、

「まア、うちの阿父さんと來たら、すぐあゝむきになるんですよ。お客さんだらうとなんだらうと、もうさうなつたひにやアまるッきり見境がつかないんですから……」

などと、女は女同士と云つた調子を借りて、笑顏を振りたてながら頻りと美津枝に喋りかけた。

「でもね、あたしも一度しかお目にかゝらないんですけど、藤代さんつて方、そんな方ぢやアりませんわ」

「えゝ……」

ぐらり〳〵搖れだした體を、無理にピンとさせようと力を入れながら、三白に吊しあがつた目に亭主の方をぢッと見据ゑてゐる三好に氣をかねて、女房はそれには曖昧に答へて置いて、今度は瀧十郎の方へ、「でもね、この道ばかりはまた別だつて云ひますから、それアね、あたしどもにやア解らないやうなことも、それアおあんなさらない限りぢやアありませんからねえ。……旦那いかがです、おあと、鯛茶にでもいたしませうか」

十一

何事も穩便にと、ひとり氣をもんでゐる女房の手前としても、瀧十郎は、不粹らしく、不愰な顏もしてゐられないはめだつたけれども、いくら追ひかけ廻したつて出來ない人には出來ない、などと、三好へあてゝの言葉とは言へ、この場合の瀧十郎の胸には、ちよいと痛い釘を差されたりして、亭主の三吉に對しては、可なりの反感を感じてゐた。

「三好先生、どうしませう、鯛茶漬を貰ひますか、それとも……」

出來るだけ平氣を扮つて、そんな風に相談をもちかけてみたが、三好は、それには答へようともしずに、何を思ひ出したのか急に、

「瀧さんの前だが、一體お前さんの妹つてやつは……」

と、頻りと脣を舐めずり廻しながら、「どうもちつと生意氣すぎるぜ。あんな女をまた、どこがよくつて……」

「およしなさいよ、先生、もうおよしなさいッたら……。よく解つてますよ……。ねえ、もうそろ〳〵出かけようぢやありませんか。あッしが、お宅までお送りしませう」

「まアいゝさ、……それになんだらう、美津ちやん、君はお腹がすいたらう？　御當家御自慢の鯛茶でも食べたらどうだい

「いゝえ、もうあたしお腹はいつぱいです」

「さよですか、ぢアお茶を差しあげませうか」

と、女房は、婉曲に、そろ〳〵歸るべき時

を暗示して、女客の前にだけ湯呑の茶を勸めた。
「だけど、考へてみると……」
三好は、いつかもう丸三に對する反感を忘れかけて、ものを考へるあたまの習慣が、そろそろと順調に廻りだしたのに、ひとり上機嫌な微笑さへ浮かべて、「トウダイ（藤代）つて人は、實際わけの解らない人だね。大した鋭さをもつてるかと思ふと、からきしだらしがなかつたり、馬鹿かと思つてると、なんでも解つてたり……」
「要するに、然し、一筋縄ぢアいかない方でせうね」
「ところがさ、たゞの一遍で、小僧ッ子の不良少年に騙されちまつたり、レイコウ（鈴江）だつて……」
「先生！　後生だから、あいつの話だけは堪忍してくださいな。さうして、もう――」
と、右の袖口をちよいとまくりあげ、腕時計を見て、「もう十五分で二時ですよ。そろそろ歸るとしようぢアありませんか」
「ぢアわたくしは、こゝで失禮いたしますから……」
と、美津枝は、瀧十郎と三好と兩方へ輕く頭をさげてから、女房へ、「あの、俥をさう云つて貰へませんかしら」
「へえ、どちらまで？」
亭主が、景氣よく引きとつて、「すぐその鹽町の角に、新宿歸りを待つてるのが、かれこれ夜どほしゐますさア」
「ぢア、すみませんが、銀座まで一臺……」
「いゝぢアありませんか、あッしがぐるッと送つて廻りませうよ。これから牛込へ出て、それから銀座を廻つて、最後にあッしが歸ると……」
「かれこれ三時になるね」
と、三好が嘲るやうに笑ひながら、「いやもう、御殊勝なお心がけです。だが、俺アいゝよ。これから士官學校の裏を山伏町の方へぬけてけば、なに、歩いたつて知れたもんだ」

十二

「ぢア、もう一臺お俥をさう申しませうか」
女房は、兎も角一刻も早く歸つて貰ひたい氣持を押しかくして、三好の方へ、機嫌をとるやうな言葉をかけたが、瀧十郎が遮つて、
「いゝよいゝよ、自動車でくるッと廻りやなんでもないんだ。それより、ちよつとお會計を願ひたいな」
「へえ、いえまた、いつでもお序に頂きますから……」
「まアさう云はないで、御面倒でも、ちよつと何してみてくださいな」
そこへ、いち早くも亭主は、俥を云ひつけて歸つて來た。
「へえ、たゞ今すぐに參りますから」
「さう、どうもありがたう」
と、美津枝は腰を浮かして、「それでは、わたくしお先に御免かうむります。どうも失禮いたしました」
「まア待ち給へな」
三好も立つて、どちらへも出やうのない美津枝を導くやうに、自分から先に暖簾のそとへ出て行きながら、「俥は僕が乘つて歸るから、君は丹後町へ送つてつて、それから、うちへ歸りやア、丁度道順ぢやないか。さうし給いな」
「でも、それぢアあなたがお一人になつちやつて、お淋しいでせう」
續いて美津枝も暖簾をくゞつて出ると、偶然のやうに、二人はそこで、鼻と鼻とを突き合せんばかりに向ひ合つて立つた。空に記憶えてゐる出た料理の數を、低聲によみあげて、亭主に算盤を彈かせてゐた女房は、その合間に、
「どうも有難うございました。ぢア御免くださ

いまし――」

と、おもてへ顔を向け、少し調子を張つて聲をかけた。

「女將さん、御馳走さんでした。またお伺ひします……」

振り返つて、暖簾をかゝげた隙から眼だけ出して、美津枝も笑顔よく挨拶を返した。その肩へ、うしろからぐツと手がかゝると、三好が、なんの憚りもなく引きよせて、

「瀧を送つてつて、もしどこかに寄るつてつたら、構アねえから、知らん顔をして一緒に行つてみろ！」

耳のはたで、早口にさう囁いてから、すぐについとそばを離れて、一つ二つ、四つ五つ、十二三、ぱらりと星の數を散らした、寒いほど靜り返つた空を振り仰ぐと、「あゝあ、また明日も日があたるのかい。馬鹿にしてやアがら」

そこへ、瀧十郎も勘定をすまして、愛想のいい同士で、いろ〳〵冗口まじりに女房と挨拶を交しながら、ぶらりとおもてへ出て來た。

「おい、瀧さん、ぢア俺アこゝで失敬するよ。いづれまた二三日うちに……」

「さうですか。それではと……、美津枝さんはあたしが送つて行きませう」

「いゝえ、先にお宅へお送りした方が道順ですわ、どうせ自動車屋さんは、うちのすぐ近所なんですから……」

「まア、兎に角乘りませうよ」

三好は、存外まだ足もとも慥で、――とは云つても、ずるり〳〵下駄を引摺りながら、俥の待つてゐるところへ來て、

「牛込横寺町……」

その云ひ方の通りの投やりな身の動作で、ぐたりと車上の人となると、「萩原氏、よき吉左右を――」

送つて出てゐた丸三の三吉が、ぬからず、

「ちよん！」

と、口で柝を入れた。

「相待ち居るぞよ……」

十三

ついその調子に引き込まれて、俥夫までなんとなく景氣よく梶棒をあげると、護謨輪の、音のないのがもの足らなかつたか、人通りも稀な夜更の街に、カラ、、ランと一つ鈴を響かして、荒木横町の方へ向いて引きだした。

「ぢア旦那、御免ください」

「さやうなら」

「どうも失禮、おやすみ！」

口々に呼びかけるのに、三好は幌のなかから、たゞ一言ぶツきら棒に「さよなら」と答へたきり、すぐ遠ざかつて行つた。

「さア、それぢアお乘ンなさい」

「まアどうぞ……」

「まア〳〵」

ちよつと讓り合つてから、美津枝がまづ乘り、瀧十郎も押し竝んで席についた。扉を閉める前に、助手が顔を出して、

「どちらへ？」

「赤阪の丹後町……」

と、すばやく答へたのは美津枝だつた。

「いえまア、あなたの方を先にしませうよ」

「いゝえ、それぢア道順がまるで逆になりますから……、うちはいくら晩くなつたつて、ちつとも構やアしませんから……」

「さうですか、なんだかそれぢアお氣の毒だけれど」

それから助手へ、「ぢやアね、兎も角赤阪の方を先にしてくださいな」

「へー」

すぐ自動車は動きだした。そとでお辭儀をしてゐる丸三の親爺に窓硝子ごしに頷き返すと、瀧十郎は序のやうに見せて、窓掛を引きおろ

して了つた。
「この車は、なかで燈をつけたり消したり出來るやうな仕掛になつてないのかな」
考へやう一つで、ひどい露骨なことにも、またなんの他意もないことのやうにも釋れさうな言葉を、すまして、そこへぽんと擲り出して、瀧十郎は、灰おとしのあたりに、スキッチの釦を探した。
「さうですね」
美津枝も、すまして、自分の側を撫廻してみた。「とてもそんなハイカラなんぢアないでせう」
「かう明るくつちアつまんないね」
云ひながら、二重廻しの袖を、つい身動きの拍子でかゝつたと云ふ風に、ふはりと美津枝の膝の上にかけ、すぐその下で、手を索つた。長い襟卷を下から捲きあげて、暖手筒のやうにしたなかに、女の手はあたゝかく組み合されてゐた。その、筒になつたなかまで、右の手を差し入れて、相手の左を把ると、引きよせて、兩の掌のうちに、ぎゆうッと握りしめた。どぎまぎもしずに、美津枝は、
「あら、手袋をはめていらつしやるの?」
遠くもない道中の氣忙なさから、瀧十郎は、ついそれをぬぐことを忘れてゐたのだが、先方の手を把つて了つてから、(はッ、しまつた!)と思つてゐた矢先だつた。
「ごめん〳〵、いまとるから、ちよつと待つてね」
逃がさない用心に、膝と手の甲との間に、しつかり抑へつけて置いて、急いで兩方の釦をはづし、交互に、セム革のぬくみのなかから指をぬきだした。けれども、その間も、女の手は、ぐたりと重たく膝に載つてゐて、少しでも引つこませさうな氣勢は感じられなかつた。
「さ、これでいゝだらう」
左で、手袋を外套の衣嚢に押し込みながら、今度はぢかに掌と掌とを合せて、靜にじりじりと力を罩めた。さうしながら、横目で、女の表情を讀まうとした。

十四

美津枝は、——布哇女にありさうな長く引いた眉を、靜に、烏睛がちな、ぱつちりとした目の上に休ませ、强ひてとりすましたやうな、口尻の力をもゆるめて、たゞなんとなく眞正面を見詰めてゐた。驚駭、と云ふやうなものは、もとよりどこにも見られなかつた。喜悦、それのほんの漣すらも脣のあたりに漂つてはゐなかつた。悲哀や怖怒でなく、さればと云つて、怳惚でもなかつた。口邊のたるみには、ちよつとそれに見紛ふものがないではなかつたが、それにしては、瞳の冷たさ、眉の落つきを、なんと解くべきやうもなかつた。胸底の煩擾をぢッと押しこらへてゐるにしては、胡桃をも嚙み碎きさうな、意思そのものを見るやうな、鯛の鰓ほどに角ばつた顋の、そこの力のはいらなさを、なんと見るべきだらう。　無關心、まづはそこらが一番公平な觀察らしかつたが、同じ無關心にしても、この場合には、ぐでんと體を投げ出して置く筈のものか、さもうるさげに顏をそむけて了ふ側のものか、そこらの隱微な氣持までは、有髯の瀧十郎にも、しかとは見極めかねた。が、なんと云つても、素人、——半處女、と云つた概念は、どこまでも彼のあたまから去らなかつた。その氣持で、ぞろッぺいに押してよければ、勿論恍惚と認められないことはなかつたし、少くとも、膝の上に感じられた手頸の重さで、身體全體が、もういゝ加減だらしなく投げかけられてゐるやうに看るくらゐは、當然も當然、大手を振つて通れるほどの當然さと考へられた……。
——これから二人でどつかへ行かうか——

もし否との答だつたら、すぐ冗談に紛らして了へるやうに、弱々しい、卑怯な微笑を、酒氣のために却つて蒼白く、粉がふいたやうな頰に浮かべながら、瀧十郎は、一本々々組合せた指の股に力を罩めて締めつけた。けれども、美津枝の表情には、紙裂撚で撫でたほどの變化も起らなかつた。

「ねえ、どつかへ行かうよ」

「どこへ……？」

「どつか……」

「今時分からどこへ行つたつて、起きてるうちなんてありやアしませんわ」

初て顏を振りむけて、優しく窘なめるやうに微笑んだ。女を大ざつぱに、母型と娼婦型とに分けるなら、それは母型の笑ひ方だつた。もし言ひ得べくんば「姉型」の笑ひと云へば、更に適切だつた。……瀧十郎には、少年の日の、戀心ともつかない憧憬の氣持が、懐しいほのかな匂となつて、胸を擽るやうに感じられた。

「ぢアね、もし起きてるうちがあつたら、よるかい」

「一體どこへ行くおつもりなの？」

「それは訊かないで、きつと二人で一緒によるつて約束してくれないかねえ」

「今時分から、どこへよつたつて仕様がないぢアないの」

「ぢア……、ぢアいつそ泊るさ」

「あら、二人ツきりで……？」

「いけないかい？」

「二人ツきりぢア……」

「ぢア、三好君も引つ張つて來れアよかつたね」

「えゝ、二人ツきりでなけれア、一晩ぢう話し明したつていゝけど……」

十五

もう一息押しさへすれば、可厭とは云はないだらうことは、度々の經驗で、瀧十郎にはよく解つてゐたが、

「それぢアかうしよう、運を天に任せることにしよう。一軒だけ、――たつた一軒だけ叩いてみて、すぐ起きたらよるし、ちよつと起きて來さうもなかつたら、すぐ歸ると……。どうだい、そんならいゝだらう？」

執拗な感じを避けるために、故意とかう、ふうはりと持ちかけた。

「……えゝ、……でも……」

目の色を沈めて、考へ深さうに何か云ひかけるのに被せて、

「さア／＼、もうそれにきめた！」

云ふなり、美津枝の側の窓硝子を通しておもてを見ると、いつかもう赤阪離宮の通用門の前を紀國坂へかゝるところだつた。そのまゝ默つてゐれば、右に折れて東門の前を警察署の方へ出て行くのが順だつた。腰を浮かして運轉手の席との隔ての硝子を叩きながら、

「君、君！　溜池の方へ曲つてくれ給へ、さうして、田町の通りにはいるんだ。あの、東海銀行の通り……」

「一體どこへつれてくつもりなの？」

今更になつてそれを尋ねると云ふことは、むしろ、夙からもう行先が知れてゐた、と云ふ氣持の裏書にほかならなかつた。それがよく解つてゐるだけに、瀧十郎は、さも興ありげに微笑つて、

「まアいゝよ／＼、默つて、大人しくしておいでよ」

「だつて……。あのね、もし起きたらどうするの？」

「起きたらあがるのさ」

「あがつてどうするの？」

「あがつて？　まア一杯やるのさ」

「あなた、まだ侍やがりたいの？……今時分からお酒を飲ませるうちなんてあるもんでせう

か……」

「あるところさ……」

「それから？　お酒を召しあがつたらどうなさるの？」

「さあ、どうしよう……」

「あら可厭だ！　その先はまだどうなるか解らないんですか？」

ほとんど、憐むやうな眼差だつた。それで急に瀧十郎は、「こん畜生！」と云ふやうな氣持にされて、

「その先かい？　その先には、二人でゐるのさ――」

ギラリと太刀でも引きぬいたやうな氣持の言葉を、今度こそは、あれえ！　と云つた風な表情で受けとるだらうと思はれたのに、美津枝は、落つき拂つて、につこりした。

「それから？――」

有繋の瀧十郎も、ちよつとのま啞にされて了つた。かう云ふ態度が、生處女の名に違はしいかどうかは、今はもう思案の外になつてゐたが、兎にも角にも彼には、驚くばかり目新しいものだつた。從つて、どう受けてよいものかあてもつかず、さつそくの頓智さへ引つ込んで了つた。

「君は　、君つて人は、一體どう云ふんです。一體、君は……」

「何を云つていらつしやるのよウ――」

美津枝は、ぷッと噴飯して、肚の底から可笑しさうに笑ひ崩れた。

喰戸の横町まで來た時に、自動車を停めさして、すばやく瀧十郎は跳びおり、なかば駈けるやうに左の方へ切れ込んで行つた。

十六

ひとり自動車のなかに取り殘された美津枝の氣持は、へんに白ッちやけた、馬鹿々々しいやうなものだつた。三好とは、去年の秋からの仲だつた。先方が、さう大して惚れ込んで來てゐるわけでないことも承知なら、自分の方でもただ可厭ではない、と云ふくらゐの氣持のまゝで、ついヒョッとした機會に出來て了つたのだが、逢ふ日の樂みを、それほどとも思はないのに、一度は一度より、ちよつとのことでは別れ憎いやうな、不思議な粘着に絡まれて行つた。それは、思ひ出して、決して快いものではなかつたけれど、然し魅力の強さは、不意にぶる／＼と身顫ひされるほどだつた。そんな間にも、男から二十圓、三十圓くらゐづつ小遣ひをねだられてゐた。考へてみるまでもなく馬鹿らしくつてならないばかりか、度ごとにおいそれと云ふ目を出してやつてゐたのには、いよ／＼もつて甘がられ、増長されるは知れきつた話だつたけれども、それがどう云ふものか、いつもきつぱりと斷りかねた。それに金錢上の關係が生じてみると、かさにかゝるやうで強いことも云ひ憎く、さればとて弱く出れば注ぎ込んだものに未練でも殘すやうにとられさうで、氣持の上のぎごちなさが、一ときに加はつて來た。――

結局、差向ひの態度としては、だん／＼弱味に立ち、氣持としては反撥的に傾き、而も情慾の執着は深まさつて行つた。

さう云ふ時に、三好が、悪戯な計謀を持つて來た。近頃つゞけて五六度お前のところへ飲みに行く市川瀧十郎と云ふ役者が、お前の素人らしいところに興味をもつて、成るものならなんとかしたい野心を、人もあらうに俺に向つてうちあけた。俺は縁もゆかりもない、初對面のつもりにして置いて、このいつ幾日に二人つれだつて行くから、その時には、お前ばかりでなく、使つてゐる女だちにも豫め云ひ含めて置いて、どこまでも白を切り通してみろ。俺がたねをあかすまでは、どんなきはどいところまでも知らん顔をしてついて行かなくつちアいけない、――かう云ふ話だつた。馬鹿々々しくもあ

つたが、二人の間の氣持が、もう大ぶん腐りかけてゐた矢先なので、そんなこともちよつとした刺戟だつた。二人共同でやつてゐるとは云ふものゝ、僅か二つ違ひの二十三で、兄には、店の用事で大して手傳つて貰へるやうなこともなかつたし、從つて總ての實權も彼の女のものだつたから、身を持する上についても、美津枝に對して、兎や角云ふやうな人は一人もなく、しようとさへ思へば、どんなことでも出來る、その自由さにも、飽きが來かけてゐたところなので、何かひやひやするやうな戀の戲れに、一層心を惹かれたわけだつた。そのうへ、男と云ひ、口前と云ひ、切離れと云ひ、裏通りの小さなカフヱエの客としては、それこそ、塵芥箱に鶴と云つてもいゝほどの瀧十郎に對して、美津枝の方でも、少からず興味を感じかけてもゐたし……。

丸三月での別れぎはに、誘はれたらどこへでもついて行け、とまで云はれたが、さうなると、あまりのことに、三好の氣持が解らなくなり、薄氣味わるくさへ感じられるのだつたが、ヒヨツとすると、騙されてゐるのは、瀧十郎ではなくて、自分かも知れない。——二人なれ合ひの上かも知れない、とも考へられないことはなかつた。然し、ずる〳〵とこゝまで來て了つてみれば、(そんならそれだつても構やアしない、騙しにかゝつてゐることを承知の上で、知らん顏をして騙されてゐるのは、騙し手に對する一番皮肉な返報かも知れない。なに、そんならあとで愚圖々々云はれる尻もなし……)ふと、そんな氣持にもなつたりした。

十七

さうは云つても、美津枝の瀧十郎に對する氣持は、今のところ決して戀らしいものではなかつた。ほんのちよつとしたいたづら心をほかにしては、別段に愛情を感じてゐるわけでもなく、惡意こそなけれ、却つて、少しは輕蔑してゐるやうなところすらあつた。それは、然し彼の女に澤山な戀の經驗があつたからと云ふ意味ではなくて、むしろ生來のしつかりした性分と、祖母の躾から來てゐた。

一體この兄妹が生れた柳澤家は、徳川直系の士族で、相應の家柄だつたのが、御維新後に、お定りの士族の商法で微祿して了つた上に、先代は三十臺で夭折し、病弱な若い未亡人と二人の子供は、氣丈な祖母の丹精で、どうやらかうやら、窮乏のうちにもさう賤しい思ひや、飢い目もみずにやつて來たのだが、兄妹が小學校へ通つてゐる時分に母親が亡なり、あけて一昨々年の春は、また杖とも柱とも賴んだ祖母が、七十幾歳であの夜へ旅だつて了つた。その時、狹い貸屋の奧の六疊間で、祖母は、諄々と、人生の行路の難いことを誡め、獨立獨行、一念の力の强さを說き聞かせたあとで、古い手文庫を持つて來させて、明治三十八年以來一錢の出入もなく、利子さへもつけ込んでない三千圓がちよつと切れる額の預金帳を、その底から取り出した。そして云ふには、この金があると思へば、心がゆるんで、女の手ひとつで、この永の年月を、病人と子供二人を擁へて、所詮しのいで來られるわけのものではない。夙の昔に元も子もなくした上に、恐らくは今よりも一層ひどい生活に落ちてゐただらう。自分は、それを預金した銀行が破産して了つたものと思つた、——信じた。初のうちは、どうしても信じられなかつたことが、仕舞には、さうとより思へなくなつて了つたくらゐだ。然し、今は、——死んで行く前には、もう一度それを思ひ出さなければならない。やり遂けようと云ふ一心さへあれば、自分のやうななんにも知らない女の痩腕一本でも、病人と子供を二人も擁へて、どうやら口を糊することも出來るのだ。ましてお前たちは、不足ながらも今日まで學問もさせ

て貰つて來たのだ。自分にさへ出來たことが、お前たち二人よつて出來ない筈はないではないか。若いものが二人かゝつて、こんな死に損ひの婆さんに負けたとあつては、神佛の前にも合す顏がなからう。一日だけは見せて置くが、この通帳のことは、自分が忘れてゐたやうに、お前たちにも忘れて貰はなければならない。二人力を併せて、互に誡め合ひ、勵まし合ひ、慰め合つて、ひとをたよらず、自分たちの手足を勞して食ひ、なほ餘りがあつたら學問もして、一かどの人間になつてくれ。この言葉をこそは、當家に傳はる一番大切な遺産と心得てくれ。——これが、氣丈な祖母の、最後の言葉だつた。

その後の美津枝は、ちよつとの間姐耶奉公もしてみたが、とてもそれでは、兄を食はせるだけにも足りないので、女給が割がいゝと聞いて、或る大きなカフェエに、つい昨年の二月まで勤めてゐたのだが、兄との相談の上、いかに忘れようとしても忘れられない預金を賭して、一かばちかの運だめしに、僅な經驗なり資金ながら、ひとつカフェエを初めてみようではないか、と云ふことになつたのだ。そしてこの無謀に近い企てが、今日までのところでは、存外とん〱拍子に行つて、現金でこそ、殆ど無一文になつて了つたけれども、純益を利廻りとして考へてみれば、三倍近くにもあたるし、權利や品物に形を變へた財産を見積つても、少しでも元をへらしてゐる勘定にはならなかつた。

十八

年ぢう雇婆よりもつといゝみじめな裝をして、皸あかぎれや汗みづくに暮しながら、きわ〱一杯に、ゆくかふかず、境涯を脱しかねてゐた祖母の無能を、嘲み笑ひたいやうな氣持が、美津枝の心に巣を喰ひだしたのも、一つはそれがためだつた。年齢の相違にも、世の様の變遷にも、一切目をつぶるとすれば、いかさま祖母が遺して逝つた挑戰に對して、可なりの優越感にもふくれあがりさうなことだつた。いゝ方面から先に云へば、その自信で彼の女の生活は一層さえ〲と活氣づきはしたが、同時に、その自惚によつて世を甘くみる習癖に馴れ親しんだ事實も否み難かつた。短い姐耶奉公の間に、その道樂息子によつて、彼の女の處女は既に失はれてゐたけれど、その後にひとつ間違つて、これが商賣の方でも調子よくいかなかつたならば、却つて生來のきかん氣から、ひよつとまた死んだ祖母にも劣らないほどの、瞬時も轉進のない緊張に導かれて行つたかも知れないのだが、幸か不幸かとん〱拍子に店の客足がついて行つたばかりに、こなアに、少し一生懸命にやりさへすれア……といつた風な、要するに世路の難きを安く踏みすぎた、だらけ切つた心の状態に陷ち込んで了つたのだ。女の心に、さう云ふ隙を見つけることにかけては、惡魔ですら男の敵ではない、——三好が、さう云ふ男の、丁度三人目に位置したわけだつた。從つて瀧十郎は、四人目の後補者だつた。

……停止した自動車の薄暗い豆電氣のもとに、ひとり淋しくひとを待つ氣持には、短い時間でも永く感じられた。そこへもつて來て、瀧十郎の戻りは實際になか〱おそかつた。自分のことよりも、運轉手や助手に對する氣兼で、一秒づつに、わく〱と胸さきへ苦しさが來た。錠された表の戸を叩いて、すぐ起きたか、いまだに起きないのか、そんなことはもう問題ではなくなつて、どつちでもいゝから、一刻も早く瀧十郎に歸つて來て貰ひたかつた。助手を使で見せにやつて、もしそこらに姿が見えなかつたら、それであとの申譯はたつわけだから、構はず先に歸つて了はうか、それもあんまり惡いかしら、などと思ひ迷つて、どつちかにきめる間

を、口のなかで、一から十までの數をよむことにした。

（一、二、三、四、五、六、七……）

そこへ、フェルト裏の草履の音が、凍た往來の上にバタ〳〵と駈けよつて來た。――何よりもまづ助かつたと云ふ氣持だつた。嬉しかつた。思はず、うちから扉の把手に手をかけたが、その時には、もう、いち早くも助手が跳んで降りて、そとから扉をあけてゐた。

「起きたよ、降り給い！」

瀧十郎は、子供の無邪氣さで、殆ど躍りあがらんばかりに勇みたつてゐた。待ちに待つてゐた美津枝は、ひとたまりもなく、その氣持に引き込まれて了つた。

「さう……？」

と云つた時には、もう我知らず座席から腰を浮かしてゐた。きまりのついた嬉しさに、それよりほかのことは何もかも忘れ果てゝゐた。

「さ、早く降りないか」

恰も瀧十郎が、そんな命令的な言葉を使ふだけの資格でもつた人のやうな氣持で、

「はい」

と、素直に答へながら、自動車を降り、早くも拂ひを濟まして了つた男のあとについて、暗い横町へ、なんの不安もなしに、いそ〳〵とはいつて行つた。

飛礫

一

お澄のもとで一夜をあかした翌日の午ごろ、もう一度、ごく少量のチョコレエト色をした腥いものを、そッと便所で吐いて來たが、いい按配にそれきりでをさまつて了つた信之は、この最初の吐血について、誰にも一言も洩らさなかつた。たゞ連日の飲みすぎのために、大ぶん腸胃を害ねてゐるやうだからと稱して、以來は、うちでもそとでも、酒と不消化物とを自分から遠慮してゐた。歸つてすぐの四五日は、どこがどうと云ふほどでもなかつたけれど、打ちのめされたやうに體ぢうが痛だるくて、慾にも得にも起きてゐれなかつたので、薄い粥くらゐを啜つてごろ〳〵してゐた。それでも、細君の閑子がいくらやかましく云つて勸めても、醫者に診せることだけは、堅くとつて聽かなかつた。一つはその勸告のうるささと、もう一つには、枕もとに子供たちを呼んで、いろ〳〵相手になつて、無邪氣に、樂く時を消さうとはしてゐたけれど、なんと云つても想ひが、「死」のそばへじり〳〵と沈んで行き、暗く淋しい氣持にされて了ふ機會が多かつたので、五日目の午後に、辯護士としての資格で、是非會はなければならない來客があつたのを機に床を離れて了つた。さうして、一時なりとも業務に沒頭したり、例の文學愛好連中と一緒に、自分だけは酒を固辭してゐたけれども、あちらこちらと遊び廻つてゐる方が、忘れるともなく氣持に紛れがあつて、床に就いてゐるよりはよほど樂だつた。たゞその行くさき〴〵の會ふ人ごとに、顏色が惡い、どうかしたのではないか、などと訊かれるのがうるさくて、これには有繋に氣を腐らされてゐた。

ひとりで旅行に出よう、――ふとさう思ひ立つた。はつきりした豫定はつくらずに出かけてみて、氣分次第で、一つところに永く落つくなり、また、その元氣があつたら、先から先へと、知らぬ土地を見て歩くのも面白い、兎に角出かけよう、考へてみなければならないことも、そのいろ〳〵と變つた氣持の間では、却つて變通自在に、――一方へ偏らずに、考へ詰めることが出來るかも知れない。愛する者たちのそばから離れて、ひとり靜にものを案じて置かなけ

ればならない時が來てゐる・・・。
こんな風に考へたけれども、出かけるまでに果して置かなければならない事務や、先約などのために、ずるずると日を暮すうちには、またそれから先の約束なども出來て來たりして、いつまでも旅だてなかつた。――それと云ふのが、彼の氣持のなかに、旅へ出なければならない、と云ふ、やゝ義務的な感じが多くて、一日も早く飛んで行かう、と云つた風な願望にはなつてゐなかつたからで、要するに、行きたいやうな、行きたくないやうな、中途半端の心持だつたのだ。自分でもそれに氣がつき、そのだらしのなさ加減に我ながらくさくさしたり、「なに、大して行きたくもないのなら、無理に出かける必要はちつともありやアしない」などと、強ひても氣安く、自由な考へをもたうとしたりしてゐた。

が、その心の奥の奥には、矢張り「死」に絡はる不安があつたのだ。旅のそらで、あかの他人に介抱されて、七轉八倒の苦しみも遠慮がちに、人を待つ氣持にじりつきながら、この世を觀じる意識の最後を、悲しく佗しい色にのみ染めて、いやいや「屍骸」に變つて行くことを思ふと、うかとは東京を離れられない氣もするのだつた。

二

東京!

そこには、信之が心から愛してゐる人々が一番澤山ゐた・・・。

可なり屢々、行くさきざきのさまざまな女と、忽ちのうちに、決して淺くはない關係を結ぶ信之を、慾にこそかゝらないけれど、立派な色魔として考へてゐるやうな友達も多く、都新聞などの艶種記事にも、幾度となく引ッ張り出されて、花柳界では、少くも手におへない道樂者のやうに思はれがちだつたし、從つてさう云ふ噂を聞いてゐる人々からは、爪彈きと云ふほどではなくとも、一種の輕蔑をもつて見られてゐた。現に、彼の同業者で、もう六十を越した基督教信者の桑木博士が、心からの親切に溢れて、彼に忠告したことがある。

「あたしは君が好きです・・・」

と、その、辯護士には不向とさへ云へさうに善良な老人が云つた。

「それに、さう申しちア失禮だが、別段の理由もなく、あたしは君を信用してゐます。あたしは永いあひだ世間と云ふものを觀て來たから云ふのですが、世間と云ふものには、何よりも信用が大切です。かう申すと何か自慢のやうですが、あたしは、これでも行ひたゞしく正直にやつて來たつもりです。惡德には一切近よらないと云ふのが、あたしの立て通して來た主義です。つまり、世間に云はせれば、ちと偏屈すぎた堅人なのでせうが、それでも、そのおかげには、この年齢になるまで、――御承知のさして學問とてもないあたしですが、どうやらかうやら無事に世渡りをして來られましたからね。ただもう信用ひとつですよ。この先はどう云ふことになつて來るものか、あたしのやうな者には見當もつきませんが、然しまだまだ世間と云ふものからは、當分道德はすたりませんよ。どうして中々、世間と云ふやつは、かう見えて、口やかましい道德家ですとも! 勿論それア、所謂世間態と云ふやつで、君たちのやうな血氣盛な方々から見たら、くだらない虛僞でせう。いや、あたしにだつて、勿論それが僞善だつてことくらゐは解つてますよ。御同樣、商賣柄で、人樣の祕密や世間の裏の裏はしよつちう見聞してゐるのですから、世間からは一代の師表と仰がれ、御自分も大手を振つて威張つてゐなさるやうな方々にも、裏に廻つてみれば、隨分いかがはしい行ひがあるものだ、なんてことは、實際いやになるほど知つてゐますよ。だが、あた

しは、それならそれでいゝと思ふんです。いゝ惡いは兎も角も、どうにも仕方がなからうぢアありませんか。所謂、長いものには捲かれろ、ですよ。それアあなたにはあなたの、また立派なお考へもおありでせうけれど、世間の信用をなくしたが最後、人間どうぢたばたしてみたところで、もう誰も相手にはしてくれませんからね。これだけは、まア永い間の經驗で、この老人が云ふんだからと思つて、ひとつ心にとめて聽いて置いてくださいませんか。世間態だけのことでいゝんですから、信用を失はないやうになさいな。あたしは基督教信者だけれど、何も人様のなさる道樂にまで、とやかうと口出しをするほどの沒分曉漢ぢアないつもりです。ですから、あなたの女遊びが、少々烈しすぎようとどうだらうと、そんなことはあたしの知つたことぢアありません。たゞ、あいつはどうも道樂者で……と頭から一口に云ひ貶されて了ふやうなことになると、ちとあとが面倒ぢアなからうか、とそれをお案じ申すだけのことです。どうぞ、その點はよく御諒解ねがつて置きます……」

三

平凡な、然しそれだけに動かし難い眞實を語るこの老辯護士の前に、信之は、少しもわだかまりのない心で感謝の意を述べた。「あなたにはあなたの、立派なお考へもあらう」と、老人らしい皮肉などは少しも含めない、心からの信用を表されてみると、氣恥しくて、なほ更なんとも云へないことになつて了つた。桑木と自分との、世間と云ふものに對する心の據ゑ方の違ひ、――それははつきり解つてゐた。正直に、自分で云つてゐる通り、「長いものに捲かれ」ようとしてゐるのと、長からうが短からうが、てんでさう云ふものに拘泥ふことからして、潔しとしないのとでは、既に根本で別世界同士の對話だつた。その點にかけると、信之も、いつ何時でも、飛礫のもとにうち仆されて悔いないだけの覺悟はもつてゐた。さう云ふ意味で、五六年前に、或る文學者が、幾度も妻を取り變へたと云ふやうな非難で、烈しく世間から投げつけられた飛礫に對して、昂然と構へてゐた意氣を、蔭ながら大いに壯快としてゐたのだが、――從つて、その末路が、悲慘なら悲慘なほど好もしいが……、と念じてゐた甲斐もなく、飛礫が勝つたとも、彼の方が世を捻せるほどの力で押し通したとも、どつちつかずのうやむやの間に、一時ちよつと人氣をおとしただけのことで、彼の一生にも、世間にも、別段の變りは起らず仕舞に終つたのだ。――口うるさい僞善家の「世間」と云ふものを、今更めかしく嘲笑する氣は起らなかつたとしても、手にたつ敵すらない、と云ふ感じは、可なり淋しいものに違ひなかつた。

それほどに思つてゐても、然しはたから見れば、結局信之のやうな男は、十把一束に「世間知らずのお坊ちやん」扱ひにされて了ふのだから、「一生食ふに困らないだけの遺産が云はせる、誠にはやお目出度い寢言」とより取られッこないにきまつた考へなど、なまじつか誰にも發表しないに越したことはない、とそれも承知しきつてはゐたけれど、桑木の親切に對して、說き伏せられたでもなければ、不贊成を稱へるでもなく、曖昧に葬り去るのは、いかにも相濟まないことに思はれもした。それにはまづ、父の努力に成る遺産に對して、彼がどう云ふ考へをもつてゐる者であるか、それを語ることが、一番早手廻しのやうに思はれたけれど、こればかりは、一生ひとに洩らしたくない氣持も、可なりに强かつた。

一年ほど前に、これも或る文學者が、少からぬ額の遺産を悉く放棄して、自ら勞し、足る

を知る生活にはいらうとしてゐることが新聞に發表されて、あらゆる階級の話題にのぼつた。信之は、同業の辯護士や、友達の文學者や、理髮店の親方や、妻君の朋子や、藝者、幇間や、いろ〳〵さま〴〵な人の、それに對する批評を聞き、心持を察する機會を得たけれど、いつも彼自身は、聞役にばかり廻つてゐた。百の思想も、一つの實行に、その力強さに於て及ばないばかりでなく、容易ならぬ決心のひそんでゐるこの問題を、いかに他人事とは云ひながら、さう輕々しく口にしようとも思はなかつたが、然しさうかと云つて、同じ境遇のもとに置かれ、多少ともその同じ問題について考へてゐた彼として、決して批評や感慨がなかつたわけではない。それどころか、新聞にその報道を讀んでから一週間ばかりと云ふもの、一種落つかないやうな氣持で、ともすればそこへ切れ込んで行く考へを、我ながらどうすることも出來なかつたくらゐで、兎も角も、彼のうけた感動は、なかなか淺くはなかつたのだ。

四

が、結局信之には、その文學者の心持が解らなかつた。――遺産に就いて考へるならば、當然その根源に溯つて、金錢と云ふものゝ、人生に占めてゐる位置に就いても、さま〴〵な考察が繰返されたに違ひないと思はれるのに、それからは注意してその文學者の書くものを見落さないやうにしてゐたけれど、少しでも現實離れのしたことは、例へ考へても、文章には書かない人と見えて、現代を、その有り形のままに認めるリヤリストの立場は、決して踏みはづさなかつた。世間の批評では、いゝお道樂だの、詩人の空想だの、實社會とは沒交渉な獨善主義だのと、兎かく高踏的な思想らしく扱つたものが多かつたけれど、信之は、それとは全く反對で、現代によつて金錢に與へられてゐる位置に、少しも彼自身の獨特の評價が現はれてゐない點が、――云ひ替へれば餘りに現實に卽しすぎた點が、なんとなくもの足りなかつた。巨萬の富を捨てゝ裸一貫に返る、と云ふことに、だから少しの詩も感じられなかつた。不當にも或る場所に積まれてゐた金を、正當なる他の場所へ移す、と云ふ事務的な、平俗な感じで終始してゐた。溺れかけた敎へ子を救はうとして、身もまた水底に沈んだ敎師ほどにも、心持の上の飛躍が感じられなかつた。大地を踏みしめた、賞讃すべき足の重さが、信之としては、むしろ呪はしく思へたのだ。

そんな風に考へる信之が、けれども、決して慾ばりでないことはなかつた。金錢に對する愛着は、普通世間人のそれに、優るとも劣らないほどだつた。それが遺産であらうと、自分の儲けた金であらうと、むざ〳〵とひとにくれてやるやうな氣には、どうしてもなれなかつた。さうかと云つて、人生に於ける金錢の位置は、人並よりも慥に幾分低いところへ置いてゐる彼として、蓄財の念などは更になかつた。澤山の金を、自分自身の氣に入つたやうに、むざ〳〵と使ひ捨てたかつた、それだけに悦ばしてくれるものさへあれば、明日が日無一文にならうとも驚かないだけの氣組もあつたが、その代り、氣に入らなければ、鐚一文でも出し惜む、といふ根性だつた。この我が儘は、人のために盡さうとならば、全力をあげて自分自身のために盡すよりほかに道はない、と云ふ信念から來てゐた。かの文學者も、結局は自分自身のために、あゝ云ふ處置に出でたのだらうけれど、俺はまた俺で、俺の流儀で、自分自身のために、我が儘いつぱいにやつてやらう、――まづ、そんな風な肚だつた。

けれども信之は、さう云ふ思ひ昂つた心持で、故もなく他人の神經を脅かすことを嫌つた。

平凡な道樂者の辯護士で、ぐうたらな一生を送つた、と誰からも思はれてゐたいやうな、甚だよくない趣味があつた。その癖、もし人があつて、

「平凡な、道樂者の辯護士……、その通り、正にそれに違ひないぢアないか！　それとも、なんか、その實……、と云ふやうなものが、君の裏にひそんでゐるとでも云ふのかね」

とかなんとか、眞向から一本くらはせたとしたら、必ず彼は心底から腹を立てるに違ひないのだつた。何故かならば、彼は、自分の一生の仕事を、決してさう安くは考へてゐなかつたから。

信之の一生の仕事……？

それは、云ふまでもなく、辯護士の職を指すわけではなかつた。

女に惚れることだつた。本氣で惚れ、女にも本氣で惚れさせることだつた……。

五

これをもう少し上品に云ふならば、眞心に、人生の一番高い位置を與へてゐる信之だつた――むしろ、最聖處に祭りあがめてゐた、とでも云つたなら、一層適切かも知れないほど、それに對する隨喜渴仰の念に深かつた。

世間の口を憚らない彼の我儘が、あながち、一生食つて行けるだけの遺產にありついてゐると云ふだけの、安價な安心や呑氣さから來てゐるものでないことを、一應なりとも頷いて聽いて貰ふためには、結局は、その眞心に對する隨喜渴仰の念まで溯つて話さなければならないのだけれども、然し、そんなことは、氣恥しくて、所詮信之には出來なかつた。その邊を漠然と話して置くことによつて、假令桑木から、彼が常にさう云ふ風に見られつけてゐる、世間知らずのお坊ちやんとして、氣の毒さうな眼差でうち眺められるまでも、どうも他に仕樣のない場合だつた。

で、心からしんみりと禮を述べたあとで、信之は、吃り〳〵こんな風に自分を云ひ說かうとした。

「……から申したら、みづから揣らざるの愚を嗤はれるかも知れませんし、若氣の至りと危まれもしませうけれど、早い話が、あたしは、世間と云ふものを、貴方の仰有るやうに、『長いもの』だとは感じてゐません。いや、さう感じれば感じるほど、いづれつまらない瘦我慢には違ひないんですけれど、いよ〳〵もつてそれに捲かれる氣がしなくなるんです。さうかと云つて、事ごとに一々橫車を押さうと云ふやうな、反抗意識に燃えてゐるわけでは、勿論ありません。泣く子をだますくらゐの根氣まではあつても、地頭をやり込めるやうな卓見や勇猛心をもつてゐるわけではないんですから、大抵なことまでは、ひと一倍引込思案な方です。たゞ自分一人の問題なら、どこまでも自分流儀にやつて行きたいと思つてもゐますし、これまでの僅かばかりの經驗では、誰からもさう大した掣肘をうけずに來たつもりです。あたし一個の問題を、あたし流儀に處理して行つたために、近い周圍にいろ〳〵心配をかけたり、世間の誤解――と云ふのが既に自惚かも知れませんけれど、とかくの非難を蒙つた覺えもあります。そのうへ今後も、この流儀で押し通して行つたら、いま貴方が御心配くださるやうに、仕舞には世間の信用をなくして了ふやうなことになるだらうと、それも覺悟はしてゐるつもりです。甚だ傲慢不遜な言葉ですが、然しさうなつて來れば、どうもなんとも仕樣のないことですから、いつ何時でも御隨意にお見限りください、とでも云ひたいやうな氣持でゐます。もと〳〵あたしは、今の世の中を決して有難がつたり好いたりしてはゐないんですから、今日が日もの別れになつたつ

ても、少しも未練は殘さないつもりです」

「さ、そこですよ」

と、桑木老人は、血色のいゝ頰を優しく笑みほころばせて、「貴方のお氣持が、さう云ふ風に、——さアなんてつたらいゝか、風流と云つても當らないし、——つまりまア俗を脫していらつしやる點は、大へん面白い、……面白いと云つちアすみませんが、兎に角誠に美しい、結構なことだと思つてますよ。それはあたしのやうな俗人でも、ようく解るつもりだし、あゝあ、お羨しいことだ、とさへ思ふこともありますがね、一方、翻つて考へてみると、あたしが生來の臆病者のせゐか、どうもなんだか不安な氣がしてなりませんのですがね。ちとどうも、……露骨に云ひますよ、露骨に云へば、ちとどうも我儘がすぎやアしないか、とね、つまり老人らしく先が案じられるんですよ」

六

桑木の言葉は、親身の親のやうな慈愛にこそ滿ちみちてゐたが、要するに、自分でも云つてゐる通り、老人心の範圍を出るものではなかつた。兩親に死なれて以來、久しくさう云ふ平凡な叱言にもありつけなかつた信之として、たゞその志だけとしても、しみ〱嬉しかつたには違ひないのだけれど、さればとて、その說くところに從つて、一にも二にも世間の思はくに氣をかね、長いものに捲かれてゐようと云ふ氣になれるものでもなかつた。相變らず彼の生活は、世間の目から見て、放蕩無賴だつた。誰憚らず、うちを外に遊び歩いてゐたのだが、流石に、吐血後の心には、ひとり靜にものを考へ諦める旅を思ひ立たせるやうな、しみ〲とした眞面目な寂しさが來てゐた。そのくせ旅の間に、突然病勢が進んで、他人ばかりの介抱に死んで行くやうな有樣が、ふとまた想像の眼前に浮かんで來たりすると、ひとたまりもなく、一寸のがれの、ぐうたらな氣持に返つて了ふのだつた。

そんな風で、不決定な氣持の日を重ねてゐるうちに、二月も末近くなつた。或る風だつた寒い晩に、珍らしくうちの食卓で晩めしをすました信之が、この日ごろの侘しい氣持も忘れて、まだ果物の皿もさげない八疊の茶の間で、七つ六つ五つになる子供たちを相手に、機嫌よく遊び戲れ始めた。子好きは、彼自身がやつと子供の域を脫するか脫しない時分からの持前だつたから、自分自身の子供たちを得て以來、いかに魂を失はれ、溺れひたつてゐるやうな女がある時でも、彼等の上を全く忘れ果てると云ふためしはなかつた。その愛情が、無心な子供たちの方へ傳はつて行かない筈もなかつたが、その理由は兎も角、彼等も、年が年中うちをあけ放題にして飛び廻つてゐる不檢束な父親に對して、不思議に深い親しみをもつてゐた。

「さア、紀公かゝつてこい！」

食卓の前から一二尺膝行はなれて、僅か二合に足りない酒に、うちでやる時の常で、すぐもういゝ機嫌になりかゝつた信之が、大手を擴げ、まづ長男の信紀に挑みかゝつた。

「よし！」

と、この四月から小學校へ通はうと云ふ長男の子が、元氣よく立ちあがりながらも、總領らしい內氣から、暫くは、はにかんだやうに笑ひ紛らして、遠捲きに、「ヨウ〱」などとかけ聲ばかりしてゐた。

「どうした、弱蟲！　おア、信次も一緒にかゝつて來い。序に文子も負かしてやらうか」

手におへない亂暴者の次男が、さう聞くや否や、小犬のやうに跳びかゝつて來た。

「來たな」

父親の幸福に笑ひ輝いて、信之は、小さな體を掬ひ上げるやうにくるりと一つ宙に廻して、

肩にかついだ。續いて、長男と女の子まで、わッと聲をあげて左右からぢやれかゝつた。

「なんだ、パパなんぞ、やッつけちやへ！」

長男は、勢こんで膝へ跳びあがると、もしやくしやな父の髮の毛を摑んだが、丁度飼犬が主人の指を嚙む時のやうな、優しい心遣ひは、その小さな掌の握力にも感じられた。

「なんだ、喧嘩か！　喧嘩なら喧嘩で負けるもんか」

次男を背なかの方へ滑り落して置いて、前からの二人を兩腋に擁へ込んだまゝ、二三度揉みあつた揚句に、うしろから首ッ玉へしがみついて來た次男の力とみせて、

「どつこい、負けたぞ」

と、仰ぬけざまにごろりとなつた。

七

すぐ三人の幼い者どもは、頭も胸もところ嫌はず、ぐん／＼と踏み躙り、這ひあがつて來て、口々に罵り喚いたり、歡呼の叫びをあげたりした。……急に信之は、可愛さのために涙ぐみさうになつて了つた。白熱した細い針金でも、ちり／＼と喉さきへ揉み込まれるやうな、一種酸つぱい感じだつた。

「ようし！　こいつ等は、よくもパパを負かしたな」

元氣よく云ひはしたものゝ、そのまゝ起き返りもしずに、彈力のある小さい身體を、ぢッと胸に抱きしめてゐた。ふと信之には、位置をかへて、彼自身が、さう云ふ親の愛に抱きすくめられた幼時の記憶が蘇つて來た。

……七つ八つの頃、母親と箱根に避暑してゐて、父は、暇のとれた土曜から日曜にかけて出かけてでも來たものらしく、時折しか顏を見せなかつたが、或る日、涼しい朝風に裾を震はせてゐる蚊帳のなかで目をあくと、廣縁の籐椅子に、思ひがけなく、ゆかたがけの父親を見つけたのだつた。信之は、跳びあがりたいほど嬉しかつた。と、同時に、深い谿々に霧の晴れて行く朝景色を見入つてゐる父が、自分の目を覺したことに氣がついて、ひよいとこつちを見向いたらどうしよう、と、さうされるのが、一通りならぬ恥しさに感じられて、そのまゝ身動きもしずに、薄目をあいて、肩幅の廣い巖丈な後姿を見詰めてゐるよりほかなかつた。そのくせ、一刻も早くこつちへ顏を向けて、

「おい坊主、もういゝ加減に目を覺さないか」

とかなんとか聲をかけてくれゝばいゝのにと、そればかりが待たれるのだつたが、父はいつまでも悠々閑々とおもてを眺めてゐる……

（阿父さん！）

胸のなかで呼んでみた。

（阿父さんつてば！）

そつと口のうちに呟いた。それが聞えるわけはない筈だのに、瞬間に、ギギッと籐椅子が鳴ると、父の顏がひよいとこつちを見向いた。

はつと氣がつくと、いつの間にか、薄目をつかつてゐようと思つたことなど忘れてゐたものとみえて、カチンと音がするほどに視線と視線とがぶつかつて了つた。――わが子にうしろから見詰められてゐたことを知つた表情は、父親ながらも、いくらかてれたやうな、吃驚したやうなものだつたが、それはほんの瞬間で、すぐそのあとには、ゴボ／＼と湧きこぼれるやうな愛情が、顏ぢう一杯に擴がつて來た、と思ふと、眼のなかがぢッとうるんでゐた……

後には、大人がそんなことくらゐで泣く筈はないから、ひよつとするとあれは、自分の眼に涙が一杯たまつて來たせゐで、そんな風に見えたのかも知れない、と思ひ直してみたこともあつたが、どうもその時に、父も涙ぐんでゐたに違ひないやうな氣の方が强かつた。

それから父が立つて來て、自分を寢床のなかから抱き起してくれたのか、頰に接吻でもしてくれたのか、そのさきのことはまるで憶えがないのだけれども、その目と目とを見合した二三秒間の氣持は、いつまでも忘れられなかつた。あれほどに、心と心とがぺつたりくつ着いたやうな氣持で、父を懷しく嬉しく思つたことは、あとにもさきにもないと云つてよかつた。

八

尤もそれには、父の信策が年ぢう忙しいからだで、四十を越してから思ひがけなくも儲けた一人ッ子の信之に對してさへ、朝にも晩にも、三十分とはかまけてゐられないやうな平常の生活だつたから、謂はばそれだけ蓄積されてゐたやうな愛情が、偶然の機會で、而もそんな單純な形で現はされただけに、一生忘れられないほどの印象となつて殘つたのには違ひないが、それはそれとして、三人の子供たちをひと抱へに胸の上に抱き乘せながら、三十年も前に箱根の宿で亡父の眼をうるませたのと、全く同じ氣持の涙が、いま自分の視界をも朦朧とさせてゐるのだと思ふと、信之はなんとも云へない深い感慨に撃たれた。——その茫漠とした感慨を、無理にもなんとか名づけるならば、不死永生、とでも云つた風な氣持だつた。親の心、子の心、そのまた子の心と、同じ感情が脈をうつて行く。人類初まつて以來、親子々々と繋がつて來たものは、總てこれぼつん〳〵と飛び離れた存在ではなくして、必ずや靈魂のどこかしら一部と一部とで貼りつき合つた、長い〳〵、——例へば一卷の繪卷物のやうな關係だ。愛人や親友との間で、一言も費さずに、千萬無量の心が通ひ合ふ場合が、稀にはあるものだが、それを人の世の、横に貫く通路とするならば、縱には親子の感情が、坦々たる往還を成してゐる。心の通路さへたどつて誤らないならば、古今東西、どこに行つても、懸け渡す橋もないやうな谿は、決して一箇所でもあるべき筈はない。——こんな風に、はつきり感じたわけではないけれども、强ひて言葉にしてみれば、まづまづこんなことにでもなりさうな、朧げな、けれども生々しい實感が、信之の心に湧いて來ると、忽ちあたりが明るんだかと思はれるばかりの有難さで、もう一度新しい涙が、眼頭に滲み出して來た。

「さア、どうだ、降參か」

顏を見られまいために、子供たちの身體を、布團でも引ッ被るやうに、頭の上までずりあげて置いて、力いつぱいに抱きしめた。

「ウ、ウッ、苦ちい〳〵!」

「降參! かんにん〳〵!」

笑ひながらにも、みんな息づまりさうな聲をあげた。

「あんまり執拗くなさるの およしなさいましよ。いつでも貴方は、仕舞にはそれで誰かしら泣かして了ふんだから……」

久し振りの良人の機嫌を、樂しさうな微笑を浮かべて眺めやつてゐた朋子が、ぢたばたさせる子供たちの足がぶつからないやうにと、食卓を手前に引き寄せながら、その時から言葉をかけた。けれども信之は、それには返事もしずに、手荒くみせて、その實は十分注意をこめて、右へ左へごろり〳〵と丸まつちい體を轉がしてやつた。嬉々と笑ひさゞめいて、子供たちはすぐ起き返ると、そのまゝ仰向けに倒れてゐる父親の胴體に跳びついて來た。

「なんだ、降參したくせに、まだかゝつて來るな、ようし!」

と坐り直して、ふと細君と目を見合せた、——そこには、靜な幸福が宿つてゐた。恐らく自分の目も同じことだらう、と氣がつくと、何故か信之は氣恥しくなつて、慌てゝ視線を、膝の上

に抑へつけた信次の背なかに落したが、その瞬間に、朋子も、同じ心持で、目のやり場を變へたのを、ちらと視野のはづれに感じた。――子供を通して、いかにも夫婦らしい、落ついた愛情が流れ通つた。

九

そこに、十八になる、まだ子供々々した赤い頰の書生がはいつて來て、來客を告げた。

「西山？」

子供たちの體の間から差し出した首を、張子の虎のやうに振つてゐたが、「知らないなア。どんな人だい、男か女かい」

「あのウ、いつだつたか岡島さんと御一緒に見えたことのある、混血兒のやうな……」

「あゝ、苦烈か」

「お宅だつて云つちまつたの？」

訊かれて書生の頷き返すのを見ると、朋子は、額に薄く八の字をよせて、「なんとか云つてお斷りンなつたらどう？　およしなさいましよ、あんな不良少年なんぞとお交際なさるの。きつと仕舞にろくなことないと思ふわ」

「一人かい？」

信之も、一家團欒してひと宵を過さうと云ふ、至つて稀な機會からだけに、內々は斷つて了ひたいやうな氣もしてゐたのだけれど、細君の云ひ方の、あまり指圖がましいのに、急にまた反撥的にされて、「ぢア、書齋に通しておくれ。それから、序にストオブの火を見て置いてくれないか」

この頃の少年には珍らしくハキ／＼した返事を殘して、書生が立つて行つたあとに、すぐ子供たちが喋りだした。

「パパ、お客さん、僕たちの知つてない人？」

「お書齋に行つちアいけないの？」

「えゝ、いけませんとも！」

細君が、可怕い顏をしてみせて、「それにあなた方は、そろ／＼もう寢る時間ですよ」

「だつて、パパが行つちまつちアつまんないなア」

「僕だつてつまんないなア」

「べべちやんだつて、ちゆまんないなア」

いつまでもべビイ／＼と呼ばれつけた末の子は、いまだに自ら「べべちやん」と稱してゐたが、丁度幕あきに見る腰元か青侍のやうに、三人が順おくりに一言づつ口を利く可愛さに、信之の尻は一層重くなりかゝつた。

「ほんとに、大丈夫なんですか？……あゝ云ふ人たちが、ちよく／＼、うちに出這入つたりして……」

「なにがさ、大丈夫も大丈夫でないもありやアしないぢやないか」

「だつて、橫濱の外人殺しの嫌疑で捕まつてたこともあるくらゐで、警察でも始終目をつけてるやうな、名うての不良少年だつてぢやありませんか」

「誰からそんなこと聞いた？」

「誰だつてよござんすわ」

「また鈴江のやつが、大袈裟に喋くつたんだらう」

「ほんとにあなたの好奇も、いゝ加減にしときなさらないと、仕舞にやアとんでもない目におあひなさいますよ」

「あたしのことは、誰よりも一番餘計にあたしが考へてるんだ。丁度、お前自身のことは誰よりも一番餘計にお前が考へるやうなもんでね。それから、お前とあたしと、どつちが賢いかと云ふ問題になると……」

「えゝ、もう解りました。餘計なことを申しあげて、どうもすみませんでした」

「餘計なことぢアない。お前があたしに就いていろ／＼心配してくれるつてことは、決して餘計なことぢアないよ。それは當り前のことだ

よ。たゞいつも云ふことだが、口を利く前にもうちつとよくものを考へてみる癖をつけないといけないね。不良少年が來た、心配だ、すぐその心配を生で云ひ表はす、――それぢア、殆どいゝあたまつてものゝ要用はなくなつちまふわけだからね」

十

いまの先まで、うち面の惡い信之としては珍らしい上機嫌でゐただけに、反動的に來た氣分は、へんにひねくれたものになつた。もの云ひだけわるく丁寧で、その底に、冷い針を含ませるなどは、どつちかと云へば、彼の柄ではなかつた。自分でも、それに氣がつくと、苦々しくてならなかつた。

「まア然し、安心しておいでよ」

それで、急に晴やかな姿顏になつて、「俺はまだ、こいつは惡人だと思ふやうな人に出つくはしたことがないんだ。世の中に、そんな人が一人でもあらうとは思へないんだ。だから、不良少年つてものが、どれほど惡いか、それを知つとくのも、謂はゞまア修行の一つだらうぢアないか」

「それぢア、どうぞまアしつかり御研究なさいまし」

こゝらが折合どころと思つたか、細君も、そんな風に冗談めかして了つた。

「あゝ、そこらにぬかりはないさ。……あとで、紅茶でも煎れて持つて來さしなさいよ」

云ひながら、凭れかゝつてゐた子供たちの體を膝から押し落すやうにして立ちあがつた。「みんな時間になつたら寢なきやアいけないぜ」

「今夜パパと一緒に寢ようと思つてたら、……いやだなア」

「お客さんが早く歸つたら一緒に寢てやらう」

「おそくなつたら？」

「おそくなつたら仕方がないから、パパの床にはいつて、先に一人で寢ちまふのさ」

「そいぢアつまんないや」

「まアいゝやね、成るべく早く行つてあげるよ」

長男とこんな應酬をしてから、信之は洋館の書齋の方へ出かけて行つた。

西山は例の薄い紺色の、やゝ窮屈さうに思へるくらゐ、體にぴッちりとあつた背廣の胸をあけて、胴着の脇の下の刳に兩手の親指を突ッ込み、うしろ向きに、油繪の額の下に立つて、ぢッと眺め入つてゐた。その姿勢にはちよいと捺へたところがあつた。

「おいでなさい」

扉があいたのは女中が茶でも運んで來たのかと思つてゐた、――さう云ふ意外の思ひ入れも故意とらしく、振り向くと、快活な、清々しい上低音で、

「今晩は！」

「よく來ましたね。さア、火のそばへおよんなさい」

「えゝ、有難う。……とてもお留守だらうと思つたんですけどね」

と、圓卓を隔てゝ主人と差向ひに、一旦小椅子に腰をおろしたが、すぐまた立ちあがつて、

「僕、これを拜借しよう」

見てゐるだけで氣持のいゝやうな、キビ〳〵とした身のこなしで、部屋の隅に片よせてあつた肘掛椅子を押して來た。その潑剌とした動作ゆえに救はれて見えたのか、信之にはそれが少しも圖々しくは感じられなかつたばかりでなく、二度目の訪問に、すぐさう親しみをもつて振舞つてくれることが、却つて心持よく思はれるくらゐだつた。

「藤代さん、あなたこれになさい」

「まア君それにかけたらいゝぢアないか」

「いゝえ、どうぞ」

云ふ間に、すばやく信之を小椅子から立たせ

て、押して來た肘掛椅子と取り變へると、「あたしはこれがいゝ」
今度は、腰掛と背なかに籐を張つた船底椅子を引きずつて來て、古風な、大々とした洋爐のそば近く据ゑ、それへゆつたりと腰をおろした。

十一

「どうです、そとは寒いでせう」
腰掛の配置までは、馬鹿に調子がよかつたのに、座が定まると、へんに堅苦しくなつて了つて、そのまゝいつまでも、ぢいッと洋爐の火を見詰めてゐるので、信之がまづ、云つても云はないでもいゝやうな言葉を探りだしてみた。
「えゝ、風で、塵埃が大變です」
「何は、鈴江女史は、今夜は一緒ぢアなかつたんですか」
「えゝ、……僕、鈴江さんに嚴しく云はれてたんですけど、字が書けないもんだから、ついあれツきりお禮の手紙も出しませんでしたが、先達は有難うございました」
ぴよこりと一つ、お坊ちやんじみた、きまり惡げなお辭儀をした。信之には、そこに少しの拵へた氣持も感じられなかつた。感謝の誠意などは二の次として、（やつ、いやに初心がつて見せやアがるな）と云ふやうな邪推で、心が穢されずにすんだのを、ひたすら自分自身のために喜んだ。或は偶然これが、信之にとつては唯一無二の心持のいゝ表現だつたかも知れない。その他の、どんな云ひ廻しや仕草でもが、これほどするりとは、胸に滑り込まなかつたらう、と思はれるほどだつた。
「いゝえ」
思はず、嬉しくつてたまらないやうな微笑が浮かんだ。
「あの時お話した通り、早速仕事にかゝつたもんですから……。毎日もうみんなで、セットを造るやら、手製で間に合ふ衣裳は女連が縫ふやら……」
活動寫眞の話となると、急にまたいつもの活氣に燃え立つて來て、さも愉快でたまらないと云ふ風に、ひとりでくツくと笑ひだした。
「それア大變だね。そんなことは、みんな鈴江のうちに集まつてやつてるんだね？」
「えゝ、わりに廣いし、親父さんは、年中ホテルに行つてゝ、夜もおそくでなくつちア歸つて來ないし……。大變ですよ、そのまア晝間の騷動ツたら……。お暇があつたら一度來てごらんなさいな。座敷ぢうボール紙だア、四分板だア、貫だア、ペンキだア、針金だア、鋸だア、鉋だア、それこそ足の踏み場もありやアしません。さうかと思ふと、ほら、先達お話したでせう？　鵞鳥に追つかけられる泥棒ね、あの役をやる奴なんぞは、今から馴らしとかなくつちア駄目だつてんで、一日三界庭で鵞鳥と話をしてやアがるんですよ。『おい、こら、こつち向け！　駄目だぞ、貴樣！　ガア公！』なんて。そいつがまた、とても滑稽な奴でしてね、あんまり云ふことを聽かないもんだから、仕舞に木綿絲を持つて來て、一生懸命鵞鳥の首ツ玉を結いて、その先を自分のバンドのうしろンとこにしばりつけたまではよかつたんですけど、どうだ、今度こそは！　つてな顏をして、やツとばかり馳け出さうとすると、二足いかないうちに、すぐプツンと切れちまつてね、可笑しくつて可笑しくつて……」
「然し、本當に寫す時にやア、そんなとこは、一體どうするんだね？」
「それアあなた、そこが芝居と違つて、活動が樂の出來るとこで、いくらだつてトリックが利きまさアね。そんなことぐらゐわけなしですよ。……第一、逃げてく奴が引ツ張るなんて、假令

切れない、……針金かなんかで結いといたつて、それぢア追ツかけてるやうに見えツこありやアしません。ずる〳〵引摺られて行くやうな形になつちまつたりしちア、なんぼ喜劇だつて、それこそお笑ひ草でさア」

十二

こんな調子で、西山は、彼等の「仕事」が、些の澁滯もなく、どん〳〵捗りつゝあるやうな話を、一時間近くも喋り續けた。活動寫眞には全く興味のない信之だつたけれども、その間まるで退屈を感じなかつたほどに、その內容も何もない、たゞ敍事だけの話が、面白可笑しく運ばれた。ひとかどの不良少年で、話術に巧みでない者は稀だと云つていゝのだが、西山のは普通の意味で能辯の部にははいらないまでも、時々いかにも實感がなければ出て來ないやうな、奇矯な云ひ廻しで、ぎゆッと聞きての心を摑んで行く、光つたところがあつた。訪ねたことはもとより、ろくに話に聞いたこともない鈴江の住居の、二階や階下や庭さきまで、いづれも多少とも世をすねた若い男女が、彼等一流の奇智頓才を掉つて、戯言だくさんに、果して仕上ぐるかどうか、よりも、さうして何かしら仕事らしいことに手足を動かしてゐる樂しみから、ひどく上機嫌に燥ぎ騒ぐ光景を、信之は、手にとるやうに思ひ描くことが出來た。十四五年を溯つて、同じ年比の自分自身を思ひ出してみれば、さう云ふ自由さは、夢にも見ることの出來ないものだつたが、それだからと云つて、とても反感などはもてなかつた。寧ろ聞いてゐる間だけでも、その若々しさが、いくらか自分の氣持に憑り移つて來るやうなのが嬉しかつた。よしんば、西山の話が、悉く根も葉もない虛構で、例へば、スクリンの上に動く映畫の、「鈴江宅の場」であらうとも、彼がそれから享けた樂みの價値に、大した增減があるわけではなかつた。――一月ほど前に一も二もなく出してやつた千圓と云ふ金は、信之の氣持では、もとより活動寫眞の資本のつもりではなく、この世に眞實を見つけ損つてゐる少年の心に、一つの「信」を贈らうとしたに過ぎないのだつた。而も、受けた者の心で、それがどう扱はれようとも、それで甚しく自分の心を傷めないですむほどの距離に立つてゐたくらゐだから、まして現金の費され方などは、全く問題の外に置いてゐた。彼等の手で喜劇のフィルムが一本出來上つたところで、或はそこから生じた利益が、あとから〳〵と相應の製作を生み、數人の男女がそれによつて生活に資することが出來たところで、そんなことは、彼にとつて大した喜びでもなんでもないわけだつた。然し、それはそれとして、西山の話に少しも嘘らしいところなどはなかつた。

「さぞ鈴江が忙しがつて、……尤もいつだつて退屈なんぞしてゐる女ぢアないけれど、これで生き甲斐が出來た、つて云ふやうな氣持で、あつちこつち世話を燒いて廻つてることだらうね、……目に見えるやうだ」

「えゝ、それアもう素敵なもんですよ」

「なんだらうね、映すとなれば、勿論鈴江孃出演つてことになるんだらうね」

「いゝえ、自分ぢア可厭だつて云つてるんです」

「可厭？　へーえ、それアまたどう云ふわけだらう」

「とても親父さんに叱られちやふなんて云つてるんですがね……」

「ふーん、あの人にも苦手はあるんだね。ちよつと、お父さんを可怕がる柄にやア見えないがね」

「でもね、僕、初ッからあの人の柄を見て筋を考へたんですから、今になつて出ないなんて云

はれちア、ほんとに困るんですよ。なんでもかんでも映せつて、貴方からも一度さう云つてくださいませんか。貴方がさう云ゃア、あの人きつとやる氣ンなるんですから」

十三

「そんな分らない話があるもんか」

「いゝえ、さうですとも。鈴江さんは、それア貴方を可怕がつてますよ」

云ふうちに、西山の眼が特別な意味をもつた凝視になつて行くのを感じると、信之は、我にもなくどぎまぎして了つた。

「じよ、冗談いつちアいけないよ。可怕い……、僕に可怕いなんてとこはないよ……」

「だしぬけに、大變立入つたことを伺つて失禮ですけれど……」

さう云ひ出した時には、態度から顔つきから口の利きやうまで、がらりとうつて變つた生眞面目さで、相手の言葉など、てんから耳にかけようともしずに、西山普烈は眞四角に開き直つてゐた。「貴方は……。鈴江の方では、一昨年の五月ごろ、貴方と夫婦の關係があつたやうに云つてますが、――一體こんなことをだしぬけに人に訊くなんて法はありませんが……」

「いや、結構です。君が、眞面目で、それから卒直なのが、大へん愉快です」

「えゝ、あたし隨分でたらめですけれど、この事についちア眞面目なつもりです。あの時分、つて云ふのは一昨年の春ごろ、あたしは鈴江と結婚しようと思つて、いろ〳〵眞面目に考へてもみましたし、永い間とても寄りつけない義理になつてゐたママさんのうちへも行つて、この結婚さへ許してくれるなら、きつと眞人間になつてみせるからつて、堅く約束して、うちへ連れて行つてママさんにも會はせたんです。さうすると、――うちのママさんつて、少し變人でしてね、すつかり鈴江が氣に入つちまつたんです。お前みたいなもんの女房には、あゝ云ふ氣の勝つた人でなくつちア駄目だ、なんて云つて……。今の言葉は、そつくりママさんが云つた通りなんですよ。あたしなら、氣が勝つてるなんて言葉であの女を批評しようとも思ひませんし、第一そんな洒落た言草は知りやアしません。……そんなちよつとした言葉まで、いまだに忘れずにゐるくらゐですから、その時の本氣さつたらなかつたんです」

「ふうん、さうですか！　それで、そこまで行つてた話が、どうして毀れたんです」

「一口に云ゃア、あの女には、結婚なんて、一生する氣はないんですよ。だから、なんのかんのさんざんいゝやうなことを云つときながら、とても駄目だとかをくゝつてたうちのママさんなんぞに買被られたりして、だん〳〵話が本式になりかゝつて來ると、急に逃げ腰になつちまやアがつたんです。いつものあたしなら、いい幸に、こつちも早速ほかの女にモーションをつけちまひますがね、あん時ばかりは、いま思つてみても不思議なほど一生懸命だつたんですよ。そのくせ、あの女が、これまでにして來たことを、何一つ知らないわけぢアなし、仕樣のない奴だつてことは、重々承知してるんですからね。たゞ、あたしと關係が出來てからは、――あれはね、二月ですよ、あの同じ年の二月ですよ、――その後は、斷然ほかの男と關り合ふやうなまねはさせなかつたつもりでゐたんです。體裁に云ふんぢアないけれど、あいつだつて、實際あたしに……、あたしが好きでしたよ。過ぎたことを云ゃアお互に耻みたいなもんだけれど、これで二人が夫婦になれりゃア、まアどつちもお互に、救ひ救はれる勘定だらうと思つてたんです。あの女だつて、立派にさう云つてたんです、生れ更はれる、なんて。……それが、それが貴方……。まア大體さう云ふわ

けだつたんで、それで失禮を承知の上で、貴方に伺ふんですが……」

十四

「よく解りました」

兩手をきちんと膝に置いて、眞正面に西山の眼のなかを見入りながら、大きく一つ頷いた時には、信之の心持は、根から動かされてゐた。――なにがこれが不良少年だらう。なまじつか大それた理想などは抱かずに、たゞ少しでもさば／＼とした生活にはいらうと云ふ心持、同じ仲間の女に、心から惚れこんで、お互に何もかにも承知の上で、結婚しようと云ふ心持。而も女の方から逃げ腰になられた經緯を、眞面目に今でも人に語らうとする心持。誰がこれを、「不良」と呼ぶことが出來るだらう。世の誠に渇いた者のために、一杯の信を勸める、――さう云ふ美名のもとに隱れて、その奥底には、「不良」の深さに、それとなく尺度をおろし試みようとした氣持も、決してなかつたとは云はれない自分自身の方が、どれくらゐ人が惡いか知れたものではない！　と、しみ／＼信之は、己を恥ぢ悲しんだのだ。

「ぢアね、あたしも正直に話すから、そのつもりで聞いてくれたまい。さらです、鈴江の云つた通りです。一昨年の春、と云つても、四月末か五月頃だつたと覺えてゐるが、確にあたしはあの女と關係しましたよ。勿論初めから嫌ひと云ふほどぢアなかつたが、一體あたしは、あゝ云ふ質の女はさう好きぢアない。どこまで行つても氣持の上の繋がりと云ふものゝ出來て來さうもないやうに思はれたんだ。また事實その通りだつた。そんなわけで、初めからあたしには好奇心だけしかなかつた。いつの場合だつて、かう云ふことは、どつちがいゝの、どつちが惡いのと云へるもんぢアないが、あの女の、あたしに許さうとしてゐる氣勢も可なり露骨には違ひなかつた。……まア然し、そんなことはどうだつていゝんだが、關係してから間もなく、あの女からあたしに金を貸せと云つて來た。あたしとしては、それは寧ろ望むところだつた。と云ふのは、一體あたしは、心持の繋りからはいつて、だん／＼に深く惚れ合つて行くやうな關係なら、相手の都合次第で、金なんぞやつてもよし、やらなくつてもいゝと云ふ氣持でゐられるんだけれど、惚れてもしないのに、ついだらしなく出來て了つた關係で、その後も大して好きにもならないと云ふやうな關係だと、相手の素人玄人に拘らず、どうにかして金に被けて了ひたくなるのがきまりなんだよ。卑怯なことは重々承知だが、事の起りが惡いんだから、どうもそれも仕樣がないと思つてゐるんだ。一體鈴江つて女は、勿論素人にやア違ひないが、どつちかと云へば娼婦型の女だからね……」

「シャウフケイつてなんです？」

「女をね、假に二つの型に分けると、母性、――阿母さんになれる質、つまり一家の主婦として適はしい質の人と、娼婦型、――シャウは娼妓のシャウ、フは婦人のフの字だね」

と指先で圓卓の上に大きく書いて見せながら、「一口に云やア、色慾よりほかに樂みを知らないやうな女、子供を産んだり、家事を取しきつたり、そんなうるさいまねは眞つ平御免だ、と云つた氣風の女だね、さう云ふのと、大體二つに分けられる、――或る獨逸の學者が云ひ出したんだが、まア、さう云ふことになつてるんだ。ところで、君が考へてみたつて、鈴江を、その二つのうちどつちかへ片づけるとすれば、どうしたつて娼婦型の方だらうぢアないか」

西山は、すぐには返事をしずに、やがてニヤリニヤリ笑ひだした。

十五

「なんだい、何を笑つてゐるんだい」

西山が、今にも何か云ひ出しさうにしながら、いつまでも默つて薄笑ひばかりしてゐるので、信之もつい吊り込まれた微笑を浮かべてから尋ねた。

「いゝえ、なんでもないんですけど、ちよつとへんなこと考へついたもんだから……。然し失禮しました、どうぞ先をお話しください」

「それアしかけた話だから、ゆつくりお仕舞まで聞いて貰ふがね、一體何を考へついたんだよ。何か鈴江のことかい？」

「いゝえ、今のその分け方ですよ、獨逸の大學者とかが考へたことに、僕なんぞがとやかく云つたつて仕方がないけど、僕に云はせれア、世界中の女は一人殘らず、その、なんでしたつけ、娼婦型……ですか、それだと思ひますね。淫賣根性のない女なんて、一人だつてあるもんですか。今ふいとそんなことを考へたら、學者なんて甘えもんだ、つてやうな氣がして、つい可笑しくなつちまつたんですよ」

「さうかしら……」

愚しくもまた勇敢に、漁色荒淫の一生を終らうとしてゐるやうな、千軍萬馬の古勇者の口からでも聞くのなら、同じ反感にしても、それだけこちらにも力がはいらうと云ふものだが、いかに利口でも、どれほど女をたらして來たと云つても、まだやつと二十歳になつたばかりの普熱の云ひ草としては、（何を生意氣な！）と云ふ氣が先にたつて、我慢できるだけにひとの言葉に反對は唱へないことにしてゐる信之だつたが、たゞそのまゝに笑ひ捨てられない氣持にされた。とは云へ、飽まで調子はもの柔く、「それアまア、君のやうに云つて云へないこともないだらう。いづれ白と黑と云ふやうな具合に、はつきり二つに分けられるもんぢアないんだから、大體から云つて母型にはいる質の人だつて、多少娼婦型的なところもあるだらうし、反對に一見娼婦型の女にも、母型的な傾向が全然ないとは云へまい。それアまア解り切つたことだけれど、女は一人殘らず淫賣根性をもつてるなんて云ふ君が、結婚しようと思つたり、本氣で女に惚れたりするのは、ちつとへんぢアないか」

「一時でもそんな氣になつたことがあるだけに、今ぢア僕、却つて女を信用しなくなつてるんです」

「はゝア」

と、冗談めかして微笑ひながら、「それぢアつまり、失戀から得た哲學、――とでも云ふわけかな？」

若い癖をして、西山は急に目を逸らして了つた。輕い冗談口で受け流すだらうと思ひの外、すぐお坊ちやんらしくつツぷくれて了ふところなど、益々信之は、この相應に名を知られてゐると云ふ不良少年の善良さに、好感情をもたずにはゐられなくなつた。

「話が逸れちまつたが……」

と、ひどく上機嫌な、――相手が結婚しようとしてゐた女と、而も丁度その同じ時期に、自分も關係してゐたことを話さうとする人としては、寧ろ不似合なほど上機嫌なニコ〳〵顏で、信之は、またもとの話へと言葉を續けた。

「そこで鈴江だが、あたしとしては、あゝ云ふ娼婦型の女には、結局深はまり出來ないつてのは、初ツから解つてたことなんだ。同時にまた、その同じ理由で、一層好奇心だけは刺戟されたわけさ。だから二三度逢ふとすぐに、彼方から金の問題を持ち出された時には、正直な話、ほつとしたんだよ……」

十六

「たゞ貸せと云つて來たんですか、それともなんか、急に入用になつたわけでも話したんですか」

「それアね。……然しそれを話す前に、念のた

めに一應訊いときたいんだが、君は今でも鈴江が好きなのかい―

「いゝえ。どうしてです？」

「なにね、それを話すとなると、幾分あの人の惡口になるかも知れないからさ」

「そんなこと！　ちつとも遠慮なさる必要ありませんよ。僕は、いつかまたお話する時があるかも知れませんが、今ね、大へん好きな女が出來てるんですよ。鈴江だつてそれは知つてるし、兎に角もうあの女とは、普通の友達以上には、どんな交渉もありやアしませんよ」

「さう、ぢア云はう。――今から思ふと君のことなんだ、……今つたつて、この前鈴江と二人で來てくれた時に、すぐ、あゝこの人だな、とは思つたんだが、今夜君の話を聞いてみると、全くその通りで、……その通りつたつて、大ぶんまア話は違つてるけれど、君との關係をあいたまに置きながら話したには違ひないんだ。つまりね、或る……阿父さんが獨逸人で阿母さんが日本人の若い男と、以前にちよつと間違ひがあつた、つて云ふ風な話なんだ、その男が、以前にはそんなでもなかつたんだけれど、近頃すつかり不良少年になつちまつて、いろ／＼まアその不良さ加減を、實例を擧げて話して聞かせたがね、多分君の話を大袈裟に喋つてたんだらうと思ふんだ、……その男に、是非結婚しろとか、それが可厭ならどうするとかつて、頻りに強迫されてる、それに就いて、謂はゞまア手切金だが……」

「いくらと吹ッかけました？」

と、急にひと膝のり出した西山の容子は、無邪氣ながらも、肇て少しは「不良」と云つた感じのものになつてゐた。信之は、それでいよ／＼上機嫌に微笑ひながら、

「三百圓だせと云ふから、あたしは友達に金を貸すことは可厭だ、その代り、――これは死んだ親父の眞似なんだが、――申し出した額の半分だけは進呈しようつて、百五十圓づつ、慥か二度持つてかれたよ。つまり、初の時に三百圓すぽり擲り出しちまつた方がよつぽど氣が利いてたわけさ。然しおかげで、あたしの氣持だけは、それでさば／＼しちまつたのさ。考へてみれア、隨分高いもんについてるがね……」

最後の言葉を故ら冗談めかしく云ふと、信之は、晴やかに聲をあげて笑つた。

「ぢアなんですね……」

一緒に笑ひながらも、さう云ひ出した時には、西山の表情が、へんに緊張しかけてゐた。「今ぢアその事件に就いちア、貴方は、いくら世間にばツとしたつても、一向平氣なもんですかね…？」

信之はギクリとした。――桑木博士の前に、世を恐れないと揚言し、今はまた、さば／＼とした氣持になつてゐると述べて置きながら、その念頭に置かない筈の世間に、自ら顧みて疚しくない筈の事件が知れ亙らうとも、些の痛痒は感じまいな、と、たゞ、一言念をつかれただけのことで、とかくの思考に先だつて、まづ弱々しい不安の念に覆はれたのだ。これはなんと云ひ說くべきだらう……。

それと見てとつた西山の頰には、惡魔の凱歌が、美しい薔薇色の血汐に化けて衝きあげて來た。徐ろに背廣の內衣嚢を探りながら、

「さうとすれア、もうこんなものも値にやアなりませんかね」

十七

親指と食指との間にしつかり持つて、ついと信之の胸もとへ突きつけたのは、鼠色の西洋封筒だつた、――いつぞやカフエ、ユウロップで、一目見るなり、有繋の鈴江がへこたれて了つた、あれだつた。

何年來、いつも必ず丸善まで出かけて、しこ

ま買ひ込んで置く英國製の封筒を見ただけで、それが自分の書いた手紙だと云ふことは、信之にはすぐに解つたし、それのみではなく、鈴江に送つた手紙をたねに、急にゆすりかけようとしてゐる西山だと云ふことも、咄嗟に直覺されて了つた。──その瞬間に、まづ第一に胸に來たものは、鈴江に對する嫌惡の情だつた。目の前にゐる西山には、恐れにも、憎みにも、なんの感情も起らない先に、遠く離れた鈴江の心持や行爲が、たまらないほど不愉快に映つて來たのも不思議だつた。

　信之は、封筒から目をあげて、あらためて西山の顏を見詰めたが、たゞなんとなく氣の毒らしくなつて來て、永くはさうしてゐられなかつた。それでも、我慢して、視線だけはわきへやつて了はないやうにして、焦點でぼやかして置いて、

「君はまたどう云ふつもりで、そんなものを持ち出したんだね」

　と、穩かに尋ねた。

「なんにも云はずに、器用に買つときなさい」

「君も、もうちつとはしつかりした男かと思つてゐたが、存外馬鹿だね。これぢア千圓は高價かつた。ちつと買ひ被つたなア」

　然し、信之の調子にはだん〴〵張りが出て來た。眼にも射るやうな光が添つて、ぢッと相手を見据ゑだした。

「惡いことにやア違ひないが、こつちぢア君と云ふ人間を千圓で買つた氣なんだ。さう云つて惡ければ、ちよいと君の靈魂に、賭をしてみたんだ。人間が人間を試すなんて、もとより間違つた話だが、おかげでまア君の馬鹿さ加減も、根こそぎ解つたよ。一體自惚が強すぎらアね。誰が君等に騙されて活動の資金なんぞ出すやつがあるもんか。自分の靈魂に賭をされてるとも知らないで、あの分ならまだいくらでもあとが利く、かなんかで、いゝ心持に嬉しがつて出かけて來たんだらうが、そんな紙屑みたいなものをひねくり廻して、小汚ねえまねをすれア、……こつちは千圓どぶに捨てたと思やアすむんだけれど、そつちア一生人間らしい世の中にやア浮かばれねえや。そんな、ものゝ解らねえ惡黨てえがあんもんか！」

「ふざけンない！」

　顏色を變へて、すツくと立ちあがるや、勢こめて椅子をうしろへ蹴返した。

「ふざけるどころか、こつちは眞面目だ！」

　ふと、山犬に嚙まれたよりもまだ馬鹿々々しい死に方をした總理大臣のことがあたまを掠めた。假令殺されても、あれよりはましだと思つた。いま俺は、眞心から、相手の眞心に叫びかけてゐるんだ。相手はどうあらうとも、死ぬ瞬間としちア、まア上乘の部だ。──そんな安心も肚の底にあつた。組重ねた膝もそのまゝに、肘掛椅子にどつしりと腰を落つけて、たゞ相手の瞳を食入るやうに見据ゑてゐた。立ちは立つたが、それでは西山も、手の出しやうがなかつた。暫くは、そのまゝ睨み合つてゐた。がつちり組み合はされた鬪牛の角のやうに動かない視線のなかにも、然し、絶えず力は壓しつ壓されつしてゐた。そしてそれは、結局肚の力だつた。……もう一度信之は、さうしてゐるのが氣の毒らしくなるやうなものを、相手の瞳の奧に感じ始めた。

十八

「まア落ついて、ゆつくり一つ考へてみたらどうだい」

　さう口を切つた時には、眼と眼との壓し合ひで、もうそれ以上壓し進むのが、大人げなく感じられるほどに、勝敗の數は決してゐた、少くも信之には、さうした氣がされたのだ。ぶらりと立つて行つて、横倒しにひつくり返つてゐる

る搖籃椅子を起し、うしろから普烈つそばへ押しやつて、「まアもう一度腰かけないか。……俺の云ひ樣も、少し亂暴だつたかも知れないが、それはまア友達同士のことで、もとより悪い氣ぢアないんだから、……ねえ、もうこれで仲直りしようぢアないか。すつかりお互の氣持も解つてるぢアないか……」

グヽグヽグウと、まるで厚い革でも卷き締めるやうな聲をあげたと思ふと、急に西山は、大きな巖丈な兩の手の平で、いつぱいに顔を包んで了つて、呼吸もせはしく歔欷り泣きを始めた。一瞬間呆氣にとられて立ちつくしてゐた信之も、見るまに、二十歳になつたばかりの、負けることの大嫌な少年の昔へと、自分の心が、そつくりそのまゝ戻つて行つたやうな、一分の隙もない同感で、涙ぐましく胸が迫つて來た。うつかり何か云へば、泪聲になりさうな氣がするので、息を凝して、斜にうしろから、ぢつと西山を見詰めてゐるよりほかはなかつた。

「畜生！」

細い管から間歇的に洩れる蒸氣のやうな勢ひで、プスンと一言はき出すと同時に、拳固をあげて、自分の頭を力まかせに撲りつけた。

「馬鹿！」

もう一つゴツンといつた。

思はず信之は、場合を忘れて、ぷツと噴飯して了つた。

「まアさう撲つたつて仕樣がないよ」

「いや／＼、いやだ！」

駄々ッ兒のやうにぢだんだを踏んで、續けうちに自分の頭に拳を加へた。

「まアいゝから、もう一度腰かけろよ」

「いやだ！　いやだ！」

「おやどうすれアいゝんだよ」

「歸る」

信之は、抱きつきたいほど可愛く思つて、そばへよると、

「いやだ！　顔を見ちアいやだ！」

と、くるりと彼方むきになつて、「オイ、歸らせてくれつたら！」

「なにもそんなに……」

「いや／＼いや！　いやだつたら！　歸るつたら歸せよ！」

「よし／＼、ぢアまた近いうちに遊びに來いよ！　ね？」

うしろから肩を抱き締めると、振り拂ひもしずに、――然し、相變らず兩手でしつかりと覆ひ隱してゐた顔を、なほその上にも背けたが、どうやらをさまりかけてゐた泣聲は、それで、もう一度盛りあがつて來た。

「……すみません、……すみません……」

殆ど獨語のやうに呟くのか、微に聞えて來た。

「なんだい、今更そんなことをいふやつがあるもんか。……もう何もかも、底の底まで、すつかり解つてるぢアないか」

たうとう信之も、泪聲になつて了つた。

「……さよなら」

顔は背けたまゝに、右の手だけを差し出した。跳びかゝるやうにそれへ、掌を合はし、左に堅く堅く握り合せた。

「ぢア、さよなら、また來たまいよ」

前のまゝ肩にかけてゐた右の手で、やゝ押し加減に、信之は、この「不良少年」を玄關の方へ送り出して行つた。

ひとり旅

一

ちらほらと花の便りを聞く時候になつて來た。着るものが一枚へるごとに身も心も輕くなつて行くのに誘はれて、病に對する信之の不安

は、忘れるともなく薄れかけてゐた。それには、人知れず攝生してゐたおかげにか、その後引き續いて吐血を見るやうなこともなかつた。さうなると、頻りに旅の心が動いて來た。――京都、奈良、宇治、第一にあのへんがあたまに浮かんだ。目も遙に、蓮華と菜種とが續いて、果は薄霞んだ連山まで、一望のうちにをさめるやうな、どこでもいゝ、田舍の舊家と云つた感じの靜な宿屋に轉がつて、ひとりポカンとしてゐたらさぞいゝ心持だらう、と思つた。それもいいが、ぽつり／＼杜切れがちに、もの柔かな京都辯で、何か水のやうな、毒にも藥にもならない話をしかけてくれる女が、寢ころんだ枕もとに、疊一疊ぐらゐ離れて坐つてゐてくれても惡くない、とも思つた。里奴と云ふ妓のことが、それにつれて考へ出された……。

その妓とは、一昨年の夏の末ごろ、大阪京都へちよつとした用件を云ひたてに十日あまりの旅をした時、中學時代に同級の仲よしだつた京都生れの日本畫の畫家に招かれて、祇園の茶屋で、五晩六晩つゞけざまに逢つたのが、馴染そめだつた。口數を利かない大人しやかな妓だつた。眉尻がやゝ八の字なりにさがつたのが、いつも彼の女を愁深く見せ、ひとり仲間をはづれて、裏の小流れに臨んだ欄干にでも凭つて立つてゐるところを呼ばれて、ニッコリ振り返つたりすると、今が今まで、そッと泣いてゐた人のやうにも思はれるくらゐだつた。その薄命らしいところが、旅にゐる信之の心には、殊に哀れふかくも懷しく感じられた。彼方でも、信之を嫌つてゐるとは思へなかつたけれど、さうかと云つて、内輪に／＼と、いつも座敷の日陰とも云へるあたりに身を退つてゐる彼の女は、決して人目につくほどの特別の好意を見せるやうなこともなかつた。今後に何か事が起らなどとは、夢にも思ひ設けずに、信之はやがて東京へ歸つて來て了つたのだつた。それに一つには、十九と云ふその妓の年齡から考へても、彼にはなんとしても自惚られなかつた。永い間の戀愛生活で、女の方から先に立つて好意をみせて來るのは、きまつて年增だつた。遠慮のない友達などがよると、よくそれを云つて冷嘲かされるくらゐだつたが、いゝ御機嫌に廻つてゐる時の信之は、故意と洒々とした顏つきを扮つて、

一ふん、十臺の小娘なんぞに、俺のいゝとこが解つてたまるもんかい。なんつてたつて、問題こゝだからね―

と、心臟のあたりをハタ／＼と打つて見せたりした。そんな風で、若い娘には、たまにこつちから好意はもつても、深く惚れ込むと云ふやうな氣持になることは稀だつたし、不思議にまた彼は、年のいかない女には緣遠かつた。

ところが、東京に歸つて二三日ほどすると、畫家の矢崎から、里奴の繪葉書に、この妓が君のことばかり云つてゐて大變だ、近々にもう一度出直して來る必要がある、などと云つてよこした。文學趣味の女將がやつてゐる例の茶屋で、酒肴の載つてゐる食卓の上ででも書いたものとみえて、一筆女將の冷かしのやうな文句やら、里奴はじめ三四人の馴染の妓の自署やらも添へてあつた。

二

けれども信之には、里奴の、嫋が、あたし惚それに關隱した、と云ふやうな言葉のために動くところは、ちよつと想像の目の前にさへ浮んで來にくいものだつたから、その場かぎりの座興に書かれた文句として、格別氣にもとめないでゐた。ところが、さう云ふ寄書の葉書が、五日十日おきくらゐに三四枚とゞいたあとで、思ひがけなくも里奴からの手紙が來た。もし自分が東京へ出て行つたら逢つてくれるか、逢つて

くれるならすぐにも行きたいから折返し返事をくれ、それだけのことを、ほんの四五行に色氣もそつけもなく、簡單に書いてあつた。言葉にしろ、文章にしろ、簡潔と云ふことは、必ずその云はうとする内容の上に、相當な苦勞の費されたあとの結果を意味するものだ。最初の手紙のこの簡潔さは、里奴が、ちよつと人並はづれた才女でなければ、書きかけては破り書きかけては破りして、何枚もの書翰紙が無駄にされてゐる場合を想像することが出來た。どつちにしろ、信之には、差向ひで、全く新しい眼で、この娘を眺めたい氣持が、可なりに強く動いて來た。

十月の、霧のやうに細な雨のふる晩、特急の列車で着いて來ると云ふ里奴を、東京驛で待ちうけてゐた信之は、いつもになく心のときめきを感じたり、不思議に感傷的な氣持に鎖されたりした。こちらからの返事に對して、明日あさ特急で行く、と電報が來てゐるきりだつたから、連があるのやらないのやら、あればどう云ふ種類の人なのやら、そのへんのことも、更にあてがつかなかつた。歩廊の薄暗い電燈の下を、彼は幾度も往つたり來たりした。

目にたゝない、ごく普通の束髪で、雨コートに足袋を穿き、手には黒ツぽいタッチングの手提袋と蛇の目の傘を持つただけの、電車にも乘らず、ちよつと横町の髪結さんまで、とでも云ひさうな身裝だつた。まだ動きやまない汽車の窓と、歩廊とで、ちよつと目禮を交したあとで、車室から降りて近づいて來る時にも、顔に目も向けず、四五尺はなれたところから、ぴよこりと小腰をかゞめて、

「御機嫌さん」

「暫く。よく來ましたね。……荷物は？」

「いゝえ、なんにも……」

「ひとり？」

「えゝ」

いつもの寂しい笑顔を傾けた。玄關には、信之が乘つて來た自動車が待たせてあつた。

「東京で生れて東京で育つた人間には、東京の宿屋つてものは、まるつきり用のないもんだから、どう云ふうちに案内したらいゝのか解らないんだけれど、兎に角まア一軒電話で部屋をとつといて貰ひました。あたしもこれから行くのは生れて初めてのうちなんだが、紹介してくれた人の話ぢやア、[illegible]いゝさうな、場所は築地の[illegible]通りだけれど、ごく靜かなうちださうですから……」

「……お互さに……」

「[illegible]でもおはなれなんです……明日か、……明後日には是非とも歸りますゝ、んのどッせ」

「あゝ、そんなに……、それア大へんでしたね……」

なんとなく二人とも暗くなつてゐた。それきり口もきかず押し默つて、自動車の窓から、小雨のなかへ滲み出したやうな街の灯を眺めてゐた。

三

薄ら寒く、もの寂しい秋の雨は、里奴が築地へ着いた日の二日を、しと／＼と降り續けた。その間に、日本橋の方のちよいとした[illegible]へ、一度夕食を食ひに出たきりで、二人は、奧二階の八疊の座敷に、もの靜かにたれこめてゐた。

内氣で、飽くまでも愼しやかな、いかにも上方の娘らしい氣性は、信之には、何か勿體ない氣がするほどに好もしかつた。またの逢瀬を約束するとか、それまでの寂しさを喞つとか、そんな言葉はもとより、無言の涙さへ浮かべ得ずに、たゞ悄ツとうつむいてゐるやうな別れの時が近づいて來ると、いぢらしさに堪へられなくなつて、かねて信之が、自分ひとりの心に決めた言

葉で、子供ッぽくも「金鵄勲章」と呼んでゐる、最高の情愛のしるしを贈ることにして了つた。

――假令自分たちの戀の末はどう終らうとも、自分としては一生あなたに好意をもち續けずにはゐられない。あなたにも、その氣持だけは同じく永く續いて行くだらうと信じられる。何年かの未來に、自分たちがどれほど變つた境遇のもとに置かれてゐようとも、どつちかの一人が、萬一にも瀕死の床に就くやうな場合には、必ず報知の電報をうつこと、またそれをうけとつたものは、萬難を排して急行して、お互にとり交した心の証を悦び合ひ、確め合はう、――

これが、これまでに信之が、女に與へた約束の言葉のうちで、最も尊いものとして、自ら「金鵄勲章」と稱へ、易くは許さないことにしてゐるものだつた。半年一年つゞいた仲でも、戀が醒めたが最後、すぐあかの他人のやうな氣持に還つて了ひさうな感じの女には、夢にもこの言葉は聞かせなかつた。

里奴とは、僅に十日の仲だつたが、どう我慢してみても、この最上の愛を契らずにはゐられない氣持にされて了つたのだ。實にそれは、三つめの「金鵄勲章」だつた。

けれども、不思議な運命は、それ以來今日まで、まだ一度も二人を逢はせなかつた。里奴からは、例のそつけないほど簡潔な禮狀が一本とゞいたきりだつたから、信之としては、もつと好もしくもない性分はもつてゐようとも、手近の、刺戟の強い戀の方へと惹かれがちで、つい忘れるともなく、無音に二月三月も過して了つた。そのうちに、實家の矢崎が上京して來た、里奴が肺を患つて、實家に歸つてゐる、と云ふ話を傳へたが、たゞ北野の天満宮に近く住む、貧しい荒物屋とか聞いてゐる、とばかりで、實家の町どころや氏名は、その時には分らなかつた。で、出來るだけ詳しく調べて貰ふやうに頼んで置くと、半月ほど北邊の方を廻り歩いて歸洛した矢崎から、北野の店にもちきれなくなつて、一家を擧げて大阪へ移つたさうだが、その移轉先はいま聞き合はせて貰つてゐるけれど、ちよつと知れ憎いらしい容子だ、と云つてよこした。

すると今年の正月になつて、大阪の住友銀行に勤めてゐる大學時代の友達から傳へ聞いた話だと云つて、[illegible]上仲間の若い男が、去年の暮に北の新地に出た妓で、頻りにあなたに逢ひたがつてゐる女がある、なんでも前に京都で出てゐた時分とかに、あなたのあとを追つかけてこつちまで逢ひに來たことがあるさうだが……、などゝ、ニヤリ〳〵笑ひながら冷嘲してゐた。その態度も可笑なり、またそんな傳へ聞では、とても詳しいことなどは解る筈はないと思つて、信之は、氣にはかゝりながらも、そのまゝに聞き流して了つた。

四

それが、つい半月ほど前にうけとつた矢崎の便りによると、大阪で北の新地に出たのも本當の話だつたが、出てからやつと一月になるかならずで、ちよつと小康を見せてゐた胸の病氣が、もう一度ぶり返して來て、いま入院してゐるさうだから、追つて病院の町どころや名前も訊き合せて知らせよう、とあつた。そして、いまだにそれきりになつてゐた。

ひとり旅のあてを、上方へもつて行つて考へてゐるうちに、自然この不仕合せな女の上に思ひが重く鎖されて行つた。またそれほど悪いと云ふのでもなささうだし、約束の報知をよこしたのでもないけれど、「金鵄勲章」に對しても、ちよつとでも見舞つてやりたい、なに、出かけて行けば、病院などはすぐ知れるに違ひない、と、一時は殆どそれに決心しかけてゐた。

けれどもそれが、矢張りどこか體が弱りかけてゐるせゐか、だん／＼と重ッ苦しい感じになつて來た。死を思ふ傾きを變へに出かけようといふ旅の行く手に、不治の病に冒されてゐる哀れな娘が待つてゐる、――それではなんにもならない氣がした。いざお別れと云ふ場合なら、それはどんな無理をしても飛んで行く、けれども報知もないのに、こつちから尋ね探して行く、――行けばどんなに喜んで貰へるか分らないし、それを見ればこつちだつて嬉しいには違ひないが、――どこかそこに、ちよつと押附がましいところもあるやうで、すつかりいや氣がさして了つた。

東京で考へてゐたぶんにはきりがない。つい近くまででも一旦出かけて置いて、それから先のことは、またそこでの氣持できめよう、――迷ひに迷つた揚句、さうでもするよりほかに仕様がなくなつて來た。で、荷物も、ほんの身の周りの要るものだけを手輕く纏めて、取り敢ず箱根をあてに、新橋驛からたつて行つた。

小田原から自動車で、湯本の町へはいつたのは、春らしい夕靄が河原を明るく白ませ、對岸の樹木の鬱蒼たる暗さには、蒼み亙つて、はやちらほらと、寢ぼけたやうな灯の色が光りそめる頃だつた。舊くから父の信息が贔屓で、信之も子供の時分には、一夏二夏母と一緒に暮したこともある宿はあつたが、その後は、箱根へ出かけて來ると、いつも小涌谷、強羅、蘆の湯と、上の方へばかり行きつけて、そこへは、かれこれもう二十年ぶりだつた。一人旅の、暗くなつてから山路へかゝるのもなんとなく心細く、一つには、思ひ出ふかい宿なら、亡き父様の俤を偲ぶよすがもあらうかと、ひどく感傷的な氣持になつて、幅の狹い橋の手前で自動車を降り、前ぶれもなく、昔風な土間の入口に立つた。

「いらつしやいまし……」

と、出迎へた女中の容子には、決して歡待的なものではなかつたが、それは然し、信之もかねて覺悟してゐるところだつた。

「どつか部屋ありますかしら……」

「へえ、ちよつとお待ちくださいまし」

入れ變つて、四十恰好のひようげた顔つきの番頭が、田舎の舊家の臺所と云つた感じの廣々とした板敷を横ぎつて驅けつけて來た。

「へえ、いらつしやいまし……」

と、型の如く揉手をして、「えゝ、おひと方さんでいらつしやいますか」

「さうです。廣いとこは要りませんが、どこか靜かな部屋があいてたら……」

番頭は、職業的な目つきを敏捷に働かして、頭のてつぺんから足の爪先まで、客の容子をひと舐にぺろりと物色した。

五

助手のついてゐない自動車だつたので、やゝ遲れて、そこへ運轉手が、衣類鞄と手提鞄とを兩手にぶらさげてはいつて來た。それと見ると、露骨に番頭の態度が改まつた。

「いえなに、唯今のところ別段たて込んでは居りませんのですけれど、ぼつ／＼お申込があるもんでございますから……。ぢア……」

どこそこへ案内しろ、と女中を顧みて云ひつけたが、どつちにしろ大した客とは思はれないので、檢分の役目を果しただけで、すぐ自分は奥の方へひつ込んで行つた。

格別金持ぶりたいわけではないけれども、良家に育つた坊ちやん氣には、初ても同然の、而も相當名のある宿へ、だしぬけに一人で飛びこんで行つたのでは、これくらゐは仕方がないと云ふ察しもついてゐながら、矢つ張りいゝ氣持はしなかつた。僅の辛抱なのだから、いつそ山の上の馴染の宿屋まで登つて行けばよかつた、と後悔もされたし、折角の旅の出鼻にけちがつ

いて了つたやうで、へんに氣が沈みもした。

　通されたのは、こゝとしては下の部の客をいれる部屋らしかつたが、眞黑に光澤々々と光つた馬鹿げて太い柱や、頑固な天井の押緣や、釘かくしのついた承塵など、どうしても五六十年ではきかないくらゐに舊い建ものらしく、その朴訥な、落ついた感じは惡くなかつた。たゞ十疊と云ふのが氣に入らなかつた。普段から信之は、四疊半、八疊、十二疊半、と云つた風に、すべて眞四角な部屋でないと、なんとなく體の据りが惡いやうな氣がした。

「もつと狹くつてもいゝんですがね……」

　帽子も外套もそのまゝに、部屋の眞ン中に突つたつて、あたりを見廻しながら、思はず先刻からの不機嫌を、聲の調子に響かせて了つた。

「……へえ……」

　案内して來た十八九の、これも部屋に吊り合はせて、不[illegible]らしい女中が、ちよつと云ふ意味を嚥み込みかねた顏つきで、「では、あのウ……」

「何しろ一人だし……」

　すると、はゝア部屋代を氣にして云つてゐるのだな、とでも思つたらしく、微ながら輕蔑の薄笑ひが、血色のいゝ頰を掠め過ぎるのを見ると、信之はもう腹をたてる勢もなくなつて、すつかり氣を腐らせて了つた。

「でも、まアいゝや。面倒だからもうこゝにしとかう。ほんと云やア云ふ長ツ細い部屋は嫌ひなんだけれど……」

「もしなんでしたら、あとで番頭さんにさう申しまして……」

「いゝえ、もうこゝで結構。……えゝと、飯は勿論まだです。酒は……と、さうさな、一本つけて來て貰ひませうか。それから、その前に、早速ひと風呂あびたいんですがね」

「へえ、承知いたしました。唯今すぐにお浴衣を持つて參ります」

　いやに氣むづかしさうな客だ、と思つたのだらう、女中もそつけない切口上で、疊ざはりも荒々しく出て行つた。

「あゝあ、こいつアどうも……」

　思はず獨語を洩らして、信之は不承不精に、ぽつんと一つ床前に敷いてある座布團のそばへ歩みより、爪先でそれを緣近くへ押しよせてから、肇て腰をおちつけた。なんとなくこの調子では、旅のさき〴〵まで面白いことはなささうな氣がして來た。

　そこへ女中が二人で、火鉢や茶道具や浴衣、丹前などを運んで來たが、信之は振り向きもしずに、硝子戸ごしに、ぢツと宵闇の暗さへ目をやつてゐた。

六

「あら！」

　突然、いかにも思ひがけないと云ふやうな聲に、振り向いてみると、いま初て顏を見せる年增の女中が、まだ茶盆を下にも置かずに突膝のまゝで、ぢツとこつちを見詰めてゐた。その、ちよつと營養不良と云つた感じの、小さく引き締つた顏つきには、慥に見覺えがあつた。それと同時に、善良な女だつたと云ふ記憶が、續いて信之のあたまに蘇りかけた。

「あゝ」

　誰とも分らないながら、思はず親しみの笑顏にはなつてゐた。それには、先刻からの冷たい待遇で、淋しく氣の沈んでゐたところだけに、少しく大袈裟に云へば、地獄で佛と云つた風な氣持もされたのだ。

「まア旦那樣、お久振りでございます」

　さう云はれゝば、すぐもうすつかり思ひ出された。長男の信紀が生れた時分だから、足かけ七年も前に、紀尾井町の家で働いてゐたことのある女だつた。名前はちよつと出て來なかつたが、慥かこゝからは遠くない足柄下郡の、[illegible]

浦和の者だつたと云ふことまで、不思議にもふいと思ひ出された。
「あゝ、お前さんだつたのかい。これアどうも、思ひがけないとこで……」
「いつも御無沙汰ばかり申あげて居りますが、皆様別にお變りいらつしやいませんか」
折りかゞみなり言葉つきなり、かう云ふところに働いて、もう可なり久しくなるらしく、以前とは比べものにならないほど落つきもし、もの馴れてもゐた。
「えゝ、有難う。お前さんは……と、信次までは知つてたんだつけね」
「へえ、お生れになつて間もなくお暇を頂きましたけれど……」
「さうだつたかね。ぢア、あとまた女の子が一人ふえてね……。でもまア、仕合にみんな元氣にしてゐるよ。……お前さんはいつごろからここに……？」
「へえ、お邸からお暇を頂藏しましてからぢきに、親たちにやかましく云はれまして、一旦わきへ嫁きましたんでございますけれど……。あゝさう云へば、その節はまた奥様から、結構なお祝を態々お送りくださいまして……」
「さう？……いゝえ、なんでしたか……」
「まアどうでせう」
と、朋輩の方を顧みて、口もとに手をあてゝ笑ひながら、「五年も前のお禮を、今ごろになつて……」
先き、明かに反感をもつてさがつて行つた若い方の女中は、まづこの奇遇の、單純な驚きや、先方がひどく鄭重にする客に對して、新に生じかけた尊敬や、强ひて云へば自分ばかりのけ者にされたと云ふやうな、殆ど理由のない輕い困却や、話の先を待つ好奇心や、いろんな氣持を、少しの覆ふところもなく、素直な赤い頰にさらけ出してゐたところへ、突然言葉を向けられて、相槌でもうつどころか、吃驚したやうにうつ向いて了つた。
「へえ、それで……？」
信之は、普段は喫んでもよし喫まないでもすむのだが、一人旅の手持無沙汰に買つて來た敷島の袋を袂に探つて、不馴な手つきで火をつけながら、話のあとを促した。
「いえ、でも、お着きンなるなりこんなに喋り込んぢまつて、相濟みませんでした。……なんでございませう、當分御滯在くださるんでございませう？ またゆつくりお話に伺ふことにいたしますから……、どうぞまア、早速にお風呂をおめしなさいまして……」

七

「さアね、ぢアまア一ツ風呂あびて來ようか」
云ひながら立つて着物をぬぎかけると、手早く中前に浴衣を重ねて、うしろへ廻り、
「でもまア、ほんとうに不思議な御縁でございますねえ」
「うん、旅に出て知つた人に會ふつてものは、なんとなく氣丈夫になつて嬉しいもんだよ。……實はね、先刻から頻に考へてるんだが、どうしても名前が思ひ出せないんだ。お前さん、失敬だが、なんてつたつけね」
相手をてれさせないほどに調子よく笑ひながら、すぐ素直に答へて、
「はまでございます」
「あゝさう／＼、おはまさんさ……」
ふと、この女が田舍から出て來て間もなくに、うちのなかに起つた小さな事件が思ひ出された。――朋子の、洗面所の棚に置き忘れた金剛石入りの指輪が、ほんの僅の間に紛失して了つたのが、ことの發端だつた。元來信之は、そんなものをほしがる女の氣持はまたしもとして、指輪、――殊に金剛石の指輪などは大嫌ひだつた。趣味でもなんでもなく、たゞ富を指の間に

掲げてゐるやうな感じが可厭だつた。細君からその話を聞いた時にも、第一に、（それ見ろ！）と云ふやうな氣がした。それほど大切な品なら、金庫にでもどこにでもしつかり藏つて置くがいいのだし、さんざ人に見せびらかした揚句、ぞろッぺいにそこらに放りだして置くくらゐなら、見えなくなつたからと云つて、俄に泣ッ面をして騷ぎたてることはあるまい、とでも云つてやりたい氣持だつた。現に、誰にも喋らずに諦めて了へ、とまで云つたのだが、その時にはもう女中たちの間に知れ亙つてもゐたし、一つには、それが朋子の實家の母親から貰つた形身の品だと云ふ點で、信之も、さう／＼（態アみろ！）と云つた態度ですましてゐるわけにいかなかつた。仕方なく、警察に屆けるとなると、目見得に來たばかりのおはまは、一番都合の惡い立場だつた。關係者一同の目が、四方八方から自分ひとりの背にさゝつて來るやうに感じられたに違ひない。その時分、まだ兩親の在世中から勤め續けて來た女中頭格の婆さんがゐて、水天宮かどこかのお札を水に浮かして、その流れよつた方にゐた者が犯人だと云ふ、とんでもない吟味の方法を申し出た。途方にくれてゐた時は、ついそんなことも許す氣になつたとみえて、或る晩十一時頃に、信之が例の如く醉つて歸つて來ると、茶の間で、水を張つた金盥を眞中に置き、うちぢうの者が車座に坐り込んで、いざこれからと云ふところだつた。

「馬鹿！」

わけを半分聞くか聞かないに、いきなり彼は、金盥を立蹴にけとばして怒鳴りたてた。それで頼母しい氣がしたのか、その晩おはまは、書齋まで醉ひ醒の水を運んで來た序に、絨毯の上にぢかに坐り込んで了つて、自分には全く覺えのないことだから、なんとかして疑ひの晴れるやうにしてくれ、このまゝいつまでもじりじりと疑ひの目で見られてゐるくらゐなら、——暇をとると云ひだせば、猶更疑ひが深くなるばかりだし、どうにもかうにも身の細るほど辛いから、いつそ死んでしまはうかと思つてゐる、などと、涙を流して訴へた。初ッから、誰一人疑はうともしなかつたほど、その事件に冷淡だつただけに、それまで、この目見得中の婢の、氣の毒な立場にも、全く氣づかずにゐた信之は、それを聞くと、すつかり同情してしまつた。

八

第一その眞劍な態度には、これんばかりの嘘もなく、この婢の仕業でないことは、明かすぎるほどに明かだつた。それからは、刑事がうちに調べに來たりすると、おはまに代つて、信之は一生懸命辯護に努めてやつたものだ。果して、半月ほど後に、質屋から足がついて、出入りの魚屋の若い者があげられた。勝手口へはいる露路に面した洗面所の窓を覗くと、ちらりと指輪が目についたばかりに、ふとした出來心で、乘つてゐた自轉車を踏臺にして、格子の間から盜んで行つたものだと云ふことまで知れた。品物も、質屋から買ひ戻すことが出來た。信之は、前から氣に食はなかつた老つた女中頭に、なんとつかず暇を出して了つた。——これが事件の大體だつた。

紀尾井町に勤めてゐた間ぢう、おはまはひどくこれを徳として、旦那樣の御用と云ふと、何を措いてもまめ／＼しく働くと云ふ風だつた。さうされゝば信之の方でも、一層目をかけて使ふことにもなつて、仕舞には、はたの女中たちの猜みが目につくほどだつた。——だん／＼に、そんなことまでが思ひ出されて來ると、忽ちもう旅の心細さなどは、どこかへ飛んで行つて了つた。

「お前さん、こゝに來てから、もうだいぶんにな

るのかい？」
丹前に手を通しながら、信之は打つて變つた機嫌顏を振り向けて訊ねた。
「へえ、いつの間にかもう丸三年になりますから、どつちかと申せば、古顏の部になつて了ひました。ほんとに月日の經つのは早いものでございますわね。お坊ちやま、さぞお大きくおなりで、お可愛らしいことだらう、なんて、始終ひとりで思ひ出して居りますのですよ」
「もうすぐこの四月から學校だからね、憎まれ盛りで、手におへたもんぢやアない」
「まア……。ほんとに一度お伺ひして、久し振りで皆樣のお顏が見たくつて仕樣がないんでございますよ」
信之は手提鞄の前に中腰になつて、手拭や石鹼を取り出しながら、
「おいでなさいな。お客の立込まない時分なら、一晩や二晩暇がとれないことはないだらう。是非一ぺん泊りがけで遊びにおいでなさいなね」
「えゝ、有難うございます。是非お伺ひいたしたいと思つて居ります。……お廣さん、あなたお風呂場に御案內申してね」
「こゝは、なんですか、女中さんは、矢張り部屋部屋で係りがきまつてるわけですか」
「えゝまア、凡そはさうなつて居るんでございますが、忙しい時分にはお互にすけ合ひますから……」
「ぢアお廣さん……つて云つたね。あなたがうちの主任と云ふわけかい？」
「主任……」
と、おはまは、信之の脫ぎ捨てた着物の始末をしかけてゐた手をとめて、態々身を起して笑つてから、「この主任さんが來てからまたあんまり間がございませんのですから、氣のつきませんところは、どうぞ御遠慮なくさう仰有つてくださいまし」
そんな風に話題にされて、はにかんでもじもじしてゐたが、やがてその若い女中を先にたてて、信之は、幅の廣い廊下に上草履を鳴らして出て行つた。
風呂場の前まで來てみると、俄に舊い記憶がありありと蘇へつて來た。
「あゝ、さうさう、もう分つた分つた」
云ひながら、觀音開きの、後で仕掛ではね返るやうになつた自在戸を彼方へ押して、一足ふみ入れるなり、信之はぴたりとそこに釘づけにされて了つた。

九

一段下つて、八疊間ほどの廣さになつてゐた。左は洗面所、右は四つばかり並んで風呂の入口がついてゐる廊下で、正面の板羽目に、洗面所の側と直角に交はる斜線で、そこへ大きな姿見がかゝつてゐた。
自在戸の上の半分は硝子になつてゐたから、その鏡の前に、人が立つてゐることだけは、湯氣に籠つて曇けながら、あけない先から目にはいつてゐた。——湯あがりに、いま浴衣をはおつたばかりか腰紐もしめず、けれども、浴衣の下をちよいと腿の間にはさんで立つた後つきの、きちんと帶をしたよりも、却つて足腰の形を露に、ぶはつく胸の脇から上も、うつ向き加減に兩手を束髮のルイズのあたりへあげてゐるせゐで、肩胛骨のありかまでそれと分るほど艶めかしい姿を前にしては、ひよいと踏み込んだ足をそのまゝに、信之はそこへ立竦んで了つた。
……正面の板羽目が斜線だけに、肩ごしに見える耳から頰へかけての、煙つたやうに粧い襟、……よしそれは隱れてゐようとも、縫ふかたもなく、それはお浴の骨格たつた、そして肉つきだつた。
生憎とまた、自在戸の發條が、ギイーと無遠

慮に鳴つて了つたあとだつた。……咄嗟に信之は、どう自分を處置していゝものか、まるで見當もつかなかつた。煙にでもなつて消えて了ひたい思ひだつた……

親の仇と云ひたいほどの、窪井謹五郎が女とは知れた、――が、それで惚れた女が遂に嫌ひになれるものではなかつた。知らぬ以前は兎も角も、知つてなほ、殊に他人のもちものに通ふさへ、信之の性分としては、心苦しい限りなのに、そのうへ相手が窪井では、あの世へ行つても、親父にあはす顔がないほどに思ふのだが、それでもなんでも、別れられなかつた。

腑甲斐なさに、我から髪の毛を掻き挘るやうな思ひの幾夜を明しても、矢ッ張り好きな女は好きに違ひなく、二人の心が渝らない限りは、假令ぶすま、白刃の間の上ででも、相見えようと願ふに違ひはなかつた。その愛執の前には、親父も窪井もあつたものではないのだが、一緒にゐてさへ、思はずほつと深い溜息をもらすやうなことも、決して稀ではなかつた。何よりも彼より、信之には、死んだ親父の顔へ泥を塗る……といつた氣持が、遣りきれない捨木だつた、そこへあたまが向くと、忽ち世が、生きながらの地獄となつた。

あゝ……―

つく息さへ黝ずみ震へた。

―また〳〵また！　どうぞそれは考へないで！　きつとあたしちやんときまりをつけますから……ね？　ね？―

―それほど義理つてものは重いかな。たかが金だ、つて氣にはなれないもんかなア―

―でもね、これまでにあたしを育ててくれた姉さんへの義理は、またさうばかりも考へられませんからね―

―だからあたしが……―

―いゝえ、それは駄目！　あなたが出ては却つていろ〳〵事が面倒になるばかりだから、……あなたのお辛いのは、よウくあたし解つてるんですから、さぞ歯痒いでせうけれど、もうちつとのま辛抱してくださいね。決してあたし一日のばしにほつたらかしてるわけぢアないんですから。なんと云つても、姉は姉ですし、決して芯から惡い人ぢやアないんですから……―

―それアさうだ……―

そこへ話が行くと、いつも必ず信之は、何故かぽつんと言葉を切つて了つた。

十

さうして、結局ずる〳〵べつたりだつた。近頃では、破裂し易い爆弾のやうに、どちらからもその話に觸れることを怖れるやうな氣持で、而もそれが二人の間に置かれてゐると云ふ意識は、いやが上にも、凄いほど冴え返つてゐながら、堅く口を禁んで、それで矢ッ張り逢ひ續けて來た。つい三四日前に、最後に逢つた時には、丁度信之は、京大阪の旅ばかりを心に描いて、明日にも出かけたい氣持でゐた折だつたので、その通りを話して別れたのだが、お濟の方からは、旅の夕の字も、箱根の八の字も云ひ出しはしなかつた。たゞ一日も早く歸つて來い、などと、そんなことばかり云つてゐたのだ。

それが……、信之は、カアンと一つ、腦天に鐵槌を喰つた氣持で、思ひもかけぬお濟の後姿に見入つて立ちつくした。

案内して來た女中は、それを、婦人客に對する禮儀からの躊躇とでも思つたのか、うしろから聲をかけて、

―どうぞ……、どうぞお構ひなく……―

その時には、信之の眼も据りかけてゐた。まるで氣もつかずに奪ひ込んだやうに、平氣で敷居を踏み鳴らして近よつて行つた。

髪に手を挙げたまゝ、ひよいとお濟は振り返つた。――と、まるで幽靈でも見たやうな顔つ

きが、輕くあいた唇の間に、息の通ひも止まつたかと思はれるばかり、硬く凍りついて了つた。

「今晩は……」

不思議なくらゐ信之の氣持は、急に平靜なものに抜け返つて、自分でも氣がつかないうちに、笑ひ顔にさへなつてゐた。「どうして……？ いつ來たの？」

皮肉のつもりでもなんでもなく、さう云ふ日常茶飯の言葉がすら／＼と出た、それで、一秒でも早く、お澄の心を平かにしてやりたいと、そればかりが願はれた。……けれども、急にお澄は、右手を袖のなかにひつこめると、それでいつぱいに顔を覆うて、くるりと彼方むきになつて了つた。あとに、信之は、ひよいと自分の顔を見た、……不自然な、醜い笑顔が、鏡のなかに映つてゐた。

（ふうむ、さうか、矢つ張り俺の方もか……、それぢア仕樣がない！）

この態も、これが破局か、と云ふやうな氣持が、ひやりと胸へ來た……。浴衣一枚で彼方むきに立つてゐる女の方へも、突ッ張つたやうな醜い自分の笑顔にも、目の置きどころがなくなつた。ひとりでに歩きだしてゐた。さうすると、どの浴室があいてゐるのかしら、とそれが氣になりだした。――つまりそれは、酒井がそこにはいつてゐるだらう、と云ふ懸念と同じことだつた。生憎じやぶり／＼、ふた所ともに、湯を使ふ音がしてゐた。さうかと云つて、いつまでもまご／＼してゐられもしなかつた、構はず、一番手近の開戸へ、コツ／＼と拳固をあてゝみたが、その途端に、なかからぐいと推しあけられる、――と、タオルの西洋浴衣の袖へ手を通さずに、前を掻き合せ、懷中で褄をとつたやうな具合に、毛脛がむきだしになるまで裾をたくしあげた小男と、眞正面に顔を見合せて突ッ立つて了つた。中からの熱で、周圍にほや／＼と殘つた湯氣が、やけにタオルで拭き切つたばかりとみえて、有らゆる方向へ靡いてゐた。一つはその故で面變つては見えたけれど、十年以前に二三度見かけたことのある、これこそ酒井謙五郎に相違なかつた……。

十一

「や、これア失禮」

口には、さらりと、世間普通の挨拶を述べてゐたけれども、心の面を逆撫にたてあげられたやうなむしやくしやした不快が、信之の高く秀でた眉宇の間に露だつた。――今が今まで、どの浴室に酒井がゐるか、うつかりそこへ飛び込むやうなことがあつては……、との懸念をもつてゐたと云つても、何もお互ひのつれが、十が十まで酒井ときまつたわけでもないのを、一概わるい場合の想像をして置けば間違ひない、と云つた氣持から、強ひてもそれにこだはつてゐたのだ。それだのに、自分にも意識したくない心の底の底には、ひよつとすれば、おもんやお直と一緒に來てゐるのかも知れないと、そこは懸目と云はうか、萬一の僥倖も望んでゐたのだ。それが、不思議な顔を見合せ、言葉をかけると背を向けられて、手ひどく裏切られた揚句でも、なほかつ一種の望として殘つてゐたのだが……

思はずギクツとその小男を睨め返して、出入口を開いて通さうともしずに、信之はそこに、仁王立に突ッ立つてゐた。先方でも、へんなやつだな、と云ひたげな顔つきで、尺でもとるやうに、頭のてつぺんから足の爪先まで、大きく飛び出した目の玉をキヨロリと動かしたが、いやに底力のある聲で、

「や、お待遠さま……」

と、無愛想に言葉を返すなり、自在戸をもう一つ勢く推しあけて大股に歩み出しながら、「あゝ

やつとこれで、少しはものゝ食へさうな腹になつた……」

それをなかば聞き捨てに、風を起してあつちこつちへ煽り返す自在戸を、やけにグイと押してはいつた信之は、モウ〳〵と立籠めた湯氣に、電燈の光さへ薄暗んだ浴室の、誰一人の眼もないところで、いきなり拳固を振りあげると、力いつぱい撲りつけた。……ミシリ……

それは、はいるとすぐ目の下に浴槽が見おろされないために、凡そ身の丈ほどに建て廻した目隱だつた。その、杉柾の四分板が、縱に割れめがはいつて、へこんで了つた。——蒼白んだ信之の頰には、ちよつと苦笑ひが浮かんで、すぐ消えた。

（馬鹿！　馬鹿！）

せめては、自ら嘲ることの痛快さに、堪へ難い憤懣の情をやるよりほかなかつた。（こんな馬鹿は、あいつらのはいつたあとの風呂へでも飛び込んで、溺れ死んで了ふがいゝんだ！

……けれども、流石に、その浴槽には、身を浸す氣にはなれなかつた。一二秒躊躇した末に、またもや手荒く自在戸を押して出ると、そこにまだゐる筈の男女の方へは、ちらとも目を向けずに、すぐ隣の浴室へ飛んではいつた。——實際そこに、二人がゐたのやらゐなかつたのやら、……西洋浴衣の白さだけでも、視野の中に感じはしなかつた。そのくせ彼の耳は、ギイーンギイーンと響けるやうな、窪井の太い聲を掬ひ込んで來て了つた。そのことが、ひどく忌々しかつた……。

いゝ按配に、今度の浴室はあいてゐた。帶をときかけた時に、ふと信之には、こんな考が閃いて來た……。きまりをつけて了はう。綺麗に話をつけてやらう。丁度いゝ機會だ。正々堂々とこつちから名のつて出て、……あとは臨機應變だ。先方の出やうによつちア……、そこまで來て、急に心が淋しく暗んで了つた。——あれほどぴつたりくツついてゐたつもりのお澄の心のなかが、いつのまにか信之には、一さい見當のつかないものになつてゐたのだ……。

十二

愛する者の心を見はぐれる、——さう云ふ淋しさの底に、いつも必ず待つてゐる氣持があつた。それはひえ〴〵と冷たかつたけれども、さうかと云つて、決して可厭な氣持とばかりは云ひ切れなかつた。度重なるにつれて、信之にとつては、却つて、身のしまるやうなほろ苦さで、しん〳〵と冴え返つて來る質のものになつてゐた。

……ひとりだ、なんと云つても、結句人間は、ひとりツぼつちのものだ。水も洩らさぬ、と云ふほどの仲でも、二人めい〳〵に、どうにもならないひとりツぼつちの寄合なのだ。親子の間、夫婦愛人の仲、……三世の縁とまで呼ばれる主從の結ばりなどは、今の世には見聞くも稀で、一世はおろか一年でも、二人の人が、——男女の仲に限らず、男同士女同士の親和だらうとなんだらうと、どれほど堅い結ばりでも、一年と續く間に唯の一度、（あゝあ、なんと云つても、最後までたよりになるのは矢ツ張り自分ばかりだ、結局ひとはひとだ！）と、しみ〴〵ひとりツぼつちの感慨にうたれることがないとすれば、それは既にこの世の仕合ではなくて、天上のものだ、聖賢か愚者か、そんな普通はづれた人でもなければ、めつたに享け得られない仕合だ、——とは諦めてゐても、なみ〳〵の心境には、ひとりツぼつちの淋しさに、よく堪へ得るものではなく、懲性もなく愛しては、天上極樂の夢に遊んで、ふとまた現世のひとりツぼつちに目を覺ます、眞に粟を炊ぐの間さへないのだが、獏のやうに、人はまた夢なしには生き難いものとみえる。夢みての淋しさ苦しさか、いか

に焦くが如くであらうとも、喉もと三寸、時ふれば忽ち忘れ去る熱さなのも、自然の恵みか惡戯か、憂しとはいへど凡夫の身には、そこらの故を以て住みよい浮世と觀じなければ、それこそ罰を被るところだらう……。

そこへかけての慾性のつかたさ加減を云つたなら、信之は、決して人後に落ちない方だつた。彼が何より彼より大切にしてゐる眞心で、ひた押しに押し進み、一人相撲の力足を、一生懸命に踏みしめてみても、末は、見るも氣の毒ッたらしく、すッてんころりとけし飛んで、足腰の痛みに額を顰めるくらゐがおちなのだが、不思議なことには、まだその傷所も癒えないうちから、次なる異常をとりたて御覽に入れるにあたつて、嘗て一度たりとも、また一人相撲か！）と、しぶ〳〵ながらに起きあがつたためしはなく、（今度こそは！）の必勝を期して、喜び勇んで四股を踏み、矢聲もろとも跳びかゝるのだが……。

（よし、それぢアいよ〳〵ひとりだ！　世に、ひとりほど強いものはありやアしない、ひとりになつて……）

から、信之は考へた。（ひとりになつて……）と云ふのは、（實際まだひとりッぽつちかどうか解らないが、假にひとりになつた氣で……の意味だつた。——そこまで來ても、まだお澄の心から離れッきりにはならなかつた。裏にどう云ふ事情が潛んでゐるのか、少しも知らない、また強ひて知らうともしない自分なのだ、いま偶然目の前に見た事實だけで、すぐさまお澄の心までを疑つては相濟まない、——一方には、そんな反省もあるにはあるのだが、然しそれはなんとなく弱々しい力しかもち得なかつた。同時にまた、その弱々しいものをも、力綱にして取り縋らうとしてゐたのだ。

（……ひとりになつて、あの男の前に立たう、ひとりほど強いものはない。さうだ、あの男と會つて話をしよう……）

十三

さう心をきめて、信之は、ときかけてゐた帶を締め直した。

（馬鹿らしからうとも、間拔じみて見えようとも、そんなことは構はない。成心をつくらずに、生地のまゝで應對しよう。それが何よりも肝心なことだ！）

いつか亢奮しきつて、武者震ひのやうな體の震へが感じられるだけに、一方そんな考へをも保たうとしたが、（それが既に一つの成心ではないか、なんにも考へずに、一時も早く出て行け）と、さう促し立てる別の氣持もあつた。例へば有難い護符でも頂くやうに、たゞ深い息を一つ腹の底まで嚥みくだすと、信之は少しの躊躇ふところもなく、浴室の戸を押して出た。

そこでは宮井が、鏡の前に立つて、半白の薄い髮を、左から禿の上に搔き並べることに氣を奪はれてゐた。手早く身じまひを終へて、先に部屋へ歸つて行つて了つたものか、お澄の姿は、もうそこには見えなかつた。これは、信之にとつては、寧ろお誂へ向きの寸法だつた。

「突然で、大へん失禮ですが……」

つか〳〵と、つい二尺とは離れないそばまで歩み寄つて、いきなりから言葉をかけた。

「はア……？」

櫛を持つた右の手を、頬のあたりまでさげて、じろりと見やつた眼つきには、胡亂臭いと云ふ以上に、やゝ狼狽たやうな色さへ見えたが、すぐ大した事でもないと思つたか、ぐいと顎を突き出して、自分より五六寸も丈の高い信之を、無理にも下目使ひに見あげながら、「何か御用ですかな？」

「あたしは藤代信之と申すものですが、貴方は宮井さんぢアいらつしやいませんでせうか

「左様、わしは窪井ですが・・・」

—さうですか。紹介状なしに、またこんな廊下のやうなところで、突然言葉をおかけ申すのは、重々失禮ぢアございますけれど、實は貴方に、折入つてお話し申しあけたいことがあるのですが・・・」

—はゝア、どう云ふ御用件ですかな？—

「こゝではちよつと申し述べかねるのですが、今夜なり明朝なり、ちよつと一二時間お暇を割いて頂けませんでせうか—

「左様さ・・・」

指の間に櫛を挾んだまゝの手で、短く刈り込んだ口髭を引ッ張りながら、もう一度あらためて、眞正面から無遠慮に、じろ〲相手の容子を觀察してゐたが、「失禮ながら、一體貴方はどう云ふことをなすつておいでなんです、つまり御職業は・・・？」

「辯護士です」

「はゝア、成程・・・。で、御用件のあらましは？—

—あらましと云つては申しあけ悪いのですが、武井澄、あの人に關したお話です—

—ふゝむ—

と、大風に鼻音で答へると、急に言葉使ひまでがぞんざいになつて、—普段忙しい人間が、たまさかかうして氣晴しに出て來とるんだから、どう云ふお話か知らんが、・・・なんなら、東京の事務所の方へ來て貰はうよ—

—いゝえ、別段そんな面倒な話ぢアありません。もしなんなら、今すぐこゝで申しあげてもいゝのですが・・・—

—まさか立話もなるまいて—

窪井は、小さな體を揺りあげ、柄にもない豪傑笑ひをして、ぷいと鏡の方へ顏を向けて了ふと、傍に人がゐるとも思はない顏つきで、またもや頭に櫛の歯をあて始めた。

十四

「でもまア、要點だけでも聞いといて頂きませう」

ぬらりくらり脱けて行きさうな氣勢と見てとると、信之は、何は措いても目打錐を一本たてて了はなければと、頻に氣を苛つたが、さてその「要點」と呼ぶに適はしいやうな言葉に、自分ではたと行きづまつて了つた。けれども、一瞬間でもそこに隙間のあけられる場合ではなかつた。自分でも、カッと取り逆上せて行くのが感じられながら、もうどうにも取返しがつかなかつた。「・・・つまりなんです、あたしは・・・、あたしはお澄と、・・・云ふことが、・・・そのウ、つまり・・・」

無殘にも、しどろもどろになつて了つた。それに對して、悠々と姿見の前から向き返つた窪井は、刃に釁らずして、既に敵の咽喉を扼したやうな優越に、氣持が、ぬく〲と、十分にふくれあがつてゐた。

—どうしたんだね、君とお澄がどうしたと云ふんだね？—

—つまり・・・—

「つまり・・・？」

「大嫌ひな言葉で使ひたくないんですが、つまり、關係があると云ふんです」

「關係？ それア一體、どう云ふ關係があると云ふんだね？ 一口に關係と云つたつて、關係にもいろ〲あるからな・・・—

落つき拂つた意地の惡さで、ニヤリともしずに迫ひ迫つた。

「云ふまでもなく體の關係を云ふんです、・・・情交があると云ふんです」

やけくそな氣持で、思ひきり露骨な言葉を、自分たち自身の上へ投げつけて了つた。

「ふゝうん—

もう一度、例の大風な鼻音で答へてから、で、それがどうしたと云ふんだね？—

「それが、貴方とは全く沒交渉な話でせうか」

　それにしても、挑戰的に出たのはよく／＼のことで、信之は、一旦の逆上から、ずる／＼と滑り落ちて了つた窮地は、容易に脱出られさうもないのだつた。

「さう、交渉があると云へばあるし、ないと云へばないやうなもんだが、一體そんな話を、態わしの前に持ち出して來た目的がね、――」

「それから先に伺はうぢアないか」

「あなたとお宅との交渉を、きつぱり斷つて頂きたいと思つてゐるんです」

「はゝア、……然か君は辯護士をしてゐるとか云つたやうだが、一體どう云ふ權利があれば、そんな要求を、やたら他人に對してすることが出來るものか、後學のために、そいつを一つ承はつて置かうか」

「もとより權利義務の問題ぢアありません。ただあたしは、眞心をもつて、貴方の眞心に御相談ねがひたいと思つて、それでこんなところで、突然な言葉をかけたりしたのですが、目的はどこにあるかと仰有られたので、間の細かな心持をはぶいて了つて、いきなり最後のお願ひに飛んだものですから、それであたしの言葉が、『要求』と云ふやうな、ぶしつけな感じのものに響いたのでせう。然しあたしの心持は、決してそんな、『要求』と云ふやうな大風なものではないのです。そのあたしの心持を、ゆつくり聞いて頂きたいと思つて、それで一二時間のお暇を願つたわけです。先潛りをした申分で、自分でも大へん不愉快ですが、どうか[illegible]しいことを云ひ出すではなからうか、と云ふやうな御心配なら、決しておもちくださいませ……いま初めてお目にかゝつたばかりで、こんなことを申したつて、誰だつて信用してくれる人はないかも知れませんが、決してあたしは、そんな狂亂な人間ではございませんから……」

十五

　心おきない友達との雜談の場合は別だが、今時の若い男としては、信之の言葉使ひは、わりに鄭重な方だつたし、殊に年長者に對つては、たゞそれだけの理由で、一應の敬意を表すことを忘れなかつた。父の恨みもあり、いま眼の前に、難攻不落の地の利に安心しきつて、のしかかるやうに傲然と構へこんでゐる笹井に對しても、憎惡の情が重なり充ぶるほど、表面の禮儀は勿論、心持の潤ひ、纖細さをも失ふまいとした。

「出來ないね、要求者は、自分の要求する時は[illegible]決して同道[illegible]はしない」

　[illegible]自分自身に云つて聞かせたりして、一生懸命心を落つけようと努めた。

　笹井は、然し、ゆすりではないから安心してくれと云はれた言葉を、たゞそのまゝ素直には受取らなかつた。[illegible]氣持をこぢらしてゐた。

「わしには、他から乘ぜられるやうな弱い尻はもつて居らんし、從つてまた君を、ゆすりだなんぞと思ふ理由もないんだから、その點は君こそ安心したがいゝのだ。……ところでその眞心からの御相談とか云ふやつだが、そんなことで一二時間も暇をとられちやアやり切れんよ。然し斷つてと云ふなら、今夜でもわしの部屋に來たまへ。そして、ひとつ要領よく手短に願ふとしようぢアないか。何しろこつちはたまさかの暇に、氣保養に出かけて來てるんだからね、いつまでもぐづり／＼つまらん愚痴を聞かされるのはかなはんよ」

「早速御承諾くださいまして有難うございま

す。では、何時頃御伺ひいたしましたらよろしいでせうか」

「さう、これから晩飯をやるから、…さうさ、今から三時間ほどしたら出かけて來たまい。……いや、いゝ時分にこつちから迎ひをあげよう。なんとか云つたね、君の名は？」

「藤代信之と申します」

「藤代…ふゝん…」

そのとき窪井は、ふと何か思ひついたらしく、こと改めて信之の顔をぢつと見詰めた。――いよいよ、一番痛い瞬間が近づいて來たことを、信之は直覺した。同時に肚の底から、じりじりと湧き起つて來る勇氣をも感じた…。

「君は、…君の阿父さんは、いま生きてゐなさるのかな？」

「いゝえ、もう居りません」

「生きておいでの頃は、どう云ふことをして居られた方かな？」

「あつちこつちの會社に首を突ッ込んで居りました」

「はゝア、ぢア…？」

さうです、御推察どほり、[illegible]の倅でございます」

あゝ、さうかい、そんなら君、初ッからさう云つてくれりやア…」

その他の親しみと、懐しげな容子には、些の嘘もなかつた。殆んど手を把らんばかりにそばへよつて來た…。

これは、幾度となく描き變へられた信之の空想のなかに、全く似よりのものさへなかつた光景だつた。

はツと胸のあたりが熱くなつたと思ふと、もうこらへる暇もなく、眼のなかいつぱいの泪になつてゐた。眞正面に近よつて來た窪井の顔も、ギラギラと泪に映る光のために、忽ち消えて了つた。…しばたゝきもしないのに、筋を引いて、熱い泪が頰へ流れ落ちて來た。

十六

好意をもつて對つた人に、惡意で報はれた場合の淋しさは、いかにそれが救はれがたく辛くとも、どこかまた痩我慢に似た底力の、撥ね返さうとする氣勢だけでも感じられるものだが、反對に、好意で報はれた優しい敵意ほど始末にわるいものはない。云ひ換れば、「一人を見たら泥棒と思へ」の人生觀で對つて行くと、存外それが大違ひで、結局「渡る世間に鬼はなし」の實感に、しみじみ嬉しくなつた時の、己を恥ぢる氣持、「穴があればはいりたい」と云ふやつだが、もともと人は、なにも好きこのんで惡意や敵意をもちたいわけではなく、望んでも得られないと思へばこその、先潜りの用心から、故ら着せかけた衣だけに、脱ぐひになれば、さして氣咎もしないで、たゞもう嬉しさに溺れて了ふ…。

信之の嬉し泪もそれだつた。今が今まで、窪井を可厭なやつとばかり思ひ込んでゐた自分について、とかくの反省はさて措いて、思ひの外の善良さに、手も足も出なくなり、誰に捧げるともない嬉し泪が、たゞだらしもなく溢れて來るのだつた。

けれども窪井には、その泪の意味が、妥當に汲みとれたかどうか、俄に言葉を改めて、

「いや、これアどうも、全く意外でしたな。貴方が藤代さんの、…さうですか、…ちつとも存じませんで、つい失禮ばかり申しましたが、どうぞまア惡く思はないで下さい。…御尊父さんの御在世中には、實に一通りならない御眷顧にあづかつたもので、いや、全くお見かけ申した立派な御人格の方でしたよ。吾々後輩一同、常に大人の御教訓で、どれくらゐ啓發されるところがあつたか知れません。いまだに事にふれては、大人のお言葉をしみじみと思ひあたることがありますよ。いや全く、えらいお

方でしたな……

こんな風に、引延ばされた言葉で聞いてみると、然し、今さつきの懐しげな容子までが、ほんの見せかけだつたかと疑けれるほどに、窪井の感情の平靜さがむきだされてゐた。なんとなくそら／＼しくて、聞いてゐる方が恥しくなるくらゐだつた。どつと一時に溢れて來た泪も、それでまた忽ち乾いて行くのを、信之は、しみじみと淋しく感じた。何もう云ふことがなくなつて了つたやうな氣持で、默つて頷き返すばかりだつた。

「で、貴方、いつこちらへおいででした」

「たつた今ついて來たばかりです。貴方がたのおいでのことは、全く夢にも存じませんで……」

「ぢア、無論まだ御食事前でせうな。……うん、それア丁度よかつた。お近づきのために、御一緒に食事をいたしたいと思ひますから、どうぞその御都合になすつてください。支度が出來次第、こちらからお迎ひを差あげますから、失禮ですが、どうぞ是非部屋までお出かけくださいませんか」

「有難うございますが、お食事のおすみになつた時分にお伺ひいたしませう。親父との御交際はそれとして、今夜のところは、唯今ちよつと申しあげたやうなわけで、こちらから無理にも御面會を願つたやうなわけですから……」

「まア、さうお堅く仰有ることはないでせう。食事後に、そのお話もゆつくり伺ひますが、同宿のよしみだけでも、よんだりよばれたりするくらゐは普通でせうからね。まして藤代大人の御子息と伺つたからは、是非ともお近づきのお盃も頂きたいし……」

「さうですか。それほどに仰有つてくださるのをお斷り申すのも却つて失禮ですから、それでは、御遠慮なくお伺ひいたすことにいたしませう」

十七

二時間ほど後には、六十歳を越して少しも精力の衰へを感じない商魂商才で叩きあげた實業家と、その男のために、金で自由を縛られてゐる女と、またその女との相思の愛情を、堅く信じて疑はない壯者と、かう云ふ三人が、而も互にその三角關係を承知して、ひとつ食卓に差向つたと云ふ、不思議な晩餐の光景が展開されてゐた。

床の間を背負はされた信之は、丹前浴衣を、結城のちよい／＼着に改めて來てゐた。主人公は、丹前の上から、お召の縫紋をはおつて、大島に、古代紫がかつた鹽瀬の袱紗帶を、安易な氣持に低くしめ、湯あがりの薄化粧に、頬の血色をほの紅く浮いた圓顏を、そば近く侍らせて、そろ／＼もう機嫌よく酒が廻りかけてゐた。それまでは、生前奇行の多かつた信策の思出などが、主な話柄になつてゐたが、——勿論さう云ふ話の聞き手として、信之は、誰よりも興味をもち、また嬉しくも思ふものだつたが、やがて持ち出さなければならない問題が胸につかへてゐるので、さうは氣も引きたゝず、頻りと勸められる酒にも味はなかつた。第一、いつも、おい、お前あゝしろかうしろと云つた調子で對してゐるお澄を、彼の女の旦那のそばに置いて、しかつめらしい顏を見合せてゐるのからして、尻こそばゆい思ひだつた。それもいつそ三人きりならば、最後には、事實ありのまゝの關係をむきだしに、自由な口の利きやうもあらうと云ふものだが、丁度この部屋の受持におはまが廻つてゐて、事々につけて信之のうへに氣を使つてくれるのが、例へば何かの出演に、見ず知らずの他人よりも、内々の人に見てゐられる方が、逢に氣つまりでもあれば、てれ臭くもあるやうなもので、どうにも底を割ることの出來ない感じがあつた。

いつまでも畔井が盃を廻してよこすので、食事が永びき、たうとう仕舞には、一座に倦怠の色さへ漂ひ始めた。

「いかがでせう……」

と、信之は、それ故に口を切つて、「先刻申しあげといたお話をいたしたいのですが……」

「はア、はア」

畔井は欠伸を噛み殺しながら、「えゝ、伺ひませう。……ぢア、君はちよつと遠慮して貰はうかね」

で、おはまは、低聲に何か云つて、膝の上に持つてゐた銚子を、お澄のそばへ押しやると、一先さがつて行つた。

「早速ですが」

と、信之は、居ずまひを正して話しだした。

「一應事實を申しあげますと、もと／＼あたしは、お澄……、お澄さんに、貴方のやうな方があると云ふことは、全く知りませんでした。つまり、當人が話してくれなければ、あたしとてそれを知る筈もなかつたのですけれど、この正月の末に、——好きになつてから丁度二十日ばかり經つてからですが、偶然の機會で、はたから貴方のことを聞いたので、今のうちなら別れられないことはないと思ひまして、その晩早速出かけて行つたのですが……」

お話なかばですが、さう云ふ具體的なことは、もう伺ふ必要がなささうですな。どうでせう、いきなり要點へ飛ばうぢアありませんか。……貴方は、あたしを、所謂戀仇のやうに憎んでおいでですか、それとも、あたしに對して心苦しいとか濟まないとか云ふやうな氣持でおいでなのですか、それともまた、そんなことはもう問題ではなくつて、どうでもからでもお澄を自分ひとりの所有にして了ひたい、と云ふ御希望なのですか。それ次第であたしは、卽座に決着の御返事をいたす考へでゐますがね。お澄はもとよりのこと、先刻からの御容子で、失禮ながらあたしには、貴方と云ふ方の御氣性もよく嚥み込めてゐると思ひますから、大して間違つた計らひはいたさないつもりですが……」

十八

有繫に、いざとなるとしつかりしたものだつた。お座なりや誤魔化しは、藥にしたくも見出せない畔井の言葉に、豫期のはづれた信之は、やゝ面喰つた氣味だつた。こつちも、もう一度よく／＼考へ直してみて、その上でなければ、うかとは口が利けない、——さう云ふ感じだつた。

不思議なことには、當然それであるべき第三の場合、「どうでもからでもお澄を自分ひとりの所有にして了ひたい氣持が、實感として、胸いつぱいに溢れては來ないどころか、却つて干潮のやうに、さら／＼と遠退いて行くのが感じられた。何故だか解らなかつた、たゞそれが嘘のないところだつた……。

（こゝだ！　くだらない負惜みを出して、ちよつとした恥を、二倍にも三倍にもするやうなことがあつちアならないぞ！　構はないから、なんでも正直にやッつけろ）

さう決心すると、急に心がさば／＼と輕くなつた。

「猫の目のやうに、くる／＼云ふことが變つて、——まるで子供みたいで、いかにもお恥しいわけですが、考へてみると、この問題に貴方を引ッ張り込んだのは間違ひでした。若しあたしたちが、どうでもからでも一緒にならうと思へば、失禮ながら貴方に御相談申すまでもなく、疾の昔にその意志を貫いてゐなければならない筈です。今日まで、なんのかんのと自分たち自身を誤魔化して、曖昧に逢ひ續けて來たことは、それが取も直さずあたしたちの心持の程度を、最も正直に物語るものでせう。お恥しい次第

ですが、どこか一本も二本も足らないところのある、いゝ加減な氣持だつたのです。……お澄さん、貴方さうは思はないかね？」

お澄は襟に目を落して、默つてゐた。自問自答の時間を與へるために、男たちは、可なり永いこと待つてみたが、その容子には、答へようとする意思さへも感じられなかつた。

「いや、全く仰有る通りだらうと思ひます」

と、窪井が、たうとう待ちかねて口を切つた。

「よくさう男らしく、眞ツ直に仰有れたことだと、內々感心いたしながら伺つて居りました。仰有る通り、意思はあつたが方法がつかなかつたでは、申開きは立たない道理です。お澄だつて、どうでもかうでも貴方の方へ行かうと云ふ氣なら、さうきつぱりあたしに斷ればすむことです。それをいつまでも愚圖々々してゐたのは、その意志がはつきり確定してゐなかつたからでせう。これは、お澄に代つてあたしから斷言しても、あながち依怙の沙汰にはあたるまいと信じます。……ところで、問題はまだ將來にかゝつてゐますね。今後もし貴方がたが逢ひ續けて行くものとすれば、そのうちには、またどう變つて來ないものでもない。將來のことは、それが現在に來るまでは何も云へない、と云つて了へばそれまでだが……」

「あたしにお暇を頂かせてくださいまし」

その時お澄が、窪井の方へ、きつぱりとかう云ひ放つた。餘り唐突なので、窪井も信之も、氣持のあるところを汲みかねて、默つてゐると、すぐにあとを續けて、「繭代さんにも、もうこれきりお目にはかゝらないつもりです。おふた方のおかげで、あたしにも、ぼんやりながら自分と云ふものが解つて來たやうな氣がいたします。これからは、あたし、男の心持になりませう。仕合な結婚でもしない限り、それでなくては、とても女は生きて行かれません……」

「違ふな、その悟りには、あたしはちつと贊成しかねるな」

から信之が口を出したけれども、お澄は耳にもかけなかつた。

「もうこれからは、きつと一人でやつて行きます。この世の旅には、つれなんてものは、決して出來ないものと思へばすむことなんですから」

裏切者

一

旅に出てみて、信之は、心もからだも勞れ切つてゐる自分だと云ふことに、今更ながらつくづく氣がついたのだ。

……昨夜、まだいつぱいに力を出しきらない相撲で、ヒョイと腰をついて了つたやうな、あつけなく、またたよりない氣持のまゝ引きとつて來ると、すぐ寢床のなかにもぐり込んで了つたのだが、もとより眠つかれもしずに、あり餘る思ひに鎖されてゐると、程もなくおはまが、へんな顏つきをしてはいつて來て、枕もとに坐り込んで、たつたいま、お澄がひとりだけ歸つて行つた、と話した時にも、はッと起き直るだけの元氣すらなかつた。尤も、何も知らないおはまの前で、さうすることも、考へてみれば可訝しなわけだが、然し、漠然としてゐる心ならば、そんなことぐらゐ問題にはしない筈だのに、あながちその思はくを氣にしたためでもなく、ただぼかんとして聞いてゐたのだ。おはまにしてみれば、人揃ひまでした會談のあとに、すぐ引き續いて起つた事件だけに、內實に就いては凡その見當さへつかないながらも、信之に話して聞かせたら、きつと吃驚するだらう、くらゐには考へて來たのだらうから、この無關心な態度は、全く意外だつたと同時に、餘計なことをして了つた、と云ふ間の惡さで、幾分しよげさ

せられもした。信之は、寧ろその氣持に氣をかねて、一通りあとさきの容子を聞くために、床の上に起き返つて胡坐をかいた。

　おはまの話によれば、信之が歸つて、部屋のあとかたづけをしてゐる間、二人は一言も口を利かなかつたが、床をのべようと云ふと、あとで呼ぶからちよいと待つてくれ、と一旦さがらせたつぷお澄で、それから三十分もたつかたゝないに、呼ばれて行つてみると、窪井がごろりと横になつたまゝ、ひどく氣むづかしい顏つきで、すぐ自動車を呼べと云ふ。もう終列車にも間に合はない時々だのに、どうする氣かと思つて、氣がつくと、隣の方ではお澄がこそ／＼と荷造りをしてゐる。いつの間にかすつかり着物も着換へてゐたが、いかに無神經でも、その二人の關係に、取り返しがつかないほど白け返つた空氣を感じずにはゐられないし、そこは女同士で、そばへよつてそれとなく勞りをこめて、手傳ふことでもないかと言葉をかけたりした。いよ／＼別れる時が來ても、女が、「では御機嫌よう」と丁寧に頭をさげたのに對して、男は殆ど振り向きもせずに、「おや、まア……」と一言、それもあとを濁して、そのまゝ見送りにも立たずにねころんでゐた、と云ふのだ。いつの間にどう云ふ話になつたのだか、餘り思ひがけないことだつたので　これは……、と、いつぱしの忠義だてで、何よりもまづ信之の耳に入れて置かうと、それで自動車を見送るなり、すぐこつち、へ驅けつけて來たのだつた。

「へえ、さうかい—」

　それまで詳しく聞いても、不思議なほど信之の心は平靜だつた。もしや……と、萬々が一の、生命に關するやうな想像も、ちよつとあたまに浮かんで來ないではなかつたが、急に白々しく、總てが遠く隔り去つて了つた感じで、ぼんやり聞いてゐた。

「でもね、時刻が時刻ですし、なんぞ心配なことはないんでせうか—」

「なに、大抵は大丈夫だらう。よしまた大丈夫でなかつたところで、どうにもしやうがありアしない—」

「一體どこへいらしたんでせうね。尤もそれア、明日の朝自動車屋に訊き合せてみれば、すぐ分ることですけど……」

二

　あかの他人のおはまでさへ、そんな風に氣つて氣をもんでゐるのに、つい三四日前に木挽町の二階で、少時の別れを惜み合つた仲でありながら、この冷淡さはどうしたことだらう、と、信之には、我身で我身が解らなかつた。心に泥んだ考へ方から云ふならば、これは、どうしたつて薄情と呼ばれなければならない急變だつた。

（えゝ、合せものは離れもの、一旦積飯が利かなくなれア、また原のばら／＼だ。世の中はひとりのこと、ひとりのこと！　ひとつが二つに離れッこはないんだ……）

　そんな風に考へることが、この際、ひどく心持がよかつた。それは、ほてつた體を、ぢかに冷たい板敷の上へでも轉がすやうな、せい／＼とした快さだつた。

　けれども信之には、その快い瞬間をさへ遮り通る影があつた。この際と云ふ條件なしに、ひとりの涼しさを喜べるほどの、—まだそれほどの酒脱には到達してもゐず、また夢にもそんな境地を望んでゐるわけでもなかつたが、而もなんとなく、その快さに溺れ切れないやうな、中途半端な感じは、慥に心の襞を掠めすぎたのだ。

—まア、いゝさ、どこへなりと、行きたいところへ行くがいゝさ、一體生意氣だアね、女のくせに、一本立が聞いて呆れらア—

苛立ちやすく、信之は、そんな風にお滋のやり方に對する反感を、何も知らないおはまの前で破裂させたりした。
そしてやがて十二時近くに、勞れ切つて眠りに落ちると、一度隣の部屋でも掃除するらしいはたきの音に薄目をあいたきりで、昏々と午後の三時すぎまで、なんにも知らなかつた。起きて、ゆつくり風呂をあびて來て、新聞でも見散らかしてゐると、すぐもう山の間には夕陽の影さへ消えて了つて、朝酒やら晩酌やらわけの分らない盃を、酒精中毒で細かく震へる指先に把りあげることになつた。
「どうしましたね、昨夜あたしが招れて行つた、あの三階のお客さんは。まだ御滯在ですか」
たぶんもう歸つて了つたこととは思ひながらも、念のためと、酌についてゐる若い不馴な女中のお廣に、かう尋ねてみた。
「えゝ……」
「お歸りになつたのかい？」
「いゝえ」
「まだいらつしやるの？　へえ、さうかい。そいぢア……」
昨夜の返禮ながら、招んで、二人で一杯やるかな、——十分寢足りた機嫌のよさから、ふいとそんな氣を起した。それには、同時に同じ女を失つた二人の男が寄り合つて酒を汲むと云ふのも、飄逸な感じで、ちよいと惡くなささうな氣もするのだつた。云ふまでもなく、昨夜以來、親の仇どころか、窪井が相應すきな人物になつてゐた……。
が、よく考へてみると、飄逸と云ふやうな趣味は、實は彼の柄ではなかつた。窪井の年齢ごろにでもなれば、またと云ふこともあるが、彼としては附燒刃の、相手に阿る態の嫌味になると思ひ返した。
「さうかい、あたしアまた疾うにお歸りンなつたんだらうと思つてた」
うつかり云ひ出しかけた言葉を、そんな風に誤魔化して了つて、信之は、なみ〳〵と注がれた杯へ唇をよせて行つたが、同じ屋根の下に知つた人がゐると云ふだけで、相手ほしやの氣持が、俄にたかまつて了つた。

三

そこにおはまがはいつて來た。
「まア、隨分よくおやすみになりましたものですねえ」
「おかげで少しは人心地がついたと云ひたいところだけれど、あんまり寢すぎたせゐか、却つてまた寢たりないやうな氣がする」
「ほんとにそんなもんですわねえ……」
「ときに、例のひとの行方は知れたかしら」
有繋にそれは氣にかゝつてゐたし、おはまもきつと、何かその話で出かけて來たのだらう、と思はれた。
「それなんですがねえ、旦那樣……」
案の定、すぐ改まつた顏つきになつて、「あたしども、なんにも知りもしないくせに、ほんとに餘計な心配なんですけど、なんだか氣になりますもんですから、今朝ほど自動車屋に電話をかけて訊きましたんですの。さうしましたら……」
そこでふと言葉を切つて、こんな云はでものお喋りをしていゝものかしら、とでも考へついたらしく、信之の表情に、ぢッと瞳をこらしてゐた。
「さうしたら……？」
何氣なくあとを促しながら、てれ隱しに盃をあげて、お廣に酌をして貰つた。
「さういたしますとね、どうと云ふわけでもございませんけど、たゞなんとなく小田原の方へおくだりになつたこととばかり思つてましたのに、塔の澤の佐々木へお送り申したつて云ふの

ですよ……」

「佐々木つてえと……？」

「對山樓ですわ」

「へーえ……」

以前からその宿屋と、どうか云ふ關係でもあつたのなら別だが、夜更に、若い女の身ひとつで、唯ひとり、ひよつこりはいつて行つたものとすれば、それは、なみ／＼ならぬ決心がなければ出來さうにもないことだつたし、信之のあたまにあるお澄では、どこからどう考へてみても、そんな強氣なまねを仕終せる氣性とも思へなかつた。殊に同じことでも、山をくだらずに、反對に登つて行つたと云ふ點が、さしたる理由もなく、まるで直覺的な不安を植ゑつけるに十分力強かつた。

「ふうん、可訝しいね」

考へてみたところで、あてのつくことでもないのを、信之は、左に額を支へ、右に盃を弄びながら、むつと思ひ沈んだ。——あゝ云ふ優しい、決してひとに楯つくことをしない性分の、どんづまりの底の強さ、そんなものが肇てあたまに映つて來た。柳に雪折れなし、しわしわと撓み切つた揚句、ぎつちりとこたへる力が、今になつて考へてみると、昨夜急に暇をくれと云ひだした時からのお澄に感じられないこともないやうな氣がして來た。その力では、どんなところへ追ひこくられて行かないものでもない、——それを思ふと、急に信之は、居ても立つてもゐられない氣持にされて了つた。

「それで、このことは、窪井さんにもお話したのかい」

「いゝえ……」

「どうしてさ」

「別にお訊きにもなりませんし、いつでもお一人の時は、きまつてさうですけれど、今朝からずうツと坐つたきりで、なんですか調べもののやうなことをなすつておいでですから……」

「さうかい。……勿論、飯はまだだらうね？……

四

この、突然の「飯はまだだらうね？」の意味が、おはまには呑みこめなかつた。

「へ？」

「いえね、もし窪井さんがまだ御飯前だつたら、昨夜のお返しがてら、一口つきあつて頂かうかと思つてさ」

今更こつちからは電話一本かけ憎くなつて了つたお澄の上に、俄に眞ッ黒く凝り塊つて來た不安を、せめて口へ出してでも散じようと云ふのに、窪井こそは、唯一無二の相手だつた。……あとで思へば、その弱々しい氣持も、慥に病的だつた、神經衰弱的なもの〻考へ方だつた。けれども信之は、些もそこへ氣がつかなかつたのだ。

「えゝ、まだお食事は差上けませんが……、それでは、さう申しあげてみませうか」

「うん、何も特別の御馳走もございませんが、もしお暇でしたらつてね、よく丁寧にさう云つておくれよ」

「へえ、承知いたしました」

客を招んで置いて、こつちばかり赤い顔をしてゐては惡いと思つて、おはまが返事を齎して來るのを、盃はからのまゝで、信之は傍の喫つても喫はないでもいゝ煙草を、ぷかり／＼ふかしながら待つてゐた。……思ふともなく、矢ッ張りお澄のことがあたまにあつた。それは然し、現在のお澄の身の上を案じ煩ふ心ではなかつた。どうした加減か、ふとあの、お澄に窪井と云ふ旦那のあることを知つた晩の記憶が、細々と思ひ浮かべられたのだ。……だん／＼考へて行くうちに、當時は、あれほどに冴え返つてゐたつもりの自分のあたまが、存外いゝ加減な、締りのない、もつと惡く云へば狡猾とも呼

べないことはないほどのものだつたことに氣がついて來た。

……お澄がかよの姿だ、その旦那は溶井だ、から聞いた時の信之は、實際腹を立てた。然しそれを秘してゐたのは、彼に對する好意からで、それをあかしたなら捨てられはしまいか、と云ふやうな、女心の弱さから、惡い／＼と思ひながらも、つい一日のばしにしてゐた心根は、あの事實を聞いた瞬間から、解りすぎるほどよく解つてゐた。それならば、腹が立つ一方には、既にお澄を赦してゐた筈だ。而も彼は、野獸の如くに女を恨み、憤つて、野獸の如くに泥醉し、夜陰に乘じて、勇んでひとの妾宅を叩き起したのだ。今にして思へば、それでは全く小説の運びだ、芝居氣だ、實感に遠い紋切型の行爲だ、と、軈て信之には、さう云ふ苦々しい反省が浮かんで來たのだ。さうなつて來ると、もう自棄くそ半分、溝泥のなかに自分を擲り込んで、ぐちやぐちやに踏み躪つて了はなければ氣のすまない、あの、偏執的な自己嫌惡に陷つて了ふのだつた。……信之は、肚のなかで、自分自身に對して口穢く罵りかゝつた。

どんなことがあつても、家庭の平和だけは破りたくないと云ふ、いかにも中產階級的な常識主義から、肚の底の底では、内々お澄の身の上を苛酷に思つてゐた貴樣のことだから、ひとの話を聞いて、大きに安心したり喜んだりしたのが本當なんだ。それを、それではあんまり色惡すぎると思つて、相手の好意から出てゐるほんの些細な秘事を、ともく、大惡事でも發見したやうに驚きたてゝ、自棄酒の名のもとに、酒精で本心を麻痺らせて了ひ、ひとの妾宅の門を、たれ憚らず叩いた時には、さしづめ粹な門の役どころ、それのいゝことだつたらうよ。だがそれは、貴樣の魂とはなんの關はりもない、ほんのくだらないお茶番さ……。

五

そんな氣だから、お澄にだつて愛想をつかされるし、溶井にまですつかりうけ手に出られて、とんだ馬鹿を晒すことにもなるんだ。要するに鍊が足りないからだ、一ツ面の常識で動くから、そんな間違ひも起るので、自分の本心に沈潛してゐさへすれば、いくらなんでも、もうちつとはましな行爲が出來た筈だ。そんな風に、氣持がふはつくと云ふのが、つまり人間としての鍊の足りない證據だ、駄目だ、駄目だ！

ほんとうにしつかりしなきやア駄目だ！ 男と生れて完全に女に惚れることも出來ないくらゐなら、それこそ、豆腐の角へでも頭をぶつけて死んでおしまひなさい、だ！

莫々しい氣持で、無意識のうちに自分自身をやつつけてゐると、そこにお澄が、改めて來た。

「一寸申しあげましたら、折角ですけれど、少し勞れて居りますから、今夜はお斷り申しますつてことでした」

「あゝ、さう……。御苦勞さん」

成程、それが大人の心に相違なかつた、同時に同じ女を失つた男が、二人よつて、興福の云ひ合ひをするなどは、滑稽どころか、寧ろうさうに生々しく、青臭く、そして厭味ッたらしい話ではないか！ それに何故、一時たりとも、ちよいと好もしい狀景なりと心境なりに思つたのだらう。趣味だ。而も惡い趣味だ！ いや、趣味なんてものに、一つだつていゝのがある筈はない。固定した好み、――そんなものこそ、人を、偏つた情消した常識主義へと導いて行くものなんだ。

――すぐそれと察して、膠もなく斷つてよこしたのは有難に……）

大したものだ、と無條件に感嘆しかけたが、ふと氣がつくと、そこにまた溶井らしい趣味から割り出された臭味が、ぷうんと感じられない

でもなかつた。――役にもたゝないことでは、假令一分たりとも時間を消すわけにいかない、さう云つた氣持の、極端な實利主義が、あの、年寄らしく性急な眉間の八の字と一緒に、まざまざと信之のあたまに思ひ浮かべられた。

然し、人格と遊離してゐる間こそ趣味だが、永年の間に、すつかり滲み込んで了へば、丁度體臭のやうなもので、嫌ひな人には鼻持がならないわけだけれど、一旦好きになれば、それがまた人格的な魅力となるわけだ。人間として、好き嫌ひのないやつはゐない。趣味と云つたところで、要するに、その好意の延長線上のものだ。決して限りのないわけではないのだから、それが外からの附焼刃である限りは、どんなに高尚な趣味だらうと、畢竟は愚劣なものに違ひないけれど、しつくりと己に即いて了つた暁には、場合によつては見識とも云へるし、また或る他の場合には、主義とも主張とも呼ばれて、つまりその人の特徴を成す所以だ、從つて次第に人格の大を成す所以だ……。

信之は、あたまのなかこそいやに饒舌に喋り續けてゐたが、口には時々酒が注ぎこまれるだけで、永い間言葉が斷たれてゐた。もうそろそろ彼は、ひとりゐる時にきまりの、猫の目ほどもあとから〳〵變つて行く己の思考を、我ながらつく〳〵小五月蠅く感じだしてゐた。例へば振子のやうに、端から端へと、たゞ目まぐるしく、考へを往きつ戻りつさせてゐたところで、それが大した人格修養になるでもないと思ふと、もう一刻もこんなひとり旅を續けてゐる氣はなくなつて了つた。早く東京へ歸つて、氣の合つた友達や、好きな女たちと、悠々自適してゐる方が、どれほど心の養ひになるか知れない、と思つた。

六

十日、半月、永びいたらば一ケ月でもと、出て來た旅が、たつた二晩の泊りで、信之は、ひよろりと東京に舞ひ戻つて來た。

へんに陽の力が強く、蒸暑くて、颱々風の日だつた。近づくに從つて、大火かと驚かれるばかりに、東京の空は、黄褐色の濁りを增し、見たばかりで、氣持が苛立たしく乾いた。

誰しも、好きと云ふ人もめつたにあるまいが、信之にとつては、雨風ならばまだしも、天氣がよくて風の強い日くらゐ、氣の落つかない、癇癪の立ち易い、厭ながらどうにもならない可厭な氣分にされるものはなかつた。――埃で、身にも心にも却つて勞れや衰を增して來た態の信之は、新橋で汽車を降りるなり、停車場の構内に渦をまいてゐる埃を眞向からくらつて、ひとたまりもなく悄氣返つて了つた。

タクシイを雇つて、すぐうちに向つて走らせたが、芝口行きの電車通りから、土橋のガアドの方へ曲らうと云ふところで、インバネスの袖をはためかし、片手に中折の頂天をおさへて、前こゞみに、埃のなかを泳いで來る三好を見かけた。おや、と思ふと、そのうしろには、亂れて赤いものゝちらつく裾を兩手に抑へて、束髪のまはりを戰かせ、おくれ毛をべつとり頬にはりつかせながら、風上へ斜に構へ、繩のやうに目を細くして、立ち竦んでゐる美津枝が見えた。

（おや〳〵、此風のなかを……）

と、微笑ましい氣持になつて、三好だけ見かけた瞬間に、運轉手に聲をかけて、車をとめて貰はうかと思つたのもそのまゝに、すれ違つて了つた。（どこまで埃ッぽい道行をしようと云ふんだらう。……だが、よつぽど仲がよくなくつちア、こんな日、……傍から御免だなア……）

云ふまでもなく、信之は三好が好きだつた。文學に對する才能も認めてゐたが、それより何より、この二三年來何かと世話をやく方の位置

にゐる信之としては、「可愛い」と云ふ言葉が一番適切かと感じられるほどに、だらしのない性分も承知の上で、そのつもりで、大抵のことまでは大目に見すごして來た。そのくせ、三好は高踏の事務などにかゝると、柄になく几帳面で、馬鹿まじめに働いたが、それは責任だけのことは果さうとする勤氣からで、決して性格的に、さうしずにはゐられないと云ふ意味の几帳面ではなかつた。どうかすると、晝も晩もなしに、下宿の一室にごろりと長くなつたまゝ、二日三日ねつゞけにねて暮すことがあるのも知つてゐた。露國の作家が創造したものぐさ太郎、オブロモフの有名な物語りは、三好の愛讀書の一つだつた。さう云ふ方面、——生地の性格を、信之などの前には、一生懸命かくして、忠實忠實しくやつてゐるところが、彼の弱さであり可愛さであり、また惡く云へば狡猾いところでもあつた。

さう云ふ裏も表も承知のうへで、信之はこの青年を愛してゐた。殊にいま目の前に、好きな女とつれだつて、旋風のなかできり〳〵舞をしてゐるのを、自動車の窓からちらと見ては、微笑しずにはゐられなかつた。

通りすぎて了つてからも、もう一度車をあとへ返して、二人とも一緒に乘せて、どこか都合のところまで送つて行かうかとまでに思つたりしたが、女づれだけに、むかうがてれても悪いと考へ直して、それは控へることにした。僅三日の旅でも、東京を離れてゐただけに、ひどく女戀しくなつてゐたのだ。

七

うちに歸つてみると、子供たちは、書生と女中とに附添はれて、清水谷公園へ遊びに行つてゐると云ふことだつた。それはちよつともの足りなかつたが、その代り細君の朋子へ、懐しい氣持が集中されて、珍しくも信之は、優しい愛撫を與へたりした。

それから折よくはいり加減になつてゐた風呂に飛び込んで、汽車の煤煙や埃ッぽさからさばさばとなつて來ると、いきなり茶の間の眞中に大の字なりにねころんでみた。

「あゝあ、なんと云つてもうちが一番氣樂でいいや—」

それは、いつも旅から歸つて來る度毎にしみじみ肚の底から呟かれる言葉だつた。そのくせ始終居續けると、そんな有難味はまるでないどころか、ガチャ〳〵と氣忙なくて、たまには旅にでも出なければ、碌なもの案じも出來ないやうに思はれるのも、きまりだつた。

「どうなすつたんです、大へんな御機嫌ですね—」

朋子には、ちよつとさう云ふ皮肉じみた口の利きやうをする癖があつた。豫想外の早い歸りや、いつにない良人の氣の輕さで、内心はホクホクものでゐるのだが、それは澄して棚に載せて置いて、つい酒か陽氣の加減で、信之がひとりで燥ぎだしたやうな憎まれ口を利くのだつた。

「旅さきでなんかよつぽどいゝことでもおあんなすつたとみえますね—」

「なにさ……」

それには、良人はたゞ苦笑ひで答へて置いたが、やがて思ひ出して、偶然にもおはまのゐる宿屋へ泊り合せた話をして聞かせ、ことづかつて來た、「くれ〳〵もよろしく」などを傳へたりした。

朋子も、留守中の來訪者や、云ひ置かれた用件、その他の報告をしてから、

「一昨日でしたかね、あなたがお出ましになつて間もなく三好さんが見えましたわ……」

「あゝ、たつた二三日前にも逢つたんだから、別に用で來たわけぢアなかつたらう?」

一いゝえ、それがね、その時にお話するのを忘れて了つたんだけれど、まだ今日ぐらゐお在宅だらうと思つて伺つたら、なんて、大へん困つたらしい御容子でしたから、あたしで解りますことならつて、さう申したんですよ……」

「さうしたら？一

一紙屋の拂ひを頂いとくのを忘れてゐたからつて……。尤もこんなに早く歸つていらつしやるのでしたら、三好さんもそんなにお困りぢアなかつたんでせうけれど、あなたが、ひよッとすると一月もお留守になるやうなことを云つていらしつたし、それに例の通りお出ましになつたらそれつきりで、どこにいらつしやるのやら葉書を一枚下さるわけぢアないんですから、あたしお氣の毒だと思ひまして……」

一金を出してやつたのか？一

一いゝえ、七百何十圓とか云ふんですもの、とてもそんなお金、うちにあらう筈はありませんから……一

一可訝しいな、紙屋にそんな拂が殘つてるわけはないんだが……。で、どうしたんだい？一

一小切手を切つてあげましたわ。請求書を忘れて來て、はつきりした金額が分らないつて仰有いますから、判だけ捺して、金額はあとから書き込んで頂くやうにしといたんですけど……一

一それアそれでもいゝが、……可訝しいな、慥に紙屋と云つたかい？　ふうん、つい先達紙屋も印刷屋も拂つてやつたばかりだぜ。二三十圓くらゐのもんなら、はしただけ拂ひ殘しになつてるつてこともあるだらうが、七百何十圓なんて……、どうも少し可訝しいなア……」

八

どう考へても腑に落ちない變な話だつたけれども、つい一時間たつかたゝない前に、同じ東京の街で、埃に捲かれて閉口してゐる姿を見かけてゐる三好だけに、どうしても可厭な想像をもつ氣にはなれなかつた。明日にでも、牛込の下宿の方へ、歸京した由を電話で知らせてやつたなら、出かけて來て、何事もなく總てが明白になるものと考へてゐたかつた。それには、雜誌「高踏」の用紙の支拂と聞いたのが、細君の聞違ひで、何かほかに急な入用でも出來たのであつてくれゝばいゝが、とそこまで念じられた。さうかと云つて、編輯室にあてられてゐる洋館の一間へ行つて、書類を調べるとか、紙屋へ電話で聞き合せるとかして、一時も早くさつぱりした氣持にならうと云ふほどの信念はもてなかつた。なんとなくさうすることが恐ろしいほどには、立派に三好が疑はれてゐたわけなのだ……。

三好のゐる素人下宿に電話をかけるには、近所の酒屋で取次いで貰はなければならなかつた。從つて翌朝、急に歸つて來たから遊びに來ないか、と云ひやるのも言傳だつたし、先方の、昨日午後にお出ましになつたきりまだお歸りがございません、と云ふ返事も、勿論酒屋からの取次だつた。

「さうかい、よし〳〵……」

電話口からその返答をもつて來た朋子には、氣輕に頷いてみせたけれども、信之の氣持は、それでまた一層暗くされてゐた。もしひよッと使ひ込みでもして……と思ふと、放膽なやうでその實は中々神經質な三好の性分としては、どんなに慘めな陰鬱に陷つてゐるか知れない、取り返しのつかないことのやうに世を狹く感じてゐないものでもない、――その氣持が、まざまざと信之の胸に映つて來た。一途に思ひつめる若者の心は、彼には一生の道づれらしかつた。少くとも、年下の人のさう云ふ氣持に同感する場合、往々さきへ行きすぎるほどに積極的だつた。その同感の苦しさから、却つて無理[illegible]らしい腹立に陷り、慰めの言葉の代りに、[illegible]を[illegible]

りあげて了ふことすらあつた。
今はもう疑ふ心の苦しさではなかつた。すぐ書齋に引籠つて、三好にあてゝ手紙を書いた。
――先くゞりな言葉を許して貰ひたい。萬が一君にどんな間違つた行爲があつたとしても、信じられるなら自分を信じて、何事も素直に打ちあけてくれ。自分は、金錢のことにかけても決して清淨な人間ではない。暗い罪悪に苛まれた覺えもある。またそこから脱けるために、ほんの少しばかりの勇氣でも揮つた覺えもある。僕も今は怖い――そんな氣持は、ほんの少しの勇氣で抑へられると思ふから、假令どんな間違ひが起つてゐようとも、是非一度逢ひに來て貰ひたい。これは君のためよりも、寧ろ自分のためにお願ひするのだ。君の氣持を同感する苦しさから、一刻も早く救ひ出して貰ひたさの、――さう云ふ利己主義からのお願ひと思つてくれて差支ない。勿論、突然こんなことを云ふのが、君にとつて寝耳に水で、そこになんにも間違なんぞなかつたとすれば、こんな仕合なことはない。たゞ/\自分の早合點を恥ぢ入るばかりだ。その恥が與へられるならばこの上もないが、若しさうでない場合には、一日も早く君の心の晴さを、自分のところへ來て頒つ氣になつてほしい。先くゞりながら、くれ/″\もこれをお願ひして置く……。
かう云ふ意味を書いて、すぐ速達便で出させると、信之は、やつと少し落つくことが出來た。

九

ところが、そのまゝ三好からは電話もかゝつては來ず、手紙の返事も徒しく待たれた。いよいよこれは、何か間違ひが起つて了つたな、と思ふと、信之には、ひとごとながら口惜くそな氣分が、時折胸もとへチリ/\と焦きついて來た。
盛りの花へ、風のあとの雨が注いだ。しとしとゝ、春雨らしく降り續く、薄暗いあかるさを、たれこめて信之は書齋の窓に眺めてゐた。父信貞が好みの松、楓、態々吉野から取りよせた形の正しい杉、高野槇、躑躅、八手など、ただ青いものばかりの庭のつくりは、華だちを控へて、雨に濡れて、落ついた、深い望みの感じだつた。僅かな苔に潜んだ古い庭土の窪みなどに、どこから飛んで來たか、櫻の花瓣の、二つ、六つ七つ、散り敷いてゐるのは、行く春の﨟たけて艷なる風情だつた。
無念無想に、やがて焦點もぼやけ薄れるばかり眺め入る、そんなことは、本當にこの何年にもないことだつた。――ふとそれに氣がついて、信之は、身にしみてこの時間を有難がつた。勞れ、これも三好からの苦い賜りものゝ一つなんだなア、と感じられた。
降り續いた三日目の夕方、豆腐屋の喇叭の通る時分から、急に明るんで來たと思ふと、まだ黄色をした雨の足が、すい/\と線を引いてゐるのに、西の空に雲きれがして、横なぐりに落ちて來る金色の陽光を見ることが出來た。陽の色は、信之を元氣づけた。
（さてこと、今夜あたり、誰かに會つて、ゆつくり飲みたいもんだなア）
そんなことを思つて、友達の誰彼を、心のうちにより好みしたり、落ち合ふ場所を考へたりしてゐた。そこへ書生が二三通の手紙や葉書を持つて來た。なかに、白い西洋封筒に、鉛筆でグイ/\力をいれて宛名を書いたのがあつた。裏には、二ケ所に〆がしてあるばかりで、差出人の名はなかつたけれど、信之には、一目でそれが三好から來たものと知れた。それのみならず、鉛筆の、一畫々々にいやに力のはいつた筆跡は、内容のたゞならない感じまで物語つて餘りあるものだつた。どこか田舍の雑貨屋で間

に合せに買つたらしい、安ものゝ白い封筒を引き裂いた時には、信之の氣持は決して平かなものではなかつた。なかは、間版の雜記帳から二枚引きちぎつた罫紙で、勿論これも鉛筆のはしり書だつた。

お氣づきだつたかどうか知りませんが、去年の秋頃から、僕は高踏社の金を使込んでゐました。勿論くだらなく酒色のために使ひはたしたのです。惡いことには違ひないが、僕の心持では、一時の融通で、いよ〳〵となれば故郷の母に泣きつくなり、また僕の脚本が二つも上演されゝば、樂に返せる金額だと思つて、そんなに苦にしてはゐませんでした。その時分には三百二三十圓でしたので、もうこれ以上には殖すまいと堅い決心をしてゐたのですが、もと〳〵僕の使つていゝ額より、實際使つてゐる額の方が、毎月大抵倍以上にもなつてゐるやうな生活なのですから、あちこちの借金は見る間にたまつて了ひました。折角この二月まで一生懸命に我慢してゐたのに、またもう一度去年のやうなことを始めました。紙屋や印刷屋に拂ふと云つて貴方から預つて歸つた金のなかからも、僕の使ひ込んでゐる分があるのです。

どうしてこんな僕になつて了つたか。それには、實は少しわけがあります。卑怯なやうですが、一通りそれから聞いて頂きたいのです。

十

柳澤美津枝と云ふ女に就いては、萩原が興味をもつて通つてゐると云ふ話から、飽まで白ばつくれて傍觀の態度はとつてゐるが、實は以前から僕が關係してゐた女だ、と云ふことまで、――思ひ出しても冷汗ですけれど、いつぞやお宅で御馳走になつて、いゝ心持に醉つた晩に、ついうか〳〵とお喋りして了ひました。僕はその美津枝と云ふ女に、さう大して心を惹かれてゐるつもりはありませんでしたが、女はどんなことをしても僕から離れられないくらゐの執着をもつてゐると、蟲よくも堅く信じてゐたのです。その自信を、いやが上にも、自分自身に對して確めるやうな氣持から、夜おそく萩原と二人きりで乘つて行かうと云ふ自動車のそばで、僕は美津枝に、誘はれたらどこまででもついて行つて見ろ、行くところまで行つてみろ、と囁いたのです。女にかけての萩原が、なみ大抵ならぬ手腕家だと云ふことを知つてゐるだけに、さう云ふ危險に曝しても、尙且守るべき最後のものが、僕のために清く殘されることを信じ、またその信が裏切られなかつたと云ふ結果を喜びたかつたのです。

ところが二人に別れた僕は、俥で道の一町と行かないうちに、餘すところのない嫉妬そのものでした。難攻不落と見えた「自信の城」の哀れにも慘な降服が、かうまで速かに來ようとは！

翌日僕は、カフエエ・シャノアルで賴みつけの自動車屋へ、こつそりとはいつて行きました。云ふまでもなく、前夜二人をどこまで送り屆けたか、それを知らうがためでした。答へが、而も殆ど絕望的でした、赤阪田町四丁目の横町で二人を降して來た、と云ふのです。時刻から考へてみたところで、勿論待合よりほかに客のために戶を開く家はない筈ですが、鳴戶の横町と聞けば、いつぞや貴方も御一緒で、萩原に誘はれて二三度行つたことのある、あの梅の井とか云ふうちに違ひありません。

僕は腹を立てました。――今から思へば、その腹を立てたと云ふことだけで、どうやら少しは救はれたのです。と云ふのは、一方には〳〵なんだ、あんな女の一人や二人、犬にでもくれてやらアと云ふやうな、負惜みながらも、冷い笑ひに紛らして了つて、二度とふたゝび美津枝

とは逢ふまいと思ふ氣持が僕に動いてゐたのです。若しその時に僕が、さう云ふ冷淡の方へ自分自身を賣り渡してゐたならば、今日こんな、泥棒にも劣つた惡業を重ね、一生貴方にも顔むけのならないやうな罪惡感に苛まれずともすんだ代りには、生活の眞摯からは、更に數歩の轉退を踏まねばならなかつたでせう。既に惡い精神から、惡い祟りが來かゝつてゐたのです。一足飛びに清淨な世界へは出られッこありません。惡業の世界で、せめては眞摯な熱情に殉じたおかげには、利口な去勢者の群にはいることだけは助かつたと信じます。

僕は美津枝を詰りました。美津枝は體に間違ひのなかつたことを飽まで云ひ張ります。誰がそれについて眞の事實を證明するものがあり得ませう。信じるか信じないか、問題はそれだけです。肚の底から信じられてはゐない女を、いつか誇大されて了つた自信で、故さらあぶないところへ突き出してやつた、その不眞摯の祟りです。歸つて來た彼の女が、幾度同じ言葉を繰返しても、今度は僕には、信じることも、信じないことも出來なくなつて了ひました。罰です、天罰です。信じてもゐないものを、いかにも信じ切つたやうなふりをすれば、その報いとしては、信ずべきものでも、信じられなくなつて了ふのでせう。僕はさう云ふ罰を蒙つたのです。

十一

信じられないと云ふことで、僕は、すつかりくしや／＼して了ひました。腹立は二重にされたのです。

それと同時に、一方には不思議な愛着で、牽いて美津枝に惹きつけられて行きました。愛が嫉妬を生む普通の場合とは反對に、嫉妬から愛が生じて來たのでせうか、一時たりとも彼の女を、僕の目の屆かないところへ置くことが、不安で不安で、とても堪へられなくなつて了つたのです。

初めの間は、この突然の、殆ど病的な愛撫が、美津枝を不安にし、苦しがらせましたが、嫉妬が落つくにつれて、僕の愛情は、次第にしんみりとむかうの胸へも滲み込んで行つたものとみえて、どうやら心持も變つて來ました。これまでの彼の女に、いつも必ず肚の底で、コチンと小さく片づけられてゐた我執が、そろ／＼ほどけかけ出した己の周圍に體裁よく結ひ環されてあつた垣根に穴があくと、呆れ返るほど善良な、初々しい心持や、獨力で衣食してゐる娘にふさはしいやうな自惚、氣儘などが、覆ふところなくむきだしにされて來たのです。──これを、以前の僕の生活氣分で眺め、そこに用ゐられさうな言葉で云ひ現はすとすれば、いよ／＼あいつも、だらしなく惚れ込んで來やアがつたな―とでも北叟笑むところでせうけれど、夢にも思ひがけない心持がその時分にはもう僕の裡にすつかり育ち切つてゐたのです。

生れて始めて、僕は肚の底から人を愛する心を知りました。いや、そんなことを云ふと一寸恐ろしいほどに、僕の我執は、徹底的に打ち碎かれてゐたのです。率直に云へば、美津枝が好きで好きでたまらなくなつて了つたのです。ただそれだけのことです。が、これを、僕の惡い癖で、やゝ哲學的に云ふならば、女に惚れたと云ふ氣持は、これまでにも全く知らないわけではなかつたのですが、今度と云ふ今度は、そのことの有難味につく／＼觸れ得た、とでも云ふべきでせうか、兎にも角にも、僕の生活のだらけ切つた點がはつきり目に映つて來て、慙ずる者の有頂天、──生活の沸騰點にありつけた氣持なのです。最近の僕は、ほんとうに自分が生きてゐる氣がするのです。

そこで、卑怯な申譯のやうに聞えるか知れま

せんか、僕を茲まで導いてくれたものは、勿論美津枝と僕との間に芽ぐんで來た愛情よりほかのものではありませんけれど、それを助けて、僕の犯した惡業に、幾分の功を歸せないわけにはゆきません。——貴方を始め、高踏同人諸兄は云ふまでもなく、故郷の母の前にも、いや世間一般讀者の前にも、顔むけのならない不了見者、卑劣な小惡黨と自分を感じる心、天にも地にも身の置きどころなく、消えてなくなりたいほどにしよげ返つた氣持、これが僕を、美津枝の胸へ追ひこくつて行つた態がないとは云へません。

このちつぽけな、けちな、だらしのない惡人を、何もかも承知であたゝかくかき抱いてくれる者は、なんと云つても、天下に美津枝のほかにはなかつたのです。と云つたところで、俯仰天地に恥ぢず、と云つた氣持では、ひとを愛し得ないものだなどとは、決して考へてはゐません。慘めのどん底に陥ちてから、盲龜の浮木的に、やつと愛の力を感じるなどは、我ながらつくづく情ない心境だと思つてゐますが、盲龜の身としては、浮木の有難さを讃へないではゐられません。——

永々とこんなことを書いたのは、つまり貴方へお詫びを申しあげる手紙に筆を執りながら、大して自責の責念を感じない心苦しさを、自分でどうにか片づけたい氣持からです。

十二

さうかと云つて、去年の秋から僕が犯したところのけちくさい、いぢけた、卑劣千萬な詐欺取財、——と云ふのか、竊盗と呼ぶべきものか、兎に角高踏社に關する金錢の出入から、目立たないほどにちよく／＼誤魔化して來た自分を、決していゝとは思つてゐません。表面高踏社の金と云ふでう、つまりは貴方の金を、貴方の厚い信用につけ入つて、かれこれ千圓ほどもくすねました。その上さらに、先達旅にお出かけになつた前々日にお預りした紙屋と印刷屋との拂のうちから、ついまた七百圓ほどを、差し迫つた自分の借金拂ひに流用して了ひました。ところが紙屋の態度が、今月に限つて惡く強硬で、全額の四分の一ばかり入れたのでは、とても承知してはくれないのです。強談に及ばれると、こつちはもと／＼傷もつ脛の、キュウ／＼の目にあはされて、なんのあてもなしに、二三日のうちには必ずどうにかする、と約束して別れたのですが、あとで、あの勢ひでは、惡くすると直接貴方の方へ掛合が行く、さうすれば今までのことが何もかもばれて了ふ、と思ひついたらです。思案にあまつてゐる間にも、あとからあとから矢の催促です。たうとう僕も決心をつけて、一切を貴方の前に打ちあけて了はうと、お宅へ出かけたのが、丁度一足違ひで、貴方は旅行にたつてお了ひなすつたあとでした。そこで、もうどうにもかうにも仕方がなくなつて、奥さんにお話すると、幸か不幸か、なんの疑ひもおもちなさらずに、すぐ氣輕く小切手を切つてくださいました。而もそれには金額が記入してないので……。

僕のあたまは、兎に角美津枝でいつぱいでした。美津枝で渦をまいてゐました。そこに、一金と云ふのと、旅と云ふのと、二つの思ひが飛び込んで來て、渦のなかでキリ／＼舞を始めました。僕の足は、銀行にも紙屋にも向かないで、まつ直に美津枝へと驅けつけたのです。實はその前から、僕は彼の女のために、或る小さな巣を用意してやりました。そこのキシ／＼と鳴る、暗く狹い階子段をあがる時分には、僕はすつかり決心してゐたのです、——文學の仕事なぞはおろかなこと、一生でも棒に振らう、と。身も心も、悉く彼の女の前に捧げつくさう、と。

この根本の心持が、美津枝を動かしました。初めのうち、[illegible]とを重ねて[illegible]なかつた

僕の悪い行爲についても、今はもうなんにも云へなくなつて了つて、すべて僕の思ひのまゝにならうと決心してくれました。奥さんから預つて歸つた小切手で、紙屋の拂七百二十一圓八十錢のほかに、吾々は、無斷で、貴方から千圓の金を拜借する蟲のよさ、圖々しさを、繰返し繰返し自ら責め、自ら勵ました揚句、たうとうこの戀を命に生きようと云ふ最後の決心をもう一層堅くするよりほかはありませんでした。翌日銀行から金を引出し、紙屋の拂をすませたり、細々した用事の片をつけたりしました。そして其の翌日の午後四時頃、荷物らしい荷物とてもなく、凡の見當を關西とつけただけで、どこまでの切符を買はうと云ふあてもなしに、新橋の停車場にはいつて行つたのです。そこで吾々は、偶然にもお滝さんに逢ひ、貴方が湯本においでになると云ふ話を聞いたのです。

世を捨て、人々と別れて行かうとする前に、もう一度貴方にだけは逢ひたくなりました。惡業のどん底にゐる、この裏切者の、お詫の言葉を、一言きいて頂いてからと思ひ、美津枝とも相談の上、すぐさまこの宿屋へやつて來たのです。

十三

湯本まで來てみて、貴方が吾々と入れ違ひに、その同じ日にはもう東京へお歸りになつてゐたことを知り、ほんとうに口惜しく思ひました。美津枝などは、泪ぐんで、少時の間ぼんやり考へ込んで了ひました。彼の女は、後にも前にもたつた一度しかお目にかゝつたことのない貴方を、それほどに好いてゐます。若しも貴方が、引き續いて彼の女の店に行き……、さうして僕が、今日の僕のやうな氣持になつて來てゐたなら、きつと今頃は、何か恐ろしいことが起つてゐたに違ひない、と感じられます。彼の女が、自分からそれを云ふくらゐです。そんなことを思ふと、吾々は、運命論者的な氣持で、今の自分たちを、空恐ろしいほど幸福に感じます。暗い罪惡感の蔭にも、さうした喜びを胸いつぱいに湧き立たせたりしてゐる吾々だと云ふことも、正直に申しあげて置いた方がいゝと思ひます。

長い手紙になつて了ひました。たうとうどこにもお詫びの文句らしいものはなくなつて了ひましたが、こと改めてそんな風に申しあげないでも、もう僕の氣持はよくお解りくださつたことゝ思ひます。吾々は今夜の夜行で、關西の方へたつて行かうとしてゐます。吾々の將來については、それくらゐよりほかに申しあげ得る目的も計畫もありません。行きあたりばツたりに、どうにかやつて行くつもりでゐます。

もう一度お目にかゝる機會があるとすれば、その時には、僕も別な人間になつてゐるつもりです。若しまたお目にかゝれないとすれば、貴方の御厚意も、無斷で借用した金子も、すべて溝のなかへでも捨てゝ了つたものとお諦めください。あんまり蟲のよすぎたお願ひですが、今の僕としては、これくらゐ正直な言葉はないのです。

御一家の上に永く幸福が續くことを祈りながら願つて居ります。奥さん、高瀬同人諸兄へも、宜敷きやうに、僕の方からは永く渝らないつもりの好意をお傳へくださいまし。美津枝からもくれぐれも宜敷申しました。

ではこれで。

いつか斜陽の影も消えて、蒼茫と暮れかけて來た窓ぎはの取附ソファの上で、一字々々拾ふやうに、信之はこの長い手紙を讀んだ。どこからどこまで、一々ぴたりと胸へ落ち込んで來た。そのことで、いつか彼は、晴々とした氣持になつてゐた。前後矛盾した文句などあつても、その箇所々々の氣持に噓がなく、三四年來の交際の間にも、これほどぢかい、ぢかべたに友好の心に觸

れたやうな感じはもてなかつたことを思つた。好意に背いて金を持ち逃げした裏切者、——そんな感じは、爪の垢ほどもなかつた。もし強ひても三好を惡い人間と觀じなければならないとすれば、信之自身も惡徒仲間だし、自分をそんなに惡いとは思へない現下の感情を基とするならば、云ふまでもなく三好は、最も親しい良友の一人だつた。

（戀は人を淨化する。いや、戀には限らない、一生懸命になりさへすれば、その時間、人は誰でも清く美しい心になれるのだ。さうだ、一生懸命と云ふことが肝腎な點だ、戀でも、だらけた、或は餘裕のあるのではなんにもならない。

それを思へば、やたら惚れッぽい俺なぞは、大した仕合を享けて生れた人間かも知れない。すぐ夢中になる、……いや、さうでもない。年齡とともにだん／＼後前の考へをするやうになつて來た。もつと／＼一生懸命に惚れなきアいけない。さうだ、もつと／＼本氣で惚れなきア仕樣がない！）

十四

すぐあたまに來るのはお澄のことだつた。——晩春の夕にふさはしい寂寞だつた。信之には、どう云ふものか、もう一度逢戻りたいと云ふやうな未練が殘つてゐなかつたばかりでなく、別離の甘酸ッぱい寂しさを、いつまでもその好もしい後味に保つて置きたい氣持から、今後人の噂話に聞くとか、偶然芝居や往來で出會ふとか、そんなことも、寧ろ避けたいくらゐに思はれた。云ふまでもなく、信之の彼の女を愛する心に噓はなかつたけれども、全く思ひもかけない離別が、かやうに速かに來てみると、その呆氣なさの感じに手傳はれるせゐか、それほど熱烈だつたとも思へなかつた。何かなしお澄の心の表面には、薄紙のやうな感じのものがあつて、信之には、たうとう別れるまでそれを取り除くことが出來なかつた。とは云へ、齒痒さ、もの足らなさを感じながらも、一方に彼は、奥床しい薄色にぼかされたその心ゆゑに、惹きつけられもし、從つてまたしやにむにそれを引ッぺがさうとするやうな若々しい熱情には驅られなかつたのだ。

いま信之は、自ら意識しなかつたその老成ぶつた心持に、肇て明かな觀察をくだす時が來た。これは、平生の心懸けから云つて、當然恥としなければならないところだつた。殊に世の望みからも、友達からも離れて、のめり込むやうに戀愛三昧の生活に飛び込んで行つた三好の手紙を讀んだばかりの今の氣持には、しみじみと胸にこたへて厭はしい自分だつた、——うるみ霞んだ夕空を見あげて、思はず信之は、深い溜息をもらした。厭はしさは、水のにじみ擴がるやうに、お澄の上へも延びて行つた。その理由のないことは承知してゐながら、彼の女にも責の一半を背負はせたいやうな氣がした。奥床しさの魅力ともなつた心の薄皮も、さうなつて來ると、たゞ味もない冷たさとしか感じられなかつた。こんなに早く別れが來ようとは、夢さら思ひ設けなかつたばかりに、つい云ひだす折もなかつた金鵄勳章の話、——二人のうちどちらでも危篤と云ふ場合には、どんな境遇のもとにあかの他人になつてゐようとも、必ず知らせ合ひ、見舞ひ合はうと云ふ約束も、たうとうしず仕舞になつてゐたことも、結句よかつたと思はれた。すると不思議な直覺が、いつかはお澄に着せかけてゐる幻の、無殘に破られる時が必ず來るに違ひない、と囁くのだつた……。

もう窓近い席も、ものゝ文色をわかたないほどに暮れかけたが、信之の疲れ切つた心には、その薄暗さが丁度ふさはしかつた。ソファに深く腰を沈めて、いつまでも思ひ耽つてゐた。

そのとき扉に叩音が聞え、信之の答へで、すぐそこをあけたのは朋子だつた。

「あら・・・?」

信之はおツと身動きもしず、言葉もかけなかつたが、心は、思ひもかけないほどの懐しさで、細君のそばへ飛んで行つてゐた。

「いらつしやるの?・」

「うん」

「どうなすつたんです、眞ツ暗闇で・・・。電氣をつけてもいゝんでせう?」

「あゝ、いゝとも」

パチリとスヰッチの釦を押す音がして、急に部屋ぢう明くなつた。そこに描き出された細君の姿を、珍らしいものでも見るやうに、信之はしげ〳〵と眺め入つた。傷ついた心を抱いて歸つて行くところは、なんと云つても朋子よりほかにはない、そんなことを考へながら、然し彼は、立ちあがらうともしず、笑ひかけもしず、なほさら言葉もかけずに、そのまゝ靜に居竦んでゐた・・・。

（前 篇 了）

多情佛心（後篇）

押入の中

一

銀器や貴重な酒、煙草などを藏つて置くために、その一間の押入は、錠のかゝる仕掛になつてゐた。普通に吊つてあつた中棚は取り毀して、三尺おきくらゐに、五段ばかり松六分板を渡してあつた。——これは、移つて來た當時、一應家主に斷つて、ジェムス・マッケンゼンが加へた模樣變の一つだつた。

玄關から客間、隣つて食堂、それだけはもともと洋風の建築になつてゐた。二階の八疊二間は板敷に直して寢室にあてられた。廊下を隔てゝ北向の、やゝ茶がかつた四疊半は、無殘にも衣裝部屋に使はれて、天井まできち〱に、重さうな洋服簞笥が二つ、そのほか裝身の調度で殆ど足の踏みたて場もないくらゐだつた。

錠のかゝる押入は、臺所と背中合せに、西に向つて高窓があるきりの、薄暗い六疊の間にあつた。大勢女中でもゐれば、さしづめ彼等の部屋になるところだが、築地の或る商館に通つてゐる主人マッケンゼンと、三十近くも年齢の違ふ日本人の細君與禰子との間には、子もなく、同居の身よりと云ふやうなものもなかつたから、從つて女中も一人しか使つてゐなかつた。それには、書生を置く人のために、玄關のそばで、出這入口の體裁だけは洋風の扉だが、疊の三枚敷ける、矢張り薄暗い北向の部屋があてがはれてゐた。

で、この六疊の間の方は、客でもする時のほかには、三日に一遍も人の出這入る必要のない場所になつてゐた。まして主人のマッケンゼンなどには、自分でそこの押入の襖をあけるやうな機會は、殆どないと云つてもいゝくらゐだつた。雪の結晶を圖案化した安ものゝ襖紙に、わるく光る黑塗の緣がとりつけてあつたから、そこへ惜氣もなくうち込んだ鐶や南京錠も、別に痛々しいと云ふほどの感じではなかつた。

今から二月ほど前に、けれども、この押入の内味には、驚くべき差變が行はれてゐた。そこに藏つてあつた貴重品の數々は、そつくり細君の居間の戸棚へ、またそろ〱もう普段使ひにおろしてもいゝやうな品だけは、食堂の、マホガニイ製のがつしりした食器棚の中へと移し入れられてゐた。松六分板の棚板は、上から四段だけ取りはづして、一番下の、床上三尺ばかりの高さにある一段をしつかりさすために、平に積み重ねられた。その上には、藁のと羽毛のと布團が二枚、而も敷布は、始終洗濯したてのと取り變つて、寢心地のよささうな寢臺を形づくつてゐた。勿論、薄い掛布團も枕も備はつてゐた。そのまた枕もとには、灰落しやマッチ、時には、ウヰスキイの瓶などまで置かれてゐることがあつた。以前上の段々を支へてゐた横木には、あちこちに釘がうつてあつて、上着やズボンでも、またほかの品でも、ちよつとひつ掛けて置くことが出來るやうになつてゐた……。

この驚くべき内味の變化については、細君の與禰子と、そこで、煙草を吃つたり、パジャマに着更へたり、パンを囓つたり……、要するに彼の生活の或る一部分がそこで送られるところの一人の若者よりほかには、誰も知つてゐるものはなかつた。始終壁一重隣りの臺所で働いてゐる女中のおきんでさへ、夢にも思ひよらな

かつたのだから、ましてや主人のマツケンゼンなど、尚更のことだつた。
ところで、天にも地にもたつた一人、第三者でそれを知つてゐるのが蘇代信之だつた。

二

五月中旬の或る日曜の午後のこと、赤阪氷川町の高臺にあるマツケンゼンの家には、夫婦づれの客が來てゐた。茶がすむと間もなく、少し用談があると云つて、良人同士で、二階の、書齋を兼ねた主人の寢室へあがつて行つたあとには、もう中年の、西洋人には珍らしく口の重い、無愛想な細君と差し向ひに、與禰子が、客間のソファで、ぼんやり一つところを見詰めてゐた。

黒い光澤やかな、たつぷりある髪を、無雜作に、然し有繋どことなくハイカラな感じの束髪に結つて、鼠地に、ともの薄色であらい縞と、その間にこつくりとした紅の通つた英國製のセルに、安ものゝジヤガ更紗を帶にしめてゐたが、薄汚れた足袋のせゐか、立派に籍のはいつた正妻ながら、なんとなくラシヤメンと云ふ言葉の匂ひがした。亭主のそばに立つたところは、少し嘘をつけば半分しかないくらゐで、日本人の女としても小柄の方だつた。豐頰で、眼鼻だちのちま〱と調つた顔つきも子供ツぽく、三十四とはとても受け取れなかつた。たゞわりに目の大きいことだけが、その感じを裏切つて、所謂男ずきのしさうな、成熟しきつた肉體や感情も物語る色ツぽさを現はしてゐた。

「今週の葵館、見においでンなりまして？」

可なり永い沈默が續いたあとで、やつとこさで思ひついたやうな話題を、義理一遍の笑顔で、與禰子はそこへ持ち出してみた。

「いいえ、まだ。あなたは？」

アイルランドの百姓娘だとか云ふ客の細君は、著しく顳顬にかたまつて白髪の混つた亞麻色髪のおくれ毛を搔きあげながら、陰氣な目つきを毛絲の編物からあげた。

「昨夜……、一昨日の晩でしたか、ちよつと行つて來ました」

「さう、いかがでした？　面白い？」

「えゝ、まア……」

「さう」

相手によつては、隨分お喋りもする方なのだが、與禰子は、この細君を別に好いてもゐず、また一生懸命氣骨を折つてまでお愛想に話しかけなければならないほど重く見てゐる客でもなかつた。人前の二人づれだと、そこは西洋人のことで、親切丁寧に扱つてゐるけれど、道樂者の亭主が、ひとりで遊びに來た時などには、「うちの山の神さんだの」どん百姓の娘だの」やきもち燒だの」云つて、馬鹿にしきつてゐるのが、與禰子にも、氣の毒には感じられないで、いかにも尤もと同感されるやうな、どこに一つ面白味もない女だつた。で、相手の返事が簡單なのをいゝ幸に、そのまゝ口を噤んで了つた。默つてゐれば、心に浮かんで來ることは山ほどもあつた……。

用談と稱して二階へあがつて了つた男たちは、中々戻つて來なかつた。夕方から散歩に出て、マツケンゼンの好物の鰻で晩飯を食ふことになつてゐたが、出かける間際になつて、うまく自分だけそのお伴を逃れることに思ひ極めてゐる與禰子は、口實の言葉をいろ〱工夫しながら、客の指先きに、機械のやうに動く編棒を見詰めてゐた。

「永いお話、ねえ」

「えゝ、どうしたんでせうね」

ちよつと二階を見あげるやうにして、與禰子はさう答へたが、どうせまた不良老年どもがよつて、碌な話をしてゐないとは、初めから彼の女には察しられてゐた。大口を開いて、クツクと

引き笑ひをしてゐる彼等の容子が、目に見えるやうだつた。

三

「蓄音機でもかけませうか」

與彌子自身にとつては、怠屈な永い沈黙も、決して苦にはならなかつたのだが、客の手前さうさう默りこんでゐるわけにもいかず、さうかと云つて、枝葉の榮えつこないにきまつた話下手を相手に、無理やりに話題を探し出して、なんの彼のと繋いでゐる煩ひにも堪へられなかつた。そこで蓄音機と云ふ代辯者を思ひついて、俄に愛想のよい笑顔を傾け、ソファから腰をもたげた。

「どうぞ……」

もとより客には、それを拒むなんの理由もなかつた。生氣のない灰色をした眸を、ちよいと瞼ものからあけて、目禮を返したまでのことだつた。

ヴィクタアの機械は、レコオド入れを兼ねた臺の上に、手近な一隅に置かれてゐた。勿論何を聞かうと云ふ氣とてもない與彌子は、手あたり次第に一枚の、曲の名も見ずに、いきなり廻轉盤に載せ、發條を捲いた。

「——なんですか」

客がほんのお愛想に尋ねるのも、聞えなかつたふりをして、すぐに始めた。ワルツだつた。

「ダンス・ミュウジックですね？」

「えゝ」

そのまゝ、聞き慣えの曲に耳をなぶらせながら、彼の女のあいゝ、あたまは、安んじて、勝手な世界へと飛んで行つて了つた。

「綺麗ですね」

さう云はれて氣がついた時には、いつかもうお仕舞になつてゐた。けれども、そのことで、眠らずにみてゐた彼の女の夢は醒めきらなかつた。

「えゝ」

云ひながら、針を持ちあげて、ついまた初まりへあてがつて了つた。機械は、同じ音樂をもう一度繰返しだした。

（おやおや？）

眞ッ暗な挿入つなかに、怠屈しきつてゐる耳には、それはちよつとした失望だつた。ラヴス・ドリーム。ワルツ、——その選擇のくだらなさへ、かてゝ加へて同じものを二度やるとは……。

（一體、どうしたんだい！）

仰向に頭の下には、両の指を組み合せに手を敷いて、柔かな羽根布團にマクリと身を沈ませながら、苛立ち易くも、西山菁烈は、思はずさう呟いた。が、いかほど癪にさへてみたところで、どうするわけにもいかない場合だつた。欠つ張りその音樂にでも耳を傾けてゐるよりほかには、どうにも心の紛らしやうのない彼だつた。いつの間にか、また組み合せた指のさきで、熱心にタクトをとつてゐた。

中學も一二年以後は碌に通はず、殆どなんの智育もないやうな菁烈だつたけれど、音樂にかけての才能ばかりは、ちよつと人並はづれてゐた。またそれだけに好きも好きで、十二三の頃からヴァイオリンの稽古に通つて、最近の一二年こそ手にしないが、音樂學校ぼッと出の樂手などでは、足許にも寄りつけないくらゐの腕もあり、曲の組立に就ても相當の理解はもつてゐた。——少しもほかへ氣の散らない今の場合のあいゝ、あたまには、殊に耳慣れた曲のことでもあり面白いやうに、作曲家の技巧が見え透いて來た。

（ふゝん、成程さうか……）

曲の組立が、胆のなかで分解されて行くことに、菁烈は、ひとり得意になつて笑を浮かべて頷いてゐた。

四

樂想に、なんの奇もない、[illegible]だつたが、

前半を問ひの、後半は答への、相呼應する態に、謂はば「戀の夢物語」とでも云ふべき心持にしつらへてあつた。速度にアンダンテかアンダンチーノらしかつたが、これは蓄音機のことで、よくは分らなかつた。第一段は、八小節から成る旋律の繰返し、十六小節を、もう一度繰返すことで終つてゐた。コン・モオトで、それが可なり通俗的だつた。次の三十二小節の旋律は、パッショナアトに、それからドルチェに、第三段まで進むと、四小節ばかりの繋ぎがはいつて、それから變種移調になる……。

續けさまに二度同じ曲を聞くと、もうそれぐらゐのことが嚥み込めると云ふ得意が、普烈を愉快な輕い氣持にしてゐた。驚くべきことには、三度目に聞えだした音樂が、まだ同じラヴス・ドリーム・ワルツだつたけれども、今度はもうそれが少しも癪にさはるやうなことはなかつた。それどころか、益々いゝ心持になつて來た。——と云ふのは、音樂が解る以上に、客間にゐる與禰子の心持が、そのことによつてはつきりと感じられたからで……。

普烈には、その日の客も、いろ〳〵出された菓子も、主人の道樂で、あれこれと吃かす煙草の、二階へあがつて行く時に銜へてゐたのは何かと云ふことも、あとに客間に差し向ひになつてゐる二人の女の容子も、一々手に取るやうに知れてゐた。然し蓄音機を始めて、同じ曲を三度まで繰返したことは、謂はばそこから打つてよこした無線電信のやうなものだつた。——解つてるでせう? 何しろ、あの奥さんのことですもの、話もなんにもありやアしないわ。仕樣がないから蓄音機をかけてるの。なんだつて構やアしないのよ。どうせみんなが出かけるまでの繋ぎですもの。あたし、面倒臭いから、何遍でもおんなじものをやつてやるわ。ねえ、構やアしないわ、ねえ。さう云ふ長文の無線電信をうけとつたも同樣の普烈は、三度目の時には、それに合せた舞踊の手を考案しだすほど上機嫌になつてゐた。

襞おもく垂れた黑天鵞絨の前で、高い簀の子からあびせてよこすスポット ライトのなかで、普烈は自分自身の堅くしまつた裸體が、戀の夢を美しく描き出してゐる舞踊に眺め入りながら、同時にまた體ぢうの筋肉に、旋律的な運動感覺の快く走り動くのを感じてゐた。うつゝ心に、看客と演技者とを兼ねた一幕が終らうとしてゐた時分になつて、やつと、申譯的に薄い敷物を敷いた階段をおりて來る亭主たちの靴音が聞えて來た。

（いよ〳〵出かけるな）

さう思ひながら、枕もとの時計を探つて、建附の惡い襖と柱との間の隙へもつて行つてみると、五時半になつてゐた。西北に向いて高窓をもつてゐるきりのこの部屋では、一日うちでその時刻が一番明るく、日の永くなつたこの頃では、天氣さへよければ、襖の一部へわづかの陽光がさして來て、その部分だけ薄明りなものだが、さうでないところをもつてみると、今日は曇だな、と思つた。——普烈は、土曜日の午後三時頃、そこへ忍び込んだきり、まる一晝夜以上も押入のそとの空氣を吸はないでゐる男だつた。

（さアもうぢきだぞ）

錠をはづす音と、忍びやかに、襖をあけると、血に渇いた豹のやうに跳びかゝつて來る與禰子を、想像の目がまざ〳〵と見た。どう云ふ風にして彼の女を苦しめてやらうか、そんなことを彼は考へ始めた。

五

西山普烈が、初めて與禰子と知つたのは、去年の歲晩、横濱の東亞ホテルに催された、年忘れのファンシイ・ボオルの折だつた。彼の扮裝は、新劇團にゐる友達の世話で、衣裳屋から借り出

した、古代希臘の風俗だつたが、普段から波をうつた髮の毛へ更に鏝をあてゝ縮らせ、すらりと丈は高く、サンダルのなかの素足も、靴でいぢめられ通したのでもなく、さりとて下駄の上で平べつたく踏み廣げられもしないいゝ形だつたから、シイザア幕下の若い策士とでも云ひさうで、ちよつと人目を惹いた。マッケンゼン夫人は、その小柄を利用して、雛妓になつて行つてゐた。これもよく似合つて、初め普烈は、どうしてこんな集まりに雛妓なんぞがまぎれ込んで來たらうと、怪しんだほどだつた。紹介してくれる人があつて、彼等は二番も一緒に踊つて、土耳其の軍人に扮したマッケンゼンにも、その折紹介されたが、いやにひとを小馬鹿にしたやうな鄭重さで、普烈のうけた第一印象は、ひどく惡かつた。

その後鶴見の舞踊場で二三度一緒になると、不良少年に獨特の、至極口あたりのいゝ誘惑の毒舌は、もう十分に振舞はれて了つた。女の方から手紙をつけるほどの逆上りやうだつた。さうして、見るまに二人は深入をして行つた。生れて始めて普烈にも、本氣に惚れる、と云ふ氣持が解つて來た。相手をたゞ快活な、それだけに惡戯ッ兒じみてはゐるが、ほんの可愛いお坊ッちやんと信じ切つて、少しくらゐ惡い評判を聞いても、てんで受附けようともしずに、一圖に好きで好きでたまらないと云つた風な、正直眞ッ法な惚れ込み方には、有繋の普烈も、刃向ふべき刃がなかつた。

これは後になつて解つたことだが、實際また與禰子は、戀愛生活ばかりでなく、人生の暗い裏を殆ど知らずに來たやうな女だつた。――彼の女の父と云ふのは、いま大名華族のうちでも家運の隆盛を極めてゐる或る伯爵家の、先々代の四男に生れたのだが、妾腹のために全く別物扱ひにされて人となり、その上不思議な性癖から次第に身を落して、五六年前に、たうとう横濱の場末の陋巷に、こつそり死んで行つた人だ。舊知の話によると、ごく若い時は知らず、もう三十臺からは、彼には全く性慾が失はれてゐて、もとより妻女はなかつたと言ふ。與禰子の母親と云ふものもどんな人だつたか、知つてゐる者がなかつたばかりでなく、實子かどうかさへ疑はしかつた。そんな風で、女嫌ひで、而も性慾に關することなら、どんなことでも三度の飯よりも大好きだ、――さう云ふ不思議な性癖をもつてゐた。その道の好事的研究なら、かの宮武外骨、などの遠く及ぶところでなかつたと云ふが、所謂博覽強記で、書き遺したものとてはないけれど、その代り、それに關する書畫、寫眞、神體、道具、藥、玩具、その他、殆ど一生かゝつて蒐集したあらゆる種類のもので、八疊一間ぎつちりにつまつてゐた。生計は或る種の密畫を描いて、竊に外國人に賣ることによつて立てゝゐたが、少しでも餘分の金がはいれば、惜氣もなく例の蒐集のために使ひ果した。

十八の年齡まで、その父親の膝下に、この上もなく可愛がられて育つた與禰子だが、今もつてそんなことは爪の垢ほども知らないのだから、恐らく例の八疊の間は、密室として容易に出這入できない仕掛になつてゐ、また細かい縫仕事は夜中にでもそつと起き出してやつたものと思はれる。兎にも角にも、彼の女の父親は、慈愛と威嚴とを兼ね備へ、而も新しい時代にも理解をもつた、誠に理想的な方だつた、と、今もつて與禰子は人に自慢するくらゐだから、趣味と實生活とは、確然と二分されてゐたに違ひないのだ。

六

この奇癖をもつた老人を、慢性病に衰弱しきつた病床に、彼から望んで見舞ひに來た、一

人の亞米利加人の醫者があつた。――一方、老人は、外國人相手の商賣で口を糊してゐながら、舊弊な「毛唐人」と云ふ呼び名を最後まで捨てなかつたほどで、どんな場合にも、決して直接には顧客を引見するやうなことはなかつた。取引は總て或る仲介者を通じてなされ、いつも外國人と云ふものには、理由のない輕蔑や反感をもつてゐたのだ。

既に初老の亞米利加の醫師は、兼々仲介者の話に聞いて、どうかして一度、この變態性慾の老人に逢つてみたいと思つてゐた人だつたから、いろ／＼に手を廻して、頑固な老人を說き落させたのだ。仲介者と懇意なくらゐだから、この醫者も、決してその道の門外漢ではなかつた。診察を終つてから、うまく話をそつちへ持つて行つた。老人は思ひがけない外國人の知己を得て大喜びだつた。それからは、殆ど每日のやうに、この獨り身の醫者が見舞つて來た。が、すぐ彼等は、醫者患者の關係ではなく、趣味とは云へないくらゐ深い性癖の似よりで結びつけられた仲よしの友達になつて了つた。

そのうちに、尿毒症を起して來て、老人の命數は、既に限られたものになつてゐた。醫者がそのことをほのめかすと、老人もちやんと覺悟をしてゐて、それにつけて、一生の間金と時間と根氣とのありツたけを盡して漁り求めた、かの驚くべき蒐集品を、たゞ決して散逸させないと云ふ條件さへ堅く守つてくれるなら、遺物としてそつくり贈りたい、と申し出した。云ふまでもなく醫者は、喜んでその好意をうけ、それと同時に、誰一人身よりとてもないやうに聞いてゐるあと／＼の世話は、娘與輔子の一身上のことは勿論、葬式萬端、何から何まで、きつと身に引うけて出來るだけの力を盡したいがどうだらう、と相談しかけた。

「有難う――」

と、老人は苦しい息の下で、「それは、こちらから、お願ひしたいと思つてゐたことだ。知つての通りわしには一文の貯もないが、葬式や墓場なんぞはどうでもいゝ、――是非やらなければならないと思ふなら、一番簡單な方法を選んで貰ひたい。それがわしの望だ。然し、娘には、貴方が出來るだけのことをしてやつてくれないかね。どう云ふ風な女に仕立てゝ貰ひたいと云ふやうな註文はない。たゞ貴方の心の誠に訴へて、出來るだけよくしてやつてくれとお願ひするよりほかはない」

「――解つた」

これも風變りな亞米利加の醫者は、枕もとに端坐し、深く頷き返して、「貴方の心持、よく解つた。少しも心配しないでいゝ。出來るだけのこと、わたしに出來ると思ふ――」

「有難う」

もう一度老人は、心からの禮を述べて、それから少時は目をつぶつてゐたが、靜かに云ひ出した。「貴方は娘を、わしの蒐集品の一つだと考へてゐやしなかつたかね？」

すぐには、醫者も、口が利けなかつた。心の攪亂は、深い皺の多い、白皙の面上に、露はすぎるほどに動いた。それを見ると老人は、優しく微笑みながら言葉を續けた。

「お察しの通りだ。或る意味で、あれはわしの愛玩の品だつた。蒐集したものゝうち、一番の寶物だつた。――その氣持は、恐らく貴方のお察しの通りだらう。けれども同時に、わしはあれの親だ。娘を可愛がる男親の氣持には、それもある。わしばかりではなく、誰にでも必ずそれがある。然し、決してそればかりぢやアない……」

七

道の一里も駈けて來た人のやうに、息を切らし、思はず顰まる顏を見せまいとしてか、老人

は枕のなかに額を埋めて了つた。

「解る、よく解ります」

海豹のやうに、脣の上に垂れかゝつた半白の髭を、齒の間に輕く銜へて、異國の友は、いたましげに目をつぶつて「わたし、奥さんあつた、子供もあつた。女の子供、十にまでそばにゐた。可愛がる、——玩具のやうに可愛がる。それから本當にためを思つて可愛がる、二つの心持どちらもよく知つてゐる。言葉うまく云へないけれど、よくわたし、解つてるつもり……」

「有難う。それなら安心だ。……だがね、あれは、わしには娘だが、貴方にはさうぢやアないからね、そこを云ふのさ。貴方に娘のやうに可愛がつてくれなんて、そんな無理な註文はつけないよ。あれに對してわしと貴方と、おんなじ氣持にいかないのは知れきつた話だからね。貴方は貴方の氣持で、思ふとほりを正直に、……たゞ心の誠だけを盡してくれりやア有難いのさ、無理にわしのやうな氣持になつてくださいなんて賴むわけぢやアないよ……」

「貴方の言葉、大へん可訝しい! わたし決して……」

「さう〳〵、さう誤解されさうなことだと思つたよ。いや、かう云つたからつてね、決して娘の可愛さに目がくらんで、仕合でさへあれば貴方が妾にしようとどうしようと構はない、——そんな下心があつて云つてるんぢやアないのさ。よしさうされたところで、どうも仕樣のない話だけれど、何も好んでさうしてくれと賴むわけぢやない。つまりまア貴方の心持次第さ。わしからの預りものと云ふ氣で、他人行儀に大事がられるより、貴方のものとして、可愛けれア可愛がる、憎らしい時には打つなり蹴るなりする、また女として可愛くなつて來たら、その時はまたそのやうに可愛がつてくれてもいゝし、つまり、どうとも貴方の好き自由だが、——ただ然し、心の誠だけはどんな時にも失はないやうに、出來るだけのことをしてやつてくださればいゝんだ。なまじつか他人行儀に大切がられるよりは、貴方の思ふまゝにして貰つた方が、結局あれの仕合だらうと思ふから、それでこんなことを云ひ出したのさ。惡く取らないでくださいよ。ねえ、解りましたね!」

「解つた、今度こそよく解つた」

「有難い、ぢやア賴みますよ!」

二人は堅く手を握り合つた。さうして、それから四五日して、老人は息を引きとつたのだが、與禰子の、亞米利加人の家庭に移つてからの生活は、誠に亡父の望みどほりのものだつた。彼の初老の醫者は心から彼の女を可愛がつた。彼の女の方でも、晴々とした、愉快な氣持で、この第二の父親に懷き、親しんだ。——かうして與禰子は、性秘の發掘者のそばで、なんにも知らずに、たゞ可愛がられ通して育つた。

その時分、横濱の或る大きな藥種屋の支配人をしてゐたマッケンゼンは、職業上の關係からも、よくこの同國人の醫者を訪問して來た。さうして一二年ほどが過ぎてから、與禰子に結婚の申込をした。なんにも知らない、まるで子供のやうに育てられて來た彼の女は、至極無邪氣にそれをうけた。風變りな醫者は、三十ばかりも年齢の違ふことを、却つて與禰子のために仕合だらうと云つて、これにも別に不贊成は唱へなかつた。

が、この結婚は、決して幸福とは云はれないものだつた。不思議な廻り合と考へれば考へられもすることだつたが、この花婿は、亡くなつた與禰子の父親と同じやうな[illegible]の狀態にあつた。——つまり、不能者に近い健康だつた。

八

とは云へ、もとよりそれを苦にやむやうな與禰子ではなかつた。結婚後半年ほどしてから、

二階の書齋には、カアテンで一隅を仕切つて一人床が入れられて、以來、夫婦別々に寢につくことになつたが、結句、それを氣安く思ふやうた彼の女だつた。さうして、二年ほどの月日が流れたあとへ、突然西山普烈と云ふものが、平和な夫婦の間に立ち現はれて來たのだ。さうなつてみると、矢つ張り此の結婚は、幸福なものとは云へなかつた……。

客間には、もの丶二三十分も、英語と日本語を入混に、人々のがや／＼と喋り合ふ聲が續いた。それは、與禰子が、今夜一緒に鰻を食べに出る約束を、なんとか言葉を設けて、自分一人うちに殘らうとする云ひ譯やら、はたからはまた、「まアそんなことを云はずに……」などゝ同行を勸めるやらで、ひとしきりの賑ひだとは、押入のなかの男にもちやんと察しがついてゐた。その上、女を大事がる外國人たちのことだから、結局與禰子の云ひ分が通ることも分りきつてゐた。

（えゝ、さつさと出て行きやアがれアいゝんだ！）

舌うちをして、心に呟く時分に、やつと話のきまりがついたとみえて、靴音が玄關の方へ出て行つた。

「ウェル、ゼン、グッバイ……―

「さやうなら、……行つてらつしやいまし―

「行つて來ます。ぢア十時頃には歸つて來ますからね……」

「奧さん、またどうぞお遊びに……」

「有難う、さよならお大事になさい……―

さう云ふ聲々は、はつきりと聞えて來た。

普烈はことさら悠々とした心持を用意しようと、枕もとのスリー・キャッスルの罐から一本ぬき取つて、マッチを擦つた。いつかもう隙間から差し込んで來る幽かな光も消えて、殆ど眞暗闇に等しい押入のなかに、赤黄色い火先が延びあがり、ズボンと、上はソフトシャツ一枚のごろ寢の若者を、ちよつとのま描き出した。

靜に、然し小走りに、足音が近づいて來て、入口の襖をあけると、

「……いまぢき來てよ……」

「おきんを使に出しちまひたまい―

待ち構へてゐて、普烈はそれを注意した。

「えゝ、だいぢよぶ！―

そしてまた廊下の足音が遠ざかつて行つた。

……息いつぱいに吸ひ込むと、鼻の先の煙草の火で、普烈の刻の深い容貌が、赤々と照し出された。いかにも心地よげに微笑してゐた。

「うーん……、あゝあア……―

今までとて別にさう窮屈に縮まつてゐたわけでもないが、急になんとも云へん氣樂な心持になつて、のう／＼と大きく伸をした。手足がすぐ襖へつかへたと思ふと、足もとの方で、ガタンと、寢床から床へ落ちたものがあつた。今はもう然し、そのもの音ではつと身を竦めるやうなこともなかつた。身を返つて、前こごみに、一服ふかく吸ひ込み、その火影にすかしてみた。白鞘の短刀の、さほど離にしつたのが、キラリと光つた。（なアんだ！）とも思はずに、拾ひあげて、枕もとの布團の下へ押し込んで了つた。

二階は女中、階下は與禰子と手分けをして、ガタン／＼雨戸を繰る音がしだした。それがすむと、食堂の方で、買ひものを云ひつけてゐるらしい主婦の聲が聞えた。暫くしておきんが、臺所の水口から出て行つた。

待ちに待たれる足音は、然し、湯殿の方へ驅けつけ、そこの板戸のあく音がした。

九

潔癖で、日に何度となく、手を洗つたり、口を漱いだり、髮に櫛の歯を入れたりしずにはゐられない與禰子が、指先に薄皮のざら／＼と感じられる雨戸の桟を掴んだ手では、いかに心の急

く逢瀬でも、そのまゝ驅けつける氣になれないのに無理はなかつた。それも解つてゐながら、普烈は、癇の強い馬のやうに、じり〳〵と苛つてゐた。どんな微な物音でも聞き洩らすまいと、おのづと耳が澄まされた。臺所と背なか合せになつてゐる湯殿の方からは、水を使ふ音が聞えて來た……。

と、その時、ガチャ〳〵と、扉の握柄を捩ぢ試みるらしい物音を、鋭くなつてゐる普烈の耳が捉へた。それは、湯殿とは正反對の方角、——東南の隅にあたる玄關の扉と直覺された。そのうへ、音の高低をほかにして、そのガチャリガチャリ捩ぢ試みる音には、盜賊のやりさうな忍び〳〵の心持があつた。ガチャリと一つ廻すと、うちのなかに心附いた者があるかどうか聞きすまして置いて、それから徐にまたガチャリともとへ戻す、——さう云ふ風な、忍びやかなやり方だつた。

上半分が硝子になつてゐる觀音開の玄關の所に、耳をよせて、鍵がかゝつてゐるかどうかを、そつと捩ぢ試みてゐるマッケンゼンの姿が、咄嗟に普烈の目の前に浮かんだ。——さツと肌が寒氣だつて、思はず床の上に起き返つてゐた……。

が、どうやらそれは空耳らしかつた。ガチャリガチャリと三四度は慥に聞えたと思ふ物音が、起き直つてぢツとすました耳へは、もうまるで傳はつて來なかつたばかりでなく、氷川神社の森に近いこの山の手の裏町には、逢魔が時とでも云ひたいやうな、日暮がたのほんの少時の深い靜まりが來てゐた。申し合せてものみなが、一時に音をやめたかと思はれるやうな沈默に、すませばすますほど、耳鳴りばかりが高くなつて來た。なんの手應へもないこの沈默の方が、更に一層薄氣味わるいものだつた……。

ガラリ、——いきなり水口の腰高障子が引きあけられて、すぐ大股に踏みよる、憚るところのない靴音が、反ツくり返つた臺所のあげ板を、ガタリゴタリと荒らかに踏み鳴らした。普烈は床に足をおろしたが、そこには立ちあがるほどの餘地はなかつた。腰かけたまゝ、無駄を知りつゝ、もとより引手のない襖の縁へ爪をかけて、力いつぱい引きあけようとした。云ふまでもなく、南京鋲が、揺れて鳴るばかりだつた。

すぐもう入口の襖があいて、疊の上の靴音が、ぴたりと押入の前に止まつた。普烈は、手早く寢床の下を探つて短刀を取り出し、いつもさうしてゐる習慣から、ズボンのなかに、柄頭だけがバンドの上へ顏を出すやうに深く差し込んで身を構へた。

が、靴音は、すぐまた廊下へ出て行つた。今度は、前ほどには荒々しい歩き方ではなかつた。寧ろ物音を憚るやうな心持が感じられた。

「與禰さアん……」

紛ふ方なきマッケンゼンの聲だつた。頸を帶びるほどに緊張しきつてゐながら、一生懸命ことなげにみせようとしてゐる調子だつた。湯殿からはすぐには答が聞えて來なかつた。

「與禰さん、……與禰さん、あなたどこにゐます？……二階？」

靴音は階段の方へ、從つてそれのすぐそばにある湯殿の方へ、用心深げに、コトリ〳〵と遠のいて行つた。

十

この押入を姦夫の隱れ場と知つてゐて、ことさら十時頃までは歸らないと云ひ殘して出かけておいて、不意打に現場をおさへようと云ふ氣で戻つて來たものか、それともなんにも知らずに、出がけに忘れて行つた好物の葉卷かなんかを取りに歸つて、そこに細君の姿が見えないところから、いきなりこゝへはいつてみると、

襖に錠がおりてゐるので、それですぐまた鍵を取りに出て行つて了つたのか、聲音や足音ばかりで想像するのでは、マッケンゼンの本意のあるところが、有繫の普烈にも、まるきり見當がつかなかつた。もし何もかも知つてのことゝはつきり解つたならば、その暇に襖を蹴破つてでも飛んで出て、素早く西向の高窓から身を隱すぐらゐの藝當は、彼にとつてはさしたる難事でもなかつた。然しなんの他意もなしに、忘れものを取りに戻つて來たものとすれば、細君か、あれは都合で藏ひ場所を變へたと云つて、部屋から持つて來て渡しさへすれば、そのまゝ無事にすんで了ふことだつた。一旦襖を蹴破ると云ふやうな愚事を演じた上は、身の安全だけは圖られるとしても、今後の逢ふ瀨が絕對に不可能になるか、少くも困難の度は非常に增すわけだ。第一この押入のなかの爲體を、なんと云ひ解くすべもない與禰子が、あとに殘つてどれほどの苦しみにあはなければならないか知れない。その立場を思ひやれば、これは迂濶なまねは出來ないぞ、と、聰しくも普烈は深く思ひめぐらしたのだ。

尤もそれには、普段からのマッケンゼンの態度が、不義者たちにとつて、何から何まで知りぬいてゐるのやら、それとも全く無邪氣なのやら、なんとも要領を得ない謎のやうなものだつたせゐもあつて、さう云ふ際どい場合まで行つても、思案といへば思案だが、惡く云へば埓もない氣迷が起るわけでもあつた。飽まで圖々しい普烈と、これまであまり嘘と云ふものゝ必要に迫られることなしに來た與禰子との取合せだつたから、いかに鈍感な者にでも尻ッ尾を押へられさうなあぶなッかしい瀨戸も、幾度となく潛つてゐた。留守中押入から出て、シャッ一枚で、悠々と時分はづれの晝飯を食はせて貰つてゐるところへ、ぬうッとはいつて來られて、兩方で、なんとも云へない珍妙な顔を見合せたこともある。矢張り不意の歸宅に驚いて、靴を穿く暇もなく、手にぶらさげて庭へ跳んでおり、內と外と入れ違ひに門の方へ行かうとすると、なんと思つてか、いつになくそつちから廻つて來かゝつたマッケンゼンと、庭木戶のところで、ぱッたり眞正面にぶつかつて了つた時などは、有繫の普烈も顔色がなかつた。金に困つて、與禰子に書いて貰つた小切手に、——そんなところはまたいやに正々堂々と、住所も氏名も有の儘に裏書をして引き出したのが、程なくばれて、銀行で調べられた結果、與禰子がしどろもどろに、一時立替へてやつたものと云ひ紛らし、いろいろしてわきから調達して來た金で、普烈から爲替で良人に送らせて、どうやら誤魔化しをつけたこともある。決して愚ではないマッケンゼンが、いかに細君をほんの子供のやうに思ひ、それ故にまた信用しきつてゐたとは云へ、かう云ふことが度重なつては、それと思ひ極めないまでも、少くとも疑ひぐらゐはもたなければならない筈だつた。それだのに、彼はたゞの一度でも、細君に向つて、普烈との交際を咎めてかう云つたためしがなかつた。まるつきり知らん顔をしてゐた。これは、然し二人を、どう云ふ關涉よりも尚更に、一種底氣味わるい不安へと追ひ落すものだつた。

十一

與禰子は、然し、彼の女の明い淺薄な性分から、事件の發覺をそれほど深く懼れてゐるのではなかつた。——決して良人を嫌つてゐるわけではなく、それとはまた全く別に普烈が好きで好きでたまらないのだから、これはどうも仕方がない、と云ふやうな氣持だつた。戀ひ進むにつれて、良人は顔を見るも可厭になり、愛人と二人きりの生活をしたく思ふのが普通だけど、彼の女の、はつきり良人は良人、愛人は愛人と云つた風な

心持には、女がよくさう云ふ場合が陷りがちな自己欺瞞がなかつたせゐか、いつまでも永續きがした。とは云へ、二人の男の、位置、財産、名望、才能と云ふやうなものを比較商量して、强ひてこの現狀の維持を必要と思ふやうな、さう云ふ理智的な與爾子ではなかつた。夫婦の間とはかうしたもの、そこへ愛人が出來れば、その結果はおのづとかうなつて來る、どうもほかに仕樣がない、――かう、水の低きにつくやうな邪氣なさで、自分自身の行爲を眺めてゐられる彼の女だつた。

そこへ行くと、普烈の方は、全く凡俗の戀だつた。まづ、不良少年らしい惡戲心や打算からはいつて行つて、次第に本氣になり、今ではどつちかと云へば、却つて自分の方が動きのとれない愛着に絡まれてゐるくらゐなのに、みづから欺いて、なに、こんな女の一人や二人、いつ捨てたつて惜かアない、ほんの當座の享樂だ、と云ふ風に考へてゐた。さうでも考へてゐなければ、この場合殊に滿たされ憎い戀人の獨占慾を、どうにも處置のつけやうがないわけだつた。

この二つの心の据ゑ方の違ひは、可怕いほど鮮明に、露骨に、事件の發生に對する二人の覺悟に現はれてゐた。命知らずと云はれ、喧嘩の名人と謳はれてゐる西山普烈が、時折マッケンゼンの掌中にある短銃を幻に見て、心を寒くしてゐたのに反して、與爾子の方は、もし見つかつて叱られたら、あやまるばかりだし、それでも勘辨してくれなければ、離緣なりなんなり、良人の思ふ存分になるより仕樣がない、と、簡單明瞭にたかをくゝつてゐた。それ故にこそ、小切手の例でも知れるやうに、普烈に關する祕密の取扱ひなどもぞろつぺいだつたり、押入を寢床に改造すると云ふやうな、危險な、そして圖々しい企てにも、手を拍ち合せて喜び贊成するわけだつた。たゞ圖々しいだけの普烈の氣持とは、全く別なものがあつた……。

風呂場の方からは、普通の調子でものを云ふ聲が聞えて來た。六疊の鍵を出しておくれ、煙草を忘れたから。いゝえ、もう煙草やなんかはあすこに入れてないの、あたしの部屋、今すぐ持つて來ますからね。……そんな風な、穩かな會話らしく思はれるのだが、それにしてはちつと永すぎた。殊に、何を云つてゐるのか言葉は分らないが、マッケンゼンの聲ばかりが多くて、その合間に一言二言づつ挾まる與爾子の調子の、普段よりずつと低聲なのが腑に落ちなかつた。

……じり／＼と、不安が、もう一度胸にこみあげて來た。

「兎に角、お貸し！」

急に、怒鳴りつけるやうなマッケンゼンの聲が響いたと思ふと、ガチャ／＼と錠前が鳴つた。何やら甲高に與爾子の叫び聲が起り、續いて二人もみ合ふらしく、ドタバタと板敷に足音が亂れた。

普烈は力まかせに、襖の裾を蹴つけた。

十二

安ものゝ襖には、ひとたまりもなくボコリと大穴があいたばかりで、さうお誂へどほりはづれてくれなかつた。すぐまた枕もとの方の柱に接した框を狙つて蹴ると、丁度それが外側の溝にはまつてゐたので、中ほどの、錠で二枚とぢ合はされたあたりで弓のやうに撓つて、一尺ばかり疊の上へずり出した。續けさまに三つ四つ蹴るうちには、外側の一枚だけ上下とも溝がはづれて、――それでも錠で吊られたまゝ、謂はば三尺の開戸の形に、あくまで、べつたり内側の襖に折り重なつて了つた。

その眞正面に、唯一疊を隔てるか隔てないところに、八寸豐のマッケンゼンが、ヌッと突ッ立つてゐた。西窓に微かに殘つた外の光を背負

つて、ヒョイと見あげた目には、天井からペロリと黒い紙でもぶらさがつたやうで、顏のありかも知れなかつた。けれども、腕いつぱいに突き出された右の手に、拳銃の握られてゐることだけは、咄嗟に、目が見たか、耳が聞いたか、鼻が嗅いだか、兎も角普烈の心には、はつきりと映つてゐた。思はずたじろぐ胸へ、俄造りの寢臺の小端がポンとあたると、そのまゝ布團の上に腰かけて了つた。――偶然ながら、それは決して、腰をぬかした、と云ふ形ではなく、くそ度胸を据ゑ、くるりと尻をまくつて坐り込んで了つたと云つた風に見えた。と、マッケンゼンは、一足踏み出して、ピタリと普烈の胸板へ狙ひをつけた。

（どうでもなれ！）

普烈はもう全く破れかぶれの氣持だつた。ソフト・シャツの襟に手をかけて、グイと押し開くと小さな貝釦は手應へもなくバラ〳〵とちぎれ落ちた。內懷の肌へぢかに、左の手をグッと差し入れその肘の下に隱れるやうに、右だけはシャツの上からズボンへ突ッ込んで、短刀の柄をしかと握つた。

そのまゝで二人は睨み合つてゐた……。殆ど影繪に等しいマッケンゼンの顏にも、ぢツと見詰めてゐると、目、口、鼻がはつきりして來て、殊に白眼は、まるで燐光でも放つかと思はれるほどギラ〳〵と輝いた。その二つの眼のほかに、眞つ正面に、心臟に擬せられてゐる銃口が、更に恐しいもう一つの眼だつた。それが、ぢツと普烈の生命を睨め据ゑてゐた。

（えゝ、もう、どうともしやがれ！）

所詮のがれられないと覺悟をきめると、普烈は、嘘のやうに急に暢氣な氣持になつて了つた。寢臺からぶらさげてゐる足を、無意識の間に輕く組み違へ、貧乏ゆすりよりもちつとあらい間を刻んで、ゆら〳〵とゆすぶらし始めた。

――それだけの、無言の時が過ぎたのだ。

（今までぶつぱなさないんなら、こいつだいぶん臆れが來てやがるな。やられたところで、存外怪我ぐらゐですむかも知れねえぞ。まア、やられりやアやられるで、それもいゝや）

それくらゐな氣持になつて來た。

（だが、一體與瀰子のやつはどうしちまつたんだらう。目でも廻したかな。やられるくらゐなら、その前にもうひと目顏を見たいが……。でも、こんなところへ跳び込んで來て、惡く止めだてでもされようもんなら、却つてそれがズドンとぶツぱなされるもとだ。かうしてぢつと睨み合つてゐるうちは、なんかきつかけがない限り、ちよつと引金は引けめえ……）

十三

危機一髮とも云ふべき瞬間の、死の恐怖はそのまゝに、不思議にも普烈は、一方そんなことまで考へてゐた。さうしてその考察は、可なり鋭いものだつた。驚愕や表情は見極められなかつたとしても、さア立派に撃ちぬいてくれ、と云はんばかりに、シャツの胸をはだけて、眞正面に銃口に對し、而も寢臺からぶらさげてゐる足を、音樂のタクトでもとるやうに、暢氣らしくゆすぶつてゐるのでは、どんな人間でも、ちよつと火蓋の切れるものではなかつた。危險は寧ろその無言の、靜止の狀態が、何か第三者によつて亂される瞬間に懸つてゐた。だから、睨み合ひの狀態のまゝで、二人が化石でもして了はない限り、飛び行く秒々に、遁れ難い危險が迫つてゐたわけだが、同時にその狀態が續いてゐる限りは、絕對に安全だとも云へるわけだつた。

一刻一刻、外の光は薄れて行つた。打ち込まれた杭のやうに、棒立に立ち塞がつてゐるマッケンゼンの姿に、もはやカラヤシャツの白と、上衣の黑とをさへ見分けかねるほどになつて了つ

た。……急に苛烈には、どうにでもしてこの場を遁れようと云ふ氣が、ムラ〳〵と湧き起つて來た。

（なに、こんな鐵火簪みたいな野郎！）

さう思つた瞬間だつた、あけ放しになつてゐた戸口に、足音もなくすつと立ち現はれた姿があつた。二人はそれを視野のはづれに感じながら、どつちもその相手から目をはなさうとはしなかつた。ちらとでもさうしたが最後、命はないもの——この感じには、動きがなかつた。

「あなた！」

と呼びかけた與爾子の聲は、震へてはゐたが、低く、底力がこもつてゐた。「あたし、亞砒酸をもつてゐるんです。そのピストルをはなしてくださらなければ、今すぐ口へ入れますから……」

「ネヴァ（ならん）！」

正面を睨め据ゑたまゝ、思はずマッケンゼンは、ひと言生國の言葉で叫んだ、與爾子は、そろそろと部屋のなかにはいつて來た。

「おやアそれをあたしに手渡してください―

―いけない！　あなたはそつちに行つといでなさい！―

「よろしい――おやア毒を嚥んでもいゝんですね！」

「うーむ……」

低く呻いたと思ふと、ブル〳〵ッと全身に武者震ひが流れる、途端に與爾子の小さな體が、鞠のやうに彈んで、マッケンゼンの右の手に跳びついた。

……ヅゥン……重く銃聲が響いた。……ドッ、ドッ、二つ三つ疊の上に力足が踏まれたかと、思ふと、マッケンゼンの長大な體は、風船玉の息がぬけたやうに、急にシワ〳〵シワと崩折れだした。馬乘りに折り重なつて、苛烈もともども、古新聞で腰貼をした黄大津の壁へ、ヅッシンと重く倒れかゝつた。

いやな呻き聲と、壁に疊にドタリバタリ手足を打ちあてる音……。

「ニ、ニ、西、西山、……フリッツ……、フリッツ……」

「くそ！」

もう一度新たに、苦しい呻きが高まつた。

「死んで、一緒に死んで！」

もうそこは夜の闇だつた。探りよつて來る與爾子の手を摑んで引よせたのは、いやにベトベトする手だつた。

「死なうとも、さアお立ち！」

十四

もとよりその答に噓はなかつた。が、その一瞬間前、ふと我に返つて突ッ立ち上つた時には、たつた今わが掌にグリ〳〵と手應を感じつゝ、息の根をとめたばかりの男を踏み跨いで、右手には、たほしかと短刀の柄を握つてゐた。……それは、噛みしぼつて引擦り廻すやうな筋肉の抵抗の間に殘して來てもいゝ筈のものだつた。よし十重二十重に取り圍まれようとも、それさへあれば、またどうにか遁れ終せないものでもない、——この氣持は、ごく闇にもせよ、動いてゐなかつたとは云はれなかつた。だのに、與爾子の聲を聞くと同時に、バサンと疊の上へ、その、血みどろの刃ものを投げ捨てゝ了つたのだ。

（さうだ、二人なら死んだ方がいゝ……）

その時になつて、驚て二人と云ふことに氣がついた。そして、もし一人だつたら、自殺などは夢にも思ひ起さないものだつたに違ひない。

「さア、早く、……お前の部屋へ行つて、あすこで……」

一刻もそこに居たゝまれない氣持は、一足ごとに指先が背なかに觸れるほど、急きに急いて追ひ縋つて來た

「起して、た、た、立てない……」

探りよる手先が、帶のお太鼓のもツくりとしたふくらみに觸つた。うつ俯になつてゐる兩脇から手を入れ、胸へ抱きあげようとすると、キヤツと叫んで、必死に身をもがきながら、
「だ、だ、誰かゐる！ フリッツ！ 誰かうしろにゐる！」
「俺だよ、どうしたんだ、俺だよ！」
しがみついて行く女の手先へ探りよつてみると、兩手にしつかりつかまつてゐるのは、マッケンゼンの右腕だつた。
「おい、違つてるよ！ それア……おい、それア……」
「いや〳〵、いや！」
「馬鹿、俺はこゝにゐるんだ！ うしろにゐるんだ！ これが俺の手だつて云ふのに……」
「いや、フリッツ！ 誰か來てるよ！」
「馬鹿！ 違ふつたら！ それア……」
「いやだ〳〵！ いやですつたら……」
生きた二人の手と、みづからは動かない一本の手とが縮み合ひ、もつれ合つて爭ふうちに、耳を劈く銃聲が鳴つた。
「人殺し！」
咽喉いつぱいに、與禰子の聲が突ツ走つた。
續いて、どこまでぬけて行くか分らないやうな、太い息が、ウ、ウ、ウ、ウ——ッと呻く、その口へ手の平をあてがつて、全身の力を集めて、女の體をもぎ離すと、ど、ビッ、と、着物のほころびる音がした。廊下を引きずつて食堂まで來た。そこには、電燈が明るく點つてゐた。みると與禰子はもう顏色がなかつた。
膝に枕をさせて、襟を押し寛げた。そこには、手に掬へるほどの血だつた。——マッケンゼンの拳にあつた拳銃の引金へ、生きて動く二十本の指の、どの一本が觸れたとも云へなかつた。死んで動かない五本の指の、そのひとさし指にでも、それくらゐの力が、——或は執念が、生き殘つてゐなかつたとも云ひ切れはしまい……。
「與禰子！」
靜まり返つたあたりへ、その聲は、答へられることなく吸ひ込まれて了つた。ぢツと動かない烏睛を見詰めてゐたが、急に、ドタリと死體を膝から落して、血みどろになつた若者は、ぬツくと突ツ立ち、走るやうに部屋を跳んで出た。

うはさ

一

暦では、まだまる一月も早いのに、降り具合は丁度梅雨だつた。半日かそこら、晴間が、たまらない蒸暑さで 降れば降るでまたじめ〳〵と、いやに、あたまが押へつけられるやうな日が續いた。
信之は、また蒸暑い仲ながら、ちよつと理由があつて、一日待つ間に切れてゐた日本橋の幾代と云ふ女と、半年振りに一夜をあかして、翌日がその鬱陶しい雨だつた。二時頃になつて、待合富久田家の、薄暗い離下座敷で、やつと二人は、朝とも晝とも云へない食事を摂らうとしてゐた。自分でも情ないとは思ひながら、日曜の熱には脆い信之のことゝて、そろ〳〵また迎酒の糸がもどりかけてゐた。前の晩の深酒がさしてこたへてゐないのをよいことにして、ゆつくり腰を据ゑて、ちび〳〵始めてゐた。
「なんだい、何を思ひ出し笑ひなんぞしてるんだい……」
あいた盃を突き出しながら、餉臺の角と左右の肩へ掛けかけた新聞から顏をあげた拍子に、ちらと目にとまつた幾代の薄笑ひに、信之は、つい誘ひ込まれて自分もニヤ〳〵した。
「いえね、昨夜の萩原さんの寄子を思ひ出したら……」
「いやどうも、これは恐縮……かい？」
「あれを云ふ時の顏つきツたら……」

幾代は、ちよつとハンケチを口のはたへもつて行つて、機嫌よく微笑つたが、信之のは寧ろ苦笑ひだつた。

　前の晩は、伊庭や瀧十郎と一緒だつた。機嫌買ひの瀧十郎が、ちよつとした拍子から馬鹿にはしやぎだして了つて、いゝ加減の幇間では側へもよれないほど、奇智縦横のお座もちぶりを見せた。正面からはぷつりとも云はずに、暗々の裡に、御主人公の信之と、久し振りでなんとなくばつの悪くなつてゐる幾代との間の空氣を、和げ、暖め、仕舞には幾分エロティックにさへ萌し醸さうと努めた。その調子のよさは、それだけで一つの藝當になつてゐて、當の信之でさへ、少しもてれることなしに、笑つて見てゐられたが、然し結句、餘計なおせつかいだと云ふ有難迷惑の感じは免れなかつた。そこへ行くと、利口なやうでも幾代は、單純に瀧十郎の心遣ひを嬉しがるばかりだつた。おまけにその現し方が、いかにも遊び馴れた、謂ふところの「粋な」取り廻しになつてゐるので、同じことでも、擽られてゐるやうな快味を誘はれたのだ。

「ほんとに面白い人ね」

「ちつと面白すぎるくらゐだね」

　信之の云ひ方には、どことなく反感が含まれてゐた。

「でも、あの方へかけると、隨分凄いんですつてね」

　相手の氣持を感じると、すぐそれに應ふ方向へ、話の道筋を自然に折り曲げて行くやうな神經や技術は、永く妓籍に身を置いてゐる幾代には、もう一々は意識にものぼらないほどの、心の習慣となつてゐた。

「さうかしら……」

「あなた、木挽町のよし野つてうち御承知でせう？」

「知つてるよ」

　ほんの目につくかつかないほどに、信之の眉根がよつた。

「おもんさん……」

　意味をもつた目つきで、ぢツと相手を見詰めながら、幾代は色ッぽく首をかしげた。

二

「そのおもんさんも知つてるが、それがどうしたと云ふんだい」

　逸したい目を、無理に相手の顔に抑へつけてゐるやうな、いつになく弱々しい表情で、信之が訊き返した。

「あの人ともさうだつたんですつてね」

「萩原がかい？」

「えゝ」

「それアもう天下周知の事實ぢアないか」

「さうですか」

　と、素直に頷いて、「ぢアあなたは、誰がさうだつたとお思ひなすつたの？」

「いや、それア……。然しあのおもんさんて人は、不思議に評判の悪い人だね。どこで話が出ても、つひぞ褒められるのを聞いたためしがないよ」

「ほんとにさうですわね。有繫の萩原さんも、あの人だけには、なんでしたつてね。……有繫になんぞつけて、瀧ちやんにはすまないけれど……」

「なんでした、たアどう云ふんだい、捲きあげられてゐたとでも云ふのかい？」

「えゝ、まア……」

「そんなことはあるまい。勿論大して金を使つちアゐなかつたらうけれど、まさか、萩原を絞りあげるなんて、おもんさん、決してそんな人ぢアないよ」

「さうでせうか。でも、專らさう云ふ取沙汰ですわ」

「あの土地なら兎も角、こゝらまでそんな取沙

法があるほど、一體おもんさんつて人は、大した人なのかね？」

「えゝ、それアあなた……、何しても田島伯爵を手玉にとつてゐたんで、すつかり世間へ賣り込んぢまつた名前ですもの」

「さうかなア、さう云ふ名妓質の人たア思へないがなア。……然しまア、それアさうなんだらう。三好に云はせると、無智と色氣の象徴だなんて、からもう一文の値打もないやうに云はれてるが……」

「あなたは、大へんまた御贔屓のやうですわね。少し可訝しいのね」

「可訝しいか可訝しくないかは、そちらの御推察に任せるが、贔屓は慥に贔屓だよ。一體、ひとの噂つてものほど當にならないものはないからね。あれはどうも質が悪いの、この人は實に立派な人だのつて、さう人間が善か惡かのどつちかへ、ぴたりと組込まれてたまるもんぢやアないよ。丁度柱時計の振子みたいなもんでね、いゝ方なり強い方なりに、――つまり右なら右へだね、そつちへ五寸搖れるだけの力があれア、反對の悪心や弱々しい氣持にだつて、同じ五寸と云ふものは搖れ動かなけれアならない筈のものなんだ。それが、右なら右、左なら左へ片づんだ搖れ方をしてゐるやうな奴は、きつと一人前の人間ぢアないんだ。嘘つきなんだ。嘘つきつたつて何も詐欺師なんぞのやうに、人を騙すばかりが嘘つきぢアない。世の中に何が救はれないつて、自分で自分を騙して平氣でゐられる人間ほど始末におへないものはないんだ。さう云ふ奴等に限つて、自分の心を、ぶらんぶらん平氣で右や左へ搖れ動かして置けないもんだから、無理やりに右へ抑へつけたり、左へ片づけたりして、得意になつて納まり返つてゐやアがるんだが、あたしに云はせれア、そんなのは一人前の人間ぢやアないね。片輪だね。右へ行かうと左へ動かうと、自分の心の搖れる幅をちやんと心得てゐて、平氣で落ついてゐられるのが本當だ。それでこそ一人前の人間なんだ！」

三

「それぢアあたしなんぞも……」

と、よくは嚥み込めないながらに、幾代が言葉を挾んだ。差し向ひの朝酒に、理窟ッぽいお談議を、やゝ辟易の態で、ならばうまくほぐらかして了はう了見だつた。――まんざら馬鹿への五寸ばかりぢやアないんですね。ガッチャンと一つ搖れゝば、これで利口の五寸もあるわけなんですわね」

「感心！ その通りだ……」

信之も機嫌よく微笑ひながら、「だが、お前さんなんぞは、馬鹿への五寸が、三寸五分あたりで引き返しちまふ態がないたア云へないぜ。どこまで行つてもだらしがなくならないやうぢア、まだ〳〵半人前だね」

「へえ？ どこまで行つても、あたしがだらしなくならない？ へえ、さうですかねえ。尤も半年近くもほつたらかして置かれたんぢア、こちらがいくら隨いて行きたい了見だつて、踏み出す目途がつかないわけぢやないでせうかね」

「なアんてね、なか〳〵味なことを仰有るね。あたしみたいな正直者にうつかり眞にうけられて、あとで困つても知らないよ。困ると考へるのからして、そも〳〵自惚たわけなんで、その實は、嗤はれるのがおちかも知れないが」

「可厭なの！ お人柄らしくもないことを仰有るもんぢアありませんよ！」

多少の誇張はあるにしても、その「可厭なの！」は、慥に實感らしかつた。信之は、心にもない花柳界的輕口を、深く、自ら恥ぢなければならなかつた。間拔けじみた、智慧のない云ひ草でも、實感からものを云つてゐるさへすれば、

んな場合でも、決していゝいやみにだけは陷る氣づかひがないんだ、いや、それが人間として當り前の言葉なんだ。——普段から百も承知してゐながら、またそんなくだらない反省を繰返さなければならなかつた。

赤くなつた顏を眞正面に幾代に向けるだけの勇氣は、然しその反省が生んでくれた。

「御免！　今のは全くきざだつたね、あやまる！」

「あらア」

てれて、幾代は橫を向き、手持無沙汰の煙草に火をつけようと、敷島の箱を取り上げた。その時、目の中が一杯の涙になつて來た。——悲しい涙はこらへやうもあるが、嬉しい涙の氣まぐれさに不意をうたれては、どうにももう誤魔化しがつかなかつた。一本ぬき出して、手近の煙草盆へ持つて行くと、富士山の形に綺麗に搔きあげた灰と、その眞中の、なかば黑いまゝの櫻炭とが、涙を通して、もじや〳〵に入れ混つて見えた。信之も默つてゐた……。

「暑い」

ほのかに鈴蘭の匂ふハンケチで、まづ鼻から口へかけてのあたりを押しつけるやうにしてから、手早く眼頭を拭つて、「雨があがるんぢやないかしら。いやに蒸して來ましたね」

云ひながら立つて行つて、小庭に向つて五寸ばかり隙してあつた障子をあけ放した。銀の、細い雨足が、スッ、スッと、斜に、萬兩や矮雞檜葉の下草の茂みに消える。どことなく空の底光りがまして、近くの湯屋の煙であらう、物干竿の屆きさうなあたりを、薄く舞ひおり舞ひあがつて流れる……。

さう云ふものを眺めながら、幾代は綺麗に涙をふいた。

信之は、手酌で盃を滿しながら、

「こつちにいらつしやいな」

「えゝ」

「おもんさんの話が、中途からとてつもないところに逸れちまつたね」

平の結城絣の、仕立おろしがやゝ突ッ張つた袖へ、ハンケチをしまひながら座に戾つて來る幾代を見あげた。起きぬけに風呂へ飛び込み、この階下座敷に來るや否や新聞に讀み耽つてゐて、身じまひを濟まして、あとから「お早うございます」とはいつて來た幾代には目も向けず、「お早う」と頷き返して置いたので、昨夜に變るそのこしらへに、つい今が今まで氣がつかずにゐたのだ。化粧と云ふほどではなく、ブルームでちよいと叩いたばかりの、小麥色の地肌に、ゆるやかに、然しぴたりと、葡萄鼠の襟の重なつてゐる具合が、ひどくよかつた。

「大へんねえ、何をそんなにぢッと見ていらつしやるの？」

「いや、なんでもない……」

てれてすぐ目を逸したが、話しかけてゐたことを思ひ出して、「だが、あまのじやくなもんでね、あんまり惡い噂ばかり聞くと、その噂の當人が、同情されて可哀想になるんぢアなくつて、實際ごくいゝ人のやうに思はれて來るが、そんなのは俺ばかりかしら。おもんさんだつてさ、はたが自分のことを惡辣な女だと噂をすれば、無理にもその噂どほりにしてゐなければ濟まないやうな氣持になつて了ふほど、それほどいゝ人なんぢアないかとさへ思はれるんだ。だから、もしあの人が、この方ばかりは、と思つて、おのづと頭のさがるやうな人が出て來て、それアみんなが間違つてゐるんだ、お前さんは惡辣どころか、大へんにいゝ人なんだよ、と云つて聞かせたら、忽ち生れ變つたやうないゝ心になるに違ひないよ。つまりあの人の振子が、一時、世間の噂と云ふもので、右なら

ば右、左ならば左へ靖つかされてゐるので、もとはと云へば、決してそんな一方に偏したもんぢアあるまいと思ふんだ。何もそれは、おもんさんに限つた話ぢアない、世の中の噂なんてものは、どれだつて大抵さうだらうと思ふんだ。それどころか、悪い噂を立てられるくらゐなら、きつと芯のいゝ人に違ひないとさへ思はれるんだ。――なアんて、馬鹿に一人で力んぢまつたが、どうだい、あなたはさうは思はないかね？」

「さア、さう云ふむづかしいお話になつて来ると、あたしなんぞにはとても解りませんわ。でもね、それアさうかも知れない、と思はれるとこもあつてよ」

「どうして？」

「いえね、おもんさんがね……」

「なんだ、まだあの人の噂か」

「いけない？」

「なに、いけなかアないさ。……どう云ふんだい」

「なんですか、あんまり思ひがけない話で、ほんとうかしら、と思つてるんですけど……」

「ふうん、またなんか事件でも起したかね？」

「えゝ、どつか我善坊とかのお不動さんに凝つてね……」

「なんだい、神信心を始めたの？」

「えゝまア……」

と、苦笑ひしながら、「御信心と云やア御信心かも知れませんけど、そこのお住持さんに……、まるでもう夢中なんですつて」

「へーえ、坊さんに惚れたの……。そいつア成程不思議だね」

五

「その坊さんがね、それア縮から抜けて来たやうないゝ男なんですつて」

「ふうん、お住持さんと云やア、然しもういゝ加減の年齢だらうにね」

「そんなでもないんです、……三十七八つてんですから、かれこれおもんさんとおツつかツつぢアないかしら」

「おもんさんは、慥あたしより一つ上の亥の五黄だから、七だらう」

「あゝ、さうですか。……大へんお詳しいんですね」

幾代は餉臺の端に両手を置き、胸を突き出して、意味深げにニヤ／＼しながら、ぢつと信之の瞳のなかを見入つた。

「なんだい……」

見るまに頬に血がのぼつて来た。ぢツと見込まれてゐる瞳を逸すまいとする努力も露はだつた。「なんだい、……なんだ、ぢツ……」

この意外の答へは、もう十分明瞭だつたにも拘らず、幾代は、劬はりなくなほも相手の眼から視線をはづさずに、而も口を利かうともしなかつた。たうとう、たまりかねて信之は、盃をとるとグイとあけて、さした。

「まア一つ……」

「可厭！ そんなことでは誤魔化されません。……あなた、おもんさんと……」

冷かしではなく、こんな話には適はしくないほどの生真面目さで、目の色を沈ませ、「さうだつたんですね？」

「あゝ……」

真赤になりながらも、信之は、悪びれずにきつぱり答へた。

「いつごろ？」

「去年の歳晩、あとにも先にもたつた一度……」

「まア……」

「序だから何もかも云つちまはう。あたしは一體あの人の妹さんが好きだつたんだが、ちよいとしたものゝ間違ひで、そんなことになつて了つたんだ。然し、いろ／＼へんなところもあ

るけれど、いまだにあたしは、あの人が好きだよ。云つたり爲たりすることに、なんとなく底力があつてね、ぐうつと押して來るやうな根強いところがあるんだ。呆れ返られるか知らないが、そのすぐあと、妹のお澄さんとも、たうとうそんなことになつて、この方は三月ばかりも續いたんだが、今になつてみると、性分としちやア、あたしはおもんさんの方が好きだな。へんにしねくねした陰性なところがなくつて、有繋にすつきりしたもんだよ……」

「まア……、可怕い！」

「何か可怕いんだい。……あたしを色魔だとでも思つてか？」

「色魔か何か知りませんが、何してもえらい腕ですね」

「腕なんて……、可哀想に、そんな可厭な言葉を使つてくれるなよ。もしあたしが、腕がいゝとか色魔だとか云はれるやうな人間だつたら、あなたなんぞに圖星をさゝれて、すぐ眞赤になつて、どぎまぎして、忽ち尻ツ尾を押へられて了ふやうな、そんなどぢを踏むもんかね。ぬけぬけとした顏をして、へえ、よし野、そんなうちは知らないね、とかなんとか、初つからうまく誤魔化しちまはアね。腕のいゝなんてのは、こんなもんぢアないだらう」

六

目を伏せて、暫くぢツと考へ込んでゐたが、幾代は急に職業的な媚笑ひに身を甲ひ、言葉つきも晴々として、

「御免なさいね、お客樣を捉へて、腕がいゝのなんのつて、好き放題なことばかり云つて……」

今度は信之の方が、ぢつと相手の顏に目を据ゑて、ちよつとのま默つてゐたが、

「あたしは、自分の自惚の強いのに自分ながら呆れ返つてるやうな人間だから、のめ〱と云ふがね、あなたはあたしが好きなんだよ」

「あら、さうかしら……」

「少くとも、今さら、お客樣を捉へて、なんて云草はなからうと思ふんだ。……それぢアなんだ、と聞き直られても困るが、さうまた急に他人扱ひにしなくつたつてよからうと思ふがね」

「すかない！」

「あゝ、嫌味だらうと、きざだらうと、心からさう思つて云ふんだから仕方がないさ。あなたはあたしが好きだし、あたしもあなたが好きなんだ。あたしはあなたを藝者扱ひにした覺えはないよ……」

「へえ、さうですかね。もしあたしが藝者でなかつたら、あの時……、誰がなんと云つたつて……」

「さア、それだつてもさ、何もあなたが藝者だから、それであんな風に云つて別れたわけぢアない……」

「それアあたしも……」

「いや、ちつともあなたは惡かアない。……なに、要するにあたしが浮氣者なんだよ。浮氣者ぢアあるが、然しさうかつて、決して不眞面目ではないつもりだがな。好きでもない人と、そんな關係を結ばうとは思はないし、體だけで好きになるなんて云ふこともまづないな。……移氣は移氣でも、助平根性は人並より薄いだらうと思つてる。さう云ふことを露骨な目的にしては、人が好きになれないくらゐなもんだ。さうかつて、好きな人なら、どん〱近よつて行つて、結局そこまで行かなければア落つけないんだが、でもそれア人間自然の出來がさうなんだから仕方がない。助平根性だけで女を見てゐる人も一種の片輪だが、さうかつて、體を離れて、全く精神的な戀をしようなんてのも、美しいには違ひないが、自然に背いた空想だね。……あたしに、若し多少とも人と違つてるとこ

ろがあるとすれば、人が好きになりたくつてならない性分なんだ。その裏には、例の振子の理合で、ひどく人嫌ひになつて了ふ場合もあるんだが、生來の淋しがり屋だから、とても一生とは、その人嫌ひの氣持が續かないんだ。人嫌ひの氣持も、例へば眞暗な洞穴かなんかのやうに、ヒヤ／＼と冷く、小暗くつて、そとからはなんの交渉もないし、自分一人を強く守つてゐるやうな感じは、決して惡くないんだが、淋しがり屋には、とても永もちのしない心持なんでね、それですぐ人を好きにならうとする、人情の曖昧にくるまらうとする。一人好きな人がある上に、また好きな人が出て來れば、慾ばつて、それも好きになる。移氣と云ふでう、前のが全然嫌ひになるわけぢやない。矢ッ張り好きなんだが、また別な種類の、違つた好きさが生じて來るんだ……」

「そんな勝手なのつてないわ。種類の違つた好きだなんて、そんな……、好きは好きぢアありませんか。やつぱり飽ッぽいのよ、つまり浮氣なんだわ。わたし、そんな人大嫌ひ！」

七

さうまで云はれては、有繋に信之も、大ぶんしよげた容子だつたが、でもまだ考へ足りないと云ふ風に、小首をかしげながら、

「これほど何もかも正直に云つて、それで嫌はれるんぢア脈はないわけだが、然しあたしとしちア、どれもこれも大眞面目なつもりなんだがなア。好きだ、可愛い、と思ふ氣持は、それほど一人だけに限られなければならないもんかしら。あたしみたいな精神的にも肉體的にも、人並の力しかもつてゐない男が云ふから、嘘らしくも聞えるんだらうけれど、若しこれが頭抜けてえらい人だつたらどうだい。女の四人や五人、いちどきに可愛がれないつて筈はないと思ふがね。またそれだけの實力のあるなしは別として、男には誰しも、一人でも多くの女を可愛がらうと云ふ氣持が、天然自然と與へられてるやうに思ふがね。そこへ行くと女は、どこまでも一人の愛に縋らうとする氣持ばかりだから、愛人なり良人なりの心がほかへ逃れかゝると、必要以上の心配をしたり、嫉妬をやいたりして、大騷動が始まるんだ。男がえらければ、それくらゐの騷動は、なんでもなく抑へつけて了へるんだから、結局問題にやならないわけだが、いちどきに幾人もの女を可愛がれる男の氣持の複雜さを、女としても、ちつとは考へてみるがいゝんだ。いや、そんなことより第一には、自分のねうちをちやんと知つてゐれば、安心してゐられるわけなんだ。自信のない女に限つて猜疑深いが、またそのわけぢアないか、いつ何時男の心が自分を離れて行くか知れない、そんな氣持でしよつちうビク／＼してゐるんだものね。くだらない自惚ぢア困るが、ちやんとした自信があつて、男の自由を認めてゐられるやうだと、ほんものだがね。幾人もの女をいちどきに愛せるほどの力をもつた男つてのがなか／＼ないのと同じで、いま云つたやうな、自信に充滿ちて男の自由を平氣で認めてゐられる女つてのも、めつたにあらう筈はないんだが……」

「それで、あなたにはそれが出來るんですか、いま仰有つた、そのいちどきに幾人もの女の人を好きになるつてことが？」

「立派に、出來ると云ひ切るだけの自信はないね。無理に云へば滑稽な自惚になつて了ふ、つてくらゐなことは、なんぼなんでも解つてるよ。然しさうかつて、逆鉾立をしても一生出來ない仕事だとも思つてないね。なか／＼容易なことではなさうでゐて、氣がつくと、存外いつの間にかちやんとそれになつてることもあるんだ。だから、勉強次第で、決してさう悲觀し

たもんでもないと思つてるがね……」
この「勉强次第」で、幾代はぷつと噴飯して了つた。
「何が勉强次第……そんなことを勉强する人つてあるでせうか」
「ほかにはなくたつて、少くもあたしは、現に一生懸命……」
「勉强中なんですか？　まア呆れた！」
「呆れることはないさ……」
「つまりそれが、色修行と云ふのでせうね。さう云ふ方にあつちアあたしなんぞ……」
「それ〲、それが自信のない女の悪い癖だよ。ひとの言葉を、へんに皮肉に歪めて釋つて、自分ばかりいゝ子にならうとする……」
「どうもすみません！」
「さうまア慍らなくつたつていゝぢアないか」
「いゝえ、ちつとも慍つてやしません」
さう云つて幾代は、プイと横を向いて了つた。

八

座の白けかゝつたところへ、丁度折よく女中のお豐が、すらり、と云ふよりも、にゆうツと馬鹿高い姿を現はした。酒膳には、佐日の料理が三品と、銚子が載つてゐた。
「お待たせ申しました」
いやにゆつくり引き延して云つて、すぐ取つて附けたやうな笑ひ聲をたてた。
「寢起のいゝ子だなア」
微笑ひ顏で答へながらも、信之の言葉には、どこかちよつと意地の悪い響も含まれてゐた。
「寢起？　可厭ですよ。貴方がたぢアあるまいし。あたしたちはね、もう起きてから六七時間にもなりますよウだ」
「お豐さん、お序にお銚子をどうぞ」
「何よう、ひとの鼻のさきへお尻を向けて。ちやんとうしろに來てますよ！」
「あら、大へんね、あなたが態々あたしのうしろへ來て坐つちやつたんぢアないの」
「坐つたら、あなたの方で、その大きなお尻を片づけたらいゝぢアないの」
「まア、お豐さん、あんた……」
振り向きさまに肩のあたりを目がけて、ぴしやりと平手で喰はせようとするのを、ぴよいとすかして、手首を捉へ、
「さア、どうだ、昨夜廊下であたしに賴んだことを今こゝで云ひませうか、それとも……」
「何よ、何をあたしが、あんたに賴んで？」
「まア、あんな白々しい、……あのね、藤さん、この妓はね、昨夜あたしを捉へてね、あの……、今夜……」
クルッ〲と聞えるやうな、短い笑ひ聲を洩らしながら、幾代はいきなりしがみ附いて、お豐の口を手の平で抑へようとした。
「なに、腕力なら負けるもんか」
お豐は、それが癖の、男のやうな口の利きやうをして、手先をこんぐらかして應戰した。信之も、苦笑ひで眺めてゐるより仕方がなく、手持無沙汰に、からを承知の銚子を取りあげて、注いでみながら、
「おい、總斥斤の流しは滑るから氣をつけなよ」
「あら、それア……それア一體なんのこと？」
俄の運動に、頬を眞赤にして、お豐は息をはずませた。
「東店の山の神どもが、摑み合の喧嘩をして、轉ぶとわるいからさ」
「あら、憎らしい！」
「その手間で、ちよいとお銚子こつちへよこしてくれた方が、體は慥に樂だらうかな」
それで、どつちからともなく力をゆるめたところで、いきなり幾代が、相手の腕をキリ〱と捩りあげた。
「あいたゝ、たゝ……何よう無態性！」
「あら！」

もう一度組みかゝらうとして、氣を變へると、すらりと立つて、信之のそばへ行き、「さア、口惜しかつたら、いくらでもかゝつていらつしやい」

「いやよ、そんな、加勢なんぞつけたりしたつて、知らないことよ」

「ヤアい、負けたでせう」

子供の調子で囃しながら、そば近くべたりと坐つて、信之に、「ほんとにお豐さんいけないのよ」

「うん、さうか、よし／＼」

肩に手を廻して、信之も、孫のやうな妓を愛撫する助平爺の身振で、故意とでれん／＼しなだれ懸つてみせた。

九

じろりと睨めやつて、お豐は、噛んではき出すやうに、

「甘いの！」

「同じことなら、あめえの、と云つて貰ひたいな」

「あめえと云はれるにはね、もうちつとどッか小粋なとこがなくつちアね……。あなたのは、あ、ま、い、の！」

「甘い／＼と輕蔑するな、さ」

「西郷隆盛アもと甘い？」

すぐ乘つて、あとをつけてみて、幾代は我ながらぶッと噴飯して了つた。はたの二人もお義理でなく笑へた。

「まつたく、銅像で見ても、西郷隆盛は甘さうですわね」

お豐などは、その取合せの可笑しさを思ひ出しては、いつまでもクス／＼笑つてゐた。

三人になると、先刻までの理窟ッぽい話は、まるで別人のことのやうに、他愛もない冗口ばかり利き合つた。うまい食物や、好きな酒だけでも、安値に信之の享樂心は滿たされるのだが、そのうへ、久振りに逢つてみた幾代の心持が、決して見當のつかないほど離れてはゐないのも、内心少からず嬉しかつた。それで、二本目があく頃には、機嫌よく酒が廻りかけてゐた。

「もう御飯でおよろしいんでせう？」

お豐が、ちよいと腰を擡げて、微笑ひながら尋ねた。――矢張りこのうちへ來る客で、信之と同期に大學を卒へた醫學博士があつて、噂が出るごとに、彼の體を心配して、もうそろ／＼酒はやめないとほんとうにいけない、などと、どちらの座敷へも出る藝者たちや女中相手にでも、親身になつて云ふのがならひだつた。近頃では、かけ違つて、めつたに顔は合さなかつたが、傳へ聞に、その親切には、信之も嬉しく心にうけてゐた。――お豐が酒を小切るのも、それ故だつた。

「だつてまだ二本だぜ。それもだいぶ助けられてるから、正味にしたら……」

「いゝえ、もういけません」

と、幾代が、眞顔になつて、「つい二三日前にも、財部さんにお目にかゝつたら、相變らず飲んでるらしいが、あなたには癪の系統とかがあるんだし、それでなくつたつてあゝ深酒ばかり續いちア、いくら丈夫な體だつて保ちアしない、なんて、隨分それア心配しておいでなしたよ。昨夜もあんなに召上つてるんだから、今日はもう御飯になさいね！」

「なアに、酒に命をとられるんなら、ちつとも恨むところはないが、親父の苦みやうを見てるだけにね……。尤もゲエ／＼やる方なら、いゝ加減馴れちアゐるが、……ちア、かうしよう、もう一本だけね、たつた一本、それならいゝだらう」

「仕樣がないのねえ……」

ほんとうにお酒のみつて、意地が汚いから嫌ひよ」

幾代とお豐とは、かう云つて顔を見合せたが、信之はそのしんみりしかけた調子をまぜッ返して、

「こつちへお豐さんなんぞに好かれたひにやア、女で一命を落すことにならアね。それくらゐなら酒で死んだ方が、よつぽどましだア」

「ぢアもうあたし知らないから、いくらでもいいだけお飲みなさい」

「さうよ〳〵、いくらこゝであげないやうにしてゐたつて、よそでめちや飲みをなさりやアおんなじことなんですもの。制めて恨まれるだけが損だわ」

十

結局三本目が來て、それを飲み盡す頃には、信之は、口を利くのも億劫いほど、いゝ氣持にトロトロなつて了つた。輕く茶づけを一杯半かツこむと、早速もう肘枕で横になつた。

「あら、起きてらつしやいなね、つまンないわ」

ほんの四五杯の酒に、幾代はほんのり頬を染めて、甘ッたるい鼻聲で云つた。

「なに、寢やしないがね、ちよつと……」

「嘘! もうぢきあたし、行つて來なきアならないんですからさ。あたしが歸つてからゆつくりおやすみなさいましよ」

「七百貫目の借錢負うて、夜ひる稼ぐ伊左衛門、こんな時に寢ねば寢られぬ……、それからなんてつたつけかね」

「知りませんよ! ねえ、起きてらつしやいつてば!」

そばへよつて、うしろから肩を小突かれて、目をつぶつたまゝ、グタリ〳〵と他愛もなく、

「何が何して惣嫁どの……、つて云ふんだが、なんてつたつけかね、憶えてない?」

「邪魔なされな惣嫁どの……」

やゝ調子をつけて答へた。

「あ、さうか」

「おや、洒落なの?」

「何がさ」

「さうか、つて……」

「どう致しまして、とんでもない。洒落どころか、たゞもう眠い〳〵……」

飾臺の上を片づけて了つて、綺麗好きらしく、クックと布巾をかけながら、お豐が口を出して、

「仕樣がないから、今お枕を持つて來てあげますわね」

やがてまた二人きりになつてからの話が、どうかした續き具合で、もう一度おもんの噂に返つて行つた。――なんでもこの二月ごろからの關係らしく、尤もその佐伯とやら云ふ坊主が、瀧十郎の男衆大西の紹介で、よし野へ出這入しだしたのは、去年の秋だと云ふが、二月以來はまるでもう入りびたりに、例の奥まつたおもんの部屋に寢起して、めつたに寺へも歸らなかつたさうだ。それが、三、四、五、と四月續いたと思ふと、何にどう使つたものか、少からずあつた寺の預金はもとより、紡績、郵船あたりの持株で、いかに惡い時期とは云へ、十萬は決して切れない額のものが、そつくり人手に渡つて了ひ、土地はないにしても、よし野の建物造作まで、二番三番の抵當にはいつてゐると云ふのだから、全體の金額にしたら、嘘のやうな使ひ果しやうに違ひない。使ひ捨てないまでも、佐伯の名義になつたとかなんかで、兎にも角にもおもんの身は、僅か四月ばかりの間に、綺麗にまる裸にむかれて了つて、今ではもうにつちもさつちもいかないのだ。――と、かう云ふ話だつた。

「嘘だらう」

あまり思ひがけない出來事に、信之の驚きなどはどこかへ飛んで行つて了つて、ひよいと聞き返すなり、煙草に火をつけながら、一[illegible]根も葉もないことでもあるまいけれど、なんぼなん

「でも、そんな……。第一株にでも手を出すとかなんとか、さう云ふことでもしない限り、四月やそこらで、そんな大金が使ひ切れるわけがないぢやアないか。名義を書き換へるなんて、いくら惚れたからつて、まさかそんなことをオイソレと承知するおもんさんでもあるまい」

十一

「だつても、ほんとうにさうなんですから仕様がないぢやアありませんか」
幾代は、女に獨特な、くだらない意固地をみせて、「あたし慥な人から、もう二三度も聞いてますわ」
「さうかい。ぢアまアそれアそれとして置いて、その後は一體どうなつてるんだい」
「絞るだけ絞ると、坊さんはお寺へ歸つちまつたんですつて」
「へえ、世話狂言にでも出て來さうな、大した奸惡なんだね。へーえ、それで？」
「それからがもつと驚いちまふんですよ。今度はね、おもんさんの方からお寺へ押しかけて行つたんでせう、行つてみると、ちやアんとおかみさんがあるんですつて……」
「それを、その時になるまであの人は知らずにゐたのかい？」
「それアさうでせう、しよつちう、それで揉めるんだつて云ひますから」
「可訝しいね、それまでにだつて寺へは行つたらうにね。……尤も隱さうと思やア、どうにでも隱せないことはあるまいけれど」
「ひよつとすると、夫婦喧嘩かも知れないの。何故つてば、この頃でもずうッとお寺にゐるんださうですけれど、坊さんは、おかみさんばかり大事にして、おもんさんにはそれア邪慳に當るんですつて」
「ふうーん」
「つい二三日前に行つて來たつて人の話だと、可哀想におもんさんが、鉢卷かなんかで、よれよれになつたゆかたを着て、しよんぼり臺所の板敷に坐つてたさうですよ」
「へーえ、つまり、それほどにむごく扱はれても、矢つ張りそばが離れられないと云ふわけなんだね？」
「さアそこはね、それほどまでに惚れてるのやら、それとも、どこへも行きどころがなくつて、仕方なしに我慢してゐるやら、そのへんのことは、よくは解りませんけどね……」
「冗談いつちやいけない。それアあの人には、そんな乞食みたいな心持で、とても一日たつて我慢してゐられる氣遣ひはありやアしないんだから……」
「だつて、それアどうとも解りませんわ。うちにゐれば、お金を借りた人に責められるし、どこへたよつて行かうにもあてがないと云ふやうなことだつたらどうして？
「いや、それア然し、まだ十分に未練があるんだよ。どうしてもそばを離れる氣になれないんだよ」
「あら、さうですかしら？」
「餘人の場合ならいざ知らず、あの人に限つちア、借金取りくらゐを恐れて、うちへ寄りつかないなんてことはないよ」
「さうでせうねえ、もしお金だけのことなら、いよいよとなれば、お澄さんのとこへさう云つて行つてもすむことでせうしね」
「一體さう云ふことになつて來て、お澄さんて人はどうしてるんだらう」
「あら御存知ないの？」
「知らない、なんにも知らない」
「噓でせう、そんな筈つてないわ」
「筈があらうがあるまいが、知らないものは知らないんだよ」
「へーえ……」

「なんだい、なんか變つたことでもあつたのかい」

さう云ふ顔を、まだ疑はしげにぢつと見詰めて、幾代は暫く口を開かうともしなかつた。

十二

さうして間をもたれてゐる間、信之は、有繋に落つかなかつた。思ひつめ、張り切つてゐた心も、丁度いつぱいに膨らんだ風船玉へ、鋭利な刃物でもあてたやうに、箱根の宿の不思議な出會で、急に他愛もなくペシャ〳〵と萎えて了つたのだが、――そして、さうなつた後から考へてみれば、合性でも惡いと云ふのか、深くなれば深くなるほど、心の奥の、そのまた芯に、なんとしても溶け合はないものがあるやうな氣がしてゐたことも否めなかつたのだが、さてかうして、別れて後の消息でも聞くだんになると、そこはなんと云つても他人の氣持ではゐられなかつた。殊に別れてからはや二月、よきも惡きも、實感の生臭さが薄れて行つたあとには、たゞ淡々とした懷しさばかりが殘つてゐた。

「ほんとうになんにも知らないんだよ。おまけに、知らないとなつたら、いつそのこと何一つ知らずにゐたいやうな氣持さへあつたらしいな。蒔繪なんぞに逢つても、こつちからは一切なんにも云ひ出さないし、彼方でも、へんによし野の話を避けるやうな具合だつたが、それを丁度いゝ幸と思つてたんだから……」

「ぢア、あたしもなんにも喋らない方がよささうね……」

「いや、それアいけないよ……」

「いけないたつて……」

「なんにも云はないんならいゝけれど、そこまで云ひかけといて、あとを聞かせないのはいけないよ。そんなずるい奴があるもんか」

「ずるい？　何がずるいのよ！」

「ずるかアないが、話して！」

「あなた悲觀なされアしない？」

「またそんな……」

「でも、一時は隨分大へんだつたんですつてね。あたしなんでも知つてるわ」

「それア兎に角、ほんとに、不思議なくらゐよし野のことに詳しいんだね、一體どう云ふわけなんだい？」

「それアもう……」

無邪氣な得意で、美しい齒並を見せて笑み輝きながら、「不思議に思ひなさるでせうねえ……」

「不思議だ、……どう云ふんだよ……」

「ほんとはね、あすこのお勢さんつて人知つてらつしやるでせう？」

「あゝ知つてるよ。あの人が……？」

「あの人と、うちに小母さんて人がゐるのよ、血の繋がつた叔母ぢアないんですけどね、その人とが昔ッから大へんな仲よしなの。だから、お勢さんは、しよつちうちに遊びに來てるわ」

「へえ、世間つて、全く廣いやうで狹いもんだね、……さうかい、ふうん」

「惡いことつて出來ないもんね」

「まつたくね」

「あら、隨分のめ〳〵してるわね。そんなこと云ふんなら、もうなんにも聞かせてあげないからいゝ」

「何が、あたしアどんなことも云やアしないぢアないか」

「そんならいゝわ」

ツンと横へ向けた頰を、指のさきで輕く突いて、

「慍つた？」

「慍つた！」

「ぢア御免、あやまるから許して」

「ちやアんと、頭をさげてあやまらなくつちア可厭！」

「御免々々……」
膝の上に載せてゐた手を把つて、その、薄く靜脈の透いて見える甲へ、きつく脣を當てた。

十三

「さア――」
微温かく柔い手先を、兩の手の平に弄びながら、信之は、ニコ〳〵顏で促したてた。「さア、もう神妙に聞くから、話してくれよ」
「吃驚したつて知らないことよ」
急に、惡戯ッ兒らしく眼を輝かして、幾代は一膝のり出した。
「大丈夫!」
「あのね、お澄さんね、――さう云つたつて、あたしやアお目にかゝつたことなんぞないんだけど……」
「うん」
「お嫁にいつちやつたんですつて――」
「お嫁に? へえ、それアまたどうしたつてことだらう」
「富岡さんつて華族さんがあつて?」
「さア、よくは知らないが、舊い海軍の軍人で、子爵かなんか貰つてる富岡つてのがあつたやうな氣がするな」
「あゝ、ぢアそれでせう。もうその方は亡なつて、今は息子さんの代なんですよ」
「さうかも知れない。日淸戰爭時分の將軍だつたと覺えてるから、もう死んでもいゝ年齢だらう。で、その息子さんのとこへ嫁いたわけかい?」
「さうなの。大したいゝ男なんですとさ。年齢もたしかあなたくらゐなんでせう」
「ぢア、初婚とすれア晩い方ぢアないか」
「いゝえ、二度目なの。それも、お澄さんが好きになると一緒に、前の奥さんを離縁して了つたんですつて。一人とかお子さんもあつたんですつてから、隨分思ひ切つてるわ。なみ一通の惚れやうぢや出來ないわね」
「へーえ、ひどいことをする奴だなア」
うつかりさう云つて了つてから、ぎくッとした。――それは、全く出鱈目だつた、でないとすれば、なほ惡いわけになるのだが、大嘘だつた。
何よりも誠實を尊ぶ信之だ、もし一人の女を戀して、心の眞がそこに盡されてゐるならば、二人の生活を結んで離すまいとするためには、どんな大切なものでも犠牲にして、ビクともしない信念や勇猛心には、滿腔の敬意を捧げずにゐられない筈だ。道學者達の口吻で、皮相の事實を、因習的な道德に照し合せ、頭からその非を鳴すやうな、そんな淺薄なまねは出來ない筈だ。――それが、どうだらう、一夜の愉しみもない放縱無軌な行爲のやうに、たゞ一口に貶しつけて了つたのだ……。
（俺はまア……、一體……）
あまりのことに、一時は、自分ながら吃驚してゐたが、然しすぐ反省してみるだけには、心の平衡をとり戻した。――第一には、人格の未熟と云ふことが考へられた。言葉を換へれば、附燒刃の人生觀が、いかに成すなきかを、鼻のさきへ、慘らしいまでにまざ〳〵と突きつけられたやうな氣持だつた。思想が思想として在る限り、いざと云ふ場合の、もの丶要には立たない、思考が、その形を失つて、身内を環る血となり、肉となり、骨となつて了はなければ、假令どんなにそれが立派だらうと、所詮は裝身の具にも等しいのだ、――この理をつく〴〵と思ひ知つた。
――……青い、青い、實に青ッぽいもんだ、いつになつたら俺も、もうちつとはどうにかした人間になれることか！）
差向ひに幾代のゐることも忘れ果てゝ、信之

は、深く自ら恥ぢ、危ぶんだ。

十四

それには、勿論、一見理由のないやうな嫉妬が働いてゐることも事實だつた。これが、一年二年隔てゝ起つたことなら兎も角、自分との、あれほどまでの戀が破れたと思ふと、すぐもう後釜が出來てゐたことは、なんとなく侮辱されたやうな氣もし、まだ記憶に新な愛撫が、他の男の上に思ひ移されて堪へがたい怨恨、憎惡の念ひともなつた。――さう云ふ感情は、明らさまな形をとらないまでも、話を聞くや否や、信之の心に湧き起つてゐたに違ひない。

まだそのほかにも、話してが幾代であると云ふ關係から、そんなことを聞いたくらゐで少しも弱りはしない。頭ごなしにやツつけてやれる、と云つた風な見栄坊もあつたらうし、「ふうん、さうかい」と、さうは無關心に聞き過せるわけはなく、自然、心持が複雑に動いたのだ。そして、複雑と云ふことには、往々にして伴ひ易いところの、不純が紛れ込んだものとは云へ、それにしても、大體から云へば、人格の未熟をなんとしやうもないのだつた。最後には、彼が駄目な人間だ、――それだけの人間だ、と云ふ事實が厳然として殘るばかりだつた。

「さうねえ、奥さんや子供衆のことを思つたら、なんぼなんでも出來ることぢアないわねえ」

から幾代に同意されてみると、なほさら信之は、恥しさに堪へられなくなつて來た。とは云へ、一旦さう感じたことは、――彼がそれだけの人間だと云ふことは、言葉にしてそれを云ひ表はした表はさないに係はらず、既に一生拭ふべからざる事實だつた。彼の人間としての修行道に、進歩の里程を示す一本の榜示杭だつた。而も足のおそさを物語るところの、餘り名譽でもない記録だつた。――これを感じながらでは、然し、今さらむきになつて取消しを云ふのも、矢張り恥ぢらはれた。

「でもまア、さう一概にも云へない。二人の氣持がどこまでも眞劍なんなら、いかに奥さんや子供たちが氣の毒な目を見ようとも、どうもこれア仕様のない話なんだから」

「あら、あたしはさうは思はないわ……」

「さア、そこはめい／＼の考へで、理窟を云ひ出しやアきりがないが、あたしはまア、自分の心の誠に從ふことが一番立派だと思つてるんだから、さう云ふことも決して不贊成ぢやアないよ。たゞ然し、今あなたから聞いた時に、すぐあたしがうけた感じから云へば、なんだかその眞劍さが疑はれないこともないな。何一つ理由もなしに、獨斷的にそんな暴言を吐く奴もないもんだけれど、どうもあとで二人が後悔するやうな時が來やアしないかつて云ふ風な氣がしたな」

「さうねえ、それアなんとも云はれないわねえ。……でも、あなたはどうなの、そこまでの氣持にはとてもおなんなさらなかつたんでせうね」

「あたしは、うちのかみさんが好きだもの、子供たちだつて隨分可愛いもの。中々大抵なことぢアそんな氣持にやアなれないよ」

「さうお」

幾代は淋しく眼を伏せて、そのまゝ默つて了つた。信之も、なんとなく心が滅入りこんで行つた。

靜かながら、雨はやゝその銀色に光る足を繁く降り出したとみえて、竪樋を落ちる點滴が、甲高に響いて來た。いつか部屋のなかもむらむらと暗くなつてゐた。

十五

「あなたもうそろ／＼歸らなくつちアいけまい？」

ふと思ひついて、信之はから言葉をかけた。

ひとりになつて、ものを思ひたい心持も、その

底にはあつた。

「えゝ、もう何時でせう」

と、立つて行つて、違棚の亂箱に信之の時計を見ると、「あら！ 大へん／＼」

「何時？」

「六時十五分前。……あなたは、ずうッと晩までこちらにいらつしやるんでせう？ あたし、十時までにはきつと歸つて來ますから、待つてらつしやいね？」

「さうもしてゐられないが、兎も角ちよいとひと寢入さして貰はう。それからのことは、またそこへ行つてきめようよ」

云ふうちにもうゴロリと横になる信之の枕もとに來て、どこそこは貰ひいゝから、どことどこを御挨拶にすれば、九時には歸つて來られるから、などと胸のなかでたてる計畫を、そのまま口へ出して一通り喋つてから、すらりと立つて、もう一度待つてゐるやうに念をおしながら、急いで幾代は歸つて行つた。

お澄のこと、おもんの噂、……大好きな、とりとめのないもの思ひにはもつて來いの材料で、信之のあたまはいつぱいになつてゐた。薄い掛布團をもつてはいつて來たお豐が、幾代で賑はうとするのにも、眠さうな、一向氣のない返事をして、すぐに席を立たせた。……お澄の性分の、どこか底のつかへる嶮しさが、暈けながら形をとつて摑めさうになつて來た。おつとりしてゐるやうに見えて、存外目端のきくところ、――俗ッぽい利口さ、これらしく思へた。心持の方角を、唯心、唯物の二つに大別すれば、きつぱり後者に屬すべき生れつきに違ひなかつた。反對におもんの方は、人の噂には一筋繩でも二筋繩でもいかない、謂ふところの海千山千で、一生男に惚れるなどと云ふことの出來ない女のやうに思へるのだが、――事實またそれを證據だてるやうないくつもの材料はあるのだつたが、それは寧ろ後天的な人世觀なり境遇なりから出てゐる「行爲」で、その眞の「心」を云ふならば、お澄などと比べものにならないほど唯心的な生れと考へられた。信之としては、云ふまでもなく、おもんのやうな性分の方が好もしかつた。いや、「好もしい」などと落ついたことの云つてゐられる場合ではなかつた。生れた時から既に近くにゐる心だつた、「緣ある人」だつた。

……十五六年も前に、武田家の二階で眞蒼になつて、胸をいつぱいに開けられて、フゥ／＼云つてゐた時、それ水よ、葡萄酒よと、そばにつき切りで世話をやいてくれた女に、然し信之が、さういふ性分などを思ひ得る筈もなかつたけれど、それでも、なんとなく嬉しくはあつた。よしんばそれが唯物國の王座からおりて來たやうな女であらうとも、當時のおもんほどに若くて美しかつたならば、無論信之には、それでも同じことだつたに違ひないのだが、懷しくも香ばしく、舊い記憶が蘇生つて來ると、なんとなくその頃からの「緣ある人」のやうに思はれて、好意は二倍にも三倍にもされた。

そのくせ、去年の幾尾の間違ひでは、全く受身だつた。今でこそ、人の噂ほど當にならないものはない、などと云つてゐるが、その當時の彼は、慥にそれに影響されてゐた。――江淵にのれない女だけれど、折角据ゑられた膳だから……、と云つた氣持が十分あつた。

十六

もとよりおもんの心は荒み果てゝ、勞れ易くなつてゐた。享樂を思ふと、さア／＼と尻から追ひたてられてゐるやうな、氣忙なく、苛立たしい年齡ごろも來てゐたのだ。信之が、しみじみそれを感じたのは、あの祖霧の晩から三日目に、瀧十郎の名でかけてよこした電話に釣られて、京橋の或る料理屋へ出かけてみると、それ

がおもんで、白茶苦茶に飲まされた擧句、おそくなつてよし野の奥座敷にひよろけ込んだ時だつた。ふと床の間を見ると、醉つた眼にも鮮かに、つい三日前までは何事もなかつた栖鳳の横物で、親子兎の圖が、一文字から縮を通り越して軸まで、大しては太くもない筆の根本まで押しつけて、力いつぱいグヽ、グッと引きさげた墨のあとも黒々と、無殘に塗り消されてゐた。訊くと、これも醉つた紛れの、隱しだても飾ッ氣もなく、おもんが笑つて話したには、前の日の朝、瀧十郎が、それを御歳暮にくれた或る客のことから、心にもない嫉妬をやいてみせ、いつまでも諄く愚圖々々いつてゐるのに業を煮やし、丁度そばにあつた筆を把るなり、一なによ、こんなものくらゐ……—とばかり、いきなりあゝして了つたのだ、と云ふことだつたが、馬鹿高價くばかりあつて、面白くも可笑しくもないその繪の筆者に對しては、竊に溜飲をさげながらも、信之は矢つ張りちよいと驚かされた。そんな亂暴がしてみたい氣持もさることながら、それを今もつて抛ッぱなしにして置くづほらが、更に雄辯におもんの氣持を物語るもの丶やうに思はれた。そしてその瞬間には、彼の心はただ驚くばかりされてゐたけれど、今になつて考へてみれば、多少は芝居氣の馬鹿らしさも感じられないでもないけれど、然しその癇癖には、十分の同感と好意とがもてたのだ。

その後の經緯に關しては、迷惑と、奇怪と、そして氣輕な好意との印象が殘つてゐた。—おもんもその氣なれば、信之は尙更のことだつた。

一方お澄が、細君や子供の慘さも思ひやらずに、華族に嫁入つたと聞くだけに、坊主に騙されて、さば〳〵と捲きあげられ、ゆかた一枚で臺所の隅に慄へてゐると云ふおもんには、急にありつたけの好意が傾き注がれだした。永年の間世間から着せかけられてゐた衣をぬいで、やつと本來の馬鹿々々しい人の好さに歸れた、—それは眞面目に考へても、せめて蔭ながらでも祝つてやりたいほどに立派なことだつたが、ただその話の感じだけから云つても、いかにも間拔じみた、古風に大間な味が、なんとも言はれず好もしかつた。

平常の思考から推せば、どうしても同感しなければすまない筈の、萬難を排して惚れた同士が一緒になつたお澄の勇氣、妻も子も忘れ果てた相手の男の猪突、—一旦は無理にも好意をもたうとしてみたその戀愛が、不思議に少しも身にしみなかつた。お義理に、申譯に、感歎すべきが本當だからさうしてゐると云つた具合だつた。いきなり心へ響いて來た感じほど誤りの少いものはない、とは、これも普段から信之の考へてゐることだつたが、だん〳〵そこへ結びついて行つて、華族の息子にもお澄にも、氣持に大ぶん遊びがある、それが自然と直覺されたのだ、と、自信をもつて考へられさうになつて來た。少くとも、おもんの眞劍さに比べたら、足もとにもよりつけない、とは感じられて來た。

(よし、これからすぐ行つてやらう。たしか我善坊のお不動さんとか云つてたな。なに、麻布ぢう探したつて知れたもんだ。若しおもんに逢へなければ、善かれ惡かれさう云ふ力をもつた和尙の面つきだけでも見て來てやらう)

と、決心して、元氣よく跳ね起きるなり、信之は呼び鈴を押した。

不動堂

一

ちよつとの間、夕方にあがりさうに見えた空も、いつかまた眞ッ暗に曇つて、眼にもとまらないほどの霧雨が落ちてゐた。——下駄は昨日

うちを出た時からの日和で、誰のものやら、女持の蛇の目を一本富久田家で借りて來た信之は、夏外套なしでは薄ら寒い肩をすぼめ、歩き憎い敷きたての砂利を踏んで、いま通りがかりの人に教へられたまゝに、小半町もあと戻りをした。普段至つて歩き不精で、ちよつとの道でもすぐ乘物をほしがるのだが、さつき食ふなり横になつて了つた腹の具合も惡かつたし、待合で賴んで貰つた自動車で、門前に横附にされるにしても、行く先がちつと變りすぎてゐたので、乘り馴れない電車で出かけて來たのだつた。

靴屋と漬物屋との横町と云ふのはすぐ知れたが、いかに山の手とは云ひながら、電車通りをそこへ切れ込むと、忽ちもうしもた家續きに薄暗くなつて、から傘をかついだ自分の姿が、角の瓦斯燈の光りを背負つて、さほどではないが泥濘んだ道の上を、一足ごとに長く〳〵延びて行つた。その蒼白い光りは、また黒板塀の上へ茂り出した濡色の葉櫻をも照して、金屬性の光點をあちこちにばら撒いたり、暗綠の葉蔭を陰氣に見せたりした。――どこからともなく、樫の花の匂ひが流れ漂つて來た。青臭い、むせ返るやうな、そのくせなんとなく陰慘とした樹の花の匂ひ・・・。

塀なしに、ぢかに往來へしいたみを見せて、低い駒寄を結つたのや、それもなしに、いきなりきつ立の總二階になつたのや、家並がだん〳〵みすぼらしくなつて行つた。軒燈なども三軒に一つくらゐの割で、その灯影さへ侘しく、なかには丸火屋がかけて、褐茶けた炭素線の五燭球が覗いてゐるのさへあつた。――泥濘もだんだん深くなつて來た。

もうこゝらと思はれるあたりから、伊豆石の塀が五六間右手に續いて、聞いて來た通り花崗石の柱に鐵棒を組んだ扉をつけた門があつた。石塀の内からは、枯れかゝつた鎌倉楓葉や、ヒョロヒョロと丈ばかり高い櫻が頭を出してゐる、それらに丁度適はしいやうな、やにツこい丸太に取りつけられた電燈は、支柱が、ひとうねり紆つて下へ向いた奴だつた。その摺硝子の丸火屋の底には、二錢銅貨大の埃を沉澱させて、とろりと雨水がたまつてゐた。

正面の堂は、一二だん階段があるきりで、普通の屋造りとあまり違はないほどの床ばりだつたから、反りをつけた屋根の低さが目立つて、調子を破つてゐた。トタン張りの雨戸が四六枚、――假に引きよせてあるのか、それとも建附が惡いのか、間々の二三分づつの隙間から、内の灯がさして來た。

（さアて、どうしようかな）

なんとなく無氣味な感じがして、信之は、往來から覗きこんだまゝ暫く考へ込んでゐた。門扉が、一方だけしめて、一方は半開きになつてゐたのも、ちよいとそこらまで人が出かけたあと、と云つた風のしまりだつた。少し身を斜にすれば、樂に通れるくらゐには開けてあつたのを、傘をつぼめるのが面倒さに、左の手で、さして力もいれずにグイと押すと、ゴロ〳〵ツと、妙に腹へ響ける音をたてゝ、弧線に敷いた板金の軌道の上を、扉の底の車で、吃驚するほど輕くあいた。思ひなしか、それさへ、いきなり手頸を把つて引きずり込まれたやうで、いい氣持はしなかつた。

二

石甃を眞直に本堂の前に立つてみた。鰐口から垂れさがつた縒りの太い綱には、折からのじと〳〵雨に、濕氣を吸つて、温みふやけた大勢の手垢の層を、巫山戲ちらして跳ね廻る黴菌どもの夜遊びが思ひ描かれて、一尺以内には近よれない氣がした。賽錢箱は、薄眼をあけて狸寢入をしてゐるやうな蹲まり方だつた。太い小倉の鼻緒をすげた朴齒が一足、外前に穿き

歪められて、不行儀ながら階段のもとに平伏してゐた。五寸ほどの、却つて踏み登り憎さうな階段が三つ四つで、すぐ廻廊になつてゐた。
信之は、兎も角もそこへあがつて行つて、栗色に塗つたトタン張りの雨戸の隙間から、内の容子を窺つてみた。土藏づくりで、窓の一つもない、晝は却つて薄暗さうな、ものゝ十五疊よりは廣くない本堂は、須彌壇の燈明があか〳〵と灯つてゐるばかりか、右の横手からも電燈の光りがさして來るらしく、そとの暗さに引きかへて晃々と光り輝いてゐた。が、人影はもとより、話聲さへ聞えず、靜り返つた明るさは、却つて妙にもの凄かつた。内陣の扉は、これも何か金屬張らしく、黒々と鎖されてゐた。抹香臭い匂ひと、蠟燭の匂ひとが別々に、戸の隙間へ押しつけてゐる鼻のさきへ流れよつて來た……。
急に往來の方で、快濶な、青年らしい話聲がしたと思ふと、すぐ石甃へ足駄の歯を軋ませながら、人がはいつて來た。信之が振り向いたのと、彼方で彼を見つけたのとが、丁度同時らしかつた。その二人づれの男は、しかけてゐた話は勿論、歩みをもピタリと停めて、ぢツとこつちをすかしてゐた。
一人は、中折で、薄いインバネスをひツかけた、足駄の故ばかりでなく、見あげるやうな大男だつた。もう一人は、中丈で、木綿絣に袴をつけ、帽子なしの、オール・バックの頭髪を、例の丸火屋の、底に水のたまつた電燈のもとに、ピカ〳〵光らせてゐた。（こやつ、何者！）と云つた氣持の身の構へ方から、二人が寺の人か、でなくともこゝに縁の深い人だと云ふことは明かだつた。
どうにも說明しやうのない立場に、信之の面喰ひ方は一通りでなかつた。取り敢ず階段をおりて下駄を穿き、二足三足歩き出すと、彼方からも眞直に近づいて來て、鼻のさきへ立ち塞がるやうにした。顏を背け、身を避けて、そのまま出て行くわけにも行かず、眞正面に眼と眼とを見合せて、信之もぢつと突ッ立つて了つた。
中折は、光りを背負つた蔭でさへも、きはだつて色の白い、瘦がたの、凄いやうないゝ男だつた。「凄いやうな」は、「普通いゝ男」の形容に使はれる意味ばかりでなく、ほんとうに銳い眼つきを、——殺氣を帶びたと云つていゝほどの凄さに射りつけられての印象だつた。それから眼を逸したが最後、もう助からない、と云つた氣持から、信之は、もう一人のオール・バックの方はそつちのけに、たゞその銳い視線に堪へようとばかり努めてゐた。——下ツ腹にうんと力を入れて、ふんぞり反つてゐた。
……一分、二分、中折は、きつと一文字に口を引き結んで、默つて見据ゑてゐた。信之からなほのこと云ふべき言葉はなかつた。これが、佐伯と云ふ住職だとは、一目顏を見た瞬間に直感されてゐたが、それだけに尙更どうにも始末が惡かつた。

三

「何か御用ですか」
たうとう先方から口を切つた。存外調子はもの柔かだつたが、釋りやうによつては、それが曲者とも考へられないことはなかつた。
「えゝ、ちよつと御參詣にまゐりましたのですが……」
「はア、さやうですか」
と、もう一度頭の頂邊から足の爪先まで、じろじろと睨め廻して、「大ぶん おそがけのお參りでしたな……」
「えゝ、實は、初ての御參詣ですが、來てみますと、もう御本堂の戶が閉まつて居りましたものですから、遠方から出かけてまゐりましたので、ついちよいと中を窺いたり致しまして……」
「いや、どう致しまして。……え、で、どちら

から……？」
「なんです、實は、こちらのお不動様が、大層あらたかだと伺ひましたものですから……」
「はア、成程……、いやよくこそお參りくださいました。ま、どうぞ……、只今あけさせますから……」
「いえもう、どうぞそのまゝになすつてお置きください。また出直して、明朝にでもお參りさせて頂きませう」
「いえ、なに、わけはございません。本多君、君そつちから廻つていつて、あけてくれ給へな」
と、顎で指した、向つて右側の格子戸づくりの玄關には、信之もついそれまで氣がつかずにゐた。もし彼等の歸りが、もう十分おそかつたら、恐らくはそこをあけて案内を乞うてゐたらうし、ヒョッとすれば、今ごろはもうおもんに逢へてゐたのかも知れない。
逢つたとすれば、どう云ふことが起つてゐたらう。——ふと、そんなことが考へられると、急に信之は可怕くなつて了つた。運命の偶然さ、それへのこ〲と乘しかゝつて行かうとした自分の淺慮、……それを思へば、よくこそ二人が早く歸つて來てくれたものと、今は却つて助かつたやうな氣持になつて、
「どうぞもう……、今夜はおそうございますから、いづれまた改めて……」
「なに貴方、神佛を相手におそいも早いもあるものですか。仕儀によつては、丑の刻參りさへするぢアございませんか」
なんとなくねッとりと絡んだ云ひ方をして、輕く聲をたてゝ笑ふと、玄關からうちを廻つたオール・バックを待ちかねて、つか〱と廻廊へあがり、戸の隙間へ指を差し込んで、力をこめてあけにかゝつた。
「うん、あく〱。本多君、よろしい！ あくよあくよ」
「いえ、今あけます」
内外からの力が合して、重さうな戸が、ガラガラとけたゝましい響をたてながら引きあけられた。
「さアどうぞ。ずうつとお通りください」
「これアどうも相濟みません」
すつかり氣おくれがして了つて、ならば逃げだしたいのを、さうもならず、强ひて引き止められるだけなほ不氣味ながら、信之はもう一度泥まみれの日和下駄を、階段の下にぬがなければならなかつた。
「いやどうも、この通り荒して居りまして……」
まだはいつても行かない先から、戸の蔭でさう云ふのが聞えた。

四

「ぢアちよつと拜まして頂きます」
と、信之は、行きがかり上、いかさま信心でもしさうな克明な男らしく、小腰をかゞめて、高い框を踏みあがつた。見ると、中折の男は、手早くも帽子や外套を脱ぎ捨てゝ了つて、衣に輪袈裟の僧形に早變りしてゐた。いよ〱住持の佐伯と云ふ男に違ひなかつた
「さアどうぞ。たゞ今御内陣もおあけいたします」
書生態の男に、脱いだものを持たせて庫裡の方へやり、つか〱と進んで、自分で内陣の扉を引いた。その間に、信之は須彌壇の前に額いて、——そこで、はたと當惑した。假にも辯護士と云ふやうな職に就いてゐながら、世事に疎いことと云つたら、お話にならない彼だつた。不動樣と云ふのは、神樣で、從つてお守をするものも神主のやうな人だらうと思つてゐたくらゐだから、手の合せやうや唱へ言などは、尙更もつて見當がつかないわけだつた。さうかと云つて、神佛に對する尊崇の心は、今時の若いものに似合はず深い方だつたから、この咄嗟の滑

稽をも、自分では滑稽とは感じなかつた。家の宗旨である淨土眞宗の「南無阿彌陀佛」を口のうちに唱へながら、胸に合掌して、心からの禮拜を捧げた。

「さアどうぞ、御遠慮なくずつとお進みください」

須彌壇のうしろから、さう聲をかけられたのをしほに、立ちあがると、そこへも一つ出してあつた賽錢箱に、五十錢玉を一つチャリンと擲り込んで、奥へはいつて行つた。

「いやもう、先住が一向お構ひなさらんお方だつたので、御覽の通りの有様で、誠にお恥しい次第です」

「……」

なんと挨拶してよいものやら解らなかつた。で、急に話題を變へようとしたが、ふとあたまに浮かんで來たのは、幾代の話に、この色魔坊主が女を陥れるには、まづ加持とか護摩とか稱へて、兎角二人きりになる算段をするが、大抵はそれでまゐつて了ふところをもつてみると、何か催眠術のやうなことでもするのではなからうか、と云ふ噂さへある、と聞いて來た、その修驗の法だつた。

「實は……」

と、差し向ひに立つたまゝで、「よくも話を聞かずに飛んで參りましたやうなわけでして、御宗旨のことは一向に不案内なのですが、伺ひますに、どうかこの、お加持のやうなことをなさいますさうで……？」

「はい〱、……えゝ、いたしますです」

「それは、なんで御座いませうか、午前中とか、夕方何時までとか……」

「いえ別に……、若しなんでしたら、たゞ今からでも……、何かさう云ふことでお出かけでしたかな？」

「えゝ、ちよいとその……。實は……」

と、その時ふとまた思ひついたのは、西山普烈のことだつた。「氷川町の外人殺し」が、初號見出しの四段抜きで、各新聞に發表されたのは、一昨々日の月曜のことだつたが、その後いまだに犯人の目星もつかないらしく、つい五六時間前に宮久田家で見たなかにも、復もや事件迷宮に入らんなどゝ、暗に警視廳の無能を揶揄するやうな書きぶりのもあつたくらゐだが、信之には、それが普烈の仕業であることは、少しも疑ひを入れる餘地もなかつた。その後どこにどうしてゐるか、――これは、信之のあたまにこびり附いてゐる考へだつた。

「實は或る男の行方が知りたいのですが」

五

「知りたい……？」

濃い眉根にちよつと皺をよせて、住持は解せない顔つきをした。

「つまり失踪者の居所なり、生死なり、さう云ふことを伺ひたいのですが、いえ、これはあたしの獨斷でして、願事がなんでも大抵はかなふと聞きましたところから、そんなことも伺ひをたてゝ頂いたら、きつとなんか、お告げとでも云ふのでせうか、承知できるものかと思ひまして……」

「成程、それアもう、お望みでしたら、護摩なりお加持なり致しませうが、さう云ふことは、もともと佛の加護を祈ると云ふ意味合ひのものでして卜占じみたことになりますと、つまり早い話が、お門違ひ　と云ふやうなわけで……」

「あゝ、さやうですか。　いえ、あんまり心配なことがございましたものですから、よくも質しも致しませずに、なんでもかなへてくださるあらたかなお不動様と聞きましたばかりで、早速驅けつけてまゐりましたやうなわけでして、お話を伺ひますれば、成程これアお門違ひでございました。どうもとんだ粗忽で、申譯ござ

いません」
「いや、どう致しまして。然し何か存じませんが、人を探ねると申すことは、誠にはや気の急くものでして、さぞ御心痛のことでございませう、お察し致します」
「有難うございます。時に、甚だ不躾なことを伺ふやうですが、貴方がこちらの、……えゝ御住職で……？」
「はア」
と、讀經のためにつぶれたやうな咽喉を嗄らせて、「七年ほど以前に、先住の後を襲ひました者でして、……えゝ、佐伯と申します。どうぞまたこれを御縁に、お通りがかりの節はお參りもして頂きましたり、至つて若輩ではございまするが、えゝ、御法のお話も申上げませうですから、御遠慮なく御立寄りを願ひたうございます」
「有難うございます。あたくしは……」
と、ちよいと内懐を探つてみて、「えゝ、生憎名刺を持合せませんでしたが、藤代と申します。どうぞ以後御別懇に……」
「あゝ、さやうですか。えゝ、で、なんですが、お住居は……？ 御遠方で……？」
「いえ、遠方……、と云ふほどでもございません。麹町に住んで居ります」
「はア、それア……、高燥の地ではあり、閑静で、なんと申してもお膝廻りの一等地ですから、な、それは結構です」
「どう致しまして。麹町もいろ〳〵でして、どうせ吾々のやうな者ですから……」
「とんでもない！ えゝ、麹町の藤代さんと仰有ると……？」
うま〳〵と釣り寄せられて、信之は、俄にはツと思つた。大勢の人に接する僧侶として、話上手は別に怪むに足りなかつたが、こちらは、いかに嘘をつくことが嫌ひとは云へ、名前も所も有のまゝに喋らされて了つたなどは、なんぼなんでも迂濶すぎた。世間の狭い一人の遊民と自分で自分を思つてゐ、それはまたそれに違ひないのだが、父信策は、相應世に聞えた實業家ではあり、紀尾井町の邸も、もう三十年以上も住みついてゐるのだから、ちよつとでもあの邊にゐたことがあるとか、親戚知友でも持つてゐるとか云ふ人ならば、「麹町の藤代」で、存外これが通らない名でもなかつたのだ。

六

それにまたどんなことで、おもんの口から、彼の名前が傳へられてゐないとも限らない場合だつた。——思へば、馬鹿正直と云ふ以上に、横着な口を利いて了つたものと、今更ながら後悔された。けれどもまた、考へやうによつては、佐伯の「麹町の藤代さんと仰有ると……？」とさも心當でもありさうな云ひ方が、本音を吐かせよう詐みの手で、その實なんの據りどころもない出鱈目かも知れないのだつた。さうとすれば、うかと後悔も出來ないわけになる……。信之は空呆けて、商人じみた揉手をしながら、
「いえ、とんでもない！ 決してもう貴方がたのお耳にはいつてゐるやうな、そんな者ではございません。若しひよつとお心當りでもございますのなら、多分それは同姓でも、まるでもう關係のないお方に違ひございません」
「いや、そんなことは……。失禮ですが、麹町はどの邊でいらつしやいます？」
「ひどい、それはもうごみ〳〵した裏町でして……」
「ひよつと、紀尾井町へんぢアいらつしやいませんか」
鋭くじろりと見据ゑられて、信之も、これは所詮遁れられないかな、と思つたが、後に現はれるまでもと、
「いえ、まるで見當が違ひます。別にお隠し申

すほどの素性でもございませんが……」
「弁護士の藤代信之さんと仰有るのは、貴方ちやアいらつしやいませんか」
図星を指されて、信之はもう目と目を見合せてゐるに堪へられなかつた。どう落つかうとしてみても、頬からだん／＼熱くなつて来るのが感じられた。
「弁護士……？　藤代……信之……？　貴方、その人を御承知なのですか」
「いゝえ、まだお目にかゝつたことはありませんが、お話は常々聞いて居ります。貴方も藤代さんと仰有るのださうですし、それに、話に聞いて想像したところですと、どうやらお容子も、失礼ながら貴方のやうな方らしく思はれますので……」
「へゝえ、あゝ成程……」
烈しい追窮に、信之も有繋にしどろもどろの態で、曖昧な返事をしながら、目を内陣の奥深く、不動明王やかれこれ等身大ほどもある尊像に向けて、ちらめく裸灯に頻りと瞬きばかりしてゐた。弱々しい微笑で、意味もなく唇が引歪められてゐさうな気がして、我ながらやりきれなかつた。
「若し……」

と、佐伯の調子は、際立つて意地悪げな皮肉に緊張して来た。「万が一にもその藤代さんでしたら、……実は、是非とも会つて頂きたい人もあるのですし、私自身も一度お目にかゝつて、篤と御相談申上げたいことがあるものですから……」
「あゝ、さやうですか」
「然し、あなたが藤代さんは藤代さんでも、信之さんでないとすれば、こんな余計なことを申しあげたところで仕様がありませんでしたね。いや、誠にこれア失礼申しました。どうもとんだお人違ひを致しまして、申訳ございません」
「いゝえ、とんでもない！」
「ですが、同じ麹町で、同じ藤代さんで、……これア間違へるわたしも、まんざら無理ぢアございますまい」
佐伯は、さう云ふなり、大きく口をあけて、無遠慮な哄笑ひを吐き出した。

七

いかに嘲笑されようとも、今更信之は、前言を翻して、自分をその当人だとは云ひ出せなかつた。我から勝手に招いたこととは云へ、その弱味には、ひどくじり／＼させられた。恐らくはそれと覚つてゐながら、わざと空呆けて、人違ひと云ふならそのまゝ帰して置いてやらう……と云つたう、、は手の態度に納まり返つてゐる佐伯の前を、もう一秒でも辛抱できないやうな気持にされて了つた。
「どうもこれア、夜分おそく出まして、とんだお邪魔を致しました」
突然さう挨拶して、丁寧に頭をさげたが、何もかも馬鹿々々しくて、自分自身に対する腹立たしさから、自と身のこなしまでが荒々しくなつてゐた。
「さやうですか。それアどうもいろ／＼失礼を申しまして……。またどうぞお通りがかりの節は、是非お立寄りください」
「有難うございます。いづれまた出直してお伺ひ致します」
もう一度頭をさげて、スタ／＼と本堂を出た信之のあとから、見送りながら廻廊へおり立つた佐伯が、そこへ脱ぎ捨てた下駄を突つかけて、戸外から玄関の方へ廻らうとしてついて来た。
「どうも鬱陶しいお天気が続きます。……傘にお持ちですか」
「えゝ、持つて参りました」
一時も早くと急きたつた眼にも、そこに、初

めから脱ぎ捨てられた朴齒と、住持の足駄はそのまゝで、信之の日和だけが、向うむきにチャンと揃へてあるのを見遁せなかつた。あがりしなに、自分で揃へて脱いだ憶はなかつた。曾てそんな風な丁寧な脱ぎ方をした憶すらない信之だつた。廻廊を廻つて、例のオール・バックの書生でも來て、直して置いてくれた、とでも考へるよりほかに考へやうのないことだつた。そんな扱ひをうける參詣人と云ふのも稀だらうし、第一あの書生ッぽが、云ひつけられもしずにそれほど氣を利かすとも思へない話だつたが、急きたつてゐるまゝに、大して訝しみもしずに突ッかけて出た。糠雨は、なほ、飛廻る小蟲のやうに散つてゐた。

「では、御免ください」

「どうも失禮を……。さやうなら」

挨拶を交して、住持は、石甃の岐路を玄關の方へ、信之は門のそとへと別れた。信之には、遽に夢から醒めたやうに、改めて我と我が行爲が顧みられた。眞直な心の故に、おもんがひどいめに逢はされてゐると聞くと、矢も楯も堪らず飛び出して來たのは、勿論、一日なりと逢つて、云ひ慰めてやりたいと思へばこそだつた。少しでも彼の女の心を明るく、——自分の陷つた苦艱が、決して惡い心の報いではないと云ふことを說いて、いくらかでもそれを輕くうけ流すことが出來るやうにしてやりたいばかりだつた。その動機には、少しでも嘘や不純が混つてゐたわけではなく、どう非難のしやうもないのだが、さてその結果のどぢさ加減と云つたらなかつた。

（俺は、どう考へてみてもあんまり利口ぢやァないな！）

さう思はずにはゐられなかつた。——普段くだらなく思つてゐる「利口」の値うちが、急に立ち勝れてみえて來た。反對に、「馬鹿」は、一文の値うちもなく、我が身ながらに嗤ひ倒したいやうな氣分になつて了つた。

八

自分の都合さへ考へてゐれば、誰でもさう愚かしくは振舞へないものだ、それを、負けなくも、ひとごとにまで立入つて氣を揉んだ揚句が、とんだ馬鹿をみる……。

（あ、いやだ〳〵！）

いつか信之は、普段輕蔑しきつてゐる世の常の「利口者」と選ぶところのない、消極的な、安全第一の處世法に、ぐたりと心の背を凭せかけてゐた。けれども、その、縮まりこんだ片隅にも、決して居心地のよい暖かみは見出せない心だつた。二月の空ッ風に吹き曝されて、夕暮の街角にでも突ッ立つてゐる浮浪者のやうな、すさまじい寒さと寂しさとに鎖されて了つた。

（あゝ、いやだ〳〵……）

は、同時にその嘆聲でもあつた。孤獨の感には、いつもひと溜もなくまゐつて了ふのが、信之の生得の性分でありながら、他人のために差しのべた手の拙さに、逃げ込んで來る片隅は、きまつてまた安價な個人主義的な立場だつた。彼を蝸牛に譬へるならば、個人主義はその脆い殼の如きものだつた。脆いことを承知で姑く世の雨風をしのぐ隱れ家が、もとより安住に堪へないのは解り切つた話だつた

私はなんの役にも立たないやうな親切に、氣持惡く薩摩絣の單衣が濕つて、心ばかりか姿までしよんぼりと、薄暗い裏町の通りへ出た。

——態々やつて來たのに逢へなかつたために、急に、いゝおもんが戀人の懷しさであたまに絡はりついて來た。よれ〳〵の浴衣一枚で、臺所の片隅に縮こまつてゐると云ふのが、顏かたちなり心持なり、人一倍華美な女だけに、一層哀れふかく思ひ描かれた。

「……先生、……先生……」

低い嗄れ聲で、うしろから呼びかけられたやうな氣がした。すぐ振り返つたが、黒板塀の外までも深々と茂り出した葉櫻の影に、いとゞ小暗い裏通りの、犬の仔一匹動く樣もなく、まだ宵の口ながら、沈々と更け亙つてみえた。

暫く佇んでゐたが、空耳とより他に考へやうはなかつた。こんな突なところで、人に呼びかけられるやうな覺えもないし、それに、彼に對して「先生」と云ふ呼び方をする者は、たまに出入する四五人の法學生くらゐのものだつた。けれども、その太い嗄れた聲は、慥に耳にはいつたのだ……。

（可訝しいな……）

薄氣味惡い氣がして、スタ／＼と、表の電車通りの方へと急がうとした。

一ちよつと、先生、先生一

今度ははつきりと、けれどもかすめた聲で、囁くやうに云ふものがあつた。振りかへつて、闇をすかすと、不動堂の石塀が切れて、隣の、往來へぢかに切つ立つた二階家へ續く、その間の僅か一尺か一尺五寸ほどの庇間に、ちらりと動くものがある……。

「誰だ！一

信之は、思はずけはしい聲になつてゐた。手先だけ出て、ひら／＼と麾ぐ……。

「誰だ、何か用か……一

「先生、あたしです、あたしです一

云ふ聲には、慥に憶えがあつたが、すぐには誰とも見當がつかなかつた。場所が場所だけに、――自分でも、生れて始めての、今後二度と通りかゝるかどうかも解らないやうな、用のない裏町だけに、心當のつけやうもなかつた。

九

けれども、うさんな者でないことだけは明かだつた。

一二間立戻つて、庇間へ立寄り、蓋のない溝のこちら側から、首を伸して覗き込んで、

「誰だい……一

引摺るくらゐの黒のレインコートで、すつぽり身を隱し、鳥打を眼深に冠つて、背中でピタりとしたみに張付いてゐるのが、顔だけさし寄せて、

一わたしです」

まがふ方もない西山晋烈だつた。

一アッ一

とばかり、有繋に信之も唖にされた。思ひがけない驚きの瞬間に續いては、[illegible]に誘ぜられた凄慘な人殺の下手人に、眼のあたり突ッ立たれた恐怖も渦卷いて、意氣地なく足がすくんでしまつた……。

けれども、闇に馴れて行く眼が、やがて晋烈の僅かばかり現はれた顔を見せてくれた。それは、一時なりとも恐怖を以て對した自分が、恥しくつて堪らなくなるほどに、全き信頼と感謝とを物語つてゐた。眼と眼とがぴッたりあつて、一秒、二秒……、どちらの眼にも涙が一杯になつて來た……。

「……どうするの？一

まづ信之が、囁くやうな調子で切り出した。言葉はそれだけだつたが、意味は、

一お前の意志が第一だ、今後のお前自身を、どう處置しようと思つてゐるのか、それから先に聞いて置から一

といふやうなことだつた。

一ど、どうでもします一

きッぱりした答へだつた。

一よし、ぢやア兎に角うちへ行から、――どう思ふ？一

一あなたさへお差支へなければ……」

一あたしは、いゝから云ふんだ。君はどう思ふんだい……？

一いえ、どうでももう先生のおつしやるやうに

なります」
「それア困る！ 僕は君ぢやない。最後までも君を動かすものは、君の意思以外にはなんにもあつてはならないんだ。僕はたゞ君に忠告したり助力を與へたりするよりほかに、どうしてあげやうもないんだ。君は君の思ふ通をなんでもかまはずに眞直にやればいゝんだ。この際なにか僕で出來ることがあつたら、喜んで力を貸すよ。で、どうする？」
「ぢア、兎に角先生のところまでつれてつてくださいな。僕達がへつて……」
「よし、行かう！ でも、一緒でも、ちよつとまづいなア、さうかつて、君……」
「さうです。とてもわたしひとりでふら〳〵出掛けられやアしません」
「一體君アいままでどこにゐたんだい？」
「お不動さんの緣の下……」
「え？ 緣の下？」
「先生の下駄が直してあつたでせう？ あれで大抵はお察してくださるだらうと思つてた」
「じよ、冗談云つちやいけない！ 誰がそんなとこに君がゐると思ふもんかね！ 君だつて、僕が來ようなんぞとは、夢にも思ひがけなかつたらう？」
「えゝ、それアさうですけど……」
「まア、然しそんなことはどうでもいゝや。どうしよう、なんなら自動車でも賴んで來ようか」
「駄目ですよ、こんな裏通りに自動車を入れたりしちア……」

十

存外普烈のあたまは慥だつた。そのことが、信之に、ひどく力強い氣をさせた。
「よし、ぢやかうしよう、僕だけ電車通りに出て、そこらで自動車を賴んで來るから、君はその間うまくどこかに隱れてゐたまい。さうしてあすこの角へ來たら、僕もおりるから、そこへ出て來てくれるといゝね」
「えゝ、さうしませう……だけど、こゝら近所には、ちよつと自動車屋がなかつたやうだな」
「まアいゝよ。どつかで搜して來るから……。ぢアいゝね、あすこの角に自動車が停つたら出て來るんだよ」
「大丈夫、うまくやります」
「あッ！ ひつこめ〳〵！ 人が來たぞ！」
囁く聲ながら、鋭く注意して、すぐ信之は泥濘を拾ひ〳〵歩きだした。なんとなくひとに顏を見られては惡いやうな心持になつてゐた。蛇の目をかしげて、足早にすれ違はうとしたが、ふと、爪革のない男もの〻古い足駄に、やゝまむしをつくつて載せてゐる素足の美しさが目についた。洗ひ晒しながら、紺に乱菊のゆかたの柄は、どうしてもこゝらの細君たちに似つかはしいものでなく、褄さばきにも品格が見えた。思はず信之は傘を傾けた。と、その瞬間に先方の傘が上半身を隠した。さうされたことで、いよ〳〵おもんに違ひないと直覺した信之は、すぐ足をとめて振り返つた。女も、稍うしろに傘を廻して、その影からそつと見返つてゐた。
「おもんさん！」
「あら、信さん！ 矢つ張り貴方だつたのね？ どうも歩きつきがよく似た方だと思つてたら……。でも、どうして、貴方がこんなところへ……？ あんまり思ひがけないんで……」
「貴方に逢はうと思つて……」
「うそウ……？」
「ほんとうさ？ たつた今お不動さんへ行つて來たところ……」
「さう？」
心から嬉しさうな笑顏を傾けた。……湯あがりに、濃すぎる白粉の野暮くささが、信之を涙ぐませた。惚れた男のためならば、女として、容易ならない己れの趣味も何も打ち捨てゝ、

ひたすら歡心を得ようとしてゐる心根が、いぢらしく胸に迫つたのだ。ちよつと口が利けなかつた。けれどもおもんは、變り果てた自分の境遇なり身の周りを顧みることさへうち忘れた平氣さで、すぐ言葉を續けた。

「奥さんが出て來て?」

「いゝえ、御本堂を窺いてゐるところを、そとから歸つて來たお住持さんに見つかつちまつて、どうもひどく間の惡い思ひをしちやつた」

「あら、もう歸つてゝ?」

氣の急く容子をみせて「あたしどこへ行つたかさう云つてゝ?」

「いや、まさかあなたに逢ひに來たとは云ひ出しかねて、誤魔化して歸つて來たんだから、無論あなたの話なんかしなかつたし、あたしも、自分の名前は出さずに來たんだが、どうやらあたしと云ふことの察しがついたらしい。歸つてからもし訊かれでもしたら、そこはうまくやつといて貰ひたいな。何も構やアしないわけだが、一旦さうぢアないと、きつぱり云ひ切つちまつたんだから」

十一

殺人の大罪を犯した者の身の上を、一時たりとも引きうけてゐながら、おもんに逢へば逢ふで、そこでもまた引つ懸つて了ふやうな信之だつた。恐らくは苛烈が、あの庇間から眼だけ窺かして、こつちを見てゐるだらうとは思はれたが、そんなことはちつとも氣にならなかつた。鼻と鼻とを突き合せんばかりに向ひ合つて、なほも言葉を續けた。

「あたしがかうして出かけて來たのは、噂によると、貴方があんまり仕合な境遇でなささうに思はれたからなんだ。もし噂のやうなわけなら、及ばずながら御相談相手にもならうと思つて……」

「有難う! それアあたしにも解つてるわ。……いえね、いまお目にかゝつてさう思つたんぢアなくつて、先達中から、そのうちきつと貴方が來てくださりやアしないかしら、つて云ふやうな氣がしてゐたくらゐなの。だから、ほんとうに嬉しいわ!」

「さう! あたしが來るかと思つてた?」

「え、なんとなくそんな氣がしてたの」

「さう! それア……」

信之も嬉しかつた。子供のやうな無邪氣さで、たゞニコ〳〵するばかりだつた。

「だけどあたし……」

と、おもんほどのものが、これも小娘のやうにはにかんで、項を傾け、瞼を伏せて、「今のところどうにも仕樣がないと思ふわ」

「と云ふのは、貴方の氣持からだね? 貴方の氣持として、假令よそ目にはどうあらうとも、今のまゝが一番いゝと思ふんだね?」

「信さんの親切に對しても、こんな我儘は云へた義理ぢアないけれど……」

「あゝ、それアいけない! 貴方そんな風に釋つちア大間違ひだ。あたしに貴方の我儘な加勢しに來たんで、決して意見なんぞしようたア思はないよ」

「えゝ、それも解つてるつもり……」

「いゝえ、駄目々々! あたしはね、つまりかう思つたんだ、——もし貴方が、えらい男に引ッ掛つたと思つて後悔しながら、どうか云ふ事情で、辛い思ひを辛抱しい〳〵お寺にゐるんぢアつまらないが、——それなんだ、それを心配して來たんだ。然し……」

「えゝ、それもあつてよ。辛いことは、それア……」

見榮もなく、ゆかたの袖を眼に押しあてゝ、急に鼻を吸りあげながら、「奥さんには、女中よりひどく扱はれるし、あの人はあの人で、お湯に行くにも蹤をつけさすくらゐの嫉妬やきで、

しよつちう打つたり蹴つたりされどほしだし、それア辛いことを云やア……」

「うん、ぢアからだね？ 辛いことは辛いが、貴方の氣持としては、どんな辛抱でもしてそばにゐたい、さうなんだね？」

「……えゝ、……まア……」

「さうか！ そんならいゝぢやないか。ちつとも恥しさうに云ふことはないさ。それなら立派なもんだ！ どこへ出したつて立派な氣持だ！ あたしはまた餘計な老婆心から、今となつては止むを得ずの態かと思つたもんだから……。いえ、そんならもうちつとも心配することはないんだよ……」

假令この後、虐め殺されたと聞いたとて、餘人は知らず信之は、さぞ本望だつたらうと、竊に喜んでやれる場合だつた。

十二

「でも、よくまアお心にかけて、態々こんなところまで尋ねて來てくださいましたわね。ほんとうに御禮の申上げやうもありません」

おもんは、しみ〴〵と信之を見あげながら、涙ぐましく呟いた。

「何もそんな……」

はにかんだやうに、然し嬉しさうに微笑つて、

「そんなことアなんでもありやアしないが、この先とも、萬が一にも困るやうなことが起つて來たら、どうか遠慮なくさう云つてよこしてくださいな。碌な御相談も出來まいけれど、辛いことつてものは、たゞひとに聞いて貰つただけでも、いくらかは氣が晴れるもんだし、それに……。兎に角あたしは、貴方のことは、いつも氣にかゝつてゐるのだから……」

「有難う――」

消え入るやうに、しんみりとうけて、「なんぞまた、お力を借りに伺ふやうなことになるかも知れませんから、どうぞその節は……」

「えゝ、きつとですよ……。ぢア、早く歸つたらいゝでせう。こんなところで立話をしてゐるところでも見附かつたら、また困りやアしない？」

「えゝ……、あのね、信さん、唐突にへんなことを云ふやうですけれどね、もしあたしに萬一のことがあつた時には、何を措いても貴方駈けつけて來てくださらない？ あたし、死ぬ前に、一目でもいゝから貴方にお目にかゝつて行きたいの。一生に一つのお願ひですから、是だけは是非聽いてくださいね？」

「それアもう必ずとんで行きますから、知らせを忘れちまつちアいけませんよ。……なんて云つてるあたしの方が、どうやらお先になりさうだが、その時には勿論貴方も來てくれるでせうね？」

「そんなことがあるもんですか！」

「まアさ、お互にそんなことがあつちア堪らないけれど、いづれ萬が一の話さ。誰がなんと云つても、これぱかりはどうにも遁れられないこつたからね」

「それアさう！ ぢア萬が一さう云ふことだつたら、あたしもきつとお目にかゝりに出ますから、すぐ知らせてくださいね。假令あたしがどう云ふ體になつてようと、どんな無理をしてでも、その時には必ず駈けつけますわ」

「よろしい、……ぢア堅く約束しましたよ」

「えゝ、貴方もどうぞ間違ひなくね」

どちらからともなく、思はず手を握り合せ、ぢッと瞳を見合せて、少時は無言のうちに深い心を通はせた。一點翳りのない眞を、お互の目が吸ひとつた。

「ぢア……」

「えゝ、お別れしませう」

「さやうなら、……どうぞ體に氣をお付けなすつて……。好きな人のためなら、どんな辛い境

週だつて、つまりは仕合なんだから、氣を長くいゝ日が來るのをお待ちなさい」

「どうもいろ〳〵有難うございました。貴方もどうぞお體をおいとひなすつて……。あゝ、それから、あんまり深酒はおよしなさいましね。……あたし、大喧嘩をした揚句に、綺麗に姉妹の縁を切つちまつて、今ではあかの他人ですけれど、よくお澄からも聞いてました、貴方のお體には、お酒が一番の毒なんですつてね？ ほんとうにお氣をおつけなすつてくださいましね、くれ〴〵もお願ひして置きますよ」

十三

一人ッ子に生れて、眞の味は知らないながら、姉のやうな優しい勁りを罩めてさう囁かれると、急に信之は、なんと云ふこともなしに悲しくなつて了つた。

「……有難う……」

こみあげて來る涙の影には、心が悉く感傷に殉じ盡してゐた。「だけど、あたしには、貴方みたいに、自分はどうなつても構はないつてほどの氣持で、好きで〳〵たまらない人があるわけぢアなし、寂しくつて、寂しくつて、……酒でそれを紛らさうなんて、意氣地のない話だけれど、……まつたく世の中つて、寂しいところだからねえ……」

「あら、信さんのやうな方が、そんなことを仰有るなんて……。いゝ奥さんがいらしつて、可愛い盛りの子供衆もおあんなさるぢアありませんか」

「それア、女房子も可愛いよ。自分でさう云つちア可笑しいが、大抵誰にも負けないくらゐ心から可愛がつてるつもりだよ。だけど、——どう云ふんだらう、つまりひとより慾ばりなのかね。それだけぢアまだ可愛がり足らないやうな氣がするんだ。あたしを好いてくれるひとが出來れば、幾人でも可愛がらずにはゐられないんだ。何も女には限らない、一人でも餘計に好きで好きでたまらないやうなひとがほしいんだ。それでゐてあたしには、或る點まで行くと、それから先へは進めなくなつて了ふ惡い癖があるんだ。つまり、臆病なんだね。これ以上は自分の惚込み方に自信がもてない、と云ふやうな氣がする時が來る、さうすると自然相手も疑ひたくなる。——一旦歩みが止まつたが最後、砂山の中腹に立つてゐるやうなもので、ずる〳〵摺落ちて、見るまにもとの杢阿彌さ。だらしがない、實際だらしがないつちアありやしない」

「だつてお濟なんぞは、まつたくあれの心根がよくなかつたんですもの……」

「そんなことは問題ぢアないさ。いゝところも惡いところも、つッくるめて好きにならなくつちア、まだほんとうの好きたア云はれないさ。今の貴方の場合だつて、佐伯と云ふ人だ、他人のあたしから見れば、決していゝ心掛だとは思はれないけれど、それだつて、そんなことは貴方にとつちア問題の外なんだ。つまり、相手次第で動いてゐる分にやア、すぐ行きつくところへ行きついて了ふわけさ。どんな場合でも、自分の心が先に動いて、相手構はず戀ひまさつて行く、一時もやまずに深くなつて行く、——それがほんとうの好きなんだ。さうなつてゐれば、相手がくたびれて遲れたり、歩調が亂れたりしても、それを寂しがるやうなことはないんだが、あたしなんぞは兎角相手のことばかり氣にしてゐるもんだから、ちよつとしたことにも、すぐ寂しくなつて、氣を腐らせて了ふんだ。まつたくなつちアゐないよ！」

「さうばかりも云へませんわ。世の中にはどうしたつて好きになれないやうな人の方が多いんですもの」

「それアさう！ お釋迦様ほどの方でも、緣なき衆生は度し難しと仰有つて諦めをつけてい

らつしやるくらゐだから、まして吾々凡夫に、好き嫌ひのあるのは當り前だけれど、好きになつたからには、いゝ、とことんまで行かなくつちア妄だと思ふね。……だけど、ついまた喋り込んぢまつたが、いつかまた機會があつたらゆつくり話をするとして、今夜はこれで別れませう。ぢアいづれその内……」

「さうですか、では失禮いたしませう。御免下さいまし……」

十四

今度こそ二人は別れようとして、理由もなくてれた心持から、ほんの頷き合ふほどに頭をさげ、すばやく眼も逸して了つて、くるりと背を向けて歩き出した。信之の心は和やかに、ひとは可愛く、世は溫かく、晴々として輕かつた。

五六間も行くと、振り返りたい氣持が抑へきれなくなつて來た。――振り返つた。おもんの後姿には、急に瘦が目立つて、泥田におりた鶴のやうに、しよんぼりと雨夜の闇に消えて行かうとしてゐた。哀れ深く、いとしさが胸に迫つた……。眼を返さうとして、序に普烈のかくれてゐる庇間のあたりを見たが、もとよりそこには、鼻の先も覗いてはゐなかつた。

……氣持が入れ混つた。殺人犯人に對する薄氣味惡さが、おもんの一徹な戀に感じられたり、戀にやつれた後姿の哀れふかさが、普烈の血に浸つた心に着せかけられたりした。さう云ふさま〲な感情の動きはどうあらうとも、併し信之は、結局に於て樂しかつた。自分の心の裡だけと諦めてゐた世界が、いつか自分の周りにも展けて來たやうな氣持で、大威張りで大道狹しと歩きたかつた。この勢なら、どんなことでも出來る、と云つた風な、力強い感じが頻りに動いた。亢奮して、泥濘も水たまりも構はず、無茶苦茶に歩いて行つた……。

飯倉の通りに出て、自動車屋をみつけ、薄汚れた箱のに乘せられて、もう一度靴屋と漬物屋との横町へ引き返して來た時には、雨はいよいよ細かくなつて、靄のやうに白く暗んだ夜が美しかつた。

「よし〱、その角でいゝんだ!」

性急に、まだ停まらないうちから腰を擡げて、運轉手に聲をかけ、自分で戸を半開きにして待つてゐた。と横町から、外套に長靴の巡査が、佩劍を鳴らして出て來た。はつとして、思はず信之は扉を閉てたが、すぐその理由のなさを反省して、躊躇もなく、折から停つた自動車を降り立つた。

「すぐ來るから、ちよいと待つてゝくれ給へね」

じろ〱風態を見極めながら、ついそばを通り過ぎて行く巡査にも、寧ろ聞えよがしの、平氣な高聲でかう云つてから、信之は、傘も持たずに、横町へ切れ込んで行つた。然し、やつぱりなんとなく氣がかりだつた。平常の彼は、警官に對して、内囊的な敵意や反感をもつやうなことは決してなく、寧ろ親愛の念を抱いてゐるくらゐだつたが、それが俄に、なんとなく怖ろしいものに感じられだしたことに氣がつくと、我ながらちよつとへんな氣がした。それが、法律とか制度とか云ふ人爲的なものに對する、理智的な憚りや怖れではなくて、出合頭に猫の前に跳んで出た鼠でも感じさうな、本能的な衝動だつただけに、尚更へんな氣がした。

ちよいと振り返つたが、もう巡査の姿は見えなかつた。そのことが、然し一層信之を不安にした。すぐ引返して、表通りの、巡査の曲つて行つた方を透かすと、白い靄の中を、却つて著しく、外套の後姿が、ゆる〱と遠ざかつて行つた。

「先生!」

どこから出て來たのか、普烈が忍びやかに近づいて來て、「行つちまひましたか」

「大丈夫だ！　早く來たまい」

無事に二人は自動車上の人となつた。深い霧を衝いて、車は紀尾井町の藤代家へ向つた。

眠られぬ夜

一

マッケンゼン殺しとか、氷川町の外人殺しとか謳はれて、新聞を賑はしたのも僅かに二日の間だつた。現場の最初の目撃者である同家の下女おきんの、參考人としての供述によつて、三日にあげず出入りしてゐた西山普烈の名が引き出されると、不良少年の黒表中の立物だけに、九分九厘間違ひのない犯人と目ざされて了つた。刑事は東京横濱間に飛んで、彼の立ち廻りさうな要所々々を堅めた。警視廳でも所轄署でも、正犯人の逮捕に、十分の自信をもつてゐたが、たゞ大抵の不良少年がさうであるやうに、激情に驅られ安い、神經質と云ふよりも、寧ろ神經衰弱的な普烈の性癖を鑑みて、あまり新聞でわい／＼騷ぎたてたために、自殺でもされたり、とんでもない高飛びを企てられたりしても厄介だと云ふところから、三日目から記事掲載が差止められて了つた。

押入の中の狀況で、大膽にもそこを媾曳の場所にしてゐた姦通事件であることは疑ふ餘地もなかつた。そこに遺棄された麥藁帽子、背廣の上着などが普烈の所有品であることも慥められてゐたし、それらの物を身につける暇もなく逃走したとすれば、逮捕は一層容易さうに思はれたのだ。犯罪が重くて、逮捕が容易らしいとすれば、第一の疑惧は犯人の自殺でなければならなかつた。ものとりの意思のないことは明かだつたけれど、萬が一にもと、紛失した家財の有無をおきんに就いて檢べてゐる中に、玄關の帽子掛にかゝつてゐた筈の、主人が常用の黑の雨外套と、鳥打帽子とが、失はれてゐることが判つた。犯人の服裝も、これで慥められたわけだつた。

犯行の現場である納戸の六疊間で、左の下腹部と心臟のやゝ下とに、鋭利な刃傷をうけて、多量の出血のなかにうち斃れてゐたマッケンゼンの右の手に、二發だけ發射されたブロウニーの六連發が握られてゐたことで、そこに爭鬪が行はれたと云ふ推定にも誤りはなささうだつた。廊下に殘つた血の跡は、與繭子が六疊間で殺されてから、屍體の發見された食堂まで引き摺つて來られたことを物語るものだつたが、その右の肺を貫いてゐる銃傷によれば、マッケンゼンの所爲らしくもあり、彼の女自身の傷口から流れたのではない、外部からの血で、甚しく衣服が汚染されてゐる點から推すと、マッケンゼンが短刀の一擊をうけてから後の出來事であるか、さもなければ、犯人自身も傷を負つてゐるか、そのいづれかでなければならなかつた。

兇行の短刀は、現場に發見された。それも、普烈の、日頃携帶してゐたものであることが探知された。證據物件や、現場の狀況や、おきんのほかに當日訪問してゐた米國人夫婦、普烈の友達である二三の不良少年たちの供述によつて、犯人並に犯罪の主因、その方法など、比較的に明瞭だつた。たゞ犯行の目擊者が、犯人のほかには二人ながら死んでゐるので、逮捕後の豫審に多少の困難が、もしあるとすればあるくらゐに豫期されてゐた。

世間の噂は、新聞が一時に緘默して了つただけに、却つてジワ／＼と湧きだして來た。度重なる災害に、京濱の外國人たちの間には、日本警察の不信任を唱へようとする氣勢もほの見えて來た。

二

けれども、事件發生から六日目の金曜日には、

犯人か、辯護士の蘇代信之と云ふものに附添はれて、午前九時頃、直接檢事局に自首して出たことが、各紙の夕刊によつて報ぜられた。中には午後になつて、市ケ谷刑務所に護送されるために、囚人自動車に足を踏みかけてゐる白絣の單衣に袴を穿いた、痩せてヒョロ〳〵と丈ばかり高い若者の寫眞を添へたのもあつた。

そこで、その後の事實はかうだつた。

霧雨を衝いて動き出した自動車のなかで、心を落つけるために、信之は、眞正面に運轉手の背中を見詰めたまゝ、虎の門のあたりへ來るまでぢッとおし默つてゐた。

「話をしてもよござんすか」

恐る〳〵さう口を切つた普烈の心持が、手にとるやうに感じられて、信之は涙ぐむほど可愛かつた。今まで引き締められてゐた額や頰の筋肉が緩んで、急に、思はずも優しい笑顔になつて了つた。

「いゝとも！」

「默つてると淋しいんです……」

「解る、解る！」

耳に口をよせて、「運轉手に聞えないやうに、それだけは氣をつけた方がいゝ……」

けれども、毀れかゝつたやうなぼろ自動車だつたのが、結句幸ひで、調子の惡い機關の音に遮られて、その囁くつもりの聲を、却つて張らなければならないくらゐだつた。

「……えゝ……」

口を利くとなると、然しなんにも言ふことはない、——さうらしかつた。僅かの間にげつそりと痩せ衰へて了つて、ギョロリ〳〵光る眼を、まぶしさうに膝へおとした。

「たうとう えらい ことがもちあがつちまつたね」

信之は、落ついた調子でものが言へるやうに、心の支度を、すつかりもう調へて置いた。大事驚くに足らず、——兎角小事に拘泥りたがる性分を自覺して、日頃から取返しのつかないことを「宿命」と云ふ底まで押し鎭め、心の安定を保つ修養を怠らなかつたおかげには、神經質のわりに、大事に臨んでも狼狽ないだけの支度が出來た。——「たうとう」と云つたのは、かねて普烈が來ては、事件の發覺が際どい所まで進んでゐる由を、惚話まじりに喋つて、

「何しろ、相手が異人だけに可怕ござんすよ。知らない筈はないのに、顏を合せるといやに鄭重だつたりして、薄氣味が惡くつて仕樣がありやしない」

なぞと云ふので、信之も、

「惡いことは出きないもんだ、君みたいな男でも、可怕いといふ氣が出るんだから……」

「冗談いつちアいけませんよ。僕はそんな……」

「いや、異人つてやつアまつたく不氣味だよ。なんて云ふとこれだからね」

と拳銃を差しつける手眞似をしてみせた。

「ほんと〳〵！　ズドンと來れアそれつきりなんだからなア。だけど……」

「その人のためなら いゝか！　命もいらないか」

冗談半分とは云ふでう、こんな會話を取交はしたこともあつたのだ。

で、それが、たうとう本事になつて了つた、と云ふほどの意味だつた。

三

「えゝ、とんでもないことをしちやひましたよ」

普烈の蒼白い頰には、微かに苦々しげな笑みが浮かんで來た。それは、何か取返しのつかない失策を仕出かして了つた時に、心では十分に責め訶まれながら、ひとから愚図々々云はれるに堪へない勝氣な靈魂が、しやうことなしに笑ふところの、あの寂しい笑ひだつた。その上には、神樣でさへ、なんの罰をも加へようと思ひ

はしないだらうところの、我執の破産に、赤裸にむかれた心の寂しさ、——これは、深く信之の心に觸れた。

「ほんとにとんだことだつた。然し、はずみだよ、ほんのちよつとしたものゝはずみだよ。ねえ、さうだらう？」

「さうばかりも云へません、いざと云ふ場合にやア、やつつけちまふより仕方がないたア、かねがね思つてたことなんですから」

「それにしたつて矢つ張りはずみだよ。大袈裟な言葉を使へば、運命だよ。……然し、一體どうして奥さんを……？」

「あれア僕ア知りません！　多分おやぢが、くたばりかけながら、九死一生の力で引金を引いたんぢアないかと思ふんだが、何しろ眞ッ暗闇だつたから……」

「さうだらう。もし君のしたことだつたら、よもや君だつて生きちやアしまいと思つてたんだ。然し、どうして早く自首して出なかつたんだい」

「だつて、それア……」

「可怕かつたのかい？」

子供のするやうに、素直に頷いてみせた。自動車は、霞ケ關から永田町の高臺へと、前燈の光のなかを煙のやうに飛ぶ靄と闇とを衝いて、まつしぐらに登つてゐた。

「だけど、今夜まであつちこつち逃げ廻つてるのも、隨分可怕かつたらう」

「えゝ……、だけど、殺されるよりやいゝ」

信之は、グイと心臓を突かれたやうな氣がした。この男は、殺されることの恐ろしさを、目のあたりに見て知つたのだ。それは概念的な恐怖とは全くわけの違ふものなのだ。——さう思ふと、不思議に莊嚴な感じに壓せられて、思はず首を垂れて了つた。が、無理にも心を實際的な問題へ向け變へると、すぐに引き取つて、

「殺される？　死刑になるつて意味かい？」

「えゝ……」

この言葉から、聞くも恐ろしげに顔を背け、深い溜息を震はせた。

「冗談いつちアいけないぜ！」

「　　何が……」

「何がつて君、せい／＼重くつて十年だよ。うまくいきア五年か七年、俺に裁判させれア無論無罪だ！　死刑なんて、こつちから頼んだつてしてくれるもんかね」

「さうですか？」

それは、ほんとうに意外らしかつた。クルリと正面に信之の方へ捻向いて縋りよるやうに膝に手をかけると、「ほんとうでせうね、間違ひありますまいね」

信之としては、普烈が、人を殺したから俺も殺されると云ふ風な、法律に關する無智と云ふよりも、寧ろ元始的な感情に支配されて、それで今夜まで逃げ隱れてゐたことが、これまた呆れて言葉も出ないほどの意外に感じられた。

「さうか、君やア……、さうかい！」

こんな善良な不良少年が世にあらうか、と思はず膝に置かれた手をとつて、しげ／＼と顔を見詰めたのだつた。

四

近々と見合せて、一二秒すぎたと思ふと、普烈の眼の中は、いつぱいの涙になつて了つた。それを見ては、信之とて我慢できなかつた。——特別の恩典で、纔に死刑を免れた人のやうな、目も利けないほどの感謝に充ち溢れた心が、鮮やかしくも信之の眼前にあつた。なんとなく吾身が恥しくなつて來た……。

人は、易くも、運命の善し惡しを云ふ。而も明日の日の來ることを信じて疑ふものはない。萬人の今日は、たつた一つの例外もなしに、特別の恩典で、纔に死刑を免れてゐるのだと、そ

んな風に「運命」を感じてゐる者はないのだ。口には、俗僧も稱へるけれど、實感として心にそれをもつてゐるものは甚だ稀だ。が、事實、釋迦の謂はれた通り、誰が明日の日を恃むことが出來よう。而も、恃むべからざるを恃むのが、人の性情だ。そのおかげで、人は自棄から逃れる。懺悔から救はれる。厭世から放たれる。そして、その代りには、感謝を忘れる。自らを大切にする心を失ふ。惡徳はすべてそこに種を卸す。誰か、その日〳〵を、一特別の恩典で、纔に免れてゐる一日だと觀じる者があらう。

さうさせないところが、慈愛に充ちた自然の詐欺で、たまさかさう感じてゐる者の心の美しさこそは、肚から笑つた自然の羈でなければならない……。

信之は、**その羈に繋たれたのだ。** 己の「明日をも知れない死刑囚」であることを思ひ出させられたのだ。そして「人殺し」の前に、我身を恥しく感じたのだ。――二人の、大きく睜いた眼から、涙が止め度もなくぼろ〳〵と零れ落ちた。

細君の朋子には、良人の連れかへつた人間が、鬼のやうに感じられた。彼女の心配と恐怖との前に、信之は、平身低頭してたゞ〳〵賴み入るよりほかはなかつた。

共同水道から飲み、掃溜から食つて過した五日間の後を思つて、時間もとらず、腹にもさはらないコオン・フレエクスに牛乳をかけて食はせた。上等の葡萄酒をぬいて飲ませた。それから、湯に入れて信之の浴衣を着せた。脱ぎすてたものは、云ふまでもなく血に汚れてゐた。それらは、信之自身で風呂敷包みにして、書齋に持つて來てから、やつと少しは落ついた心持で、煙草に火をつけ、葡萄酒の盃を取り上げた。

「有がたう、いゝ心持になりました」

浴衣の袖で耳の穴を拭きながら、やがてそこにはいつて來た普烈は、たゞ何事もない泊客のやうな、ノウ〳〵とした顏つきをしてゐた。

「注がうか」

ボルドウの古酒の瓶をとりあげて、信之も、仲のいゝ友達を迎へた主人の心持で云つた。

「えゝ、もう一杯御馳走になりませう」

「腹はどうだい」

「まだ食へるけれど……」

「でも、さういちどきぢアいけまいから、二三時間してからパンでも食ふかね」

「えゝ、……飯が食ひたいな」

「飯はどうだらう。お粥でないと無理ぢアないかね」

「なアに、掃溜なんてものも、あさつて見るとあれでなか〳〵御馳走がありますよ。絶食のあとほどに用心する必要はあるまいと思ふんです。構はないから、飯を食はしてくださいな」

五

その調子は、寧ろ忌々しさうだつた。腹をすかして、氣むづかしくなつてゐる子供を丸出しの普烈が、この上もなく可愛いものに感じられて、信之はニコ〳〵と頷いてみせた。

「ぢア、何か御馳走を賴んで置かう」

と、女中を呼んで、食事の支度を云ひつけてから「……然し實に不思議だつたね。あすこに君がゐようとは、まつたく偶然中の偶然だね。一體どうしてあんなところに行つたんだい」

「なんとなく足が向いちやつたんですよ。……初に氷川神社に飛び込んぢまつたんだけれど、どうもあんまり近間で、落つかない氣がするもんだから、谷町の通りへおりて行つて、とても賑かなんで、こいつアいけないと思つて、すぐ市兵衛町の方へ上つて、ブラ〳〵してゐるうちに夜が更けて來たから、丁度通りかゝつたあの寺の緣の下へもぐり込んぢまつたんです」

「あゝ、それぢやア初の晩からずうつとあすこ

に籠つりきりかい」

「普通の神社や寺のやうに、馬鹿々々しく床が高くないし、さうかつて住居よりは高いから、……それに晝間もあんまり參詣人は來ないし、馬鹿に都合のいゝ隱れ場所だつたんですよ。……然し、貴方がやつて來たにやア驚いた。これアてつきり知つて來たんだな、と思つた」

「それアさうだらう、普段の僕とはまるで緣のないところだからね。僕にしたつて、あの二三時間前までは、あんなとこへ行くことにならうたア、夢にも思つてなかつたんだからね」

「あたしもね、あんまり思ひがけないから、初は他人の空似だと思つてたくらゐですよ。さうしたら、聲を聞いたら紛ふ方ない貴方なんでせう、嬉しくつてね、すぐ飛び出して行つて抱きつきたくなつちやつた……」

「さうかい、僕はまたそんなことたア夢にも知らないからね、慥に脫ぎつぱなしにしといた筈の下駄が、ちやんと直してあつたりして、可怪しいとは思つたんだが……」

「あたしはもうてつきり警察を出しぬいて、貴方に足を取られてるんだと思つてたから、有繫は貴方だと思つて、內々敬服してゐたんですよ」

「成程ね、そこは爭はれないもんで、どこまでも活動式に考へて、僕を名探偵にしちやつたわけだね。それで、敵ながらも天晴と云ふんで、[illegible]もなか〳〵足駄を直して置いてくれたのか。芝居氣があるんだね」

「いや」

と、生眞面目に、「實際嬉しかつたからですよ」

「さうかい」

信之もしみ〴〵として、「然し何しろ不思議だ。神佛のお引合せとでも考へるよりほかに考へやうがないくらゐだ」

「そアお不動さんのお引合せでせう」

「うん……」

と頷いた信之は、（いや、寧ろおもんのお引合せだ）と云ひたいところだつたが、何も知らない普烈の前を、口を噤んだまゝ、ちよつと思ひを、氣の毒な、然し勇ましい女の身の上へ走らせたのだ。

（どうしてみんなかういゝ人ばかりなのだらう！）

人の世が、彼の前に、明るく微笑んでゐた。

六

日頃から信之は、自分をえらい人間だとか、大した男だとか思つたことはなかつた。たゞそんなに惡い者だと思はないだけだつた。ひとには、つまらないことで噓をつく場合もないではないが、自分自身に對しては、決して噓のつけない正直者だと思つてゐた。時には正直を通り越して、小心者と、寧ろ可哀想に思へることさへあつた。殊に、感情の素直さは我ながらいぢらしいくらゐに無邪氣だつた。人心の美しさに出逢ふと、すぐ涙ぐんで了ひ、世の中が急に晴々と明るくでもなつたやうに嬉しがるし、ほんのちよつとした惡意に躓かされると、忽ち人嫌ひになつて、寂しく默りこんで了ふよりほか、角も槍も出せない蝸牛だつた。その、あまりに他愛なく燥ぎだし、めいり込んで了ふ具合が、自分ながら安つぽいものに感じられた。まるで日向に擲り出してあるボール紙みたいだ、と、さう自分で自分の惡口を考へるのだつた。ちよいと日に晒されゝば、すぐペコンと反りくり返るし、さつと水がかゝつたばかりで、じつとり濕つて了ひ、少しひどい雨にでもあへば、ベトベトに性も張りもなくなつて破れて了ふ。——さう云ふだらしのなさ、怺へ性のなさは、我ながらつく〴〵、誰にも氣の毒にもならない[illegible]のものだつた。が、いかに[illegible]、それが彼の生得の性分だつた。そしてそれは、安つぽくはあるが、——從つてちつとも[illegible]

なくもあるが、然し決して恥づべきことではないと思はれた。立派ではないにしても、惡いこととは思へなかつた。人格的にじりじりと大きくなつて行くよりほかに、その點だけをどうかしようとするのは間違つてゐる、却つてよくない結果になる、——さう思つて諦めてゐた。いや、寧ろ、永く保存したいくらゐの殉情主義もないとは云へなかつた。

初心な感情、——それは信之にとつては、上品な、愛すべき美點と考へられた。殊に同業者たちの、涸渇した、冷靜な感情のなかにあつては、それは、いつも必ず坊ちやん扱ひをうけ、馬鹿にされるにきまつたものだつたが、それだけに一層自分一人の私な喜びは深かつた。みんなが、くだらなく磨り減らして了つた寶玉を、自分一人だけは、いまだに大切に護り保つてゐる、——そんな氣持で、平氣でひとから變人扱ひをうけ、小馬鹿にされ、仲間ツぱづれにも甘んじてゐた。

いま茲にも、彼自らの謂ふところの「ボール紙」は、強い日射のもとに、ペコンと反つくり返つてゐたのだ。

(さう云ふいゝ人たちが、……一人は、くだらない坊主にひつかゝつて、みじめを見たり、一人は、法律によつて罰せられなければならないのだ!)

義憤とも云ふべき腹の底の煮えくり返る思ひが、急に信之を捉へた。この青年のために、飽まで法律と戰つてやらうと決心した。まだ一度も刑事の事件を引受けたことはないが、よし! 一生一度の大辯論をやつて、どうにでもして無罪にしてやらなければ氣がすまない!——これも例の單純な感情から、信之は、一圖にさう思ひ込んで了つたのだ。

「で、何かい、君は、惡いことをしたと思つてるかい」

突然のへんな質問に、普烈は、その意を汲みかねて、眼をパチクリさせた。

七

「……惡いことつて……?」

「つまり、君の氣持はいゝのかい、惡いのかい。すまないと思つてるのか、それとも……」

「それア、無論惡いことをしたと思つてますよ」

「どう云ふわけで?」

「だつて、人を……」

「然し、若し君がさうしなければ、反對に君の方がさうされてゐたかも知れない場合ぢアなかつたのかい」

「それアおやぢは、眞正面から僕に拳銃を差しつけてゐましたよ。僕は、こいつア所詮はやられるかな、と思つたんです。咄嗟に、シャツの襟をあけて、立派に覺悟をみせてやつたくらゐです。尤もなんか背に背けてゐるとやられる場合でも、素ッ裸になると、大抵喧嘩に馴れた人間でも、ちよつと手が下せなくなるもんだつて話は、前から聞いてたことがありますし、覺悟をみせたと云つたんぢア、少し立派すぎるかも知れませんが、でも、その氣持だつてまるツきりなかつたわけぢアないんです。そのくせ、一方にはまた、さうして見せたら、よもやぶッ放しはしまい、と云ふやうなこすい了見もあつたに違ひないんですから、……その證據には、うまくいきア、あべこべに相手を突ッ殺してやらうと思つて、ちやんと短刀だつて用意してゐたんですもの」

「用意してゐたとは……?」

「ズボンのなかで、しつかり柄を握りしめてゐたんです」

「さうしたら?」

「いつまでも撃ちアがらない。隨分永いこと睨み合つてたやうな氣がしますが、そこへ與爾公が飛び込んで來て、いきなりおやぢの腕に武者

ぶり附いたんです」
「無論右の手だね？」
「さうです。いや、さうぢアなかつたかな、……何しろ、毒藥をもつて來て、拳銃を攫り出さなけれア、これを飲むと云つておどかしたんですから……」
「ふーん、それで？」
「それでおやぢが、ちよつとひるんだところを、いきなり僕が跳びかゝつて……」
「突いちまつたわけだね？」
「えゝ、さうです」
「それでも良心に咎められるかねえ」
「良心だかなんだか知りませんけれど、死に角可厭な氣持ですよ」
「それア無論いゝ氣持はしまいけどさ、まごまごしてれア自分の方がやられちまふ場合としたら、どうもそれよりほかに仕樣がなかつたらうぢアないか。さうとすれア……」
「いや、こつちが殺されるまでも、殺すといふことはいゝ氣持のもんぢアありませんよ。それも、普段から、仇かなんぞのやうに憎い〳〵と思つてたんならまた別でせうけれど」
「ぢア君は、死んだマツケンゼンに對しても、心から惡かつたと思つてるんだね？」
「それアさうですとも」
「で、夫人の方は、全く君にやアどうして死んだんだか分らないのかい？」
「えゝ、先刻も云つた通り、眞つ暗闇の納戸から連れ出さうと思つて、抱き起さうとしてゐるうちに、ドスンと拳銃が鳴つたんで、何が何やらさつぱり分りません」
「ぢア夫人に對しては……」
「それだつて無論、あたしから起つたことですから、直接引金を引いたのが誰の指だらうと、咎はあたしにあるんです。あたしのために死んだんです。あたしは……、あたしは……」
云ふうちに、一聲激しくしやくりあげたと思ふと、ワツと圓卓に泣き伏して了つた。

八

信之はものを言ふことが出來なかつた。が、今度は涙は出なかつた。ほんの少しだが、感情的すぎると云ふやうな氣がしてゐた。それほどに思ひつめた女なら、何故その場を去らず自殺して了はなかつたんだ、今になつて、そんな、メソ〳〵泣いたりして……、不思議に高く吊りあがつて了つた心には、さう云ふ非難めいた考へさへ浮かんで來るのだつた。
「すんで了つたことは仕樣がないさ……」
愛する女の死を悲しむ、たゞそれだけの感情として、然し信之も同情をもたないわけではなかつたから、優しく云ひ慰めて、「生死のことは、いかにぢたばたしてみたところで、結局どうにもならないもんだと思ふよ。諦められまいが、その内には時間が諦めさせてくれるだらう。それよりは目前の問題だがね、君がそれほどまでに自分で自分を責めてゐるのなら、もう誰からも文句を聞かされるところはないんだ。自分で自分を責めることを知つてゐる人には、神樣だつて罰を與へようとはなさらない筈だ。然し世の中の制度は制度だから……」
「えゝ自首します。必ず貴方に御迷惑をかけるやうなことは……」
「なに云つてるんだ！」
思はず信之は、語氣を荒く、「自分の迷惑なんぞ考へてるくらゐなら、誰が君なんぞ連れて歸つたりするもんか。第一、初手から交際やアしないや！」
「いや、さう云ふ……」
「僕は何も、君を自首させようと思つて連れて歸つたわけぢやアないんだ。一應さう云つて勸めてみるくらゐの氣はあつたかも知れないが、もし君が、法律の制裁なんぞうけてたまるもん

か、と云ふやうな氣持で、飽までも逃げ隱れる決心だつたら、それもよからうと思つてたんだ。決心の強さによつては、大いに贊成するくらゐの氣でゐたんだ。なんぼ僕が裁判所に縁のある人間だからつて、警察官ぢやアあるまいし、無理やりに君に自首させようなんぞたア決して思つてやしないんだからね」

「すみません、僕だつて何もそんなつもりで云つたわけでも……」

「それア無論さうだらう、ほんの挨拶のやうな、輕い意味で云つたんだらう、それア解つてるが……、然し、今も云ふ通り、君が飽まで逃げ延びてみせるつて氣なら、少しも遠慮は要らないんだから、さうし給いよ。要するになんでも構はないから、君の思ふ通りにするのが一番いゝんだ」

「いや、自首して出ます」

「それが一番いゝと思ふかい」

「えゝ、逃げ歩いてる苦しみは、もうこの五日間で澤山です。こんなことが一生續いてたまるもんですか」

「さうかい。それだけ解つた話なら、何より結構だ。ぢや、明日の朝僕も一緒に行つてあげよう。もう犯人は君ときまつて了つたんだから、一件書類も檢事局に廻つてると思ふし、警視廳へ行くより、いきなり裁判所へ出頭した方がいいと思ふからさうし給いな」

「えゝ、どうでもいゝやうにやつてください」

「それから、公判になつたら、僕は何を措いても辯護に出るがね、豫審中には、なんでも構はずどん〳〵正直に喋つちまひ給いね、その方が却つてあとがやりいゝんだから」

九

そこへ、食事の支度が出來たことを告げに、女中がはいつて來た。

「お茶の間の方へ行かなくつちアいけないんですか」

と、晋烈は、やゝ當惑顏をみせて云つた。

「なに、いゝとも。こゝに持つて來て貰はうか」

「ぢア、さうしてくださいな、どうもいろ〳〵我儘ばかり云つてすみませんが……」

「なに、……ぢアね、お氣の毒だけれど、こつちへ運んでくれないか」

「はい、かしこまりました」

「あ、それから、奥さんはどうしたい、もう寢ちやつたかい……」

「いゝえ」

「ぢア、こちらは少し遲くなるかも知れませんから、お先におやすみなさいつて、……それから、御免かうむつて、お櫃もこゝに持つといでな、俺がお給仕をしてあげるから」

「はい」

やがて食膳が運ばれて、飛びつくやうに晋烈が箸を把りあげ、三ぜんの飯を食べ終るまで、側で信之は、豫審廷の模樣などを話して聞かせ、自分の友達に森と云ふ判事があるが、うまくその男の番に當つて、調べて貰へるやうだと都合がいゝが、などと云ひ出したりした。食ふことに氣を奪られて、然し晋烈には、それもよくは耳へはいらない容子だつたが、最後に、御飯茶碗に一杯なみ〳〵と番茶を飲み終ると、

「あゝ、食つた〳〵」

と、腹を撫つて反り返り、なんの屈託もない人のやうな、幸福に滿ちた微笑を浮かべて、

「さアもうこれで、だれでも鐵砲でも持つて來いだ！」

「山の手は店屋の仕舞ふのが早いから、なんにも碌なおかずがなくつてお氣の毒だつたね」

好き自由に取れる晩餐の、これが當分のお別れと思へば、どんなにでも御馳走してやりたかつたのだが、すつかり[illegible]つてゐる男子に

向つて、食事の用意に心を使つてくれとまでは賴みかねて、女中まかせにして置いたので、ほんの有合せのお惣菜だつたのを、山海の珍味でもあるやうに、舌鼓をうつて食べるのを見ては、信之も思はずほろりとなつて、ついそんなお世辭めいた言を云はずにはゐられなかつたのだ。

「いゝえ、御馳走さんでした。うまかつた。ほんとに、こんなにうまく飯を食つたことはめつたにない」

嘘でもお世辭でもなく、普烈は喜んでゐた。信之は、もう一度抱きしめたいほどの哀憐の情に涙ぐんで、

「それアよかつた！……ぢアまア、なんにもおかずがなかつた代りに、煙草のうまいのでもやり給い」

とう云つて、日頃から道樂の歐米舶來の卷煙草を五六種、盆ごとそこへ積んだ。

「貴方は葉卷はあがらないんでしたつけね」

「あゝ、生憎葉卷は切らしたな」

「いゝえ、僕はいゝんですよ。ぢアこいつを一本頂戴しませう」

と、ロンドン・ライフに火をつけ、一二服すぱ〳〵やつたが、苦い顔をして、そのまゝ灰皿にこすりつけて了つた。

「駄目です、強くつて。矢つ張りこの方がいゝや」

さう云つて、接待煙草を入れた銀の箱から敷島を摘みあげた。

✝

マッケンゼンの常用品でも誤魔化してゐたのだらう、よく普烈は飛切り上等の葉卷をふかしてゐた。さうでない場合でも、エヤシップとかバットとか、必ず兩切の強いやつばかり用ゐてゐたのに、急に敷島を選ぶやうになつたのは、營養の衰へた上に、五日間煙草にありつかなかつたための結果だつた。

「ひどいもんですね、苦くつてとても吸つてられませんよ」

それを云つて、自分で感心してゐた。

「うちで三十日養生してから行つたつて構はないやうなもんだけれど、それおアあんまりお上を恐れないやうで、裁判官の感情にもいゝ影響は與へまいし、君だつて體を樂にもつた揚句だと、却つて辛いにきまつてるから、ひと思ひに明日の朝行つちまふんだね」

「えゝ、さうしませう」

ふと、普烈は寂しく眼を伏せて、「考へてみれア、さんざ良くないまねをして來たんだから、ちつたア惡い報いもなくちア、天罰が恐ろしいや。監獄に行くくらゐのことですむんなら、あたしは却つて有難いんですよ。お袋は、どうならうとあたしのことなんぞ、ちつとも氣にかけてくれるやうな人ぢアなし、ちつとも構やアしないんだから……。たゞね、生きてるのか、死んぢまつたのか、それさへ分らないんだけれど、あたしが十三の年齢に獨逸に歸つちまつたハ、が聞いたら、きつと悲しがつたり腹を立てたりするだらうと思ふんです。それだつて……、言はばあたしは、天にも地にも一人ッぼつちみたいな人間なんだから、與爾公が死んぢまはず、監獄にゐようとどこにゐようとおんなじこツてさア！ そんなに心配してくださらないでも平氣ですよ。よしんば十年ふんつかまつてたつて、まだ若いんですもの、出て來ても、やつと三十一だ！ 今の貴方よりまだ五つも若いんだもの、なアに平氣でさアね」

「さうだとも、さう思やアなんでもありやアしない。元氣よく行つて、誰よりも一番快濶に働いて、氣持も體も、うんと一つ丈夫になつて來るんだね」

「えゝ、ちよいと惡く、ありませんね」

獄中に評判がたつくらゐ茶目で、活潑な青年としての自分を思ひ描いたのだらう、普烈は、樂みなことでもあるやうに、ひとりニコ〳〵して、「監獄なんて、きつとそんなに可厭なところぢアありませんよ。ひよつとすると、娑婆より面白いかも知れない」

「それア大きにそんなことかも知れない。……それから話は別だが、いくら君に冷淡だつて、君の阿母さんも、今度はちつたア心配してなさるだらうぜ。先達から、無論刑事は張り込んでるに違ひないし、何かの新聞にも、おきまり文句ぢやアあるが、誠に心配でたまりません、と涙ながらに物語つた、つて云ふやうな記事も出てゐたからね。その内一遍面會に來て貰つて、君のさう云ふ元氣のいゝとこを見せてあげるんだね」

「元氣がよけれアいゝで、あの通り圖々しいんだから、なんて云ひかねない婆さんですからね。でも、彼方で逢ふつて云つたら逢はせてください、さう云ふ手續きをしてやつてください」

「僕も一度逢つてみようよ。これまで君の話の通りだつたとすれア、この際ちつと心を入れ變へたつていゝと思ふからね。この雨で、かたまる地面ならかためた方がいゝからね」

十一

普烈の生母、西山かねと云ふのは、小學校さへ滿足には卒へず、殆ど智徳の教養をうけたことのないやうな、程ケ谷在に生れた田舎娘が、丸ぽちやの色白と云ふだけを取柄に、收入のいゝ代りには多少とも人選のやかましい横濱のホテル奉公に住込んでゐた間に、宿泊中の獨逸人に弄ばれ、身重になつたのを、幸ひその中年の紳士がわりに生眞面目な人だつたおかげに、一時相應の家にかこはれてゐたこともある、謂ふところのラシヤメンがその前身なのだ。腹の子は流産して了つたが、どこか氣に入るところがあつたと見えて、ほどなくブローカーのやうな仕事を始め、日本に住みつくことにきまると、山手にうちをもち、そつちへ一緒になつてからは、殆ど奥さんと云つて差支へないほどの待遇をうけたが、然し遂に表向の結婚はしなかつた。

その後三年ほどして生れたのが普烈だつた。

一家はいよ〳〵幸福に滿たされたが、そこに、どうしても歸國しなければならないやうな事情が出來て來て、急に獨逸人は、後事を友人に託し、永くも一年かそこらの豫定でたつて行つた。

ところで、性の誘惑に對しては、少しの抵抗力もないおかねだつた、寧ろ抵抗すべき何等の理由をも考へられないやうな無智な、從つて無邪氣なあたまをもつた彼の女だつた。うちの臺所を預つてゐた四十男の、なんのけもない醜男に、易々と身を任せて了つた。そのくらゐだから、きちんと留守中の所帶が保つて行けるわけはなかつた。どれが女中で、どれが主婦なのやらわけがわからないほどの亂脈を極めた家庭に、早熟な普烈の、春期發動が、一層はやめられたのだ。

後事を託された友達の、一應の忠告などが用ひられさうな筈はなかつた。狀態があからさまに報告され、二三度の往復のうちには、最後の月ぎめの送金と一緒に、手切れの金が屆いて來た。そのためばかりでもなかつたらうけれど、留守を預つてゐた二三人の事務員達も解雇されて、或るアパアトメントの二階で扱はれてゐた店の仕事も、それきりに鎖されて了つた。

一家解散の時が來た　云ふまでもなく普烈には、生みの母親や、それの亭主然と構へてゐる舊のコックは、少しの權威も持ち得なかつた。輕蔑と憎惡との眼差しでジロ〳〵と見てゐるこまツしやくれた十三歲の少年に對して、衣食住を供へてやらうと云ふ氣などが、どうして二人の心に起るだらう。改めて、親でもない子で

もない、と申渡すまでもなく、どつちからもさう云ふ感情はもてなかつた。あまりのことに見かねて、生みの父親の友達が四五人かたり合つて普烈を引とり、面倒を見てやることになつたが、それもほんの半年かそこらで、とても手におへない子供だと云ふことを、つく〲と彼等に思ひ知らせるだけの結果に終つた。いつそ獨逸に送つてやらうか、との案も纏まりかけたのだが、それは普烈の方で、惜げもなく御免かうむつて了つた。

伊勢崎町のとある街角に出る一品洋食屋が、おかねとその內縁の良人との近頃の營業だつた。そして普烈は、十五の年齢から今日まで、「不良少年」を職業として、自ら食ひ、自ら着、自ら住んで來たのだ。時にそれが、押入の中や、縁の下だつたにもせよ……。

十二

「態々逢つてみてくだすつたところで、とても無駄なこつてさア」

噛んではき出すやうな普烈の言葉の裏には、然しどことなく儚い希望の響が罩つてゐた。

お坊ツちやん育ちの二十一ならば、まだまだたまには駄々の一つもこねてみたい年比だと、十五で快樂を失つた信之には、その裏の心持が、我身に思ひ合はされて、しみ〲汲みとれたのだ。一つにはまた、いかにして普烈が不良少年の群に投じたか、それを公判廷で說く折の參考にもと、最近是非とも母親を尋ねて行くことに心をきめ、町所を訊いて書きとめて置いたりした。

その晩、既に敷いてあつた自分の寢床をも二階の客間に移させ、普烈と枕を並べて横になつたのは、もうかれこれ一時近かつた。久しぶりに柔かい布團の上で、ノウ〲と手足を踏み延ばすことの出來た普烈は、二言三言ものを云つたと思ふうちに、忽ち大きな鼾をかき始めたが、却つて信之は眠つかれなかつた。取とめもなくいろんなことが考へられた。死ぬ間際には、誰でもが一生を振り返ると云ふが、殆どそのやうに、舊い新しい記憶が、あとから〲と、終りのない絲を繰出した。いろ戀に係りのないと云ふのは稀だつた。

(可成り俺も浮氣もんだなア)

さう思はずにはゐられなかつた。絕え間なく、それからそれへと渡つて來たばかりでなく、一時に三四人の女と逢つてゐて、どれへもそれに適はしい愛情を注ぐことが出來た時代も往々あつたのだ。さう云ふ記憶にしてからが、然し少しの自責も感じられなかつたばかりでなく、寧ろ微笑ましく、輕い愛惜の情を禁じ得ないくらゐのものだつた。顧みれば、どの女にも溺れてゐた、迷つてゐた。それ故にこそ、記憶は微笑ましい哀憐に潤ふのだつたが、その癖一方に、彼は夙くから女性崇拜の感情を失つてゐる男だつた。いまだ嘗て、男性を凌駕するほどの女性と云ふものが、世に存在したとは信じなかつた。これを云ひ換へれば、さげつきりに頭があがらないやうな女には、一度でも出逢つた覺えがないのだつた。どんな女だらうと、女ならば、自分より一段劣つたものと觀じて、決して誤りのないことを信じてゐた。夙すぎるほど夙く彼に迫つたこの幻滅のあとでも、而もなほ戀愛を去り、女を小馬鹿にしきるやうな精神に陷らせなかつたところが、靈妙不可思議な自然の巧だと思ふよりほかはない。大勢のなかには、一旦の幻滅のあとで、決して同じ夢を繰返さうと思はなくなる性分の人もあらう。けれども大體から云へば、どんな幻滅だらうと、人生では、それが咽喉もと三寸の熱さだ。人生では、悪夢から覺めて、もう決して眠るまいと思ふのも夢なれば、夢だつたかと、もう一度枕につくのも夢で、白日を頂き、大地を踏んで、我こゝに立

てりと叫んでゐるものが、果して寢惚けてゐるのでないと誰がよく證し得よう。眼を開けば悟りの夢、眼を閉づれば迷ひの夢、人生は畢竟長夜の眠りと觀じたなら、基督ならずとも、釋迦ならずとも、歸するところ昇天を喜びとし、涅槃を希へずにゐられようか。[illegible]るに生の悦びよ！　幻の有難さ、迷ひの尊さ！　生活力の旺溢こそは、現世の執着こそは、信之の守本尊でなくてなんであらう。

十三

さう云ふ氣持で裏づけられながら、自分で自分を浮氣ものと思ふことは、寧ろ微笑ましいくらゐだつたが、世の中の道樂者の、露骨な性慾衝動や、單なる好奇心で色を漁るのと一緒にされた場合には、面には笑つて濟ましても、肚では相手を輕蔑しずにはゐられない信之だつた。さうかと云つて、女を愛すると云ふことが、崇高な、人道的の行爲だなどとは、假にも思ひよらないのだけれど、惚れた、好きでたまらない、息がとまるほど可愛い、可厭なことはなくなしてやりたい、——さう云ふ心持は、決して謂ふところの助平根性ではないと思へるのだつた。好きの度が增せば增すほどに、體の愛撫も強烈になるけれど、それと同時に清淨な靈的な愛情も深められるものだ、と云ふ實感をもつてゐた。順當な戀愛の行程なら、必ずこの二つのものは相携へて、前へ〳〵と進んで行くべきものだと信じてゐた。一途な愛を誓ふと云ふやうな言葉もあるが、同じ深さの愛が、三日も四日も續くやうならば、その踏み止まつてゐるつもりの足は、丁度砂丘の中腹にでもあるやうに、必ずじり〳〵とあと滑りをしてゐるのだ。桐の木のやうに、スク〳〵伸びる代りに密度の疎なるものもあらうし、樫の木のやうに、延びは遲くとも硬い質の得られるのもあらうし、年齡の老若、性情のさま〴〵によつて、世に同じ戀は二つとないわけだが、習慣的になつて了つたのは別として、眞に愛し合つてゐる二つの心が、善き方へ、深き方へ、瞬時もたゆまず枝を擴げ、根を張らないと云ふためしはないのだ。これを、「享樂」とのみ觀じ去るならば、甚だ誤つてゐる。獨り戀愛のみでなく、世に生ある限りの森羅萬象が、順當なよき生育のもとにあると云ふだけのことを、「享樂」とも「努力」とも觀ることは出來ない。はたから見て、樂げな場合もあらうが、當人の身にとつては、中々に辛い時もあらうが、それは菜の花に蝶が舞つたり、喬木が嵐に揉まれたりするやうなもので、通じて生の營みのうちだ。順當なよき生長を遂げつゝあるものは、必ずよい結をするだらうし、よい結はまた、必ずそのものをよく導き延ばすだらう。その反對のものならば、何をしたつてよい筈はない。——信之の考へは之れだつた。そのためには、假令人には嗤はれても、必ず自分を僞らないこと、即ち、飽まで己れに忠實であること、まごころもつて生きること、——これを金科玉條としてゐた。

（浮氣ぢアあるが、いつだつて俺は本氣だ。すぐこりかたまつて了ふ、浮氣でこり性、と云ふやつかな……）

さう思つて、寢床のなかで、ひとりクス〳〵笑ひ出した。お澄を思つても、おもんを思つても、里奴を思つても、伊代を思つても、惡戲ッ氣の一番強かつた岡島鈴江の思ひ出でさへも、少しもあとへ不快な滓が殘るやうな感じはなかつた。晴々とした氣持だつた。

廊下の欄間が明るくなつて來た。雀が爽かに囀りだした。雨あがりの綺麗に晴れた朝らしかつた。鼾もやんで、ぐつすり安眠してゐる普烈の寢顏をちよつとのま見詰めてゐてから、クルリとうしろ向きになつて、信之は寢つかうとした。

公判廷

一

偶然にも、豫審は、信之の親しい友達である檢判事の受持ときまつて、自首して出た當日から、審理は滯りなく進捗した。犯人の自白は、至つて素直だつたし、それに證據にも缺けるところはなかつたから、案外早く片づいて、八月の十八日が公判と云ふことにきまつた。

辯護士會館で、羽織をぬぎ、薩摩上布の上から法服をはおつて、唐扇をもつただけの、フオリオ一つ提げずに、控室の方へと信之は足を運んだ。十時を少し過ぎた暑さは眩めくばかりだつた。四五日來、どうしたのか、胃にこだはつてゐるものがあるやうな氣がして、毎年夏には大して負けない性分なのだが、殆ど普段の三分の一しか食べられなかつた。陽の色を見てさへクラクラとして、目があいてゐられないほどの衰弱も、その減食のためだらうと思はれた。半眼に淺目の行路を見おろし、彼方から來る人々をたゞ影繪のやうに黑く眺めながら歩いて行くより外なかつた。目の前に、自分の兩手の組合されてゐるのが、にじんだ墨のやうに見えた。

「藤代さん―」

女の聲で呼びかけられた。右手の廣場を横ぎつて、白地に露西亞風の更紗を薄く置いたボイルの外出着を裾短に着た岡島鈴江が、大跨に近づいて來た。正月、普烈を紹介するための訪問以來、絶えて久しい對面だつた。大して知りたいことでもなく、――それくらゐだからつい今もつて普烈に尋ねる折もなかつたのだが、あの、いかい、ゆすりの種に使はれた手紙に就ては、鈴江も承知の上か、さうでなくても薄々は感づいてゐた仕事だらうと思はれたのだ。さう云ふ、いかにも女らしいだらしのなさに、可なりの不快を感じた信之だつたが、半年あまりも隔てゝは、忘れるともなくその實感から遠ざかつて、淡い懷かしみすら覺えたのだ。

「ヤア、暫くでした」

と、人なかだけに、いくぶん言葉も取りつくろつて、「どうです、その後は？」

「どうも大へん御無沙汰しちやひました。皆さん、お變りありませんか、紀ちやんたちも相變らず元氣なんでせうね―」

わりに子供好きで、以前ちよくちよく訪ねて來てゐたころ、信之の留守や、來客中の折などには、心から面白さうに、子供達の相手になつて遊んでくれた。それで子供達の方でも、いまだにどうかすると、「シゼちやんどうしたらう、ちつとも來ないね」などと云ひ出すことがあつた。今も、すぐその子供たちの安否を尋ねられたのだつた。

「あゝ、みんな元氣ですよ。時に君ア、無論普烈のなんで來たんでせうね」

「驚いちやひましたよ。ほんとに仕樣のない人……」

クルリと一つ眼の玉をでんぐりかへしてみせて、「うちにも、隨分たびたび刑事にやつて來られて、いゝ迷惑しちやひましたわ」

「それでも、公判を聽きに來ただけでも、いくらかまだ友達甲斐があると云ふもんだ。一人かい？」

「いゝえ」

ちよいとうしろを振り返つた。葉の茂つた櫻の立木の下に、三四人、何れも、洋裝の若者たちが、こつちを向いて立つてゐた。

「はゝア、横濱の不良か何か、[illegible]見と云ふわけか―」

信之としては、ちつと皮肉のあるもの云ひをした。

二

「まアそんなことですね」

鈴江は如才なく顏ぢうを笑み皺めながら、「それアさうと、藤代さんの辯護士服を着たところ初めて見たけれど、中々よく似合ひますね。今日は一つ、お手並を拜見できるわけかな」

「生意氣いふと證人に引張り出して、判事にうんと脂をとらせてやるぜ。俺もさう云つてやる、——この女は相棒ぢアなくつて、尻押しだ。活動を種の詐欺や、古手紙の押賣や、ちよいちよいした惡事はみんなこの女の指金だつたんだつて」

「あゝ、あたしさうだらうと思つてたの、藤代さんがきつとさう思つてらつしやるだらうと思つてたの」

急に眞面になつて、口の利きやうもいつになくしんみりと、「でもね、あたしほんとに知らないのよ。活動の方は、それアあたしも話を聞いてましたけれど、手紙は、……あれはあたしの留守の間に、勝手に部屋ぢう引つ掻き廻して、盜んでつたんですもの……」

「さうかい〳〵」

事の實否は兎も角として、すぐさう本氣になつて辯解しようとする態度だけで、信之は自分の言ひ出した言葉を恥しく、同時に相手には氣の毒でならないやうな氣持にされて了ふのだつた。「なに、あの當時こそちよつと不快な氣がしたけれど、今ぢやもうなんとも思つてやアしないんだよ。ちよいと揶揄つてみただけのことだよ」

「でも、すみませんでした。とんでもない人を御紹介しちまつて」

心からさう思つてゐるらしく、ほんの心持首をかしげただけだつたが、調子にはきつぱりした響が罩つた。

「とんでもない人どころか、僕は大好きになつてたよ。いゝ人ぢアないか」

「えゝ、不良青年たの、不良少女だのつて云はれてる人は、大抵いゝ人ばかりですよ」

「すぐさう圖に乘つちやいけない」

と笑つて、「中にやア君みたいなのもゐるんだから……」

「それアもうあたしなんぞ、金箔つきですもの！ 然しどうでせう、あの人……終身ぢアないだらうかつて話を聞きましたけれど」

「なに、そんなに永いことはあるまい。……ちよつと失敬するよ。なんだか、急に氣持が惡くなつて來たから……」

胃の腑の重さが、だん〳〵と鈍い痛みを作つて、堪へ難くなつて來たのだ。

「あたしも、さつきからどうかなすつたんぢアないかと思つてたんです。いやな顏色をしておいでですよ。大丈夫ですか」

眼をつぶつて突つ立つてゐる信之のそばへ寄つて來て、「目が廻るんですか。暑さにあたつたんぢアないんですか」

「なに、大丈夫々々々！」

さうは云つても、いかにも肩先が苦しかつた。

鈴江の仲間が休んでゐる方の中庭に建つてゐる共同便所が一ばん近いな、と思つたまでははつきりしてゐたが、あとは殆ど夢中だつた……。

小便所の踏段へあがるや否や、ウッと口中いつぱいにつきあげて來たのは、例の魚の臓物が腐つたやうな、たまらない臭氣だつた。しまつた、と思ふひまもなく、チョコレエト色のどろどろした排血が、三和土の上へ落ち散つてゐた。

三

鈴江や、彼の女の連の、不良青年たちに援けられて、信之は、辯護士會館の方へ引き返した。藍碧の夏の空が、眼を射るばかりの輝きを失つて、地の厚い布か何かの染色のやうに、吃驚するほど美しい碧さで、額のすぐ上のとこ

ろに擴がつてゐた。

（綺麗だなア、綺麗だなア……）

と、そればかりを思ひ續けた。部屋にはいつて、含嗽を使ひ、手早く並べてくれた椅子の上に、誰かの風呂敷包を枕に横にされた。

親しい同業者の誰彼が集まつて來て、醫者を呼ばうかの、うちへ電話で知らせようかのと、いろいろ親切に云つてくれたが、信之は、普段に似げない強情を表はして、テキパキと斷りを云つた。彼は、法廷で倒れるまでも、今日の辯論には、どんなことをしても云ふだけのことを云はないでは措かない、と決心してゐたのだ。

信仰の堅い基督教信者で、日頃から藤代贔屓の老辯護士、桑木博士もはいつて來た。

「それアおよしなさい、斷然およしなさい。どうせ一度や二度の審理で片づきやアしないんだから、貴方のお考へをお述べなさる折はまだいくらでもありますよ。若し心がかりなら、あたしが聞いといて、あとで詳しく話してあげてもいゝし、何しろ今日はお歸んなさいよ。それア貴方むちやと云ふもんですよ」

「有難う」

信之は、青白い頰を赤らめて、「折角貴方がさう仰有つてくださるのですから、お言葉に從ひたいのは山々ですけれど……」

「何か、特別の事情でもあるんですか」

「いゝえ、なんにもありやしませんが」

と、益々赤くなつて、「どうか、この強情だけは通さしてください」

子供に等しい駄々をこねることを、心に恥しく思つたのだが、その陰には、今日法廷に立つて置かなければ、遂に永遠にその機會は來ないんだぞ、と云ふ豫感が、群がる薄雲のやうに漠漠と動いてゐたのだ。たうとう桑木も諦めて、その代り元來自分はこの事件に關係はないのだけれど、信之の附添ひとして、一緒に法廷にはいらう、などと云ひ出した。

「そんなにしてくださらないたつて、大丈夫ですよ」

先輩の厚意に、泪ぐましく動かされて、微笑ひながら信之は、あらぬ方へ眼を逸した。

「今日のあたしは、辯護士ぢアない、看護手だ」

などと、桑木は、ちつとも冴えない洒落を云ひながら、やがて定刻におくれること一時間ほどで、いよ〳〵開廷を知らせて來た二號法廷の方へと、殆ど手を把らんばかりに劬り導いて行つた。

普烈は、前の日信之から屆けて置いた仕立卸しの久留米絣に、キリリと袴をはいて、常よりは二つ三つ若く、と云ふのが實際の年恰好に、そして學生々々して見えた。被告席の木柵のなかに立つと、看守がそばから深編笠を取つてやつた。と、氣輕に振り向いて、辯護士席の信之の方へ、ニコ〳〵と笑ひかけた。いゝからそこへかけてろ〳〵、と云つた心持で、信之も頷き返した。それで、素直に、傍聽席の方まで振り向けようとしてゐた首をもとに戻して、椅子に腰をおろした。その活々と、然し愼みをもつた態度で、信之は、なかば肩の荷を卸したやうな氣がした。

四

合議室との境の扉がさつと開いて、内海裁判長を眞ツ先に、判檢事、書記、司法官試補がそれ〴〵着席した。

右手の窓そとの青葉は厚く深かつた。それゆゑ室内の光線は蒼ずんで、海底のやうな小暗さだつた。近くでミン〳〵蟬が鳴いてゐた。廊下の方の扉も明け放してあつた。人々が平氣でそこを往き來し、言葉を交してゐた。高い天井に反響して、些細なもの音や人聲まで、モリンモリンと唸るのも鬱苦しく、風は習とも動かなかつた。

氏名、年齢、住所、の訊問から、型の如く審理が始まつた。獨法を信之より二年先に銀時計で出た少壯俊敏の内海判事は、厚ぼつたい記錄の上に、その六尺近い體を猫脊に覆ひ被さり、一方の耳に故障でもあるか、被告が口を開くごとに、緣なしの近眼鏡の奥に鋭い眼を光らせながら、右の耳を突き出した。無骨の細面には、判官帽がよく似合ひ、正面に青葉の反射をうける高い額は、いよいよ理智的に蒼白んで、肅然として法の威嚴を思はせるものがあつた。

事實の訊問に對しては、始終普烈は、きつぱりと、「さやうです」「間違ひございません」と云ふやうな短い言葉でばかり答へてゐた。豫審の陳述を飜したところは一箇所もなかつた。詳しい說明を求められると、落ついた調子で、考へ考へ出來るだけ的確な答へをしようと努めた。たゞ與禰子に關することでは、二三度嗚咽のために口が利けないことがあつた。

「なんと思つて、與禰子を食堂までつれて來たんだね」

「怪我をしてゐるとは思ひましたが、暗いのでどの程度か分りませんでしたから、……それで、から抱きあけまして、……その時あんまり重いので吃驚しました……」

「重いので……？」

「えゝ、眠つて了つた子供が重いのとおんなじで、先方に抱かれようと云ふ心持がちつともないことが感じられましたから、これア……大變だ！……大變なことになつちまつた、と思ひまして……」

單衣の袖で、鼻の穴を押へるやうにしながら、せぐり來る涙を、一生懸命に噛みしめた。

「あすこの廊下の電燈は、ついてゐたか、消えてゐたか」

「はつきり憶えて居りません。ついてゐたとしても、そこでは、歩きながらには、顏を、……顏を見なかつたと思ひます」

「すぐ食堂へはいつたんだな？」

「えゝ、途中は、重い重い、とたゞそればかり氣になつてゐたやうに憶えて居ります」

「食堂には勿論電燈はついてゐたと……そこへ來て、それからどうした？」

「膝に擁へたまゝで、顏を見ました。……さうしたら、……さうしましたら……」

子供のやうに、聲をあげて泣き出しさうになつた。裁判長は、眼を記錄に落し、忙はしく頁のあちこちを繰つてみて、

「よろしい。……一體、與禰子が、マツケンゼンをお前に紹介したのは、いつ頃のことかね」

それでも、普烈は泣きやまなかつた。裁判長は、ぼかんとしたやうな顔つきを窓の方へ向けて、暫かに外の陽光に眼を休ませてゐた。その寛仁な態度の嬉しさに、信之の眼もおいつと潤んで來た。

五

かやうにして訊問は、一時間二十分の永きに亙つた。熱心な内海陪席判事の面上には、さすがに疲勞の色は見えなかつたけれど、首席判事の注意に從つて、午食のために少時の休廷が宣せられた。人々はどやどやと廊下に流れ出した。

「大丈夫だ！」

と、桑木は、信之の斜うしろに腰掛けながら、喜ばしげな調子で囁いた。「あゝ云ふ立派な被告の態度なら、大丈夫、安心なもんですよ。いくら八田君だつて、さうひどいことは云へないでせう」

八田檢事は、寸毫も假借するところのない、峻烈を極めた論告を以て鳴つてゐる人だつた。いつも必ず、判事の言葉の間は目をつぶつてゐ、被告が口を開くと急に懶うげな薄眼をあけて、斜右下に、トロリとした視線を注ぐか、時には、ふさぎつぱなしで聞いてゐるのが癖で、

そこには、誰の目にも、すぐ檻のなかの獅子を思はせるものがあつた。而も、一旦論告にかゝると、音吐朗々理路整然として、一劍霜に凍るが如き犀利味を見せるのだつた。「シシが八田」などと渾名に呼ばれる所以で、再び開廷されゝば、この獅子が吼りだすわけなのだ。

「さうですね」

信之は、いかに活氣づかうと努めてみても、神身の沮喪にうち克ちかねた。この上は、ほんの些少な精力でも貯藏して置くよりほかはないと思つて、言葉數を愼み、控室へ戻らうとする桑木に謝して、廊下の窓下に置き並べられた長椅子に腰をおろした。その時、すぐ隣の長椅子から、日に焦けた廣い額をいやにテラ／＼させ、ゆかたがけの胸をはだけた、四十恰好の品の惡い女が、ぢつと彼の方を見詰めてゐたのへ、ぴたりと視線がかち合つた。普烈が自首して出た翌々日、横濱石川町のごみ／＼した分り憎い露地の奥に、やつとのことで尋ね當てゝ、ほんの四五分の對談で、なか／＼腹を立てない性分の信之も、そのしら／＼しい、冷淡きはまる態度に業を煮やして、「さう云ふ氣持でゐるんなら、とてもお話は出來ませんし、また無理にしたところで無駄なことだと思ひますから」と、嘘にしろ、「まアどうぞおあがり……」とも云はれずに、門口での立話を、それできつぱり打切つて歸つて來た、——その母親のおかねだつた。彼方では裝の變つた信之を、はて、見憶えのある男だが、と思つて見詰めてゐたのに違ひなかつた。

（やア、有繫に出かけて來たんだな……）

と思ふと、すぐ信之は、一月ほど前の憤慨も忘れて、微笑みかけようとした。が、その瞬間に、むかうでは、慌てゝ顏を背けて了つた。信之は、持つて行きどころのなくなつた笑顏へ、苦々しくも八の字をよせ、胸を屈めて、深く長椅子に凭りかゝつた。……ふと、氣がつくと、その容子を、子供に獨特の鋭さで、ぢつと見詰めて立つてゐる十一二の女の子があつた。あくどい色のリボンを卷いた、田舍くさい麥藁帽子の顎へかける護謨を、ぷくりとはしてゐるが、榮養不良らしく蒼黃色い頬から、口へ咬へ、それを舌の先でおもちやにしながら、鼻音で唱歌を唄つてゐた。微笑が、苦々しい不機嫌に變つて行く道程を、すつかり觀察されてゐたと思ふと、信之は、なんとなくその娘が憎らしかつた。自とさう云ふ眼つきになつたとみえて、破れ靴の踵で、クルリと背なかをむけて、

「おツ母ちやん、ねえ、おツ母ちやんてば……」

六

さう呼びかけながら、だらしなく股を割つて、肥つた體をもて扱つたやうに、ぐツたり長椅子に凭つてゐるおかねの膝へ跳びついて行つたところをもつてみると、その子は、普烈の胤違ひの妹に相違なかつた。さうは知れたが、信之には、どんな子柄だらうと、改めて顏を見ようとするほどの興味すら起つては來なかつた。そこらを往來してゐる見知りのない人々と全く同じ扱ひで、徒しく視野のはづれに蠢かせて置いた。

ふと、それほど無關心でゐられるものを、親身とし、妹としてもつた普烈のために、病苦をおしても刑の輕減に努めようとしてゐる自分と云ふものが、可訝しく顧みられた。目前、その肥つた婆さんが、卒中か何かでポツクリ仆れようとも、子供が自動車に撥ねとばされようとも、恐らく自ら手をくだしては、なんの[illegible]をもしようとはしまい。それだのに、普烈のためには、壽命を縮めることをも敢て辭さない氣持で、かうして乘りかゝつてゐるのだ……

（考へてみれア、我が儘勝手なもんだ……）

この反省はあつたが、然し少しも心苦しいとも

感じられはしなかつた。もと／＼彼は、普烈のために、努めていゝことをしてゐるとは思つてゐないので、自分がさうしたいからするだけの話だつた。善事の名に從つて、公平を期しなければならないやうな、さう云ふ理窟ぜめの心持では決してなかつた。それにしても、つい手のとゞきさうなところにゐる親きやうだいには、洟もひつかけないほどの冷淡さで、たゞ一筋に、當人の上にばかり心を使つてゐるのが、我ながら、不思議と云へば不思議な氣持だつた。

　やがて被告が、再び腰繩で牽かれて來た。と見ると、母親は、娘の手をとつて、のこ／＼と側へよつて行つた。

「それみなさい、云はんこつちやアないんだ。今度と云ふ今度こそ、親不孝の罰を思ひ知つたらう、この馬鹿野郎奴が！」

　蒼黑い頬の肉を、ブル／＼と震はせて、おかねは可怕い目つきをきツと深編笠に射つけた。可怕い、と云つたところで、幾歳になつても生の子ならば、これを可怕がらない筈はないと信じ切つてゐるやうな、「めえですよ、めえめえですよ」のあの目つきに外ならなかつた。

　編笠が正面に向き、ちよつと足が停まりかけたが、すぐスタ／＼と室内へはいるなり、普烈は、被告の席に泣き崩折れて了つた。看守に手傳はれて笠を取つてからも、兩手にしつかり顏を掩うて、――いつぞや信之の書齋で洩したところの、厚い革でも締めつけるやうな、グッグッ云ふ歔欷泣を續けてゐた。鏡に映すやうに、そこに波打つ氣持が、信之の胸へも映つて來た。それ故、不躾な母親のやり方に對しても、少しも腹は立たなかつた。――と云ふのは、人一倍勝氣な普烈として、勿論口惜しさは腸が九轉する思ひに違ひないだらうけれど、たゞそれだけの簡單さではなかつた。有合せの言葉で間に合せれば、「萬感交至」と云ふ氣持で、記憶を生じて以來の、喜びも悲しみも、恨みも懐しさも、愛執も憎惡も、ありと有らゆる心持が、大きなうねりにもちあがつたと思ふと、忽ちどッと岩へ打ちつけ、飛沫をあげて碎け散つたのだ。子が親にもち得る限りの感情を、一つ殘らず、一瞬間に噴きあげた火柱なのだ。

（泣け／＼、泣け／＼！　そのなかでお前の靈魂が丈夫にされるんだ、堅くされるんだ！　泣け泣け、もつと泣け／＼！）

　信之は、心のなかでさう叫び續けてゐた。

七

　再び開廷された。大きな風呂敷包をといて、黑褐色に血塗られたさま／＼の證據物件が、机の上に擴げられた時には、傍聽席は一時にざわめき立ち、うしろの者は延びあがるやうにして眺めやつた。人ひとりの命を斷つた短刀は、豫審の陳述によつて、氷川神社の森の下から發見された箱にをさめてあつた。拳銃は血に錆びてゐた。與禰子がそれから毒を仰ぐと叫んだと云ふコップも現はれた。紺霜降りの背廣が出て來た。中で最も凄慘をきはめたのは、マッケンゼンのホワイト・シャツだつた。一面血痕の附着した、と云ふ程度ではなかつた。下半分を、ドップリ染壺へでも浸けたやうになつてゐた。藤代家の湯殿で、普烈が脱ぎ捨てたのを、人手を借りずに信之自身で風呂敷包にしたシャツやズボンもそこへ示された。――被告は、問の言葉に從つて、一々ちよいと目をあげるだけで、すぐ下を向き、それに相違ない由を答へた。で、調は簡單にすんだ。

　いよ／＼、獅子と呼ばれる檢事の論告に移つた。まづ、被告平常の行狀について觀るに、その筋の注意人物で、既に權藤の外人殺し事件に際しても、有力な嫌疑者として戸部署の手に拘留された事實もあり、微罪ながら三四の前科もある、金箔つきの不良兒で、犯罪的傾向は

十二分にこれを備へてゐるものと見なければならない。即ち、こゝに犯さざればかしこに犯す質の人間で、いつかは法の制裁に會ふべき過去の動因は、決して輕視すべきでない。今回の犯罪の原因にしても、遠くして姦通事件であり、近くしてこれが發覺である。姑く溯つて、この有夫姦の事實を檢するに、被害者ジェムス・マッケンゼンは、溫良の紳士であつた。事件發生の一月ほど以前から、兩人の醜關係については、薄々と云ふ程度以上に察知してゐたにも拘らず、堪忍大度、よく憤りを抑へ、屢意を言外に託して妻與禰子に警告するところがあつたのは、豫審に於ける被告の陳述に依つて明かである。而も被告は、その溫情につけ入り、圖々しくも、納戸の押入のなかに起臥し、巧に人目を避けて不義の關係を續けてゐたのだ。その大膽な態度は、全く自暴自棄的であつて、いざと云ふ場合には、相手を殺害するくらゐの覺悟に、平常これを胸に藏してゐたに相違なく、それ故にこそ、身邊必ず兇器を携へてゐたのだ。譬へて云へば、爆弾が、導火線に火の點ぜられるのを待つてゐたやうなもので、殺害の意志は、犯行に先だつ旬日から、旣に暗々裡に被告の心にあつたものと看做すべきである。

から云ふ調子だつた。犯行に就いても、主人の不意の歸宅を知ると、こゝにいよ／＼平常の殺意を堅めて、外部から錠の卸してあつた襖を自ら蹴倒し、脱兎の如く衝いてかゝつたものに相違なく、その際被害者は、自衞のために拳銃を放つたのだが、恐らくはそのとき既に第一の刃傷をうけてゐたため、手元が狂つて、被告の身にかすり傷さへ負はせることが出來なかつたのだらう。さもなくて、六疊の闇で、被告の陳述のやうに、狙ひをさだめてゐたとすれば、射損じる方が不思議だ。また與禰子は、良人の危急を見ると、有繫に傍觀するに忍びなくなつて、援けようとし、被告はその行爲に怒りを發し、且つは、生かして置いては後日發覺の基となるは勿論、法廷で不利の陳述をされるだらうことを惧れて、俄に殺意を生じ、犯跡を覆ふために、マッケンゼンの手に握つたまゝの拳銃を擬して、その引金を引いたものだ、と推斷したのだ。

八

で、結論に於て、これは、二人の人命を、暴力的に奪つたところの殺人だと述べ、而も被告平常の行狀から予るも、犯行の直接原因である姦通事件を考察するも、一つとして情狀の酌量すべきものがなく、最後に自首して出たとは云へ、それも他動的で、豫審の陳述には、未だ己を隱蔽し、法官を詐らうとする態度が顯著で、決して改悛の情に堪へないものとは認められない、これ等の諸點からして、無論死刑を求刑すべき案件ではあるが、たゞ被告の年未だ若く、獰惡なる害心と云ふより、思慮分別の不足から起つた事件と見ることが出來ないでもないから、この點を斟酌して無期懲役を求刑すると論告した。

代つて私學出の、若い辯護士が立ち上つた。見掛の貧弱さに似げなく、辯舌はなか／＼爽かで、まるで諳誦でもして來たやうに、滔々と述べ立てるのだが、論理は大ぶん曖昧だつた。

それはよいとしても、與禰子を毒婦型の女にして了つて、性的に缺陷のあつた良人に代ふるに、無邪氣な、そして健康な被告を以てし、淫慾を恣にしつゝ、宛も傀儡の如くに操つてゐたのだ、と云ふやうな强辯をされたのでは、苛烈の不愉快さは、たまらないものだつたに違ひない。信之は目を瞑つて、成可くそれは聞かないやうにしながら、自分の考へを纏めて置かうとかゝつたが、手足が震へるほどの亢奮のために、なか／＼さうはいかなかつた。

「まづ最初に申しあげて置きたいのは……」
立ち上ると、信之は、まづかう口を切つた。
「被告と私とは、年齢こそ大ぶん隔つて居りますが、友達でございまして、この事件の辯護に立ちますのに、私が必ずしも公平ではあり得まいと云ふことでございます。然し、人を裁くにあたつて、誰が絶對に公平であり得るかを考へてみますと、正しき裁斷を仰ぐ上から申して、私の位置は、被告にとつてではなく、法廷にとつて、幾分有利であらうとも、決して有害ではあり得ないことを信じて、敢て自らこの事件の辯護を願ひ出たわけでございます。尚もう一つお斷り申して置きますが、私は刑事の法廷に辯護士として立ちますのは、これが始めてでございまして、一向に慣例を存じません。どうぞ法にかなはないところがございましたら、どん／＼お叱りくださいますやうに、豫めお願ひ申して置きます。
一被告西山普烈は、世に謂ふ不良少年でございます。賢明なる豫審判事の調書にも、可なり詳しく彼の生立は記載されて居るやうに思はれましたから、私から屢くは申しあげません。ただ一言申し添へたいのは、總ての不良少年がさうであるやうに、被告も亦、人の世に誠實があると云ふことを知らずに育つた哀むべき人間の一人だと云ふ點でございます。餘事を申述べるやうですが、一體不良少年と云ふものは、一種の病人だと考へます。幼時から、ひとの誠實が得られないとか、或は與へられても、何かの理由でそれに觸れられなかつたとか、さう云ふ原因で、遂に全く誠實を見る明を失ひ、世に誠實はないものと思ひ込んで了つた人間が、世に謂ふ不良少年の群を形造つて居るのです。つまり彼等は、誠實に對する不感症、とも云ふべき病氣をもつて居るのです。被告がさやうな性情に陥つたまでの徑路は、先程も御審理がありました彼の生立に就いて考へてみますれば、甚だ明かであると考へられます。
一ところが被告は、マッケンゼン夫人を愛して居りました、熱愛して居りました。これは、この事件に、重大な意味をもたなければならないことだと信じます。

九

「何故かと申しますと……」
信之もだん／＼氣持が落つくにつれて、云はうとしてゐることが、少しははつきりと摑めて來た。「人を愛すると云ふことは、誠實がなくては出來ないからです。何もかう申したからとて、[illegible]所謂人の道徳とか、[illegible]とかにかぶれて、愛と云ふものに、やたらに勿體をつけようとするのではありません。一體、私は「愛する」[illegible]に、[illegible]れるとか好きだとか云ふ[illegible]なのですけれど、法廷の威嚴のために、[illegible]な言葉を使つてゐるのでして、決してさうな文學青年じみた氣持から申すのではございません。また、なにも戀愛ばかり[illegible]してゐるわけではなく、[illegible]にだつて、[illegible]にだつて、凡そ人が[illegible]になれる[illegible]には、必ずついて廻るにきまつた[illegible]で……いや、その本氣になると云ふことが、[illegible]なのですから、いやに理窟ばつた倫理論なぞを、こゝでこねくり廻さうとしてゐるわけでは[illegible]ございません。卑俗な用語をお許し願つた上で申さうなら、普烈は、――いや被告は、[illegible]で[illegible]子に[illegible]れてゐたと云ふだけのことなのでございます。
「そんなことが、何故この犯罪に意味をもつか、との御不審もございませうが、それによつて私は、次のやうなことが考へられると思ふのでございます。即ち、彼を平常の行狀に觀れば、慥に誠實不感症の不良少年でございま

すが、與禰子に對する心持に於ては、――初めてやらう、くらゐの不良さをもつてゐたでせうけれど、その後だん〳〵本氣になり、與禰子の方でも眞面目に彼を愛する心持になつて居つたのでございます。事件の丁度一月ほど前だつたと覺えて居りますが、彼等――被告と與禰子との二人づれで、私のうちに參りまして、離婚訴訟の原因となるべき條件、その手續などに就て相談をうけましたが、その當時彼等は、萬難を排しても夫婦にならうと云ふ堅い決心を、私にうちあけて居ります。本題に關係のないことではございますが、與禰子の籍は、良人マッケンゼンの生國、亞米利加に送られて居りますので、あちらの事情に疎い私には、十分の返答も出來ませんでしたし、訴訟の勝負に就きましては、尚更なんとも豫測いたしかねましたから、有體にそのやうに申し聞かせましたやうな次第でした。然しいよ〳〵訴訟の決心がきまつたなら、その手續だけのことなら、自分が引うけて、解らないところは先輩に相談してでも提出してあげようから、遠慮なくさう云つて來るがいゝ、たゞ、どつちみち一年やそこらは、無論かゝるものと思はなければなるまい、と、ほんの一應の、常識的の氣持からですが、多少諫止する氣持を含めて申したのでございます。ところが、その、私のいゝ、たよりない返事で、二人ともすつかり悄氣てしまひまして、與禰子などは、初對面の私の前で、クス〳〵泣きだしたりするやうな始末でして、益々私は意外の感にうたれたのでございます。何しろ男は、まだ二十や二十一の、氣持の落つかない、而も名うての不良少年ですし、女も、どう云ふ事情からかはまだその當時知りませんでしたが、外國人の女房になつてゐるくらゐでは、さう清純な娘時代を送つたとも考へられませんでしたので、もつと、ウワ〳〵した、寧ろ惡魔主義的な、ほんの一時の出鱈目だらうと思つて居つたのです。で、私は、始めてその眞劔さに撃たれて、深く自分を恥ぢた次第でございます。

十

一申しあげれば、まだいろ〳〵の事實もございますが、たゞこの一事について觀ましても、不良兒西山普烈には、立派に心の疵があり、該事件の直接動因たる有夫姦が、必ずしも無賴、破廉恥の行爲ではなかつたことを證するに足ると存じます。

「もとより姦通は、法の禁ずるところであり、善良なる風俗を害ふ社會惡の一つであることは、論をまたないのでありますが、これを貫くに誠實を以てするならば、一路精進の道として、當事者にとつては、善惡を越えた、無上の心境と云はなければなりませんし、從つてまた第三者としても、無上正眞の道にいそしむ彼等に對して、敬愛の念を抱くべきだと信じます。とは云へ、法のこれを罰するは當然のことでございます。法に觸るゝところに、精進の一路を見出した彼等には、無謀か、不用意か、意志の薄弱か、常識の不足か、さもなければ強烈な覺悟あつてか、靜に自ら省る時が來たならば、必ず何かしらもの足らなく感じられるところがなければならない筈です。最も立派な場合、――巖のやうな覺悟を以て臨んだ場合ですらも、覺悟と云ふ心境が、それ自體弱者の強みでありまして、決して勇往邁進の決意と混同すべきでないことも、やがては悟らなければならない筈です。一國の法が然く掟するならば、これによつて罰せられなければならないのは勿論ですし、[illegible]省の暁には、自己の心でも、決して萬全上乘の道だとは考へられないでせう。にも拘らず、褒むべく、稱ふべき至醇無二の[illegible]實あつて存するならば、彼等は既に善惡

の彼岸に立つてゐるものと、私は感じてゐます。以上申し述べました如く、私は必ずしも戀愛至上論者ではありません。尙更享樂主義に溺れて居るものでもございません。たゞ人生に於て最も値打高く量られなければならないものが、誠實である、まごゝろである、と信じて疑はないところの、謂はば「誠實至上主義者」とでも申すべき者なのでございます。そして、下品凡骨のわれら如きにあつては、人の世の光りであるまごゝろを現はすのに、戀愛にでも依るよりほか、なか〳〵に精進の退轉を構へ得ないと思ふところから、我にもひとにも最上の愛をと希ふ心が深いのでございます。

「そこで本論に立返りまして、被告の與繭子に對する戀愛が、果して善惡是非の彼岸に置かれるほど立派なものであつたかどうか、につきましては、種々議論の岐れるところだらうと存じますが、私といたしましては、可なり立派な誠實を、そこに認めないわけには參りません。この點は、檢事の御論告に對して、飽まで異議を申し立てる存念でございます」

こゝで信之は、日頃の彼には、到底思ひ描くことも出來ないやうな、烱々たる眼光を、正面に「獅子の八田」へ射つけた。けれども獅子は、有名な、いつもの「眠り」から、眼を開かうともしなかつた。「もう一點は、犯行の有様について、檢事の御想像が、恐らく被告に對して最初から惡者であるとの觀念をもたれた爲めでせうけれど、甚だしく惡意に滿ちたものであつたと感じられますゆゑ、御參考までに、私の想像を申し述べて置きたいと存じます。特に想像と申しますのは、勿論そこにたつた一人の目撃者もゐなかつたからでして、このことは、恐らく被告にとつて、千載の遺憾ではなかつたらうかと、私はさう感じて居るものでございます」

十一

それから信之は、豫審廷に於ける被告の陳述について、心理的な解説を與へた。丁度バラバラにこぼれてゐる珠に、紐を通して、一かけの珠數に仕あげるやうに、一つ〳〵の事實の間に、一貫した氣持の經過を見出さうとしたのだ。それは、當の普烈にさへ、意識されてはゐなかつたやうな深みへまで、微細を極めて潜入して行つた。惡意の眼、——疑ひが、必ずしも鋭いものではなくて、好意の眼、——信をもつてすれば、却つて思ひがけない捷徑から、ヒョイと眞實のそばへ出て了ふものだ、と云ふことを思はせるに十分だつた。けれどもそれを押し進めれば、警察官より、犯人たちに好意をもてよ！ 惡人を愛せよ！ と云ふことにもなつて來る。而も、聖賢としてこれを言はないものは一人もないくらゐで、俗耳にさへ、今では鼓にたかられたほどの[illegible]しい臭ひもなくなつて了つたのだ。それほど平凡な常識の一つなのだ。だから、傍聽人の多くは、あの辯護士、ちつと甘いぞ、と思ひ、罪を糺し、惡を罰する法廷に、上御一人の名によつて事を行ふ法官たちには、多少の差はあれ、反感めいたものを感じさせた。

信之に從へば、普烈の行爲は、大半正當防禦だと云ふのだつた。押入のなかに人ありと知つたマッケンゼンが、そこに拳銃を擬へてゐたとすれば、襖が蹴破られるまでに、それを差しつけてゐない筈はない。銃口を眼前に見、こちらも兇器をもつてゐて、誰か殺意を生じないものがあらう。殺されるか殺すか、その一つを選まなければならなかつたとすれば、聖賢と雖も從容として前者に就くことは容易でない。まして無謀短慮の普烈が、身を挺して相手を刺したのは、最も自然なことで、[illegible]のやうに、情狀酌量すべきものがないとは、決して考へられないのだ。與繭子の死に就いては、一層

目撃者のなかつたことが、被告の不利益になつてゐる。と云ふのは、甚だ突然な出來事だつたに違ひなく、その點に關して普烈の答辯のはつきりしないのは、罪を覆はんがためではなくして、全く彼自身にも、本當のことが判らないのだと思ふ。が、彼の語るところに據つて想像すれば、最初、毒杯を仰ぐと云つて、良人の手によつて愛人の胸板に擬せられてゐる銃口を、一時たりとも他へ轉じさせようとした與禰子が、それの效を奏しないことを知ると、いきなり身を躍らせて、良人の右腕へ跳びついたのだ。引金を引く意思もなく、手に力がはいつて、第一彈が發せられた。それは丁度この慘劇の開幕に、相圖の鈴を鳴らしたやうな結果になつた。すぐ普烈が手もとへ飛び込んで一擊のもとにマッケンゼンを斃す。右腕に武者ぶりついてゐた與禰子も、勿論のこと一緒に轉がる。相手が既に抵抗力を失つたことを知ると、普烈は立ちあがつて、兎も角も與禰子を別室へつれて行かうとして、名を呼び、或は抱き起さうとしたのだが、この時あたりの驚愕に、彼の女の精神は朦朧としてゐた。自分が抱きついてゐる體、——良人と、愛人普烈とが混同錯雜して了ひ、うしろへ來て自分を引き起さうとしてゐる者を、誰か新しい侵入者だと感じたのだ。さもなければ、與禰子が頻と、誰かゐる、誰か來てゐると叫んだと云ふ事實の説明がつかない。それは普烈にとつては、想像するだにたまらない、厭な、薄氣味惡い言葉だつたに違ひないのだ。それで、一層あせつて、彼の女を、屍體から引き離さうとする、離れまいとする、その最中に第二彈が發射されたのだ。

十二

誰の指が、誰の力が、引金に加へられたのか、それは恐らく神よりほかに知るものはなからう。拳銃をもつた手に、與禰子が武者ぶりついてゐる、そこへまた、それを放させようとする普烈の手が絡みついて行つて揉み合ふうちの出來ごとで、暗さは暗し、全くもの丶拍子と云ふよりほかはないのだ。これを故意による殺人と觀るのは、峻嚴と云ふよりも、寧ろ惡意を含んだ曲解である。もしさうとすれば、以後與禰子の屍體を食堂へ運んで行つたりしたことは、なんのためとも解釋のくだしやうがない。殆どの事實は、一聯事件が偶發的であつたことを物語るものだ。彼には何等の豫想も覺悟もあつたわけではないのだから、たゞとんでもないことをして了つた、と云ふことだけが、ぼんやり考へ續けられるきりで、自分をどうしていゝのか見當もつかなかつたに違ひなく、本能的な恐怖からその場を飛び出して、四日の間あちこちと隱れ歩いてゐたのだ。而も偶然の機會で自分と出會つた時分には、もうすつかり自首の覺悟はついてゐたので、二三の新聞が傳へたやうに、自分が夜通しで敎訓して、やつと檢事局へ同行することを承知させた、といふやうな事實は根もないことである。それについて、麻布からの自動車の中で、またはうちへ歸つてから取り交した會話の内容を、信之は詳しく述べたて、要するに今の普烈は、誰の前にも頭をさげたくつてたまらないやうな、恐く謙虛な心持の人となつてゐる。後悔から、自ら贖罪を望んでゐる彼の誠意は、十分に認めてやつて貰ひたい。それは決して噓ではないのだ。

以上述べ來つた自分の理解に從つて刑期を定めるならば、十年を上越すわけはないと思ふ。なほこの先とも、被告の人となりは、入念に調査して貰ひたい。たゞ一圖に、不良少年と云ふ概念に道けられ、事實の闕隙に泥んで、最初から最後まで一貫してゐるところの、涙ぐましいほどの誠實を見落さないやうにしてや

りたいものだ。

濟々一時間に亘つて述べ終り、席についたと思ふと、信之は、その腰をおろす動作から引き續いて、すうッと非常な速さで、地の底へ體が落ち込んで行くやうな氣がして、はッとして眼をつぶつた。……それきり覺えがなかつた……。

……十五分ほど後に、控室の方で彼は正氣に返つた。桑木博士がゐた。醫者らしい若い男がゐた。小使がゐた。うしろの方から鈴江も顏を差し出してゐた。

「大丈夫」

云はうとも思はないのに、口がそんな風に動いた。どこがどうとも云へないやうな、體全體の苦痛で、すぐまた目をふさいだ。

「今ぢきに奥さんが見える筈だ」

桑木の聲が云つた。その不安な響きが、然し不思議に彼を不安にはしなかつた。却つて、微ながら、可笑しい氣がしたくらゐだつた。(こんな、なんでもない、ちよつとしたことで、女房を呼ぶなんて、桑木君もよつぽどどうかしてゐる……)そんな風に考へられた。さうかと云つて(餘計なことをしてくれたもんだ!)と云ふほどの腹立にはならなかつた。たゞその狼狽を、好意をもつて「フ、ム」と輕く笑ひたいやうな氣持だつた。

法廷に出る前に、血を吐いたことを、信之は綺麗に忘れてゐた。若い時分に時々やつた腦貧血だらう、くらゐに考へてゐたのだ。

十三

「桑木さん」

信之の心は、けれども、なんとはなく寂しかつた。青池に泡をあげる活氣のやうに、ブツブツと囁き交してゐる人聲が、陰氣くさくつてならなかつた。「どうぞもつと大きな聲で話してくださいな」

一時にパタリと話聲がやんで、深夜のやうな沈默が來た。油蟬の聲ばかりが、葉越の青い光線に篩つて流れ込んで來る。

「今すぐ奥さんが見えます」

暫くして桑木が、もう一度同じことを云つた。それでもまだ信之は、自分の容態について、少しも不安は感じなかつたが、然し寂しさから、一人でも餘計そばにゐてくれる人のふえることは嬉しかつた。

「岡島さん、……鈴江さんがゐましたね?」

「えゝ、こゝにゐますよ」

近づいて來た氣勢に、信之は薄眼をあけてみた。ひどく眞面目な顏をしてゐるな、と思つた。

「でも、今日はよく出かけて來たね、大丈夫だ、普烈のことはもう大丈夫だよ」

「さうですか。どうもいろ〳〵……」

「君は、無論あの人の阿母さんを知つてるんだらうね」

「えゝ、今朝も偶然に電車で一緒でした……」

「安心するやうにさう云つてやりたまい。軍属にはいらうとどうしようと、あれはもう大丈夫だよ。あれならもう、どこへ出したつて立派なもんだと思ふよ。君たちもちつと喜びたまい」

それが、冗談どころか、大眞面目なので、鈴江も、氣を撃たれて、

「……えゝ……」

「一緒に來てゐるのはみんな、仲間だね?」

「えゝ」

「みんなも本氣になるんだね、本氣なら何をしたつて立派だからね」

「えゝ」

「君には、僕アすまなく思つてる……、決して本氣とは云へなかつたからね……」

そこへ、英吉利風に髯を刈り込んだ、やつと二年前に學校を出たくらゐの醫者が、顏を突き出した。

「あんまりお話をなさらないやうに……」

その見覺えのない顏を、信之はぢつと見詰めてゐたが、

「一體、あたしはどうしたのです？」

「いえ、なに、大したことではございませんが、出來るだけ安靜にしていらしつて頂きたいんです」

「話もいけませんか」

「えゝ、まア出來るだけは……」

「さうですか」

ひどくつまらなくは思つたが、强ひて爭ふほどの氣持もなかつた。そのまゝ目を閉ぢて了つた。ぢつと落ついてみると、胃のあたりが妙に重ッ苦しく感じられた。

「さうだ、先刻吐いたんだつけな……」

始めてそれを思ひ出した。抱き擁へられて中庭を過る時に、顏のすぐ上に感じられた、青さも青い空の色が、つぶつた眼のなかに美しく擴がつて來た……。

ちよつと、人聲と足音とが亂れ騷いだ。

「あなた！」

園子の聲だつた。思はず、兩手を差し伸べた。しつかりとそれが握られた。

「うちへ歸らう」

はつきり眼を開いて、信之は、一言さう云ふなり、また意識が朦朧として行つた。

都を離れて

一

兩側の店々の明るい電燈は、晝をあざむくばかり、押し合ふほどの人通りに、ゆかたの白さが青ずみ、白粉は浮び、ものゝ影が幾重にもかさなり動いた。噎返りさうな人いきれだつた。

大阪、心齋橋筋の夏の夜の雜沓のなかを、三好龍夫が、ひとりぶら〳〵と、店舖よりも、往き來の人々の姿態風俗に好奇な眼を光らせながら、南へ向いて歩いて行つた。御召セルの背廣に白ズボン、白靴、ぢみなネクタイを蝶結びにして、茶紐のついたケーンを提げたところは、東京にゐた頃よりも、人物は數等立まさつて見える。夏やせか、やゝ面やつれしたのも、年齢よりはふけさせて、人なかに出ても、少しは口の利けさうな若者を思はせた。生活のつかれは、けれども、なんとなく彼の目の色を沈ませ、皮膚を脂ぎらせてゐた。

眞つ直に戎橋を渡り、一現茶屋の並んだ裏通りに切れ込んで、〇〇座の樂屋口に立つた。幕間とみえて、大道具の立働く物音が騷々しく響いて來た。

「瀧十郎さんはまだゐますかしら」

お辭儀をするにも及ぶまいし、さうかと云つて帽子を被つたまゝでもすむまいか、と云つた氣持に裏切られながら、左で麥藁帽をとり、横撫に額の汗をハンケチでふきとつてゐる三好を、どこも無愛想にきまつたやうな、樂屋番の爺が、じろりと睨据ゑて、

「なんぞ御用だつか」

「えゝ、まだ歸らないんならちよつと……」

「あんたはんは？」

「ちよいとこれを……」

内衣嚢を探つて、革の名刺入から一枚ぬいて渡した。大阪〇〇新聞演藝記者の肩書を見ると、それでも爺は、不承不精ながらも、いくらか態度を改めた。

「ちよつとお待ちなはつて……」

丁度そこへ通りかゝつた男衆らしいのを捉へて、部屋への取次を頼むと、役者のお仕着ゆかたの胸をはだけて、破れ扇子の風を入れた。

「どうもお世話さん」

ゐさへすればもうこつちのもんだ、と、久し振りに懷しい舊の友に逢ふ嬉しさに、ついそんなお愛想の一つも云つてみる氣になつた。け

れども爺は、聞えなかつたのか、聞えない振りをしたのか、今度は衣紋をぬいて、禿頭の上から背なかへと風を通り、顔をそつぽに向けてゐた。三好はぐつと癪にさはつたが、強ひて寛仁大度を示さうとして、眞ッ赤に突きあげて來た頬のほてりを隠すやうに、ハンケチで撫で廻して了つた。

頭取部屋の前には、この暑中をも厭はず旅稼ぎに出た若手一座の座頭、市川何某が、頁の扮装で、巻煙草を片手に、背丈に扮した丈の低い役者と、何やら冗談口を利いて笑つてゐた。さう云ふ樂屋の空氣も、彼には久し振りだつた。

□□新聞に職を得たのは、ついこの一週間ほどで、出奔以來の半年ほどと云ふもの、活動寫眞には時折出かけたけれど、芝居とはまるで縁を絶つてゐた。たゞの一幕も見なかつた。――彼にとつて、芝居は愚みごとではなかつた。勉強でもあり仕事でもあつた。それほど大切なものだけに、見るくらゐなら、片つぱしから一軒残らず通ひたくなるし、なけなしの財布でけちけち見るくらゐなら、いつそ一幕も見に行かない方が氣持がいゝのだつた。

二

新聞社に職を得てからはなほさら、自分の財布で芝居を見に行くことが馬鹿々々しいやうな氣もし、また暑い盛りに碌な芝居もあいてはゐなかつたので、演藝記者と肩書を刷り込んだ名刺まで出來あがつてゐた今日でさへ、まだつひぞどこの座へも足を踏み入れたことはなかつたのだ。けれども、或る若手の一座に加はつて、市川瀧十郎が下阪してくる由を社内の噂話に聞いた時から、三好は、我ながら氣恥しいほど子供々々した嬉しさで、待ち々々相見る日の近づいて來るのを樂み待つてゐた。――都を離れてから、彼は、言葉のほかにいきなり心と心とで語り合ふことの出來るやうな友達に飢ゑ切つてゐた。

一大した御機嫌ね―

下宿屋の貧しい食膳に向つて、堅く一本きりときめられてゐる晩酌に、馬鹿々々しいほどお喋りになり、笑ひ易くなつてゐる内縁の良人を、嬉しさの裡にも輕い皮肉を罩めて、美津枝が揶揄つたのは、社でその噂話を聞いて歸つたと云ふ夕方だつた。

信之のもとから持ち出した金も使ひ果し、僅かばかりの友達の間を食ひ倒して歩いたりした揚句、いざとなればどこかのカフェエででも美津枝を稼がせれば、なに、さう急に二人の口が乾あがるわけではなし、と自棄に近い氣輕さから、却つて惡度胸が据わつて、紹介してくれるものがあつたのを幸ひ、四月、二人で下阪に轉げ込んだのだつた。そこへ、半月ほど前に、思ひがけない信之からの手紙が、出奔當時まづ頼寄つて行き、三四日するうちに、すぐもうそこの細君と美津枝との間に醸された氣まづい感情が、延いては亭主同士のいさかひとなつて、夜ふけをも厭はず飛びだしてしまつた高槻にある會社員の、濱田の住居宛で、それに何枚も附箋が貼られて屆いて來た。不貞腐れたやうなその當時の三好の心には、恩人の名前が、たちまち反感と嫌悪との感情をもつて映つて來た。十中の八九までは、拐帯した金の請求だらうと、すぐそんな風に僻んだ讀りやうをしてしまつたのだ。日に焦け、さゝくれだつた疊の上に寝そべつたまゝで、忌々しげに封を切つたのだが、讀みだして二三行もいかないうちに、けれどもキチンと坐り直さないではゐられないやうな氣持にされて了つた。

信之が云ふには、――僕のしたことは勿論いいことではない。然しつくづく考へてみるに、自分には少しも君を責めるだけの權威がないことを知つたのだ。若し自分が、心から、心の

心底から君を信用して、高踏社の會計一切を任せきつてゐたのなら、自分も立派な權威を以て君に臨むことが出來よう。怒るとしても、宥すとしても、そこに力があり、立派だけれど、自分の君に對してゐた氣持は、そんなしつかりと片づいたものではなかつた。中途半端だつた。前から薄々に勘づいてゐて、心ひそかに困つたことだと思つてゐながら、そのくせ事を好まない、と云へばまだいゝが、惡く云へば泰平を喜ぶ性分から、今に碌なことは起らないぞと云ふ豫感を押し殺し〳〵して、一日一日の安きについてゐたのだ。決して君を信用して放つて置いたのではない。信用なしに任せてゐたのは、自分のだらしなさを意味するのだ。そのだらしのなさが、一面君の惡業を促し立てたのだとさへも考へられないことはない。要するに僕としては、君の惡業に對して、一言の非難を加へる權威のないものであることを、その後自分で痛感してゐるのだ。

三

然しこれは僕の話だ、僕自身だけの話だ。

——と、信之の手紙が更に筆を轉じて續けるには、——だから、この同じ理由で、君が君自身の良心から放たれると云ふわけにはいくまい。君は君自身としての深い反省がなければならない筈だ。恐らくそれは、既に、君の心の裡に幾度となく繰返されたことと信じてゐる。たゞどれほどの密度と堅實さとを以て、君がその上へ脱け出して行くことが出來たかは、爾來君の消息に接しない僕には知るよしもないのだが。

そこで君が無斷で持つて行つた金に就ては、君に返さうと思ふ意思があり、それの出來る時機が來たら返して貰ふこととし、その意思がなければそれでもよいこととして、これ限り君と僕の間から擲つて了はうではないか。吾々の交誼が、たゞこの金の問題だけの爲に遮斷されてゐるのならば、只だ馬鹿げ切つたことだと思ふ。若しそれをほかにして、尙ほ且君が僕に消息しない理由があるのだとすれば、せめてその理由だけでも洩らして貰ひたい。だが、僕には、そんなことは有り得ないやうな氣がしてゐる。それで、突然この手紙を書くやうなことにもなつたのだが。

實は數日前、御池の□□新聞の社會部長平賀氏と面談する機會があつた。用談後の話の滑り具合で、さして改まらずに、君をあの社へ推薦することが出來た。今の君が、どこで何をしてゐるかもよくは知らずに、そんな話を持出したのは、第一には、知つての通りの僕のお節介な性分からであるが、この好機會を兎も角捕へて置かう、斷る分にはなんでもない話だから、と云ふ氣持だつたのだ。

若し君に□□新聞社で働いてみようと云ふ氣があつたら、御一報次第すぐ紹介狀を書いてあげるし、平賀氏の方へももう一度改めて賴み込んで置かう。同氏を、僕は大へん立派な紳士だと思つてゐる。この人の下に働くことは、決して君を惡い方へ導きはしまいと信じてゐる。心持のよい君からの返事を待つて——から云ふ意味の手紙だつた。暑さの最中にも、三好は皮膚が粟立つやうな寒さを覺えた。心がキリキリと引きしまつて、思はず泪が溢れて了つた。

十日もすると、忽ちにして三好は、大阪一流の□□新聞社々員だつた。そこでは特別の事情あるもの〻ほか、出社の際には和服が禁じられてゐた。支度金のやうな意味で、前拂に渡された月給のうちから、三好は、どこへ出て行つても恥しくないやうな洋服を、半金月賦で註文した。名刺も刷れて來た。

生活の優越から、口で云ふほどには、芳津枝も、カフヱエ勤めを可厭がつてゐたわけではなかつたが、それをしないですんだと云ふ意味よ

りも、久し振りに理髪店へ行つて、行詰の洋服を着て、ステツキをもつて、十九圓五十錢のキツドの半靴をはいて、始めての出社に、うす汚い野田あたりの下宿屋の玄關を立ち出でて行く姿には、乾父の妻女が、あの幕切れの喜びをそのまゝ、居ても立つてもゐられない思ひだつた。彼の女は、一生、信之のゐる方角へは、足を向けて寢まいとまで思ひ定めたものだ。

この幸福は、二人が同樣の、やゝ頽廢しかけてゐた基調をも一變させてくれた。なんとなく引きしまり、活氣づいて來て、貧しい食膳にも、一本かぎりの銚子にも、幸福の明るさは光り輝くのだつた。

四

「あゝ、大した御機嫌さア……」

と、三好はわざと、美津枝の皮肉を輕くうけ流して、ぐツと仰いで盃をさし、「まア、君一つどうだい」

「あたし？」

いつにないことだけに、すぐには手を出さずに、その代り銚子を取りあげて、「あたしよすわ。それよりまアお酌でもしませう」

「ほんと云へば、俺より君の方が嬉しい筈なんだから、お祝のつもりで、ひとツたらしても惜しいやつを、特に一杯獻ようといふのさ」

「あら、どうして？」

「どうしてではないだらう。なんなら一ぺん首尾をしてやらうか」

「執念ぶかい方ね、まだ疑つていらつしやるの？」

この正月、夜更に、赤阪の待合に連れ込まれた翌る日、血相變へて三好に詰問された時には、美津枝も一生懸命だつた。醉つたまぎれとは云ひながら、どこまでも瀧十郎の行くと云ふところまでついて行け、などと自分からつまらない難題を持ち出したりして、非は十分三好にあつたのだが、そんなことには觸れようともしずに、ひたすら身の潔白を申開かうとした。いかに事細かに話を訊いても、三好として信じ憎い根本は、彼の女が決して誘惑に對して頑強ではあり得ないことを、自分自身の經驗で知つてゐる點にあつた。瀧十郎は、誘惑者として、自分以上の魅力をもつてゐなければならない筈だ。それに、現に自分には許してゐて、彼に許さなかつた、などと云つたからとて、到底そんなことはあり得ないと思はれるのだつた。うまく云ひくるめられて、あゝさうか、矢つ張り役者よりは俺の方がよかつたのか、とすつかり甘くなつて了ふくらゐなら、寧ろ好きな女の體が、友達のために犯されたと云ふ事實を知つてゐた方が、よつぽど恥しくないと感じられたのだ。その勢で、詰問されたのだから、たまつたものではなかつた。然し眞實の前には、いかに執念深い疑ひも遂には、溫みとけないわけにはいかない、以前に數倍した愛情、——と云ふより、新に肇て生じた戀愛が、俄に堅く二人を結び、遽の出發となり、さうして今日までまづまづ平和な日が續いて來たのだ。その間にも、たまには、揶揄ひ顏に、赤阪の待合の名や、そこの狹い部屋の名や、瀧十郎の紋どころや、いろ〳〵三好の口から持ちだされたけれど、いつも美津枝は、そのよしない冗談を嚴しく拂ひのけてゐた。いゝ氣になつてうつかり調子など合せて、冗談のうちはいゝとして、若しまたひよつと本氣にでもなられたひには……と、いつぞやの責苦ではよく〳〵懲りてゐたものとみえて、その話となると、笑顏ひとつ向け返さないやうにしてゐた。が、その眸の二人は、幸福に光り輝いてゐた。ちよつとしたことくらゐでは、その光りは翳りさうにもなかつた。それに第一には、もう半年の上も經つてゐた。「執念ぶかい方ね、まだ疑つていらつしやるの？」と、言葉では悉

く否定的だつたけれど、その笑ひながらの調子に、嬉しさうな表情に、いつもの一撃のもとに揶揄ひのけるやうな手嚴しさはなかつた。それどころか、やゝ挑戰的にさへ響いたのだ。

「フン」

と、三好は、酌をさせてゐる盃のなかを見込んだまゝ、鼻のさきで笑つて、「せめて、疑ぐられてゐるだけでも嬉しいか」

「えゝ、さうよ。火のないところに煙はたゝないつて云ひますからね」

相手の言葉の毒々しさに吊り込まれて、つい美津枝もそんな言葉を投げ出して了つた。

五

揶揄に報ゆるに揶揄を以てしてゐるのだと云ふことは解つてゐたが、それでも瞬間的に、三好は、飯のなかにガチリと石を噛み當てたやうな顏をした。

「へーえ、火があるのかい」

行きがかり上そんな風に呟いた時には、けれども反對に、虚構の疑心などはさらりと消え、それだけにまた面白くも可笑しくもない白々しさに冴え返つた氣持になつてゐた。

「それアさうでせう、兎も角もよる夜中に、たつた二人ツきりであゝ云ふうちへはいつたんですからね」

美津枝には、遽にこの言葉の遊戯を捨てるに忍びないやうなはしやぎ切つた上機嫌が來てゐた。「而も役者と若い女と……」

「三面記事的に云へば、それが絶世の美人だつたつてね」

大人げなく、今更不機嫌にもなれず、三好はどうにか笑つて了はうとした。

「さうよ、三面記事的よ、あなたがいつまでもそんなことを云つて揶揄ふのはね」

「さうして女は大抵三面記事しか讀まないもんだよ。丁度君が、口では可厭がりながらも、揶揄はれゝば、矢つ張り相好を崩して嬉しがつてゐるやうなもんでね」

自分がうけただけの不愉快は、なんとでもして、その相手へたゝき返してやらなければ氣のすまない三好だつた。輕くは云つてのけたやうなものゝその、「相好を崩して嬉しがる」には、可なり毒々しい響があつた。

「あゝさう……」

美津枝はつんとして、眼を暮殘つた空の色へ溶け込ませた。ほんとに氣が知れないつちやありやしない、馬鹿にさばけて出るかと思ふと、急にまたねち／＼した意地惡根性になるんだもの……、と男の氣性に不滿を覺え、漠然とした寂しさに鎖されかゝつてゐた。

有繋に三好には、相手ばかりを惡く考へるわけにはいかなかつた。反省は、彼を、あの胸わるい自己嫌惡に突落した、その惡心の適藥でもあるかのやうに、手酌で二三杯たて續けにあふりつけたが、

「兎に角、一ぺんどこかへ飯でも食ひにつれてかなけれアならないが、その時には、是非君も一緒に行くんだね」

と、斷ることを承知で、寧ろそれをあてに、いかにも實のいらない言葉を並べてみた。氣まづい沈默の、ほんの場ふさげだけのものだつた。

「いやよ！」

調子がちよつと荒々しかつた。

「何故さ」

「何故だつていやだわよ。斷然ごめん蒙るわ」

「行けよ。假令何事もなかつたにしろ、兎に角一緒に……」

「もう澤山よ。うつかり揶揄ふと、また顏の相を崩して嬉しがることよ」

「なにもさう根にもつて憤らないだつていゝぢアないか。俺の方ぢアなんにも拘泥らずに、氣輕に誘つてるんだから、君も氣輕にうけたらい

いんだ」
「えゝ、あたしだつてなんにも拘泥つてなんぞゐやアしませんけど、あたしなんぞが御一緒に行つたところで、お邪魔になるばかりで仕様がないでせう」
「邪魔になると思やア誘やアしないよ」
「でもなんでもあたしはよします」

六

その調子が、ゆきがかり上、思はず肝走つた。
三好は、暫く口を噤み、改めてじろりと美津枝を睨め据ゑた。
（假令口が裂けても、二度と再びこの女の前で、瀧十郎のタの字も云つてやるもんか！）
そんなことを考へてゐた。まるで、美津枝の憎みにと思つて、好意から持ち出した話題が、なんの愛想ツ氣もなく、見てゐる前で蹴かへされでもしたやうな感じになつてゐたのだ。（誰がくそ、下手に出てゐれアいゝ氣になりやアがつて、どこまでつけあがるか知れたもんぢやアない。これだから女は嫌ひよ）
感情が緩和されたあとにも、その決心だけは殘つた。一座へ乗込んで來る日どりや、演題などを報じた新聞が、二人の間に亂らばつてゐて、それが目について仕様のないやうな時には、なんとなく不機嫌にさへなつた。いよ／＼浦田に着いて來るといふ朝は、個人としても、演藝記者といふ職責から云つても、是非ともプラットフォームに待ち構へてゐなければならない筈の三好だつた。ところが、前の晩に、社の先輩二三人に誘はれて、始めての打ちとけた酒席につらなつた。自腹では大したことも出來なかつたけれど、信之はじめ高踏社同人たちのおんぶでは、屢々一流の待合で一流の藝者と接して、兎も角場うてだけはしなくなつてゐたし、どうかした言葉のはし／＼に、花柳界好みの氣のきいた調子が滑り出るので、どちらを向いても知らない顔ばかりの、やゝ仲間はづれの觀は、ほんの歪が廻りだした始めの間のことで、すぐもう居心地よく妓たちに取り捲かれて了つた。
その、本場仕込の放蕩の匂が、妓たちによつて嗅ぎ出されたことで、三好はひどく滿足し、上機嫌にされた。武者修行の若侍が、旅へ出て始めての他流試合に、思はぬ手柄をたてたやうな得意さだつた。で、調子に乗つて飲みすごし、古綿のやうになつた體が、俥で野田の下宿屋へ送り屆けられたのは、もう午前二時頃だつた。それでも、翌朝瀧十郎が着いて來ることだけは忘れずにゐたから、七時までに起すやうにと、美津枝に云ひつけはかけて、ふと目をつぐんだ。
（へへ、誰がくそ……）
アルコオルで焚き出された興味者に、いつぞやの決心が、偶然にも持ち出して來たのだ。瀧十郎のタの字も云はないですむことながら、それに關したとあつては、一言でも口は利けないといふやうな、醉ツぱらひに獨特な正直さから、なに、起きようとさへ思へば目が覺めないことはない、と心に呟くや否や、着のみ着のまゝふんぞり返ると、忽ちもう高鼾で眠つて了つた。そして、その酣睡から覺めた頃には、一座の役者たちを運んで來た汽車は、かれこれ岡山近くまで走つてゐたのだ。
この失策で、三好は恐く氣を腐らせて了つた。その日に社へも出ずに、一日中から布團を引ツ被つてゐた。美津枝も、記者生活も、瀧十郎も、一生を投げ込まうとしてゐた演劇も、何も彼も一切合切の存在が呪はしかつた。じけじけした下宿の煎餅布團に包まれて、人生は、暗く味氣なくつまらなかつた。
翌日は重い足を、それでも社へ引きずつて行つた。出てみると、人生は決して濕氣臭いばか

りではなかつた。騒音だつた。目まぐるしさだつた。命令だつた。服従だつた。而も三好はケロリと上機嫌になつてゐた。××座は初日だつた。心斎橋筋には明るい人波がゆれ動いてゐた。

さうして、彼はいま楽屋口に立つて、久し振りの都の女に會はうとしてゐたのだ。

七

暫くすると、初から瀧十郎に附いてゐる男衆の大橋が、眞黒な顔を脂汗にテカ〳〵させて、頭取部屋の前にかたまつた二三人の役者のそばを、小腰をかゞめてすりぬけ、近づいて來た。

「おいでなさいまし」

職業的にもせよ、愛嬌笑ひをみせて、「漸くなりお目にかゝれるだらうなんて、旦那ともお噂して居りましたんで……。さアどうぞまア、ひどいので濟みませんが……」

と、そこへ直してくれたのは、脂と汚れで、印で捺したやうに足形のついてゐる古麻裏だつた。さうして置いてから、楽屋番の爺の方を振り向いて、ほんの體裁だけに、「ねえ、爺さん、もう少しどうかしたのはないのかね」

「いや、なんでも結構々々」

三好は慌たしく聲をかけ、半靴をぬぎ捨てると、汚れ腐つた草履を突ッかけた。あとへ廻つて大橋が、瀧十郎の名を貼つた下駄箱へ靴を收め、小走りに案内に立つた。

「やア」

「ようこそ」

「お目出度う」

「お目出度うございます」

通りがかりの知つた顔の役者たちとは、そんな風に初日の挨拶を交して、二階へあがり、すぐ瀧十郎の部屋へと來た。

「ゐるの？」

「いえ、たゞ今お風呂で、すぐあがつて參りますから、どうぞ暫く御休息なさいまして」

「ぢアもうからだはあいちまつたんだね」

「へえもう……。ちよいと御免くださいまし」

茶を侑めるやうにと、小聲で弟子の若衆に云ひつけて置いて、すぐまた大橋は、忙しさうに上草履を突ッかけながら出て行つて了つた。

合部屋の三人のうち、一人はもう歸つたあととみえて、鏡臺の前がキチンと片づいてゐた。ほかの一人が、東京にゐる時の通り、市川左喜松だとは、いかにも女形らしい紅のはいつた座布團の模様だけでも知れたし、見知りごしの男衆たちもまご〳〵してゐた。その人々と時候の挨拶など交しながら、一番奥の瀧十郎の鏡臺の前で、三好は侑められた座布團から、新調のズボンをいたはつて横坐りの兩足を出し折々は鏡に映る自分自身の影を好もしげに眺めたりしてゐた。

そこへ、ナイト・ガウンのやうな仕立のタオルの湯あがりをはおつて、片手の袖口で耳の穴を拭きながら、つか〳〵と瀧十郎がはいつて來た。

「やア」

いつもの書生流儀に聲をかけると、瀧十郎はたゞ久し振りと云ふだけのことで、どうしたものか人柄に似合はず、へんにてれた表情で、べつたり疊に手をついて、

「しばらく、御機嫌よろしう」

と、改まつた挨拶をした。

「いや、君もいつもお變りなくつて……」

吊り込まれて、三好も投げ出してゐた膝を折り曲げ、輕く頭を下げた。

「どうもすつかり御無沙汰申しました」

「それアもうお互さんで……」

そこまで來て、やつと二人は、馴染深い笑顔を見交すことが出來た、――いろ〳〵複雑な心持を通はしつけた、あの重寶きはまりない無邪

の合言葉を取り返したのだ。

「いかがです」

「いやどうも……」

八

瀧十郎の「いかがです」には、云ふまでもなく、美津枝との共同生活を活かす意味が十分に含まれてゐた。あなた方の情事は、噂でも聞いて居りますが、さぞ／＼御幸福なことでございませう、の心持を、故意と空ッとぼけて述べたものだつた。

これに對して、三好の「いやどうも」は、東京にゐた頃、一時彼等の仲間に流行つた通り言葉だつた。そのほか、「たゞ／＼」とか、「たゞもう」とか、意味がありさうでないやうな、ないかと思へば、山盛りにもり込んであるやうな言葉を、いかにも感に堪へた顔つきで、そのくせほんの上の空で、無暗矢鱈と使ひたがる。一種下町の隠居風とでも云ふやうなものを眞似ることが、ただなんとなしに面白くてならなかつたのだ。例へば、芝居でも、會合でも、掛合事でも、一人がどこからか歸つて來て一緒になる、と云ふやうな場合、はたの者は、まづ挨拶代りにでも、「いかがでした」と聞く、十が十まで、答へはきまつて、「いやどうも」で片がつくのだ。云ひやう一つで、呆れ返つたとも、とんでもないとも、不思議なものだとも、お話にならないとも、どんな意味でも通はすことが出來るし、それがと云ふに、江戸末期の「無感興」を、粹一として錬んだ氣質が基調をなしてゐるからで、若し何か或る芝居でも見て、心底から感心して歸つて來たとしたら、決して「いやどうも」は使はないのだ。だから、つまり、何事も頭から茶化してかゝる世紀末的人生觀の露骨な現れに他ならないのだつた。

で、この場合の三好の云ひ方では、まづ第一に自己輕侮の色彩が鮮かだつた。「からきしだらしアありませんや」の氣持だつた。そしてその裏から、うッすりお得意の色もぼかし込んであつた。一言にして盡せば、迷惑がつて喜んでゐると云ふ態だつた。それだけ複雑な氣持が、ほんの一口づつの、會話とも云へないほどの應酬で、忽ちお互の胸へはつきりうつッて來るだけでも、友達と云ふものゝ味はまた格別だつた。はたの者には氣違ひじみて聞えさうな笑ひ聲が、すぐそのあとへ續いて爆發した。

「然しまア、お羨ましいことで……」

「や、薄氣味わるく、へゝゝゝ、恐入つて、――たゞたゞ……ですよ」

「そいつが大遊び……」

「何が大遊び……」

「いえ、まつたく。……と、思つたのが大間違ひ、つまり、矢張野に置けといふやつですな」

「いやどうも、なんとも申しあげやうもございません」

と、瀧十郎は、突拍子もなくいきなり頭を疊へさげて、「あやまるよ、あッしや。何も大阪三界まで來て、のつけから、矢張野に置けまで聞かされることアないと思ふんだ。暑い、おゝ暑い、ねえ、三好さん、大阪と云ふとこは大層暑い國ですね」

「えゝまア、おかげさんで。この陽氣でしたら、今年アいくらかお米が下がるでせう」

もう一度二人は、あたり構はず大笑ひをした。すつかりもう旅の心ではなかつた。

「時に、實ア今夜は、個人として挨拶したわけぢアないんで……」

「ア、成程。伺ひました。お藤の方と云ふわけで」

「え？ 馬鹿に早いね」

「それアもう。惡事千里つてますからね」

「惡事はないだらう」

「これは失言。實はね、發ちます前に、ちよつと紀尾井町さんへお伺ひいたしまして……」

九

「あゝ、さう……」

我にもなく三好は、ぱッと赤くなつた。……信之からは、深い宥しの心をうけてゐるし、自分でも今では、一生を陰らすほどの惡事とは感じられなくなつてゐるのに、思ひもかけず突然に衝きあげて來たこの血潮には、全く面喰つて了つた。言ふべき言葉は勿論のこと、眼のやり場にさへまごついて、いきなり前にあつた茶碗を取りあげたが、生憎底に五厘錢大の黄色い圓が、搖れ散れば影も止めないばかりだつた。

「オイ、熊公、お茶！ 序にあッしにも一杯」

瀧十郎が、すぐさう次の間に聲をかけてくれたのは、救ひのやうで、却つて三好には痛痒かつた。いまの狼狽の一伍一什を見詰めてゐたことが、それで裏書されたやうなものだつた。

「いや、もう澤山」

と、殘りかゝつた番茶で、底にひとツ滴のこつたやつを、しゅッと啜つて、[illegible]の、鶴に老松を染附けた番茶々碗を、大きな掌の中のうちに、鼓のやうにポン〳〵と打ち鳴らしながら、その間にいつか血の色の消え散つた顔を、せい〳〵清々しく、にッと引き正め、落つき拂つて、「あすこでも、皆さんお變りないんだらうね」

「あれ！ 御承知ないんですか」

「何を」

「何をつて、紀尾井町さん……」

「どうかしたの？」

さすがに三好は、顔色をかへんばかりに一膝のり出した。

「癌らしいんです」

「ガン？」

「えゝ、癌、胃癌です」

「あゝさう、胃癌……。さうかい、矢つ張りねえ」

悵然として、暫くぢつと相手の眼のなかを見据ゑてゐたが、「でも、まださう進んぢアゐないんでせう？」

「えゝ、御自分ぢア大したお元氣です。つい四五日前、こつちへ出かけるについてお暇乞ひに伺つた時でも、寢床の上に起き返つて、例の片胡坐かなんかで、談論風發だもんですから、却つてこつちがお宅の方に氣兼でしてね、ちよつと三十分ばかりゐてすぐお暇して來ましたが、奧さんのお話だと、どうも矢つ張りこいつが不治らしいんですね」

「うん、癌ときまつちアねえ……。だから、どうもあの吐氣が可怪しい〳〵つてつちア、隨分僕等やかましく云つて、一度醫者に診て貰ふやうに勸めたんだがなア。……一體、どう云ふことから急に床に就くやうなことになんなすつたんだらう、血でも吐かれたのかね？」

「えゝ、それが例の不良少年、ほら、なんとか云つた、ほら、外人殺しの……」

「うん、西山普烈か」

「えゝ、あの人の裁判に出なすつたことは御存知でせう？ 盛に新聞にも書きたてられて、困つておいででしたつけが……」

「いや、知らない。こつちへ來てから、新聞も碌に見ないもんだから」

「さやうですか」

と、眞面目にうけて、すぐ話し續けようとしたが、急に手を延ばして、三好の肩をぽんと叩き、咽喉を使ふ職業者に獨特なジャ〳〵聲を振りしぼつて、「可厭だ！ 眞面目な話の最中に、だしぬけに惚話るなんて、怪しからん、とても下等だ！」

十

「じよ、じよ、冗談いふない」

自分では毛頭惚話のつもりではなかつたのだが、瀧十郎の方で、無理にもそれにして了ひ、座興のつもりか、急にそんな風に燥ぎだされてみ

ると、ついこつちもその氣で受けて置くよりほかはなかつた。そこでまづ「冗談いふな」と言葉で打消して、態度で肯定してみせたのだ。

「まつたく、世の中にこんな仕合せな人が、また一人あるかしら。シキメ（情婦）をつれて大阪落ちの、すぐさまうまい穴を見つけてはいつちまふなんて……」

「うまい穴とは？」

「□□新聞と云やア、大阪一流の社でせう。新聞で大阪一流と云ふことは、日本で一二と云ふことでせう。どうして貴方、大した位置でさアね」

「それもこれも、みんな紀尾井町のおかげなんだ」

三好は、やゝ粗雜な心持で應じた。

「どうして？」

「いゝえね、こんなうまい位置を與へられたのも、藤代さんのお世話だからさ」

「へえ、さうなんですか」

「さうさ、君、知らなかつたのかい？」

「えゝ、紀尾井町さんは、三好君も、いゝ按配に、大阪でこれ〳〵ださうだ、なんて、はたから噂にでも聞いたやうな顔をしておいででしたつけ」

「ふうん、さうかい」

「さうですか、あちらのお世話だつたんですか。へえ、さうかなア、えらい方だなア」

「ちよいと頭がさがるね」

「えゝ、とてもいけませんね」

暫く濕い沈默が來た。

「失禮、ぢアちよいとあたしは着物を着ちまひますから」

タオル浴衣一枚の我が身なりに心づいて、瀧十郎は、習慣的に鏡のなかをぢツと見込んでから立ちあがつた。

「で、その苛烈の辯護を引きうけて、それからどうなつたんだい」

取り揃へて待つてゐた男衆がうしろから着せかける羅に手を通し、衣紋をつくろつたりしてゐる瀧十郎を見あげながら、三好は、先刻の話の先を促した。健康な者でもいゝ加減弱つた今年の暑さの盛りに、じり〳〵と迫つてゐた衰弱をも顧みず、公判廷に出て行つて、その始まる前に吐血し、それでもなほ屈せずに、一時間餘の大辯論をやると、そのまゝ人事不省に陷つて了つたと云ふ話を、ひと通り喋つて聞かす中には、身支度の方も整つてゐた。

「追つてまた、いろ〳〵詳しいお話をいたしませう。さうですか、まるで御承知なかつたんですか。大抵の新聞には、可なり詳しく書き立てましたがねえ」

「さうかい。で、それ以來ずつと床に就いてるんだね？」

「起きたがつて仕様がないんださうですがね、はたでまア、どうにかかうにかなだめすかして、押へつけるやうにしてねかして置くんですとさ」

「何しろそいつア困つたことになつちまつたなア」

聲で三好には、しみ〳〵とこの事の悲慘が胸に染み込んで來た。あの部屋で誰がどうして、かうして、子供さんたちはどこで、どうしてかうしてと、殆ど毎日のやうに行きつけた紀尾井町の邸の、病める主人とその周圍のさまが、ありありと眼前に思ひ浮かべられて來たのだ。

十一

四五年前に、伊庭の紹介で初めて會つた時の、ものの柔かで慇懃な裡にも、ちよつと親しみ憎いやうな、コチンとした、謂はゞ獨善主義の冷たさとでも云ふやうなものを感じた第一印象から、だん〳〵打融けて來るにつれて、少しも己の缺點を隱さうとはしない、人のいゝ、親切な小父さ

んめいた感じ、さうかと思ふと、へんに堅つ苦しいところは、最初の印象の冷たさをいつまでも思ひ出させたり、要するに、よく解つてゐるやうで、今だにしつかりとは捕捉へられない點――藤代信之と云ふ存在が、あらためて三好の意識の表面に浮かんで來た。彼は、その人に、金錢上の迷惑をかけ、而もそれに被せて今日の位置まで與へられてゐた。そのほか有形無形にうけた恩誼は、中々なまやさしいものではなかつた。さう云ふものを、然し三好は世間並に、ただ「恩」として感じたくはなかつた。「報恩」と云ふ手段をとりさへすれば、今日にも帳消しにして了ふことの出來る水臭い數量の感念で、この關係を見ようとは思はなかつた。されば と云つて、藤代信之を、一生涯とても頭のあがらないほどの威嚴をもつた大人物と崇め續けてゐられようとは、夢にも思へないことだつた。さう云ふ結果は、信之の行爲に、心の底から出たのではない、や、勤め氣な、所謂道德的臭味でもあつてのことか、或はまた自分の方、一方に、我儘勝手なしまりのない點でもあつてのことか、そこは三好にも判斷がつきかねた。然しそれもよく考へてみれば、「解らない」と感じるよりほかないので、平常の彼の氣持では、信之が親切な人だと云ふ點を、少しも否まうとはしなかつたけれど、されば と云つて、その德望に敬服しきつてゐると云ふほどのことではなく、つまり德はあるが、未だ天衣無縫の域には遠く達しない、生半可なものだくらゐの見解に落ついてゐたのだ。もう一つ云ひ換へると、信之から示されたくらゐの好意なら、こつちがえらくなつて了ひさへすれば、返さうのなんのと、こと改めずとも、自由に、闊達に、自づとこちらから彼方へも流れて行く筈のものだ、と觀じてゐた。それ故、決して普通の意味で「恩」に着るやうな氣持にはなるまいと努めてゐたのだ……。さうだ、努めてゐたのだ。僅に彼はまだ信之からうけた好意を「卒業」しきつてはゐなかつたので、早く卒業して了はうと努めてゐる最中だつたのだ。

そこへ、當の信之が、再び起つことのむづかしい病の床についたと云ふ話を聞かなければならなかつたのだ。――三好は、單純に、素直に、たゞ悲しい、と云ふ氣持にはなれなかつた。無理にも言葉にすれば、困つたことになつた、これア惡くすると、とんだ好意の背負込みものをしなけれアならないぞ、と云つたやうな、迷惑の感じが、なんとなく彼の悲しみの色を濁してゐた。思はず泪ぐむ、と云ふやうな感情とは、よほどかけ離れたものだつた。

―一度でもひとに怒つた顏を見せたことのない、あゝ云ふ人だもんだから、それだけにまた、決してひとの云ふことを聽かない性でね、いくら勸めても醫者に診せないんだもの。ひどいことを云やア、自業自得と云つた感じがないでもないのさ」

八當りに當り散らしたいやうな氣持さへあつて、三好は、場所柄も忘れたむきな調子で、そんなことを云ひだした。

十二

その時分には、瀧十郎は、すつかり身ごしらへがすんで、中腰に、鏡臺のそばで、腕時計や懷中ものを身につけてゐた。

―さア、出かけませう―

―出かけるつて、一體君ア……」

―兎も角御飯でも……―

―なんだ、賣れてない人かい―

「えゝもう、さばさばとね。

―初日の晩に體があいてるやうなことぢア、折角だが、この御飯たべても、あんまりピツと來さうもないね。

樂屋で、忙しない人出入りのなかで、ちよこちよこと挨拶でもして來るのが關の山と、實は

内々觀念して來たのだが、案外にも、わりにゆつくり話が出來たばかりか、珍しくも體があいてゐて、一緒に出て晩飯でも喰はうと云ふのだつたから、三好にとつては、まつたく願つてもない仕合だつた。けれども、その喜びは色にも見せずに、突ッ込んで可厭がらせの一つも云つてみるのだつた。と、瀧十郎は瀧十郎で、すぐまたそれを跳返しにかゝつた。

「なアに貴方、座敷の三つや四つ斷つたつて、假令御贔屓をしくじつたつて、久し振りの三好先生に代へられますか。よしんばまた、女の一人や二人焦れ死に死ぬまでも……、そんな奴アないか……」

「それアそのくらゐは當り前だ。大阪へ來たら、誰より新聞社のお方様を大切にしなきア、とても藝人は立ち行かないんだから、憚りながらその氣でつきあつて貰はうか」

「へい〳〵、へい」

と、しかつめらしく頭をさげて、「さやうござらばお社の方様……」

「うむ、案內いたせ」

「善公、自動車だ」

みんな一度にどつと高笑ひをして、思はず立ち上り、三好はズボンの膝をちよつと氣にして叩き、鏡の前で眞新しい麥藁帽子を被つてみるし、瀧十郎は、銀の煙草入にキリアーチを詰め込む、善公は部屋を飛んで出る、急にざわめき立つた。――遊びに出かけようとしてゐる若者の氣持、うき〳〵と華やぎ、そは〳〵と落つかない、一種なんとも云はれず樂しい氣持が、二人の胸を一杯にしてゐた。不治の病に伏した信之などは、あとかたもなくどこかへけし飛んで了つた……。

一時間たゝないうちに、二人は、北の新地の或るお茶屋の廣間にゐた。一枚殘らず建具を取りはづして、ほんの體裁に垂れた御簾さへ卷きあげ、床飾もあつさりと、緣ばなに、人數だけ水淺葱の座布團の敷いてあるのもよかつた。奧二階の、欄干のそとはすぐに、星影さへ見えない宵闇だつた。遠くの空が、ほんのり街の灯に焦かれてゐるだけで、隣近所の燈火やざわめきを遮つて立つた高塀までは、上方風のひらたい庭づくりが、もの丶影も落さず靜まり返つてゐる。

「よござんすね」

「また別の味だね」

座敷にはいるなり、二人は、緣側に立つて眺めた。それも旅らしい心持だつた。

「おこし……」

仲居のお房が、肥つた軀を大儀さうに、目はまた、一流の茶屋の仲居としての落つきをみせて、ゆつたりとそこへ挨拶に出た。

「や、お機嫌さん……」

瀧十郎は、すぐ大阪辯で答へて、「こんどはまたいろ〳〵お世話さんになります。どうぞよろしう」

十三

男衆の大橋にでも電話をかけさせてあつたものとみえて、藝者たちの來かたも早かつた。盃とウヰスキイのコップとがちやんぽんに、や丶空腹の、鯛と烏賊のつくり合せや、鮨の吸物に箸をもつて行かうとする鼻の先へ突き附けられた。

「まア、ちよつと待てよ」

「食べるのんかて飲むのんかて、お腹のおツきなる味に變りおまへんで」

と、年増妓の遠慮なく、無理にも相手の手にコップを持たせて「さア、今夜へべレケにのんまへらいな」

「どうです、この連中と來たら、いつ逢つたつて、酒のない國からたつたいま梅田の驛へ着いて來たばかり、と云つた勢なんだから、呆れますね」

―ガブ〳〵と云ひたいが、氣の毒ながらガッガツの方が近いやうだな」

瀧十郎と三好とは、から大勢に取り捲かれると、自然と攻守同盟を結ぶ態になつた。妓のなかには一昨日の晩、社の先輩たちと一緒の折に來てゐたのが三四人まざつてゐて、初ての茶屋へお連樣で來たやうでもなく、三好は初手からはしやいでゐた。瀧十郎にとつては、云ふまでもなく、來る妓が片つ端から顏馴染だつた。よしんば始てにしても、或は一度かそこらあつたばかりで、すつかり忘れてゐるのでも、調子のいい若手の花形役者の座敷では、てれるのはにかむのと云ふやうな氣ぶりなど、藥にしたくも見出せなかつた。二時間たゝないうちに、男にも女にも、いゝ加減酒の力が働きだしてゐた。

緣側の柱に、高時然と凭りかゝつて、左右からしなだれかゝる若い妓を兩手に引きよせたまま、老妓の差しつけるコップへ脣を持つて行つて飮んだりしてゐた瀧十郎のうしろへ、何氣なくお房が摺寄つて來て、ちよいと耳もとへ囁いた。

「あら、可厭やわ」

と、甚米の膝によりかゝり、肩へ廻された瀧十郎の手先を、兩掌のうちに弄びながら、とろとろといゝ心持になつてゐた若い妓が、耳さとくも聞きとがめて、美しい眉毛を地藏樣のやうに半月形に吊りあげ、やつとこさ、うるんだ眼を睜いて、「お房姐さん、こんな時、電話なんぞ云うて來なはるつてことおまつか。もうとうにいなはつた云うて、切つとくンなはれ」

「なに、電話？ 女子はんの聲だつたか、男はんの聲だつたか―」

―どつちやにしろ、そんなんいかんわ、今夜はもうこゝからそとへは、一足でも出したげへんのやよつてん……」

老妓や年増たちも、すぐそんな風に合槌をうつた。

「いゝえ、大橋さんだつせ、男衆さんからだつせ。なんや、芝居の方の御用らしわ」

お房が強ひて眞面目顏で云ひ解かうとしたが、蜂の巣をつッ突き毀したやうな妓たちの騷ぎは、なか〳〵そんなことで鎭りさうもなかつた。ちよつと電話口へ出るだけだとか、決して逃げはしないとか、なんなら一緒について來てごらんとか、あつちこつちへ頻と申譯を振り撒いてゐた瀧十郎も、仕舞には問答無益と云はんばかりに、左右の妓を拂ひ退けて立ちあがつた。

「駄目々々！ 逃がしたらあきまへんで」

老妓の號令と共に、若い連中が前後左右からしがみつき、首ッ玉にぶらさがり、たうとうまた座敷の眞ン中へ坐らせて了つた。

十四

「なんて騷ぎだい！ なんなら俺が代りに出てやらうか」

騷動のそとに一人とり殘されて、やゝ手持無沙汰に煙草を喫してゐた三好が、先ッ着更へた貸浴衣の裾から、膝で縮みあがつたツンツルテンの毛脛も露に、ふら〳〵と近づいて來て、眼で瀧十郎に話しかけた。矢ッ張り行ちア駄目なんだ、と云ふ瀧十郎の眼つきの答だつた。

「なに大丈夫だよ。ザフ（座敷）ならそのやうに、メ（女）ならまたメのやうに、ちやんとうまくやつて來てやるよ」

「そいつがね……。まアいゝや、ちアね、もうボウトキマ（一時間）ほどしたらカウ（行く）するからつて……誠にどうも恐れ入りますが……」

「そんな、英語なんぞ云ひなはつたらいかんわ」

「ずるおまッせ」

「アワ、、、ファー」

取り圍んだ妓たちが、一時にまはりから囃したて、美しい指を揃へて口を塞がうとする、さ

うはさせまいとする……。
「よし、解つてる〳〵。くどくは云ふな」
　そのまゝ三好は、いち早く廊下の方へ出て行つた。
「そんな電話、はよ切つて了ひなはれ、三好さんかてぐるやよつてに、出したけたらいかんわ」
　無遠慮にかじりついて、キャッキャと騒ぐわけにもいかないやうな位置とか性分とかから、遠捲に口先だけで囃したてゝゐた連中が、二三人ばら〳〵とあとを追つて來た。
「來ると承知しないぞ！」
　振り返りざま、三好は、故意と仁王様のやうな形をして怒鳴りつけた。妓たちはワッと云つて立ち竦み、手を把り合つた。そこへお房が追縋つて來て、
「そんならわたしだけ一人ついてきまつさ。あんたたちはこゝで待つてなはつたらよろし、なア先生」
「さうだ〳〵。さア、君と二人で道行だ」
　背なかから腕を廻しあつて、階段をおりながら、三好は、囁くやうにお房の耳もとで、「なんだい、一體、ほんとに電話なのか」
「そりやさうでんがな」
「誰だい」
「さア、……先生知つてはれしまへんの？」
「知つてるさ」
　と、三好は、瀧十郎のことならなんでももつて來い、と云はんばかりの顔つきをしたが、その實大阪の女のことまでは聞いてはゐなかつた。「知つちアゐるが、あれこれと、あいつも中々口數が多いからな。どの口だい」
「知つてやおまへんのでつしやろ？」
「だからさ、どの口だよ。矢つ張りこの土地の人だね？」
「いづれ、そりやさうでつしやろかいな」
「ふうん、まあいゝや。どこだい、電話は？」
「こつち〳〵」
　お房が危ぶんで、まづ自分が出ようとするのを、三好は横手から受話機をひツたくつて了つた。
「もし〳〵、もし〳〵」
　然し答がなかつた。
「それみなはれ、あんまり手間どつたさかい、切れてしまうたんやわ」
　お房が變つて、ベルを鳴らし、先方の番號を云つて、改めて呼び出さうとしてゐるところへ、ひよッこりまた相手の人が出て來たらしかつた。
「へえ、わたし、お房……。みんなに掴まつて、もうえらい目にあうてはりまつせ。とても出られなはれしまへんで、……そんなこと云やなはつたかて……。あのな、今な、先生かな……」

十五

　いきなりそんな、先生さんと云つたところで、先方の女へ通じる筈はないのだから、三好は、慌てゝそばから送話口へ口をよせ、
「兎に角、一時間かそこらしたら必ず伺はせますから、どうぞもう少々御辛抱くださいまし……」
「さ、先生かはつたなはれ」
　と、お房が自分の耳にあてがつてゐた受話機を、すばやく三好に渡して、「いま先生が代りに出なはりまつせ」
　いくら電話でも、先方はひどくてれた調子で、笑ひ聲ながら何かわけのわからないことを呟いてゐるのが聞えた。
「あたしから、責任を以て申しあげます」
　三好は、いつそもう度胸を据ゑて、「一時間後には、きつと當人を差しだします。誓つてお約束しますから、どうぞ御安心ください」
「まアま、えらいお堅いことで……。おほきに……」

もの馴れた、すこしは年のいつた女らしい口ぶりだつた。「それではどうもひつれい申しました、よろしうお願ひ申します」

「ぢア、失禮……」

もう少しは揶揄つてもみたかつたのだが、三好は、兎も角重荷をおろした心持で、そのまま電話を切つた。二階をあがりながら、心持が、すつかり瀧十郎の身方になり切つてゐるのに氣がついた。戀の取持に、馬鹿々々しいほど肩を入れる待合の女中のやうな、一種へんな滿足感に浸つてゐる自分を見出したのだ。さう氣がついても、然しそれがそんなに可厭でもなかつた……。

「お房さん」

あんまり人見知りをしない性だけに、もうすつかり馴れ／＼しく呼びかけて、「どうかして瀧のやつを落してやる工夫はないかね」

「さア……、なか／＼えら事だつせ」

「それアえら事だ。だからそこをさ、なんとかうまく……」

「よろし、わたしうまいことやつてみます」

二階の廣間では、もう一度各自の席に直つて、やゝ落ついた座談が始まつた。云ふまでもなく、今度の芝居が主な話題で、從つて瀧十郎が主な話手だつた。――さうしてゐる間に時が經つて行くのを、はたから三好の方が却つて苛々してゐた。

「さア、先生、そろ／＼お暇といたしませうかね」

やがて、ちよつとした言葉の切れ目を巧に捕へて、瀧十郎はちらと腕時計を見た眼を、すぐ三好の方へ、意味深く向けると、「何しろまだ二番目の臺詞がまるツきりはいつてゐないんですからね、今夜でも少し讀んどかないと」

「それアさうだ。あゝどうも鞘附につけて貰つてちやア仕様がありアしない」

「あら、そんなことないわ。よう覺えてなはつて、すら／＼云うてなはつたやおまへんかいな」

と、今日の初日を觀て來た一人が、眞面目顏で反對した。

「さ、そこがお素人衆だ」

瀧十郎がすぐ巫山戯たがるのを、三好はそばから、割込んで、俺まで本氣らしく、

「それアほんとに、あんなこつちアいかんよ。はる／＼大阪まで出て來て、どうもあんな……」

「そんなことはないわ……」

「いや、それアちよいと素人にはわからないよ。だが、いけない、あれぢア困る……」

一幕の半分も見てはゐない三好が、白々しい眞面目顏で、こんな風にけちを附け始めた。

十六

けれどもその手では、結局彼女たちは誤魔化されなかつた。いくら三好がむきになつて、臺詞を憶えるために、今夜は早く歸宿しなければならない瀧十郎だと云ふことを、熱心に說き聞かさうとしても、頭からそんな話には乘つて來ようともしずに、てんでに勝手次第なことばかり喋りたてゝゐた。

そこへ、眞面目顏で、お房がつゝとはいつて來るなり、疊に手をおろして、眞正面から瀧十郎に、ちよつと顏を貸してもらひたいと云つた。どうしても改まつた用件としか思はれない片ツ苦しさだつた。

「は」

瀧十郎も、何事か起つたんだらう、と云ふ顏つきで、すぐ立つて行つた。そこに、冗談口や惡ふざけの言葉を發する心の餘裕が出て來ないさきに、二人はする／＼と、小走りに廊下を階段へ、何やら囁き交しながら去つて行つた。

お房さん

なかでも一番執拗く瀧十郎に絡みつき、引き

止めようとしてゐた二十三になる一勇と云ふ妓が、その時分になつて、これア一杯喰はされたかな、くらゐの半信半疑の氣持から、取り敢ず聲だけあとを追ひかけさせた。まだ十分聞える階段の中ほどで、しかし返事はなくて、急に足音が早まつた。

「逃げなはるつもりやわ」

それ、方々御油斷あるな、と云つた氣持で突ッ立ちあがる一勇の手を、すばやく三好が捉へて了つた。

「違ふよ。歸るんなら、俺と一緒に歸るさ。このうちで紅葉見をして貰ふやうなことを云つてたから、多分その日取りやなんかの相談だらう。一言の挨拶もなしに歸るなんて、そんな卑怯なまねをしたら、第一この俺が承知しやアしない」

「あんたはぐるやよつてあかんわ！」

振り拂つて、すぐあとを追つて行つたが、玄關にも廊下にも便所にも、その時にはもう瀧十郎は影も形もなくなつてゐた。おまけにお房さへ見附からず、ほかの仲居に訊いてみれば、みんな一樣にニヤ／＼しながら、知らないと答へるばかりだつた。やつと、帽子も被らずに、自動車に飛び乘つてどこかへ出て行つたと云ふだけのことを、おいおいほかの口から白狀させ、プンプンして妓が引き返して來た。

三好は、内心まづよかつたと思ひながら、口先では頻と憤慨してみせた。藝者たちに、初めからぐるのくせに、それが白々しい、と云つて、二重の怒りを三好の上に破裂させる。が、なんと云つても客と藝者のあひ對ひなのだから、激しければ激しいほど、口數が多ければ多いほど、結局は座敷がはずんだことで、みんなは却つて愉快にされたくらゐのものだつた。

ほどなく、三好に電話を取次いで來た。瀧十郎に違ひなく、この上先生までおびき出さう魂膽だらうが、中々さうはさせない、と云ふので、三好のあとから妓たちがぞろ／＼と喰附いて來て、電話口を取り卷いて了つた。

ところが當の瀧十郎は、電話口に出ないで、先刻は無斷で中座して誠に相濟まない、止むを得ない用件でまだ一時間ほど手間どるが、必ずそちらに戻つて行くから、どうかお暫くお待ちを願ひたい、と云ふやうな、堅つ苦しい切口上が、誰やら男の聲で述べ立てられた。油斷なく受話機のそばへ耳をよせてゐた妓たちも、それでは冗口の利きやうはなかつた。

「もし間違うたら承知せえへん云うたげなはれ」

などと、低聲に三好のうしろから囁くくらゐのことだつた。

十七

「ちよいと瀧十郎さんを電話口まで呼んで貰へないでせうか」

三好としては、妓たちの手前にも、こつちは當人が出てゐるのに、先方では代理ですませようとする無禮を、そのまゝ見逃して過すに堪へない氣にするのだが、さうかと云つて、その無禮に對して腹の立つ實感はさらにないのだから、ほんの體裁だけの意味で、強硬がちにかう申し出たのだつた。

「甚だ失禮でございますが、ちよいとその……、手ばなせない用事にかゝつて居りますので……、でも少々お待ちくださいまし、只今御都合を伺つて參りますから」

「いえ、別に大した用もないのですがね……」

云ふうちに先方は、いかにも芝居者らしいうはッつらの鄭重さで、つべこべ何か云ひながら引ッ込んで了つた。

「先生ですか」

暫くすると、受話機のなかに、いきなりかう瀧十郎の聲が響いた。まはりから取り圍んでゐる

た妓たちが、ワッと囃したてゝ、てんでに云ひたい放題のことをしやべりだした。三好は、それを押し鎭めるのにひと骨をつてから、
「なにしろ、この通りの人氣なんだから……」
と、話しかけた。「すぐに來られないもんかね。そつちの御用も、それアもう手放し憎からうけれど、それア重々お察し申してゐるが、俺もね、多勢に無勢でちとあしらひかねてるんだから」
「えゝ、伺ひます」
「さう安請合しないでさ……」
「それアさうと、だしぬけですが、貴方はお民さんつて人を御存知ですか」
「お民さん？……一體なんだいそれア」
「キモノ（藝者）です」
「キモノ？　どこの」
「こゝの人ださうです」
「知らない。藝者にお民さんかい」
「そいつがね……、名代本名でさうねえ」
「それだアなほのことわかりッこありやしないよ、藝名で云はれたつてやつと同た人覺えてるかどうか怪しいのに、本名だなんて……。一體それがどうしたつて云ふんだい」
「是非貴方にお目にかゝりたいんですつて」

顏をよせて、受話機から洩れる先方の聲に耳を傾けてゐた妓たちが、もう一度やんやと騷ぎ出した。
「わて、知らんわ」
「まア／＼、先生」
「白ばッくれはつたかてあかんわ」
「まア、ちよつと待つてくれよ」
と、三好は、振り向いて、背中を叩きたてる妓たちを制し、身に覺えはないことながら、矢つ張り惡い氣持はしず、わざと隱してゐるやうにも釋れさうなニヤ／＼笑ひに相好を崩して、「ぢア、このごろ東京からでも鞍換して來た人ぢアないのかね」
「京都の人ですつて。それがね、病氣でね、今日明日も知れない容態だと云ふんですがね。一目でもいゝから先生に逢つて死にたいつて云つてるんですとさ」
「そんな！　それア人違ひだよ」
三好も、冗談に投げだして了ふよりほかなくなつて來た。「京都の人なんぞに、一人だつて知り合ひはないよ。何かそれア間違ひだらう」
「紀尾井町さんの關係で、なんか覺えはありませんか」
「關係なんか……ないね。それより早く來たまいよ。來てからゆつくり話を聞くからさ」
そんなことで、やがて電話を切つた。

十八

かれこれ二時間も待たされて、やつと瀧十郎が戻つて來たのは、もうやがて一時近かつた。藝者たちのなかには、大ぶん歸つて行つたものもあつた。三好の、なんのかのと云ひつゝも心では矢ッ張り瀧十郎に十分好意をもつてゐる、その心根のうれしさ賴もしさから、まだほんの淺い馴染ながら、十年の知己のやうな親しみを見せて、さすがにもう杯は捨てゝ、しんみり語り更さうと腰を落つけた四五人もあつた。謂はば芝居と云ふものゝ魅力で縮られたその一團の男女は、さんざ待たされた揚句、瀧十郎の姿を見ると、なんとも云はれない懷しさを感じて、うらみつらみを並べたり、皮肉や揶揄でうんと脂をとつてやらうとの心づもりも忘れ果てゝ、ついちやほやと歡迎してしまつた。それでもひと通りは、やれお怨みのなんのかのがあつて、やがて三好が口を切つた。
「なんだい、一體さつきのお民さん云々は？」
「あゝ、困つた／＼、すつかり忘れてましたよ」
瀧十郎は、くるりと三好の方へ向き直つて、
矢つ張り、紀尾井町さんの御贔屓筋だつたん

です。貴方ぢやアなかつたんだ」

「なアんだい、馬鹿々々しい」

多少とも裏切られたやうな感じがあるだけに、それを誤魔化して了ふため、故意と實感の五倍ほどにも誇張して、ぐツと三枚目に身を落し、口あんぐりと反りくり返つてみせた。それが妓たちにうけて、さも可笑しさうな笑ひ聲や、輕い冷かしが出た。

「いかに僕が忘れッぽいたア云へ、あんまり覺えのなさすぎる名だと思つたよ」

三好は、さもつまらなさゝうに、そんなことを呟いてから、「然し、それがまたどう云ふわけで僕に逢はうとは云ふんだらう」

「そこですよ。いまに始まつたことぢアないけれど、紀尾井町さんつて方は、全く不思議な方ですね。あれだけ浮氣の仕放題をしてゐながら、それでて女に殘してゐる印象と云ふやつが、とても深刻なんですからね。……そのお民さんて人が、肺病で、もういよ〳〵いけさうもないつて云ふんですがね、その臨終の際になつて、一目でいゝからお目にかゝつて死にたい、つて云ふんですとさ」

「へえ、一體そのお方、藝妓はんだつか、素人はんだつか」

と、年増の妓が、そこに口を出しかけると、さつき電話室までついて行つた若い妓が、すぐその耳もとへ口をよせて、何か囁いて聞かせた。

「ふーん、さうだつか」

芯から思ひがけないと云ふ顏つきで、老妓は鼻音の感嘆詞を幾度も繰返しながら、小刻に首を左右に振つた。

「なんだい、君ア知つてるのかい」

三好は、すぐその花勝と云ふ若い妓の方へ問ひかけた。

「そやよつてん、先刻わたし、小藤さん云うたげたやおまへんか」

「小藤さん？　だつて、そんな人知りやアしないよ」

何が何やら、三好にはさつぱりわけが解らなかつた。

「さうなんだ、藝名は小藤と云ふんださうですよ。ついこの春ごろ、京都からこつちへ變つて來た人なんですつてね？」

「へえ。あつちにゐなはつた頃は、里奴はん云うて、大人しい、品のえゝお妓でしてん。わてその頃からよう知つてまんね」

年増女が傍から説明するのを聞いて、三好もはつと思ひ出した。里奴と云ふ名ならば、信之の口から洩れたのを慥に聞き憶えてゐる。あの、あとをしたつて東京まで態々信之に逢ひに來たと云ふ、あれに違ひない……。

十九

「へえ、さうかい」

と、何か大きな塊でも咽を通す時のやうに、三好はガックリと一つ頷いて、「こつちでは小藤と云つて出てゐたんですか。さうかね、それアちつとも知らなかつたが、小藤、ねえ、瀧さん、可厭だね、小藤たアよくものめ〳〵とつけたもんだね」

「成程ね、小藤……。いつそのこと、藤代とすれアなほよかつたでせうにね」

二人は、さう戯れ合つて笑つたが、信之のことをなんにも知らないはたの妓たちには、この意味は通じなかつた。で、彼等の間には、小藤の噂話が囁き交され、それがだん〳〵に話題の中心を占めることになつた。ほか土地から變つて來た人ではあり、それに出てゐたのもほんの僅かの間だつたから、中には名前さへ知らない妓もゐたくらゐで、彼等自身の流意識から、勢、憎く取り扱はれたことは云ふまでもないが、然し、若くして肺病で死にかゝつてゐるながら、好きな男に一目でも逢ひたいと云つてゐる、

その、いかにも新味には乏しいけれど、通俗的な人情悲劇の情境で、妓たちの口を出る言葉に、十分同情と好意とが盛られたのだ。さう云へば、いつも憂はしげな悲しい顔をしてゐたとか、京都にゐた頃の位置が位置だけに、知つたお客の顔ぶれがよく、従つてどことなく上品におつとりしてゐたとか、そんな類の噂だつたが、それにしても、あんな大人しさうな人が、一期の思ひ出に是非逢ひたいと云ひ出すほど深く思はれてゐた男と云ふのは、一體どう云ふ方だらう、と、話はやがて、自然とそこに落ち込んで行つたのだ。

―それがその、有名な……、なんでせうね―

瀧十郎は、いつからともなく、自分自身を、戀愛の世界での花々しい若武者と感じるやうになつてゐた。向ふところ敵なしの氣持にさへなつてゐた。それが信之のためには、大ぶん荷厄介にしてゐたとは云へ、おもんと云ふものを奪はれてゐる。内々氣のあつたお淺と云ふものをしてやられてゐる。反感とまでは云へないけれど、心持が、戀愛の分野に對立の關係で立つ場合になると、なんとなくひねくれたくなるのをどうすることも出來なかつた。謂はゞ商賣仇のやうなもので、氣がついて自分ながら不愉快になるまでも、相手を褒める氣にはなれないのだつた。今も、實は「有名な色魔」と云ひかけたのだが、それではあんまりひどすぎると思つて、ニヤ／＼しながら、三好へ臺詞を渡して了つたわけだつた。

「有名な……、さうさなア、まア色事師だらうな、ちよつとほかに適當な言葉がないが……、つまり色事師と云ふ言葉がもつてゐる江戸情緒をそつくりぬき取つて了つて、その代りに、多少の人道主義を加味した、と云ふくらゐのところかな」

三好自身とても、その商賣仇の感情は、幾度も經驗してゐるのだから、瀧十郎が、彼をして云はしめようとしてゐる臺詞の内容は、解りすぎるほど解つてゐたのだが、有繋に、それに同じて、卑しむべき反感を表明する氣にはなれなかつた。最近の三好は、美津枝にさへも洩しはしないけれど、可なり信之を有難く思つてゐた。遠く離れた土地で、その當人を色魔として吹聽するやうな、そんな氣持にはどうしてもなれないのだが、さうかと云つて瀧十郎が、臺詞を割つて、渡してよこした氣持を、さうまたべらぼうに裏切つて了ふわけにもいかず、中をとつて、こんな風に云つたのだつた。そして、それが同時に、三好の正直な評價だつたかもしれない。

二十

「そんなやゝこしこと云ひなはつたかて、わてらにわからしまへんけど、つまりなんでつしやろ、よう女子はんのでけるお方でつしやろなア―」

相變らず、瀧十郎のそばにペツたり喰つ付いて坐つた一勇が、そこにほかの意味をも託して、惚れた男の横顔に秋波を送りながら云つた。眼で見ないでも、心にそれと感じて、瀧十郎は、洒々とした顔つきで、

―すると、つまり、あツしみたいなもんですかね―

―君は色魔さ。その人は、色事師と云つた方が當つてるんだ。ちよいとそこは違ふよ―

―へえ、あツしは色魔ですか―

―すかんわ、先生！―

―そんな云ひなはつたら罰あたりまつせ―

三好は忽ち總攻撃に會つたが、故意と言葉仇にはならず、眞面目くさつて瀧十郎に、

―で、僕に逢ひたいと云ふのは、どう云ふんだらう。それより第一、僕と云ふ者の存在を知つてるのからして不思議ぢやアないか―

瀧十郎の說明に從へば、彼が今まで行つてゐた「或る所」の「或る人」が、その「お民さん」なる者の遠緣にあたつてゐるし、可愛がつてもゐるので、普段から信之のことはよく聞き知つてゐたのだが、その「或る人」のうちの妓が、一昨日の晩三好にあつた話を傳へ聞いたお民が、それはきつと「高踏」にゐた方に違ひないから、是非お目にかゝつてお願ひしたいことがある、——と云ふのは、つまり一目でもいゝから信之にあつて死にたいが、自分からぢかにそれを云つてやるのは、いかにも厚かましくて出來ない、あんまりな我儘だけれど、一度自分にあつてくれて、たゞ見た通りの容態を、なんとつかず東京へ知らせてやつて貰へれば、この上の幸ひはないと云ふのださうだ。それを「或る人」から、くれぐれも三好に賴んでくれと云ふ言傳が、篤てそこに、こと細かに、瀧十郎によつて述べられたのだ。そして最後に、一體ならば、他聞を憚らなければならないのだが、こゝにゐる連中は、みんな「氣心の知れたお友達」だし、二人だけ別室へ行くのも水臭くつて可厭だつたから、構はずこゝで云つて了つたけれど、みんなもどうぞそのつもりで聞いて貰ひたい、と云ふ意味のことを附け足した。——同一の祕密をもつことで、人の心は親しく結びつけられる。殊にそれが戀愛に關したことだと、若い女の心などには、一種の魅力をもつた絆とさへなるのだ。この場合では、別に大して祕密にしなければならないほどのことでもなく、却つて美談として語り傳へてもいゝくらゐの話だつたけれど、妓たちは他言しないことを誓ひ、急にしんみりした氣持になつて、いろ〳〵詳しいことを聞きたがつた。また三好に向つては、今夜にも逢つて、容態によつてはすぐ電報で呼びよせるやうにしてあげたらよからう、と熱心おもてに現はして說き勸める妓もあつた。

「ところがね、生憎とその先方の方も御病氣なんださうだが……、ねえ、瀧さん、とてもこつちまで出かけて來られる容態ぢやアあるまいね」

「さア……。然し、あの方だけにね……」

「それに、事件が事件だからね……——ですけれど、いくら紀尾井町さんが行くと仰有つても、矢ッ張りはたが出しますまいね。醫者としたつて許すわけにいきますまいから」

「然し、そんなことなら何故知らせてくれなかつた、なんて、あとで恨言を云はれても仕方のないことだからね、兎も角、明日の朝でも電報だけは打つて置かうかね」

云ひながら、ふと三好は、うは目使ひに、更け渡つた空を見やつた。——天の河が、ほのかに白く流れてゐた。

二十一

秋めいた夜更の風がわたつて、一座には、霜でも置いたやうな靜寂が來た。

「さうかて、仕合やわ。そんなにして、死ぬ臨終まで思ひ込んで忘れられんほど好きな人があつたら、ほんまにえゝわ、假令死んだかて、それだけでもう、よつぽど仕合やと思ふわ——」

花勝と云ふ若い妓が、伏目ながら、述懷めいて呟いた。それはほんとにさうだ、と同じるものと、いくら好きな人があつても、一緒に死ぬのなら兎も角、あたしは死ぬのは可厭だ、死んで花實は咲かない、そんな風に反對するものとがあつた。

男たちは、二人別々に、それ〴〵の思ひに耽つてゐた。瀧十郎は、信之が達者で、女の危篤の報を聞いてすぐ出かけて來るのだつたら、どんなによからう、と考へた。そこにゐる妓たちの手前を、「或る人」などとぼやかしたところで、小藤と遠緣であり、そして日頃から可愛がつてゐる、と云つてしまへば、大抵もう見當はついてゐる筈の、淸葉と云ふ常磐津の名手で、浮氣

者の評判をとり、却つてそれで賣つてゐるやうな一流の美妓とは、つい去年からの關係だつたが、その人を中心に、信之、小藤、三好などで、しばしの間でも、美しい人情の世界に住むことが出來る。戀愛至上の氣持で、人々が親しく結びつくなかに、自分と清葉との、極度に祕密を要する逢瀬が、さして人目を憚らずとも、屢々繰返されるだらう。清葉は、どんなに信之たちに親切に、そして自分には情合の深い、心ざまの美しい女になることだらう。――さう云ふ清らかに樂しい空想は、瀧十郎の表情をさへ美しく見せた。

「なに考へこんでなはる?」

年のいつた妓が、さも好もしげな眼差で見やりながら、手を延ばして、ぽんと膝を叩いた。

「えッ? あゝ」

と、瀧十郎は夢から醒めたやうなけうとさでうけたが、すぐ普段の、觸れば切れさうにてきぱきした調子になつて、「なに、その藤代さんて方が、どうかしてこつちに出かけて來られるといゝと思つてさ」

「さうだすな、よゝほどわるおまんの」

「えゝ、何しろ胃癌ですからね」

その時、これも何やら考へ込んでゐた三好が、急に横あひから口を出して、

「兎に角、一刻でも早い方がいゝね。今夜は無論しようがないけれど、あしたの朝でも、僕を會はせてくれないかね」

「えゝ、よござんすとも、何しろ先方で逢ひたがつてゐるんですもの、貴方……」

「うん。で、入院でもしてゐるのかい、それともうちなのかい?」

「病院ですつて」

「それアなほ世話がなくつていゝや。どこのなんてえ病院だか聞いて來たの?」

「いゝえまだ……。實は、こんな席ですから、今夜はとてもお耳へ入れられまいと思つたんです。それがこんな風に……。どうぞ、皆さん、この話だけは、この場かぎりにしといてくださいね」

「えゝ〳〵」

口止めされる者の不愉快も、玆には感じられなかつたから、笑顔よく妓たちは頷き返した。

「ぢア、どうしよう」

「兎に角、今夜はもう晩いから、貴方こゝにお泊んなさいな。さうすれば、あッしが明日の朝早くお誘ひに來ますよ。都合で、あッしも御一緒にお伴してもいゝんですから

二十二

「そんなこと云はんと、あんたかて泊つて行きなはつたらよろしねん」

年増の妓が、故意と權柄づくに、瀧十郎を引き止めにかゝつた。

「いえ、今夜はね、ちよつとさう云ふ具合にいかないんですよ」

強ひて眞面目顏を扮つて答へるのを、妓たちは、少しの斟酌もなしに、

「そらさうだつしやろ」

「よそへ泊ンなはたら、えらいひかれはりまつしやろ」

「そんなやゝこしい人、はよ歸んなはれ、歸んなはれ」

「へえ、そんなんやつたら、すぐに去なしてもらひまッさ」

瀧十郎は、四ン匍ひになつて、尻から立ち上がるやうな滑稽な形をしてみせた。

「いかんわ、いかんわ!」

[illegible]妓たちは周りから取り縋つて、口々に[illegible]冗談やらを浴びせかけた。その[illegible]に、[illegible]は何はいつても焦點は定めずに、[illegible]しげに、[illegible]のことを考へて[illegible]た三好が、その時たし[illegible]げに口を切つて、

「ぢア兎も角僕は泊つて行から。君は君の都合で、歸るなり泊るなり御隨意だが、歸るのだつたら、明日の朝間違ひなく一つ誘つてくれないかね。若しまたその都合もつかないやうだつたら、電話でなりと病院を知らせてくれないか。何しろさう云ふ話は、一刻でも早い方がいゝよ。それで僕が行つてみて、模樣によつちア、ちよいと僕東京まで行つて來てもいゝや、手紙ぢアどうもまどろつこしくつて仕樣がないからね。何しろ、一生に一度の臨終の願ひなんだから、僕たちもいつものやうなよたな氣持で扱つちアすまないよ。そのお民さんとか云ふ人に對しても、紀尾井町さんに對しても、實際お義理でなく、眞面目な氣持になれるからなア」

「それアさうですよ」

とまでは、ひどく眞劍な調子でうけたが、すぐ瀧十郎はニヤ／＼と笑ひかけて、―然し貴方もお變んなさいましたね。なんぼなんでも、それほどとは思はなかつたが……」

「なんぼなんでもたアなんだい。第一それほどどうなつたつて云ふんだい」

戯れに、喧嘩面で突ッ掛かつて行くと、瀧十郎も同じく脣をとんがらかして、

「だつてさうぢアありませんか。以前の貴方なら、中々これくらゐのことで、さうへロ／＼に菩提心を起す氣支はなかつたんですもの、それが……」

「うるさい！」

「それがどうです、——なんぼなんでもでせう？ 一言半句もありますまい？」

「いや、君には惡だよ、袋惡だよ。……ところで、御新造か、いつぞやセキハンへ赤坂へお伴ねがつた時には……」

「殿中おやぞよ」

「無論、……だつたんでせうな」

「だつたとは、何がだつた……」

瀧十郎には、急に意地惡い氣持がおさへられなくなつて來て、故ら相手を苛立たせるやうな、複雜を極めた表情を扮つた。裏とみせてそのまた裏が本當で、とみせたのがまた裏で……、と云つた風な心持のものだつた。

「だつたかい？ それをはつきり云つてもいゝかね？」

「えゝ／＼」

間違ひなく「願」と云ふ隱語が持ち出されることと思ひきめてゐた鼻のさきへ、

「肘鐵砲だつたんだらうと云ふのさ」

三好は、興奮のために少しく青白みながら、傲然とかう云ひ放つた。

茶斷鹽斷

一

「もし、もしえ……」

年すこし前の日本橋東仲通りの或る四角で、日傘を肩に、何かおもへごとをしながら、俯向で小刻みに、つい鼻のさきを突ッ切つて行く二十三四の、生地のまゝで美しい横顔へ、唾の飛びさうな近くから、から聲をかけたのは、頭に丸まると染めた半纏着の半股引で、見榮もなく紺の大風呂敷包を背負ひ込んだ、この炎天に、例のクリクリ刈の大入道、おでん屋の主人だつた。

「あら！」

はツとして振り向いた、そのいゝこなしに、自分だけでてれて、日盛りを急ぎ足に來かゝつた暑さと一緒に、ぽつと顔を染めながら、「まア、吃驚するぢアないの……」

「いかがです、隨分久しくお目にかゝりませんね」

さがつた眼尻に、翁の面にあるやうな皺を疊んで、「ちつとお出かけくださいましな、と云ひたいところですけれど、なんと云つても一流の

料理屋に違つたもんで、この月一杯はお休みです」
「あら、生意氣ねえ」
―生意氣はないでせう。から見えたつて、郵便貯金で三千七百五十五圓、ちやアんと預金してあるんですからね―
「どこへ行つて來たの？」
「きまつてまさね、買ひ出しですよ」
「お休にしてゐても買ひ出しがあるんですか―
―それアあんた、屋臺は休んでたつて、お座敷がありますもの、そのほか園遊會……はあんまり暑中にやアないが、つまり鮎狩のお供な、ちよいとまたその、鎌倉あたりの御別莊がたから御註文を頂きますな、中々これで忙しいんですよ」
―結構ですわ……」
―あんたは……？―
―あたしなんぞ、人様のやうに山だ海だつて飛んであるける身分ぢアないんですもの、毎晩あせみづくになつて、一生懸命かせいでますわ」
―どうも、恐れ入ります―
笑ひもしずにうやうやしく頭をさげて、「いえ、それでなくつちア妄ですよ。この節は皆さん夏になると、どつかへ出かけるのを見榮のやうにしてなさるが、……そのくせ一文だつて身錢を切るわけぢアなし、お客樣こそいゝ面の皮でさアね」
―だつて、その我儘が利くんだから大したもんぢアないの―
　何が大したもん……。姐さんなんざア、出かけようと思やアいつだつて、そんな、しみつたれな、お客樣の世話になんぞならずとも、どこいでも好きなとこへ行つて、さんざッぱら保養して來られるんぢアありませんか―
―とんでもない……―
「いゝえ、人間いつでも出來ると思ふことは、却つてしないもんですよ。珍しがつて、嬉しがつて、飛んでく人に限つて、裏へ廻つてみれア碌なもんぢやありませんや。現にあたしを御覽なさいな、かうして眞黒になつて働いてゝも、それ、いま云ふ三千七百五十五圓でせう―
―でも、よく貴方、あたしが分つてね―
―それア分りまさアね。おまけに鼻のさきをすれすれにお通ンなさるんだもの。一體いやアこんな往來なかで、あたしどもみたいなもんが、矢鱈にお言葉をかけたりしちアすまないくらゐは、これでもちやんと心得てるんですけれどね、これを話で云ひア、どこそこの角でパッタリ出ッくはした、と云ふやつですからね。正にパッタリぶつかりかゝつて、ひよいとお顏を見るとあんただもんだから、ついそれ、失禮をも顧みずな……」

二

　からの自動車が一臺、大通りの方からはいつて來て、四辻の曲り角で、毀れかゝつた音の惡い喇叭をプウプウ鳴らした。
　「おあぶなうござんすよ」
と、丸三の爺は輕く肩に手をかけ、角の下駄屋の飾窓のそばへ押しやりながら、―それでまアついお言葉をかけちまつたやうなわけなんですけど……―
―あたし、實はちよつと齒醫者さんまで行つて來ようかと思つて出かけたんだけど、痛みもとまつたし、あんまり暑いから今日はよすわ。急ぎがないんならうちへよつていらつしやいな、なんか冷たいものでもとうさ云はすから―
へ、有難うござんすが……」
　急ぐの？
―いゝえ、別に急ぎやしませんけれど、またのことにしませうよ。あたしみたいないゝ男が上り込んでるところを、若しまたひよつと旦那にでも見附かつたりすると、あとがうるさうござんすからね―

「いゝえ、それで旦那をしくじつたら、あんたンとこへ押しかけ女房に行くばかりだから。……あゝ、でも駄目ね、あんないゝお上さんがあつてはね」

「旦那つてば、何は、紀尾井町の旦那、どうも困つたことになつちまひましたね。……憖かあちらと御一緒においでくだすつたんでしたつけな？」

「まア、随分心細いのね、四五遍も行つてますのに」

「さうでしたな、いつも紀尾井町の旦那と御一緒で……、さうでしたな」

「さうよ、随分あなた忘れつぽいのね。ぢア、とてもあたしの名なんぞ覚えてやアしないんでせうね」

「だつてそれア伺ひませんでしたもの」

「あら、あんなことを云つて。」

「さうですか？　伺ひましたか」

改めて、無遠慮にじろ〳〵と顔を見詰めながら、「あ、さうか、さう〳〵、さうでしたつけねえ」

「何かさうでしたつけね……」

何故か、その時に妓がぽうつと頬を染めたと見て、三吉は、目尻の皺を深く、ニタ〳〵笑ひかけて、

「いや、これはどうも失禮を……、その節はまた御馳走様で……」

「何が御馳走様よ……」

「何かはないでせう、ねえ、姐さん、人命の女将さんにもお世話もんですつてね」

「知らないわ」

肩を揺つて、日傘の柄を、兩の掌の間に、きり〳〵と廻した。

「あ、さうだ！」

三吉は、ぽんと膝をうつて、「幾代さん……、ね、さうでしたね？」

「あら、さんざ話をしといてから、今ごろやつと思ひ出したりして……」

「あ、さうか。どうも、さつきから随分考へてたんですよ。お顔はよウく覚えてるんだが……。自慢ぢアござんせんが、可なりこれで下町の綺麗な姐さん方がいらしつてくださいますからね、ついどうもごつちやになつちまつて……」

「今度こそ忘れられないやうに、是非一遍うちへ連れてつとくわ。さあ、黙つてついていらつしやい！」

優睨みに睨め据ゑられると、三吉は、出ッ歯の口を無理に結んで、丁寧に頭をさげた。

「いらつしやいよ」

「へえ、もうどこまでもお供いたします」

三

幾代は、先に立つて、もと來た方へ引き返した。[illegible]うしろに從つて、背負つた風呂敷包みの重みのために、[illegible]下のやうに首を前につきだし、ちびた朴[illegible]を日和[illegible]の[illegible]にカタコトと鳴らしながら、三吉は、幾代の名を度忘れしてゐたことの言ひ譯を繰返し、その代り思ひ出したとなると、一遍にいろんなことが解つて了つたと云つて、またしても人命のことをちよいちよい匂はせたりした。そんな内緒ごとまで、どうして知つてゐるか不思議だらう、と云つた風な口吻だつたが、それくらゐなことは、信之に頼まれて、三吉が自分で呼んで來た自動車なのだから、あとでそこの運轉手にでも聞けば、すぐ行先くらゐ知れる筈で、幾代にとつては、大して珍らしくも可笑しくもない話だつた。[illegible]しと〳〵雨の日、久し振りに逢ひ戻つてから、急に兩方でうちとけた氣持になり、それ以來、信之が公判廷で卒倒して床に就くやうになるまでの二月半ほど、三日にあげず逢ひ續け、逢ふ度ごとに深い愛情にはいつて行つたのを、不治の病と聞いてからは、日頃信心の[illegible]、日參

し、お百度も踏み、茶斷鹽斷の祈願をこめ、一心に平癒を念じてゐたのだ。今ごろになつて、飲みつかれた揚句、夜あかしのおでん屋から、向島へ自動車を飛ばした昔のはかない逢瀬などを、かれこれ揶揄はれたとて、なんの變哲もないのだが、それでも信之に關したこと〻なると、矢つ張り虚心平氣ではゐられなかつた。容子を知らうにも、やたら手紙を出していゝやらどうやら分らず、たまに伊庭や瀬川と云ふやうな遊び仲間の文學者の座敷にでも出た時に、さうさう根間ひ葉間ひするわけにもいかないから、ほんの二言三言の話を、大切にもつて歸つて、あとは眠られぬ床に、あゝかからうかと想像してみるくらゐのもので、心配の種はふえこそすれ、決してへりはしなかつた。――それほどの馴染でもない、彼方では名前さへ碌に覺えてはゐなかつたくらゐの丸三の爺を、わざ〳〵うちへ誘つて歸らうと云ふのも、さう云へば、ひどく現金にあたるけれど、實は詳しい容態も聞きたし、よしそれは解らないまでも、懷しい人について、何かと話し合ふことが出來ると思へば、今の幾代には、往來の立話くらゐで、そのまゝ別れてしまひ憎い相手だつた。それだけに、先刻から、第一番に訊ねたいことには却つて觸れられずに、つまらない冗口ばかり利いてゐたのだが、そんな心持が彼方へ通じようわけもなく、舊めかしいことなど揶揄はれるにつけても、氣の短い幾代は、なんとなくじり〳〵して來て、折角せい一杯好意のつもりで云つてくれる言葉にも、碌すッぽ返事をしなかつた。足もとに影のちゞまる日盛りを、氣むつかしげに口を引き結んで、たゞとつとと歩いて行つた。

「姐さんは、隨分足がお早いんですね」

「えゝ、早いでせう」

「老人の足ぢアかなはねえ……。かうしてお伴して行つて、さアて、何が御馳走になれることやら」

「なんでもあなたのお好きなもの……」

「さうですね……」

「あなたお酒はあんまりいけなかつたんでしたつけね」

「えゝ、やりません。酒は毒ですよ。紀尾井町の旦那だつて、あんまりはうづのねえ飲み方をなさるから、あんなつまらねえ病氣を引き出しちまつたんでさアね」

四

荒ッぽく云ひ罵つてゐる裏に、けれども親身な氣持は十分あつた。いつそ死んでしまつた後ならば、何も壽命と、却つて諦めいゝけれども、かけがへのない一生を、飲み食ひの愼みを缺いたために、死病に取りつかれて、あたら棒にふるとは、あんまり馬鹿けた話ではないか、と氣に入つてゐる人だけに、腹が立つてならないのだつた。その言葉の裏へにじんだ好意が、幾代にはひどく賴母しかつた。

「ほんとね」

たゞ一言同意を表しただけで、けれども幾代は、そんな氣持は氣ぶりにも見せずに、さつさと道を急いで、やがてとある横町に、わが家の格子戸をあけた。

「へえ、こちらですかい。どうもまア、よくもこんなに磨きこんだもんだなア」

云ひながら、丸三は、風呂敷の結び瘤から片手をはなして、格子の横棧を指の先で撫でてみた。

「大へんなうちよ」

突き當りは丸窓をとつた壁で、右へ三疊のあがり口、障子を拂つて、二階へあがる梯子段はまる見え、そのかげに臺所、湯殿、女中部屋ぐらゐがあるらしく、左へ續く奧は、簾戸から簾戸で、ほの暗く、涼しげに、六疊八疊が窺はれた。

「結構なお住居ですね」

と、まだ荷を背負つたまゝ、無遠慮に、あちこち見廻して、「それにまア、どこもかも塵ツぱ一つおつこつてませんが、姐さん、あなたよつぽど綺麗ずきとみえますね。その代り、これぢア女中衆は泣かされらア」

「ところが、その女中さんが綺麗ずきで、あたしが散らかして歩くそばから〳〵と片づけられてるの。まるでお尻から掃きたてられてるやうな氣持よ」

ピシャリ〳〵簀戸をあけ放して、一旦奥の八疊まで行き、神棚の前でちよいと手を合せて、すぐまた出て來ながら、「お波、お客樣ですよ」

「姐さん、あたしよしましたよ。この風態であがるうちぢアないや、これア」

「ぢア途中來る間は、その風態であがるうちだと思つて、内心輕蔑してたのね」

「そ、さう云ふわけぢアないけれど……」

と、故意とドギマギ面喰つた風をしてみせて、

「暑いや、これア、どうも馬鹿に暑いや」

「兎も角もその風呂敷包をおろしたらどうなの」

「へい〳〵、なんだか知らないが、まるで叱られに來たやうな氣持だ」

そこへ出て來た女中に、

「お紅茶冷してなかつたかしら」

「氷を入れて、冷藏庫に入れてございます」

「あらさう、よかつた、頂戴な。……さあ、おあがんなさいつてば、何してるのよウ」

「氷を入れて冷藏庫に入れるつてのは、一體どう云ふんだらうと思つて、今いろ〳〵考へてたところなんですがね……」

「お紅茶のいれ物に氷を入れて、それをまた冷藏庫に入れてあるんぢアないの」

「あ、さうですか、あたしアまた、冷藏庫に氷を入れて、そこへ入れてあるつて云ふのかと思つて、さうするとお宅の冷藏庫は、普段は氷がはいつてないのかしらと思つて……」

「くだらないことを云つてないで、さつさとおあがんなさいなね」

「おや〳〵、まご〳〵してると、氷を入れて冷藏庫のなかへ摑り込まれちまひさうな見幕だ」

五

上り框に、どつこいしよと背をおろしてから、脊腰にかけた自分の足の埃に氣がつくと、丸三は默つておもてに出て、四尺ばかりの露路へはいり、水口に立つて、

「ちよいとすみませんが、あなたバケツを貸してくださいませんか」

だしぬけに聲をかけられて、冷し紅茶を客に出す支度をしてゐた女中のお波は、吃驚して振り向いたが、そこにのそりと立つてゐる丸髷の主が、たつた今まで玄關の方で何か云つてゐた客人だらうとは夢にも思はずに、

「どなたです」

と、かう云ふうちの者らしい、ちよつとでも弱味は見せまい鼻つ張りで、いやにきつぱりする。

「ヘツ」

ひとを小馬鹿にしたやうな恭しさで、膝まで手をさげ、「手前、四谷に屋臺おでんを渡世に致し居ります丸三……、以後お見知り置かれますやう」

「いやだわ、あたし……」

二十五になる、しつかり者の部屋も、不氣味になつて來て、そろ〳〵と腰を擡げ、奥の方へはいつて行きながら、「姐さん……」

「何よ」

玄關に姿が見えないので、どこへ行つて了つたらうと思ひながら來かゝつた雛代は、出會がしらに、お波のへんてこな顔つきを見て、「どうしたのよ」

「なんですか、氣違ひみたいな人が來て……」

「どこに」

聲をひそめて、
「そら、ついそこに立つてますよ」
窺いてみると、三吉が、前に手をにぎり合せ、免状を貰ふ子供のやうなしほらしい容子をして、おつと頭をうなだれてゐた。
「あら、どうしたの？」
「へゝゝ」
眼尻をさげて、馬鹿に嬉しさうに、「ちよいと、おみ足を洗はして頂かうと思つて……」
「構はないことよ」
「いゝえ、いけませんよ。この上うちぢう足あとだらけにして歩いたひにやア、今度こさア女中さんにつまみ出されちまひますよ。ねえ、あなた……」
と、急に言葉をかけ、目を向けられたお波は、呆れてぼかんとしてゐた顏を、それでも有繋にすぐ笑ひほころばして、
「どういたしまして、どうぞそのまゝ」
「どこへ行つちまつたのかと思つてたら、いつの間にかこんなとこへ廻つて來たりして、ほんとに仕樣のない小僧さんねえ」
「さア、ほんとにさ、雜巾バケツを貸してくださいなね」
「一度云ひだしたら中々きかない人ぢアないんだから、うるさいから、お波、貸しておあげよ」
「うるさい……？」
「うるさいわ、ほんとに。よそのうちに行つて、さうなんのかのと世話をやかすもんぢアないことよ」
「へーい」
「さあ、足をふいたら、さつさとこつちへ上つて來るんですよ」
　そのまゝ幾代は臺所を出て、ほんの五六本青いものを植ゑ、植木棚に朝顏の鉢など並べた、猫の額ほどの庭から、たまに軒の釣荵にチリ、ンと風鈴を鳴らすほどの風を入れる奥の八疊へ來て、ぺたんと横ずわりに腰を落した。
　糊けのないいゝかたの肩がすべつて、人には告げよ夏痩と、あはれ幾代は、身も細るほどの思ひに、大都の炎暑をさへ忘れてゐたのだ。

六

　幾代は本名を隅田いくと云つて、二代前のことは話にも聞いたことがなく、從つていかなる人の裔とも、今もつて知れないほどの不幸零落のうちに生れて來た女だつた。九尺二間の裏長屋に、もの心がついた頃の父親は、あとで思へば、やつと三十を一つか二つ出たばかりだつたらうか、淺黑い、上背に、一筋繩で馴いたやうな隈のはいつてゐるのが、窪んだとよりは、パッチリしたと云ふ印象を、涼しく澄んだ兩眼に與へてゐる、丈のすらりと高い、江戸前の、素晴しいいゝ男だつた。後に聞くと、隅田の姓は母のもので、その男が果して實父かどうかもはつきりしなかつたが、兎に角彼の女の十二歳までは、さう云ふ社會の、年若な父親としては、よその子の手前も恥しくなるくらゐ可愛がつてくれた。
　その時分の母親は、むくみの來る心臟病で、青ンぶくれて、唇まで厚ぼつたくなつてゐた。人の話には、吉原で何家の某と云へば、五本の指には洩れなかつた名妓のなれの果ださうだが、わが母親として眺める子供心にも、あんまり氣持のよくない顏かたちだつた。それに、立居振舞の鈍く、しぶ〳〵げなのと不釣合に、氣性はいつも張りつめてゐて、少しでも何か氣に入らないことがあると、せい〳〵息を切らしながらも怒鳴りたてる。相手が良人だらうと、良人の仲間の鳶の若衆だらうと、家主だらうと、そんなことにちつとも頓着はなかつたから、まして幼いおいくは、上目使ひに母親の機嫌を窺ふやうな娘に育つた。煮たきぐらゐはぼつ〳〵と自分でやつたが、その姿を恥ぢてか、おもてへは決して出なかつたために、おいくは、少し大袈裟にな

へば、足が達つてよろ／＼歩けるやうになると同時に、使ひ歩きに追ひこくられたのだ。

　おいくが十二の歳の春から初夏へかけて、母親の病がだん／＼あらたまつて行つた。そこへ、青葉に陽の焼けた或る夕方、身なりもさして賤しくはないが、それよりも人品のいゝ、白髪頭を短く刈り込んだ、背紺の質素な爺さんが訪ねて來た。その爺さんと母親と、母親と仕事から歸つて來た父親と、父親とその爺さんと、仕舞に三人が一緒になつて、永いこと何かごとごと話し合つてゐた。夜おそく、歸りがけに爺さんが、上り口の板の間でひとりぽかんとしてゐたおいくの頭へ輕く手を置いて、「これがいく坊か。おそくまでよく目が覺めてるな。どうだ、小父さんと一緒に小父さんのうちに行かないか。どうだ」

　強い反感を感じながら、即座にいや／＼をすると、笑つて、

「可厭か。それア困つたな。今夜は小父さんが來てゐたんで、いつまでも寢かされないで可哀想なことをしたな。今度來る時には、なんか土産を持つて來てあげようよ」

　そんなことを云ひながら、ぢツと顔を見てゐた。――これが實の父親だとも云ふ。また、その人に嫌はれてゐた間に、いゝ男の噂と出來て、夜逃げをして陋巷に隱れてから後に、腹に宿つたのだ、とも云ふ。

　六月十二日に母親が死んで、形ばかりの葬式をすませた翌日、もう一度この白髪頭の人が現はれて來た。そしてそれきりおいくは、今に至るまで、色の淺黒い苦み走つた父親――でないとしても、父親らしい愛情を向けてくれた男の顔を見ないのだ。昔を思つて懷しいと云へば、たゞその人の面影くらゐのものだつた。

　おいくが引き取られて行つたのは、下根岸の、その頃もう四十六七と見えた、田村かめと云ふ白髪頭の爺さんの妾のうちだつた。

七

　白髪の爺さんは、黒門町へんの古い藥種屋で、堀内と云ふの、隱居だつた。若い頃から河東節に凝つて、自慢の咽を聞かせたさに、少しでも財布がふくらんでゐれば必ず華街へ出かけてはたいて來る、その間に何もかも忘れつくすと云ふほどの深はまりもなかつた代り、お相三味線と云ふやつで、藝の方の女達とも、いろ女ともつかないやうなものは、あつちこつちにあつたと云ふ。誰がやつたところで、凡そ同じやうな商賣柄ゆゑ、掛引や思はくに手違ひがあつたわけでもないのか、時勢の變りと共に、じりじりと押されて行つた。で、同族會議と云ふのにかゝつて、高等商業を出たばかりの長男に家督を譲らされる仕儀になつたのは、もう二十年も前の、彼が四十七八の働き盛りだつたけれど、いろ事に家産を擲つてしまふ意氣もないだけに、若い者に家を譲つて行くと云ふやうなことには、凡そ執着も興味もなく、くさ／＼しきつてゐた折柄だから、願つてもない仕合には、かり、息子から宛がはれる小遣錢に、いつも決して多い少いを云はず、甘んじてゐるだけのことで、ほど今まで通りの生活が續けられるのに滿足してゐた。それには、女房に早くに先だたれて、氣樂な獨り身でもあつた。

　下根岸の妾は、おいくが引取られて行くつい二三年前に圍はれることになつた者だが、その前から長男が新しく始めた商賣が思はしくないで、自然隱居も足らはぬがちに、相手になつてくれる女もだん／＼尠くなつて行つて、今ではもう河東どころか、端唄が十ばかりと、長唄が二つ四つついけるくらゐの代物になつてゐた。家は六疊、三疊、二疊に臺所、それでも土地柄だけに、さう埃りにもまみれてない枸橘垣のそばに、鎌倉楓葉の下枝の垂れたやつが二三本ひよろひ

よろと立つてゐるやうな小庭がついてゐた。淺草の待合に、女中奉公をしてゐた田村かめと云ふ、――堅肥りで、髮の毛が著しく縮れてゐて、赤味のさした肌にてりのある、愚鈍な、その代り飛切りの上人間だつた。――下根岸の妾宅、と云へば、おツそろしく粹に聞えるが、その内容は、實はこんなわけだつた。

こゝでおいくは、十五の年齢まで育てられた。妾のおかめ一人の時には、なんのかのと口やかましく追ひ使はれはしても、どこかしらに、微かながらも彼方から愛を求めて來るやうなところが感じられて、氣持の上では、決して慘とは云へなかつた。そのために却つて、從順の裡に一種の傲を藏した、あまり可愛氣のない性分が萌して來た。隱居は、日一日と目に見えておいくに對する愛情を増して行つた。猫ツ可愛がりに、膝の上に載せて撫で廻したりするには、彼の女はもうだいぶん大きくなりすぎてゐたが、それでも構はず、自分に甘えかゝらせようと思ふばかりに、まづ自分の方で甘ッたるい口の利きやうをしたりした。おいくの方が、大人の心持で、そのでれつき加減に呆れて了ふやうな時があつた。

―また始まつた！　なんですよウ、みつともない！」

おかめは、隱居のさう云ふ容子を見ると、これればかりは馬鹿々々しく立派な齒並をむき出して、きまつて怒鳴り立てる。

「何が見つともない。俺の娘を俺が可愛がるに、別に不思議はなからうぢやアないか」

「ヘツ、俺の娘……、どこまでお目出度いんだか……」

「なに、お目出度い？　俺がお目出度いつて云ふのか？　こ、この娘はな……」

思はず云ひ募らうとして、さすがに老人らしく横を向いて、ぶつ〳〵捨臺詞を呟きながら、日向にごろりと長くなつたりするのだつた。

八

大體から云つて、おいくの下根岸での生活は、それ以前ほどの苦しみがなかつただけに、だらけた感じのものになつて來た。それには、頽齡の男と、無智で貪慾な女との、なんの撿束もない共同生活に醸される、ひどく調子の低い、下品な氣分に影響されるところも少くはなかつた。さうしてそこに、二年の月日が經つて行つた後に、彼の女は、吉原の或る藝者家に抱へられることになつた。

軒並下駄の鼻緒を内職にしてゐるやうな、名のみ豪勢な花川戸の陋巷に、夕燒空の下を、溝板を踏んで尋ねて來た時分の隱居は、あたりの卑賤なためばかりではなく、どこか大店の旦那らしい上品な、鷹揚なところもあつたのだが、長男がうんと株をもたされて社長に祭りあげられてゐた製菓會社が、人にも話せないやうな馬鹿々々しいつぶれ方をして以來、ほんの申譯に煙草錢くらゐのものしか仕送つて貰へなくなつて、急に根性が貧乏くさく縮かんでしまつたせゐか、狡猾な、普段から娘子供の賣買や鞍替で飯を食つてゐさうな爺に見えて來た。昔は兎に角堀内の旦那で通つてゐた人が、臆面もなく、舊い馴染の老妓を尋ねて行つて、立派に祝をして引かせた妓の末路から、自分の今の身の上を、憐つぽく物語つて、最後に胤の知れない私生兒で、少し纏まつた金を借りたいと切り出したのだ。その老妓には斷られたが、泣きつくやうにして紹介だけして貰つた、その頃賣れ盛りの一流藝者のうちに、やつと話がきまつたのは、おいくが十五の春だつたが、それ以來、十九の年齢に姙娠で五六ヶ月引いてゐただけで、その後は今の日本橋から出るやうになつて今日までの十年間を、彼の女は、'客'と云ふものに寄生して、狹苦しく歪んだ一隅から、人生の種々相

に面して來たのだ。
藝者としての幾代は、決して出しや張りにならない程度で、一流らしい自恃を以て、どう云ふ階級の人の話でも相應に理解し、ぼろを出さずに、さうかと云つて上の空にも流れず、明るく面白く會話を運ばして行く鮮やかな手際を示した。藝ごとにも熱心な方で、太鼓は土地でのうち手だつたし、唄は清元をよくした。要するに藝者らしい藝者、――借りものと云ふ感じの更にない藝者だつた。けれども、その裏で彼の女のふんで來た生活は、ひどく藝者らしくないどころか、素人にも稀な忍從と克己の、世帶じみたものだつた。
吉原に雛妓で出て間もなく、彼の女に戀した若者があつた。鎧橋の近くに大きな店を構へてゐる林と云ふ仲買の若旦那だつた。二年ほどは、たゞ「仲よし」と云ふやうな意味で始終よばれて行き、氣の張らない面白い座敷と喜んでゐた。きまつてよばれる三四人のうちで、殊に幾代だけに篤くすると云ふ風は氣ぶりにも見せなかつたから、なんにも知らずに、無邪氣に、彼の女の方でも好いてゐた。そのうちに「仲よし」仲間の一人が、若旦那に對する戀の心を、だんだん露骨に見せ始めた。かゝつて來ると、第一番に驅けつけて行つては、仲間の蔭口をきいたりして、それとなく水をさし、その人の周圍を、自分に頭のあがらない小さな子どもばかりで取り卷かうと企てた。それに對する若旦那の反感を動機として、急にあとの二三人が近づいて行つたなかに、幾代は生得の負けン氣から、林さんと聞くと、胸を轟かして、何を措いても飛んで行くやうなことになつて了つた。

九

それで俄に勇氣づけられた林の若旦那は、さすがにすることが大掛りで、茶屋をもつてうちの方へ正々堂々と、幾代の世話をしようと申し込んで來た。その時の彼の女は、不思議な習慣によつて、既に純處女ではなかつたけれど、さうかと云つて、これときまつた旦那などは、土地柄から云つても年から云つても、まだあらう筈はなかつた。抱主から云へば、手つかずの大した賣ものだつた。それにしては、いくら金に絲目をつけないと云つても、相手の若くて綺麗なのが、何よりの傷だつた。若い同士でかッかとなられては、商賣にはさはるし、とゞのつまりも見えすいた話だつた。で、暫くごたついた揚句、矢つ張り目の前に並べられる金には勝てないで、公然と二人の仲が結ばれることになつた。
幾代としては、それまで戀と云ふほどの氣持ではなかつたのだけれど、そんな風に、まるで素人の結婚にも等しい初心さで一緒になり、一週に少くも二度以上逢ひ續けて行くうちには、落ついた、しみじみとした愛情が湧いて來た。よその座敷の辛さも苦にならないやうな幸福が二年ほど續いてから、彼の女は身重になつた。鎌倉の山手へよつた百姓家の離れを借りて、そこで出産の時を待つてゐた。
林の總領息子はそのとき二十八で、親たちや世間の手前、相應以上のうちから嫁を迎へることに話がきまつた。幾度も鎌倉まで出かけて行つては、云ひそびれて歸つて來たりしてゐるうちに、自然と足遠くなり、手紙も書き臆くなつて了つた。心細く、いやな豫感にばかり惱まされてゐた幾代の耳へ、思はぬ方面からその結婚話が傳はつて來た。そのことでは、然し、彼の女の心はさして痛みはしなかつた。晩かれ早かれ、さう云ふ時の來るのは、解り切つてもゐたし、若し萬一にも自分を正妻にとでも云ひ出されたとしたら、それがどれほど熱心な乞ひであらうとも、決してそんな無理な境涯に身を置くやうなあと先見ずはしまい、飽まで斷り通さうと、しつかり決心もつけてゐたくらゐで、諦

めの寂しさはあつても、はしたない瞋恚嫉妬の念にとり逆上るやうなことはなかつたのだけれど、たゞその話が、好きな男の口から、優しく云ひ聞かされたのではなくて、思ひもかけぬ他人によつて齎されたのには、はかなくも悲しい涙がせきあげて來るのを、どう耐へやうもなかつた。いろ〳〵思ひ迷つた末に、結局なんにも知らない態で、男からとかくの挨拶が來るのを待つことにした。

菊日和のあたゝかい晷が、靜かに〳〵移つて行く緣先の柱にもたれて、何氣なく空を仰いで、微にほッと溜息をつく男の容子を見ると、幾代はたまらなくなつて泣き出してしまつた。なんにも云はずに、男もハンケチを目にあてた。それだけで、話すことの必要も何もなかつた。感情は、互の胸に溶け、流れ、隈もなく行き擴がつた……。

産は重かつた。死兒を生んだあとも重態が續いた。林はその枕もとへも落ついては坐つてゐられないやうな、結婚前の體だつたので、知らせに驚いて驅けつけて來た堀内の、もうすつかり老耄きつて了つた隱居に、立ちがけには、今すぐでも打てるやうに印紙まで貼つた電報用紙を、必ず一枚づつ預けて歸つて行つた。

醫者も不思議がつたくらゐに、幾代は十九の、厄を落して、やがて快方に向ふと、どん〳〵もとの體に返つた。林の新郎新婦の寫眞が載つてゐる婦人雜誌の口繪を、偶然目の前に開いた時にも、寢床の上に仰臥したまゝ、たゞちよつと微笑んだだけで、落ついた、以前よりも數倍落つきはらつた彼の女になつてゐた。

十

病氣は全快したが、幾代は、もう一度前の土地から出るやうな氣にはどうしてもなれなかつた。藝者稼業をぬけられないのは仕方がないとしても、せめて全く新しい周圍のなかに自分を見出したかつた。そんな相談も、矢つ張り林を相手にするよりほかはなかつた。吉原の方の抱主に、さんざ可厭がらせや因業なことを云はれた揚句、それでもどうやらかうやら今の土地へ來てひろめをすることが出來た。

土地が變つてからは、目に見えて商賣熱心になつた。金がほしくてではなく、たゞ一日も早く藝者氣質になつて、その日その日の勤めのつらさを忘れたかつたのだ。謂はば「職業」と云ふ衣を身に重ねて、わが心の動きをそとへは見せず、幾分とも感じを鈍らせて置きたい氣持になつて來たのだ。泥水と呼ばれる、その稼業の水に、そつくり身をひたして、心までも冷さうとしたのだ。そして、彼の女はそれに、可なり成功したと云つてよからう。五年たゝないうちに、生えぬきでもない幾代の名が、約束の數にもれることは稀になつて來たのだから。

結婚後の林は、業態にも似合はない以前の律義さをだん〳〵失つて行つた。大人の圖々しさ、狡猾さ、複雜さなどを、それに裏づけるなんの信念もなしに、たゞこの上もない世間智として喜んでうけ入れたがる生意氣ざかりの年頃が來たのだ。自然、幾代一人を大事に守つてゐるやうなことを、友達の手前にも寧ろ恥として、あつちこつちを食荒して歩いた。幾代に對してする筈のものを、二月三月もほつたらかして置いたりした。さう云ふことをしたあとは、きまつてまた疑ぐり深く、嫉妬づよくなつた。酒は飮まないのだが、ちよつとしたことで顏色を變へて慍りだし、時には手荒なまねもした。どうせ俺もかうした水商賣だから、年ぢう出來不出來はあるんだ、いゝ時には、何を措いてもお前のためになつてやる、その代りには、手詰つてゐると思つたら、お前の方でも少しは辛抱して、へんなまねをして俺の顏へ泥を塗るやうなことのないやうに、――それくらゐな義理人

情はわかりさうなもんだ、よくそんな風に云ひ出した。まるで水の手が切れさへすれば、女と云ふものは、前の男からすぐ次の男へと移つて行くものときめ込んでゐる口吻だつた。けれどもその底に、林の眞實が語られてゐないわけでもなかつた。なんと云つても、初戀以來つゞいて來た女のことで、ほかの浮氣は浮氣として、も、やつぱり幾代に對する執着が一番深かつたのだ。日本橋へ出て二年目に、彼の謂ふ出來のいゝ時があつて、立派に祝をして、自前にしてやつてゐるのだ。幾代は、身に疚しいことはないけれど、いつも大人しく打たれたり蹴られたりしてゐて、それで別に男を恨めしくも思ひはしなかつた。

然しかう云ふ關係には、それ自體のなかに、はやくも破局は十分に芽ぐんでゐた。寧ろ、それを意識の上底の下に感じてゐることによつて、どうやら續いて行くやうな態さへあつた。意識の閾下に押し鎭められてゐる倦怠や不滿足は、常に解放を待ち望んでゐたのだ。

そこへ信之と云ふものが現はれて來た。千を以つて數へられるほどの男の心を、彼の女の氣持では、兎も角も見て來たつもりでゐたが、そのなかのどの型にもあてはまらないやうなものを、朧げながら信之の裡に感じた。最初は、その珍しさで惹きつけられて行つた。それから、いやに淡々としてゐて、易くものごとに動きさうもないのが、不思議な魅力をもつて、頼母しくも懷しく感じられだした。

十一

信之の方でも、決して彼の女を嫌つてはゐないと感じられた。けれど幾代に、出來るだけ自分の氣持を押へ鎭めながら、大勢一緒の座敷でばかり半年の上も逢ひ續けた。けれども、人の感情は、言葉とか、眼色とか、振舞とか、さう云ふ形あるところでばかり現はされるものではない、心から心へぢかに、なんの仲媒もなく、通ひ傳はる温か味には、覆ひ遮らうにもすべのないものだつた。水の低きにつくやうに、どこに一つ際立つた言葉や目つきが交はされたのでもなしに、自然々々と心が相寄り、體が近づき、さうして或る夜の激情が、隙間なく二人を結んで了つた。

これに、良心の關所を大手を振つて通らせられる幾代ではなかつたけれど、さうかと云つて、林の前に事實を告げて了ふほどの勇氣もなかつた。義理人情へ絡めてもそれは出來ないことゝ考へたかつた。良心の命によつてつく嘘の、この世の中にあることを、感謝と傷心とで認めてゐる彼の女としては、そのために自分ひとり苦しがつてゐるのが、最上の道徳だと思ひ諦めるよりほかはなかつた。林にも信之にもなんにも聞かせずに、あらゆる咎を自分ひとりの胸にうけようとした。

驚くばかり行き届いた、細かな注意を拂つて、内證の上にも内證にしてゐた信之との逢瀬も、然し度重なるにつけて、ちらほら人の口の端にのぼるやうになつた。何事もない時分でさへ、影を形に疑はれてゐたくらゐだから、敏い林の耳からこの噂が逃れてゐようわけはなかつた。夜更とは云ひながら、往來なかで、靴のまゝ腰を蹴飛ばされ、軒下に寄せてあつた手車に倒れかゝつて、脾腹を打ちつけたこともあつた。そんな目にあへばあふほど、却つてあだびとの戀しさは増すばかりだつた。さうかと云つて、林と云ふ人も、心から氣の毒に思はれて、どうしても、きつぱり切れとくれとは云ひ出せなかつた。ほんとうにすまないことをしてゐるのだから、うち打擲で氣が晴れるものなら、あたしの體はどうなつてもいゝ、そんな氣持で、心の底から詫び入りながら、大人しく虐められてゐた。

思ひもかけないところで、さう云ふ幾代の苦境を聞き知つた信之は、早速會ひに行つて、なんにも理由は云はずに、もうこれきり別れようと切り出した。すぐ幾代には、その裏の事實は察しられたが、あらはにそれと云はない先方の勦りに對しても、こゝで何もかも自分の感情を壓し殺して了ふのが本當だ、と云ふやうな、殉情的なほど犧牲の念に驅られた不思議な氣持から、涙一滴見せずに、その申出に頷き返した。さうして、あの、いつかの、五月の逢ひ戻りまで、一旦彼等の仲は絶えてゐたのだ。

然し今度はもう事情が變つてゐた。好きな人と逢へればこそ、どんな辛い虐待にも堪へられて來たのだけれど、もうその人とも別れて了へば、自分ひとりならどうなつても構はない、義理知らずとも不人情とも、云ふ人の口に任せよう、――さう云ふ捨鉢な度胸が据つて、十年にもなる旦那との仲を、なんの未練氣もなく綺麗に斷つて了つた。普通の考へにすれば、今こそ天下晴れて旦那の氣に入られようと云ふ曉になつて、たゞ可哀ですからとばかり、茶屋の女將をさんざ手古摺らせて、我を張り通したのも、全く幾代が、藝者らしくもなく、へんに小むづかしい道義心から來てゐた。それが理窟にもならない正義だつたのだ。――で、今では彼の女も、商賣に縛られるほかには、どこからも文句のつけ手のない自由な體になつてゐた……。

十二

折から信之は、普烈の事件で、心持の高揚した日々を暮してゐた。體にも暇がなかつた。それでも下町の方で夜食でもすれば、お豐と云ふ惡口相手のゐる待合富久家によつた。なんと賴んでみても、もうほかの藝者は呼んでくれなかつた。三時間もゐて、ほんの二三十分幾代の顏を見て歸るやうなこともあつたが、賑かな座敷の好きな信之が、だん／＼それを喜ぶやうになつて來た。第一審の公判廷で卒倒するまで、明日の用を控へてゐない時は泊つても行き、ちよつとの間でも二人差向ひに、五月の小雨の日のやうに、いやに理窟ッぽい話やら、さうかと思ふと他愛もない冗口を利き合つたりして、はたの見る目も氣持のいゝ、靜かに落ついた深い情合へはいつて行つた。

さう云ふ二人の關係とは、夢にも丸三の知らう筈はなかつた。いゝ年輩をして、やゝてれ加減に、天井、柱、內規の木目を見る風で、あちこちへ顏を振り向けながら、その實は、素足の踵い疊ざはりを氣にしながら、奥の八疊の敷居際まで來て、窮屈さうに膝を折つて坐つた。

「中々しつかりした御普請ですねえ」

「さうですか。あたしにはなんにも分らないの」

と、やゝ素氣なく答へて、「お波、お紅茶をあげて頂戴ね」

「いえ、もうどうぞ」

客と主人の前に、コップが汗をかくほどに冷えきつた紅茶を置いて、いやにきちんと堅くなつてゐるこの不思議な來訪者を盜み見すると、プッと吹き出しかけて、お波はあわたゞしく立つて行つた。それを横目で見ながら、三吉はすまし込んで、

「いゝお女中さんですね。あのどうも腰つきと云ふものが……」

「まア、大へんなほめ上手ね。さう一々おほめにあづかつても、四谷と違つてこの邊では、丸三つて云ふやうなおいしいお料理屋さんもありませんしね……」

「恐れ入ります」

ニヤ／＼しながら頭をさげ、序に紅茶のコップを取りあけて、「御遠慮なしに頂戴いたします」

ゴクリ／＼咽を鳴らして、さもうまさうに飮

み乾すのに、思はず幾代は見惚れてゐたが、ふと心持が急きたつと、一時も早く訊きたいことが、山ほどあるやうな氣がして來た。

「あなた、しよつちう紀尾井町さんへお伺ひしてるの？」

「へえ」

と、息を切つて、「よく冷えてますなア、これア……」

「よかつたら、どうぞお代りを……」

幾代は、どこかの配りものらしい朱塗の小盆ごと、自分の前の紅茶を押しやつて、「綺麗なんですから……」

「いえ、もう」

ちよつと遠慮しながらも、殘つた滴まで吸ふやうにして、「あゝ、これア結構だつた」

「あがれよ」

「でも、姐さん……」

「あたしは……」

うちの者にさへ告げない心願を、優しく笑ひ紛らして、「いまほしくないの」

「日盛りを、あんなにとツとと歩いていらしつて？」

「えゝ」

「おア、御遠慮なしに頂いちまはう」

丸三はもう一杯、ものゝ見事にあふりつけて、ほツと息をつくと、

「あゝ、うまかつた〳〵」

十三

これでやつと少し落ついた、と云ふ風に、手の甲で口のはたを横撫に拭きながら、ひと膝のり出すと、

「なんです、紀尾井町さんですか？」

「えゝ」

「それア時たまお見舞にやア伺ひますけれど、旦那はもう夙から形のあるものなざア咽を通せないのですから……」

「で、一體どう云ふ御容態なの」

「さア、前からあゝ云ふ痩形の方ですから、さほど痩は目にたちませんけれど、何しろもうどうも……」

と、膝頭に兩手を突つ張り、高まつた肩の間に垂れた首を、二三度力なく振り動かしてみせた。

「それアね、癌と云へば、どうにも仕樣がないんだつてますけど、でも、あの病氣が出るにしちアまだお若いんだし、……手術で助かつたつて人の話も聞いたことがあるしするから」

「えゝ、その御相談もあつたやうですが、もう今からぢアむづかしいさうです。ラヂウムとか云ふ……なんでもから光るもんで、罌粟粒ほどもありやア何萬兩とかする藥だつてえますが、そいつを、今ンとこまア上からそうツと宛がつとくくらゐなことで……、それだつて、氣休めみたいなもんださうですけれど……。それにね、いけないことにやア、紀尾井町さんの御先代樣が、矢つ張りおんなじ病氣でお亡なんなすつたんださうでしてね、だもんだから、――その時そばに附いておいでなすつたもんだから、何から何までちアんと御自分で御承知でさア。だから、ちつとも騙しが利かないで仕樣がないつて、奥さんもこぼしておいでしたつけ。それにあお見えて、なか〳〵氣むづかしいところがおありですからね……」

相手の顏に眼を据ゑて、ぢツと聞き澄ましてゐた幾代が、その時、さも腹立たしげに遮つて、

「氣むづかしいうちは、病人、まだ〳〵大丈夫よ。何も、今からそんなに氣を落しちまふこたアないと思ふわ。お醫者樣がみんな匙を投げちまつてからだつて、不思議に助かつたなんて話も、いくらも世間にはあることなんですもの。自分たちに解らないからつて、それで死ぬにきまつたもんのやうに云ふなんて、一體お醫者は

「げぢ〳〵よ！」
「げぢ〳〵？」
「えゝ、げぢ〳〵だわ！　それくらゐなら、一生懸命勉強して、どんな病氣でも癒せるやうにちアんとするがいゝぢアありませんか。それをさ、自分たちに癒せない病氣は、みんな死ぬにきめちまふなんて、一體生意氣よウ！　そんなこと云つたら、神樣も佛樣もないわけぢアないの。いやよ！　あたしそんなのいやだわ！　げぢ〳〵！」
「えらい！」
ポンと揣手を打つと、丸三は、酸つぱいやうな口つきに出ッ歯をかくして反身になつた。「ああ、えらいことを仰有る……」
「何よ、褒められたつて嬉しかないわ」
幾代は、ほんとに子供のするやうな澁面になつて、「あなただつてげぢ〳〵よ！」
「それアもう、無論手前もげぢ〳〵です」
いつになく三吉も本氣だつた。ごくりと唾を飲みこんで、もう一膝のり出し、「いや、然し有繋に紀尾井町さんだ！　立派なもんだ、これならば立派なもんです！」
いきなり疊に兩手をついて、ペッたりと平身低頭した。……幾代はハラ〳〵と落涙して、なんにも云へなくなつて了つた。

十四

「いや、恐れ入りました」
と、顏はあげたが、いつぱい涙のたまつた幾代の眼を見ると、すぐまた三吉は、肩胛骨の間にガクンと首を落して、「それでこそ……、いや、どうも實に……」
「あら、大へんねえ」
忽ち笑顏になると、氣取ッけもなく袂のさきで眼を押し拭ひながら、「だつて、あんまり口惜しいんですもの」
「然し姐さん……」
で行きづまつて、首をかしげ、横から見あげるやうにまじ〳〵としてゐたが、急にあと早口に、「おそばへ行きたいでせらねえ」
「それア……、でも諦めてるわ」
「よろしい！」
と、膝頭に置いた手を、腿のつけ根へ引きつけ、胸板を突ッ張らせたまゝ顏を差しよせて、「なんとかしませう。きつとお逢はせ申します！」
「そんなことが……」
「いゝえ、出來ます。まかり間違つたところで、丸三のお出入が叶はなくなるまでのこッてさア。なアにあなた……、それに第一、一生一度のことぢアありませんか」
「いやなの、それがいやなの！　あたしが逢へないことは、それアもうよウく諦めてますけれど、一生に一度なんて、……そんな風に、……あの方の御病氣については、あたし決して諦めてなんぞゐないんですからね」
「さア、癒るもんとしても、姐さんの氣としたら、たゞの一日でもおそばでお世話がしたい筈です」
「いゝえ」
「噓おつしやい！　そんな痩我慢を云はないで、あたしにお任せなさいましなね！　決して惡くは計らひませんよ。あなたのお心持は、今の、……さうだ、あのげぢ〳〵で一遍にあたしのお肚の底まで、ちやんと落ち込んで來てるんですから、どうぞ御安心なすつて、お願ひだからあたしに任しといてくださいよ」
「あたしはいや」
聲低ながらしつかりと、「それアね、あちらから來いと仰有つてくださるのなら、それアもう何を措いても飛んで行きますけれど、あたしの方から……」
「そんな、姐さんの名前を出すやうな……」

「いゝえ、それは出しても出さないでもおんなじことよ。先の先まで、ちやんともうあたしのお肚のなかはきまつてるんですから、御親切はしんから嬉しいんですけれど、どうぞもうそんな御心配はなさらないでください」

「そんな義理堅いことを云つてたつて、今時あんた……、そんな、くだらない……」

「くだらなくつても、時代おくれでもいゝの！ あちらが逢ひたいと思つてくだされば、きつと電話なりお使なりくださるでせうし……」

「それア、あなた、旦那だつて逢ひたいにきまつてまさアね。逢ひたいには逢ひたいけれど、そこはまたな……」

「ですから、そこを押しきつても逢ひたいと思つてくださるまでは、あたしとしては大人しく待つてゐたいの。ね、解つたでせう？」

「解りました。解りましたが、つまらねえ遠慮だア。……どうもこれアとんだお邪魔をいたしました。ぢア、姐さん、これで御免かうむります」

急に丸三は、切口上に挨拶して、さつさと腰を持ちあげた。

「さうお……」

別に引き止めようともしずに、幾代も續いて立ちあがる、その足もとに、思ひなしかまるで力がなかつた。

振假名

一

二人には廣すぎる、徑四尺ほどの、肘をつくと少しがたつくやうな圓卓をさし挾んで、伊庭と瀨川とが支那料理を食べてゐた。横濱でも一流のうちだけれど、山下町に軒並の、あの古ぼけた煉瓦造りの一つで、おまけに支那人流の放恣から、でこぼこな床に敷かれたリノリウムはいつ取り替へたとも知れないほど、部屋の隅々を殘して大方は模樣も擦消え、壁紙には雨洩りが滲み出し、電燈の紐も裏は通さず、殺風景にもむきだしに天井を匍はせてあつた。

八月の晦日で、ひどい暑さの日だつた。前の晩鎌倉の海岸よりに、夏だけ瀨川が借りてゐた三間ばかりの家に、ひよツこり伊庭が尋ねて來て、久し振りだ、大いに飲まうと云ふので、有合せに、近所の仕出屋から三品、四品とつて、二人ともいける口の、一時過ぎまで雇婆さんにお燗番をさせながら快談して、今朝起きたのは、かれこれもう午近かつたらう、有繋に宿醉の氣味で、平野水ばかりがぶ〳〵飲んで、赤茶けた疊の上に寢そべつてゐたが、早めにたてさせた風呂に飛び込むと、大ぶん氣持がシヤンとして來た。

で、さてこれからどうしようと云ふことになつた。大體伊庭の訪問は、かなたの散步に、數寄屋橋から高架線の上を行く汽車を見て、ふいと氣が變つて出かけて來たと云ふやうなわけで、別段用事もなかつたのだけれど、それだけにこちへも斷らずにあるのだから、成る可くなら今夜は歸つてやらう、くらゐの氣持だつたし、それに、瀨川も、昨夜詳しく聞かされた信之の容態が氣にかゝつて、早速見舞に行きたいと思つてゐたので、兎に角夕涼にでもなつたら、上りの列車に乘ることだけは、暗々のうちにきまつてゐた。

「少しなんか食つてもいゝやうな氣持になつて來たなア」

伊庭は、大きな體を、苦しさうに起き直つて、裸けた胸を掻き合せながら、「どうです、そろそろ出かけませんか」

「まだ、あなた、暑くつて仕樣がありやしない。でも、腹がすいて來たのなら……」

「いや、そんなでもないけれど……。君は？」

「僕アまだどうも……。然しなんかうまいもんなら食つてもいゝですな。大ぶん久しく都會的な料理を食ひませんからねえ」

「なんだ、東京までもたせる氣なんですか」
「いや、そりやまア小町園か小はん亭あたりへ行つて食つたつていゝんですがね、久し振りでうまい西洋料理かなんか、……風月でもよし、ライオンもちよつと惡くないな」
「どうも然し、東京まではちつと……」
「もちさうもありませんか。ぢア、中をとつて横濱……」
「あ、支那料理がいゝや」
「よろしい、ぢアすぐ行かうぢアないですか」
そんなことで、急に勢ひづいて出かけて來たので、西へは廻つてゐたが、まだ日は高かつた。で、特にこの、菜、、奥まつた小部屋を選んだのだつたが、室が少いところへ、隣がくツついて坐つてゐるので、薄暗いながらにちつともひやりとはせず、なんとなくあたまが壓しつけられるやうだつた。
はいるなり、二人とも重羽織や足袋をぬいで了つて、時はづれの、ほかに客とてもない、静かな、寧ろ陰氣にさびれ果てた感じをどうにか引き立てようと、まづどつしり腰を据ゑて、十分くつろぐ氣になつてゐた。それに、汽車や自動車に搖られてこゝまで來るうちには、朝からなんにもはいつてゐない腹は、いかに宿醉とは云へ、すつかりすき切つてゐたので、いつになく老酒の廻りが馬鹿に早かつた。

二

昨夜から差向ひの喋り續けに、有繋にちよつと話が杜切れた時、横濱と云ふ土地につれて、ふと瀬川のあたまに浮かんで來たのは、岡島鈴江だつた。以前丹後町の萩原の家に、母親や瀧十郎と一緒に暮してゐた時分には、彼の女は盛に文學者のうちを歴訪して歩いたものだつた。今よりはずツと綺麗でもあつたし、文學でも好きな少女らしい才氣も仄見えて、訪問をうける若い文學者たちのなかには、植ゑつけられた戀の芽生を、立枯に今も胸の隅にもつてゐるやうな者も、四人や五人はあつたが、然し、父親に引きとられて、横濱に移り住み、急に不良少女めいたいけ圖々しさを現はしてからは、先方からめつたに寄附いても來なかつたし、たまに往來などで顏を合せるにしても、先くぐりに反感を見せられるので、すつかりもう人氣をなくしてゐた。レイコウとか、岡鈴とか云ふ親しみの呼び名も、いつか連中の脣に全くのぼらなくなつて了つた……。
「一體岡島鈴江女史といふものは、その後どうなつて了つたんだらう」
「さア……」
伊庭は豐な頰に、ニタリ〳〵と薄笑ひを見せて、「貴方でも知つてないとすれア、吾々の仲間に知つてる人はないでせう」
以前、鈴江の文壇人遊歴に、一番しげ〳〵と立寄られた門は、本郷森川町の瀬川の家だつた。てつきりもうさうに違ひない、などと岡やき連の蔭の噂では、一時それにきめ込まれてゐたくらゐだつた。
「それア違ふでせう。信さんですよ」
「信さんは信さん、貴方は貴方ぢアないんですか」
「いや、僕も多少コツ（惚れること）されてたやうだけれど、然し無論フガン（關係はないと云ふ意味）ですよ」
「僕はかうきめてるんだ、――いかに親しい友達でも、王樣ぢき〳〵のお調べでも、ガンフガン（關係のあるなし）の返答だけは、決して信用できないもんだとね。と云ふ意味は、僕自身友達にも、女房にも、誰にも本當のことは云はないことにしてゐるんだから、その點にかけると、實に徹底的な懷疑派ですよ。貴方がガンサイだと云つても、フガンだと云つても、要するに、僕にとつちや、それは全く無駄な言葉なんだ。信用も

しないし、さうかつて嘘だとも思やアしません」

さう云つて伊庭は、大きな腹から揺りあげるやうな高笑ひをした。ちよつと見には中々堂々たる體格だけれど、芯に弱いところがあつて、仲間うちでは、事實上一番堅い生活をしてゐる瀬川は、伊庭のやうなその方面の猛者にかゝつては、たゞ口舌の戯れだけでも、所詮そばへもよりつけなかつた。いま云つた、いかにも伊庭らしい一家の掟にしても、瀬川は、嘗てそんなことに就いて考へてみようとしたことすらないやうなものだつた。それでも生得の負じ魂から、

「さうですか。それア僕としても望むところです。と云つたところで、レイコウとあつたと云ふ意味を仄かすわけぢアないけれど……」

瀬川も、やつとさう切りぬけて、一緒に高笑ひの出來る廣場へ出て行つた。

「然し、あれツきりレイコウみたいな文壇娘が出現しませんね。一人くらゐあゝ云ふ無所屬な女がまご／＼してゐてくれる方が、賑かで、なんとなくお色氣があつていゝがな」

やつと笑ひが納まつたところで、伊庭が、老酒の盃をあげながらから云つた。

三

瀬川もそれには同感だつた。

「それアいゝですとも。……いづれなんとか名があるんでせうけど、ベース・ボール・ティイムの寫眞を見ると、よく可愛らしい小さな子供が、まるで選手の雛型かなんぞのやうに、矢つ張りちやんとユニフォムを着込んで、仕合と云ふとどこへでも喰附いて出かけて行くものらしいが、つまり文壇娘の存在のよさは、あれですよ、なんて云ふものか知らないが、つまりあの豆選手のよさですよ」

「岡鈴ぢアそれほど可愛くもないが……」

「まア然し、あれだつてちよつと惡くなかつた。この頃のことは知らないが……」

「久し振りにちよつと逢つてみるのもいゝですな」

「簡單に逢へるもんなら、ちよいと逢ひたいですな」

「俥夫でも賴んで使をやつてみませうか。山手だけれど、こゝからならさう遠かアないし、ゐさへすれア必ず出かけて來るでせう」

「貴方行つたことがあるんですか？」

「なに、行つたこたアないが、いつだつたか銀座で逢つたとき名刺をくれたから……」

懐から大きな三つ折りを取り出して、回數券などを入れて置く革の二つ折のなかをあちこち探してゐたが、「あゝこれだ」

「ちよいと拜見」

瀬川は、手を差し延べて、「あいつが名刺なんぞ持つて歩いて、一體どうする氣なんだらう」

「客をひく氣でせう」

「まさか……」

もう一度二人は大笑ひに笑つた。折角たまに横濱に來たものだから、ちよいと知らせといてやらう、と云ふやうなことになつて、瀬川が手帳の紙を引き裂き、それに鉛筆の走書で、いま伊庭君と二人こゝに來てゐるから、もし暇ならば一緒に飯を食べに來ないか、と書いて女中を呼び、俥夫を賴んで屆けるやうに云ひつけた。

「ゐれア來ますよ」

「それア勿論飛んで來ますとも。兎も角、ライセン(瀬川)と聞いちアとてもぢツとしてはゐられますまいからね」

「昔ならね」

また面白さうに笑ひ聲を合せて、「然し僕のは、浮名儲けか浮名損か分らないけれど、兎も角内容ははなはだ空疎なんだが、信さんとは、……もう今となれば公開しても差支ないと思ふが、慥にさうだつたらしいですね」

「それア君、あんなに始終やつて來て、たまにや泊つて行つたりするうちにやア、それア、信さんでなくつたつて……」

「いや、それア貴方の人生觀ですよ。男と云ふ男がみんなさうぢアないですよ」

「みんながみんなさうでないとしても、大抵はさうでせう」

「いや、それアどうも矢つ張り伊庭好みの觀察だな、己をもつて他を誣ひるも甚だしいものだな」

冗談と本氣とを半分々々くらゐの調子で、瀨川は、普段から、この、二つ年上の友達に對して飽足らず思つてゐる唯性的人生觀に、輕く非難の一刷毛を加へた。

「ぢアまア一歩を讓つて、少くも信さんなら、あゝ仕向けられて、どうして大人しく指をくはへて差し控へてる筈はない、そんなこと、所詮僕には考へられもしない、と云つたからつて、あながち男性全體の不面目にもなるまいから、姑く前言をさう訂正さして貰ひませうか。どうです、そんなら貴方だつて、別に異論はないでせう」

圓滑輕妙な答に、自分が眞ツ先に滿足して、伊庭は、やゝ政治家好みの野狐禪的な哄笑に破裂した。

四

「然し信さんにしたつて……」

或る一つの傾きをとると、そこに轉げて行く心の惰勢を、輕くそらせることの出來にくい、──生眞面目と云ふよりはやゝ度が強く、されぱとて一克と云ふほどでもない性分の瀨川だつた。「信さんにしたつて、据膳食はぬは男の恥つて云ふやうな、あたじけない、さもしい、下等な心理に、さうむざ〳〵と支配されて了ふ人ぢアないと思ふがな」

「だつて、現に箸をつけてるんだから仕樣がないでせう」

意固地からも、伊庭は、惡魔主義的な見方を誇張して、「それア恐らく、君が信さんだつておんなじことですよ」

「さうかしら。僕も決して自分を女嫌ひとも思つてないけれど、總ての女にそれほどの魅力があるとは考へられないな。前々から好きだつたと云ふやうな、特別な場合なら、それア勿論一も二もないが、嫁ひなやつぢやアどうも……。つまり貴方がたは、結局僕らより毛嫌ひが少いと云ふことになるのかな」

「女に對しての毛嫌ひはあつても、何もその場に臨んで、兎やかう云ふほどのことぢアないでせう。それほどの大問題でもないんだから──「齋藤綠雨も、その心持を、亂暴な言葉で云つてますね、──鼻をかむのとおんなじことだつて。どつちも紙が要ると云へば向いゝ、なんて。これが綠雨なればこそ、あの時代の、青ツぽいセンテイメンタリズムの戀愛至上主義に對して、胸のすくやうな痛快味にもなるんだが、今更どうもそんな考へ方は、ちつと時代錯誤ぢやアないですか─

「そこが君、眞理の眞理たる所以でさアね、時代が變つても朽ちないところが……」

さう云つて伊庭は、またもや天空快濶らしく笑つた。──哄笑は、彼の社交になくてならない武器の一つだつた。

「然し」

と、瀨川は調子を改めて、「信さんつて人も、隨分いろんなことをして來たやうだが、感心に品が惡くなつてませんね。殆どありませんからね道樂者らしい可厭な臭味なんぞ」

「ちよいとしたことで、すぐ眞ツ赤になつたりしてね」

「さう〳〵、あれアまた不思議ですね。不思議つてこともないが、何しろくだらなく赤くなる人ですね。殊に女のことゝなると、差向ひぢア、

とても僕にやア冷かす氣も出ませんよ。あゝどうも、芯からてれて了はれると、却つてこつちが、氣の毒らしくつて困つちまひますからね」

「少し、することに釣り合はない赤面ですな。さては、あれも一つの手だつたかな」

すき腹に、料理も酒もうまかつた。口腹の滿足で、二三人は上機嫌になつて、それから暫くは、歴代信之論を續けた。いつとはなくその調子が、死後の追憶めいたものになつて行くのに、ふと氣がついては、有繫に寂しい氣持にされた。

「ほんとに、どうにかならないもんかなア」

「可厭ですね、三十五六ぢア死にたくないなア、何しろ、まだこれからつて氣持の年齢ですからね。信さん、自分でもうとてもいけさうもないと思つてるかしら」

「さア……」

「胃癌つてことは、無論もう知つてるんでせうね」

「それア知つてますとも。今年の正月とかにも一度血を吐いたことがあつたんだとさ。それを先生、この頃までだアれにも話さなかつたんださうだから、悪くすると、へんな東洋流の諦めかなんで、ちやんともう覺悟してるのかも知れない」

五

「いや、さうでもないでせう」

瀬川は、考へ深さうな眼つきで手に取りあげた盃の底をぢつと見詰めてゐたが、そのまま唇へはあてずに卓上に戻して、「存外これで、人間、諦めがよささうで悪いものぢやないですか。年齢に不足のなささうな爺さんで、誰が見たつて、とてももういけないにきまつた容態をしてゐながら、當人だけは、いつまでも死ならなんぞたア夢にも思はないでゐるやうなのが、隨分これで多いもんですよ。あれでもちつとどうも困るが、死ぬ間際までも、自惚と云はうか慾目と云はうか、所詮はたからでは考へられないやうな馬鹿げきつた再起の望みが、當人だけには許されると云ふのも、やつぱり例の、自然の意思とか、神の攝理とか呼ばるべきものゝ、底の知れない叡慮の一つかも知れませんね。云ひ換へれば、造物主といふやうな者が、人間製造の仕上げ間際に、口のうちに唱へた呪文のなかに、自殺止め、或は失望落膽よけの禁厭と云ふのがあつたとすれば、つまりそれですね。さうとは知らずに人間は、「未練」だなんて悪名を負はせてゐるけれど、ひよつとすると、こいつ、親の心子知らずの口かも知れない」

「それア大きにさうだ。おまけに、親の心と云ふやつが、大抵の場合子にとつて、有難迷惑なことが多いのとおんなじで、こいつもあながち御親切とは云へないかも知れない、――序のことに君の比喩は、そこまで持つてつといた方がいゝ。生きてゐたくなくなつた人間にとつて、無理に生かして置かれることは、明かに迷惑千萬な話なんですからね」

「成る程、さう云ふ考へもなり立たないことはないですな。然し、信さんの場合なんぞ、まだまだ生きてゐたいでせうからね、悲慘と云やアその方が悲慘だが、未練は十分あるでせうよ」

「可哀想に、とんでもない禁厭のおかげで、人間最後の夢をみせられてるわけですか」

「何しろ、死ぬのは可厭だな」

「生きてたつて、別段大していゝこともないけれど、それでも死ぬのよりはましだらうな」

「大していゝことがない? 貴方が? チェッ」

子供がするやうに、舌を鳴らしてそッぽを向き、瀬川は、さも憤懣に堪へないと云つた調子で、「なんです、さんざ悪いことをし盡して置きながら……」

「だから、悪いことばかりでいゝことがないん

でさアね」

伊庭は、例の、大きく笑ひ飛ばして了つて、銚子を取りあげ、瀬川に酌をしようとしたが、丁度もうからになりかけてゐた。「やア、こいつア失敬……」

すぐ手を鳴らした。時はづれの客の少い刻限を、女中たちは、どこかに寄合をつけて喋り込んででもゐるのか、幾度か叩いては、耳を澄してみても、中々返事が聞えて來なかつた。見廻すと、部屋の中央に、電燈の紐に結びつけて、呼鈴がさがつてゐた。伊庭は、大きな體を大儀さうに立つて行つてそれを押した。遠くで、いけぞんざいな返事が聞えた。――眞夏の午後の支那街は、その時、例へば明盲目の白眼の、牡蠣に似た青白さに、寂寞として靜まり返つた。

「あゝ、醉つた」

呟きながら、圓卓の方に戻つて來かけたが、ふと突當りの壁にかゝつてゐる聯が目についた。二つ割の竹に、一節に一字づつ五文字、[illegible]でもなく對で、僅かに彫り込んだ溝へ、緑青色の胡粉を塗つた、恐らく安物に違ひない、ごく普通の聯だつた。

六

「不俗是仙骨
多情乃佛心……」

一面づつ句切つて、伊庭は、聲に出して讀んでみた。

「なんです」

瀬川も振り向いて、すぐ伊庭の視線をたよりに、何やら汚點だらけの壁紙の上に懸つてゐる聯へ目をつけた。「不俗是仙骨……」

「多情乃佛心さ」

「成程……、いゝですな」

「ちよいといゝ句ですね。不俗是仙骨は、御尤もすぎて面白くも可笑しくもないが、多情乃佛心の方は……」

「なか／＼いゝですよ」

「ね、面白いですね」

暫くは、二人とも、ぢつと聯の面に目を据ゑて、言葉の深みへ、靜に實感の錘を垂れさげてゐた。じり／＼と意味が、奥へ廣まつて行くやうな氣がした。

「なんと讀みます？」

伊庭が、席についても、なほ多情乃佛心の字面に眺め入りながら、何やら思ひついたらしく、ニヤリ／＼笑ひ出した。

「なんと讀むとは？」

「つまり、諸君と書いてみなさん、效能として いゝきめと讀ませる意氣で、多情乃佛心に振假名をふつてみたまへ」

「あゝ成程、さうさなア、移り氣は、……どうも佛心がむづかしいですな」

「浮氣は凝性、はどうです」

「さう、……少し原文に即きすぎてる嫌ひがあるな、浮氣と見えたは深はまり、……まづいかな」

「浮世すてれば人間ばなれ、惚れつぽいのがふかなさけ、……どうです、そつくり都々逸にしたところなんざアうまいもんでせう」

「うまい／＼。もう少し原文から離れたところで、それはそれこれはこれ、つてのはどうでせう」

「成る程、信さんの云ひ草ですな。あの人が、いちどきに二人以上の女に關係してゐる時に、それを云つて揶揄ふと、きまつて、それはそれ、これはこれですよ、つて云ふのが十八番だが……」

「ぢアいつそのこと、ふぢしろのぶゆき、と讀ませたらどうです」

「そいつアいゝ！」

と、思はず、伊庭は吹き出して、「多情乃佛心と書いて、藤代信之と讀ませるのはいゝ、こ

いつア一番傑作だ」
「それとも、子の四緑、……あの人の星廻りだが、どうもあの年齢の人は、多少とも多情佛心的な傾向がありますね。浮氣は浮氣でも、へんにかう、馬鹿ッ堅いやうなところもあつたりして、結局薄情なまねは出來ないで、ずる〳〵ッと深はまりをするやうなところは、どうも多情佛心の星ですよ」
「ぢア、不俗是仙骨の方は、戌の六白かな」
「戌の六白と云ふと……、三十八か」
「つまり僕ですよ」
「あなた？　冗談いつちやいけませんぜ。それアまだしも僕の方が近いくらゐでさアね。それアとても子の四緑の多情乃佛心ほどにやアぴつたりしないけれど……」
　そんな他愛もない話にうち興じてゐるところへ、威勢のいゝ靴音を響かせて、岡島鈴江が、一二間もあとに殘した案内の女中に、どこ？　一番奧の部屋？　などと大きな聲で問ひかけながら、つか〳〵とはいつて來た。やア、やつて來たな、と云ふやうな氣持は、二人にとつても決して惡いものではなかつた。

七

「今日は」
　反身に、顎をつき出し、黒く染めた伊太利麥藁の、少しふは〳〵する廣い鍔の蔭から、斜下に傲然と二人を見くだして、鈴江は、まるで每日でも逢つてゐる人にするやうな、ぞろッぺいな挨拶の言葉をかけた。
「やア、よく今時分うちにゐたね」
　瀨川は、手を延ばして、傍の椅子を、すぐ腰かけられる位置になほし、「さアまア、こゝへ來て掛け給へ」
「おゝ暑い〳〵。一體どうしたの、貴方がたは？　今時分、なんと思つてこのへんをぶらついてるのよ」
「なんのことはない、女の巡査さんだね」
　挨拶の言葉もかけずに、肥つた人には大抵それが特色の、丸まつちく、可愛らしい手つきで脣のはたまで持つて行つた盃もそのまゝに、呆氣にとられて鈴江の振舞を眺めてゐた伊庭が、まづ初ッ鼻に、愛嬌のある毒舌を浴せかけて笑つた。
「成程、女の巡査はいゝ」
　ふはりと肚から出た諧謔だけに、いかにも實感が罩つてゐて、瀨川も思はず噴飯さずにはゐられなかつた。「女性巡査と書いてをかじますずえ、と讀ませるのはどうです」
「なに云つてるのよ」
と、有繫にちよいとてれて、椅子につくと、手提袋を擲り出すやうに卓上に置いて、ほんとにどうしたの？　……あ、分つた！　昨夜から來てゐるのね？　また不良中年どもが、キヨあたりで泊つて來たんだらう」
「キヨたアなんだい―」
　瀨川は、盃を獻しながら訊いた。
「あたしお酒きらひよ！　なんか冷たいもの持つて來て貰ひたいわ」
「あ、さうだつたね。ぢア今さら云ふがね。なんだよ、一體、そのキヨつてのは？」
「白ばツくれたつて駄目よ！」
「あのへんのホテル、相變らずはやつてるかい」
　伊庭がニヤ〳〵しながら尋ねた。
「何よ、昨夜泊つて來たんでせう？」
「あゝ、ちやぶ屋ですか」
　その時になつて、やつと瀨川に呑みこめたことが、手ッ取り早く鈴江の疑ひを晴らした。女中が、あとから加はつた客のために、箸や皿を運んで來た。鈴江は、年中來つけてゐるらしく、馴々しく女中と冗口を利きながら、自分の飮ものを註文したり、早速箸を割つて、大ぶん食ひ荒された料理の方へ手を延ばしたりした。

「あら〳〵、こんなおいしくもない月並なもんばかり註文して、……これだから田舍者は困るつて云ふんだ。ねえ、お銀ちやん。それに第一、この頃はコックさん二番でせう？」

「あらどうして？」

脂肪肥りの、丈と鼻の低い、どこからどう見ても支那料理屋の女中としか踏めないやうな女が、新しく持つて來た銚子で、面倒臭さうに二人に酌をしながら、朋輩とでも話すくらゐの、いけぞんざいな口の利きやうをした。

「暑いうちは、一番コックは休んでるんだつて、誰だつたかさう云つてたから……」

「そんなことありませんよ」

「君ア中々通らしいが、なんかうまさうなものをさう云つてくれよ」

「通でもないけど……」

瀬川におだてられると、鈴江は柄にもなく鼻白んだが、それでもあれこれと支那語で料理の名を舉げてみて、女中と相談しい〳〵二品三品註文した。

八

口のへらない鈴江が加はり、酒肴が新しく持ち運ばれて、興はさらに湧いた。七掘く一つの話題について話し込むやうな根氣は、そろそろもういゝ心持になりかけて來た瀬川や伊庭には失はれてゐたから、勢人の噂と云つた風な、斷片な話題が、例の冗だくさんに、次から次へ續々として續いた。伊庭は、いつぞや自分のところへも、活動寫眞のフィルム製作所の資金を出さないかと云つて、一二度尋ねて來たことのある西山菩然の、今度の事件を思ひだした。最初の時には、たしか鈴江の紹介狀を持つて來たのだし、その後誰かから、二人の間に關係のあつたことも聞いてゐた。

「おい、君、西山のやつえらいことをやつたね」

「えゝ、あれ馬鹿よ！」

「どうして」

「だつて、馬鹿ぢアないの、人殺しなんぞして」

誰か自分の知らない人の話だらうと思つて、興味なげにそつぽを向いてゐた瀬川も、「人殺し」と聞くと同時に、一月ほど前に、一時ちよいと新聞を賑した不良少年の外人殺し事件を思ひ出し、てつきりあの男のことだな、と察した。

「あゝ、なんとか云ふ西洋人を殺したやつの話かい？」

「うん、マッケンゼン殺し……、あいつはね……」

「あいつなら君、いゝぢアないか。ちつとも馬鹿ぢアないよ」

「いや、この件についちア、レイコウは批評めいたことを云ふ資格なんぞないんだ。あいつは、昔この人の……」

と、鈴江を指して、「なんだいあゝ云ふのは、一體なんて云ふものなんだい？」

「兎に角馬鹿よ、なにも殺さないだつて、自分が逃げちまへばすむことぢアないの」

「だつて、相手の女には惚れてたんだらう？」

「どうだか……」

「おい〳〵、今さら嫉妬たつておッつかないぜ」

橫合から伊庭がから揶揄つて、大きく笑ひ出した。

「冗談でせう、そんなんぢアありませんよ。あいつは、ほんとの不良ですからね……」

「それアさうだらうさ」

と、瀬川が、少し可怕らしく吊つて來た烏眼を鈴江の眉間に射つけて、「君らみたいな不良の徒輩から云つて不良なんだらう。だから、つまり吾々から云はせれば善良なんだ。不良から云つての善良は、即ち不良なんで……」

「解つた〳〵、もう解つたよ」

伊庭が、（先生、少し廻つたな）と云つた心持の笑ひ方をして、「然し、實際えらいぢアないか、人

殺し、と口で云つて了へばなんでもないやうなもんだけれど、中々出來ないこツたらうぜ」
「さうさ！　一口に、それを馬鹿だなんて、一岡鈴は、この頃ちつと生意氣になりすぎてるよ。君たちにやアまだ、馬鹿つてのはどう云ふものだか、利口つてのはどう云ふもんだか、ほんとのことは解りやしないんだ」
　かうきめつけられると、けれども鈴江は、洒洒と伊庭の方へ正面に顏を向けて、（あれだ！）と云つた風に、一つ顎をしやくり、片眼を瞬叩いてみせた。そんなことには構はず、瀬川は、言葉を續けた。
「岡鈴はまア仕方がないとしても、あの檢事が生意氣だよ。あれくらゐのことで死刑だなんて、馬鹿だよ！　あんな解らない求刑つてあるもんか……」

九

「でも、第二審の模樣だと……」
　鈴江は、うんと頰ばつた口もとを、有繫に手巾で輕く抑へて、もぐ／＼やりながら言葉を插挾んだ。「大へん具合がよささうですとさ。普烈がね、はたではら／＼するくらゐ、何もかもどん／＼喋つちまふんですとさ。それが却つていゝんですつて、心證とかなんとか云ふものがいゝんですつて。それアね、裁判官だつて人間なんだから、被告人の感じのいゝと惡いとぢア隨分違ふでせう。證據もすつかりあがつてるんだから、普烈だつて、今さら惡あがきをするより、せめてその心證とかでもよくしといた方が得ですからね。あいつのことだから、中々そのへんはぬかりませんやね」
「實際君は馬鹿だね」
　瀬川は、つく／＼呆れ返つたと云ふ風に、鈴江の顏を正面に見詰めて、「さういふ下等な打算よりほかに、人間の心を動かすものを、一つだつて知つてないらしいね。かうなると寧ろ哀れむべき無智と云ふよりほかはないね。人間つて、そんなもんぢアないんだよ」
「知つてゝよ。だけど、あたしの云ふのは普烈の場合ですからね。あいつなら……」
　そんな話は面倒だ、と思つたか、伊庭が横合から押被せて、
「初ての時には君も行つてたんだつてね？」
「えゝ、誰から聞いて？　藤代さん？」
　それには答へずに、
「尤もあれアまア、どつちの義理から云つても、是非とも君は見物しとかなきアならない芝居だつたからね」
「えゝ、大へんな大芝居……」
「信さんが、血を吐くまで喋つたつて？」
「えゝ、なんだか、隨分亢奮しちやつてたわ。あの人、大した普烈贔屓なのね」
「さうだつてさ。臥ついてからも、裁判の模樣ばかり氣にして、――僕が先達見舞に行つた時にも、桑木とか云ふお[illegible]さんの辯護士が來てゐたつけが……、臥てゐるもんだから、暇にあかしちアなんかかんか[illegible]へだして、そのたんびに、あの爺さんが呼びつけられて、あゝ云つてくれの、これも忘れずに説明してくれのつて、一々頼まれるわけなんださうだ。あんまり氣の毒だと思つて、仲にはいつて奧さんが、三度に一度は握りつぶして了はうとするんだけれど、先生中々承知しないで、それア困りぬくさうだよ」
「さうなると、信さん、あれで中々凝性だからね。ちよいと、あたまをほかへ轉じるなんてことの出來ない性分だからね」
　さう瀬川の説明する言葉は、醉つてゐるに似ず、しみ／＼としたものだつた。
「つまり、そこらが佛心かな」
　伊庭が冗談らしく云つて笑つた。
「さうだ／＼、慥に佛心だ」
「何よ、ブッシンつて？」

「正面を見ろ、君の眞正面を」

「何？」

「そこにかゝつてる聯を讀んでみろよ」

「不俗……これ仙骨つて讀むの？」

「さうだ、もう一つは？」

「多情、すなはち佛心か……。あゝ。それで佛心……？」

「どうだい、多情乃佛心で、ふぢしろのぶゆきつて振假名は？」

「へえ……？」

「さう云ふ感じはないかね？」

「ないわね」

「だつて、あの人の多情についちア、君だつて別に異論はあるまい」

「だから、上の二字でふぢしろはいゝけれど、下の三字がのぶゆきとは讀めないわよ」

十

「ま[illegible]いつてやがる」

さう[illegible]たやうなものゝ、今度は瀨川も、五六[illegible]あるらしく、にやり／＼笑つて、「それアまた殊に、君の場合なんぞはさう感じられさうなことだよ。つまり君は、信さんの多情だけに溺れて、佛心までは徹しなかつたんだが、その罪の一半は君にあるんだから、仕方がないさ。もう一つ碎いて云へば、おもちやにされただけで、可愛がられるところまで行かなかつたんだらう、どうだい？」

「知らないよ」

鈴江は、ツンとすました顏をそつぽに向けて、

「死にかゝつてるつて云ふから、氣の毒だからあんまり云はずに置くけれど、一體貴方がたは、あの人を買被つてるわよ。なアに、あの人だつてなみの男だわ」

「勿論さうさ。誰も、だから聖人だとも君子だとも云つてやアしないぢアないか。なみの男もなみの男も、少し行きすぎてるくらゐのなみの男で、つまり……助平爺だよ。然し同じ多情でも、あの人のは、佛心に近いところまで至つた多情だと云ふだけのことさ。多情はとりもなほさず佛心だ、と云ふこの言葉の面白味はそこにあるんだからね。別々なものぢアない、一つだと云つてゐる裏に、そこまで徹した人の心境が、自と現はれてゐる。たゞ、助平、そいつアえらいや、と云ふのとでは、意味は同じでも、どこかに心持の深さが違ふ。そこが面白くもあるんだし、すぐ吾々が信さんを思ひ出した理由でもあるんだ。だが、そこらのことは君なんぞにやアまだ解るまいな。折角云つて聞かせたところで、ちつと早すぎるかも知れないね。どうだい、それとも解つたかね？」

「そんな面倒臭いこと、てんから聞いてやアしないわよ。うるさい佛心のお講釋より、この點心の方がよつぽどおいしいわ」

云ふ通り、瀨川の長談義などには碌に耳もかさずに、恐らくはその間に考へて置いたのだらう、柄にもなく手綺麗に洒落のめして、そこに出てゐた西瓜の種を、上手に前齒でパツリと嚙み割つてゐた。組織だつたものゝ考へ方よりも、當意卽妙の、所謂高飛車なもの云ひなどを偏重し、自分でも時々、ぬきうちに人を切りさげるやうな、やゝ時代おくれの政治家趣味を現はす伊庭としては、その場の氣合で、一も二もなく鈴江に軍配をあげ、友達ながらこの勝負、瀨川の黑星と見極めをつけて了つた。で、その心持を、すぐ例の高笑ひに託した。

「……………」

瀨川は可なり不愉快にされた。云ふべき理窟はいくらでもあるが、いつまでも尾を引いてゐるその笑ひ聲には、「理窟や」不愉快さうな顏」を封じて置いて、なほ且つ裏からチク／＼つツ突くやうな、始末におへない響きがあつて、それを押し切つてまでは、――次に續くべき醜い

場面を覺悟してまでは、己を樹てようとする熱意もなかつたのだ。それに、永い間の伊庭との交際で、いゝ加減馴らされてもゐたので、また始めやアがつた、くらゐの氣持で、なんにも云はずに苦笑ひをしてゐた。たゞ然し、この無言の賞讃で、鈴江の無言の得意が、天井なしに昇りつめてゐる氣ぶりには、ちよいと我慢がしにくかつた。可憐なやつだと思つて、苦笑ひながらジロ／＼睨めつけてゐた。

「今日は、これから、貴方がた一體どうする氣なの？」

「東京へ歸るのさ。瀬川君は信さんの見舞に行くつて、それで一緒に出かけて來たんだ―」

「あたしも、一緒に行かうかな」

さすがに氣後して、二人の氣持に計る調子だつた。冷かしやら冗口やら、いろ／＼あつた末に、結局食事がすんだら三人づれで東京へ出て、すぐ紀尾井町を尋ねることに話がきまつた。

青蜩

一

普段は、泊り客でもある時のほかあまり使つたことのない、奥まつた八疊を病室にあてゝゐた。次の間の六疊の方を足にして、東枕に、南の縁へ顔を向けてゐる信之は、淺間しいまでに痩せ衰へて了つた。禿あがつた額の骨の凸凹は、殆ど皮一枚の下に、はつきりと現はれ、骨相學の方から云ふと、觀察力の發達を示すものとか稱へる、常から高く秀でた眉骨などは、中にも殊に著しく飛び出し、その蔭に深く落ち窪んで、三重にも四重にもなつた瞼から、こぼれ出しさうな眼の玉が、大くギョロンと瞬かれてゐた。鼻は尖り、頰の肉が落ちたために、脣のあがきも苦しさうで、蓬々と延びた髭のなかに、白い大きな歯が、始終頭を出してゐた。老人と違つて、若い者のさう云ふ姿は、惨しいとよりは、寧ろ不氣味だつた。

遠く目を放つて、軒端をすれ／＼に、光り耀く夏の夕空を見詰めながら、鼻音で、同じほどの間を隔てゝ、微かに、うん／＼と返事をしてゐた。丸三の三吉は、假令天子様のお召にあづかつても、このまゝでお臺所口からお伺ひする、と頑に云つてゐる半纏着で、縁側にピタリと坐りこみ、低聲に何やら話し續けてゐた。ほかには誰もゐず、青蜩の聲ばかり、廣い邸内の寂寞をひとしほ深くしてゐる……。

「……と云ふわけで、あたしもつく／＼お可哀想になりましたので、餘計なことをするやつとお叱りをうけますまでも、どうぞして一遍ちきにお目にかゝつて……」

「うん」

「是非とも お願ひ申してみたいと思ひまして……」

「うん」

「いかがでございませう……？」

「うん」

「たゞの一目でも、……一時の間でも……」

「うん」

「ねえ、旦那……」

「あたしの方では、疾に、……疾から來てくれさうなものと思つてた。然し、こんなこと云つたつて、なんにも知らないお前さんを捉へて、恨み、……根吉の取次でもしてくれと頼むやうに採られちや困る、來たいが來られない、――その、その遠慮が彼方にあるうちは、あたしだつて、來てほしいが、呼びにやるのを、どうしても遠慮することになるんだ……」

「なアんだ」

三吉は、俄に晴々しい笑ひ顔になつて、――そんな……、なんです、旦那、そんならせ早く

に……」

「待つてくれ。お前さんは、氣が早すぎるよ……。たゞ逢はうと思ふ氣持なら、何もお前さんを煩はすまでもたいさ。電話、……手ツ取り早く電話一本でもすむことだ。こんなことまでもお前さんに話すことはないんだけれど、これも御緣だ。とんでもないところへ、思ひがけないお前さんと云ふものが飛び込んで來たのも、これも何かの御緣だ。……待つてくれ、すまないが含嗽を一つさせてくれないか。口が渇いて……」

「へえ」

慌て氣味に枕もとへ匍ひより、ブツカキを浮かしたコップの水を、硝子管で吸はせ、小さな金盥を布團の上へぐいと壓しつけるやうにして、枕の上から吐き出すのに具合よくしてやつたり、心のくばりは、自とすることの親切になつて現れた。

二

含嗽をすますと、信之は、力のない聲で笑ひだした。

「なんだか、間をおいたら、勿態がついちまつて、話し惜くなつた。つまらないことだから、よさうよ」

「旦那、そんなこと云はないで……、なんですね、仰有つてくださいましなね」

「くだらない話さ、謂はば愚痴だよ、いや、惚話だよ。……堪忍しといてやらう」

「可厭ですよ、氣持のわるい……」

「なにね、誰しも云ふ口さ、……お互のうち、どつちでも、いよ〳〵いけさうもないと云ふ時が來たら、假令その時には別れてゐようとも、お互にどれほど變つた身の上になつてゐようとも、いくら遠方に離れて住んでゐようとも、なんとでもして知らせ合つて、どちらが先にしろ、死ぬ時だけは必ず枕もとにゐつこ、ツてね、さう云ふ約束がしてあるのさ。笑つちアいけないよ……」

信之は、もう一度力のない笑ひ聲をたてた。三吉は勿論笑はなかつた。首を垂れて、ぢつと考へ込んでゐた。

「どうだね、可笑しさを通り越して、いつそ馬鹿馬鹿しいかね?」

「さうでもありませんが」

と、顏をあげて、憚るところなく、一旦那にしちア、そいつはあんまり出來がよくなかつた。そんな約束なんぞどうだつていゝぢアありませんか。來たいと思つたら來る、いやなら來ない、それでいゝこつちアありませんか」

「ところがね、それほどに堅い約束をして置いてさへ、だアれも來てくれてがないなんぞは、ひどいもんだよ。我が身ながらも氣の毒ツたらしいほどだよ」

「だアれも來ないつて、そんなに幾人も、あつちこつち口がかけてあるんですか」

丸三の調子には、反感が露だつたけれども、信之には、まるでそんな感じはないやうに、さも面白さうに笑ひ出した。

「なアに、そんなにたんとでもないさ。金鵄勳章だから、さう數は出さないやれ。どうだい、金鵄勳章つてのはいゝだらう?」

「へツ、金鵄勳章……」

と、やゝお義理に笑つて、一旦那、ほんとうに浮氣もんだなア」

「なんに限らず、出來る間にして置くことだ。出來なくなつてからぢア、なんにも出來ないかられ、え? さうだらう」

「ぢアもう思ひ置くこともないでせう」

ズケリと云つて退けて、あとは有繋に、急に冗談らしく、[illegible]の面に似た皺だらけの愛嬌顔になつて、旦那なんぞ、なみの人間の十人前やそこらは、いゝことばかりして來たんだか

ら、――そこらぢう金鵄勲章だらけにしちまつたんだから……、ねえ、さうでせう、旦那！」

「もう大丈夫見せつけられる心配はない、なんぞと思やアがつて、急に氣が強くなりやアがつて、この期に及んで意見しやがる。可厭なやつとは思ふけれど、まア〳〵默つて聞いといてやらう……まつたくだ、素人考へにしたら、大抵もう思ひ置くこともなささうに思はれるだらう、いかにもさうありさうなこつた！」

「てえと、その實まだあるんですか……」

「まだ出る〳〵つてね、古い手妻の掛聲ぢアないが、いよ〳〵目をつぶるまではこつちのもんだ、誰がなんと云つたつて俺の命だからね、あんまりさう安く扱つて貰ひたくないもんだ。ねえ、とツさん、どうだい……」

三

「呆れた！」

いつの間にか三吉も、すつかりいゝ心持にされてゐた。云ふ言葉はいかやうともあれ、そこに湛へられる空氣は、なんとも云へず澄み透つてゐた。明るくほがらかだつた。先刻からちよくちよく感じられた反感も、今はさらりと捨てて、うつかりその明るさに包まれて了つた。「呆れた！」言葉の響きでは呆れただが、その場の意氣では、成程！ 感心！――そんな感じに近いものだつた。

「然し、旦那まつたくさうしたもんでせうね」

「馬鹿にするない。すつかりもう死ぬにきめてやアがる」

今度は三吉も、力のはいらない信之の笑ひ聲に合せて、咽ぼとけのあたりで、ころ〳〵と笑つた。

秋めいた、黄味の勝つて來た夕陽のなかに、寂しく甲高な青蜩の聲が冴え亙つた。ぢツと聞き澄してゐた信之の胸には、底の知れない憂鬱が來た。

一人だ！ 結局人間は一人きりのものだ！ 親兄弟だらうと、いかに深く惚れ合つた情人同士だらうと、つゞまるところは他人のより合ひだ。自分のほかに自分はない。一人だ！ 一人だ！ ――幾度信之は、この胸の冷たくなる實感を繰返して來たことだらう。――まごゝろこめた眞實が、なんの手答もなく消えて行く……、湯氣ならば、空に凝つて雲ともなり、雪ともならう、消えて行く眞實の儚さは、天地のそと、永劫の後にも、一片の影さへもとゞめないのだ。まごゝろが、まごゝろに觸れて、柔く抱きとられる深い悦びを、なまじなまなか知つたればこそ、畢竟はこの寂しさだ！ まごゝろよ、遠く汝の扉を閉ぢよ！ と、憤りは我に還つて、髪をむしり、歯を喰ひしばつたことは、そも幾度だらう。――一人だ！ 一人だ！ 俺の好きなやつは、この世はじまつてより終るまで、たゞの一人だつてあるものか。だれがくそ！ だれがくそ！

その憤ろしさのうちはまだよかつた。あとへ續く一人ツぽつちの寂しさは、一人ツぽつちに沈んで行くよりほか、誰にも、どこへも持つて行きどころはなかつた。世を憎み、世を憤る言葉を、死ぬ間際までも絶たなかつた父信策の、一事一念、凝りかたまつたが最後、夜の目も合はさず、食も攝らずに、氣違ひじみた眼つきになつて、どうかすると二日二晩も籠りきりに籠つたことのある洋風の書齋、――そこに信之は、憤りも得ず、泣きも出來ない、暗く冷たい孤獨の心を、石ころのやうにころりと置いて、……最後には、たゞぼんやりと氣がぬけたやうになつて了ふ、――さう云ふ思ひを幾度くり返して來たことだらう。

けれども、彼には、決してそれが永續きしなかつた。子供が出來てからよほど違つて來たとは云へ、それでも、石ころの心には、酒よりほ

かに注ぎかける適藥がないかのやうに、眞ツ暗になつて飛び出して了ふと、三日四日は飲み續ける……。

「咽もと過ぎれば熱さを忘る、つてのを知つてるかい」

醉つたなかにも、ふと氣がつくと、自ら嘲らずにはゐられなかつた。「天狗樣が、ほや〳〵湯氣のたつてる大盃を吹いてる繪だぜ。咽もと過ぎれば熱さを忘る、つてね、思ふも早いが忘れるのも早いや。なんのことはない日向に置いたボール紙だ。裏へでも表へでもペコン〳〵と反りやアがる。安値なもんだぜ。早いがお得だ。代は見てのお戻りだ。ねえ、ペコン〳〵とボール紙、さ。裏も表もあるもんか。安値なもんだ。おい、安いよ〳〵。早いがお得だ。どうだい、一番俺を買はねえか」

四

不機嫌に燥ぎだすと、信之の自嘲は鋭く冷かつた。同時に、飛沫ははたへもかゝつた。醉へば醉ふほど、ひとの心と、その言葉との隔たりに押しあてる物差の目盛りが、はつきりと目に見えて來る。

──なにヨッ云やがる、毒なもんならお上で賣らせるか。酒は毒ぢアねえ、こんなくだを卷く口が毒なんだらう。口ぢアねえ、毒は腹にあるんだ。可厭ならけえれ、さつさとけえつてくれ！　それとも、俺のそばにゐたいことはゐたいんだけれど、いつまでも飲んでるから可厭だつてえんなら、眞直にさう申しあげちまへ！　なんの罪もねえ酒に、……こ、こんならめえもんに、假にも毒、毒たアなんでえ、つまらねえ因緣をつけやアがると承知しねえぞ」

さう云つた調子の自分自身が、いかに下劣であるかと云ふことは、誰よりも一番に自分が承知してゐた。決していゝ心持になつてゐるわけではなかつた。心が傷んだ。けれども、ほかにどうすることも出來なかつた。自分ほど寂しがりやの、ひとを戀しがる性分の男を、忽ちにして、こんな人嫌ひにして了つたのは、一體誰の仕業だ。みんなひとのせゐぢやないか。そのひとが、俺によつて不愉快を與へられたからつて、それは自業自得と云ふもんだ。俺がひとからうけた寂しさの仕返しにしちア、まだ〳〵とてもこんなことぢア足りないんだ。いくら俺が一生懸命になつて、相手構はず、片ツぱしから不愉快に、──世の中には、まごゝろなんてものは、これンばかりの破片もおつこちてはゐないもんだと云ふ、人間らしい人間ならば、誰しも必ず「寂しさ」の反應を呈さずにはゐられない筈の毒素を注射してやつたつても、存外平氣の平左なのだからやり切れない。故意と焦らして、いつまでも渡さずに置いてみたところで、相手が格別それをほしがつてもゐない場合では、折角の意地惡が、なんの役にも立ちはしないのだ。そこまで承知でゐながら、矢ツ張りほかにどうしやうもない、その苛だたしさ口惜しさなのだから、眞に救ひがたかつた。──なんでも構ふことはない、山葵おろしのやうな、がさつ極まつた下劣さで、心をがり〳〵と引つ搔いて、そこにこびりついてゐる寂しさを剝ぎとるよりほかに、どうにも納まりのつけやうがなくなつて了ふのだつた。またそんな時に限つて、ほんのちよつとした好意にも、すぐにころりと參つて、生れ變つたやうに世の中が明るくなり、喜ばしいこゝろになつて、いま鳴いた烏のニコ〳〵顏で、人嫌ひの氣持なんてものは、一體どこの國へ行つたら見附かるのだらう、とでも云ひたげに、ケロ〳〵と變つて了ふ……。彼が好んで使ふところの自嘲の言葉をもつてすれば、日向のボール紙が、安値にペコンと反つくり返つてゐるわけだつた。

然し、今度ばかりはさう簡單にはいかなかつ

た。今日このごろの信之の寂しさは、いつものやうに、そんな、――謂はば手輕な調子で人嫌ひにはなれないし、さうかと云つて、やたらに嬉しくもなれないところに、奥底の知れない凄みがあつた。深い洞穴でも覗くやうな感じがあつた。

總てが有難く、總てが滿足だつた、と同時に總てがもの足りず、總てが寂しかつた。一分でも喜び勇んでは過ごせなかつた、そのくせ、どんなことがあつても心からは憤れなかつた。……死は夙から覺悟してゐた。然し、その前に、これほど始末に困る心境によつて、じりじりと秒間を送らなければならない時が來ようとは、それは夢にも思ひ設けないところだつた。

三

遠く近く、甲高な蝉の聲に聞きとれてゐる信之の心は、その、底の知れない憂鬱に鎖されて了つた……。

彼には、一刻の猶豫もなく、たつたいま逢ひたいと、それぱかりを念じ續けてゐる幾代の心が、手にとるやうに解つてゐた。と云ふのは、彼自身がその心持でゐたからだ。たゞ、それだけの簡單な理由から、信之は、夢にも自分の感得に誤りがあらうとは思はなかつた。と同時に、彼の女が、自分から進んで出かけて來るやうなことをしないのも、よく解つてゐた。何故かならば、この瞬間のたつた今、信之自身の心が、萬難を排しても逢はうとまでは、……それほどの熱には燃えてはゐなかつたからだ。この同じ心が、幾代を有ゆる現世的の思慮から、未だ全く放つに至らしめないことも、あまりに明かだつた。――現世的、この言葉が信之には、或る特別の實感をもち始めてゐた。達者な時分の彼だつたならば、恐らくはそこに、常識的と云ふ言葉を用ひただらう。常識を尊び、常にそれによつて動くことをよしとしてゐながら、尚且、ただの一日でも、さう云ふ己れに滿足しきることの出來なかつた信之は、いつか現世と未來とに、それと全く同じ感情を以つて臨むやうになつてゐた。少くも、いま享けてゐるこの生くらゐいゝものはない、と思ひながら、一方には、決してそれに飽き足りてもゐられなかつた。佛法で、來世とか未來とか説くものを、その説かれた形で考へてゐたわけでもないが、まごゝろが、むきだしのまゝ、大手を振つて通用する世界、と云ふほどの意味では、現世の對語としての未來を、明かに胸底に髣髴させてゐた。體はどとにあらうとも、一旦心がその世界に飛び込めば、そのとき始めて、人が豹變するまゝに豹變し得る力をもつ、――その力がまだ幾代にも自分にも湧いて來ない。それ故に逢へないのだ、と思つてゐた。然しさうかと云つて、逢ふために、無理にもその力を振りたてようとは思ひもよらなかつた。「無理に」と云ふやうな現世味が、次第に信之から失はれつゝあつた。――寂しさの始まりは彼の裡にあり、終りもまた彼の裡にあつた……。

「ぢアまア、兎に角あたしにお任せくださいますか」

三吉は、暫くしてから、もじもじと歸り支度の尻を擡げかけて、「旦那は、來たければいつでも來いつて云ふくらゐの氣持でいらつしやるんだから……」

「折角親切にさう云つてくれるものを、病人のくせにいやに一克で惡いけれど、矢つ張り默つてほつといてくれないか。なんとなく、今夜か明日の朝くらゐには來てくれることになりさうな氣もするし、態々それだけのことを云ひに行つてくれたところで、それですぐ出かけて來るかどうか……。それよりね、お前さんには、ほかに頼みたいこともあるんだから……」

信之には、八月にはいると間もなく、女中と

書生をつけて、鎌倉の、親類の別荘へやつてあつた子供たちを見たく思はれだしてゐたが、歸つて來るやうに云つてやるのに、手紙ではまどろッこしいし、電報では早すぎるやうな氣がして、誰か迎ひに行つてくれ手はないかと思つてゐたところだつた。で、その時ふと丸三がよからうと考へついたので、一方をすげなく斷つた蟲抑へにもなるわけと、急にそこへ依頼の話を持ち出したのだつた。

丸三も心持よく承知して、今からすぐ發つて、おそくも明日の朝には、みんなつれて歸るからと、緣側に痺れを切らした膝をさすり〱立ち上るのを、

「おい、君、君……」

と、うしろから呼びとめて、「君そつちへ行つたら、朋子にちよいと來るやうにさう云つてくれないか」

「畏まりました」

丸三は、もう一度ピヨコリと頭をさげて、長い廊下に、ピタ〱と素足の音をたてながら臺所の方へさがつて行つた。

六

昔から醫者嫌ひの信之も、今度と云ふ今度は仕樣がなかつた。同期の大學出で、日本橋の方の道場に、時折は一緒になつたこともある財部博士を主治醫に、ほかにも二三人診て貰つてゐた。裁判所から、細君と、桑木看護士とに附添はれて、自動車で歸つて來ての三四日は、煮くたらされたやうにペト〱になつてゐたけれども、ちよつと小康が來ると、すぐなんのかのと口やかましくなりだした。絶對安靜だの、流動食だのと云ふ言葉は、聞いたばかりでも癇癪の種だつた。馬鹿々々しく外面のいゝ信之のこととて、看護婦にさへも、めつたに荒い言葉は吐きかけなかつたが、その鬱積を、心おきなく一度に浴びせかけられるのが、朋子だつた。

然し、十日ともたずに、さう云ふ日も過ぎて行つた。この頃では、大抵のことなら、うんうんと大人しく云ふ事を聽いて、頻とひとを戀しがり、細君などは、眠る暇もないほど、格別の用もないのに枕もとに呼びつけられてゐた。さうなつてみれば、事毎に、氣むづかしい八の字をよせて、がみ〱叱り飛ばされてゐた時分の方が、どれ程よかつたか知れない、と、ひとり朋子は、心細さに堪へられない思ひだつた。

丁度臺所へ、晩御飯の支度を見に行つて、何かと女中に氣をつけてやつたりしてゐるところへ、

「奥さん、旦那樣がお召ですよ」

と丸三は、いつもの、暗闇から引き出した牛のやうな、ぬうッとした面つきで、ぶつきら棒に云つたまゝ、すぐ水口の下駄を突ッかけようとした。

「お前さん、もう歸るの？」

「へえ」

「もうちつとお相手をしてゐてくれゝばいゝのにさ。ちよいと人の顏が見えなくなると、朋子朋子が始まるんで、ちつとも用が片づかないで仕樣がありやしない」

「結構です」

「何が結構があるもんかね。暇なら、もうちつと油を賣つて行つたらどう？ なんにもないけれど、晩御飯の支度もしといたし……」

「ところが奥さん、さうしてゐられないんで。これから手前は御使者の役目、……なか〱大役です」

「あゝ、さう。道理で、さつき來た時から、あたしの顏を見る眼つきが、へんにまぶしさうだと思つた」

「いゝえ、それが、今日に限つて大違ひ……」

三吉は急に愛嬌笑ひをして、一目さす仇は鎌倉殿、……お子さんがたのお迎ひと云ふ大役で

す。尤も大役は無役に近いとか云つて、なに雜作もないお安い御用だが……」
「へえ、さう？　ほんとう？」
「なアんだ、奥さん御承知ぢアないんですか？　あつしアまた、御相談の結果、大命降下と相成つたる次第かと、憚りながら……」
「うるさいね。……へえ、さうかい。それならなほさらのこと、御飯を食べてつたらいゝぢアないの」
「いや、一應館へ立ち歸つた上、嗅左衞門の尉味良とも、篤と別れを惜まねばならず、兎も角一晩でもうちをあけるとなれば……」

七

「ぢアまア勝手になさいだけれど……」
三吉の冗口に相手になつてゐたひには、いつまでもきりのないことを承知しきつてゐる朋子は、強ひては晩飯を勸めなかつたが、然しいよいよ鎌倉まで行つて貰ふとなれば、旅費も渡して置かなければならず、彼方の諸拂も、書生に預けてある分ではとても足りる筈はなく、ことづけて持たせてやりたいし、そのほかいろいろ用事もあるので、「兎も角、ちよつと待つておくれな。いろ〳〵頼みたいこともあるんだから……」
「まアよござんさアね。木偶の坊を使にやるわけぢアなし、そこは鼻から鼻へぬけるほど利口な丸三でさア、萬事遺漏なくやつて來ますから、御安心なすつていらつしやいましよ」
「だつて、ことづかつて貰ひたいものだつてあるんだからさ」
「お金でせう？　そんなもなアあとでよござんすよ。何しろ、いつも云ふ通り……」
「三千七百圓かい」
と、つい釣り込まれて笑へば、
「三千七百五十五圓、同じことなら、端數まできつちり憶えといてくださいなね。……冗談は兎に角、早い方がいゝから行つて來ませうよ。彼方のお拂ひなんざア、あとからだつて構やアしませんやね。どうンでもしてお子さん方の體だけ持つて來ちまやアいゝんでさア。一刻も早く逢はしてあげたいから、實はあツしア、今夜のうちにお連れして來る氣でゐるんですぜ」
「そんなこと云つたつて……」
「まア〳〵、いゝから任してお置きなさいましよ。それより、奥さん、早く旦那のところへ行つてておあげなさいなね。看護婦さん、どこへ行つちまつたんだか、――尤も話の都合でちよいと遠慮して貰つたにやア違ひないが、兎も角いま旦那お一人でしたから……」
「あら、さう！」
と、朋子は、すぐ小走りに行きかけ、振り返つて、「いますぐ來ますからね、ちよつと待つてくださいよ」
そのまゝ長い廊下を、二箇所で曲つて、奥へと急いだ。先達もうつかり註もつけて置かなかつた間に、含嗽に使ふアイス・ウオタアを、嚥飲の口からゴク〳〵と飲んでゐるところへ行き合せて、驚き呆れたことがある。叱ると、なにかう大ッぴらにやるのは初てだが、内々には、もう夙から隱し飲みをやつてゐた、含嗽のたんびに少しづつ誤魔化しては咽喉へ入れてゐたのだが、近頃ではすつかり上手になつて了つたから、ちよつとはたの目には分るまい。……だけど、こんなこと、財部に云ひつけたりすると承知しないよ、などと、洒々としてゐる始末の惡さに、それ以來必ず誰かしら一人だけは、そばから離さないことにしてゐたのだ。それを、看護婦がついてゐることとばかり思つて、うつかり丸三と話し込んでゐた朋子の足は、無意識に早められてゐた。あたまには、けれども、全く別の考へが浮かんでゐた。――一言の相談もなく、いきなり子供たちを迎ひにやる氣になつたと云

ふのは……。
　事毎に、ともすれば不吉な氣持へ陷ちたがるこの頃の癖で、それだけのことにも、ぢつと思ひ沈ませられた。目も伏せて、する〳〵と行く緣側の、もう病室まで四五間と云ふあたりで、身を斜によけて、風のやうにすれ違つて行つたものがある……。觀世水に何か花のある、洗ひ晒の手拭ゆかたに、紫の伊達卷をしめてゐた。素足の眞白な……。
　おや、誰だらう、と振り向いた時には、ぢかの陽こそなけれ、まだ明るい緣側に、棚引く煙ほどの影もなかつた……。

八

（おや）と、口のうちに呟いたが、それは、うしろを振り向きさへすれば、必ず目のなかにはいつて來ると思ひ込んでゐたものが、だアれもゐなかつたので（おや、可訝しい……）くらゐの氣持だつた。不思議にも、床のなかから出て來たばかりと云つた風の身裝については、まだその時には、少しの訝しさも感じられなかつた。すれ違ひざまに、小腰をかゞめて、輕く會釋をし合つたやうな氣持さへ殘つてゐたくらゐで、その時刻に、その廊下へ、さやうな裝をした女が通りかゝることが、決して不思議でもなんでもなく思はれてゐたのだ。何よりの不思議はそれだつた。いかにぼんやり考へ込んで歩いてゐたとは云へ、それを可訝しく思はなかつたと云ふのが、第一に可訝しい。それから、あとになつていかに考へ出さうとしてみても、顏かたちと髮とに、まるきり憶えの殘つてゐないのも不思議だつた。そのくせ、すれ違ふ拍子に、頭の頂邊から足の爪先まで、ちらとながら目を走らせたやうに思はれるのだが……。
（まア、いやだ！）
　と、ちり毛もとから、水を浴びせられたやうに、ぞうッと身顫ひしたのは、うしろを振り向いて、やゝ二三秒もたつてからだつた。思はず朋子は、足音あらく良人の病室へ駈け込んで了つた。
「あなた！」
　そば近くぺたんと坐つて、はア〳〵肩で息をしながら、見ると、良人の衰へ切つたやうな眼のなかにも、いつになく、たゞならぬ色が動いてゐた。
「なんだ……」
「なんです……」
「なんか見たか……」
「あたし、いやですわ……」
　脊筋からゾウ〳〵して來て、……はッと思ふと、厚い褥の上へ、横坐りにはひつくばつて、瘦せさらぼへた良人の肩にしがみついてゐた。
　信之は、靜に背なかから脇へ手を廻して、ぢッと優しい力を罩めた。
「なんでもない、なんでもない」
　さう云はれると、なほさら怖さが身にしみて來て、ガタ〳〵と齒の根も合はなかつた。桃葉珊瑚、八角金盤、柊南天、さう云つた下草ものゝ蔭には、もう夕の色が濃かつた。そよとの風もなく、軒の岐阜提灯が、纔に沖天に暮れ殘つた光を吸つて、あたりにそぐはぬオパールの明るさに、ぼてりと重くつるさがつてゐる。間遠になつて、青蜩の聲がひとしほ寂しい……。
「……あなた……」
「なんでもない、俺にはよく解つてゐるんだ」
「なにが……？」
「あとで、もつと落ついてから話してあげよう」
「いや〳〵、そんなこといや、云ふんならいま云つて頂戴……」
　信之は、しばらく考へ込んでゐたが、そつと朋子の掌を自分の掌に把つて、柔に握り締め

ながら、
「いつか、京都から遊びに來てくれたひとがあつたらう、里奴と云ふの……」
細君は、薄い掛布團のなかに埋めた顏をそのまゝに、輕く頷き答へた。
「あのひとが、眼を患つて、大ぶん惡いと聞いてゐたが、ひよつとするといけなかつたのかも知れない。――お別れに來てくれたんだ」
もう一度朋子は、ブル／＼と顫へあがつた。信之も、身のまはりがスイ／＼して、いやに寒かつた。
「よく然し來てくれたと思つて、俺は喜んでるんだよ。可哀想だけれど、どうも壽命ばかりは仕方がないからなア」

九

「どうして、……どうして……」
暫くしてから、朋子はやつと布團から顏をあげて、幾度も云ひ淀みながら、「どうして、だけど、そのひとだつてことが……」
「それア分るだらうぢアないか、顏を見たんだもの」
「まア！……はつきり？」
「ふいと見ると、いきなりもうそこに坐つてたんだ」
「いやア！」
もう一度かじりつく細君の背を、信之は優しく撫でさすり、笑ひ聲で、
「弱蟲だねえ、なんでもありやしないぢアないか。死の知らせの話なら、世間に腐るほどあるよ。可怕いと云ふことぢアない。不思議には違ひないが、然し決して惡い靈魂が來てゐたわけぢアないんだから……」
「それだつて……」
「矢ッ張り可怕いかい？　よし／＼、ぢアもつと賑やかにしようよ。……どうしたい、三吉はもう歸つたかい？」
「あゝ、さう／＼。ちよつと待つてゝくれるやうにつてさう云つて來ましたけれど……、ほんとになんですか、鎌倉へ行つて貰ふんですか」
「急にみんなの顏が見たくなつたから……」
さう云つて了つて、信之は、ぞうッとした。なんとも云はれず不吉な氣持が、眞黑く胸に蟠つた。――それが、すぐ細君の方へ傳はつて行く、と感じられた。「きつと、なんだ、みんな、日に焦けて、丈夫さうになつて歸つて來るだらうね。文子なんぞ、ヒョッとすると、可怕がつて、俺のそばに寄りつかないかも知れない……」
「そんなこと……」
「いや、さうでないよ。隨分これで、ひどいことになつちやつたからなア……。ほんとうに子供たちのことを思つたら、こんな惨めな姿は見せない方がいゝのかも知れないが……」
「もうそんな心細いこと仰有らないでください……」
「だからさ、大に元氣を出して、子供たちのためにならうとなるまいと、俺が逢ひたくなつたから呼びに行つて貰ふんだよ。……逢ふときまつたら、馬鹿に待遠しくなつちまつた。なんだつて、三吉、待たしてあるんだい。何か……」
「いゝえ、あんまりだしぬけでしたから、またいつものでんで、丸三にかつがれるんぢアないかと思つて……」
「まさか……」
と、寂しく笑つて、「兎に角、あとのことはあとのこととして、たんと持たしてやることはないよ。……現金、あるのかね？」
「えゝ、丁度いゝ按配に今朝少しばかり出させて置きましたから」
「ぢア、すぐ出かけて貰ふやうにさう云つてくれないか。今からなら、七時の汽車に乘れるだらう、少し無理かな」

「どつち道、今夜のうちには歸つちア來られませんわ」

「さうかしら……。ぢア、明日の朝は出來るだけ早い汽車にして貰ひたいな」

「さう申しときませう」

「ぢア早く行つて金を渡してやれよ」

「……えゝ……」

と、朋子は立ちかねてゐた。

「なんだ、まだ、可怕いのか」

「今日は、どうしたんでせう、電氣……」

「電氣がつきア七時になる。ついてくれない方が有難いや。……さア、早く行かないかよ」

急き立てられて朋子は、思ひきつて、夕闇の廊下を、臺所まで夢中にとんで行つた。

十

入れ違ひに、朋子がよこしたものとみえて、間もなく看護婦が、襯の強い仕事着の裾をカサカサ鳴らしながらはいつて來た。

「ちよつとお檢温を頂かせてくださいまし」

「六度三分……」

「へ？」

「六度三分でも四分でも、そのへんのとこでいい加減につけといてくださいな」

信之は、今なんにもしたくなかつた、なんにも喋りたくなかつた。刻々に色を失つて行く庭木の茂みへ視線を休ませたまゝ、瞬きひとつしずに、ぼんやり焦點を崩してゐた……。

「でも、ちよつと……」

云ひながら、うしろから、ゐざりよつて、輕く肩へ手をかけた。さうしたなら、いつものやうにすぐうけとるものと思ひ込んでゐるらしいのが、――その押しつけがましさが、たまらなく可厭だつた、情なかつた、涙が出るほど口惜しかつた。

「……………」

默つて知らん顏をしてゐた。

「……ね、ちよいとお入れ遊ばしてくださいましね」

東北の訛で、馬鹿丁寧に、そのくせ心持には、子供だましと云ふほどの劬りもなく、ほんのたゞうはの空で云はれると、それが信之には、大勢の人なかで、聞くに堪へない侮辱やら暴力やらを加へられながら、こちらからは口答ひとつ出來ない場合ほどにも口惜しくつて、我慢しようと思ふ心が、忽ち弱々と涙になつて了つた。――心ばかりではない、實際目のなかに一杯たまつて來た涙が、ぽろ〳〵と鼻柱へ傳わり落ちた。

「……ね、ちよつと……………」

七娓くも、もう一度さう云つて、そつと腕を擡げようとして、看護婦は、思ひもかけないその涙に氣がついた。吃驚して、だんまりで檢温器を鞘にしまひ、こそ〳〵と枕もとを離れて、次の六疊の間へ立つて行つて了つた。

……夢から覺めたやうに、それで信之は、はツと我に返つた。體温を計る計らないで泣き出して了つた自分と云ふものが、はつきりしたあたまへ映つて來ると同時に、恥かしさや馬鹿馬鹿しさではなく、突拍子もない氣持にぶつかつてゐた……。

（これでほんとうなのだ、これが俺と云ふものなのだ。普段こんなことを恥かしがつたり、馬鹿馬鹿しがつたりしてゐた俺は、……あれはほんとうの俺ぢアない、あれは、……一體あれはなんだらう、兎に角なんかの間違ひだ……。だが、その間違ひのなかに住み慣れてゐる淺田さんにしたら、さぞ吃驚しただらう、氣の毒なことをしたな……）

さう思ふとまた涙が盛りあがつて來た。今度は、鼻筋を越して、左下にねてゐるその左の頰まで、生温かく、むづ痒く流れて來た。それと共に、清々と、なんとも云はれずいゝ心持に

なつて來て、暫らくは、無念無想に泣き續けられた。（死んで行くのも、存外これは樂なことかも知れない……）

ふと、そんな考へが、白紙のやうなあたまのなかへ、一筋薄墨色の線を、すうツと引いて消えた……。

「淺田さん」

また暫くしてから、信之は看護婦へ聲をかけた。いつかもう、少しも普段と變らない調子になつてゐた。涙聲なんぞではなかつた。

「もう電氣は來てゐるんぢやアないんですか」

「まだのやうでございますよ。どうしたんですか、今日はおそうございますね」

「さう。……あの、……それからね、……體溫器をかけませう……」

曉天の星

一

山下町の支那料理屋を出て、すぐ櫻木町驛から電車で上京して來た伊庭、瀨川、鈴江の三人が、新橋で降りて、銀座を散歩し、冷たい飲料を攝つたりして、うか〳〵と八時半ごろになつて了ひ、慌てゝタクシイで紀尾井町へ驅けつけて來てみると、いつも大抵は締めきりの大きな屋敷門が、八文字に押し開かれて、俥が二三挺と自動車が一臺、玄關さきに客を待つてゐた。

（おや！）

見るなり三人は、一樣に肚胸を衝かれたのだが、そこは女だけに、まづ口へ出して呟いたのは鈴江だつた。

「なんだらう。……ねえ、瀨川さん」

「うん」

低く鼻音で答へたばかりで、車が止まりきるのを待ちかねて、瀨川はうちから扉をあけ、眞先に跳びおりた。

「ちよつと、君、いくら？」

急き込んで、心づもりでもう蟇口から摑み出してゐた金を、運轉手の答と同時にその掌に押しつけて、續いて降りて來た二人と一緒に、すぐ玄關さきへ立つた。

「ごめん、ごめんください」

立派な體格から出る、太い、朗々とした伊庭の案内にも返答がなかつた。瀨川が呼鈴を押した。奧の方で、人聲や、忙しげな足音はしてゐた。「ちよいと、どなたか、お玄關ですよ、お客樣ですよ」そんな、甲高な女の聲も聞えてゐたが、まだそこへ誰も取次に出ないうちに、門内に敷つめた小砂利を鳴らして、自轉車で乘りつけて來たのに、電報配達だつた。

「はい御苦勞樣……」

鈴江が五六歩あゆみよつてうけとり、すぐ發信人を、玄關の灯にすかして讀んだ。

「ミヨシ……」

「三好？　三好颱夫かな」

瀨川がそばへ行つて、ひつたくるやうに取つて、封のないのをそのまゝに押し開いた。「馬鹿に長いぞ……」

「おい、讀むのは亂暴だよ」

笑ひ聲ながら伊庭がたしなめた。

「なに、三好なら構やアしないさ」

「それに親展ぢやアないんですもの」

「電報に親展なんぞあるかい！」

伊庭が、例の湧きあがるやうな笑ひに破裂しようとするのを、

「あるとも！」

と、引きとつて、瀨川は、大きな目をクリ〳〵させながら、「親展だけ、前のやうな封をすることになつたんですよ。この頃は、普通なら、みんなこの通り開封なんだ。驚いたなア、貴方そんなこと知らなかつたんですか」

「知らない。……へえ、さうですか、親展の電

報てのは始て聞いた……」

「だから、貴方は舊時代だつて云はれるのよ……」

鈴江が、こゝぞとばかり冷かしにかゝるのを、瀨川はかけ構ひもなく讀み始めた。

「オタミキトク……、お民つて誰だらう？」

「三好君と一緒にゐるひとはなんてつたつけね？」

「あれは、君、……なんだつけな、あゝ美津枝さア。誰だらう、……お民危篤、ケイトアイミンコトヲ……、ケイつて誰だい……」

「ケイは兄さ、貴兄の兄さ」

「あゝさうか、兄と相見んことを、か。ノゾムセツ、ゴビョウキトハシレド、ゴホウか」

「ぢア、矢つ張り信さんのメ（情人）なんだね」

「さうらしい。この騷ぎのなかに、三好もめちやなやつだなア」

二

「そんなことはどうでもいゝけれど……」

鈴江は、何やらひとり苛立たしげな容子で、あけ放した奥の方を見込みながら、「なんぼ混雜してるつたつて、誰か取次ぎぐらゐ出て來たつてよささうなものね、何してるんでせう……」

「構はないから、あがつてつてみようぢアないか」

書生流儀の無雜作に、瀨川が下駄をぬいで、式臺へ踏みかけようとした時に、大急ぎでそこに飛んで出て來たのは、丸三の女房お辰だつた。

「おや、皆さんお揃ひで……」

まるで、屋臺の暖簾をわけて突き出された顏にでも對した時のやうに、相變らず愛嬌よく笑ひかけた。

「なんだか、大層うちのなかがごたついてるやうだが、容態でも變つたんぢアないのかね」

伊庭は、お辰の顏つきを見て、ひとまづ安心はしたやうなものゝ、急き込んでから尋ねずにはゐられなかつた。

「えゝ……」

と、急にまたガラリと變つた眞面目顏になつて、「夕方、丁度うちの親爺が伺つてまして、鎌倉までお子さん方のお迎ひに行つて來いつて、あの、お頼まれしましてね、もういま出かけようとしてゐる時だつたさうですがね、これまでになく澤山血をおあげなすつたんださうですの。それですぐお醫者樣に來て頂くやら何やら大騷ぎになりましたんですけれど、今さつきからちつとお落つきになつて、この分なら今が今と云ふやうな御容態ぢアないからつて、お醫者樣もお一人だけはたつた今お歸ンなさいましたが……、まア、どうぞお上りくださいまし……」

「さうかい、そいつは何しろ心配なこつたね、で、何かい、意識ははつきりしてゐるのかい？」

「えゝ、なんでもよくお解りになるさうです。親爺がお枕もとへ行きますと、お前まだ愚圖愚圖してたのか、早く鎌倉へ行つたらいゝぢアないか、つてひどく叱られちまつたんださうですよ。それで、一旦うちへ飛んで歸つて參りましてね、あたしに、すぐお手傳ひにあがるやうにつてさう申しまして、そのまんままた新橋へ、七時の汽車に間に合ふやうにつて、柄にもなく貴方、自動車かなんかで驅けつけて行きましたんですよ。ですから、そのくらゐなんですから、お氣は慥なんでせう。あたしは、御遠慮申して、まだお目にはかゝらないんですけれど……」

「さうか、そんなことと知つたら、僕が子供達をつれて來れアよかつたんだがな」

瀨川は、玄關にあがつて、帽子掛に、大分薄汚れた麥藁帽を引ッかけながら、「今日僕は、鎌倉から出かけて來たんだからね……」

「あら、さうですか、ずつとあちらへ行つていらしつたんですか？」

「あゝ、こゝの紀ちゃんたちとも、大抵毎日の

やらに瀬川で一緒になつてた。みんなそれア元氣でね……」
「まアさうですか。……ぢア、兎に角お書齋へお通りくださいませんか。今すぐ奥さんに申しあげて參りますけれど……」
ぞろ／＼と、玄關から左へ、勝手を知つた洋館の書齋の方へはいつて行つた。その入口で、上靴を突ッかけながら、瀬川が、
「おもてに自動車や俥が待つてるが、ほかに誰か御見舞の方でも見えてるのかね？」
「えゝ、財部さんとか仰有る博士の方と、それから……」
云ひかけて、お辰はニヤ／＼笑ひだした。

三

書齋の片隅によせてある船底椅子を引き摺つて來て、早速それへ腰をおろさうとした瀬川が、いち早くも丸三の女房の笑ひ顏に目をつけて、
「なんだい、ひとりでニヤ／＼笑ひなんぞして、薄氣味のわるい」
「あたし、驚いちまひましたわ……」
「何がさ」
「あのね、……あの方、たしか日本橋の方でしたわね……」
「だしぬけにそんなこと云つたつて……」
伊庭がそばから引とつて、「誰か藝者でも來てるのかい？」
「えゝ」
と、お辰は、ひつつめにした縮ッ毛の頭を、あまた度うなづいてみせて、「一先に二三度、手前どもにも來てくだすつたことのある方ですわ。瀧十郎さんが御一緒の時もありましたし……」
「瀧十郎と一緒？」
「いゝえ、それアいづれこちらの旦那のお伴ですけれども、瀧十郎さんやまだほかにも藝者衆が三四人も一緒に來て、屋臺へはいり切れないで、代り番こに食べては往來に出て待つたりして、大騒ぎをなすつたことがありましたつけが、その時にも見えてた方です」
伊庭が、（あゝ、なアんだ！）と云ふ風に、大きく口をあけて、
「幾代かア……」
「えゝ、さう／＼！ 幾代さん！」
「幾代が、そいで、今こゝに來てゐるつてのかい？」
この問ひに頷き返したお辰の眞向から、瀬川は、チエッ！ とひとつ、唾が飛びさうに大きな舌打をした。
「なんぼなんでも、それア信さんめちやだ！ それアいけないや！」
「なぜさ」
「なぜつて、君、かう云ふ際に家庭に藝者を呼ぶなんて……」
「いゝえ、あなた……」
お辰は、慌しく遮つて、「それが、お呼びなすつたんぢアないんですから、いよ／＼もつて驚いちまふぢアありませんか」
「なんだ、ぢア、幾代が自分の方から勝手に押かけて來たのか」
「えゝ、さうなんですつて。あたしのお伺ひなしたほんの十分かそこら前に、眞ッ蒼な顏をして、たつた一目でいゝから旦那樣にお目にかゝらせてくれつて、お內玄關に立つて、しく／＼泣きだしたんですつて……」
「奥さん、なんて仰有つたら……？」
鈴江が、さも興味のあることのやうに、話のさきを促したてた。
「一應旦那樣にお伺ひしてみるけれど、兎も角も書生部屋にでも通してお置きつて、さう仰有つて……」
「へーえ、珍しいことがあるものね」
その、鈴江の調子には、明かに反感が含まれてゐた。それが、瀬川には、ぐッと癪にさはつた。

「こゝの奥さんはね、嫉妬もひどいけれど、ものゝ解つた人だよ。君なんぞの考へてるやうなもんぢアないんだ!」

殆ど喧嘩面だつたので、お辰はその場を取り繕ふためにも、すぐに話のさきを續けた。

「旦那は、お聞きになると、すぐ通せつて仰有つたんですつて。あたしの伺つたのが、丁度、――幾代さんですか? あの人が奥へ案内されて行くところだつたんですの。吃驚しちまひましてね、すぐお女中さんにわけを聞きましたら、さう云ふ話だつたんですよ」

四

「然し、幾代つてやつも、へんなやつだな……」

一同の上に、壓しかゝるやうな沈默がちよつとのま續いたあとで、瀨川が、誰に話しかけるともなくかう呟いた。「へん」とでも云ふよりほか、ちよつと彼の女の行爲に對する氣持の云ひ現はしやうがなかつた。圖々しいと評したいほどの反感もあつた。同時に、胸に壓迫を感じるほどの眞摯さ、根深さにも擊たれてゐた。自分ながら、感慨の焦點を摑み得ないへんな氣持を、そのまゝ幾代の上へ被せて、さう形容してみたまでのことだつた。

「兎に角まア、思ひ切つたことをなさる方ですわね」

丸三の女房は、それくらゐの程度で、同じく反感と敬服と相半ばした氣持を云ひ現はした。

「それアまアいゝや」

と、伊庭が、敷島の吸ひ終つたのへ、引き繼ぎにもう一本火を移しながら、「兎も角吾々の來たことを、奥さんまで取次いで貰はうぢアないか。で、もし醫者から禁められてゐるのでなけれア、寢顏でもいゝから逢つて行きたいな」

「へえ、さう申しあげて御都合を伺つて參りませう。ついくだらないお喋りをして了つて……」

すぐ立つて行かうとするお辰のうしろで、鈴江が急に大きな聲をだした。

「あゝ、それから……、瀨川さん、今の電報……」

「あゝ、さう〳〵」

と、手に持つたまゝ忘れてゐたのを、お辰の方へ差し出して、「いま吾々が玄關にゐるところへ屆いて來たんだ」

「へ、さよですか、持つて參りませう」

「然し……」

渡しかけたやつを、大急ぎでまた引つ込めて、

「こいつを、この際奥さんに見せるつてのは、どんなものかな……」

「さう……、ちよつと考へもんだね」

「信さんに逢つてみた上で、容子によつたら、それとなく話して聞かせるなり……、勿論握りつぶしにして了ふのは惡いけれど……」

「さうね、臨機應變に、なんとかそこはうまくやらうぢアないですか」

「奥さんに見せたところで、どうにも仕樣のないことですからね」

「ぢア、よろしいんですね」

小腰をかゞめて話の決着を待つてゐたお辰が、さう確めてもう一度行きかけた。

「だけど……矢つ張り……、さアどうしたもんかな……」

瀨川は、神經質に尙も思ひ迷つてゐたが、「まア、いゝだらう。こつちだつて危篤なんだ、どうすることも出來ないのは同じことだ」

「いゝよ! いゝから、君は奥へさう云つてくれ給へ」

伊庭の決定的な言葉に、お辰が走り去つたあとを、三人は瓦斯入りの白ツぽい電燈の下で、互に云ふべき言葉もないやうな、空洞な氣持に眼を伏せて、やゝ暫くぢツと身動きするものもなかつた。

「暑いな」

溜息と一緒に、伊庭がさう呟くと、俄に襟を寛げ、幾筋も輪のはいつた太い頸の周りを、苛立たしげに手巾で押し拭つた。それには答へずに、瀬川は、ふとまた手にした電報を開いてみた。

「お民……と、誰だらうな……」

五

「あたしね……」

その時節江が、頸を突き出して、上目づかひに、天井を見あげながら、「あたし今ふいと思ひ出したんだけれど、たしか去年の秋ごろだつたかに、こゝへ來たらお留守で、三好さんがひとりで雜誌の方の用をしてゐるつて云ふから、ちよつとあがつて行つたことがあるの、その時に、信さん今日はいゝことがあるんだ、なんて云つて、京都から態々藤代さんに逢ひに出て來てゐた藝者の話を聞かせてくれたことがあつたわ。ひよつとすると、その人ぢアないかしら。その人なら、たぶん里奴つて云ふのよ」

「うん、その里奴の話なら、僕も三好から聞いたし、その後大阪へ住み變へたつてことも知つてるが、……何しろ信さんと來たら數が多いんだからね……」

伊庭が、笑ひながらさう云ふのに被せて、

「さ、そこが多情乃佛心の振假名にされて似合ふところぢやありませんか」

その瀬川の發聲に和して、まるで萬歳でも唱へるやうな、三人の笑ひ聲が破裂した……。

そこへ丸三の女房が戻つて來た。いつにない眞面目顏を見ると、有繋にみんな笑ひをさめて、その云ひ出すところを待つた。

「たゞ今ぢきに奧さんがお見えになさいますさうですから、どうぞ暫くお待ちくださいまし」

さう云つて輕く頭をさげるなり、お辰は大急ぎで引き返して行つた。

「なんだ、急に容態が變つたんぢアないかな」

「さうですね、なんだか容子がへんでしたわね」

「うん……」

めい／＼に、さう一言づつ呟いたきり、あとはもう誰も口を利かうとするものがなかつた。山の手の、奧深い邸のうちには、夙くも夜更の靜けさが來てゐた。窓近く、ジージッと二聲ばかり、おびえたやうに短く蟬が鳴いた。そしてあたりが一層しんとした。

「どうも、大へんにお待たせ申しまして……」

と、朋子がそこへ、ゆかたの衿を搔き合せながら、急ぎ足にはいつて來た。普段からやゝ上り加減の眼尻が、亢奮のために吊つて、白蠟の黃味を帶びた、あの蒼白さに緊張した頰と云ひ、すぐ、古い內裡雛を思はせるやうな上品さがあつた。客も椅子を立つて禮を返した。年かさの伊庭がまづ口を切つて、

「いかがです、御容態は？」

「每度お見舞くださいまして……」

「いゝえ、ちつとお惡いやうな御容子ですが……」

「えゝ……」

目を伏せ、ぶらりと垂れて、膝で指先を組合せてゐた手に、急に力がはいると、祈りの時のやうに、掌を合せて握りしめた。「どうも、いよいよいけさうもございません。……たゞ今もまた、ちよつと金盥に半分ほど吐きまして……」

「ふうん」

瀬川は、いたましげに眉を寄せ、深い息を洩らした。「それアどうも……」

「財部君は、まだゐてくれてるんですか」

信之の細君で、伊庭や瀬川も、この年若な醫學博士とは、日本橋での遊び友達になつてゐた。

「えゝ。なんですか、脈がちつと面白くなくなつて來たつて云つておいでですが……」

「意識は……？」

「はつきりしすぎてゐて、困つて了ふくらゐでございます」

六

「どうでせう……」

瀬川は、思ひ入つた風に、「吾々はお目にかゝつちやアいけませんかしら……」

「ちよつと、財部君に相談して頂いたらどうだらう」

伊庭も口を添へて、「かう云ふ場合には、何よりもまづ醫者の意見が大切ですからね」

「わたくしといたしましては、もうどなた樣でも、おいでくださつた方には、お目にかゝらせてやりたいのが山々なんですけれど、……兎も角、ちよつとお待ちくださいまし、すぐ財部さんに御相談して參りますから……」

小腰をかゞめて、朋子はすぐ奥へ急ぎ去つた。落つかない氣持で、誰も椅子に腰かけるものはなかつた。

「可厭だなア、死ぬのは可厭だなア」

瀬川が獨語のやうに呟いて、絨氈の花模樣に目を落したまゝ突ッ立つてゐた。

「信さん、まだ死なしたくないなア。どうにかならないもんかなア……」

「駄目だね、科學なんてものは、あつてもなくつても結局おんなじことだねえ」

「可怕い、可怕い！　人間いつ何時死なない限りぢアないんだからなア」

重い體を、ドシリ〳〵と、伊庭は、部屋のなかを歩き始めた。

鈴江は壁に背を倚せて、やゝ口をあき加減に、ポカンとして電燈を見詰めてゐた。

さうして十分ほどの時が經つた。小間使らしい少女が、飛ぶやうに驅けつけて來た。

「みなさん、どうぞあちらへおいでくださいまし」

「は」

長い廊下を茶の間に出て、そこから奥まつた、――よく遊びに來るこの連中でさへ一度か二度しか通されたことのない、離れのやうになつた病室の方へと導かれた。

「おい、朋子！」

存外しつかりした信之の聲が、廊下まで聞えて來た。「灯が暗いな。もつと大きな球はないのか。百燭でも、二百燭でも、出來るッたけ明かるくしてくれ。これぢア陰氣で仕樣がない……」

そこへ、伊庭を先頭に、鈴江を殿に、三人珠數つながりにはいつて行つた。

成程、十六燭かそこらしい電光のもとに、ぼんやりと描き出されてゐるものは、まづ雪白に堆い布團の長方形だつた。そしてその上に小さく仰臥してゐる、骨と皮ばかりの藤代信之だつた。枕もとに看護婦と並んで、夫人の伊代がつゝましやかに坐つてゐた。次の間には、紫檀の机をさし挾んで、細君と財部博士とがゐた。

「おう！」

どこからそんな調子が出るかと思はれるやうな、やゝ嗄れたどす聲で、「よく來てくれたね、よく來てくれたね……」

白布に包んだ羽根布團の上へ、斜に添へて投げ出されてゐた右の腕を、靜に差し出した。躊躇なく、伊庭は立身のまゝそれを兩掌のうちに把つた。丁度煎餅の厚みと、堅さと、濕みと、そして乾き加減だつた。力を入れるわけにいかなかつた。持つたまゝ膝をついて、

「どうです」

それにはちよつと目禮を返して置いて、もう一度手を持ちあげにかゝつた。その氣勢で、すぐ入れ代りに瀬川が膝行りよつて、少しでも樂をさすために、暫く布團の上に置いたまゝで握つて、目を合せたが、なんにも言葉が出ないので、代りに、そつと力を入れて打ち振つた。

七

最後に鈴江が、そば近く進みよつて、雛の

足のやうに筋骨だつた指さきを、そつと掌の裡の上へ載せた。何故とも知れない恐怖で、眞正面に、やつれ果てた信之の顔を見ることが出來ず、掌にある指さきへ目を落してゐた。……

と、その指さきが、微にうち震ひながら、掌に甲の方へ折り曲げられて、じり〳〵と力が罩つた。あとにはもう代るべき人がゐなかつたせゐだらう、信之は、さうして握りしめたまゝで、まづ伊庭と瀬川の方に話しかけた。

「今日は、どう云ふものか、朝から頻とみんなに會ひたい氣がしてね。たぶん近頃になく氣分がいゝせゐだらう、と思つてたんだが、夕方からひどくやりだしたから……」

と、あいてゐる左手で、ちよいと胸から口の方へ、うじ〳〵すと云ふ意味を手つきで見せて、「どうやら、いよ〳〵のお別れがしたくなつたのらしいよ。ところが、偶然に……。偶然なんだらう？ それとも、うちのものが知らせてあげて、それで來てくれたのかい？」

「偶然さ、實は昨日伊庭君が鎌倉に來てくれて……」

「あ、鎌倉に？……さう〳〵、君はあつちへ行つてたんだね。うちの子供たちもさつき迎ひにやつたから、今夜か、あしたの朝は、顔が見られるだらう。みんなくるまで、まだもちさうだよ。に、もたせようと思やア、半日や一日ところは、どうにでもしてもたせられるもの丶やうな氣がするよ。可訝しなことを云ふやうだが、確にそんな氣がするよ……」

「……紀ちやんたちも、大抵毎日海岸で一緒になつたが、眞つ黒になつて、なか〳〵大へんな元氣だよ」

「さうかい」

と、ニコ〳〵笑つて、「それア、お世話さんになつたことだらう……」

「それから今日は、二人で[illegible]演に出かけて、支那料理を食ひにはいつて、急に岡崎に逢つてやらうかと云ふやうなことになつて、呼びにやつたら……」

「支那料理か、羨しいなア……然しよく來てくれたね。偶然に、かうしてみんなに逢へたのは、ほんとうに嬉しい……。鈴江さん、だけど君は可訝しな人だね、折角來てくれて……、あたしはまだ君に會はないよ。……目を見せたまへな、目を。目を見ないと人に逢つた氣がしないぢアないか。ちよいとまア、正面にこつちを見てくれたまへ……」

と云ひながら、握つた手に力を入れられると、鈴江は、急になんとも云はれず悲しく、淋しい氣持になつて來て、瞬間ではあつたけれど瞼の上に、ポタ〳〵と涙を落してしまつた……。

「……」

何か云ひかけた唇を、噛んで、信之はおツとりと鈴江の手を見詰めてゐたが、引きよせるやうにして胸に重ねさせ、片方の手を、こちらの兩の掌のうちに包み込むやうに握つて、それから、靜に口を切つた。

「君には、あたし、少し惡いことをしたか、と思つてたが、さうでもなかつたやうだね。どうだい、君はあたしに對して、惡い感情をもつてるかね？……或る時期にさう云ふ氣持はあつたかも知れないが、今では、今はさうぢやないさうだね？ 伊庭君たちに誘はれたので、いやいやながら來た、さう云ふ氣持ぢアあるまいね……？」

手巾で、鼻と口とを抑へて、一生懸命泣聲を殺しながら、——しくり〳〵涙をすゝりあげながら、鈴江は、子供がするやうに、たゞかぶりを振つてみせた。

八

「もうなんとも思ひやアしないね！ さうだらう？ 思つてないね！」

信之は、これも子供がするやうに、無心に顔をさしよせて念を押した。その一言々々に合せて、鈴江は頷き返した。

「あゝ、それでいゝ！」

晴々と眉をあげると、握つてゐた手に、ぎゆッと力を罩めて、「ぢア、あらためて握手しよう。それから、ちやんとこつちを見てくれないか……」

鈴江は、自分でもわけが解らないほど、涙が出て、涙が出て仕様がなかつた。いつか氣持はさば／＼と、寧ろ快いくらゐになつてゐたが、それとは別に、涙だけが泣かれるのだつた。さう云はれると、然し、一生懸命、息がとまるくらゐにこらへながら、涙を押し拭つて、正面に信之の眼へぶッつかつて行つた。それは、思つた通りのものだつた。――こつちが嬉しがつてゐる通りに、むかうも喜んでゐた。心から、ぢつとにじみ出して來るやうな涙が、目のなかを光らせてゐた。

さう云ふ二つの目が、やゝ暫くのあひだ見合された……。もう鈴江には、怖れも、悲しみも、苦しみもなかつた。有難い、と云つてもいゝやうな喜びばかりだつた。……押し拭つたばかりの目が、すぐ涙で一杯になつて了ひ、さきの顔が見えなくなるかと思ふと、ポロ／＼と頬へ一筋流れ落ちて、そのあと暫くは、後光のやうな、細い光りの縞のなかに、信之がゐるのだが、すぐまた不正確な結晶體に似た光りばかりに埋もれて行く……。たうとうたまらなくなつて、握り合せた手の上に面を伏せて、聲をあげて泣き入つて了つた。

そこへ、さつき云ひつけられた明るい電球を持つて、朋子がはいつて來た。口の出しやうも手のつけやうもなく、云ひ合せたやうに、みんな膝に目を落してゐた一座は、却つてそれで救はれたやうな氣持になつた。

「つけ更へませう」

瀬川が、すぐ立ち上つて云つた。

「えゝ、どうぞお願ひいたします」

枕もとの方へ、紐で釣りよせた電燈のスキッチが切られた。隣の、六疊間の灯だけになつて、一時人々は視力を奪はれた。……キュルッと、ソケットと電球との喰ひ合せが軋み鳴つた……。

薄暗さに、瞳孔の調節がついて來た時に、鈴江の肩に手を廻して、耳のはたで何やら云ひ慰めてゐる朋子の姿を人々は見た。そして、百燭光が、眩いばかりに部屋ぢうを照しだす前に、その二人は、ひとかたまりになつて、廊下へ出て行つて了つた。

「よし／＼、これはいゝ。これで賑やかになつた……」

信之は、晝よりも明るいくらゐの光りで、頻りと部屋ぢうを眺め廻した。

「それから、伊庭君……」

と、枕もとの方へ席を退つてゐた文學者の友達を、目でさしまねいて、「高踏の金だがね、あたしは、自分に許されないほどの金を使つて了つて、こんな邸には住んでゐるが、實は借金だらけだ。とてもあたしの死後までは……」

「そんなこと、ちつとも心配しないでください……」

「いゝえ、さうでない。一體金と云ふものは……」

さう云ひかけた時には、信之の頬は、美しい薔薇色にあかるみ、眼は耀かしく澄んで、衰へ瘦せさらぼへながらも、驀然として犯すべからざる風貌だつた。

九

さて信之は、金と云ふものについて、こんな獨斷的な考へを述べ始めた。――萬象を、物と心との二つに分ける二元的な考へがなかつ

たなら、恐らく金と云ふものは、この世の中に生れて來なかつただらう。物のうちに心を觀じる一元の生活にはいれた人にとつては、すべての價値は、形なく計られる。即ち、何を買つたりやつたりしても、心持だけのやりとりで、これを金に換算し、相償はせる必要はないのだ。然し今の世から、金を追ひ出すことは出來ないにきまつてゐるし、在る限りには、それは、——物の代表者である金は、最後の一つ手前のものと云はなければならない。これが集散は、明かに、人生にとつて、最後の一つ手前の一大事である。自分は、それについて自分ひとりの考へ方をして來た。と云ふのは、金は、餘計得た人にそれだけ餘計使つていゝ權利があると云ふ、普通の考へに對する一つの反駁にほかならないのだ。止むなくこの世の價値評價を金で計算するとしても、せめてはそれを以て計られる標準には、心を第一に置かうと云ふので、つまり、精神的によい、立派な生活者には、金を取る取らないなどは論外としても、それに値するくらゐの金は、借金だらうと、ひとのものだらうと、どん〳〵使ふ自由を與へ、精神的にわるい生活をしてゐる者には、いかに澤山の金を儲けても、それを散じる權威を認めないことにするのだ。もつと個人の心理にはいつて云ふなら、俺はこれだけ立派に生活してゐる、と云ふ自信だけが、それに値するほどの金を使ふ唯一の特權となるし、精神生活上の劣敗者には、金の使行權は、事實上あるとしても、はたが認めてやらない、——せめてはそれくらゐの世の中にしたいものだ、と云ふ考へ方だつた。

そして、信之自身について云へば、親の遺産を、たゞめちや〳〵に使ひ捨てたと云ふことも、自分の一生が、立派であれば、天地に恥ぢないことになるし、いかに自分で稼ぎ貯めた金でも、よくない精神生活のうちに散じられたのでは、我にも人にも申譯なく、面目ない次第になるのだが、いま心を謙虚にして振り返つてみるに、自分の使ひ捨てた金額は、自分の精神生活のよさに比較してみて、どうも十分滿足できるとは云へない。生活が、金に對してやゝ負擔を感じるのだ。

また實際問題として、女房と子供たちが、今後かつ〳〵やつて行けるだけのものは、なほ殘つてゐるが、「高踏」の出資まではとてもつゞけられない。同人諸君には、前に述べた意味で、自分ひとりの心苦さを感じながら、こゝで約を解いて貰ふよりほかはないのだ。どうぞ、惡からず思つてくれ、——から云ふ話だつた。

「いや〳〵」

と、伊庭は、聞き終つて、思ひ入つたやうに、あまたたび首を打ち振つて、「そんな風に云はれては、吾々こそ恥しくつてたまりませんよ。吾々の雜誌に金を出して貰つてゐた氣持は、決してそんな立派だの、純粹だのと云はれるやうなものぢアありません。露骨に云へば、——さうです、吾々はあなたを、いゝ食ひものにしてゐたのです。決してそれだけとも思ひませんが、その氣持も多分にあつたことを、いま改めて正直に云つて置きます。あやまらなければならないのは、あなたぢアなくつて吾々なんです。どうぞ、惡く思はないでください。許してください……」

云ひ終つて、日頃傲岸な伊庭も、疊に手を下げた。

十

「もし君に、ちよつとでもさう云ふ氣持があつたのなら……」

と、信之は沈み落ちた眼にも、心いつぱいの力をこめて、「惡いのは、あたしを食ひものにしたと云ふ事實ぢアない。いまも云ふ通り、君たちがさうしてもいゝだけの精神生活をしてゐ

たのならば、決してその表面の事實だけで心を煩はされることはなかつたらうと思ふ。恥しく感じるのは、君たちの生活が、十分それだけの金に値しないものだつたからだ、——あたしはさう思ふ。金の問題ばかりぢやない、あたしの道德の基は總てそれだ。いゝこととか、わるいこととかと云ふのは、謂はば事實の通稱だ。或る人間を呼ぶのに、顏かたちから、心ざま、何から何まで云ひ並べれば、古今東西、たゞの一組でも全く同じ二人の人間と云ふのはない筈だから、それが最も正しくその人を指す名前にならなければならないのだが、それこそ、じけむじけむ明光のすゥりきれ、どころの騷ぎではなく、とても用が足りないから、そこでめいめい八兵衞とか權助とか云ふ通稱をもつことになる。斷々の行爲はいゝことだ、とか、惡いことだ、と云ふのも、つまりその八兵衞權助の類で、八兵衞とその內容なる人間とが、何等有機的な關係をもたないのと同樣、たゞ一種の符徵に過ぎないのだ。だから、斷々の行爲はいゝことだと云つて置いても、勿論それでもすむのだし、またよく／＼內容を吟味してみれば、その行爲と善惡とは、そばへくッつけて考へるさへ可笑しいくらゐのものにならないとも限らない。人の精神的內容は、なか／＼善惡とか正邪とかで、さう一言のもとに片づけて了ふことは出來ないのだ。例へば每日庭を掃いたり、風呂を燃しつけたりしてゐる限りは、誰一人として權助が權助であることに異を樹てるものはないのだが、一旦これが、他殺の嫌疑のある死體かなんぞになつて、往來にぶつ倒れてゐたとなると、まづ權助か八兵衞か熊公か、通稱からして調べてかゝらなければならなくなるし、だん／＼の吟味の末は、權助、八兵衞の別は兎もあれ、その人間としての動きを、第一に考へ極める必要が起つて來るのだ。だから、普段から、通稱主義の道德なんぞはどうでもいゝ、精神的內容主義でものを觀てみたい、と云ふのがあたしの心懸なのだ。それがあたしの道義心なのだ。君たちが、あたしをいゝ食ひものにしたと云ふのは、つまりその通稱なのだ。現に幾人かの人が、あたしにその通稱を指摘して、忠告してくれたこともあるけれど、そんなことであたしはちよつとでも心を動かされはしなかつた。しかしいま伊達君の口から、自ら恥ぢてと云ふ言葉を聞かなければならなかつたのは、あたしにとつてちよつと苦しいことだつた。さうかと云つて、空威張りをされるよりは、遙に氣持のいゝことだつた。然し要するに今のあたしの氣持なんぞはどうでもいゝことで、問題にするがものはない。それよりも、問題は寧ろ君たちの氣持にあると思ふ。通稱なんぞには少しも目をくれずに、自分のしたいことをして、そしてそのしたことが、何に對してもちつとも負擔を感じない、——つまり行爲に權威あらしめる、これが一番立派な生活だとあたしは思つてゐる。殊に藝術に心を潛めてゐる方々などは、眞つ先にさう云ふ心境にはいつてゐてほしいと思ふ。——もうあたしもかうなつては、つまらない謙遜なんぞしようとも思はないから、づけ／＼云ふのだが、それで、馬鹿にされようと、生意氣なやつだと思はれようと、感服されようと、いまのあたしにとつては、ほとんど問題ぢアない、たゞあなた方のためを思つて云ふ、心からためを思へばこそ云ふ……」

信之の眼には、その時ぢッと淚が浮かんで來た。

十一

その言葉の切目を待ちかねてゐたやうに、次の間から、財部博士が、すらりと立ちあがつた。八寸豐の、やゝ猫脊に、すた／＼歩みよりながら、

「信さん、さう君ひとりで喋つてちアいけないね。ちつとはたの人にも話してもらつて、聞きてにも廻らなくつちア……」

「さうか……」

信之も、忽ち心からの笑顔でうけて、「だが、時間から云ふと、あたしが一番忙しい人なんだからね。まアみんなはあとからでもゆつくりお喋りが出來らアね――

醫者は、寢床の端に突き膝の中腰で、邪慳らしく病人の手頸を把つて、脈どころを抑へてみた。

「いけないなア」

叱る調子と、嘆く調子を半分々々に、「こんな脈にしちまつて……。死ぬまでは君の體ぢアないか。自分で大切にしなきア仕樣がありやアしない。さア少し落ついてゐるんだ。ね、信さん、暫くみなさんにあつちに行つてゝ貰はうぢやアないか」

信之は、てれたやうな笑ひ顏を、一順友達や、ずつと枕もとの方にゐる幾代にまでも向けた。

そこには、幾分か、みんなの氣持にも詢つてみる、と云つた容子があつた。伊庭や瀬川は、婉曲な財部の云ひ廻しに對しても、自分たちの方から、なんとか言葉を設けて、一度は座を立たなければならない場合だ、と氣はついてゐるのだけれど、懷しく穩かで、居心地のいゝその場から、どうも腰を擡げる氣になれなかつた。

――やがて靜に信之が答へた。

「いゝさ……」

「よかアないよ」

「……ぢア、成可くあたしは口を利かないやうにするから、みなさんには矢ツ張りこゝにゐて貰ふことにしようよ。矢ツ張り、から……、賑やかな方がいゝからね」

「ぢア、今みたいに、長講一席、君ひとりで喋りだしたら、今度こそ一人ツぼつちにしちまふよ。……それから、一筒、注射をしとかうぢアないか」

「眠り藥なら斷るよ」

「大丈夫、眠かしやアしない。不倒翁さんを煎じて拵へた藥だ」

それで、みんな、危篤の病人の枕もとにゐるとは思へないやうな、晴々とした笑ひ聲をあげた。さつきから、目を膝に伏せたまゝ、まるで凍りついたやうになつてゐた幾代でさへ、それには仲間入りをして、病人の方に、にこやかな笑顏を向けた。

布團を彼方へ廻つて、看護婦に手傳はせながら、財部は、何やら靜脈内へ注射した。そのあひだ病人は目をつぶつてゐた。目をつぶると、急に驚くばかり痩が目だつて、正視するに忍びない相好になつた。

瀬川が、伊庭の耳もとへ口をよせた。

「電報、どうしませう」

「さアね……」

伊庭も、囁き返した。「この元氣なら、大丈夫、大丈夫ですね、見せたつて」

「僕もさう思ふ……。ぢア、讀んで聞かせませうか。兎に角、握りつぶすのはよくないから……」

「いゝでせう、讀んであげたまへな」

で、注射がすんだところで、いま自分たちが玄關へ來ると同時に配達された三好からの電報のことを話して、

「……君、自分で見ますか、それともこゝで讀んであげませうか?」

聞くと信之は、空を見詰めたまゝ、瀬川への返答ではなく、枕の上に、胸ごと大きく一つ頷いた。

十二

「どうします、讀みますか」

すぐもう膝の上に電報を披きながら、瀬川が

云つた。無言で、暫くぢツと天井を見詰めてゐた信之は、溜息をついて、左へ、體ごと振り向けようとした。丁度看護婦は、注射のあと始末をしてゐたので、それと見て、すばやくうしろへ廻つて手をかしたのは、幾代だつた。
「もつと、下の肩を手前に引くやうにしなきア……」
「はい、……これでようございます？」
その聲で、ちよつとうしろを振り向き、
「なんだ、おいくさんか。……どうれで下手だと思つた」
「あら、大へんねえ」
うつかり朋輩たちの間や、座敷で云ひ慣れた言葉癖が出て了つた。顔は見えないでも、その失策で、どれぐらゐ幾代がみんなの手前てれてゐるかは、信之にはよく解つた。一つは、その具合惡さから救ひ出したい氣持もあつたし、さうでなくても、ふはり出た調子のよさが、馬鹿に彼には嬉しかつた。
「よし／＼！　久し振りだな。さつきから、ちつともその調子が出ないんで、なんだかもの足りなかつたんだ……、さア、改めて握手だ……」
肩ごしに、うしろへ手を出すと、すぐそれへ柔かい指が絡んだ。冗談口調とは似もつかぬ、心の誠をこめて、自と掌に力が罩つた。
赤くなつて、目を伏せて、幾代も握り返した。
「……だつて、……ごめんなさい……？」
「こつちは喜んでるのに、あやまる人もないもんだ──」
「どうです、醫者と云ふ商賣も、中々これで辛いところがあるでせう？」
と、財部が、二人の文學者へ話しかけて、「かう云ふ景色を見せられても、病人と思へばそばについてなきアならないんですからね」
快い笑ひ聲が起つた。
「まアいゝやね、どうせ永いことはないんだ、友達甲斐に辛抱して貰ふんだね」
さうは云つても、信之は手をはなした。幾代はもとの席に戻つた。
「電文はね……」
その氣持の變り目に、もう一度瀬川が、それを讀みにかゝると、信之は輕く手を振つた。
「解つてる……」
「え、解つてる……？」
「誰かが、死んだとか、危篤だとか、そんな知らせぢやアない？」
「さう、お民さんつて人が危篤だつて云ふ……」
「然しもういけなかつたに違ひない……。可哀想に、京都で出てゐた人だが……」
「里奴……？」
「よく知つてるね」
「三好から聞いたことがあつた……」
「さう。可哀想だが、然し……。まア、どうも仕方がない……」
「どうして君は……。前から、惡いつてことを云つて來てあつたのかい？」
「いや、……まアさうだ。知らせがあつたんだ。これて、明日の湯があかつて來れば、子供たちには逢へると……。もう一人、是非逢ひたい人があるんだがなア……」
「誰、……誰だい？」
伊庭が、いつもの落つきに似合はず、急き込んだ調子で尋ねた。

十三

「伊庭君」
と、眞正面に瞳を見込んで、「君は知つてる人なんだ。もとのよし野の女將さん、……おもんさん、ね？」
「知つてる……」
場合も忘れて、思はずニヤリとした。
「あの人に逢ひたい！」
信之の方は、しかし飽までも眞面目だつた。

「居どころは、はつきりしたことは分らないんだが、我善坊のお不動さんまで行つて貰へば、大概知れるだらうと思ふ……」

さう云つて、一番近い停留所から、靴屋と荒物屋との横町へ切れ込んで行くまでの道筋を話して、もしよかつたら、今から自動車で行つてみて貰ひたいんだがね。そこにゐなければゐないで、多分行つてる先は知れるだらうと思ふんだ。……尤も、そこの坊主は、ちよつとへんな奴だがね……」

「それア行つて來ようけれど、時間がどうだらう、もう寢ちまやアしないかしら」

財部が、胴着の衣嚢から金時計を取り出してみて、

「もう十時すぎてるよ、二十二分、かれこれ半として……」

「夏の十時は宵の口だよ」

そのとき瀨川が口を出した。「僕ア逢つたことはないけれど、よく噂には聞いてるんですが、それほどまでにして逢はなくつちアならないほどの女ですか。どうも僕ア、あんまり贊成できないな……」

きつぱりさう云はれると、信之は、ひとたまりもなくしよげて了つて、軒端に遠く宵闇の、天の川白い初秋の空へ、いかにも悲しさうな目を放つた。……蟲の音がしきりだつた。

心の底から寂しさうな、信之の目の色を見ては、瀨川も内心後悔してゐたのだが、行きがかり上、すぐまた取り消すわけにもいかず、誰かなんか云ひ出してくれるのを待つてゐた。

「差し出がましいやうですが……」

と、靜に口を切つたのは、思ひもかけない伊佐代だつた。信之の顔を窺き込むやうに、枕もとから乘り出して、「もし、お構ひなければ、あたしが行つて參りませうかしら。どうもそのお迎ひに、男の方より女のはうが都合がよささうですし、おもんさんなら、——あちらでは忘れておいででせうけれど、あたしもお目にかゝつたことはあるんですから……」

「さう……」

夜の空を見詰めたまゝ、ぢツと考へこんでゐたが、「しかし……お前は……、あなた、自分から行きたいわけぢやないんだらう？……よさう、來て貰へたらこの上ないが……、電報を一本うつといて貰はうか」

「あなたが行つて來いと仰有るんなら……」

「云はない。反對に、行つちア困ると云つてるんだ。……奥さんとこへ行つて、電報用紙を貰つて來てくれないか。伊佐代、大儀だが、[illegible]よい[illegible]……」

伊佐代が立つて行つた。

「どうだい……」

と、信之が瀨川を顧みて笑ひながら、「いよいよもつて多情佛心だね」

「多情な佛さ心なたよ、[illegible]……」

その二人にしか聞こえない言葉には、信之の耳は惹かれなかつた。ぼんやりしてゐた

「ねえ、信さん、今日横濱で、面白い文句を見つけて來たんだがね……」

さう云つて呼びかけて置いて、瀨川が、支那料理屋の聯について、詳しい話をして聞かせた。

十四

心よげに、一什の話をうん〳〵と頷きながら聞いてゐた信之の眼が、そのうち次第に細くなつて行つて、どうやら寢入りさうに見えた。

財部に注意されるまでもなく、それは注射の利き目と察しられたので、だん〳〵に話聲を低めて、たゞほんの子守唄がはりに、表情もなく喋つてゐると、やがて信之の返答が、すや〳〵と輕い寢息に變つて了つた。財部初め一同が、眼と眼で、いゝ按配だつたと云ふ心を通はせ、靜に立つて次の間の方へ來た。

そつちで胡坐になるなり、伊庭は、咽喉風邪でもひいた人のやうなかすめ聲で、頭部に容態を尋ねた。

「結局いけさうもありませんね」

若い醫學博士は、首を振り、眼鏡の奥に、鋭い眼を光らせて、「電話で、夕方僕が駈けつけて來た時に、もういけまいと思つたくらゐだ。ひどい脈さ」

二人の文學者たちは、額をよせて、交互に問ひかけた。

「でも、その後はよつぽど落ついてゐるわけなんですね？」

「なアに、おんなじことですよ」

「死脈とか云ふやつですか？」

「まアさうですね。君たちに面會を許したのも、さういふ容態だつたからだが、……然し奇蹟的だよ、あの脈であゝ云ふお喋りが出來るつてのは。……少くとも、僕は初て出會したことだ」

「つまり氣だね、氣でもつてゐるんだね」

「お氣の毒なやうだが、もう今となつちアどうにも仕様はないんでせうな」

瀬川は、先刻から顔を眞ツ赤にしてゐた。

「どうも……」

「要するに、時間の問題ですか」

「それもですよ、明日の朝子供たちに逢へるつてのを、大へん樂みにしてゐるが、僕アどうもそいつが……」

「さうですか……」

伊庭は悄然として、帷子の袖に手を拱いた。

「注射をどん〳〵してみたら……？」

「そいつがね……、食鹽注射つてやつは中々、辛いらしいんだね、あんなに意識が明瞭だと、さうどうも苦しませてもと思ふんでね……」

「さうですか……」

とんでもない時分になつて、とんでもない返事をするいつもの伊庭の癖で、「そんなに惡い脈なんですか」

「惡いとも！ 是なんぞ、もう夙からうつてやしない。嘘だと思ふならさはつてみたまへ。でもまア、わりに吐く氣の少いのが何より仕合せさ。幽門はもうすつかり塞がつてるんだからね、溜つて來れば、いやでも應でも上へ出るよりほかはないんだが……」

「先刻から何遍やつたんです」

「僕の來ないうちに二度あつたさうだが、三度目のがえらかつた。四合はたつぷりあつたらう」

みんな悼ましげに眉をよせ、目を伏せて、——もう云ふべき言葉もなかつた。思はずも、長くつく息が震へた……。

忍びよるやうに朋子が來た。

「いまおやすみです」

と囁く瀬川に、目だけで答へて、そのまゝ良人の枕もとへ行つて、きちりと小さく坐つた。

五六歩おくれて、幾代が、硯箱の上に賴信紙を載せて、これも足音靜かにはいつて來た。

十五

十二時すぎてから、思ひがけなくも子供たちが歸つて來た。

門前に自動車がとまつた音を聞いても、もし時間の繰合せがついたらもう一度來てみようと云ひ置いて、夕方歸つて行つた大學病院の高名な醫者だらうと思つてゐた朋子も、それと聞くと、良人の眠りを醒まさせない氣配りに、廊下まではそつと出たが、あとは宙を飛ぶやうに玄關へ走せつけた。總領の信紀だけが大きな目を瞠きながらも、ぼかんとした顔つきで立つてゐた。信次は丸三の膝にぐつすり眠つてゐた。文子のお河童さんの毛は、書生の肘から、長々と搖れてゐた。——兎も角も、みんな揃つて歸つて來てゐた。それを見ると、朋子はいきなり

眼にいつぱい涙をためて了つた。

「お歸り！」

云ふなり、まだ靴を穿いたまゝの信紀を、胸へ抱ひ込んで、頰をすりつけ、抱きしめた。子供も、頸ッ玉に堅くしがみついて來た。

「御苦勞さん、よく早く歸つて來られたね。もうとても明日の朝だらうと思つてた……」

さう云つて、まづ丸三と書生とを勞つた。

「かす／＼九時五十分のに間に合ひました」

丸三は、手傳婦に、ひどく取りすまして答へたが、書生を顧ると、急に笑ひだして、「ねえ、隨分あわてましたねえ」

「その代りみなさん、着のみ着のまゝみたいなもんです。でも、多分終列車で、お花さんが、少しは荷を纏めて歸つて來る筈ですが……」

「あゝ、いゝとも／＼」

信紀をおろして、丸三の手から信次をうけとらうとしたが、

「なに、ようござんす、ようござんす」

と、そのまゝ勝手を知つた寢部屋の方へ、さつさとはいつて行つた。

「お敏、お前、早く行つて床を敷くんだよ」

まご／＼してゐる小間使にさう云ひつけて、自分は信紀の手を引き、書生に抱かれた文子の寢顏を覗き込みながら、「まア、眞ッ黑けになつて……。でも隨分肥つたねえ、どうだらうまア、この頰ぺたは」

「マヽ、僕、游げるやうになつたよ」

いきなり、元氣のいゝ、大きな聲で、信紀が云つた。

「さう？　游げるやうになつたの？」

「板子があれば、こゝからね」

と、態々母親の足を止めさせて置いて、「彼方の、あの、お茶の間に曲る角ぐらゐまでは、大丈夫行けるよ」

「まアさう？　えらいのねえ」

「板子がなくつたつて、このくらゐなら」

兩手をいつぱいに、肩の後まで擴げて、「このくらゐなら游げらア」

「さう？　よかつたねえ。みんな大人しかつたつてねえ」

「三吉が來て、いきなり僕に、東京へ行きませうつて、僕、吃驚しちやつたア」

「でも、もうそろ／＼歸りたくなつてたんぢアないの？」

「うゝん、僕鎌倉の方がいゝや。東京、海がないんだもの、つまんないや」

話しながら寢部屋まで來ると、洋館の應接間の方で休息してゐた瀬川婆やが、子供たちの歸りを聞いて、[illegible]早速とんで來た。

「ヤア、みんな歸つて來たね……」

丸三も、書生の中村も、口にこそ云はね、心には案じて來たことが起らなかつたのを知つた、――さう察してよい、お敏やの人々の顏だつた。

十六

瀬川婆やまで一緒になつて手傳つて、寢込んで了つた子供たちを床に入れてやつたりしてから、信紀だけつれて、朋子はひとまづ茶の間に落ついた。

「マヽ、よ、マヽつてばよウ、マアマア」

子供のくせに、夜更しで朝寢坊の信紀も、流石に眠くなつて來て、疊の上にゴロリと倒け、母親の膝を枕に、そろ／＼鼻を鳴らし始めた。遊びにほうけて、忘れてゐたのが、久し振に母親に抱かれたりしてみると、急に甘ッたれたい氣持で一杯になつて來たのでもある。朋子は丁度、醫者や友達が休んでゐる洋館の方に、パンと紅茶でも持つて行かせようと思つて、仲働きの女中に、そんなことの用意を云ひつけてゐたので、子供の方への返事があと廻しになつた。

「よツ、マヽ！　マヽつてえばア—

「はい〳〵

膝の上に目を返した時には、もう信紀は、甘え泣きの澁面をつくつてゐた。

「なアに？　眠いんでせう？」

「いやだ、いやだ！　マヽがすぐ返事をしなかつたから僕いやだ！　いやだ！」

手足をおたばたさせておこりだした。—僕もう、いやだ、いやだ！—

「あのね、…　そんなこと云ふもんぢアありませんよ。…あのね、パヽさんがね、御病氣なんですからね、うちへ歸つて來ても、大人しくしなくつちア駄目なのよ。あなたの大好きなパパぢアありませんか。ね、分つたでせう？」

「いやだ、いやだ！　なんかくれなくちアいやだア」

「あゝ、あなたお腹がすいてるの？」

「いやだ、いやだア！

「おアね、お客樣の御相伴に、麺麭とお紅茶でもあがれな」

「いやだ、そんなもんつまんないや　なんかお菓子でなくつちアいやだ」

「困つたね、生憎なんにもとつてなかつたねえ。…ねえ、初や、なんかお菓子がなかつたかしら？」

女中の手がふさがつてゐたので、丸三の女房が來て、遠慮なくそこらの戸棚をがら〳〵探し廻つて、漸くウェファスの罐の底に、少しばかり殘つたのを探し出して來た。そんなことでは、然し中々承知しなかつた。眼と眼との間の、鼻の上を青くして、癇癪は、どうしても一雨降らせなければ納まらない勢ひを示してゐた。

そこへ、音はなしに、風を起して、廊下を滑るやうに飛んで來た幾代が、

「奥樣…、ちよつと……」

「どうしたの？　また吐き氣？」

「えゝ……、あの……」

顏色で、たゞごとならぬ模樣と知られた。

「あの、洋館の方に先生がおいでですから……」

さう云つて、思はず膝の上の頭を放り出すやうにして立ちあがつた。

「いやア、マ、いやア……」

それで、癇癪玉に火がついて、信紀はワッと泣き聲をあげた。

「あのり、誰か……」

呼んで置いて、應接間の方へ行く幾代と擦れ違ひに、奥へ駈けつけようとする周子のうしろから、信紀が飛びついて來て、ワン〳〵泣きながら、腰へぶら下つて了つた

「ちよつと誰か！　誰か！—

丸三のお民が駈けつけて來て、引き分けようとしたが、子供はいつかな手を離さなかつた。

十七

そこへもう洋館の方からは、財部博士を眞先に、人々が急ぎ足に近づいて來た。瀬川と鈴江とは、信紀をたましにかゝつて茶の間に殘り、あとの三人だけが、病人のそばへと急いだ。

「紀ちやん〳〵、シゼちやんを忘れちやつたの？　また先みたいにシゼちやんと汽車ごつこをして遊ばない？　ねえ、遊びませうよ」

以前ちよく〳〵とゝへ出這入りしてゐた時分には、鈴江は、なか〳〵子供たちの間に人氣があつた。鈴江がつまつて、シゼちやんと呼ばれて、いつはしの小母さんだつた。昔から子供好きな瀬川も一緒になつて、傍からいろ〳〵云つてみたが、他人の口がはいるほど、なほ信紀は氣むづかしくなつて行つた。たうとう周子は、ちつときつぱりした調子になつて、

「いけません！　そんな分らないことを云ふと、ハヽちやんに叱つて貰ひますよ。……ねえ、ハヽは御病氣なんだから、そんな大きな聲を出すも

んぢやありません、分つたでせう？」
　もう一度幾代が呼んで來た。
「奥様、旦那様が……」
「はい」
　泣き叫ぶ信紀を抱きあげて、すぐ男子は廊下を奥の間へ急いだ。行く行く「お默んなさい！　よ！　もう泣くんぢアないの！」などと云ひきかせると、それでも、父親のそばへ行くと云ふ氣持からか、泣き聲がだんだんに低まつて、ぴつたり肩へ顔を押つけて了つた。
　病室では、またもや多量にもどした金盥の始末を終つたところだつた。財部が自分であと口を漱がせたりしてゐた。
「……歸つて來た、歸つて來た……」
　白つちやけた黒眼を、力なく動かして、信紀を見ると、病人は、息を喘いで喜んだ。「ちよいとこゝに……、ちよいと、よこしてごらん」
「眠いもんですから、やかましくつて……」
　いくらそこにおろさうとしても、子供はしつかり頸つ玉へかじりついてゐて放れなかつた。
「おい！　信紀どうしたんだ」
「パヽちやんが呼んでいらつしやるぢあないの。……さあ、たゞ今をなさい、ね、いゝ子だから」
「まア、いゝや、だんだん、そのうちに機嫌がなほるだらう」
　云ひながら、輕く背なかを叩いてやり、「おい、信紀、お前もいゝ人になるんだよ。いゝ人が一番いゝや、ね、いゝ人におなりよ。……そいから、信次も、文子も……二人ともつれて來ておくれ、……起きないやうに、寝たまんまでそうつと抱いて來て、……ね、抱いて來られるだらう？」
　目で肯き、頷き合つて、幾代と末江が立つて行つた。それを見送つてゐた信之の眼は、花の凋むやうに靜にとざされた。財部博士は脈をとりづめに、病人の容子を見守つてゐた。……
　しいんとした。有繋にひやひやとした夜氣が、あけ放した六疊の方の縁側から、動くともなく流れ込んで來た。
　自分に構ひてがなくなり、あたりがひつそりして了ふと、信紀はそつと顔をあげて、頸から母親を見あげた。が、母親の顔は、どこもかも石にでもなつて了つたやうに、こつちりとして動かなかつた。
「マヽ、ア」
　低聲に呼びかけてみた。それでも動かなかつた。どんな顔つきをしてゐるのか見たいと思つて、瞼からすこしばかり身を起した。大きく瞠いた目から、いつぱいに盛りあがつて來たばかりの涙が、ホロリ、ホロリッと蒼白い頬へ轉け落ちるところだつた。

十八

　それを見ると、子供の心は、急に悲しくなつて來たが、然し何故か、いま泣き聲をあげてはならないのだ、と云ふ氣が強くした。一生懸命、涙をこらへてゐた。
　そこに、末江が信次を、幾代が文子を抱いてはいつて來た。子供たちはよく寝入つてゐた。手足がだらんとぶらさがつてゐた。
　もの音で、信之は微に目をあけた。
「こゝへ……、そばへつれて來て……」
　弱々しく云ふ聲が顫へて、[illegible]かうとする手も、もうもちあがらなかつた。すつと末江から進んで、そば近く膝をつき、子供の顔を差しよせて見せた。永くは、信之は見てゐなかつた。目をつぶり、微に首を振つて、もういゝと云ふ知らせをした。幾代が代つて、文子の眞ツ赤な頬を、殆ど床の上にさし置くまでに近よせた。信之は、そうッと輕く搖き[illegible]て、すぐまた目をつぶり、あつちへつれて行けと云ふ心を示した。

鈴江も幾代も、床の足もとの方へ退ると、こらへこらへてゐた涙を落した。朋子も、あとからあとから頰へ傳ひ流れて來る涙を拭はうともしずに、
「どうも御苦勞さんでした」
と、それでもはつきり挨拶した。
「あつちへつれてつて、寢かしておやり」
信之が、低く囁いた。二人は、靜かに立つて、寢部屋の方へ戻つて行つた。
それから暫くは、もの音がなかつた。みんな、おツと病人の顔を見詰めてゐた。
重たく時が動いて行つた……。
病人が、こけ落ちた頰の肉を、ぎごちなささうに動かして、何やらもの云ひたげにした。
「含嗽をあげようか」
財部が乘り出して行つて、吸飲みを取りあげた。それには、血を吐いたあとの口が腥いと云ふので、石炭酸を調合した水がはいつてゐた。口に含んで、信之は、ちよつと不憚な顔をしたが、すぐ金盥に吐き出して、
「水、たゞの水をくれないか」
「飲みたい？」
「飲みたい。もう飲んでもいゝだらう？」
「いゝとも、いくらでも、飲みたいだけ飲みたまい！」
決然として、若い博士が答へると、病人の頰には、さも嬉しさうな微笑が動いた。
「……お許しが出た……。盜み飲みでなく、今度こそ心置きなく飲まれる……」
「あゝ、飲みたまへ！」
看護婦が、手早く吸飲みへ、水差しの水を注ぎ、ぶツかきを三つ四つ匙でしやくひ込んで、財部に渡した。財部は、朋子を顧みて、目でそばへよれと告げた。信紀を抱いたまゝ膝行りよつて、吸飲みをうけとつた時には、朋子の涙は、微ながら音に洩れた。
信之は、吸飲みに七分目ほどの水を、ごくごく咽を鳴らして飲んだ。それから、硝子の管を唇から離すと、
「朋子……」
と、靜かな、沈んだ聲で呼びかけた。人々は座を遠慮すべきかどうかを諮り合ふやうに目を見合せた。瀬川の立ちあがつたもの音で、信之が薄目をあけ、あたりを見廻しながら、
「みんなこゝにゐて、……おいくも鈴江も、みんな、……賑かに……賑かにこゝにゐてくれ……。おもんは、おもんはまだ來てくれないかしら……」

十九

呼びに行かないでも、丁度そこに鈴江と幾代が戻つて來た。至急報の電報はうつて置いたけれど、うまくそれがおもんの手にはいつたかどうかは危まれた。信之も、それ以上はおもんのことを繰返さなかつた。
もう一度呼びかけて、手を求めるやうにした。
「……朋子……」
「はい」
一膝躪りよつて、左に信紀を抱いたまゝ、右の手を握り合せた。
「お前には、いろ／＼苦勞をかけたね。だが、あたしの心が一番よく解つてゐてくれるのは、なんと云つてもお前だ、……今まだ解らないでも、これからさきお前の一生のうちには、だんだんと解つて行くこともあるだらうと思ふ。だから、あたしは、今更なんにも云ふことはないんだが、たゞ、子供たちを大事にしておくれ、――それだけだ、それだけは、云はないたつて大丈夫なことだけれど、云はしておくれ。何しろ、これから先、永い間子供たちを育て貰はなければならないんだが、構はないから、自分のしたいと思ふことをさせておくれ。あたしは一生それでやつて來たのだ。誰にも逆らはなかつ

たけれど、誰の云ふことも聴きはしなかつた。
たゞ、一番むづかしいのは、自分のしたいことがなんであるか、それをはつきり知ることだ。人間は、決して自分のしたいと思ふことを、そのまゝにはしてゐないものだ。一體何をどうしたいのやら、自分でもはつきりそれが分らないのだが、不思議にそれで満足してゐる。十人に九人までは、さう云ふあやふやな生活をしてゐるものだ。自分のしたいことが、はつきり解る、つまり心からしたがる、それが何よりむづかしい。むづかしいがさうしてやつて行くのなら、何をしたつていゝ。子供たちには、――いや、子供たちばかりぢアない、お前だつてさうだが、なんでもしたいことをするがいゝ。たゞ、したいことの本體を、しつかり握つてからしたがる習慣をつけないといけない。心からしたいことをする分には、何をしたつていゝのだ、ほんとに、どんなことだつていゝのだ。眞に何がしたいのか、それがあやふやだつたり、したがる度合が弱かつたりする場合に、平氣でなんかするくらゐいけないことはないんだ。解つたかい？……まア、いま解らなくつても、だん／＼解るからいゝさ。まごゝろから何かしたがること、――これが、あたしの一生かゝつて貯めた財産の全部だ。これよりほかに遺産はないんだ。貧しいけれど仕方がない。ほかのものは、明日が日、火事や泥棒にあつても消え失せて了ふし、自分で使つても減つてくものばかりだが、いま云つた遺産だけは、使へば使ふほどよくなる、――だから最後に云ひ置いて行く、……信紀！　いまハヽの云つたこと、解らないでもいゝから、よウく憶えてゐるんだよ。信次や文子の分もお前に預けて置くからね、大きくなつたら分けてやるんだよ、いゝね、いまハヽが云つて聞かせたことが、うちぢうの何よりかより一番大切なものなんだからね、お前は大事に心のなかに持つてゐて、今に解るやうになつたら、信次や文子にも話して聞かせるんだ、ね、解つたらう？」

朋子の顎の下に、堅く押しつけられてゐた子供の頭が、ガクリ／＼と頷いた。

「解つたのね？　ぢア、パヽちやんの方を向いて、解りましたつて仰有い―」

さう云ひながら、子供を膝からおろして、父親の前に坐らせようとするのを、信之は、靜に手で制めた。

二十

「いゝよ／＼、そのまゝにさしとき。今のあたしの顔なんぞ見ない方がいゝ。見られたくもない。ね、さうしてマヽにくツついておいで、云ふことだけ聞えさへすればいゝ。……それから、[illegible]人々へ、一[illegible]、みなさんに、お禮を云はしてください。よくあたしのやうなものを愛してくださいました。今後も、女房や子供たちを、あたしと同様に思つて預けるなら、こんな仕合せなことはありません。たゞ、今もうちの者[illegible]したいことをする、と云ふ家風を通して参りましたから、何事に限らず、うちの者の方から御相談を願はないかぎりは、彼等のしたいやうにさせて置いて頂きたうございます。こんなことまで申しては失禮とは思ひますが、これも序にお願ひして置きます。あたしの最後の我儘だと思つて許してください……」

目をつぶつて、暫く息を喘いでゐたが、

「それから、伊庭君、津川君にお頼みして置きたいのは、西山[illegible]のことだがね、裁判の方は、昨日も桑木博士が來てくれて、出來るだけの力は盡すと云つて、……大抵まア五年くらゐの刑期ですむだらうつて云つてたが、その方は仕方がないとして、出て來てからのことを、なんとか面倒を見てやつてくれませんか、あれは、

中々したいことの出來る男だが、出獄人らしくいぢけさせたくないからねえ、何分ともお賴みしますよ。……それから、三好君や萩原にも、もし東京なら逢ひたいのだけれど、遠方のことで仕樣がないから……、よろしく云つてくれ給へ……」

「承知しました」

伊庭が膝をよせて、きつぱり答へた。瀧川は、男泣きに泣いてゐて、口が利けなかつた。病人は、これで一安心、と云ふやうに、深く頷いて、目をつぶり、仰臥しようとした。看護婦と幾代とで、體をかはすのを助けてやつた。

「おいくさん、お前に、一杯水を飲ませて貰はう……」

幾代が、片袖で鼻から下を覆ひ、一生懸命泣き聲を洩すまいとしながら、吸飲みの口を差し出した。手が震へて、なかに浮いてゐる氷がカチカチ鳴つた。

「しつかり／＼、死ぬ僕がこのくらゐ落ついてゐるんだ。しつかりしないか……」

信之は、晴々しくさう戯れて、うまさうに水を飲み乾した。

「おもんさんには逢へさうもない。お前、尋ねて行つてよろしく云つとくれ。あなたの身の上については、いろ／＼心配してゐたが、……さやうなら、と云つてたつて。……それから、お澄さんに逢ふ機會があるやうだつたら、おもんさんからよろしく傳へて貰ひたいつて……」

云ひ終ると、どう云ふ力が生き殘つてゐたか、信之は、人手をかりずに、兩掌を胸の上に組み合せた。……それから、五六分して、囁いた。

「さやうなら、……みなさんも安心なさい、死んでくのは、存外樂なもんですよ、……あゝ、樂だ……」

これが最後の言葉だつた。十分ほど後に、藤代信之の心臓は、全くその働きを停めて了つた。

大正十二年九月朔日、午前四時十五分、そろそろ東の空が白み、星の光りも薄れかけてゐた。

かくして大震災の日が、靜に夜明けつゝあつたのだ……。

（後篇了）

我は宇宙に唯ひとりの者だ、この自覺に徹して、己に生きるか。

人は群居動物なり、の意識に始終して、衆に就くか。

前者を執れば、荒い風にも、寂しい思ひにも、痛い目にも會はなければなるまい。

後者を選べば、無事平穩に、存外氣樂な世渡りが出來るだらう。

石か珠か、兎に角堅いものになるか。

それともさう云ふ堅いもの〻間に挾まるつめ綿になるか。

これは、若いうちに、とつくりと考へてみていゝ夥多の諸問題中でも、可なり重要な一つだらうと信じる。尤も、考へてみたばかりでは仕方がないが……。

（『白醉亭漫記』の「同じものは二つない」より）

椿

　三十を越して獨身の女が、洋紅の覆ひを深々とかぶつた電燈のもとで、床の間の方を枕にして、俯伏に、ねながら雜誌を讀んでゐた。まるで風のない寒い晩だつた。まだ十二時は打つまいと思はれるのに、いつの間にかすつかり人通りが杜絶えて了つて、もの音のなくなつたことが、鋭く耳につきだした。頁をめくる序に、ちよいと目をやると、五寸ほど離して並べてとつた寢床には、姪にあたる二十歳の娘が、これは右を下に、つまり向ひ合せに安かな寢顔の鼻から上だけくつきりと天鵞絨の掛襟をぬいて、大へんな美人に見える。珍しさうに、叔母はぢツと眺めてゐた。

「おすましねえ」

と揶揄つて、一緒に笑ひだしたい氣持だつたが、娘はまるで造りもののやうに、寢息さへ聞かせなかつた。ひとりで聲を立てずに笑つて、ほんのちよいと身動きをすると、引越しのとき表更をさせたばかりの青疊が微に鳴つて、夜着の下からふはりとあつたかい風が顎や頬へ流れかかつた。

　それからまた暫くは、小說の筋をたどるよりほか、なんにも思はなかつた。——生憎、ちつとも眠くなつて來なかつた。

　プウー、と短く、どこか遠くで汽笛が鳴つた。それで、あんまり靜なのがあやしい氣になつた。今夜だけに限られた靜けさのやうな氣がしだした。女中を起して、寢床をもつてあがらせ、今夜はいちおうみんな揃つて、二階にねようかしら、とも思つてみたが、起きて行くのも億劫なので、そのまゝ讀みつゞけた。そのうち、男女關係のかなりきはどいことを書いたところへ來たけれども、なんともなかつた。引き續きに思ひ出されるやうな男などもなかつた。なんにも思はずに讀み耽つた……。

　パサツ。

　すぐ枕もとだつた。あともさきもなしに、ただそのもの音ひとつきりだつた。疊の上に何か落ちたのに違いないが、なんであるか、顏をあげて見る氣にはなれなかつた。左の片手に持つてゐた雜誌を、そうツと蒲團の上へ置き、手足を引つ込めて、胸のところで握り合せた。[illegible]やうな[illegible]見ると、[illegible]こつちへ瞳を据ゑてゐる

　ギヨツとした。

「なによ！」

　跳ね起きるなり、なによ、節ちやん！」

「いやア！」

　夜着ごと飛びついて來て、膝頭へ面をふせた。

「なんですつたら！」

「なんなの？」

　そうツと顏をあげかけた。

「知らないわ！」

　膝の窪みをはね返して置いて、躊躇はず枕もとを見た。感じられたよりは一二尺遠く、床の備後表の上に、眞ツ赤な大きな椿が一輪、お椀の蓋でもふせたやうに、ぽつくり散つてゐた。

　前にゐた家の庭に、眞盛りを見殘して來るのが惜まれて、[illegible]に摘んで、澤山剪つて貰つて來たのを、青磁の瓶に生けて飾つた、——それがもう四日あとのことになる……。

「いやだわ、節ちやん」

と云ふのが、まアよかつた、の調子に落ついてゐたので、姑の娘も起き返つた。

「なアに？」

「なによ、あんたこそ！」

「だつて姉さんが……」

「あたしどうもしやしないわ」

「あら、きやツて云つたぢアないの！」

「だつてあんたが薄目なんぞつかつてこつちを見てるからさ」

「あら、それより前に姉さんが、可怕さうな顔をして、本蔵もつよして、蒲団のなかに手を引つ込めたぢアないの」

「まあ、見こたの？」

「あたし、泥棒でもはいつてるのかと思つたのよ」

「馬鹿ねえ、どうして目を覚ましたの？」

「姉さんが呼んだんぢアない？」

「いやだわ、呼ぶもんですかね」

「あら、ほんとに呼ばない？」

「知らないことよ！」

「あら……ぢアあたし寝呆けたのかしら」

「いゝえ、椿が散つたのよ」

「いやア！」

と、いきなりしがみついて、「いや〳〵、おどかしちアいやよ！」

「あら、びつくりするわよ！」

「だつて、姉さんがそんなことを云つて……」

「おどかすんぢアないわ。見てどらんなさいな、そこに……」

「いや〳〵いや！　いやよ！」

「馬鹿ねえ、床の間に生けといた椿の花が散つたのよ。その音であんたが目を覚ましたんぢアないの！」

「あら、さうウ？」

やう〳〵袖をはなして、可怕々々叔母の肩ごしに、床の間の方を窺き込んだ。「まア、いやだわ、眞ッ赤なのね……」

「そんなこと知らないわ。赤いんだつて白いんだつて、散る時が来れア散るでせうさ。眞ッ赤ならどうだつて云ふのよ」

「なんだか、氣味が悪いわ」

「ぢア、持つてつて、捨てゝいらつしやいな」

「いやよ、姉さん捨てゝ来て頂戴よ」

「構はないわ、ほつときませうよ」

「でも、なんだか血がたれてるやうで……」

「およしなさいつてば！」

と美しい眉根に八の字をよせて、本氣になつて窘めたが、「知らない、もうあたしねちまふわ」

いつかこちらの蒲団の上へ来てゐた姪を突きのけて、ころりと横になり、すばやく夜着を額の上までひつかぶつて了つた。

「あら、姉さんずるいわ！」

突き飛ばされた力をそのまゝ、これも蒲団へ轉げ込んで、頭から夜着にくるまつて、ぢツと息を殺し、耳をすましてゐた。

しいんとした。

暫くさうしてゐたが、息苦しくつて耐らなくなつて来て、姪が、そうつと顔を出して見ると、いつの間にか叔母は、背桜のよほり肩をしつかり包んで、こちら向きに、静にねてゐた。

（まアいやな姉さん！」と思ひながら、[illegible]下に寝返つた。と、部屋の隅の暗さに、電燈の覆ひの紅が滲んで、藤紫の隈になつて、しじゆう見馴れた清方の元禄美人が、屏風のなかで死相を現はしてゐる……。

あらいやだ

思はず呟いて、すこし[illegible]向を遮る鼻のさきで、だしぬけにお母さんが、[illegible]も開かない、と云ふ風に、ムツと頬被すと、いつも中中途[illegible]ないんだが、[illegible]なく、華美な友禅の夜着を[illegible]の上まで急いで引き上げ、[illegible]かけて

寝床を蹴らせながら、目をつぶつて、大笑ひに笑ひぬく、――ちよいと暗の隙間こそ面喰つたが、すぐにその可笑しい心持が、鼠にものの憑るが如くに、姫の胸へもぐたりと来た。で、これも、ひとたまりもなく笑ひだした。笑ふ、笑ふ、なんにも云はずに、たゞもうくツくと笑ひ轉げる。それがしんかんと寝靜つた眞夜中だけに、――從つて大聲がたてられないだけに、なほのこと可笑しかつた。可笑しくつて、可笑しくつて、思ひばり可笑しくつて、どうにもならなく可笑しかつた……。

（大正十二年九月作）

藝道陰陽論

筆の、深く入り込むこと、固より可なりと雖、廣く出づる亦、法たるを失はざるなり。以て藝道の陰陽と呼ばんか。

入りては主觀に、出ては客觀に、その傾くところ各好きのみ。然り而して、前者を短篇的、後者を長篇的と概説し去るも多く過たざるを信ず。その分るゝところ、もと作家の性に因つて來たるや論なし。獨合點と平俗とは、兩者の[illegible]にして、入るも出づるも、藝道に一途蒐進、その完きを得ること甚だ難し。入るは已に人なり、而して出づるは人に出づるなり。人の性の已と他に於ては、千凡と[illegible]にこれを讓けり。故に今こゝに伍せずと雖、其に人情、或は是に基を發し、二者相陽互に孤立することなし。已を知るは人に依るなり、人を觀る、これ已を捉ふるに如ず。自他二にして、發して陰陽の態あるのみ。

相家現下の藝壇を鑑ずるに、陰藝に秀たる者、なほ寥寥、數ふるに堪ふべし。陽藝の尤に至つては乃ち無し。現に、展覽會場の畫幅、[illegible]に、世間的大の[illegible]あらんか、甚だ得易し。毎月上梓さるゝ書籍中より長篇を望むも、その志必ずしも遂げ難からざらん。而も眞の陽藝に接せんと欲せば、その機運に至ることあるべからざるなり。

露の杜翁の如きは、元これ陰藝の性たるに拘らず、描いて陽に出で、眞に千客萬來の遊旅について看るの思ひあらしむ。而も、俗に所謂「隅に置けない」の嘆を久しうすること屢々なり。性の陽藝に適せる作家果々等に至つては、縱横無盡、些の擊切を見せず、時に肉食人種の倫を絶せる精根に、却つて嫌惡の情を[illegible]しめらるゝこと[illegible]初めは陰に籠り、後に陽に發す、これ[illegible]なり。故に作家の陰陽に關すること決して少しとせず。然者、我國の藝壇を見るに、陰藝の鳥合と評するも敢て過ぎたりとせず。[illegible]實に檢するや、果して然るか。[illegible]不憲に達せざるに大家を以て稱さる、滑稽と云はずして何ぞや。

且、邦人性月念なり。己に陰に籠り、[illegible]沈潛するは、その得手たるを失はずと雖、[illegible]人の如くよく森羅萬象を包攝して、陽藝を成すに至らざるなり。而して千古稀有、不世の那翁、一の成吉斯汗を輩出せざる所以か。

陽藝の功力、一にはまた俗に適ずるにあり。藝の俗に通ぜざるは、猶菓子に甘味なきが如し。たゞ物として大を成す所以は其處にあらざるにあり。俗專用の藝の價値なきは、雅專用の藝の必ずしも尊からざると同じ。雅俗に通ぜんと欲せば、宜しく陽描して宇宙の森羅萬象に及ぶべきなり。

陽藝の缺乏は、刻下藝壇の重大問題の一たるを失はず。聊是の病所を論じて、自千杖の笞を受く、また故なしとせんや。

（『白樹亭漫記』より）

父　親

山道を描いて兩鬢からぬけあがつた五分刈の額ぎはを、石鹸入をグル〲巻きにした濡手拭で逆に撫で上げながら、後手に片一方で、縱繁の格子に紙をはつた車戸をガラ〲ッとやけにたて切つて、男湯を出ると、

「やア……」

と、この奇遇を大袈裟に驚いてみせるやうな、そして馴々しげな調子で聲をかけたのは、血肥りに張り切つた頬を、湯あがりに脣赤く、テラテラさせ、胸毛が見えるまで、ゆかたを重ねたあらい八端のどてらの襟をはだけた、五十がらみの大男だつた。――あんた、きん助はんやないか

南地でこそ名高いきん助姐さんで、島の内一圓、知らない者は犬もないほどだつたが、それだけにまた、つい十日ばかり前に引越して來たこの場末の、十里二十里隔つた在所のやうに思はれてならないところへ、居まはりの人らしいづぼらな風袋の、面も見覺えのない顔なので、こッそり人目を[illegible]、そのまゝ目を逸らさうとしたのだが、はつきりきん助さんと呼びかけられてみれば、まさか知らん顔で行き過ぎもならなかつた。

「あんたはん、まア……」

二三年このかた氣樂に遊んでゐるものゝ、以前の商賣がら、どなたでした、ともまさか訊かれもしず、誰だつけかしら、と肚のなかでは頻に考へあせりながらも、顔だけはさも親しげに笑つてみせて、「まアま、永いことだんなア、あんたはん……」

「あんたはんて、……わてが分るか」

さういふ聲音で、いゝ按配に、はッと思ひ出された。

「なにいうてなはんね。……そやけど、木田はん、あんたまア、ころッと變んなはつたなア。ちよつと戸外で遇うたくらゐやつたら、ほんまに分らしまへんで」

「さうか、誰かてみなさういふで。あんたかて、ちよつとは分らへんなんだやろ。ハッハヽヽ」

「けどもまア、いつもお變りならて結構だんなア」

きん助はちよつと改つたやうに頭をさげて、「ほんまに永いことだんなア、もう何年になりまつしやろ。……ほして、あんたはまたこの頃こつちやだんのん？」

「去年の十月戻つて來てん。いつまで京城みたいなところにゐたかて、おもしろいことないわ。ハッハヽヽハ」

と、今度は少してれたやうな笑ひ方をしたが、「ときにあんたは……？」

「ついこの六日のひにこつちやへ宿がへして來ましてん。おつさんの身の都合でなア……」

「さうだつか。てやつたら、もう引きたはつたん？」

「わてだつか？……阿呆らしい……こんな婆がいゝおはなにいてよろなりまんれ」

「さうかて、ちよつとも、あんた、[illegible]」

「なにいうて[illegible]、もうあきまへんわ。ほんまにあきまへんわ」

「……そやけどなア、木田はん、[illegible]にでもおまへんか。[illegible]」

「いうてくんなはつたら嬉しおますかな。[illegible]」

ちイよんなはつたらよろしおす。[illegible]

んがな。――わてとこ、ついこの[illegible]

次だんね」

「あ、さうか。そやつたら、つい近所やねんなア。わしとこも裏町三丁目やねん。近いうち是非一遍よせて貰ひまつさ」

「おいなアれ。あんな路次で、ほんにむさくろしいうちやつけど、わてとおてやんと二人だけで、ほんに氣樂にしてまつさかい、久し振りで一杯飮んまへ、ういな」

「昔話でもしようか」

「朝鮮のお惚話でも聞いたげまつさ」

「その時はな、線香つけるよつて、おてやんにお酌して貰はんならん。……もういくつや。綺麗になつたやろなア」

「わての子だすよつて、そのだん間違ひおまへんわ」

「アッハヽヽハ。そんなら、いづれ近いうちに……」

「ほんまによつとくんなはれや。待つてまつせ。さいなら」

きん助は、愛嬌笑ひをして、マッチ箱ほどの小さな髷へちよつと手をやつてみながら、——御影石の甃石に利休の齒を鳴らしながら、女湯の格子戸に手をかけた。そこには、二月末の弱弱とした夕陽が、塀の外へいやにひねくり出した赤松の影をうつしてゐた。一遍や二遍はどこかに飮みに行ける、——そんな考へが、十三の歳から五十四まで「客」といふものに寄生して來た老妓の胸に浮んでゐた……。

場所がらと云ひ、時刻と云ひ、女湯の客の八九分までは、髮あげをさして來てゐるやうな女たちだつた。甲高い話聲や、湯をつかふ音が、天井の高い屋内に響き渡つて、モウ〳〵と立騰る湯氣のやうに陽氣で、そして、ヒョイとはいつて行つたものには、息つまりさうに騷々しかつた。

きん助は、肩胛骨のあらはな背を丸くして、流板の上をヒタ〳〵と小刻みに、娘のおてるを探しもとめながら、湯槽の方へ近よつて行つた。裸形だと、誰も彼もおなじやうに見え、また誰も彼も違ふやうにも思はれた。おや、來てゐないのかしら、と思ふ時分になつて、やつと隅の方で襟白粉をしてゐる娘の後姿を見つけ出した。一つでも知らない顏がないやうなお互同士のなかで、ひとり新米らしい肩身の狹さに、なんとなく小さくなつてゐた。きん助は、南地にゐた頃から見知りごしの土地の姐さん株の三人が、人もなげに眞ン中に幅ッたく陣どつて、六尺一つで、足の親指の股に垢擦をはさんだ三助を、己の下男かなんぞのやうに顎で使つたりしてゐるのに、理由もなく反感を抱きながら、——けれども笑顏の挨拶をふり撒きながら、娘のそばへ行つた。

「おてやん、あんたこれ忘れて來なはつたんやろ」

出しぬけに、鏡臺のそばに置いてあつたのを持つて來た糠袋を渡さうとしたが、相手が、あたりの騷々しさに紛れて氣づかずにゐるので、「これ！」と云ひながら、それを娘の肩へぽんと置いた。

「あ、吃驚した。いややわ、おかアちやん！なんぞ天井から落つて來たんやと思うたがな」

きん助は、母親らしく笑ひながら、

「忘れて來たんやろがな」

「そんなん要れへん。昨日久榮はんから貰うた東京のニードたら云ふ洗粉、試につこてみよう思うて、知つて、うち置いといたんや」

「あ、さうか。そりや、まア、えら惡おましたな」

そのまゝきん助は、深い浴槽のなかに肩まで沈んだが、口尻に力をいれるやうにして、うつ

向き加減に頸筋を洗ひながら、やがて娘へから話しかけた。

「いまそこで木田けんに遇うてん」

「だれに？」

「木田はん。あんた覺えてるやろ」

「知らんわ」

「知らんて、……なんだつせ、ほら、八幡筋の、江島屋の……」

「あゝ、あの木田はんかいな」

「まだほかにも木田はんてあるか」

それには答へずに、

「ふうん、さうか……」

と娘は、急に、冷く鼻のさきで答へた。いい歳をしながら、矢つ張り嬉しいのかしら、さうと思ふと、冷笑したいやうな氣がした。――まだ自分が生れないさきに、三つの歳に死んで了つた新吉といふ兄の父親だと聞かされてゐたその「木田はん」なるものは、自分が十か十一になる時分までは、月に一遍ぐらゐ、きまりのやうに醉つぱらつて、夜おそく飛び込んで來た。江島屋と云ふ有名な古道具屋の二男だとは聞いてはゐたが、その頃にはもう勘當でも受けてゐたものか、身なりなどもひどくみすぼらしかつた。[illegible]の母親は、夜おそくでも、大抵は留守だつたが、たまさか歸つてゐれば、毛蟲のやうに摘み出されて了ふし、留守だと、その時分にゐた、おでこで色の黑い、お竹と云ふ婢といゝ加減にあしらはれながらも、臺所火鉢（東京の茶の間の―に當る）の前に坐り込んで、ひとりで威張り散してゐた。恐しくもあるが、子供ながらにもさう大した人間とは思はれなかつたので、おどけ芝居でも見るやうな氣で、よく夜具の襟の蔭から、薄目をあけて窺いてゐたものだ。どうかすると、友惠堂のもなかの十錢袋くらゐを懷中から取り出して、「おてこ！もう寢たんかいな」などと呟きながら、そつと枕頭に置いて行つたりしたが、うちぢうの輕蔑がなんとなく染み込んでゐた人物だけに、そんなことも、かくべつ德とはしてゐなかつた。――さう云ふ舊くからの輕蔑と、一家の生計を支へてゐる娘らしい高慢とが混り合つて、それから十年近くも經つた今日、不意に母親がもち出した木田の名前を、おてるは、小馬鹿にしたやうな氣持で聞いたのだつた。

それは、すぐまた、母親の方へはね返つて[illegible]しられた。この小さな[illegible]と云ふやうな[illegible]いて、なんと思つて自分もまた、こ[illegible]なこともないことを娘に話したりしたらう。――この自分自身に對する忌々しさが湧き起つた。親子さし向ひの、それこそ箸のこけたことまで話さずにはゐられないやうな、――[illegible]生活からつけられた一種の癖、――その輕い氣持で、つい喋つて了つたのだが、それにつけても、思ひがけなく木田に逢つてからの自分が、いくらかうき〳〵した氣持になつてゐたやうでもあるのに氣がつくと、いよ〳〵もつて忌々しかつた。けれども、もとよりそれは色戀ではない、一度でも二度でも、好きな酒も飲み、甘いものでも食へるだらうと思はれるからだ、――そんな風に、飽までも口腹の慾へ結びつけて了つた。その方なら、きん助にとつては、少しも恥づべきことではなかつた。――五十よりも六十へ近い歳になつて、二昔も前に半年ほど同棲した年下の男に久し振りで逢つたからと云つて、口腹の慾でも滿たさなければ、ほかに何をもとめられよう、……そんな風に感じられた。

いゝ、いゝ、もみあげから頸のさきへかけて、クッキリと白くした娘が、そこへ、若々しく張り切つた體を[illegible]のなかへ沈めて來た。

今夜の[illegible]、とこぞつたな

この土地へ來てまだ間もないのに、もう[illegible]へ入れて貰へる、――その得意をそばの人にも

「お裾分け」したい氣持から、きん助は、[illegible]
と心得てゐることを、わざ〳〵[illegible]ねてみた。
[illegible]
「[illegible]胸を手拭で撫で[illegible]し、[illegible]
[illegible]白[illegible]た娘は、[illegible]月[illegible]に、
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
「さうか、[illegible]、勝手[illegible]していた」
一生、[illegible]
にも[illegible]人念に[illegible]
ん助[illegible]心は、[illegible]
れて桃色[illegible]を、つい鼻のさきから[illegible]
て行く[illegible]し[illegible]、微かながら嫉みを感じてゐ
た。それが、ぞんざいな洗しだや化粧の仕方た
[illegible]る不[illegible]をとつた、[illegible]にこの
頃[illegible]いものは……、さらぶふ輕蔑とも憤りと
も片つかない氣持であとを見送つてゐた。
「[illegible]さん、おさきい……」
見知つた限りの姐さんたちには、一々さう會
釋しながら、人々の間を縫つて、娘のおてる
はおづ〳〵と出て行つた。
「はあア」

[illegible]、きん助は[illegible]なく[illegible]息をついた。
[illegible]井の上で、[illegible]
行つた
[illegible]
これと[illegible]是非しなければならない用とては
ない[illegible]た。娘は座敷に出て行つて了
ひ、女中は[illegible]しもとて晩食の[illegible]
とするゐる宵の口に、[illegible]の[illegible]で
ト[illegible]なら、[illegible]の分[illegible]
[illegible]所[illegible]を[illegible]、ふと、こんな晩木田
でも[illegible]、と思ふことがあつ
た。けれども、あれきりなんの音沙汰もなく、
[illegible]ばかり經つて了つた
三月[illegible]にいつて間のない、或る晩もよひにム
シムシする晩だつた。少し具合の悪くなつてゐ
る[illegible]の要知をかり〳〵やりながら、
「[illegible]、片[illegible]、……こゝやな
などゝ呟いて、すぐもう格子のくゞりを引き
あけるし、大[illegible]に、「おい、きん助はんうちイゐ
るか。きたで〳〵」
その聲が木田だつた。
赤新聞を電燈の方へかざしてゐたきん助は、

わ[illegible]そく〳〵と立ち上つたが、[illegible]
いて、[illegible]
間[illegible]出[illegible]行つた。
[illegible]
見る[illegible]、木田は、[illegible]
から[illegible]
廻して[illegible]
はよおな
「こんなけ[illegible]……
[illegible]
[illegible]
こつちやへはいんなはれな[illegible]
「いれても[illegible]か、[illegible]
ん……」
「うた[illegible]
立ちまつせ」
「どやンな、はいるで[illegible]
「もつとあけなはつたら[illegible]まへんか。ま
アま、ほんまに大い[illegible]たんなア。なんで、こ
ない、えげつないならなんなはつてん」
「なんで云うたかてしやうがないかな。おい
しいもん食うて、遊んで暮してるよつてにやか
な」
「えらい、えゝ身分だんねなア」

「なんでもえゝわ。さア、あがつて一杯飲もか」

「無茶云ひなアんな。わしとこでは、お酒とつてあれしめへんで……」

ヨロヨロとよろけかゝつて來る、見上げるやうな木田の體を、胸もとへ手をかけて遮るやうにしながら、「それよか、どこぞい行きまへうな。うちでお酒飲んだかて、おいしいことあれへん。なア木田はん、どこぞい連れていとおくなはれへんか」

「もうおそいがな。今夜はもううちで辛抱しとき」

「ちよつともおそいことあれしめへんで。今何時やと思てなはるねん」

帳場の間へは、一歩も入れまいとするやうに、兩手を膝へかけたまゝ、きん助は柱時計を振り向いて見た。やつと、九時ちよつと廻つたばかりだつた。

「何時やて、えゝわい。わて、もう歩くのんかなはんのやがな」

「そやかて、わしとこにお酒あれしまへんで」

「なんでやね、このごろ晩酌やれへんのんか」

「やれしまへん。また、四圓も五圓もするお酒、贅澤のまへんがいな」

「お酒が一升四圓も五圓もするやうなんで、えゝねんやないか。色町が、——お前らが、今一番ぼろいことしてるくせに、なに云うてんね。びくびくせんかてえゝ。……なんやら云うたな、お前とこの娘の名ア……？」

「おてやんだつかいな」

「うん、そやそや、おてこやつたな。……あの娘がせいせい儲けて來るやないか……あ、そらさうと、おてこどうしてん。ゐるか？」

「阿呆らしい。今時分藝妓がうちにゐるやうなことで、どないなりまんね。……そやけどもまア、一遍こつちやい來て坐んなはれ」

いつまで立話もしてゐられず、仕方なしにきん助は、先に立つて、次の火鉢の置いてある六疊の間に案内した。そこには、朝から夜まで、いツ時の間もぼんやりしてゐることを許されない女中が、間々とした膝の上で、俄にせかせかと雜巾をさし始めた。

「おせいどん、炭、少し出して來てんか」

「いよう、えゝ娘やなア」

木田は、ずり落ちさうに古びた二重廻しをぬぎ捨てながら、その女中の前へ、膝を突き合せて坐ると、眞ッ赤な顔を、手早くすまいとしてツッ突いて、

「お前みたいな別嬪さんに、炭なんぞ出さしたら罰あたるわ。ねい、お炭だして來たるよつて、お前、お酒出しい」

「お酒みたいなもん、うちにあらへん云うたら、分らん人やなア。そないほしかつたら、この娘にちよつと酒屋へいて來て貰ひなはれな」

「行かんかてえゝがな。うちにあるに違ひない」

「一體、どないしてん、あんた、えらい吝嗇になんなはつたもんやなア」

「さうかて、あんたが、一杯飲むよつて來い云うたんやないか。わい、ちやアんと覺えてるで。どや、そやないか。忘れたんか……」

それから、きん助のもの云ひを上手に眞似て、「一體、どないしてん、あんた、えらい老けなはつたもんやなア」

「どうもしよかない。あんたに會うたらかなはんわ。……おせいどん、あんた氣の毒やけど、ちよつと和泉屋いて來てえな」

云ひながらきん助は、目顔で、ちよつとおもてへ出てみせておいて、それからうちのお酒をつけろ、と云ふ旨を呑み込ませようとした。

「なんやねん、……、あんた、怪體な事するねんな」

木田は、下脣を突出して、きん助の口つきをする顔つきを仰山に眞似てみせて、一

てたかて、木田新太郎はんや、めつたにお[illegible]に誤魔化されへんで。あるもんやつたら、とつさと出したらえゝやないか。なにけち／＼してるね」

「そないえゝもん[illegible]なはる奴んやつたら、もう云んどくなはれ」

と、きん助は、目ざとく見つけられた[illegible]しさもあつて、[illegible]としたやうにきめつけた。「そんなごりがん(ごろつき)わて嫌ひや！」

「まア、そない怒らんかてえゝがな。久し振り逢ふのんやないか。ほんまにもう何年にならいな。一昨年、……一昨々年やつたかいなア、新吉の十七年や思て、……わい朝鮮三界うろついてたかて、あんたこと ちよつとも忘れへんて……」

「もうよろし、そない云はんかて、飲ませまツ、飲ませまツ」

「飲まして貰はう思て云うてるんやないで……」

「わかつてる、わかつてる。……おせいどん、お酒出してんか」

「アッハヽヽハ。そやよつてん早う出してしもたらえゝのんに、阿呆やなア」

木田は大きな體をもたげて、部屋の隅に立てかけてあつた、足の折り畳み安ものゝちやぶ臺を、[illegible]で、そこへ用意した。母親も、心づもりとはせんと[illegible]つたけれども、兎に角好きな酒に[illegible]て、いつの間にか楽しい心持になつて、[illegible]、戸棚から、食パンや、果物と[illegible]佃煮のやうに[illegible]く貰たのやいれに蓋ものなどを取り出して来たりした。

「さア、こゝに[illegible]肴やつたらたんとあるで」

と、木田は、[illegible]にいやになつてゐた外套の衣嚢を索つて、[illegible]宴會などで持たして歸すやうな折を取り出した。

「折詰[illegible]、[illegible]あらたまつてなはると思たら、どこぞ宴會の[illegible]たんかいな」

さう云ひながら折を受取つて、蓋の上から結ばせてある紙を見て、「ふうん、××へ行てなはつたんか。あそこ、この頃ちよつともおいしいことおまへんでえ」

「ようて丁稚あがりのもんの婚禮や、えゝことさせへんにきまつてるわ」

「丁稚つて、お店の人だつか」

「店？ わしとこのやがな？ 阿呆らしい。誰があんなうちイ寄りつくもんかいな」

「そやつたら、いまだに出入りしてはれへんのだつか」

「知れたこつちや。とツ百萬兩の身上があつたかて、あんな道具屋みたいな辛氣くさい商賣がしてるられるかいな」

「ふうん、ほしたら、あんた今なにしてなはんね」

「……それよか、もうまた二度目の嫁はん貰ひなはつたと違ふしやろな」

そこへ女中が、流許から下駄[illegible]のまゝ臺所（[illegible]間にある）[illegible]来て、

「へい」

と、盆にのせて来た銚子を差出して、「お漬もんでも出しまへうか」

「もうえゝわ、なんや知らんけど、こゝに御馳走もつてきやはつてん」

さう云ひながら、きん助はプツンと折の[illegible]して紐を切つて、蓋をあけてみた。「なんや、しやうもないもんばかりだんなア」

「そらさうやろ」

「おせいどん[illegible]」

と、銚子を[illegible]につけようとしたきん助が、

「こないいつぱいお酒入れるもんやあれへんで。お酒ちふもんはな、お燗したら殖えるよつてん、こない入れたつたら、零れてしまふがな。勿體

ない」

「さうかて御寮ンさん、はしり許が暗うて、どんだけはいつたんや、わかれしめへなんだ」

「そやつたらしやうがない。瓶ぐちこゝいもつといで。こんな大蛇みたいな人に見込まれたら、どうで、あるだけ飲まんうちは、去にやはれへんよつてなア」

「大蛇？　なに云うてんね。お前らこそ飲んだくれのくせにして……」

きん助は笑ひもしずに、銚子の酒を一杯自分の盃にあけてから、銅壺へつけた。

「そらさうと、さいぜんの話、どないだしたんやなア、婿を貰ひなはつたん？」

「女房みたいなもん、もう一生もらエへん、こり／＼や。……あ、今のん取消！　おせいとん」

と、すぐもう女中の名を覚えて了つて、「お前やつたら、今が今でも貰ふで。どやねん、わいとこの嫁はんになれへんか」

「しやうむない！」

さうは云つても、有繋にちよつと頬を赤くしながら、女中は流許の方へ行つて了つた。

「ふうん、さよか、ひとりでゐなはるのん。ほして、今なにしてなはんね」

「あんたもまア、えいとこ出てた人に似合はん、目の利かんこつちやなア。ちよつと見たとこでも、分りさうなもんやになア」

「へ、さうでしたか」

と酌をして、自分の盃にあつた冷酒をグッと一口に飲み干すと、それへも手酌で注ぎながら、「そやなア、見たところで云うたら、まア十両までいかんうちに老耄れてしまうた角力取のあがりでつしやろかいなア」

「阿呆ぬかしなはれ！　角力取にこんなえゝ男が一人でもあつたら、お目にかゝるわ」

「そやなかつたら……」

「もうえゝ／＼、どうせ碌なこと云へへんにきまつてる……」

「ほんまになにしてなはんね」

「こゝに何んでたら、それだけでも大概分りさうなもんやないか」

「あ、さうだつか」

と、盃を唇にあてながら、幾度も頷いて、

「けどもなア、わてらの知つてる株屋はんは、もうちよつと気前がよろしおましたで……」

「なんかしやがんねん！　……そらさうと、あんた、大分金できたやろ」

「阿呆らしい。繋妙みたいなもん何年やつたかて、お金でけるもんやあれしめへんで」

「そない隠したかてあけへん。今のお酒もおなじことやがな。無い無い云うたかて、やつぱりあるねん。……どうや、ちつと株で儲けてみる気ないか」

「そんなお金があつたら、疾に楽隠居したんがな……」

「そないに云はんと、まア聞きいな」

木田は、指のさきまで赤くなつた手を、相手の鼻のさきで、虫でも逐るやうに振り動かしながら、急に聲をおとして、「わてなア、これ、慥な筋から聞き込んでるねんけど、もうついえらいかゞ来るで、……がらつと分るか」

「そんなことぐらゐ知つてまんがな」

「えらいもんでな……ほいでな、こゝでな、帯切て賣りを出しとくねん。なんでもえゝけど、まア、紡績か船なんぞやつたら間違ひないなア……こら、ほんまに秘密やねんで。誰にも云はれしまへんで……見てゝみい、三百圓が三千圓、この月末になつたら、きつと三千圓になる。ほしたら、十株賣つて……かて、きつと三千圓の儲けや。こゝで一萬圓も遊んでる金があつてみいな、一週に十萬やそこら儲かるねん。ほんまに、安合うて儲けますか、どや、やつてみ

もうないか」
「いや〳〵、わしとこらには、遊んでるにも遊んでへんにも、お金なんぞ、どだいあれしめへん。また、すこしはかりあったかて、相場みたいなもん、わてら可怕いわ」
「いゝ、いゝ、あんた意気地なしやなア。そんなこと云はんと、五千圓……千圓でえゝよってん、わてに預けてみい、すぐ三層倍や四層倍にして持って來てあげるわ……わいなア、若い時いろ〳〵世話になったと思ふよってん、ほんまに、恩返しのつもりで云うてるねんで。相場々々と一概に云ふけれど、こんどのやうに確な筋から聞いたんやったら、ちよっとも危いことあれへんやい。まちがひないねん、石橋を叩いて渡るやうなもんやねん。ほんまに儲かるわ……若しやるんやつたら、わいも一生懸命で、君の御馬前で討死する覺悟でやるわ」
「まアおきさくらかいな」
輕くうけ流して、……それよかまア、一杯あけたはれへんか」
「さア、飲むことは飲むけどな」
と、盃をさして、それが癖の思案くさく首を傾げながら、折角、儲が目の前にぶらさがつてるのんになア……」

「そんなんやったら、あんた、貴ろなと買ふたと、たんと儲かるやうにしなはったらよろしやおまへんかいな。わてらみたいな貧乏もんとこい來て、そんなこと云ひなはったかて、どないも仕様がおまへんやおまへんか……おほきに、お断しまッ」
木田は、醉漢らしい執拗さで、暴落が眼前に迫つてゐること、その豫想がいかに確な筋から來てゐるかと云ふこと、この株を、どれだけ買って置けば、いくらいくら儲かる、と云ふやうな、とらぬ狸の皮算用やらで、小一時間も喋り續けながら、盃に盃の數を重ねた。きん助の方は、氣のない相槌をうちながら、一しやうむないと貶した食ひ荒らしの折詰へ、盛に箸を運んでゐた。が、やがて二人とも、同じことの繰り返しに飽きて來た。なんとなく面白くなくなって來た。
「久し振りでなんぞ一つやろか。三味線ひきいな」
「おきなはれ、怪態な淨瑠璃……」
「淨瑠璃でなうてもえゝで。兎も角、三味線だして來ィな」
「しんどい。それよか、なんぞおごんなはれな。もうなんにも食べるもんあれしめへんで」
「ようし、なんなとおごったろ」

木田は得々たる下腹を叩いて、こゝらでたらなんやろな。北陽か、
「洋食みたいなもんもよろしおますし、もっとたんぞれから、さっぱりしたもんにしまへうな」
「うん、まアなんなと、あんたに任すわ。なんなと勝手なもん取りなはれ……なア、おい、あの茸やけどな、このこゝ近くにおいしい食べさす店があったら、ひとつ行て來てんか。値段に、あんたにもなんぞおごるで。……わてはなんでもよろしおまへん、きん助はんの好きなもん、一品か二品云うてもろてなはれ」
「御馳走さん。どこイ行て來まへう」
「そやな、やっぱりふく〳〵やろなア」
「ほしたら、なにか云うて來ますわね」
「わて、……そやなア、なんぞ仔牛の煮たもんと、葉の三杯酢でもろて來てもらおか」
「わいもそんなことでえゝわ。そいから、丼もんかなんぞでけるのんやったら、ほんまにあんた、云うて來て食べなはれ」
「この娘はよろし、あとでまたいゝ、私が何んでも取ってやりまっさ。なア、その方がえゝなア」
「へえ、わてもうなんにも結構だす」
女中は、禪をまるめて袂に入れながら出て行った。

口をつけたばかりの一升瓶を、かれこれ空にして了つた二人は、もういゝ加減酔つてゐた。

そして、飲めば飲むほど、不思議に二人の口は重くなつて行つた。殊に女中が出て行つたあとでは、へんな苦しさが懸つて來た。言葉ばかりでなく、目を見合すことすら気まづいやうな、――めいめいの胆のなかで思つてゐることが、つい近くまで來てゐながら、掛け渡す橋もないほど深い谷を隔てゝゐると云つた気持に壓されて了つた。一人が盃に手をやるのに誘はれて、ついそれを取りあげると、黄色い液體の底に映つてゐる黒點におツと見入つて了ふやうな沈黙が續いた……

格子戸ががらがらとあいた。使に出た女中だらうと思つてゐると、次の間からあがつて來たのは、娘のおてるだつた。

「なんやねん、おてるやんかいな――ないしてん、えらい早いやないか」

「知らん人ばかりやよつてん、店で待つてるのん、てれくさいわ」

「そんなことゆうてたらあけへんで。店で待つてなはれ、誰かいまた連込んでくれるのんに、そんな甲斐のないことゆつたら、ほんまにあけへんわ」

「これ、おてるやんか」

木田は、三白眼のやうに吊り上つた瞳を射つけて、「えらいえゝ娘になつたもんやなア。……あんた、わて覺えてるか」

眉根に八の字をよせて、露骨に不愉快さうな顔をそむけたきり、おてるは答へなかつた。娘の帰りの早さに大分不機嫌になつて、いつもの焜々しい小言にならうとしてゐた母親だが、木田の今の言葉が、お世辭ではなく、全く、心からの讃嘆らしいのに、ふとまたいゝ心持になつて、

「おてるやん、あんた木田はん覺えてやな。……そんなとこに突ッ立つてんと、まアこつちい來て坐んなはれ」

さう云はれると、娘も、さも草疲れたやうに膝を折つて、

「おいでやす」

「あ、そんなとこに坐つたら衣裳がだいなしやがな、座蒲團もつといで」

そんなことは耳にもかけずに、

「あゝ、しんど。なんや知らん、今夜だるうてしよがない」

「ほんまに別嬪や。いくつになんなはつてん」

「あゝ、そんな風して柱に凭れたりしたら、帯がわやゝつせ。ちんとしてたはれへんかいな」

「なア、いくつになつてん」

「十九だす」

と、ほき出すやうに答へて、「わてやつぱり店で待つてまつさ」

「まア、えゝやないか。今夜はわてがあかい(十一時半から翌朝までの線香代)一杯買つたげるよつてん、こゝにゐてお酌しーえな。なア、きん助はん、そやつたらいゝいゝけんたい([illegible])やなア。……ふうん、十九か」

木田は、ひとり頷きながら、娘の顔から、肩から、胸から、腰から、横坐りに、引いてゐる裙の下にまで見つめつゝ、見えない足のさきまで、舐め廻すやうにぢろぢろと視線を滞らせてゐたが、「きん助はん、じやまねん」と県田に笑つて、娘の方を、敏捷く顎でしやくつて見せた

「わて、行てこ」

さらりと襟をたてはいて、娘が急に立ちかゝるのを、木田は、慌てゝそばへすりよつた。

「まア、まアいゝな。兎も角一杯飲んでき。線香つけたらわいがてお客や」

云ひながら、左に娘の手をしつかり把つて、右で盃の[illegible]を矢庭に振り廻した

「痛た！　痛！」

娘は大袈裟に聲を立てゝ、「おかアちゃん！」

「木田はん、わて怒りまっせ。……そない盃を振り廻したら、滴が飛びまんがな。衣裳にかゝったらどないしまんね。……おてやん、あんたもまた、はよそっちゃへ行たらえやないかいな」

「さうかて、こない強うつかまいられてたら……

「痛！ 痛！」

「軟かい手やなア」

その時ガラリと格子があいて、

「菊榮はん、徳田屋だっせ」

その入方（東京の箱屋にあたる者）の聲を聞くと、有繋に木田も手を放して、慌てた風に手酌で一杯グッと飲んだ。娘はケロリとして、褄をとりながら、

「わてまだ行ったことのない家やし。どこだんね」

「どこかてえゝやないか。はよ行といなはれ」

「……うちにゐたかて線香つけへん、損やがな」

娘は逢状をちよっと灯にすかして見て、襟もとへさし込むと、そのまゝ挨拶もしずに、三和土の上にズル／＼下駄を引きずって出て行って了った。

胡坐の膝に兩肱を張って、いゝちゃぶ臺の上の一つところをぢッと見詰めてゐた木田は、暫くして、ふゝ、

「あれ、ほんまに菅蓮はんの子かいなア」

と、女が自分から拔き去って行った、素人義太夫で一時鳴してゐた男の名を持ち出してみた。

「そんなこと訊かんかてよろし」

きん助は不快な顔をして、「もうお[illegible]しめへんで」

「そやったら、買ひにやったらえゝやないか」

「もうそろ／＼、あんた、去んなはってもよろしのんか」

「さうかて、今御馳走がくるがな」

「あ、そや／＼。酔うてゝも食べるもんのことやったら、よう覺えてはるわ」

と、大きな前齒を見せて笑って、「ほしたら、それたべてしもたら、去んなはれや」

そこへ女中が駈け込んで來た。

「ぼつ／＼降って來ましたで」

「あ、さうか。……そらおそかったんやなア。なにしてゝん」

「生憎一人も出前持がゐてしまへんなんだよってん、待ってゝ、わてが持って來ましてん」

せい／＼息をはずませながらも、早口にさう云って、女中は、通りにはいへ（表の格子戸から、裏の台所まで通じる三和土の通路）を臺所（裏の間）の前まで來て、そこへ岡持を置いた。

「あ、さうか。そらえらい御苦勞さんやったな」

きん助は、岡持から食べものを取り出して、そ[illegible]

「[illegible]並べたりした[illegible]

「菅蓮はん、[illegible]

「え、死にはりましたで」

[illegible]それには[illegible]女中の方へ[illegible]し

「あんた、[illegible]、おいしさうやな。お味噌のとこ[illegible]

おいでなはれんで

[illegible]

「これは御馳走、こっちの知ったことぢやアない、と[illegible]表へ回って行った

「さうかいなア、菅蓮はんの子かいなア。今なんや知らん、ふいと、わてその子のやうな気がしてん……」

「しやうむないこと云ひなはんな。……早う食べるもん食べて去んなはれ」

「あんたまア、よう食べるなア」

「[illegible]のお腹、[illegible]

ん、なんぼでもはいります[illegible]。あんたは、もう食べなはれしめへんのんか」

「酒や／＼。酒やつたらなんぼでも飲んだるわ」

「お酒もうこいでお仕舞だつせ」

と、タラ／＼と雫を切るやうにして注ぎ終るのを、

「そらいかん、おせいどん。お邪魔序に、もう一遍酒屋まで行て來てんか」

「もうおきなはれ」

きん助は食べものを頰張つて、モグ／＼やりながら、首を横に振つた。

「まアえゝわ、もう五合でえゝよつてん、とつて來こもろてんか」

暫く云ひ爭つた末に、女中はまた使に出されることになつた。

「序になア、おせいどん。……なにしてるねん、そこでザク／＼云はせて……」

「傘だしてまんね」

「そない降つて來たのんか？」

「へえ、ほんま降りになつて來ましてん」

「さうか。……あ、ほいでな、序にもう一遍ふいくゞいよつて、書附もろて來てえな。お酒は分つてるけれどな……」

ふたゝび銚子が來た。木田は幅の廣い肩を、ちやぶ臺の上に蔽ひかぶさるやうにして、ぢツと一つとこへ目を据ゑたまゝ、時々空の盃へ手を持つて行つては、淋しさうに、絲底を指の腹で撫でゝみたりしてゐた。きん助の方は、今度は、そんなことにはお構ひなしに、いま來た料理をムシャ／＼平げ始めた。あたりもいつかシインーとした。樋を傳ふ雨垂の音ばかりが、耳について聞えた。

やがて酒が來たが、きん助はもう殆ど飲まなかつた。木田が手酌で、まづさうに、それでもグイ／＼咽へ流し込んでゐた。

「さア、それ一本あけたら……」

云ひかけて、きん助は、無遠慮に大きな欠をした。「……それ一本あけたら、もうほんまに去んなはつたらどうだんね。ほしてな、お料理の値段、二圓と六十錢やさうだす。お酒は、おあとの五合は大分殘つてますさかいえゝとして、わしとこの一升だけ拂うてもろて、なんやかんで、……そやなア、十圓置いて行きなはれ。おせいどんもさんざ使うたしな……」

「わい、今夜泊めて貰はうかいな」

「なに云うてなはんね。そらいきまへん、いきまへん」

「さうかて、こない降つて來たら……」

「裏町やつたら、あんた、ついひと足やおまへんかいな。なんやつたら傘一本貸したげますよつてん、歸んなはれ」

「まア／＼なに云はんと、泊めてえな」

「そんなことができまつかいな。もうごて／＼云うてんと、去んなはれ云うたら、さつさと去んなはれ！」

「なにも、そないえらそに云はんかてえゝやないか。わつしは昔のことも考へてみい、そないポン／＼云うたらんでもないやろが」

と、少し氣色ばんで云つたが、すぐまたニタニタ薄氣味惡く笑ひかけて、「なア、おつとは、三味線屋の奧にゐた頃のことなども思ひ出してみたらどやねん」

さう云ふと木田は、火鉢ごしに、いきなり痩せて骨ばつたきん助の手頸を把つた。「なア、そやろ」

「おきなはれ」

むきになつてその手を振りほどくと、思はずきん助は立ち上つた。「さア、もう、ほんまに去んなはれ去んなはれ」

「去んだるとも。ふん、この死にぞこなひの慾ばり婆め！」

木田は[illegible]／＼に立ち上つた。

「木田はん、あんた[illegible]か」

そんなことしたくらゐなら、わて、ほんまに承知せえしめへんで」
「よそのうちイ來て、御馳走よばれて歸るのんが、それがなんで食逃やねん」
「そないな、……あんたみたいな……」
咆るやうに、甲高にわめく〳〵と、きん助は身の微力も忘れて、大木に蠅がとまつたやうに木田の胸ぐらへしがみついた。
「なにするねん。……まアえゝ。そない騒がんかて、いま錢入がわそつちやへくれてやるがな」
悠々と懐から出しかけるのを、きん助は敏捷くひつたくると、慌てゝなかを調べてみた。
「これ、なんやねん！　一圓そこ〳〵ぐらゐよりはいつたれへん。ほかに札入もつてなはんねやろ。隠したかてあけしめへんで」
「そんなんあるくらゐやつたら、お前らみたいなもんとこい來るもんかい」
云ふなり木田は、きん助の鼻の頭を掠めて二重廻を羽織つて、にはにおり立つたが、急に馬鹿丁寧に腰をかゞめて、「や、大きに御馳走さん。またちよく〳〵よせて貰ひまつせ」
「……………」
なんとかひと言、思ひきり毒づいてやらうと思ふのだけれど、もうきん助には口が利けなかつた。一圓いく〳〵らはいつた蟇口を、ブル〳〵と震ふ手に握り締めて、憎惡に燃えた眼で木田を睨みつけてゐるよりほかなかつた。木田は下駄を踏み返して格子戸によろけかゝりながらも、表の間の薄暗い隅に、くの字なりになつてよりかゝつてゐる女中の方へ、愛想よく笑つて見せた。
「おせいどん。えらい使ひたてゝ氣の毒やつたなア。あとで、饂飩でも買うて貰ひなはれ。ハッハ、、、ハ――」
格子戸に挾まつた外套の裾が、むかうへ引かれて見えなくなると同時に、きん助は、力いつぱい蟇口をたゝきの上へ叩きつけて、さも忌々しさうに呟いた。
「ほんまに、覺いて〳〵され、けつたくその悪い！――」
「あゝあ、えゝ氣持や」
煉瓦でたゝんだ路次に、ズルリ〳〵下駄を引きずりながら、帽子をぬいで、熱い額を雨にうたせてでもゐるらしい木田の聲が聞えて來た。
（ヒョッと、おてやん、道で出逢やへんやろか――）
そこに、なにか、非常に恐しいことが起らうとしてゐるやうな氣がした。……きん助は、ふと、木田が、おてるの實の父親であることを考へてみた。――生れて初めて考へることのやうに考へて見た。ドキ〳〵と、胸が高く〳〵鳴り出した。舌の上に苦い味がのぼつて來た、と思ふと、全く思ひがけない泪が、顴骨の突き出したきん助の頰を傳つて流れ落ちてゐた。……
夕立のやうな、激しい雨になつて來た。

（大正七年六月作）

解り切つたことだけを云つたり仕たりしよう。解り切らないことを云つたり仕たりして了つたあとほど、苦々しく自分の顧みられることはない。幾年か前に、やつと私は、から云ふ大發見をして、爾來さう心掛けて來てゐるつもりだ。

（『白醉亭漫記』の「解る」より）

銀二郎の片腕

——から云ふ話を聞いた——

年の半分は、野も山も深い雪に鎖されて了ふやうな地方の、或る牧場に、銀二郎と云ふ牧夫がゐた。

牧場は女主人で、それに別段相談相手と云ふやうな人もゐなかつたけれども、總てのことが活氣のある秩序の下に、年々よくなつて行つた。三十二で亭主に死別れた彼女は、子供がなかつたせゐか、それからは全く男のやうに振舞つて、牧夫たちの先に立つてよく働いた。牧夫たちの仕事は、先の旦那の時分よりも量に於てはさうなつてゐながら、質に於ては、樂な、面白いものになつた。彼女には、一種、昔博徒の親分の家に、姉御と云つて立てられてゐた女たちにでも似つかはしい、世話好きた、思ひやりのある、そして氣丈な性分が急に現はれて來た。ただ、さう云ふ地方のことだから、粹だとか、通だとか、垢拔けがいゝとか云ふ傾きは、必要上現はれて來ないで、その代り、馬や牛を觀るとか、病氣を調べるとか云ふ專門の技能は、亭主に別れる前からの耳學問が、やがて本式の商賣人の域に達した。毎年秋に立つ馬市には、これほど質の惡いものはないと云はれる博勞どもの間に混つて、立派に、——と云ふのは相應質の惡いこともして、利益の多い商賣をして來るやうになつた。そのうへ彼女の熱心と勇敢とは、一匹の馬の行方を、——疑もなく既に死骸になつてゐるべきものを搜索するために、朝から日暮れまで雪のなかを彷徨はせたほどだつた。

病氣や怪我をした場合などには、流石に彼女も女らしい優しさを示すことはあつたが、普段は無智で單純な牧夫どもが、馴れ親しみ憎いほどの威嚴を保つてゐた。さうかと思ふと、何か祝事でもあつて母屋から酒が出た晩などは、自分も少し醉つて土間をカラ〱下駄を引き摺りながら、納屋と仕事場とに連らなつてゐる牧夫部屋へはいつて來ることもあつた。そんな時には、誰かから卷煙草を貰つて吃したり、酌をしてやつたりして、そこに主人がゐるやうに堅くなつて坐り直したりする者があると、却つて機嫌を惡くした。自分がはいつて行つても、いゝ鹽梅に座が白けない時などは、調子づいて了つて、口三味線で唄を始めたこともあつた。それでも翌る日は、母屋の女中が牧夫部屋に來て、

「ゆんべ旦那が卷煙草を一本借りたつて。誰だえ、それは」などと云ひながら、一本の卷煙草を大事さうに親指と食指の間に挾んで、それを頭の上で振つて見せたりした。

彼女には、十年來の中風で足腰の利かない舅が一人殘つてゐたほかには、この人里離れた土地には、遠縁のもの一人ゐなかつた。が、そんなことは、少しも彼女を淋しがらせなかつた。朝から晩まで男のやうに激しく勞働して、グタグタになつて眠ると云ふ生活が、良人を失つてからの彼女には、——少くもこの土地では、一番自然に流れ落ちて行つた生活で、そこには、馬や牛や牧夫どもや金錢に絡んで、喜びも悲しみも腹立も心配も、——凡そ人が死ぬほど退屈しないだけの複雜さがあつた。たゞ然し、こゝには永い冬がすぐ還つて來る。その間も全く仕事のないことはなかつたが、初めての二三年が過ぎた後に、彼女は、牧畜の事業ばかりでは、どうしても慰められない自分を屢々感じだした。わけもなく苛々して、[illegible]

思はれるやうな懐かしい調子で、レロ／＼と
あけて分らないことを云ふ舅に、小ッピドく當り散らしたりするやうになつた。さう云ふ時には、丁度舅が、退屈な「冬」そのもののやうに思はれて、見てゐるだけでムカ／＼して來た。どうかすると、朝から酒を飲んで爐端にゐたりもしながら、俗口も遅れて來る東京の新聞を、トロンとした目で見てゐたりした。

一いつそ東京へ出て了はうかしら――よくさう考へることもあつた。十八の時に東京から離れたきり、これ三年と云ふものこつちでばかり暮らしていて、せめて冬の間だけ遊びにでも行つて來ようかと云ふ氣にも、度々[illegible]なつてゐた。行くなら、牧場を賣るなりどうかする事をつけておかなければならないやうに思はれるのが、一年の大部分を云つていゝくらゐ億劫なことになつて了つた。よし冬の間だけ行つて來る氣になつたとしても、誰も人のない不案内な土地、而も非常に人が集るやうに思はれる土地に一人で行くのも、なんとなく薄氣味悪く、またその間舅の世話をしてがないのも、矢ッ張り心苦しかつた。

龍宮ほどに不思議な都をウト／＼と夢に見てゐると、枕頭で人の氣勢がして目が覺めた。いつの間にか舅が側へよつて來て、大きな顔の先に太鼓の撥を立てたやうな恰好に、仰向いて、徳利の底に少しばかり殘つてゐた酒を飲つてゐた。

「コラ、畜生！」

水口から鼻を突込んで、晩食に買つて置いた魚を銜へようとしてゐる犬を見付けたお嫂のやうに喚きながら、彼女はいきなり舅の横ズッポウをはつた――禿の頭に手を上げたのは、これが最初だつた。木枕を叩いたやうな手ごたえと一緒に、舅が不態にそこへぶつ倒れるのを見ると、急に、憎い、憎い、めちやにしても足りない思ひで、ウッとなつて了つた――。

ドコバタといふ音を聞きつけて、丁度何か用があつて臺所へ來てゐた銀二郎がそこへ飛び込んで來た

一旦那、そりやよくねえ一

かう云つて、[illegible]のやうな舅の[illegible]へ乘しかゝつてゐるのを引き離すと、彼女は、暫く呆然つッ立つてゐたが、急にそこにペタンとなつて、兩手で顔をシッカリ包んで了つた。

舅がウン／＼唸つてゐるのに氣がついて、銀二郎は次の間の寝床へ抱へて行つた。母屋へはめつたに牧夫たちを通さないことにしてあつたから、誰もそこで[illegible]。銀二郎の潔癖については[illegible]離す場合もあるが、彼は、舅に[illegible]自分の體ながら切つて捨てたいほどの氣がして、床の上に寢かすと、まるで[illegible]だらけなものを[illegible]たあとのやうに、思はず兩手を打ち合せたり、胸のあたりを拂つたりした。着てゐたものを取り更へ、體を洗はなければ、と思ふ一念に夢中になつて了つて、[illegible]る餘裕もなく、銀二郎はさつさと部屋へ歸つて行つて了つた。

その日女主人は、一日陰鬱な顔をして壁の前に[illegible]自分[illegible]、あの時人の氣勢で目を覺ましたと思つたのがやッ張りさう[illegible]、夢のなか[illegible]やうに思はれるほど不思議だつた。然し親を打[illegible]、後悔[illegible]幾度も打ちたいと思つたこともあるし、それ以上、もつとヒドいことを考へたこともあるので、別段初めてしたことのやうな、新しい氣はしなかつた。不思議に[illegible]こと を、なんであんなにまでしたらうと、それは自分

でもどうしても解らなかつた。けれども、彼女を陰鬱にしてゐたのはそのことではなくつて、これまで自分のつもりでは、女神のやうに、また慈母のやうに、高い所から臨んでゐた牧夫たちの一人に、から云ふ淺間しい自分を見せて了つたと云ふ點にあつた。目下の者に弱點を握られると云ふことほど、誇りが苛立たしくも踏み躙られることはない。彼女は、ひと思ひに銀二郎を解雇して了はうかと思つた。然し、その腹いせに町へでも行つて、あることないこと云ひふらされてはつまらないとも考へた。

「尤もあの男に限つては、そんなこと、よもやしやアしまいけれど……」

　十何人ゐる牧夫たちのなかで、銀二郎は、誰にでもすぐ目につくほど、一風變つた男だつた。幅が五分ぐらゐありさうな太い眉と、三白目と謂はれる、瞳が上へ吊るし上つた陰氣な目付と、顴顬で縊れた長い輪廓と、禿上つた廣い額の、骨相の方から云つて由ありげな凸凹などが、既に、牧夫に似つかはしい容貌ではなかつた。着る物は普通の牧夫らしく貧しくはあつたが、どことなく身綺麗にしてゐた。なみより少し高い丈を心持猫背にしてスタ〳〵歩いてゐる所などは、學者か何かのやうな風情があつた。人の言葉を容易に背はない、氣むづかしい性分が、どうも、彼を仲間の者に打ち解けさせなかつた。明かに中年からの牧夫で、この牧場へ來てからまだ丸二年にしかならなかつたが、前の半生に就いては、仲間の誰にも、ひと言も話したことがなかつた。爲替の組方やその料金に詳しかつたり、古いボン〳〵時計が毀れた時に、自信を以てそれを繕つたりしたことから、薄氣味惡く氣がおける裡に、どこかえらさうに思はれ、畏れられてもゐた。年は四十くらゐだつたが、然し、實際よりは少し老けて見える方らしく思はれる節もあつた。

　この牧場へ雇はれるとすぐから、彼が他の者とは一種特異な人間であることを示すやうな、種々な話の種を次々に蒔いた。——こゝで一番古顔の、一番年嵩な房州は、いつも仲間を複數で呼んでゐた。差し向ひの時に「おめえら」と云はれると、自分だけを高い所に置いて、はたの者は十把一紮に安く踏まれてゐるやうな氣がして、誰しもいゝ氣持はしなかつたが、さうかと云つて、別に抗議を申し込んだ者もなかつた。所がこの銀二郎は、來るとすぐ、「それだけはよしてくれ」と云つた。ちよつとした云ひ合ひの末に、年寄が笑つて折れた。それでも永年の癖で、その後もチョイ〳〵「おめえら」が出たが、さう呼ばれたのでは、銀二郎だけは決して返事をしなかつた。その次に仲間を驚かしたのは、彼の小さな荷物のなかから、茶碗や箸箱や、汚く剝げちよろけた汁椀まで出て來たことだつた。それを彼は自分で、必ずはたのとは區別して洗つた。更に、彼を愈々「變人」として仲間に通らせるやうにしたことが起つた。或る日彼の留守に、房州が、惡氣も何もなく、たゞ手近にあつたので、なんの氣も付かずに彼の茶碗で飯を食つてゐる所へ、銀二郎がヒョックリ歸つて來た。で、房州爺はポカ〳〵三つ四つ喰はされたのだが、それはから云ふ輩のことで、別段驚くほどのことでもなかつたけれど、茶碗が紐で吊るされて、七日の間井戸の底に漬つきりにしてあつたのは、後々までの語り草になつた。——彼の潔癖に關するこれに類した話は澤山あるが、それは省いて、「癇性病の穢いもの知らず」の諺に洩れず、彼も、よく辛抱できると思はれるやうな穢いことを、平氣でゐる時もあることと、前に述べた例のやうな、形の上のことばかりでなく、高慢ぶるとか、故もなく人に意地惡くするとか云ふ、心の上の不潔に對しても、同樣の手厳しさと、同樣の[illegible]とを兼ね備へて

ゐたことを附け加へて置くに止めよう。
　かう云ふ銀二郎の特性は、夙くから女主人の心を惹いてゐたが、大勢の人々を統御して行く位置にゐる者が感じる「公平」と云ふ考に喰ひ止められて、日常の仕事などには、特に彼を重用すると云ふやうなことを避けてゐた。そのうへ彼も、牧夫の仕事に特に興味をもつてゐるわけはなく、骨惜みをしないと云ふだけの話で、拔群の勤勉を抽でたと云ふほどのこともなかつた。たゞ女主人の心のなかで「あれは並の牧夫ぢやアない」と云ふ心持として、別ものにされてゐたに過ぎない。それが、今度のやうな場合に、偶々いくらかの意味をもつことになつた。
「あの男のことだから、きつと誰にも喋りはしまいが、兎に角、呼んで話して置かう—」
　食慾のない、まづい晩飯のあとで、女主人はかう決心した。一風變つた性質の男としても、かう云ふ知られない半生をもつた男としても、かう云ふ機會に彼と差し向ひの話をすることは、ちよつとした好奇心でもあつた。普段から心服してゐる奴僕の一人として、彼女の意思には絶對に從順なものと豫期してゐたから、いざ呼びつけて話すとなると、先刻までなぜあんなに屈託してゐたか不思議に思はれるほど、ゆつたりした優越を感じるやうになつた。
　銀二郎は、大工や植木屋の親方が、高位の人の縁先へでも呼びつけられた時のやうに、小腰を屈めて恐る〱はいつて來た。それは、馬小屋の前や牧草の野などで彼等が女主人に對する態度ではなかつた。どうやら、彼は、唯一人母屋へ呼び出されたと云ふ稀有な出來事で、不安にされてゐるらしかつた。それを見ると女主人は一層安易な心持になつて、とるべき態度が確定したやうに感じた。
「……何ね、私は今朝のことでひと言お前に禮を云ひたいと思つて、それで呼んだんだがね、ほんとにお前がいゝ所へ來てくれて、私は喜んでゐるんだよ」女主人はこんな風に始めた。「思ひ出すと夢のやうで、どうしてまア、あんな、……ほんとにお前には、とんだ恥しい所を見せちまつたがね、實は、——こりや、こゝきりの話にしておくれよ」と云つて、舅がいつの間にか枕頭に來て酒を飲んでゐたことから話した。
「——お父ッさん、お前まア何をするんだよ、つてね、私も吃驚して止めたんだけれどね、まるでもう夢中さ。徳利から喇叭だらう。仕様がないから、私が取り上げて了はうとするとね、まアあんな病人だけれど、飲みたい〱の一心だね、それは貴方でね……」こゝで彼女は晴やかに笑つた。「さうなりやア、もう[illegible]より仕方がないから、ついまアねえ。……それにね、私は寢起きと來てゐるだらう。いやな、腹の立つ夢をみてゐて、ヒヨイと目をあくとそれだらう……なんだか、半分はわけも分らずでね、……お父ツさんもお氣の毒にさ。ほんとにお前が來てくれなかつたら、私は何をしてゐたか分らなかつたくらゐなんだよ——」
　女主人は、習慣的に樂々と嘘のつける性癖をもつてゐなかつた。順調だつた、從來の彼女の生活からは、それは殆ど不用だつた。然し、一旦必要に迫られゝば、女の細心や圖太さを言葉の誇張に託して、殆ど止めどがなかつた。話の杜絶に湧いて來るべき不安が、あとを〱と押し出してよこした。醉つたやうな亢奮が、彼女の耳朶を赤くしてゐた。——面倒臭さうに、云つても云はないでもいゝことのやうな調子で、嘘がつけるやうになるまでには、相應の修行が要る。
　銀二郎は、「へエ〱」と無愛想な返事をしながら、相手の方へは一度も視線を向けずに、むッと聽いてゐた——彼は悲しい心になつてゐた。若い日の自分を思ひ出す時に感じるやうな、惡

いことも憎めない、いゝことも嬉しくない、たゞ何もかも懷しく悲しい、いゝもの柔かな心になつてゐた。彼には、面倒臭さうな顏をして、云はないでもいゝ嘘を云つた昔もあつた。澤山嘘をついて、澤山嘘をつかれて、それから自分の嘘をやめた時に、彼の耳の穴は、恰もそこに括約筋が出來たやうに、或は暗箱のしぼりと云ふ機械を取り付けたやうに、大きくも小さくも、自在に締めたり緩めたりすることが出來るやうになつてゐた。嘘は、眞實の周に柔く塗りつけられた嘘は、彼の耳のいゝしぼり機械に會ふと、そのなかから眞實だけが手繰込まれるに從つて、綺麗に、いゝこき落されて了つて、耳の外部に殘つた。彼の生來の潔癖は、このこき落された滓で、外側にもせよ、耳が穢されるのに堪へられなかつた。その滓を摑み取つて、グチャリと相手の顏へ叩きつけることが、當然の返報だと思つてゐた。然し誰でもが、その顏へ叩きつけられた汚物を、自分から出たものだとは、容易に肯はなかつた。そのために銀二郎は、都會から町に追はれた、町から村へ——村から、たうとう山のなかへ、までも……。

けれどもこゝには、神經過敏な彼の耳の括約筋をすら鈍らせて了ふやうな、のべつな、どんな馬鹿の耳にもそのまゝではいらないやうな嘘があつた。それは、永い冬を幾つとなく越して來た房州の慰みだつた。さうして同時にそれは、仲間の牧夫たちの慰みにもなつてゐたが……。

一さうよ、なんでも俺がこけえ來た草鞋さぬいだ年だアから、もう……さうよ、四五十年も前のこつたなア。なアんともハ、えれえ雪さ降つた揚句だつけ。越年のうちイくたばつた鹿の死骸ちふもんがな、なアんと濱ぢう埋めてけつから。いま山サの番屋建つてるな、あすけえら足の踏みどもねえ、ま、たアもかアも鹿の死骸の下さへえつてな、あんだけある玫瑰の木が、なアんと、一本なし、見えやしねえもんだつけさア……—

それは、亡つた旦那の片身だと云ふカーキー色のキロットの上に、綿の這入つた半纏を着た汚い爺の齒の拔けた口を通して、退屈し切つた、馬鹿けた「冬」が、即興の詩を唄つてゐるやうなものだつた。周りのものが、

「冗談ぢやアねえ、いゝかげんにしとけよオ—などと云ふのは、その詩をもつと面白く、もつと永びかせるための合唱に外ならなかつた。合唱隊に、鹿の死骸で岡が築かれるところまでも即けて行く氣だつた。

さすがの銀二郎も、これにはピントをはづして、いゝ、しぼりを緩めて了つた。それでも矢ッ張り、彼はこの爺が好きにはなれなかつた。ヒドく無性で、どこか滑稽てみせるやうな動作からして氣に喰はなかつた。

そこで、女主人の話をぢツと聽いてゐた銀二郎は、久し振りで耳の括約筋を緊張させたわけだつた。そこには、少なからぬ滓が殘つた。

女主人が男に辛く當るやうになつたと云ふ事實は、いかに彼等が母屋への出入を制限されてゐたとは云へ、永い冬の間でも退屈しない銀二郎の目や耳からは、全く遁れてゐたことではなかつた。然しそのことを、彼は、大して惡いとも感じなかつたばかりでなく、女主人にとつては、無理のないことだと思つてゐた。それはただ、彼が女主人を好いてゐたからで、生きながらの死骸であるやうな、恐らく非常に不潔な男に對しては、好きも嫌ひもないが、思つたばかりで身震ひが出さうだつたからだ。隨つて先刻も、體を洗つて着物を取り更へたあとでも、あの事の故に、——子が親を打つたと云ふ理由だけから、女主人を責める心持には、少しもならなかつた。きつと男が、惡いのだらうと、思

つた。余ッ程腹でも立てさせられなければ、誰だつて、あゝ云ふ氣味の惡い體の上に乘しかゝつたり、叩いたりする氣になれるものぢやない。若しチュウッと水でも走つたら……オヽたまらないたまらない。銀二郎はもうそれからさき考へる氣がしないので、また無理に考へるほどの興味もないので、母屋からの使が來た時までで、そのまゝ忘れてゐた――。

「でねえ、お前に限つてそんなことはあるまいとは思ふがね」と最後に女主人が云ひ出した。「どうぞ今朝のことは、お前、誰にも云つておくれでないよ。一度が末代で、始終そんな風にでもしてゐるやうに、兎角惡い方に思ひたがるもんだからね。……私の氣にすりや、あゝ云ふ體になつてまで、そんなにも欲しいものなら、いくらでも飲ませてあげたいけれど、さうかつて、それがもとで急にどうかうつてことでもありやア、矢ッ張り私の落度だからね。決して惡いつもりはなかつたんだけれど、人はさうは思つちやアくれないやね。どうぞ賴むから、これだけは內證にしとくれよ。私だつて、みんなから、鬼のやうなものに思はれるのは、いやだからね……」

「へえ、承知しました。決して誰にも話しやしません」

かうキッパリと答へて銀二郎は立ち上らうとした。戀とは云はないまでも、いくらか敬ふ心持すら含んだ好意を捧げてゐた女主人が、ふとした機會から、これまで度々會つて來た嘘つきの一人であることを知ると、彼は腹を立てるよりも、なんとも云へず悲しくなつて了つた。幻が消えて了つた。

齡と共に生得の潔癖を少しづつ失つて行く質の人もあるが、銀二郎のは、例へば、疊の上に落ちてゐる絲屑一つにもすぐ目を引かれるために、いつまでも彼の目は老いるわけにいかず、ちよつとした嘘にも忽ち括約筋の收縮を感じるために耳も老いるわけにいかないと云ふやうな質だつた。さう云ふ人は、いく度も幻滅を繰り返して、世の中の不潔癖を見盡せば見盡すほど、益々己の性癖に偏つて行つて、またしても賴めない世の中に幻を創らずにはゐられない。目や耳が老いないやうに、心がいつまでも老いない。さう云ふ永久に幼い心は、鋭い目や耳にも拘らず、「幻」のためには、一生涯騙され通さなければならない。――銀二郎がさう云ふ一人だつた。彼がこの二年の間、女主人に着せかけてゐた「幻」が、美しい石鹸玉がはじけるやうに、パッと消えて了つた。もうこの土地に止まつてゐるのも面白くなくなつて了つた……。

「銀二郎、お前どうおしだい。何か私の云つたことが氣に障つたのかい？」と女主人がうしろから呼び止めたほど、彼は不機嫌な、氣むづかしい顏をして立つて行つた。女が男に向つて、自分の弱みを承認して、それを他に洩らさないやうにと賴んだりする時に、利用しようとさへ思へば利用出來ないこともない弱みで、多少とも男があふられるものであることを、或る意識下の本能で感じてゐる女主人には、この結果は稍々意外だつた。

「どうしまして、そんなことは……」

銀二郎は障子のそとに蹲まつて、もう一度頭を下げて、「では、おやすみなさいまし」と、もの靜かに云つた。

急に女主人は、なんとも知れない恥しさを感じて、引き込まれるやうに、「ハイ」と閑雅な返事をした。それが、――荒れ果てた野に落ちた雨のやうな一滴が、ポツリと銀二郎の心に沁みた。

明けても暮れても雪だつた。地平線の腰を撫でて通る、低い太陽が、薄日ながらも在所を見せて、やがて紅々と沈んで行く日はまだ慰められた。女主人は、以前のやうに牛馬の健康状態や、冬の間の牧夫の從業を看るために、小屋や仕事場に顏を見せることが稀になつた。男の世話は女中任せにして了つて、酒と、ウツラウツラした眠りとに耽つてゐた。

牧夫部屋の方も、晩飯のあと、房州が僅かばかり飮む自前の酒にいゝ心持になつて、例の冬の詩を歌ふ時ぐらゐよりほか、賑かな笑ひ聲は聞かれなかつた。なかにも銀二郎は、暗い顏をして、いつも一人を守つてゐた。

牧夫の一人が町の酌婦と駈落をした紛擾で、女主人は一度その料理屋へ出掛けなければならない場合があつた。その時、ふとその女將が氣に入つて、それからは、時々そこへ飮みに行くやうになつた。料理屋と云つた所で、街道に沿つて、庇も圍もなしに露出しに建つてゐる、長屋のやうな賤しい家だつた。手垢と油とで黑光に光つてゐる安鏡が、二つ三つ並べてあるのが、出窓の硝子障子ごしに覗かれるやうな、この地方で驛馬の立繼ぎをするくらゐの田舍町には、きまつて二三軒はある、方言で「曖昧屋」と呼ばれる家の一つだつた。そこのガタ／＼普請の二階で、白粉を塗り立てただらしのない女どもを取卷きに、拙い料理や惡い酒を飮み食ひするのが、それでも、退屈しきつてゐる女主人にとつては、當分、六日と行かずにはゐられないほどの歡樂境になつてゐた。

さう云ふ遊興の一つで、グデン／＼に醉ッぱらつて了つた女主人を乘せて、或る晩銀二郎が橇を御して歸らなければならない機會が生じて來た。・星の美しい空が、眞白に降り鎖された平野の上に、寂として廣がつてゐた。二十何町と云ふ道距の間には、小作人の小屋がポツリポツリ二三軒あるばかりで、夜が更けては全く人通りも杜絶えて了つた。

「馬鹿にするない。ハッハヽヽ」

まるで男のやうな調子でだしぬけに女主人が寢言を云つて、それから、いかにも泥醉者らしくブツ／＼叱言でも云ふやうに呟き始めた。銀二郎は振り返つて見た。亡つた旦那が着た男外套の上から、毛布でまたクル／＼卷きにして置いたのが、いつの間にか踏み脱いで了つて、自墮落に手足を投げ出してゐた。

「旦那、寒ウがすぜ――」

「驚いた。驚いた。おーどーろーい、た」

銀二郎は思はず微笑して、馬を止めて、毛布を着せかけようとして下りて行つた。長い咽を見せて、ガックリと首を後に投げかけてゐる女主人の體は、ヒドく重かつたが、グタ／＼になつてゐる手足を動かすのは、死人を扱ふやうに、どうにでも自由になつた。銀二郎は、女主人の手足を勝手な所へ動してゐる自分を申開きでもするやうに、「風邪を引くといけねえ――」と呟いた。然し、その辯明すら誰も聞いてくれる者はなかつた。廣漠たる雪の原野に消え散つて了つた。仕事は、成し得るよりも永い時間がかゝつた……。

「ウーン」と低く呻いたのは、女主人ではなくて、却つて銀二郎だつた。彼は仕事のなかばで腰を延ばして立ち上つた。彼の三白目は、野に住む獸のやうにギラ／＼と暗のなかに光つた。全身に力を籠めて、眞直に突立つた彼の姿勢には、二つの考の間に迷つてゐる影は少しもなかつた。それは一つの考の上で、次の、――決行の瞬間に移る恐ろしい潛熱に溢れて見えた。

――この土地まで流れて來るまでには、銀二郎は必ずしも潔い行爲ばかりをして來たわけではない。或る淋しい田舍道で、いま女主人があるやうに、どうにでも自由になるのではない、

必死の抵抗のある體に、暴虐な力を加へたこともあつた。その時には、「抵抗」が益々彼を猛惡にした。今は、「不可抵抗」が彼の心を鷲摑みにして放さなかつた。
　再び低い橇の上に、頑丈な銀二郎の體が蹲みかゝつた。
「旦那――」
「驚いた、驚いた。おーどーろーい、た――」
「ハ、ハア、驚いたねえ」
　女主人は薄目をあいて、にこやかに、心から樂しさうに微笑した。白い歯が星あかりにきらきらと耀いた。
　――急に銀二郎は立ち上つて、橇に背を向けて、サク／＼と深い雪に踏み込みながら、眞正面をぢッと見詰めたまゝ、五六間まつすぐに歩いて行つた。そこに停つて、十分ほど突立つてゐた。――彼の心には、獸が血を流して噛み合ふやうな、荒々しい爭が渦を巻いてゐた。
「ウーン」もう一度銀二郎は呻いた。手早く外套を脱ぎ、半纏を脱いで、……見るまに素裸になると、雪のなかを目茶苦茶に轉げ廻つた。全身に堪へられない痛みが感じられだした時まで、ウン／＼唸りながら暴れ廻つてゐた……。
　やがて銀二郎が橇の所へ歸つた時には、女主人は寒さを感じたらしく、頭から毛布にくるまつて、足を縮めて寢てゐた。その快げな鼾を聞きながら、銀二郎は微笑して、直ぐ御者臺に上つた。

　冬は永かつた。
　それだけ雪解は樂しかつた。春と初夏とがひと足違ひにやつて來た。
　女主人の生れ變つたやうに活々とした姿が、あすこでもこゝでも、まるでそれが二つも三つもあるかのやうに、行く先々で見られた。その度に牧夫等の心は樂しく、喜ばしくされた。
　やがて牛や馬が放たれた。思ひ／＼の群が思ひ思ひの所に、丘や小川の岸や若草の野に點々と眺められた。自然は益々美しくなつて行つた。丘の頂に、澄み透つた明るい薄暮の空をクッキリと仕切つて、馬上に反り身になつた女主人の姿が影繪に浮んでゐるのを眺めたりする時には、心ない牧夫たちも、主人と云ふ意味からばかりではなく、素朴な尊敬に充ちた目をあげて、自分たちの位置が十分幸福であると云ふやうな滿足に醉つた。丘の高みからは、量の豐な、太い、然し男性の聲帶には與へられてゐない或る魅力を有つた聲で、彼女が、愛犬の五郎を呼ぶのが、草の葉の戰きに乘つて流れて來た。
　銀二郎は、永い一日の日光に膨れ上つた體を掻きよせながら、その日の天氣のやうに上機嫌で、「ごらう、ごらう」と、女主人の呼び聲を、低聲で眞似てみた。
　不意に彼の傍を、音とも何ともつかないものが矢のやうに飛び過ぎて行つた。
「ごらう、ごらう」
　英語の“Hallo！”と云ふのに似た音で、一目散に駈けつける犬を、尚その上にも急きたてるやうな女主人の聲が續いた。銀二郎は丘の頂を見た。――彼の心が、體を棒に延ばして草のなかを飛んで行く五郎のやうに、女主人の方へ吸ひつけられて行くのを感じた。彫像のやうにぢッと立つてゐた馬上の姿がふいと消えた。――そこに、薄白く空を切りぬいて、彼女の影が殘つた。
「ごらう、ごらう」とまた口眞似をしながら、彼は仕事の手を動かし始めた。缺けるところのない幸福が彼の心を浸した。
　最初の幻滅の後に、夏が、女主人を生氣と敏捷と逞しさとに美しく飾つた夏が、いつ

が銀二郎の心を、前年よりも深い愛に誘ひ込んで行つた。時には悩ましい思ひにまで導かれた——。

夏が過ぎて行つた。もうやがて冬が來ると云ふ頃の或る日、牧場では、母屋から廊下傳ひに行かれる小さな隠居所の落成祝ひがあつた。舅にそこで冬を過させようと云ふのだつた。例によつて牧夫部屋にも酒肴が運ばれた。また永い憂鬱な冬が來るんだ、今晩は一つ大にやツつけろ、と云ふやうな心持で、牧夫たちは飲み食ひに飽きることを知らなかつた。ランプの數をふやしたので、いつもの汚い牧夫部屋も、いくらか宴席らしく見えた。

銀二郎だけが、また自分を別ものにしてゐた。酒も少しでやめて了つて、面白くなささうな顔をして隅の方に引つ込んでゐた。彼には牧夫部屋よりも大して上等ではない、六疊一間の隠居所が、母屋のもとの病室よりは決してよくなつたとは思へなかつた。却つてそこの方が寒さうだつた。——それは彼にはどうでもいゝことゝしても、それの新築を祝ふための酒に浮び浮れてゐる仲間と一緒になつて、面白さうに騒ぐ氣にはなれなかつた。

女主人が町からの客をつれて、少し醉つてはいつて來た。

「旦那、この度はどうも……」などと、房州が、自分で、一同の代表者を以て任じて、御目出たらしい祝ひを述べた。

「……いゝえね、もつといくらでもよくして上げたいんだけれどもね」女主人は一體四方もある爐傍に座を占めて、房州の酌を受けてから云つた。

「どう致して、仲々出来ないこつてす」と町からの客が、女主人の志を賞揚した。

「これが、生みの親ならまた何んですが……。いや全く美談です。御隠居もなんでせう、さぞ御満悦でせう」

「いゝえ、そんなに御賞められるとお恥しいんですがね、私も、こゝの母親は知りませんし、良人に死なれましてからは、まア二人分勤める氣で、永い間随分、これで、出来ますだけは盡して參つたつもりですよ」

「そりやアもう全くで……」と房州が、保證人が判を捺すやうな調子で云つた。

「それにあゝ云ふ體ですからね……」

「さやう／＼、もう何年になりますかなア」

「何年つて、もう永いことですよ。下の世話ばかりは、他人の手には掛けられませずね、随分そりや、種々汚したりしましてね」

「今度は、すぐにはばかりはお近くにつきましたし、ヤア何しろ、から云ふお嫁さんをお貰ひなすつたのが、こちらの御隠居のお仕合せでさア」

「私もまア永年考へてゐましたことが、やつと志だけでも届きまして、これだけして死んで貰へば、もう心殘りはありません」

「さやう／＼、あれで隠居費りましたらうな、木口も仲々上等でさア」

「いくらつてほどでもありませんが、それでも矢ッ張りね、疊建具なんだかんだで、存外要りましたよ」

牧夫たちは鳴りを鎮めて、ボッと聞き惚れてゐた。自分たちの女主人を、昔の聖者のやうに、けだかい、立派なものに思つて、その有難い言葉のひと言でも聞き逃すまいとして、膝を乗りだして來る者もあり、何か感激に堪へないやうな顔で、言葉を私語き合ふ者もあつた。

突然、銀二郎がそこへ突立つた。彼の三白目は一層うは吊つて、蛇のやうに唾をなしながら、眞正面に女主人を睨め据ゑてゐた。その瞬間、一人も残らず口を利く氣を失つた人のやうにされた。

「こいつは大噓つきだ！　我慢のならねえ、貫

の悪い嘘をつく女だ！　殺しても足りねえほど穢らしい女郎だ！」
　銀二郎はから畳みかけて、壓し潰したやうな嗄れ聲で云つた。——「穢ねえ自分を、綺麗なもんに見せかけようとする嘘ほど、鼻持のならねえもなアねえ！　よしんば、あの水膨を締め殺さうと俺の知つたことぢやアねえ、俺アなんとも思やしねえ。だが、手前の、その、善人面ア我慢がならねえんだ。……オイ、房州、こいつに比べりやア、手前は一生嘘をついた覺がねえと云つたつていゝくれえのもんだよ……。ヤイ、嘘つき女！　どうしてくれらな……」
　その時銀二郎は、實際、己の身内に熖々と燃え上つて來るものを、どう處置したものか解らなかつた。この女を殺せばそれは鎭まる。しかし……！
　水が、渇いた者の想ふものであるやうに、鍊へられた鐵の、冷たい光が、何よりもいま彼の心を惹きつけるものだつた。——彼はツカ／＼と土間におりて行つた。そこに鋭利な鉈があつた。女主人を切る代りに、——自分の左の腕を薪割臺の上へ載せかけて置いて、力一杯に鉈を振り下ろした。
「ヤイ、これを手前にやらア」
　血の滴る片腕が飛んで來て、色を失つてゐる女主人の目の前に、ドサリ、と横たはつた。

　それツきり銀二郎は、どこへ行つて了つたのか、皆くれ行方が知れなかつた。女主人が彼の片腕を、どう云ふ風に受け取つたか、銀二郎はそれに就いて、全く無關係なものゝやうに、交通機關の不備なこの地方では、囚徒でさへさうは出來ないほど、完全に姿を隱して了つた。彼自身さへ聞き知らうとしないその結果を、他人の私としては、たゞ一應の好奇心にのせられることも憚られたので、たうとうそれは尋ねずに了つた、——七日の間井戸のなかに吊るされてあつた例の茶碗は、その後房州が、わがもの顏に使つてゐると云ふ後日話は聞いたが。

（大正六年一月作）

幼壯老の死

二階全體が三十度ほど傾き、壁が降りかゝり、頭上にいきなり蒼空を仰いだが、それほど恐しいとも思はなかつた。一日二日あたりの餘震の方が可怕かつた。とても屋根の下にゐる氣になれなかつた。それが一日々々と、馴れては平氣になつて來た。——あたり前の順序であらう。この三つの時期のうち、勿論第二期でやられるのが一番たまらない。これを一生に引き移すと、第一期はもの心のつかない幼時で、そこへ來る死は、怖しいには違ひないが、そんなに殘忍なやつではない。第三期の老年の死も、今日このごろの實感からいつて、さして恐しいことはなさうだ。青年、壯年の「死」こそは、鬼面人を脅すものでなければならない。

（『白醉亭漫記』より）

善心惡心

てきぱきしない呂造の性分では、種々な對象との間に結ばれた困つた關係が、根を斷たれないで、いつまでも、ぐづり／＼尾を引いて殘つた。さう云ふ幾條かの尾に纏はられて、彼の生活が次第に息苦しく、甚だしく活氣を失つて來た。彼にはそれを可なり切實に感じることは出來た。悶搔いて、そこから浮び上らうと希ふ心も決して弱くはなかつた。唯それを實行に持ち來す意力の點になると、彼は全くだらしがなかつた。こゝに問題は元に還る、——呂造は若いに似合はない、誠にてきぱきしない、齒切れの惡い青年である……。

二十五歳の春、彼は、今度こそいよ／＼今までの生活からすッぽり蟬脫して了はうと計畫した。第一に始末をつけなければならないのは、或る年上の女との關係だつた。それは案外にも容易く成就されたが、その顚末は茲には省く。次には、もう一人の年上の女、お京との關係だつた。

ところで、彼には、「俺はもうお前がいやになつた——と、女に面と向つて云ふだけの勇氣は未、さう考へる勇氣さへもなかつた、——からして、さうは考へなかつた。

相手が自分に對して好意を有つてゐると考へられる間は、誰に限らず、こつちからその人に對して惡意を抱くことの出來憎いのが、彼の性分の一つだつた。而も、その女とは、兎も角も三年越しの關係だつた。そこで、彼がいやで堪らなくなつた「生活」と云ふもの丶なかからは、その女は全く控除されてゐた。實際彼にはその女に對してまだ仲々未練もあつたが、それよりも、自分の方から先に相手が嫌ひになり、隨つてまた、その女から薄情者のやうに思はれ、さう記憶されることの方が更に辛かつた。別れて了つた後までも、女の胸のなかで、懷しい昔の戀人として永く生きてゐたい慾があつた。そこで「生活」を一變すると云ふ漠然とした考へから發して、女とのこれまでの關係を續けると云ふことが、勢また不可能になると云ふ結論の方へと自分を導いたのだ。然し彼は夢にもさう意識的に工らんだ覺えはない。そんな悖德（?）なことを自分の考へとして考へ得るだけの勇氣があるくらゐなら、もつと手ッ取早く事が運ぶ。自分を悖德漢なりと意識することを恐れる彼は、その恐れてゐると云ふことをも意識に上せないでゐる。（かう云ふ融通の利くあたまを必ずしも狡猾と譏ることは出來ない。——それよりももう少し惡い「怯懦」と呼ぶ方が、もつと適當である。だから、彼は自分を、お目出度いほど善い人間だと思つてゐられた、——決してほじくらうと試みなかつた或る微かな不滿足な心持を除けば。（さうだ。さうして彼は慥かにお目出度いほど善い人間なのだ。——たゞ、大分卑怯なだけで。そしてまた、善い人間には多くの場合、大抵かやうな弱點が伴ふのを常とする。）

この女と、決して再び會はないつもりで別れて來る、歡ばしかるべき日は、實際彼にとつて隨分悲しかつた。房事と飲酒とでヒドく衰弱してゐたあたまは、可なり感傷的に傾いてゐたとは云へ、彼は永い間卓の上に泣き伏して、何年たつたらこの悲しみが忘れられるだらうと思つたりした。イゴイストなる彼は、別れて行く自分を潔くするために、同時にまた善良なる

彼は、女の幸福のために、それまでに女から受け取つた遊興費の二三倍にも當る金を女に贈ることにした。それをもつて女が、ヒドい商賣に繋がれてゐる身の自由を購ふことが出來るだけ多く。

そのために彼はかう云ふ犠牲を拂つた。

四月中旬のある晴れた日だつた。彼は定期預金の證書を懐中して京橋の銀行へ向つた。この預金は、名義上にも事實上にも彼に屬したものではあつたが、彼自身の勞苦とは全く無關係に、親から傳はつた彼の財産の一部であつた。その上、それは實印と共に、堅く母親の保管の下に置かれてあつた。その間、母親の留守中にそつとその證書を取り出し、裏書をして、實印を捺したのだ。

彼は、如何に自ら辯護しても、懐中してゐるものと、「盗品」と云ふ意識とを引き離すことは出來なかつた。鉛のやうな罪の意識に胸はいつぱいになつて、時々體が微かに顫へるのを覺えた。勿論それは決行する前から當然豫想されてゐた筈である、――その苦しみであることは。それにしても、この瞬間の辛さは全く豫想外であつた。

一お出しになるのですな一

出納係の男は彼の顔を見ながら確めた。いま彼の運命の全部が、この年若い、いかつい行員の手に握られてゐると思ふと、彼は忽ち自分の顔から血の氣の引いて行くのが感じられた。

「さうです」と唇を嚙みしめた齒の間から僅かに答へる。暫くして、

一これはと、何んですな、別に行員は事務的の出札口のやうな穴へ顔を差し出して云つた。「これは、いま定期預金が滿期になつて居りますが一

「はア、滿期前だと出せませんのですか」彼はもうそれを證書の儘で返して貰ひたくなる。もうこのうへ恐ろしい時間に堪へきれなくなつて來たのだ。

一いえ、さう云ふことはありませんが、たゞ利子が大變御損ですが、それさへ御承知でしたら、こちらはいつでもよろしいので一

彼は危機が去つたのを覺ると急に圖々しくなつて、ひと思ひに承知の旨を答へて了つた。

ほどなく札の束を握つた時に、彼にはもう犯罪人らしい自棄くそな度胸が据つて、直ぐその足で、女の手へ渡して貰ふ約束になつてゐる友達のうちへ、それを屆けた。一時間ほどの後に、彼は十四五の時分から買ひ集めてゐた錦繪を攫へて、今度は神樂坂の古道具屋の店に現はれた。

そこで、まるで踏みつけられるやうな思ひを我慢しながら、愛着の深い[illegible]を[illegible]に換へた。[illegible]た。彼は、またその上にも、こんな[illegible]金を、女をその周圍の者どもに、殊に彼を[illegible]苦んで苦しめた者どもに[illegible]とする。それで彼れの[illegible]にならぬやうな品を贈つて償ふことを誓ふとして、また以前のやうに、今度は出宅に[illegible]いミルクホールで落ち合つた。[illegible]の一室も自分の手には殘らず、凡ての計畫が[illegible]滞りなく片づいたので、彼の心は今や、落ついてゐた。そして、この大きな犠牲に[illegible]として、彼に二度と再び言葉も交さない、彼の女と、電話で話すだけの自由を、自分自身に許して[illegible]た。そのミルクホールの[illegible]に近い電話口で、友達が呼びだしてくれた女と、何か、この大きな犠牲の[illegible]としては甚だ不十分なことを二分間ほど話し合つて、満足して、電話を切つた。

前からの約束があつて、友達と別れると、その儘すぐ帝國[illegible]へ、そこで[illegible]を見る弟たちと一緒になるために急いだ。或る不愉快な社會劇の幕が明いてゐて、平凡な顔をした時計屋のやうな小役が、彼と同じ名の少年の役を勤めてゐる。この少年に何か惡い遺傳が現はれて來るらしい場が演じられてゐた。

「昌造さん、あなたまア……」甲高な女優の聲が響く。――その一時種々な、色の濃い刺激に惱まされた彼の神經は、哀に痩せ細つてゐた。丁度聲がはりの時期にある畸形兒のやうな少年が、頻りに昌造々々と呼ばれるたびに、彼は腹も立たないで、擽つたいやうな、泣き出したいやうな氣持になつて了つた。やがて、時間を見計らつて家の者に別れを告げると、すぐ新橋の停車場へ行き、そこから彼は、逃げるやうに京都への旅に上つた。

夜汽車のなかの昌造を外的に寫し出すならば、それは悔恨と不安とに身の置き所もなく惱んでゐる青年の、立派な、然しどこか空虚な肖像畫が出來上つて行くだらう。彼は非常な速さで走つてゐる汽車のなかにゐて、而も刻々追ひ縋つて來るものがあるやうに感じた。ふと、殺人犯が高飛びをする場合の心理が思はれる。母親の用簞笥に鍵を差し込む時の、戰く胸の恐ろしい瞬間を思ひ出す。彼は頭を振つて、立ち上つて、食堂車へ酒を飲みに行く――その酒が醒めて行く時分にまた飲む。――から云ふ風に書いて來ると、然し、その次に來るべき、「たうとう彼は、京都迄汽車で目を瞑まずまで、なんにも知らずにぐつすりと深い眠に就いた」と云ふ本當の記述が、前半と互にその效果を喰ひ合ふやうな形を免れなくなる。然し茲で作者が出會はなければならないこの矛盾は、そのまゝ作中の主人公の方へ轉嫁して差し支へない。彼は體中の筋肉を搾り上げながら心で叫ぶ。――あゝ俺もたうとう泥棒だ！」と。さうして肚のなかで何か呻きながら杯の酒をガブリとあふる。然し次の三分が經たないうちに、彼は今度は冷かな笑ひを浮べる。「不安と悔恨が、[illegible]り！」そして酒飲みらしい手つきで唇へ持つて行つた杯をちよつと嘗めて味ふ。「お前が今日一日に仕遂げたことを、何故杯を擧げて祝ふ氣になつてはいけないんだ！　お前は何か惡いことでもしたのか？」更にまた次の三分が經たないうちに、「いくら自ら欺かうとしたつて、良心の聲に耳を塞ぐことは出來ない……」――かくのごとくにして、決局どつちが本當の自分の心なのだか、決して彼には解らなかつた。解らうとして、深く追究しようともしなかつた。作者も強ひてその孰れにも與しない。「彼は煩悶する」「彼は安眠する」――小説的效果を互に相殺するこの二つの事實も、そのまゝ事實として生きるより仕方がない。　既にこの小説の冒頭にも云つた通り、彼は少し卑怯なだけで、慥かに善い人間で、正直であるから。さうして、さう云ふ型の人間は、二つの全く矛盾した思想や感情に支配されることに馴れてゐるから。

京都には全く違つた春が彼を待つてゐた。着いた日の晩、彼と友達の佐々とが工事中の四條大橋の竹矢來について、御影石の破片が澤山落ち散つてゐる泥濘に惱みながら、假橋の方へ曲らうとした時に、大學の制服を着た市村が突然うしろから「オーイ、昌坊主」と聲をかけた。痩せてヒヨロヒヨロとした體が、ダブダブな、薄い夏服のなかでピエロオのやうに氣輕で、滑稽で、放埓に見えた。その「印象」と、[illegible]で久振りの友達に會つた喜びとで、昌造は急にウキウキして來た。京都に住んでゐる市村は彼等をお茶屋へ案内すると云つて自[illegible]にはいる。昌造は遊びの興を徐々に豫想しながら、[illegible]の椅子に凭りかゝつて待つてゐた。

ほどなく彼等が銘々の間に[illegible]た。それと調和するにはみんな痩せて見すぼらし過ぎたから、やゝ[illegible]茶がかつた庭に面した座敷に、[illegible]頬をして、髮の[illegible]

とした装の娘が、何か叫びながら飛び込んで來た。これが、昌造が初めて見る舞妓だつた。頬を思ひ切り臙脂で染めて、眉を煩雑に紅で引いた顔の拵りは、遠くから見るによい都踊のこしらへで、髪も同様、たゞ衣裳だけが近くで見るによい自分の襟かけの着物に變つた所から起る不調和であることも聞かされたが、當分の間、どうも彼には美しく見えなかつた。すゞ、やゝ小ぶりで同じものがその隣に來て坐つた。

　その晩彼等はそこの二階で雑魚寝をした。その時分には、舞妓の言葉がいくらか昌造にも通じるやうになつたが、彼は故ら選んで市村と同じ布團のなかに寝た。夜中に彼は何かヒドく堅いもので頭を打たれて目を覺ました。佐々が獨でクックと云つて笑つてゐる。丁度目を覺ましてゐた彼の話で、初め市村も昌造も自分たちの枕を外してゐたが、そのうち昌造は自分のでなく、市村の枕をして了つた。すると暫くして、市村も枕をしようとして、いきなり昌造の頭へイヤと云ふほど自分の頭をぶつけたのだと云ふことがわかる。一部始終を見てゐた佐々の可笑しさが思ひやられて、彼等も痛い頭を摩りながら長い間笑つた。床の上に延び上つて、ほの暗い行燈の火影に舞妓の寝姿を眺めて「相手があゝ云ふ虚弱な破れものでなくつてよかつた」など云つてまた笑つた。

　その翌々晩くらゐには、昌造はもうすツかり舞妓好きになつてゐた。唐木の机を前にして彼等は纏まりのないことを話す。寧ろ舞妓たちの話してゐるのを傍聞きする。サイダアのコップのなかを箸でくる／＼掻き廻してから、玉蟲色に光る小さな脣へ持つて行くのを眺める。中で年かさの勝彌が、生意氣にコップ酒など飲んでトロンとなつて、獨り喋つてゐた。その容子に、才はじけた一奴が何か適評をした。小さな醉ツぱらひが聞き咎めて、一人前らしく、グッと開き直つて、

「一奴はん、あんたあてをあなづつとゐるえなあ―その―あなづつとゐる―の邊で呂律が廻り切れなくなる。

「へえ、あなづつてます―一奴は平然として受ける。昌造は何んとも云へず嬉しくなつて了ふ。――そとには春雨がシト／＼と降つてゐた。

　翌る朝、雑魚寝の布團の上に市村が起き上つて、宿醉の脂ぎつた蒼白い顔をして、生欠伸を嚙みながら、帶ひろ裸になつて了つた前をかい合せてゐた。

「まアま、市村はん情があること―この一奴の言葉に、市村はこいつと云つて立つて捕へに行く眞似をして見せた。彼の隣には、またもの心もつかないほどの少さな子か、目をあけてスヤ／＼眠つてゐる。

　或晩昌造はヒドく醉つて、どうして寝たかも覺えなかつた。ふと目をあくと、雨戸をたてない部屋のなかに、紫色の美しい曉が靜かに立ち迷つてゐた。寝返りを打つて見ると、一つ布團のなかで、思ひがけなくおそめが寝てゐた。この悧口な舞妓に、いつからともなく昌造の心は惹かれてゐた。彼は自分の酒臭い息を恥ぢる。おそめの寝顔をつく／＼眺めてゐるうちに、いつかそつと小さな掌を握る。それは案外にもさう柔ではなかつた。さうしてゐても仲仲目を醒しさうもないので段々にチッと力を入れる。だしぬけに、ふと、涙ぐましいやうな戀心が起る。若しや、寝てゐると思つたおそめの方からも、そつと握り返しはしないだらうか、極く微かにでも。さう思つて掌に神經を集注して待つてゐたが、どんな微かな手答もなかつた。彼は悲しく、泣きだしたくなる。……

　活動寫眞小屋の椅子に、おそめと小龍とを彼等の間に腰かけさせてゐた時には、たうとう

昌造も市村もすツかり勞れ切つて、感傷的になつてゐた。この五六日殆ど晝も夜もぶツつゞけに一緒にゐて、都踊の花道と見物席とでも、目と目で笑ひ合ふくらゐまでに心やすくなつて了つた可愛らしい舞妓たちが、まるで彼等のもの悲しい心とは沒交渉に、時々何か面白さうに私語き合ひながら、一生懸命活動寫眞ばかり見てゐる。それは當然のことで、それ以上可愛らしいことで、而も彼等の心を苦しめた。それならば、どうすれば滿足するかと云ふに、それは彼等にも解らなかつたが、たゞなんとなくそれでは物足らなかつた。

そこを出てから、みんなに別れて、彼等は久振りで自分たちばかりになつた。まるで憑ものが落ちたやうにポカンとして、何故かお互ひ同士でうら恥しいやうな氣持もする。俄にウカウカと遊び過ぎて了つたことが、取り返しのつかないことのやうに、他愛もなく心苦しくなる。惡戯をして、先生の叱言が目の前に迫つてゐる小學校の生徒のやうに、肚の底からたよりない氣がする。二人とも默つて、薄ら寒く曇つた夕方の町をぶら〳〵歩いた。

「あゝあ」思はず一人が洩した溜息で、相手も噴飯して了ふ、この場合、それがこの上もなく適切な言葉のやうに、同感されたので。そのまゝまた默つて歩く。銘々種々なことを、反芻動物の食物のやうに、一つ〳〵丁寧に味ひ反してみながら。

彼等の十分でもない小遣は、「男性のgallantry(婦人に慇懃なること)」と云ふ、この遊蕩の間に新らしく出來た、冗談とも本氣ともつかない箴言が繰り返される度ごとに、小間物屋の帳場などへまでも滑つて行つて了つた。昌造は黑谷に住んでゐた友達から歸りの旅費を借りて來たが、市村はまるで豫算が狂つて了つた財布を持つて、それから暫くの間下宿の二階に立て籠るにしては、餘りに「男性のgallantry」が發達し過ぎて了つた。たうとう彼は、もう目の前に迫つてゐる試驗も顧ずに、昌造と一緒に東京へ歸ることにした。それでも彼等は、東京へ着いたら一文なしになる覺悟で、先に歸つてゐた佐々に、電報で、金を持つて新橋に出迎へろと云つてやつて置いて、大風な顏をして京都の急行の二等に乘つた。

彼等の話は舞妓遊びで持ち切つた。おそめや一奴やコップ酒を飲んだ滕彌などが、代る〳〵彼等の話題に上り、同時に眼前に髣髴した。全く覺える氣もなしに聞いてゐたつもりの唄の一節などが、どうかしたはずみにヒョイと口に出た。

「羅の輕き袂に通ふなり」云々と云ふその年の都踊の立唄を頻りに繰り返す。

「(どんたくお見舞申します)か」

「(オヤ〳〵お前はどんたくさん)サ。(そこは端近いざまづこれへ)か」

「(然らば通るで御座んせう)だね。(然しゅうべの……)」

「(夜前の)だよ」こんな稽古を始める。

「(づうき〳〵とするであろ)」

「(オホヽ)」

「(アハヽ)」

「(ヨヽイガヨイ)」

「ツヽツヽ、トントロ、ツテツ、トントロ」彼等は夢中になつて同時に聲を合せる。そしてあたりの人に聞かれはしなかつたらうかと見廻して、その當座だけ低聲になる。――まるで京都に浮かされてゐた、そのくせ二人とも、殆ど戀らしい心はもつてもゐずに。

東京に歸つても、市村は自宅へは寄りつかないで、郊外に住む妻帶した友達のうちに泊り込

んでゐたが、五月になつても京都から着て來た綿入を着て、することもなく〳〵ブラ〳〵してゐただけに、京都の餘熱が仲々に冷めなかつた。相變らず男性の三三二てを交へた歌を、膝を手とした掌でピタ〳〵叩きながら、女達の蔭で西洋花を見て翹つたりしてゐた。そこに昌造や作作が誘ひ出しに來た。東京の藝妓を相手に遊んでも、彼等はどこかに京都の舞妓の誰かとの似寄りを見つけ出して、一和製のおそめはん一などと呼んだり、京都で覺えて來た一でえんこ〳〵、識の隣に鬼がゐる」と云ふ他愛のない遊戯をしたりして、せめても、一心はかせの薄荷パイプ一（そんな流行言葉も出來た）にしてゐた。

それ程の京都熱も、やがて次第に醒めて行つた。殊に銘々が一人でゐる時には、夢のやうな思出ばかりでは何んのたそくにもならなかつた。中にも昌造は、愛慾に渇いて、陰鬱な心でゐた。それでも有繋に、時々お京らしい女から、知らない名前で掛つて來る電話には、決して出ないでゐるだけの元氣はあつた。

カラッと晴れ渡つた初夏の或る日のこと、彼は俥夫が持つて來たと云ふ一封の手紙を受け取つた。一目見てそれはお京の手蹟だつたが、咄嗟に彼は、それをどう處置してよいものか迷つた。だッて裏切られたと讀んだ。そこにこそ、昌造のうちから餘り遠くない或る四辻まで、兎も角一寸でいゝから出て來てくれ、と書いてあつた。暫く考へてゐたが、矢ッ張り彼は出かけて行つた。咄嗟に、どうにでもなれ、と云ふやうな氣持になつて。そこには、お京が廓にゐた頃使はれてゐた小女が一人で立つてゐた。彼は、ふと、女が物陰にでもゐるのかと思つた。然し、彼等が一寸目禮を交したまゝ、無言で一町ほども行くうちに、お京はどこからか出て來て、二三間あとを歩いてゐた。電車通へ出た時に、追ひついて來て、毎日會つてゐる人にでも云ふやうに、いきなり、

「築地に、一寸變つた料理屋が出來ましたつて、……行つてごらんなさらない。」

かう云ふ場合、相手の意表に出ることを云ふのがお京の慣用手段だつた。彼は、と思ひながら、昌造は暫く女の顏を默つて見詰めてゐた。お京は、金齒を出して、「駄目？」とでも云ふやうにウフヽヽと笑つた。彼も誘ひ込まれて、一寸笑つて、そこへ來た電車に乗つた。

その料理屋の二階で、

「一體どう云ふつもりなんだ」と昌造は、改まつた顏をして云つてみた。そこに酒と料理が來て話が逸れる。暫く默つて了つた。

「一體どう云ふつもりで態々呼び出したのだ」

昌造はもう一度繰り返した。

「どうつて……妾に何もないのに、目に入れたものを故意とらしく云はれては困るわ。」

「これからだつて、いゝぢやないか。」それぢや濟まないんですよ。脇道にそれない、きつとよ、彼女は小女の方へ向いて云つた。

一吃驚するもしないも、まだ何も行くともなんとも云つてやしないぢやないか一

この返事で、お京のうちへ行くことが、略ぼきまつたことになつて了つた。それから醉つた體が電車に搖られる。淺草のゴミ〳〵した街の古道具屋の店先から二階へ上る。お京の母親がゐて、初對面の挨拶をする。酒が出て更に醉ふ。母親と小女とがいつの間にかゐなくなる。暫くして昌造は、便所のない、狹いばかりのなかで、前後にフラ〳〵しながら、戰慄から云ふかいゝつもりだね。……と云ふ位なら、矢ッ張りかうなるつもりか。フンと、自分で自分を嘲つてゐた。世の中と云ふものはみんな馬鹿げた、くだらないことで埋まつてゐる。俺ばかりでもアない。——こんな心持が、今まで見聞きした樣な話の雜事でつまつてゐるのが、いま一隅から湧

き出て來た。そのはきだめのやうな一隅には、……（書肆の注意により以下約百三十字削除）……その他茲に書くことが許されない様々な醜怪事、――虚飾と獸心とが背合せに貼りつけられてゐる人間の住んでゐるどんな所からでも嗅ぎ出すことの出來る醜惡な繪が、その時彼のあたまのなかで一時に跳梁を極めた。その仲間では、彼のしたことは、――血の出るやうな思ひをして別れた女と、忽ちまたズル／＼に關係して了つたと云ふ、たゞそれだけのことは、ほんの些細な馬鹿げたことだつた。世界には、たゞ一人或は二人の人が知つてゐて、その人たちの死と共になんの痕跡も殘さず消えて了つた恐しい程の醜怪事が山ほどあるに違ひない。呂造に醜怪邪惡を喜ぶ心がふと頭を擡げる時、よく彼はそれを感じる。そして一種憧憬に近い心持で、その永久に知られざる祕密の臭を嗅ぎつけたい慾望に捕へられる。桀紂とか、ティベリウスとか、クレオパトラとか云ふ暴王の話を讀む時、誰でも、多少ともその慾望を感じない人があるだらうか。そこに至ると、呂造はいつも邪惡な祕密の前に頭を下げたくなる。たゞそれが卑近な例として或る時は、彼の頭の一隅にはきだめのやうに汚らしく積まれてゐた。そしてそれを、良心を鈍らす必要のある場合に、丁度死體を葬るかにする時に振りかけるお土砂のやうに、あたまのなかにいつぱいに振り撒いて了ふ。

「いづれは他愛ないもんさね」女の傍に歸つて來た時に呂造はかう云つた。女は顳顬の所を抑へて、疊の上にうつ伏せになつてゐた。

程なくお京は目黒に一軒小さな家をもつた。山の手線の停車場を出て、ジリ／＼と焦きつける陽光を洋傘越しに受けながら、呂造は急な坂を下りた。廓で會つてゐた頃とは全く違つた趣がそこで彼を待つてゐた。北窓の青葉の反射で、無智な女の顏も、時に神經質らしく、蒼白く見えることがある。西日が次の六疊まで差し込んで來るやうな暑い臺所で、丈の長いお京の母親がセッセと夕飯の支度をしてゐる時女がクス／＼笑ひながら何か半紙に包んだものを持つて來て、黙つて呂造の前にさし置いた。昔風な字で「神樣のもの」としてある。あけて見ると、その前の時に呂造が置き忘れて行つた手巾が、綺麗に洗濯されてはいつてゐた。

「いゝうちのおッ母さんてば、貴方のことを、いつでも神樣々々つて云つてるのよ」

呂造は本當に神樣のやうに、心からニコニコして、それを彼に與へてくれた者に感謝したいやうな心持になる、――さう呼ばれてもいゝ何かを。

永い薄暮の時に、彼等は競馬場の高臺の方へ、蜩のトンネルの下を潜つたりに登る。ハンディキャップをつけておいて、埒に沿つて、砂を蹴立てゝ彼等は驅け出す。きめて置いた決勝點まで行かないうちに、女は急に、一緒いやーーと云つて、浴衣の兩袖で顏を隱し、娘のやうなそぶりをした。彼方の茂みの間から十三四の小娘が飛んで來て、續いて、切り下げにした茶の湯の師匠が、遠くから、「まアお京さん」と聲をかけた。彼等は野花を摘んで、歸りには師匠の家で冷いお手前を一服御馳走になる。人通りのない道を、二人は戯れながら、小さな住家へ歸る。……翌る朝、神樣は何んとなく不機嫌に、怒りッぽくなつて坂道を上る。か、さもなければ、更に機嫌の悪い時は、晝頃まで床のなかにゐて、起きるとすぐ酒にした。その間に彼のうちでは、……不愉快に、もつと怒りッぽくなつた彼が、呂造が、女中たちに當り散らした。そして彼の留守にはいつて行つて、亂雜になつた机の上から書きかけの原稿を取り上げて、一二枚讀んでみて、舌鼓を打つて下り

て行つた。

秋が來た。澄み透つた空には、吹き千切られたやうな筋毛を出して美しい雲が流れる、光と雨とを得て、果は熟し葉は落ちる。齢を逐うて書かれてゐた昌造の長い自叙傳は、十四歳の或る日、或る暗い事實にぶつかつてこの方、机の上で埃を浴びてゐた。

或る日昌造は、友達の北島と一緒に、和製の「おそめさん」に會つてゐたが、彼が夢想してゐたほどには、相手が何んとも思つてないことを知つて、ムシヤクシヤして、友達と別れてからお京のところへ廻つた。お京はもう目黒のうちを疊んで、また淺草へ(古巣のある區へ)歸つて、ひとの二階を借りて住むことになつてゐた。

昌造が、路次の溝板を踏んでそこの勝手口へ廻ると、丁度そこにゐたお京は、一寸狼狽へた色を見せたが、すぐ決心したやうに先に立つて二階へ上つた。六疊の部屋中いつぱいに物が取り散らされてゐる。そのなかで男が古新聞で瀬戸物を包んでゐた。お京は突立つたまゝ、

「もうこゝも落城...明け渡し」

「さうして?」

「叔父さんの所へ轉げ込むの。...いゝえ、それは別よ」さう云つて道具屋の手から、當に昌造が描いて與へた樂焼の菓子皿を取り戻して、うつ伏に臉に當てがつて、何、これしきの悲運に!と云ふ風に微笑んだ。...「神樣さんは婆や奉公」

「一家散亂だね」昌造は冷かに云つた。前に別れる時にはあれだけのことをした。もう今度は俺の知つたことぢやない。と云ふ心持で、

——「俺の三味線は?」

「賣つちまつた」

道具屋がへゝラ笑ひをして昌造の顔を見上げた。そこへ、つい近所にゐるお京の叔父の娘が荷物を運びに來て、昌造を見て、羞恥んですぐ下りて行かうとした。女は呼び止めて、挨拶をさせてから、何か二品三品持たせてやる。その晩彼等は、黄色い薔薇のやうな顔色をした内氣な娘をつれて外で食事をして歸つてから、何一つないガランとした明き屋のやうな六疊で、明る過ぎる電燈の下でねる。寝ながら昌造は、先刻仲見世で半襟を買つてやつた娘の、日本人に獨特な、黄色い薔薇の花のやうな、わりに光澤のない、細かなきめの皮膚を思ふ。——蠅が一疋、寝靜まつた夜に、甲蟲ほどの羽音をブンブン云はせながら、彼等の蓐はな邊に來てはとまつた。

翌日二人、體と寝道具だけをお京の叔父の家へ移した。そこは六疊と四疊半二間きりの平家だつた。四疊の方には、上さんの内職の半襟を縫ふミシンもあり長火鉢もある。そこに叔父夫婦と娘とお京親子とが、昌造を上座に据ゑてキッシリつまつて別れの宴を張つた。お京の母親の兄に當る叔父は、風采に要求されるまゝに、いかさま賣卜者然と蓄へた山羊髯を撫でながら、松茸の土瓶蒸しの通を云ふ。さうして自からその料理を用意する。杯がそれからそれへ廻つた。

……どうぞ今後とも末永く面倒を見てやつて下さい。いゝえ、これだつて」と自分の妹を指して叔父は續けた。「この年になつて、こんな思ひをしようとは夢にも思はなかつたでせうが、まアま、みんな持つて生れた運でさア。ねえ、人間は七轉び八起……」

こんな話になつて來ると、心のいゝ、デブデブと肥つた賣卜者の上さんは、すぐに亭主の言葉に感動して、半纏の袖で鼻の穴を突き上げるやうにしながら目を繁叩いた。

「申しちやアなんですが、妾もこれで元はと云

へば、日本橋で五本の指に數へられる位の問屋で、まア御新造さん〳〵と云はれたこともある女なんで御座んすが……」お京の母親が亢奮して、いつものオド〳〵した容子に似げなく、からうは吊つて顫へを帶びた聲で始めた。「それが貴方、まア、恥を申上げなければ分りませんけども……」

「およしよオ、おツ母さん」とお京は殊更ら平氣を裝つて、涙ッぽろいみんなの氣持を陽氣な世間話の方へでも誘つて行かうとして、晴やかに笑つてみせたりする所に、彼女にまた彼女らしいセンチイメンタリズムに裏切られながら、

「昔は昔、今は今さ。面白くもない……」

母親は恨めしさうに娘の顔を眺めてゐたが、

「さうさねえ、下らないね。……だがね叔父さん、お前さんだけはみんな知つてるがね、考へてみりやア、あれもこれも妾の身から出た錆さ。これと云ひ、上三郎と云ひ……」から云ふうちに、彼女の窪つた目から、大きな涙の雫がボロ〳〵とこぼれ落ちて來た。「あゝあ、一度は二十人三十人の奉公人を使つたこともある身が、この年になつて、他人の家の飯を食べなきアならないやうな羽目になると云ふのも、みんな……」

「大變、衰たねえ」と女は鼻の先で。

「いゝえ、ちつとも大袈裟ぢやアないよ。お前は知るまいがね、……ねえ叔父さん、まだ先の旦那の生きてなすつた頃にやア……」

「奉公人のことなんぞ云つてるんぢやアないよ。そんな者アよし四十人が五十人だつて、どの道今のたしにやアならないやね、下らない」

お京は醉つて、目を据ゑて、ガミ〳〵嚙みつくやうに云つた。「さうさ、全くおツ母さんの云ふ通りさ、みんなお前さんから出たことだよ」

「お京さん、まアお前さん、なんだね」と上さんが聞き兼ねて宥めた。

「ハッハッハア」と叔父は咽で笑つて、「いゝえね、貴方の前でがすが、兎角女てえ奴は愚痴な奴でがしてね、アッハ、、、」と云つて彼は、さも可笑し涙でも拭くやうに、目の周りを擦つた。その時老つた兄妹の心には、古い日のことが、同じやうに徂徠してゐた。黄色い娘はいつの間にか八疊の方へ寢に行つて了つた。お京の母親は、上さんを捕へて滔々と泣言を聞かせては、二人して襦袢の袖で目を拭いてゐた。昌造と叔父とは、くだらないことをポツリ〳〵話しながら頻りと飲む。お京は急に默り込んで了つて、ボンヤリ一つ所を見詰めてゐたが、

「さア、もう寢ませう〳〵。いつまで云つてたつておんなじことさア」と大聲に云つて、昌造を促して、近所で借りて來た屛風で圍つた寢床にはいつた。屛風一重向うには、山羊髯を胸の上に載せて、叔父が盛な鼾をかき始めた。上さんと母親とで、カタコトとあと片づけをして了つてから、四疊の方にたつた一つある電燈を消さうとした。

「叔母さん、點けといて」お京の氣狂じみた嗄れ聲が屛風の裏から聞える。「そいからおひやを一杯、コップに」

昌造の荒だ心は、この貧窮の棟割長屋の屋根の下に、一家が散亂しようとしてゐる光景のなかに、みんな少しづつ亢奮して苛立ち易くなつてゐる無智な、善良な人々の間に、最も居心地のよい安住の地を見出した。普段イヤに常識主義なお京までが、時々と反抗的に、捨鉢になつてゐるのも、彼には嬉しかつた。そこでは總ての感情が、赤裸々であるとともに淺薄で、小規模で、昌造の小さな心も、それを分析したり味つたりするのに十分であつた。彼はその小さな世界を看に、エゴイスティックな立場に、恣に、浸つて、欲するだけの慾を十分に飲みながら、引止められるまゝに、一二晩も彼は

等の間に暮して了つた。

　深く霜の降りた朝、昌造は珍らしく早起きをして、愈々同に別れを告げに出た。病氣擧句に久振りで外に出た時のやうに、爽かな朝の空氣が彼の皮膚には強すぎた。足腰にも力がなかつた。ついそこらまで送ると云つて一緒に出た女が、電車道まで來ると、もう少し歩からと云ふ。彼等はなんと云ふこともなく、一錢蒸氣で向島へ渡つた。廓にゐた時分隨分贔屓にされた老つた發句の宗匠の庵室めいた家を、土手の上から眺めて、お京は永い間の遊女生活をボンヤリ思ひ出しながら歩いた。百花園へはいる頃には、だん／＼霜が晴れて、日光が彼等の上に照り始めた。若い藝者風の女と、昌造よりもまだ若いほどの青年とが、石の上に腰を下ろして、肩を押しつけ合つて休んでゐた。彼等は一組づつ、互に、互の前の晩を想像し合つた。さうして自分たちをちつとも幸福だとは感じない。不穩な沈默を續けたまゝ、彼等はそこを出た。心の上からクルツと濡紙を貼りつけられたやうに、總て彼等の感情は、いま、鈍く、息苦しかつた。通りがかりの人のやうな心持で、唯並んで歩いた。

　そのまゝ晝近くまで歩き續けて、人形町へ出た來た時には、日射で體がクタ／＼にだるくなつて了つた。ふと、或る鳥屋へはいつて酒を飲んだ。焦け爛れた胃の腑に、溜飲に似た苦さで酒がチリ／＼と滲みる。――醉が廻るに從つて、彼等は少しづつ生き／＼して來た。

「これから先、一體お前はどうして行く氣なんだ」昌造は言はず語らずのうちに愈々別れる時が來たと思つて、それをもう既定のこととして、殆ど義理一遍にさう訊ねてみた。

「どうにかなりませうさ――

「女にやすたりがないか」と毒々しく、然しいつまで叔父さんの厄介にもなつてゐられまい

お京は、そんな生意氣を云ふなら、云つて聞かせてやらうかと云ふやうに、暫く男の顏を見詰めて、勿態らしい間を置いてから、今夜から活動に出て唄を唄ふんですとさ、金龍館でね――

　それを今まで祕してゐて、いざ別れようと云ふドタンバへ來てつい喋つて了つた女の心持を、ハツキリと感じながらも、昌造は苦笑ひを浮べただけで默つてゐた。けれども有繋に活動小屋の内部を思ひ描くと、墮ちて行く女の運命を哀れまずにはゐられなかつた。（出獄したために、獄中より、入獄以前より、更に惡い、暗い生活へはいらなければならなかつたとしても、それは獄吏の知つたことではない。）僕は、どんなに憂き目に遭つても、少くとも女を、いまより不幸にしようと思つて、彼女の身の自由を縛つてやつた譯ではなかつた。それが、その結果は！　六十近い母親は婆や奉公に出る、女は淺草の活動小屋で唄を唄ふ、人間の善良な意志が、思ひがけぬ不幸の因となつた例は山ほどある。運命の皮肉な惡戯！　人間の善良な心を嘲笑ふ運命の惡戯！――こんな風に昌造は、自分の一時の出來心に等しい善良な意志――それを貫徹させることに全く無分別無責任だつたこれまでの態度、そんなことは下らない、棚に上げて置いて、この不幸の源を、運命の惡戯と云ふ、決して不服の出ない、うまい所へおッ被せに考へた。そしてその思考にいふられて、傲慢になつて、まるで彼が意地惡な運命とグルになつて、初めからこの結果を見越してゐながら、善良な意志でお京親子を不幸の穴へ落し込みでもしたやうに、その企みを思ふ壺へ嵌つて來たやうにさへ思ひ曲げて、窃かに邪惡な心に阿つた。惡心が滿足して、出かした出かしたと褒めた。

　鳥屋を出ると、お京は、或る用事で淺草へ、行

くから、新橋の停車場まで一緒に行かうと云つた。新橋まで來ると、もう横濱行はよしたと云ふ。いよいよ別れようとした。すると女が、もう一生會はないとしても、場合によつては、手紙は上げるかも知れないと云ひ出した。昌造はもういよいよ堪性をなくして、「斷然いかん！」と往來なかで思はず大きな聲を立てた。この爭ひの間に、彼等は日比谷公園にはいつた。夕榮えが永田町の岡の上に美しく空を染めてゐた。落ち葉の浮いてゐる池で水禽が群れたり離れたりしてゐる。――むつくりした胸で水を分けて、丸い黑い目であたりを見廻しながら、自分の行きたい方へ勝手に游いで行く。或る一羽がどう思つてか、陸へ上つて、身震ひをして水を切る。岸の丸石が少し濡れただけで、なんにも重大な結果を生まない。昌造は、人間の行動の一寸した左右から分れて來る善惡の結果と、同じく自由な意志をもつて行動してゐる鳥の、全く善惡のない結果とをボンヤリ思ひ比べてゐた。それが難かしい理窟になつて行かずに、たゞ何んとなく彼の心も鳥のやうにゆつたりと緩んで來た。瞬間、四圍が消えて、長閑な鳥獸の世界を感じた。――ふと後を向くと、女が疲れ切つたやうに口をあいて、夕日を見詰めながらボンヤリ立つてゐた。ほんの瞬間的に、昌造は、雄鳥が雌鳥を愛するやうな心持になつた。が、すぐまた苦い顏をして默つて歩き出す。廣い芝生の所へ來た。あたりにはまるで人影がなかつた。

「オイ。もう歸れよ、いゝ加減に―

「近いうちにもう一度だけ會はない？」

「いやだ！―

「いやならよござんす――なんの執着もなく云ふ。昌造はカッとなつた。

「そんなら何故初めッからそんな餘計なことを訊くんだ。俺をいやがらせるだけの目的で云ふんだな―

「貴方はもうすッかり氣が變つてお了ひなすつたのね。妾、憎い―

言葉に現はせない程の憎さを、十分に傳へてやりたい欲望で胸がいつぱいになつて、口が利けなくなつて、洋傘の柄を力まかせに握り締めたまゝ、昌造はブルブル顫へてゐた。

「おいやでせうね、金龍館の下座を情人にしてゐると云はれちやアね―

昌造は女の代りに大地を力まかせに打つた。洋傘の先が折れて飛んだ。女はその飛んで行つた先を見てゐた。草のなかで金物が光つてゐる。

「俺を責める氣だな、貴樣、貴樣が一體俺のよし惡を云ふなんて、第一考へるなんて……」

頭の上を鳥の群が鳴きながら歸つて行つた。羽音が靜かな夕空に遠ざかつて行く。暫くして女は落ちつき拂つて云つた。

「人間てものは、誰でも飽きるわ―

「生意氣云ふとほんとになぐるぞ―

「貴方はどうかしていらつしやるのね―

「もういゝ。どうしてゐようとお前のお世話にやアならない

「堪忍して下さいね、妾が惡かつたから」

「なアに、あやまるにやアあたらないよ。お前と云ふ人間はさう云ふ人間なんだ。あやまつたりするとまた嘘になる。本性を現はしたまゝで引き下つた方が男らしいぞ

「何をそんなに怒つてらつしやるの？」

「もういゝんだよ。これですッかり片がついたんだ―

なにかとゆつくり引張つて云つた。

「俺たちが一番お仕舞に本當の肚を云ひ合つて別れるんだ。それでいゝぢやアないか

さう云つて了つて昌造は歩き出した。それでも彼の注意は後に惹かれた。（どうしたら

うと。
烈しい怒りのあとで、彼の心は次第にいくらか穏になつて来た。少し云ひ過ぎたやうな氣もして女が氣の毒でもあつた。然し彼は努めてその心を押へつけた。暫くして、二三間あとから女の足音がついて来るのを知つた時、まアよかつたと思つた。彼は停留所の方に出ずに、そのまままうちのある方へ歩いて行つた。女がついて来ることが出来るやうに。

足がうちに向ふと同時に、彼の心は重くなつた。永い間無斷で、電話一つかけないで、うちを明けてゐた結果を、彼はよく知つてゐた。屢々繰り返したことだが、両親は仲々それに馴れなかつた。父の怒、母の心配、兄弟の迷惑。彼も仲々それに馴れなかつた。結局彼は友達のうちに寄つて、そこから兄でも呼び出して、一緒に歸つて貰はうと思つた。

その友達のうちの門の前に来た時に、昌造は振り返つて、今度はまるで違つた優しい聲で、勞るやうにから云つた。

「北島の所へよるがね、若し留守だつたらすぐ出て来るけれど、ゐたらもう別に断りには来ないからね、五分ほど待つてみて、出て来なかつたら歸つておくれ」

もう全く夜だつた。女の顔がほの白くただ頷くやうに見えた。

「おやアさよなら」昌造はサッサと門のなかにはいつた。

北島は彼を見るなり、

「オイ〱、冗談ぢやアないぜ、一體あれからどこに行つてたんだい。君のうちぢやア大騒動だぜ。俺は何遍電話口に呼び出されたか知れやしない」

同じ夜の九時頃、俊之助兄に從はれ、昌造がシヨンボリ部屋にはいつて来た時に、父母はまア助かつたと思つた。五人の男の子のうちで、この四男のやうな放蕩者は初めてだつた。どの伜もどの伜も、成年になる前後に、きつと何か知らんで苦勞をかけたけれども、昌造のやうに無遠慮に彼等を苦しめる者はなかつた。

「一體どこへ行つてたんだ！」父親は、今までの心配や不安が、急に劇しい怒に變らうとした。然し、その時彼は、伜の、三四日の間にゲッソリ痩せて了つた顔を見た。薄く縁どられた目は、勞れて力なく見えながらも、思ひ迫つたやうに潤んで、深い皺を刻んだ眉の下に落ち込んで光つてゐた。髯なども汚らしく延びて、一層顔色を醜く見せてゐた。口にこそ一言も出しはしなかつたけれども、心のうちでは、實際生命さへも賭けてゐた我が子の、かう云ふ窶へ切つた容子を見ると、何故となく涙も誘はれた。母親は堪らないことだと思ふと、ハラ〱と心弱い涙を落した。昌造は、自分を一文の値うちもない放蕩者だと心から恥じて、父母の前に身の置き所もないやうに悉縮してゐた。然しそこには、もう一人の心に[illegible]れるものもあつた。何かに、悪心の風に吹き煽られ、眞心の鞭にたゝかれながら、両[illegible]るまでも[illegible]の旅をさまよ[illegible]つた足弱な旅人が、宿を頼むのも忘れはてて、軒先でウン〱してゐるやうな趣があつた。

「俺は何んにも言はれまい」と聞く沈黙が續いた後に父親がかう云つた。「また叱りもしまい。ただ、これからはもう少し氣をつけてくれ。[illegible]お[illegible]ことも思つてくれ。よウく自分で一度考へてごらん。……然し、それよりもまア、今夜はふつくりお休み、まるで……身投でもしかけて助けられて来た男のやうな顔つきをしてゐる」と父親はその時思つたのだけれど、尤よりそれは口へは出さなかつた。

昌造は勞れ切つて自分の寝室にはいると、これと云ふ理由もなく、聲を立てゝ泣き出して了[illegible]

つた。久振りで父母に對する愛を感じながら、子供のやうに泣きじやくりながら寢入つた。

或る日の午後、昌造は佐々を訪ねようと思つて電話で都合を訊くと、市村と牧野とが來こゐるが、よければ、と云ふ返事だつた。昌造はその明け方、〓廢とする／＼へつたり―と題する、幾度か生活を改めようと志しては幾度も失敗に終る意力のない生活を描いた自敍傳風な小說を脫稿した。それに出來次第に、そのなかの主人公のモデルである佐々に見せる約束になつてゐた。それで佐々は、他に來客があつてはと云ふ遠慮を言葉のうちに現はしたが、昌造は一寸考へて見て、却つてその方がいゝと思つて、行くことに約束して電話を切つた。

この小說のなかで、昌造は、佐々に對して身を切られるやうな思ひで或ることを白狀してゐた。

それは下のやうな事件だつた。

一體佐々は昌造の兄の健之助の友達だつた。隨つて年は六つ程上だつた。明敏な昌造が、この友達と對等に交際ひ得る頭腦をもつてゐたため、佐々も自分を實力以上に偉く見せなければならなかつた。その背るし上つた足と地面との間が、この友達との關係に於て、昌造の最初の趣味になつた。うは吊つた彼の言說でも、時には、鈍厚な佐々には才氣煥發に聞えた。だから彼等の交際は、はたからは、年のわりには對等らしく見えた。然しその實は、昌造の宙にぶら下つた足と地面との間には、佐々の思想、趣味、道德などが、芝居の岩のやうに一見頑丈らしく踏み臺にされてゐた。昌造もそれに心づいてゐて、幾度その空洞な足つきを自分の大地にまで踏み碎いて了はうと悶掻いたり、或はまたそこから飛び下りて了はうとも企てたか知れない。然しその踏み臺の岩の周圍は、日と共に膨大して、遂には己の立つてゐる大地を見失つて了ひさうな有樣になつて來た。

その時分の或る日、小網町の河岸に臨んだ西洋料理屋の二階で、彼と佐々とは、畫家である英國人の友達から、オーガスト・ジョンと云ふ畫家の話を聞いたことがある。まだ若年ながらジョンは、恐ろしいやうな一種の強い性格を持つた男だつた。彼の性癖は一々オナリチイだつた。彼の周圍には、磁力に引き寄せられる鐵片のやうな崇拜者が、常に五六人づつはあつた。そのなかの一人であつたオースボルンと云ふ畫家は、立派に自身の才能を守つてゐながら、その作畫は、どう描いても、ジョンの見眞をあとから／＼と追つて行くやうになつた。たうとう彼は、ロンドンを去つて、或る田舍に引込んで了つた。そして子供の心にかへつて、一向自然を觀て描いた。然しオスボルンは、その一枚が出來上ると同時に、ピストルの彈丸を己の頭腦へ射込んで死んで了つた。――かう云ふ話になつて來た時に、昌造と佐々とが殆ど同時に尋ねた。

「―その一枚は？」―

「―すゝ、非常なもの、彼自身の藝術！」―

その後二三日の間と云ふもの、昌造は、佐々を殺して了はうと云ふ考を、どうしてもいまから追ひ出すことが出來なかつた。自分が殺されて了ふよりは……と思つたのだ。然しこれに關する詳しい記述は茲には省く。

昌造と佐々との間にはまた次のやうな關係もあつた。仲間の中にまだ一人も女を知つた者がなかつた時分に、昌造は家に使つてゐた年上の下婢と通じてゐた。この事實は最も親しい友達の佐々にも打ち明けずにゐたが、最早や童貞ではないと云ふだけは、いつ頃したともなく通じさせてあつた。その後或る時、佐々が遊女と寢たことを昌造に打ち明けた時に、昌造はそれに對する〓〓のやう

に、彼自身の秘密をも語れと迫られた。その時以來四年ほどの間、佐々は、昌造の相手が神田に住む煙草を商ふ女だと云ふ虚構を信じさせられてゐた。それでも彼は、何故ともなく、あの下婢ではないかと想像して、[illegible]ことも[illegible]か、昌造に[illegible]嘘[illegible]つた。この[illegible]のために、昌造は益々佐々の前に己を[illegible]く[illegible]しなければならなくなつて了つた。遂に彼は、名を[illegible]作に[illegible]て、佐々に本當のことを[illegible]、同時に今までの關係にも[illegible]分[illegible]明を持[illegible]企[illegible]しようと[illegible]一部分[illegible]この目的のために書かれて[illegible]昌造に[illegible]この道それは苦しい仕事には違ひなかつたが、この頃になつて、彼にそれを[illegible]だけの勇氣が湧いて來たと云ふよりも、[illegible]するだけの[illegible]が出來て來たのだと云つた方が當つてゐた。小説のなかで、彼は、人を[illegible]とした[illegible]穴のなかで、如何に己自ら苦しんだかと云ふ事實を書き、そこには少しの[illegible]にしたとしても、無根の[illegible]はなかつた。[illegible]主人公としては、苛酷なまでに主人公を鞭うつて、恰もそれで永い間友達を偽つてゐた罪が償はれるものゝやうに感じた。そこには、友達の前に罪を謝する代りに、この勞作に[illegible]品としてのよい批評をも受けたかつた[illegible]永い間の嘘を自白し、同時にまた[illegible]に[illegible]はると云ふ、[illegible]に意[illegible]しないまでも）甚だ横着な態度が潜んでゐた。[illegible]から云ふヒドい意味の作を佐々の手に渡すには、[illegible]で目の前で讀まれるよりは、[illegible]方がいゝと[illegible]、原稿を袱紗に包んで、昌造がその日佐々のうちへ出掛けたわけだつた。

先に[illegible]友達は[illegible]果[illegible]に[illegible]出[illegible]目な鼻唄を唄つたり、雨[illegible]を抱いて床柱に[illegible]曲[illegible]を[illegible]たりして、中心になる感情も話題も明かに[illegible]見えた。この空氣はいま昌造が身を置くに最も適してゐた。佐々はこの空氣のなかから昌造の[illegible]作を持つて隣の部屋へ出て行つた。昌造の心はワク／＼して來た。それを紛らすには、あたりの空氣を一層ダルにすることが有效だつた。

四年の間親しい友達に偽られてゐたことを知つた時には、人を信じることの厚い佐々は可なり不愉快な心持になつた。その上、讀み終つてからもとの座敷へ歸つて見ると、そこでは昌造がダラケ切つた冗しをたゝいてゐて、恬として恥ぢる樣子もなかつた。佐々には[illegible]この[illegible]大で、[illegible]かつた[illegible]その時には彼も[illegible]

「どうだつたい？」と昌造が殊更平氣を裝つて訊いた時に、

「[illegible]」

[illegible]けて、[illegible]

その晩彼等は醉つて[illegible]、[illegible]つたが、牧野の童貞に敬意を拂つて、[illegible]ない引手茶屋へ上つた。[illegible]飲んだり、[illegible]娘たちが[illegible]したりした。昌造は[illegible]箱のなかに[illegible]稿の袱紗包を見つけて、「こんなものが[illegible]してちや面白くねえ」などと云つて帽子の下に隱してから、頻りと燥ぎ始めた。[illegible]るべつたりを讀んだ後で、佐々[illegible]して不[illegible]てもないのか昌造には[illegible]友達の目色を窺ふやうな[illegible]態度に[illegible]い不[illegible]味なも感した。[illegible]その不[illegible]ツな、無神經な冗談を[illegible]た。――[illegible]人に佐々の心は惹かれた。然しそれには[illegible]心[illegible]なかつた。たゞ昌造はそのみさ子と云ふのが一番佐々を厚くもてなすと思つて、[illegible]を感じてゐた。然しその[illegible]

女達の方へは決して向けられないで、その女に對して、殊更に佐々の方へ押しやると云ふ心持の、謂はば幸福と云ふ形で苦しめるとでも云ふべき心持で現はれて來た。銀貨盡しの遊びをしてゐた時に、佐々の拳固を指して、「その熊のやうな手!」と云つたのも、翌朝藝妓たちが歸つて了つた時に、あゝあ、御婦人達がゐなくなると、急にみんな氣をぬいて了つて、惘然した顏をしてるぜ、と云つたのも、昌造の心持には、無遠慮すぎたと云ふ以外には、全く咎められるべき何等の他意もなかつた。所が、二三日してから昌造は、あの晩君が僕に對して爲た下劣な心の遊戲で僕は君に對して可なり不愉快を感じてゐる。そしてその心持を今小説に書きかけてゐるから、當分君とは遇ひたくない、と云ふ意味の佐々の手紙を受け取つた。佐々は自分がみさ子に對して抱いた可なり眞面目な愛情を、昌造が馬鹿にして、わざと女の前で自分の毛だらけな手を嘲つてそれに譬へたりしたのだと釋つたのだつた。

それ以來暫く、二人は遇はなかつた。昌造は、自分に對する佐々の不愉快が、日ごとに彼の原稿紙の上に形を取りつゝあることを思ふと、ふと腹立たしく感ずるやうな時もあつたが、然し彼にとつては、この友達との間に、どんな形ででも變化の來ることは、心竊かに望む所だつたから、さしてそれを苦にもせず、他の友達と一緒に、相變らず遊び歩いてゐた。

もう冬が來てからの或る日のことだつた。昌造は北島からかゝつて來たと云ふ電話に出た。すると、「妾よ、わかつて?」から云ふのがお京の聲だつた。彼はすぐ電話を切らなければならぬと感じながら、矢ッ張り受話器を耳に當てがつてゐた。

「なんと思つて電話なんぞかけるんだ」

「たゞよ。急にかけて見たくなつたのよ」お京は明かに餘程醉つてゐた。デレ〳〵とよく廻らない舌で、くだらないことを喋り續けた。その後からは、樂隊の音や人の話し聲などが騷々しく聞えてゐた。活動小屋の樂屋の酒宴。醉ばらつた下座の女。堪らなく不愉快になつて、昌造は默つて電話を切つて了つた。

この時肇めて昌造は、別れた後のお京の生活を目前に浮べて見た。彼はなんとなく心苦しく情なく感じた。

―いやだ〳〵、たまに善いことをすりア、その結果はこんなもんだ―

その秋同じことを鳥居の二階で感じた時に比べると、彼はずッと簡單に、概念的にこの問題を片づけて了つた。人の心に在る善の力が、いかに成すなきかを思ふことは、一面から彼の生活をジャスティファイし、不安を麻痺させる效力があつた。而も彼は善のために悲しまなければならないやうに感じた、末世の世には、善もその力を收めなければならないと云ふ風に。そしてこの幻滅は、彼の考へに從へば、末世の世に目を開く前に、必ず受けなければならない「二十三」であつて、これを經た後、人は、自分達のうちに何か或る尊いものを意識し、常にそれを力綱としてゐずには、一日も生きて行かれないやうなヒロイズム時代から、離れて現實に面接する不屈の力を備へた成熟の時代にはいるので、恰も彼が今その一時期に際して、別れて行く過去の時代を惜しみ、且つは幻滅の悲みに逼つてゐるのである、とかう昌造は自ら解釋した――然しまた別な見方から云へば、彼の所謂「二十三」は、徴兵檢査のやうに、誰でも人が必ず受けなければならない凡人檢査の試驗であつて、昌造がその甲種合格者であつたと云ふことも出來る。この考へに從へば、その日の短い電話が、彼を立派な凡人に成熟を

せた。昌造はそれを[illegible]、[illegible]た事實である。人[illegible]にも幻滅を感じ[illegible]ならない。[illegible]いものに、[illegible]こ[illegible]ないのだ[illegible]、[illegible]ものに[illegible]情しけた。ドン／＼滅しさつてゐない。

單[illegible]的に名聲、位置もない、[illegible]人、[illegible]なですもやうに、[illegible]と昌造は彼と友達への手紙に書いた。心の上に[illegible]するもののない素人間は、またどんなことをも恐れない。何等の役に等へてない役者の離す素顔と云ふやうに、近頃の彼は、全く役のない、素人間になつたやうな氣がする。[illegible]然な、[illegible]つた[illegible]氣な感をしたがる少年——無自覺に煩悶を道樂にする青年——漁色家——情人、こんな様々な役を了へて、俺は顔を洗つて了つた。この時、なう云ふ「役」が、思ひがけず、心の状態の自由であることを知つた。自由な心の所有者に、素人間」に限られてゐる。然しその素人間かまた今の俺の「役」でないとは云へない、心の潜在でないとは云へない。が、兎も角俺は永い間望んでゐた心の自由をやつと過ごし得たやうな氣がする。所がそれは、言葉を換へて云ふなら、「自主的な所のない放埒」と云つてもよいやうなものだ[illegible]、俺[illegible]於て[illegible]、それは淋しい空虚に等しかつた。俺はこれに堪へなければならないのだらうか。この行手に本當の大きな自由が待つてゐるのだらうか。

一週間ほどたつてからの手紙に

僕は自由と云ふものを摑むことが出來ようか。他人との對立に於てでなく、自分一人の、絶對の自由と云ふものを。

自由とは畢竟、意識の自由——であることは論を俟たない。人はごく不自由な自分を自由であると意識する自由も、どんな自由な自分を不自由であると意識する自由も、決して失ふことはない。要[illegible]ただその意識が外的な何物かに支配されるか否かに歸する。絶對の自由とは開放された意識である。外的な何物をも含まない人格的意識——もつと碎いて云ふなら、自然な心、素な心、それだけが自由だ。僕は近頃から思つて、爲たいことを爲、思ひたいことを思ひ、全くなんの目標もなく、批判もなく暮してゐる。が、然し、少し淋しい。

から云ふのが、昌造の成熟した自由な心、の哲學だつた。彼の心のなかに建立された尊かるべき筈の哲學だつた。——それは丁度、旅人される時に少々損じた——日本人の性情にはヒマリしはな[illegible]い自然主義[illegible]、と云ふものか、青年の心に種々な[illegible]つて働き始める時代だつた。——哲學はそれでよい。所で彼の[illegible]自由な生活とはどんなものだつたらう。

數年の二月頃、昌造は或小さな待合の[illegible]火鉢の置いてある部屋で、[illegible]の女達が二階から降りて來るのを待つて居た。そこに女達の呼んだ女だけが先に降りて來て、[illegible]に挨拶をして歸つて行つた。——三四時間後に、女達と別れてから、彼はその近所の或る他の待合にゐた。

「フム、貴方だつたの。[illegible]ない人ね、貴方は」

先刻女達の呼んだ女が座敷にはいつて來てから云つた。昌造はニヤリ／＼笑つてゐた。

「お馴染かい」

「あの方と？　いゝえ」

「何、お馴染だつて構やしないがね。さつきお前が歸る所を見初めたと云ふわけだ」

歸る時分には、昌造はこの色白で小肥な、女學士上りのスレッカラシを、ガァ／＼と[illegible]字名して、それからまた一週間もすると、すぐ文通などを始めたりした。

この女の生家は江戸川の終點の近くにあつ

た。そっちへ歸つてゐるから、一緒にどこかへ遊びに行くから、誘ひに來いと云ふ手紙を受け取つた昌造は、約束の時間に終點で降りて、夕闇のなかに人待ち顔に立つてゐる「ガラ〳〵蛇」を見つけた。彼はこの女相應の、或はそれがまた彼自身の財布にとつても相應の、料理屋へでも行つて、飲食ひしたりする氣でゐたが、女は頻りに「活動」へ行かうと云つて強請んだ。その時昌造に、ふとかう云ふ名案が浮んだ。——この女と竝んで腰かけながら、金龍館でお京の聲を聞かう、と。この思ひ付きが頗る彼を興がらせたので、快く承知して、二人は電車で淺草へ向つた。所が行つて見ると、生憎金龍館は表ばかりの改造中で、折角の名案も駄目になつて了つた。そこで他の小屋で、立廻りの多い舊劇の寫眞を我慢しなければならなかつた。間もなく、そつと女に囁くやうにして彼等はそこを出た。[illegible]い、けすな[illegible]屋の人が[illegible]の[illegible]で、[illegible]い夜食を終る頃には、女は[illegible]酔つてゐた。

「おいよい姐さん〳〵、[illegible]れて[illegible]へて來たつてえのかい」

まだよからうと思つてゐるうちに、ポツ〳〵り[illegible]はれたので、昌造は面喰つてゐる——[illegible]なたね、お前さんところの[illegible]ツて[illegible]、熱ゥいお出花を飲ませることも知らないなんて……もう一度煎れ變へといで」

昌造は厄介なことになつて來たと思ひながら、やつと女を宥めておもてへ連れ出さうとした。入れ込みの相客はジロ〳〵二人の顔を眺めて、お互に私語き合つてゐた。

「なんだつて？　六區だつて？　巫山戯ちやいけないよ。その上、かう見えたつてこゝまでゝられてはと、可笑しくもあり、恥しくもあり、昌造は女を引きずるやうにして往來に出た。實は彼とても可なり醉つてゐたのだが、「ガラ〳〵蛇」の[illegible]氣に怖れをなして、醒めて了つた。馬道まで來ると、これから吉原へ繰り込むのだ、と云つて、女は何と宥めても聽かなかつた。[illegible]夫、ア、[illegible]だよなどと叫んだりした。吉原では、彼女は[illegible]目を一身に集めて了つた。着物の前はだかりにして、ヒョロ〳〵よろけて行くのを、妓[illegible]人ともはよい慰みものがはいつて來たと、[illegible]でに[illegible]な冷罵を浴せた。辻卜賣の鼻ツ垂れも、「ヤア、女の醉ツぱらひ〳〵」などと囃し立てゝ、ゾロ〳〵跡からついて歩いた。いかな昌造も、閉口してしまつた。時々女の醉ツぱらひは後を振り返つて、昌造の姿が見えればよし、一寸でも見えないと、手綱か[illegible]大聲で彼の姓を呼び立てた。昌造が知らん顔をして段々近よつて行くと、見附けて、安心してまたヒョロ〳〵歩いて行く。群集は彼女の視線をたどつて、連れの男を見附け出さうとする。そのなかで昌造も、群集の一人のやうなもの好きな顔をしてあたりを見廻したりした。——大分遅れてゐた昌造が仲の町の通りに出た時に、「ガラ〳〵蛇」は、姿が見えないほどの人立に圍まれてゐた。彼女は辻卜賣の子が五月蠅いと云つて、その一人の頭を打つた。それを見咎めた矢ツ張り醉ツぱらひの義憤家が、女と喧嘩を始めたのだ。昌造は、今度こそ知らん顔をして先へ歸つて了はうと思つたが、それが出來る性分なら、もう疾に淺草で女を撒いてゐたらう。彼は人立を分けてはいつて行つて、女の手首を取ると、[illegible]つてグン〳〵大門の方へ引ッ張り出して來た。「ヤア[illegible]事だ、刑事だ、と云ふ聲を後に聞きながら。荒れ狂ふ女を無理に俥に乘せて、俥夫に所番地を云つて聞[illegible]、[illegible]、[illegible]と肩の荷を下ろしたやうに、人通りの比較的少ない[illegible]の方へ歩いて行つて、やがて[illegible]に[illegible]つた。寒い月が大空に冴えてゐた。俥は[illegible]の下の方へ出る寂しい町を走つてゐた。それまでの目に遇はされた「ガラ〳〵蛇」が、彼にはまださ

ういふではなかつた。何か窶れたやうな愛情さへ感じた。行手に、灯をとられた提燈を點火さうとしてゐる俥があつた。提燈を下ろさずに後棒の俥夫が前に廻つてマッチを摺つてゐた。俥の上には、ガツ〳〵眠[illegible]心持の客人の一人あるらしく、ぐツたりと首を曲げてゐた。

「オイ、氣をつけてやつとくれよ」呂造は俥の上から聲をかけて行き過ぎようとした。

「なアんだ、貴方だね。わかつてらア」と女に急に顔を振り上げた。その顔にはいつぱい月がさして、蒼白く美しく見えた。

この晩二時頃に、若い泥醉してゐる女を、知れ合い路次の奥の、小さな汚い家へ送り届けた二人の俥夫は、家内には彼女と妹らしい娘との二人きりで、男や大人がゐないことを確めた時に「わつかいい、わつちらも、これから仲まで歸りや夜が明けちまひますから、どこの隅でもようござんすさア、一晩泊めてやつておくんなさいな」と芝居の科白のやうな口を利いた。俥は路次の奥に霜と月光とを浴びながら朝までそこにあつた。

露骨この上なしの「ガラ〳〵蛇」からこの話を聞かされた時には、有繋自由な「心」の所有者も傾げ返つて了つた。

暑い夏が環つて來てからのことだつた。その時分には既に以前のやうな交誼に復してゐた呂造と佐々とは、嘗て一週間のうち少くも二日まではさうしたやうに、一緒に連れだつてあてもなく街を散歩してから、その年納涼のために公開された御臺場の一つへ渡つて見ようと云ふことになつて、芝浦の埋立地の海岸に立つた。舊曆十五日の月が上りかゝつてゐたが、いかにも夏らしく、夢のやうに足もとが暗かつた。ボウボウと、締りのない、生温かく濕つた風が肌にベトついて快くはなかつた。それで、御臺場に渡す艀の出る所はちよつと知れもしなかつたが、乘り氣になつて探してみる氣もなくなつて了つた。堤防近く舫つてある舷の高い和船の舳から暗い海の水へドブン〳〵と飛び込んでゐる若者たちの呑氣な夜の水浴が、元來から云ふことの大好きな呂造にさへ妙に危つかしく思はれるやうな晩だつた。それは、耳朶を鳴らしてボウ〳〵と吹いて行く、日照り續きの海上で温められた風や、浮雲が流れる度に息をつくやうに明るくなつたり暗くなつたりする寢惚けた夏の月光のせゐでもあつたらう。いくらか豫期して來たやうな、爽かな涼味とは丁度正反對な、と云つてもいゝやうな、怠けた、或はそれ以上不氣味な感じを受けながら、二人は下駄を[illegible]いだ上へ腰を下ろして、暗い水に[illegible]でゐた。潮の匂ひに混つて、腐つた魚の匂ひもして來た。それが、湯のやうに[illegible]の上へ、白い腹を出して浮んだ死魚の[illegible]つて來るやうな心持をさせた。

廣々とした埋立地の草原を横ぎつて、彼等はそろ〳〵歸りかけた。往き道には心附かなかつた小屋がけの素人相撲の前へ出た。彼等はそこにはいつて、猿股の上から緋金巾[illegible]めた逞しい青年たちを、薄暗いカンテラの光の下に眺めた。好惡の難しい彼等は、[illegible]い力士たちのなかから、すぐに贔屓を[illegible]見つけ出した。規定の時間が來て、木戸[illegible]び立てられるやうにして、最後に彼等がそこを出た時には、いくらか元氣を回復したやうな氣がした。いつか月は天心に昇つて、青く澄んでゐた。棧橋のやうな危つかしい橋を一つ渡つてから、安普請の小料理屋や小待合の[illegible]と建て込んだ一廓へ、例の好奇心から折れ込んではいつた。その道は[illegible]出て行き止つて了つた。片側は石炭[illegible]來る暗い傾斜で、上には鐵道のシグナル[illegible]を突くやうに立つてゐた。あと戻りをするのが業[illegible]

原なので、彼等は構はず鐵道線路の土手へ登つた。そこを横切ればすぐ田町の通りに下りられると思つてゐたが、上つて見ると、土手と向う側の往來との間には、コンクリートの溝か何か工事中らしく、その上案外往來は低かつた。
「こりや下りられない、廻らうか」
「なに、線路について行つてみよう。大抵下りられるよ」
　彼等は新橋の方へ向つて線路のわきを歩いて行つた。そこへ前の方から大地を震動させて下り列車が來た。
「危いよ」
「大丈夫だ。こいつは氣違ひぢやないから」
　自動車のことを、ケンノン性な牧野が、氣違ひ電車と呼んでゐた。電車も怖いが、自動車と來たら、いつ何時こつちへどう逸れて來るか分らないのだから、これほど怖いものはない、とよくその友達が云つてゐた。それでも彼等は出來るだけ線路から離れて、土手では、その草を踏まへくゐる、端を歩いてゐた。下りの列車は彼等の歩いてゐる側からは一番遠いはづれの線路の上を、轟音と凄しい響をたてゝ走つて行く、——昌造の一、二間の前から、浴衣がけの佐々の、薄ら白い姿が、ハッと消えてなくなつた。途端に

昌造は、非常な音響と、吹きよろめかされる程の空氣の攪亂に會つた。熱く感じるやうな、焦臭い風が裾をあふる。すぐ頭の上を円筒な明るいものがチカ〳〵チカッと飛び過ぎる。次の瞬間に、昌造は、目の前に山の手電車の間のやうに大きな後姿と、赤いランプの光を見る。
　恐らく三秒よりも短い間にこれだけのことを感覺する一方では、佐々が蔭のやうに五六間さきへケシ飛んで行く瞬間の姿をも見た。そしてその次の瞬間には、切腹した人のやうにうッぷしてゐる佐々を後から抱き起してゐる「己」を感じた。首から鼻柱の横へ流れてゐる血を見た。目はあいてゐる……
「大丈夫か」
「大丈夫だ」
　怪我人の聲は思つたよりしッかりしてゐて、何か自ら嘲笑ふやうな調子さへあつた。けれども昌造は、「こりや佐々は死ぬかも知れないぞ」と思つた。どうして死ぬのだらう、と自問して、その時初めて、佐々が山の手電車に觸れたと云ふ事實をはつきり意識した。——もう一筋の血が唇から顎へ流れて來た。これが血ヘドなら助からない!
「シッカリしてくれ!」

「大丈夫だ。大丈夫だ」佐々は一言づつ確めるやうに云つた。
　そこは、往き道に彼等も潜つた三丈ほどある陸橋の天端で、佐々の踵頭から一尺とは隔てない所から、下の往來へ、石垣の高い絶壁になつてゐた。その小い鼻の下を、涼みの客がゾロゾロ歩いてゐる。それが、彼等とは交渉を許されない他界の人々のやうに、こつちを振り向きながらも、立ち停りも慌てもせずに、平靜な足なみでゾロ〳〵動いてゐる——昌造は心細くなつて來た。
「誰か來て下さい。大變です」と彼は驚愕して呼んだ。谷の底で「どうしました」と云ふ聲が聞えた。
「誰か早く來て下さい」
　その間佐々は、膝頭で立つて、前こごみになつたまゝ一言も口を利かなかつた。昌造は後から、その、ガックリ前こごみにならうとする頭を膝で支へるやうにして、背から抱へ込んだ兩腕でしッかりと抱いて、手を佐々の乳のあたりで組み合せてゐた。その昌造の腕の上にまた佐々の手が軽く載せてあつた。そこには、生溫い、サラ〳〵に乾いた、アレ性の、いつも通りの佐々の掌の感觸があつた。それがいく

らか昌造に勇氣を與へた。「大丈夫だらう」とも
思つた。そして遂に、兎に角こりや大變なことが
出來て了つた…と初めてさう思つた。どこか
らともなく、彼等の周圍には人々が集つて來た、
角燈を持つた線路工夫もゐた。

「どうしました」

「電車です…大變です」

「兎に角角木まで下ろさなくちやいけない」

「お待ちなさい」手を貸しに寄つた中年
の男は、ヒドく酒の匂ひをさせてゐた。

「貴方はいけない」昌造はその男が手を拂ひ
のけてゐたのを見廻した。湯屋の歸りらしく、
手拭を下げた屈強の若者が目についた。と
つさに相撲とりの一人だナと彼は心丈夫に思
ひながら、

「貴方すみませんが手を貸してくれませんか—」

その若者に、人々がからかふ場合に得て陥り
易い、義に勇むと云ふ風な氣負ひ立つた容子も
なく、無愛想に近よつて來た。昌造はそれも氣
に入つて、その若者に對しては無遠慮になつて
もいゝやうな心持で、さげてゐた手拭を貰ひ受
けた。それで佐々の頭に後鉢卷をした。濡手
拭はグッと堅く絞つた。髪の毛のなかで、傷
の位置かは知れないが、顳顬の動脈を締めつけて
置いたら、いくらか出血が防げるだらうと。

そこへ白服の巡査が來て、「醫者はまだ來な
いか」と云つた。その時佐々が悲鳴を立てたや
うな聲で、

「警察醫なんかに來て貰はなくつてもいゝ、そ
れよりも早くどこか病院に連れてつて下さい」

昌造は、自分ばかりが狼狽してゐるのに、
怪我人の方が却つてはつきりとした思慮を保つ
てゐるのを頼母しく、心丈夫に思つた。

「さうかね、…だけど…大丈夫か」

氣だけはしッかりしてゐても、案外途中で
…ことゝ、それも案じられるので、昌造はため[illegible]
な、當人にそれを確める。何しろ傷の程度がち
つとも分らないので、彼の不安は手遅れと云ふ
點にあつた。それには、若し手遅れでもなつ
たら申譯がない、と云ふ自分を責める自己本位な
考へ方が俺に混つてゐた。

「大丈夫だ」佐々は受け合ふやうにしッかりと
答へた。

「それぢやア醫者はいりませんから、大急ぎで
俥を二台云つてくれませんか」

巡査は、昌造にものを云ひつけられたこと
で、ヒドく感情を害したらしく、そんなことは
自分でしろと云ふやうな言葉を殘して去つた。

兎に角往來へ下ろすことになつて、湯歸りの若
者が前に廻つて背負つた。昌造が後から助け
載せようとすると、突然怪我人が、「痛い〳〵」
と叫んだ。見ると首の邊が五六寸ほど二ケ所ほど
破れてゐた。彼の心はまた暗くなつた。

自分はスタスタと、一度行つて歩いてゐた、躍
起の要領で、佐々の下駄の片一方を拾つ
て、昌造は人々のあとから恐ろしい所を[illegible]町
の往來へ下りた。誰か呼んで來てくれたのか、
俥が二台待つてゐた。

「一緒に乘らなくつてもいゝか、一人で大丈夫
か」

「大丈夫だ」

佐々は俥の腰かけの端の所へ、一寸腰をかけ
て、前こごみに窮屈さうにしてゐるので、昌造が
うまく掛け直させようとすると、「いや、このまゝで
いゝ、痛いのだ」と云つた。そこに、アク濡れにな
つた佐々の麥藁帽や、下駄の片一方を持つて來
てくれた人があつた。昌造は先刻拾つた片々の
下駄を、こんなもの片ツ方だけ持つてつてど
うする氣だ、と心附いて、どこかへまた捨てゝ來
たのだ。帽子は自分の手から一重に被つたが、
下駄は目立たないやうにそつとまた捨てゝ了つ
た。もう出かけようとしてゐた時だつた。

「僕等逃げて了つちやいかんぢやアないか」と云つて巡査が近よつて來た。昌造は腹を立てゝ、「逃げやしないが、何か用があるのか」と喰つてかゝつた。兎も角交番まで來いと云ふので、佐々の俥夫に田町の通りをソロ／＼先へ行くやうに云ひつけて置いて、昌造は交番へよつた。いつの間にかあたりは大變な人立だつた。巡査は彼等二人の姓名職業住所などを訊かうとした。昌造は人立のなかでそれを口にしたくはなかつたので、自分の名刺に佐々の姓名や番地を書き添へて、精しいことはこれからU病院に行くから、そつちに調べに來いと云つて俥に乘つた。怪我人の註文で、ソロ／＼と引いて行く俥は街燈の明滅を集めた。濕つた手拭が血を吸つて、赭色に染つてゐるので、尚更人目を惹き易かつた。で、昌造は暗い裏通りの方を行かせた。そしてU病院、――彼の親戚の男が外科の主任をしてゐるそのU病院へ行かうと佐々に告げた。

「U病院で不愉快なことはないか」佐々がかう云つた。昌造にはその意味が解らなかつた。

「何故？……ないだらう？」

「慥か俺は、この頃K病院に通つてるんぢやないのか」

「ウン」と答へはしたが、昌造はギョッとした。

「そんなことを人に確めるとは……。」

「そんなら矢ッ張りK病院にして貰はう」

佐々はその時分K病院で治療を受けてゐた病氣を、友達の親類などに知られたくないと、それを氣にしてゐるのだつた。

「でも、大變遠いよ」

「タクシイを云つて貰つたらすぐだ」

「それでもいゝが、U病院ではいやかい」

「不愉快なことがありさうだ。我儘を云つてすまないが、矢つ張りK病院にして貰はう」

そこで、新橋のタクシイへ電話をかけて、彼等の行く道を逆に迎ひに來させようと云ふことにして、昌造の俥だけ先に自動電話のある街角まで走らせた。種々の名で引いてみたが、氣が急いてゐるせゐか、どうしても番號が知れないので、昌造がひとりでワク／＼してゐる所へ、もう佐々の俥が追ひついて來た。その由を告げながら、自動電話の灯で佐々の顏を見ると、蒼ざめてもゐたが、瞳孔が開いたとはかう云ふのを云ふのだらうと思はれるやうな、生氣のない、凄い目付をして一つの所を見詰めてゐた。昌造はこりやいけないと思つた。

「U病院で我慢して貰はう。それだともうすぐなんだから」

「どうか、ぢやアさうしよう」案外佐々は素直だつた。昌造はU病院に電話で知らせて置くことにして、佐々の俥を先にそこへ向はせた。電話で大分手間取つて、彼が再び俥に乘つた時には、急にゐても立つてもゐられないやうな不安に襲はれてゐた。大急ぎ／＼と彼は俥の上でぢだんだを踏んだ。俥夫も、人通りの少ない公園を一生懸命に走つてくれた。然しいくら急いでも、行手に佐々の俥が見えなかつた。昌造は目を瞑りながら、兩手に力を込めて、手拭を絞るやうに、ステッキをキリ／＼捩り廻してゐた。濡れた佐々の帽子で箍をはめられたやうに堅く締めつけられてゐる彼の頭は、なかがキューン／＼と鳴つてゐるやうな氣がした。

――佐々は死ぬかも知れない！

四五年前に昌造は、オーガスト・ジョンとオズボーンの話を聞いて、佐々を描かうと思つたことはあつた。しかし、佐々が死ぬかも知れない！と云ふ心持に直接したのはこれが初めてだつた。それは全く有り得ないからこそ、考へても考へられないやうなことだつた。その言葉には意味があるやうでないやうだつた。

佐々は死ぬかも知れない！

いくら思つても、悲しくも、悲しく……嬉し

くも、倘更ら可笑しくも、――どんな感情も一つも浮び上つて來なかつた。その癖彼は、嘗て自分が彼を殺さうと思つたことを知つてゐた。さうかと思ふと、佐々の遺物のあとにでも書くやうな、追憶の文章の突飛な一部分がありあり[illegible]に浮んで來た。佐々が死ねば彼は非常に悲むだらう、と思はれた。しかし、死ぬかもしれない！ と云ふ事實に伴ふ感情は、あるやうで、漠々として霧のやうに取りとめない、あいまいなかに擴がつてゐた。

その晩昌造は、怪我人の枕もとで一晩あかした。醫者は、[illegible]生命に關するやうな重傷では勿論ないが、右の肩胛骨の下の打撲傷から何か内臓に餘病を惹き起せば……と危んでゐた。その上佐々は、全く記憶を失つて了つた。手術を終つて病室の寝床に横たへられた時に、彼はヒドく亢奮して、頬を赤くして、機嫌よくニコ〱と笑つてゐた。さうして、

「一體俺はどうしたんだい」と昌造に尋ねた。あらましのことを話して聞かすと、

「さうか、電車でやられたのかい。さうかなア、隨分間抜けたことをしたもんだなア」と笑つた。

それから、R病院に通つてゐるのかどうかを確めて、佐々はあの病氣が惡くなつたんだと思つてゐたと云つた。佐々はこの頃何か仕事をしてゐたのかね」と訊く、長篇を書きかけてゐる由を答へると、「さうかなア、ちつとも覺えてゐないなア、どんなのだい」「君がR市へ行つた時分のことから書き出してさ」「ア、さうか、俺はR市へ行つてたのかね」と、こんなことまで云ふと、また、一體俺はどうしたんだ」と初めの質問にあと戻りして、殆ど一つも狂はずに同じ順序で同じことを一順尋ねて了ふと、また最初の質問にすぐ戻つて行く。そして、それほど記憶を失つて了つたと云ふことには、自分で全く何等の不安をも感じてゐないらしい。初めのうちは昌造は、こりや悲慘なことになつて了つたと思つてゐたが、一晩中、少くも二十遍以上同じ返事を繰り返させられたので、仕舞には五月蠅く、少し癇癪さへ立つて來た。[illegible]亢奮してゐたし、[illegible]寝られさうもなかつたのに、故意と横になつて目をふさいで了つた。それに、その記憶力を失つたことは、一時的の現象だらうと思はれたから。

翌る日午近く、昌造は血に染つた浴衣や、『罪と罰』などを風呂敷包みにして、炎天に寝不足な眉を顰めながらうちへ向つた。その時分には、佐々はスヤ〱眠つてゐた。歸りしな外科醫の病室で醫者に確めて得た所では、もう十中八九心配のないことも解つた。

――佐々は助かつた！

かう思ふと昌造は、何か[illegible]ない氣がした。彼は吃驚した、俺は、ほんとに呆れ返つた人間だ！ と思ふ。[illegible]心の底では安心した[illegible]男な[illegible]、ゆうべ[illegible]夢中になつて[illegible]やうない！

佐々の怪我はドン〱快くなつて行つた。昌造は見舞に行つて、よく佐々の[illegible]たちと一緒になつた。この上もなく佐々を愛してゐる祖母が、孫の枕もとで、溢れるやうな喜びに老つた軀を震はしてゐるのを見た時には、昌造は不思議な不安を感じた。「俺は佐々の生死よりも、この人たちの喜びが見たかつたのではなかつたらうか。若しこのお婆さんが、喜びの代りに悲みで震へてゐたとしたら……」

老祖母は繰り返し〱昌造に禮を云つた。さうされると、昌造も、何か自分がしたことか、特別善いことでもあつたやうな氣がして來て、嬉しさうにニコ〱してゐた。

（大正五年六月作）

年譜

明治二十一年（戊子）

七月十四日、横濱市月岡町なる横濱税關局長官舍に、有島武の四男として生れ、英夫と命名。誕生に先立つこと三日、母幸子の里なる山内家の當主英郎、任地大阪に於て死亡せしにより、出生と同時に山内姓を襲ふこととなりたるも、實家の祖母と共に依然有島家に於て養育せらる。武郎、愛子、壬生馬、志摩子、隆三の三兄、二姉あり。

明治二十六年

六月、有島一家と共に東京麹町に移る。學齡に達せしも、[illegible]を以て入學せず、專ら家母によりて[illegible]を自修せしめられたり。

明治二十七年

十一月、更に東京に移り、翌年一月より赤阪區仲ノ町小學校に通學す、末弟行郎生る。

明治二十九年

四月、麹町區下六番町に移ると共に、番町小學校に轉じ、十二月、更に學習院に入學、初等學年三年生たり。

明治三十二年

六月、山内家唯一の長老たりし祖母靜子病死す。父母はいませしかど、この祖母の鍾愛は殊に深く、世に謂ふ「おばあさん子」の觀ありしに、一朝この事に會し、哀愁極めて切なるものありき。

明治三十四年

學習院中等學科に編入せらる。既にこの頃より文藝作品に親しみしは、家兄、武郎、壬生馬の感化に負ふところ尠なからざりしなり。

明治三十九年

學習院高等學科に進む。[illegible]雜誌の編輯部委員たりしことあり。文學書の亂讀と觀劇とのために、學業を擲ちしかば、在學中、成績は常に甚だ擧らざりき。

明治四十一年

九月より翌年同月に至る一年間、竹馬の友たる園池公致、兒島喜久雄、田中治之助、正親町實慶等と共に廻覽雜誌一「麥」を月一回編輯し、創作の初歩を修行す。武者小路實篤、志賀直哉等に負ふ所尠しとせず。

明治四十二年

東京帝國大學文科英文科に入學せしも、聽講月餘にして倦み、やがて退學す。折から、家母より、山内家に屬する資産、人一人が、慎しやかに一生を送るに足るものあるを告げられしかば、遂に意を決し、專ら文學作家たらんことを期するに至れり。これより先、中學五六年生時代に、次兄壬生馬の、身を畫道に投ぜんとするを知りし時、多大の刺戟をうけしも、意志弱き己れを省み、生活苦のために文品の卑しからんことを慎るゝの餘、自ら實業家として立ち、[illegible]

盡瘁せんと志しゐたりしなり。

明治四十三年

四月、武者小路實篤、志賀直哉、木下利玄等の「望野」、萱野二十一、柳宗悦等の「桃園」、並に前記「麥」の三廻覽雜誌の同人相集り、これに武郎、壬生馬、長與善郎、山脇信德等の新同人を加へて「白樺」を創刊す。年少にして公に文を草すること、父の允すところたらず、爲に里見弴なる筆名に隱れて、短篇「お民さん」を以て「白樺」誌上に初見參す。時に二十三歳なり。

明治四十四年

北原白秋に囑せられて『入間川』を「ザンボア」に寄す。これ、所謂よその雜誌に執筆せる最初なり。尙、當時未明「大森女の話」「河岸のかへり」「友達の見舞」「易い追儺」等の習作的短篇あり

明治四十五年　大正元年

十一月、「白樺」に發表せる『手紙』は當時やゝ自信ありし作なり。

大正二年

三月より、「白樺」誌上に、最初の長篇『君と私と』を連載せしも、十一月號の原稿、印刷所にて紛失し、再び稿を繼ぐの勇氣なく、遂に未完のまゝ擱筆す。

この年十月より放浪の旅に上り、歲尾、大阪南地の或る藝者の屋形(自宅)に寄寓す。素材を同家の老母より得たる『實川延童の死』(後『河岸』と改題)は、稿を改むること四度、出來榮やゝ意に滿ちたり。

大正三年

夏、一時歸京しゐたる時、武者小路實篤を通じて、夏目漱石の依頼をうけ、「東京朝日新聞」に『母と子』を連載し、始めて原稿料を得。

大正四年

四月、文壇登龍門の稱ありし「中央公論」に、『晩い初戀』を發表せしより、續いて六月「太陽」の『箱根行』、十月「新小說」の『夏繪』と、作品、漸にして市價を生ずるに至る。「白樺」所載の『勝負』も亦苦心の作なり。

十二月、大阪にて寄寓しゐたる山中家の女、まさを携へて歸京し、父母の允を強請して遂に妻と定む。依つて有島家と別れて、麴町五丁目の裏通りに一戶を構へたり。これより先、七月、まさによりて長女を得、夏繪と命名せしも、五十日を經ずして夭折す。

大正五年

二月、「中央公論」に標題を附せざる小說を發表し、新進作家として確固たる地步を占む。『善心惡心』『俄あれ』『女按摩』『妻を買ふ經驗』『失はれた原稿』等いづれも同年中世評を得たる作なり。

十一月、泉鏡花の推挽によりて、最初の短篇集『善心惡心』を春陽堂より上梓することを得たり。

七月、麴町區山元町一丁目に轉居。

八月、嫂、安子を、十二月、父、武を亡ふ。

大正六年

この一年中の作品は『銀二郎の片腕』『三人の弟子』『恐しき結婚』『ひえもんとり』『或る年の初夏に』『幸福人』『不幸な偶然』『大火』等十六篇なり。

五月、第二短篇集『三人の弟子』、選集『恐し

き結婚』出版。
一月、長男を得、洋一と命名す。

大正七年
『一目惚』『刑事の家』『病床記』『子ごろし』『最後の一つ手前のもの』『けむり』等を創る。
七月、選集『不幸な偶然』出版。
二月、劇甚なる丹毒に侵され、危篤の狀態にあること數日なり。
七月、次男、鐵郎生る。
十二月晦日、四谷區右京町の新居に移る。

大正八年
五月より『時事新報』紙上に長篇『今年竹』を發表せしも、休載多く、百餘回に及んで遂に中斷せらる。
『慾』『强氣弱氣』『毒草』『彼と小娘』『雪の夜話』等はこの年の作なり。
五月、選集『我』、七月、選集『未明』、九月、第三短篇集『慾』を出版。
十一月より、吉井勇、久米正雄、田中純と共に雜誌「人間」を興す。
十二月、次女、瑠璃子を得たり。

大正九年
『髪の鞭打』『夜櫻』『父親』『桐畑』『蛙』『川瀬の音』等十二篇を作す。
五月、選集『强氣弱氣』、八月、第四短篇集『毒草』、九月、選集『善心惡心』を出版。

大正十年
「改造」誌上に前年より連載し來れる『潮風』を完結し、他に『或る老婦の哲學』『夜番』等を創る。尙、中村吉右衛門のために處女脚本『新樹』を草し、六月、新富座に上演す。
五月、長篇『桐畑』出版。
六月號を以て「人間」を廢刊す。
九月より逗子新宿に移り住む。

大正十一年
『甘酒』『おせっかい』『直輔の夢』の三中篇の他、『截紙刀』『親』『暗い夜空』等の短篇あり。
三月、選集『銀二郎の片腕』、四月、第五短篇集『幸福人』、選集『勝負』、選集『彼と小娘』、五月、中篇『潮風』、九月、感想隨筆『赤き机に凭りて』を出版。
六月、三男、湘三生る。

大正十二年
前年十二月二十六日より『時事新報』に連載せる『多情佛心』震災のために一時中絶すと雖も、遂に大晦日に及んで約二百回、二千枚に垂とするの長篇となれり。他に『四葉の苜蓿』『火事』（後に『滿潮』と改題）の二中篇、『鯉の巣』『踏切』『椿』等の短篇小説、及び戯曲『平凡長壽』あり。
一月、中篇『直輔の夢』、七月、中篇『おせっかい』、第六短篇集『父親』出版。
六月、長兄、武郎を亡ふ。
震災にて逗子の假寓崩壞、上京して處々轉々せる後、麹町下六番町に一時の住宅を得。

大正十三年
六月より十二月に亙り、『大阪毎日』『東京日日』の兩紙上に『陷沒』（後に『凡夫愛』と改題）を連載。
『百年の戀』『雨に咲く花』『大臣の晝飯』『不貞』『仕合な藤七』等のほか、戯曲『愛憎不二』『正直』『嫉妬』成る。
一月、長篇『四葉の苜蓿』、五月、長篇『多情佛心』前篇、六月、感想隨筆『白醉亭漫記』、八月、長篇『多情佛心』後篇、九月、第七

短篇集『雨に咲く花』を出版。
四月、鎌倉藏屋敷に假寓を得て移り住む。

大正十四年
『石門の東に』『伊豫すだれ』『夢みたいな話』『緣談嬢』『オー・ド・キニン』『蚊やり』『或る片輪者』『ネクタイ』等の短篇小說、並に、『正直次郞』『眼鏡』の二戲曲成る。
五月、長篇『凡夫愛』、八月、『文藝管見』、十月、長篇『冲滿』、『現代小說全集第七篇　里見弴集』、十二月、第八短篇集『緣談嬢』を出版。
六月、四男、靜夫を擧ぐ。

大正十五年　昭和元年
『乾板を碎く』『その人』『最初の泊』『小暴君』等の短篇、『たのむ』『白扇の下』『小暴君』『オンネコタン』等の戲曲のほか、「婦人公論」に一年連載の『大道無門』と、『苦樂』創刊號以來滿三年間連載の『今年竹』の二長篇を完成す。
五月、戲曲集『如心』、『選集』をんな』を出版。
十二月、鎌倉西御門に住宅を構へ移る。

昭和二年
『私は見た』『陰霽』『夏籠』『川はまり』等の短篇、戲曲『紐』、ラヂオドラマ『或る夫婦』のほか、「改造」二月號より『善魔』を、七月より「報知新聞」に『蛇咬毒』を、共に連載中。
三月、長篇『大道無門』を上梓す。

角力をとつた記憶

晩年の五六年はさうでもなかつたが、私が覺えてからそれまでの父と云ふ人は、ひどく忙しさうで、めつたにうちにはゐなかつた。朝われわれが起きる時分には、冬だと、禿頭がほんの少しばかり見えるか見えないほど、スッポリ夜具をかぶつて了つて、グウグウと可なり大きな鼾をかいて寢てゐた。それツきりこつちは學校へ行つて了ふと、よる私たちの寢る前に歸つて來ることは稀だつた。だから、三日も、四日も、禿のさきだけしか見ないで過すことが多かつた。たまにうちにゐると、客の絶えまがなかつた。絶えまがあると小さな手帳に、短くなつた赤鉛筆で、クシャクシャに何やら書いてゐた。

そんなわけで、私は、まるで、父の側へよつて弄具にされたり、甘やかされたり、一緒に遊んだりした憶えがない。たつた一度、六つか七つの頃、夏、[illegible]の別荘の庭で、兄弟たちがよつて角力とつてゐると、なんと思つたのか、父がふんどし一つになつて飛び出して來て、さアこい、と構へたのだが、年の順にだんだん轉がされて、やがて私の番が來て、一生懸命に飛びかかつた時の嬉しさを、今もつて忘れない。あんなに嬉しいと涙が出るものだと云ふ經驗を、その時に初めて知つた。前に云つたやうなわけだつたから、その時分私は、父がさう好きだつた筈はないのだけれど、それでも、なんとも云へず嬉しかつたのは事實だ。

私の子供たちが、このごろそろそろ丁度いい弄具になつて來て、うちにさへゐれば、晩飯後など、差し上げたり、振り廻したり、喧嘩ごつこをしたりして相手になつてゐるが、嬉しさうには違ひないけれど、とても涙がにじみ出るほどではなささうだ。私のは、少しづつ、なしくづしに嬉しがらせてゐるので、父のは、そいつを、いつぺんに纏めて、私にさづけてくれたわけだらう。親子でなければ通用しない方法だ。

（『白樫亭漫記』の「亡き父の五十年祭に」より）

佐藤春夫集

僕も彷徨者であるらしい。僕の道は遙遙として居る。時に南に向ひ時に北を指し、又東又西。人々は僕が自分の向いたところが常に遠くなかったを怪しむかも知れぬ。しかし僕の道は一路である。さうして僕は歩きながら花をつむ。雛犬の声があゝとまらではおられざる犬を呼んで口笛を吹いた。人々は行くてのない散歩者だとし僕を思って居るらしい。

佐藤春夫 三十三才

改作 田園の憂鬱
或は 病める薔薇

I dwelt alone
In a world of moan,
And my soul was a stagnant tide.
Elger Allan Poe.

私は、呻吟の世界で
ひとりで住んで居た。
私の靈は澱み腐れた潮であつた。
エドガア アラン ポオ

その家が、今、彼の目の前へ現れて來た。

初めのうちは、大變な元氣で砂ほこりを上げながら、主人の後になり前になりして、飛びまはり纏はりついて居た彼の二疋の犬が、やうやう柔順になつて、彼のうしろに、二疋並んで、そろそろ随いて來るやうになつた頃である。高い木立の下を、路がぐつと大きく曲つた時に、

「ああやつと來ましたよ」

と言ひながら、彼等の案内者である赭毛の太つちよの女が、片手で日にやけた額から滴り落ちる汗を、汚れた手拭で拭ひながら、別の片手では、彼等の行く手の方を指し示した。男のやうに太いその指の尖を傳うて、彼等の瞳の落ちたところには、黒つぽい深緑のなかに埋もれて、目眩しいそはそはした夏の朝の光のなかで、鈍色にどつしりと或る落着きをもつて光つて居るささやかな萱葺の屋根があつた。

それが彼のこの家を見た最初の機會であつた。彼と彼の妻とは、その時、各この草屋根の上にさまようて居た彼等の瞳を、互に相手のそれの上に向けて、瞳と瞳とで會話をした——

「いい家のやうな豫覺がある」

「ええ私もさう思ふの」

その草屋根を見つめながら歩いた。この家ならば、何日か遠い以前にでも、夢にであるか、幻にであるか、それとも疾走する汽車の窓からでもあつたか、何かで一度見たことがあるやうにも彼は思つた。その草屋根を焦點としての視野は、實際、何處ででも見出されさうな、平凡な田舍の横顔であつた。而も、それが却つて今の彼の心をひきつけた。今の彼の憧れがそんなところにあつたからである。さうして、彼がこの地方を自分の住家に擇んだのも、亦この理由からに外ならなかつた。

廣い武蔵野が既にその南端になつて盡きるところ、それが漸くに山國の地勢に入らうとする變化——言はば山國からの微かな餘情を湛へたエピロオグであり、やがて大きな野原への波打つプロロオグでもあるこれ等の小さな丘は、目のとどくかぎり、此處にも其處にも起伏して、一筋の平坦な街道が東から西へ、また別の街道が北から南へ通じて居るあたりに、その道に沿うて一つの草深い農村があり、幾つかの卑下つた草屋根があつた。それはTとYとHとの大きな都市をすぐ六七里の隣にして、謂はばそれ等の劇しい旋風の境目に出來た眞空のやうに、世紀からは置きつ放しにされ、世界からは忘れられ、文明からは押流されて、しよんぼりと置かれて

居るのであつた。
一たい、彼が最初にこんな丘の上で、限りなく樂しく、又珍らしく心のくつろいだ自分自身を見出したのは、その同じ年の春の或る一日であつた。こんな場所にこれほどの片田舍があることを知つて、彼は先づ驚かされた。しかもその平靜な周圍の風物は彼に珍らしかつた。ずつと南方の或る半島の突端に生れた彼は、青い海と險しい山とが嚴しく嚙み合つて、峽の間で人間が微小にしかし綺麗に生きて居る一小市街の傍を、大きな急流の川が、その上に筏を長長と浮べさせて押合ひながら荒荒しい海の方へ先を爭つて流れて行く彼の故郷のクライマックスの多い戲曲的な風景にくらべて、この丘つづき、空と、雜木原と、田と、畑と、雲雀との村は、實に小さな散文詩であつた。前者の自然が彼の峻嚴な父であるとすれば、後者のそれは子に甘い彼の母であつた。一時は放蕩息子に自分自身をたとへた彼は、息苦しい都會の眞中にあつて、柔かに優しいそれ故に平凡な自然のなかへ、溶け込んで了ひたいといふ切願を、可なり久しい以前から持つやうになつて居た。おゝ!そこにはクラシックのやうな平靜な幸福と喜びとが、人を待つて居るに違ひない。Vanity of vanity, vanity, all is vanity!「空の空、空の空なる哉都て空なり」或は然うでないにしても――いや、理窟は何うでもかまはない。都會のただ中では息が詰つた。人間の重さで壓しつぶされるのを感じた。其處に置かれるには彼はあまりに纖細な機械だ、其處が彼をいやが上にも纖細にする。そればかりではない、周圍の騷がしい春が彼を一層孤獨にした。嗚呼、こんな晩には、何處でもいい、しつとりとした草葺の田舍家のなかで、暗い淡いランプの陰で、手も足も思ふ存分に伸ばして、前後も忘れる深い眠に落ち入つて見たい、といふ心持が、甘やかな白熱燈の下を、石疊の路の上を、疲れ切つた漂浪人のやうな足どりで歩いて居る彼の心のなかへ、切なく込上げて來ることが、まことに屢であつた――おお!深い眠、おれはそれを知らなくなつてからもう何年になるであらう?深い眠!それは言はば宗教的な法悅だ。おれの今最も欲しいのはそれだ、熱烈な法悅だ、即ち眞理がほんとうに生きてゐる人の法悅だ。俺は先づそれを求める。それのある處へ行かう。さあ早く行かう!」彼は自分自身の心のなかでさう呟いた。或は、口に出してさへ呟いた。さうして矢も楯もたまらない、郷愁に似たやうな名づけやうのない心で、その何處とも知れない場所へ、自分自身を連れて行きたかつたのであつた。――彼は老人のやうな理智と青年らしい感情と、それに子供ほどな意志とをもつた青年であつた。

その家が、今、彼の目の前に現れて來たのである。

道の右手には、道に沿うて一條の小溝があつた。道が大きく曲れば、溝もそれについて大きく曲つた。そのなかを水は流れ流れ來るのであつた。雜木山の裾や、竹藪の傍や、廐の横手や、藪の下や、門口や片側に沿うなり大きな百合や葉をのぞかせた叢の端などを通つて。幅六尺ほどのこの溝は、事實は田へ水を引くための灌漑水であつたけれども、遠い山間から來た川上の水を眞直ぐに引いたものだけに、その美しさは溪と言ひ度いやうな氣がする。青葉を透して降りそそぐ日の光が、それを一層にさう思はせた。――いや、この堤上を流して、流し去して何の濁りも立てずに、淺く走つて行く水は、時時ものに堰かれて、[illegible]柄になく大きく光つたり、さうかと思ふと縮緬の皺のやうに繊細に、或は或る小さなびくびくする痙攣の發作のやうに光つたりするのであつ

た。或は、その小さな閃きが魚の鱗のやうに重り合つて居るところもあつた。涼しい風が低く吹いて水の面を滑る時には、其處は細長い瞬間的な銀箔であつた、薄だの、もう夙くにあの情人にものを訴へるやうなセンチメンタルな白い小さい花を失つた野茨の一かたまりの藪だの、その外、名もない併しそれぞれの花や實を持つ草や灌木が、溝の兩側から茂り合ひかぶさりかかると、水はそれらの草のトンネルをくぐつた。さうしてその影を黒く涼しく浮べては、ゆらゆらと流れ去つた。或る時には、水はゆつたりと流れ淀んだ。それは旅人が自分の來た方をふりかへつて佇むのに似て居た。そんな時には土耳古玉のやうな夏の午前の空を、土耳古玉色に——或は側面から透して見た玻璃板の色に、映して居るのであつた。快活な蜻蛉は流れと微風とに逆行して、水の面とすれすれに身輕く滑走し、時時その尾を水にひたして卵を其處に産みつけて居た。その蜻蛉は微風に乘つて、しばらくの間は彼等と同じ方向へ彼等と同じほどの速さで、一行を追ふやうに從うて居たが、何かの拍子についと空ざまに高く舞ひ上つた。彼は水を見、また空を見た。その蜻蛉を呼びかけて親暱したいやうな子供らしい氣持さが、自分の心に湧き出るのを彼は知つた。さうしてこの樂しい流れが、あの家の前を流れて居るであらうことを想ふのが、彼にはうれしかつた。

劇しい暑さは苦しい、樂しい、と表現しようとして木の葉の一枚一枚が寶玉の一斷面のやうに輝くと、それらの下から蟬は燒かれて居るやうに呻いた。灼けた太陽は、空の眞中近く昇つて來て居た。併し、彼の妻は、暑さをさほどには感じなかつた。併し、彼の妻から暑さを防いだものは、その頭の上の紫陽花色に紫陽花の刺繍のあるハラツル——貧しい婦の天蓋——ではなかつた。それは彼の女の物思ひであつた。彼の女は今歩きながら考へ耽つて居る、暑さを身に感じる閑もないほど。彼の女は考へた——さうすれば今間借りをして居る寺のあの西日のくわつと照し込む一室から涼しいところへ脱れられる。それよりもあの下卑た俗惡な慾張りの口うるさい梵妻の近くから脱れられる。さうして、靜に、涼しく、二人は二人して、言ひたい事だけは言ひ、言ひたくない事は一切言はずに暮したい住みたい。さうすれば、風のやうに捕捉し難い海のやうに纖細過ぎるこの人の心持も氣分も少しは落着くことであらう。あれほどの意氣込みで田舍を憧れて來ながら、僅ながらもわざわざ買つて貰つた自分の畑の地面をどう利用しようなどと考へて居るでも無く（それはもとよりさうであらうとは思つたけれども）それよりも本一行見るではなく字一字書かうとするでもなく、何一つ手にはつかぬらしい。さうして若しそんな事でも言ひ出せばきつと吐鳴りつけるにきまつて居る、それでなくてさへも、もう全然駄目なものと見放されて居る——わけて自分との早婚すぎる無理な結婚の以後は、殊にさう思はれて居るらしい父母への心づかひもなく、ただうかうかと——ではないとあの人自身では言つても、とにかくうかうかと、その日その日の夢を見て暮して居るのである。何時、建てるものとも的のない家の圖面で、而も實用的といふやうな分子などは一つも無いものを何枚も何十枚も、それは細かく細かく描いて居るかと思ふと、不意に庭へ飛び出して、犬の眞似をして犬と一緒になつて、吠えて居る草いきれの草原を這つたり轉げまはつたり、さうかと思ふと突然破れるやうな大聲で笑ひ出したり叫び出したりするこの人は、ほんたうに何かが非常に寂しいのであらう、何事も自分には滿足させてくれはしないから解る筈もない。何か自分には隱して

居るのではなからうか……。彼の女は、五六日前に讀み了つた藤村の「春」を思ひ出した。單純な彼の女の頭には、自分の夫の天分を疑うて見ることなどは知らずに、自分の夫のことをその小說のなかの一人が、自分の目の前へ——生活の隣りへ、その本のなかから拔け出して來たかのやうにも思つて見た……あれほど深い自信のあるらしい藝術上の仕事などは忘れて、放擲して、ほんとうにこの田舍で一生を朽ちさせるつもりであらうか。この人は、まあ何といふ不思議な夢を見たがるのであらう……。それにしても、この人は、他人に對しては、それは親切に、優しく調子よくしながら、何故からまで私には氣難かしいのであらう。若しや、あの人のある女に對する前の戀がまだ褪せきらない間に、私はあの人の胸のなかへ這入つて行つて、そのためにあの人はしばらくはあの女を忘れては居たけれども、根強く殘つて居たあの戀が何時の間にか再び自分をのけものにしてまた芽を出したのではなからうか。さうして私には辛くあたる……。今のままでは、さぞかし當人も苦しいであらうが、第一そばに居るものがたまらない。返事が氣に入らないといつては轉ぶほど突きとばされたり、打たれたり、何が氣に入らないのか二日も三日も一言も口を利かうとはしなかつたり……。あの人はきつと自分との結婚を悔いて居るのだ。少くとも若し自分とではなく、あの女と一緒に住んで居たならばどんなに幸福だつたらうかと、時時、考へるに違ひない。考へるばかりではない、現に、自分にむかつてさう言つたことさへある——「あの時、おれがあの女、あの純潔な素直な娘と一緒になれさへしたならば、あの人が私をよく統一して、おれは今ごろ、いろいろな意味でもつと美しいもつと善い生活が出來て居ただらうに」と……。實際あの女は、自分も知つて居るけれども、自分などよりはもつと美しく、もつと優しい。私はあの人があの女をどんなに深く思つて居るかはよく知つて居る……いや、いや、さうではない。あの人はやつぱりあの人自身で何か別のことを考へ込んで居るのである……さうだ、夫は、「ただ、私をそつとして置いてくれ」と言つた……

ふと、

「俺には優しい感情がないのではない。俺はただそれを言ひ現すのが恥しいのだ。俺はさういふ性分に生れついたのだ」

彼の女は、昨夜、いつになく打解けて彼が語つた時、彼の女にむかつて言つた彼の女の夫の言葉を思ひ出すと、その言葉を反芻しながら歩いた。さうして未だ見たことのない家の間どりなどを考へた。たとひ新婚の夢からはとうに覺めたところであつても、こんな暑さの下でも、たゞ單に轉居するといふだけの動機で心持がふだんよりもずつと活き活きとして來て、こんなことを考へて悲しんだり、喜んだり、慰んだりすることの出來るのは、まだ世の中を少しも知らない幼妻の特權であつたからだ。さうしてそれがまた、あの案内の女が、喋りつづけに喋つて居るその家の出來に就て、何の興味も持たぬらしく、ただ無愛想に生返事を與へて居るに過ぎなかつた所以でもある。——この案内の女は、その長い暑苦しい道の始終を、ながながと喋りつづけて休まなかつた。この女は自分の興味をもつて居るほどの事なら、他の何人にとつても、非常に面白いのが當然だと信じて居る單純な人人の一人であつたから。

こんな道を、彼等は一里近くも歩いた。

さうしてその家は、もう、彼等一同の目の前に來てゐた。

家の前には、果して渠が流れて居た。一つの小さな土橋が、茂るがままの雜草のなかに一筋

細く人の歩んだあとを殘して、それの上を歩く人人に、あの幅一間あまりの渠を越させて、人人をその家の入口へ導く。

入口の左手には大きな柿の樹があつた。さうして奥の方にもあつた。それらの樹の自由自在にうねり曲つた太い枝は、見上げた者の目に、「私は永い間ここに立つて居る。もう實を結ぶことも少くなつた」とその身の上を告げて居るのであつた。その老いた幹には、大きな枝の腋の下に寄生木が生えて居た。その樹に對して右手には、その屋敷とそれの地つづきである桐畑とを區限つて細い溝があつた。何の水であらう、水が涸れて細く――その細い溝の一部分を何細く流れて男帶よりももつと細く、水はちよろちよろ喘ぎ喘ぎ通うてゐた。じめじめとした場所を、一面に紫色の花の月草が生え茂つて居た。また子供たちが「こんぺたう」と呼んで居るその菓子の形をした灰赤く白い小さな花や、又「赤まんま」と子供たちに呼ばれて居る草花なども、その月草に雜つて一帶に蔓つて居た。それはなつかしい幼な心をよびさます叢であつた。其間は螢の宿であらう小草のなかから、葉には白い竪の縞が鮮に染め出された蘆が、すらりと、十五六本もひとところに集つて、爽やかな長いそのうへ幅廣な葉を風にそよがせて、ざわざわと音をたてて居るのであつた。屋敷の奥の方から流れ出て來た水は、それらの小草の、莖をくぐつてそれらの蘆の短い節節を洗ひきよめながら、うねりうねつて、解きほぐした絹絲の束のやうにつやつやしく、なよやかに搖れながら流れた。さうして、か細く長長しい或る草の葉を、生えたままで流し倒して、その草のために一時動流することをさへぎられたそれらのささやかな水は、その草の葉を傳うて、より大きな道ばたの渠のなかへ、水時計の水のやうにぽたりぽたりと落ち濺いで居た。彼にはこの家の屋後に、湧き立つ小さな清新な泉がありさうにも感ぜられた　さういふ地勢でもあつたから。

家の背後は山つづきで竹藪になつて居た。竹のなかには素晴しく大きな丈の高い椿が、この清楚な竹藪のなかの異端者のやうに、重苦しく立つて居た。屋敷の庭は丈の高い――人間の背丈よりも高くなつた榊の生垣で取り圍まれてあつた。家全體は、指顧の遠さで見た時にさうであつた如く、目の前に置かれて見ても、茂るにまかせた樹樹の枝のなかに埋められて、茂るにまかせた草の上に置かれてあつた、

犬は一疋づつ土橋の側から下りて行つて、灌水の水を交交に味うた。

彼はその土橋を渡らうともせずに、「三徑就荒」と口吟みたいこの家を、思ひやり深さうにしばらく眺めた。

「ねえ、いいぢやないか、入口の氣持が」

彼はこの家の周圍から閑居とか隱棲とかいふ心持に相應した或る情趣を、幾つか拾ひ出し得てから、妻にむかつてかう言つた。

「然うね。でも隨分荒れて居ること。家のなかへ這入つて見なければ……」

彼の妻は少少不安さうに、又さかしげに、氣まぐれな夫をたしなめる時にすべての妻がする口調をもつてさう答へた。併し、すぐ思ひかへして、

「でも、今のお寺に居ることを思へば、何處だつていいわ」

今飲んだ水から急に元氣を得た二疋の犬は、主人達よりも一足さきに庭のなかへ跳り込んだ。松の樹の根元の濃い樹かげを擇んだ二疋の犬どもは、わがもの顔に土の上へ長長と身を横へた。彼等は顔を突き出して、下顎から喉首のところを地面にべつたりと押しつけ、兩方から同じ形に顔を並べ合つた。さうして全く同じや

うな様子に顔を向けて、彼等を投げ出した様子は、まことに愛らしいシンメトリイであつた。赤い舌を垂れて、苦しげな息を吐き出し乍ら、庭に這入つて来た彼等の主人達の顔を無邪気な上眼で眺めて、静かに穏しさうに尾を動かして見せた。いかにも落着いたらしいその姿は、此処はもう自分たちの家だといふ事を、彼等の主人たちよりもさきに十分に予感して居るらしいやうにも、彼には見られるのであつた。若しこの時、妻が彼のそばに居たならば彼は妻にかう言つたらう——

「ね、フラテもレオ(二つとも犬の名)も賛成してゐるよ。」

けれども彼の妻は、案内の女と一緒にその縁側の永い間閉されて居た戸を開けようとして、錆で鍵穴をがたがたと言はせて居る。

雨といふ雨に茂りに茂つて、緑は幾重にも積み重つた。錯雑した枝と枝とは網の目になり重になつて、庭はほとんど日かげもさし込まなかつた。土の匂は黒い地面から、冷冷と湧いて来た。彼は足もとから立ちのぼるその土の匂を、香を匂ふ人のやうに官能を尖らかせて沁み沁みと味うて見た——ぢやらぢやらと涼しく音を立てて居た鍵束の音がやまつて、縁側の戸が開けられるまで。

* * * * * *

「やつと、家らしくなつた」

昨日井戸前で洗ひ浄めた障子を、彼の妻は不慣れな手つきで張つたのである。最後の一枚を張り了つた時、それを茶の間と中の間とのあいだの敷居へ嵌めようとして立つて居る夫の後姿を見やりながら、妻は満足に呟いてさう言つた。

「やつと家らしくなつた」彼の女は同じ事を重ねて言つた。「畳は直ぐかへに来るといふし……。でも、私はほんとうに厭だつたわ、をとつひ初めてこの家を見た時にはねえ。こんな家に人間が住めるかと思つて——

でも、まさか狐狸の住家ではあるまい——

「でもまるで浅茅が宿よ。でなけりや、こほろぎの家よ。あの時、畳の上一面にぴよんぴよん逃げまはつたこほろぎはまあどうでせう。恐しいほどでしたわ」

「浅茅が宿か、浅茅が宿はよかつたね。……おい、以後この家を雨月草舎と呼ばうぢやないか」

(彼等二人は——妻は夫の感化を受けて、上田秋成を讃美して居た。)

夫の愉快さうな笑ひ声を、久しぶりに見た妻はうれしかつた。

「そこで、今度は井戸ですよ、これが大変ね。一年もまるで汲まないといふのですもの、水だつて腐つて居ますわねえ」

「腐るとも、毎日汲み上げて居なければ。俺の頭のやうにね」

この言葉に、又叱られるかと思つた妻は、今までのはしやいだ調子を忘れておづおづと夫の顔を見上げた。しかし夫の今日の言葉はただ口さきだけであつたと見えて、その角ばつた顔にはもとのままの笑があつた。それほど彼は機嫌がよかつたのである。それを見て安心した妻は甘えるやうに言ひ足した。

「それに、庭を何とかして下さらなけりやあ。こんな陰気なのはいや！」

疲れて壁にもたれかかつた妻の膝には、彼と彼の女との愛猫が、しなやかにしのび寄つてのつそりと上つて居るところであつた。

「おお猫、猫。お前は暑苦しいねえ」

と言ひながらも、妻はその猫を抱き上げて居るのである。彼の家庭には犬が居る。猫が居る。一たん愛するとなると、程度を忘れて溺愛せずには居られない彼の性質が、やがて彼等の

家庭の習慣になつて、彼も彼の妻も人に物言ふやうに、犬と猫とに言ひかけるのが常であつた……。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

彼等夫婦がこの家に住むやうになつた日から、遡つて數年の前にある――

この村で一番と言はれて居る豪家の、家の老主人は、年をとつて、ひどく人生の寂寥を感じ出した。普通、人にとつてかういふ時に最も必要なものは、老いと若さとを問はず異性であつた。さうしてこの老人は、都會から一人の若い女を連れて來た。この豪家は、この風流人の代にその田の半分を無くしたのだけれども、流石に老人の考へは金持らしいものであつた――ただ美しいだけで、何の能もないやうな女はつれて來なかつた。少し位は醜くとも、年さへ若ければ我慢するとして、村の爲めにもなり、それよりも自分の經濟の爲めにもなるやうな女を擇んだのであつた。一口に言へば、彼は、今まで村に無くて不自由をして居た産婆を副業にする女を需へたのだ。それから自分の家の離れ座敷をとり外して、彼の屋敷からはすぐ下に當るところへ、それを建て直した。冬には朝から夕方まで日が當るやうな方角を考へて、四間の長さをつづく縁があつた。玄關の三疊を設けて、六疊の茶の間には爐を切らせた。黒柿の床柱と、座敷の欄間に嵌込んだ麻の葉つなぎの透しのある障子の細工の細かさは、村人の目をそばだたせた。さすがは、うちの山から一本擇りに擇つて伐り出した柱だ、目ざはりな節一つない、と大工はその中古の柱を愛撫しながら自分のもののやうに褒めた。さうして農家の神神しいほど廣い土間のある、太い棟や梁の眞黒く煤けた臺所とは變つて、その家には、板をしきつめた臺所に、白足袋を穿いて、ぞろぞろ衣服の裾を引摺つた女が、そこで立働くやうになつた。老人は、その家督を四十幾つかになつた自分の長男に譲つた。さてこの老人は幸福であつた。村の人人は、自分の年の半分にも足らぬ若さの茶呑友達を得た隱居に就てかげ口を利いた。併し、そんな事位は隱居の幸福を傷けはしなかつた。

けれども、併しすべての平和と幸福とは、短い人生の中にあつて最も短い。それはちやうど、秋の日の障子の日向の上にふと影を落す鳥かげのやうである。つと來てはつと消え去る。さうして鳥かげを見た刹那に不思議なさびしさが湧く。老人のこれ等の平和の日も束の間であつた。

若い妾は、程なく、都會から一人の若い男を誘うて來た。村の人人は、この若い男を「番頭さん」お産婆の番頭さん、と呼んだ。村の人人は産婆には、果して「番頭さん」が入用なものかどうかを知らなかつた。さうしてこの隱居は、自分の若い妾が、自分には無斷で、若い「番頭さん」を雇入れた事に就て不滿であつた。非常に不滿であつた。第一にこの若い男女の生活は田舎の人人の目には贅澤すぎた。隱居の豫算とは少し違ひすぎた。隱居は彼等がもつとつつましやかであり得ると考へ初めた。その事を彼の妾に度度言ひつけた。初めは遠まはしに遠慮勝ちに。併しだんだん思ひ切つて言ふやうになつた。或る夜には夜中言ひ募ることがあつた。「番頭さん」は多分これ等の對話を壁一重に聞いただらう。或るそんな夜の後の日に――彼の女が初めて村へ來てから一年ばかりの後、若い「番頭さん」を若い妾が雇入れてから半年ほどの後、或る夕方、彼等二人の男女の姿は、突然この村から消えた。夕方に村の方から歸つて來た馬方は、山路の夕闇のなかで、くつきりと浮上つて白い丸い顔が目についたので、よく見ると

「Ｎさんのお産婆」だつた、とその次の朝村の人人に告げた。併し、これは多分、この男が實際にこれを見たわけではなく、彼等が居なくなつたと聞いた時に、思ひついた嘘であつたかも知れない。でなければ彼は歸つて來ると直ぐ、その事を、珍らしげに、手柄顔に言ふべき筈だからである。人はこんな時に、ちよつとこんな事を言つて見たいやうな一種の藝術的本能を、誰しも多少持つて居るものである。それはどうでもいいとして、この話は、話題に饑ゑて居る田舍の人人を喜ばせた、當分の間。さうして二十八の女には、七十に近いあの隠居よりは、二十四五の若者の方が、よく釣合ふべき筈だつたといふのが、村の輿論であつた。

痛ましいのは、若い妻に逃げられたこの隠居が、その後、植木の道樂に沒頭し出した事である。

彼は花の咲く木を庭へ集め出した。今日はあの木をこちらに植ゑ變へ、昨日は別の庭からこの木を自分の庭にうつした。さうして明日は何かよい木を搜し出さねばと、毎日毎日、土いぢりに寧日がなかつた。春には牡丹があつた。夏には朝顔があつた。秋には菊があつた。冬には水仙があつた。さうして、彼の逃げて仕舞つた妻の代りに、二人の十と七つと孫娘を、自分の左右に眠らせた寐のなかで、この花つくりの翁は眠り難かつた。彼は月並の俳諧に耽り出した。

隠居は死んだ、それから丁度一年經つた後に。彼は、かうして集めた花の木のそれぞれの花を僅かばかり樂しんだばかりであつた。さうしてその家は、彼の末の娘と共に村の小學校長のものになつた。村の校長はこの隠居の養子だつたからである。すると拔目のない植木屋があつて、算術の四則には長けて居り、それを實の算盤に應用することにも巧ではあつたけれども、美に就ては如何なる種類のそれにも一向無頓着な、當主の小學校長をたぶらかして、目ぼしい庭の飾りは皆引拔いて行つた。大株の白木蓮、玉椿、櫨、海棠、黑竹、枝垂れ櫻、大きな花柘榴・梅、夾竹桃、いろいろな種類の蘭の鉢。さうしてそれ等の不幸な木はかくも忙しくその居所を變へなければならなかつた。土に慣れ親しむ暇もなかつた。かうしてそれ等のうちの或るものは、爲めに枯れたかも知れない。

小學校長は、ちやうど新築の出來上つた校舍の一部へ住んだ。自分の貰つたこの家は空家にして置いた。さうして居るうちにこの家を借り手があれば貸したいと方方へ申出した。住む人が無ければ、家は荒廢するばかりであるし、たとへ二圓でも一圓五十錢でも、家賃をとつて損になることはない。校長先生のあたまは明晰である。ところが、田舍では大抵一人は自分自身の家を持つて居る。たとひ軒が傾いて、おちた藁屋根にむつくりと青苔が生えて居るやうな破家なりとも、親から子に傳へ子から孫に傳へる自分の家を持つて居た。どんな立派な家にしろ、借家をして住まねばならないやうな百姓は、最後の最後に自分の屋敷を抵當流れにしてしまつた最も貧しい人人に決つて居た。かくて、あの隠居が愛する女のために、又自分の老後の樂しみにと建てたこの家は富に貧しい貧しい百姓の家に化してしまつたのである。隠居が茶の間の茶釜をかけた爐には、大きないぶり勝ちな松薪が、めちやめちやに投込まれて、その煙は田舍家には無駄な天井に邪魔されて、家から外へ拔けて行く路もなかつた。さうして部屋を形造つた壁、障子、天井、疊は直ぐに煤びて來た。氣の毒な百姓の一家は立籠つた煙などを苦にしては居られない。反つてそれから來る温さに感謝して、秋の、冬の長い夜な夜なを、

縄を綯うたり、草鞋を編んだりして、夜を更かさねばならなかつた。家賃は四月目五月目位から滞り出した。畳はすり切れた。柱へはいろいろな場合のいろいろな痕跡がいろいろの形に刻みつけられた。「せめては下肥位はたまるだらう」と校長先生が考へたにも拘はらず、校長先生の作男が下肥を汲みに行く朝は、其処は何時もからつぽだつた。何となれば家の借り手の貧しい百姓が、自分の借りて居る畑へそれを運んでしまつた後であつたから。校長先生はひどくこの借家人を悪く思ひ初めた。會ふほどの人には誰彼となく、貧乏な百姓の狡猾を罵り、訴へた。さうして「どうせ貧乏する位の奴は、義理も何も心得ぬ狡猾漢だ」といふ結論を與へ去つた。外の村人は、直ぐ校長先生の意見に賛同の意を示した。そこで校長先生は自分の論理が眞理として確立されたのを感じ出した。次には、こんな男に家を貸して置くよりも、寧ろ荒れるにまかせて置いた方がどれほどよいか解らないと思ひ出した。何故かといふに、こんな男に家を貸すことは、積極的に荒廢させることである、反つて、空家として打捨てて置くことはその消極的な方法である、といふこと。この借家人は逐ひ立てられた。村の人人は校長先生の態度に合理的だと考へた。

これらの間——あの隠居が亡くなつてから後は、その庭の草や木のことを考へるやうな人は、ひとりもなかつた。家と庭とは荒れに荒れた。

ただ一人、あの貧乏な百姓の小娘が、隠居が在世の折に植ゑられたままで、今は草の間に野生のやうになつて、年年に葉が衰れになり、莖がくねつて行く菊畑の黄菊白菊の小さな花を、秋の朝毎に見出しては、ちぢくれた髪のかんざしにと折りとつた……

……彼は縁側に立つて、庭をながめながら、あの案内者であつた太つちよの女が、道道語りつづけた話のうちに、彼一流の空想を雑へて、ぼんやり考へるともなく考へ、思ふともなくそんなことを思うて居た。

「フラテ、フラテ」裏の縁側の方では、彼の妻の聲がして、犬を呼んで居る。「おおよしよし、レオも来たのかい。おお可愛いね。何も上げるのぢやなかつたのだよ。フラテや、お前はね、今のやうにあんな草ばかりのところで這ふのぢやありませんよ。蝮が居ますよ。そらこの間のやうに、鼻の頭を咬まれて、喉が腫れ上つて、お寺の和尚さんのやうにこんな大きな顔になつて来ると、ほんとうに心配ぢやないか。いいかい。フラテはもうこの間で懲りたから解つたわね。レオや、お前に気をおつけよ。お前の方はおとなしいから大丈夫だね……」彼の妻は牧歌を歌ふ娘のやうな聲と心持とで、自分の養子である二疋の犬に物云うて居る。さうして涼しい竹藪の風は、そこから彼の立つて居る方へ抜けて通りすぎた。

＊　＊　＊　＊　★　＊　★

眞夏の花園は茂るがままであつた。

すべての樹は、土の中ふかく出来るだけ根を張つて、そこから土の力を汲み上げ、葉を彼等の體中一面に着けて、太陽の光を思ふ存分に吸ひ込んで居るのであつた——松は松として生き、櫻は櫻として、槙は槙として生きた。出来るだけ多く太陽の光を浴びて、己を大きくするために、彼等は枝を突き延した。互に各の意志を遂げて居る間に、各の枝は重り合ひ、ぶつつかり合ひ、縮み合ひ、靭き合つた。自分達ばかりか、太陽の寵遇を得るためには、他の何物をも顧慮しては居られなかつた。さうして、日光を享けることの出来なくなつた枝は、日に日に細つて行つた。一本の小さな松は、杉の下で赤く枯れて居た。[illegible]の生垣には丈が不揃

ひになつて、その一列になつた頭の線が不恰好にうねつて居る。それは日のあたるところだけが生ひ茂り丈が延びて、諸の大きな樹の下に覆はれて日蔭になつた部分は、落凹んで了つたからであつた。又、それの或る部分は葉を生かすことが出來なくなつて、恰も城壁の覗き窓ほどの穴が、ぽつかりと開いて居るところもあつた。或る部分は分厚に葉が重り合つてまるく固つて繁つて居るところもあつた。或る箇所は全く中斷されて居るのである。といふのは、丁度その生垣に沿うて植ゑられた大樹の松に覆ひ隠されて、それればかりか、垣根の眞中から不意に生ひ出して來た野生の藤蔓が、人間の拇指よりももつと太い蔓になつて、生垣を突分け、その大樹の松の幹を、恰も虜を捕へた綱のやうに、ぐるぐる巻きに巻きながら攀ぢ登つて、その見上げるばかりの梢の梢まで登り盡して、それでまだ滿足出來ないと見える——その巻蔓は、空の方へ、身を悶えながらもの狂しい指のやうに、何もないものを捉へようとしてあせり立つて居るのであつた。その巻蔓のうちの一つは松の隣りのその松よりも一際高い櫻の木へ這ひ渡つて、仲間のどれよりも迥に高く、空に向つて延びて居た。又、庭の別の一隅では、梅の新らしい枝が直立して長く、高く、譬へば天を刺貫かうとする槍のやうに突立つて居るのであつた。竹には若竹であつた軟かい土には、根強く蔓つた雜草があつた。それは何處か竹に似た形と性質とを持つた強さうな草であつた。それの硬い莖と葉とは土の表面を網目に編みながら這うて、自分の領土を確實にするためにその節のあるところから一一根を下して、八方へ擴がつて居た。試にその一部分をとつて、根引にしようとすると、その房房した無數の細い根は黒い砂まじりの土を、丁度人間が手でつかみ上げるほどづつ持上げて來る。これが彼等の生きようとする意志である。又、夏の萬物に命ずる燃ゆるやうな姿である。かく繁りに茂つた枝と葉とを持つた雜多な草木は、庭全體として言へば、丁度、狂人の鉛色な額に垂れかかつた放埓な髮の毛を見るやうに陰鬱であつた。それ等の草木は或る不可見な重量をもつて、さほど廣くない庭を上から壓し、その中央にある建物を周圍から遠巻きして押迫つて來るやうにも感じられた。

併し、凄く恐ろしい感じを彼に與へたものは、自然の持つて居るこの暴力的な意志ではなかつた。反つて、この混亂のなかに絶え絶えになつて殘つて居る人工の一縷の典雅であつた。それは或る意志の斷片である。あの秩序のない植木屋、この庭園から殆んどその全部を奪ひ去つたとは言へ、今にただ遺されて居るもののなかにも、確に、故人の花つくりの道樂を偲ばずには置かないものが、一つ二つ目につくのである。自然の力も、未だそれを全く隱し去ることは出來なかつた。例へば、もとはこんもりと饅頭形に刈り込まれて居たであらうと思へる白斑入りの縮緬柏である。それは門から玄關への途中にある。それから又、座敷から厠を隱した山茶花がある。それの下かげの沈丁花がある。鉢をふせたやうな形に造つた霧島躑躅の老株かがある。大きな樹が覆さつたために萎れ、その蔭に大輪の花が枯れ萎びて居る年經た紫陽花がある。それらのものは巨人が激怒に任せて投げつけたやうな亂雜な庭のところどころに立つて、白木蓮、沈丁花、玉椿、秋海棠、梅、芙蓉、古木の高野槇、山茶花、萩、蘭の鉢、大きな自然石、むくむくと盛上つた青苔、枝垂櫻、黒竹、常夏、花柘榴の大木、それに水の近くには鳶尾、其他のものが、程よく按排され、人の手で愛まれて居たその當時の夢を、北方の蠻人よりももつと亂暴な自然の蹂躙に任されて顧る人とて

もない今日に、その夢を未だ見果てずに居るかと思へるのである。また假りに、庭の何處の隅にもそんなものの一株もなかつたとしたところが、門口にかぶさりかかつた一幹の松の枝ぶりからでも、それが今日でこそ徒らに硬く太く長い針の葉をぎつしり身に着けて居ながらも、曾ては人の手が、懇にその枝を勞はり葉を揃へ、眉を撫でたものであつたことは、誰も容易に承認するのであらう。實は、それの持主である小學校長は、この次にはその松を賣らうと考へて、この松だけはこん度の貸家人が植木屋を呼ぶときには、根まはりもさせ鬼葉もとらせて置かうと思つて居るのであつた。

故人の遺志を、偉大なそれであるからして時には殘忍にも思へる自然と運命との力が、どんな風にぐんぐん破壞し去つたかを見よ。それ等の遺された木は、庭は、自然の澁剛たる野蠻な力でもなく、また人工のアアティフィシャルな形式でもなかつた。反つて、この兩樣の無雜作な不統一な混合であつた。さうしてそのなかには醜さといふよりも寧ろ故もなく凄然たるものがあつた。この家の新らしい主人は、木の影に佇んで、この廢園の夏に見入つた。さて何かに脅かされてゐるのを感じた。瞬間的な或る恐怖がふと彼の裡に過ぎたやうに思ふ。さてそれが何であつたかは彼自身でも知らない。それを捉へる間もないほどそれは速かに閃き過ぎたからである。けれどもそれが不思議にも、精神的といふよりも寧ろ官能的な、動物の抱くであらうやうな恐怖であつたと思へた。

彼は、その日、暫く、新らしい住家のこの凄まじく衰れな庭の中を木かけを傳うて、歩き廻つて見た。

家の側面にある白樫の下には、蟻が、黑い長い一列になつて進軍して居るのであつた。彼等の或るものは大きな家寶である食糧を擔いで居た。少し大きな形の蟻がそこらにまくばられて居て、彼等に命令して居るやうにも見える。彼等は出會ふときには、會釋をするやうに、或は噂をし合ふやうに、或は言傳を託して居るやうに兩方から立停つて頭をつき合せて居る。これはよくある蟻の轉宅であつた。彼は蹲まつて、小さい隊商を凝視した。さうして、暫くの間、彼は彼等から子供らしい樂を得させられた。永い年月の間、からいふものを見なかつた事や、若し目に入つたにしても見ようともしなかつたであらう事に、彼は初めて氣づいた。さう言へば、幼年の日以來――あの頃は、外の子供一倍そんなものを樂み耽つて居たにも拘らず、その思ひ出さへも忘れて居た。――落ちついて、月を仰いだこともなければ、鳥を見たこともなかつた。そんな事に氣附いた事が、彼を妙に悲しく、また喜ばしくした。さういふ心を抱きながら其處から立上つて、歩み出さうとすると、ふと目に入つたのは、その白樫の幹に道化た態をして、牙のやうな形の大きな前足をそこへ突立てて嚙りついて居る蟬の脫殼であつた。それは背中のまんなかからばつくり裂けた、赤くぴかぴかした小さな鎧であつた。なほその幹をよく見て居ると、その脫殼から三四寸ほど上のところに、一疋の蟬が凝乎として居るのを發見することが出來た。それは人のけはひに驚く風もないのは無理もない。その蟬は今生れたばかりだといふ事は一目に解つた。それはまだ極く軟かで體も固まつて居ないのである。この蟲はかうして身動きもせず凝乎としたまま、今、靜かに空氣の神祕にふれて居るのであつた。その軟かな未だ完成しない羽は全體は乳色で、言ふばかりなく可憐で、華奢しく、小さくちぢかんで居た。ただそれの綠色の脈ばかりが、どく目立つた。それは爽やかな快活なみどり色で、彼の聯想は白く割れて種子を綻開いて突出

しこ豆の双葉の芽を、ありありと思ひ浮べさせた。それはただにその色ばかりではなく、羽全體が植物の芽生に彷彿して居た。生れ出すものには、蟲と草との相違はありながら、或る共通な、或る姿がその中に啓示されて居るのを彼は見た。自然そのものには何の法則もないかも知れぬ。けれども少くもそれから、人はそれぞれの法則を、自分の好きなやうに看取することが出來るのであつた――何も熟視すると、この蟲の平たい頭の丁度眞中あたりに、極く微小な、紅玉色で、それよりももつと燦然たる何ものかが、いみじくも鏤められて居るのであつた。その寶玉的な何ものかは、科學の上では何であるか――單眼といふものでもあらう――彼はそれに就て知るべくもなかつた。けれどもその美しさに就ては、彼自身こそ他の何人より知つてゐると思つた。その美しさはこの小さなとるにも足らぬ蟲の誕生を、彼をして神聖なものに感じさせ、禮拜させるためには、熱中、非常に有力であつた。

彼のあるか無いかの知識のなかに、蟬といふものは二十年目位にやつと成蟲になるといふやうなことを何日か何處かで、多分博學な誰かから聞き噛つたことがあつたのを思ひ出した。

おお、この小さな蟲が、唯一口に[illegible]と呼ばれて居るほど、人間には無意味に見える一生をするために、彼自身の年齢に殆んど近いほどの年を經て居ようとは！ さうして彼等の命は僅に幾日――二日か三日か一週間であらうとは！ 自然は一たい、何のつもりでこんなものを造り出すのであらう。いやいや、こんなことを言つてただ蟬ばかりではない、人間を、彼自身を？ 神が創造したと言はれて居るこの自然は、恐らく出たらめなのではあるまいか。さうして出たらめを出たらめと氣附かないで解からうとする時ほど、それが神祕に見える時はないのだから。いやいや、何も解らない。さうだ。唯これだけは解る――蟬ははかない。さうして人間の雄辯な代議士の一生が蟬ではないと、誰が言はうぞ。蟬の殼は見て居るうちに、目に見えて、そのちぢくれが引延ばされた。同時にそれの半透明な乳白色は、刻刻に少しづつ併し確實に無色で透明なものに變化して來つつあつた。さうしてあの芽生のごとくに爽快ではあるけれどもひ弱げな緑も、それに應じて段段と黒ずんで、恰も若草の緑が常磐木のそれになるやうな、或る現實的な強さが、明かに其處にも現れつつあるのであつた。彼はこれ等のものを二十分あまりも[illegible]つくして居た時に――それは[illegible]的な[illegible]さを以てであつた――目[illegible]と思はれる[illegible]。

突然、彼は自分の心にむかつて言つた。

「見よ、生れる者の惱みを。この小さなものが生れるためにでも、此處にこれだけの忍耐がある！」

それから重ねて言つた。

この小さな蟲は蟬だ！ 蟬よ、どうぞ早く[illegible]育て！

彼の奇妙な祈禱はこんな風にして行はれた。それは[illegible]常に[illegible]して行はれ[illegible]あつた。

* * * * * *

さて、ここに[illegible]この庭の[illegible]に[illegible]つた。

それは井戸端の水はけに沿うて、垣根のやうに植ゑつけられて居るのであつた。若し十分に繁茂して居れば、一架の[illegible]を見せて、二三間つづきの立派な花の垣根を造つたであらう。けれどもそれ等は甚だしく不精なものであつた。朝日をさへぎつては杉の木立があつた。夕日は家の大きな影が、それらの上にのしかか

つて邪魔をした。さうして正午の前後には、柿の樹や梅の樹がこの薔薇の木から日の光を奪うた。さうしてそれ等杉や梅や柿の茂るがままの枝は、それ等の薔薇の木の上へのさばつて屋根のやうになつて居た。かうしてこれ等の薔薇の木は、その莖はいたいたしくも蔓草のやうに細つて、尺にもあまるほどの雜草のなかでよろよろと立上つて居た。

八月半すぎといふのに、花は愚かそれらの上には、一片の――實に文字どほりに一片の青い葉さへもないのであつた。それ等の莖が未だ生きたものであることを確めるためには、彼はそれの一本を折つて見るほどであつた。日の光と温かさとは、すべての外のものに全く掠められて、土のなかに蓄へられた彼等の滋養分も彼等の根もとに蔓つた名もない雜草に悉く奪はれた。彼等は自然から何の恩惠も享けては居ないやうに見えた。ただこんな場所を最も好む蜘蛛の巣の丁度いい足場のやうになつて、ただ、それのためばかりに有用なものになつて、薔薇はかうしてまでその生存を未だつづけて居なければならなかつた。

薔薇は、彼の深くも愛したものの一つであつた。さうして時には「自分の花」とまで呼んだ。

何故かといふに、この花に就ては一つの忘れ難い、慰めに滿ちた詩句を、ゲエテが彼に遺して置いてくれたではないか――「薔薇ならば花開かん」と。又、ただそんな理窟ばつた因緣ばかりではなく、彼は心からこの花を愛するやうに思つた。その豐饒な、杯から溢れ出すほどの過剩的な美は、殊にその紅色の花にあつて彼の心をひきつけた。その眩暈くばかりの重い香は、彼には最初の接吻の甘美を思ひ起させるものであつた。さうして彼がそれを然う感ずる爲めにとて、古來幾多の詩人が幾多の美しい詩をこの花に寄せて居るのであつた。西歐の文字は古來この花の爲めに王冠を編んで贈つた。支那の詩人も亦あの繪模樣のやうな文字を以てその花の光輝を歌ふことを見逃さなかつた。彼等も亦、大食國の「薔薇露」を珍重し、この「換骨香」を得るために、「海外薔薇水中州未得方」と嘆じさせた。それ等の詩句の言葉は、この花の爲めに詩の領國内に、貴金屬の鑛脈のやうな一脈の傳統を――今ではすでに因襲になつたほどまでに、鞏固に形造つて居るのである。――詩の國に足を踏み入れるものは、誰しも或るところで薔薇の噂を聞くほど。さうして、薔薇の色と香と、また時には葉も棘も、それらの優秀な無數の詩句の一つ一つを肥料として己のなかに汲み上げ吸ひ込んで――それらの美しい文字の幻を己の背後に輝かせて、その爲めに枝もたわわになるやうに思へるほどである。それがその花から一しほの美を彼に感得させるのであつた。幸であるか、いや寧ろ甚だしい不幸であらう、彼の性格のなかにはかうした一般の藝術的因襲が非常に根深く心に根を張つて居るのであつた。彼が自分の事業として藝術を撰ぶやうになつたのもこの心からであらう。彼の藝術的な才分はこんな因襲から生れて、非常に早く目覺めて居た。……それ等の事が、やがて無意識のうちに、彼をしてかくまで薔薇を愛させるやうにしたのであらう。自然そのものから、眞に清新な美と喜びとを直接に摘み取ることを知り得なかつた頃から、それら藝術の因襲を通して、彼はこの花にのみはかうした深い愛を捧げて來て居た。馬鹿馬鹿しいことのやうではあるが、彼は「薔薇」といふ文字そのものにさへ愛を感じた。

それにしても、今、彼の目の前にあるところのこの花の木の見すぼらしさよ！　彼は、嘗て、非常に温い日向にあつた爲めに冬中に蕾んだところの薔薇を、故郷の家の庭で見た事もあつ

た。それは淡紅色な大輪の花であつたが、太陽の不自然な溫かさに誘はれて蕾になつて見たけれども、朝夕の日かげのない時には、他國とても寒中は薔薇に寒すぎたに違ひない。蕾は日を經ても徒に固く閉ぢて、それのみか白いうちにほの紅い花片の最も外側なものは、日日に不思議なことにも綠色の細い線が出來て來て、葉に近い性質、言はゞ花片と葉との間のものとでも言ふやうなものにまで硬ばつて行くのを見た事があつた。けれども、彼が今日の前に見るこれらの薔薇の木は、その哀れな點では曾てのあの蕾の花の比ではない。彼はこれ等の木を見て居るうち、衝動的に一つの考へを持つた。どうかしてこの日かげの薔薇の木、忍辱の薔薇の木の上に日光の恩惠を浴びせてやりたい。花もつけさせたい。から言ふのが彼のその瞬間に起つた願ひであつた。併し、この願ひのなかには、わざとらしい、遊戲的な所謂詩的といふやうな、又そんな事をするのが今の彼自身に適はしいといふ風な「態度」に充ちた心が、その大部分を占めて居たのである。彼自身でもそれに氣附かずには居られなかつたほど。（この心が常に、如何なる場合でも彼の誠實を多少づつ裏切るやうな事が多かつた）さて、彼はこの花の木で自分を卜うて見たいやうな氣持があつた――「薔薇ならば花開かん」！

彼は自分で近所の農家へ行つた。跣足に出て行く主人の姿を、二疋の犬は目敏くも認めて追駆けた。錆びた鋸と桑剪り鋏とをかたげた彼が、二疋の犬を從へて、一種得意げに再び庭へ現れたのは、五分とは經たないうちであつた。

彼はにこにこしながら薔薇の傍に立つた。どうすれば其處を最もよく日が照すだらうと、見當をつけて上を見廻しながら、さて肩拔ぎになつた。先づ鋸で、最ものさばり出た柿の太い枝を挽き初めた。枝からはぼろぼろと白い粉が降るやうにこぼれて、鋸の齒が半以上に喰ひ入ると、未だ斷ち切れない部分は、脆くもそれ自身の重みを支へ切れなくなつて、やがてぼきりと自分からへし折れ、大きな重い枝はそれの小枝を地面へ打つけて落ちかかつた。すると、その隙間からはすぐ、日の光が投げつけるやうに、押し寄せるやうに、沁み渡るやうに、あの枯木に等しい薔薇の枝に降り灑いだ。薔薇を抱擁する日向は追追と廣くなつた。押しかぶさつた梅や杉や柿の枝葉が、追追に刈られたからである。彼は桑剪り鋏で、薔薇の木の上の蜘蛛の巢を拂うた。其處にはいろいろの蜘蛛が潛んで居た。蠅取り蜘蛛といふ小さな足の短い蜘蛛は、枝のつけ根に紙の袋のやうな巢を構へて居た。鼈甲のやうな色澤の長い足を持つた大きな女郎蜘蛛に、大仕掛な巢を張り渡して居た。鋏がその巢を毀すと、蜘蛛は曲藝師のやうな手際で絲を手繰りながら逃げて行く。それを大きな鋏が追駆ける。彼等は絲を吐きながら鋏のさきへぶら下がつて、土の上や、草のなかや、水溜りの上に下りて逃げる。それを鋏がちよん斬つた。

そんなことが彼の體を汗みどろにした。又彼の心を興奮させた。最初に、最も大きな枝が地に墜ちた音で、彼の珍らしい仕事を見に來た彼の妻は、何か夫に喚びかけたやうであつたけれども、彼は全く返事をしなかつた。犬どもは主人が今日は少しも相手になつてくれないのを知ると、彼等同士二疋で追つかけ合つて、庭中を騷ぎ廻つて居た。何か有頂天とでも言ひたい程な快感が、彼にはあつた。さうして無暗に、手當り次第に、何でも挽き切つてやりたいやうな氣持になつた。

彼は松に絡みついて居るあの藤の太い蔓を、根元から、桑剪り鋏で一息に斷ち切つた。彼は案外自分にも力があると思つた。その蔓を縒をもどすやうにくるくる廻しながら松の幹から

引き分けると松は其時ほつと深い吐息をしてみせたやうに、彼には感ぜられた。彼は蔓のきり端を両手で握ると、力の限りそれを引つぱつて見た。併し、勿論それは到底無駄であつた。松の小枝から梢へそれから更に隣りの櫻の木へまでも纏りついた藤蔓は、引つぱられて、ただ松の枝と櫻の枝とをたわめて強く搖ぶらせ、それ等の葉を捥ぎ取らせて地の上に降らせ、又櫻の枝にくつついて居た毛蟲を彼の麥稈帽子の上に落しただけで、蔓自身は弓弦のやうに張りきつたのであつた。「私はお前さんの力ぐらゐには驚かんね！　どうでも勝手に、もつとしつかりやつて見るがいい！」と、その藤蔓は小面憎くも彼を揶揄したり、傲語したりするのであつた。彼はこの藤蔓には手をやいて、たうとうそれぎりにして置くより外はなかつた。さうして今度は生垣を刈り初めた…………

正午すぎからの彼のこの遊びは、夕方になると、生垣の頭がくつきりと一直線に揃ひ、その壁のやうに平になつた側面には、折りから、その面と平行して照し込む夕日の光線が、樅の黒い硬い葉の上に反射して綺麗にきらきらと光つた。からなつて見るとあの大きな穴が一層見窄しく目立つのであつた。

「やあ、これやさつぱりしましたね」

と、こんな風な御世辭を言ひながら、その穴から家のなかを見廻して行く野良歸りの農夫もあつた。それから、彼はその序にあの渠の上へ覆さつて居る猫楊の枝ぶりを繕うても見た。

その夕方、彼は珍らしく大食した。夜は夜で快い熟睡を貪り得た。而も翌朝目覺めた時には、體が木のやうに硬ばり節節が痛むところの自分を、苦笑をもつて知らなければならなかつた。

その幾日か後の日に、今度はほんとうの植木屋——といつても半農であるが——が、彼の家の庭に這入つた時には、あの松と櫻とにあまで執念深く絡みついて居た藤蔓は、あの百足の足のやうな葉がしをれ返つて、或る部分はもうすつかり青さを失うて居るのであつた。さうしてあのもの狂ほしい指である藤蔓は、悉くぐつたりとおち入つて居た。彼は惡人の最後を舞臺で見てよろこぶ人の心持で、松の樹の上で植木屋が切り苛む太い藤蔓を、軒の下にしやがんで見上げて居た。

「これや、もう四五日ほして置くといい焚きつけが出來ますさあ」と突然、植木屋は松の樹の上から話しかけた。

「其奴はよつぽど死太い奴だね」彼はそんな事を答へて置いて「然うだ」とひとり考へた。「あの剛情な藤蔓が、そんなに早くも脆く枯れたのは、彼をそんなに太く壯んに育て上げたと同じその太陽の力だ」と、彼はこの藤蔓から古い寓話を聞かされて居た。彼は又、彼の意志——人間の意志が、自然の力を左右したやうにも考へた。寧ろ、自然の意志を人間である彼が代つて遂行したやうにも自負した。藤蔓が其處に生えて居た事は、自然にとつて何の不都合でもなかつたであらうに。とにかく、最初に人間の手が造つた庭は、最後まで人間の手が必要なのだ……。彼は漫然そんなことをも思つて見た。

それにしても、あの薔薇は、どう成つて來るであらうか。花は咲くか知ら？　それを待ち、樂しむ心から、彼は立上つて歩いて行つた。薔薇を見るためにである。それの上にはただ太陽が明るく賴もしげに照してゐるほか、別に木に何の變りもないのは、今朝もよく見て知つて居る筈だつたのに。

かうして幾日かはすぎた。薔薇のことは忘れられた。さうしてまた幾日かはすぎた。

* * * * * *

自然の景物は、夏から秋へ、靜かに變つて行つた。それを、彼ははつきりと見ることが出來た。夜は殊に早くも秋になつて居た。蟋蟀だの、螽斯だの、秋の先驅であるさまざまの蟲が、或は草原で、或は彼の机の前で、或は彼の牀の下で鳴き初めた。樂しい田園の新秋の豫感が、村人の心を浮き立たせた。村の若者達は娘を搜すために、二里三里を涼しい夜風に吹かれながら、その逞しい歩みで歩いた。或る者は、又、村祭の用意に太鼓の稽古をして居た。その單純な鳴りものの一生懸命な響きが、夜更けまで、野面を傳うて彼の窓へ傳はつて來た。この村に歸省してゐた女學生、それはY市の師範學校の生徒で、この村で唯一の女學生は、夏の終りに、彼の妻と友達になつたが、間もなく喜ばしさうにその學校のある都會へ彼の妻をとり殘して歸つて行つた。

彼の狂暴ないらいら立たしい心持は、この家へ移つて來て後は、漸く、彼から去つたやうであつた。さうして秋近くなつた今日では、彼の氣分も自ら平靜であつた。彼は、ちやうど草や木や風や雲のやうに、それほど敏感に、自然の影響を身に感得して居ることを知るのが、一種の愉快で誇りかにさへ思はれた。この夜ごろの燈火は懷しいものの一つである。それは心身ともに疲れた彼のやうな人人の目には、柔和な床しい光を與へるランプの光であつた。彼はそのランプを、この地方へ來た行商人から二十幾錢かで買つた。その紙で出來た笠は一錢であつた。けれどもそのランプのガラスの壺は、石油を透して琥珀の塊のやうに美しかつた。或る時には、薄い紫になつて、紫水晶のことを思はせた。その燈の下で、彼は、最初、聖フランシスの傳記を愛讀しようとした。けれども彼は直ぐに飽きた。根氣といふものは、彼の何處にも、今は寸毫も殘されては居なかつた。さうしてどの本を讀みかけても、一切の書物はどれもこれも、皆、一樣に彼にはつまらなく感じられた。それればかりか、そんな退屈な書物が、世の中で立派に滿足されて居るかと思ふと、それが非常に不思議でさへあつた。何か――人間を、彼自身を、すべての物がこの世界とは全く違つたものから出來上つてゐる別世界へ引きずり上げて行くやうな、或はただ彼の目の前へだらしなく展げられてゐるこの古い古い世界を全然別箇のものにして見せるやうな、或はそれを全く根柢から覆してめちやめちやにするやうな、それは何でもいい、ただもう非常な、素晴らしい何ものかが、どうかして、何處かにありさうなものだ。彼はしばしば漠然とそんなことを考へて居た。ほんとうに、日の下には新らしいものがあることは無いのか。さうして一般の世間の人たちは、それなら一たい何を生き甲斐にして生きることが出來て居るのであるか？ 彼等は唯彼等自身の、それぞれの愚かさの上に、さもしたりげに各の空虚な夢を築き上げて、それが何も無い夢であるといふ事さへも氣づかない徒に猛つて生きてゐるだけではなからうか――それは賢人でも馬鹿でも、哲人でも商人でも。人生といふものは、果して生きるだけの値のあるものであらうか。さうして死といふものはまた死ぬだけの値のあるものであらうか。彼は夜毎にそんなことをも考へて居た。さうして、この重苦しい困憊しきつた退屈が、彼の心の奧底に巢喰うて居る以上、その心の持主の目が見るところの世界萬物は、何時でも、一切、何處まででも、退屈なものであるのが當然だといふ事――さうしてこの古い古い世界に新らしく生きるといふ唯一の方法は、彼自身が彼自身の心境を一轉するより外にはない事を、彼は知り得た時、但、さういふ狀態の己自身を、どうして、どんな方法で新鮮なものにすることが出來

るか。彼の父の送つて居る手紙のなかの、「大勇猛心」と呼んで居るものはどんなものか。それを何處から齎してどうして彼の心へ植ゑ込むことが出來るか。どうして彼の心に湧立たせることが出來るか。それらの一切は、彼には全然知り得べくもなかつた。さうして田舍にも、都會にも、地上には彼を安らかにする樂園はどこにも無い。何も無い。

「ただ萬有の造り主なる神のみ心のままに……」

と、そんなことを言つて見ようか。けれども彼の心は、決して打砕かれて居るのではなかつた。ただ萎びて居るだけである……。彼は太鼓のひびきに耳を傾けて、その音の源の周圍をとりかこんで居るであらう元氣のいい若者たちを、羨しく眼前に描き出した。

彼の机の上には、讀みもしない、又、讀めもしないやうな書物の頁が、時時彼の目の前に曝されてあつた。彼はその文字をただ無意味に拾つた。彼は、又、時時大きな辭書を持ち出した。それのなかから、成可く珍らしいやうな文字を搜し出すためであつた。言葉と言葉とが集團して一つの有機物になつて居る文章といふものを、彼の疲れた心身は讀むことが出來なくなつて居たけれども、その代りには、一つ一つの言葉に就てはいろいろな空想を喚び起すことが出來た。それの靈を、所謂言靈をありありと見るやうにさへ思ふこともあつた。その時、言葉といふものが彼には言ひ知れない不思議なものに思へた。それには深い神的な性質があることを感じた。それら言葉の一つ一つはそれ自身で既に人間生活の一斷片であつた。それら言葉の集合はそれ自身で一つの世界ではないか。それらの言葉の一つ一つを、初めて發明し出したそれぞれの人たちのそれぞれの心持が、懐しくも不思議にそれのなかに殘つて居るのではないか。永遠にさうして日常、すべての人たちに用ゐらるるやうな新らしい言葉のただ一語をでも創造した時、その人はその言葉のなかで永遠に、普遍に生きてゐるのではないか。さうだ、さうだ、これをもつと明確に自覺しなけやあ……。

彼はそんなことを極くおぼろげに感じた。さうして或る一つの心持を、仲間の他の者にはつきりと傳へたいといふ人間の不可思議な、微妙な欲望と作用とに就ても、おぼろに考へ及ぶのであつた。言葉に倦きた時には、彼はその辭書のなかにある細かな插畫を見ることに依つて、未だ見たことも空想したこともない魚や、獸や、草や、木や、蟲や、魚類や、或は家庭的ないろいろの器具や、武器や、古代から罪人の處刑に用ゐられたさまざまな刑具や、船や、それの帆の張り方に就ての種種な工夫や、建築の部分などに就て知ることを喜んだ。それらの器物などの些細な形や、動物や植物などのなかにはさまざまな暗示があつた。就中、人間自身が工夫したさまざまなもののなかには言葉の言靈のなかにあるものと全く同じやうに、人類の思想や、生活や、空想などが充ち滿ちて居るのを感じた——それは極く斷片的にではあつたけれども。さうして、彼の心の生活はその時ちやうどそれらの斷片を考へるに相應しただけの力しか無いのであつた。

彼は、時時それらの感興の末に、夜更けになつてから、詩のやうなものを書くことがあつた。それはその夜中、彼自身には非常に優秀な詩句であるかのやうに信ぜられた。但し、翌日になつて目を醒してまつ先きにその紙の上を見ると、それは全く無意味な文字が羅列されて居るに過ぎなかつた。それは寧ろ、先づ嘆くべきことであつた。——ふと、いい詩が彼のつい身のまはりまで來て居たのであつたのに。さうして、それを捉へようとした時、もうそこには何

物も無かつたのである。捉へ得たと思つた時、それはただ空間であつた、ちやうど夢のなかで戀人を抱く人のやうに。そのもどかしさと一緒に、彼はふと自分の名が呼びかけられたと思つて振り返つた時、そこに言葉の主が誰もなかつた時に似た不安をも、その度毎に味うた。

家の圖面を引くことを、彼は再び初めた。彼は非常に複雜な迷宮のやうな構へを想像することがあつた。さうかと思ふと、コルシカの家がさうであるといふやうに、客間としても臺所としても唯大きな一室より無い家を考へることもあつた。それの外形や、間どりや、窓などの部分の意匠のデテイルなどが、殆んど毎夜のやうに、彼のノオトブックの上へ縱橫に描き出された。遂には白い頁はもう一枚も無くなり、方一寸ぐらゐの餘白が最も貴重なものとして探し出されて、そこもいろいろに組合された幾多の直線で、ぎつしりと埋められてあつた。その無意味な一つ一つの直線に對して、彼は無限の空想を持つことが出來た。そんな時の彼の心持は、ただ一人で監禁された時には、無心で一途に唐草模樣を描き耽るものだといふ狂氣の畫家たちによほどよく似て居た。

かうして、又してもたうとう生氣のない無聊が來た。さうしてそれが幾日もつづいた。

* * * * *

或る夜、彼のランプの、紙で出來た笠へ、が、さと音を立てて飛んで來たものがあつた。見るとそれは一疋の馬追ひである。その青い、すつきりとした蟲は、その縁を紅くぼかして染め出したランプの笠の上へとまつて、それらの紅と青との對照が先づ彼の目をそれに喚びつけたが、その姿と動作とが、更におもむろに彼の興味を呼んだ。その蟲は、それ自身の體の半分ほどもあるやうな長い觸角を、自分自身の上の方でゆるやかに動かしながら、ランプの圓い笠の紅い場所を、ぐるぐると青く動いて進んで行つた。それは圓く造られた庭園の外側に沿うて漫歩する人のやうな氣どつた足どりのやうにさへ、彼には思へた。この青い細長い形の優雅な蟲は、そのきやしやな背中の頂のところだけ赤茶けた色をして居た。彼は螢の首すぢの赤いことを初めて知り得て、それを歌つた松尾芭蕉の心持を感ずることが出來た。この蟲は、しばらくその圓いところをぐるぐると歩いた。さうして時時、不意に、壁の長押や、障子の棧や、取り散した書棚や、或は夜更しをすぎて何時になれば寢るものともきまらない夫を勝手にさせて自分だけ先に眠つて居る彼の妻の蚊帳の上のどこかなどへ、[illegible]に飛んで行つては鳴いて見せた。人間に生れることばかりが、必ずしも幸福ではない、と、草雲雀に就てそんなことを或る詩人が言つた。今度生れて來る時にはこんな蟲になるのもいい、或る時、彼はそれと同じやうなことを考へながらその蟲を見て居るうちに、ふと、シルクハットの上に、薄羽蜉蝣のとまつて居る小さな[illegible]を空想した。あの透明な大きな翅を背負つた青い小蟲の身のやうにふはふはした小さな蟲が、漆黑なぴかぴかした多少怪奇な形を具へた帽子の鋭角なかどの上へ、頼りなげに佇しはつきりととまつて、その角の表面をそれの線に沿うてのろのろと這つて行く……。それを明るい電燈が默つて上から照して居た……。彼は突然、彼の目を上げて光を覗いた。それは電燈ではない。ランプの光である。彼はそのランプの光を自分の空想と混同して、自分も今電燈の下に居るやうに思つたからである。

何故に彼がシルクハットと薄羽蜉蝣といふやうな對照をひよつくり思ひ出したか、それは彼自身でも解らなかつた。唯、さういふ風な、奇

妙な、纖細な、無駄なほど微小な形の美の世界が、何となく今の彼の神經には親しみが多かつた。

馬追ひは、毎夜、彼のランプを訪問した。彼は、最初には、この蟲が何のためにランプの光を慕うて來るのか、さてその笠をぐるぐると廻るのか、それらの意味を知らなかつた。併し、見て居るうちに直ぐに解つた。それは決してその蟲の趣味や道樂ではなかつたのである。この蟲は、其處へ跳んで來て、その上にたかつて居るところのもう一層小さい外の蟲どもを食ふためであつたのだ。それらの蟲どもは、夏の自然の端くれを粉にしたとも言ひたいほどに極く微細な、ただ青いだけの蟲であつた。馬追ひは彼の小さな足でもつてそれらの蟲を搔き込むやうに捉へて、それを自分の口のなかへ持つて行つた。馬追ひの口は、何か鋼鐵で出來た精巧な機械にでもありさうな仕掛に、ぱつくりと開いては、直ぐ四方から一度に閉ぢられた。一層小さな蟲どもはもぐもぐと、この强者の行くに任せて食はれた。食はれる蟲は、それの食はれるのを見て居ても、別に何の感情をも唆られないほど小さく、また親しみのないものばかりであつた。指さきでそれを輕く壓へると、それらの小さな蟲は、青茶色の斑點をそこに遺して消え去せてしまふほどである。

馬追ひは、或る夜、どこでどうしたのであるか、長い跳ねる脚の片方を失つて飛んで來た。長い觸角の一本も短く折れてしまつてゐた。遂には或る夜、彼の制止をも聞かなかつた猫が、書棚の上で、彼の主人の夜ごとの友人であるこの不幸な者を捉へた。さんざんに弄んだ上で、その馬追ひを食つて仕舞つた。彼は今度生れ變る時にはこんな蟲もいいと思つたことを思ひ出すと、こんな蟲とてもなかなか氣樂ではないかも知れないと小さな蟲の生活を考へて見た。

彼がそんな風な童話めいた空想に耽り、醉ひ、弄んで居る間に、彼の妻は寢牀の下で鳴くこほろぎの聲を沁み沁みと聞きつつ、別の童話に思ひ耽つて居るのであつた。――こほろぎの歌から、冬の衣類の用意を思うて、猫が飛び乘つても搖れるところの、空つぽになつた彼女の簞笥の事を考へ、それから今は手もとにない彼の女のいろいろな晴着のことを考へた。さうしてそれ等の着物の縞や模樣や色合ひなどが、一つ一つ仔細に鮮然と思ひ浮ばれた。又それにつれてそれ等の一かさね一かさねが持つて居る各の歷史を追想した。深い吐息がそれ等の考へのなかに雜り、さてはそれが淚ともなつた。彼の女は、女特有の身勝手な主觀によつて、彼の女の弄具の人生苦を人生最大の受難にして考へることが出來た。さうして其悲嘆は、而も訴ふるところがなかつた。これ等のことを今更に告げて見たところで、それをどうしようとも思はぬらしく「何ものも無きに似たれどもすべてのものを持てり」といふやうな句をただ聞かせるだけで、一人勝手に生きて居る夫、象牙の塔で夢みながら、見えもしない人生を俯瞰した積りで生きて居る夫、その夫を妻が蔑み少く思ふことは是非ない事である。彼の女は、時時こんな山里へ來るやうになつた自分を、その短い過去を、運命を、夢のやうに思ひ廻しても見た。さて、今でもまだ舞臺生活をして居る彼の女の技藝上の競爭者達を、（彼の女はもと女優であつた）今の自分にひきくらべて華やかに想望することもあつた。……Nといふ山の中の小さな停車場まで二里、馬車のあるところまで一里半、その何れに依つても、それから再び鐵道院の電車を一時間、直ぐの里程にすれば六七里でも、その東京までは半日がかりだ……それにしても、どんな大理想があるかは知らないが、

こんな田舎へ住むと言ひ出した夫を、又それをうかうかと賛成した彼の女自身を、わけても前者を彼の女に最も非難せずには居られなかつた。遠い東京．．近い東京．．近い東京．：遠い東京．．．その東京の街街が、アアクライトや、ショウヰインドウや、おひおひとシイズンになつてくる劇場の廊下や、樂屋や、それらが眠らうとして居る彼の女の目の前をゆつくり通り過ぎた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

空の夕燒が毎日つゞいた。けれどもそれはつい二三週間前までのやうな灼け爛れた眞赤な空ではなかつた。底には深く快活な黄色を隱してうはべだけが紅であつた。明日の暑さで威嚇する夕燒ではなく、明日の快晴を約束する夕燒であつた。西北の空にあたつて、ごく近くの或る丘の凹みの間から、富士山がその眞白な頭だけを現して、夕映のなかでくつきり光つて居た。俗惡なまで有名なこの山は、ただそのごく小部分しか見えないといふことに依つて、それの本來の美を保ち得て居た。この間うちまでは重り合つた夕雲のかげになつて、それらの雲の一部か或は山かと怪しまれた西方の地平に連る灰黒色な一列は、今見れば、何處か遠くの連山であることが確かになつた。今日も亦無駄に費したといふ平凡な悔恨が、毎日この夕映を仰ぐ度ごとに、彼にははげしく瞬間的に湧き上るのであつた。多分、色彩といふものが誘ふ感激が、彼の病的になつてゐる心をさういふ風に刺戟したのであつたらう。地の上の足もとを見ると、彼の足場である土橋の下を、溝の水が夕榮の空を反映して太い朱線になつて光り、流れて居た。

田の面には、風が自分の姿を、そこに渚のやうな曲線で描き出しながら、ゆるやかに蠕動して進んで居た。それは涼しい夕風であつた。稻田はまだ黄ばむといふほどではなかつたけれども、花は既に實になつて居た。さうして蝗がそれらの少しうな垂れた穗の間で、少しづつ生れ初めて居た。蛇苺といふ赤い丸い草の實のころがつて居る田の畦には、彼の足もとから蝗が時折飛び跳ねた。すると彼の散歩の供をして居る二疋の犬は、より早くそれを見出すや否や、彼等の前足でそれを押し匿へると、其處に半死半生で橫はつて居る蝗を甘さうに食つてしまつた。彼等の一疋はそれを見出す點で、他の一疋よりも敏捷であつた。併し、前足を用ゐて捉へる段になると、別の一疋の方が反つて機敏であつた。又一疋の方はとり逃がした奴を直ぐあきらめるらしかつたけれども、他の一疋はなかなか執拗に稻田のなかまで足を泥にふみ込んで追ひ込む。彼等にもよく觀れば各違つた性質を具へて居るのが彼を面白がらせ、且つ一層彼等を愛させた。稻の穗がだんだん頭を垂れてゆくにつれて、蝗の數は一時に非常に殖えて居た。犬は自分からさきに立つて彼を導くやうにしながら田の方へ毎日彼を誘ひ出した。彼は目の前の蝗を見ると、時時、それを捉へて犬どもに食はせてやりたくなつた。それで指を撥げた手で、その蟲をおさへようとした。犬どもは彼等の主人がその身構へをすると主人の意志がわかるやうになつたと見えて、自分の捉へかかつて居るのを途中でやめて、主人の手つきを目で追うて、主人の獲物が與へられるのを待つて居るのであつた。けれども彼は大てい五度に一度ぐらゐよりそれを捉へることが出來なかつた。ただ捥ぎとれた足だけを握つて居たりした。彼は蟲を捉へるには、それに巧でない方の犬にくらべてもずつと下手であつた。それにも拘はらず、犬どもはそんな事にまで主人の優越を信じて、主人を信賴して居るらしかつた。さうして、

彼が蟲をとり逃がした空しい手をひらいて見せると、犬どもは訝しげに、主人の手の中と主人の顏とをかはるがはる見くらべて、彼等は一樣にその頭をかしげ、それから彼等の口の端を少し曲めて、その可憐に輝く眼で彼の顏を見上げた。それがさも主人のその失敗に驚き失望しながら、けれども何故ともなく主人に媚びて居る樣であつた。彼等犬には、實に豐な表情があつた！ 彼等は幾度もその徒らな期待の經驗をしながらも、矢張り自分達よりも主人の方が蟲を捉へるにでも偉い筈だといふ信念を、決して失はないらしかつた。彼の蝗を捉へようとする身構へと手つきとを見る毎に、彼等は彼等自身が既に成功して居るも同然な蟲を放擲して、主人の手つきを見つめたまま、何時までもその惠みを待ちうけて居るのであつた。彼は空しくひろげた掌で、失望して居る犬どもの頭を愛撫して居た。犬はそれにでも滿足して尾を振つた。

彼には、それが――犬どもの無智な信頼が、またそれに報ゆることの出來ない事が、妙に切なかつた。彼が人間同士の幾多の信頼に反いて居ることよりも、この純一な自分の歸依者に對しての申譯なさは、彼には寧ろ數層倍も以上に感じられた。彼は、彼等のあの特有な澄み切つた眼つきで見上げられるのが切なさに、遂には、目の前の蟲を捉へようとする一種反射運動的な動作を試みないやうに、細心に努力するのであつた。

何時か、彼自身一手入れをしてやつた日かげの薔薇の木は、それに覆ひかぶさつて居た木木の枝葉を彼が刈り去つて、その上には日の光が浴びられるやうになつた後、一週間ばかり經つと、今では日かげの薔薇ではないその枝には、初めて、ほの紅い芽がところどころに見え出した、さうして更に、その兩三日の後には、太陽の驚くべき力が、早くもその芽を若若しい葉に仕立てて居た。併し、彼は顏を洗ふために井戸端へは毎朝來ながら、何時しか、それらの薔薇の木のことは忘れるともなくもう全く忘れ果てて居た。

圖らずも、ある朝――それは彼がそれの手入れをしてやつてから二十日足らずの後である、彼は偶然、それ等の木の或る綠鮮やかな葉の新らしい枝の上に花が咲いて居るのを見出した。赤く、高く、ただ一つ。永い永い牢獄のなかでのやうな一年の後に、今やつと、また五月が來たのであらうか！ ―その枯れかかつて居た木の季節外れな花は、歡喜の深い吐息を吐き出しながら、さう言ひたげに、今四邊を見まはして居るのであつた。秋近い日の光はそれに向つて注集して居た。おお、薔薇の花。彼自身の花。「薔薇ならば花開かん」彼は思はず再び、その手入れをした日の心持が激しく思ひ出された。彼は高く手を延べてその枝を捉へた。そこには嬰兒の爪ほど色あざやかな若綠色の軟かい刺があつて、輕く枝を捉へた彼の手を輕く刺した。それは、甘える愛猫が彼の指を優しく噛む時ほどの痒さを彼に感じさせた。彼は枝をたわめてそれを「己」の身近くひき寄せた。その唯一つの花は、嗟！ ちやうどアネモネの花ほど大きかつた。さうしてそれの八重の花びらは山櫻のそれよりももつと小さかつた。それは庭前の花といふよりも、寧ろ路傍の花の如くであつた。而もその小さな、哀れな、畸形の花が、少年の、唇よりも赤く、さうしてやはり薔薇特有の可憐な風情と氣品とを具へ、鼻を近づけるとそれが香さへ帶びて居るのを知つた時、彼は言ひ知れぬ感激に打たれた。悲しみにも似、喜びにも似て何れとも分ち難い感情が、切なく彼にこみ上げたのである。それは恰も、あの主人に信頼しきつて居る無智な犬の澄みきつた眼でぢつと見上げられた時の氣持に似て、もつともつと激しかつた。

譬へば、それはふとした好奇な出來心から親切を盡してやつて、今は既に全く忘れて居た小娘に、後に偶然にめぐり逢うて「わたしはあの時このかた、あなたの事ばかりを思ひつめて來ました」とでも言はれたやうな心持であつた。彼は一種不可思議な感激に身ぶるひさへ出て、思はず目をしばたたくと、目の前の赤い小さな薔薇は急にぼやけて、双の眼がしらからは、涙がわれ知らず滲み出て居た。

涙が出てしまふと感激は直ぐ過ぎ去つた。併し、彼はまだ花の枝を手にしたまま呆然と立ちつくした。頬は涙が乾いて硬ばつて居た。彼はぢつと自分の心の方へ自分の目を向けた。さうして心のなかでいくつかの自分同士がする會話を、人ごとのやうに聞いて居た――

―馬鹿な、俺はいい氣持に詩人のやうに泣けて居る。花にか？　自分の空想にか？―

「ふふ。若い御隱居がこんな田舍で人間性に饑ゑて御座る？」

「これあ、俺はひどいヒポコンデリヤだわい」

* * * * * *

或る夜、庭の樹立がざわめいて、見ると、靜かな雨が野面を、丘を、樹を仄白く煙らせて、それらの上にふりそそいで居た。じつとりと降りそそぐ初秋の雨は、草屋根の下では、その跫音も雫も聞えなかつた。ただ家のなかの空氣をしめやかに、ランプの光をこまやかなものにした。さうして、それ等のなかにつつまれて端坐した彼に、或る微かな心持、旅愁のやうな心持を抱かせた。さうして、その秋の雨自らも、遠くへ行く淋しい旅人のやうに、この村の上を通り過ぎて行くのであつた。彼は夜の雨戸をくりながらその白い雨の後姿を見入つた。

そんな雨が二度三度と村を通り過ぎると、夕方の風を寒がつて、猫は彼の主人にすり寄つた。身のまはりには單衣もとより持ち合せて居ない彼も震へた。

或る夕方から降りだした雨は、一晩明けても、二日經つても、三日經つても、なかなかやまなかつた。初めの内こそ、それらの雨にある或る心持を寄せて樂しんで居た彼も、もうこの陰氣な天候には飽き飽きした。それでも雨は未だやまない。

犬の體には蚤がわいた。二匹の犬はいぢらしくも、互に、相手の背や尾のさきなどの蚤をとり合つて居た。彼は彼等のこの動作を優しい心情をもつてながめた。併し、それ等の犬の蚤が何時の間にか、彼にもうつつた。さうして睡眠を蚤に苦しめられ出した。蚤は彼の體中をのそのそと無數の細い線になつて這ひまはつた。

それに睡眠の不足のために、暫く忘れて居た慢性の胃病が、彼を先づ頭から陰鬱にした。それがやがて心を陰鬱にした。毎日毎日の、たく同じ食卓が、彼の食慾を不振にした。その毎日同一の食物が彼の胃液を涸らせるやうにして居ると、感じないでは居られなかつた。犬でさへもうそれには飽きて居た。ちよつと鼻のさきを彼等の皿の上に押しつけただけで、彼等さへ再び見向きもしなかつた。けれどもこれに就て、彼は彼の妻には何も言ふべきではなかつた。この村にある食ひ物とては、これきりだからである。

彼の單物はへなへなにしとつて體にまつはりつき、彼の足のうらは脂汗のためにねちねちして、坐つて居る時にはその足の汗と變な濕かさとが彼の尻に傳うて來て、蚤が好んでそこに集まつて居た。頭の毛のなかにも蚤が居るやうな氣がした。それを梳かうとすると、冷りとしとつた生えるがままの毛髮は、堅く櫛に絡んで、櫛は折れてしまつた。その蚤の巣のやうに感じられる體を洗つて、さつぱりするために、風呂に

入りたいと思つても、彼の家には風呂桶はなかつた。近所の農家では、天氣の日には毎日風呂を沸かしたけれども、野良仕事をしないこの頃の雨の日には、わざわざ水を汲んだりしてまで、風呂へ入る必要はないと、彼等は言つて居た。さうして農家では、朝から何にもせずに、何にも食はずに寢て居るといふ家族もあつた。

猫は、毎日毎日外へ出て歩いて、濡れた體と泥だらけの足とで家中を横行した。そればかりか、この猫は或る日、蛙を咥へて家のなかへ運び込んでからは、寒さで動作ののろくなつて居る蛙を、毎日毎日、幾つも幾つも咥へて來た。妻はおほぎやうに叫び立てて逃げまはつた。いかに叱つても、猫はそれを運ぶことをやめなかつた。妻も叫び立てることをやめなかつた。生白い腹を見せて、蛙は座敷のなかで、よく死んで居た。猫は家のなかを荒野と同じやうに考へてゐる。さうして家のなかは荒野と全く同じであつた。

或る日、彼の二疋の犬は、隣家の鷄を捕へて食つて居るところを、その家の作代に見つかつて、散散打たれて歸つて來た。その隣家へ、彼の妻がそれの詫びに行つたところが、圓滿な言葉といふものを學ばなかつた田舍大盡の老妻君は、案外な不機嫌であつた。犬は以後一切繋いで置いて貰ひたい。運動させなければならぬならば、どうせ遊んで居られる方ばかりだから自分達で連れて歩けばいい。庭のなかへ這入つては糞をしちらかす。田や畑は荒す。夜は吠えてやかましい。そのために子供が目をさます。その上につい一週間ほど前から卵を産み始めたばかりのいい鷄などを食はれてたまるものではない。まるで狼のやうな犬だ。若し以後、庭のなかへ這入るやうな事があつたならば、遠慮はして居られないから打ちのめす、うちには外にも澤山の鷄があるのだから。と何か別の事で非常に激昂して居るらしい心を、彼の犬の方へうつして、ヒステリカルな聲で散散に叱鳴り立てた。その聲が自分の家のなかで坐つて居る彼の耳にまで聞えて來た。この中老の婦人はこの犬どもの主人が、他の村人のやうに彼の女に對して尊敬を拂はぬといつて、兼兼、常に不愉快に思つて居たからであつた。最も奇妙なことには、彼の女は彼等夫婦が何も野良仕事をしないといふ事實に就ての彼の女自身の單純な解釋から、彼の女の憎らしい両人が何か非常に贅澤な生活でもして居るものと推察して居たものと見える。かういふわけで、發育盛りの若い二疋の犬は、毎日鎖で繋がれればならなかつた。

彼は初めの數日は自分で自分の犬を運動に連れて行つた。二匹の犬を一人で牽くのは仲仲にむづかしかつた。それに傘をもさされればならなかつた。道は非常に濘つて居た。どうせ遊んで居る閑人だ、運動なら自分で連れて步け……と言つた言葉を思ひ出すと、彼は步きながら悲しげに苦笑を洩した。若い大きな犬どもは五町や六町位の運動では、到底滿足しなかつた。それに彼等は普通の道路を厭うて、そのなかへ足を踏み込むと露で脛まで濡れる畦道の方へ横溢した活氣でもつて、その鎖を強く引つ張りながら、よろめく彼を引き込んで行つた。わけても闘犬の性質を持つた一疋は非常な力であつた。それらの様子を、隣家の老妻君は家のなかから見て居さうに、彼は思つた。實際そんな時もあつた。運動不足で癇癪を起して居る犬どもは、繋がれながら、夕方になると、與へた飯を一口だけで見むきもせずに、ものに怯えて、淋しい長い聲で何かを訴へて吠え立てた。その聲が、雨のためにほの白く煙つた空間を傳うて、その向側の丘の方へ傳つて行くと、その丘からはその聲が重苦しい山彦になつて吠え返して來る。犬はそれを自分たち自身の聲とは知らずに、再び

より激しくそれへ吠え返した。それが再び山の方へひびき渡る。かうしていつまでも犬の遠吠えはやまない。犬をなだめてやらうとして、彼等の名を呼んでも、もうおびえきつて居る犬どもに、彼等の主人をさへ怖しがつて尻込みした。仕方なしにそのまま犬を吠えさせて置くと、そのけたたましいやるせない聲は、彼の心の底に沁み込み、それを震動させて、ちやうど胸騒ぎする時の心臓のやうに彼の胸を壓しつけるのであつた。犬はかうした夕方毎に一しきり物凄く長鳴きした。或る時には犬のその聲を聞いて、例の隣の大盡の家からは「ほんとうになんといふうるさい犬だらう！」と、大きな聲で子供が吐鳴るやうなこともあつた。彼は例の老妻君が、自分の娘にさう言はせて居るのだと氣がついて、この度し難い女に業を煮やした。猫の方は猫で、相變らず蛙を啣へて來て、のつそりと泥だらけの足で夕闇の座敷をうろついて居た。彼は時にはそれらの猫を強く蹴り飛した。連日の雨にしめつて燃えなくなつて居る薪の烟が、風の具合で、意地わるく毎日座敷の方へばかり這入り込んで來て天井一面に重くのさばつた。

晝間の犬の音なしい時には、例の隣家の大盡の家では、卵を生んだ鷄が何羽も何羽も、人の癇をそそり聳さねば措かないやうな聲で、け、け、け、け、けけけけと一時間もそれ以上も鳴きつづけた。或る日、それらの一群が、彼の家へ紛れ込んで來たが、犬どもの繋がれて居るのを見ると、したりげに後から後から群をなして彼の庭へ闖入した。さうして犬の食ひちらした飯粒を悠然と拾ひ初めた。犬は腹を立てて追ふ。鷄はちよつと身を引く。腹を立てた犬は吠え立てたけれども鷄の一群は別に愕かなかつた。その一群の闖入者を追ひ拂はうとして走り出した犬には、鎖が頸玉をしつかりとおさへて居た。あせればあせるだけ彼自身の喉が締めつけられるだけであつた。遂には彼等同士の二つの鎖がお互の身動きも出來ない程に絡み合つて居たりする。さうしてそれを訴へて吠える。彼は雨のなかへ下りて行つて、どう縺れて居るか解らない鎖を直してやらうとする。犬どもは喜んで泥だらけの足を彼の胸のあたりへ押しつける。犬どもがぢつとして居ないために、鎖は更に複雑に縺れ合つて行く。苛立たしくもどうしても解けない。たうとう犬は悲鳴をあげる。一度追はれた鷄は、その間に再び平氣で縁側へさへ上つて來て、そこへ汚水のやうな糞をしたりした。手を擴げて追ふと、彼等はさも業業しく叫び立てた。彼等はちやうど、あの意地わるの女主人に言附かつて、彼を揶揄するために來たかとさへ思はれた。その女主人は、垣根の向うから、それらの光景を見て居ながら、わざと氣のつかぬふりをして居る。彼の妻はそれを見ると、何かあてつけらしく鷄を罵りさうにするのを彼は制止した。彼はそんな事をしては悪いと思つて居るよりも、臆病と卑屈とから、それすらも出來ないのであつた。さうして内心は妻よりより以上に憤慨して居るのである。別の隣家の小汚い女の子が二人、別に嬰兒まで負うて、雨で遊び場がないので、猫よりももつと汚い足と着物とで彼の家へ押込んで來た。背中の嬰兒が泣く。さうして二人ともそれぞれに何を見ても欲しがる。お國といふ名の十三になるといふ一番上の兒は、もうすでに女特有の性質を發揮して、彼の妻を相手に、隣の大盡の家の悪口やら、いろいろの世間話を口やかましく聞かせて居た。それ等の兒は時時彼等が風呂を貰つて這入る家の子なので、その子を追ひ立てることは出來にくいと妻は言つた。その實、彼の妻はそんな子供をでも話相手に欲しかつたのである。それでも、さすが彼の妻もうるさいと思ふ時もあると見える。「もうちへお歸り」といふ

と、その子供は口口に「いやだあ、うちでは皆眠てゐるだ、戸たてて。まつ暗だもの。下のうちで遊んで來うと言つたべいし」と言ふのであつた。「下のうち」といふのは彼の家を指すのである。犬や猫ばかりでない、確にこの子供達が一層澤山に蚤を負うて來るに違ひない、と彼は考へた。彼はいらいらしながらも、よその人とさへ言へばこんな子供にまで小さくなつて、小言一つ言へない性質であつた。さうしてそんなことには無神經なほど無頓着な彼の妻が、その子供たちに雨降りのなかを、お豆腐を買つて來いの、お砂糖がなくなつたのと言つては、あまりしげしげ用事に使ふのを見ると、彼は反つてはらはらして、妻を叱り飛ばした。

その子供達の家へ風呂を貰ひに行くと、七十位の、耳の遠い老婆が、風呂釜の下を燃してくれながら、いろいろと東京の話を聞きたがつた。東京の話ではない江戸の話である。この老婆は「煙のやうな昔」とそのツルゲニエフのやうな言葉をその老婆自身が言つた娘のころに、江戸の某様の御屋敷で御奉公したとかで、御維新の騒ぎで殿様が甲府の町奉行になるところが駄目になつた話やら、その年は實に悪い年で山王様の御祭が満足に出來なかつたことやらを、とぎれとぎれに語り出して、さてまだ眼の見えた昔に見た江戸の質問を彼にするのであつた。維新で田舎へ歸つたと言ひながら、その維新とはどんなものであるかは知らないのであつた。「その時にはどんな世の中に代ることかと思つたのに、昔とちつとも代りはしない。こんなことなら、何もあんな大騒ぎをすることもなかつたのに……」とそんなことを呟いた。さうして電車が通つて居たり、公園があつたりする東京といふものの概念は何一つ持つて居なかつた。彼には答へる術もないその江戸の質問を、くどくどと尋ねるのであつた。さて彼が「江戸」の事は不案内だと氣がつくと、彼の女の娘時代のその家の全盛、今の主人である息子の馬鹿さ、身上も持てないくせにけちんばうで御近所へのつき合ひもろくに出來ないこと、それから思ひ出して子供が毎度遊びに行つて御邪魔をするといふやうなこと、あなたの商賣は何だといふ質問、實に實に平凡なことどもを長長と聞かせて、それに對してそれ相當に長長しい返答を要求するのであつた。それでなくてさへ口不調法な彼には、返事の仕やうが解らなかつた。それにこの老婆は答へても何も聞えぬだらうほど耳が遠かつた。一體彼はそんな話には面白くないのだ！ ひとのことなどはどうでもいいのだ！ 彼はさう叫んでやりたくなつた。この老婆のくどい話は結局、何のことであるかは解らなかつたけれども、彼の氣持をじめじめさせるには、何しろ十分すぎた。しかもそれの相手になつてくれと懇願する表情（それは半ばは死んで居て、犬のそれの半分も豊かではないをもつて、この老婆は五十六の時に全く失明したと、今のさつきも物語つたその兩眼で、彼を見上げた。見つめた。風呂釜の火が一しきりゆらゆらと燃え上つて、ふと、この腰の全く曲つて居る老婆を照すと、片手に長い火箸を持つた老婆は、廣い農家の大きな物置場の暗闇の背景から、くつきり浮き上つて、何か呪を呟く妖婆のやうにも見えた。

その風呂場を脱れ出てくると、さすがに夜風がさわやかに、彼の湯上りの肌を撫でた。併し家へ歸つて見ると、彼の妻はホヤのすすけた吊りランプの影で、里の母からでも來たらしい手紙を讀んで居たが、彼には見せたくないらしく、遽にそれを長長と巻き納めると、不興極まる顏をして、その吐息を彼に吹きかけでもするかのやうに彼をまともに見上げて、涙で光らせた瞳で彼を見上げた。それに何か意味するやうに

も見え、哀願するやうにも見えた。その手紙を、彼は讀まずとも知つてゐる。彼にはつまらぬことであつて、彼の女達には重大な何事かであらう。彼の女等は互に彼の女等の苦しい困窮を訴へ合つて居るのであらう……彼の家には、もう一人泣きに來る女があつた。それはお絹といふ名の四十近い女であつた。彼等がこの家へ引越して來る時に、この家へ案内し・引越しの手傳ひをしたあの女である。その因縁で、その後、彼の家庭へ時時出入りするやうになつた女である。彼の女は身の上ばなしを初めてはよく泣いた。お絹はいろいろな生涯を經てこの村へ流れて來た女であつた。最初にたつた一度、もの珍らしさからついこの女の身の上咄に耳を傾けたのが原因で、お絹はその後いつもいつも一つの話を繰り返した。彼はしまひにはお絹の顏を見ると腹立しくなつた。もつとも不思議なことには、彼はお絹の顏さへ見れば胃のあたりが鈍痛し初めるのであつた……。

　床の下では、犬が蚤にせめ立てられて、それを追ふために身を搖すぶると、その度にゆれる鎖の音が、がちやがちやと彼に聞えて來た。彼はお絹の身の上ばなしよりも、蚤に惱まされて居る犬の方に、より多くの同情を持つた。さうして彼は自分自身の脊中にも、脇腹にも、襟にも、頭の毛のなかにも、蚤が無數にうごめき出すのを感じた……。

　せめては早く雨だけでも晴れてくれないものかと、彼は每日々々夕方になると空を見上げた。彼は何故か夕方に空を見上げた。さうして星でも出ては居ないかと、空を見まはした。星どころか、野面は白く烟つて、空はただ無限に重かつた。

　些細な單調な出來事のコンビネエションや、パアミテエションが、每日單調に繰り返された。それらがひと度彼の體や心の具合に結びつくと、それは悉く憂鬱な厭世的なものに化つた。

雨は何時までも降りやまない。それは今日でもう幾日になるか、五日であるか、十日であるか、二週間であるか、それとも一週間であるか、彼はそれを知らない。唯もうどの日も、どの日も、區別の無い、單調な、重苦しい、長長しい幾日かであつた。牢獄のなかで人はかういふ幾日かを送るであらうか？　おお！　然うだ。日蔭になつて、五月になつても、八月の半頃になつても青い葉一枚とてはなく、ただ莖ばかりが蔓草のやうに徒らによろめいて延びて居た、この家の井戸端のあの薔薇の木の生活だ。彼は再び薔薇のことを考へた。考へたばかりではない。あの日かげの薔薇の[illegible]を今は生活そのものをもつて考へるのである、こんな日每の机の前に坐り込んだまま、

　薔薇といへば、その薔薇は、何時かあの涙ぐましい――事實、彼に涙を流させた畸形な花を一つ咲かせてから、日ましによい花を咲かせて、咲き誇らせて居たのに、花にはまたこの頃の長い長い雨に、花片はことごとく紙片のやうによれよれになつて、濡れに濡れて碎けて居た　碎けて咲いた。

* * * * * *

　こんな日頃に、ただ深夜ばかりが、彼に閑安と落着きとを與へた。鷄の居ない夜だけ、鎖から放して置くことにした犬が、今ごろ、田の畔をでも元氣よく跳びまはつて居るかと想像することが、寢牀のなかで彼をのびのびした氣持にした。

　併し或る夜であつた。家の外から彼の家を喚ぶものがあつた。未だ机の前に坐りこんで、考へに壓へつけられて居た彼は、緣側の戸を開けて見ると、一人の黒い男が、生垣と葉との向うの道の上に立つて居た。さうしてその何者かが

彼に向つて、横柄に呼びかけた。巡査かも知れない、と彼は思つた。

「これやあ君の家の犬だらう」

「さうだ。何故だい」

「これやあ、怖くつて通れんわい」

その村位、犬を恐怖する村は、先づ世界中にないと、彼は思つた。この附近には、狂犬が非常に多いからだと村の一人が説明して居た。それに彼の犬の一疋は純粋の日本犬であつた。

「大丈夫だよ。形は怖いが、おとなしい犬だから」

「何が大丈夫だい。怖くつて通れもしない」

「狂犬ぢやないよ。吠えもしないぢやないか」

「飼つて居る者はさうでも、飼はんものにはおつかない。ちよつと出て來て、繋いだらどうだい」

この何者かの非常に横柄な口調は、其奴が闇で覆面して居るからだと思ふと、彼は非常に憤ろしかつた。彼はいきなり其處にあつた杖をとると、傘もささずに道の方へ飛び出した。雨は繖ほどより降つて居ない。その知らない男は、何かまだぐづぐづ言つて居た。さうしてどうしてもこの犬を繋げ、それでなければ俺は通れぬ、と言ひ張つた。可笑しいほど犬を恐れ乍ら、可笑しいほど一人で威張つて居た。「これは優しい犬だ、未だ子供だから人懐しがつて通る人の傍へ行くのだ」と彼は犬のために辯護した。その彼にとつては、今、犬は無辜の民である。その男は暴君である。彼自身は義民であつた。その男の言ふことが一一理不盡に思へた彼は、果は大聲でその男を罵つた。彼の妻は何事かと縁側へ出て來たが、この樣子を見ると彼の女は、暗のなかの通行人に向つて頻りに詫びて居た。彼にはそれが又腹立しかつた。

「默つて居ろ。卑屈な奴だ、誤る事はない。犬が惡いのぢやないぞ。この男が臆病なんだ。子供や泥棒ぢやあるまいし……」

「何、泥棒だと」

「お前が泥棒だと言やしないよ。音無しく尾を振つて居る犬をそんなに怖がる奴は泥棒と見たいだと言つただけだ」

彼は、しまひには、その男を毆りつけるつもりであつた。彼等は五六間を距てて口爭ひして居た。其處へ、見知らない男の後から一つの提灯が來た。それがその男に向つて何か言つて居たが、提灯は彼の方へ近づいて來た。彼等は棒組だな、と彼は即座にさう思つた。若し傍へ來て何か言つたら、と彼は杖をとり直して身構へした。

「どうぞ堪忍してやつて下さいましよ。親爺やお酒をくらつて居るんでさ」

その提灯の男は、反つて彼に謝つて居たのだ。彼は相手が醉つぱらひであつたと知れると、急に自分が馬鹿げて來た。併し、彼は笑へもしなかつた。その時或る説明しがたい心持で、身構へて把つて居た自分の杖をふり上げると、自分の前で何事も知らずに尾を振つてゐる自分の犬を、彼は強かに打ち下した。犬は不意を打たれて、けん、けん、と叫びながら家のなかへ逃げ込む。打たれない犬もつづいて逃込む。彼は果然とそこに立つて居たが、舌打をして、その杖を溝のなかへたたきつけると、すたすたと家へ這入つて行つた。犬は二疋とも床下深く身を隱して居た。さうして庭に這入つて來た彼を見た時、彼等は細い悲しい聲を上げて、彼等の訴へを吠えた。杖を捨てても未だ操つて居た彼の掌は、ねちこちと汗ばんで居た。

「今に見ろ。村の者を集めてあの犬を打殺してやらあ！」醉つぱらひはそんな事を言ひながら、提灯をもつた若い男に連れられて通り去つた。

醉つぱらひのその捨白が、その晩から、彼に

は非常な心配の種になつた。村の者が、實際、彼の犬を打殺しはしないかと考へられ出すと、身の上話で泣いて居たあの太つちよの女が、いつか彼に告げた言葉も思ひ出された――「この村では冬になると犬を殺して食ひますよ。御用心なさい、御宅のは若くつて太つて居るから丁度いいなんて、冗談でせうがそんな事をいつて居ましたよ」

捨てて仕舞つた杖は、思へば思ふほど、彼には非常に惜しいものであつた。それは唐草模樣の花の彫刻をした銀の握のある杖であつた。別段それほど惜しむに足りるものではないのに、それが彼には不思議なほど惜しまれた。その翌日は、彼は犬を運動させるやうなふりをして、その杖を捜す爲めに、渠の流れに沿うた道を十町以上も下つて見た。あの清らかであつた渠の水は、毎日の雨で徒らに濁り立つて居た。杖は何處にも見出されなかつた。彼はあんな風にして杖を無くした事を、妻にも内緒にして居るのであつた、全く羞づかしい事だつたので。

杖と醉漢の捨白とが、彼自身でさへ時時は可笑しいばかり氣にかかる。一層、あの時、あの男を探りつけてやればよかつたに――彼は寢床のなかで、口惜しくてならない時もあつた……若しや犬がいぢめられて居はしないかと、それを夜中放して置くことが苦勞になり出した。氣を苛立てながら聞耳をそば立てると、犬の悲鳴がする。大急ぎで縁側へ出て戸を開けながら口笛を吹くと、犬は直ぐ何處かから歸つて來る。さうして鳴いて居るのは外の犬であつた。併し、口笛を吹いても名を呼んでも容易に歸つて來ない事がある。さうして一層けたたましく吠えつづける。そんな時には居ても立つても居られない。彼の妻は、あれはうちの犬ではないとか、犬は別に何處でも鳴いては居ないとか言つて、初めは彼を相手にはしなかつたけれども、彼があまりやかましくいふので、この妄想は、何時しか妻の方にまで感染した。彼等は呪はれてゐる者のやうに戰戰兢兢として居た。その上に、ランプの焰がどうした具合か、毎夜、ぽつ、ぽつ、ぽつと小止みなく搖れて、どこをどう直して見ても直らなかつた。彼は自分の不安な心を見るやうにランプの搖れる芯を凝視して、神經を苛立てて居た。或る夜、ただ事でない犬の鳴聲がするので、庭に出て見ると、レオはさも急を告げるらしい樣子で彼を見て吠え立てる。遠くの方ではフラテ？ の悲鳴が切なく聞えて來る。彼はレオの後に從ひながら、悲鳴をたよりに、フラテ！ フラテ！ と呼びながら、それの居所を捜し求めるのであつた。やがて歸つて來たフラテを見ると、頸の周圍と腹とが泥だらけであつた。フラテは泥の上にすりつけられて折檻されて居たのであらう。何處からか凱歌のやうに人の笑聲が聞えて來る。……その夜以來、犬は夜中のただ一二時間だけ放して置いてから、又再び繋ぐことにした。且又、それの鎖の場所を玄關の土間のなかへ變へた――人通りの出來る庭の隅では、たとひ繋いで置いても不用心だからである。

しかし繋がれるために呼ばれるのだと知ると犬は呼んでもなかなか歸つて來なかつた。歸つて來ても、主人たちの顏つきを見ながら、庭の中を逃げ廻つてなかなか捉へられなかつた。そこで食物を與へて釣つて見ても鎖の傍へならば寄りつかなかつた。鬪犬の子で逞しい足と、太い牙とを持つてゐるフラテは、或る夜自分の鎖を眞中から食切つて、四邊の籬から驅けるためには床下の土に大きな穴を開け、大きな體をそこからもぐり出すと、鎖の半分は頸にぶらさげて泥濘の地上にそれを曳きながら、夜中樂しく遊びまはつて居た。それを主人に知らせるために、さうして自分も解放されたいために、レオ

は激しく鳴き叫んだ。

彼は、犬に對する夜中の心配を晝間に考へ直すことがあつたが、これはどうも一種の脅迫觀念だと氣づかずには居られなかつた。犬だつて自分の力で自分を保護することは知つて居るだらう……。さうして、たわいもない犬のことなどをばかり考へて居る自分が、恥しくも情けなかつた。けれども夜になると、やはり――俺の犬は盜まれる、殺される！　きつとだ！　今では、犬は彼にとつてただ犬ではなかつた――何か或る象徴であつた。愛するといふ事は實にそれで苦しむといふ事であつた。杖のこともなかなか忘れられなかつた。犬の心配のない時には、銀金具の環のある杖が、その金具の重みのために頭の方だけ少し沈みながら、濁つた溝のなかを、流れのままに浮いたり沈んだりして、何處かを、さうして涯しのない遠い何處かへ持つて行かれるために流れて行くところを、彼は屢、夢のなかで空想して居た。

*　*　*　*　*

雨は、一日小降りになつたかと思ふと、その次の日には前よりももう一層ひどく降る。さて、その次の日にはまた小降りになる。併し、その次の次の日にはまた降りしきる……。この間歇的な雨は何日までも降る……。幾日でも、幾日でも降る……、世界そのものを腐らせようとして降る……

何もかも腐れ……、
腐るなら腐れ……、
勝手に腐れ……、
腐れ腐れ……、
お前の頭が……、
まつさきに腐れ……、
…………、
…………、
…………、
…………、
…………、

韻のないコーラスは家の外から、四方から來て、彼の家のなか一ぱいにうすら寒く、うす暗く漂うて、見てゐると雨の脚はさういふリズムで降る。北の窓の方を見ても、南の窓の方を見ても、その物憂いリズムの無限の度數を繰り返し、繰り返して降る……。何日になつたならば止まるといふ希望なしで降る……。

*　*　*　*　*

ここに一つの丘があつた。

彼の家の緣側から見るとき、庭の松の枝と櫻の枝とは互に兩方から突き出して交り合つて、そこに穹窿形の空間が出來て、その樹と樹との枝と葉とが形作るアアチ形の曲線は、生垣の頭の眞直ぐな直線で下から受け支へられて居た。言はばそれらが緣の枠をつくつて居た。額緣であつた。さうしてその額緣の空間のずつと底から、その丘は、程遠くの方に見えるのであつた。

彼は、何時初めてこの丘を見出したのであらう？　とにかく、この丘が彼の目をひいた。さうして彼はこの丘を非常に好きになつて居た、長い陰氣なこのごろの雨の日の毎日毎日に、彼の沈んだ心の窓である彼の瞳を、人生の憂悶からそむけて外側の方へ向ける度毎に、彼の瞳に映つて來るのはその丘であつた。

その丘は、わけても、彼の庭の樹の枝と葉とが形作つたあの穹窿形の額緣を通して見る時に、自らと一つの別天地のやうな趣があつた。ちやうどいいくらゐに程遠くて、さうして現實よりは夢幻的で、夢幻よりは現實的で、その上

霧の濃淡によつて、或る時にはそれが彼の方へ稍近づいて、或る時にはずつと遠退いて感じられた。或る時には磨ガラスを透して見るやうにほのかであつた。

その丘はどこか女の脇腹の感じに似て居た。のんびりとした感情を持つてうねつてゐる優雅な、思ひ思ひの方向へ走つてゐる無數の曲線が、せり上つて、せり持ちになつて出來上つた一つの立體形であつた。さうして、あの緑色の額縁のなかへきちんと收まつて、譬へば、最も放膽に開展しながらも、發端と大團圓とがしつくりと照應できる物語のやうに、その景色は美しくも、少しの無理も無く、その上にせせつこましく無しに纏つて居た。それはどこかに古代希臘の彫刻にあると謂はれてゐる沖靜な、而も活き活きとした美をゆつたりと湛へて居た。それは氣高い愛嬌のある微笑をもつた女の口の端にも似て居た。丘の頂には雜木林があつて、その木は何れも手の指を空に向けて開けたやうに枝を張つて居て、彼の立つてゐる場所からは一寸か五寸ぐらゐに見える——或る時には一寸ぐらゐに、さうして或る時には五寸ぐらゐに感じられて見える。短い頭髪のやうに揃うて立つてゐる林は、裸の丘を額にしてそれの頂だけに、美しい生え際をして生えて見える。それらの林と空とが接する境目にはごく微細な凹凸があつて、それが味ひ盡せないリズムを持つて居る。それの少しばかり不足してゐるかと思へるところには、その林の主である家の草屋根が一つ、それの單調を補うて居る。さうして、その豐かにもち上つた緑の天鵞絨のやうな横腹には、數百本の縱の筋が、互に規則的な距離をへだてて、平行に、その丘の斜面の表面を、上から下の方へ弓形に滑りおりて、くつきりとした大名縞を描き出して居た。それは緑色の縞瑪瑙の切斷面である。それは多分、杉か檜か何かの苗床であるからであらう。だがそんなことはどうでもいい。唯、この丘をかくまでに繪畫的に、裝飾風に見せて居るのには、この自然のなかの些細な人工性が、期せずして、それの爲めに最も著しい效果を與へられて居るのであつた、ちやうど林のなかに家の屋根が見えて居ると同じやうに。さうして、この場合どこからどこまでが自然その儘のもので、どこが人間の造つたものであるかは、もう區別出來ないことである。自然の上に働いた人間の勞作が、自然のなかへ工合よく溶け入つてしまつて居る。何といふ美しさであらう! それは見て居て、優しく懷しかつた おれの住みたい藝術の世界はあんなところなのだが……

——何をそんなに見つめていらつしやるの?——

彼の妻が彼に尋ねる。

「うん。あの丘だよ、あの丘なのだがね——

あれがどうしたの?——

——どうもしない。綺麗ぢやないか。何とも言へない。

——さうね。何だか着物のやうだわ——

この丘は澁い好みの御召の着物を着て居ると、彼の妻は思つて居る。

それは緑色ばかりで描かれた單色畫であつた。しかしこのモノクロオムは、すべての優秀なそれと全く同じやうに、殆んど無限な色彩をその單色のなかに含ませて居た。さうして見て居れば見て居るほど、それの豐富が湧き出した。一見ただ緑色の一かたまりであつて、而もそれは部分部分に應じて千差萬別の緑色であつた。さうしてそれが動し難い一つの色調を織り出して居た。譬へば一つの緑玉が、ただそれ自身の緑色を基調にして、併し、それの磨かれた一つ一つの面に應じて、各相異つた色と效果とを生み出して居る有樣にも似て居た。

彼の瞳は、常に喜んでその丘の上で休息をし

て居る。

「透明な心を！　透明な心を！――」

その丘は、彼の瞳にむかつて、かうものを言ひかけた。

或る日。その日は前夜からぱつたり雨が止んで、その日も朝からうすぐもりであつた。やがて正午前には、雲に滲んで太陽の形さへ、かすかながら空の奥底から卵色に見え出した。

彼の妻は、秋の着物の用意に言寄せて、東京へ行つて來ようと言ひ出した。彼の女は空の天氣を案ずるよりも、夫の天氣の變らないうちにと、早い晝飯をすませると、毎夜の憧れである東京へ、あたふたと出かけた。心は恐らく體より三時間も早く東京へ着いたに相違ない。

彼は、唯ひとりぼんやりと、縁側に立つて、見るともなしに、日頃の目のやり場であるあの丘を眺めて居た。その時その丘の面は、何となく全體の趣が常とは違つて居ることに彼は氣づいた。それはどうもただ天氣の光だけではないのである。けれどもその原因は少しも解らなかつた。と見かう見して居るうちに、彼はやつと思ひ出して、机のひき出しから眼鏡を捜し出した。彼は可なりひどい近眼でありながら、近頃は折折、眼鏡をかけることさへ忘れて居るのであつた。何ごともしない近頃の彼には眼鏡も殆んど用が無くなつて居たから。さうして、つい眼鏡をかけずに居ることが、彼を一層神經衰弱にさせて居ることにも氣づかずに。眼鏡をかけて見ると、天地は全く別箇のものに見え出した。今日は天地の間に何かよろこびのやうなものを見ることが出來た。空が明るいからである。丘ははつきりと見えた。なる程。丘はいつもとは違つて見える――丘の雜木林の上には鳥が群れて居た。うすれ日を上から浴びて、丘の横腹は、その凹凸が研ぎ出されたやうな丸味を見せて、滑らかに綠金に光つて居る。苗木の畑である數百本の立縞――なる程、違つて居るのは其處だ。その立縞の縞と縞との間の地面をよく見ると、その左の方の一角を要にして、上に開いた扇形に、三角形に、何時もの地面の綠色が、どういふわけか、黒い紫色に變つて居るのである。はて！　何時の間にこんなに變つたのであらう？　何のために變つたのであらう？　彼は、實に不思議でならない氣持がした。彼には世にも珍らしい大事が突發したかのやうに、しばらくその丘の上を凝視した。その丘は、彼には或るフェアリイ・ランドのやうに思はれた。美しく、小さく、さうして今日はその上にも不可思議をさへ持つて居るではないか。

かうして暫く見つづけて居ると、その丘の表面の紫色と綠色との境目のところが、ひとりでにむくむくむくと持ち上つて、その紫色の領分が、自然と少しづつ延び擴がつて行くやうであつた。尚も、瞳を見据ゑると――さうすると眉と眉との間が少し痛かつたが――其處には、小さな小さな一寸法師が居て、腰をかがめては蠢動しながら、せつせとその綠色を收穫して居るのであつた。あの苗木と苗木との列の間に、農夫が何かを作つて置いて居たのであらう。併し、見た目には、その農作物が刈りとられて居るといふよりも、紫色の土が今むくむくと持上つてくるとしか、彼の目には感じられなかつた。

彼は不可思議な遠眼鏡の底を覗いて、その中にフェアリイ・ランドのフェアリイが仕事をして居るのをでも見るやうに、この小さな丘に[illegible]る驚異的な心持を起しながら、ちやうど子供が百色眼鏡を覗き込んだやうに、目ばたきもしない憧れの心持で眺め入つた。彼はたうとう煙草盆と座布團とを緣側まで持ち出して、このな[illegible]に持ち上る土の紫色を[illegible]。紫色の土は[illegible]やうに持ち上る。あとからあ

とかうと靜かに上る。紫色の領土が、紫色の領土を見る見る片はじから侵略して行く。と、うすれ日はだんだんと明るくなつて來る。不意に、夕日の光が、少しの間晴れて來た西の方の雲の細い隙間から一かたまりに流れ迸つて、丘の上に當つた。丘は舞ふやうな光線のなかに急に輝き出す。その丘の上へ、色彩のあるフットライトが投げられたかのやうに。丘の上ではフェアリイも、草木達も、太い濃い影を地に曳いた。さうしてフェアリイ・ランドの風景は、一層くつきりと浮き上つた。今も立上つたばかりの紫色の頂にはオルガンの最も低い音色のやうな聲をして、何か一齊に叫び出しさうに見える。丘の頂の林のなかの草屋根は滑らかなものになつて、そのなかから濃い白い煙が、縷縷と、ちやうど香煙の煙のやうに、一すぢに立ち昇つた。さうして、彼は今、うつとりとなつてフェアリイ・ランドの王であつた。

その天地の榮光は、自然それ自身の恍惚は、一瞬時の夢のやうに、夕日が雲にかくれた時に消えた。夕日は、雲から、次には一層黒い雲と遠い地平の果の連山の方へ落ち込んで行つた。あの細い雲の隙間のところに、明るいかがやかな光の名殘を殘して。

氣がついて見ると、丘はもうすつかり紫色に變つて居る……フェアリイの仕事が終つたからだ……。見とれて居るうちに、あたりは何時しかとつぷりと暗くなつて居た。それでも彼の瞳のなかには、フェアリイ・ランドの丘だけが、依然として、闇のなかにくつきりと見えるやうに思ふ。

やがて、いつまでも見えるやうに思つてゐた丘も見えなくなつた。……

* * * * *

彼が我にかへつて、もうフェアリイ・ランドの王ではなかつた時、闇は、遠い野や山の方から押し寄せて來て、それが部屋といふ部屋中へ、もうぎつしりとつめ込まれて居た。彼の身のまはりは全く暗黒であつた。彼は先づランプへ灯をともさなければと、煙草盆にあつたマッチを擦つた。さうして家中到る處でマッチを擦つた。ランプのありかを求め搜す爲めであつた。けれども何處に置かれて居るのやら、それはどうしても見つからなかつた。

一たい、この頃彼にはそんなことが實によくあつた。ランプなどといふそれ程大きなものではないにしても、その代りには今のさつきまで自分の手のなかに在つたもの、さうして使つて居たもの、例へばペンであるとか、帽子であるとか、筆であるとか、そんな風なものが、不意にどこかへ見えなくなるのであつた。さうして一時間を費して搜しても見つからなかつた品物は、後になつて思ひも寄らないやうな、その緣故へればごく詰まらない所から、意外な時に出て來る。よく搜した筈だと思はれる場所から、ひよつくりと出て來る。併し、搜す時には、何に意地惡く決してそれは出て來ない。さう言ふ事は誰にもよくある事である。併し、この頃彼に起つた程それほど屢々、決して誰にも起るものではない。彼にはこの頃そんな事が一日に少くとも二三度は必ずあつた。そのふとした事が、彼にその都度どんなにか重大に見えたであらう。實に不可解な、神祕とさへ考へたいやうな、寧ろフェイタルとも言ひたい程な出來事だ、とさへ彼には感じられるのであつた。誰か目には見えない何者かが居て、その間ちよつとその品物を隱して居るといふ風にも思へた。さうして彼の持ちものが、かうして毎日二三品づつ位、身のまはりからひよいひよいと消え失せでもするやうに彼には感じられるのであつた。それ故ランプの時にも、「又あれだな」と思ひながら、

彼はもうそれを搜すことを一先づ斷念することにした。それは、妙に、斷念すればする程早く出て來るやうだから。彼はそこで氣がついて、簞笥の上から手さぐりに燭臺をとり下した。それへ陰氣な、赤い、搖れる火をともした。

その夜のやうな時に、そんな田舍で、而もたたひとりで居て、四方を未だ戸締りして居ない家が、彼を薄氣味惡くした。――何とも知れない變な、それは泥棒などといふ素性の知れたものではない別種の侵入者、それは結局正體のない侵入者、それを自由自在に出入するに任せて居るやうな氣がするのであつた。戸袋といふものはそれの性質上、家の隅隅にあつた。生れつき最も臆病な、その上更にこの頃ではそれの程度が、神經質な子供以外の普通の人間には到底同情、どころではない理解もされさうも無い程にまでなつて居た彼には、家の隅といふやうな場所さへ、不安なところに思へるには十分であつた。彼がそこに立つて一枚一枚と戸を繰つて行くと、戸の走るその音が、野面の方へ重く這つて行つて、そこで空虛に反響して居た。その音に脅えたのであらうか、今までは音無しく睡入つて居たらしい彼の二疋の犬は、その時床の下からほの白く出て來るや否や、又いつものあの夕方の遠吠えを初めた……。十枚ぐらゐもあるその緣側の戸を締めてしまつて、もう一つ反對の側にある短い緣側の戸を締めようと、通り拔けに六疊の座敷へ彼が足を踏み入れた時である。そこの床の間に、ちよこんと立つて居た！ ランプが。今まであれ程搜して、ここだつて念入りに搜した筈の場所ではないか！ いつものやうな小さなものででもあらう事か、こんな大きなものが。……さう思ふと、彼は全く恐怖に近い或る感じがした。……これや、このランプにはうつかり手はつけられない。それを持たうと何の氣もなしに手を差し延した刹那、それが自分の目の前で、ふいとまた見えなくなりでもするとしたならば……彼には、そんな事が想像された。その想像を馬鹿ばかしいと自制しながら、彼は思ひ切つてランプへ手を差し出した。

ランプはいい工合に本ものであつた。

ランプへ灯をともして、戸を締めてしまつて、火鉢の前に來た時、彼の氣がついたのは、お茶を飮まうにも湯がなかつた。炭は眞白な灰になり、瞬間には滾り立つて呻りつづけて居た鐵瓶は、それのなかの水と一緒に冷えきつて居た。それも當然の事である。彼の妻が十一時ごろに出かけて行つた時、それを生けて置いたままで、彼はそれつきり炭を次がなかつたのだから。炭などは愚か、彼にはあのフェアリイ・ランドの丘以外には、世界に何も――自分自身でさへも無かつたのだから。……いい按排にそれの遠吠は今日は案外短くて濟んだと思つた犬は、今度は二疋で、くんくんと鼻を鳴らし出して居た。これは彼等の夕飯の催促なのであつた。空腹なのは彼等と猫とばかりではない。彼自身も先刻からの、妙に胸さわぎのするやうなその臆病な氣持も、うすら寒いのも、一つは確にそれのせゐに相違ないと考へた程に空腹なのであつた。併し、夕飯を食べるにしては、今夜は先づ飯を炊かなければならなかつた――不意に東京へ行くと言ひ出した彼の妻は、汽車の時間の都合でそれの用意はして置けない、と、くどくどと言ひ譯をして、停車場への行きがけにそれをお絹に賴んで行かうと言つた。けれども、昨夜もお絹の身の上話のもう十遍目位を聞かせられて惱まされて居た彼は、妻には米を洗はせて水をしかけさせて、自分自身で炊くことにして居た。火のない火鉢の前に坐り込んで、彼は一晩ぐらゐ飯などは食はなくともいいと思つた。けれども、かうして犬どもにせがまれて、この常に飢に襲はれて居る者どもの空腹を想像

しに見た時、彼は飯を炊かずには居られなかつた。この頃ではもうつかりして居るうちに日が暮れるのだから、早く用意をして置かなければ……と、さうも言ひ置いた妻の言葉を、彼は思ひ出しながら、自分を臺所の方へ運んで行つた。

彼は犬を鎖から放してやつて、それを臺所の方へ呼んで來た。うす暗い隅隅の多い臺所は、彼ひとりではもの淋しかつたからである。犬どもは彼等の主人の心持をよく知つて居たかのやうに、土間にしやがんでゐる彼の傍へ來て、フラテも、レオも、二疋とも彼にすり寄つて坐つた。猫は猫で、そこの板間の端に來て彼の顏に近く蹲つた。かうして彼の妙な一家族が、馬の蹄のやうな形に高く積み上げられて土で出來た竈の前にわびしく物言はぬ團欒をした時に、彼はやつと心丈夫に思へた。さうして彼は火を焚き出した。焚きつけだけはよく燃えた。それが燃え盛ると彼の心も明るくなつた。けれども火は直ぐ消えてしまつて、彼の投げ入れた二三本の薪へは決して燃えつかない。彼はただ徒に焚きつけを燃した。永い間の雨で、薪は濕りきつて居たからである。さうして焚きつけは——こんなもの位はもつとどつさり用意して置けばいいものを！　少しか無かつた焚きつけは、五六遍くべて居るうちには既にもう屑も無かつた。彼は考へついて石油の罐を持ち出した。びくびくしながら薪の上へ石油をぶつかけた。直ぐ石油は地の上から三四寸浮いたところに大きな輕い火の塊をつくつて、燃え立つた。走るやうに燃えた。神經的に燃えた。それは全く何の精神統一もない人の——彼自身のやうな人の昂奮に髣髴として燃えた。思慮なく、理性を沒却して、そのくせ力なく、ただ一氣に燃えた。直ぐにぐつたりと氣がくづをれて下火になつた。石油はただそれがある間はそれ自身だけ燃えて、燃え盡きると、あれほど大きかつた炎の塊は幾つかの小さなそれに分れ分れになつて、それの一つ一つは薪の上つらを這つて傳ひながら、青く小さな炎がちらちらとそこを舐めてしまつたかと思ふと、もう消えて居た。どす黒い臭とどす黒い色とを持つたその特有の煙、それは馬鹿げた感激の後に來る重い氣分に似た煙が、一度にどつと塊つてさもけだるげに昇つた。それは猫がおどろいて立ち上り、二疋の犬は一樣にそれから顏を反けた程にどつさりであつた。彼はその同じことをもう一度試みた末に、石油は薪に灑がれたものよりも土の上に零れたものの方が、最後まで燃えて居るのを發見して（實際、彼には石油の燃え方に就て、いらいらした自分の感激の具象化を、假の病的な細密さで丹念に、研究者のやうに見つづけたのである。）彼は改めて竈の下から、石油の燃えたしるしに、それの上つらだけが黒く燻されて居る薪を竈の外へ、一たん取り出した。さて竈の底の灰の上へ思ひきつてあるだけの石油を灑いで置いてから、その上の上に薪を組み合せて積み上げた。さて燃えて居るマツチを一つかみ投げ込んだ。黒い煙の少しと大きな炎とが、釜の下を傳うて存分に吐き出された。そのうちにそれは少しづつ薪へ燃えうつり出した。

「うまい！　うまい！」

彼は思はず聲を出して、さうひとり言を言つた。その低い聲を聞いて、フラテは彼の細く尖つた顏を上げて、その意味を訊すかのやうに彼の顏を見上げた。やつと、少しづつ燃えて來た薪は、それは心から動かされた人間の、力強い感激のやうに頼もしい炎であつた。おお！　燃えて來る火といふものはどんなにうれしいか。彼と彼の犬とは同じやうに瞳を輝かして、未開の人たちが神と崇めたその燃える火を見つめ

た。その時炎の上に濺がれて居た彼の瞳に、ふと何の關聯もなしに、妻の後姿が、極く小さく——あのフェアリイほど小さく見えるやうな氣がした。その燃える火のなかにゐる彼の妻は、どうやら大變な人ごみのなかに居るやうに感ぜられる……。單な想像ではなく、それは目さきにちらつく幻影に近い——幻影といふのはこんなものであらうかと思へるやうな形で、そんな空想が思ひがけなく彼に起つた時に、ああ活動へ行つて居るな！ と、彼には直覺的にさう思へた。その次には半ば彼自身の意志から、彼の空想は、東京のそのうちでも人氣の多いやうな場所へ向いて行つた。とその次の瞬間に、……若しや、自分自身も今ごろは、そんな人込みのなかを歩いて居るのではなからうか、と、そんな有り得べからざることが極く普通の考へのやうに思ひ浮ぶ。……こんな處に、うす暗いうすら寒い臺所の片隅に、竈の前へしよんぼりと蹲つて、思ふやうには燃えない炎をさつきからぢつと見つづけて居る自分。まるで苦行者が苦行をでもつづけるやうに自分自身の氣分を燃える炎のなかに見つめて、犬や猫にとり圍まれて蹲つて居る自分。これは若しや本當の自分自身ではないので、本當のものは別にちやんと何處かに在るので、ここの自分は何か影のやうな自分ではないのか！ そんな氣持がひしひしと彼に湧いて來た。その心持が彼に滲入つた時に、冷たい感覺が彼の背筋の眞中を、閃くが如くに直下した。身のまはりのすべては、自分自身も竈の炎も二疋の犬も猫も、眼を上げるとお櫃も手桶もランプも流しもとも悉くが、今、ふいと搔き消えはしないかと危ぶまれる。さうして怖る怖る身のまはりが振り返つて見られる。壁の上には、彼自身と二疋の犬との三つの影が三方に擴がつて、大きく黒く一面に映つて、それが炎の燃えるまにまに、壁の面で或は小さく或は大きくふるへる。それは小休みなく動く毎に、それだけ少しづつ彼等の本體の方へ近づいて來て、それ等の本體を呑包んでしまひさうに見える。と、彼の左側に居たレオは、突然ぬつくと立ち上つたが、煙を出すために少しばかり隙けて置いた戸の隙間からすり拔けて外の方へ出て行つた。それから急にけたたましい短い聲で吠え出した。耳を後に立ててその兄弟の聲に注意したフラテも同じやうにして出て行つた。彼等は聲を合せて吠えた。——目には見られない何者かが近づいて居ることを彼に告げでもするかのやうに。恐怖が彼を立上らせた。併し、犬どもは直きにそれをやめて不興げな眞面目な樣子で、もとの座へ、彼の傍へ歸つて坐つた。

犬どものその樣子が彼には不審でならなかつた。彼は心を落着けると、少し身を延び上つて、戸の節穴から、試みに、そつと外を窺うて見た。すると、ほのかな闇を見透して居る彼の目に、柿の樹の幹のかげから黒い小さな人影が、不思議にも足音なしに現はれて來た！ その人影が小さかつたことが彼をいくらか安心させた。けれどもそれは正しく何の足音もない者であつた！ 併し、それが動いて來て、戸の隙間から洩れて流れて居るランプの光につき當つた時、それは別に奇異なものではなかつた。それはお桑、彼の家へよく遊びに來る隣の家の十三になる女の子であることが確であつた。けれども？ あのお喋りの、いつもずつと遠くから大聲で呼ばはりながら驅け込んで來たり、犬の名を呼んだり、或は口笛を吹いたりしながら來る子、さうして夜になつてからなどは決して遊びに來ない子が、今夜あんな風にして來る筈はない、と思ふと、そのふはふはと近づくお桑は、やはり、奇異なものであつた。彼はそれを確めようと呼んで見た——

「お桑さか？」

「おおっ！ びつくらした！ 小父さん居ないかいたか」

さう答へたのはやはりお桑であつた。併し、彼の呼んだのは妙に落着いた大きな聲のひとり言のやうであつたのに對して、お桑の答へは實に仰山な叫びであつた。その聲で、今まで濟しきをこらへて居た彼が飛び上らうとした程。お桑の聲で安心した彼は、戸を開けた。外には突立つたお桑の妙な表情が明るく浮き出した。

「どうしたのだ、お桑さ。……うちで叱られたのか」

「……」 お桑は直ぐには返事をしなかつた。けれどもやがて暫くすると、小父さんは飯を炊いて居たのかとか、小母さんは何日歸るかとか、この子はいつもの通りに喋り出した。そのうちに、お桑はふと思ひ出したかのやうに言つた。

「然うだつけ！ おら忘れて居ただ。今日おらいあで風呂焚いただよ――お天氣で、皆野良へ出ただもの。今焚いて居るんだよ。もうちつとしたらへえりに來なよ。 小父さんは妙な人だなあ、無え時にへえへえりたがつて、ある時にはへえりたがんねえでねえか。お桑はそんなことを言ふと、そはそはと歸り出した。今夜ばかりは、お桑にでももつと喋つて居て貰ひたいと彼は思つたのに。その女の子は、五六間歩き出した時には、

「小父さん。また降つて來ただよう」

と、もういつものとほりのお桑であつた。お桑の方は今度ほつと安心をしたのだ、と彼は思つた――彼には、風呂の事を聞いた時に、あの足音の無いお桑が、偶然にもう解つて來て居たから。お桑の一家族は皆手癖が悪いといふ噂や、この頃外に積んで置く薪があまり減りすぎるといふ事や、時時の朝に、束から離れて拔け落ちた薪が二三本も井戸端にある、といふやうな事を、彼の妻が言つたのを彼は思ひ合したのである。

こう解つて見ると、そんなことは彼にはどうでもよかつた。唯、

―小父さん。また降つて來ただよう―

と言つたお桑の言葉と、あの時あのきつかけでひよくり棒の蔭から現はれた人影としてのお桑が、彼の心に殘つた。それよりも、彼がそれ程に苦心をした飯は、何か用具について居たのか、彼の手にあつたのか、とにかく石油の臭が沁み込んで居た。(お茶をかけて、ランプの光に透して見ては、別に何も浮いては居なかつたが。)

彼には、それはどうしても一杯しか食へなかつた。その夜は、飯にばかりではない、夜着の襟も、枕も、彼の眉のところも、彼の口のなかも、空氣そのものも、彼の鼻にぷくぷくと小さな心臓の鼓動を傳へて彼の傍に來て默つて居た猫も、皆石油くさかつた。さうしてそのあるかないかの臭が、夕飯の代りにと澤山に彼が飲んだ茶の作用と結びついて、それが極く僅かなだけに、彼をひどく昂奮させた。實はあると思へばあつた、無いと思へばなかつた。……ふと、夕方ランプを捜さうとして方方でマッチを擦つたことや、火を燃さうとして石油を弄んだことを思ふと、釜を竈から下した時それの尻にちらちらと動いて居た小さな火の粉の行列を面白がつたことと言ひ、この部屋にみなぎる石油の臭と言ひ、さう思つて見るとお桑が薪を盗みに來たことまで、何でもかでも皆、今夜この家から火事が出るといふ事の豫覺に思へてならない。……空氣のなかには、既にさういふ用意が出來てゐて、それが彼の官能には假に石油の臭になつて訴へられて居る。とそんな風にも思へる。たうとう……こんな家ぐらゐ燃え上がつてしまへ。火事といふものは愉快なものだ。いやいや、そんなことを考へるとほんとうに火事が出

る、とも思ふ……。若し火事が出たら、眞先きに犬どもを鎖から放してやらなければ彼等は燒け死ぬ、と思ふ。その時になつて狼狽するといけないから、今のうちから用意に放して置いてやらうかとも思ふ。……大丈夫火事になどはならないとも思ふ。……何しろ早く夜が明ければいいとも思ふ。そんなことを思ふ傍に別の心があつて、ほんとうに妻は活動寫眞へ行つたらうかと思ふ。今日の晝間のあのフェアリイの仕事をして居る家を思ひ浮べる。と、夕日がぱつと丘に照つたことから、それの色からまた火事の事が思はれて來る……。彼は自分自身で、それを、未だ眠入らずに考へて居るやうにも感じ、もう眠つて居て夢のなかで考へて居るやうにも思つた。さうしてそれが果してどちらであつたやら、後になつて見ると更に解らない。——

＊　＊　＊　＊　＊

或る雨の晴れた晩であつた。それはもつと後の日であつたか、それともここに書くのが順當な頃であつたか解らない。とにかく或る雨の晴れた晩であつた。大きな圓い月が、あの丘の上から、舞臺の背景の迫出しのやうに、靜に昇つて來たことがあつた。

その晩は犬が二疋ともいつもよりももつと悲しげに、もつと激しく吠えた。

彼は、それらの犬どもを遊ばせるつもりで庭へ出た。庭からまた外へ出た。空に月が出て居ることが彼の心を樂しくして居た。月は殆んど中天に昇つて居た。空は東の方がからりと晴れて、西の方へ行くほど曇つてその果は眞黑であつた。大きな空が一刷毛でぼかされて居た。彼は月をつくづくと見上げた。さうして歩いた。遠い水車の音が、コットン、コットン、コットン、と野面を渡つてひびいて來た。フェアリイ・ランドの丘の女の脇腹は、月の光が細かく降りそそがれて、それは濡れて光つて居た。彼は彼の家の前の街道を幾度も幾度も往つたり來たりして歩いた。月を背にして自分の短い影を見た。又は、自分の影は見ないで涯しのない月の中を見つめて歩いたりした。二疋の犬は彼の後について、二疋で互にふざけ合ひながら、嬉嬉として戯れて居た。彼が立ちどまると、二疋の犬は、立つて居る彼のぐるりを、追つかけ合つて廻つた。彼は水のせせらぎに耳を借した。路の傍に、彼の立つて居る足の下に、あの道に沿うた渠である細い水が、月の光を碎きながら流れて居た。それは大きな雲母の板か何かのやうに黑く、さうして光つて、音を立ててふるへて居た。ふと、南の丘の向う側の方を、KからHへ行く十時何分かの終列車が、月夜の世界の一角をとどろかせ、搖がせて通り過ぎた。その音が暫く聞かれた。この時、彼にはもの音が懷しかつた。月の光で晝間のやうに明るい、いや雨の日の晝はこれよりずつと暗い——野面を越えて、彼は南の丘の方へ目を向けた。……今、物音の聞えたところ、丘の向う側には素晴らしく賑やかな大都會がある。……其處には、家家の窓から灯が、きらきらと簇つて輝いて居る……。彼は不意に何の連絡もなく、遠い汽車のひびきを聞いただけで、突然そんな空想が湧き上つて來た。さう言へば、一瞬間、ほんの一瞬間、その丘のうしろの空が一面に無數の灯の餘映か何かのやうにぼつと赤くなつた……かと思ふと、すぐに消えた。それは實際神秘な一瞬間であつた。

「俺は都會に對するノスタルヂアを起して居るな？」

彼は、さう思ひながら、その丘から目をそらした。さうしながら、見ると彼の突立つてゐる一筋の路の前方から、或る黑い人影が彼の方へ歩いて來つつあつた。それは彼とは二町ほど距

て居た。彼はそれを見つめながら、月の光のなかをそんな風な打開けた場所を人の通つて來るのを、何といふこともなく氣味惡く思つた。さうして月夜は闇夜よりも物凄いと思つた。と、その時、その人影の方から、

「ヒュウ！」

と、一聲、ただ一聲、高く口笛が聞えて來た。すると彼の犬は、二疋とも、突然疾風のやうな勢で、その人影の方へ驅け出した。それが先づ彼には非常に不愉快であつた。これらの犬は彼、卽ち犬どもの主人の呼ぶ時より外には、今まで決して他の人の方へは行かうとはしなかつたからである。それがその夜に限つて、この一聲の口笛を聞くと、飛ぶやうに驅け出す。彼は或る狼狽をもつて、

「ヒュウ！」

と、同じやうに一聲高く口笛を吹いた。犬をよび返すためである。彼の口笛を聞くと、犬も氣がついたらしく、慌てて彼の方へ引き返した。

「フラテ！」

人影はさう言つて、犬の名を呼んだ。

「フラテ！」

彼も慌てて、同じく犬の名を呼んだ。

彼のさう叫んだ聲は、妙に、あの人影の聲とそつくりであつた。さうして直ぐに同じ言葉を呼び返した爲めに、彼の聲は、ちやうど人影の聲の山彦のやうに響いた。二つの聲は、この言ひ現はし難い類似をもつて全く同一なものだと彼自身にさへ感じられた。それを犬でさへもさう聞いたに相違ない。一旦、驅け出した犬は、人影を慕うて行つたまま歸つて來なかつた。

彼は呆然と路の上に立つて、その人影を確めようと眼を睜つた。人影は、路から野面の方へ田の畔をでも傳ふらしく、石地藏のあるあたりから折れ曲つた。さうして！

何といふ不思議であらう！　その人影は、明るい月夜のなかで、目を遮るものもない野原のなかで、忽然と形が見えなくなつた。

「あつ」と叫び聲を、口のなかに嚙み殺して、彼は家の門へ、家のなかへ、一散に驅け込んだ。

「……この村では誰も俺の犬の名を覺えて居る筈はないのだ。呼びにくい名だから。いや、子供が知つて居る。けれども彼等は、「フラテ」といふ名を「クラテ」と訛つて覺えて居る筈だ。たとひ、名を呼ばれても、俺の犬は俺以外の人間の方へ行く筈はないのだ。たとひ、行くとしても、俺が呼び返せばきつと俺の方へ歸つてくる筈なのだ。今までこんなことは一度もない」彼は一人でさう考へた。「……それにあの人影は何だつて、不意にかき消すやうに見えなくなつたのであらう？……若しや、あの時俺が、この俺自身の同一人が二人の人間に別れたのではなかつたか？　離魂病といふ病氣はほんとうにある事であらうか？　若し然うだとすると、俺は、若しや離魂病にかかつて居るのではなからうか。犬といふものは物音を聞き別けるのには微妙な能力を持つて居なければならない筈だ。わけて主人の聲はちやんと聞きわける筈だが……」

彼の心臟の劇しい鼓動は、二十分間の以上もつづいた。彼はどういふわけか時計の振子の動くのを見つづけながら、離魂病に就てのさまざまな文學的の記錄や、或は犬のことなどを考へつづけて、心臟の鎭まる時間を待つた。心がやつと落着くと、彼は妻に命じて、犬がいつもの通りに緣の下に居るかどうかを見させた。犬があのままあの人影について行つて、もう何時までも歸らないやうに思へたからである。犬はそこには居なかつた。けれども彼の妻が呼んだ時には、彼等は運よく（と彼は思つた）歸つて來た。彼は月はまだ出て居るかと聞いた。月は出て居るといふ妻の返事であつた。

翌日の朝になつて、彼は昨夜の出來事を彼の

妻に初めて話した。彼はその夜のうちには、それを人に話すだけの餘裕もないほど怖しかつたからである。この話を聞いた彼の妻は、可笑しがつて彼を腹立たしくしたほど笑つた。突然、人影が見えなくなつたといふのは、犬がその人の足もとまで懷いて來たので、誰かその人が、犬の頭を撫でようと身を屈めたに相違ない。その爲めに畔道を歩いて居た人は、田の稻のかげに隱されて形が見えなくなつたのであらう。と、さういふのがこの事に就ての彼の妻の解釋であつた。成程、それが適當な解釋らしい、と彼も考へた。併しその瞬間に感じた奇異な恐怖は、その説明によつて消されはしなかつた。

＊　＊　＊　＊　＊

一度かういふ事もあつた――

或る時、夜ふけになつてから、ランプの傍へ蛾が一疋慕ひ寄つた。炎熱の盛んなこの地方では、この頃になつて、この蟲がよく飛んで居たものである。彼はこの蟲を最も嫌つて居た。常から、以前にも一度、この蟲が彼のランプへ來た時、彼は手頃の蠅たたきでこの蟲をたたいた。その場に壓しつぶされたこの蟲は、眉の形をしたまた櫛の齒のやうな形でもあるそれの太い觸角を、何とも言へず細かくびりびりとふるはせると、最後の努力をもつてくるりとひつくりかへつて、その不氣味なぶよぶよな腹の方を曝け出すと、六本程ある彼の小さな脚を、何かものを抱き締めようとでもする形で一度に、ぴく、ぴく、と動し、また時時には翅に力を入れて彼の腹を浮き上らせ、その觸角と脚と翅と腹とのそれぞれに規則的とも言ふべき小さな動作をいつまでもいつまでも續けて、その死の苦悶を彼に見せつけた事があつた。それは小さなものながら、それを見守つた彼を物凄く思はせるには充分であつた。それ以來彼は殊にこの蟲を厭ひ、怖れて居るのであつた。

この蟲の、灰色の絨緞のやうな毛の一面に生えた、妙に小さな頭、そこの灰黑色のなかに不氣味に、底深く光り返つて居る眞赤な、小さな、少しとび出した眼。べつたりと吸ひついたやうにランプの笠の上へ翅を押しつけてぢつとして居る一種重苦しい形。それが、急に狂氣の發作のやうに荒荒しくその重い翅を働かす有樣。それからいくら追ひ拂つても全く平然として厚顏に執念深く灯のまはりを戲れまはる樣子。それがランプの直ぐ近くで、死の舞踏のやうな歡喜の身悶えをする時には、白つぽくぼやけた茶色の壁の上を、それのグロテスクな物影が壁の半分以上を黑くして、音こそは立てないけれども、物凄く叫び立てて居る群集のやうに騷騷しく不安に狂ひまはつた。彼の追ひ退けるのをのつそりと避けて、障子の上の方へ逃げて行つてしまふと、今度はその厚ぼつたい翅でもつて、ちやうど亂舞の足音のやうに、ばたばた、ばたばた、と障子紙を打ち鳴らした。

彼は、蛾が靜かになるのを見すまして、新聞紙の一片でやつとそれを取り押へた。さうして、その不氣味な蟲を、戸を繰つて外へ投げ捨てた。たたき殺すことはもう懲りて居たからである。

けれどももの十分とは經たないうちに、その蛾は（それとも別の蛾であるか）再び何處かから彼のランプへ忍び寄つた。さうして再び、怖ろしい、黑い、重苦しい、騷騷しい、翅の亂舞を初めた。彼はもう一度、その蛾を紙片で取り押へた。さて再び戸を繰つて窓の外へ投げ捨てた。

けれども、又もの十分とも經たないうちに、蛾は三度び何處かから忍び寄つた。それは以前に二度まで彼をおびやかしたと同一のものであ

るか、或は別のものであるかは知らないが、さつきあれほどしつかりと紙のなかにつつみ込んで握りつぶしたものが、出て來ることは愚か、生きてゐる筈も無ささうだから、これは全く別の蛾であつたらう。とにかく、二度、三度、四度まで彼のランプを襲うた……この小さな羽蟲のなかに何か惡靈が居るのである。彼はさう考へずには居られなくなつた。さう思へだすと、もう一度自分でそれを取押へることは、彼には怖ろしくて出來なくなつた。そこで、わざわざ妻を呼び起して、この蟲を捕へさせた。それから、一枚の大きな新聞紙で捕へられてゐるそれを妻の手から受け取つた彼は、この小さな蟲を、その大きな紙で幾重にも幾重にも捲き込んで、更にもう一枚新聞紙を費して極く念入りに折り疊み込んだ。さうして今度は戸の外へは捨てないで机の上へ乘せ、それからその上へ厚い古雜誌を一冊載せて置いた。かうして、やつと初めて安堵して、彼は寢牀に入つた。

暫くして、眠つかれないままに、燭臺へ灯をともすと、その時ひらひらと飛んで來て、嘲るやうに灯をかすめたものがある。それも蛾であつた！

*　　*　　*　　*　　*

彼は眠ることが出來なくなつた。

最初には、時計の音がやかましく耳についた。彼は枕時計も柱時計も、二つともとめてしまつた。全く、彼等の今の生活には、時計は何の用もないただやかましいだけのものにしか過ぎなかつた。それでも、彼の妻は、毎朝起きると、いい加減な時間にして時計の振子を動した。彼の女は、せめて家のなかに時計の音ぐらゐでもして居なければ、心もとない、あまり淋しいというのであつた。それには彼も全く同感である。何かの都合で、隣家の鶏も、犬の聲も、猫の聲も、風の音も、妻の聲も、彼自身の聲も、その外の何物の聲も、音も、ぴつたりと止まつて居る瞬間を、彼は屢經驗して居た。その一瞬間は、彼にとつては非常に寂しく、切なく、寧ろ怖ろしいものであつた。そんな時には、何かが聲か音かをたててくれればいいがと思つて、待遠しい心持になつた。それでも何の物音もないやうな時には、彼は妻にむかつて無意味に、何ごとでも話しかけた。でなければ、

「うん、さうだ」

と、こんな意味のないひとりことを言つたりした。

けれども夜の時計の音は、あまり喧しく耳について、どうしても寢つかれなかつた。それの一刻一刻の音律にそそられて、彼の心持は一段一段とせり上つて緊張して來た。それ故、彼は寢牀に入る時には、必ず時計の針をとめることにした。さうして毎朝、妻は、夫のとめた時計を動かす。夫は、妻の動かした時計をとめる。時計を動かすことと、止めることと、それが毎朝毎夜の彼等、各々の日課になつた。

時計の音をとめると、今度は庭の前を流れる渠のせせらぎが、彼には氣になり初めた。さうして今度はそれが彼の睡眠を妨げるやうに感じられた。何日の雨で水の音は、平常よりは幾分激しかつたであらう。或る日、彼はその渠のなかを覗いて見た。其處には、一二日か以前に、彼等がこの家へ轉居して來たてに、この家の庭園の手入れをした時に、渠の上手にある猫柳から剪り落したその太い枝が、今でも、その渠のなかに、流れ去らずに沈んで居て、それが堰のやうに、水上からの木の葉や新聞のきれのやうなものなどを堰きとめて、水はその堰を乘り越すために、湧上り湧上りして騷いで居た。あの騷騷しい夜每の水の音は、成程この爲めであつ

た。ひとりでさう合點して、彼は雨に濡れながら渠のなかに這入つて、その枝を水の底から引き出した。澤山の小枝のあるその太い枝の上には、ぬるぬるとした青い水草が一面に絡んで上つて來た。彼はそれを一先づ路傍へひろひ上げた。さてもう一度、水のなかを覗くと、今まで猫楊の枝の節にからんで居た木の葉やら、紙片やら、藁くづやら、女の髪の毛やらの流れて行く間に雜つて、其處から五六間の川下を浮きつ沈みつして流れて行く長いものが、ふと目にとまつた。

見れば、それはこの間の晩、醉つぱらひと口爭ひをしたあの晩、犬を打つてから水のなかへたたきつけたあの銀の握のある杖であつた。

彼は不思議な縁で、再びそれが自分の手もとにかへつたことを非常に喜んだ。何といふことなく恥しく、馬鹿ばかしくつて、それを無くしたことを妻にも隱して居たのに、つい浮つかり話してしまつたほどであつた。さうして彼は考へた――あの騒騒しい水音は、きつと、この杖のさせた聲であらう。杖はさうすることに依つて、それを搜し求めて居る彼に、杖自身の在處を告げたのであらうと。

彼はその杖を片手に持つて、とどこほりなくひた押しに流れて行く水の面をぢつと見た。これならば、今夜はもう靜かだ、安心だと思つた。併し、それは間違ひであつた。その夜も、前夜よりは騒がしいかと言つても、決して靜かではないせせらぎの音が、それはもともと極く微かなものであるのに、彼にはひどく耳ざはりで、それが彼の睡眠を妨げたことは、前夜と同じことであつた。

けれども、そのせせらぎの音は、もうそれ以上どうすることも出來なかつた。

その外に、もう一つ別に、彼の耳を訪れる音があつた。それは可なり夜が更けてから聞える、南の丘の向側を走る終列車の音であつた。

而も、それはよほどの夜中なので――時計は動いて居ないから時間は明確には解らないけれども、事實の十時六分？ にT驛を發して、直ぐ、彼の家の向側を、一里ほど遠くに、丘越しに通り過ぎる筈の終列車にしてはそれは時間があまりに晩すぎた。そればかりかそれは一夜中に一度ではなく、最初にそれほどの夜更けに聞いてから、また一時間ばかり經過するうちに、又汽車の走る音がする。どうしてもそれは事實上の列車の時間とは、すべて違つて居る……たとひ、それが眞黑な貨物列車であつても、こんな田舍鐵道が、こんな夜更けに、それほど度度貨物列車を出す筈はない。さうして、それほどはつきり聞かれる汽車の音を、彼の妻は決して聞えないと言ふ。その汽車の遠いとどろきがひびいて來る時には、その汽車のなかには、こんな田舍へ、彼を、思ひがけなくも訪れて來る友人があつて、その汽車のなかに乘つてゐるやうな氣がしてならない。さうして實際にさう言ふことがあるとしたならば、それは誰であらう。Oであらうか？……Eであらうか？……Tであらうか？……Aであらうか？……Kであらうか？……彼は、思ひ出せるだけの友人を思ひ出して見た。けれども誰もそんな人はありさうも無かつた。併し、人が――誰か知つて居る人が、ひとり車窓に倚りかかつて居る樣子が、彼には實にはつきり想像された。さうして妙なことは、それがふと彼自身に思へるやうな晩もあつた――そんな形でそこに腰をかけて居る人は。さうしてそれが彼の耽奇的な空想に、怖ろしい、併し魅惑のあるポオの小話の發端を與へた。

時計のセコンドの音。渠のせせらぎ。汽車の進行するひびき。そんな順序で、遂に彼はその外のいろいろな物音を夜毎に聞くやうになつた。その第一なるものの一つは、彼が都會で夜更

けによく聞いた、電車がカアブする時に發する、遠くの甲高な軋る音である。それが時時、劇しく耳の底を襲うた。或る夜には、うとうと眠つて居て、ふと目が覺めると、直ぐ一町ほどのかいみにある村の小學校から、朗らかなオルガンの音が聞え出して來た。もう朝も近くなつて、唱歌の授業でも始つて居るのかと、おもひ見ると、夜は未だ睡入つて居る。戸の隙間からも朝の光は洩れて居ない。何の物音も無い……そのオルガンの音の外には。深夜である。睡呆けて居るのではないかと疑ひながら一層に耳を欹めた。オルガンの音は、正にそれの特有の音色をもつて、爽やかに、甘く、物哀れに、ちやうど晩春の夕方のやうな情調をもつて、よく聞きなれた何かの進行曲を、風のまにまに漂はせて來るではないか。彼は恍惚としてその樂の音に聞き惚れて居た。或る夜にはまた、活動寫眞館でよく聞く樂隊の或る節が……これもやはり何かの進行曲であるが……何處からとしもなく洩れ聞えて來た。それ等の樂の音を感ずるやうになつてからは、水のせせらぎは、一向彼の耳につかなくなつた。さうして彼はもう眠らうといふ努力をしない代りに、眠れないといふことも、それほどに苦しくはなかつた。それ等のもの音は、電車のカアブする奴だけは別として、その外のは皆、快活な朗らかな、或は幽遠な、それぞれの快感を伴うて居た。彼はそれらの現象を訝しく感ずるよりも前に、それを聽き入ることが、寧ろ言ひ知れない心地よさであつた。就中、オルガンの音が最もよかつた。次には樂隊のひびきであつた。それから寺詣りの人が敲くやうな鐘の微かな音が續いたこともあつた。オルガンの音は二三度しか聽かれなかつたけれども、樂隊は殆んど每夜缺かさずに洩れ聞えた。彼はそれを聞き入りながら、ついそれの口眞似を口のなかでして、その上、臥てゐる自分の體を少し浮き上がらせる心持にして、體全體で拍子をとつてゐた。それは一種生理的とも言へるやうな、即ち官能の上の、同時に精神的でもある快樂の一つであるかのやうであつた。若しそれが修道院のなかで起つたのであつたならば、人人はそれを法悅と呼んだかも知れない。

幻聽は、幻影をも連れて來た。或は幻聽の前觸れが無しにひとりでも來た。

それの一つは極く微細な、併し極く明瞭な市街である。それの一部分である。ミニアチュアの大きさと細かさとで、仰臥して居る彼の目の前へ、ちやうど幕の上あたりへ、そのミニアチュアの街が築かれて、ありありと浮び出るのであつた。それは現實には無いやうな立派な街なので、けれども、彼はそれを未だ見たことはないけれども、東京の何處かにこれと全く同じ場所がきつとありさうに想像され、信じられた。それは灯のある夜景であつた。五層樓位の洋館の高さが、僅に五分とは無いであらう。それで居て、その家にも、それよりももつと小さい——それの半分も二分の一の高さもない小さな家にも、皆それぞれに、入口も、灯のきらびやかに洩れて來る窓もあつた。家は大抵眞白であつた。その窓掛けの青い色までが、人間の物尺にはもとより、普通の人の想像そのもののなかにもちよつとはありさうもないほどの細かさで、而も實に明確に、彼の目の前に建て列ねられた。いやいや、未だそればかりではない。それらの家屋の塔の上の避雷針の傍に星が一つ、唯一つ、きつぱりと黑天鵞絨のなかの銀絲の點のやうに、鮮かに輝いて居る……。不思議なことには、立派な街の夜でありながら、どんな種類にもせよ車は勿論、人通り一人もない……。しいんとした、その癖、何處にとも言へない騷がしさ

を湛へて居ることは、その明るい窓から感じられる……その家はどういふ理由からか、彼には支那料理の店だと直覺が出來る……それをよくよく凝視して居ると、その街全體が、一旦だんだんと彼の鼻の上から遠ざかつて、いやが上に微小になり、もう消えると見るうちに、非常な急速度で景色は擴大され、前のとほりその儘の街が、非常な大きさに、殆んど自然大に、それでもまだやまずにとめどなく巨大に、まるで大世界一面になつて……それをぼんやり見て居ると、その街はまた靜かに縮小して、もとのミニアチュアの街になつて、それとともに再び彼の鼻の上のもとの座に歸つて來た。彼はかうして數分間か、それとも數秒間に、メルヘンにある小人國から巨人國へ、それから再び、巨人國から小人國へ、ただ一翔りで往復して居る心地がした。その市街が巨人國のものになつた時に、彼自身の眼と眼との間の幅も一度に廣くなつて――ちやうど巨人のもののやうになつて、その爲めに眼界も一度に擴大されるやうな氣のすることもある。何かの拍子に、その幻の街が自然大位の巨大さで、ぱつたり動かなくなる時がある。彼は、突然、實際そんな街へでも自分は來て居るのではなからうかと、慌てて手さぐりでマッチを擦つて、闇のなかで自分のすすけた家の天井を見わたした事があつた。

それらの風景は、屢〻彼の目に現はれた。それの現はれる都度、それは前度のものとは決して寸毫も變つたところがなかつた。それもこの現象に伴ふところの一つの不思議であつた。

或る時には、稀に、その風景の代りに自分自身の頭であることがあつた。自分の頭が豆粒ほどに感じられる……見る見るうちに擴大される……家一杯に……地球ほどに……無限大に……どうしてそんな大きな頭がこの宇宙のなかに這入りきるのであらう。と、やがてまたそれが非常な急速度で、豆粒ほどに縮小される。彼にはあまりの心配に、思はず自分の手で自分の頭を撫で廻して見る。さうしてやつと安心する。滑稽に感じて笑ひ度くなる。その刹那に Kan-kan-kan と電車のカアブする音が、眉の間を刺し徹す。

これら幻視や、幻感は、併し、幻聽とはさほど必然的な密接な關係をもつて現はれるものでは無いらしかつた。一體に幻聽の方は、彼にとつて愉快であつたに拘はらず、こんな風に無限大から無限小へ、一足飛びに伸縮する幻影は、彼にさへ不氣味で、また愉しかつた。

これらの怪異な病的現象は、毎夜一層はげしくなつて行くのを彼は感じた。彼はそれ等の現象を、彼の妻から傳はつて來るものだと考へ始めた。汽車のひびき。電車の軋る音。活動寫眞の囃子。見知らぬ併し東京の何處かである街。それ等の幻影は、すべて彼の妻の都會に對する思ひつめたノスタルヂアが、恐らく彼の女の無意識のうちに、或る妖術的な作用をもつて、眠れない彼の眼や耳に形となり聲となつて現はれるのではなからうか、彼はさう假想して見た。それは最初には、ほんの假想であつた。けれども、何時とはなく、それが彼には眞實のやうに感ぜられ出して來た。それだから、妻の何時も居る臺所の方には東京のことの空想が一ぱい充滿して居て、いつかの夕方ひとりで飯を炊いた時に、ふとあんな事が思ひ出されたのだ。と、彼はそんなことをも考へた。彼自身の如く、殆んど無いと言つてもいい程に意志の力の衰へて居る者の上に、意志の力のより強い他の人間の、或はこの空間に犇き合つて居るといふ不可見世界のスピリット達の意志が、自分自身のもの以上に、力強く働きかけるといふことはあり得べき事として、彼はそれを認めざるを得ないやうに思つた。生命といふものは、周圍にあるすべてのものを刻刻に征服し、それを食つて、

それのなかの力を自分のなかに吸引して、而もそれを十分に統一して行く或る力である。肉體的には明らかにさうである。靈的にだつて、精神的にだつてさうに違ひない。さうして今や、他のものを吸集し統一する作用を持つた神秘な力は、彼からだんだんと衰へて行きつつあつた。寧ろ彼は今まで持つて居る自分自身を刻刻に發散してゐるのみであつた。

彼が、闇といふものは何か隙間なく犇き合ふものの集りだ、それには重量があると氣附いたのもこの時である。

こんな風にして、彼の喜怒哀樂や恐怖に、現世界に生存して居る他の人人のそれとは、全く共通しがたい何物かになつて行つた。孤獨と無爲とこの兄弟は、實に奇異な力を持つて居るものである。——若し自分が今、修道院に居るとしたならば？ と、彼は或る時さう考へた。……若し、彼が彼の妻と一緒にこんな生活をしてゐるのではなく、永貞童女である美しいマリヤの畫像を毎日禮拜してゐながら、この日頃のやうな心身の状態に居たならば、夜の幻影は、それは多分天國のもの、その不快なものは地獄のものであつたらう。さうして畫像のなかのけ高い優しい唇は生きて彼にものを言ひかけたであらう。さうして惱ましいもののすべては、畫家スピネロオ・スピネリイが描いたといふ惡魔の醜さ厭はしさ怖ろしさをもつて彼に現はれ、彼の目の前に出沒して、彼を苦しめたであらう。又、あの一時の睡眠をも持たない夜が、戸の隙間からほのかに明け渡つた時に、ふと小鳥のしば鳴きを聞く、あの淋しい、切ない、併しすがすがしい、涙を誘はうとするやうな心持は、確かに懺悔心になつたであらう。修道院といふ處では、それの生活の様式も思想の暗示も、すべてがそんな風な幻影を呼び起させるやうに、呼び起し易いやうに、呼び起さねばならないやうに、と、それらの色色の仕掛けで出來て居たのだから……。

彼はそんな事をも考へた。併し、その考へは、この當座よりももつと後になつて纏つた。

* * * * *

ふと彼の目の前へ人間の足の形が浮んで來た。……足だけが中有に浮いて居るやうであつた。それはどれほどの大きさであつたか解らないが、それの大きさに就て、別だん注意を呼ばなかつたところを見ると、普通の人間のものぐらゐであつたであらう。それは白い素足で美しかつた。それを見て居るうちに……つと、白い手の指がまた現はれた。それはエル・グレコの畫によくあるやうな形をした手なので、拇指と人差指とが何か小さなものを撮んでゐる指であつた。……そのうちに手の方は消えたが、唯さつきの足だけがやはりそこに動いて居て、それがぴよこぴよこと、何かを踏むやうに動き出した。動く度ごとに爪先が上下して、そこに力がはいつて、その都度足の指は尺取蟲のやうにかがんだり伸びたりする。……實に變な夢だなあ、と、彼は夢のなかで考へた。さうだ！ さうだ！ これや王禪寺の方へ遠足した時、道に迷うて這入つて行つた家の絲とり娘の足だ。それの手だ。絲とり臺を踏んで居るのだ。紡がれて出る絲すべてをつまんで居る手つきだ。……さう思ふと、またその手の指が現はれて來る。田舍には珍らしい白い手や足だつた……ちらと彼を見上げた時には、いい顏をして居た。あそこへ行く途中、どこかで夕立がして……虹が浮んだ……山の中でそれを見た。あの娘は年は十六位だつた……もつとはつきり、手や足だけではなしに姿もすつかり見えて來ればいいがなあ……。その動搖する白い素足だけの夢を見つづけて、そんな風なことを思ひ出して居ると、

突然、あたりが一面に赤く明るくなつて……と見ると、燭臺の火が眩しく彼の目に射込んで來た。彼は目が覺めた。彼の妻は障子をあけて縁側から這入つて來る所であつた。便所へでも行つて來たのであらう。

「もつと氣を附けてくれなけりやいけないぢやないか、何日も言ふとほり。俺は灯がちよつとでも目に這入ると直ぐ目が覺めるぢやないか。たつた今せつかく寢ついた所だのに」

妻の方を見上げながら、眩しい目をしばたたいて彼はがみがみ小言をいつた。

「私、氣をつけて居たつもりだつたけれど。……あなた、きつと目をあけたままで睡つていらつしやるのね？」

妻はそんな事を言つて、今更慌ててその灯を吹きけした。

「王禪寺がどうなすつたの？　あなた、今寢言をおつしやつてよ」

「いつ？」

「つい今、私が灯をともさうと思つてマッチを擦つた時—」

彼は馬鹿ばかしい氣がした。夢のなかで綺麗な足だと思つて見たのは、きつと妻の足を見て居たのだ。おれは枕を外してしまつて、疊の上へぢかに横顔を押しつけて寢て居たらしいから、妻の足が歩いて行くのを見て夢だと思つて居たのだ。彼はさう氣がついた。それにしても、王禪寺の近所の一軒家に絲をとつて居た娘——その時には、そんな場所に美しい小娘が居て、淋しく、つつましく絲を紡いで居るのを面白いと思つたが。それつきり全く忘れてしまつて居た娘が、半意識の間に思ひ出されて來たのを、彼は珍らしく思つた。

これは一例である。この時ばかりでは無い。その頃、彼にはどうかして眠りたいと思ふと、よくこんな眠りを眠つて居るのであつた。

＊　＊　＊　＊　＊

「決して熱なんかは無くつてよ、反つて冷たい位だわ」

彼の額へ手を翳して居た彼の妻は、さう言つて、手を其處からのけて、自分の額へ手を當てて見て居た。

「私の方がよつぽど熱い」

それが彼には、反つて甚だ不滿であつた。試みに測つて見ようと、驗温器を出させて見ると、それは度度の遠い引越しのために折れて居た。

若し熱のためでないとすれば、それはこの天氣のせゐだ、このひどい風のせゐだ。と彼は思つた。全くその日はひどい風であつた。あるかないかの小粒の雨を眞横に降らせて、雲と風自身とが、吹き飛んで居た。そのくせ非常に蒸暑かつた。こんな日には、彼は昔から地震に對する恐怖で怯えねばならなかつたのだけれども、今日はこの激しい風のためにその點だけは安心であつた。併し、風の日は風の日で、又その特別な天候からくる苛立たしい不安な心持が、彼を胸騒ぎさせたほどびくびくさせた。

猫よ、猫よ。あとへあとへついて來い！
猫よ、猫よ。おくへおくへすつこめ！

ふと、劇しく吹き荒れる大風の底から一つの童謠の合唱が、ちぎれちぎれに飛んで來た。それらは風のかたまりに送り運ばれて、跡絶え勝ちに、彼の耳もとへ傳はつて來たやうに思はれた。けれども、それもやはり幻聽であつたのであらう。それは長い間忘れて居た彼の故郷の方の童謠であつたから。風の劇しい日、然うだ、こんな風の劇しい日に、子供たちが、殊に女の子たちが、驅けまはりながら互に前の子の帯の後へつかまり合つたり、或は前の子の背中の下へ首を突込んだりしながら、こんな唄を今の

ような節で繰り返し繰り返し合唱して、彼等は風のためにはしやぎながら、彼の故郷の家の門前の廣場をぐるぐると環になつてめぐつて居たものであつた……。それはモノトナスな、けれどもなつかしいリズムをもつた韻句のある童謠で、また謠の心持にしつくりと嵌つた遊戯であつた。それを見惚れて、砂埃の風のなかで立つて居る子供の彼自身が、彼の頭にはつきりと浮んで來た。それが思ひ出の緒口になつた。その頃、城跡のうしろの黒い杉林のなかで、――あの城山の最も高い石垣の眞下の、それに沿うた細い小道である。そこには大きな杉の林があつて、一面にかさなつた杉の幹のごく少しの隙間から川が見えた。船の帆が見えた。足もとには大きな齒朶が茂つて居る、小道にはいつも仄暗かつた。さうして杉の森に特有の重い濕れた高い匂があつた。その道を子供のころ一ばん好きであつた。……もつと大きくなつてからもさうであつた。機械體操で怪我をして、二度魔睡剤をかけられた時に、彼の魔睡の夢は、その森の道を逍び歩いて居るところであつた。二度とも……。その林のなかで、或る夕方、大きな黒色の百合の花を見出した事、そのそばへ近よつてそれを折らうとして、よくよく見て居るうちに、急に或る烈しい旋風の恐怖に打たれて、轉げるやうに山路を驅け下りた。次の日、下男をつれて、そのあたりを隈なく探したけれども、其處には何ものもなかつた。それは彼には、奇怪に思へる自然現象の最初の現はれであつた。それは子供の彼自身の幻覺であつたか、それとも自然そのものの幻覺とも言へる眞實の珍奇な種類の花であつたか、それは今思ひ出しても解らない。ただその時の風にゆらゆらゆれて居るその花の美しさは、永く心に殘つた。その珍らしい花が、彼の「青い花」の象徴でもあつたやうに、彼はその頃からそんな風な淋しい子供であつた。さうして彼の家の後である城跡の山や、その裏側の川に沿うた森のなかなどばかりを、よく一人で歩いたものであつた。「狐釣り」と人人の呼んで居た森は、わけても彼の氣に入つて居た。そこには石灰を焼く小屋があつた。石灰石、方解石の結晶が、彼の小さな頭に自然の神秘を教へた。又その淵には、時時四疊半位な大きな瑠璃の渦が幾つも幾つも渦卷いたのを、彼はよく夢心地で眺め入つた。さうしてそれを夢そのもののなかでも時折見た。その頃は八つか九つででもあつたらう。……何か噓をつくと、その夜はきつと夜中に目が覺めた。さうしてそれが氣にかかつてどうしても眠れなかつた。母を搖り起して、その切ない懺悔をした上で、恕を乞ふとやつと再び眠れた。……それから、然う、然う、夜半に母を起す彼の聲を屢夜聞いたこともあつた。あの頃、俺は五つか六つぐらゐであつたらう。俺は、昔から、あの頃から、もう神經衰弱だつたのか知ら。さうして幻聽の癖もそのころ既う見える――彼は、また思ひ出して愕いた。それ等幼年時代の些細な出來事が、昨日の事よりももつとはつきりと――その時の彼には昨日のことはただ茫漠としてゐた――思ひ出された。一つの奇妙なことには、つい三四ケ月前、夏の終り頃に見た、或る山のなかの一軒家――そこには、百合と百日紅とが咲いて居た――その人氣のない大きな家に年とつた母と二人きりで居た小娘、その白い美しい足と手の指とが彼のうつつの夢に現はれたあの娘、それが童話の情調をもつて、彼の記憶のずつと奥の方へひつこんで行つて居ることであつた。さうして、それら彼の幼年時代の追想のなかへ、時時彷ひ込んで錯誤して織り込まれて、その奥深い記憶の森のなかで仙女にならうとして居るのであつた。彼は、さう思ひたがらうとして居る自分を、その度毎に氣がついて叱つた。いやいや、これ

ばついこの間の事ではないか。さう自分をたしなめながら訂正した。……彼はかうして幼年時代の追想に耽りつづけた。而もそれらは悉く、今日まで殆んど跡方もなく忘却し盡して居たことばかりであつた。さうして、彼はその思ひ出のなかのその子供になつて、彼の母や兄弟や父を戀しく懷しく思ひやつた。一たい常に自分自身のことばかりより考へる事のない彼には、この時ほど切なくそれらの人人を思ひ出したことは、今までに決してなかつた。その父へも、母へも、どの兄弟へも、彼はもう半年の上も便りさへせずに居る。不義で家に歸つてゐる耳の遠い姉が殊に悲しかつた。彼は第一に母の顔を思ひ出さうと努めて見た。それは半年ばかり前にも逢つたばかりの人でありながら、決して印象を喚び起し得られなかつた。纏らない印象を無理に纏め上げて見た時に、思ひがけなくも、奇妙にも、それは十七八年も昔の或る母の奇怪な顔になつた――母は丹毒に罹つて居た。――黒い紗を顔一面に冪して、黑い假面のやうな、さうして薄笑んだ眼ばかりが光つて、その病床の傍へ來てはならないと、物憂げに手を振つた怪物のやうな母の顔であつた。子供の彼は、しくしくと泣きながら庭へ出て行つて、もつと泣いた。その泣いた目で見たぼやけた山茶花の枝ぶりと、それのぼやけて綻つた花の一つ一つが、不思議と、母のその顔よりもずつと明瞭に目に浮び出て來る……決して思ひ出したことのないやうな事柄ばかりが後へ後へ一列に並んで思ひ浮んで來た。その心持がふと、彼に死のことを考へさせた。こんな心持は確に死を前にした病人の心持に相違ない。して見れば、自分は遠からず死ぬのではなからうか。……それにしても知つた人もないこんな山里で、自分は、今斯うして死んで行くのであらうか。……死んで行くのであるとしたならば？　彼の空想は果しなく流れた。彼は今まで未だ一度も死に就て直接に考へたことはなかつた。さうして彼はこの時、最初には、多少好奇的に彼の特有の空想の樣式で、彼自身の死を知つた知人の人人のその時の有樣を一つ一つ描いて見た。すさまじい風のなかに、この騷騷しい世界から獨立した靜寂へ、人の靈を誘ひ入れるやうに啼きしきるこほろぎの聲に彼は耳を澄した。

彼は手をさし延べて、枕もとのずつと上の方にある書棚から、何か書物を手任せに抽かうとした。その手を書棚にかけた瞬間に、がちやん！　と物の壞れる音がした。彼は自分自身が、何かをとり落したやうに、びくつと驚いて、あたりを見まはした。それは彼の妻が臺所の方で、ものを壞した音が、風に吹きとばされて聞えて來たのであつた。

彼の書棚も今は哀れなさまであつた。其處には僅かばかりの古びた書物が、塵のなかで、互に支へ合ひながら横倒しになりかかつて立つて居た。あまり役目にならないやうなものばかりが自然と殘つて、それは兩三年來、どれもこれも見飽きた本ばかりであつた。彼が今抽き出したのは譯本のファウストであつた。彼は自分の無益な、あまりに好奇的な自分自身の死といふ空想から逃れたいために、何の興味をも起さないその本をなりと讀まうとした。けれども、風の音は斷えず耳もとを掠めた。臺所の流し元に唯一枚嵌められて居るガラス板が、がちやがちやと搖れどほしに搖れて、彼の耳と心とを苛立たせた。

彼は腹這ひになつて、披けた頁へ目を曝して行つた。

現世以上の快樂ですね。
闇と露との間に山深く寢て、
天地を好い氣持に懷に抱いて、
自分の努力で天地の髓を搔き挘り、

六日の神業を自分の驅に體驗し、
做る力を感じつつ、何やら知らぬ物を味ひ、
時としては又溢るる愛を萬物に及ぼし、
下界の子たる所が消えて無くなつて……

偶然、それは「森と洞」との章のメフィストの白であつた。この言葉の意味は、彼にははつきりと解つた。これこそ彼が初めてこの田舍に來たその當座の心持ではなかつたか。

彼は床の中からよろけて立ち上つた、机の上から赤いインキとペンとを取るために。さうして今讀んだ句からもつと遡つて、洞の中のファウストの獨白から讀み初めた。彼はペンに赤いインキを含ませて讀んで行くところの句の肩に一一アンダアラインをした。その線を、活字には少しも觸れないやうに、又少しも歪まないやうに、彼は細い極く神經質な直線を引いて行つた。それがぶるぶるとふるへる彼の指さきには非常な努力を要求した。

…………

手短かに申せば、折折は自ら欺く快さを
お味ひなさるも妨けなしです。
だが長くは我慢が出來ますまいよ。
もう大ぶお疲れが見えてゐる。
これがもつと續くと、陽氣にお氣が狂ふか、
陰氣に臆病になつてお果てになる。
もう澤山だ……

アンダアラインをするのに氣をとられて、句の意味はもう一度讀みかへした時に、初めてはつと解つた。メフィストは、今、この村のなかから彼にものを言ひかけて居るのだ。おお、惡い豫言だ! 陰氣に臆病になつてお果てになる、それはほんとうか、これほど今の彼にとつて適切な言葉が、たとひどれほど浩瀚な書物の一行一行を片つぱしから、一生懸命に捜して見ても、決してもう二度とはここへ啓示されさうもない。それほどこの言葉は彼の今の生活の批評として適切だ。適切すぎるその活字の字面を見て居ると、彼はその活字が少しづつ怖ろしいやうな心にさへなつた。

—まあ、何といふひどい風なのでせう。裏の藪のなかの木を御覽なさい。細い幹にひよろひよろと高いものだから、そのひよろひよろへ風の當ること! 怖ろしいほどに搖れてよ。ねえ折れやしないでせうか—彼の妻の聲は、風の音に半ばかき消されて遠くから來たやうに、さうして何事か重大な事件か寓意かを含んで居るらしく、彼の耳に傳はつた。

氣がついて見ると、彼の妻は彼の枕もとに立つて居た。彼の女はさつきから立つて居たのであつた。妻は彼に食事のことを聞いて居た。彼は答へようともしないで、いかにも大儀らしく寢返りをして、妻の方から意地惡く顏をそむけた。けれども再び直ぐ妻の方へと向き直つた。

—おい! さつき何か壞したね—

—ええ、十錢で買つた西洋皿—

—ふむ、十錢で買つた西洋皿? 十錢の西洋皿だから壞してもいいと思つて居るのぢやないだらうね。十錢だの十圓だのと、それは人間が假りに、勝手につけた値段だ。それにあれは十錢以上に私には用立つた。皿一枚だつて貴重なものだ。まあ言はばあれだつて生きて居るやうなものだ。まあ、其處へ御坐り。お前はこの頃、月に五つ位はものを壞すね。皿を手に持つて居て、皿の事は考へないで、ぼんやり外のことを考へる。それだから、その間に皿は腹を立てて、お前の手から逃げ出す。すべり落ちるんだ。一たい、お前は東京のことばかり考へて居るからよくない。お前はここのさびしい田舍にある豐富な生活の鍵を知らないのだ。ここだつてどんなに賑やかだかよく氣をつけて御覽。つまらないとお前の思つてゐる臺所道具の一つ一つだ

って、お前が聞くつもりなら、面白い話をいくらでもしてくれるのだ。生活を愛するといふことは、ほんとに樂しく生きるといふことは、そんな些細な事を、日常生活を心から十分に樂しむといふ以外には無い筈ではないか……」

彼は囈言のやうに小言を言ひつづけた。それは、この日ごろの全く沈默勝ちな彼としては、珍らしい長談義であつた。彼はあとからあとからと言葉を次ぎ足してしやべりつづけた。さうしてゐるうちに妻に言ふつもりであつた言葉が、いつか自分に向つての言葉に方向を變へて居た。さうしてそれは平常、彼が考へても居ないやうな思ひがけない考への片鱗であるのに、喋りながら氣がついた。そこに、彼にとつて新らしい思想がありさうに思つた時、彼が言はうと思つて居る處へは、もう言葉がとどかなくなつて居た。ただ思想の上つらを言葉がぎくしやくと滑つて居るだけであつた。「日常生活の神秘、日常生活の神祕―彼は、人間の言葉では言へない事を言はうとしてゐるのだ、と自分で思つた。さうして遂に口を噤んだ。

二人は押し默つて荒れ狂ふ嵐の音を聞いたが、暫くして妻は、思ひきつて言つた。

「あなた、三月にお父さんから頂いた三百圓はもう十圓ぽつちよりなくなつたのですよ」彼はそれには答へようともしないで、突然口のなかで呟くやうにひとりごとを言つた。

「おれには天分もなければ、もう何の自信もない……」

＊　＊　＊　＊　＊

闇が彼の身のまはりに犇いて居た。それは赤や緑や、紫やそれらの隙間のない集合で積重ねてあつた。無上に重苦しい闇であつた。彼は闇のなかでマッチを手さぐり、枕もとの蠟燭に灯をともすと寢床から起き上つた。さうしてその燭臺を、隣に眠つて居る妻の顏の上へ、ぢつとさしつけた。けれども深い眠に陷入つて彼の女は、身じろぎもしなかつた。彼はしばらくその女の無神經な顏を、蠟燭の搖れる光のなかで、ぢつと視つめて見た。彼はこの時、自分の妻の顏を、初めて見る人のやうに物珍らしくつくづくと見た。

蠟燭の光はものの形を、光の世界と影の世界との二つにくつきりと分けた。その光のなかで見た人間の顏は、強い陰影を浴びて、その強い光の強い濃淡から生ずる效果は、人間の顏の感じを全く別個のものにして見せた。彼は人間の顏といふものは――唯に自分の妻だけではなく、一般にかうも醜いものであらうかと、つくづくさう感じた。それは不氣味で陰慘で醜惡な妙な一つのかたまりのものとして彼の目に映じた。女は枕元に、解きほどいた束髮のかもじを黒く丸めて置いて居た。奇妙な現象には、彼はそのかもじを見た時に、これが、ここに眠つて居る女が、自分の妻だつたのだと初めて氣がついた。

彼は燭臺を高く少し持上げたり、或は女の顏の耳の直ぐわきへくつつけて見たり、暫くその光の與へる效果の變化を實驗して遊ぶかのやうに、それをいろいろと眺めて居た。彼の妻はそんなことには少しも氣がつかずに眠つて居る。寢返りもしない。こんな女は、今若し喉もとへ劍を差しつけられても、それでも平氣で眠つて居るだらうか。いや、そんな場合には、いかに無神經なこの女でも、さすがに人間の本能として當然目を睜くであらう。さうでなければならない。彼はそんなことを考へた。さうして、若しやこの女は今、殺される夢でも見ては居ないだらうかとも思つた。……それにしても、かうした光の審査から人間といふものはさまざまなことを思ひ出すものである。こんなことから、

實際人を殺さうと決心した男が、昔からなかつただらうか……

一尤も、俺は今この女を殺さうとして居るわけではないのだが一

彼は思はず小聲でさう言つた。自分自身の愕くべき妄想に對して、慌てて言ひわけしたのである。

「そこでと…俺は今何のためにこんなことをして居たのだつけな一

彼は氣がついて急に妻を搖り起した。

夜中である。

妻はやつと目を覺したが、眩しさうに、搖れて居る蠟燭の光を避けて、目をそむけた。さうして未だ十分に目の覺めて居ない人がよくするやうに口をもがもがと動かして、半ば口のなかで、

一また戸締りですか、大丈夫よ」

さう言つて、寢返りをした。

「いいや。便所へ行くんだ。ちよつとついて行つてくれ一

厠から出て來た彼は、手を洗はうとして戸を半分ばかり繰つた。すると、今開けた戸の透間から、不意に月の光が流れ込んだ。月はまともに緣側に當つて、歪んだ長方形で板の上に光つた。不思議なことには、彼はこれと同じやうに、全く同じやうに月の光の差込んで居る緣側をちやうど今のさつき夢に見て、目がさめたところであつた。何といふ妙な暗合であらう。彼には先づそれが怪奇でならなかつた。さうして、今、自分達がかうして此處に立つて居ることも、夢のつづきではないのか……ふと、さう疑はれた。

一おい、夢ではないんだね一

一何がです。あなた寢ぼけていらつしやるのね一

蠟燭は彼の妻の手に持たれて、月の光を上から浴びせかけられて、ほんのりと赤くそれ自身の光を失つた。光の穗は風に吹かれて消えさうになびいたが、彼の妻の袖屏風の影で、ゆらゆらと大きく搖れた。風は何時の間にかおだやかになつて居たが、雲は凄じい勢で南の方へ押拂つて居た。小雨を降らせて通り過ぎる眞黒な雲のぱつくりと開けた巨きな口のファンタスティックな裂目から、月は彼等を冷え冷えと照して居た。

彼は手を洗ふことを忘れて、珍らしいその月を見上げた。それは奇妙な月であつた。幾日の月であるか、圓いけれども下の方が半分だけ淡くかすれて消え失せさうになつて居た、併し、上半は、黒雲と黒雲との間の深い空の中底に、研ぎすましたやうに冴え冴えとして、くつきりと浮び出して居た。その上半のくつきりした圓さが、何かにひどく似て居ると、彼は思つた。然うだ。それは頭蓋骨の顱頂のまるさに似て居る。さう言へば、その月の全體の形も頭蓋骨に似て居る。白銀の頭蓋骨だ。研ぎすました、或は今溶爐からとり出したばかりの白銀の頭蓋骨だ。彼の聯想の作用は、ふと海賊船といふやうなものの事を思ひ出させた。神聖な海賊船、どういふわけかそんな言葉を思ひ浮べた。彼は青い月を瞬かずに眺めた。ああ、これと同じ事が、全く同じことが、その時も俺はここにかうして立つて居た。雲の形も、月の形もこれとそつくりだつた。どこからどこまで寸分も違はない。そればかりかその時にもかう思つたのだつた。今と同じ事を思つたのだつた。遠い微かな穴の奥底のやうな昔にも、現在と全然同一な、そつくりそのままで重り合ふ、寸分の相違もない出來事が曾てもあつた……茫然として、彼は瞬間的にさう考へた……何時の日のことだつたらう……何處でであつたらう……

空一面を飛び奔る斷れ雲はもう少しで月を、白銀の頭蓋骨を呑まうとして居る。

「もう、閉めてもいい？」

妻は、寒さうにさう言つた。

彼はその言葉で初めて我に歸つたのか、手を洗はうと身を乘り出した。その瞬間であつた。

「や、大變！」

「え？」

「犬だ！」

「犬？」

彼は即座に手早く、戸締りに用ゐた竹の棒を引つつかむと、力任せに、それを庭の入口の方へ投げ飛した。彼の目には、もんどりを打つ竹ぎれからす早く身をかはして、いきなりそれを目がけて飛びかかると、その竹片を咥へたまま、眞しぐらに逃げて行く白犬が、はつきりと見えた。尾を股の間へしつかりと挾んで、耳を後へ引きつけ、その竹片に嚙みついた口からは、白い牙を露して、涎をたらたらと流しながら、彼の家の前の道をひた走りに走つて行く。月光を浴びて、房房した毛の大きな銀色の毛犬、その織るやうな早足、それが目まぐるしく彼の目に見える。それは王禪寺といふ山のなかの一軒の寺の犬だつた。その形は明確に細密に、一瞬間のうちに彼には看取出來た。

「狂犬だよ！」

彼は自分の犬どもの名を慌しく呼んだ。呼びつづけた。其處らには居ないのか、犬どもは彼の聲には應じなかつた。妻には何事が起つたのか、少しも解らなかつた。併し、夫のさうするままに彼の妻も聲を合せて犬の名を呼んだ。その甲高い聲が丘に谺した。七八度も呼ばれると、重い鎖の音がして、犬どもは、二疋とも同時に、いかにものつそりと現はれた。さうして鎖をぢやらんぢやらんと言はせながら身振ひして、主人の不意な召集を訝しく思ひながらも、彼等は尾をちぎれるほどはげしく振り、鼻をくんくんとならした。

月に雲のなかに呑まれてしまつた。

彼は妻の手から燭臺を受け取るや否や、それを、犬どもの方へ差し出したが、一時に風に吹き消された。直ぐに、ランプに灯をともし代へて見たが、彼の犬には別に何の變事もないらしかつた。

「ああ」愕いた。俺はうちの犬が狂犬に嚙まれたかと思つた―

彼は寢牀に這入つたが、妻にむかつて、今見たところのものを仔細に說明した。彼の妻は最初からそれを否定した。いかに明るくとも月の光で、そんなにはつきりと見える筈はない。それに王禪寺の犬は、なる程、狂犬になつたのだ、けれども、もう一週間も十日も前に、そのために屠殺された。その時、お絹が、

「だから、お宅の犬もお氣をつけなさい」

とさう言つた。その事は、その時彼の女自身の口から彼に話した筈だつた。――妻は事を分けて、宥めるやうに夫に說明するのであつた。しかし彼は王禪寺の犬が氣違ひになつた話などは聞いたこともないと思ふ。

「犬の幽靈が野原をあちあちして驅けまはつて居たのだ。さうして、さういふ靈的なものには俺にばかりしか見えないのだ……。」……憂鬱の世界、呻吟の世界、靈が彷徨する世界。俺の目はそんな世界のためにつくられたのか――憂鬱な部屋の憂鬱な窓が憂鬱な夜闇の方へ見開かれて居る。彼はそんな風に考へた。俺の今生きてゐるところは、ここはもう生の世界のうちでは無く、さうかと言つて死の世界でもなく、その二つの間にある或る幽冥の世界ではないか。俺は生きたままで死の世界に彷徨してゐるのであらうか……ダンテは肉體をつけたままで天界と地獄をめぐつたと言ふならば……。少くとも、少くとも俺が今立つて居る處は、生死をそれの端にしてその方へ著しく傾斜して居る坂道であ

る……

＊　＊　＊　＊　＊

その翌日――雨月の夜の後の日は、久しぶりに晴やかな天氣であつた。天と地とは今朝甦へつたやうであつた。森羅萬象は、永い雨の間に、何時しかもう深い秋にも化つて居た。稲穂にふりそそぐ日の光も、そよ風も、空も、其處に唯一筋絹絲のやうに浮んだ雲も、それは自づと、夏とは變つて居た。すべては透きとほり、色さまざまな色ガラスで仕組んだ風景のやうに、彼には見えた。彼はそれを身體全部で感じた。彼は深い呼吸を呼吸した。冷たい鮮かな空氣が彼の腑に眞直ぐに這入つて行くのが、いかなる飲料よりも甘かつた。彼の妻が、この朝は毎日のやうに犬どもを繋いで置けなかつたのも無理ではない。それはよい處置であつた。遠い畑の方では、彼の犬が、フラテもレオも飛び廻つて居るのが見られた。百姓の若者がレオの頭を撫でて居た。音無しいレオは、喜んでするに任せて居る――太陽に祝福され野面や、犬や、そこに身を屈めて居る働く農夫などを、彼はしばらく恍惚として眺めた。日は高い。この景色を見るために、何故もつと早く目が覺めなかつたらうと、彼は思つた。縁を下りて、顔をば洗ふと庭を通ると白い犬が昨夜啣へて行つた筈の竹片は、萩の根元に轉がつて居た。彼は思はず苦笑した。それは、併し、寧ろ樂しげな笑ひであつた。

井戸端には、こぼれた米を拾はうとして――妻はわざわざ餘計にこぼしてやつたかも知れないと彼は思つた――雀が下りて居た。今までつひぞここらで見たこともないほどの澤山で、三四十羽も群れて居た。彼の跫音に愕かされると、それが一時に飛び立つて、そこらの枝の上に逃げて行つた。逃げたりなどはしなくてもいいのに。二・三本の枝には雀とは別の名も知らぬ白い額の小鳥も居た。その時彼は自に讃美した聖フランシスを、思ひ出した。彼の家の軒端からのぼる朝の煙が、光を透して紫の羅のやうに柿の枝にまつはつた。雨に打ち碎かれて、果ては咲かなくなつて居た薔薇が、今朝はまたところどころに咲いて居る。蜘蛛の網は、日光を反射する露でイルミネエトされて居た。薔薇の葉をこぼれた露は、轉びながら輝いて蜘蛛の網にかかると、手にはとる術もない瞬間的の寶玉の重みに、網は鷹揚にゆれた。露は絲を傳うて低い方へ走つて行く、ぎらりと光つて、下の草に落ちる。それらの月並の姿を、彼は新鮮な感情をもつて見ることが出來るのであつた。

水を汲み上げようと繩つるべを持ち上げたが、ふと底を覗き込むと、其處には測り知らぬ蒼穹を徑三尺の圓に區切つて、底知れぬ瑠璃を靜平にのべて、井戸水はそれ自身が内部から光り透きとほるもののやうにさへ見えた。彼はつるべを落す手を躊躇せずには居られない。それを覗き込んで居るうちに、彼の氣分は井戸水のやうに落着いた。汲み上げた水は、寧ろ、昨日の雨に濁つて居たけれども、彼の朗かな氣分はそれを恕すには十分であつた。

妻の用意した食卓についた時には、彼の心は平和であつた。食卓には先日東京から持つて來た殘つた食物があつた。火鉢の上には鐵瓶が滾つて居た。さうして、陰氣な氣持は妻の言つたとほり、いやな天氣から來たものだつた――と、彼は思つた。彼は箸をとり上げようとして、ふと、さつき井戸端で見た或る薔薇の莟の事を思ひ出した。

「おい、氣がつかなかつたかい。今朝はなかなかいい花が咲いて居るぜ。俺の花が。二分どほり咲きかかつてね、それに紅い色が今度のは非常に深い落着いた色だぜ」

「ええ、見ましたわ。あの眞中のところに高く咲いたあれなの？」

「さうだよ。一莖獨秀當庭心——奴さ」彼はそれからひとり言に言つた「一莖花對白日か。いや、白日は可笑しい。何しろ彼等は季節はづれだ」

「やつと九月に咲き出したのですもの」

「どうだ。あれをここへ摘んで來ないかい」

「ええ、とつて來るわ」

「さうして、ここへ置くんだね」彼は圓い食卓の眞中を指でとんとんとんたたきながら言つた。

妻は直ぐに立上つたが、先づ白い卓布を持つて現はれた。

「それでは、これを敷きませう」

「これはいい。ほう！ 洗つてあつたのだね」

「汚れると、あの雨では洗濯も出來ないと思つてしまつて置いてあつたの」

「これや素的だ。花を御馳走に饗宴を開くのだ」

樂しげな彼の笑ひを聞きながら、妻は花を摘むべく立去つた。

彼の女は花を盛り上げたコップを持つて、直ぐ歸つて來た。少し芝居がかりと見える不自然な様子で、彼の女はそれを捧げながらいそいそと這入つて來た。それが彼には妙に不愉快であつた。彼自身が、人惡く諷刺されて居たやうに感じられた。彼は氣のない聲で言つた。

「やあ、澤山とつて來たのだなあ」

「ええ、ありつたけよ。皆だわ！」

さう答へた妻は得意にであつた。それが彼にはいまいましかつた。言葉の意味の通じないのが。

「なぜ？ 俺は一つでよかつたんだ」

「でもさうは仰言らないのですもの」

「澤山とでも言つたのかね……。それ見ろ。俺は一つで澤山だつたのだ」

「おや外のは捨てて來ませうか」

「いいよ。折角とつて來たものを。まあいい。其處へお置き。……おや、お前には何だね——俺の言つた奴は採つて來なかつたのだね」

「あら、言つたの言はないのつて、これだけしきや無いんですよ！ 彼處には」

「然うかなあ。俺は少し、庭に紛ふ空色を帯びたやうな赤い蕾があつたと思つたのに。それを一つだけ欲しかつたのさ」

「あんな事を。庭に空色を帯びたなんて、そんな難しいのはないわ、それやきつと空の色でも反射して居たのでせうよ」

「成程、それで……？」

「あら、そんな怖い顔をなさるものぢやない事よ。私が惡かつたなら御免なさいね。私はまた、澤山あるほどいいかと思つたものですから……」

「さう手輕に謝つて貰はずともいい。それより俺の言ふことが解つて貰ひ度い。……一つさ。その一つの蕾を、花になるまで、目の前へ置いて、日向へ置いてやつたりして、俺はぢつと見つめて居たかつたのだ。一つをね！ 外のは枝の上にあればいい」

「でも、あなたは豐富なものが御好きぢやなかつたの」

「つまらぬものがどつさりより、ほんとうにいいものが只一つ。それがほんとうの豐富さ」彼は自分の言葉を、自分で味つて居るやうに沁み沁みと言つた。

「さあ、早く機嫌を直して下さい。せつかくこんないい晴なのに……」

「さうだ。だから、せつかくのいい晴たから、俺はこんな事をされると不愉快なのだ」

彼は、併し、そんなことを言つて居るうちにも、妻がだんだん可哀想になつて居る。さうして自分で自分の我儘に氣がついて居た。妻の人

親指には、薔薇の刺で突いたのであらう、血が吹滲んで居る。それが彼の目についた。併し、そんな心持を妻に言ひ現はす言葉が、彼の性質として、彼の口からは出て來なかつた。寧ろ、その心持を知られまい、知られまいと包んで居る。さうしてどこで不快な言葉を止めていいやら解らない。それが一層彼自身を苛立たせる。

彼は強ひて口を噤んだ。さて、その花を盛り上げたコップを手に取上げた。最初は、それを目の高さに持上げて、コップを透して見た。緑色の莖が水にひたされて一しほに緑である。葉うらがところどころ銀に光つて居る。そのかげにほの赤い刺も見える。コップの厚い底が水晶のやうに冷たく光つて居る。小さなコップの小さな世界は緑と銀との清麗な秋である。

彼はコップを目の下に置いた。さうして一つ一つの花を、精細に見入つた。其處にある花は花片も花も、不運にも皆蝕んで居る。完全なものは一つもなかつた。それが少し鎭まりかかつた彼の心を掻き亂した。

「どうだ、この花は！　もつと吟味をしてとつて來ればいいのに。ふ、みんな蝕ひだ―」

彼は思はず吐き出すやうにさう言つて仕舞つたが、又、妻が氣の毒になつた。急に、その中の最も美しい莟を一本抜き出すと、彼は言葉を和げて、

「ああ、これだよ。俺の言つた莟は。それ、此處にあつた！　此處にあつた！―」

彼の言葉のなかには、その言葉で自分を和げて、妻の機嫌をも直させようとする心持があつた。けれども、妻は答へようとはしないで、默つて彼の女自身の御飯を茶碗に盛つて居るのであつた　彼は横眼でそれを睨みながら、妻の額を偸視た。このコップを彼處へ、額の上へたたきつけてやつたなら。いや、いけない。もともと自分が我が儘なのだ。彼は仕方なく、寂しく切ない心をもつて、その撮み上げた莟を、彼自身の目の前へつきつけて眺めだした。……その未だ固い莟には、ふくらんだ横腹に、針ほどの穴があつた。それは幾重にも幾重にも重つた莟の赤い花片を、白く、小さく、深く芯まで貫いて穿たれてあつた。言ふまでもなくそれは蟲の仕業である。彼は厭はしげに眉を寄せながら、尚もその上に莟を視た。

はつと思ふと、彼はそれをとり落した。

その手で、す早く、滾つて居る鐵瓶を下したが、再び莟を撮み上げると、直ぐさまそれを火の中へ投げ込んだ。――莟の花片はぢぢぢと焦ける……。そのおこり立つた貪婪の炎を見た瞬間、

「や！―」

彼は思はず叫ぶやうになつた。立ち上りさうになつた。それを彼はやつと堪へた。ここで飛び上つたりすれば、俺はもう狂人だ！　さう思ひながら、彼は再び手早に、併し成可く沈着に、火鉢で焼けて居る花の莟を、火箸の尖で撮み上げるや、傍の炭籠のなかに投げ込んだ。彼はこれだけの事をして置いて、さて、火鉢の灰のなかをおそるおそる覗き込むと、其處には何もない。今あつたやうなものは何もない。愕き叫ぶべきものは何もない。彼は灰の中を掻きまはして見た。底からも何も出ない。水に濡らした石油よりも一層早く、灰の上一面をぱつと眞青に擴がつた！　と彼の見たのには、それは唯ほんの一瞬間の或る幻であつたのであらう。

彼は炭籠の底から、もう一度莟を拾ひ出した。火箸でつままれた莟は、焼ける火のために色褪せて、それに眞黒な炭の粉にまみれて居た。さて、その莟を彼は再び吟味した。其處には、彼が初めに見たと同じやうに、彼の指の動き方を傳へて慄へて居る莖の上には花の蕚から、蝕んだただ二枚の葉の裏まで、何といふ蟲であらう

——葉の色そつくりの青さで、實に實に細微な蟲、あのミニアチュアの幻の街の石垣ほどにも細かに積重り合うた蟲が、莖の表面を一面に、無數の數が、針の尖ほどの隙もなく裹み覆うて居るのであつた。灰の表を一面の青に、それが擴がつたと見たのとは幻であつたが、この莖を包みかぶさる蟲の群集は、幻ではなかつた——一面に、眞青に、無數に、無數に……

「おお、薔薇、汝病めり！」

ふと、その時彼の耳が聞いた。それは彼自身の口から出たのだ。併しそれは彼の耳には、誰か自分以外の聲に聞えた。彼自身ではない何だか、彼の口に言はせたとしか思へなかつた。その句は、誰かの詩の句の一句である。それを誰かが本の扉か何かに引用して居たのを、彼は覺えて居たのであらう。

彼は成るべく心を落ちつけようと思ひながら、その手段として、目の前の未だ伏せたままの茶碗をとつて、それを靜かに妻の方へ差し出した。その手を前へ突き延す刹那、

「おお、薔薇、汝病めり！」

突然、意味もなく、又その句が口の先に出る。

彼はやつと一杯だけで朝飯を終へた。

妻はしくしくと泣いて居た。「嗚！ また始まつたか」と心のなかで彼の女の夫に就て呟きながら。さうして食卓を片附けつつ、その花のコップをとり上げたが、さてそれをどうしようかと思惑うて居た。あの蝕んだ燒けた蕾は、彼が無意識に捻り碎いたのであらう——火鉢の猫板の上に、粉粉に裂き刻まれて赤くちらばつて居た。彼はそれらのものを見ぬふりをして見ながら、庭へ下りようと片足を緣側から踏み下す。と、その刹那に、

「おお、薔薇、汝病めり！」

フェアリイ・ランドの丘は、今日は紺碧の空に、女の脇腹のやうな線を一しほくつきりと浮き出させて、美しい雲が、丘の高い部分に小さく聳えて末廣に茂つた木の梢のところから、いとも輕輕と浮いて出る。黄ばんだ赤茶けた色が泣きたいほど美しい。何時か一日のうちに紫に變つた地の色は、あの緑の縦縞を一層引立てる。そのうへ、今日は縞には黑い影の縦が織り込まれて居る。その丘が、今日又一倍彼の目を牽きつける。

「俺は、仕舞ひには彼處で首を縊りはしないか？ 彼處では、何かが俺を招いてゐる」

「馬鹿な、物好きからそんなつまらぬ暗示をするな」

「陰氣にお果てなさらねばいいが——」

彼の空想は、彼の片手をひよつくりと擧げさせる。今、その丘の上の目に見えぬ枝の上に、目に見えぬ帶をでも投げ懸けようとでもするかのやうに……

「おお、薔薇、汝病めり！」

井戸のなかの水は、朝ひとほりに、靜かに圓く湛へられて居る。それに彼の顏がうつる。柿の病葉が一枚、ひらひらと舞ひ落ちて、ぽつりとそこに浮ぶ。その輕い一點から圓い波紋が一面に靜にひろがつて、井戸水が搖らめく。さうしてまたもとの平靜に歸る。それは靜で、靜かである。涯しなく靜かである。

「おお、薔薇、汝病めり！」

薔薇の叢には、今は、花は一つもない。ただ葉ばかりである。それさへ皆蝕ひだ。ふと、目につくので見るともなしに見れば、妻は今朝の花を盛つたコップを臺所の暗い片隅へ、棚の片わきへ、ちよこんと淋しく、赤く、それを隱すやうに置いて居る。それが彼の目を射る。

「お前はなぜつまらない事に腹を立てるのだ。お前は人生を玩具にして居る。怖ろしい事だ……。お前は忍耐を知らない——

「おお、薔薇、汝病めり！」——

裏の竹藪の或る竹の或る枝に、葛の葉がからんで、別に風とてもないのに、それの唯一枚だけが、不思議なほど盛んに、ゆらゆらと左右に搖れて居る。さうしてその都度、葉裏が白く光る――それを凝と見つめて居ても……。彼を見つけた犬どもが、いそいそ野面から飛んで歸つて、雨戸から飛び縋る。それを避けようと身をかはしても……。どこかの樹のどこかの枝で、百舌が、刺すやうにきりきり鳴き出しても……、渡鳥の群が降りちらばるやうに、まぶしい入日の空を亂れ飛ぶのを見上げても……、明るい夕空の紺青を仰いでも……、向側の丘の麓の家から、細細と夕餉の煙がゆれもせず靜に立昇るのを見ても……

「おお、薔薇、汝病めり！」

言葉がいつまでも彼を追つかける。それは彼の口で言ふのだが、彼の聲ではない。その誰かの聲を彼の耳が聞く。それでなければ、彼の耳が聞いた誰かの聲を、彼の口が即座に眞似るのだ。――彼は一日、何も口を利かなかつた筈だつたのに。

犬どもは聲を揃へて吠えて居る。その自分の山彦に怯えて、犬どもは一層はげしく吠える。山彦は一層に激しくなる。犬は一層に吠え立てる……彼の心持が犬の聲になり、犬の聲が彼の心持になる。暗い臺所には、妻が竈へ火を焚きつける。妻が東京へ引き上げたいといふ氣持は、たしかにこんな時に彼處で養はれるに違ひない。何處かから歸つて來た猫が、夕飯の催促をしてしきりと鳴く。ぱつと火が燃え立つと、妻の顏は半面だけ眞赤に、醜く浮び出す。その臺所の片隅では、薔薇のコップが、暗のなかでぽつりと浮び出して來る。その薔薇は、蝕ひの薔薇は煙がつて居る！

彼はランプへ灯をともさうと、マッチを擦る、ぱつと、手元が明るくなつた刹那に、

「おお、薔薇、汝病めり！」

彼はランプの心へマッチを持つて行くことを忘れて、その聲に耳を傾ける。マッチの細い軸が燃えつくすと、一旦赤い筋になつて、直ぐと味氣なく消え失せる。黒くなつたマッチの頭が、ぽつりと疊へ落ちて行く。この家の空氣は陰氣になつて、しめつぽくなつて、腐つてしまつて、ランプへも火がともらなくなつたのではあるまいか。彼は再びマッチを擦る。

「おお、薔薇、汝病めり！」

何本擦つても、何本擦つても。

「おお、薔薇、汝病めり！」

その聲は一體どこから來るのだらう。天啓であらうか。預言であらうか。ともかくも、言葉が彼を追つかける。何處までも何處までも……

改作田園の憂鬱の後に

「田園の憂鬱」の作者自身が、それの改作を凡そ了つた晩に、それの終に、自分と讀者との爲めに書く。

本書冒頭以下の五章は、今からちやうど三年前の五月の作で、同じ六月、雜誌「黑潮」に『病める薔薇』の題で掲載された。この部分は同年十二月に全く改作した。別に同年九月の作である「續病める薔薇」約五十枚がある。それは兼ねての約束であつたにもかかはらず、雜誌「黑潮」の編輯者から、それの採錄を拒絶された。その原稿を自分は遺棄してしまつた。それ故本書のなかにはそれは收められて居ない。それは勿論、惜しむに足るほどの價はない。第六節以下、卽ち本書の大部分は、去年の一月三月の作である。それには發表されなかつた原稿『續病める薔薇』に書かれた同一の材

も雜つて居る。併し、全部改めて書かれたものである。同じ去年九月、雜誌「中外」に「田園の憂鬱」として掲載されたものがそれである。その不充分な作品である理由で、自分はその時までそれの發表を躊躇したのである。當時、書肆天佑社が自分の第一著作集を出版する計畫があつて、それの頁數の都合からこれを同集のなかに收錄したいと言つた。その著作集『病める薔薇』には、改作された「病める薔薇」が「田園の憂鬱」と一つに連續して「病める薔薇」或は「田園の憂鬱」といふ二つの題を持つて、未定稿と斷つたままで收錄した。今茲、三月四月、自分は同書に據つて、先づ可なり多くの誤字脫字を改訂する傍、別に約二萬二千字の字數を加へた。二つの新らしい斷章をも設けた。それは殆んど各頁に行き渉つての增補で、或は單に字句の削正であり、併しより多くの場所に更に的確精細な描寫と、內容的なリズムの諧調とを期し努めたつもりである。而も、もともと今日から見て落想を誤つたものがあつたが爲めに、一度不完全に表現されてしまつたものは、今更これをどうすることも出來なかつた。書き足りない部分にでは無くて、反つて書かれて居る部分で、作者をして全く堪へ難いやうな氣持を起させるやうな箇所は、自分をただ徒らに愧ぢしめるのみであつた。冒頭からの五十頁ほどは、（前述の如く最も舊く書かれた部分であるが、）その最も著るしい例である。そんな部分を私は唯そのままにして置いた。それを改めることは全くの無意味だから。それは、不完全ながら、をかしいながらにも、それ自身がそのままで持つてゐる或る有機的な組織を徒らに毀つばかりであつて、それを改めることによつて或は樣子のいい、いい、いいものにはする代りに、それに脈動してゐる或る物を得て傷け勝ちである。それは決して藝術に忠實な所以ではない。より忠實な者はこんな場合に寧ろ全部を抹殺すると同じ意味で、全部をそのままに生かして置くであらう。

『「田園の憂鬱」或は「病める薔薇」』は、ともに自分の外的な事情のために、あまりに未定稿のままで、しかも斷片的に發表されたものであつたが爲めに、自分は、最初敢へてこれをいくらかでも完全に改作して見ようなどと考へもしたやうなものの、一度書かれてしまつたものをつつ突き返すやうな事は——それの可否は別として——今更ながら全く豫想外に、自分には不可能であり、不愉快な仕事でもあつた。さう痛感した時、自分は出來るだけ直ちにそのペンを投げ出した。自分はもうそれ以上の不愉快を忍びたくはなかつたから。自分が、最初にはもつと面目を一變するかも知れない程度での改作を志しながら、敢てそれを存分には遂行しなかつた所以である。かうして、「本書改作「田園の憂鬱」或は「病める薔薇」」が出來た。いつまでも二つの名を負はされたこの一篇は、いつまでも不完全でつぎはぎであるらしい。それでも未だしも、改作した方がよくなつた（？）と、作者はあやふやな自信をもつてさう考へる。けれども他の人人がそれを見て、無駄だつたと言ひ、又懲もなく過去の作品に執着として居るものとして笑止がつてくれなければ幸である。とにもかくにも、作者は以後、本書をもつて定稿としようとする！ 「病める薔薇或は田園の憂鬱」は、もし事情が許したならば第一の[illegible]これ

に纏めて發表するのがほんとうであつた。それが作者の當初の企てでもあつた。

雜誌「中外」に掲載された『田園の憂鬱』が、未定稿のままで、比較的江湖に迎へられ且つ文壇諸家の一瞥をも得たことは、年少無名の作者にとつて望外の光榮であつたと言はなければならない。けれども同時に、自ら省みて、それがさまざまな事情で、又さまざまな意味で、まことに喘ぎ喘ぎに綴り合されたもので、心ゆくまでにそれを書き遂げる機會を逸して、自ら親しく體驗し、且つ比較的久しく心にあつた作品としては、その或る世界——それは爭ふべくもなくつまらない、が併し、そこに暫く私が住まなければならなかつたところの或る世界のアトモスフィアは、この作品で再現された時には、情けないほど稀薄な、こくの無いものになつて居るのを感ずる。私の Anatomy of Hypochondria は到底ものにはなつて居ない。さうしてそれはいくらか増補された今でも依然としてさうである。しかも今ではもうこれ以上にそれをどうするといふ氣持にもなれないのを、愚痴にも、多少遺憾に思ふ。この書が（——多辯にも、つい自家一個の所感をまで吐露してしまつた序に、もうしばらく多少の氣恥しさを堪へて書きつづければ、）この書が、近く新に稿を起さうと用意してゐる『都會の憂鬱』が、或は作者自身滿足出來る程度に書かれるやうなことがあつた場合、その時に、それの微かな伴奏としてそれほど邪魔をすることもない姉妹篇としてでも、せめては役立つてくれればいいと自分は願ふ。

一九一九年五月一日　　佐藤春夫

断章

さまよひくれば秋ぐさの
一つのこりて咲きにけり、
おもかげ見えてなつかしく
手折ればくるし、　花ちりぬ。

（『殉情詩集』より）

なみだ

埋火もきゆや涙の烟る音　　芭蕉

あるはつきばゆたつけぶり、
あるは樋をゆくたにのみづ、
あるはわが目にわくなみだ。
これをさだめとさとるゆゑ、
ぜひなきものと知るらめど、
とめてとまらぬものなれば、
せつなやあはれほそぼそと、
ひとすぢにこそながるらし。

（『殉情詩集』より）

都會の憂鬱

近所の人たちはその家を見てへんに思つた。そこには若い夫婦ものが二人ゐるきりで、犬が二疋飼つてあつた。妻君の方は毎日、朝のうちから出かけて行つた。派手な服装はただの風俗ではなかつた。その二十ぐらゐの妻君が出かけて行つたあとでは、その家は見たところ空家のやうに感ぜられた。表の戸はいつも一枚だつて完全には明けられてゐなかつた。だがこの家は空家ではない——そのなかに彼が住んでゐたのである。

それは坂の中ほどにある一軒の小さな平家で、その坂はどういふ理由からであるか幽靈坂といふ名であつた。さうしてその名に不相應でないいやな狹い坂道であつた。それにこの道は行きづまりでもなく、またこの大都會の場末といふわけでもないのに、社會に生きて活動してゐる人間にとつては用事のない道であつた。それ故この近所に住んでゐる人でもなかつたらこんな道のあることは誰も知るまい。そんな坂道の中ほどに彼の家があつた。さうしてそれは一日中日の當ることのない家であつた。その代りには坂の中ほどだから、冬の空風が卷き上げる砂埃がどつさり家のなかへ這入り込んだ。あまり味氣ないやうな氣がして彼は表の戸をすつかり明けて見たことがあつたが、そこからは日の光一すぢ射すでもないのに、砂埃がざらざら音を立てながら障子にあたつた。そこで表側の戸は全く開けないことにしたけれども、それでも戸の隙間から寒い風と一緒に砂埃が侵透して來た。さうして一日中、日の當らないこの家は、ハウスキイパアが居ないために一そううすら寒く暗く荒涼としてゐた。彼は一日中殆んど物言ふことなしに、或る窓のそばへ妻が出がけに用意して行つてくれた置炬燵にもぐつてゐた。別だん何をしてゐるのでもなかつた。もとより毎日さまざまな事を考へはした。然しどれもこれもとりとめのあることではなかつた。身に沁みて物を感じようとするには、實際、彈力のある心でなければならない。しかも彼の心のなかにはその彈力といふものはすこしも殘つてゐない。彼のとるに足りないそれらのさまざまな考のなかで、何ものよりも最も力強く彼に迫つて來るものといふのは、實に、

「どうして、この家には日があたらないのだらう？」

と、さういふ極くつまらない事實であつた。彼のなかに生き生きとした何物もなくなつてしまつてゐるのは專ら、日の當らない家のなかに住んでゐるといふ事に起因してゐたかのやうに彼には感じられるのであつた。——その事を、彼は或る晩に彼の妻に訴へたことがあつた。彼の妻は彼が駄駄つ子のやうな事を言つてゐるのに對して、それを慰めでもするやうに、この家にだつて日のあたつてゐる時間があるといふ事を聞かせた。彼の妻が言ふには、彼の女が毎朝出かける時刻——といふと九時ごろであるが、その時刻には、この家の表の窓の戸に朝日が射してゐると云ふのであつた。その話を妻から聞いた彼は、その次の日の朝は早く妻と一緒の時刻に起きて見た。さうして表の窓を試みに明けると、その障子の一番左の端の一枚の上の方に、ちやうど兩方の手の拇指と人差指とを各組合せて形どつて見せることの出來るほどの三角形の日ざしが、冬の太陽ながらにも朗日たか

らそれこそ華やかに、その銀鼠色にすすけた障子へくつきり輝き映つてゐるのであつた。その障子を引くとその日脚は埃の渦巻きのなかを虹色に射透して海老茶色をした疊の上へ三角に突き當つて、白く積んでゐる埃を照し出した。彼は自分の家に射し入つてゐるこの思ひがけない日光を、思ひがけない貴賓を迎へた裏長屋の子供のやうにびつくりして見恍れた。太陽は向ひの二軒の二階屋の屋根の線がすこしばかり喰ひ違つたその隙間から洩れこぼれてくるのであつた。彼はその太陽の方を見た――彼が自分の家のなかから太陽を見たのは五十日目ぐらゐだつた。日脚は古疊の上を刻刻に這つて、有難いことにやつと掌ほどの大きさしかなかつた日向は、刻刻に大きくなつて十分ほどの後には斜邊が三尺以上もある日向になつた。彼はその小さな貴重な日向へしやがんで見た。その日向は彼の肩の半分を照すのにはやつと十分であつた。しかもその日脚は彼の肩の上で刻刻に縮んで行つてゐたと見える。十分ほどの後にはもうその日脚は消え去つて、この家のなかのどこにも一すぢの日ざしさへなかつた。全く日が當らないと思ひ込んでゐたこの家にも日があたるのであつた――而も、一日のうちに二十分！

その日以後、彼はその二十分の日脚を樂しむために每朝妻と一緒に起きた。さうして妻と一緒に朝の食事をすると、やがて表の戸を一枚引いて、そこから射し入る朝日の光を身に浴びた。二十分間！　さうしてもう一度、寢牀のなかへもぐり込んだ。さうして、彼は犬のやうに犬の眠を――うつらうつらして直ぐに目の覺め易い眠を眠つた。といふのは、妻が朝出がけにそれぞれの店へ寄つて彼の夕方の食事のために註文して置いたさまざまな品物を、それぞれの店の小僧が持つて來ると、主人と同じやうに臺所口で眠つてゐる彼の犬がきつと一度は吠えた。さうして彼は目を覺ました。こんな具合にして彼の一日は正午になり、彼は時には朝飯の殘りで午飯を濟ましたり、或は全く午飯を食べなかつたりした……

彼のその家と太陽との關係をもう少し述べると、彼は或る日、偶然彼が午後になつてからよくもぐつてゐる炬燵のある窓の直ぐ向うにある板塀――それは隣の家と彼の家との境目で彼の窓から直ぐ文字通りに手のとどくところにあつた板塀に、ほんの少しばかりではあつたが一時間近くも日が當つて、その反射のためにうす暗いその二疊の部屋がほんのりと溫い明るみを感ずることに氣がついた。それは[illegible]よく見ると、それは彼の家のものではなく、隣家のものであつたからその日の當つた明るい部分には、隣家の方から打ちつけた釘の尖が皆、彼の家の方へ突き出してゐた。ふと彼は或る氣紛れから、妻の鏡臺の傍へ行つてそこから、一つやや大きな鏡を持つて來た。さうして[illegible]のニッケルで出來た是を[illegible]して、その[illegible]くまがつた部分を[illegible]日向に[illegible]けてゐる釘にひつかけ[illegible]日の光は[illegible]の面に反射し屈折して、彼の二疊のその[illegible]の上へ光を照し返した。彼はその上の小さな日光をしばらく眺めて見たが、やがて手を高く[illegible]げて細い日光が流れてゐる[illegible]をその掌で遮つた。日光は、掌に當つた。その日に當つてゐる掌を彼は嬰兒がよくするやうに握つて見たり、ひろげて見たりした。終には、不意に彼は炬燵のなかから立ち上つてその光の[illegible]へ彼の顏を當てて、日向にある鏡を、その鏡のなかに在る小さな太陽を覗いて見た。暫くぢつと見つめた。それは單に退屈のあまりに彼がして見たことどもではあつたが、彼が自分のしてゐることに氣がついた時には言ひ知れない馬鹿馬鹿しさと同時に暗鬱な心とを彼のなかに湧かせた。

彼は、その瞬間に何となく、牢屋のなかにゐる者であるかでなければ氣違ひででもあるかのやうに自分が思へた。

　ふと、彼に思ひ出されたのは、彼等がつい二ケ月ほど前までゐたあの田園の家であつた。その田園の家の庭であつた。その庭にあつた日かげの薔薇であつた。つい半年前まではその田園の日かげの薔薇は彼にはまだいくらか象徴的なものであつた。それ故に美しいものであつた。しかし、今日の彼には何一つ彼の夢を託するものはなかつた。そこは灰色の都會であり、この家は日のあたらない家であり、季節はすべての物の音まで消え入りさうな冬であり、彼自身に何の才能も素養もない文學青年――いや、或る場末の劇場に出てゐる下つ端の女優の夫であつた。――かの女の方から言はせたら、夫に意久地がないからそんな場末の下つ端の女優にかの女がなり下つたのだと言ふであらう。……

　とりとめもなく一日が暮れて、――この日の當らない家は特別に早く日が暮れて、しかもこんなに暗いのはこの家だけだと見えて、電燈は未だともらなかつた。あの慌しく且つ永い黃昏のなかに、彼は火の消えてしまつてゐる長火鉢を見出して、小指の尖ほどの火種を賴みに火を吹き出した。さうして、先刻からのとりとめのない考へのつづきを、やはりとりとめもなく考へ續けて居た。――俺の一生は結局そんな場末の女優の亭主として朽ちて仕舞ふのであらうか。――さうかも知れない。――それならばそれでもいい。俺には、事實、あらゆる先輩や友人が精一杯の好意の末でもう見放してしまつてゐるとほり何の才能もないのであらう。――又誰だつて自分自身で些の自信をも持てなくなつてゐる一人の男に向つて何の希望をかけるものか。――都會へ出て行けば何とか刺戟があるであらうと言つて彼を再び都會へ連れ出して來た彼の妻だつて、初めのうちは夜更けに歸つて來ては眞先きに、今日は何か出來さうだつたかと尋ねてゐたのに、この頃になつては一度だつてそんな事を言はないではないか。――人人はもう誰も、彼れも「若しかすると才能があるかも知れない男」としての彼を全く忘却してしまつてゐるのであらう。無理もない事だ、俺自身がもう「若しかすると才能があるかも知れない男」を自分自身のなかで刻刻に見失ひつつあるではないか。――結局それもいい。そんな愚かな夢は早く覺めたがいい。――が、併し、一生この日の當らない家のなかに住まなければならないとしたらどんなに物悲しい事であらう。

「日かげ者か！」

　彼はふとそんな有り觸れた言葉を思ひついて、それを口に出して呟いた。日かげ者。世外の人。世の中から恥を與へられてゐる人。彼はさう考へて見たが、この「日かげ者」と云ふ言葉が普通に持つてゐる意味は、彼にはそれほど力強い響がなかつた。却つてその文字通りの意味「日光の射さないところに住まなければならない人」といふ事の方が怖ろしく思へた。

　南國で育つた彼は寒さには實に弱かつた。さうして寒い時期には花が咲かないやうに、冬の寒さには人の空想も凍え勝ちなものであつた。自分の空想に醉つて纔に生きることの出來るやうな性格の彼にとつては、その空想力のにぶる冬が最もうら悲しいのである。それ故に、いつも冬になると彼は日向ぼつこをして idle hour を造つてゐるのであつた。しかもこの家には日が當らないのである。中流の家庭に人となつた彼は、今までにまだ一度も日向のない家の冬といふものを知らなかつた――さうしてそんな家に住まなければならない自分といふ者にほんと

うにうらぶれといふ氣持をしみじみと感ずるのであつた。さうして彼は考へた。――日の當らない家に俺が住まはなければならないといふことは、俺には似合はない事だ。いや、俺には似合はないばかりではない。人間の誰にだつて似合ひはしない。いや、人間だけではない。犬だつて日向を戀しがるではないか。――だが、そんな事を言つてゐるのもほんの一冬か二冬かで、それ以上この狀態がつづけば、今にそんな、日の當らない家などにはすつかり慣れて來るであらう。どんな惡い狀態にだつて人間は慣れて來る、――それが人間の一番悲しい事ぢやないか……

少しづつ赤くおこつて來る火を一心に見つめながら、夕方のヒステリイ的な感興でこんな虛無的な意久地のない事を考へつづけてゐるうちに、不意に部屋のなかが明るくなつた。電燈がともつて、お晝に食べ散らしたままのお膳が片隅に押しやられてあるのを穢らしく照し出して居た。彼は部屋が明るくなつた拍子に無心で茶簞笥の上にあつた置時計が五時であるのを見た――さうした日でその文字板を見つめながら、妻が歸つて來るまでにはまだ五時間半あると考へた。さうして十二時前にそつと起きる彼の半日か慌しいくせに、しかもひどく退屈なのを感ぜざるを得なかつた。

……「二三日前、君の家の前を通つて見た。聲を掛けようかと思つたが戶が閉つてゐたね、覗いて見たら上り框に犬が眠つてゐたよ。あの家の生活は、君、小說になりさうぢやないか」或る先輩が彼にさう言つた。――この先輩の家といふのは彼の家から一町とはない屋敷町にあるので、彼は時時、犬を牽いて步いた歸り路などにそこを訪れることがあつたのだが、その同じ先輩の家で或る時に落ち合つた或る洋畫家は又、彼の顏をつくづくと見て言つた――「面白い。實に繪畫的だ。頭の毛の具合から髭の樣子から何一つ調和を破つてゐるものはない！私の靑と黑とを基調色にしてあなたの顏を描かせていただきたいものですね」彼は人人が何故にそんなことを言ふかといふことを知つてゐた。彼の家の沈鬱して濁つてうすら寒い空氣が家の外側まで蔓つて路を行く人にまでそれを感じさせ、また彼の精神の困憊が淺ましく彼の顏へまで覗き出してゐてそれが初對面の人の目にまで注意を引くのである。――君の家の生活は小說になる――君の顏は靑と黑とを基調色にした繪になる――この言葉は、神經質な彼には、お前の全生活にはデケイした面白味があるよ――お前は敗頽して行く人間だからね――と言はれたのと同じ效果をもつて聽き做された。そんなことを考へるのをひがみだと思つても、そのひがみを抱くのが當然のやうな引け目が自分にあることを思はざるを得なかつた。また妻の母親は時時にこの家を見舞ひに來て、この不可解なほど氣位が高いくせに生活力と言つては何一つなく、若し何か金錢上の事やなにかを相談でもしようものなら、自分自身のことであり乍ら逆に他人の無心でも聞くかのやうに橫を向いて仕舞ふこの奇妙な自身の婿にひどく氣兼ねをしながらも、苦笑を含んで皮肉した――「お前に出來る仕事はまあ何處かのお屋敷の犬の番人ぐらゐなものだらうね」と。いろいろの場合に人人から言はれたそれらの言葉が彼の心に殘つてゐた。それが時折にひよつくりと彼の心の表面に恥になつて浮き上つて來た。それは彼の眉をしかめさせないで置かないものであつたが、もう一つ別に彼の頰を苦笑で歪ませるものがあつた。それは、毎日夕方になつて電燈がともつて急に明るくなつた部屋を見まはした時に、時時にふ

いと思ひ出された。――「あなたの家へ來て見ると急に左前になつた相場師の家を見るやうですね。箪笥やら長火鉢やら茶箪笥やらが家不相應で、夫人は未だまだ世帶やつれがしてゐませんからね」といふ言葉であつた。それは彼の友人の江森渚山の言葉であつた。その表現のいかにも渚山らしいのが彼には面白かつた。しかし一度この言葉から、この言葉を云つた人江森渚山を思ひ出すと、彼の苦笑はもつと苦いさうして重苦しい心持に變つて行つた。

江森渚山こそ何の誇張もなしに敗殘者だと彼は思つた。――さうしてさう思つたすぐ後には、渚山をそんな風に考へて自分よりももつと下がある、自分は未だあれ程ではないと思ふことに依つて、無意識にでも自ら慰め或は自ら誇つてゐるのではないか、それならば限りなく野卑なことであると彼は自分を反省して見るのであつたが――、彼ばかりではない渚山を知つてゐる限りの人人は、この年長の友を皆それぞれに輕んじてゐるのであつた。年をかくしてゐる渚山は何歳であるかよく解らなかつた。それにしても少くとも彼よりは一時代、十歳は年長であつた。さうして渚山はよく何かにつけて、一時代前の文壇の動搖の氣運に、いかにして曩に文壇の表面へ游ぎ出せさうであつたかを自分でよく說いたのであつた。渚山の年少の友は皆それを或る微笑をもつて聞いた。渚山の言ふところによると、渚山はその時代の二三の大家にも面識があり、その大家の手から二三の創作が相當の雜誌で發表されたこともあつた。さうしてそれが渚山に樂しい思ひ出となつてゐる。――渚山は、經驗を重んずる自然主義藝術の信條を、その文學的生涯の第一歩から固く信じて來た。信じたばかりではない、身を以つてその信條に奉仕して來たのである。渚山は、多分二十年（？）近く以前にその母を失つた當時に、その頃としては決して少額ではなかつた二千圓以上の金を遺產として手に入れると、彼自身の才能を信じてその才能の完成のために一生を盡さうと決心をした渚山は、小說作家としては學問よりも人格よりもその他の何よりも貴重だとその當時誰も言つた人生の經驗、その經驗を買ふために且つは彼の青春を樂しむ爲めに、その金のつづくかぎりは、そこここの遊覽地やら温泉宿やらを歩きまはつて年月を暮した。さて渚山の經驗は漸く豐富になり、その豐富な經驗をもつて、いざ文壇に乗り出さうとして徐ろに試み初めたところには、文壇の傾向――それはうつり氣な、理由のない一般の流行と何の區別もないものであるが――はもうすつかり彼の信奉する主義のものではなくなり、却つてその反動として渚山の考へとは全く逆行するものになりかかつてゐた。しかし一個の發育盛りの頭腦が一つの主義の空氣のなかに若し何の疑ひをも抱くことなしに生育した場合には、たとひその主義が幽靈にならうとも、それを盲信した人人は永くその幽靈のために惱まされ、力の弱い者、或はその主義を信ずること最も深かつた者は生涯その幽靈のために憑かれるものである。實際、渚山はその信ずるところのものを後年になつて、たとひ持てあましても決してそれを如何やうにも變へることは出來なかつた。渚山は自分の年少な仲間たちがそれぞれに何れも新らしい時代のそれぞれの思想を抱いてゐることを知り、同時にそれを寛大に理解してゐたけれども、渚山自身の思想は、言葉の一端一端にその時代おくれなことを自白してゐた。また生れながらに善良で、謙遜な渚山は丁寧な言葉づかひですべての年少の友に接してゐた。それがどうかすると先輩が後進を導く親切か、それともつ

と人惡く觀察する時には、渚山自身がうつかり親しみのある言葉などを使つてこその結果、若い者どもから同輩らしい言葉づかひをされてはならないといふ心づかひからでも出てゐるのではないかと思はれる節さへないではなかつた。渚山はよく自分の書かうと思つてゐる小說の筋を話すことがあつたが、若しそれを聞く誰かが、「それは面白い」とでも言はうものならば、渚山はその人に向つてうれしさうに次のやうに言ふのであつた――「面白いですか。ほう。氣に入りましたか。どうです。一つ書いて御覽になつては。その材料なら差し上げてもいいのです。――私には、もつと書きたい經驗が幾つもありますから」渚山はさう言つて彼の經驗の豐富を誇りながら材料を人にくれたがることは、仲間で有名な話であつた。年若な仲間は渚山が自分から出た材料を書かせたがる心理を推測して、かげではよく聲色を眞似ながら渚山を笑つた。

その渚山が彼――この話の中心人物である彼とは、四五年前に、いつどこでともなく知り合ひになつた。渚山は生活の必要上からなるべく廣く交友を持つやうに心がけてゐたらしかつた。さうしてそれがすべて年少の友ばかりであつた。渚山は屢彼のところへ來ては、あまり新らしい友であり過ぎるかも知れない彼に向つて、金の無心を言つた事もあつた。――どこか求職の口があるといふ話をした上で、その爲めに入用だから是非とも夏羽織を一枚欲しいと言つた。さうしてその頃、父から僅かばかりの仕送りを貰つて生活してゐた彼の家庭にも少しも金がないことが判ると、渚山は彼に幾冊かの書物を貸せるやうに歎願した。求職する人間が見すぼらしい服裝をしてゐることは當然なことではないかと彼は言はうとは思つたが、あまり見すぼらしい風態で求職や借金の用事に行きたくはないといふ心理に、何か本當があることを彼は感じた。さうしていくらかをかしい氣がしながらもいやな顏をせずに渚山の要求に應じたものであつた。渚山の求職は無論駄目であつたが、渚山は古着屋で求めた絽の羽織を着た姿で彼の家庭へ來て、その羽織の襟をつまんで示しながら、「お蔭で」といふ言葉を使つて丁寧にお禮を言ひながら、求職口の駄目だつたことや、田舍新聞の記者などといふそんな職業は寧ろ自分を辱しめるものだといふ口吻を洩した。その十日ほど後に、夕方の散步に出た彼が、夕立ちに降られて慌しく乘り込んだ電車のなかで偶然渚山を見出したが、渚山はその絽の羽織を大切さうに新聞にくるんで懷にたたみ込んで仕まつてあつた、――「濡らしては傷んでしまひますからね」と言ひながら。彼は渚山を益々愛すべき人物のやうに感じながら、渚山の夏羽織といふ話柄をその仲間に提供したものであつた。……その後、仲間のすべてを捨てて田舍の方へ行つてしまつてゐた彼は、無論、渚山ともしばらく逢ふことはなかつたが、再び都會へ舞ひもどつた時に、外の仲間との交友は田舍へ行つたきりそのまま遠ざかつたのに渚山との交りだけは再びつづけられた。といふのは、渚山の方でそれほど繁々と彼の家――この日蔭の家へ遊びに來るからであつた。渚山の生活は、彼が田舍にゐた一年足らずのうちに益々加速度的に惡くなつて行つて居るやうに見えた。その昔、人生の經驗を捜し求めて步いたころに何處かで傳染してゐた病氣の爲めに、渚山の髮の毛はうすくなり、顏色はどす暗くなり、思想は不確になり、物に飽きつぽくなり、體のどこかには絕えず故障があつたやうである。さういふ狀態でその生存を牽きずつて居る渚山の困窮はもとより言ふまでもなかつたが、しかしその渚山もさすがに、二三年以來のやうにいろいろな永つたらしい言ひ譯をしながら小遣錢を彼から借りよ

うとは決してしなかつた。現在の彼の生活を見たら渚山にもそんなことを彼に言ひ出すことの無駄なことは一目して解つた。さうして今は何故の物質的な好意をも豫期せずに渚山は彼のところへそれほど繁繁と遊びに來るのであつた。實に純粹な友情である！――と彼は考へた。

さうしてそれが彼にとつて怖ろしいほど悲しく重重しい心持を感じさせた。渚山は全く渚山自身と同じやうな道を辿らうとしてゐる後進を見て、いかなる他の場所よりも心措きないくつろいだ氣持を、彼の家の空氣のうちに見出したに違ひない。さればこそ渚山は、折にふれては彼に向つて以前よりは一そう飾氣なしに彼にその心持や生活の狀態などを打ち明けるのであつた。しかも今はそれによつて心の慰め以外の何物をもう求めるのではなかつた。二三年前――その交際の當初から渚山を何となく輕んぜずには居られなかつた彼は、今でも心のどこかにその同じ感情を渚山に就いて抱いてゐた。しかもその渚山が心置きない無二の友達として彼に對してゐた。それが自尊心の強い彼にはどうやら堪へがたいものであつた。しかし自尊心を持つてゐるといふことが本來ある人間といふことと果して何の關係があらう。渚山にだつて自尊心がある！　しかし、しかし、俺は渚山とはいくらか違ふ筈だ――と、彼は漠然とさう信じながら、さて考へつづけるのが常であつた――だが何といつても、渚山より外にはいかなる意味からにしろ俺を顧みようといふ友達は――逢つて多少なりとも藝術なり人生なりを語らうとしてくれる人は無いではないか。いや、あるかも知れない。しかし人人は何れも各自身の仕事に熱中してゐる。而も、それこそ最も當然な事である。それ故に俺の友達は渚山ひとり――いやもう一人ある……

彼の持つてゐたもう一人の友、それは或る古本屋の小僧であつた。この二十ぐらゐの青年は、或る日、彼が小遣錢を得ようと思つて偶然つれて來た小僧であつたが、この青年は自分の客が賣らうとしてゐるところの嵩ばかりあつて一向値にならない書物や雜誌やらが悉く文學書類であるのを見てとつて、それをいくらか高價――と言つたところで總額にしてせいぜい二圓八十錢だつた――に買ひ入れた上で、彼に向つて藝術や人生や哲學などのさまざまな話を持ち出すのであつた。ベルグソンの哲學を知つてゐるかと言つた。彼がそれに就て何の知識もないことを知ると、小僧は彼のためにそれの概論を述べて聞かせた。しかしその説くところは彼には少しも解らなかつた――しかもそれが出鱈目を言はれてゐるせゐであるのかそれとも彼の頭がそれを理解する力を失つてゐるためであつたか、彼にもどうやらそれの判斷もつき兼ねながら、この小僧が得意さうに説明するところを默つて聽いてゐるより外はなかつた。彼のこの態度のなかに何か滿足を見出すところがあつたと見えるこの小僧は、その後一週間ほどして又彼の家へ這入つて來た。それから二三度、店の使の道草を喰つては彼を訪ねて、タゴオルであるとか、ベルグソンであるとかそんな名前を口にしては最初の時と同じやうに彼を妙に壓迫するのであつた。さうして時たまには讀んで見るやうにとすすめて讀書界で流行する書物を持つて來て貸してくれるのであつた。

「私だつてこんな古本屋の小僧などをしてゐたくは無いのです。書いて見たいと思ふことはいくらもあるのですが、何しろ主人の目を偸んでは讀んだり書いたりするのでせう。そのうち何か見て下さい。それにしてもあなたなんか何時も机の前に坐つて居られるのを見ると羨しいですなあ」小僧はそんなことをも言ふのであつた。

藝術に對して本能的な愛情を抱いてゐる彼はたとひ洛山なりこの古本屋の小僧なりをいかに輕蔑しながらも、その道の話題になるとやはり熱中した態度になつて何かしらその場かぎりの考へでも、やはり述べずには居られなかつた。さうして彼等が歸つて行つた後では、意味もなく彼の自尊心が傷けられたのを感じてさびしいうつろな心を感じた。しかもそれでゐながら、いつも繋いで置く犬の爲めに、犬を牽いて散歩にでも出かけてゐる時、ふと誰もゐない留守の家へ、誰か――金錢の話以外の題目を持つた彼等、と言つたところが洛山とあの古本屋の小僧とより外には誰もないが、その二人のうちの誰かが訪ねて來はしないだらうかと思ふと、急に家へ歸つて見る氣持になりさへもするのであつた。

藝術といふものは實に不思議なものである。世のなかにこれほど不思議なものは先づ滅多にはない。さうしてこれを說かうにも、それを譬へるべくこれに相當する何物も外には先づ見當らないと言つていい。假りに、人間の誰しもが重かれ輕かれそれに惱まされないでは居られないあの不思議な熱情――戀愛の感情にこれをくらべて見ようか。その情熱は正しく、互に似通うた相近いものであるかも知れない。けれども、普通、戀に酬いられなかつた若者はどうかするとその戀人を憎惡をもつて思ひ起さないとは限らない――時を經ていづれは懷しさに變つて行くとも、それを忘れる爲めには少くとも一時は多少の憎惡であるとか怨恨であるとか乃至は輕侮であるとか何れさういふ種類の或る感情を以て、その憧憬の標的であるところの戀人を見返すのが普通である。これに反して藝術家が藝術に對する場合には、たとひ彼が藝術のためにどんな世間的の苦境に置かれようとも、すべてを藝術の名によつて喜んで受け或は誇として、彼が藝術のやうなものをどうして愛するやうになつたらうと言つて藝術そのものを憎んだり輕んじたり疎じたりするやうなことは決してない。但、己の天分の薄いことや或は自分が時代に合はないことをただただ感じて、自ら挫けながら而も藝術に對する熱愛は益々怪しく深くなつて行くのである。それは既に信仰歸依の一種である。而も「神は與へ神は奪り給ふ」と叫んだヨブ程の信仰だとも言へるかも知れない。宗教の場合には餘程深い信徒でもなくては決してかうはあり得ないであらうと思へるところのものを、藝術の場合ではその仕事に携らうと志した者の殆んどすべてが、彼ら自ら別に何の努めるところなしにこの心持をひとりでに抱くものである。勿論、彼らとても藝術をつまらないと考へることはある。しかしその時間は彼にあつてはすべての人生そのものがつまらないのである。藝術を捨ててどこに行かうにも、人生のうちには彼の行くところは全くない。それは一時、神を疑つて惡魔にひれ伏さうかと思ひ惱むかも知れない信仰者のものとは少し趣が違つてゐる。――これ等のことはこの正體の知れない魅き物たる藝術に魅せられた人、藝術家の本能を持つて生れて來た人以外の者にはいかに說明しようとも結局不可解なことである。

かういふえたいの知れない心を抱いてゐる息子を持つた父が、その息子に對して採る手段といふものは多くの場合何れも同じ順序である。普通この父と子とは互に相手に向つて不滿を感じながら、しかも親は愛するが故に遂には敗けて、風變りな息子を持つた自分の不幸を歎きながら、しかしもうあきらめて子のするがままに任すものである。彼――この話の中心人物であ

る彼も、やはり、さういふ風にして自分の道を撰んで來たのである。彼の父は田舍の町で開業してゐる醫者であつた。その祖父も亦、醫者であつた。さういふ風に何代か醫者をして來た彼の家では、父は總領息子である彼をやはり醫者にしたいと思つて居た。しかし幼い彼の性情を看て取つて、北海道にちよつとした開墾地を所有してゐた彼の父は彼をどこかの農科大學へでも入れてゆくゆくはその開墾地の管理でもさせたいと考へ直した。父はその子を材料にしてさまざまな希望ある空想をめぐらしてゐるうちに、その子は勝手に大きくなつて何時どんな人からの影響といふことも無しに詩歌集や小說類に讀み耽つて志を文學に寄せてゐるのを知つた時、さういふ事に就て全くの無理解でない父は子の望みのままにそれを許さなければならなかつた。この點では、さういふ理解のある父をもつた彼は、普通の文學少年よりは遙に幸福ではあつた。しかし何時如何なる場合にも「父と子」とは「父と子」であることを忘れてはならない。父は彼に向つて文學といふ學問を許したのであり、學者たることを要求したのである。決して藝術家なるものを認めたのではなかつた。しかし學者にならうといふ考への寸毫もない―學者と藝術家とは自ら別のものだと信じてゐる彼は官立の學校を希望してゐる父の意向を裏切つてほんの申し譯に氣樂さうな私立學校へ這入り、それならばせめてはそこをでも卒業してくれればと思つてゐる父母の心をもう一度無視して、何時の間にかもうその學校も半途で廢學してゐた。その代りには家庭には何の相談もなく一人の、家庭の人たちに取つては全く見知らないやうな女を妻にしてゐるのであつた。しかも彼の父母にとつては、彼がどんな方法かで何事かを努力してゐるものと認めてやるべき材料は、今はもう何もなかつた。彼の母は、その夫の友達の息子たちが夏休みになるとそれぞれの學校から歸省して、或者は某の醫學校を來年卒業するとか、或はもう大學の二年とか三年とかになつたとか、或者は來年は醫學士になつて歸るだらうとか、さういふ話が自づと耳に這入つてくるのを苦にしながら、彼のやうなのらくらな息子を生んだことを夫に向つて恥ぢるばかりである。――折にふれて金の無心に遠く歸つて來た彼に向つて彼の母はそんな事をよくくどくどと言ひ出すのであつた。父はさすがにそんなことは一言も言ひはしなかつた。その代りもつと理に協つたそれ故手ひどい事を言つた―

―例へば、「お前は昔から個人主義者だと言ひもしてゐる。又そのやうに振舞つて來てゐる。何時、家庭の一員としてどんなことを家庭の爲めにした事があるか。自分の便宜の時にだけ家庭をたよるといふのは理由が成り立つ事だらうか。……和洋折衷といふことがあるが、お前のはまるでそれだな。西洋流の個人主義と日本流の家族主義とを自分の便宜に應じて折衷するのだ」と、そんな風に、一流の苦い諧謔を弄することもあつた。又、「お前は私にはろくろく相談もせずに妻を娶つたのだ。その時だつて私は一たいどうして妻子を養つて行くつもりだと尋ねてやつた。お前はそれには何とも返事はして來なかつた。私はお前にはお前の分別があるものと思つてゐた。私は未だ獨立するだけの力のない子を養ふのは父の義務と思ふからお前の爲めには金をやつてゐる。しかし自分で口を糊することも出來ないものが勝手に娶つた妻をまで養ふ義務は感じないのである。しかしそんなことを言つて他家の娘を干乾にさせて置かうといふのではない。なるほど夫婦二人では、私がお前に月月送るだけではやつとの暮しで、何の人間らしい生活も出來ないかも知れない。しかし二十五圓の月給を貰つてゐる巡査

でも妻子を養育して生活してゐるぢやないか。

私がお前に送るのは少いけれども巡査の月給よりは多からう。誰だつて汗水をたらして生活をしてゐるのだ。それが人間の暮しの常といふものだ。お前はただのらくらとして、何の仕事をしてゐるのだ。たとひお前が何かをしてゐるとしたところで、それが値打のあることかどうか藝術なり文學なりのことを知らない私には一切解らない。これが若し學校にでも通つてゐるといふのなら學業の成績なり進級なりによつて、私はそれでお前が何か進歩してゐるといふことを認めることも出來ようし、或はまたお前が若し何かの仕事をでもして世に問うてそれが識者に認められでもしたらば、それは又その時でも私もその識者を通してお前の才能を信用するといふ方法もあらう。私はあり餘るやうな金があつてお前たちを好きなやうにさせてやれるやうな身分でもなし、お前の外にはまだ二人も男の子がある。あてにもならないお前にばかり何の爲めに費してゐるかも解らない學資を、お前が望むだけに十分に、それもいつまでといふ制限もなくやつてゐるようなものなら、あとの若しかすると有望かも知れないお前の弟たちに對して、私が心ゆくままのことをしてやれないことになるではないか。お前は自分で自分の才能に信頼して自分の道を選んで貧乏などは平氣な筈ぢやないか。もし又文學で身を立てられないなら、電車の車掌なり巡査なり、お前にだつてなれるものはいくらもあるぢやないか。なるほど、そんな事をお前がするのは家庭としてもお前自身としても名譽なことではないに決つてゐる。しかし全くの白痴でも氣違ひでもない男が何の仕事もせず、それを又私たちが別に鞭撻しようともせずにゐるとすれば、お前が身分の低い職業をするよりはその方がもつと恥づべき事だ。世間にも申しわけのない事だ」父は彼に向つてさう言ひ置いて、それから座にゐた母に對つて、「この事は、お前にも聞いて置いて貰ひたいものだ。世間體が惡いなどと思つて私に内緒で金をやつたりなどしてはならん。舐犢の愛といふ言葉があるが、それはお前のやうなのを言ふのだ。何かにつけて親牛が無暗と仔牛を舐めて可愛がる――それより外に可愛がり方があるのを知らないのだね」教養ある健全な人である彼の父の言ひ分は、いつも一つ一つ尤もであつた。「二十五までは、學校に通つてゐてもそれぐらゐの年まではかかるのだから、二十五までは、お前が學校へ行つてゐるものと見做して、私も今までどほり月月の金は送らう。しかしその以後に決して私を手頼つて貰つては困る。私もお前には一切手頼りはしない。……私はお前の薄志弱行が面憎いのだ。論語に、「女今畫」とある――自分の力を自分で見切りをつけてゐることだ。お前のやうな男が孔子のお弟子にもゐたと見える。大勇猛心といふものが欲しいものだね」さういふふうに彼の父が言つた。彼の母は又、或る時「何ごともお前自身の心がらだから」とも言つた。

その彼の二十五はこの正月が來てもう後れてしまつたのである。

彼の妻や妻の母などは、こんなに困窮してゐるのに彼がどうして彼の父から金を貰はうとしないのだらうかと、それを寧ろ訝しく思つてゐる。さういふ意味のことを時折に言葉の端に洩しもする。しかし彼として見れば、實際もう今になつては父母から金を貰ふ理由は成り立たない……單に親子だからといふわけでいつも無心を言へたものではない。それに彼を一度困窮のどん底へ置いて見たらば……と意を決してゐる彼の父は、今の場合もう決して金などをくれる筈のないことは解つてゐる。一たい彼自身のなかにそれほど備へてゐもしないくせに、而も父

母の方でけ無限に持つてゐてくれさうなその情愛をいい事にしてそれに縋らうとすることは、彼の考へでは不合理でもあり従つて又一種重大な不徳義にも感ぜられた。父が彼の才能に何かまだ信頼のやうなものを置いてゐる間こそ彼は父を自分の藝術上の保護者とも思つて甘えることも出來るけれども、既に彼の父は才能を見放してしまひ、それ以上の事には彼自身が早くもう自分自身の才能を信じられさうにも無くなつてゐる今日、詐欺師でない以上は誰がそんな不渡手形を切出して金を要求出來るものではない。

煙草の煙や、その吸殻を火のなかへくべて燃した煙などの爲めに部屋のなかが濛となつてゐるのに氣づきながらも、若しどこかを明ければ寒い風が吹き込むので、おつと火鉢のそばにそれを氣にしながらもしやがんで、彼は自分の頭のなかも正しくこの部屋のやうに侘びしさや味氣なさで濛としてゐるのを感じた。自ら憐れむやうな、自ら蔑すむやうな、又何事ともしれない――多分それをしつかりとつきつめて行けば生れて來たことそのことをかも知れない事を悔ゆるやうな氣持や、さては何者に向つてともなく反抗しなければならないやうな、それよりはすべてをせせら笑つて仕舞ふやうな、しかし唯それだけでは決して氣の安まらないいらいらしさや、さうしてそんな彼自身の心境こそは哀れむべき人間のものであることは疑へないといふやうな反省や、そんなさまざまな心持――しかもそれも激しい活氣のあるものではなく、譬へて見ればたそがれの市街の景物のやうに淡くどす黒くごたごたと彼の心のなかを去來してゐるのを彼はただ手を束ねて凝視した。かうして精神の衰弱してゐる彼は、いつも自分の精神狀態の自脈を取つてゐるのである。さうして自分以外の人間のことは、妻のことでさへ別だんに何も考へる閑はなかつた。それでゐて、氣まぐれに、俺にだつて何の才能もないとは限らない、何か短いものでも書いて見ようかと、そんな事を考へてゐると、すると、現實生活とは些かのかかはりもないやうな荒唐無稽なこと――例へば、或る王様のところへ大變身の輕い舞踏に長けた少女を献じた者があつた。その少女はあまりに身が輕すぎて夜眠つてゐる間などには飛んで仕舞ふおそれがあつた。そこでその少女の足や手をしつかりと鎖でつないで、それでもまだ心もとないから、毎日の夕方王宮の庭中にその日咲いた花を摘み集めて、その花の息で少女の部屋の空氣を重くした。それから……とか、――或は、月夜に散歩してゐると見なれない洞窟があつた。興に乘じてそこに這入つて行くと洞窟のなかは外よりも反つて明くてそこには一人の支那少女が遊んでゐた。しきりに物を食べてゐたから蓮の實だらうと思つてよく見ると、それは繭であつた。繭を指であざやかに二つに破き開くとそのなかの蟲を食べてゐる……とか、そんな全く意味のないことを二三枚書いては、こんなものが何だと自分を叱りながらその書きかけを裂いて丸めてしまつた。さうして自分の空想のなかには、全く不健實極まる或るものがあるのを厭はしく思ふと、たとひそれが十分間であつてもそんなことを面白いと感じた自分が恥しくなつた。自分にはどうして貧乏だとか情愛だとかその外さまざまな世相なり人情なり乃至は思想なりが、他の人人のやうに力強く響いて來ないのであらう。それは生活そのものが惡いからだ、どういふふうに惡いのか、……だがこれよりはどうも仕方がないから、……大勇猛心がないから。……それからそれへともう一度またさまざまな問題を循環的に考へ直し

て、終には考へることが何になるか！　と、自分自身のなかでやけに叫んで、何とも言へないヘルプレスな心になつて來た。このやうなさまざまな彼の物思ひの間にはいつも江森渚山の影がちらちらと出沒するのを彼は感じた。

毎日、決して實になることのないそれらの雜多な考をあら方一とほり考へるとか、或はそれらのうちの一つについて迷宮を辿るやうに考へ耽つて、彼の頭が全く疲勞し切つた頃になつて、夜が更けたから人通りの全く杜絕えたこの淋しい裏町に或る下駄の音が凍てついてゐる地上に冴え返つて彼の耳に響いてくると、裏の狹い庭に繫がれてゐる二疋の犬も、その足音を聞きつけて聞き判けると見えて、頸の鎖をぢやらんぢやらん音させながら柔かに短く吠えたり、クンクンと鼻を鳴せたりするのに對して、家の外からは下手なとぎれとぎれな口笛が吹かれる。やがて彼の家の表戸が威勢よく開いて、

「レオや！　フラテ！　フラテ！」

と、きつとさう二疋の犬の名を呼びつづけながら戸閉りしてゐるのであつた。彼の妻が歸つて來たのである。

寒い風に吹かれた頰を赤くしながら、この快活な若い女は、活潑に長火鉢の向うへ來てしやがんで、黑い手袋のままで手を火に翳しはするけれども、別だんに寒いなどとは言はずに、直ぐに何か今日、外で――電車のなかや樂屋などで起つた愚にもつかない話を一つ二つ騷騷しい早口にしやべつて笑つてしまふと、それから、掌の上まで長く垂れてゐた白い長い襟卷やら手袋やらをすつかり取り外してしまつて、片手をのばして背後の障子を開けて置いてから、湯のたぎつてゐる銅壺をつまみ上げるとそれを臺所へ持つて行つた。臺所の片わきに或る時にはその茶の間の片隅に無性に押しのけてあるよごれた食卓を手早く處置して、そのよごれてゐた茶碗を洗つて仕舞ふと、それを再び茶の間へ運んで來た。彼の女は彼に、犬に御飯をやつたかどうかを聞いてから未だだつたら、再び庭へ下りて行つて先づ犬たちに食物を與へて置いて、彼等はそれから夜食をするのであつた。しかも夜食が濟むともう一度それらのよごれた食器を洗つて翌朝の用意をしてゐることがあつた。――彼は、人一ばい無性なさうして寒がりな彼は、自分の妻が、一日中兎も角も働いて來たその女がこんなに事もなげに物事を手早くしてのけるのを呆氣に取られるとでもいふやうに見ながら、かうして夜遲く歸つて來て、そればかりか甲斐甲斐しくそれらのことをやつてのける彼の女をつくづくと見てゐると、彼もさすがにいたいけな心持を抱かずにはゐられなかつた。しかし、小言ならばてきぱきと理詰めにいつまででも言ふことがあつても、そのやうな感情を表白する情愛な言葉の持ち合せは彼にはどういふものか決して易易と口から出て來なかつた。つとめてそんなことを言ふのは彼のやうな性格には何となく不快なことであつた。さうして彼はいつも一言も彼の女をいたはるやうな言葉を言つた事はなかつた。さうしてどちらかと言へばやはり苦い氣むつかしい表情をして、このよくはしやぐ、言葉數の多い妻を興味もなささうに聞き流すことが多かつた。さうかと思ふと彼自身が彼の女よりももつとはしやいで談笑しかけることも時折にはあつた。しかしそんなことがたとひどちらであつたとしても、そんなことには割合に無神經な、又この三年間の同棲で自然と夫の氣まぐれな性質を呑み込んでしまつてゐる彼の女は、夫が別だんに理由があつて不興なのではないと思つてゐるらしかつた。

いかにも、彼には何を不興がるといふ理由も

なかつた。しかし彼自身にも當分は解釋出來なかつたやうな或る奇妙な鬱憂があつた。それは夜更けになつてからして歸つて來た後の元氣のいい妻に對する時や、また朝朝、彼の女がこつそりと身支度をしてなるべく夫の目を覺さないやうに心がけながらいそ〳〵と出かけて行くのを、その少しのもの音にも目を覺す彼が寢呆けた目でぼんやりと見る時や、或はまた不眠な夜毎にその傍で心地よさうにぐつすりと寢入つてゐる妻を見る時などは、屢ふとその氣分に襲はれるのであつた。それは彼が今までに味つたことのあるさまざまな感情のなかでは最も嫉妬の感情に近かつた。しかしそれは普通の嫉妬ではなかつた――彼が彼の女に關してそんなことを空想して見たことは未だ一度もなかつた。しかもその嫉妬に似た或る感情が日毎に少しづつ募つて來た時、その理由らしいものがぼつぼつと彼自身にわかつて來たやうに思へた。それはやはり或る嫉みであつたと彼に解つた。それはすべき仕事乃至職業を持つてゐる人間、その人間が樂しげにその仕事に熱中してゐるのを見る時に、その傍にある何もすることのない人間、何をしていいか解らない人間、何も出來さうにない人間の抱く嫉み――言ひ換へれば生活をしてゐる人間に對する生活のない人間の嫉みではなからうか。彼は自分で自分に言つた……

「俺はかうしてゐるのが樂しくつてのらくらしてゐるのぢやない。俺にはすることがないのだ。俺が樂しんで出來るやうなことが何もないのだ。樂しんでではなくともいい。無理にでも、俺のするやうな職業は一つもないのだ。俺は今までにも幾度か會社員にでも新聞記者にでもその他の何にでもならうと思つたではないか……」事實、彼は時時知り合ひの先輩や友人などにその事を相談して見たことがあつたけれど、誰一人として彼のその相談を眞に受ける人はなかつた。いや、眞に受けたにしても正直な人は「駄目だよ。君に何が務まるものか」と言つた。さう言はれて見ると、彼はなるほど自分は駄目だらうと思つた。露骨にさう言はなかつた人は「君はやはり生れながらの藝術家だから……」と、さう言つてとり合はなかつた。すると、彼はなるほど俺は生れながらの藝術家だから、と思はないでもなかつた。――一日の職業によつて疲れて、それ故に深く眠ることの出來る嫉ましい妻の傍にあつて生きても居なければ死んでもゐない又目を覺してもゐなければ眠つてゐない彼、譬へば「重量と容積とのある影」そのもののやうな彼は、とりとめのない考へで鈍い自己反省をするのであつた。

――……さういふわけで、僕はこのごろつくづく職業が欲しくなつて來てゐるのです。何でもいいのです。何でもやつて見るつもりなのです。ニイチェだつたか誰だつたか、職業は生活の脊髓だ――と何でもそんなことを言つた人があるさうだが、さうすると僕などはさしあたりくらげのやうな人間ですね。僕も一つ、何でもいいから職業を見つけて、自分の生活をその職業に順應するやうに改造したいものだと思ふのです。たとひその職業が藝術に何の關係もないもので、例へば銀行員といふやうなものですね――さう、一そうそんなものの方が反つていいのだ。朝の九時にはちやんと出勤して夕方の四時にはきちんと歸つて來るといふやうな、なるべくそんな規律のある生活がいいのです。で、そんな我我としては途方もない職業に努力をして見て、そのために僕の生活がすつかり調和がとれそれに慣れ切つてしまつて、その結果もう小說を書かうなどと考へることなどが莫迦莫迦しい空想に思へてならなくなつてしまつた

としたら、その時はそれでも結構だ。つまり僕はさういふ節にかかつて藝術家といふものから、落伍した事になるだけです。落伍するものなら、さまざまな節のうちのなるべく早いうちの奴でふるひ落された方が、結局はいいのですからね。――ともかくも今のままではあまり生活が氾濫しきつてゐますからね。こんなふうにしてゐれば今に、精神も肉體も一緒に駄目になつてしまふことは……」

或る時、折から訪ねて來てゐた渚山をつかまへて、彼は、まるでこの人に向つて求職口を哀願してでも居るかのやうな熱心でこんなことを言ひ出した。さうして「こんなふうにしてゐれば今に、精神も肉體も一緒に駄目にしてしまふことは……」と彼がさう言ひかけた時に、これを聞かされてゐる相手が渚山であつたことにふと氣がつくと、そんなことを今更にこの渚山の前で話し出すといふことは、氣のいい渚山がたとひそれをどう無神經に聞き流してゐるにしたところで、あまりに心ないわざのやうに彼には思へた。同時に又、渚山などを相手にして自分の憂悶を眞面目に打開けさうになつてゐるこのみじめな自分自身が腹立しくもなつて來た。そこで彼は、今のさつきの沁み沁みとした口調を一變した。わざと輕佻にさうして自嘲するやうに――

「……と言つたところで、どこへ行つたら僕を雇ふだらう。尤もたつた一ヶ所はありさうなのだ――」

「ほう。それは又どういふ所です」今まであまり氣のなささうな受答へをしてゐた渚山は急に好奇心を動かしたらしく言葉を挾んだ。

「なに、それがね、新劇座の背景の手つだひなのだ。ふ、ふ。女房が新劇座へ這入つた時に、序に僕にも何か仕事がないか、座長の大川秋帆に頼んだのださうです。秋帆は僕が道樂に繪を描くのを知つてゐたと見えて、背景の手つだひはどうだと言つたさうです。なるほど邪劇の臺本を書くよりはこの方が才能のいらない事ですからね。樂なことだし毎日の仕事ではなし、なぐさみにやつて見たら小遣錢ぐらゐにはなるだらう――さう言つて女房まで勸めたものです。その當座ね。だが僕はやつぱり悟りが開けてゐなかつたものだから、女房は下つ端の女優、亭主は背景の手つだひをして、夫婦揃つて大川秋帆の家來にはいくら何だつてなりたくはないと思つて居たのです。ところが今となつては問題はその程度ぢやない。――成程、小遣錢も欲しいには欲しいが、それよりはかうして毎日ぢつとしてゐるのが退屈でやりきれない。場末の小屋の背景描きになつてそれに順應するやうな生活を始めた日には、それこそ生活の改革どころか改惡になるかも知れたものぢやない――いや、今のこの生活より惡いものと言つては先づ無ささうだが、さうすれば結局今と同じ程度のことかも知れないが、僕はそれでもいいと思ふ。僕の欲するのは生活の改革だが、それが出來なけやせめては轉換だけでもいい。で、僕はこの間そんなつもりで今度は僕の方から背景描きの志願を秋帆に取次いでくれるやうに女房に頼んだのです。すると今度は女房の方でそんな馬鹿なことはしないがいいと言つて取り合ひさうにはないのです」

「それやマダムにして見れや、あなたが本當にそんなことをしさうな氣勢を示せば、させたくないに決つて居まさ。それよりあなたはやつぱり何か書いて見ちやどうだらう」渚山は一應そんなことを言つてから「――だが、さういふ社會へちよつと這入つて見るのも全く無駄ではなささうですがね」渚山は渚山らしい考へで――人生に於て絶對に尊重すべき經驗の新らしいものとしてのその仕事を、彼に向つて誘引す

るやうな言葉をもつけ加へた。しかしその口吻とても何も別段小劇場の背景描きを事實に於て彼に勸めたのではなく、單にそれを話のつぎ穗にして、洛山は例によつて未だ書かずにゐる或る小説の筋書を一つ、ここで彼に披露する機會を得たかつたのだといふことは、洛山が再び口を開いた時に直ぐわかつた――

「私は一つ、やはりさういふ不遇な藝術家に就てのエピソオドを考へて置いてあるのですがね」――その洛山の話といふのは或る青年畫家が淺草でパノラマ描きになつてゐるといふ話である。眞夏の眞晝に或る畫家が高い足場の上で仕事をしてゐたのが、眩しい光線と蒸せるやうな暑さやペンキの臭ひにでも當てられたのか、突然目まひがしてその高いところから墜落して氣絶した。そのまま動けなくなつたから、別の畫家がそのつづきを塗らうとしてその高い足場へ上つて行つたが、その時、二番目の畫家は、前の男が皆がいやがるその高い部分をいつも好んで描いてゐた理由――さうして多分はその爲めに足を踏み外したらうとも思へる理由を發見した。といふのはその高い足場から見下すことの出來る視野のうちに、極く近い私娼窟の一室のありさまが開け放した窓の中に露骨に展開してゐたからである。――洛山はさう筋を述べてからいつものやうにそれに就て、自分で自作の註釋をし初めるのであつた。――しかもまだ一行も書いてはゐない自作の註釋をし初めるのであつた。「何、ほんのつまらない筋ですよ。何しろもう十年以上も前に企てたものですからね。尤も、無論いくらかはそれに似た事實によつてヒントを得たものです。え、當時私はゾラなどのやうなものを心掛けてゐたので、つまり何です――自然主義でありながら筋の面白さもあるといふ作風です。で、私はその時、淺草ばかりを取材にして『淺草』といふ小説を書かうと企ててゐたのです。一つ一つが獨立した短篇で、その短篇が十二三篇も集つて、一つの長篇になるといふつもりだつたのです。――さうさう、三四ケ月前に私が『殉教』に書いた小説『およね』といふのを讀んで下さいましたか。いや、どうも冷汗が出ますが、あれもやはりその、『淺草』シリイズの一つなのです。ほう。あんな恥を知らないことまで書いてしまつて……」

或る同人雜誌にお情けで採用してもらつたその『およね』とかいふ作品は、何でも洛山自身の經驗を、どうやらそのまま書いてゐるらしかつた。さうしてこの氣の利かない男が昔はどんなことをしてゐたかといふ事に就て多少の興味を抱かないではない彼は、その『およね』の筋は聞いて見たいと思つたが、さきに洛山が「あれを讀んでくれたか」と言つた時に彼はその時はこの上にもう一つ洛山の小説の筋を聞かせられては……と、うつかりいい加減にもそれを讀んだやうなことを言つて仕舞つてゐた。それ故、『およね』が全く洛山の自敍傳の一節で、且つそれは自信のある作品だといふ口吻で洛山がそれに就て、例の謙遜な口調でではあつたが改めて長廣舌を振ひ出した時には、彼はうつかりちぐはぐな返事をしてはならない爲めに、ただ當り觸りのない返事をするより外には仕方がなかつた。

それにしても洛山は――と、彼は洛山の語るところを聞くやうに裝ひながら、心ではひとりで考へるところであつた。それにしても洛山は全くの才能無い人とはどうしても思へない。いや、大した才能はないかも知れない。しかしもつともつと無能な男でありながら一時の風潮に乘じて、他人からも自分自身でも一通りの作家のやうに成り切つてゐる人間の例はいくらでもあるのに……彼はそんなことを思ひながら、炬燵のなかに味氣なく相對してゐるこの年長の

女――この小男の平べつたい特色のない顏、――それはもう青年のものではない顏を、電燈のまだともらない夕闇のうす暗さを透してしみじみと見守つた。――さて、ほんの幾分かの間、彼は自分自身の事(!)を忘れて居た。

もう春になつたやうに温かな日であつた。それが彼を勇氣づけた。こんな日が十日もつづけばいくらか助かるやうな氣持さへする。しかしこれはもとより季節はづれの温かさで、だからこんな日に出かけなければ、と彼は決心をした。しかしいざ出かけるとなつて見ると、外套を着て見たり脱いで見たりさまざまに思ひ惑ふのであつた。もう五年越の古外套は襟が垢だらけで、それぼかりか裾が擦れてゐる。今日のやうな日ならば外套を着なくともをかしくはない。けれどもさてその外套を脱いで見たところで一枚看板の銘仙は皺だらけで羽織の襟などはよれよれになつてゐる。それを見ると、もう外へ出かける氣勢までが挫けさうになる。彼は、この温さに空さへも春らしく紫ぽくなつてゐるのを窓から見上げながら、ふと十五年も昔、學校の師匠が古くなつたと様にせがんで父にひどく叱られたことのあつたのを思ひ出した――

――士志道而恥惡衣惡食者未足與議也」

そんな言葉を父が教へたのはあの時であつた。その言葉も本當ではあるが、あまり見すぼらしい身装をしてゐては心まで卑屈になり歩き方だつてたどたどしくなるではないか。それに彼はもう、道に・――藝術の道に志してゐるといふやうな矜持をもどうやら失ひかかつてゐた。さうして今は一介の求職者として出かけようとしてゐるのである。然うだ、「諸士の夏羽織」だ。そりや全くほんとうだ。それにしても、外套を着てみようと脱いでみようとその見じめな程度は同じだとすれば、もうどちらでもいいと思ふより仕方がない。

彼は外套を手に持つたままで歩いた。――といふのはこの古外套は表より裏の方がまだしもましで、持ち方の工夫をすればどうやら破れたところよごれたところなど、見えないで済みさうだつたからである。

……それにしても、大川秋帆とはどんな風に口を利いたものであらう。全く識らないといふ間柄ではなく、と言つて識つてゐるといふ程でもなく、それにもう五六年以上も逢つたことはない。――この頃、新らしい風潮の演劇が流行し出した光に乗じて、やゝ名の知れ出した大川秋帆が、その才気ともう一つにはその情婦たる若艶ある一女優の一代の人気とで、秋帆の成金的成功は素晴らしいものであつた。さうして秋帆はその一座である男女の俳優たちを引具して意氣揚々、諸所のカフェーへ、現はれて人々の注目を集めてゐたものであつた。秋帆と彼とは、その頃のカフェーの友、とでも言つたらいいだらうか――その頃彼はまた學校にゐたから、さうしてその貧弱な私立大學のなまけ者ぞろひの學生たちは、學校を唯その勢揃ひの場所として、殆んど毎日、さうして一日中そこかしこのカフェーに出入してゐたものであつた。彼等は金のある間はそれぞれに單獨行動をとつた。金がなくなると皆して金を集め合つては[illegible]をして、一杯のコーヒーを註文してそんな場所で數時間もしやべりくたびれて悲しくなつてゐることが多かつた。…さうして秋帆の芝居にはもとより、それが當時學生上りの座の新派、なるものの興行でさへあればどの芝居へでも、劇團的の木戸御免で押入つては、もとより芝居などを見るではなく、ただ劇場の廊下をさも自分たちの縄張りうちとでもいふやうな顔つきで、うろうろしてゐたものであつた。その頃の彼の仲間の或る者

はもうとつくに一人前の文士になつて文壇に現はれ出てゐる。或る者は洋行をしてゐる。せいぜい思はしくない人人でも學校の先生にはなつてゐる。さうして彼ひとりは、取殘された者のやうにそのうちの誰とももう交りつづけてゐる者はない——。かつてはさういふ仲間の一人であつた彼と秋帆とは、さういふ顏馴染としていつも會釋をし合つたり、或は時たまに同じテーブルに來合つて坐るやうな事があると、それぞれに至極呑氣さうな無駄口を取交したものである。そのやうな間柄である秋帆のところへ彼が、偶偶やはり同じ新劇壇の女優を妻にして、その女が秋帆の一座に使はれるやうになつたといふ關係を新たにたどつてではあつたが、それにしてもその秋帆に向つて、仕事もあらうのに背景描きの手傳ひをさせてくれと頼みに行くのは、人並より多分に見え坊らしい彼にとつては、言ふまでもなく決して愉快なことではなかつた。妻がそんなことを取り合はないからしてかうして自分で出かけて行くのではあるが、彼の妻がそれを取り合はないといふのも尤もだと言はざるを得ない。どうぞ秋帆の方で氣を利かして彼にあんまり恥しい氣持をさせないでくれればいいが……。

そんなさまざまなことを、或はその頃の友達のことを、さては自然と彼が妻と知り合ひになつた當時のことやら……、彼はそれらを歩きながらも、電車のなかででも考へつづけた。さうして新劇座が近づいて來た時に、妻が居る樂屋へ夫である彼が用事を持つことは言へたづねて行くといふことに、彼は妙なひけを感じた。

彼が自分で、「それも今日突然、秋帆を訪ねて行かうなど」と妻には一言も言つては置かなかつただけに、かの女はきつと愕くであらう。實際、それほど切實に生活の現狀から退却したがつてゐる彼、その爲めには敢て背景描きの手傳ひをでもしようといふ心持になつてゐる彼を、かの女は了解しなかつたであらう。いや、おそらくは外の何人もやはり了解しないであらう。さうしてすべての人は彼の妻とともにそれを、せいぜい彼の物好きな氣まぐれぐらゐに思ふかも知れない。さう言へば、確に物好きの氣まぐれも半分ぐらゐはあつた。しかし彼自身ほどこまでも眞面目なつもりであつた。彼のやうな人物にとつては氣まぐれと眞面目とがいつも互に解き放し難いほど複雜にもつれ合つてゐるものである——それが所謂ロマンティケルといふものの通有性癖ではなからうか。さうしてロマンティケルは彼自身いつも自分の眞面目な方面ばかり信ずるし、しかし世間はいつも彼の氣まぐれの方ばかりを見てゐる。——彼は、いつもの癖として、かういふふうに自分自身の事も恰も作者が小說の主人公に就て考察する時のやうに考へながら、歩くたびに埃の舞ひあがる自分の足もとを見つめて、樂屋の階段を二階へ昇つて行つた。

扉を引くとなかは眩しいほど明るかつた。今まで彼の通つて來たところがうす暗かつた上に、この六疊ほどの部屋には一面の中窓から差し込む日光が疊の上にあふれて、その疊の上の日光が窓の下に並べてある四つの鏡臺へ反映して、その鏡の一つからの反射が、扉をあけた拍子に彼の目にあたつて居たからであつた。彼は目ばたきをして、目を伏せてから言つた——

「瀨川瑠璃子は居ませんか」

今まで人の這入つて來たけはひにも別だん氣にもかけずに喋りつづけてゐた女どもは、一齊にふり返つた。さうしてそのなかの一番年かさで一番美しくない女が、喉を惡くしてゐるやうな聲で、誰だと彼を咎めた時に、

「うちの者です」

さう、彼は慍つたやうに答へた。三人の女は

無遠慮にもう一度彼を見つめたが、そのうちの一人はかの女の隣りに一つ空いてゐた派手なメリンスの座布團――それは瑠璃子のものである座布團を彼にすすめると、そこに寢そべつてゐた一人の男は起き直つてその座布團を彼の方へ引き寄せて彼にすすめた。さうしてその男は立ち上つて扉を開放したままで出て行つた。多分、瑠璃子をどこかへ搜しに行つたらしかつた。

人づき合ひの惡い彼は、三人の初對面の女どものなかへ坐らせられた手持無沙汰に、煙草を吸ひつけてこの亂雜な――赤いものや青いものや、女の衣物をだらしなくそれぞれに脱ぎ捨てたり、壁に吊したり、殆んど丸めたと同じやうに無雜作にたたんだりしたこの部屋のなかを見まはした。女どもも氣むづかしげな彼のためにいくらか窮屈さうにおしやべりをやめて、鏡のなかのかの女自身を見つめながら既に出來上つてゐる舞臺化粧をもう一度直してゐた。

「この部屋はよく日が當つていいですねえ」

彼は不意にさう言つた――それはただのお愛想ではなく、久しぶりでそんな日向に坐つた彼が思はず言つたのである。

「え、今日はほんとうに暑いやうですわ」さう答へたさつきの年のふけた女は、そこに一本ころんでゐた煙草を拾つて、彼の前にあつた火鉢へ手を差し延べて火をつけた。しかしこのぎごちない對話はもうそれ以上發展させる必要がなかつた。といふのは、その時、髮を鬘下地に結ひ直して眼尻を長く紅で縁取つた瑠璃子が浴衣の上に樂屋衣を羽織つて、さつきから開け放してあつた扉のところに現はれたからである。

彼はだらしのない姿をした自分の妻を一種險しい目つきで見上げた。かの女はまたかの女で彼が不意に樂屋などへ來たことを訝しがつてゐる樣子であつた。

「用事？」

彼女は扉をしめながら言つた。

「いいや――」

彼は答へた。

「遊びに來たの！」

「いいや。――遊びになんぞ來るものか」

二人の對話がをかしかつたと見えて、三人の女たちは無遠慮に笑つた。彼もかの女も仕方なささうに笑つてから、彼に言つた――

「大川君は今居るかね。ちよつと逢ひたいと思ふのだ。いや、何でもない事だ。――實は、あの事を自分で話して見ようと思ふがね」

「さう？」

彼女はさう言つたきり默つてゐたが、秋帆の部屋を教へると言つて彼を座から立たせた。彼と彼女とは廊下に立つたままで、秋帆にそんなことを今になつて賴んでも無理だとか無駄でもいいとか、二言三言問答をした上で、彼女は秋帆の部屋の入口を指で示しておいたきり、衣裳をつけなければならないと言つて何處かへ行つてしまつた。

彼は彼女が教へた扉を二三度靜かに敲いて見た。最後に少し強く敲いた時、「おう」と言つて答へたのは確に數年前に聞き憶えのある大川秋帆の聲であつた。返事はあつたけれども別に誰もなかから開けてくれさうにもないから、彼はその扉を明けて這入つて行つた。さうして彼が秋帆の顏を一目見た瞬間、これは這入つてはいけなかつたのぢやないかな、とさう思つた。秋帆のそれほどむづかしい目附きは、彼の這入つて來たことを怪しみ咎めてゐるやうであつた。さうしてこの闖入者が彼であつたことを一應認めてからも、秋帆はその敵意あるとでも言ひたい險惡な目附きを改めようともせずに、ただその視線を手を當ててゐた桐の角火鉢のなかへ落して、それから火箸を手にとつて無意味に灰を掻きまはした。

「私です。大川さん」

彼は秋帆が彼を見忘れたのぢやないかと思つたから、さう自分を紹介しようとした。

「ああ。これはよくこそ」

秋帆はかう一種の切口上で應對をして、その火鉢の向うにあつた座布團を顔でもつて彼にすすめた。さうして置いて久濶をでも敍することか、さも迷惑さうなさうして幾分きよとんとした表情を――それでも少しは努めてかくしながら秋帆は、何と言ひ出さうかと戸迷ひしてゐる彼に向つて言つた。

「どういふ御用でお出かけ下さいましたか」

此言葉を聞いた彼は一そう戸迷ひをした。――古い顔馴染としていくらかは心安だてに話が出來るだらうといふ彼の豫想が全く外れてしまつたからであつた。それにしても解らないのは、恰も見知らない犬同士が途上で相會した時のやうな秋帆の彼に對するこの態度であつた。彼はふと秋帆がその情婦の樂屋であるここでその女と密談でもしてゐるところへ自分が這入つて來たのぢやなからうかと思つた。それけこの部屋にはさまざまな器具調度などが善く調へられてゐて、同じ樂屋と言つても今のさつきまで彼がゐたところなどとは自づと異つた空氣がある上に、窓には厚味のある窓かけがすつかり垂れ籠めてゐて、その爲めにこの部屋がしんみり落着いたうす暗さであることからの聯想であつた。しかし扉といつては彼が這入つて來たところより外にはなかつたし、部屋のどこにも外に人のゐるけはひは無い。そこで彼はもう一度考へ直して見た時、秋帆が自分の監下であるいけちな女優の夫が秋帆自身と同輩でもあるやうな顔つきをしてこの部屋へ這入つて來たその事で不愉快に思つてゐるのかも知れないと思つた。さう氣がついた彼は、自分の目の前に結城紬を二枚重ねて納つてゐるこの男を――さうして同時に自分自身をいくらか愚弄するやうな口調で言つた。

「家内がどうもいろいろとお世話になります。それでちよつと御挨拶に上つたのです。」

「はあ。これはどうもわざわざ恐縮で……」

秋帆は口ではそんなことを言つたけれども、その表情には依然として、彼が皮肉にも期待したやうなそんな變化は何もなかつた。

「それに」と彼はつけ加へた。「實は少しお願ひがありますので。外でもありませんが――いつぞや瑠璃子がお願ひをした時、私に背景の手傳ひをさせて見てもいいと仰言つてくれたさうですが……」

「はあ。そんな事ですか。さうですな。それは一」と秋帆は妙に狼狽を示しながら彼の言葉を中途でとつてしまつたきり、しかも自分でもしばらく絶句してから、急に早口で言つた。「さういふ事は一つ御手紙ででも――いや、今一ヶ月ほどして見てから改めて御相談下さるといいですなあ」

この腑に落ちない秋帆は、さう言ひながら立ち上つて、扉から顔を出したと思ふと「田中！　田中！」と大聲で誰かを呼んだ。それから殊にその返事をも待たずに、もう一度「虎公！　虎公！　虎公、居ないか！」と叫んだ。さうして一人の若い男――それは多分秋帆の書生と思へる男がぺこぺこと秋帆の前へ來た時に、秋帆はその男に言つた――「今直ぐにね、……いや、よし。今おれが自分で行くよ」それはどうも秋帆が自分の客を小うるさがつて早く歸らせようとするための言葉らしかつた。果して秋帆は自分は今ちよつと多忙だからと言つて、彼をその部屋から追ひ返した。

家に歸るために彼は、先刻そこに置いて來た外套を取つて來ようと再びあの女優の樂屋へ立ち寄つた。そこには若い女優がたつたひとり、

令嬢風な舞臺衣裳を着飾つたままでしよんぼりと、非常に騒がしく賑やかな眞中にゐる人間がひよつくりさびしさを感じた時のやうな顔をしてぼんやり坐つてゐたが、彼を見ると、瑠璃子は今舞臺にゐると言つた。さうして「少し待つてゐれば部屋へ歸るから、一緒にお辨當でも食べて歸るやうに」瑠璃子が言ひ置いたと聞いた時、その若い女優に、彼は、

「直ぐ歸つたと言つて下さい！」

さうぶつきらぼうに言ひ放つた。さうして彼が暗い階段を下りようとする時に、足もとが突然明るくなつて、彼の頭上にぽつかりと電燈がともつたところであつた――未だ早いとばかり思つてゐたのにもうそんな時刻であつたと見える。

二月に入つてから、渚山は一層足繁く彼の家へ遊びに來た。さういふ點に就ては極く常識的な渚山は、あまり頻繁な訪問が相手を迷惑がらせるであらうことを顧慮して、今までは十日に一度とか一週に一度とか、それぐらゐの時日を措いてからでなければ遊びには來なかつたものが、近ごろになつてから隔日ぐらゐに彼をたづねた。さうして尻を据ゑて話し込むのであつた。氣の小さい渚山は、そんなに度度彼の家へ來ることには、やはりいくらか氣がひけないでもなかつたと見えて、近所の或る私立圖書館へ調べものに通つてゐる序たといふやうな尋ねもしないことを述べて言ひ譯をしたりしたことがあつた。どんな調べものだらうと聞いて見ると、あゝ、ふやな――それ故それ以上聞き返して惡いやうな返事をしたところを考へると、渚山の圖書館通ひは或はほんとうでなかつたのかも知れない。何にせよ、それほど毎日のやうに渚山は彼のところへ入りびたつてゐた。もともと決して性が合つてゐるわけでもない二人は、いつしか話題を無くして沈默がちなことが多かつた。彼は犬の運動にかこつけて渚山を置きつ放しにしたまま、渚山に留守を賴んで犬を牽いて出てしまつたりした。それでゐて渚山が歸りさうにすると、彼は精一杯それを引き留めた。渚山も彼の言ふがままにいつまでも坐り込んでゐた。

或る日、例によつて渚山が夕方に來た。渚山はいつもの炬燵の向うへ坐ると、懷から何かを取り出しながら言つた――「これは」さう言つて懷から出して來た小さな紙包みを開けて、それを彼に渡しながら、「――ごくつまらない物ですが、マダムに上げて下さい」マダムはさういふものに興味を持つてゐられたと思つたので持つて來てみたのですが。それはね、鳩笛といふのです。古くからあるおもちやのやうですな。ええ、弘前の鳩笛といひましてね。そのプリミチブな形にちよつと雅致があると思ひましてね。何、それは東京で手に入れたのです。ええ、神田の或るおもちや屋を覗いてゐると目につきましたから、これや面白いと思つて二つ買つたのです。もつと大きいのとそれと二つね――二つでいくらだとお思ひです、大きいのが六錢、それが四錢です。大きいのは先日岩田氏のところへ行くときにお子さんに上げましたがね、この小さい方が小さいだけに不器用に出來てゐて面白いのです。吹いてごらんなさい。味のある音を出しますから……」

彼は、渚山からの所謂雅致あるこの贈り物――
――その小さな鳥に形どつた泥細工の笛をとつて吹いて見た。

「どうです、おもしろい音でせう」と渚山が言つた。「ちよつとから幻想的とでもいふやうな音でせう。――それに就てエピソオドがあるのですがね」

「へえ？　古くからの言ひつたへですか」

「いやいや！　なに、僕の生活の上のエピソオドとでも言ひますかな」

さう渚山は話し出した――。それを買つたのは、この間、一月末の雪のふり出した晩であつた。それを買つてから夜おそくなつて下宿へ歸つて來た。渚山の下宿といふのは――彼は今まで他人の生活といふやうなものは大して興味を持つてはゐなかつたし、その上いつも轉轉と宿所をかへて歩く渚山が今は、どんな生活をしてゐたか、どんな家に住んでゐたか別段に尋ねて見たことはなかつた。そこで渚山はそのエピソオドといふのを語り出す順序として手短かにその下宿のことを說明したが、そこはやはり彼の家と同じやうに或る坂の中ほどにあつて、彼の家と同じやうに日の當らない家であつた。わけても、月三圓の約束で渚山が借りてゐる四疊半に至つては一日中、日の光が一すぢも射すことはなかつた。光をとる筈の大きな窓といふのは西北の方に向いてゐる上に、そこにはすぐ五六間へだてて崖の斷面が突立つてゐた。これが渚山の部屋であるが、その隣室は襖一重で六疊になつてゐたが、そこには少しは朝日が射すやうであつた。そこには月五圓で、砲兵工廠の職工が借りてゐた。その若い職工のところへは、時時やはりどこかの女工だらうと思へる一人の女が遊びに來て、以前からよく泊つて行くことなどもあつた。

物好きに鳩笛を買つた渚山は、しばらくの間、古本屋通りなどをぶらぶらしてゐたが、夜がふけるにつけて雪がひどくなつて來て、あまり寒かつたから、そこらの居酒屋で一杯ひつかけた。電車へ乘るには近いし歩くには少し遠いその下宿まで、渚山は醉に乘じて歩いた。然し金のないために十分滿すことの出來なかつた渚山の微醉は、下宿へ歸りついたところにはもうすつかり醒めてしまつた。醒めきつた酒のために却つて、渚山は容易に眠れなかつた。――それに、どうも隣室の職工のところへはいつもの情婦が來てゐるやうな氣勢が感じられたりした。渚山は所在なさにふとさつきの鳩笛を吹いてみたいといふ氣がしたので、それを輕く二聲三聲吹いて見た。それから吹きつづけた。ホオ、ホオ、といふその聲がしづかな夜氣のなかへ消えて行つた時に、

「あら、何か來てゐるわね」

「何が？」

「いま啼き聲がしたぢやないの？」

「うそだよ……」

そんな會話が隣室でとり交されてゐるのが渚山の耳に入つた。――果して、例の女が來てゐるな、まだ目をさましてゐたのか知ら。渚山は鳩笛を吹くことをやめたが、男の聲が「噓だよ」と言ひながら、それでも二人して何だか耳をすましてゐるらしいのを感ずると、渚山はもう一度それを吹いてやりたい氣がして、わざと幽かに鳴した。

……ホオ、ホオ。

「ね！　それ。あれだよ」

「うむ。――なんだらう？」

……ホオ、ホオ、ホオ。渚山はもう一度つづけて鳴した。

「をかしいわね」

「何だらうな。軒の下へでも來て居るやうだぞ」

「いやよ。わたしこはいわ」

男は「馬鹿な」とか何とか言ひながらも、起きて出たものと見えて、窓の戶を開ける音がした。

「――や。これやひどく積つたぞ」男のやや大きな聲がさう言つてから、ミシミシと音がしたのは男が窓の敷居へでも上つたらしい――なあに、何もゐやしないよ」

諸山はをかしさを耐へてしばらく默つてゐた。さうして男が再び寢牀のなかで溫まつたと思ふころに、また一しきり吹き鳴した――ホホ、ホホ、ホホ、ホオホホ……男と女とは暫くはそれを不思議がつてゐるらしかつた。――

さう言へば、これで夜更けになど聞けばちよつと陰にこもつてかそけきとでもいふ程度の氣味わるい淋しさがありますからね――そんなことを言つて諸山は、改めて自分でその笛を鳴して見ながら、その生活のエピソオドを結んだ。

彼は諸山の話を默つて聞いてゐたが、諸山が事もなげに言ふその出來事の奧底には諸山の不幸や孤獨がこの短い話のなかに具體的に現はされてゐるのに氣がつかないでは居られなかつた。諸山の話はもとよりさりげない淡い興味でしか語られはしなかつた。もしかすると諸山自身は、ただその見かけどほりな淡いをかしさしか自分では氣づいてゐないのかも知れない。

しかしそれを諸山の口から彼が聞く時には、自づとそこにもつと複雜な陰影を感ぜさせられずには居られなかつた。さうして、諸山が敢て氣づかないふりをしてゐるものとおもへるその複雜な心持にまで思ひ到ると、この雪の夜の鳩笛の話は實に一篇のユーモラスな――人生そのものが無理強ひをされて失つてゐる時の橫顏たるユーモラスな――小話を讀むやうな氣がするのである。

諸山は三十五六にもなつてまだ獨身であつた。年の若い仲間は以前時たま冗談に妻帶をすすめて諸山を揶揄したものであつたが、諸山は眞顏になつて生涯妻を持たない積りだと言つた上に、その理由をたづねると、それは今は言はないが自分の死後では自然と解ることである、とさう答へるだけであつた。――誰が諸山の死んだ後まで、「どうしてあの男が生涯妻帶しなかつたらうなぞといふ興味を持つてゐるものか！」と、その時仲間の一人が別に大して毒のないかけ口を利いたことがあつたのを、彼は思ひ出す。その諸山が襖越しの男女の囁きを聞きながら、深夜にひとり鳩笛を吹いてゐるのを、その形をその心持を想像し初めると、彼は思はず言つた――

「――なるほど、これや面白い。これはたしかに書けますね――」

彼の言葉を聞いた諸山は、口の兩端に人のいい笑ひを浮べてゐた。しかし彼が諸山と目を見交さうとした時諸山の目は一寸時濕つてゐるやうに見做された。さうして口角の笑と眼中の濕とは次の瞬間にうまく調和されて諸山の顏一面は靜かな苦笑に變つてゐた。諸山は然しいつものやうに、面白いですか。ほう、ではその材料は差上げてもいいのですとは言はなかつた。ただその淋しい苦笑をしばらく顏に漂はしたきり、何も答へなかつた。その顏を見た時に彼は、初めて氣の毒なことを言つてしまつたことに氣がついた。そこで彼は諸山に謝罪するやうなつもりで言つた――。

「お互ひに、小說は書けない代りに、小說に書かれる人のやうになつてしまひさうですね――」

それから今度は彼が、先日大川秋帆をその樂屋へ訪ねて行つた時の一件を詳しく諸山に話して聞かせた。諸山は割り合ひに興味をもつてそれを聽いてゐるらしかつたが、秋帆が一向取り合はない樣子を語り終ると、諸山は何か身に覺えでもあるらしく、又經驗深い先輩の口調で言つた――

「さういふ人は世間によくあるものですよ――」

「さうでせうね」と彼が言つた。「僕もその時には、秋帆の奴は自分の一冊を鼻にかけてゐる俗な奴だと思つてゐたのです。ところが、あとになつて家內から聞いて見ると、秋帆はこのごろ氣が氣ではないのださうです。樂屋中のものに當り

ちらしてゐるのださうです。——何でも秋帆の情人が外に男でも持つてゐるらしいといふことが解つたとかでね——

「へえ。秋帆の情人といふのは例の橘朱雀でせう」

「さうです。……さうしてその餘沫が僕にまで及んだわけですよ」

渚山と彼とは聲を合せて、二人とも氣の拔けたやうな響のない聲で笑つた。——人生といふものは、結局たださういふ聲で笑ふより外には仕方もないとでもいふやうに。

或る夜、渚山が大分おそくなつて訪ねて來たことがあつた。彼はもう妻が歸つて來たのかと思つた。それにしては、このごろ歸りの遲い妻としては早すぎると思つてゐると、渚山であつた。——もう十時半もすぎてゐたらう。渚山がそんなにおそくなつて出かけて來たことは今までにはまだ一度もなかつた。しかしその夜も渚山は別に用事もないらしかつた。渚山は、久しぶりだから一度マダムにも逢ひたくなつて、夜ふけに來たが、マダムは未だお歸りではないのかといふやうなことを言ひながら坐つた。その渚山の樣子には、近ごろになつてどうも訪問病がよほど募つてゐるらしいところがあつた。

——訪問病といつて、別にそんな病氣があるわけではない。言はばただ神經衰弱の一狀態なのだが、以前彼や渚山たちの仲間でそんな妙なテクニックが流行したことがあつて、その意味はつまり、何もかも行きづまりになつてしまつて而もうその孤獨を一人でぢつと踏みこらへるだけの或るものをも失つてしまつて、無暗と友人の顏が見たくなつて來て、そこでその友人のところへ行つては見るがさて愉快な話などは決してあるわけではなく、そこで改めてもう一度今日逢つて見たいやうな友達を心のなかで一とほり吟味してみて、さてその友達のところへ行つても一向落着く筈もなく、果は一種やけのやうな氣になつて、あるかぎりの友人の家を遠近かまはず轉轉として一日中步きまはる。ところがかうして一人がその病的な心理に陷つたが最後、この心理はもともと內向生活に何の安定をも得てゐない彼等の仲間中へ傳染し出して、この所謂訪問病にとりつかれたAに訪問されたBもやはりそれに感染し、さうして次にはAとBとの二人の訪問病者がCを訪ねると、今度はまたABCの三人が互にその心理を助長し合つて、一そう遠いところにあるDを訪ねる……かうして仲間の生活がたうとう交互に腐蝕されて行く。しかも仲間のうちにはいつも一人以上は重いか輕いかこの訪問病者が絕えなかつた。自他の生活がひどく荒されることに氣がついて、誰しも一人にならうとあせりながら、それでも何時かしらやはり面白くもない友人の迷惑さうな顏——さうして一時間ほどの後にはやはり自分と同じやうに故もない暗鬱に變つて行くその顏——を見るために、悲しさうに町をうろつきに出る……。こんな狀態が一しきり惡疫のやうにつづいた末にはいよいよその生活が行きづまつて、或る者は故鄕へ歸つて小學教師になつたり、或る者は滿洲の方へ放浪して行つたり、かうしてさすがの惡疫も下火になつた。この消え入るやうな群集心理は仲間が瓦解した時に初めてやつと驅逐された有樣であつた。そのころ妻を持つてゐた彼はいつもあまり出步かないといふので、彼の家には、每日二組以上の訪問病者が押しかけて來て、それが皆彼の家で落ち合つてまるで訪問病者の俱樂部を現出してゐた。彼があの時あんなふうにして一度都會から遁れて田園に侘び住ひをしたのも一つにはこの訪問病者の群から逃れ出したか

つたからであつた。實際それらの訪問病者によつて彼は物質的にも精神的にも大分荒らされたのであつた。さうしてそのころの仲間――これは村居夜雨と知り合ひになつた當時の仲間より以後の仲間であるが、その人人は彼が田園に逃げ込んでしまつた前後から、それぞれにもう訪問病時代を卒業して、或る者は落着いて、と云つたところでいづれ比較的のことではあるが、ともかく、何か熱中すべきものを見出すとか、或る者はまたその病的心理が一層重態になつて例へば彼自身のごとく厭世と倦人との傾向によつて友人の顔など一つも見たくなくなつたりしてゐる。しかも諸山だけはやつぱり三年ほど全く同じやうに訪問病時代を徘徊してゐるらしい。しかも一層氣の毒なことには今日ではもう諸山によつて訪問病を感染させられる仲間は一人もないらしい。諸山はこのごろでもやはり一日に數人の友人を訪問して歩いてゐるらしい。――唯一人でしかも多分はそれぞれに多用な友人のところを巡歴するのであらう。諸山はさまざまの友人の噂を傳へたがそれは何れも昨日會つたとか今日逢つて來たとかいふ人のことばかりであつた。諸山のその當時の仲間といふのは、しかし、彼とはあまり關係のない人たちであつた。それ故諸山の齎すせつかくの噂語もそれ以上興起する話題にはならなかつた。――彼と諸山との話題は既にきまつたものである上に、そのきまつた話題さへ殆んど毎日のやうに語り合してゐるうちには益乏しいものになつた。諸山の所謂「珍らしい材料」ももうすつかりひと通り聞いてしまつた。さうしてその夜も諸山は『山峡の人人』といふ長篇の話を初めさうにした。しかしその梗概ももう一度聞いたことがあつた。話の途中で諸山もそれに氣がついたと見えて、

「とにかく、私もいよいよ書きます。あなたも一ついかがです」

諸山は、さう、あたかも主人が客に菓子をすすめるやうな口調で言つて話を締めてしまつたが、この『山峡の人人』こそ諸山が數年來の腹案で、これだけは是非とも書き上げたいものだと諸山は呟くやうに言つた。

「それにしても、あんな下宿にゐたのぢやとてもおちおちと書けるものぢやなし、さうかと云つてどこへも變るところもなし……」

諸山はそんなことをこぼし出した。それがどうした加減でかふと彼には、諸山が彼の家へ來て同宿してはいけないだらうかといふ謎で――「どうです、僕のところへ當分來ませんか」とさう彼の口から言はせたいのではないか、と思はせられた。さうしてそれが氣をまはしすぎた邪推でもないことであつた。しかし彼はそんなことには一向氣がつかないふりをした。以前、彼が今ほど困窮してゐなかつたころ、今は滿洲へ放浪してゐる多田が食客になつて這入り込んで來たことがあつたのを諸山も知つてゐる。あんな手に了へない男を同居させたほどならば諸山自身の方が遙かにいい同居人の筈だと、諸山はさう思つてゐるのではなからうか。なるほどそれは確かにないことだ。不良な性の多田などにくらべるまでもなく諸山は善良な温厚な人に違ひはない。しかし、彼の暮しの方から言つてそれが全く不可能なことは暫く措いて、たとひ諸山が自分だけの事にするとしたところで、諸山と一緒に生活するといふそれだけの事實は、想像して見ただけでも、今の彼としてはあまりにもの悲しすぎた。一緒に生活するにはこの先輩はあまりに親切すぎる性格ではないか。それに、「道樂に窮した金は人も貸すが暮しむきで切迫した金を人は貸したがらない」といふやうなことをよく言ふが、多田と諸山との相違は「道樂に窮した金」と「暮しむきで切迫した金」ぐら

ゐの相違である。それにしても人間といふものは奇妙な實に不合理な心理をもつてゐるものである。渚山は彼にとつてあまりに現實的にみじめすぎて同情の心を動かす餘地もない――彼はそんなことを心に考へながら、敢て渚山の意のあるところを察しようとはしなかつた。ただそんなにいやだといふ今の渚山の下宿、あの崖に面接した北向きの窓がある四疊半の下には、どんな家族がゐるのかといふことを彼は渚山に聞いて見た。

渚山の答へたところでは、そこは六疊と三疊との二間に五十ぐらゐの夫婦と田舍から姪を養女につれて來たとかいふ十六ばかりの娘と三人が住んでゐた。彼等は自分たちの二階を貸して、その上三人で麻つなぎの内職をしてやつと生計を立ててゐる。渚山はそこで麻つなぎといふ内職を一應いて、いろいろと説明をしたが、「で」と渚山は話しつづけた。「夜はいつもおそくまで起きてゐるのです。彼等の寢るのはいつも十二時過ぎです。私は尤も御同様もつとおそくまで起きてゐますが、夜、便所へ行かうと思ふと先づ彼等の枕もとを通つて次には夫婦の眠つてゐるところを通り拔けなければなりません。これがなかなかあまりいい氣持のものではありませんて。――尤もこんなことはその下宿が不愉快な理由にはなりませんがね」渚山はそこで短く氣のない笑ひをしてしばらく口を噤んでゐたがたうとう言つた。「實はですね――何事かと思ふほどその言葉が改まつてゐた。而もそれは間代が三四ケ月分溜つて來てゐるといふだけの事であつたのはいかにも渚山らしくて彼は思はず微笑させられた。それを渚山は兎も角もいい加減なことを言つて延してゐたのを、先方がそれを當にしてその都度催促をするのである。それも無理ではない。彼等とてもやはりその僅ばかりの金が入用な人たちだから。さうしてもう幾度も違約をした渚山はどうも家に這入つてゐにくい。それで仕事を搜すのだからと言ひわけをして二月の月末まで待たせてはゐるけれども、もとより渚山に思はしい仕事のありやうもない。しかし家へ宵のうちに歸れば十二時まで内職で起きてゐる家族の一人がきつと渚山を出迎へて、出迎へるといつては體裁もいいが、その實、渚山が何か仕事を見つけたかどうか早速たづねるのである。答へやうもないだけに渚山にとつてはそれが不愉快で、それを避けるためにこの頃ではいつも十二時を過ぎて皆が寢てしまつた時刻を見計らつて下宿へ歸ることにしてゐる。渚山はなるべくこつそり表戸を開けて、それから三疊――そこは二階への上り口でまた娘の寢間である――三疊へ渚山が足を踏み込むとその時いつでもきつと、次の六疊の間から下宿のおやぢが咳拂ひをするのである。

そんな點でまで自分を警戒してゐるものと見える。――自然主義小説を志してゐるだけに渚山はそんな些細な事實をうまく掴んで輕妙に話すのであつたが、それらの事實は彼にこの前に聞いたあの鳩笛の話と照し合せて見て一層、渚山の生活の近況をはつきりとさせた。渚山はただきびしい心持に追ひまくられて友人の家を歴訪するだけではなく、自分の下宿に落着いてゐにくいそんな事情もあつてかうして夜更けまでひとの家で話し込んでゐるのだな。彼はさう思ひながら、渚山の話が途切れた時も別に受答へのしやうもなく黙つてゐた。渚山もしばらくは自分の現狀を味ふとでもいふやうに沈黙してゐたが、といふよりか彼に尋ねた――

「どうも這入つた事を聞くやうですが、マダム瑠璃子は一たい月にどれほど取つてゐられるのでせう」

「さあ、たしか四十五圓でせう」彼は吐き出す

やうに答へた。
「四十五圓？　それであなたがたの生活は立ち行きますかね」
「さあどうですか。――家内は四十五圓貰つてゐるのださうですが、それでうちの暮しを立てゝゐるのでは無いやうですね。晝と晩と二度のお辨當代や電車賃やそれから樂屋での配役やつき合ひや、月賦でつくつた着物の代や、そんなことで大方給金が無くなるのでせう。尤も時には五圓ぐらゐもつては來ます。それに質の利上げだけはきちんとするやうです」
「で、さうするとこのうちはどうして立つて行くことになるのです」
「それが僕にも解らないのです。――僕はそんな事は一切知らないのです。いづれ家内のおふくろか何かゞいいかげんにやり繰りをしてゐることでせうよ……」
「あなたは實に呑氣ですな。まるで人事のやうぢやありませんか。――いくら困つたと言つても未ださうしてゐられるのですから、羨しいわけですね」
　そこで二人がもう一度それぞれの物思ひで沈默した時に、いつもの足音がして、口笛が鳴つて、それは彼の妻が歸つて來たのであつた。――

もう十二時であつた。彼の妻は狂言の都合とかでそのころいつもその時刻でなければ歸らなかつたのだが。
　諸山の病氣がそのころになつてよほど重いものになつてゐたことが、その夜偶然なことでわかつた。といふのは、歸つて來た彼の妻がいつものやうに戸を閉めようとした時に、カラカラと何か倒れた音がして、それがよく聞いて見ると諸山の杖であつた。諸山は何かと言ひまぎらしては居たが、例の病氣で足の關節が痛みでもするのか杖にすがつて歩いてゐたのだといふ事が、これより少し後になつてわかつた。しかもそのころはその杖を見られまいと思つて、それを上り框までは持ち込まないで戸の外へかくしてあつたものと見える。諸山はその夜、彼の家へとまることになつたが、蕎麥屋と貸布團屋とは市中で一番おそくまで起きてゐる家業だと諸山は諸山らしい通を言つて、その上、その近所の貸布團屋のありかをも諸山は知つてゐた。この男は今夜來がけから彼のうちへとまるつもりでゐて、通りがかりに既に貸布團屋を物色して置いたらしくも思はれない事はなかつた。彼の妻が蕎麥と貸布團とを註文に出かけたあとで、諸山はその片わきに置いてあつた風呂敷づつみをほどいて、妙な細長く丸いものを一つとり出した。それから懷中をさぐつて出して來たものは懷爐であつた。「どうも腸をいためてゐるのでこんな老人のやうな事をやつてゐます」さう言ひながら諸山が風呂敷づつみから今取出したもの――懷爐灰を入れ直した時、彼の諸山に對する悲しさは一種何とも言はれないものであつた。同時にどうかするとあの小さな風呂敷づつみ一つにそのすべての日用必需品を用意してゐるのではないかと思へる諸山が、或はこのまま彼の家に居据つて住み込むのではないか――もしそんな事情になれば、すげなく追ひ拂ふことも出來るものではない――彼にはそんな心配もあつた。その時ふと思ひ出したのは、いつかあの古本屋の小僧が彼に書かないかと言つてすすめた赤本風の出版物の原稿のことである。外國の探偵小説か何かの出たらめな飜譯でも飜案でも、二百枚ほどで三十圓になる筈であつた。外國語は全く讀まないが、昔、中學の三年まで通つたことのある諸山にだつて出來ることだし、彼はその原稿を書いて見る氣はないか諸山にすすめて見た。
「それだけの金があれば」と諸山は言つた。「去年の十一月以來の下宿の間代を拂へます。敵

屋のとどこほりも片附けば、その上どうかすれば鹽原で醫者を開業してゐる古い知り合ひのところへ、居候に出かけるだけの旅費も出來さうです。え、その婦人は出掛けてさへ行けば世話をしてくれる筈になつてゐるのです。私はそこで例の奴を書き上げて來ますよ 氣位の高い筈の渚山は、赤本の原稿のことを聞くと見てゐてもいぢらしいほど喜んだ。

或る日、彼は三月ぶりぐらゐで散髮をした。

それから一週間目ぐらゐで入浴をした。一たい、入浴をしたり散髮をしたりすることは彼にはこの上なくおつくふなことであつた。散髮をしてゐると、彼はいつでも後頭部が息ぐるしいやうな工合になつて目がぐらぐらするし、入浴をしても湯のなかに長くつかつてゐることそれ自體がもう、體の各部を洗つたりなどしてゐられないほどそれ程、體を疲れさせることなので、彼がお湯に這入るといふことは要するにただ、いつもと同じやうなとりとめのないそのくせ重苦しい氣持の物思ひを裸になつて熱い水のなかでつづけるためにそこへ行くといふだけの事にしかすぎなかつた。それに彼は清潔といふことを別段それほどの美徳とは思つてゐなかつた。體に垢がついてゐる事とさうでない事とは人生に於て何の大問題でもない。體をきれいに磨いたり髭をそつたり髪をどうにかしたりするのはそれは何だか心にゆとりのある——といふよりは寧ろ考へ込んだりするやうな何物をも心に持たない人間のすることで、彼のやうな人間はそこまでは手がまはらない、とでも言ふのであらう。何にしても一日そのやうにぼんやりと暮してゐながら、彼はお湯へ這入らうなどと思ふことは滅多になかつた。たまにそんなことを思ひつく事があつても、次の瞬間には全く別な考へ——と言つて例によつて少しも焦點のあるわけではない考へがふいと浮ぶと、そのままその考へをつづけてゐるうちに、いつの間にかもうお湯へなど這入りたくはなくなり、さうして夕方になつてゐるのであつた。彼は夕方にお湯へ這入るのはいやであつた。さまざまな人間がごたごたと一向美しくもない自分の體をごしごしと擦つて洗つてゐるのを見るのは、彼にとつてへんに味氣ないやうな、またそんな人込みのなかで自分自身が幾日分もこびりついてゐる垢を落してゐるのを彼等に見られるのが妙に厭はしいといふやうな落着かない氣がした。お湯へ這入るならば人氣のない朝の十時ごろとか、晝の一時ごろとかそんな時刻が最も好もしいと彼は思つてゐるのに、そんな時刻には彼はいつも寢てゐた。——このやうに物臭な彼がその日に、久しぶりで入浴をして、それから更に散髮をしたのである。別段に理由のあることではなく、恐らくはただの氣まぐれで、いやさういふよりはその日の天氣の加減であつたらう。實際、陽氣はだんだんと温かくなつて、その日などは、彼と一緒に入浴してゐた二人づれの男は花見の相談見たやうな話をしてゐたほどであつた。——さうだ、さうだ。花が咲いて燕が來て、小ざつぱりとした袷でも着たら、その頃にでもなつたら……お湯のなかにとつぷりとつかつて、高いガラス窓を透して藍色の空を眺め入りながらひよつくりそんなことを考へると彼は、やはり季節の關係であつたらう、また一つには體中が温かくなつて來た理由からであつたらう、どうやら人生にも未だいくらか快樂があるやうな氣がした。時刻は彼が起きて間もない一時ごろであつたから、入浴の客は四五人よりなかつたし、それに[illegible]男湯と女湯との仕切りの壁の上の番臺に近いところに乘せられてある籠のなかでしきりに囀つてゐる

た。それがからんとした浴室の高い窓のなかで反響していかにも朗らかであつた。――ここのおやぢはあそこに鶯の籠一つ置くことでその生活を豊富にしてゐるのである。彼はそんなことを考へた。――人生といふものは結局そんな些細なことの積重ねにしか過ぎないのかも知れない。そんな日常生活のうちのちよつとしたことを外にして何か特別に「人生」といふ抽象的なものがあるやうに思つてゐるのはやはり愚にもつかない夢であるやうだ。しかし、そんな夢が終生つづく人こそ藝術家といひ詩人といふので、それだのに天分の無い俺はもうぼつぼつそんな夢から醒めかかつたのかも知れない――そんなことをも彼はぼんやりと感じた。しかしそれはつきつめて考へ込んだやうでなく過ぎ去つて、彼が體を拭きにかかつた時には、ふいと氣がついて、耳もとへこんなにかぶさりかかつてゐる鬱陶しい髪を今日は一つ散髪してやらうと思つた。ちやうどたつた一つあつた五十錢銀貨を持つて來た湯錢のおつりもあるから。それにしても床屋はこんなに氣違ひのやうに延びた髪を見て腹立たしく思ふだらう。いや、しかし俺の顔色が悪いから病人で永いこと寝てゐた人間だと思ふかも知れない。彼はそんな餘計なことをちよつと氣にしながらそこの姿見にうつつてゐる自分の顔をのぞいてゐた。又、着物を着ながら、もうこんなに温くなつたのだからあのインバネスを質に入れて、その代りに袷を一枚新調しなければならない。それにしてもあのインバネスが一枚の新らしい袷だけの値になるだらうか。いや、袷が這入つてゐる筈だからインバネスと入れ換へればいい。しかし新調のきちんとしたのを着たいのだがな……

起きるとすぐさまお湯へ這入つたり、それから散髪を思ひ立つたり、その上に着物のことを考へたりして見るといふことは、この頃の彼としてはもつとも積極的な珍らしい氣分であつた。――それほど生氣のない人間的興味に缺けた性格の彼になつてしまつてゐた。さうして春といふ季節が二足無羽の動物にもその力を及ぼす事は微妙なもので、この頃の彼のやうな男に對してさへそんな輕快な氣分を呼び起させるのであつた。

全くその日は、彼にとつては珍らしく活動的な日であつた。彼は散髪がすむと家へ歸つて今度は、犬を牽き出して九段の廣場まで行つて見る氣になつた。もう櫻の花がどれくらゐ含んでゐるかなどといふ興味さへもあつたからである。

二疋の犬はフラテもレオもすつかり成育してゐた。フラテは純粋な秋田犬で見るから逞しい見事な犬になつた。いつかも彼がフラテをつれて近所で日向ぼつこをしてゐると、通りかかつた一人の青年紳士が彼にさまざまなことを話しかけた。先づフラテをしきりにほめそやして、いろいろと犬に就ての通を述べ立てて、フラテは背丈がもう五分も高かつたら理想的な體格だ、體重は多分何(?)キログラムはあるだらうといふやうなことを言つて、それからその人はこの近所には定めし立派な犬が澤山あるだらうといふやうなことを彼に尋ねたりした。この青年紳士は、よく話を聞いて見ると、今年の三月には獣醫學校を出るので、ここらへ開業して見たらと思つて場所の檢分に來たのだと打ち明けてゐる。實際、フラテはそれほどいい犬であつた。さうして彼はいつもいくらか得意になつてフラテを鎖に牽いて歩いたりした。その上フラテはこせつかない呑氣な氣質であつた。それ故、彼等夫婦の愛情は田園にゐるころからどうもフラテの方に厚いやうな傾が自然とあつた。彼は妻にも注意をしてレオをも決してフラテ以下にとり扱つてはいけないと言つたりしたこと

もある。何故かといふのにレオは大へん神經質な犬で、從つて非常に怜悧で、また表情に富んでゐた。さうしてフラテの形や樣子を見てすぐ目をレオにうつした人は、誰でも、レオを女犬かと問うた。レオにはさう言へば女のやうな人に媚びるやうなところがあつた。しかもフラテのどこか鈍間なやうな樣子の方が、レオのさかしげな樣子よりももつと可憐に思へた。そればかりではなくレオは、小さかつた時にはほんとうに痩せ衰へた奴であつたのに大きくなつたのを見ると、胴ばかり長くつて脊の低い犬になつた。さうしてそれが無暗と太つて、それでなくてさへあまり見榮えのしないものが、フラテと並んで歩くと一そう不恰好であつた。彼はフラテは鎖につないで自分で牽いて歩いたけれどもレオはいつも放して置いた。それといふのはレオは音無しい性質で外の犬と喧嘩をするやうなおそれが少なかつたからではあるが、けれどもレオが見たところあんまり素晴らしい犬でなかつたこともその理由の一つでないとは言へない。何故かといふのに、もしレオがフラテほど立派であつたら彼はおそらくは少しぐらゐ面倒はかまはないでレオをもやはりフラテと同樣に鎖につないで、この二疋の犬を兩手に牽いて歩いただらう。――その頃はちやうど鬪犬が流行した後で、一般に犬に對する流行のために人人は妙に犬に注意を拂ふやうであつた。彼はフラテを牽いて歩くと、すれ違ふ人人が多かれ少かれ皆注目をした。小さな犬が來て吼えたててもフラテは一向知らない振をしてゐた。それは道道もさうであつたが、Kの廣場へ行つてからことにさうであつた。といふのはこの廣場へは近所の子供たちがやはりそれぞれの飼犬を牽いて運動に出て來てゐたからである。さうしてフラテの英姿は全く目ざましいものであつた。小さな犬をつれた子供などはフラテが來たのを見ると自分の鎖をひかへて、自分の犬を隱したものもあつた。その邊に遊び働きてゐた子供たちは噂し立てながらフラテのまはりに集つて來た。

「おや！　いい犬だな」

「ずゐ分よく肥えてゐやがるな」

「こいつは強いぞ」

子供たちはかう口口に讃美した。そのなかにひとり酒屋の樽拾ひが道くさを喰つて雜つてゐたが、この十四五の小僧は最も言葉を盡してフラテをほめた。さうしてひとりで前へ進み出でこはごはにフラテの頭を撫でた。

「やあ、可愛いなあ。おとなしく尻尾を振つてゐやがら」

小僧は調子に乗つてしやべりつづけた。さうしてその邊に全く人人から閑却されながらその子供の群のまはりをおづおづとながめてゐたレオに、樽拾ひの小僧がふと目を留めた。

「ふん、こいつは又どうだ。まるで豚見たいな恰好してゐやがる。こら！　やい！　豚！」小僧は、フラテをもつと有效に讃美しようと思つてレオの惡口を言ひながらこの立派な犬の持主である彼に向つて媚びるやうな目つきをした。それからレオも同じく彼の犬であると知らないこの小僧は、ひとりではしやぎ切つた末に興に乘じてそこにびくびくしてゐる神經質なレオを追つかけまはした。レオは追はれながら自分の主人の方へ聲を放つて、彼に助けを求めてゐた。しかし小僧があんなにレオの惡口を言ひ出して、レオにむかつて惡ふざけをし初めた時に、彼はどうも今更その見つともない犬のことを、それも俺の犬だとは言ひそびれた。レオを、彼の犬と氣がつかなかつた小僧はますますレオを追つかけまはつた。けれどもレオは自分の主人の居る傍から敢て放れようとはせずに、その主人たる彼と兄弟たるフラテとのまはりをくる

くるとまはつて逃げ歩いてゐた。

「おい！」と彼は小僧に向つて言つた。「そんなにいぢめるのはよせよ」

けれども小僧は、その言葉をもただ[illegible]しに意味のあるものとも思はなかつた。やはりレオを追ひつづけながらしまひにはその氣持が嵩じて來たと見えて、たうとう足を上げてレオを蹴つた。レオはたうとう彼のそばを放れて逃げ出した。逃げるのを追つて追つかなかつた小僧は、足もとにあつた小石を拾つて馳けて行くレオを目かけて投げつけた。それがレオに當つたのかどうか、レオは悲鳴を上げて、それでも自分の主人の方へ見返り見返りしながら、一散に家の方へ逃げて行つた。彼は急にフラテの鎖を引つぱるとその小僧の方へ大股にいそいだ。彼は不意に小僧の襟もとをいやつかんで言つた——

「こら！　何をするんだ。——何だつて石などをぶつけるんだ！　今までお調子に乘つてゐた小僧は、彼のこの意外な權幕に怯えながら、しかしその理由を解し兼ねて呆然としてゐた。その小僧の泣き面を見つめながら、

「——あれや俺の犬だ！」

さう言ひ放つた彼は、彼自身の顔もちやうど小僧のもの同樣に歪んでゐるのを自分で感じた。さうしてその瞬間しつかり引つ捉へてゐた小僧を力なく放した。それから氣拔けがして立ちすくんでゐる小僧に今までとは全く別な、寧ろ優しげな一瞥をくれると彼はもう見返りもせずにすたすたと歩き出した——今のさつきあんなに萎れ萎れたレオが見返りがちに逃げ去つた道の方へ。

歩きながらも、あのレオの目付きが彼の心を重く壓さへつけた。——おれの主人はどうしておれを庇つてはくれないのだらう。おれが理由なしにいぢめられてゐるのをおれのあの信頼すべき主人はどうして默つて見てゐるだらう。助けて下さい。憫れんで下さい。——すべての出來事を疑ひながら、しかし彼をどこまでも信頼して憐憫を乞うてゐたレオの瞳。それからまたあの惡意なく人に媚びた末に無邪氣な子供らしく戯れた小僧が不意に怯え恐れてゐた瞳。それは二つながら全く相似た種類のもので、言はば了解されない理由から傷けられながらそれに手向へずに、一つの魂がいためられてゐることを示す瞳であつた。しかもレオにあんな目付きをさせ、またあの小僧にあんな目付きをさせたこと、それのおこりは皆彼から發してゐる。然うだ、——と彼は考へながら歩いた——然うだ、それは皆彼のちよつとした見えからだ。立派な犬フラテの持主である俺が同時に見つともないレオの持主だといふことを知らせまいとしたその俺の見え、見えから出た事だ。俺はあの小僧に怒る事は何もなかつたのだ……。

日は暮れかかつてゐた。その少しづつ暮れてくる淋しい片側町を彼は頸垂れて歩いた。さうして彼は自分自身の考へが正しいが、しかしその感動の仕方はあまりヒステリカルなことに氣づいて、これは、今朝から妙にあまりはしやぎ過ぎた氣分の反動だなと自己解剖をしながら、しかしやはりそのヒステリカルな物思ひはおさへる事が出來なかつた。彼は家に歸つて來て早速レオを呼んで見た。レオはひとりで家へ歸つてはゐたが、しかし彼を恐れてゐるのであるか、それとも憤つてゐるのであらうか、深く緣の下にもぐり込んでしまつてゐてなかなか出ては來なかつた。彼は臺所から餌を出してそれをレオに與へようとしたが、それでもレオは出て來なかつた。彼はレオが拗ねてゐるやうに思へて忌忌しくなつて、緣の下へ餌を投げ込んでやらうかとしたが、又思ひ返した——レオは拗ねてゐるのか、それとも彼自身では何かわからないが自分で惡い事をしたと思つてその罪を恐れて、

その理由が解らないだけに一層恐れてどうしても出て來ないのかも知れない。レオは機嫌の直るまで放つて置かう

彼は部屋のなかへ這入つたが、罪を犯したもののやうに切なかつた。實際俺は見え坊だ——と彼は思ひつづけた。——渚山に對してだつてさうだ。——渚山がただみじめな生涯の人であるといふ理由で、おれは渚山と親密であることを自分ながらに恥ぢてゐるではないか。さうして渚山と親友であることを恥づる理由が一體どこにあるだらうか。…………

端なくもさういふ順序で、彼はその夜、今の彼のただ一人の親友である渚山といふ人物を——今まではてんで頭のなかに、ただ輕んずべき以外の何者でもなかつたその人物の事を、さつきからのヒステリカルな考へ方のつづきとしてではあつたが沁み沁みと考へ耽つたのであつた。

一たい渚山のどこが友として恥づべき人物であらうか。人として間が抜けてゐるからであらうか。それならば渚山のどこがをかしく間が抜けてゐるであらうか。あの妙に丁寧な言葉づかひがさうであらうか　妙にきちんとしたさうして人のいい態度もさうであらうか。それから一向に世間から認められもしないその自分の藝術を自分だけ高く思ひ傲してゐることであらうか。昔その母からの遺産をその青春の無分別の結果恃むべきでなかつた才能の爲めに浪費してしまつて今は無一物であるといふ事であらうか。さう考へてくれば、渚山その人の全部が何もかも間が抜けてをかしいやうではある。しかし今假りに——彼は渚山のことを考へつづけた——假りに渚山が、今のままの渚山であつて唯世に時めいてゐる一人の作家であつたとして見たらば……？　渚山はどの後進にでも親切で丁寧で、謙遜で、常識に富んで、おだやかな性格で、しかも自分自身の藝術に對しては實に熱中的で、それのためにはすべてを賭した人と言へないであらうか。然うだ。渚山が若し、唯、唯〱！成功者でさへあつたとしたならば、今日をかしい渚山のすべてが、一つとして渚山の長所として數へられさへするであらう。さうして見ればをかしいのはただ、渚山が不遇な人であるといふ事だけである。さうして渚山の才能はと言へば、然う、それは實際あまりに豐富ではないかも知れないが——いや、今に豐富ではないかも知れない、しかしながら昔、渚山が年若くて輝いてゐる日を見放つて前途に對した時に、渚山は今と全く同じやうに才能がなかつたとは言へないであらう。渚山の才能はその不遇のうちにだんだん今のやうに消磨してしまつたのであるかも解らない。何故かといふのに不遇は通例として、人の才能を養ふものでは決してないではないか。あの田園の家の庭にあつた日のあたらない薔薇のことを考へて見てもわかるではないか。薔薇ならば花開かむにさうして！　その薔薇がしかし生涯日かげにあつたならば、花開く前に枯れ果ててしまはないとは誰が知らう。

——彼の考へはここまで來て何時の間にかもう決して渚山を對象にしたものではなかつた。しかし彼はわざと渚山をばかり考へた。何故かといふのにこの場合に自分自身のことを思ふことは、もう彼には怖ろしかつた。それ故に、——渚山は……と考へつづけた。さうしてこの場合この渚山はもう現實的人物ではなく一つの象徴的人物であつた——さてその渚山は、その人を昔は一目に才能ない人のやうに思ひ込んでしまつてゐる。然し現に渚山がそれだけの人で今あるかといふことは誰も知つてゐる筈はないわけである。でも俺は、渚山を最初から決し

て重く見てゐたとは言へない。さうして友達甲斐もなく、その洛山の作品を滿足な注意を持つて讀んだ事さへもまだ一度もなかつたではないか。洛山が「自信ある作」などといふ時には洛山のこの言葉そのものをさへただをかしいと思ふぐらゐで、敢て讀まうともしなかつた。さうだ。雜誌『殉教』は手もとに貰つてゐる筈ではないか。俺はどうして今までに洛山の『およね』を讀んで見ようとはしなかつたのか。そればかりならまだしもいい。何一つ滿足に讀みもしないで、洛山の才能を最初から見縊つてゐたのではないか……

　彼は立つて荒涼としてゐる彼の机のところへ行つた。さうしてその近くに積重ねてある古雜誌やらぼろ冊子やら或は役にも立たない古原稿などをひつくりかへして見た。しかし今直ぐにも讀んで見ようと思ふ洛山の『およね』が出てゐる雜誌『殉教』はどうしてもそこには見つからなかつた。ものを搜す手をやすめて、いつしか彼は自分自身の事に思ひ耽つてゐたが、その時ふと思ひ出されたことは、あの田園の日かげの薔薇の花のこと、さうしてそれを考へてゐるときさまざまに思ひ浮んで來るあの田園の憂鬱な彼自身の生活である。——今まで、それとは氣がつかなかつたけれども、これはどうやら何か書いて見るだけの値打があるかも知れない。或は俺にだつて書けるかも知れない。今度、洛山が來たならば、一つこれを洛山に話して聞いて貰はう。——今まで、たとひ何を思つて見ても、それを洛山に話さうと思つて樂しみにした事などは一度もなかつたのに、その夜はさういふ風に洛山を考へたのである。——然うだとも。俺が、洛山の友達であることが何が恥しいのだ！　洛山がすべてを俺に語るやうに、俺も何でも洛山に語らう！　覺えてゐるとう、洛山を輕蔑することで纔に自分をえらいものと無意識にでも思つてゐるとしたら、それこそ情けない見えだ。それこそもう敗殘者の第一歩だ！——いや、それとも俺はもう自分で氣がつかないうちにただに外面的でなく、內面的に、敗殘者としての第一歩をも、もつと以上をも踏み出してゐないとは限らない。——或る性格にとつては自己譴責が享樂である事がある。

　洛山と言へば、もう二週間以上も顏を見せない。——例の冒險小說の原稿を賣りつける約束が成り立つて、その仕事のいくらかを運ぶ所も書きなぐつて、全部出來上つてからでなければといふのを無理に賴み込んでやつとなにがしかの金を前借したからお蔭でまあどうやら、遲れながらにも二月の暮れを越すことが出來た。厚さ二吋以上もあるやうな立派な稀本——しかもそれは夜店で十錢で買つてゐたといふ書物を彼に見せた。何れ外國の洛山並みよりあまり以上の作者ではないのであらうが、著者の名はあつたがつひぞ知らない名であつた。スティヴンソンの流行當時、その作風を當て込んで書いたものでもあつたらう。洛山はその插畫のどつさりある書物の頁を開いて示しながら、「こいつを賴みにして話を綴つて居るのですがね」と言つてゐた。繪から推して見ると、何でも『寳島』や『黄金の甲蟲』を下手にくどく行つたやうな海賊の物語で、海賊同士の戰爭などもあるらしいといふ事であつた。そのやうな話をして歸つて、洛山はその後それつきり顏を見せないがどうしたのであらう。あんな仕事にでも身が入つてゐるのであらうか。と思つてゐる折から表が明いた、噂をすれば影と思ふと……しかしそれは郵便であつた。

　——一枚のはがきで、その眞面目な書體と

簡單な事をまはりくどく述べた文章とで、それは直ぐと彼の妻の父――その人は内務省の下級官吏であつたが――から來たものだといふことがわかる。はがき一面に書いてあるが、要點はと言へば、少し相談事がある故明日の午後散歩がてらでも來ないか。もしそちらから明日來なければ一兩日中に當方から行つてもいいが……といふだけの事で、妻の母からの名になつてゐて、その上にある三月二十三日といふ日づけを見ると、行かなくともその用件といふのは解つてゐた。この月の暮れをどうするかといふ問題にきまつてゐる。

彼はそのはがきを丸めたり延したりして弄びながら、一たい彼の家へ郵便といふものが來たのは、この家へ來てから何度目だらうと思つた。この四ケ月の間に恐らくこのはがき一枚ではなからうか。或はもう一つぐらゐあつたかも知れない。――それも――當然である。彼自身がもう永い間、誰に向つても手紙などを書く用事も心持もなかつた。その彼にどこの誰から珍らしい便りもあらう筈もない。

孤獨といふものにはもう慣れてゐるこのごろの彼にとつては、その晩ほど人に會ひたいと思つたことは珍らしかつた。「話があるから出かけて來い」といふそのはがきを手にとつて、それを弄びながら、その話といふのはきつと暮し向きの事に相違ないと氣がつくと、自づとそんなことが考へ出されるにつけて、一そう人に會ひたいやうな氣持が募つた。誰でもいい。暫く來ないあの古本屋の小僧でもいい。しかしなるべくならば渚山がいい。もし今ひよつくり渚山が來たならば、どうかすると親身に貧乏話をしないとは限らない。いや、自分は貧乏などはおそれはしない筈だ。そんなことなどは口に出しては決して言へない。それよりももつとしたいのは藝術の上の話である。今日やつと氣がついたあの田舍に於ての自分の生活、彼が觀るともなく見て來たあの自然と自分の心持との交感の物語――それを話して聞かせたならば、渚山は果して、それを彼自身が思つてゐるやうな微妙な物語だと認めてくれるだらうか。またさう認めて、それをいつものやうに、早く書き上げるやうに自分を勇氣づけてくれるであらうか。いや、若しそれがほんとうに渚山の目から見ても微妙な物語だと信じられたら、或は渚山だつて、口では何と言はうとも内心には彼がそんな立派なものを書きさうにしてゐることに對して、嫉妬と敵愾心とを抱くかも知れない。それともこの話は渚山には全く了解されないものであるかも知れない。いや、それは決して渚山などを眼中に置いて書かるべきものではない……。しかし、しかし、たとひそれが書かれたところで、一たい誰がそれを活字にしてくれるだらうか。――それよりも、一たいその立派(?)な、何かしら心持だけははつきりあるがさてとりとめのありさうもないその話がほんとうに自分の手で書けるだらうか。

こんなふうに、彼は努めて「明日の話」を忘れようとして、その代りにふと思ひついてまだ何のまとまりもない物語のことをさまざまに思つて見て、心が妙に昂つて來る傍から、直ぐまたそれは根柢のない自信であることに氣がつかざるを得ないのであつた。それでも彼の藝術的昂奮は、ともかくもそれの梗概の項目だけでも何かに書きつけて見ようと思ひ立つた程であつた。さうして彼は、もう二週間以上も机に向つた事がなかつたことに氣がついて、それにもう原稿用紙は一枚も殘つてゐないのをも知つてゐた。それをこれから出かけて買はうにもそれだけの金すらも彼にはなかつた。五十錢の

銀貨を一つとつて、錢湯に入つて散髪をして煙草を一つ買へば、あとは明日の電車賃である。ただ、彼は時折二三行、或は五六枚も書きかけて放つてある原稿が、行李の蓋に一杯あつた。彼は押入のなかからその行李をとり出すと、それらの古原稿の反古を搜して、それを一枚一枚裏がへしに折り直してゐた。

偶然その反古にまじつて雜誌「殉教」が出て來た。それはさつきあれほど搜してゐたものであつた。それのなかには渚山の自信ある作「およね」が活字になつてゐるのである。彼は古原稿を折り直す手を暫くやすめて、「およね」の上に目を曝した。——しかし、それはもう渚山に對する優しい好意からではなかつたかも知れない。多分は新らしい製作を思ひ立つた藝術家が、危かしい自信を或は鼓舞する材料ともならうかと思つて身邊にある仲間の作品を檢分するといふ方がきつと適切であつたらう。

「およね」は、ばらばらと頁を繰つて見ると相當に長い短篇であつた。八九十枚はあるだらうと思へる。それは題に示されてある名の女を女主人公にしたもので、邦吉といふ青年がおそらく渚山自身ではあるまいか。さうして、これもどうやら渚山の例の淺草叢話のうちの一篇であるらしい。——それは淺草のいかがはしい女とその相手客とを泊める極く下等な安待合の娘と、そこへ出入りする客の一人たる邦吉とが、何時しか或る關係になつて、男はたうとう女の家に起居するやうになる。女はまだ十七かそこらで、その母親といふのはまだ四十に足らない寡婦である。この作の主題はその娘と娘の母親とそれから邦吉との間に構成された事件と、それから生ずる邦吉一人の内面的な葛藤である。形は可憐ではあるが早くから周圍の事物によつて心の頽廢してゐる娘は半年と經たないうちに邦吉を捨てて新らしい情人の方へ行く。邦吉は嫉妬のためにその娘の家から出ようとする。しかし嫉妬よりも未練の方が力強くつて、邦吉は未だその家を立去り兼ねてゐる。邦吉に對する娘の母親の同情から、邦吉はその家から逐ひ出されずにゐたのである。娘はその母親が邦吉を同情することに就て、この親子の間にはいつも口爭ひが絶えなかつた。邦吉は心に限りのない未練を殘してゐる娘のその母親の誘惑に墮ちて、しかしその次の朝にこの怖ろしいしかもそこにゐれば生活だけは保證されるその家から、何の光明も目當もなく逃れ出して來る……といふのがその小說の筋であつた。

ひろひ讀みを始めた彼に、渚山の作は忠實な精讀を要求した。渚山は[illegible]作者ではなかつた。[illegible]いたづらに狎[illegible]しないやうな[illegible]れた心境を[illegible]せるやうな言葉がところどころにあつた。人としてをかしい印象を與へる渚山も作者としては些ともをかしいところがなかつた。彼は少しも渚山を輕んずべき理由を發見しなかつた。一とほり彼はそれを讀み通して、しかしそれに就てもう一度それを考へ直した時に、容易に物に滿足しない批評家としての彼は考へながら、不滿であつた。さうしてその不滿はたんだんとつひに同情に變つて行くやうに感ぜられた。渚山の筆には圓熟してゐるし、その心境は疑ひもなく或る程度に達してもゐる。それは少くとも文學の上の修業を心がけてゐた人の作品であつた。取り入れることの出來るものは殘らず取り入れてあつた。さうしてその代りとしてあらゆる未熟が失はれてゐた。しかも未熟と一緒に生氣までが無くなつてゐるのはどうした事であらう。さういふ淺ましい事を書きながら氣品のやうなものがあるのは、ただ情熱がうすれてゐる結果としてそのやうに思へるのでないとは限らない。氣の毒な渚山は名

を成さない作家でありたがら、既に老大家のやうな作品をものしてゐるのである。あゝ、最も微細な老大家！　人としてをかしい渚山が作者として何一つをかしくない――どこと言つて缺點を指すことの出來ない作品。だが、どうしてただそれだけでいい藝術があり得ようか。それよりも最も氣の毒なことには、「小さなゾラ」のやうな構圖のなかに、「小さなトルストイ」のやうな意見のあることであつた。さうして渚山の精一杯の新鮮を以てしても、それは單に文壇といふやうなものから見てもう三年、たつた三年だけ遲れてゐる――さういふことを思はせるやうな作品であつた。事實、世のなかにはそのやうな作家や作品があるものである。――この氣の毒な渚山が、而も今、彼を勇氣づけてゐるのである、同輩の無力が人の喜びの一つであるとは、何といふ矛盾した人生であらう。

題は『花咲かぬ薔薇の話』……未だ誰も試みたことのない物語だ！

彼は筆をとつて書き初めた。書きつづけた。

限らずに書いた。その翌日も彼は、はがきで呼ばれてゐることなどは殆んど思ひ出さずに書きつづけた。――さうしてその夕方、遲筆な彼が珍らしく十七八枚も書いて、それを讀み返した時、その反古紙の裏に書かれた文字は、彼をただ絶望させただけであつた。それはあの田舍の家で、夜ふけて時折りに書いた詩のやうなものが、その次の朝には一晩のうちにその色と匂とが全く發散してしまひでもしたやうに、そればかりではなく全く無意味な寢言のやうなものであつたのを思ひ起さずにはゐられない。あの奇妙な發作の長いものが今つづいてゐたのである。

「駄目だ！」

と、彼は大きな聲を出してひとり言を云つた。

長い間その机の前に坐りつづけた或る男の言葉が彼に思ひ出された。それは強い個性と大きな體軀とを持つた彫塑家であつたが、彼は言つた。「自分に藝術の才能がなかつたとわかつたその時にとる事は解つてゐる――たつた一つの方法だ」この言葉のなかにどれだけの實感があるか、それともただ衒ひ氣味な、或はその人の自信を逆説的に表白するものであるか、そこまでは解らない。ただ兎も角も、その彫塑家がそのアトリエでロダンの作品の寫眞版を繰り示しながら、彼に向つて激越な調子で言つた數年前のその言葉が、彼に思ひ出された。自分自身のなかに何の才能もないといふことが自分自身で宣告され、自信が悉く粉碎されたとしたならば、さうして青年でありながら既にさうであつたならば、その生涯は全く生きてゆくだけの價値のないものになる。しかし多くの才能のない人間がうようよと世のなかに生きてゐるのは、その彼自身に對する幻滅が實にうまい工合に、しづかに一歩一歩忍び足で來るからであらう。さうして人人はその自信を少しづつ片端から徐徐とそぎ去られて行く。さうしてその人自身はそれを少しも氣づかない。――彼は机の前に坐つたままでそんなことを考察した。それから極く自然な順序として、いつものとほり彼の考察は、自己批判のうちに進められた。漠然として途方もない自信が、今現に目に見えて掌中の砂のやうに刻刻に失はれてゆくのを彼は感ぜざるを得なかつた。さうしてこの場合に、何かしら企てるといふことは、ただその自信を磨滅する方法を積極的に行ふといふことと同一義である。しかし事實無いところの才能に就て、いつまでもそれを夢みて待してゐるといふことはあまりに馬鹿げたことではないか。――藝術に志した人

人のうちに、どれだけ澤山の人がこのやうにして、藝術に對する夢想と自信とをその青春と一緒に消費し盡したか知れない。さうして今のおれがちやうどその時期に來てゐる。しかし藝術が出來ないとしてそれなら自分には外の何事が出來るであらうか。人の一生といふものはどうにかかうにか、どんな人間にでも過ごせるやうには出來てゐるであらう。しかしどうにかかうにかして過ぎるやうな生涯は考へただけでも怖ろしい。それでも才能のない人間にはそれより外に何も與へられてゐないのである。さうして人生の希望といふものは何時も、自分の力を信じて明日を夢みてゐるといふことである。——さう言へば、今に何かすると信じながらさまざまなことを考へ、さまざまなことを生活し、また當もなく創作をしたりしながら三十年以上の生活を送つて來た渚山、外側から見て何の幸福をも持たずに送つて來た渚山は、ただその事だけでも尊敬していいのではなからうか。もし渚山の己を知らない不聰明からその苦しみが少なかつたものとしても、それならば一そう渚山を笑つていいか羨んでいいか解らないことになる……。渚山ばかりではない、すべての人が生涯を送るといふことそれ自身が十分に悲歡すべき事であらう。才能ある人に對してはその才能のためにその生涯を尊敬すべきであるし、さうして才能のない人に向つては、才能なしに生涯を送つて來たといふ理由で同じやうに尊敬すべきではないだらうか。——さうして自分のごときは生涯の門出でもう既に息がきれさうになつてゐる——人人が讃美する青春といふものは今おれには我慢の出來ない一つの重荷である……。

I am sick of malady
There is but one thing can assuage:
Cure me of youth, and see,
I wil wise in age !

——彼はうろおぼえの詩を心のなかで思ひ出しながらそんなことを考へてゐたのである。さうだ、青春そのものこそ人生がヒステリイにかかつてゐる狀態かも知れない。今、自分に必要なものは老人のやうに平靜な透明な生活である。それだのに今のおれの生活はどうだ。青春だ、さうして荒んでゐる青春だ——この一瞬間のうちに三十年ほど經つてしまへばいいのだ。いや、すべての生涯そのものがこの一瞬間のうちに經つてしまつてもいい。おれは今自分で死ぬやうなそんなヒロイックな積極的な意志は全く無いだけで、けれども死がひよつくり突然に來てもさう驚きはしない……。

彼は自分の馬鹿馬鹿しいところまでか實感で、どれだけか時のやうな詩集であるかわからないやうな考へが、ぢつとしてゐればとめどもなくつづくのを凝視しながら、そんな思想が何一つ彼を救つたり慰めたりしないで、却つて頭を混亂させてゐることに氣がつくと、心持を變へるためにこれから友の家へ出かけて見ようかと思ひ立つた。しかし時計は間もなく十一時であつた。そこで彼は戸口へ出ると口笛で犬を呼んだ。こんなに無用に昂奮してゐる時には散歩でもしなければ眠ることも出來ないだらうと思つたからである。たとひ盜まれるものとて何一つない家でもまさかに留守番なしにはどこへ出かけることも出來ないし、また出かけて行くところとてもないから、彼は人どほりのない自分の家の前を、犬と一緒に行つたり來たりしてゐた。もう宵は昏ておぼろ月夜であつた。その月を見ながら歩いてゐると、あの田舍の生活——昨日から目の前に浮び出してゐた、けれども決して描き表はせない田舍のあの生活が、月を見ることで新らしく思ひ出されて、それが妙に懷しまれた。さうして何故もつと長くあの

ままであそこに居なかつたらう。どうして一層のことあそこのセピア色をした村の住民になつてしまはなかつたらう。何の目あてがあつてもう一度この都會へうろつきに出た自分であつたらう。さういふ氣持が感傷的にしみじみと味はれた。さうして心がだんだん靜かになつて來て、今夜は妻が歸つたならば田舍の話を——あの丘の話や、井戸端のことやそんなことを話し合つて見よう。さうすれば又何かと新らしく氣のつくことも出て來るに違ひないから……さう思ひながら彼はしばらくして家のなかへ這入つた。

　敷き放しにしてある寢牀のなかへ這入つて、もう一度あの書きかけた原稿を讀み直して見ようかとも思つたけれども、しかしもう一度自分の無能を見せつけられなければならないかと思ふと讀みかへすことはやめて、それでもその原稿とペンとを枕もとへ丁寧にそろへて置いた。

——あの感興もほんの發作的なものであつたやうにあの絶望もやはり發作的なものに過ぎないかも知れない。もう一度改めてゆつくり書いて見よう。おれにだつて何も出來ないと決定してゐるわけではない。彼はさう自分を慰めたが、ふと、諸山もこんなことを思ひながら寢るだらうかと思つてみて、その自分の大して意味のない考へがたまらなくをかしかつた。彼は聲を上げてゐる自分の笑ひ聲を自分の耳に聞きながら、この男は何といふへんな男だらう——さう自分の事を遠くから振りかへつて見た。

　自分のさまざまな思想や感情のなかでぼんやりしてゐた彼は、突然、犬の短い叫び聲に氣がついて妻が歸つて來たと思つた。それは妻の足音を聞きつけると犬が習慣的にさういふ吠え方をするのである。さうしてそれに答へて妻が口笛を吹くのであつた。しかしその晩は口笛の聲がしなかつた。けれども足音は遠くから聞えて來た。監獄の中にゐる人間は外界の物音に就て非常に鋭敏になるやうに、彼の耳もどうやら犬の耳のやうに鋭くなつて居た。足音はだんだん近づいた時、どうも妻の足音ではなかつた、しかしその足音は人通りのめつたにない彼の家の近くへ來てゐて、下駄の足音は急に低くなつた。その忍び足の下駄と一緒にポタポタと音を立てるゴム草履のやうな音が聞えて、そのふるひに二通りにみだれた足音が彼の家の前を過ぎ去つた——妻が歸つて來たのではなかつたのであらう、彼はさう決めようとしてゐた。……十分とは經たないうちに、もう一人の足音がして、さうして、今度は前に來た方角とは反對の方角——いつも彼の妻が歸つて來る道ではない坂の上の方から、足音がひびいて來て、それは彼の家の前へ來ても忍び足にはならなかつた。——戸があけられて居る。いつもとは違つて犬は甘つたれる聲に對しても別に何とも相手になつて貰へない。しかし犬は吠えない。犬は足音でちやんとそれが誰れだといふことを知つてゐるからだ。さうして十分前に足音がした時にも犬はそのとほりであつた。訝しさが彼を不快にしたから、彼は妻には一言も聲をかけなかつた。ただ突然 おい。今夜はいいおぼろ月夜だらう——とさうぼんやりたづねたら、妻はきつと、ええと何氣なく答へるだらう。その時かういふ風には男は女をつれて女は男をつれて歩くものだ。それがほんとうだよ」さう言つてにやにやと笑つたら、妻はどんな顏つきをするだらう。自分を一瞥して「この男の耳は何と不恰好だらう」と思ふだらうか……彼はそんな風に考へた。さうして何時までも默つて、妻の歸つたのを知らないもののやうにしてゐた。彼は、しかし疑深い注意をもつて、隣の部屋へもう這入つて來てゐる自分の妻の樣子に氣をつけてゐた。

かの女はどうやら長火鉢の前へ倚りかかつた

まま凝手としてゐるらしく彼には思はれた。彼がもう寢入つてゐるとでも思つたのかかの女も亦何とも聲をかけなかつた。ふと、彼に一つの別な考へがあつた――ひよつとすると妻は昨晩うちから來たあのはがきを見てもゐたのだから、劇場からの歸り道を自分のうちへ歸つてお母さんと何か相談をして來たのかも知れない。さうして母親がかの女をそこまでおくつて來たのかも知れない。さうして家事上の心配でかの女は今考へ惱んでゐないとは限らない……。さうだ――

「おい」彼は襖越しに呼んで言つた。「お前はうちの方へまはつて來たんぢやないかい」

「あら、起きていらしつたの。」不意に言葉を掛けられてひどく驚いたらしかつたかの女は答へた。「いいえ。なぜ？」

豫想した答を得なかつた彼は再び默つてゐたが、もう一度言つた――

「お前は今日は坂の上の方から來たやうだつたね」

「え。よく解つたわね？」

「わかるさ。何でも解るよ。足音がそつくりよく聞えるのだからね。――何だつてあんなさびしい坂の上からなど歸るんだい」

「……でも温かでいい月夜なのです。電車のなかで知つた人に逢つたの。ちやうど新見附で降りる人だつたので、私も一緒に下りたの。その人はさびしいところをそこまで送つて來てくれたわ」

女はすらすらとさう言つた。――半分か三分の一だけほんとうを言つてゐる、さう彼は思つた。もしさつき坂の下から一度歸つて來た足音さへ聞いてゐなければ、みんなほんとうを言つてゐると思つてもよかつたのだが。しかし彼はそれ以上もう何も言はうとも聞かうともしなかつた。ただ、枕もとにあつた例の原稿を取り上げるとそれをめりめり破いてしまつた。

「どうなすつたんです」

女がそんなことを言つたのに對して彼は落着いた聲で答へた――

「なあに。いつもの出來そこないの原稿をひき破つたのだ。――お前のせゐぢやないよ」

彼はさう言つてから、起きて妻のゐる部屋へ這入つて行つた。果して長火鉢の前に凝手としてゐる妻をそこから立ちのかせて、火鉢の抽出しを一つ一つさがしてみた――それが彼の妻には不審らしかつた。

「何です？」

「眠り薬だ。まだ一服ぐらゐは殘つてゐた筈だ」

妻の母親は縁側の日向にうしろ向きで坐つてゐた。彼は木戸をくぐりながら竹垣の破れから針仕事をしてゐるらしいかの女を認めると、聲もかけずにつかつかと家のなかへ這入つて行つた。表戸をあけて五足歩けばもう家の中心に立つてゐるほどの小さな家で、彼の妻のいつでも坐つてゐるとほりの緣側に突立つてゐる彼をふりかへつて見上げて妻の母は言つた――

「おや、よく來ておくれたね。來ないのかと思つたから、今出かけて行かうと思つてゐたところだつた。これを早く仕上げてからと思つて……」

かの女はやはり針仕事をしてゐた。これをと言つてつまんで見せたものを見ると、その袷は赤と黒との市松格子になつた柄の荒い銘仙であつた。もう全く出來上らうとしてゐるところで、その着物には黒繻子の襟がかかるものと見えて、裁縫をする人のわきにその布があるのを目敏く認めながら彼は、自分で座布團をとつて敷きながら言つた。

「ひどくいいきな着物だな。誰のです、一たい？」

「まあ、誰でもだらうね。」かの女はさう言つて笑つて見せた。その笑ひ顔に悪意は寸毫もなかつたがどうも野卑な印象を與へる笑ひ方であつた――この笑ひ顔を自分の妻の母が――そんな笑ひ顔をするのを彼はいつも不愉快に思ふのであつたが。さういふ笑ひ顔でちらと彼の方を一瞥してから、針を動かす手の方へもう一度視線を返したかの女は、「私はどうもこんな柄はいやだね。第一、品がわるいぢやないか。」

「さうだな。」彼は言つた。「僕もいやですね。一たい誰の着物です―」

「いゝ―」かの女はもう一度彼の方を訝しげにちらりと見て「これやお前の見立てぢやなかつたのかい。私はまたお前がこれを知つてゐてわざと私に聞いてゐるのだと思つてゐたよ」

「僕の見立て？ いやだね、そんなのは。――それやあれですか。弓子の着物ですか。」

彼はそれが弓子――彼自身の妻のものであつたとわかると心の深いところから不快が湧き出してくるのを感じた。弓子は今まで自分で給金をもらつては居ても、たとひ銘仙でも着物ほどのものを自分勝手でこしらへるといふやうなことはなかつたし、たとひ何を買ふにしてもその柄なり好みなりに就ては何一つ彼に相談しないことのない弓子であつた。その女が、いつそれを買つたかは知らないが何にしてももう出来上らうとまでしてゐるそれに就て一言も話しもしない。それはそれでいいとしてもこの好みは一たいどうだらう。似合はしいものならたとひどんなに人目に立つものでもいいと考へる彼ではあつたが、しかし極くあたりまへの女學生あがりのやうな風俗をしてゐればともかく間違ひのない女が柄にもなく、なんのつもりでこんな藝者――といつても安つぽい藝者まがひの身装をしようといふのであらう。場末の素人芝居のやうな一座のそれも下つ端の方へ加はつてそれでいつかどの藝人にでも成り濟ましたやうな気持であるかと思ふと腹立たしかつた。彼がそのやうにして黙つてゐるのに對して弓子の母は、見たところそれが彼のいつもの無愛想な沈默と大して相違がなかつたので、別に氣にも留めないらしく仕事をつづけながら、その縫ひ物に一段落をつけてから、お茶を入れて、その所謂相談事を初めた。――巻紙の切れのやうなものを先づとり出したが、それはかの女がその娘の家庭のためにさまざまな方法で用立ててあつた時時の金額とそれの用途との心覺えであつた。かの女は彼に向つてその時折の回想を要求するやうにくどくどと説明をつづけた。なるほどそれらの金は皆うろ覺えながら彼にも思ひだせるものばかりのやうであつた。どうでもいいことである。結局それをどうしようといふのであらうか、話は結末だけにしてほしかつた。外の事ならばともかくも金銭上のことは明確でなければいけないといふ考へは彼にとつては不可解な思想であつた。けれどもこのくどい女は、世俗一般の風習として金銭上の明確を大へん追及するのみならずまた一つ一つ順序立ててまはりくどく說き出さなければ思ふことの言へない性質の人であつた。それにしても今日の話はいつもの用件のものよりももう一そうくどいやうに思ひながら彼は、昨夜の足音のことや今日の市松格子の着物のことなどの方をもつと明確にしようと思ひつづけてゐるうちに、このどうでもいい方の問題はやつと結論に達したらしかつた。

「それでねえ、結局、」かの女は、問題に就てあまり不熱心な――今まで殆んど一言も返事らしい返事をしない彼を促すやうに彼の名を呼びかけて置いて、それから長煙管で一服煙草をつけて、に吸ひ込んでから話しつづけた。「それでねえ、累計、今もいふとほりお前たちの借金は皆で百九十六圓あるのさ。まあざつと二百圓だねえ。

このなかで私が知つた人からお前たちに去年の暮に借りて上げた五十圓といふのは今月が期限になつてゐるし――一週間や十日のことはそれやわけを話せば待つてはくれるがね。お前たちの借金にしたところが、私の方にお金でもあれば――まあ假りに私たちがお前のお父さんのやうな身分であつたらだねえ」とかの女は、彼の父母が彼等に冷淡だといふ日ごろの不平をちよつとここに洩らして「それは可愛い娘とお前とのしでかした借金だもの、それも贅澤でこしらへたとか不始末とかいふのではなし、二百はおろか、それが千圓でも、あるものでさへあれば、私たちがどうにでもして置くのさ。それもお前にしつかりした當でもあつて何時何時までとでもいふのなら、それや何とか外に方法も考へられもしようが、さうでないかぎりはかうして今のままで居れば今に共倒れですよ。――それでね、この際一そうのこと今までのものは一先づ片をつけてしまつて置いた方がよからうと思ふのだが、さうかと言つてそれをするいい方法もなしさ、私もほんとうに困つてしまふよ。お前に何か考へがあれば聞かしてもらひたいのだがね」かの女は輕くさう言つたが別に彼に向つてその答を聞かうといふでもなく、その代りにはちよつと苦笑をして見せて直ぐ言ひつづけた。

「どうせお前のことだから、考へのないことは解つてゐるしね、この間からお父さんとも相談をして見ましたがね、お父さんの言ふには、――まあ默つてお聞きよ、お前が贊成だかどうだか知らないけれどもね。お前が住むと言つて買つた田舍の地所だね、あの畑を抵當にしたら二百や三百の金にはなるのだから、それで三百圓も借りて、今までの借金の方はきれいになしてしまつて、殘つたお金のある間にお前も精一杯何か仕事をして見たらどうだらう。それにしても高高百圓ぐらゐ殘つたのでは、今のままでは二ケ月とは無いのだから、一そう今の家を疊んでしまつて、――あそこはお前も氣に入つてはゐないやうだし、それに弓子がうちにゐないのだからお前の不自由も氣の毒だしね、一そう今の家を疊んでしまつて、さうしたら弓子はこの家へ一寸預かつて置いてもいいのだがね――これもお前の考へ次第だけれど、お前も一緒にこの家、來たつてそれは構はないが、この通りの家だから机を据ゑるといつたところだつてなし、第夫婦では寢るにも不自由といふわけだらう。[illegible]はいいけれども晩になると、お父さんはそれあれだ――毎晩十時まで謠をうたふだらう。お前はきらひだといふからあれもうるさいだらうしね。で、お前いやでさへなければどこか近いところへ一時下宿でもするのがよくはないか。弓子を下宿へつれて行くといつても、第一二人ではやつぱり金がかかる上に、夫婦で下宿屋にゐるといふのはをかしなものだよ――尤もお前がさうするといふならそれもいいけれど。それで若しお前ひとりなり或は二人でなり下宿をするならつい一町とはない近いところに、さうさあの軍隊へ出してゐるパンを拵へるうちの横を曲つたところに下宿があるだらう。あそこの親父といふのがお父さんの謠の仲間でね、心安いから私は昨日ちよつと行つて聞いて見たら、ちやうどいい部屋があつてね。明るい南向きの一日中日の當るところだね。四疊半だけれどもなかなかいいよ。十七圓だとさうな、お前も一度よく考へて見ていやでなかつたら家を今月限りで疊むやうにして見たらどうだらうね」

彼は今まで默つて聞いてゐたが何とか返事をしなければならなくなつた。さうして彼には別にどうしようといふ考へとてもなかつた。要するにやはりどうでもよかつた。

「然う、僕はどうでもいいのですよ」

「たよりない男だね、お前は。どうでもいいと

言つたつて自分の事だのに」

「フ、フ、フ」彼はかの女と一緒に短く苦笑したが、かの女たちの考へたことが一とほりいい方法のやうに思へた時に彼は尋ねた。「で、何ですか。そのことはもう弓子には相談したのですか」

「四五日前の日にね、あれが使をよこして何でも樂屋の頭取の倅とかが死んだといふので樂屋中香奠集めだが、お金がないから五圓ぐらゐ欲しいといふので、私が都合をして持つて行つたものだから、その時ちよつとその話をしたが、あれはお前さへよかつたらさうしたいやうな話の樣子だつたよ」

「へえ？ 四五日前に？ 僕にはそんなことはあなたにお會ひしたことなども、何とも話しませんでしたよ」彼は妻に對する大きな不快のなかにまた新しいデテイルを加へたことを感じた。その彼の顏色に氣がついたのかどうか、かの女は自分の娘を庇ふやうに言つた――

そんな話をするとお前がうるさがるものだから、みんな、私にさせるのだね。何にしてもお前がさうしていいと思ふならさう決めようぢやないか。月のうちと言つてももう少しだから私は明日からでも道具を纏める手つだひに行つて上げるよ」

「え。……だけど、今直ぐと言つたところで、そのお金がなくつてもいいのですかね」

「それがね、お前が田舍の地所でお金をこしらへるつもりなら、と言つても直ぐには出來ないだらうから、それまでのところならそれを當にして何とか私の方で工夫して上げるよ――ともかく、一ケ月だつて今のやうにしてゐれば損だから、さうと決めたら月のうちにした方がいいだらう。田舍の地所を抵當にすることに就ては、お父さんの言ふには、考へるだけは考へても見て上げるが自分がそれを世話するのはやめたいと言つてゐた。お前のうちでまた何とか思はれてはいけないと思ふのだね――貧乏人のひがみでさ」

彼とかの女とはそれぞれのことを考へてちよつと沈默をした。

「江森さんはどうしたらうね、それやさうと」かの女は氣まづい沈默を切り上げようと話題を換へた。「さうかい。お前の方へもしばらく來ないのかい。うちへも暫く來ない。さう前月の二十日ごろには毎晩のやうに來てゐたのだがね。お前知つてゐるかい、あの人はなかなか謠がうまいのだつてね」

「謠が？ さうですか。そんな隱し藝があるのですか」

「隱し藝どころか、玄人だといつてゐるよ。よく枯れたいい聲でね。うちへ來る師匠と「藤戸」とか何とかいふのを謠つたが、師匠も感心をしてゐた。あとで、師匠があの人はよほど稽古をしたらう、あれなら手ほどきぐらゐ十分出來ると言つたものだから、その次に來た日にお父さんがその話をして――さうと江森さんにね、こんなに謠のはやる折だから、昔も一つ貧乏をしてゐるより謠の師匠でもしたらどうだ。弟子は世話をするよつて、そんなことを言つてゐたよ。お父さんもあけすけな人だから條詐なことを言つてね、江森さんもその時に笑つてゐたがそれつきり來ないのだがまさかそれが氣に入らなかつたのではなからうね。――私たちには、一たいお前さんたちの心掛はちつとも解らないよ」

諸山ほどの圓滿な常識家でもやはり變人に見えるとすれば、この女の目には彼自身などは全く見當がつくまい。さうして彼自身にさへ、解らない……。それにしても諸山がどんな氣にしろそんな垢抜けのしたものを持つてゐながら今日までそんな吹聽を一つもしなかつたといふことが、彼にとつては諸山の性格に或る好もしい

陰影を添へるやうに思へるのであつた。

うららかに晴れた早春の午後三時ごろの日ざしは、今まで閉讀してゐた北向きの小さな窓一つある部屋から出て來た彼の目には眩しいほどであつた。もとより彼の心持に對しても眩しかつた。人通りの賑やかな坂道の両側の店にはショオウヰンドウのけばけばしい裝飾が、自分の足もとを見つめて歩いてゐる彼の目を時時その方へ引きつけた。――それほど華美な色彩であつた。目に觸れるものは何もかも、世界といふものは一たいこんなに明るかつたか知ら――こんなに明るくつてもいいか知らと、そんな氣持を起させるやうな人氣であつた。世の中はこの二三時間のうち、すつかり春になつてしまふかと思へる日であつた。さうして冬の間は澱んで流れなかつたためにふやけたやうになつてゐた彼の心が少しづつうごめいて來るに從つて、その困憊の度が一そう濃くなるやうに思へた。ただその氣持ばかりではなく外部の事情もだんだんと切迫して來てゐて、いやが應でもこの行きつまつてゐる彼の生活が一度に堰を切つたやうにくづれて來さうな豫覺――といふよりも寧ろ事實上の兆があつて、それが彼の心のなかに小さくはあつたけれども濃い影を落してゐるのを彼は感じた。――うちへ歸つてもあの薄いうす暗い部屋のなかに、ひとり閉ぢこもつて考へるにはあまりに緊迫した問題で、恐ろしいと言はうか、煩はしいと言はうか、一種不氣味にうとましいものであつた。彼は一たん家へ歸らうとした足の向きをかへて、直ぐ道のわきにあつた土手に登つて行つた。それはこの部落の中心にある古い城趾の廢墟の一部分であつた。彼は心にわだかまりの無い人でもあるかのやうに、もう青んでゐる若草の上をゆつくりと歩きながら、努めてその觸れたくないことを避けてゐるのに、しかし彼の心のうちには隠された影が一刻一刻と擴がつて行つた。彼は歩みをとめて佇んだ。それから草の上に坐つてしばらくするとそこへ仰向きに倒れ横たはつた。空は青いといふよりも紫色をして視野のかぎりでは雲一つない――さういふうららかな日に、自分の妻を疑はなければならないとは何といふ忌忌しいことだらうと彼は思つた。一たいと彼は考へて見た）自分は何時しみじみと妻と語つたことがあるであらう。田舍にゐたとき以來、この都會に出て來てからは殆んど互にしみじみと語合つたことはないやうな氣がする。いろいろな話をしても妻は妻の話題を話し、彼は彼の話題をしか語らない。その上に朝早く出て行つて夜遲く、わけてもこのごろは夜更けてから歸ると、話をする時間さへもない。それならば自分はいつしみじみと自分の妻のことを思つたらう。實際、それとてももう永いことそんな心持になつたこともない。いや近ごろではそんなものの存在をさへ忘れてゐることが多かつた。自分の仕事のことやそれに關聯して諸出のことなどにかかりきつてゐたではないか。さうして妻と話すよりより以上に諸出と話をしたではないか。かの女とても亦自分の夫より外の誰かと、それが男であるか女であるかは解らないが、ともかく誰かと、夫とより以上の時間を又話題を話し合ふことであらうから、して二人の間には互にそれぞれの別の世界が開展してゐたとて、それは決して不自然ではなかつた筈である。昨日までは――文字通りに昨日の夜あの二重にひびく足おとを聞くまでは、全く忘れてゐたとも言ふべき自分の妻を、疑惑によつて急に重大視するといふことが一たい不合理なことである。貞操といふことはそもそも、何人が何人に向つてでも要求するやうな性

質のものではない筈である。それはすべての贈物と同じやうに先方の好意だけがくれるものである。かの女が自分に好意を持たなくなりその結果その一番いい心の贈物である貞操を自分にくれないからと言つて、それを誰が誰に咎め立てすることが出來るだらうか。無理強ひをして贈物を得ようといふことが間違ひではないか――かういふ風に、自由にむしろいくらか冷淡にこのことを考へることが出來るといふのは、自分自身既にかの女に情熱を持たなくなつてゐるからではないだらうか。或はまたこれが未だほんの疑惑である間から、かういふ風にいくらか理性的に考へられもするのではなからうか。さうだ、それはいよいよ事實になつて目前に現はれて來ないうちは、自分が自分の妻に對してまだどれだけの情熱を抱いてゐるかといふことは自分自身にも測れない。――つまりはその程度にまで自分自身も冷たくなつてゐると言はなければならない。さういふ程度の自分が、況んでどうして單に自分の妻であるといふなほ事實を盾にして、どうしてかの女の貞操を強ふる權利があるだらうか。それにしても自分は、かの女に向つてこの疑念を打ち明けて、かの女に何事かを歎願するだけのものがあるならば歎願し、或はまたそれだけの情熱が既に失せてゐるならただの友人としてかの女に何か忠告でもするのが至當であらうか。忠告？ さうしてそれはどんな忠告だらう？ 言ふべきことは何もないやうな氣がする。世間普通だけのことならば今更にそんなことを言はなくとも、一個の人格としてかの女だつてそんなことぐらゐは心得てゐる筈である。自分を捨てて行くならば捨てて行くがいい。自分とても亦それを追つかけるだけの熱心はないであらう。それならば自分をこんなに惱ましてゐるものは何であらう。やはり愛着ではないであらうか。それとも單に男性としての名譽を考へてゐるのであらうか。どうも後者に近いやうに思へる。さうして今もしかの女を憎むとすればそれは自分の愛を裏切つたといふ憤ではなくつて、自分の名譽を――世俗的の名譽を壞すといふいやしい憤である。而も男の名譽を壞すと同時に、その妻も亦女としての世俗的の名譽をもやはりすてにかかつてゐる仕事ではないか。それならばかの女が女としての名譽を顧みず、又ともかくもかつてかの女が愛した男の名譽が傷つけられることを十分に知りながら、敢てかの女にそんな行爲をさせるものは何か。それはかの女のなかに新らしく湧いた情熱に違ひない――さう思つて來ると、彼の心中にもやはり嫉妬が萌え出してゐることに氣がついた。いや、今初めて萌えたのではなくてずつと前から、この問題がそもそもただの嫉妬であるのを、さう如實に考へることが自らを卑しくすると思つてまはりくどく、さまざまに考へて見てゐるのではないであらうか。……そこで彼は永いことその一點に就て考へ耽つた。と同時に彼のこの疑念はほんの疑念にしかすぎなくなつて、それを問題にするにはあまり根據が薄弱で、――二人で毎晩歩きまはつてゐるためにこの頃のかの女の歸りが遲いのであらうといふ事も、あの下品な市松模様の着物が新らしい相手の好みだらうと思ふ事も、さてはかの女が自分と別れるための下拵へに先づ家を疊まうと思ひついたらうかといふ事も、すべては彼自身の恥づべきまはり氣からの蜃氣樓ではないかと思ひ返しもした。さうかも知れない、と彼は考へながら心のなかに思ひ當ることがあつた。それはかつてその運動のために投獄されたことのある社會主義者の一人が彼に語つて聞かせた獄中生活の事である。そこでは多くの囚人がきつと自分の妻が自分の留守のうちに不貞をしてゐるであらうといふ疑念

に惱まされる。その夢を見る。それが嵩じて面會に來た妻に向つて突然かう女を面責するやうな實例が屢あるといふのである。彼はその話を心のなかに思ひ出しながら、さうした自分のあの不健全なこの兩三年間の生活は、確かに囚人の生活のやうに自分の心を不健全にしてゐるかも知れないと彼は思つた。——かうして自分は自分の妻を信じようとしてゐるのだ。それが若し自分の信任に女が背いてゐるとしたら、それは自分の恥にはならなくつてかの女だけの恥になるだらう。そんなことも考へた。

上手の直ぐ下をとほる電車が轟きながら往來するのを聞きながら、彼はそこで二時間近く、このうららかな日に似合しくないことを思ひ耽つてゐた。

さまざまに考へた上で彼が心に決めたことといふのは結局ただ、妻にはこの事に就て何も言ふまいといふことであつた。何もかも手を束ねて見てゐてやらうといふことであつた。それより外には方法もないことではあつたし、たとひどんなことがありさうであらうとも唯出來るだけ冷靜にそれを觀察してゐてやらうといふことであつた。どうしていいか判らない人間にとつてただ出來ることは、そのどうしていいか判らない周圍の事情を鋭い觀察を以て一一見遁さずはつきりと知るといふことだけであらう。その代りには、一旦何ごとかを言はざるを得ないやうな立場に追ひ込められた時には、何日の何時には何處でどんな疑はしい事があつたし、又、何日の何時には何があつたといふ彼の觀察を順序立つて述べることだけは出來るやうにして置かなければならない。さうすることによつて自分が、以前から默つてこそはゐたけれども決して何も知らずに馬鹿にされてゐたのではないといふことを、その時になつて思ひ知らせてやらう。ここまで考へて來た彼は、自分の妻に對していつの間にか戰鬪的な、それも極く消極的な方法を擇んでゐる自分がみじめにも淺ましいものに思へてたまらなくなつた。しかし、俺は、と彼は考へつづけた。俺は何も別に探偵のやうに努力をしてそれをつきとめてやらうと思つてゐるのではない。ただ今までと同じやうに自然と耳目に觸れることのうちから自分に氣のついたかぎりの事を、自分の疑問を解決するために役立てようといふまでである——から自分で自分に言ひわけをしてみてもそれは一向に言ひわけにもなりさうにもなかつた。さうしてたとひ何をしてゐても一たい[illegible]に出來てゐるかの女の性質[illegible]、巧に[illegible]けられるやうなことの出來るわけはなし、直ぐにも尻尾を出してしまふだらう。かう思つた時に彼はふと妻がをかしくまた哀れなやうな氣がしないではゐなかつた。さうしてもしこの心持の方が出たとしたなら彼は彼の妻に言つたかも知れない。——おい、俺は何も知らない顏はしてゐるが實はお前の見張をしてゐるのだぞ。何か惡い事があるならなるべく上手に俺には勘づかれないやうにやつたがいいよ——彼はたとへば自分の役割の白の稽古をする役者のやうに、そんな言葉を自分の心のなかで呟いて見た。然しこんなことを若し自分が妻に向つていふとしたら、それは恐らく妻を愛してゐるからでも憫れんでゐるからでもなく、ただ自分自身が物事を正面から見られないといふ臆病な卑屈な一時のがれの[illegible]からでないとは自分でも言へない。

俺には本當に現實家の強い精神が缺乏してゐる。自分の首が斬られようといふ斷頭臺の階段の數をかぞへながらいつもの足どりで上つて行く精神だ。人生のすべてのものを驚かずに悲しまずに誇張や感情の霧を透さずにはつきり

と凝視することさへ出來たら、それ自身が既に一つの解脱だと言へるかも知れない。どうにでも成るやうになれ――から叫んでゐる彼は、ただ半ば自分を捨てかかつてのいひ草である。どうにでも成れ、どこへ行つても道はあるといふのではない。彼にとつては、どうにでもなれ、何れはどこへ行つても行きづまりだからといふだけのことである――このやうに彼は自分のことを一人稱で考へたり三人稱で考へたりしながら、彼の物思ひは時時ひよつくり思想の大通りへ出るかと思ふとすぐにそこを横ぎつて、またしても妻に對する疑惑の暗い拔裏の方へ迷ひ込んで行つた――それにしても、と彼はまた思ひつづけた。こんなに自分を惱ませるこの出來事が若しもう起つてゐるとしたならば、それは一たい何時から初まつたことであらう？ 新らしい記憶の、しかし新らしいにも似合はず、ぼんやりとしたものを辿つて遡つて行くうちに自然と思ひ出されて來るのは、彼が大川秋帆に逢ふために樂屋へ出かけて行つた日のことであつた。――樂屋のなかで、かの女は何となく冷やかに彼に對したやうに思はれる。いやさうではない。それは彼自身があのやうに一種こじれた氣持から妻に對して無關心な態度を示したことの反映であつたらう。さうして物慣れない場所へ踏み込んで行つてどぎまぎしてゐる彼をろくに顧みようともしなかつたやうな氣もするけれども、それは事實かの女がその役割の時間が迫つてゐたために忙しかつたからに違ひない。疑ひをもつて見れば何もかも怪しげに見えるけれども、もしあの頃からして既にそんなことがあつたとすれば、秋帆のあの時の態度を說明するために、それは橘朱雀に新らしい情人が出來たからだといふやうなことを、かの女の口から彼に傳へはしないであらう。でも何かかの女のなかにも自ら省みてやましいところがあつたならばたとひ他人のことでも氣が射して、そんなことを大して必要もないときに言ふ筈はなからう。だがそれは解らない。一たい一般の人間といふものは直ぐ目の前で自分のことと全く同じことが他人によつて行はれてゐても、自分の場合のことはその間全く忘れてしまつてでもゐるかのやうにごく平氣で、總ては自分自身への批判であるべき言葉を自分とは何の關はりもなささうに喋りちらしてゐるものである――平俗な人間と多少でも教養のある人間との相違の重大な點の一つとして、これは數へられることである。さうして女の場合には殆んど全くこの自分自身に對するまはり氣、或は良心的射の作用は絕無と言つてもいいものである。彼の妻の場合とても、だから、朱雀のことを手きびしく批判してゐたからと言つてその同じ陷をかの女が持つてゐないといふ證據には決してならないであらう……。――黑いこの建物と築いては打壞し打壞してはまた築き上げて彼の物思ひは例によつて切りがなかつた。

朱雀に逃げられさうになつてゐるといふ秋帆の硬ばつた顏といらいらした樣子とが、事新らしく、彼の眼前へ闇のなかに見えて來た。

かの女はまだ歸つては來なかつた。歸つて來て別にどうといふわけもなく、だから待つてゐるといふのでもないのに、やはりかの女がまだ歸らないといふことが彼にとつて問題であつた。煙草の火をつけたマッチの光で枕もとの目覺し時計の表を照して見ると、よその時計が十二時を打つてからもうよほど時が經つてゐるやうに思ふのに、この時計ではまだ十五分過ぎたばかりであつた。――かの女は、いつも遲く歸つてそれほどおそくないやうな顏をしようと思つて時計の針をおくれさせて置くのぢやないかな？ ふと、そんなことまで彼には考へられた。

家のなかで何か物音がしたやうな氣がして彼の淺い眠がさめた。節穴や隙間だらけの戸から洩れる光の具合では朝ももう相當に遅い時刻らしかつた。彼はもの憂い手を差し延べて枕もとの襖を開けた。臺所の方から陶器を洗ふ音がして、昨夜はたうとう歸らなかつた妻が、多分今のさつき歸つたらしかつた。枕もとの時計は、八時少し前であつた。呼び掛けるのも忌々しいやうな氣がして彼は、目を覺したままやはり床のなかでまだ十分にはさめ切らない睡を感じながらぼんやりとしてゐた。けれどもどうももう一度眠れさうもなかつた彼は、たつた一本だけ殘つてゐた煙草へ火をつけて、睡眠不足のせゐか頭が鈍く痛むのを感じた。彼はわざと妻に聲を掛けないでゐるのだけれども、その沈默が奇妙に腹立しくなつて、それかと言つて今更何とか言ふことは一そう業腹でもあるし、若し妻の方で彼の起きた事に氣がついてゐるのならこの際何とか向うから聲を掛けなければ、止むなく彼の方から吐鳴りつけなければならないやうな氣持になつた。吐鳴つてもいいのだけれども、彼は朝になつてやつと歸つて來た妻に對して何と言つて吐鳴つていいのだかその言葉がわからなかつた。その言葉はわからないとして、假りに何と吐鳴つて見やうとしたらと彼はそんなことを考へてみてゐるうちに、もしそんなことでもしようものならこれで朝つぱらから大變なことになると氣がついた。彼の言葉に對してかの女がやはり何か激しく言ひ返すとか、或はめそめそ泣き出すとか、で結局は喧嘩をしなければならないことになる――つい半年も以前にはそんな激しい喧嘩をよくした彼は、いつの間にかもうそんなことをするだけの情熱も無くなつてゐるのか、今日では妻と喧嘩をすることを彼は大變に恐れてゐた。彼には彼等が喧嘩をおつ初めた時の妻のいつもの表情が何とも言へず不愉快だからであつた。かの女の言葉は皆それぞれに舞臺の上の白のやうだし、その表情もどうしても心の眞剣が顔や聲に出て來たものと思へないやうなたまらない身振りであつた。彼はそんな折のかの女の様子をひよいひよい目の前に思ひ浮べて「女優の夫」といふ言葉を自分の心のなかではつきりと意識した。さうしてこれは確に當ける――とそんなことを思ひながら、もうすつかり灰になつてしまつてゐる吸殼を灰皿のなかへ捨てた。

十能へ火を盛つて妻は臺所から六疊の部屋へ這入つて來た。「いい天氣だな」と思つた彼の視線に妻は昨夜かの女の様子が違つてゐたあの着物をもう着てゐることに氣がついた。似合つてゐるといふのだか不似合なといふのだかわからない、で、見なれない姿に感じられた。彼は十能の上の火を見つめてゐたが、さうして坐つてゐるも炭をついで火の上へ灰を落してゐたが、どんな目つきをしてゐたか妻には見えなかつた。

「あら。もうお起きになつたのね」

かの女は、今それに氣がついたやうにそんなことを言つた。彼はそれには答へないでほんのしばらくして言つた。

「もう一本煙草が吸ひたいものだね」

それから空の袋をくしやくしやに丸めて、別に大した感情を込めたつもりもなく、それを[illegible]の下の方へ投げた。

「そんなに皮肉をなさらなくとも、買つて來いと言へば買つて來ますよ」

かの女は少しばかり聲を險しくしてさう言ひながら、煙草を買ひに出かけて行つた。

二人はそれつきりしばらく口を利かなかつた。さうして默つて向ひ合つて朝の食事をした。近所の時計が十時を打つのを聞いて、彼に

ふと昨夜氣がついたあの目覺し時計の針のことを思ひ出して、未だ片づけてない隣の部屋の枕もとの時計を持つて來て、それを茶箪笥の上へ置いてから時間をくらべて見た。疑はしいと思つたのは、しかしほんの五分とは遲れてはゐなかつた。

「わたし今日は休むのよ」

彼が時計をそこへ持つて來たことを何と思つたものか、妻はそれをちらと一目見てさう言つた。しかしその聲はものやはらかで今までの永い沈默が重荷になつてゐることを表してゐた。それに對しては自づと彼も何か答へなければならなかつた——

「何故？」

「でも、ごたごたしてゐるの。——だからわたし今日は休むつて言つて置いて來たわ——何でごたごたしてゐるのだか一向わからない。けれども彼はそれを聞き返さうともしなかつた。かの女はそれで受答へのない話に拍子拔けがした形であつたが更にひとりで喋りつづけた。「朱雀さんかね、今度もうやめるのよ——役者はやめてしまふんですつて。何でも大川さんとは別れるらしいのね、默つて聞いてみると朱雀が一座から脫退するに就て、殆んど朱雀の人氣だけで賣り込んでゐる大川秋帆の一座は、朱雀が居なくなると一緒に自然と座主から見放されることになるらしく、この事は兼ね兼ね分つてゐたらしいのだけれどもたとひ暫くの間にしたところで一座の結束を固くして置きたいと思つた秋帆は、昨夜まで誰にもそれを洩らさなかつた。昨夜はねてしまつてからそれを一座に披露したので、その相談のために昨晩夜が更けてしまつて皆して樂屋に泊つたのだ。——さういふ風にかの女は昨夜歸らなかつたことの說明をした。

彼はかの女の話には別に大した興味がないとでもいふやうに、火鉢に肘をついたままでしきりと小さなささくれを氣にして拇指の爪を嚙んでゐた。

「それでゆうべ皆して合議をした結果といふのはどういふのだね」彼はよほど暫くしてから思ひ出したやうにさう尋ねて見た。

「それがね……」

かの女はそこでちよつと言葉を區切つて、少しゆつくりした眼つかひで彼の顏色を驗して見ながら、唐突な調子だつた——

「わたしもう役者はやめて仕舞はうかと思つてゐるの」

その言葉とその眼つきとは、素直に彼の意見を徴してゐるやうにも看做されたし、またちよつと彼の氣を引いて見るといふやうにも取れないことはなかつた。

「それは又どういふわけだらうな——」

「あそこがやめになつたら皆は淺草へ出るんですつて。皆を路頭に迷はせるといふので、殘つた役者を秋帆が淺草の興行師へ賣り込んだのね。でも、わたし淺草へなんぞ出る氣がしないわ。——それにかうしてたまにうちに居て見ると、どこへも行かずにいつもうちにゐたいやうな氣になることよ——」

その言葉の後半に就ては彼は別に耳を假さないで、その代りに言つた——「淺草へ出るのがいやだつて。あんな品の惡いところはいやだといふのかね。奧樣のお道樂だから無理もないね。だが舞臺や觀客が惡くなつたら役者そのものの價がそんな外側のことで値が無くなるものだらうか。假りに僕が君なら、さうして芝居そのものが好きなら、淺草だらうが何處だらうが出るね。さうしてその低級な芝居だらうが何だらうが立派なものにやつてのけるだらう。それにA劇場だつてもともと與太芝居ぢやないか。さうして見ればただ場所が落ちるといふだけのもので、本質は疾つくから落ちてゐるわけぢやない

か。――僕は一たい場末にも名優があり、不遇のうちにも才能はあるやうな氣がしてゐるのだが……。と言つて何も、僕はお前を淺草へ出たらいいだらうとも惡いだらうとも言ふのぢやないぜ。もともとお前がどんな考へでもう一度芝居を初めたか知らないが、お前が芝居をしてくれたからと言つてその爲めに僕には一向何の得にもなりはしない――又僕だつてお前に養はれたり小遣を貰つたりしたのぢや不愉快でたまるまいから。お前が何と思つてゐるにしても芝居は結局お前の道樂さ。お前は自分の口すぎはしてゐるだらうが結局小遣錢も相當持ち出すやうだから同じわけだらう。だから僕はお前を無理に役者をさせて置かうといふ考へは一つもない。と言つてやめさせようといふ考へも一つもない。は、は、は」彼はさう言つてちよつと笑つた。彼は彼の方をちらと見た妻の目を感じながら言葉を足した。「つまり僕の言はうとするところは今までの小屋ならいいが淺草はいやだといふ、お前の考へ方が不徹底で不純だと言つたまでだよ。やめるならやめるさ」

「あなたはちつとも相談にはなつて下さらないのね」

かの女の聲は少しとげとげしかつた。

「相談をしてゐるぢやないか。さうして僕はどちらでもいい。好きなやうにしたがいいと言つてゐるぢやないか」

「さう！　でもね、女といふものは時にははつきりと命令をして貰ひたいこともあるものですよ」

「なるほど。これや哲學だ。――だが人に命令をせず、人からも命令をされないのが僕のむかしからの哲學だね」彼は平靜なむしろ何か愉快なことを言ふやうな聲でかう言つた。かの女はそれつきり默つてしまつた。しかししばらく經つとかの女はまた話題を見つけた。

「お母さんのところへいらしつて？」

「行つたよ、昨日。その〈と言つて彼は顎でかの女の着てゐるのを示しながら〉その着物が仕上るところを見て來たよ」

「……。何か相談があつた？」

「この家を引き拂ふことだらう。――何もかも御意のままだよ。皆のいいやうにしたがいいのだ。僕にはどうしたらいいのだか一向わからないものね」

「あなた、厭なの？」

「厭ぢやないよ。皆のいいやうにすればいいぢやないか」

「皆のいいやうにおさないわよ、厭な方ね、あなたつていいやうにおさなくつて―」

「然うか。それぢや僕のいいやうにだ。僕はどつちでもいい」

「あれた――ほんとうに相談にも何もなりやしない。お母さんがあなたと話をするのをいやがるのも無理ぢやないよ」かの女は半ばひとり言をつぶやくやうにさう言つた。

彼は今までの冗談ともほんとうとも自分自身でもわからない話ぶりを改めて、事務的に言つた――「もうちやんと相談はして來たのだよ。今にお母さんも來るだらう。何でも明日からでも行つて片づけてやるといふことだつたからね。僕は引越して新らしい氣持になるのは大好きだ。だが引越そのものは大嫌ひだ。――一つまた僕の知らないうちによろしくやつて貰ふのだね。――犬と女房とをさつさと預けて下宿をすりやさぞ呑氣な身の上になるだらうな」彼は自分のアイロニカルな言葉のなかにある自嘲を自分に感じながら立ち上つて、十一時か、どうれ、一つ散歩をして來よう」

「散歩？　犬をつれて？」

「今日は犬はいやだ」

「遠くへいらつしやるの？」

「どこだかはきめてゐない。――お濠の土手ででも寢ころんで來ようか。いい天氣だからね――」

「そんなところへいらつしやるくらゐなら、意地の惡い、何もうちにいらしつてもいいぢやありませんか。――わたし今日はうちに居るのですもの」

「僕にして見れや留守番のある日にゆつくり散歩でもしたいといふものだよ――」

彼の女だちでも彼の妻でも彼のことを皮肉ばかり言ふ男だと言つてゐた。事實、彼はどうも素直には口の利けない不幸な性質であつた。人並な美しい感情の湧いた時にはそれを表白する言葉を見出せないくせに、不機嫌の感情を洩らす時に彼の理窟つぽい言葉は自分でも氣がつかないくらゐ自由であつた。そのために、元來センチメンタルな彼を一個超人のやうなと思做してゐる女だちさへあつた。しかしそれはただ彼の孤獨な氣持から出てゐて、その性癖が彼を一そう孤獨にしてゐた。わけても今日は、彼の口からつい出てしまふ一語一語は彼自身でも何となく不愉快なものであつた。さうして妻と面してゐる以上はそれがどうにもやみさうにもなかつた。それに彼には全くひとりでゐたい日であつた。帽子を取り上げる彼を目送した妻の目が、氣のせゐか、どうも少し淚ぐんでゐるのぢやないかと彼には思はれた。それとも亦、かの女もただ前夜の睡眠不足でそんな目をしてゐたのかも知れない。

家を出て來た彼は、されば と言つて行くところもなかつた。ふと思ひついて彼は、渚山がそこへの道ついでに彼の家へ立寄ると言つたあの圖書館へ行つて以前に讀みかけたことのあるアンナ・カレニナを讀んでみようかと思つた。けれどもあの大きな本の形を思ひ出しただけでもううんざりしてしまつた。しかし彼が圖書館へと思ひついた時に彼の足は反射的にその方へ運んでゐて、彼は自然と、あのいつか不恰好なレナのことで酒屋の樽拾ひの胸ぐらを捉へたことのある廣場の方へ來てゐた――その間にも、彼の考へたことはすべて妻のことであつた。彼は妻が家でひとりで泣いてゐるのぢやないかと思つた。それも何か彼に對する反抗的な氣持からならまだしもいい。でなくつて彼の歸りを恐ろしいやうな氣持で待ちうけながら、彼が歸るのを見るといきなり「宥して下さい。みんなわたしが惡いのです」そんなことを言ひ出したらどうだらう？　さう空想して見ると彼は家へ歸るのが恐ろしいやうな氣がした。さうかと思ふとまた、泣いてゐるも思ひ沈んでゐるもないただかの女は、彼が起きたあとの布團のなかへもぐつてかの女の不足してゐる睡眠を充たさうとぐつすり太平樂に眠入つてゐるのかも知れない：：そんなふうにも空想された。馬鹿なことだ、何事でも目の前へそれが起つて來るまでは空想などは餘計なことだ。――尤も愉快な空想でもあれば別だが。彼はそんなことを自分自身に言ひかけながら、偶然そこまで歩いて來て、そこにあつた石の共同ベンチに腰を下した。

そのあたりの櫻の並木はもう皆十分に蕾みふくらんでそのために枝全體うす赤いのを、彼は一とほり唯見渡しながら、女といふものは時にははつきりと命令をして貰ひたいものなのですか――と、彼はひよつくりさつきの妻の言葉を思ひ出してゐた――巧いことを言つたものだ……どうもあれは自分で考へたことぢやあるまい。何かの本にでもあるのを應用したのだらう……。又してもそんなことを考へ初めたから、彼はベンチを立ち上つて、その廣場から街の方へ下りる廣い坂道をずつと下りて行つた。彼の背中が太陽を受けて暑かつた。彼にはさ、熱いほど温かいのを氣にしながら、所在なさに彼は、その電車道に兩側に澤山並んでゐる古本屋

を、何の目的もなしに軒並にひやかした。もしあの店を覗いてみてあの小器があるやうなら諸山の消息でも知つて居るかどうか聞いて見てやらう。

或る店頭にラファエル前派の珍らしい畫集があるのを見て、彼はそれを聞いて見てゐた。すると、

―やあ！―

といふ太い元氣のいい聲と一緒に彼の肩へ手を置いた者があるので、彼は振り返つた。この太つた男は、三年越し會はなくなつた古い友達の一人で久能であつた。今年こそいよいよ卒業論文を書くので參考書をあさつてゐたと言つて、久能はどこか近所のカフェーへ誘つた。―彼は寧ろ迷惑さうなとでもいふ顔つきでこのもとから親切な友人のあとへついて行つた。

―どうかしたのかい。ひどく顔色が惡いぜ―

―さうかね？　よく眠れないからだらう―

―また神經衰弱か。ハッハッハッ―

久能は神經衰弱ぐらゐなら吹飛ばしてやらうとでもいふかのやうに、相變らずの大きな聲でその大きな體を快活にゆすぶりながら、意味もなく笑つた。笑ふ時にあの柔和な目を細くする久能の笑顔が、後から歩いてゐる彼の目に見えもしないのにはつきりと映つた。久能には友達の仲間で誰かが西鄕隆盛と綽名をしたやうに、彼などとは全然正反對の性格者であつた――久能の事などはしばらくすつかり忘れてゐた彼は、ひよつくりその人に逢つて彼の性格がひどく羨しいものに思へた。

彼の引越して來たのは、妻の母が言つたとほり妻のさとからは一町とは無いところであつた。その部屋は南一面が低い窓でそこに一ぱいのガラス障子が嵌つてゐた。そのガラスがしかも磨ガラスでもなく、またその上に紙も何も貼つてはなかつたから、太陽は淺い廂からすべつて直射的にこの部屋の疊の上へ、落ちて隈なく照りつけて居た。實に温な部屋で冬中はどなたにもお貸し申さないで私が自分で住んでゐたのですよ。とこの下宿の老主人が彼をその部屋へ案内した時に言つたが、いかにも冬中はいい部屋であつたらう。然しもう四月になつては、どなたかにお貸し申さずには居られない部屋であらう。ここではまるで一日中、日光浴をしてゐるやうなものであつた。太陽の光にあれほど憧れとほした彼ではあつたが、ここへ來てから三日ほど經つとこの太陽光の洪水のなかで彼はすつかり頭の芯まで[illegible]て來るやうに感じられた。いや、本當に[illegible]のであつた。それは全く不思議な位であつた。[illegible]もここではぐつたりとだらけて仕舞つて、[illegible]人生だのとそんな問題はもう[illegible]などとの隙にも無くなつてしまつて、それならば[illegible]代りに何を考へたり思つたりしたかといふと、それが全然何も無かつた。夜は十時にならぬに眠くなるくせに朝は[illegible]なければならなかつた。眠れなくて困ることは今まであつてもこんなに眠ることは彼には珍らしかつた。晝になつて目がさめると朝と晝とを兼ねた食事をして――それが甘いんだか不味いんだかそんなことも少しも感じられない、ただもう口のなかへ入れてしまふと、人に這入つて來られるのがいやだから先づお膳を廊下へ突き出して置いて、さつき自分で疊んだ布團のなかから彼は枕をさがし出してそれを疊の上へ投げ出すと、また再びぐつたりとなつてゐる體を橫へた。眠つてゐるのでもなく目が覺めてゐるのでもなく、犬が日向ぼつこしてゐるのはこんな氣持だらうと彼はそんなことを思ひながら、世の中にこれほど無目的なことがあるだらうかと思ひつづけて見たり、又

學などといふものは戀愛などと似た種類で何かやはり一種の熱病で、――といつもの通りのことを思ひつづけて――その熱病が彼自身で知らないうちにけろりと癒えてしまつたのぢやなからうか、さうだとすると少しは心細いやうでもあると思つて見たり、しかしそれらの考へに就て彼は、この間までのやうに一つ一つ神經質な追及で考察しつづけるやうなことなどは少しもなく、それならば心持が輕快かと言ふと無論決してそんな筈はなく、言はば古沼などが淀んで水が腐りさうになつてその底からボツボツと時時泡を吹き出してゐるやうなものであつた。

――これもやはり神經衰弱中の一兆候であらう。

それにしても氣候とか住んでゐる部屋とかいふものがこれほどまでに人間の精神狀態を變へるか知らと疑はれた。しかし淀んだ水の底にはやはり依然として不安の流れはあつた。それはしかし昨日までのやうに鋭くさうして一つ一つ理智を持つて築き上げたり打碎いたりするやうなものではない代りに、肩の凝りや齲齒の鈍痛や過食の後の胃の不安やさういふものに類似したただぼんやりとした鈍いしかし一刻も放れ去らないものであつた。彼を惱ますその小さい方の一つはあの田舍の土地を擔保にして金を借りる事――その事のために彼自身がそんな事務的なことを自分でしなければならないといふだけのことであつた。ただそれだけの事であるが實務に就ては何の才能も經驗もない彼がそんな用事で見ず知らずの人間と對談しなければならない――さうして何時であるかは知らないが、その時期がだんだん切迫して來てゐるのだと考へ、たそれだけでも彼はもういい加減に狼狽もしたし、うんざりもした。それを思ひ出す度に彼には空元氣を出して自分自身に言つた――一先方で採用さへしてくれればこれから新聞記者にならうといふ人間ぢやないか。それぐらゐのことがてきぱきとやつてのけられないで如何する!?」

そこで彼はこの間、偶然にも久能と逢つてその時久能から話し出された事を思ひ出して、彼の考へはしばらくそこで停滯した。

彼の困窮してゐることを知つた久能は、或る大新聞社に彼の知人がゐてその人が、久能の大學を卒業するとしないとに不拘、久能をその新聞社へ雇入れようと言つてゐた。久能自身もやはり職業を求めてはゐたのだけれども久能はそれほど切迫した氣持や境遇で求職してゐるわけでもなし、それで久能は自分自身のものはゆつくり搜すとしてその新聞社の知人へ彼を推薦しようと言ふのであつた。さうして四五日のうちにはその知人に面會して一應その事を相談してくると彼に言つたのである。それつきり一週間ほどになつたが久能からは何のたよりもなかつた。どうせ駄目なものとは思つてゐるがそれでも彼は久能から何とかはがきぐらゐありさうなものだと心待ちに待ち續けてゐた。一先方で採用さへしてくれれば云云といふのはその事なのである……。

不安のなかの大きな重い方のものは言ふまでもなく彼の妻のことであつた。かの女は彼が默つて放つて置いたが、やはり淺草の小屋へ出ることにした。さうしてかの女の生家からそこへ通うてゐるのであつた。

「別別には住んでもうちは近いのだし、行き歸りにはわたしもきつと寄るわ……」

かの女はそんなことを言ひながら一週間にもなるのにまだ二度來たきりであつた。それも一度は彼がここへ越して來た次の日か何かに、朝、彼がまだ寢てゐるうちに這入つて來て、

「……これすいい部屋ぢやないこと。ここなら落着いて何か出來るでせう?」

そんなことを一言二言しやべつたまま直ぐ出て行つた。彼はろくに目も覺さないで夢のなかか何かのやうにそのそばはした聲だけを聞いた。目が覺めて見たらかの女はもうゐなかつた。

二度目の時には夜遊びに來てまで寢てゐる彼の枕もとへかの女が來て言つた。さうして今度の小屋はAの劇場と一年の二の契約をして、一座の興行で、九時の小屋入りだから朝が早くて困ることや、それから淺草まではどうしても一時間ももつと以上もかかる事や、從つて夜の歸りもおそくなるから、つい彼のところへ立寄る暇のない事などをひとりで言ひつづけてから不意に思ひ出したやうに言つた――「あなた吉澤といふ人知つてゐる？ 吉澤陽太郎といふのよ」

彼はそんな名前の人間は知らないが、それがどうしたのだと訊くと、その男が今度の小屋の樂屋頭で、彼が學生の時分に素人下宿で彼を半年以上に寄宿させた事があると吉澤が言つたといふことだつた。――さう言へば、なるほど、五六年も前に彼は吉澤といふ家に下宿してゐたことがあつた。古い話になる。娘があつて、それを九州あたりから來てゐる金まはりのいい書生に推しつけようと母親が騷がましく騷ぎ立ててゐた。その吉澤が吉澤だ。その頃で、誰か好きな人が居つて、大道具か何かの仕事をしてゐた……

「大變な人間かい？」

「さうよ、大變なものよ。お父やつぱりさうなのね。世の中には怖いものだといふお話ね――」

「だから悪いことは出來ないものだよ」彼は苦笑をしたままじろじろとかの女を見上げた。かの女は別に變つた表情もしなかつたが、しばらくして言つた。

「今度の樂屋へ來るのはおよしなさいね。頭取が私を呼んで、ちやんとあなたの事は昔よく知つてゐる、お父さんもよく知つてゐる――ちやんとしたうちの坊んちだなんていふのですもの、まるでちやんとしたうちの坊んちが淺草の女優風情と一緒だと言はないばかりよ」

「また實際、さうでもあるからね」

「とにかく今度の樂屋へ來ちやいけないわ。あなたもいやでせう、吉澤なんかに顔を合はすのは――」

「別に吉澤に悪い事をした覺えもないから構はないがね。――一度逢つて見てもいいぐらゐなものだ」彼は心にもないことを言つた。……今までだつて樂屋へなど好んで行きはしないし、今だつて樂屋へ行きたいと言つたわけではないのに、この女はどうしてさう樂屋へ來てはいけない、來てはいけないといふのだらうと彼はそれを訝しく思つた。直ぐに一つの想像があつて、それは、かの女のことが今ではもう樂屋中へ噂まつてゐて若し彼が樂屋へでも來るやうなことがあれば自然と彼の耳へ何かの噂を與へさうだらうといふ事をかの女が恐れてゐるのだらうと彼には考へられた。樂屋のなかではかの女にとかくの噂が評判になつてゐる……。自然その評判の女の亭主のことも噂に上らずにはゐない。吉澤はそこでかの女の亭主の名前を知つたのだ……。

「それにしても何だつて構はないのに自分の亭主のことを頭取などに言ふのだい」

「わたしが言つたのぢやないわ。誰かよけいなお喋りをしたからよ」

さうだらう。それに違ひない、思つた通りだ。彼は心のなかでさう思ひながら默つてもつとそのつづきを考へて居た。それからどうしたわけかまつて、彼はふいと吉澤の娘――たしかお繁と言つた――とあの金まはりのいい九州の學生と長い冬の夜を一時ごろになつても彼の隣室でひそひそ話をしてゐた事を思ひ出してゐた。お

雪はまづい顔立だつたが色の白いぽつちやりとした初初しい娘だつたなどと思つてゐるのである。――それにしても現に彼自身の隣室の學生も今ごろ何だかいらいらした氣持でゐるだらう。……

「もう十二時半ごろでせうね。わたし歸るわ」

暫く默つてゐてからかの女はさう言つて立ち上つた。彼は自分の目の前に立つた自分の妻を枕をしたままでぢつと見上げた。それから障子をあけて出てしまふのを惜しいもののやうになやましげに目送した。障子をしめてしまひさうにした時に彼は、咽喉の乾いたやうな聲で低く、

「おい」と言つて自分の妻を呼びかけた。かの女はまだ十分には閉めてゐなかつた障子をもう一度開けて、しかし部屋のなかへは這入らうとはせずに廊下に突立つて言つた。

「何？」

「いや何でもない」彼はかの女が部屋のなかへ這入つて來ないのを不滿に思ひながら、興ざめした聲でそれだけの事を言つたが、急に一種憎憎しい聲で言つた。「お前もさう忙しいところをちよこちよこ寄つてくれないでもいいよ」彼は初め言はうとした事とは全く反對なことを言放つて、それから忌忌しさうに枕もとの電燈のスヰッチを捻り消した。かの女は何も答へずに立去つたやうであつたが、彼は暗くなつた部屋の闇から目隱けのないガラス窓のガラスを透してあまり明るくない街の星の一かたまりをぢつと見守つたまま、妻がありながら獨身者のさびしさを覺えた。

或る日のことであつた。下宿の女主人である婆さんが彼の部屋へ來て、陰氣な無口な人に對する一種びくびくした調子で、彼のところへ來客があることを知らせた。來客？ 彼のところへ？ しかもこの下宿へ誰が何の用で尋ねてくるだらう？ 訪問して來る人もなければ、何人も彼のこの下宿住ひを知つてゐる人がある筈はないではないか。

「僕のとこへですか？ 人違ひぢやないんですか」

「いいえ、確にあなたと仰言いましたが」

「一たいどんな人です」

「お若い――あなたよりもつとお若い方で……」

「ふむ？」

「お洋服を召した立派な方ですよ」

誰だらう？ 彼は疑問のなかに一種ぎくつとした。彼の妻のことが咄嗟に心に浮び出して、その「お若い――あなたよりもつとお若い、お洋服を召した立派な方」が、何故かしら彼の妻と何か關聯があるやうに直感された。

「さうですか。ともかくも僕が行つて見ませう」

彼の胸には決心とでも言ふべき音が起つてゐた。彼はつかつかと階段を下りながら玄關口に立つてゐる男――青いスプリングコオトの青年紳士がしやがんでゐる後姿を見た。その人は彼の足音を聞くと今までそこにしやがんでもう靴を脱いでゐた體をねぢ向けて彼の方を

「よう！」

と呼びながら見上げた。

「何だ！ お前か！ 何故さう言つて名乘らないのだ」

彼はつつけんどんにけんつくを喰はせるやうに自分の弟にさう言つた。それからすたすたと自分の部屋の方へ上つて來てしまつた。弟は取殘されまいとでもするやうに急いで彼について部屋へ這入つてから、いきなり天井の高い部分に目をやつてそこをぐるぐると一まはり眺めたが柱の上にもつた一本の釘を素早く見つけて、そこへ自分の帽子を掛けた。それは蒼灰

色をした新らしい輕さうな中折帽であつた。坐る時に新調のズボンの膝が抜けないやうに苦心をしながら、弟は、兄の不機嫌な顔色をよく見たけれども、それは兄のいつもの癖であつたからそれほど氣にもとめなかつた。しかしその日の兄の不機嫌は格別なものであつた。彼の妻に對する不信と危惧とが、極く些細な事でも何かちよつとした事さへあれば飛上るやうになつてゐるその過敏以上の過敏――それが殆んど病的なものにまでなつてゐた自分に氣がつくと、彼は羞恥とも憤怒ともつかないもの、而もそれが誰に向けやうもないそれ故自分自身のなかで内訌する感情で一杯になつた。さうして久しぶりに逢ふ弟に對してどうして彼が今特別に不機嫌であるかといふ理由を說明することも出來ないと考へると、それが更に彼を不機嫌にした。その上にも亦、弟のきちんと調へた服裝を見て彼はもう一そうに不機嫌が募つて來た。ちやうどその場へ、さつきの婆さんがお茶と座布團とを持つて這入つて來て、この年とつた女が丁寧な言ひ草で合槌をすると、弟は弟で、兄が御厄介になりまして……」といふやうなことを柔和な人懐つこい調子で應答してゐるのまでが、彼の心持を苦苦しくした。さういふ社交性によつてこの弟は人人から愛せられて彼のやうに孤獨でもなかつたし、又平凡な性格に生れついて學校へ不滿もなく通つてゐられるといふ事實でこの弟は全く青年紳士のやうな風采を保つだけの保護を父母から受けてゐた。

若若しく無心な弟は、しかし、兄がどんなひねくれた事を考へてゐるか氣づかなかつたから、例の柔和な口調で彼の今までの住居を先づ尋ねたがそこが空家であつたことや、それで彼の妻のさとへ來て見たらわかるだらうと思つてそこからここを尋ね當てて來た事などを話し出した。弟はちよつと言葉を途切らせてから言つた。

――ねえ、突然だが森鷗外博士の譯したもので「街の子」といふ本があるかね。――おやぢが讀み度いから捜してくれと言つて來たのだよ。――それが妙なのさ。何でもうちの方へ田舍まはりの新劇團がまはつて來てそこでそれを上演したのだと。お母さんが人に誘はれて二十何年ぶりとかでその芝居を見て來てのかへりに、お父さんにその筋を話して、あれはまるで兄さんのやうな息子であのお父さんがあんなに怒るのも無理はないと言つたとかで、どんな事を書いた本だか見たくなつたと、お父さんから手紙が來てね。一たいどんな本だらうね？――

――何、おやぢのいふことを聞かない息子が乞食のやうになつてしかも女房子供まで引連れて自分から飛び出した故郷へ舞ひ戻つて、何だか親父と口爭ひや、鬪爭やを繰り返すやうな話だ――雜誌に連載されたきり本にはなつてゐないよ、未だ――

彼はそれだけの事を返事をした。その少しせき込んだ口調で、弟は兄が平常よりも大へん不機嫌なことにやつと氣がついた。さうしてそれは「街の子」のことなどを言つたからだと考へた。弟はポケットからシガレットケースのなかに這入つた兩切をパイプに差してゆつくりと吹かしながら、もういつまで待つてゐても口を利きさうにない兄に對して言つた。

――一度うちへ歸つて來ようと思つてゐるのだが、今晩ね――それから獨言のやうにまた辯解するやうにつけ加へた。「休みになつて直ぐ行かうと思つたのだけれど遲れてしまつたものだから……――

――ふむ――彼はさう返事したきり、何の爲めにとも聞き返さなかつた。

――別にうちへ用事は無かつたかね？――

――さうさ。何もないよ。心がらで段段窮迫して

來て今に街の子の息子のやうに乞食をしさうだと言つてくれ―」

弟はそんなことには返事をせずに「ちやさやうなら」と言ひながら立ち上つて、ズボンの膝頭を輕くたたいてから柱の釘にあつた例の中折を頭の上へ丁寧にのせた。彼は出て行く弟を、今までのやうに身を横へたままで見送つてゐたが急に立つて玄關まで送り出して行つた。赤い編上げの紐を結んで居る弟を後から見守つてゐるうちに彼は、引越をしても通知一つしない兄を遠い三田の方から捜し訪ねて來た弟をそんなに無愛想に取扱つたのが氣の毒に思へて來て、そこで彼は聲を和げて言つた。

「で、いつこつちへ歸るんだい」

彼の無愛想が今になつてやつと弟の心にも反應したかのやうに、今度は弟の方でぶつきら棒に答へた。

「さあ、よくわからないね。ゆつくりはしてゐないが。――さよなら―」

客を送つて出て來た下宿の婆さんが、出て行つた彼の弟を彼がしよんぼりとまたぼんやりと見送つてゐるのを見て、彼に尋ねた。

「弟御さんでいらつしやいますか」

「さうです。どうしてです？」

彼の答はまるで慍つてゐる人のやうな語勢であつた。さうして彼はその言ひ方に些かあつけに取られてゐる樣子の婆さんを尻目にかけて再び自分の部屋の方へ引き返した。彼はすべてが氣まづくちぐはぐで彼ひとりだけが皆に――父にも母にも弟にも、下宿の婆さんにさへも取りのこされたかのやうな不安な寂寞な孤獨な心持になつて、いつものやうにごろりと身を横へることさへせずに、どうしてだか何時までも机の前へきちんと坐つて考へ込んでゐた。

彼がそのやうに縷縷としたおぼつかない生活をつづけて居るうちに、江森渚山は彼の心のなかからその影を少しづつ薄くして行つて今はもう殆んど思ひ出す閑もないやうになつてゐた。毎日のやうに訪ねて來た友人が三ケ月も顏を見せなくなつたその理由がわからなくとも、さうしてその事を思ひ出してもただ「相變らずどうかして生きてはゐるだらう」位にしか感じない。彼はそのやうなイゴイストでもあつたし、それよりも第一に彼の生活のなかには親切な人間に必要な心のゆとりがなかつたのである。――「あの男もあれからどうしてゐるかしら？」と一人の友人をしみじみと思ひ出すためには、人はその人自身が先づ幸福でなければならない。さうして我我の主人公は我我も知つてゐるとほり決して幸福ではなかつた。と言つて、彼はまた決して所謂悲慘でも悲壯でもあつたわけではない。それは、たとひどんな下らないものにしろ一つの生活信條を抱いて人生をそれで統一してゐる人間にとつては全く同情出來ないであらうやうなぐうたらなもので、ただ自分をも人をも信じなくなつていらいらとしてひとりぼつちでその結果として彼は自分自身の心持を隅から隅まで凝視しつづけて、さてそれをどうしようといふやうな意力は彼にはもう寸毫も働かなかつた。生活は彼にとつては半睡狀態の夢のやうになつて來てしまつてゐた。――こんなことをしてゐればあの川のなかへ落ち込むのだが、とさう思ひながら人は夢のなかでずんずんその川の方へ歩いて行く――そんな夢がよくあるものだが、そんな類の夢のやうに人生そのものが彼の上にのしかかつて、彼自身少しも意志を持たないなりゆき任せの生活が彼の上をのそのそと爬つてゐた。この不安な不快な怪物を、今にはどうにかなるであらう――一そう何もかも解らなくなつて自暴自棄になるやうな時

が来ればいいといふ具合におつと揃へてゐるうちに、夢に[illegible]まされる人がただ刻々の現在のために精一ぱいでその過去は一遍で埋没してしまふやうに、彼は江口渚山のことなどはもう思つても見なくなつてゐた。その渚山が肺病が嵩つて来て入院してゐるといふ消息を不意に傳へたものはあの古本屋の小僧であつた。彼がまだ[illegible]にゐたころに[illegible]彼を訪ねて[illegible]思想問題の話[illegible]を彼に[illegible]せた事のあるあの古本屋の小僧であつた。

「いいいい、[illegible]何かちよつとした[illegible]つた事、例へば[illegible]小旅行をするとかそんな事でも[illegible]時にいつも彼にはがきをくれるのが常であつた。或るクリスト教の病院へ入院しなければならないほど[illegible]してゐた渚山は、病院からその事を[illegible]一寸彼に知らしてよこした。しかし郵便物で訪問者を豫想しなかつたし寧ろそんなものを避けてゐた彼は、断雲山から引越しをする時にも近所の何人にも轉居先などを教へては置かなかつたから、渚山のはがきは彼の手には這入らないで渚山の方へ帰つて行つた。その附箋のあるはがきを持つて古本屋の小僧は来たのである。渚山はその舞戻つて来たはがきの宛名の住所を消してその代りに彼の妻の實家の所番地をそこへ新らしく記入してゐた。さうして[illegible]の時に、そこへ行つて彼の今度の住所を聞くやうにその古本屋に頼んだのである。「私のところへの手紙へそのはがきを封入して来たのですよ」と、その小僧は言つた。

小僧——と言つてももう[illegible]の青年ではあるが、しかしこの男は渚山のことをまるで仲間の一人でもあるかのやうな口ぶりで噂をした。それに[illegible]て彼はその[illegible]渚山のことをは[illegible]つきりと[illegible]。[illegible]の頭痛としてセンセイショナルな[illegible]の一部をこの古本屋で[illegible]備の手を通じて[illegible]に代つた渚山は、この古本屋の小僧[illegible]。[illegible]人でやはり[illegible]古本屋の番頭[illegible]——その人に[illegible]本を出版しようと企てゐる人[illegible]二十圓[illegible]前借をして、もし渚山にそれつきり[illegible]つきを書いてよこさなかつた。

「一たい渚山は皆で何枚ぐらゐ書いたのだね。その[illegible]原稿を？」

「五十枚足らずですよ」と古本屋の小僧は言つた。「それで是非とも入用だといふので、私は無理にその[illegible]からその五十枚足らずに對して一十圓借りてやつたのです。ところが先生その後をちつとも書いてはよこさないでせう。また[illegible]たいした[illegible]といふのだから、[illegible]な筆[illegible]でもう小[illegible]も[illegible]して[illegible]それを元手に[illegible]本を出して儲けようといふ[illegible]なのですから、それに何れ[illegible]の心持など[illegible]のある男ではなし、その二十圓ばかりの事を小うるさく言ふのです。僕も間へ這入つて困るものだから時時渚山のところへ催促のやうな形で遊びに行つてゐたのです。渚山氏はひどく恐縮をしてね、けれども恐縮するだけで一向書きさうにもないのです。[illegible]別だ[illegible]外にせしい仕事があるのでもなく、何[illegible]行つて見ても[illegible]なかへ[illegible]それでもペンと[illegible]用紙とは[illegible]置いて、そのそばに[illegible]自分の原稿[illegible]になつた作品の切り抜き見[illegible]なんですけて見[illegible]してゐるのです。僕も何だか[illegible]の毒なのです。[illegible]こなりましてね……さう、さう、あの人は夏目漱石さんの手紙を持つてゐますね。先生いつか夏目さんのところへ[illegible]を持ち込んだ事があるらしいのですね」

「むかしだらう」と[illegible]つてゐるよ、そんな事は一」彼は渚山がそんなものをこの小僧にまで見せびらかしたのかと思ふと嫌ましさと腹立しさとが自

分の胸のなかにこんがらがつて、人ごととは思ひ難い氣持を感ずると、彼は思はず吐鳴るやうにさう言つたが、その自分の語氣に彼自身が先づ怯えた彼は急におだやかな口調で半ばひとりごとに言ひ足した。「それにしても諸山は誰の世話で病院へ這入れたのだらうな。ね、君、そんなにひどく惡くなつたのかい」

彼のこの質問に對して小僧は意外なほど精はしく何もかも知つてゐた。さうしてこの若い男は、それを知つてゐることに愉快をでも感ずるかのやうに例の持ち前の雄辯で話し出したところによると、この男が諸山をまるで仲間か何かのやうに言ひ做すのも無理がないほどたつた三ケ月かそこらの間にこの二人の關係は相當に親密なものになつてゐたらしかつた。何故かといふのに、要に於ては決して少くない筈の諸山の友人達は、決して諸山を惡んでゐるわけではなかつたけれども、皆はそれぞれに彼等の生活で忙しかつたから誰一人として諸山の下宿などへ遊びに行つてゐるやうな時間はなかつた。さうして諸山はもう自由に外へ出ては歩けないほどになつてゐたらしい。ともかくも諸山を訪ふものは一種の偏癖者たるこの古本屋の小僧であつた。さうしてこの小生意氣でえらさうなことを吹聽する代りに不親切ではない古本屋の小僧は、頼まれれば諸山の汚れた寢間着の着換への工面などまでしたのである。そんなになつてしまつてゐる諸山にとつては、今までも相當にそれぞれ手數をかけてゐる友人たちにまた今度の心配を持ち込むより、この汚らしい知り合ひに世話を焼いてもらつた方がまだしも氣が樂であつたのかも知れない。

諸山は彼のところへ顏を見せなくなつてしまつて以來は絶えず病床にゐたものと見える。さうして或る時から、諸山は全く腰が立たなくなつて一人ではもう便所へも行けなくなつた。呻吟してゐる諸山を下宿の夫婦や、或は隣室に下宿してゐる砲兵工廠の職工などが背負ふやうにして便所へつれて行つた。痛苦はさほどにひどいものではないらしいけれども、思ふやうに身動きが出來ないのでそれが焦燥するのであらう、どうも子供のやうな氣儘を言ふことがある」下宿の主人は、古本屋の小僧をつかまへて迷惑さうに苦笑をした。さうしてさすがにそれとは言はなかつたけれども諸山をどこかへ早く立退いて貰つて欲しい口ぶりであつた。諸山もこのままではどうもならないと思つたに違ひない。或る知り合ひの――と云つてどれほど親密な人だか解らないが、ともかくも或る牧師に頼み込んでその紹介で築地のS・L病院へ入院することに決まつた。その時にも偶然そこへ來合せてその事を知つた古本屋の小僧は諸山が病院へ運ばれる日にも見舞ひのつもりでその時刻に病院で諸山を待合してゐた。諸山の人力車が來たので出て見ると、外にももうひとり四十ぐらゐの人が一緒であつたが、それが諸山を病院へ紹介した牧師であつた。

「その牧師は、と古本屋は言つた。―僕をよほど親しい諸山氏の親友とでも思つたのか、何かといろいろ立入つた相談をするのですね。僕はひどく面くらつて一時は、これや餘計なおせつかいから飛んだかかり合ひになつたと思ひましたよ。醫者が私たちを、私とその牧師といふ人とを別室へ呼びましてね、「この病院では肺結核患者は三ケ月より收容することは出來ないのですが、あの患者は三ケ月のうちに全治する見込みもないし、また三ケ月のうちに死ぬ見込みもない。何しろ永い間の病氣が[illegible]り[illegible]つてもう脊髓まで犯されてゐるのだから今では直る見込みはまづ無い。三ケ月經つたらどうするといふことも今から考へて置いて下さい」といふやうなことを相談するのです。一たい諸山氏は身寄と

いふやうなものは一人もないのださうですね。牧師がさう返事をすると醫者と一緒にゐた事務員が『それならばともかくも二ケ月間はこちらで預つて置きませう。それから後は都合でこちらからでも取計らつて養育院へでも預けるやうにしませう――さういふ例もありますから』と言ふのです……」

「養育院へ？」彼は思はず口を插んだ。さうして體を倚せかけた机の上の紙に意味のないガジャガジャの線を落書してゐた手を休めて、その言葉を話した相手の顏を見上げた。養育院といふ言葉に彼はひどく感動したのである。しかしその感動は同情から出發したものとは全然別なもので、言はば全く思ひがけないしかしいかにも自然に開展した物語に驚歎するやうな或はまた小兒が珍らしいものを見た時に目を見張るやうな感動であつた。けれども相手は彼のそんな樣子などに注意しようともせずに語りつづけた――

「時に、あなたは渚山氏は幾つだと思ひますか」

「三十五六だらう」

「ね、さうでせう。私にも三十六だと言つてゐたのです。それがね、ほんとうは三十八なのです。年を二つ懸値をしてゐるのですね。あの人は。――お醫者に問はれてどぎまぎしながら、『三十八、三十八』とベッドに横つたまま小さな聲で呻いてゐるのです」

渚山が年を、それも二つだけ匿してゐたといふことはなるほど面白い發見ではあつた。けれども彼はそれを聞いて無邪氣には笑へなかつた。彼は今まで樂書をしてゐる紙の餘白へ大變念入りにスペンセリアン體の羅馬字を書きながら心持が妙にあぢきなく、さて少しづつ重苦しくなつてくるのに氣がついた。……

彼はここへ轉住するやうになつた當座のうちは、妻の實家へ預けた犬を時時見にゆくことが慰めであつた。それほど彼を彼等は慕うてゐたのである。彼はしかし間もなく、さう度度は犬を見に行かなくなつた。もう犬を愛するやうなのどかな氣持が、都會へ來てしまつて殊に今のやうな場合にはだんだん尠くなつて來てゐたことは確だけれども、彼が犬を見に行かなくなつたのにはもつと理由があつた。さうしてそれはやつぱり彼がそれほど犬を愛してゐたからといふことになる。――犬を見に行くと、妻の母は近ごろ陽氣のせゐでヒステリイを起してゐて彼を捉へてはよく愚痴をこぼすのを、彼はいい加減に聞きながして歸らうとすると彼の後を追うて、きつと二疋とも懷しさうについて來た。もつと氣ままな時の彼であつたらこの無邪氣なものの爲めに少しぐらゐは一緒に散歩をしてやる氣持にもなれるのであらうが、目に見えない重いものの蔽ひかぶさつてゐる彼にはただ二疋の愛犬をちよつと振り返つて見るだけであつた。彼等は彼をその下宿まで送つて來た。彼がそこの門口のガラス戸を開けるのを彼等はけげんさうな表情で見上げた。主人と別れ別れに住んでゐることの悲しさをものを言はないものが語つてゐるやうに彼には感ぜられた。この犬どもは彼がそんな家のなかへ這入つたのを見ても直ぐには引返さうとはしなかつた。彼等は彼の下宿の戸口に坐つたまま立去らなかつた。その黑い影が磨硝子を通して見えるのが彼には氣になつた。今閉めた硝子戸をもう一度開けて、歸れといふ命令の意味で彼が手を振ると、犬どもは飛び上つて尾を振つた。立ち上つて歸る姿勢をしながらも彼が戸のなかから出て來ないのを見ると彼等は彼の顏を見上げつづけてまた再びもとのところへ尻を据ゑた。彼は犬どもを追ひ返すことはもうあきらめて、彼の姿が見えなくなればそ

のうちには自然とひとりで歸つてしまふだらうと、彼はその硝子戸を閉めきつて自分の姿をかくしたがそれでもやつぱり思ひ切れなくて土間に突立つたままで硝子越しに透いて見える黑い二つの影を見つづけた。しかしからしてここに立つてゐては下宿の人が不審に思ふだらうといふ妙な氣兼ねから彼は思ひきつて自分の部屋へ上つてしまつた。けれども犬がいつまでも門口で彼を待つてゐるであらうと案ぜられて、五分も立たないうちにまた梯子段の中程へ下りて覗いて見た。彼等の影はやつぱり動かずに待つてゐた。このやうにして彼が三度目に覗きに行つた時にはやつと彼等は歸つてしまつたらしかつた。

彼等はいつもからして彼について來て彼を待ちつづけるのであつた。さうしてどんなに失望して、彼等は、しよんぼりと歸るであらう。犬といふものはどんな不思議な本能を持つてかうまで主人を愛慕するであらう。――彼はそんなことを考へて見ると奇妙な切なさに襲はれた。自分がそれだけの値もなしにそんな信賴を彼等に受けてゐるのは申譯のない事であつた。彼は犬に送つて來られ待たれるのが厭やで、同時に妻の母の風評にも困るし、以上のすべての事から釀し出される彼自身の氣持が堪へがたいので、今までのやうに氣なしに犬の頭を撫でに行くことは出來なくなつた。

或る晩のことであつた。妻が割合に早く――と言つて無論十一時は過ぎて居た――ひよつくり下宿へ來た。部屋へ這入りながらいきなり言つた。

「フラテは昨日、深川から使が來たからやることにしましたよ」

「え?」妻の言葉は彼には唐突であつた。「深川といふと?――そんなところへ何日犬をやる約束をしたのだい?」

妻の答へたところに依ると、彼が近ごろ以前のやうに犬のことには熱心ではないしもう飽きたのだと思へるから、それにあの手のやける犬どもを二疋までも飼つて置くといふことは忙しい母の手では出來ないから、それにいい貰ひ手があつたら一疋はよそへやつてもいいと彼自身も言つたではないか――成る程、さう言へば彼等を持て餘してさう言つたこともあるやうには思へるが、

―それにしても―と彼は言つた。―それは漠然と言つたことだ。なぜ貰ひ手があつた時に一たん相談をしないのだ。俺のものを何故勝手にくれてやつたりするんだ―

―それやああなたが惡いのですわ―とかの女が應じた。「ちつとも實家へ廻つて來ないからです。來たら相談をしようと言つてゐたのに。ちつとも寄りつかないのですもの。だから私に相談に行けと言つてゐたのだけれど私は忙しくつて來られなかつたのです。そのうちに昨日先方から箱と車とを持つて取りに來たから渡したのでせう」

「ぢや、なぜその時相談しなかつたのだ」

「朝早かつたからあなたがまだ寢てゐることは解つてゐるぢやありませんか……。やつてしまつてはいけなかつたの―

―やつた事がいい惡いの問題とは違ふ。なぜ人のものを預つて置きながら自分のもののやうな顏をして何故無斷でやつてしまつたのだと言ふのだ。二疋の犬は手がやけるさ。それや初から解つてゐるのだ。預つてやるといふ以上はそれだけのことは承知だらう。手がやけてうるさくなつたからと言つて、俺に相談もせずにやつてしまつていいものかね。やるならやつてもいいさ。俺はただやる時に自分の手で飯の一杯も食はしてやりたかつたと思ふのだよ。ウフ、フ、フ―彼は自分の笑ひ聲がへんな調子で響くのに

泣きつきながらふと何かが自分のうちにあるものが壓し殺されてゐるやうな聲だと自分ながら氣がついた。そのヒステリックな笑ひに氣がついたのかどうか彼の妻は言つた。

「何といふさびしい笑ひ方をなさるの」

「馬鹿！」—危くさう彼は吐鳴らうとした。しかしそれよりも早く、その芝居がかりな厭味な言葉と一緒にかの女がちらりと彼に濺いだ一瞥を彼が見返した時に、どういふわけだかかの女の目のなかにも涙が宿つてゐるのを認めた。それを見ると彼はかの女を吐鳴りつける氣が無くなつた。しかしそのいらだたしい氣持は決して直つたわけではない彼は、それつきりもう口を利かなかつた。新らしい話題を捜さうとさへ思はなかつた。一たいひどくお喋りな時のある彼は、近ごろでは全く人と口を利くことが嫌になつてゐた。ただ彼はわけもわからずに泣いてゐる妻を不氣味さうに見ながら、あの田園の風景をひよつくり心に思ひ浮べてゐた。その田園の景色のなかに自分と歩いてゐるフラテのことを彼は思つてゐた。

—いいよ—と不意に制するやうに優しくしかしひとり言のやうに彼は言ひ出した。「俺はこれからどういふ風に轉轉とした生活をするかわからないのだ。犬だつてああ可愛くなつて見れば足手まとひだからね。何れやるものなら早くやつた方がいい。—そのうち一度、その深川とやらへフラテを見に行つて來てもいいな—」

から優しく言つた言葉の自分自身に及ぼす作用からであつたかも知れない。彼の心のなかには珍らしくも柔和な氣持が滾滾と湧いて來た。それを自分自身に感じながらも彼はやつぱりただ押し默つてゐた。

そんな晩があつてから二日目の朝であつた。彼は朝のうちに自分の部屋へ闖入して來たものがあるので目を覺した。

「峯雄、峯雄」と彼の名を呼び立てながら這入つて來たのは妻の母であつた。かの女はひどく昂奮した調子であつたが、「さあ早く起きてちよつと來てごらん。フラテが歸つて來たのだよ。ひとりで歸つて來たのだよ」よく聞くと、その朝つい三十分ほど前にフラテはひよつくりと歸つて來たのであつた。頭には嚙み切つた鎖を半分ほど曳き摺つて、その鎖はもとより、體中泥だらけになつて木戸からひとりのつそりと這入つて來た時にはまあどんなに驚いたらう。あまりいぢらしいから御飯をやると、いつもの一疋分を一息に食べてしまつて、改めてもう一皿やるとそれも直ぐに食べてしまつてしきりに何か[?]のまはりをまはり歩いて臺所の板の間まで上つて來たりしたが、今は入口のいつものところへ横になつてぐつすり眠入つてしまつた。フラテを迎へたレオまでがその同じ場所へ並んで寢て、かの女が外へ出る時にもいつものやうに從いて出ようとはしない—あまりいぢらしいからお前に見せようと思つて起したのだとかの女は言つた。彼の妻の母であるこのヒステリイの女は上品では決してない代りにひどく單純で、もともと動物が好きであつた上に、その犬がそのやうにしてひとりで自分の家を慕つて歸つて來たといふことを少女のやうに無邪氣に喜んでゐた。さうして彼に起きて見に行くやうに迫き立てた。

フラテが泥だらけになつて來たといふとほり外へ出て見ると路はひどくぬかつてゐた。その泥濘が雨あがりの朝十時ごろの太陽の下に光つてゐた。何でも前日は雨がふつてその上夜になつてからは櫻の花時によくある強風が吹き募つてゐたことを彼は思ひ出した。そんな時にびしよびしよと雨に濡れながら深川からここまで、と言へばこの大都會の果から果までであるが、その遠い見知らない道をあちらこちらとたづね

ながら、どんな鎖だか知らないが頸にそんな邪魔つけなものを曳き摺りながら、田舎そだちで一たいに雜沓をひどく怖ろしがる傾向のあつたフラテが人やさまざまな車や或はもつと強い犬などに脅かされながら、いつ深川から逃げ出したか知らないが恐らくは夜も晝も迷ひながら一途に歩きつづけて來たフラテ、あの尖つた鼻を地面にすりつけながら知らない地上を迂路迂路と歩いてゐるその形。その心持。——彼が下宿から出てその泥濘の道を一目見た時からそんな事がひとりでに思はれながら、それを思ひつづけて歩いた。彼等が家に近づいた話聲でレオは彼等を迎へるために飛び出して來たけれども、フラテの姿は見えなかつた。しかし木戸のところまで來ると逞しい體つきのフラテは家の入口の前の日向に横倒しにされたままのやうな形で死んだやうに眠入つてゐた。なるほどその身近くには御馳走を一つぶ殘さずに食べた空の大皿が二つあつた、犬を呼び起しさうにする妻の母を押しとどめて彼はしやがんだまま、ただぢつとフラテを見入つた。それからそつとフラテの肩に手をのせた、フラテは一種野獸のやうな鋭さで目を開くと直ぐに、自分の前に現はれてゐる者が彼であつたのを見るとそこに目をはつきりと明けた。それから首を曲げその彼の手をしきりに舐めた。半分起き上つたやうなその姿勢が窮屈さうに見えたから彼は手でフラテをもとの横倒しの姿勢に押し倒して手をフラテの口のところへ當てて舐めさせてやつた。フラテは横になつたままで尾を振つて地面から塵を掃き上げた。

「狡い奴だよ。大儀なものだから起きようともしない」

さう妻の母が言つた——いかにも可愛いといふ調子で。彼は默つてもう尾を振らなくなつていつの間にか再び眠入つてしまつたそれほど疲れてゐるフラテをいつまでも見入つた。

彼はその晩、幾十日ぶりかでものを書いて見る氣になつた。それは「犬」といふ題のスケッチで——

或る厭世家が言つた。

私は無論別れた妻のことも思ひ出さないではないが、しかしかの女に今逢つて見たいと思つたことは一度もない。ただその女と一緒に飼つたことのある一疋の犬が今どうしてゐるか、どんな風になつてゐるか、それが無性に見たくて仕方のないことがよくあるのです……)

彼はそれだけを一度に書いてあとはもう書けなかつた。「私は無論別れた妻のことを思ひ出さないではないが」とさう空想的に書き放した文字に誇張がないだらうか。自分として眞實でなくはないだらうか。そんな彼自身まだ經驗したことも無い心持を考へ初めると、その文句にさまざまなこだはりが出て來てこのスケッチはこれ以上もう書きつづけられなかつた。——犬一疋を人にくれてやつたただそれだけの事でこんなに心が動かされる自分、またちよつと涙を溜めてゐる妻の目を見ただけで吐鳴ることも出來なくなるやうな、そんなセンチメンタルな自分が、たとひ理性のなかにどんな自由な思想があつたからと言つても、妻といざ別れるといふ段になればどんな氣持がするかも知れず、また一旦別れてしまつてからでも、別れた女だといふただそれだけの事から却つて戀戀としないとは保證出來ない自分である、實際、世の中には一たん別れてしまひながらもと通りになる夫婦といふものもざらにあるのだから……彼には、不用意に書き出した彼自身の文句が彼の胸のなかへそんな風に複雑に反響した。

何もかもその時になつて見なければ判るものぢやない——彼は小うるさい自分の側の考へ方

を一蹴しようと思つて自分でさう結論をつけながら思ひつづけた――それにしても記憶力などといふものは何の爲めにあるのだらう、また何時まで消えずにあるものだらう。たかが一年ほどの間食ふものを與へられたからと言つてあれほどまでにして元の家へ歸つて來なければならないフラテ、自分の生活にもう適應しなくなつたことなどを何の用があつていつまでも記憶してゐなければならないといふのであらう。そんな事をいつまでも覺えられてゐては切なくてしかたがない。――犬の記憶もさうだが、人の記憶だつても同じことだ。

「例の新聞社にゐる知り合ひが社用で九州方面を一ケ月も旅行して留守だつたのがやつと歸つたから君のことを話した。ともかくも君に會はうといふ事だが、それより前にもう一度僕の所で打合せしよう。僕はいつでもうちにゐるから夜分にでも遊びに來たまへ。なるべく早い方がいい」さういふはがきを受取つた彼は、その日の晩に久能をたづねた。久能は彼に向つてその男にいつ逢ひに行くかと尋ねた。彼はいつでも行かうと言つた。久能は前から用意してあつたらしい紹介狀――秦龍太郎氏に宛てたものを机の抽斗から取り出して彼にくれた。その外には打合せのやうなことも別になく、久能は彼に大變うまい菓子を食はせた。それから僕の卒業論文はメレディスにすることに決めて見たが、難しくていけないと言つた。暫く文學上の話をしてゐたが久能は散歩をしようと彼を誘つた。

彼等は暗い坂道を池の端の方へぶらぶらと歩いて行つた。喋りくたびれてゐた彼等は默つて歩いて居た。ちやうど共進會の夜間開場のある日と見えて、その建物の上あたりの空がひどく明るく煙つてゐるのを見上げて歩いてゐる彼に、久能は不意に言つた。

「ね、君。――これはつまらない事だが、新聞社へ行くにはやつぱりちよつと身裝でもこしらへて行つた方がいいのだが、もし何なら、その、何か僕の着物でも着て行つちやどうだい」

久能の言ひ方はひどく遠慮さうな恰も恥かしい事を切り出した人のやうな口調で、早口であつた。久能の打合せといふのはこの事で久能はそれを手紙で書きにくくもあつたしそれに今晩だつて直ぐにそれを言ひ出し兼ねて居たのだらうといふ事が彼に直ぐ感ぜられた。

「有難う」

彼はこの友達のデリケートな言ひ方に感謝しながら、ふと、清山の夏羽織を思ひ出した。それから自分ではもう氣がつかなくなつてしまつてゐたが、そんなに見るからに窮迫したやうな身裝をしてゐたかと思ふと、急に身のまはりが顧みられた。

「有難う。――しかし、僕も顔を出しさへすれば何か着る物がありさうだ。……」彼はさう言ひかけたが自分の返事が相手の優しさに對していくらか反抗的な見えはしないかと感ぜられたので

「……だ、しかしそれも果して出せるかどうか、出せないやうなら君のを借りる事にしよう」

「ああ然うか」

久能は事もなげに、自分の言ひ出した事が別に相手の氣持を傷けなかつたのを安心したやうに答へた。彼はそのわだかまりのないしかしデリケートな心持を知つてゐる友達を彼は今更のやうに闇を透して見つめた。その時、彼は自分にも思ひがけなかつたやうな大きな聲で笑ひ出してしまつてゐた。そのあまりに突然な笑ひ聲が久能には解せなかつたのであらう。久能は少しぼんやりした顔つきで言つた。

「何だい。急にそんなにうれしさうに笑ひ出したりしてさ」

「だがまあ、考へて見給へ……」彼の笑ひ聲はまたつづいた。久能が西郷隆盛と綽名をされてゐるのはその男性的な氣質からだけではなくて、二十貫もあらうかといふずんぐりした體格にも原因してゐた。ただひよろ長いだけで十二貫あるなしの彼に、久能は自分の着物を貸せようと言つたのである。「まあ考へて見たまへ、君のそのづう體をさ。西郷隆盛の着物をこの僕が着られるか」

「アッ、ハ、ハ、ハ、ハ」久能も初めて氣がついたといふ風に例の笑ひ聲で笑ひ出した。

「君は親切はあるが、どうも空想力は無いね」

さう非難するやうに言つた彼の言葉は、彼としては久能に對するその瞬間の深い親愛を表はさうとするものであつた。その言葉に對しても久能はただ、「アッ、ハ、ハ、ハ、ハ」といふ腹の底に響くやうな笑で答へただけであつた。

茫漠として重厚なさうして而もこまやかな感情を解してゐるこの友達は、彼がもつと何か語りさへすればもつと慰安を彼に――たとひ何等意味のあることを答へなくともただその自然な態度によつてだけでも十分に、慰安を彼に與へるだらうと彼は考へた。さうしてこの太つた大男の友達と見すぼらしく肩を並べて歩きながら彼は、自分の妻に對してこの日頃抱いてゐる感情をこの友達に打明けたいといふ氣持が湧き立つた。自分の苦しい氣持を人に洩すまいとすることは彼のやうな性格にとつては見えでもあつたしまた道德でもあつた。しかしこの晩久能に對して彼は危く見えと道德とを打捨てさうになる自分を感じた。彼等の歩いて行く細い坂道は暗かつた。彼は自分の感情を洩したいといふこの切望はこの暗さの誘惑だと思つた。彼はそんな暗い路を早く通り抜けるやうにと自分で先に立つて早足になつた。それから久能に言つた

――「おい、共進會のイルミネエションの方へ行かうよ」

ほんの一瞬間であつたが彼の態度はそれほど――あの鈍感な久能にさへ怪まれたほど目立つたものであつたと見える。眩しい光のなかにこみ合つてゐる群集のなかへ突立つた彼を見て久能は言つた。

「何だい？ どうしたんだい？」

「いや、何、なんでもない」彼はやつと我に返つたやうに再び歩き出した。「ちよつと知つた人を見かけたものだから――聲を懸けようかと思ふうちにどこかへまぎれ込んでしまつた」彼は半分口のなかで呟くやうにさう答へた。實際、彼はちよつと知つた人を見かけたのだ！ 女、しかも外の女ぢやない彼自身の妻だ。――三十ばかりの脊の圖抜けて高い男、その男があまり脊が高いので彼はふと何氣なくその方を見た瞬間に、その男の向う側からその男の顔を見上げた女の顔が目にまともにうつつた。

「おや！」と思つた次の瞬間にはその女の顔は再び男の體のかげになつて、彼等は人ごみのなかへ、その男の帽子だけが群集のなかに高く目立つてほかのものは遠く見えなくなつてしまつた。つい人の頭を三十とはへだてない近さであつた。それは一瞥しただけでは正しく彼の妻の顔であつた。それを確める間はなかつたけれども瞬間の印象はどうしてもそれに間違ひなかつた。それがもしかの女でなかつたといふのならば、彼はこの群集の眞中で晝よりも明るい人工光線の下でかの女の幻を見たとより外は思へない。それにしてもかの女は淺草工場を休んでゐない限りは未だそこにゐなければならない時刻ではないか……

「久能、もう何時だらう」

「え？ 時間か？」久能はさう答へながら懷中

時計を持つてゐると見えてちよつと自分の胸もとの方を見てから「十時少し前だ。十分か十五分か。——僕の時計はあてにならないが、夜間開場は十時までだから」
「まだ十時前だね、ぢや僕はもう失敬しよう。そんな時ならちよつとまはつて行きたいところがあるのだ」
彼はさう言つて、[illegible]のまばらな方へ出ながら久能をまくやうにして別れた。[illegible]の電車通りへ出ると、動き初めてゐる電車へ飛び乘つた。十一時までは小屋にゐなければならないと聞いてゐるかの女が、もし今日小屋を休んだのでなかつたならばまだ小屋にゐる筈だ。さつき見かけた女が果してかの女であつたかどうかを知る上からは、ともかくも小屋へ行つて見るのが一番いいと考へた彼は、かうして淺草行きの電車に乘つてはしまつたものの、彼が淺草へ來てしまつた時には小屋の樂屋口へ自分の姿を捜しに行かうといふ勇氣はもう無くなつてゐた。彼はその小屋の樂屋の前を三度か四度往つたり來たりした。それから表へまはつてけばけばしいペンキの看板をぼんやりと見上げてゐたがもう一度樂屋口の方へかへつた。それから樂屋口に坐つてゐるであらう頭取の古澤のことを考へると彼、中老の男を目の前に思ひ出した。彼はすたすたと脇目もふらずに、わざと勝手を知つた者のやうに這入つて行つた。さうして樂屋口に、番人のやうな場所にどつかりと坐つてゐる中老の男を認めた時に、なるほどこれがやつぱりあの根津の素人下宿の古澤だなと思ひながら、しかし彼は素知らぬ顔をしてその男に尋ねた。
「瀬川瑠璃子はまだ居りますか」
さう言つて彼は相手に顔を見られないやうに向いてしまつた。
「ええ……と、瀬川瑠璃子さんと……」
相手はちよつと考へ出さうとでもするのか、それともそんな質問をうるさがつてゐるのか、或はまた何か胡散に感じたのか、ともかくも言葉をちよつと區切つた。彼は相手からじつと見つめられてゐるやうな氣がすると同時に顔が急に燃えるやうにほてつて來た。相手はきつと彼を、その女優を讃美してゐる男か何かだと思ふかも知れないと感ずることが彼には[illegible]たい恥かしいその上に恥辱に[illegible]たやうな氣持であつた。
「瀬川さんですか」相手は思ひ出したやうにもう一度聞き返してから「瀬川さんはもう歸りましたよ」
「歸つたのですか。——いつでせう」
「もうよほど前ですぜ」
「一時間位ですか……」
「ええと、あの人の出る幕は[illegible]おしまひですから一時間ももつと前でせう」
彼はそこのところをもつとしつかり[illegible]かつた。しかしもう今までさへ[illegible]聞き過ぎたやうな[illegible]彼は[illegible]聞からといふ[illegible]出なかつた。
「あ、然うですか、それは[illegible]……」と彼が言ひかけた時であつた——
「おい、尼寺！ 尼寺！」
突然に彼の背後で[illegible]彼はびつくりとした。しかし[illegible]のやうに續いた。「何だい、女房を[illegible]に來たのか？」
[illegible]つたりと[illegible]からの方から出て來たその聲の主を、彼はその場から引き摺り出すやうに[illegible]つて、彼自身は逃げるやうに古澤の前を立ち去つて來た。やつと彼等が外へ出た時に彼は、あの彼をあんなにどぎまぎさせた無作法な男に言ひかけた。
「おい、ゴドさん。困るぢやないか。おれは古澤とは古い知り合ひだが知らん顔してゐるの

に。君に呼びかけられて面くらつたぜ」

「ふむ、お前吉澤知つてゐたのか。おれはまたそんなことを知る筈はなしよ――」ゴドさんと呼ばれたその男はさう答へた。さうして彼等にどことといふこともなしに然し申し合せたやうに同じ方角へ歩いて行つた。

ゴドさんと不思議な名をもつて呼ばれる男はその名のとほりやはり不思議な人物であつた。もう五十には間もないであらう。それとも五十五かも知れない　この男の縮の袷にハンティングを冠つてゐる老書生のやうな風采からその年齢を推すことは難しかつたし彼はこの男にまだ年を聞いた事はなかつたからはつきりしたことはわからない。その年ばかりではなくこの男がこの年になるまでどんな事をしどんなことを考へて暮して來たかといふことも彼はよく知らない。しかしこの年配の人間としては高等な教育をも受けてはゐたし殊に數學には天稟を持つてゐて學校を出る時には首席だつたといふ事である。若い頃には詩才を現して文壇の詩人などの仲間に加はつてゐたがそれで名をなすといふ風にはならなかつた。さうして世間に出て出世をして行く仲間とはいつも離れてしまつて常に貧窮とばかり遊んでゐた。さうしてその貧窮といふ號をいつの頃からか悟道人、或はまた誤道人、又時には「御當人」とも洒落れて隨筆のやうな雜文のやうな一種の社會諷評――といふよりは市井評論とでも謂つた方がその感じを表はし得るやうな文章を書いて、決して歡迎もされない雜誌社などにそれを持ち廻つて暮してゐた。彼の文章のなかに譏笑や冷罵は卑俗なわりにアマいものでしかし無邪氣で、讀んで見ると悟道人はどんなに人柄を落して見ても決して働きの無いけれども彼の氣質のなかには世俗の精神的賤民と少しばかり違つた何ものかのニュアンスがあつた。人人は決してこの人に尊敬を仕拂はない代りにはただ悪意のない輕い嘲笑を以て、その人の爲めには喜んで多少の迷惑を忍んでやる氣にはなれるのであつた。人人は彼のことを初めに正しく悟道さんと呼んでも、だんだんとその音をつづめてゴドさんと言つてこのへんちきりんで少しばかり何となくユウモラアスな呼びかたの方がこの人に似つかはしいことを感じたものと見える。今ではこの男のことを誰でもゴドさんと呼んだ。このゴドさんと彼が知り合ひになつたのは彼がまだ學校に居た頃であつたが、ゴドさんは文學に志してゐる學生たちの集合のなかへよく無遠慮で這入つて來た。それから毒のない悪罵で文壇の人たちを一蹴し去るやうな口調を青年たちは別に邪魔にはしてゐなかつた。ゴドさんは恰も正當な權利のやうな顏つきをして屢々彼等から小遣錢を徴收した。ゴドさんはただ「電車賃！」と言つて手を突き出して人人が出さうが出すまいが同じやうな表情でいその快活な顏つきを頷いて見せた。彼もしばしばゴドさんに電車賃の徴收をうけたしまた下宿への訪問をもうけたものであつた。然しゴドさんはもう文學青年にも飽きたのかそれとも飽かれたのかこのごろでは新興の藝術的な芝居と稱する小劇團の樂屋へ入り込むことを道樂にしてそんな劇團の樂屋の溜りになつてゐた。その事は彼も時時彼の友から聞いて知つてゐた。ゴドさんは淺草か場末の或る女優にのぼせて男衆のやうにしてゐるなどといふ者さへあつた。――ゴドさんはその年までずつと獨身だつたのである……

さつきは「女房を迎へに來た」と話しかけたゴドさんは、二人きりになると大へん眞面目なことを言つた。「どうしたい。暫く會はなかつたぢやないか。そこらで一杯つき合はないか」

「うむ」彼は氣のない返事をして、しかしこの男ともう少し一緒に居たならば自然、あの女の

――彼の妻の消息が解るだらうと思つた。――つき合つてもいいが、僕は金を持つて無いよ――
「金はあるよ――おらあちやんと夢助から捲き上げて來たからな。クックックッ」ゴドさんは怪鳥の聲のやうな笑ひ方をした。夢助といふのはこの男が男衆のやうになつてゐると言はれてゐる女優の夢子のことであらう。
「おれもたうとうゴドさんにおごつて貰ふやうな身分になつたかな」――或る一軒の小汚いバアへ這入りながら彼がさう言つた時、ゴドさんはどもりながら吐鳴つた――
「バ、バ、バカ！――
それはテーブルにゐた人たちが皆その方をふり返つて見たやうな大聲であつたが、ゴドさんは無論怒つたわけではなく、反對にゴドさんがこのバ、バ、バカ！ を連發するのは彼の機嫌のいい事の證據であつた。
彼はひどく酔つぱらつてしまつた。もともと酒のきらひな彼のくせに二十杯も飲んだらう。酒豪のやうな顔つきをして酒毒で頬をピクピクさせてゐるゴドさんも飲んで見ると酒量はごく少いと見えて二人で四本の酒に呂律が廻らなくなつてゐた。さうして「おらあにはどうも女といふものがわからねえ！」と言ふやうなことをくどくどと喋り立てながらよろよろと倒れさうであつた。彼も心のなかで言つた。――おれにもどうも女といふものは解らない。……あんなに世話女房だつた奴がいつの間に心變りがしたのだかその變化のあとは實に奇妙なほど解らない――彼は考へつづけた。さうしてさつきゴドさんがまだあんなに酔つて仕舞はないうちに彼に言つた言葉とあの實に黄色いきたない歯のある口がもぐもぐする形とを一緒に思ひ浮べた。「おらあ第一お前が氣に入らねえ。苟も尾澤峯雄ともある者が、な、女房に女優をさせて自分がのらりくらりしてゐる了見が判らない。――女髮結ひの亭主ぢやあるまい。おらあお前に逢つたら忠告してやらうと思つてゐたんだ。女房に女優をさせるなんてことはおよせやい。――女優たあ何だい。花見踊たあ何だい。赤い褌を女が見せびらかすのが民衆新舞踊か：：」その言葉に對し――彼は、決して女房には養はれてゐない事や女優をしてゐるのは女自身の道樂だといふやうなことを辯明したら、その時ゴドさんはそれ以上は何とも言はなかつたが、ゴドさんの彼に忠告したかつた事は「女房に女優をよさせる事」ではなくつて、「あんな女房はよせ」と云ふ事であつたかも知れない、さうして若し彼がゴドさんの言葉を直ぐその意味に解したとしたら、ゴドさんは自分がそんなことを彼に言ひ出した理由として何か具體的なことを――あの女の樂屋のなかでの評判でも彼の耳に入れたかつたのであつたかも知れない。それに相違ない。この男は何もかも氣がついて知つてゐるのだ……。――「ゴドさん」とさう急に呼びかけて――と彼は酔のためにめちやくちやになつてゐる頭のなかでふいと空想して見た――「ゴドさん」とさう不意に呼びかけて、彼自身がこの自分の親父ほどの年をした老友の手を急にしつかりと握つて「教へてくれ。はつきり言つて見てくれ。君はおれの女房の事は皆知つてゐるんだらう。さあそれを言つて見てくれ」とさう歎願したら、ゴドさん――一かどの奇人になりすましてはゐるが、元來はやはり一種のセンチメンタリストにすぎないこの年取つた方の酔つぱらひはどんな様子をしてどんなことを言ふだらう。
「アツ、ハ、ハ、ハ、ハ――
彼は不意に久能の笑ひ聲を耳もとに思ひ出して彼自身もその通りに笑つて見た。

「アッ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ」

その彼の笑ひ聲が、すべての興行物がハネて人通りの杜絶えた活動小屋の通りに反響するやうな氣がした。足もとにいろいろのビラ紙が捨てられて白く散り敷いて、この雜沓の巷にもう人が居なくなつてただ光だけが晝よりも眩しいものがその空虚を一層寂しくした。何氣なく―それとも無意識にはそれと氣がついてゐたかも知れない―見上げた彼の目に入つたものは、偶然にも毒毒しく赤い淺草劇場の看板であつた。その毒毒しさが目に滲みでもしたかのやうに彼の目から涙が出さうになつた。彼はゴドさんがうしろから何か言ひかけるのには耳を假さずに一人ですたすたと逃げるやうに歩み出した。

「ぢや、二階の應接間で待つてゐて下さい」

受付の老人は口にくはへた煙管を放さうともせずまた彼の顔を見返さうともせずに冷淡な調子でさう言つた。さうしてこの老人は卓上電話機をもとの場所へかへしながらやや遠いところの壁にある柱時計を眼鏡越しに覗いてから誰憚るところもないやうな欠伸を一つした。彼はその欠伸を聞きながら、また老人と一緒に見た時計は四時に二十分前だつたから未だ三時から四時までといふ先方の指定に遅れなかつたことを知りながら、泥だらけの階段を上つた、威勢よくがたがたと下りて來た一人の社員らしい男に路を讓りながら。その階段を上ると應接間といふのは直ぐ左手に自然と目につくところにあつた。扉が閉つてゐたから彼は開けようと思つてノッブに手をかけて二寸ほど開けたと思ふと、「使用中!」と内から大聲で吐鳴られた。彼は途方に暮れてしばらくその廊下に突立つてゐた。しかしその隣にもう一つ第二應接室といふのがあるのに氣がついて今度は恐る恐るその扉を開けて見ると、そこには誰もゐないやうであつたから彼はそのなかへ這入つて行つた。

一つの小さな白木の臺があつてそのまはりにやはり白木の腰掛が三つあつた。そのテーブルとは言へない臺の上にはつい二三日前にでもこぼしたのか黒黒としたインキの汚點が臺から床の上までこぼれ傳うたあとがあつた。さうして臺の上には小さな鐵製の煙草盆はあつたが火もマッチもなかつた。この部屋の直ぐ近いところにでもその機械が動いてゐるのか輪轉機の響のためにこの部屋の床はぶるぶるとふるへてゐた。高い天井の隅にぶらさがつてゐる蜘蛛の巣もふるへてゐた。彼はきよろきよろと部屋を見廻してからその腰掛の一つに腰を下した時に、閉めてある窓のガラスの隣接した建物の壁のために暗いなかに自分の顔とカラとがぼんやり映つてゐるのを見つめた。さうしてさつき町の角のショオウィンドウの鏡に映し出された見すぼらしく滑稽な姿をまざまざと思ひ出して、こんな洋服などを質屋から出して來て而も氣が利いたやうな顔をしてゐる妻の母がもう一度腹立しくなつた。と、その時、部屋の扉が蹴り飛ばされたやうに元氣よく跳ね上げられたので彼は殆んど反射的に立ち上つてそれから相當に丁寧にお辭儀をした。

「あなたが尾澤君ですか。私はここの秦龍太郎です―部屋に這入つて來た人は彼の向側にあつた腰掛へ腰を下ろしてからゆつたりした調子でさう言つた。さうして這入つて來た時からくはへてゐたらしい葉卷をしきりに吹し初めた。この人は見たところ三十三から三十八までの間らしかつたがいかにも健康さうに、又人生には何一つ足らないものが無いといふ樣子で肥つてゐた。肥つてゐたから暑いのであらう、まだ二週間以上は早いかと思はれるやうなお召の單衣羽

織を着てゐた。その服裝は彼などには見當のつかないもので所謂五分も隙さないといふこしらへで、またそれに負けないだけの貫目をこの人はもつてゐた。一たいこの男は月給をいくら貰つてゐるのだらう――彼はふとひどく世間的なことを考へながら相手の男の羽織の紐のあたりを見つめてゐた。彼は何と言つて話しかけたらいいか分らなかつたし今に向うから何とかいふだらうと思つてゐたのに先方はそれつきり何も言はないでただひどくいい匂のする煙をいつまでも吹してゐた。彼はどうやら自分がじろじろと見つめられてゐるやうな氣がしてならなかつた。さうして彼はかう言つてやりたくなつた。

「あなたは私がへんな形のそれも皺だらけのモオニングなどを着込んで來たのを見ていらつしやるのですか。私はこれを威張つて着てゐるわけぢやないのです。これや四年ほど前に拵らへたまままそれつきり質に這入つてゐたのです。外にも着るものがあるのですが皆質に這入つてゐます。それに外のものは皆いろいろなものと組合して預けてあるので一つ拔き出すと高いものにつくのださうです。念の爲めもう一度申し上げますが私は決して氣取つてこんなものを着てゐるのぢやありません。よほど氣がひけてゐるのです。それならこそ今もあの角の店の鏡で自分の姿をつくづくと見て來たのでさ。こんなことなら一そう久能の着物を借り着して來た方がよかつたのです。いや、あのよれよれになつた銘仙の薄綿の這入つたやつを平氣で着て來た方がよかつた位です。あなたはよほど着物に趣味がおありになるやうですからこんなことを言ふのですが――彼はほんとうにそのとほり言つて見たかつた。――少くともドストエフスキイのなかへ出る人物は平氣でそんな對話をおつぱじめる。そこが面白いところなのだが……彼がそんな用もないことを考へ初めたところであつた。

「ええ――久能君から電話があつたものだから、今日あたり見えるかと思つて心待ちにしてゐたところでした」相手はそのちよつと永すぎる沈默をうまい具合につくろつてくれて「で、久能からはどんな話でしたかね」

「……」彼はまさか、久能はあまりに汚い着物を着て行くなと言つたとも、雇ふやうならば月給は當分八十圓と言つたとも言へないと思ひながら彼は漠然と答へた。

「――とにかく久能君は自分の代りに私を推薦して見ようと言つてくれたのです」

「――さうさう。その事は久能からも聞きましたがね……」

「で、久能君は、一度あなたにお目にかかつて見たらいいだらうといふ事でした――」

「あ。然うですか、成程」秦氏はそこで葉卷の最後の煙を深く吸つて、小さくなつた吸ひ殘しを床の上へ無雜作に投げてから、ぢや、と言ひかけてまだ床の上で煙の出てゐる葉卷を立つて行つてフエルト草履でふみけしてからまた座へ歸つて來た。「ぢや、久能からもきつとお聞きでせうが、實は今欲しい人といふのは、私の直ぐ下に働いて貰ふ人なのです。ほんの二三ケ月も見習つて貰へば後は私もすつかり仕事の實權を、その人の働き次第ではお讓り出來るやうな人をですな――つまり社會部の幹部ともなるべき記者をですね、つまり最初の二三ケ月は八九十圓ぐらゐを支給して後になれば百二三十圓ぐらゐにもなり、どこまでも重用できるといふ程の人を搜してゐるのですが、他の社のことはあなたは無論御承知は無いでせうが、ここはその點ではずつと社員を優遇してゐるのです。その代りには隨分志望者も多ければ、從つて社でも人を入れる時には吟味をしましてね、今度でも二人だけ搜してゐるに就ても、もう三十人近

くも申し込みかあるやうなわけで。無論その人選は私が決めてもいい筈にはなつてゐますが、どうして事實はなかなか手輕には行かないので、何しろこれだけの社になつて見ますと姑小姑が多いものだからその方面からの推薦があつて見ると、それが何かひどく不適當な理由のある人でない限りは、私が自分の好きな人を入れたいといふだけの理由からぢやどうもさういふ有力者からの紹介を無視してしまふわけにも行きにくい事情がありますよ。それに近ごろの社の方の方針ぢや成る可く大學出の人を採らうといふ考へもあるらしいので、そんな肩書でも名刺の上にあると例へば訪問でもしたやうな時に何かと都合でもいいやうなわけでせう。――が、私としては無論必ずしもそんな方針などには重きを置かないで專ら實力を重じたいのです。多少とも文藝の嗜がある人を選んで所謂三面記事なるものをもつと高尚な清新の筆で書いて貰ひたい希望も十分あるので。……それにしても記者生活といふものに何か趣味なり或は自信なりをお持ちでせうかな？ あなたは？」

「――趣味？ 自信ですか？ さあ、まだやつて見ないから何とも申せませんが」――彼は少少狼狽しながらどうしてだか急に顔が赧くなるのを感じた。「――ただ、私、その今、食ふに困つてゐるだけです。困らなけや新聞記者には多分なりますまい。どうも自分でもあまり適任とは思へないのです。が、人のすることだから出來るでせう。困つてゐるのですから何でも職業でさへあれや精一ぱいはやつて見たいとは思ふのですが……」

「成程、ハ、ハ、ハ」と相手は意味のない笑ひ方をして、しかしそれだけではあまり無愛想だと思つたのであらう、意味のあるやうな無いやうな言葉をつけ足した。「いや、反つてさういふ人もいいですよ」彼は帶の間の時計をちらと覗いて見て「で、今も申し上げるやうなわけですから、きつとあなたに來ていただけるかどうかは判りませんよ。何にしても私から社長へ推薦するにも必要でありかたがた一つ、形式的ですがともかくも履歴書を出して見て下さい。いや、私もせいぜい御盡力はします、久能君からの言葉もありますからね」秦氏はそこで身づくろひをしながら今までの明快なそのくせどこを捉へていいか結局わからない、しかし秦氏はこの社では決して無勢力な人間でないといふことは確實にわかる話ぶりから急に氣を換へるやうに氣輕に言つた。「奥さんは芝居の方ださうですね、たしか。あなたはどうですお好きですか」「實は今日私も義理で見物しなけやならないものだから」秦氏はそこでゆつくりと立ち上りながら再び改まつた口調で言つた。「では一つさういふ事に願ひますかな」

彼も相手と殆んど同時に立ち上りながら默つて一禮をした。肥つた立派な男のうしろから彼はひよろひよろと部屋を出た。

街に出た彼は無意味な壓迫から初めて逃れながら、今までは舌の尖で吸つてゐた煙草もどうやらやつと深く吸ひ込めるやうな氣がした。さうして自然とつい十分間前の自分を囘想して見ると、いかにもまづい求職者で自分があつた事に氣づかずにはゐられなかつた。返事をすべき時にぼんやり外の事を考へてゐたり、必要もないのに正直なことを言つて顔まで赧くしたり、あれでは全く自分がどんなに新聞記者などといふものに不適任だかといふことを紹介するために、その事の爲めに而も拙い仕立の舊式な皺だらけのモオニングなどを着込んだ物欲しげな姿を曝しに來たやうなものだ。俺が若し――と彼は考へつづけた――若し俺が雇ふとしてもあんな男を、十分間前の自分のやうな男を自

分は採用はしない。それにしても俺だつてもう二年も前にはもつと臆面もなく人に對することが出來た筈だつたのに、いつどうしてああまで間が拔けてしまつたらう。氣が利いてゐて臆面もない。それはいいことだか惡い事だか知らないがともかくもこの社會に生きるには必要なことだつた。さういふ有力な武器を俺はもう一つ失つてしまつた。自分が間拔けであつたと同じ程度で相手はいかに手際よく自分を斷つたか——斷られたものと無論彼は自分でも思ひ込んでゐながら、でもひよつとするとまだ試つて見るつもりかも知れないやうな氣もした。つまりそれほど巧に斷られたといふことになる。が、あのそはそはとした場所でさうしていかにも事もなげに人生をやつてのけてゐる仲間に雜つて自分はどうしてたとひどんな內容をにしろ一行の文章だつて書けさうだといふ自信は一つも無いし、また初對面のエライ人などを訪問させられた時の自分を想像して見れば、これは全く採用されない方がいい。履歷書——それは一たいどんな事を書き連ねるべきものやらも知らないが、履歷書などは無論出さずともいい。いやしかし折角さう言つてくれたものだから出して置いたつていい、そんなことはどつちでもいい。といふやうなことやら、それから少くともこの十日ぐらゐの間には田舍の地所で金を借りる運動にどうしても着手しなければならない破目になつてゐることやら、いつのまにか心は少しやけ氣味になつてゐてあの疑はしい女房の行跡がどうかして早くばれて同時に自分にも恥も外聞もなくなればいいといふやうなことや、ひとりで步く時のいつもの癖として彼はそれからそれへと思ひ耽りながら、型のすつかり崩れてゐる古靴のさきを見つめながら步いた。空を見上げて何と今日は鬱陶しい雲が垂れさがつてゐることだらうと思つた。……ふと思ひ出したのは一週間ほど前にあの古本屋の小僧から聞いた渚山の噂である。渚山はちよつと「小說のやうに氣の毒」であると彼はそんな言葉で考へながら、S・L病院といふのはどの邊だかは知らないが何れここから遠くはないだらうと思ふと、彼はその小說のやうな渚山を病院へ訪ねて見る氣になつた。これは言はなければならない事だが、渚山が若し小說のやうに氣の毒でなかつたら彼は多分渚山を訪ふ氣にはならなかつたであらう。彼は一たいがそんな男なのである。

「然うだ。渚山を見舞つてやらう！」

彼は自分の思ひつきに滿足であつた。さう感じ出すと渚山の性質を吞み込んでゐる彼に偶然にも自分のいかさまなモオニング姿がへんにうれしいやうな氣がして來た——「ともかくも、これや紳士の服裝に相違ない。自分の年を二つだけ隱してゐた渚山の奴は、紳士が自分を見舞つたことを他の人に對して名譽に思ふかも知れない」

兩側に並んでゐるベッドの間を、彼は自分を案內する看護婦の步く通りに靜かに步いた。物珍らしさうに目を光らして彼を眺める病人の枕もとを三十も通り過ぎると一番奧のそれ故一番窓に近いところに來た看護婦は、病床の上で振り返つて見ようとしてゐる病人に言つた。形には似つかないいい聲であつた。

「江森さんお見舞の方ですよ」

「江森君、僕です」

「やあ、これはこれは」渚山の聲は少しも衰へてはゐなかつた。それに想像したよりも[illegible]彼[illegible]に寢返りをした。しかし[illegible]向き合つた時に彼は、自分の友人の[illegible]色[illegible]を見た。

　看護婦は今まで指を挾んで掌の間に持つてゐたバイブルをその白い事務服のポケットへ收めて、かの女はその手で諸山の枕もとにある小さな腰かけの上のもの、手帳から書物らしいものや藥瓶などを取除けてそこに彼の席を拵へようとするらしいのを、諸山は輕い手つきで止めながら、

「いや、その、それは構ひません。さあ、尾澤君、どこでもそのベッドの一部分へお掛け下さい。腰かけは御覽の通りの代物ですからお尻が痛いです」

　しかしその狹いベッドの一部分にもあまり適當な場所が無いのを見て彼は三歩ほど動いてベッドの裾の方へ腰を下した。

「これは全く思ひがけないことです。いやどうも有難う」諸山は心からうれしいやうに彼を見つめながら「ほう！」と例の聲を出した。「ほう。ひどく盛裝をしてゐられますね」

「これですか」彼はコオトの胸のところを自分でつまみながら思はず苦笑した。「御見舞ひだから一つ精一ぱいのおめかしをしてね」その冗談を諸山は半信半疑らしく笑つてゐるのを見て彼は言ひつづけた。「いや、嘘です。これには深い仔細がありましてね。實はその序に急に思ひ立つて御見舞ひに來たのです」

「序でも何でも來て下さつたのは有難いですね。深い仔細とはどんな事です」

「いや、そんなことよりも、その後どんな鹽梅です。御容態は」

「有難う。一時はひどく諸君子を煩はせたものですが、ここへ來ると直ぐよくなりましたよ。我我貧民には藥はなかなか利き目があります。歩行ですか。それがどうも不自由なので多分もう永久に駄目でせう。立派に廢人になつたわけです」諸山は自分自身を冷笑するやうな言葉を使つたけれど、彼の氣色のなかにはそれに就て別に感情を動かしてゐるやうなところは少しもなく十分に平靜であつた。さうして彼が病院の生活はどうだと言つて尋ねて見た時に、彼は諸山が病苦の劇しくない限りにここで全く滿足してゐるらしいのを知つた。諸山は第一にこの病院がある場所が靜かないいところで、その上にこの病院の建物もがつしりしていいことなどを恰もそれが自分の術らしく手に入れた屋敷ででもあつたかのやうな口吻で述べた。それから又、紹介者の注意があつたのかどうか兎も角も、室の隣の比較的獨立したさうして窓に近い明るいところに寢てゐられることを喜んでゐた。「ね、御覽なさい。この窓にはいい眺めがあるでせう。川或は海とどういふ關係の場所にあるのですかここから屋根の間に船の帆がぽつちり見えることがありますよ。ここへ來てから一週間目にやつと少しベッドの上に坐れるやうになつた時に偶然發見したことですがね。その後氣をつけて窓を向いてゐるとかうして寢てゐて外が見えなくとも、空の明るい日などには船の帆が通ることがわかるのです。――反射の加減か何かでせうか、ちらとたとへば鳥影が射すと言つた具合にですね。夜になると全くひつそりしますね。少し暗いですがでも本も讀めます。誰だか知らないが、夜になると枕もとで看護婦にバイブルを讀んで貰つてゐる人がゐますが、あの看護婦はいい聲なものだから、それが小聲で水の流れるやうに透明に聞えて來る夜の情調もちよつと惡くないです。我我老人をでもちよつとセンチメンタルにしますね。他の人も皆耳をすましてゐる樣子です。あの朗讀は――ええ、この部屋の隣らしいのですが――これはと言つて諸山は自分の[illegible]を指しながら――あれですが、[illegible]なんて、それに聞き、あれはしをらしくバイ[illegible]を讀んでゐるのです。さう、二十三日にも見え[illegible]

さ、ゆつくり實人の看護婦がゐますよ。時時廻診について來ますがね。」

もともと話好きな渚山は、久しぶりに話相手を得たせいであらう、樂しさうに口を開いてほとんど一人で喋りつづけた。何時の間にか床の上に身を起してゐた。彼が注意をすると時時は寢てた方がいいのだと言つた。扉が開けられて人が這入つて來るけはひがしてそれが渚山の方へ進んで來るらしいので見るとそれは夕方の食事を運んで來たのであつた。看護婦も一緒に來た。さうしてその色の黒い脊の低い女は、さつきその上を片づけて彼の席を設けようとしたあの頭かけの上にものをベッドの片隅へ置き直して、食事を運んで來た女に膳をその頭かけの上へ置かせると、その膳のまま食事を起き直つてゐる渚山が食べやすいやうな場所へ据ゑてやつた。

「食事がお濟みになつたら、もう横におなりになつた方がいいでせう」

看護婦が渚山にかういふ注意をのこして歸つて行くのをきつかけに、彼はもう歸らうと言つた。しかし渚山はもつとゐて欲しいと言つた。さうして彼もやつぱり何かもつと渚山と話してゐてもいい氣持はあつたのである。

「いいでせう、もう少しゐて下さい。ほんとうです。こんなものですが半分召し上りませんか」渚山はさう言つて、今運ばれた自分の膳を彼にすすめるのであつた。「さうです。私が食べないうちに半分さきに召し上つて下さい。私はいつも餘るのですから」

「いや、お腹はすきやしないのです」彼は渚山の言葉に面くらひながら狼狽したやうに言つた。「ただ、あまり永居をしちや病人のために悪いと思つただけです。構はないのなら何時まででもゐますよ。さあ、私には勝手に食べて下さい」

病室のところどころで病人達が食事に就く前にするのであらう神に對する祈禱が呟かれた。しかし渚山はそんな事はしなかつた。その代り彼に對して「では、ちよつと失敬して食べてしまひませう」と言ひながら、こく、輕く頷かれた御飯を茶碗に盛つた。それから急に小聲になつて「ね、食事はさう悪くはないでせう、セとしては――」そのセといふのは何のことだかちよつと判らなかつたが多分は施療患者といふ意味であらう。豆腐ばかりらしい、いり豚子と味噌との食事を渚山は十分滿足して味つてゐるらしかつた。彼は先刻から目に這入つてゐる窓さきにあるまだ花の咲いてゐない草花の鉢を、それは渚山のものだらうかそれとも外の患者のであらうか看護婦のであらうかなどと考へながら、しかしそれを別に渚山に尋ねて見ようともしなかつた。しかし船の帆が近くに見える時があるといふ窓の方へ立つて行つて見た。隣あはただ黄昏にまだすこし間のあるどんよりとした空の下に屋根ばかり見えて、なかにはここの洋館の壁と窓とまた隣のものに違ひないと思へる高い屋根も見えて、近いところには此病院の構内にたつた一本の棕櫚が地から大きな葉になりかかつてゐた。なるほど高い三階ではあるが眺望も何もあつたものではない。けれどもこんな窓だつて晴れた日に見たならば空が實際と見えるだけでも、いくらかは病人の慰めになるには相違ない。「いや、ちよつとしたものだ、「セ」としては悪くない食事を何の心配もなく食べてゐられるといふ事だけでも渚山にとつては近來にない心長閑な氣持であるかも知れない。實際彼だつて――と、彼は考へた――新聞社などに通ふよりはここに寢てゐた方がもつと自分に適當かも知れない。彼はそんなことをちらと考へながら、ふと看護婦がベッドの片わきに置き直した渚山の書物を見るともなく見ると、そこには一冊の讃美歌があつた。それを取り上げるとその下の赤い

書物は『天路歴程』であつた。

「ほう。看護婦がそんなものを貸してくれるのです」洛山は、彼がそんなものを見てゐるのに氣がついたと見えて、彼には思ひがけなくそんな言葉をかけた。「讃美歌なるものを初めて繙いて見ましたが、なかなか面白いのもありますね、文學的に見て」

彼は何とも答へなかつた。さうして心中に洛山はそんなものを讀んでゐることを笑はれはしないだらうかと心配してそんなことを言ふのだと思つた。もう食事を終つたらしい洛山は、いつも殘すと言つた御飯をきれいに片づけてゐた。それは蓋のないゆきひらを見れば一目でわかる。看護婦の注意に從つたのかまたベッドのなかへ横になつた洛山の枕もとへ、彼はそのベッドの片隅に狹く腰をかけた。さうして手にとつた讃美歌集を開くともなく開くと、或る頁が、そこがいつでも繰り開かれた結果ひとりでにそこが出て來るかのやうに自然に開いた。この書物にそんな癖をつけた人は洛山であるか、それとも他のこの讃美歌集を借りた事のある人であるか、それはわからないが、そのひとりでにあいて來た頁を彼はちらと讀んで見た――「夕日はかくれて」といふ句で初まる歌であつた。

默つてそんなものを見てゐる彼に對して洛山は話題を求めるやうに話しかけた。

「さうさう。その、あなたが盛裝をしてゐる仔細といふのを一つ聞かうぢやありませんか」

彼は氣のない顏をして新聞社の一件を話すと洛山は何新聞だ、サラリイはいくらだといふやうなことをどうしてだか詳しく聞きたがつた。彼が體よく斷られて來たといふと誰に面會したのだと尋ねた。その人が秦氏であると聞くと洛山は、彼を慰めでもするかのやうな口調で言つた。

「あの人に使はれたつて、どうしてあなたが一月もつとまるものですか」

「どうしてです」彼はちよつと好奇心を動した。「それにあの人をあなたは知つてゐるのですか――」

「知つてゐますとも。尤も以前ですがね。――二十年も僕のやうなことをしてゐれば誰をだつて知つて來ます。それにあれや有名な人で、あれや給仕から仕上げた人で……尤もそんなことは無論その人の人格とは關係がない事ですが。そら私の『山峽の人人』のなかに出て來る西洋樂器製造所の主人の鈴木といふのがあるでせう。主人公の良太の姉がその人の妾になつてゐるのです。その鈴木の遊び友達に新聞記者があつて、その男の插話として……」

「さう。思ひ出しましたよ。私生兒を孕んだ新華族の令孃を、その親を脅して持參金つきで貰ふ人でせう」彼は、洛山がまたしても書かれざる傑作『山峽の人人』の梗概を話し出すのをおそれて、さう話をひきとつた。しかし彼の豫防も何の效もなしに、洛山はやはり『山峽の人人』のうちのエピソオドをもう一度一とほり話し直さなければ承知しなかつた――

「……で、私の小說ではさうなつてゐますが事實は、華族の令孃ではないのです。――或る成金が孕ませた藝者です。その成金が飽きた女を持參金つきで子供と一緒に貰つただけですが、それを貰つてしまふと自分は別に妾を置いて――その妾を置きたいからその女を女房に貰つたのだなぞと惡口を云ふ人もありますがね、ともかくも貰つてしまふとその細君をひどく虐待するのださうです。しかもその女が離緣してくれといふと、秦氏は自分の女房の目前に手をついて詫るのださうです。これは秦氏の細君から出た話ださうですが、で皆は秦は女房を歸すと持參金も歸さなければなるまいし、それよりはあの新聞社と密接の關係のあるその富豪家に

頭が利かなくなるからだと評してゐますが、私の憶測は全く別なので、山峡の人人にもあるとほりに、谷氏はほんとうにその細君に惚れてゐるのですな。……」

　そんな話を聞きながら、彼は無論何の興味も覺えなかつたし、實は注意も拂つてゐなかつたからどこからどこ迄が諸山の小説でどこが事實なのやらさへも聞き洩した。ただ諸山は何のためにそんな小説の話などを初めたのだらうと思ふと、この男は自分が小説などを書く才能がある人間だといふことを、自分のベッドに近い人間に吹聴したいのぢやないかとさへ感じだした。事實、近くの病人たちは諸山の話聲が高くなるにつれて耳を傾けてゐる樣子でもあつた。

　それほどひとりで興に乗つてゐる諸山の枕もとへ再び看護婦が來て、あまり話に身が入りすぎると熱が出ますよ―と笑ひながら優しく注意したのをいいしほにして彼は歸り支度をして立ち上つた。自分の言葉の爲めに歸るのだと思つたらしい看護婦が訪問時間の六時までにはまだ三十分あるからと言つたけれども、又、諸山が急に淋しさうな顔で彼を見上げたけれども彼は再び腰を下さなかつた。

「それぢや又來て下さい。それから一つ今度の住所を控へさせて下さい―」

　諸山は枕もとにあつた小型の手帳を出しながらさう言つた。立つたまま何氣なく見下した彼の目には、その諸山の手帳には近頃病床であれこれに思ひ出して書き出したかと思へるやうに丁寧に友人の名前や住所が書き連ねられてあるのを見た。

「僕の住所ですか。下宿ですがね。近いうちにまた變ることになるでせうよ。いや、まだどこだとは決りませんが」

「それぢや、マダムの實家へでも手紙を上げればいいですね。ところでマダムはどうしてゐますかね。さうさう、マダムは歸國してしまつたつてねえ、ずつと音信にしませんでしたがどうぞよろしくおつしやつて下さい―」

「ええ、ええ」彼は曖昧につまつた人のやうな聲で答へた。

　彼は急いで病室から出た。けれども階段の半分まで行つた時に彼は踵をかへして再び諸山の枕もとへわざわざ歸つて來、何か言ひわすれた事でもあつたやうに、さうして訝しがつてゐる諸山の顔を避けながら言つた。――

「手紙は――もし用があつたらどこか外のところへ下さい―僕はひよつとして、多分、近いうちに、と言つていつたら極りませんが、女房を同棲しようかとも思ふのです」

「ほう？　それは又どうしてです？」諸山は無論ひどく驚いた表情であつた。

「その事はいづれ又あつてから――」それから

と彼は急に小聲になつて早口で「僕は人目をさけて、尤も今あるわけぢやない――近いうちに田舎の場所を探さねばならぬと思ふのですがね、必要なら持つて來ます―

「何故ならば――ただ私は決して居るのではなく必要もありませんね。實は夏目さんへ手紙を人にたのんで貰ひもしました。」

　二人は小聲で短くささやき合つてしばらく沈默した。その沈默の間で彼ははじめて諸山の心にぴつたりと觸れるのを感じた。

　諸山と別れた彼はさうしたわけでもなく、ひどく疲れてゐるのを覺えた。

　さうして諸山がいい建物だと自分の家のやうに言つたその大きな病院を晩秋の夕方の暗さのなかにふりかへつて、その病舎の上に黒く這つてゐる蔦かづらの異樣な模樣を見ながら門を出た。諸山は打見たところ然ほど險惡な病

狀とも見えないが、看護婦があんなに煩さく注意するやうではやはりよくないのであらう。いい場所へ收容してあるのもその病狀のためかも知れない。もうかうなつた渚山を死なせたくないと言ふのはただのセンチメンタリズムだ。渚山はもう死んだ方がいい。誰だつて死んだ方がいい！　それにしても「二十年も僕のやうなことをしてゐれば誰をだつて知つて來ますよ」と言つたつけが、何氣なく渚山は言つたがその言葉がへんに悲しく彼の心にのこつてゐた――渚山が死んだらあの言葉を何時までも思ひ出しさうだな。――渚山はあの病院でひどく平靜らしかつたが二ケ月經てば養育院へ行くことは知つてゐるか知ら、彼は遠路を歩いて來た人のやうな足どりで、頭ではとぎれとぎれにそんなことを考へて歩いた。と、彼の口角には意地の惡い微笑が我知らず浮んだ――あの堂々とした風采の、てきぱきした事務家の秦氏が細君の前で平伏して懇願するところと同時に渚山が病院の食事を彼に半分食べさせようとした非常識な親切とがごつちやになつて目に見えて來たからである。しかしその微笑は直ぐに消えて彼は苦い顔をした。さうしてその苦い顔も亦すぐにぼんやりとした悲しげな不快なだけの顔になつてゐた。さうして電車停留所に立ちつづけた彼は、夜に入らうとする都會の混雜時間で滿員つづきの電車のなかへ割り込んで乘るだけの氣力さへなかつた。何時の間にか空になつてゐる煙草の袋をポケットから引き出してそれを掌でまるめて自分の足もとへ投げすてながら彼は、程近い乘換場所まで再びとぼとぼと歩き出した。もう別に何も考へてはゐなかつた。街には灯がかがやかに光りはじめてゐた。……一たい今は春だつたかしら秋だつたかしら、彼はふとそんなうかいけたことを感じてゐると、けたたましい自動車の唸りに彼はうろたへながら路のそばへ退いた。威勢よく過ぎて行く車にはつとした彼は――

「は！　氣をつけなけれや。こんな時に人間は轢き殺されるのだ

砂ぼこりを浴びながら、そんなことを口に出してゆつくり呟いた。

都會の憂鬱の
卷尾にしるす文

「都會の憂鬱」は大正十一年一月から同年十二月まで雜誌婦人公論に連載されたものである。單に一人の男の平板なただ困憊し切つただけの生活を現はして見よう――描くのでもない、寫すのでもない、歌ふのでもない、現はして見ようとしたのである――と思つてから五年目に筆をとつた。

――といふと、それほど永い間の腹案で、從つてよほどの大作などと早呑込みは困る。ゆつくりとさきをお讀み下さい。――五年前の腹案は、白狀するが筆をとつて見ると殆んど役に立たなかつた。何となれば私だつてたとひさまざまの不安定のうちに育つても五年立てば五つになつてゐたからである。さうして私はその腹案を打壞すことに苦しみながらいつも手さぐりで書いたのである。やけに書いたのである。大へんつまらない作だと思つたり――讀者などといふロクでもないものでこんな事を言ふのぢやない――、必ずしもさう捨てたものではあるまいと思つて見たり、自分でも何が何だかもう判らない。本にして纏めて讀み返して見たら、その點がいくらか判るかも知れない。これがこの書物を上梓する理由の一つでもある。

この小説のなかで、私は或る問題に對し、

な點に殆んど觸れずにしまつた。これだけの長さでは書けさうにもなかつたし、また今の私ではまだおぼつかないとも思へたからである。私はやつぱり安逸を貪つたことになる。が、何はともあれ私はこの作で初めて人間といふものを取扱つたわけである。

この作を「田園の憂鬱」に比べて見て或る人は似ても似つかない姉妹篇だと言ふかとも思ふ。又一方、或る人はやつぱり血すぢは爭はれないところを發見するかも知れないとも思ふ。そんなことはどちらでも人まかせだ。ただ私としては、「田園の憂鬱」がいいからと言はれてももう一度あれを繰り返すことは出來もしないししたくもない代りに、私がもし作家としてくたばつてしまはない限りはたとひ讀者と批評家とが見向いてくれなくとも――好意ある人が積極的に私のために非難したり惜しんでくれたりしようとも、私はもつともつと「都會の憂鬱」的のものをもう一度、いや幾度でも試みて見ようと思ふ。私自身の藝術に對する考へは、人が何と言はうともさういふ風に變遷して來たのである。――私は一方に絶えず厭離の念を募らせると同時に不思議なことには、この小ざかしくも奇妙な動物、私自身亦その一員であるこの動物のさまざまな現象を苦しくも私は自づと知るやうになると、それを知ること深くなればなるほど私は普通人間と呼ばれてゐるこの動物がいへんに好き――と言はうか何と言はうか、一種切なく見入らずにはゐられなくなつて來た。この心持が、私の新らしい徑路として若し一足でもこの作でその方向を示してゐたならば、私は今はそれだけで滿足するより外には仕方がない。さうしてたとひこの作が大へんまづいものであり、また書きながらイヤな氣乘りのしないものであつたにしても、そこに人として作家としての自分の生活が開展しかかつてゐるとすれば――斷るまでもなく、このことは所謂自敍傳的製作といふ意味とは全く別であるが――、その巧拙とか完成不完成とかいふことなどの如き先づどうでもいいことにして置いてもいい。――ムシのいい申し分だが讀者も今のところそれで勘辨して置いてもらへないだらうか。

私は生地で行きたいのだ。この間、象牙の塔」から立ち退きを命ぜられたのだ。さうしてどこへ轉住しようかと思つて私はい、い、まごまごしてゐるのだ。――さう言へば、そんなことよりも今の私にとつてもつと書いて置きたい事は、この作を書いてゐた時分は、私が自分の書齋ではないところで、或時は單身の家庭の一隅で、或時は田舎の小汚い宿屋の一室で、或時は人の家のあまりはつたりともしない一隅で、或時は雜誌の編輯所で、或時は印刷所の校正室でさへも書いたといふ事實である。こんなことを書いて私が、世間見ずにもいかにもエライ事がなにかのやうにこれを吹聽したり、或は自分の作の散漫の言ひ譯に役立てたりするだらうと思ふ人には思はれ。そんなことが何で作家の作品の貧弱な言ひわけになるものか。私は知つてゐる。私は知つてゐる、すぐれた作家はみんなそれぞれの苦境のなかで書き遺したのだ。――唯、私はここまで書いて來てうつかり例の感傷の惡癖を發してこんな事を書いてしまつた。何にしても筆をとつて氣むづかしかつた私が、こんな境界や心境でよくもたとひ出たらめな一行でも書く事が出來たものだ。

とかう言つて私はいま自分を甘えかすのだ。實際、人間には苦言の必要な時もあり甘言の必要な時もある。私には今甘言が必要だ。さうしてしたりげに苦言を呈してくれる人があつても甘言をくれる人はなささうだから私は自分で自分を劬る。それほど人生が今は私につらく當つてゐる。白狀するが私は藝術のなかに悠悠自適するやうな氣持にはもうなれない。私は文章を書き直して見ばのいいものにしてゐたりするひまはない。出來さうにもなし、したくもない。そんなことをして高められ深められるやうなそんな氣品や力や眞實や美しさならさつさと消えて無くなれ！——作家としてさういふ態度がいいか惡いか、悲しむべきか哀れむべきか、またその重荷の爲めに（この重荷とは何だ！　そんなひとり合點なことはいふものぢやない）私が遂に一人生の下敷になるか、はたこれが一つの煉獄であつてより深い自分が生れようとしてゐるか。そんなことを私は一切今は知らない。私はすつかり自分自身を見失つてゐる——これはまた一たいどうしたといふざまだらう。

こんな愚にもつかない述懷をするよりは唯、そんな私をよく懲りもせずに鞭撻して、ともかくもこんなものをでも書き上げさせてくれたのは一に婦人公論記者半澤成二君の力である。君は職業の熱心以上のもの——友情をもつて私にこれを遂げさせた。半澤君、君は私にこの作を書かすために一たいこの一年内に百何十度或は二百何十度ぐらゐ私のところへ足を運び、何十度ぐらゐ私の駄駄を捏ねるのを聞いたらう。君こそ、誠實ある甘言をもつて私をよく支持してくれられた。もしその君が無かつたら、私はこれだけの粗雜なその時のがれの仕事をでもその半で放擲してしまつてゐたらうと思ふ。ここに自分の腑甲斐なさを白狀すると同時に同君の名を記して感謝するのを至當だと私は思ふ。最後にこの書の評判がよく且つ大に賣れることを願ふ。賣れることは私の生活にとつて邪魔ではないし、息子の新作の評判のいい事は何も知らない私の老父母を喜ばすであらう。

（一九二二年十二月十二日）

「都會の憂鬱」の作者

或るとき人に與へて

片こひの身にしあらねど
わが得しはただこころ妻
こころ妻こころにいだき
いねがてのわが冬の夜ぞ。
うつつよりはかなしうつつ
ゆめよりもおそろしき夢。
こころ妻ひとにだかせて
身も靈ものろのきふるひ
冬の夜のわがひとり寢ぞ。

（殉情詩集より）

また或るとき人に與へて

しんじつふかき戀あらば
わかれのこころな忘れそ、
おつるなみだはただ祕めよ、
ほのかなるこそ吐息なれ、
數ならぬ身といふなかれ、
ひるはひるゆゑわするとも
ねざめの夜半におもへかし。

（殉情詩集より）

お絹とその兄弟

私はかつて武藏野のNといふ村に住んだことがある。考へると、今でも妙な心持がする。あんな片田舎へ、一たい何のつもりで、住まうなどと思ひ立つたものであるか、今日になつて見れば少少物好きすぎたと思ふ。けれどもその時には、私は本氣にその村で一生を送るつもりだつたのだ。それは、八、九年ほど前のことである。けれども私は、それがもう十年ももつと昔のことであつたかのやうに思ふ。若しかすると、私はその田舎の一年足らずの生活の間に、十年も年をとつたかも知れない。私はその村で非常にさびしい思ひをしたのだから。――私はその時の自分の生活の狀態を、「病める薔薇」或は「田園の憂鬱」といふ作品のなかで書いた。

私自身がさびしい心持を持つて居た。けれども、その村そのものもなかなかさびしい場所であつた。言はばその點がその頃の私の氣に入つて居たのだつた。そこは、東京からでも、横濱からでも、或は八王子からでも、それぞれ七八里とは離れて居なかつた。それで居てそれらの都會への交通の便といふものは、殆んど全く何もなかつた。そこは以前、良質の[illegible]木を産出した地方としてその方面の人には知られて居た。そのN村は、神奈川と八王子とを行き來する汽車の道からは、一里以上もそれて居た。その汽車に一度乗りそこなふと、無駄に三時間も待つて居なければならなかつた。そんな場合にたまにあると、この汽車は實に不便なものであつた。村の人人は、主に圓太郎馬車で神奈川へ行くか、それでなければ歩くのである。その馬車の立つ場までだつて、私の住んだあたりからは一里近くの道である。それでも村の人人は、一向に不便を感じはしなかつたのだ。それほどこの村の人人は、單純な生活をしてゐたからである。ちよつと考へると、このわれわれが今居る東京のそれほど近くに、こんな不便な荒廢した田舎があることは、不思議なほどである。實際、私も最初に偶然この地方を見出した時には、圓太郎馬車に搖られながら、道ばたの田や、畑や、丘や、林や、森の木立や、小路や、雜木の丘や、桑や栗の果樹園を見て居るうちに、いつの間にか忽然と目の前に展開されて來た大地に氣がついて、驚いたものであつた。しかし、よく考へて見ると、大市街の直ぐ近所にこそ、反つてこんな場所が出來もするのである。それは寂しいことでもあるが、また樂しませることでもある。

そこは武藏野の片隅で、その野原が盡きてしまつて、これから山國にならうといふ地勢であつた。そこには平凡な丘が幾つも、幾重にもつづき重つて居た。その丘の或る場所からは、上古の人間の遺して行つた石の鏃か、大昔の後などに時時出て來るといふところもあつた。さうしてT川の上流で、その流域だけが僅かに打ち開けた田園であつた。前の丘の遠いうしろには、場所によつては富士山脈のうちのあるものが見えた。場所によつては富士山も、その眞白い頂だけが見えた。秩父山脈の、諸の峯が、雲の群のやうに――實際夏のうちは雲だとばかり思つた――かすかに黒く西の地平に見えて居た。そんなところに、一筋の道に沿うてそれもやつと片側だけ、飛び飛びに、或はまた道からはずつと距たつてその代りには丘の懷に抱かれて、古い草葺の屋根

がいくらかかたまつて居た。それらは、人間がむかしどんな場所を擇んで自分達の住居にしたかといふことを、實例で示してゐるやうであつた。そんな家の一つに私は住んだのだ。

私は初めN村のうちの字Iといふところに、お寺の一室を借りて居た。しかし三月ほど後に、同じ村のうちの字Kといふところで、一軒の家を借りることになつた。KはIよりも、もう一里以上も上であつた。それだけに一層不便であつた。

私達がIからKへひつ越しをした時に、その家へ案内してくれたり、荷物を運ぶ手傳ひをしてくれたり、煤けた障子を家の前の溝で洗つてくれたりした女があつた。その女はなかなか小まめに親切に働いてくれた。その女はそんな縁から、その後、私の家へよく遊びに來るやうになつた。私の妻——この女は後に離別したが——は、話相手がないままに、よくその女といろいろな話をしたり、また時時洗濯物を頼んだりして居たやうであつた。

「ほんたうに親切な人だ」

妻はさう言つて、よくその女をほめて居た。

その女はおきんといふ名であつた。さうして、村の樵屋の萬平の妻であつた。年はそのころ三十五六であつた。或はもつと若かつたかも知れない。併し、正直に言へば醜い女であつたから、實際、幾つであらうともそれがあまり重大な問題ではなかつた。おきんは色が黒かつた。その顏の形が栗に似て居た。平たい、ひしやげた顏で、頭が大きくつて頤がなかつた。よく太つて居た。亭主の萬平はきりぎりすのやうな顏をして居た。さうして痩せて居た。彼等はいかにもそんな田舍にはありさうな人たちで、さうして都會では決して見られない種類の人たちであつた。その萬平は犬が好きだといつて、私の犬を見に來ることもあつた。萬平は滅多には來なかつたが、おきんの方はよく遊びに來た。秋の夜長になるに從うて、いろいろと畑で出來るものを手にさげては、おきんはふりつづく秋雨のなかを、遊びに來た。さうして何かと話して居た。おきんは仲仲話好きらしかつた。或るそんな雨の晩のことである。おきんはひよつくりと、彼の女の身の上話を始めた。私は妻とおきんとが常にどんな話をして居たかは知らないが、この晩はたまたま私もその火鉢の傍に居たから、おきんの話を聞くことになつた。おきんの話は思つたより面白かつた。私はつい感心して、その話をおしまひまで聞いた。見たところ何の變つたところもないこの女が、そんな珍らしい運命を堪へ忍んで來たかと思つて、私は深い淵を見つめるやうな心持でつくづくとその女の顏を見た。私は多少感動した。それはおきんが私たちに起させようと試みたものとはよほど違つて居たかも知れないが、兎に角にも私はその話に心をひかれた。ところがそれがおきんにはうれしかつたものと見える。おきんの話を聞いて、私ほど耳を傾けた人は今までないと言つて、おきんは私に感謝した。おきんはそれ以來、閑あるごとに私たちを訪ねた。さうして何度でも何度でも、その身の上話をくり返した。思へば私は我儘な男である——その田舍へ孤獨を求めて來ながら、半年とはたたないうちにもうそんな淋しい田舍にも滿足出來なかつた。私はどことも知らないところへの鄕愁—それは心と體とのから、もう毎にいらいらする心持を起すやうな心身の狀態になつて居た。それでおきんの話も、たうとうおしまひに私を腹立しくした。私はおきんの顏を見ると避けるやうになつた。私はそれほど、それに惱まされたほど、度度、その話を聞いたのだ。おかげで私はおきんの話を、今でも、ほとんど彼の女の言葉どほりに語ることが

出來る。
　おきんの生れたのは甲州のMといふ靈場の附近である。おきんは六つの時に母に死に別れた。さうしてその村のお寺で育てられるやうになつた。おきんはそのお寺の住職のことを、「和尚さん、和尚さん」とさう言つてなついた。そのころおきんは、自分の父は母よりも先に死んでしまつたので自分は身なし兒だ、といふ風に思ひ込んで居た。それは亡くなつた母がおきんにさう教へて居たからである。けれどもおきんはふとしたことから、和尚さんが自分の父ではないかといふことを、子供ごころにも考へるやうになつた。といふのは、おきんが村の學校へ通ふやうになつてから、「やあい！坊主の子、坊主の子」と、さう言つて、男の子などから毎日からかはれたことである。最初、おきんはそれを、自分がただ和尚さんに養はれて居るから、外の子供たちがそんなことを言ふものと考へて居た。と同時に、何故ともなくもしやほんたうに、和尚さんが自分のお父さんではなからうかとも疑はれた。さうして、和尚さんが、おきんの疑うたとほり、おきんのほんたうのお父さんであつたといふことは、間もなく子供のおきんにもわかつて來た。それは和尚さんの臨終の床でである。それを叔母さん（おきんの母の弟の妻）が教へてくれたからである。その時、おきんはたしか八つであつた。
　かうして今度はほんたうに身なし兒になつたおきんは、母の弟である叔父の夫婦にひきとられた。叔父はお寺とは十五六里も離れた村に住んで居た。その叔父夫婦には子供が無かつた。それでおきんはその二人から非常に可愛がられた。さうして一年半ばかり經つた。
　或る日の暮れのことであつた。叔父の家へ見知らない若い男が訪ねて來た。その若者は、そんな田舍では見られない町場の風俗であつた。帽子を冠つて居た。さうして旅裝をして這入つて來た。叔父とその若い人とは、機嫌よく話し合つて居た。叔父は、叔父たち二人のそばでそれを見て居たおきんを呼びかけて、
「これやお前の兄さんだぞ」
と、言つて聞かせた。おきんは自分にそんな大きな兄さんのあつたことを、この時初めて知つた。叔父と、兄だと言はれたこの若者とは酒を飲み出した。それは多分秋であつたらう。何でも爐に火を焚き出したころだつたのをおきんは覺えて居る。おきんは物珍らしさに二人を、つと見て居た。さうして自分のことが話されて居るのだと知つた。どういふわけだか、そのうち二人の聲がだんだん高くなつて來て、二人とも喧嘩をしさうになつた。叔母が這入つて來て二人をなだめた。叔父はごくおとなしい人で、めつたに怒つたりなどはしなかつたのに、この時には大へんに怒つた。さうして叔母がなだめてもなかなかきかないで、大きな聲で言つた。「子供のころから家を飛び出して、おふくろの死に目にも逢ひに來ず、おやぢの葬式にも來なかつたものが、今ごろどのつらをさげて、この家の敷居をまたげられるか」叔父はまたかうも言つた。「われのやうなごろつきに、どうしてこの子が渡されるものか。これはもうおれの子になりきつてゐる。兄、兄と、何を笠に着ることがある」叔父は叔母を突き退けた。兄は立上つた。兄は非常な大男であつた。
「私はその前から泣いて居ましたが、」と、おきんは言つた。「兄の立上つたのを見た時には身慄ひが出るほど怕ろしくて、泣きやんだ程です」
　それでも、おきんはその兄につれられて行かねばならぬことになつた。兄はおきんに、「こんな田舍ではない賑やかな町場へつれて行つてや

る」といつた。

兄がおきんをつれて來たのは八王子の町であつた。おきんは兄と一緒に、或る家の二階に住むことになつた。その家にはお婆さんがたつた一人きりしか居なかつた。兄はおきんをつれて來る時に、おきんと一緒におきんの持物を、母や父がおきんに遺して置いてくれたものを、すつかり叔父から受取つたのである。多分、兄はうまい事を言つて正直な叔父夫婦をたぶらかしたのであらう。さうして八王子へ來ると、兄はもう直ぐその晩から、そのお婆さんの家へはとまらなかつた。子供のおきんを一人のこして置いて、どこへ行つたかわからなかつた。さうして三日に上げずからしてうちを開けた。三日も四日もつづいてうちへ歸らないこともあつた。するとそのお婆さんが、二階へとぼとぼと上つて來て、

「かはいさうに、惡い兄さんを持つて。兄さんはまた今夜も歸つて來ないねえ。お前もさびしいだらう。下へおいで、さあ、さあ、おばあさんとねんねしよう」

さう言つて、お婆さんは、そんな晩には、きつとおきんを自分の蒲團のなかへつれて行つた。

おきんは兄が歸つて來なくても、別だんさびしいとも何とも思ひはしなかつた。あの時、怕ろしい兄だと思つた心持は未だに消えなかつた。おきんは兄になつかうにも、なついてゐるひまがなかつたのだ。かうして兄がうちをあけてばかり居たのだから。けれどもたつた一つ、おきんには兄さんが歸つて來て欲しいとおもふ理由があつた。それはかうである。兄の歸らない晩には、かうしておきんはお婆さんに抱かれて寢た。たとひいやでもさうせずには居られなかつた。二階では、もし夜なかに目が覺めたりなどした時、おそろしくて一人では寢られないからである。併し、お婆さんと寢ると、いつでも、おきんは次のやうな會話をしなければならなかつた。――さう言つておきんは、その會話を次のやうに眞似て聞かせた。「兄さんはまた惡いことをして遊んで歩いて居るんだよ。それに女もあるんだよ。お常もあれにあんまり心配をかけさせられて、それでたうとう死んだのだ―

「お婆さん、誰が死んだのよう?」

―お常だよ―

「お常?」

―うん

―お常たあ何だんべい、ねえ―

すると、お婆さんはかういつた。

―うらが娘のこんだあ―

それからお婆さんはいろいろと、そのお常といふ娘の話をした。さうしてしまひには、きつと、

「考へればお常も可哀さうだ。お前も可哀さうだ。うらも可哀さうだ。うらが一番可哀さうだ―

さう言つてお婆さんは、しまひにおいおいおい聲を立てて泣いた。泣きながらまだ何かを言ひつづける。

―お婆さん、そんな話はもうよすべえよう―

さう言つておきんも泣いた。さうしておきんは泣き寢入りに寢入つた。

この婆さんはもうすつかり腰が曲つて居た。老いぼれて子供のやうになつて居た。さうして每晩同じことをおきんを相手にして口說くのであつた。

―うらが娘のこんだあ―

と、いふ。

―考へればお常も可哀さうだ。お前も可哀さうだ。うらも可哀さうだ。うらが一番可哀さうだ―

と、いふ。

さうして耐へ性のなくなつたお婆さんは、聲

を上げておいおい泣く、
「お婆さん、そんな話はもうよすべえよう」
と、さう言つておきんも泣く。
お婆さんはその話をしないことはなかつた。毎晩毎晩、その同じことを同じ言葉で、幾度でも幾度でも繰り返すのであつた。おきんには、夜になつてそれを言ひ出されるのが何よりも悲しかつた。さびしかつた。氣味が惡いやうで恐ろしくもあつた。それを聞くのがつらいばかりに、おきんはなつかしくもない兄さんが歸つて來てほしいと思ふやうになつた。しかし兄は滅多には歸つては來ない。折折、歸つてくることがあつても、なかなかうちへはとまらない。兄は叔父の家から持つて來たおきんの簞笥を開けては、母の着物やらおきんの着物やらを持出して、夕方になるとどこかへ出て行つてしまふ。さうしてそのまま一日二日どころか、一週間も歸つて來なかつた。或る日、兄は十日ぐらゐも家を開けて置いてから、見なれない人を二人もつれて、またひよつくり歸つて來た。さうして兄のつれて來た人たちは、二階にあつた簞笥を二階からおろし始めた。兄もその人たちのあとから直ぐ出て行つたが、そのまままた當分は歸つて來なかつた。けれどもしばらくするうちに、またひよつくり歸つて來た。こんどは誰もつれて居なかつた。さうしておきんにむかつて、「よく留守をして居た」とさう言つてほめた。兄は今までこんなことを言つたことは無かつたのに。それから兄は、町へ行かうと言つておきんを誘うた。おきんは今まで、八王子へ來てもまだ一度も町へ行つた事はなかつたのだ。連れて行つてくれる人がだれもなかつた。よぼよぼのお婆さんは、毎日家にばかり居たのだから
おきんは兄の誘うてくれるままに町へついて行つた。さうしていろいろなところを歩いた。或るところまで來た時に、今まで默りこんで歩いて居た兄は、不意に立ちどまつた。さうしておきんの手をひいて、ごく優しい聲でおきんに言ひかけた。
「お前は今日からよその子になるんだよ、いいかい」
さう言つて置いて、兄はちやうど前にあつた一軒の家の表障子をがらりと開けた。おきんの手をひいて、そこへ這入つて行つた。さうして上り框へ腰をかけた。それから、
「おとつつあん、連れて來たんだがね」
と、兄が言ふ。
見ると、その家のなかには男の人が二人ゐて、何か話をしてゐるところであつた。兄が、まう言ふと、そのうちの一人が一度に頷き、おきんを見た。さうしてそのもう一人に言ふのである。
「うん、その子か。それや年の割にや大きいな」
するともう一人が言ふのである。
「さうさ。それならもう二年もすれやあ、縫とりにもなれようて」
兄とその人たちとは兼ねて相談がしてあつたものと見える。兄にも、たつたそれといふやうなことを言ふかと思ふと、自分たけ一人でどこかへ行つてしまつた。おきんを見て年の割には大きいと言つた方の男が、その後永い間、おきんの父になつた。さうして父らしい、惡い父らしい權力をおきんの上に振ふやうになつた。けれどもおきんはこの義父から、何一つ世話になつたことは、おきんが十幾つかになつた今日までで、それこそただの一度もないのである。その時にだつて、おきんはその人からお茶一杯ふるまつて貰ひはしない。その家の上り框へ腰を下しすらしない。實際、おきんはその時兄が居なくなると直ぐそのまま、義父ではない方のもう一人の人、それならもう二年もす

れや絲とりにもなれる」と言つた人につれられて、或る家へ奉公させられることになつた。それがおきんの十の年のことである。

おきんのつれられて行つたのは、八王子の直ぐ近所の或る家であつた。その家では機を織るのを商賣にしてゐた。さうしておきんの年にも、機織女が十人ぐらゐも居た。何れも娘ばかりであつたが、皆もう年ごろで、おきんだけが小さかつた。おきんは勿論、機を織ることは出來ない。その上、絲を紡ぐことも出來ない。何も出來ない。只おきんの仕事は人が絲を[illegible]をこしらへてしまつた時、その長い絲綛のかたまりを、いい——[illegible]になるやうに、巻きつけるときに、その絲の末をおさへたりぐるぐる巻いたりする人の手傳ひをして、その巻かれる絲と絲とのからまる[illegible]をさばいたりすることであつた。また[illegible]たちが仕事をするところで、[illegible]落したりするやうな場合に、おきんはそれを拾つてやる役もした。[illegible]おきんをいいなぶりものにした。[illegible]するやうな人も[illegible]もやはり居ない[illegible]は、その娘たちはわざと絲を落して置いて、おきんにそれを拾はせた。あちらでもこちらでも同じやうなことを始める。さうしてしまひには、こごんで梭をとつてゐるおきんの頭を蹴つたりする。さうして皆して、嘲し立てて笑ふ。こんな時に主人でも這入つてくると、その娘どもは人間の足音を聞いた鼠のやうに、すばやく、そらぞらしくしいんと靜まりかへつて、仕事をつづける。さうしてそんな騒ぎのおこりはおきんであつたやうなことを、皆していふ。おきんは、何をめそめそ泣きやがるんだといつてよく主人から叱られた。打たれもした。晝や、八ツの休みや、夜などにはその娘たちはいつでもみだらな話ばかりして居る。さうして仲間はづれのおきんも、しかたがなしにその娘たちのそばにでも居ようものならば、機織り娘どもはすばしこくそれを見つけて、「おきんは子供のくせに男がある」の「男の話をききたがる」と言つてからかふ。おきんはこんなことで、この娘たちから日に幾度泣かされたかわからない。おきんはしまひには、休みの時間に、その娘たちに見つからないやうにこつそり物置の陰などへかくれたりして居た。機織り娘たちはおきんが居なくなると、からかふものがなくてさびしいものだから、おきんを搜し出して來る。さうして、先づおきんをうまく甘えかして置いて皆のところまで連れ出す。さうしていろいろとおきんをいぢめる。おきんはまた、穢い身なりをして居るといつてはよくいぢめられた。皆して、「あれは乞食の子だ。だから、お小遣ひもなければ、お盆にだつて歸るうちもない。さうして着物はいつでも一枚きりだ。やあい！ 乞食の子。乞食の子」「乞食の子だから虱がたかつて居る」「皆そばへよると虱がうつる」さう言つて、その機織り娘たちはよくおきんを嘲したてた。おきんをなぶりものにした。實際、機織り娘たちの言ふことはほんたうであつた。おきんには小遣錢をくれる人もなかつた。お盆の日が來て皆それぞれと着物を着かへて出かけても、おきんは別にどこへといつて行くところも無かつた。着物はきたきりであつた。夏から秋になつて來ても、おきんは着更へるものもなかつた。

ところが、この家にもひとりのお婆さんがあつた。さうして誰一人かまつてくれないおきんを見て、子供のおきんに身の上をたづねた。それがはじめで、お婆さんはおきんに目をかけてくれるやうになつた。秋ももうずつと末になつた頃、おきんがまだ單衣もの一枚しか身につけて居ないのを、お婆さんはそれと氣がついたものと見えて、お婆さんは自分の古着[illegible]たのから

自分の單衣を解いて、それをおきんの袷にしてくれた。もつと寒くなつた時にはその同じ袷を解いて、今度は綿入れにこしらへてくれた。藁くづや綿くづだらけの髪を見て頭を洗へと言つて手傳つてくれた。ほんたうにおきんの頭には虱が巣をくつてゐた。

お婆さんはこんなに親切にしてくれた。それに機織りの娘たちもうおきんをいぢめることにも飽きたと見えて、一ころほどにはげしくなぶるやうなこともなくなつた。しかしおきんがほつとしたのもほんの一ときであつた——或る日のことである、機織り娘のひとりが五錢の白銅をなくしたと言ひ出した。するともう一人がさう言へば自分のも足りないやうだと言ひ出した。すると別の一人が、私はおきんが買ひ食ひをして居るのを見たと言つた。皆はその場ですぐさまおきんを疑ひ出した。おきんはそのことに就いて言つた——私は今日までずゐ分いろいろな苦しい目にも會つて來たけれども、人樣のものを盗むどころか、道におちて居るものをだつて拾つたことはない位です、と——なるほど、おきんのさう言つたのは本當に相違ない、と私も信ずる。おきんは正直な女であつたから——そこで疑ひをうけたおきんはいろいろと正直に言ひわけをした。しかし人人の疑ひは晴れたとは思へなかつた。おきんは長い間、物置きの藁の上で泣いた。さうしてたうとうあまりの口惜しさに、その晩またもなくこつそりその家から逃げ出した。

さうしてひとりで八王子へ、迷ひ出た。

村はもう夜更けで、まことに静かであつたけれども、八王子へ出てくると、そこはまだ明るい宵の口であつた。おきんはうろうろと八王子の町を歩いた。あの兒と一緒に住んでゐた家を、あのおきんを抱いて毎晩泣いたおきんの家を捜さうと思ひついたのである。けれどもおきんにはそのおぼえてゐた家はどうしても見つからなかつた。それは、おきんがその家をその家に行く道をよくおぼえて居なかつたのかも知れないが、兎に角、ここだと思ふあたりにはその家はなかつた。そのうちに夜がふけるやうになつた。おきんは途方にくれてゐるうちに、ふと子供ながらに氣がついた。いつか兒につれられてほんの五分ばかりゐたことのあるあのうちへ、そこから奉公に出されたあのうちへ行つて見よう。さうして見つかるところまでたづねて見よう。と思つておきんはその家を捜した。捜しあてた。その家へ行くと、あの時の男の人がゐて、何だつて今ごろ歸つて來た？と言つた。そこでおきんは子供としては出來るだけ詳かに、事のなりゆきを泣きじやくりしながら話した。その男はただ、さうか、と言つた。さうして兒は今は八王子には居ない。だが心配をすることはない。ここのうちへとまればよい。おれはお前のおやぢだから、それにそんな惡いうちなどへはもう行かずともよい」さうその人は案外にも親切に言つてくれた。

その翌日の晩、おきんがゆうべまで奉公してゐた家の主人が、おきんを捜して連れもどすためにその家へ訪ねて來た。自分でおきんの親になつたのだと名告つた男は、その訪ねて來た人を見ると、非常におこつた——いい、ひともあらうにあの子をつかまへて、乞食の手傳ひまでさした上に、盗人などと罵くつたはずだつて、いくら子供だからつて辛抱しないはあたりまへよ。それをよくもづうづうしくむかへになぞ來られたものだ。うちへ歸つて來たからこそまあいいやうなものの、盗人と言はれた口惜しまぎれに、若し間違ひでもし出かして見ろ。手前たちは何だつておれに償ひをするつもりだつた——さう言つて怒鳴つた。それをかげできゝながら、ほんたうにいい氣味だとおきんは思つた。また怒鳴られ

ておきんを連れ戻しに來た筈の人は、黙つてこそのまゝかへつてしまつた。するとおきんの名義上の父は、愉快さうに家内のものの顔を見て笑つた。この日、おきんはこの父から二十錢の銀貨を一つもらつた。おきんがこの父からものを貰つたといふのは、あとにもさきにも全くこの時限りである。それほどにこの父は上機嫌であつた。この時の上機嫌の理由は、この父のその後のいろいろな仕打ちと考へ合して、おきんにはずつと後になつて初めてわかつた。この父はあの機を織る家へ、何年かの年期をきつて前給金で、おきんを奉公させて居たのであつた。おきんが年期を勤め上げずに逃げてかへつた時におきんの養父はよくやつたと思つた。さうしてもう一度、おきんを、二重に給金をとらせるためにどこかへ奉公させようときめたのであらう。あの二十錢の銀貨は言はばおきんへの褒美なのであつた。事實、おきんは、その日——逃げて來た次の日、早速別の家へ奉公にやられた。

二度目におきんの行つたうちは、やはり近在の村であつた。それは糸を紡ぐ家であつた。しばらくゐるうちにおきんは糸をとれるぐらゐになつた。糸をとるのをおきんは好きであつた。一たい糸とり臺といふのは、一つの大きな部屋のなかに沢山に列んで居る。おきんの居た家にも十五やそこらはあつた。さうして大きな水車の力がもとになつて、列んで居るそれぞれの糸とり臺が一つ一つ一度に動くのである。おきんは子供だつたから屑のやうな悪い糸をとらせられた。このうちではおきんはそれほどいぢめられはしない。つまり誰もおきんなどの相手にはなつてくれなかつたのだ。結局それがおきんには反つてよかつた。それにおきんの腰をかけて居る臺の隣りの臺に居た子は、全くおとなしい、優しい娘であつた。この家でもおきんが一番小さかつたが、その次がこの子だつたらう。よく糸のことなどでいろいろおきんに教へてくれた。その子は何といふ名であつたか、それをおきんは折にふれて、時時思ひ出さうとするけれども忘れてしまつたまま、のどもとまで出てくるやうで居ながらどうしても思ひ出せない。その子は無口な沈んだ子であつた。一日中ほとんどめつたに口も利かない、ただ口のなかで小聲で何か唄をうたつて居るのが癖であつた。その唄の節をおきんは今も耳の底にはつきり覺えてゐる。けれども文句の方は少しも覺えてゐない。それで、その子は色がくつきりして、可愛い顔である。おきんはその子の側にゐるのが妙にうれしかつた。ところが或る日のことである。この娘が不意に姿が見えなくなつた。はじめ、おきんのそばに人が坐つてゐないのを見て、仕事を見まはりに來た人が、おきんに、その娘はどこへ行つたかと尋ねた。おきんも知らないから知らないと答へた。その人は皆に尋ねた。皆どうしたのだらうと口口に言つた。或る一人がその子がさつき井戸ばたで釣瓶から水を飲んでゐたのを見たと言つた。その子は二時間もたつてまだ歸つて來なかつた。そのうちに夕方になつた。暗くなつた。皆は一層心配しだした。うちへ歸つたのかも知れないと言ふものもあるので、そのうちではその子のうちへ使を出した。夜おそくなつてその使は歸つて來たが、うちにももどつては居ないといふので、使と一緒にうちからはその子の父親が心配してついて來た。さうして迷子になつたのだらう、神隱しに遭つたのだらうといふので、村の人たちを集めて、その子を夜通しで捜すことになつた。けれどもその子はどうしても見つからなかつた。さうして皆ももうそのままにして置くより外には手の盡し方もなくなつてゐた。ただいろいろと取沙汰をするばかりである。すると、その子

見えなくなつてから、一日おいて、三日目の夕方である。不意にどしんと大きな音がして、家の屋根全體がぶるぶるとふるへ出した。皆びつくりして、ひとかたまりになつて家の庭へ出た。初めは地震だと思つたのだ。ところが庭へ出て見ると、その家の草屋根の上へ、たしかに見えなくなつた子がぼんやり、仄白く突立つて居る。皆は二度びつくりした。梯子をかけてやると、その子はやつと下りて来た。それからが面白いのですよ、とおきんは言つた。その子の言ふのを聞くと、その子は天狗にさらはれたのだつたのです。その子が井戸ばたで水を飲んでゐると、ふいに大きな人が出て来て、その子を上の方へ持ち上げて行つたのださうです。さうしてどことも知れない山のなかへその子を連れて行つたさうです。山のなかにはやはり同じやうな天狗が澤山集り合つて居ましたが、その子を見ると、その天狗の中の一人が言ひますには、

「それはいい子だからかんべんしてやらう」

するとその子をさらつて行つた天狗も、

「さうか」

と、さう言つたさうです。さうしてその子をもう一度ずつと高いところへつれて行きましたが、そこから帯をもつてぐつと突き落したさうです。氣がついて見ますと、落ちたところはその家の屋根だつたさうです。その子は、それから一時は氣狂になつて一週間ほどといふものは誰にも一言もものを言ひかけませんでしたよ。ええ、さうですその子は十五か六ぐらゐでした。

「私が天狗にさらはれた人を見たのはこれが初めてでございましたよ」

そんな事もあつた。けれどもおきんには何の變つたこともなく、おきんは十四の春まで無事とりになつてその家で奉公をした。あの父が迎へに来て、たうとうそのうちからひまをとることになつた。おきんは慣れたこの家からひまをとるのが名残惜しかつた。おきんは、それから八王子の遊廓の近くにある小料理屋の小女になつた。おきんは初めつからこんな家に居るつもりではなかつた。おきんは女中たちや客からいろいろ不愉快な思ひをさせられた。主婦からは氣がきかないといつて叱りつけられた。客はわざわざわかりにくいやうに符牒をつかつてものを註文した。おきんがわからなくつてまごつくのを見ておもしろがつた。いろいろなものを言ひつけて、おきんがそれを下へとりに行くと、それは何も無いものであつたりする。聞いた人たちは面白がつて笑ひころがる。併し、おきんにはそれが何でをかしいのかわからない。今思へば皆それはみだらなことであつたらしい。さうして主婦からは馬鹿だといつて叱られる。この家には大きな女中が三人もゐるのに、その女中たちはいつも客のそばにばかり居るので、ものを運んだり、用を言ひつかつたりするのはいつもおきん一人でしなければならない。そのうちは小さいくせにむやみと客の多いうちであつた。おきんは日に何十ぺんとなく梯子段を上り下りしなければならなかつた。それはどんなに足のくたびれるものであるか、實際に、それの經驗のない人たちには、いくら言つて見ても到底わかるものではない。それにそんなうちのことであるから夜は極くおそい。そのくせ朝は朝で割合に早い。さうして朝いちばん早く起きるものは、おきんである。主婦が床のなかからおきんを起すのである。さうしておきんは人人の朝の食事の用意を一切させられた。おきんはわれながら感心するほど辛抱をした。けれどもやがてこの家からもやはり逃げ出すやうなことになつた。

この家を逃げ出すに至つたことの理由に就ては、おきんは全く説明をしなかつた。その代りには次のやうなことを、次のやうに詳しく話を

した。

おきんはどうしても逃げ出さねばならないと決心をした。しかし、こん度はあの父の家へも逃げて行くのはいやな、逃げて行けないやうなわけがあつた。さうして、逃げるほどならば甲州の叔父の家まで逃げねばならないと決心をした。しかしおきんはすこしも金を持つて居なかつた。給金はあの悪い養父がもつて行つたのであらう。客は外の大きな女達には金をくれて居たけれども、誰もおきんにと言つてくれるものはなかつた。またおきんはほしいと思ひもしなかつた。それでもおきんは五十銭や七十銭はためて居たやうにも思ふ。しかし、金があつたところで、甲州まで汽車に乗れるものやら、どうして乗るものやら、叔父の村へはどう行くものやら、そんなことは皆目おきんにはわからない。第一叔父の村の名をさへ忘れて居た。ただその村の景色ないしははつきり目に見えるやうに覚えて居る。行けば解るだらうぐらゐに考へて居た。おきんは逃げた。夕方になつた。おきんは今夜こそ逃げ出さなければいけないと思つた。おきんはお湯に行くと言つて家を出た。手には手拭ひと、石鹸箱をさげて居た。その家ではお湯へ行く時には湯銭と糠とをくれることになつて居たから、ありたけの銭は以前からいつでも身につけて居る。さうして外におきんが持ち出すやうなものは何もなかつた。しかしおきんは遠い甲州まで行く道のことを案じると、まだほんたうの決心は出来てゐなかつた。おきんはお湯屋の前を何べんか行つたり来たりして、考へた。どうしても本当の決心はつかなかつた。そのうちにふと誰かに、どこへ行くのだと声をかけられた。お湯へ行くのだと答へると、その人は別に疑ふ様子もなく、さうかと言つた。おきんはこの時初めて決心が出来た。その人に逢つたのが何故にそれのきつかけになつたのだか、それはおきん自身にもわからない。すれ違つたその人の姿が見えなくなつた時、おきんは一さんに駆け出した、その人とは反対の方へ。さうして苦しくなると歩いた。時時また駆けた……もう駆けられなくなつて歩いた……無我夢中で歩いた……

気がついた時には、おきんはどこだかわからないところに自分が寝て居るのを見た。あたりはただもう霧のやうに真白であつた。そのうち、おきんにはだんだん自分の居るところがわかつて来た。それは山のなからしいのである。おきんは濡れた草の上に寝てゐた。真白だつたのは夏の朝の山の、深い霧であつたのである。あたりがだんだん見えるやうになつて、霧の下の方から上へ、だんだんと晴れて行つた。そのうちすつかり霧がなくなると、おきんの直ぐ目の前には高い峯がすつくりと聳え立つて居るのが見えて、その峯には頂上にだけ少しばかり、朝日がかいかいとまともに照りつけて居た。おきんはただあたりを見まはして居ると、樹と樹との間の細い山道から、鹿の皮でこしらへた山袴をはいた白髪のお爺さんが、ひとり、不意に出て来た。そのお爺さんは初めはおきんが居るのに気がつかなかつたものと見えて、すたすたとおきんが寝て居る傍まで歩いて来たが、急に二三歩とびのいた。お爺さんはぢつと見据ゑて、自分の眼を疑ふやうな様子であつたが、しばらくしてお爺さんは口を切つた。

「お前、そんなところで何してゐるのだ」

おきんは起き上りながら、自分は叔父のうちへ行くつもりだといふと、お爺さんは、叔父のうちはどこだと言つた。おきんはどうしてか返事が出来ないでゐると、そのお爺さんは重ねて

「何とか村か。それとも何とか村か、何とかか……と、その近所にあるらしい村の名を二つ三つつづけて言つた。それはみんなおきんの知らない

名前ばかりである。おきんは思ひ切つて、

「甲州だ」

と言つた。

「甲州?! お前一たいどこから来た!」

「八王子からだ」

するとお爺さんは二度びつくりして、ちやうどおきんを見つけた時のやうに、また二足三足とびのいた。それから彼は、おきんがびつくりして飛上つたほどな聲で叫んだ。「お前には狐がついてるぞ。そらそら! その目を見ー…」

お爺さんは子供がするやうに、おきんの顔をつつ突くやうに指ざした。おきんははつと思つた。その時お爺さんはさも安心したといふ風に、

「ああ、よしよし。いま狐がおちた。何といふ目をして居たのだ。おれはほんたうに魂消たぞ」

さう言つて、やつとまたおきんのそばへ寄つて來た。さうして、お爺さんは、八王子からこんなところへくれば、甲州などへは出られないで全く反對に川越の方へ出ること、ここはどちらかといへば八王子よりも川越に近いこと、それにしても、八王子からここまでの間の道程が女や子供の通れる場所ではないことなどをこまごまと説明をして、一晩歩いて來たのだとおきんから聞いた時には一層驚いた。狐につかれてゐたのだ。このあたりには悪い狐が居るんだからと、ひとりでうなづいてゐた。さうして狐につかれて居たおきんの目がどんなにおそろしかつたかといふ事をくりかへしくりかへし言ひながら、おきんを、ともかくも自分の家の方へみちびいた。そのあたりにはおきんの脊丈けほどな大きな山百合が澤山咲いて居た。おきんはその一つをとらうとして、ふと氣がついて見ると、その手には手拭と紙ぶくろとをしつかりと來たゆうべのままに握つて居た。おきんはほんたうに狐につかれて居たのであらう。さう言へば、おきんにも思ひあたることがある。それはおきんが一さんに駈け出してから、時時うしろをふりかへつて見たが、何時見ても何度見ても、その都度おきんのすぐうしろには、必ずさきに遊んだ八王子の遊廓の灯が、すぐ近くにきらきらと見えて、いくら歩いてもいくら歩いてもそれが決して見えなくはならなかつた。初めからしまひまで同じ近さで追つかけて來て居た。おきんはただもうその灯影が遠くなるやうに、遠くなるやうにと一心にそればかり思ひつめて歩きつづけて居たのであつた。お爺さんから「狐につかれて居る」と言はれて、はつと思つた拍子に狐はおちたのであらう。おきんもさう思ふ。お爺さんもさう思ふ。さて、お爺さんの家といふのは一軒家で、しかもひとりきりで、お爺さんは炭焼きであつた。おきんはお爺さんのすすめてくれるままに、しばらくお爺さんの小屋に居た。お爺さんはおきんを氣の毒がつた。さうして秋にもなれば自分は山を下りて行く、さうすればまた八王子へなり、それとも甲州へなり行く人を捜してお前のつれを見つける序も出來よう――さう言つておきんを慰めた。

おきんはどういふわけか、よくかうしてお爺さんやお婆さんにばかり慰められる。

おきんはここまでをほとんど一息に話しつづけた。さうしてここで突然言葉をとぎらせた。さうしてこんなことを言つた。

「それから私はたうとうおしまひに、こんなところ――といつては悪いのですけれども、こんなところへくるやうになつたのです。あの兄が私を渡して行つた人は、あとから聞けばよほど悪い人で、何でも博奕うちの親分であつたのださうです。私はさんざんその人に苦勞をかけさ

せられて――その人は、私の親だ、親だといつては、私の行くさきざきをつけまはしたのです。つい五六年前までは生きて居たのです。で、私がこの村へ来て、萬平と一緒になる時にも、籍を入れようと思つたけれども、籍もその人の方にあるらしいので、その人がまた何を言ひ出すかわからないと思つて、人にも相談して、私が二十五になるまで待つて、二十五になつてから私たちは自由結婚をしたのです。

自由結婚といふその言葉をおきんは使つた。多分、その當時人人が使つたのを聞いて覺えてゐたのであらう。

おきんは、たうとうおしまひに「云云」としか言はなかつた。けれどもおきんが何を渡世にしてゐて、この村へ流れて来たのかといふことは直ぐわかる。さうしておきんとても、今更、それを私たちにかくしたのではなかつたのだ。私たちがちやんと想像するとおもつて、その言ひづらい事を言はずにすませたのであらう。實際、私たちも誰からともなく、おきんはその村につい數年前まではあつたといふ一軒の或る種の[illegible]茶屋の女になつて初めてこの村へ来たのだといふことを、聞くともなくいつか耳にしてゐた。けれども村の人たちもおきんを悪くは言はなかつた。日日に親切な、人の好い、きさくな女たと言つてゐた。あのIのお寺の大黒でさへ、人のことなら誰彼の別なく何とか言はずにゐられなかつたその大黒でさへ、私たちがおきんの世話によくなると言つた時に「あの人ならば親切で正直ないい人だから」と言つたほどであつた。おきん自身でも、自分はいい人だといふことを自覺してゐるらしかつた。さうして然うであるやうにと心掛けてゐるらしかつた。といふのにおきんは次のやうなことをも言つたから。おきんは言つた――おきんは自分自身がさまざまの目にあつて来たから、難儀してゐる人がよく目につく、一たいおきんの住家は八王子から横濱の方へ行く街道にあたつて居た。さうして道に沿うて少し小高いところにあつた。おきんが自分の家でいろいろ働いてゐる時などに、ふと下の道に見なれない人が通るのを見かけることがある。重さうに足をひきひき屈託ありげに通る。そんな人に問ふまでもなく、金が無くつてその代りには心配をどつさり持つた人たちに相違ない。普通の人ならば、この便利な世の中に、八王子から横濱のあたりまで何を好んでとぼとぼと歩くものか。おきんはさういふ人たちをしばしば見る。或る時には若い男と女とで歩いて行く人たちが目についた。或る時には男であか兒を抱いて行く人が目についた。或る時にはおきんの家のそばの木かけに休んで、一時間ももつと以上も歩き出さうとはしない若い女を見た。その女は子を孕んで居たのではないかと思ふ。或る時には、水を一杯といつておきんの家へ這入つて来て、横濱までもう何里かとたづねて、がつかりして居るらしい老人をも見た。おきんはそれ等の人人には、いつでも何とか一こと言葉をかける。そんな時に親切な言葉といふものがどんなに力になるものかを、おきんはよく知つてゐる。それから十錢なり五錢なり、或る時には握り飯なり菓子なり、何でも手もとにあり合せたものを與へる。頼まれればもとよりであるが、頼まれない時にでもさうである。失禮だか欲しくはないかとおきんの方から聞くと、それらの人人は先づぢつとおきんを見てから、「もらひ度い」と答へる。それは十人が十人までほとんど同じ樣子である。それからものを渡すと、いろいろと禮をいふ。さうしてその親切は決して忘れないといふ。或る人は無理におきんの名をたづねて、自分は東京まで行くのだが、かへればきつと禮状を出すなどと約束をする。そんな人も二三人はあつた。けれども

來た誰も禮物をくれた人はない。おきんは禮をもらひ度いとは思はない。ただ時時その人たちがそのちようしたらうかと思ひ出す。さうして自分のむかしのことを思ひ出す。併しとおきんは言つた。「世間といふものはなかなか口やかましいもので、私がそんな風にしてその人達に厄介なり世話なりをやつて居るところを見た人があつたと見えて、おきんは自分たちが乞食をせんばかりの暮しをしてゐるから、身分不相應にも人に施しなどをしてゐる　といふやうなことを言はれたのを聞いたことがありました。それからといふものは、私はそんな時にはいつでも人にかくれてこつそりと、或る時には三四町も後をつけて行つてから、誰も居ないところを見すましてそつと握り飯などを渡したりしなければならなくなりました」

そんな風なことをもおきんは言つた。さうしていろいろそれらの種類の人人について、一つ一つもつと詳しく話したけれども、それは彼の女自身の身の上話とは違つて、何度も何度も繰り返したのではなく、たつた一度言つただけだつたから、私はあまりよくは覺えておかなかつた。それ故、それをここへ描き出すことの出來ないのを殘念に思ふ。が、兎に角、おきんといふ女はそんな風な女であつた。さんざ世の中でいぢめられて來て、それでもおきんはやつぱりいつまでも人がよかつた。その上ごく氣さくでもあつた。さうして時時村にもない、つまらぬ駄洒落などをいふこともあつた。そんな時に私はふと茶屋女としてのおきんに會ふやうに思つたりした。

ただどうも　と或る人は言つた。

「おきんさんはもとがもとだけに、あれでなかなか浮氣もので、男が好きで困る。そこへもつて來て、萬平さんがまた無類のいい人ときてゐる。おきんさんは今も、自分のうちに來てゐる元〆めといい仲だといふことです。毎晩、夕方になると元〆めの山の小屋へ出かけて行く。途中で人に逢ふと、薪をこしらへる木ぎれを山へもらひに行くのだと言ふさうです。さうして時時、行くと元〆めに風呂を焚いてやつたりするんだといひます。この間もＳの御祭りで山で働いて居る若いものが、皆三時頃まで遊んで來て小屋へかへつて見ると、おきんさんは未だ小屋に居たさうです。毎晩おそくなつて元〆めと二人で歸るのを、萬平さんは別に何とも言はないんですね。今までにだつてずゐ分そんな話はあつたのですよ。萬平さんは時時、道具をもつたまま出仕事に行つて、一月も近在をまけり歩いてくることがありますからね」おきんに就て、私はそんな事も噂されてゐるのを聞いた。

おきんは或る時、私たちが別に何もそんなことを聞きもしないのに、今のやうな噂はみんないいかげんな事だと言ひ訳をしてゐた。

「私の身の上はまるで小說のやうなのでございます」

さう言つて置いて、おきんはまたこんな事をも言つた――

おきんはあの兄とは、ほんの子供の時、あの時あゝして別れるともなく逃げられてしまつたきり、たうとう二度と會ふことがなかつた。それればかりか、兄がどこで何をしてゐるものやら、おきんはそれをさへもとより知らない。知れないのは兄ばかりではない。叔父や叔母との消息もぱつたり絶えてしまつた。おきんは叔父や叔母のゐたあの村の名を覺えて居なかつた。さうして誰に尋ねようにも、おきんのそばにはそれを知つてゐる誰も居なかつた。かうしておきんは二十何年間といふものは、親身の人たちとは全く別れてしまつてゐた。おきんは叔父や叔母はもう死んでゐるかも知れないと思つた。

それがつい三四年前になつて、思ひがけなくも再會出來ることになつた。

三四年前の夏の初めであつた。おきんの家へ見ず知らずの人が突然尋ねて來た。その人は横濱から來たと言つて、旅商人のやうな人であつた。初めは商人とばかり思つてゐたのが何も商ひ物らしいものを持つて居なかつた。その人がわざわざおきんを訪ねて來たのであつた。その人はおきんを見ると―つかぬことを問ふやうだが―と言つて、先づおきんの生れを問うた。さうして突然にも―もしやお前さんには二十年も前に生き別れた兄がありはしなかつたか―と言ひ出した。おきんはびつくりした。といふのは近頃ではもう、兄のことなどを思ひ出すことさへなくなつて、時時思ひ出しても、もう一度會へようとも、會はうとしようとも考へはしなかつたからである。おきんはその妙な人からさう尋ねられた時には、即座には返答も出來なかつた。さうしてただその人の顔をつくづくと偸み視た。けれどもその人が果して兄かどうか、おきんには見別けられなかつた。おきんは兄の面影をもうすつかり跡かたもなく忘れてしまつて居たのである。ただ兄ならもう少し大柄な筈だが、とおきんはその兄と叔父とが喧嘩をしさうになつた時の樣子などを思ひ出して、さう思つた。返答をしかねてゐるおきんを見てとつて、その見ず知らずの人は言つた。

―私は頼まれて來た者だが、人からお前さんのことを聞いて、私の捜すやうに頼まれたのはお前さんに違ひないと思つたのだ―

おきんは、成程、それではやつぱりこの人が兄ではなかつたのかと思つた。それが兄の當人ではないと知れると、おきんは今さら何となく不氣味であつた。兄は一體、今何をして居るのであらう。さうして何をたくらんで自分を見つけに來たのであらう。萬平に心配をかけるやうな事でなくてくれればいいが……。それとも兄が何か惡い事をして、實際そんな惡いことをもし出かさないとは限らない人だから、今來て居るこの人はもしや警察の人ではなからうか。そんな風にさへ疑はれた。さうして胸がどきどきして來た。併し、まさかとも考へ、それにさう言はれて見ればそんな兄は知らないとも言へたものでもないと思ふと、その兄に逢つて見よう、逢ひたいといふ心持が急にはげしく湧き上つた。おきんは手短かに身の上を明した。するとその人は、やつぱりさうであつたかと言つた。それからその人の頼まれたといふ人、即ちおきんの兄らしい人のことを「方丈が」とさう言つた。聞けばおきんの兄らしい人は、今、横濱の野毛のAといふお寺にゐて、そこの住職になつて居ると言つた。さうして、見つけ次第不幸をかけた妹に逢ひ度いと言つたと傳へた。兄の年を考へ合したり、いろいろと聞いてゐるうちに、何もかも符合した。それが確におきんの兄に相違ないと思へて來た。けれどもまだおきんはその人のいふのを信用出來ないやうな氣もした。又、若しや世の中に自分と全く同じやうな身の上の、さうして全く別の人が居て、その妹をその坊さんが尋ねて居るのではなからうか、最後にそんなことをさへ考へて見た。ちやうどその日はUといふ家へ風呂桶を直しに行つて居た萬平を、おきんは仕事先きへ迎へに行つて、歸つて來た萬平ともよくよく相談をした上で、會つて見ないうちは未だほんたうとも嘘ともわからない不思議な兄に會ふために、その日即刻、その人と一緒に横濱へ出かけて見ることにした。おきんはその兄にあつてももうお互に顔などは忘れ果ててゐたならどうしようかと心配した。併しうれしい事にはそれが本當の兄であつた。さうして途途いろいろと考へて見ても、どうしても思ひ浮べられなかつた兄の顔は、不思議にも本當の兄を見た瞬間に、

おお！　然うだこの人だつた！

と、急に思ひ出された。おきんはその時、別にられしい悲しいといふことはなく、たゞぼんやりとしてしまつて、庫裏の土間に突立つて居た。兄はおきんのその後のことに就ては一言も問ひはしなかつた。さうしてたゞ自分のことばかりを、落着いてではあるがあとからあとからと語りつゞけて、一言ごとにおきんに詫びてゐた。兄はやつぱり大男であつた。五十以上の人にも見えた。子供のころに父の寺で小僧をしてゐるのがいやさに寺を逃げ出したこと、それから田舍廻りの役者にもなつた。博奕もうつた。巡査になつたこともあつた。とそんなことどもを兄は長長とおきんに聞かせた。さうして初めはそれほどでもなかつたものがこの四五年來といふものは、おきんはもとより、兄や叔父などにしきりに會ひたかつたこと、おきんには一番會ひたかつたこと、さまざまにして叔父や兄の居どころだけは搜し出したけれども、おきんがどうしてもわからなかつたこと、そのため兄自身でも一度ならず八王子まで出かけたりしたこと、もう今では殆んどあきらめて悲しんで居たといふこと、そんな事などを順序もなく、丁寧な言葉で兄は言つた。おきんは兄の話を聞いてゐるうちに、おきんにはこの兄より外に未だ外にも兄があつたことを初めて知つたけれどもよく聞くと、それはおきんや話をして居るこの兄とは腹違ひなので、年も四十近くも違つてゐた。さうしてその兄といふのは、今は東京に居て、淺草の有名なSH寺の格式の高い僧になつて、人人から尊敬されてゐる――それは私などとは違つてとその時兄は言つた　極くおとなしい立派な人で、迷はずに一途に修行した人であつた。兄はその兄とも相談をしておきんを搜した。「今お前が見つかつたと言つたなら、その兄もどんなにか喜ぶことであらう」さう言つて兄はおきんにむかつてその兄にも一度是非會ふやうにと言つた。けれどもおきんはその兄といふ人には少しも會つて見たいとは感じなかつた。それも無理ではない、兄とは言ひながら腹違ひではあり、それに見たことはもとより、噂にだつてこの時に初めて聞くほどだつたから。さうして身分とてもあまりに違ひすぎて居る。それよりも會ひたいのは、叔母や叔父である。兄から叔父や叔母を聞いた時には、未だ生きて居たかと思つて今にも飛び立つやうな思ひであつた。けれどもおきんはそれを言ひ出せなかつた。それを言ひ出すことは何故となく兄に遠慮があつたからである。けれども、いよいよ兄はその叔父や叔母とのことを言ひ出した。叔父夫婦は未だ生きて居た。さうしてやはり甲州の――しかし以前の村ではなく、或る山の中の水力電氣の會社に山番をしてゐた。――その叔父を以前から、是非とも一度訪ねなければならない、と思ひながら、一つにはその閑もなく、それより、自分の今までして來たことを考へ直して見ると、いかにも氣後れがして、ことに叔父叔母には、おきんのことを初め顔むけのならないことばかりで一と兄は言つた。さうして兄はおきんと八王子で別れてからも、再三叔父のところへ行つたことがあつたこと、そのこの附近や甲州のあたりをうろついてゐたことなどを手短かにおきんに話した。こんなわけで、手紙だけは出して居たけれども、その後また一度も會はないで居たのだそうである。さうして初めのうちはお前が見つかつたなら、その時こそお前に行つてもらつて私の詫びをしてもらはうと思つて居た。けれどももうこの頃では、お前は見つからないものとあきらめて、或は死んでしまつたかとも考へたりして、そのうち自分ひとりで行かうと決心をしたところであつた。併し、かうしてお前が見つかつた上は、やはり先づお前に行つてもらはう」さう兄は言つた。さう

して、自分も一緒に行つてもいいけれども、目の前に銃をひかへて出られない。ちやうど幸にも自分の知る人に、その山の會社の技師になつて居る人があつて、その人は東京へ會社の買ひ物に來た序に、今横濱へかへつてゐる筈である。さうして二三日のうちには再び山の方へ行く都合だと聞いた。それ故もしもお前の都合さへ惡くないならば、その人と一緒に行つてはどうだ。それならばお前の亭主の方へは私からそのわけを言つて使ひを出す。それとも都合で今度の時でもいい。一旦田舍へ歸るか。そしてもう一度直ぐ亭主もつれて出直してくるか」さう兄はおきんに相談して言つた。いろいろ兄のいふことを聞いてゐるうちに、いつ流れ出したものか、おきんは顔中が涙で濡れて居た。それがぽたぽたと膝の上へ落ちて來て、初めてそれに氣がついた。おきんは若しほんたうに兄であつたならばかうも言つて見よう、ああも言つて見よう、と馬車のなかで考へ考へして來た事が、兄にむかひ合つて見ると何一つ言へなかつた。それぱかりか、何を言はうと考へながら來たのか、その事すら忘れてゐた。どういふわけであの悪い人がおきんの養父になつたか。あの八王子のお婆さんはどうしたか。お常といふのはそのころの兄さんの妻であつたか。そんな事なども何一つ問へなかつた。おきんはむかしのことに觸れてはたうとう一言も言はなかつた。さうしてただ問はれるままに亭主の萬平のことや、九年になるけれども二人の間には未だ子供がないことなどを話した。夜が更けて、しまひに兄は黙り込んでしまつた。さうして、突然、さも重大なことを尋ねるやうな口調で、

「お前幾つになつたのだ」

さうおきんに問うた。

「ちやうど三十三です」

おきんは答へた。けれども、兄は黙つてゐた。それで今度はおきんの方から、

「兄さんは？」

と、問うた。

「四十三だよ」

と、兄は答へた。さうしてやつぱり黙つて考へ込んで居た。

…………おきんは自分が言ひたい折からではあり、兄のすすめてくれるままに、山に居るといふ叔父と叔母とに、直ぐ會ひに行くことにした。兄はいろいろと土産ものをととのへてくれた。さうしておきんには新らしい單衣物をととのへてくれた。それを人に頼んで夜どほしで縫つてもらつた。からしておきんは技師といふ人に連れてもらつて、甲州へ旅立つた。甲府の少し手前のKといふところで汽車を下りた。登りになつて居る坂道を二里ほど歩いた。夕方になつて、技師は道ばたの、前に葡萄棚のある或る一軒家へ這入つて行つた。この技師は極く無口な人で、道中でもあんまりおきんに話しかけたりなどしなかつた。それ故、どんなわけでおきんが叔父たちのところへ行くのだか、それを知らなかつた。技師はその家へ來ても、此處だとも何とも言はなかつた。併しおきんはその家へ這入る時に、直ぐここだなと感づいた。家のなかにはお爺さんとお婆さんとが居た。さうしてその外には誰もゐなかつた。技師は歸つて來た挨拶をしたり煙草を吸つたりして居た。お婆さんは二人にお茶をすすめてくれた。おきんはその間ぢつとお爺さんとお婆さんとの様子を見て居た。お爺さんもお婆さんも、いたつて丈夫らしく、髪もどつさり生えて居た。しかしそれがすつかり眞白な白髪であつた。そのお爺さんお婆さんこそ、疑ひもなくおきんの叔父と叔母とであつた。それに相違なかつた。さて何と言ひ出したものであらう。おきんは用意して來たことは、この家のなかへ這入るとすつかり無駄に

なつた――といふのはこの奥さんとお婆さんと、即ちおきんの叔父と叔母とは、おきんのことをその技師の細君だとばかり思ひ込んで、すつかりさうときめてかかつて居る。さうしておきんを「奥さん、奥さん」といつて、技師と同じやうにもてなしてくれた。「今から上へ行つたところで、今日はどうせ用のない事だらうから奥さんと一緒に今夜は、あばら家だかここにとまつて行つてはどうだ。さうして明日の朝、朝涼のうちに行けばよろしからう」さう言つてお爺さんとお婆さんとは、二人して技師にすすめた。技師はもう一息のことだから、序でに行つてしまはう。それに今夜は月夜だから明るいと言ふと、「あなたはそれでもよからうが、奥さんは女だから、きつともうよほどくたびれて居なさるに相違ない」などと叔母が言つた。その叔母の聲が昔の聲にそつくりであつた。技師は、とあると言ひながらその場に困つて居るやうに無愛想に立上つた。どうしてもとまつてはくれないのか、といつてお爺さんとお婆さんとは技師とおきんとに挨拶をした。送り出される挨拶をされておきんは一層困つた。しかたがなしに、また技師の後へついて夕方にくれてその家を出てしまつた。すると技師はふりかへつて、おきんに、

「あなたの來たのはここぢやなかつたのですか」

かと、寂しさうに言つた。

さう言はれて、その時におきんは[illegible]した。さうして直ぐさま、今來た叔父の家へ引きかへした。技師には[illegible]をいひ[illegible]。

家へ這入ると、

「叔父さん！ 叔母さん！ 私は二十年前にお別れしたおきんです……おきんですよ」

さう叫んだとき――心は言葉に[illegible]と、こみ上げて來た。おきんは思はずそこへ泣き倒れて居た。

「・・・おきぬか！ 本當か……夢ではないか」

叔母はよほどしてから、やつとさう言つた。

「まだ生きて居たか」

最後に叔父がさう言つた。

「日がかすんではつきりと見られない」叔母がまたさう言つた。さうして泣いた。みんなして泣いた。夕方のうす暗い中でも、灯をともしてからも。

「私の本當の名はお絹といつたのです。それが夕方を[illegible]いて居るうちに、いつかおきんに變つてしまひました」

おきんは、ふと[illegible]ついたやうに、最後にそんな述懐をした。

（大正八年七月作）

琴うた

吹く風に消息をだにつてばやと思へどもよしなき野べに落ちもこそすれ

佐藤春夫

かくまでふかき戀慕とは
わがみながらに知らざりき、
日をふるままにいやまさる
みれんを何にかよはせむ
[illegible]ふくかぜにつてばやと
ふみ書きみれどかひなしや、
むかしのうたをさながらに
よしなき野べにおつるとぞ

（『殉情詩集』より）

星

第一折

泉州城に近い黄内の名家陳氏には三人の兄弟息子があつた。陳氏は代代、富と誉とのある家がらで、一番上の兄は早く立身をして、近ごろ両廣巡按使になつた。まだ年若な二番目と三番目とは志を立てて故郷で勉強して居る。この三番息子の少年を陳氏の第三男といふわけで陳三と呼んで居る。

第二折

陳三は誰からであつたかは知らないが、星を見ることを習ひ覚えた。さうして秋の或る晩はつきりした星月夜に、無数の星のなかから一つの星を見出した。それは疑ふべくもなく陳三自身の運命の星であつた。何故かといふに、幾夜試みて見ても、その星は陳三の目の瞬く度ごとに瞬き光るのであつた。さうしてこの一つの星より外に、そのやうな星は一つもなかつた。

陳三はそこでその星にむかつて跪いた。

第三折

「どうぞ私の星よ。私に世の中で一ばん美しい娘を私の妻として授けて下さい。又、その妻の腹に宿つて出来る私の男の子を世の中で一番えらい人にならせて下さい」

陳三の星に祈つた願事はこのとほりであつた。

第四折

来年貢生の試験に応ずるための最後の読書と詩作とに疲れて秋の夜の庭に出た兄は、[illegible]この言葉を聞くともなく聞いた。兄は[illegible]を[illegible]に向つて祈つた。

「お前は[illegible]なことを願つた。[illegible]まで凡人[illegible]を願つて居る。若し私がお前なら私は妻や子供のことなどは決して願はなかつたらう。その代り自分自身のことを願つたらうに。自分の子供などではない。自分自身が世の中で一番えらい人になるやうにつて！」

「さうです兄さん」素直な陳三はそこで答へた。「私とても最初はさう願はうと思はないではなかつたのです。しかし私は考へ直した。自分がえらい人になるだけの事なら、自分だけの努力で出来さうな気もする。それにひきかへて、世の中で一番美しい娘にめぐり逢つたり、その娘の心をひくことが出来たり、その上その娘を妻にすることが出来て、その妻によつて子供を持ち、しかもそれが世の中で一ばんえらい人になる——こんな幸福こそは、自分の考へ以上のことで、しかも自分の努力ではどうにもならない。これこそ星の力にでもよらなければならない事だ、と私はさう考へたのでした……」

「なるほど、しかし」と兄は遮つた。「私はまたかうも思ふ。運命といふものはお前が考へるよりもつと大きな力であるかも知れない。仮りにお前がもし、悪運の星の下に生れて来て居るとしたら、お前の熱心な念願も、それをどれだけ善くかへることが出来るだらうか——た…

私は星を信じない方だが、それともお前よりももつと信ずると言つた方がいいかも知れない。何にしろ星に祈るのも無駄なことではなささうだ。私の星はそれなら、しかし何であらう」

兄弟はこんなことを語り合つて、もう一度、目を上げて空一めんの星くづに見入つた。謎の空は無限に深かつた。

第五折

「……假りにお前が若し、惡運の星の下に生れて來て居るとしたら、お前の熱心な祈願もそれをどれだけ善くかへることが出來るだらうか」——何氣なく兄の言つたこの言葉は、恰も陳三の祈を聞きとどけた星が豫め兄の口を借りて陳三に告げて置きでもしたかのやうに、後になつて思ひ合されることがあつた。

第六折

幾年かは經つた。自分自身の努力でえらい人になると言つた陳三の兄——一番目の兄は、志を遂げて兩廣總督の役につくことになつた。それには、數年ひきつづいて兩廣巡察使を勤めてゐる長兄の手ぎはも有力であつたことは言ふまでもない。

第七折

陳三は得意な兄を見送つて潮州城まで來た。そのころ廈門附近のどこかに根城を置いてゐるといふ噂のあつた怖ろしい日本の海賊を避けて、今日まで馬上で來た兄の一行は、ここで馬をすてて船路を廣東の任地へ行くのである。

「順風！」

陳三は兄に別れをつげてから叫んだ。

兄の船は六月の海の朝あけのなかに帆を揚げた。岬をまはつて南の方へ小さな帆はかくれた。

第八折

物珍らしい潮州の城内を見物しようと陳三は馬に跨つた。兄を見送つた日の午後である。夢多い初夏の空の下を若い陳三は馬上でさびしく考へ耽つた——兄は志を遂げて、今、兩廣總督となるのである。兄はもう既に美しい妻をも求め得た。然るに自分は、自分に自分の星に向つて祈願をこめてからもう幾年か經つたのに、まだ世の中で一番美しいと言はれる娘の噂を聞いた事さへない。星に對する自分の祈願は果して聞かれたのであらうか。陳三はかういふ風に考へ耽つてぼんやりと馬の行くに任せて居ると、ふと、空の何處からか絃の音が聞えるやうな氣がするので、首を上げた。

陳三の目の前には、立派な門の向うに茂つた花盛りの柘榴の樹の上に聳えて一つの高い走馬樓があつて、すべては陳三の目に幻のやうであつた。何故かといふのに一人の世にも美しい娘が、走馬樓の欄に輕く背を倚せて絃を玩んで居るからである。黒い衫につり合つてその[illegible]顔が白い木蓮花のやうに白い。

ただうつとりとして眺め入つて居た陳三は、思ひきつて聲を張り上げて歌つた。絃の音に合せてである。欄干の娘は驚いてふり返つたが、蓮葉な調子で素早く物を投げる手つきをして、つと房へ這入つて了つた。

陳三の馬の前には一つの早く熟した茘枝の實が投げ落ちて、陳三の目には限りなく美しい嬌態と掌上の舞をも能くするやうな細い姿とが輝くやうに映つて消えた。

第九折

陳三は馬をとどめて、今来た道の方を指して行人にたづねた。その家は黄氏の屋敷である。その娘は黄氏の五番目の娘である。世の中で一番美しいと花朝の日以来、潮州城の人人が噂する娘である。　行人はさう答へた。さうして確に、黄五娘こそ世の中で一番美しい娘である！　陳三は手綱と一緒にあの地上に投げられた茘枝の實をしつかりと握つた手が汗ばんで、心臓が高くとどろくのを感じた。かうして陳三は世の中で一番美しいと言はれる娘、黄五娘を見たのである。

第十折

黄五娘の家には代代傳はつてゐる家寶の古鏡がある——陳三は、宿にかへつて再び黄五娘の噂を聞いた時、この鏡のことをも聞き知つた。何氣なく聞きすごした鏡のことが陳三に一つの思ひつきになつた。その鏡にことよせて、陳三はせめてもう一度あの少女を見ようと云ふのである。さまざまに考へ明した一夜ののちに陳三は宿の下僕を呼んだ。さうして彼の立派な袍と襦とを脱ぎすてて、その上に馬掛まで添へてこの貴公子の著物を、宿の下男のふだん著と取り替へようと申込んだ。

第十一折

ある朝、遠いところから歩き廻つて来た工人だ——家代代の秘法を傳へた鏡磨だと名乗る一人の若者が、黄氏の家に来て秘蔵の古鏡を磨きたいと乞うた。

彼は永い初夏の日を綠の光を透きとほす芭蕉の葉蔭で、一日中丹念にそれを磨いた。夕方になつてやつと磨き終つて奩に納めようとした時に鏡は奩とともに石疊の上に落ちた。奩は幾つかに砕け、鏡は鵲の翼に沿うて二つに破れた。工人は誤つてとり落したのだと言つた。實際、工人の言ふのは嘘ではなかつた。何か不可解なはずみがあつて、この決して砕ける可くもないものが砕破したのである。人人は罵り叫んでその工人を責めたが、最後に主人が出て来て、一たいどんな方法でこの貴重な寶の代を支拂ふつもりかと詰つた。——仕方がない——陳三は思ひかけない出来事のうちに思ひかけない智慧が湧いた。——私にはもとよりそんな大した銀はない。私はただ自分の身の代でその償ひができるだけである。私は何年でもこの鏡の代を支拂ふに足るだけの年月を、この家の奴隷になつて働かう——見なれない工人は潔く階庭にさう言ひきつた。さうして何故か頬に微かな笑を含んだ顔を上げて、私は身をもつて、この鏡に優るとも劣ることのない鏡と寶物とを當家に贈らうと思ふ——さう言ひ足して人人を見まはした。

この騒ぎを人かげに隠れて見て居た五娘は、この時初めて若い工人を見た。眩しいものを見た時のやうに瞬きした。この工人はどことなく、昨日、自分の家の門前を自分の絃に合せて歌つて過ぎたあの馬上の公子にそつくりだ。五娘は訝しい事に思ふと同時に、或は昨日のやさしげな公子の姿がまだ目にのこつて居て、この工人までがあの公子に見えるのではなからうかとも疑つた。

第十二折

鏡磨の若い工人は、そこで、黄五娘の家の奴隷になつた。五娘は、その日からこの奴隷

のこしか行となく氣がかりで深窓のかげからたえず彼を注視した。又、彼をさういふ風に注視する眼はいくらもあつた。何故かといふのに、この[illegible]の方でも[illegible]たえず五娘の目にふれようと望んで居るらしいからである。さうして五娘は、またこれはあの馬上の若者に相違ないと信じ出した。

「私は[illegible]もつて、この[illegible]に[illegible]るとも[illegible]ることのない[illegible]と[illegible]とを當家に贈らうと思ふ」から言つたあの[illegible]の[illegible]その時の[illegible]とを思ひ浮べて、をかしいぐらゐにはすべてがわかるやうにも思ひ、またそれは思ひすごしのやうにも考へたりした。[illegible]人に[illegible]るといふことは、婚約をしようといふ事たからである。五娘は彼を怪しい[illegible]たと思ふ。けれども好もしい[illegible]だと思ふ。

五娘はこれらの事をもとより誰にも洩しはしない。たつた一人、五娘の召使とも友達とも言ふべき[illegible]にだけは打開けたい氣がした。

第十三折

[illegible]は[illegible]氏を名乗るのであるが、幼い時分なし児になつて[illegible]氏に養はれた。五娘とは姉妹のやうに育つて来て、生れながらの姉妹よりももつと仲がよかつた。五娘も[illegible]も同年で、今年十五であつた。この[illegible]も[illegible]なかなかの美しい娘であつた。五娘は谷のなかに[illegible]めた[illegible]のやうに、益春は[illegible]のなかに[illegible]めた[illegible]のやうに美しい。五娘を[illegible]といふならば、益春はどうしても冷[illegible]と言はなければなるまい。五娘の美しさには地上の[illegible]かさがあり、益春の美しさのなかには天上の[illegible]かさがあつた。五娘の美しさのなかには人をそそり人を[illegible]はせるものがあり、益春の美しさのなかには人を[illegible]させ人をひき入れるものがあるやうに思へた。それ故に、人によつては五娘よりも益春の方がもつと美しいとも言ふであらう。或はさう言ふ方が正しいかも知れない。この益春が五娘の召使になつてゐるのである。それに[illegible]いては一つの[illegible]がある。

第十四折

五娘も益春も同胞のやうに育つて来て、二人と互に相手の美しいのを愛し合つたが、二人とも年ごろになるに從つて互に相手の美しさが過ぎるのが氣になり出して来た。お互に、どうかすると自分よりも相手の方がもつと美しく見え出したからである。

「私とあなたとはいつたい、どちらが美しいのでせう。」或日[illegible]に[illegible]がさう[illegible]ひ出した。

「いづれあなたの方が美しいに違ひない。しかし、それは私たち自分ではわからない事です。誰かほかの人、[illegible]の人にでも見てもらつたのでなければ──」かう五娘が答へた。

こんな可憐な問答の末に二人は、[illegible]日をトしてそれぞれに城中を出で、[illegible]行く人たちに二人のうちのどちらが一層美しいかといふことをきめて貰はうといふことに決した。さうして娘たちは[illegible]のやうに自分たちの一生を賭けた。この競争に負けたものは、一生、勝つたものに仕へよう。──二人は何がいいのだから一生離れまい。さうして勝つた者は自分の愛する者を好きに選んで、或は選ばれて、自分の夫にしていい。負けた者は勝つた者とその選んだ男子とに仕へて、勝つたものの夫の第二夫人にならうといふのであつた。

第十五折

花朝の日が間もなく来た時に、五娘が言つた。

「さあ。この間の相談を實行しませう。それでは先づあなたからさきに街を歩いていらつしやい」——この言葉にはさかしい五娘のたくらみがあつたのである。

　益春は五娘の言ふがままに新らしい装を凝らして街を歩いた。群集は老幼も男女も皆、益春を見て立ちどまつた。蜃氣樓を見るやうに目を見張つた。ふりかへつて見送つた。若者たちは囁いたり、叫んだりした。

「どこの娘だらう」

「世にも美しい娘だ」

「ほんたうに美しい」

「あの赧らめた顔を見い」

「この娘は何の花であらう」

第十六折

「さあ今度こそ私の番です」

自分の聞いたとほりを傳へる益春の言葉などには耳をかさずに五娘が言つた。

「そのあなたの著て行つた著物をお貸し。——二人とも同じ著物でなければ不公平だから——

——この言葉にもさかしい五娘のたくらみはあつたのである。

　五娘は益春の著てゐた淡紅の衫を著て街へ出た。群集は老幼も男女も皆、この淡紅を著た娘を見てもう一度立ちどまつた。人人は叫んだ。

「やあ、さつきのあの美しい娘がまた通る」この聲と一緒に、五娘はにこやかな顔を上げて人人を見まはした。

「いや違ふ。さつきの娘ではない」

「さつきの娘ではない。だが何といふ美しい娘だらう」

「さうだ。さつきの娘にも劣らない」

「寧ろもつと美しいくらゐだ」

「もつと美しい」

「もつと美しいとも」

　五娘は世に最も小さな二つの足でよろめきながら、春日のやうに遲遲たる蓮步で[illegible]るやうなかをゆつくりとくぐり抜けた。自分の豫期したるとほりの言葉を浴びてほほ笑みながら。

第十七折

　潮州城中の人人は、その日、今年の花朝には歩く花のまぼろしを二度見たと噂をした。或者は、さきに歩いたのに秋花の精であり、あとから歩いたのは春花の精であるとも取沙汰をして喜んだ。この人たちは斬新な空想もないのに徒に世の常ならぬことをいふのを好む人人であつた。

第十八折

　五娘は群集の心持をよく知つてゐたのである。人間といふものは言葉に釣られるものだといふことをも勘づいて居たのである。先づ、五娘は同じ著物で益春——一旦人人の注目を鍾めて來た益春のやうに装うて人目を引いた。さきに一度、益春と自分とを比べさせようとした。益春を讃めた群集はすぐそのあとに現れて、しかもその美しさを何れとも言ひにくい五娘を、益春と同じ程度に讃める爲めには、つい、實際以上に言葉に力を籠めざるを得ない——

「この方がもつと美しい」と。

　さかしい五娘はそのさかしさで人の心を捉へた。五娘は、世にも美しい「ほんたうに美しい」益春よりも、もつと美しいものになつた。かうして五娘は益春に勝つた。素直な益春は笑ひながらあきらめて、いつかは[illegible]はれた身ではあり、満足して五娘の召使になつてゐる。

　心驕りのした五娘はその爲めに一層美しさ

を増した。心の卑下った益春はその爲めに一層美しさを増した。各、日日に。

第十九折

益春のこの美しさは新らしい奴隷の目にも映ぜずには居なかつた。時には五娘よりも、何の粧ひもしてゐないこの召使の方がもつと美しいやうな氣持がした。しかし若者はさう思ふたびに、はつと氣がついて、五娘に思ひをかけて此家に來ながら、益春のことを考へることのある自分を貞操のないものと考へて恥ぢて居る。

この若者は一本氣な男であつた。その上に氣を負うた彼は、いつも顔を會すことの出來る召使の益春よりも、奥深い窓の際に僅に見ることのできる五娘の方に多くの夢をよせた。それを得なければならない心持が切になる。出來にくさうな事がしたかつた。——凡人の幸福を願つてゐるこの若者は、どうも凡人らしくない性質を具へて居たやうに見える。

第二十折

「どうぞ、私の星よ、私の世の中で一番美しい娘を私の妻として授けて下さい。又、その妻の腹に宿つて出來る私の子を世の中で一番えらい人にならせて下さい」

陳三は、人にかくれて自分の星に、今でもやはり同じ願事を祈つた。以前よりももつと切なく祈つた。

第二十一折

荒くれた卑しげな奴隷たちに雜つて、同じ荒くれた卑しい仕事をしてゐながらも、鏡磨であつた奴隷には確に裹んでも裹みきれない品格があつた。それが益春にも感じられる。柔かな目つきで益春は、秋の入日のなかに幾人もして重い石臼を曳く人人に雜つた骨組の華奢な奴隷を、いたいたしさうに見る。

第二十二折

五娘はまた、あの怪しい若い奴隷をいつまでも何となく氣にかけてゐて、冬の夜あたりに、益春をつかまへてはその若者の噂をしたがるのであつた。五娘が言ふには：：どうもあの奴隷は唯の身分の賤しい若者ではない。——鏡磨の工人にしたところであまり品がありすぎる。——何かわけのある人に相違ない。——といふのは、實は自分はあの人が大きな馬に乘つて眞珠のやうに白く光る袍の上に紫色の馬掛を著飾つてこの家の門の前を通つて行くのを見たことがある。——それは夢まぼろしのやうな話ではあるが、決して夢や幻ではない。この初夏のころのことであつた。さう、五娘はまのあたりに今それを見つづけてゐるかのやうな目差で話しつづけるのであつた。

第二十三折

このやうな月日のなかに、益春は嬉しいやうな悲しいやうな、切ない立場に置かれてゐる自分にはつきりと氣がついた。といふのは心ひそかにいたいたしいと思つてゐるあの華奢な奴隷といつからか物かげで口を利くやうになつたかと思ふと、その人は益春に向つて五娘の戀しさを打明けた。「お前がなつかしい」と囁いたのではないのである。

益春はひとりで、よく、いつか五娘と冗談のやうに取交したあの一生の約束を思つて見る。さうして奴隷といふにはあまりやさしすぎるあ

の人が、ほんたうに五娘の言ふとほり、何か身分の高い公子であつてくれればいい。いや、それほどえらい人でなくとも第二夫人ぐらゐ持てる人であつてくれればいい。おお、あの人が眞珠のやうに白く光る袍の上に紫色の馬掛を著飾つて……、大きな馬に乘つて……。それが目に見えて來るやうだ。五娘はその立派な公子の夫人になる。それから、それから、自分はせめて第二夫人にでもいい。その公子の妻になりたい。それともあの人は自分の事などはどうせ何とも思つてはくれまい。――益春は冷たい牀の中で、熱い溜息をつく。さうして體が顫へる。膚の寒さのためであるか、心の熱さのためであるか、それは彼の女自身にもわからない。益春は誰に向つても一言も洩しはしない。益春はやるせなさを蓄へて置いた。

第二十四折

五娘は嬌羞によつて、益春は清愁によつて、ふたりはそれぞれに益々美しくなつた。天から美しさを惠まれて居たこのふたりは、何につけてもただ美しくなるばかりであつた。

第二十五折

たうとう、益春は、あの奴隷からの言葉を五娘に傳へなければならなくなつた。

私は、いかにも、去年の六月にこの門前を馬で通つた。――私は私の星の命ずるままに五娘を見出したのである。――私は泉州城外の英內の陳といふものの第三男である。長兄は兩廣巡察使である。次兄は去年、兩廣總督になつた。私には、然し、何の官位もない。――但、私の今の唯一つの願は人間といふものはどれだけ深く妻を愛することが出來るか、また妻からどれだけ深く愛されることが出來るか、私はそれを自分の身で知りたいだけである。私は神仙を望まない。人間の幸福が欲しい。――私の故鄕には五洛の家がある。私の心には五娘を慕ふ一途な心がある。私は今こそ人傳でなくそれが言ひたい」から彼の奴隷は益春に言つた。

益春は五娘にさう傳へた。

五娘は顏を隱して、餘韻のやうに顫へる細い聲で益春に言つた。「あの人と逢はう―」

第二十六折

益春は、自分の意中の人を、ひそかに、自分ではない娘の房の中に導いて置いてから、彼の女はひとり床に伏し倒れた。倒れて泣いた。

その次の日の朝は、陳三も五娘も益春も、互に、目を伏せて相手の瞳を避けた。益春は苦しく、怖ろしく、悲しく。他の二人は苦しく、怖ろしく、嬉しく。

第二十七折

僅に數日の間に、益春は永い喪に服した人のやうに瘦せ衰へた。心がうつろになつて、一日が一月のやうに永い。ただ影のやうに靜に召使の仕事に動いてゐる。吻と吐息をして窓から、咲誇つたさまざまの花を視て見る。益春の氣に入る花はもう一つもない。皆、去年の春の花とは違つてゐる。ぼんやり見つめてゐると淚が目にたまつて來た。その益春の肩へやはらかにしかし不意に手をかけて、五娘が低い聲に力をこめて言ふ。

「春が來たのに、どうしてさう悲しいの。悲しまなくてもいいのです。あなたはあの方の傍に

大人になるのだから。私は去年の花朝の日の約束を忘れはしません」

益春は訝しげに振返つて五娘の顔をしげしげと見た。大きな蝶が庭から迷うて来て、五娘のかざしてゐる金色の花に戯れて去つたのを、益春はうつけたやうに見送つて、何もないところをぢつと見た。

第二十八折

若しさう言つてくれたらどんなに嬉しからう、とさう思つて時時自分で自分に囁いて見るその通りの言葉を、今、益春は聞いたのである。空頼みにふと考へてみるのと寸分も違はない言葉を聞かされて益春は自分の耳を信じない。この言葉が怪しくないなら、益春の住んでゐる天と地とそのものが怪しい。漸くして、しかし、この言葉を言つたのはほんたうに五娘で、またその五娘は本気でこれを言つたのだといふことが益春にも信じられるやうになつた。さうして五娘がもつと詳しく話し出した時に、益春には出来事がもう一層夢としか思へなくなる。——五娘は、今、陳三につれられて泉州へ行かうと決心して居るのであつた。はげしい愛恋にひかされて、この情熱に富んだ娘は、父の家を惜しげもなく出て行かうといふのであつた。益春にはこの養はれた人の家を見捨てるのさへなかなか躊はれるのに。・・・

第二十九折

「かうなれば一日も早く家出をしよう。その上で更めて私の家からあなたの家へあなたを貰ひに行かう。それより外には方法はない。——でなければ、年とつた人人といふものは氣の毒にも疑ひ深くて、この奴隷を自分の娘に與へるに相應した若者であらうとは、容易に信じてはくれまい。さきの日に家の寶の鏡を壊した時にやつと命を助けられた私は、今それ以上に家の寶であるあなたを盗んだことが知れたら、今度こそは殺されるであらう。奴隷には娘はくれまい。けれども英内の頭の家にならきつと拒むまい。——どうしても私の妻になつてくれようといふのなら、早く、私と一緒に逃げてくれ。——道は長いが危くはない。私は来る時に通つて来てその安全なのをよく知つて居る。——私は路銀にと思つて金と銀とを土中に埋めて置いた。——私と一緒に行かう。——愛があるならば迷ふな」きのふの夜、陳三は五娘にさう言つた。五娘は言葉どほりに陳三を信じた。しかし五娘はひとりでは、たとへ思ふ人と一緒にでも、そんな遠いところへ行くのは心細い。五娘は益春にも別れたくはない。また益春と二人の方がまだしも年とつた母が安心する。益春のことを、五娘は陳三にも話したのである・・・

「……だから、さあ私たちと一緒に行きませう。でも萬一、あなたが行かなければ私はひとりでもあの方について泉州へ行く」五娘は益春にさう言つた。

五娘がさう言ふなら、陳三がさうしなければならないのなら、益春だつてやはり泉州へ行かうと思ふ。益春も五娘には別れたくない。それよりももつと陳三に別れたくない。

「おお、私もつれて行つて下さい」[illegible]をかかへて益春は[illegible]に咽んだ。

第三十折

「たうとう明日になつたの」五娘は、昨日、益春に囁いた。「私たちは、あの方も私もあなたも、明日の朝まだ夜の深いうちにこの家を出て行くの」五娘は沈みがちな顔に元気をつけ

て「あの方は、おとなしいそれでゐて足の疾い馬を手に入れて置いて下さる。それから私もあなたも……」五娘はさも無邪氣に笑つて早口に「私もあなたも男の著物を著るのですつて。さうしなければいけないつてあの方がさう言ふの」男の著物を著る話は、内氣な益春の顔を赧くさせた。

籠中の玉燕がふと朗かな聲を揚げて囀り出した。何となくぢつとしてはゐられない五娘は、氣まぐれのやうに手を差しのべて籠の口を開けた。玉燕は驚いて歌をやめたが、とまり木の上でしばらく考へてから、怯々と籠の口へ出て見る。それから暫く佇んで、この愛育されて人に慣れた黄色い小鳥は欄干の上に來て短く歌つたが、五娘が手を振つた機みに我を忘れて飛び立つ。——程遠くの花の一ぱいある樹のなかにかくれた。

「でも、もう明日から餌をやる人はゐないのだもの」五娘は空になつて微かに搖いてゐる象牙の鳥籠を見守りながら、誰にむかつてともなく申譯のやうにかう言つて、立つて欄干に凭つた。益春も同じやうに立つて五娘と肩を並べた。「この走馬燈か、私のはじめてあの方を見たところなのだ」五娘はしみじみとひとり言を言つた。

させて、ふたりは暫く首を垂れてものを思うた。

第三十一折

三人はやつと城門まで來た。冒險者たちは一言も口を利かなかつた。もし、固く溫く握られてゐる手を感じなかつたら、ふたりの娘たちはこの闇のなかを自分たちをぐんぐん引つぱつて行く者が、ほんたうにあの親しい人かどうかを疑つたかも知れない。それほど不氣味に誰も口を利かない。城門を守る男は、この三人を見るとやはりものを言はないで、扉をきしらせないやうに用心して門を隙けた。この男は昨日の夕方、見なれない若い男から、夜中にそつと門を開ける約束で懷に重いほどの銀を貰つてゐたからである。城門からすり拔けた時になつかしい聲が初めて言つた。「安心をおし」それから多少歩みをゆるめて言ひつづけた。「ごらん」北の空の一方を指さして「あれが私の星だ。この間からああして三つ並んでゐる。それに、今夜はちやうど私の故郷の方角にある」それからまた押默つてややしばらく歩いた。「待つておいで。ほんの暫くだから。馬が來てゐる筈だ」彼はさう言ひ置いて急にどこかへ驅け出した。

第三十二折

一人は交交手をとつて二人を馬に乘せる。馬は三頭である。「大丈夫だ。ただ手綱をしつかり握つて！」二頭の馬は先頭について、そつとほりに走る。先頭は輕快な騎手である。さて後から來る二頭のために細心な注意を怠らない。それ故、不慣れな二人の騎手としては最大の速さで走る。自然に走る。且、この馬に實に使ふ爲によく訓練された馬である。二人の無頼な兵卒がやつと盗み出して北門外の一番大きな龍眼肉の樹の下で待受けてゐたのである。賣り手は「これこそ大月氏國から來た汗血の馬だ」と言ひ張つた。分秒を惜む買ひ手は、この三頭の爲に兩手に一ぱいの銀をせびられた。その三頭の馬が走る。——晩春の曙の空の下を。——足並をそろへて、昨日までの騎手にくらべては嘘のやうに華奢なものを乘せて。——夜が白んで光うすれて行くあの三つの星の方へ。

第三十三折

五娘の家で、あの無口な[illegible]

なくなつたことを、外の奴隷たちが気づいたころには、三人は既に城外百里のところにあつた。その奴隷と一緒に五娘も益春も居なくなつたことを、家の人たちすべてが気づいたころには、三人は既に城外二百里のところにあつた。さうして今日のうちにもう五十里行けばいいものとして、馬の歩みをゆるめた。――五娘の家では、娘たちは人買ひの船に乗せられたものと思ひ込んで歎いた。五娘の母は罪をひたすらに益春に歸した。

第三十四折

三人の騎馬旅行者は、工夫を凝らして人目を避けてゐるのに、どうも人の目につきやすかつた。一人は黒い袍を他の二人は藍の袍を、いづれも普通の服装をした少年たちであるのに、それがどうも行き逢ふ人に目を注がせる。立ち停らせる。振り返らせる。何故かといふのに馬上の三人はこんな地方で見ることの稀な美少年たちである。就中、年の若い二人は、その手綱を大事に握つた手の指一つ見ただけでも、どうも女にまがふ程だからである。

彼等はたうとう怪まれた。今日は漳州で泊らうといふ日に、一隊の兵卒が彼等を捕へたのである。世は亂れ始めて居た。良民を保護することに名を藉りて、寧ろ彼等を苦しめるために武器を持つてゐる兵卒たちは、以前から土著の民に迫つては酒肉を得、羇旅の客を脅しては金銀を掠めてゐた。公認された土匪のやうな輩であつた。――一年前に總督の一行としての陳三を迎へた時には、正しい軍律を装うて、且、地方の平安をよく支へてゐるやうに見せてゐた。さうして陳三は、世間しらずにも、道は長いが危くはないと信じてゐたのであつた。然るに今、總督の一行ではない陳三は捕へられた。

第三十五折

男装した娘たちは白日の光のなかで素裸にされた。兵卒どもは、うつ伏せになつて戦慄してゐる二人の娘の青く透くほど白い腰の細さを貪り見比べた。路銀は預つて置くと言つて取り上げられた。それから、これは厳しく取調べなければならない奴どもだと宣言された。

「今に後悔するぞ！」

陳三は牢屋のなかへ投げ込まれながら、さう叫んだ。然し陳三の心のなかにこれと言つて方法があつたわけではない。唯あまりの口惜しさに叫んだまでであつた。けれども、この叫を聞つた一言と、三人の官話と、三人の良さと、それに豫想外に上品な容貌とが、兵卒どもをもまた無気味にした。ただの旅行者ではないと思はれたからである。若しさもなかつたら、この獣に類した兵卒どもは、あの晝間貪り見たものの幻にそそられて、二人の娘たちを深夜牢屋から牽き出したことであらう。

第三十六折

「ここに居る者は、莫大な金銀財寶と容色ある少女二名とそれに馴育のとどいた軍馬三頭とを盗んだ強盗でございます。軍馬を盗む程の奴ですから餘程のしたたか者に相違ありません。罪科は明白ですがまだ白狀を致しません。何れ拷問に掛けようと存じましたから、足枷と手械をさせて置きました。若い女どもも兎も角一緒にここに置いてございます。これは二人とも足械だけさせて置きました」

と獄吏が説明をして丁寧に一揖すると、一隊の整列した兵卒たちに擁せられた官位の高さうな役人が一人、椅子のなかに腰を沈めた。い

かにも、うす暗い房の奥に一かたまりの黒いものが動いてゐて、それが三人の人間らしかつた。囚人たちは何事であらうかと今更新らしくふるへて檻窓の外を注視した。えらい役人はただ頷いてゆつくり一歩あるき出した。

「兄さん！　待つて下さい。兄さん！　私です！」

「あまり囚人を虐待してはならない。——ここにゐる者は氣が違つてゐるのか」

えらい役人は獄吏の方をふり返つて言つた。

「いいや！　私ぢや。兄さん！」

囚人はもう一度叫んだ。——實際、狂人のやうに。えらい役人は立ちどまつた。懐かしい故郷の訛に耳を打たれた。耳のひびきが顏色を動かした。しかしえらい役人は獄吏の何か答へるを聞き流しながら騒がずに言つた。——何しろ、この囚人を私は一度よく見よう」

第三十七折

「今に後悔するぞ！」とう偶然に言つた陳三の叫びは、全く偶然にも實現された。このえらい役人は、疑ふべくもなく陳三の長兄であつた。彼は廣東の任地から特別な任務でやはり巡察使として、亂れてゐるといふ噂の最も高いこの閩海の地方へ突然來たのであつた。久しく相見る機のなかつた彼等は、長兄は次弟の面影から末弟を信じ、末弟はまた次兄の面影から長兄を認めた。彼等は泉州の言葉で半時あまりも語り合つた。既に壯年を越えた長兄は、年若き末弟が正直に告げたところを聞いて、その情癡を憫れんだ。さうして彼の愛する弟の望みを果させてやりたいと思つた。日を期して彼自ら潮州の黄家を訪ねようと言つた。——その古鏡に優るとも劣ることのない鏡と鏡奩とを求めて黄家へ贈らなければなるまいとも言つた。

——昨日の囚人は今日の貴賓であつた。五娘と益春とはもう憚るところなく髪を梳り、簪を飾つてよかつた。昨日彼等に辱と罪とを與へた者どもは今日自分でその辱と罪とを受けなければならなかつた。

第三十八折

「どうぞ、私の星よ。私に世の中で一番美しい娘を私の妻として授けて下さい。又その妻の腹に宿つて出來る私の男の子を世の中で一番えらい人にならせて下さい。——あなたはもう私の祈願の半分を聞きとどけて下さつたやうに見える。尚も、私を憫んで私の祈願を完うさせて下さい。私にどうぞ、人間らしい幸福を授けて下さい」

陳三は、長兄との傳奇的なこの邂逅のあつた夜、彼の星にむかつて彼がその守護を得てゐることを深く感謝した。さうして彼はいつもより熱心に永いあひだ跪いた。さて、戀を思ひながら星に埋つた蒼穹を仰いだ陳三は、人間のあまりに微小なことを感じ、しかもその微小な人間の微小な胸の底にも亦一個無限の星辰を藏めた蒼穹が宿されてゐるのを感じた。それ故に人間と生れたことは實にはかなく切なく、而もさればこそ生甲斐がある——陳三はこのやうな感に打たれながら、彼の目を星そのもののやうに輝かせた。

陳三の星を敎へられ、さてその左右に並んでゐるところの星が各自分のものであることを信じた五娘と益春とも亦、窓をとほしてその星を拜みながら、ひそかに祈念した。

「どうぞ、私の星よ。私が私の夫によつて生涯深く愛せられるやうに私をお守り下さい」

彼の女たちの願事は期せずして一致した。世の中のすべての花嫁たちがさうでなければなし

ない如く。

第三十九折

悲みのなかにあつて楽しかつた日を振り返るほど堪へ難いものはないと謂ふ。而も悲みのなかにある者に、せめては楽しかつた日を振り返らないではゐられない。

五娘はいつの間にか、徒らに今日の憂悶を紛らしくするために懐しく昨日を思ひ耽る人であつた。月日は何の為めに去るのであらう。新らしい幸福を齎す為めに新らしい月日が来るのでなかつたならば、どうして幸福の満ちて居る瞬時に義和氏の車は駐らないのであらう。——「いやいや、私にに決して幸福を齎す義和氏の車ではなかつた。掠め去つて行く車だつた。その車が益春には川のやうに遠く幸福を積んで来た。あれほど愛し合つた思ひや、その幸福は消えて今日どこへ行つて仕舞つたのであらう——五娘はさう怨みながら飛び去つた一年半の月日を見る。怨みながら夫の陳三と第二夫人の益春とを見る。怨みながら黄昏のうちにある三つ並んでゐる星のうちの一番光のうすいものを見る——あの時、あの一生のうちで一番うれしかつた時、あの星に誓つた私の願事に聞かれてはゐなかつたのか——五娘はさう思つて目ぶたが熱くなり長い睫毛のふるへる目をしばたたいた。

第四十折

「それにしても夫の愛か——あれほど深かつた夫の愛が、いつからどうして益春の方へうつつて行つたらう——五娘は自然と明瞭であるこの問を、幾千度となく自分の心に繰り返す。五娘は憂さを紛らさうとして機にのぞんで、しかし長く織る手をやめて、その代りに稔みやうに佇みかない思ひで心は悪い布を織つてゐる。「夫の愛は、嫉ましくも益春が夫の子をその腹に宿したその夜からに違ひない。どうして自分には夫の子が宿らないのであらう。自分には夫の寵愛も尠なければ天の寵愛も無いのだ。——それにしても、守るにも及ばない戯れの約束を思うて、自分の夫に益春を第二夫人として薦すめた自分が怨めしい——あの時の自分はあり余つてゐる幸福を、悲歎の底にゐる益春にも少しは分けてやりたかつたのだ。それがそつくり持つて行かれようとはどうして思はう。それにしても、怨めしいのに軽薄な情をもつた夫である。いやいや、夫にやはり懐しい人だ。怨めしいのは何と言つても益春である。あの時の恩を思ひ出さうともせずに夫の寵愛をひとり占にして、果は心が離れて自分を離れさせるものか何かのやうに、時時軽蔑の様さうな目つきで睨み観てゐる。自分にははつきりとそれがわかつてゐる——何の時にも、五娘は幼くから幸福のなかで温室の花として養育されて、それは順境に置かれればいくらでも優しくなり得る代りには、世に寒さのあることを知らずに、逆境には脆くひねくれ易く生れて来てゐた。

第四十一折

益春は恋しい人の子が自分の胎のなかにあることを考へると、ぞくぞくするやうな嬉しさが湧いて、これほどまでも深い嬉しさをくれるその人を一層懐しく思ふ。もともと素直な心が更にやさしくなる。夫の愛が自分に厚いのを感ずるうれしさと一緒に五娘には済まないと思ふ、陳三を説いて五娘を訪はせようとする。しかし、陳三にはどうしても五娘の房の秋はうすら寒く灯がしめつぽい気がする。五娘は陳三

を見ない夜にはその戀しさを多く思ふのに、陳三を見る時にはつい胸一ぱいに閉ぢ籠つてゐる怨言の方を先に言ふ。その盡きない怨言のまだ終らないうちに夜が明ける、さうして何故この戀しさの方を言はなかつたらう。このつぎにこそこれを言はう。次の日には日ねもすから後悔する。しかしやはり又の夜には怨言の方をさきに言ふ。氣の弱い陳三は五娘をも惡んでは居ないだけにその棘のある言葉が聞きづらい、さうしてそれをあの沁み出るやうな益春の優しさに比べて見る。それに心の険しくなつた五娘は前ほど美しくない氣がする、さうして五娘を慰めてかき抱きながらも心は、愛と望とに美しく奥深く光つてゐる益春の黑い瞳をばかり思つてゐる。一たび礎のゆるんだ家は傾く。傾いた家はその倒れかかつたもの自身の重さでだんだん崩壞しようとする。そのやうに五娘と陳三との互の愛はくづれさうに見える。琴は張り過ぎてゐる。瑟は弛んでゐる。五娘はとだえ勝な蟋蟀の聲に悶えながらさびしさの極つて眠ることのない夜の考へで、陳三がまだいくらかでも自分を思つてゐてくれる心があるかどうかを、試して見ないでは居られなくなつた。證を求めないではゐられない愛は苦しい。

第四十二折

或る夜明けに、陳三は益春の房から出て五娘の房を訪れた。前の宵の五娘との約束を果さなければならないからである。陳三は五娘の牀の帳を押し明けた。訝しい事には五娘はそこに居ない。ただ枕もとに、その上へ金簪を置いた一通の手紙があつた。殘燈のほのかな白さのもとに、陳三はふるへる手でそれを開いた。驚いて、彼は扉を排して出た。まだ暗いことに氣がついて燭を秉つて再び出た――庭の井戸へ。五娘がそこへ身を投げると書き遺したところへ。石だたみの上には赤い小さな履が片一方ある！

五娘のものだ！　陳三は燭を高く斜にかざしてその下から井戸をのぞき込んだ。黑く履の形が一つ、灯を金色に映じた水の圓いなかにしよんぼりと浮んでゐる。水は重たく靜まつてゐた。陳三は燭を石の上に置いた。それから石の上の履を拾つた。赤いうへに蔓草とそれの花とが黑く縫ひ飾つてある。――これこそ、あの第一の晩に五娘が帳中で穿いてゐたものである。陳三はもう一ぺん井戸のなかを見る。そこには靜かな黑い水の面に星が一つ天から影を落してゐる。つくづく見るとそれが陳三自身の星である。

「五娘！」

陳三は叫んだ。黑影を映した深い水が彼をおびき入れる。よろめいて彼は墜ちた　突きのめされるやうに、又狼狽して足を踏み外したやうに。

短い叫び聲が井戸に近い穀倉から鋭く叫んだ。しかしそれは人を呑んだ黑い井戸の吼えるやうな響で消された。

陳三は苦悶のうちに水面から擡げた頭の眞上に、彼自身の星を最後に見た。――その星だけは、どんな激しい感情が陳三を井戸のなかへ追ひ入れたかを、或は知つてゐるかも知れない……

第四十三折

井戸のそばには、遺された燭の灯が大きく搖れながら燃えてゐる。穀倉のなかからよろめき出た人の影は、この燭の灯に照された時に幽鬼のやうに蒼ざめた五娘であつた。その五娘は井戸には目もくれないでよろめき走る。よろめき走つて彼の女の房へ行く。彼の女は筆をとつて

書く。その意味は――私は私の淺はかな智慧から夫の深い愛を量らうとした。私は死んだやうに見せかけて夫の悲歎がどれほどだかためして見ようとした。さうして私は私の夫を死なせた。あなたの夫を死なせた。あなたの子の父を死なせた。みんな私の曲つた心と淺い智慧とを許していただきたい。あの方には今から陰府へ行つてお許を乞ふつもりです。――それは陳三を驚かせ死なせた僞の遺書ではない。眞實のものである。益春に宛ててあつた。

遺書は紫檀の鏡臺の上に見出されたが、その鏡臺の螺鈿玉の唐草模様が「富貴多子」であつたのも哀れではないか。

第四十四折

燃え盡きて蠟涙のこぼれ傳うた銀の燭臺が井戸はたに置かれてあつた。陳三と五娘との屍が水の底から上つた。屍と一緒に五娘の履が二足あつた。益春は書き置きを見ても五娘を庇ふつもりで多くを人人に語らない。人人は同じ時に同じ處で死んだこの若い夫婦を且つは怪しみ且つは悲しんだ。この二人を同じ一つの椁に納め同じ一つの穴に葬つて同じ一つの墓を建てた。墓畔には相思子を植ゑた。

第四十五折

益春は夫に殉じて死ぬることは容易で、ひとりで生きることの却てむづかしいのを悟つた。しかし益春は、腹のなかにうごめくものを考へ、また夫がその死の前夜に偶然にも言つた言葉を思ひ合せると、どうしても生きなければならない。夫は彼の女を愛撫しながら言つた――「夫の目からはお前こそ世の中で一番美しい娘で、それ故私のまことの妻だ。それならばこそ私の子は、私の希願のとほりお前の腹に宿つた。それは男の子に違ひない。さうして後には世の中で一番えらい人になる子だ」と。それが今となつて見れば益春には、何となくこの腹にある子を守り育てよといふ夫の遺言のやうに思へる。益春はもう直きに生れる子供をも見ないで死んだ夫を、夫の爲めに悲しむ。子の爲めに悲しむ。又、自分自身の爲めに悲しむ。しかし夫を恨むことは無かつた。愛の薄くなつてゐた五娘の爲めにさへあの方は死ぬることをした。私の爲めにならば猶のことであつたらう。これほど眞實のある夫を持つことの出來た私たちは幸福であつた。それが今はもう亡い。さうして情ぶかいあの人は私がひとりでもさびしくないやうにと思つて、私には子供を遺して行つて下さつた。私はもともと身なし兒であつた。それに今ではあの人のおかげでここにこの通りに可愛い子供がある。[illegible]いひとりぼつちではない。益春は悲しい時にさう思ふやうに努めた。さうして[illegible]い涙を細く流した。

第四十六折

陳三と五娘とに起つたこの不祥事を、益春の次に最も多く歎いたのはあの廣南運使になつた兄であつた。彼は三年も以前に弟が星に祈つた願事を偸み聞いた事があつた。さうして彼から結婚の消息を得た時には、彼もその文中にあるとほり全く、弟の星への祈願が聞かれたものと思つてその幸福を祝したのに、今日その不慮の死を報じた消息を手にとつて、ふと思ひ出されたのはやはりあの同じ夜に庭の樹かげで弟に言つた言葉である――「假りにお前が若し、惡運の星の下に生れて來てゐるとしたら、お前の熱心な祈願もそれをどれだけ

善くかへることが出來るだらうか」――それは實に何氣なく口を出た言葉ではあつた。しかし今になつて思へば彼のその一言が讖をなしたかのやうで堪へがたく悲しい。更に具に事情を知つた時には、その感が一層に深い。彼は以前に弟が日ごろどんなに人間らしい幸福を望んでゐたかを知つてゐる故に弟の死を思うては夜も晝も心がふさいだ。慰めがたい心を慰めようとする感情は自然と幾つかの哀詩になつた。そのうちの一つに、次のやうな意味を歌つたものがある。――地の上に藍色の玫瑰花が色咲かない限り、人の世には完全な幸福はない。ただ夢みることと信ずることとがある。これを悟らずに幸福を追及する者はみな絶望する。醉うて鏡花を追ふ蝶と信じて水月に憧れる猿とを私は憫れまない。常に夢みることの出來た弟よ、私はお前の痛ましい死を傷むまい。計のある女の愛をさへ無上のものと信じたお前、お前こそは幸福を惠まれた人であつた。云云。

第四十七折

益春の生んだ子は男の子であつた。この生れながらに父を知らない子供は、母の喜びであり同時に悲しみであつた。益春は子供の笑ひ顏の上に屢 泪を落した。益春は喪があけても決して再び粧はない。しかし益春の美しさはそのために衰へることはなかつた。さうして未だ年若い益春に向つて再び夫を持つやうに誘ふ人は澤山あつた。その都度、益春はいつも身の傍にある子を示して「この子の爲めに」と答へた。さうしてその子はだんだん大きくなり、益春の悲しみも古曲のやうにふるくなつて行く。それは慣れては居るけれども奏でることに新らしい力で身に沁み徹る。さうして益春の志は挫けなかつた。こんな貞潔な妻を持つた夫は死後にも幸福がのこる、人人はさう言つて益春を讃歎し陳三を豔羨した。その陳三の墓――同時に五娘の墓――には苔が蒸して、相思子はやがて若木になり、成育した木になつた。その莢を成す枝は榮えた。その淡紅の花はこの墓を四阿のやうに覆うた。秋が來ると、朝に香華を供へる爲めに來る益春とその子との上に、莢から彈ぜた實が露雫のやうに落ちて來る。この紅豆はあの悲しい五娘の滴れた涙のやうに赤い。かうして益春のうへに月日が經つ、きびしくしかし樂しく、何枚かといふのに、彼の女の子供は早くから優れた智惠を示して益春に悲しい人の言葉をうれしく思ひ出させる……「後の世の中で一番えらい人になる子だ」

第四十八折

日と月とは人間の爲めに動くのではない。人間の禍福などには一向冷淡な日と月とはただ彼等自身の爲めに動いてゐるのかも知れない。さうして彼等自身でさへその行方を知らないために、恆に不斷の徃き來をつづけて同じ道をさ迷うてゐるのかも知れない。それらの事を我我は一切知らない。ただ我我は日と月とが東から來て西へ去るのを見る。さうしてこの同じことが果してどれだけ度度繰り返されるか、それを人間は何人も、どんな方法でも、數へ盡すことは出來ない。ただ人間の出來ることはその無限の徃來をつづける日と月との下で、それぞれに、さまざまな思ひで、刻刻に生きてゆくこと――乃至は刻刻に死んで行くことだけである。さうして、益春は彼の女の生甲斐としてその愛する子――死んだ人の生きて育つてゐる思ひ出をしつかりと守つた。この[illegible]男の子は生育するに從つてだんだん彼の父に

そつくりに見えるのも嬉しく悲しい。

第四十九折

（?）の子は母の姓を次いで洪氏を名乗つた。字は（?）、名は承疇である。後に萬暦の中ごろに進士になつた。この孝子の喜びと一緒に彼は氣のくづをれた母を失つて悲んだ。しかしその母はその子が「後に世の中で一番えらい人になる」ことを決して疑はないで死んだ。さう信じられた子は神宗、光宗、熹宗、思宗の四代に仕へた。國は神宗の世を最後の盛りにしてだんだんと衰へて行くのではないかと思はれる前兆があつた。光宗はたつた三十日、帝王であつた。熹宗は七年帝位に居られた。それから、思宗の世になつた。さうして洪承疇は薊遼總督であつた。

第五十折

思宗は、或る時、普通の人民の著物を著てこつそり宮殿から出た。さうしてそのころ評判のあつた或る易者をたづねた。天子が口を開かうとすると、この有名な易者は不機嫌さうに手でそれを制した。彼は占はれる人から一言も聞かないで占ふといふのが自慢であつた。易者はさまざまな方法で占つて見た上で先づ言つた。

「お前は國家の事を憂へて私のところへ來たのだらう」

そこで普通の民を装うてゐる若い天子は、この言葉の横柄な易者が人の心中を見抜く力のあるのに感心しながら氣輕に言つた――「さうだ。私は憂國の民だ。國内がどうも騒がしい。山西には賊が起つたと言ふことだ。それに満洲の方の軍兵がじりじりと都の方へ近づいてくるさうな。才能のある人間は國よりも自分の才能を愛してその才能を全うしようと皆山へ隠れる。國の難儀を救はうとする人は少い。見なれない光の星が出たとも言ふ。天子の御心になればさぞ御心配であらせられるだらう。さう思ふと我我まで國の前途が氣になるのだ」

「よろしい」と易者が言ふ。「國運は私が占つてやらう。さあ、今お前の思ひつく文字を言つて見るがいい」

「それでは」占つて貰ふ人は暫く考へてから答へた。「イウと言ふ字だ」

「憂國の憂か」易者は枯枝のやうな指で筆をとりながら言つた。

「いや、いや、友情の友だ」

易者は紙の上へ友と大きく書いた。さうして冷にひとり言を言つた。「なるほど、反の字が頭を出してゐるな」

「いや、いや、そのイウではなかつた」天子は慌てて打消した。「私のは、有無の有だ」

易者は二度目に紙の上へ有と大きく書いた。さうして冷にひとり言を言つた。「ふむ大明が半分無くなるのか」

「いや、いや、そのイウではなかつた」天子は慌てて打消した。「私の言ふのは干支の酉だ――來年は癸酉の年だから」

易者は三度目に紙の上に酉と大きく書いた。さうして冷にひとり言を言つた。「ふむ尊いお方が上にも下も……はて、これはどういふ事だらう」易者は筆を捨てて、上眼で占はれる人をじろりと見上げて言つた――

「お傍にしい事だ」

天子は、三つの文字が大きく書かれてある紙の上へ銀を一枚投げ出すと、蒼ざめた顔と顫へる聲とを隠す爲に何も言はずに急いで出て行かれた。かう呟き乍ら――「悪い冗談だ。つまらぬ洒落だ。――だが、どうも氣になる……」

第五十一折

方方で起つた流賊のなかで、最も勢力のあつたのは陝西の男で、或る大きな馬賊の頭の婿であつた。この男は李自成と言つた。政府では最初、彼等のことを癬疥のやうな病氣だ——困つたものだが、どう轉がつても命にかかはりはないと言つてゐた。それがいつの間にか盛んな勢力になつてゐて、癸酉の年には畿南、河北、湖廣のあたりへ侵し入つて來た。行く先き先きで火をつけたり物を掠めたりする。花婿を殺して花嫁を犯したりする。鳳陽を陷れた時には帝王の陵を發いて廟を焚き拂つた。陝西の地方は悉く彼等のものになつて仕舞つた。彼等は西南方から都へ押し寄せようとして居る。政府では今更にびつくりして陝山の兵を召して彼等の方へ差し向けた。洪承疇をその大將にした。——この間に北の方からゆつくりと攻め上つて來てゐた滿洲の軍兵は、國を名告るほどの勢力になつて、清と稱し號めた。この新しい國、清の天子はこのごろ自身で兵を引き連れて朝鮮の征伐をしてゐた。さうして洪承疇がやつと李自成を打拂つた頃には、清がもう都の間近まで攻入つてゐた。天子はもう一度、洪承疇に命令をして今度は清を伐たせた。天子は、今の世の中で一番えらい人はこの人だ」と思つて洪承疇を頼みにした。

第五十二折

大軍に逢ふと直ぐにちりぢりに分れて、それが去るとどこに隱れてゐたものか直ぐまた四方から集つて來る。これが李自成の軍隊の戰策であつた。洪承疇が清と戰ふ爲めに北へ行つた間に、復、河南で勢を盛り返した。そこで二人の王を殺して、その勢でふたたび都の方へ押し寄せて來る。李自成の軍のこの情勢を知つた時に、清と決戰をするために陣中にあつた洪承疇は氣が挫けた。——たとひ今ここで滿の大軍を征服することができたにしたところが、その間に殆んど守のない都が陷つたならば何にもならない。——寧ろ、この優れた軍勢を從へてゐる清に一たん降つて、仕方がなければ大明の半分を清に與へようとも、かうして國が全く亡びるよりは未だしもいい。全く——大明の半分を割くことを申し出て清と平和を締ばう。清のために負けよう。その代り清の援兵を得て流賊どもを平定しよう。そのうちには再び清と覇を爭ふ日月も來るであらう。これが洪承疇の苦しい考へであつた。さうして彼は清に降服した。洪承疇が敗れたといふ風聞が都に傳へられた時、天子は彼はきつと國の爲めに殉じたのであらうと信じた。さうしてこの人を失つたのは國が亡びたも同じことだと歎いた。天子は洪承疇の爲めに祭壇を十六壇も設けて、このえらい忠臣を弔うた。しかし、死を決してゐながらも未だ死ぬことの出來ない洪承疇は、清の軍勢を導いて都を援ける爲めに急いだ。けれども時は遲かつた。その間にもう李自成の軍が都を陷れてゐた。氣の弱い天子思宗は心が怪しくなつて玉座に近い、柳の樹に自ら縊れた——「お傷はしい事だ」十七年前にさう言つてじろりと彼を見入つたあの易者の冷たい眼の光におびえながら。

李自成は安西に居て自分で王を稱へて、この逆賊は國號を大順と呼んだ。

第五十三折

洪承疇はまだ死ぬことは出來なかつた。彼は彼をそれほどに信愛して居た天子が國に殉じたる

ことを知つて知らないふりをしてゐる、何故かといふに、彼は彼の天子の仇である李自成を討たなければならないからである。彼は清の大將の吳三桂のために大順を亡ぼす計をめぐらした。その謀によつて李自成は九宮山といふ山中へ身をもつて逃げ込まねばならなくなつた。この暴虐な逆賊の大將は村民たちから追擊された。さうしてこの大順國の王も遂に自分で縊れて死んだ。洪承疇は今こそもう命を捨てていいやうに思つた。而もやはり彼は死ぬことができなかつた――ちやうど、彼の母が夫のために命をすてることの容易なことを感じながら生きなければならなかつたやうに。洪承疇は李自成を討つために清の軍に從うてゐるうちに、心にもなく清の恩になつて來た。清の軍兵のために彼は天子の仇を報い得たのである。そればかりではない。清の順治帝は洪承疇を見て亂世には珍らしいえらい人だと思つた。さまざまに說いて洪承疇を清に仕へるやうに勸めた。この苦しい知遇をどうしても辭退できなくなつた時に、洪承疇は最後に言つた。「若し、私の願が聞いていただけるならば私は仕へませう」さうしてその願といふのは、國を開いたばかりで未だ少しも定まつて居ない清國の制度や法律を彼自身に定めさせて貰ひたい、と言ふのであつた。實際彼には軍事上の才能があつたやうに政治的の才能もあつた。さうして洪承疇は清に仕へた。――國の名は代つた。國を治めるものは代つた。しかし治められるところの民は、私をあれほど信愛して下すつた帝王の民と同一の民である。私は恥を忍んでこの先帝の民に仕へよう。この先帝の民の爲めに幸福な制度を設けよう。さう洪承疇は考へたからである。

第五十四折

洪承疇は日夜この新らしい仕事に喜んで勉めた。さうして彼は彼の耳に自づと這入つて來る彼に對するあらゆる非難を聞き流した。人人は言つた。「洪承疇は不忠の臣である。彼を寵愛された思宗は一途に彼が國に殉じたものと思ひ込まれて亡くなられた。思宗は彼が清に降つたといふことを聞かれた時には彼の生死などは一言も問はれずに、あれほど盛大に彼を弔はれた。その彼は平然と生きてゐた。しかも今敵國のために仕へてゐる。彼の母は貞節ある夫人であつた。さうして彼は無節の大夫である」――洪承疇はこの言葉を聞いて悟らなかつた。また敢て[illegible]とも努めなかつた。[illegible]を信じない人人に[illegible]見たところで何になら う。但、洪承疇はさすがに[illegible]つた。他人は自分の心事を思ひやつてくれないといふさびしさが堪へがたかつた。それは微弱な毒を溶かした苦い酒のやうに、日日に彼を衰へさせて行くのではないかとさへ感じられた。そのさびしさが彼を仕事に鞭つた。夜ふけて彼は彼の仕事の草案の筆を措きながら、目を自分の内側にむけて心を嚙むさびしさをつくづくと見守りながらひとり心に言つた。「自分はえらい人であるかどうかを自分で知らない。しかし、このさびしさは最もえらい人間が支拂ふ最も率の高い租稅であらう。喜んでこれが支拂はれるやうになれば人間は神仙である」年老いた彼は靜かに往事を思ひ出して母をなつかしむことが頻であつた。「母は私をどこまでも信じてゐてくれた。若し、今日母がゐてくれたならば、私の心持をわかつてはくれないまでも、私の言ふとほりを信じてくれたらうに。それにしても、よく私に、お前は後に世の中で一番えらい人になる子だと言つた私の母は、お前は後に世の中で一番さびしい人になる子だと何故言はなかつたらう。……お母さん。孤兒として他家に養はれ寡婦になつ

て私を育ててくれたお母さん。私のさびしいお母さん。私はどこまでもあなたの子だ」彼は心にある母の俤を呼び起して幼児の如く切なく寄り縋つた。

第五十五折

「どうぞ、私の星よ世の中で一番美しい娘を私の妻に授けて下さい。私の妻の腹に宿つて出來る私の男の子を世の中で一番えらい人にならせて下さい」さういふ願事を彼の星に祈つた陳三や、その陳三と死を偕にし墓を一つにした第一夫人――世の人に一番美しいと言はれた五娘や、陳三のえらい男の子を腹に宿した第二夫人――天の日で一番美しいと思はれた益春や、そのえらい男の子洪承疇や、その外のすべての彼等が生きてゐて、それぞれに笑ひ、嘆き、溜息をし、涙を流し、憤り、勝ち誇り、淋しきに堪へ、さて、死んで仕舞つてから、もう三百年以上になる。その間に清の國も亦明と同じやうに亡びた。ただ泉州に近い英内には、陳三の五落の家が晋江の岸に沿うて流水に影を映じながら、崩れさうになつてではあるが、今でもまだ殘つてゐる。――しかし、私はその家は見ない。私は去年旅をしてあの近くへは行つたが、泉州へはたうとう行かないのだから。

（大正十年三月作）

海邊の戀

こぼれ松葉をかきあつめ
をとめのごとき君なりき、
こぼれ松葉に火をはなち
わらべのごときわれなりき。
わらべとをとめよりそひぬ
ただたまゆらの火をかこみ、
うれしくふたり手をとりぬ。
かひなきことをただ夢み、
入り日のなかに立つけぶり
ありやなしやとただほのか、
海べのこひのはかなさは
こぼれ松葉の火なりけむ。

（『殉情詩集』より）

水邊月夜の歌

せつなき戀をするゆゑに
月かげさむく身にぞ沁む。
もののあはれを知るゆゑに
水のひかりぞなげかるる。
身をうたかたとおもふとも
うたかたならじわが思ひ。
げにいやしかるわれながら
うれひは清し、君ゆゑに。

（『殉情詩集』より）

後の日に

つれなかりせばなかなかに
そらにわすれて過ぎなまし、
そもいくたびしぼりけむ
たもとせつなしかのたもと。
せつなさわれにつもるとも
沾ちてはかわくものなれば
昨日のたもとにこと問はむ
濡るるやいかにけふもなほ

（『殉情詩集』より）

女誡扇綺譚

一　赤嵌城址

クッタウカン——字でかけば禿頭港。すべて禿頭といふのは、面白い言葉だが物事の行きづまりを意味する俗語だから、禿頭港とはやがて安平港の最も奥の港といふことであるらしい。臺南市の西端れで安平の廢港に接するあたりではあるが、さうして名前だけの說明を聞けばなるほどと思ふかも知れないが、その場所を事實目前に見た人は、寧ろ却つてそんなところに港と名づけてゐるのを訝しく感ずるに違ひない。それはただ低い濕つぽい蘆荻の多い泥沼に沿うた貧民窟みたやうなところで、しかも海からは殆んど一里も距つてゐる。沼を埋め立てた塵塚の臭ひが暑さに蒸せ返つて鼻をつく厭な場末で、そんなところに土着の臺灣人のせせこましい家が、不行儀に、それもぎつしりと立竝んでゐる。土人街のなかでもここらは最も用もない邊なのだが、私はその日、友人の世外民に誘はれるがままに、安平港の廢市を見物に行つてのかへり路を、世外民が參考のために持つて來た臺灣府古圖の導くがままに、ひよつくりこんなところへ來てゐた。

* * * * * *

人はよく荒廢の美を說く。又その概念だけなら私にもある。しかし私はまだそれを痛切に實感した事はなかつた。安平へ行つてみて私はやつとそれが判りかかつたやうな氣がした。そこにはさまで古くないとは言へ、さまざまの歴史がある。この島の主要な歴史と言へば、蘭人の壯圖、鄭成功の雄志、新しくはまた劉永福の野望の末路も皆この一港市に關聯してゐると言つても差支ないのだが、私はここでそれを說かうとも思はないし、また好古家で且詩人たる世外民なら知らないこと、私には出來さうもない。私が安平で荒廢の美に打たれたといふのは、又必ずしもその史的知識の爲めではないのである。だから誰でもいい、何も知らずにでもいい、ただ一度そこへ足を踏み込んでみさへすれば、そこの衰頽した市街は直ぐに目に映る。さうして若し心ある人ならば、そのなかから悵然たる美を感じさうなものだと思ふのである。

臺南から四十分ほどの間を、土か砂かになつたつもりでトロッコで運ばれなければならない。坦坦たる殆んど一直線の道の兩側は、安平魚の養魚場なのだが、見た目には、田圃ともつかず沼ともつかぬ海であつたものが埋まつてしまつた——といふより埋まりつつあるのだが、古圖によるともともと遠淺であつたものと見えて、名所圖繪式、この地圖に水牛に曳かせた車の輛が半分以上も水に漬つてゐるのは、このあたりの方角であらう。しかし今はただ、田圃のやうではあつても陸地には違ひない、さうしてそこの、變化もとりとめもない道をトロッコが滑走して行く。熱國のいつも青青とした草いきれのする場所でありながら、荒野のやうな印象のせゐか、思ひ出すと、草が枯れてゐたやうな氣持さへする。これが安平の情調の序曲である。

トロッコの着いたところから、むかし和蘭人が築いたといふ THE CASTLE ZEELANDIA 所謂

謂土人の赤嵌城を目あてに歩いて行く道では、目につく家といふ家は悉く荒れ果てたままの無住である。あまりふるくない以前に外國人が經營してゐた製糖會社の社宅であるが、その會社が解散すると同時に空屋になつてしまつた。何れも立派な煉瓦づくりの相當な構への洋館で、ちよつとした前栽さへ型ばかりは殘つてゐる。しかし砂ばかりの土には雜草もあまり蔓つてはゐない。その並び立つた空屋の窓といふ窓のガラスは、子供たちがいたづらに投げた石の爲めでもあらうか、破れて穴があいてないものはなく、その軒には巢でもつくつてゐるのか驚くほどたくさんな雀が、黑く集合して喋りつづけてゐる。

私たちは試みにその一軒のなかへ這入つてみた。内にはこなごなに散ばつて光つてゐるガラスの破片と壞れた窓枠とが塵埃に埋まつてゐるよりほかは何もなかつた。しかし二階で人の話聲がするので上つて行つてみると、そこのベランダに乞食ではないかと思へるやうな裝ひをした老人が、これでも使へるのだらうかと疑はれるぼろぼろになつた漁網をつくろつてゐる傍に、この爺の孫でもあるか、五つ六つの男の子がしきりにひとり言を喋りながら、手であたりの塵を掻き集めて遊んでゐたらしいのが、我我の足音に驚いて闖入者を見上げた。老漁夫も我我を怖れてゐるやうな目つきをした。彼等はどこか近所の者であらうが、暑さをこの廢屋の二階に避けてゐたのであらう。ともかくもこれほど立派な廢屋が軒を連ねて立つてゐる市街は、私にとつては空想も出來なかつた事實である。（この二三年後に臺灣の行政制度が變つて臺南の官衙でも急に増員する必要が生じた時、これらの安平の廢屋を一時、官舍にしたらよからうといふ說があつたが、尤もなことである。）

赤嵌城址に登つて見た。ただ名ばかりが殘つてゐるので、コンクリートで築かれた古い礎のあとがあるとはいふけれども、どれがどれだかさすがの世外民もそれを知らなかつた。今は稅關俱樂部の一部分になつてゐる小高い丘の上である　私の友、世外民はその丘の上で例の古圖を取り出しながら、所謂安平港外の七鯤身のあとを指さし、また古書に見えてゐるといふ鬼工奇絕と評せられる赤嵌城の建築などに就て詳しく說明をしてくれたものであるが、私は生憎と皆忘れてしまつた。さうして私の驚いたことといふのは、むかし安平の内港と稱したところのものは、今は全く埋沒してしまつてゐるのだといふだけの事であつた——全くあまり單純すぎた話ではあるが。事實、私は歷史なんてものにはてんで興味がないほど若かつた。さうしてもし世外民の影響がなかつたならば、安平などといふ愚にもつかないところへ來てみるやうな心掛さへなかつたらう。さういふ程度の私だから、同じやうな若い身空で世外民がしきりと過去を述べ立てて咏嘆めいた口をきくのを、さすがに支那人の血をうけた詩人は違つたものだ位にしか思つてゐなかつたのである。そのやうな私ではあり、またいくら蘭人壯圖の址と言つたところで、その古を偲ぶよすがになるやうなものとても見當らないのだから一向仕方がなかつたけれども、それでもその丘の眺望そのものは人の情感を唆らずにはゐないものであつた。單に景色としてみても私はあれほど荒涼たる自然がさう澤山あらうとは思はない。私にもし、エドガア・アラン・ポオの筆力があつたとしたら、私は恐らく、この景を描き出して、彼のアッシャ家の崩壞の冒頭に對抗することが出來るだらうに。

私の目の前に展がつたのは一面の泥の海であつた。黄ばんだ褐色をして、それが、かすかなせゝこましい波の襞を無數にあとからあとから

と繰返して來る、十重二十重といふ言葉はあるが、あのやうに重ねがさねに打ち返す浪を描く言葉は我我の語彙にはないであらう。その浪には水平線までつづいて、それがみな一樣に我我の立つてゐる方向へ押寄せて來るのである。昔は赤嵌城の眞下まで海であつたといふが、今はこの丘からまだ二三町も海濱がある。その遠さの爲めに浪の音も聞えない程である。それほどに安平の外港も埋まつてしまつたけれども、しかしその無限に重なりつづく濁浪は生温い風と極度の遠淺の砂とに煽られて、今にも丘の脚下まで押寄せて來るやうに感ぜられる。その濁り切つた浪の面には、熱帶の正午に近い太陽さへ、その光を反射させることが出來ないと見える。光のないこの奇怪な海――といふよりも水の枯野原の眞中に、無邊際に重りつづく浪と間斷なく鬪ひながら一葉の舢舨が、何を目的にか、ひたすらに沖へ沖へと急いでゐる。

白く灼けた眞晝の下、光を全く吸ひ込んでしまつてゐる海。水平線まで重なり重なる小さな浪頭。洪水を思はせるその色。翩翻と漂うてゐる小舟。激しい活動的な景色のなかに闃として何の物音もひびかない。時折にマラリヤ患者の息吹のやうに蒸れたのろい微風が動いて來る。それらすべてが一種內面的な風景を形成して、象徵めいて、惡夢のやうな不氣味さをさへ私に與へたのである。いや、形容だけではない、この景色に接してから後、私は亂醉の後の日などに、ここによく似た殺風景な海濱を惡夢に見て怯かされたことが二三度もあつた。――このやうな海を私がしばらく見入つてゐる間、世外民もまた私と同じやうな感銘を持つたかも知れない、――このよく喋る男もたうとう押默つてしまつてゐた。私は目を低く垂れて思はず溜息を洩した。尤も、多少は感慨のせゐであつたかも知れないが、大部分は炎天の暑さに喘いだのである。今更だが、かういふ暑さは蝙蝠傘などのかげで防げるものではない。

「ウ、ウ、ウ、ウ――」

不意に微かに、たとへばこの景色全體が呻くやうな音が響き渡つた、見ると、水平線の上に一隻の蒸汽船が黑く、小さく、その煙筒や檣などが僅に遙かに見える程の遠さに浮んでゐた。どこか沿岸航路の船らしい。さうしてさつきから浪に揉まれてゐる舢舨はそれの艀で、間もなく本船の來ることを豫想して急いでゐたものらしい。

「あの蒸汽はどこへ着くのだい」

私が世外民に尋ねると、我我の案內について來たトロッコ運搬夫が代つて答へをした――

「もう着いてゐる。今の汽笛は着いた合圖です」

「あそこへか？――あんな遠くへか」

「さうです。あれより內へは這入れません」

私はもう一ぺん沖の方を念のために見てから呟いた――

「フム、これが港か！」

「さうだ！」世外民は私の言葉に應じた。「港だ。昔は、昔は立派な港だつた！」

「昔は……」私も思はず無意味に繰返した。それが多少感情的でいやだつたと氣がついた時、私は輕く虛無的に言ひ直した。「昔は……か」

丘を下りて我我の出たところは、もと來た路ではなかつた。ここは比較的舊い町筋であると見えて、一たいが古びてゐた。あたりの支那風の家屋はみんな貧しい漁夫などのものと見えて、あのヱランダのある二階建の堂堂たる廢屋にくらべるまでもなく、小さくて毀れであつた。さうしてもともと所謂鯤身たる出島の一つであつたと見えて、地質も自から變つてゐた。砂ではなくもつと細かい、歩く度に足もとからぱつと塵が舞ひ立つ白茶けた土であつた。但、來たときと一向變らない事は、そのあたりで私は全く

人間のかげを見かけなかつた事である。通筋の家家は必ずしも皆空屋でもないであらうのに、どこの門口にも出入する人はなく、また話聲さへ洩れなかつた。私たちが町を一巡した間に逢つた人間といふのはただあの廢屋のヱランダにゐた老漁夫と小兒とだけである。行人に出逢ふやうなことなどは一度もなかつた。深夜の街とてもこれほどに人氣が絶えてゐることはないと言ひたい。しかも眩しい太陽が照りつけてゐるのだから、さびしさは一種別樣の深さを帶びてゐた。我我は默默と歩いた。不意にあたりの家蹟のどこかから、日ざかりのつれづれを慰めようとでもいふのか、鼓と呼ばれてゐる胡弓をならし出した者があつた。

「月下の吹笛よりも更に悲しい」

詩人世外民は、早くも耳にとめて私にさう言ふのであつた。月下の吹笛を聯想するところに彼の例のマンネリズムとセンチメンタリズムとがあるが、でも彼の感じ方には賛成していい。

私たちは再び養魚場の土堤の路をトロッコで歸つたが、それの歸り着いたところ、臺南市の西郊が、私のこれから言はうとする禿頭港なのである。安平見物を完うするためにこのあたりをも一巡しようと世外民が言ひ出した時、時刻が過ぎてしまつてひどく空腹を覺えてゐながらも私が別に、もう澤山だと言はなかつたところを見ても、私がこの半日のうちに安平に對して多少の興味を持つやうになつてゐたことは判るだらう。

しかしトロッコから下りて一町とは歩かないうちに、私は禿頭港などは蛇足だつたと、思ひ始めたのである。ただ水溜の多い、不潔な入組んだ場末といふより外には、一向何の奇もありさうには見えなかつた。

* * * * * *

二 禿頭港の廢屋

道を左に折れると私たちはまた泥水のあるところへ出た。片側町で、路に沿うたところには石垣があつて、その垣の向うから大きな榕樹が枝を路まで突き出してゐた。私たちはその樹かげへぐつたりして立ちどまつた。上衣を脱いで煙草へ火をつけて、さて改めてあたりを見まはすと、今出て來たこの路は、今までのせせつこましい貧民區よりはよほど町らしかつた。現に私たちが背を倚せてゐる石垣も古くこそはなつてゐるけれども相當な家でなければ、このあたりでこれほどの石垣を外圍ひにしたのはあまり見かけない。さう思つてあたりを見渡すと、この一廓は非常にふんだんに石を用ゐてゐる。みな古色を帶びてそれ故目立たないけれども、このあたりが今まで歩いて來たすべての場所とその氣持が全く違つて、汚いながらにも妙に裕かに感ぜられるといふのも、どうやら石が澤山に用ゐてあることがその理由であるらしい。

この町筋——と云つても一町足らずで盡きてしまふが、この片側町の私たちの立つてゐる方は、それぞれに石圍ひをした五六軒の住宅であるが、その別の側、即ち私たちが向つて立つた前方は例によつて惡臭を發する泥水である。黑い土の上には少しばかりの水が漂うてゐて、淺いところには泥を捏り歩きながら豚が五六疋遊んでゐるし、稍深さうなところには油のやうなどろどろの水に波紋を畫きながら家鴨が群れて浮んでゐる。この水溜の普通のものと違ふところは、これは濠の底に涸れ殘つたものであることである。大きな切石がこの泥池のぐるりを御丁寧に取圍んでゐる。しかも幅は七八間もあり、長さはと言へばこの町全體に沿うて

ゐる。深さは少くも十尺はある。この濠の向うには汀からすぐに立つた高い石圍ひがある。長い石垣のちやうど中ほどがすつかり瓦解してしまつてゐる。いや悉く崩れたのではないらしい。もともとその部分がわざと石垣をしてなかつたらしい。その角であつた一角がくづれたのに違ひない。落ち崩れた石が幾塊か亂れ重なつて、埋め殘された角角を泥の中から現してゐる。その大きな石と言ひ壕溝と言ひ、恰も小規模な古城の廢墟を見るやうな感じである。いや、事實、城なのかも知れないのだ――崩れた石垣の向うのはづれに近く、一本の龍眼肉の大樹が黑いまでにまるく、青空へ枝を茂らせてゐて、そのかげに灰白色の高い建物があるのは、ごく小型でこそはあれ、どうしたつて銃樓でなければならない。圓い建物でその平な屋根のふちには規則正しい凹凸をした砦があり、その下にはまた眞四角な銃眼窓がある。

「君！」

私は、またしても古圖をひらいてゐる世外民の肩をゆすぶつて彼の注意を呼ぶと同時に、今發見したものを指さした――

「ね、何だらう、あれは？」

さう言つて私は步き出した、その小さな樓の砦の方へ。――屋敷のなかには、氣がつくとほかにも屋根が見える。それの長さで家は大きな構だといふことがわかる。その屋敷を私は見たいと思つた。石圍ひの崩れたところからきつと見えると思つた。何でもいい、少しは變つたものを見つけなければ、禿頭港はあまり忌忌しすぎる。

石垣のとぎれた前まで來ると、それを通して案の定、家がしかも的面に見えた。いや、偶然にさうだつたのではない。この家はさう見るやうな意向によつて造られてゐたのである。また石圍ひの中絶してゐるのにやはりただ崩れ果てたのではなく、もとからそこが特にあけてあつた跡がある。水門としてであらう。何故かといふに濠はずつとこの屋敷の庭の中まで喰入つてゐて、崩れた石圍ひの彼方も亦、正しい長方形の小さい濠である。十艘の舢舨を並べて繋ぐだけの廣さは確にある。さうしてその汀に下りるために、そこには正面に石段が三級ある。しかもその水は涸き切つてしまつて、露はな底から石段まではどう見ても七尺以上の高さがある。――もしこの石段にすれすれになるほど水があつたならば、今は鵞と家鴨との遊び場所であるこの大きな空しい濠も一面に水になるであらう。それにしてもこれ程の濠を周圍に、内と外とに築いた家は、その正面からの外觀は、三つの棟によつて凹字形をしてゐる。凹字形の濠に對して、それに沿うて建てられてゐる。正面に長く展がつた軒は五間もあり、またその左右に翼をなして切妻を見せてゐる出屋の屋根は各々四間はあらう。それが總て二階なのである。――一たいが小造りな平家を幾つも並べて建てる習慣のある支那住宅の原則から見て、これは甚だ大きな住居と言へるであらう。私はくたびれた足を休める意味でしやがんだ序に、土の上へこの家の見取圖をかき、それから目分量で測つた間數によつて、この建物は延坪百五十坪は優にあると計算した。一たい私は必要な是非ともしなければならない事に對してはこの上なくづぼらなくせに、無用なことにかけては妙に熱中する性癖が、その頃最もひどかつた。

「何をしてゐるんだい？」

世外民の聲がして、彼は私のうしろに突立つてゐた。私は何故かいたづらを見つけられた小兒のやうにばつの惡いのを感じたので、立つて土の上の圖線を足で踏みにじりながら、

「何でもない……。――大きな家だね」

「さう。やつぱり廢屋だね」

彼から言はれるまでもなく私もそれは看て取つてゐた。理由は何もないが、誰の目に見てもあまりに荒れ果ててゐる。澤山の窓は殘らずしまつてゐるが、さうでないものは戸そのものがもう朽ちて、なくなつてしまつたに相違ない。

「全く豪華な家だな。二階の亞字欄を見給へ。實に細かな細工だ。またあの壁をごらん。あの家は裸の煉瓦造りではないのだ。美しい色ですつかり化粧してゐる。一帶に淡い紅色の漆喰で塗つてある。そのぐるりはまたくつきりと空色のほそい輪廓だらう。色が褪せて白つちやけてしまつてゐるところが、却つて夢幻的ではないか。走馬樓の軒下の雨に打たれないあたりには、まだ色彩がほんのりと殘つてゐる」

私が延坪を考へてゐる間に、同じ家に就て世外民には彼の觀方があつたのだ。彼の注意によつて私はもう一ぺん仔細に眺め出した。なるほど、二階の走馬樓――ヱランダの奧の壁には、淡いながらに鮮かな色がしつとり、時代を帶びてゐた。事實この廢屋は見てゐるほど、その陰影から素晴らしい豪華が滾滾と湧き出して來るのを感じた。たとへばその礎である。普通土間でなかに住んでゐる支那人の家は、その礎は一般にごく低い、地面よりただ一見た け高く、つくられてゐる。それだのに今我我の目の前にあるこの廢屋の礎は、高さ三尺ぐらゐはあり、やはり見事に揃つた切石で積み疊んであつた。もつと注意すると、水門の突當りにあたる場所には、その汀に三級の石段があることはもう知つてゐるが、その奧の家の高い礎にもやはり二三級の石段がある。その間口二間ほどの石段の兩側に、二本の圓柱があつて、それが二階の走馬樓を支へてゐるのだが、この圓柱は、……どうも少し遠すぎてはつきりとはわからないけれども、普通の外の柱よりも壯麗である。上の方には何やらごちやごちやと彫刻でもしてあるらしい。その根元にあたるあたり、地上にはやはり石の細工で出來た大きな水盤らしいのが、左右相對をして据ゑつけてある。――これらの事物がこの正面を特別に堂堂たるものにしてゐるのが私の注意を惹いた。私には、そこがこの家の玄關口ではないかと思はれて來た。

そこで私は自分の疑問を世外民に話した――

「このうちは、君、ここが正面、――玄關だらうかね」

「さうだらうよ」

「濠の方に向いて？」

「濠？――この港へ面してね」

世外民の「港」といふ一言が自分をハッと思はせた。さうして私は口のなかで禿頭港と呼んでみた。私は禿頭港を見に來てゐながら、ここが港であつたことは、いつの間にやらつい忘却してゐたのである。一つには私は、この目の前の數寄な廢屋に見とれてゐたのと、もう一つにはあたりの變遷にどこにも海のやうな、港のやうな名殘を搜し出すことが出來なかつたからである。この點に於ては世外民は、殊に私とは異つてゐる。彼はこの港と興亡を共にした種族でこの土地にとつては私のやうな無關心者ではなく、またそんな理窟よりも彼は今のさつき古圖を披いてしみじみと見入つてゐるうちに、このあたりの往時の有樣を腦裡に描いてゐたのであらう。「港」の一語は私に對して一種靈感的なものであつた。今まで死んでゐたこの廢屋がやつと靈を得たのを私は感じた。泥水の濠ではないのだ。この廢渠こそむかし、朝夕の滿潮があの石段をひたひたと浸した。走馬樓はきららかに波の光る港に面して展かれてあつた。さうして濠を玄關にしてこの家は在つたのか。――してみれば、誰が住する家だかは知らないけれども、この家こそ盛時の安平の絶好な見本で

はなかつたか。私はこの家の大きさと古さと美しさとだけを見て、その意味を今まで全く氣づかずにゐたのだ。

今まで氣つかなかつただけに、私の興味と好奇とが相縺れて一時に昂つた。

「這入つてみようぢやないか。——誰も住んではゐないのだらう」私は急込んでさう言つたものの、濠を距てまた高い石闌ひを繞してゐるこの屋敷へ、はどこから這入れるのだか、ちよつと見當がつかなかつた——道ばたの廢屋なら、さつき安平でやつたやうについ、つかつかと這入り込んでみたいのだが。後に考へ合せた事だが、入口が何處にわからないといふこの同じ理由が、この廢屋を、その情趣の上でも事實の上でも、陰氣な別天地として保存するのに有力であつたのであらう。

その家のなかへ這入つてみたいといふ考へが、世外民に同感でない筈はない。世外民はい、い、きよろきよろとあたりを見廻してゐたが、我我が背をよせて立つてゐた石闌ひの奥に、家の日かげに臺灣人の老婆がひとり、棕櫚の葉の團扇に風を求めて小さな木の椅子に腰かけてゐるのを彼は見つけた。彼は直ぐにそこへ歩いて行つて、何か話をしてゐた。向側の廢屋を指さしたりしてゐる樣子で、そのふたりの話の題目はおのづと知れる。

世外民はすぐに私の方へ歸つて來た。「わかつたよ、君。あの道を行つて」彼は言ひながら濠のわきにある道を指さして「向うに裏門があるさうだ。少し入組んでゐるやうだが、行けば解るとさ。——やつぱり廢屋だ。もう永いこと誰も住んでゐないさうだ。もとは沈といふ臺灣南部では第一の富豪の邸だつたのださうだ。立派な筈さ」

話しながら私たちはその裏門を捜した。世外民が不確な聽き方をして來てゐたので、私たちはちよつとまごついた。こせこせした家の間へ入り込んでしまつた。尋ねようにもあたりに人は見當らなかつた。このあたりは割に繁華なところらしいのだが、人氣のないのは、今が午後二時頃の日盛りで、彼等の風習でこの時刻には大抵の人間が午睡を貪つてゐるのである。私たちは仕方なしにいい加減に歩いたが、もともと近いところまで來てゐた事ではあり、また目ざす家は聳えてゐたから直ぐわかつた。但、その家はあの濠のあちらから見た時には、ただ一つの高樓であつたが、裏へ來て見ると、その樓の後には低い屋根が二三重もつながつてゐた。所謂五落の家といふのはこんなのであらうが、た家族の住居だといふことが一層はつきりすると同時に、あの正面の二階建が主要な部屋だといふことは更に確かだ。私たちは他の場所よりも、あの走馬樓のある二階や評判のあつた玄關が第一に見たかつた。それ故、私たちは裏門を入るとすぐに、低い建物はその外側を迴つて、表へ出た。

門柱はやはり石造りであつた。遠くから、上部にごたやごたやあると見たものは果して彫刻で、二本の柱にもそこに蟠つてゐる龍を彫つたものであつたが、一つは上に昇つてゐたし、一つは下に降りようとしてゐた。雨に打たれない部分の凹みのあたりには、それを彩つた朱や金が黒みながらもくつきりと殘つてゐた。高さから言つて模樣の部分が多すぎて、全體として柱が低く感ぜられたし、また其の他の部分にくらべて多少古風で莊重すぎるやうに私は思つた。しかし私と世外民とは、この二つの柱をてんでに撫でて見ながら、この家が外見よりも、ここに來て見れば立ちまさりして立派なのを知つた。細部が自と目についたからである。尤も、もし私に眞の美術的見識があつたならば、たかが植民地の暴富者の低俗な趣味を一笑つたか

も知れないが、それにしても、風雨に曝されて物毎にさびれてゐる事が厭味と野卑とを救ひ、それにやつとその一部分だけが殘されてあるといふことは却つて人に空想の自由をも與へたし、また哀れむべきさまざまな不調和を見出すより前にただその異國情緒を先づ喜ぶといふこともあり得る。況んや、私は美的鑑識にかけては單なるイカモノ喰ひなことは自ら心得てゐる。

細長い石を網代に組み竝べた床の緣に幅四尺ぐらゐ、その上が二階の走馬樓である。私たちはそこへ上つてみたいのだ。觀音開きになつた玄關の木扉は、一枚はもう毀れて外れてしまつてゐた。殘つてゐる扉に手をかけて、私は部屋のなかを覗いた。——二階へ上る階段がどこにあるだらうかと思つて。支那家屋に住み慣れてゐる世外民には大たいの見當が判ると見えて、彼はすぐつかつかと二三歩廣間のなかへ歩み込んだ、

「××××、××××!」

不意にその時、二階から聲がした。低いが透きとほるやうな聲であつた。誰も居ないと思つてゐた折から、ことにそれが私のそこに這入らうとする瞬間であつただけに、その呼吸が私をひどく不意打ちした。ことに私には判らない言葉で、だから鳥の叫ぶやうな聲に思へたのは一層へんであつた。思ひがけなかつたのは、しかし、私ひとりではない。世外民も踏み込んだ足をぴいと留めて、疑ふやうに二階の方を見上げた。それから彼は答へるが如くまた、問ふが如く叫んだ——

「××!?」

「××!?」

——世外民の聲は、廣間のなかで反響して鳴つた。世外民と私とは互に顏を見合せながら再び二階からの聲を待つたけれども、聲はそれつきり、もう何もなかつた。世外民は足音を竊んで私のところへ出て來た。

「二階から何か言つたらう」

「うん」

「人が住んでゐるんだね」

私たちは聲をしのばせてこれだけの事を言ふと、這入つてくる時とは大へん變つた歩調で——つまり遠慮がちに、默つて裏門から出た。しばらく沈默したが出てしまつてからやつと私は言つた。

「女の聲だつたね。一たい何を言つたのだい? はつきり聞えたのに何だかわからなかつた」

「さうだらう。あれや泉州人の言葉だものね」

普通に、この島で全く廣く用ゐられるのは廈門の言葉で、それならば私も三年ここにゐる間に多少覺えてゐた——尤も今は大部分忘れたが。泉州の言葉は無論私に解らう筈はなかつたのである。

「で、何と言つたの——泉州言葉で」

「さ、僕にもはつきり解らないが、『どうしたの? なぜもつと早くいらつしやらない。……』——と、何だか……」

「へえ? そんな事かい。で、君は何と言つたの」

「いや、わからないから、もう一度聞き返しただけだ」

私たちはきよとんとしたまま、疲勞と不幸と空腹とをごつちやに感じながら、自然の筋道として再び先刻の濠に沿うた道に出て來た。ふと先方を見渡すと、自分たちが先刻そこから初めてあの廢屋を注視したその同じ場所に、老婆がひとり立つて、ぢつと我我がしたと同じやうに濠を越してあの廢屋をもの珍しげに見入つてゐるのであつた。それが、近づくに從つて、今のさつき世外民に裏門への道を敎へた同じ老婆だといふことが分つた。

「お婆さん」その前まで來た時に世外民は無愛想に呼びかけた。「嘘を教へてくれましたね」

「道はわかりませんでしたか」

「いいや。――でも、人が住んでゐるぢやありませんか」

「人が？ へえ？ どんな人が？ 見ましたか？」

この老婆には、我我も意外に思ふほど熱心な目つきで私たちの返事を待つらしい。

「見やしませんよ。這入つて行かうとしたら二階から聲をかけられたのさ」

「どんな聲？ 女ですか？」

「女だよ」

「泉州言葉で？」

「さうだ！ どうして？」

「まあ！ 何と言つたのです!?」

「よくわからないのだが、『なぜもつと早く來ないのだ？』と言つたと思ふのです」

「本當ですか？ 本當ですか！ 本當に、貴方がた、お聞きになつたのですか！ 泉州言葉で、『なぜもつと早く來ないのだ』つて!?」

「おお！」

臺灣人の古い人には男にも女にも、歐洲人などと同じく演劇的な誇張の巧みな表情術がある。その老婆は今それを見せてゐるが、彼女のそれはただの身振りではなく、眞情が溢れ出てゐる。恐怖に似た目つきになり、氣のせゐか顏色まで青くなつた。この突然な變化が寧ろ私たちの方を不氣味にした位である。彼女はその感動が少し鎭まるのを待ちでもするやうに沈默して、しかし私たちに注いだ凝視をつづけながら、最後に言つた――

「早く緣起直しをしておいでなさい。――貴方がたは、貴方がたは死靈の聲を聞いたのです！」

三　戰慄

老婆は改めてやつと語り出した、初めはひとり言めいた口調で……

「……さういふ噂は長いこと聞いてはゐました。けれどもその聲を本當に、自分が本當に聞いたといふ人を――貴方がたのやうな人を見るのは初めてです。若い男の人たちは、一たいそこへ近づいてはいけなかつたのです。貴方がたは最初、私にその裏口をおききになつた時に、私はほんたうはお留めしたいと思つたのですが、それには長い話があるし、また昔ものが何をいふかとお笑ひになると思つたものですから……。それに今はもう月日も經つたことではあり、私もまさかそんなことがあらうと信じなかつたものだから……。でも、私は何か悪い事が起らねばいいと氣がかりになつて、實は貴方がたの樣子をこちらから見守つてゐたところです。――あれは昔から幽靈屋敷だといふので、この邊では誰も近づく人のなかつたところなのです。――ごらんなさい。あそこの大きな龍眼肉の樹には見事な實が鈴生りにみのるのですが、それだつて採りに行く人もない程です……」

彼女は向うに見える大樹を指さし、自とその下の銃樓が目についたのであらう――

「昔はあの家は、海賊が覘つて來るといふので、あの櫓の上に毎晩鐵砲をもつた不寢番が立つた程の金持でした。北方の林に對抗して南方の沈と言へば、誰ひとり知らぬ人はなかつたのです。いいえ、まだつい六十年にもならぬぐらゐの事です。大きな戎克船を五十艘も持つて、泉州や漳州や福州はもとより廣東の方まで取引をしたといふ大商人で船問屋を兼ねてゐました。『安平港の沈か、沈の安平港か』とみんな唄つたものです。――御存じのとほりそのころの安平港はまだ立派な港で、そのなかでも禿頭港と言へば安平と臺南の市街とのつづくところで、港内でも第一の船着きでした。これほど

賑やかなところは臺南にもなかつた程だといひます。——沈は本當に安平港の主だつたと見える。——沈家が沒落すると一緒に、安平港は急に火が消えたやうになりました。沈のゐない安平港へは用がないと言つて來なくなつた船が澤山あるさうです。それに海はだんだん淺くなるばかりで、しかもいつの間にか氣がついた頃にはすつかり埋まつてゐたのですよ。この急な變り方までが、まるで沈家にそつくりだと、今もよくみんなして年寄たちは話し合ひますよ。……沈の家ですか？ それがまた不思議なほど急に、一度に、唯の一夏の、しかも只の一晩のうちに急に沒落したのです。百萬長者が目を開けて見ると乞食になつてゐたのです。夢でもかうは急に變るまい。他人事ながら考へれば人間が味氣なくなる——と、家の父は、この話が出るとよくさう言ひました。何でも沈の家ではその時、盛りの絶頂だつたのです。今の普請もつい其の三四年前に出來上つたばかりで、その普請がまた大したもので、石でも木でもみんな漳州や泉州から運んだので、五十艘の持船がみんな、その爲めに二度づつ、それはかりに通うたといふ話ですよ。それといふのも沈家には、この子の爲めなら、父親をも目がないといふ可愛い、ひとり娘があつて、それの聟取りの用意にこんな大がかりな普請をしたものださうです。それに美しい娘だつたさうです——私が見た時には、もう四十ぐらゐになつてもゐたし、落ぶれてへんになつてはゐましたが、それでもさう聞けばなるほどと思ふやうなところはありました。……」

「そんなにまた、急に、どうして沈の家が沒落したのです？」世外民は、性急に話の重大な點をとらへてたづねた。

「ごめんなさい。私は年寄で話が下手で——。

聞いてゐるうちに解つて來たが、この老婆は上品な中流の老婦人であつた。「恐ろしい海の颶風だつたのです。陸でも崩れた家が澤山あつたさうです。それはさうでせう。——ごらんなさい、あの沈の家の水門の石垣でさへあの角が吹き崩されたのださうです。さうしてそれを直すことさへもう出來なかつたので、今もそのままに殘つてゐるのですが、夜が明けてみてその石垣——そのころはまだ築いたばかりの新しい石垣の、あんな大きな石が崩れ落ちてゐるのを見て、沈の主人は心配さうにそれを見てゐたさうです。運の惡い事に、その晩、宵のうちは靜かな滿月の夜でもあつたさうだし、沈の五十艘の船はみんな海に出てゐたのださうです。沈の主人は——五十位の人だつたさうですが、崩れた石垣を見るにつけても、海に出てゐた持船が心配だつたのでせう。船の便りは容易に知れなかつたさうですが、五日經つても十日經つても歸る船はなかつたさうです。ただ人間だけが、それも船出した時の十分の一ぐらゐの人數がぽつぽつと病み呆けて歸つて來て、それぞれに難船の話を傳へただけでした。無事に歸つた船は只の一艘もなかつたさうです。尤も、人の噂では、港にゐて颶風に出會はなかつた船も三艘や五艘はあつたに相違ないが、友船が本當に難船したことから惡企みを思ひついて、自分達の船も難船して自分は死んだやうな樣をして、船も荷物も横領したまま遠くへ行つてしまつて歸つて來なかつたものも、どうやらあるらしいと言ひます。現に何處とかの港で、死んだ筈の何の誰に逢つたの、名前も色々とこそ變つてゐたが沈の船の型とそつくりのものを廈門で見かけたなどと、言ふ人もあつたさうです。何にしても一緒に荷物を積み込んだ大船が五十艘歸つて來なかつたのです。その頃ではどんなだつたか憫るではありませんか。なかには沈自身の荷物ではないものも十分以上あつて、その主

は、みんな沈の家へ申し合せて押かけて、その償ひを持って行ったさうです。普請や娘の支度などで金を費ったあとではあり、それに派手な人で前から大きかったたけに、手許には案外金も銀も少かったと言ひます。人の心といふものは怖ろしいもので、かうなって仕舞ふと、取るものは殘らず取立てても、拂って貰へる可きものは何も取れない。それぱかりか殆んど日取まで定ってゐた娘の養子は斷って來たさうです。もともと金持の沈と緣組をする筈で貧乏人の沈と縁を結ぶつもりではなかったからでせう。……おお、あそこに、いい日蔭が出來ました。あそこへ行ってまあ腰でもお掛けなさい―

老婆は、ちやうど前栽に一本だけあった榕樹が、少し西に傾いた日ざしによってやや廣い影を造ったのを見つけて、さう言ひながら自分がさきに立って小さな足でよちよちと歩いた。今まで別に氣がつかずにゐたが、この老婆の家といふのも大したことはないが一とほりの家で、昔の繁華の地に殘ってゐるだけの事はあった。樹かげで老婆は更に話しつづけた。彼女はよほど話好きと見えて、また上手でもある。ただ小さい聲で早口で、それが私にとっては外國語だけに聽きとりにくい場合や、判らない言葉などもある。私は後に世間話にも改めて聞き返したりしたが、更に老婆の說きつづけたことは次のやうである―

前述のやうな具合で沈の家が沒落し出すと、それが緒で主人の沈は病氣になりそれが間もなく死ぬと同時に、緣談の破れたことを悲しんでゐた娘は重なる悲しい歎きのために[illegible]としてゐた擧句、たうとう狂氣にしてしまふ。その娘を不憫に思ってゐるうちにその妻も病氣で死んでしまふ。全く、作り話のやうに、不運は鎖になってつづいた。

一たいこの沈といふ家に就て世間ではいろいろなことを言ふ。

* * * * *

その四代ほど前といふのは、何でも泉州から臺灣中部の胡蘆墩の附近へ來た人で、もともと多少の資産はあったさうだが、一代のうちにそれほどの大富家になったに就ては、何かにつけて隨分と非常なやり口があったらしい。盜掠か事實かは知らないけれどもこんなことを言ふ―例へば、或時の如き隣接した四邊の田畑の境界標を、その收穫が近づいたころを見計つて、夜のうちに[illegible]遠くまで移して置く。その石標を拔いて手下の者が何人も一晩のうちに建てなほして置くのだ。次の日になると平氣な顏をして、その他人の田畑へ[illegible]な多人數で一時に[illegible]にかかった。所有者達か驚いて抗議をすると、その石標を證據に逆に公事を起した。その前にはずっと以前から、その道の役人には十分結託してゐたから、公事に負ける筈はなかった。[illegible]のうちに[illegible]になり、そこのところの役人[illegible]って彼の顏の動くままに動かなければならないやうになった、悪い例を一つこしらへた[illegible]であった。一たいこの頃、沈は兄弟で[illegible]なことをしてゐたのだが、兄の方は[illegible]港の役所で役人と口論の末に、役人を斬らうとして捕つて殺されてしまった。これだっても、どうやら弟の沈が仕組んで兄を殺させたのだといふ噂さへある程で、兄弟のうちでも弟の方に一層悪辣がある。實際、兄の方はいくらかはよかつたらしい。ある時、彼等のいつもの遣口で、[illegible]畑へ[illegible]を入れようとしたのだ。その時にはその畑に持主が這入ってゐるのを眼の前に見ながら最も圖太くやりだしたのだ。といふのはその

畑の持主といふのは七十程の寡婦だつた。だから、何の怖れることもなかつたのだ。しかし第一の犂をその畑に入れようとすると、場にあつたこの年とつた女は、急に走つて來て、その犂の前の地面へ小さな體を投け出した。

「助けて下さい。これは私の命なのです。——私の夫と息子とがむかし汗を流した土地です。今は私がかうして少しばかりの自分の食ひ代を作り出す土地です。——この土地を取り上げる程なら、この老ぼれの命をとつて下さい！」

沈の手下に働くだけに悪い者どもばかりではあつたけれども、さすがに犂をとめたまま、土をさへ突かうとする者もなかつた。男どもは歸つてこの事を兄の沈に話すと、彼は苦笑をして「仕方がない」と答へたさうだ。弟の沈はその時は何も知らなかつた。しかし、その後二三日して畑を見廻りに來て、馬上から見渡すと彼等の畑のなかにひどく荒れてゐるところがあるので作男どもを叱つた。するとそれが例の寡婦の畑だと判つて、初めてその事情を聞いた。なるほど、今も、ひとり老ぼれの婆さんがそこにゐるのを見ると、彼は馬を進めた。さうして近くに働いてゐた自分の作男に、言つた——

「犂を持つて來い」

主人の氣質を知つてゐるから作男は拒むことが出來なかつた。主人は再び言つた——

「この荒れてゐる畑へ、犂を入れろ。こら！　いつもいふ通り、おれは自分の地所の近所に手のとどかない畑があるのは、氣に入らないのだ」

老寡婦はこの前と同じ方法を取つて哀願した。作男が主人の命令とこの命懸けの懇願との板挾みになつて躊躇してゐるのを見ると、沈は馬から下りた。畑のなかへ歩み入りながら、

「婆さん。さあ退いた。畑といふものは荒して置くものぢやない」

さう言ひながら、大きな犂を引いてゐる水牛の尻に鞭をかざした。婆さんは沈の顔を見上げたきり動かうとはしなかつた。

「本當に死にたいんだな。もう死んでもいい年だ」

言つたかと思ふと、ふり上げてゐた鞭を強かに水牛の尻に當てた。水牛が急に歩き出した。無慘、婆さんは轢殺された

「さあぐづぐづせずに、あとを早くやれ——」

こんな老ぼれのために廣い地面を遊ばして置いてなるものか——

いつもと大して變らない様でさう言ひながら、この男は馬に乗つて歸つてしまつた。これほどの男だからこそ、その兄があんな死に方をした時にも、世間では弟の沈に落ちたのだと言つて、でも自分の手に懸けないだけがまだしも兄弟の情だ、などと噂したさうである。何にしても、兄が死んでしまつてから弟がその管理を一切ひとりでやつた。その後、その家は一層繁榮えるし、彼は七十近くまで生きてゐて、悪い事をしても報いはないものかと思ふやうな生涯を終る時に、彼はたつた一つの遺言をしたのだ。

その遺言は甚だ注意すべきものである。

「今から後、三十年經つたら我々の家族は、田地をすつかり賣り拂つて仕舞はなければならない。それから南部の安平へ行つてそこで船を持つて本國の對岸地方と商賣をするのだ」

その理由を尋ねようと思ふともう昏睡してしまつてゐた。しかし子供はその遺言を守つて、安平の禿頭港へ出て來たのだと言ふ。——この遺言の話はやつぱり沈の一族から、ずつと後に洩れたといふので皆知つてゐたが、あの一夜の大風が來て、それこそ颶風のやうに沈家に吹き寄せた不幸の折から、世間の人人は沈家の祖先の遺言から、またその祖先のした悪行をさまざま

に思ひ出して、因果は應報で、さすがに天上聖母は沈の持船を守らない。——あの遺言こそまるで子孫へ今日の天罰を受けさせようと思つて、老寡婦の死靈が、佐藏に乘り移つたのだとか、あの奧樣はその老寡婦が犂で殺されてから何十何年目の、祥月命日であるとか、人人は沈家の悲運を同情しながらもそんなことを噂した。何にしても、大きな不運の後であるからあとから一時に皆、死に絶えてしまつて、遺つた人といふのは年若い娘ひとりで、それさへ氣が狂つて生きてゐた。

祖先にたとひどんな噂があらうとも、かうして生きてゐる繊弱い女をほつて置くわけにはいかないといふので、近所の人人は、いつも食事くらゐは運んでやつた。それが永い間絶えなかつたといふのも、いはば金持の餘德とも言へよう。といふのは食事を運んでやる人たちは、その都度何かしら、その家のそこらに飾つてある品物の手輕なものを、一つ二つづつこつそりと持つて來る者があるらしかつた。部屋にあつたものは自と少くなり、さうなると近隣でも相當な家の人達はもうそこへ行かなくなつた——他人のものを少しづつ掠めてくるやうな人たちの一人と思はれたくないと思つて、自と控へるやうになつたのである。その代りにはまた、厚かましい人があつて、當然のやうな顔をして品物を持つて來てそれを賣拂つたりするやうな人も出て來た。下さいと言つて頼むと氣の違つてゐる人は、極く大樣にくれるといふことであつた。——さあ、お祝ひに何なりと持つておいで

高價なものがさういふ風に奪はれて、やつぱりあの家では昔の年貢を今收めてゐるのだなどと、口さがない人人は言つた。

どういふ風に、娘は氣が違つてゐるかといふのに、娘は刻刻に人の——恐らくは彼女の夫の、來るのを待つてゐるらしかつた。人の足音が來さへすれば叫ぶのだ——泉州言葉で、

「どうしたのです。なぜもつと早く來て下さらない？

——つまり、我我が聞いたのと全く同じやうな言葉なのだ。彼女は姿こそ年とつたがその聲は、いつまでも若く美しかつた！——我我が聞いたその聲のやうに？

その聲を聞いて、人人は深い哀れに打たれながら、その部屋へ這入つて行くと、彼女は人人を先づ凝視して、それからさめざめと泣くのだ。待つてゐた人でなかつた事を怨むのだ。そこで人人は明日こそその當の人が來るだらうと言つて慰める。彼女はまた新しい希望を胸に起す。彼女はいつも美しく着物を着て人を待つ用意をしてゐた。たしかに海を越して來るその夫を待つてゐるのだといふことは疑ひなかつた。さういふ風にして彼女は二十年以上も生きてゐたのだらう——

「私が十七の年に、初めてこの家へ來たころには、その人はまだ生きてゐたのです」と、この長話を我我に語つた禿頭港の老婦人は言つた。——この婦人ももう六十に近いであらうから四十年位前にこの家へ嫁に來たものと見える。「私は近づいてその人を見た事はありませんけれども、人氣の靜な日などには、よく皆がまたお孃さんが出てゐるよといふものだから、見ると五層樓の欄干によりかかつて、ずつと遠い海の方を長いこと——半日も立つて見てゐるらしいやうなことがよくありました。夫を乘せた船の帆でも見えるやうに思つたものですかねえ。いづれやつぱりその海が見えるからでせう、お孃さんのゐる部屋といふのは、あの二階ばかりで、外の部屋へは一足も出なかつたさうです。皆はお孃さん、お孃さんと呼び慣はしてはゐましたが、その頃はもうやがて四十にもなるにはなつてゐるだらうといふ事でした。それが、何

日からお嬢さんの姿をまるで見かけなくなつたのです。病氣でもあらうかと思つて人が行つてみると、お嬢さんはその寢牀のなかでもう腐りかからうとしてゐたさうです。金繍を飾つて花嫁姿をしてゐたと言ひますよ。――それが不思議な事に、それだのに、その人が二階へ上らうとすると、やつぱりお嬢さんが生きてゐた時と同じやうに、涼しい聲でいつもの言葉を呼びかけたさうです。ね！　貴方がたが聞いたのと少しも違はない言葉ですよ！　だから死んでゐようなどとは露思はなかつただけにその人は一層びつくりしたとの事です。それから後にも、その聲をそこで聞いたといふ人は時時あつたのです。――お嬢さんは病氣といふよりは、もしや飢ゑて死んだのではあるまいかと云ふ人もあります。といふのはその家のなかには、昔そこここにあつた見事な樣樣の品物が、もう何一つ殘つてゐなかつたさうですから。さうして死體に附いてゐた金繍は葬の費用になつたと言ひます――

四　怪傑沈氏

この風變りな一日の終りに私と世外民とは醉仙閣にゐた。――私たちのよく出かける旗亭である。

これが若し私が入社した當時のやうな熱心な新聞記者だつたら、趣味的ないい特種でも拾つた氣になつて、早速「廢港ローマンス」とか何とか割註をして、さぞセンセイショナルな文字を羅列することを胸中に企ててゐただらうが、その頃は私はもう自分の新聞を上等にしてやらうなどといふ考へは毛頭なかつた。毎日の出社さへ滿足には勤めずにわが酒徒世外民とばかり飲み暮してゐた。諸君はさだめし私の文章のなかに、さまざまな蕪雜を發見することだらうと覺悟はしてゐるが、それこそ私がそのころ飲んだ酒と書き飛ばした文字との覿面の酬いであらう・・・。

――で、私たちは醉仙閣で飲んでゐた。世外民は禿頭港の廢屋に對して心から怪異の思ひがしてゐるらしい。さう言へばあの話はいかにも支那風に出來てゐる。廢墟や廢址に美女の靈が遺つてゐるのは、支那文學の一つの定型である。それだけにこの民族にとつてはよく共感できるらしい。しかし、私はといふとどうもさうは行かない。私がそのうちで少しばかり氣に入つた點と言へば、その道具立が揃つて大きくその色彩が惡くアクどい事にあつた。もしこれを本當に表現することさへ出來れば、浮世繪師芳年の狂想などはアマイものにして仕舞ふことが出來るかも知れない。そのなかにある人物は根強く大陸的で、話柄の美としてはそれが醜と同居してゐるところの野蠻のなかに近代的なところがある。幽靈話とすればそれが夜陰や月明ではなしに、明るさもこの上ない烈日のさなかなのが取柄だが、總じてこの話は怪異譚としては一番價値に乏しい。それだのに世外民などは專らそこに興味を繋いでゐるらしい。いや、むしろ恐怖してさへゐる。彼は自分が幽靈と對話したと思つてゐるのかも知れない。

私は世外民の荒唐無稽好きを笑つてゐる。

――といふのはそれに對しては私はもうとつくに思ひ當つたことがあるからだ。なぜ私はあの時すぐ引返して、あの廢屋の樓のところへ入込んでみなかつたらうか。さうすれば世外民に今かうは緊張らせはしないのだ。それをしなかつたといふのも世外民があまり厭がるのと、それよりも疲勞てあつたのと、また臆病な思ひをして行つてみるまでもなく解つてゐると信じたからだ。それもすぐに、さうと氣がついたのならよかつたのに、あんな判りきつた事が、なぜ一時

間も經つてからやつと氣がついたといふのだらう。多分、あまりに思ひがけなく踏込まうとするその刹那であつた爲めと、二階から響いて來た言葉が外國語だつたのと、それにつづいてあの若い人の美妙な聲調の身振りやら、ちよつと異様な話やらで、全くくやしい事だが私も暫くの間は、少少度肝を拔かれたものと見える。本當に理智の働く餘裕はなかつたらしい。——廢屋だと確めて置いた家の中から人聲がしたのであつてみれば、それはその家の住人でない誰かが、そこにゐたのにきまつてゐる。その人のために我我が這入つて行くことを遠慮する理由は少しもなかつた筈だ。現に安平の家のなかにだつて網を繕つてゐた人間の聲がしても我我は平氣で闖入して行つた程だ。何のために我我は躊躇したか。世外民が一人で住んでゐるんだねと言つたからだ。世外民は何故そんなことを言つたか。それはその時の彼の心理を考へなければならない。多分、聲が我我の踏み込んだ瞬間に恰もそれを咎めるがごとく響いた事が一つ——しかも、その言葉の意味は、あとで聞けば全く反對のものであるが。またあの廢屋は安平のものよりも數十倍も堂堂としてゐて荒れながらにもなほ犯しがたい權威を具へてゐた事。最後に一番重なる理由としてはそれが單に、女の若さうな玲瓏たる聲であつたが爲めに、若い男である世外民も私も無意識のうちに妙にひるんでゐたのである。さうして、その聲に就ては何の考へることをもせずに、ただびつくりして歸つて來てしまつたのである。

「何にしても這入つて見さへすればよかつたのになあ。馬鹿馬鹿しい、誰が幽靈の聲などを聞くものか。生きて心臟のドキドキしてゐる若い女——多分、若々しく美しいだらうよ、そんな女がするな——それがそこにゐただけの事さ。——生きてゐればこそものも言ふのさ……」

「でも、むかしから傳はつてゐるのと同じ言葉を、しかも泉州言葉を、それもそのたつた一言を、その女が何故我我に向つて言ふのだ」

世外民は抗議した。

「泉州言葉は幽靈の專門語ではあるまいぜ。泉州人なら生きた人間の方がどうも普通に使ふらしいぜ。アハ、ハハ。それが偶然、幽靈が言ひ慣れた言葉と同じだつたのは不思議と言へば不思議さね。——でもたつたそれだけの事だ。昔はあの言葉が我我に向つて言はれたと思ひ込むから、幽靈の正體がわからないのだよ。——外の人間に向つて言つた言葉が偶然我我に聞かれたのだ。いや、我我を外の人間と間違へて、その女が言ひかけたのさ。きつと氣がついたから、たつた一言だけしか言はなかつたのだ。昔、何でもないよくある話だぜ、それや……」

「それぢや、昔からその同じ言葉を聞いたといふその人達はどうしたのだ」

「知らない」私は言つた「それや僕が聞いたのぢやないのだからね。——ただ、多分は君のやうな、幽靈好きが聞いたのだらうよ。だから僕は自分の關係しない昔のことは一向知らないのだ。ただ今日の聲なら、あれは正しく生きてる若い女の聲だよ！ 世外民君、君は一たいあまり詩人過ぎる。舊い傳統がしみ込んでゐるのは結構ではあるが、月の光では、ものごとはぼんやりしか見えないぜ。美しいか汚いかは知らないが、ともかく太陽の光の方がはつきりと見えるからね」

「比喩などを言はずに、はつきり言つてくれ給へ」一本氣な世外民は少々憤つてゐるらしい。

「では言ふがね、亡びたものの荒廢のなかにむかしの靈が生き殘つてゐるといふ美觀は、——これや支那の傳統的なものだが、僕に言はせる

と、……君、慣つてはいかんよ――どうも亡國的趣味だね。亡びたものがどうしていつまでもあるものか。無ければこそ亡びたといふのぢやないか―

「君！」―畔外氏は大きな聲を出した。「亡びたものと、荒廢とは違ふだらう。――亡びたものはなるほど無くなつたものかも知れない。しかし荒廢とは無くならうとしつつある者のなかに、まだ生きた精神が殘つてゐるといふことぢやないか―

「なるほど。これは君のいふとほりであつた。しかしともかくも荒廢は本當に生きてゐることとは違ふね。だらう？　荒廢の旋律はまあ僕が間違つたとしてもいゝが、そこにはいつまでもその靈が横溢しはしないのだ。むしろ、一つのものが廢れようとしてゐるその陰からは、もつと力のある潑剌とした生きたものがその廢朽を利用して生れるのだよ。ね、君！　…ちた木にだつてさまざまな草が簇るではないか。我我は荒廢の美に囚はれて歎くよりも、そこから新しく誕生するものを讃美しようぢやないか。――なんて、柄にない事を言つてゐる。さういふ人生觀が、君の底にちやんとしまつてある程なら、僕だつて牽濁三界でこんなだらしない酒飲みになれやしないだらうがね。だからさ、僕がさういふ生き方をしてゐるかどうかは先づこの次にしてさ―

「成程。――ところでそれが、禿頭港の幽靈――でないといふならば、その生きた女の聲と何の關係があるんだらう？」

「下らない理窟を言つたが僕のいふのは簡單なことなのだ。ね、我我の聞いたあの聲の言つたのは「どうしたの？　なぜもつと早くいらつしやらない。……」云云といふのだつたさうだね。それや無論誰が聞いても人を待つてゐる言葉さ。で、あの場所の傳説のことは後にして、虚心に考へると、若い女が――生きた女がだよ、人に氣づかれないやうな場所にたつたひとりでゐて、人の足音を聞きつけて今の一言を言つたとすれば、これは男を待つてゐるのぢやないだらうかといふ疑ひは、誰にでも起る。あたりまへの順序だ。我我があの際、すぐさう感じなかつたのが反つて不思議だ。あの際、僕があれを日本語で聞いたのだつたら一瞬間にさう感附くよ。そこであの場所だが、氣味の悪い噂があつて人の絶對に立ち寄らない場所だ。しかも時刻はといふと近所の人人がみな午睡をする頃だ。戀人たちが人に隱れて逢ふには絶好の時と所ではないか。――それも互によほど愛してゐると僕が考へるわけ、それはいづれあそこからさう遠いところに住んでゐる人ではなからうが、それならあの家に纏はる不氣味千萬な噂はもとより知つてゐるのだらうから、迷信深い臺灣人がその恐ろしさにめげずに、あの場所を擇ぶといふところに、その戀人たちの熱烈が現れてゐる。それから、また僕は考へるね、そのふたりは大分以前から、あの時刻とあの場所とを利用することに馴れてゐるのだ。でない位なら、そんないやな場所へ、女が先に來て待つ度胸も珍しいし、男だつてそれぢやあまり不人情さ。――君が、あの聲を聞いて咄嗟にそれをその住人のものと斷定してしまつたのも無理はないよ。彼等はそこをもう自分たちふたりの場所と信じ切つてゐるほど、その場所に安心し慣れ切つてゐるのだ。それならばこそ我我の足音を聞いただけで慌しく、あんな聲をかけたりしたのだ。――あそこへは全く近よる人もないと見えるね。そのくせあの家は、女ひとりで這入つて行つても何の怖ろしい事もないほど、異變のない場所なのさ。若い夫と、女――若者の玉某仔のやうな奴かな。いや、若い女ではなくつて――

一聲は若かつたがな
――さ、聲は若いつても、事實は圖太い年增女かも知れないな。でなけや、やつぱり必ず若い熱烈なる少女か。――それはどうでもいい。判らない。しかし兎も角も、今日のあの聲は不埒かは知らないが不思議は何もない生きた女のものだ、あそこが逢曳の場所に撰ばれてゐるといふ事と、又それだから、あそこにはほんの噂だけで何の怪異もない事は、おのづと明瞭さ。僕は疑はない――ああ、這入つて見れやよかつたのになあ
「酒によつてそろそろと理窟つぽくなつたぞ」
――理窟には合つてゐさうだよ。ただね、それが僕の神經を鎭めるには何の役にも立たない」
――さうかい。困つたね――
世外民はやつぱり私に同感しようとはしない。私は少しばかり、ほんの少しだが、忌忌しかつた。私は酒を飲めば飲むほど、奇妙に理窟つぽくなる。人を說き伏せたくなる。そこでお喋りになるといふごく好くない癖があつた。自分では頭が冴えて來るやうな氣がするんだが、それは醉つぱらひの己惚れで傍で聞いたらさぞをかしいのだらう。私はつづけた。
――仕方がない。君は何とでも思ひ給へ。だが、今日の事實は怪異譚としてはまるで何の値打もないのだがなあ、禿頭港で聞いた話にしたつて、因緣話にはなつてゐるものか。――そんな見方をすれや、せいぜい土俗特種の値打だ。寧ろ面白いのは、あんな荒つぽいいやな話のなかに案外、支那人といふものの性格や生活が現れてゐることだ……
「夜中に境界標の石を四方へ擲げる話か。――あれや、君、臺灣の大地主のことしたら、みんなあんな風に言ふんだ。あれこそ臺灣共通の傳說だよ。」現に、と世外民は酒で赤くなつた顏を苦笑させて、
「僕の家のことだつてもさう言つてらあ!」
「へえ? これはなほ面白い。いづれはどこかに本當の例が、事實あつたのだらうがね。多分、あの沈家が本當だらう。それにしてもそいつをどこの大地主にも應用するところはえらい。實際、あの話はあらゆる富家といふものを簡單明瞭に說明するからね。ふむ。さうかね。だがそれよりも僕にもつと面白いのは、孫でよぼよぼの老寡婦を突き殺す話だ。――僕はその沈の祖先といふのは粗野な惡漢でこそあるがなかなかの人傑だつたやうな氣がするのだ。ね、さうでなければ道理に合はない。いかに淸朝の末期に近い太平の時だつて、また半ば植民地の臺灣だからと言つて、さうさう腐敗した役人ばかりをあとへあとへと派遣したわけでもあるまい。それが昔は[illegible]ばかりの[illegible]けではあるまい。役にはきつと役人らしいのもえらい官僚もあつたに違ひない。――僕の聞きたいのは、僕の幻想だが、胡蘆屯附近[illegible]、昔、この島で最も好い開墾された農業地だらう。――……いつもいふ通り、おれは自分の地所の近所に手のとどかない畑があるのは、氣に入らないのだ。……[illegible]といふものは荒して置くものぢやない。……本當にそれにたいんだな。もう死んでもいい年だもの。さう言つてひらりと馬を下りて自分の手で突き殺したと言つたね。僕には強い實行力のある男の横顏が見えるやうな氣がするんだ。さういふ男の手によつてこそ、未開の山も野も開墾出來るのだ。草創時代の植民地はさういふ人間を必要としたのだ。役人たちの目の利いたものは、彼の事業を、政府自身のために樂しみにしてゐたかも知れないのだ。その報酬に惡德を見逃すばかりか、暗に奬勵してゐたかも知れないのだ。その男はちやんとそれを心得てゐた。その遺言が更に面白いではないか。三十年すれ

ば、いかに植民地政治でもだんだん行屆いて整つて來た學問には、彼が折角開拓した廣大な土地を、今度は彼よりももつと大きい暴虐者が出て左右することを見拔いてゐたのだ。何と怖ろしい識見ではないか――彼は政治といふものの根本義を、まるで社會學者みたいに知つてゐて、それを利用したのだ。人のものを掠奪してそれへすつかり仕上げをかけて、やれ田だの畑だのと鍍金をするさ、そいつを賣拂つて金に代へる。それから商賣をするんだね。全く商賣といふものは世が開化した後の唯一の戰爭だからね。しかも安全な戰爭だ――元手の多い奴ほど勝つに決つてゐる　彼は自分の子孫たちに必勝の戰術を傳授して置いたのさ。奴の仕事は何もかも生きる力に滿ちてゐる。萬歲だ。ところでさ、そのやうな先見のある男でも、自然が不意に何をするかは知らなかつたのが、人間の淺ましさだ。擁護してゐた自然を永い間かかつて斫り苛んだ結果に贏ち得た富を、一晩の颶風でやつぱりもとの自然に返上したといふのだから好いな。態を見やがれさ。――するとやつぱり因果應報といふことになるのかな。僕はそんなことを說教するつもりではなかつたつけな……」

私はいつの間にかひどく醉つて來て、舌も縺れては來るし、段段冴えて來ると己惚れてゐた頭がへんにとりとめがなくなり、ふと口走つた――

「花嫁の姿をして腐つてゐたつて？　よくある奴さ。花嫁の姿をして腐つて死ぬ。それがだんだん腐つてくる、か。生きてゐる奴で冷たくなつて、だんだん腐つてくるのもある。金簪で飾つてさ、ウム」

世外民はこれも亦いつもの癖で、深淵のやうに沈默したまま、私のをかしな言葉などは聞き咎めるどころか、てんで耳に入らぬらしく、老酒の盃を持ち上げたままで中空を凝視してゐた。

「世外民、世外民。この男の盃を持つてゐるところには少々魔氣があるて」

＊　＊　＊　＊　＊　＊

世外民といふ風變りな名を、私はこの話の當初から何の說明もなしに連發してゐることに氣がついたが、これは私の臺灣時代の殆んど唯一の友人である。この妙な名前はもとより匿名である。彼のペンネームである。彼の投稿したものを見て私はそれを新聞に採錄した。私は彼の詩――無論、漢詩であるが、その文才を十分解したといふわけではないが、寧ろその反抗の氣概を喜んだのである。しかし、その詩は一度採錄したきりだつた。當局から注意があつて、私は呼び出されて統治上有害だと言ふのでその非常識を咎められた。再度の投稿に對しては、私は正直にその旨を附記して返送した。すると、世外民は私を訪ねて遊びに來た。見かけは優雅な若者であつたが案外な酒徒で、盃盤が私たちを深い友達にした。彼は臺南から汽車で一時間行程の龜山の麓の豪家の出であつた。家は代代秀才を出したといふので知られてゐた。その頃の私は、つまらない話だが或る失戀事件によつて自暴自棄に陷入つて、世上のすべてのものを否定した態度で、だから世外民が友達になつたのだ。この頃の私にいつも酒に不自由させなかつたのがこの世外民だ。だが私が世外民の幇間をつとめたと誰も思ふまい。第一に世外民は友をこそ求めたが幇間などを必要とする男ではなかつた。私はその點を敬してゐた。

――この話として、何の用もあることではないが、私の交友錄を抄錄したまでである。彼が私との訣別を惜んで私に與へた一詩を私は覺えてゐる。――あまり上手な詩でもないさうだが、私にはそんなことはどうでもいい。

登彼高岡空夕曛
天邊孤雁嘆離群
溫盟何不必酒杯
君夢我時我夢君

＊　＊　＊　＊　＊　＊

五　女誡扇

私がいやがる世外民を無理に強ひて、禿頭港の廢屋のなかへ、今度こそ這入つて行つたのは、彼がその次に臺南へ出て來た時であつた。多分最初にあの家を發見してから五日とは經てゐなかつたらう——世外民は當時少くとも週に二度は私を訪れたものなのだから。

「さあ。今日こそ僕の想像の的確なことを見せる。運がよければ、君がそれほど氣に病む幽靈の正體が見られるかも知れないよ」

私はから宣言して、この前の機會と同じ時刻を擇んだ。そこに幽靈のゐないことを信じてゐる私は、しかし、自分の事を、高い雕欄のいい窪みを見つけて巣を營んでゐる双燕を驚愕させる蛇ではないかと思つて、最初は考へたのだが構はないと思つた。といふのはもしそこに一對の男女がゐるやうならば、自分はその時の相手の風態によつては、わざと氣がつかないふりをして、彼等をその家の居住者のやうに扱つて、自分達が無法にも闖入したのを謝罪しようと用意したからである。私たちはそれだから、ごく普通の足音をさせて、あの石の門柱のある表からこの前の日のとほりに入口を這入つた。その時、さすがに私もちよつと立止つて聞き耳を立ててはみた。勿論どんな泉州言葉も聞かれはしなかつた。それだのに困つた事に、世外民は氣味惡がつて先に這入らないのだ。表の廣間のなかはうす暗くて、またこんな家のどこに二階への階段があるか、私には見當がつきにくい。しかし世外民は口で案內して、表扉を這入つて廣間の奧の左か或は右の小扉を開いてみたら、そこから上るやうになつてゐるだらう、といふのである。その廣間といふのは二十疊以上はあるだらう。四つの閉めた窓の破れた隙間からの光で見ると、他には何一つないらしい。私は這入つて行つた。その時、思はず私が躊つたのは、鳩の聲を聞いたからではないのだ。ただの閉め切つた部屋の臭ひである。どんな臭ひとも言へない。ただ蒸れるやうなやつで、それがしかし建物がいいから熱いのではない、寧ろ冷たくつてゐて蒸れるとでもいふより外には言ひ方がない。この臭ひだ、世外民は室外へ來て、怖らしかつた。天井を見ると眞白に黴がふいて彼方には見えてゐる。その黴の臭ひだつたかも知れない。私たちは先づ右の扉を開けた。——果してすぐそこが階段であつた。幅二尺位の細いのが一直線に少し急な傾斜で立つてゐる。それが上からの光で割に明るい。何も怖氣がさすやうなものは一つもないが、また私は傳說をさら眼中におかないが、それでもやはりさう明るい心持にはなれないことは確だ。氣味が惡いと言つては言ひすぎるが、私はよく世外民をひつぱつて來たと思つた。私はひとりでも一度來てみる意志はあつたのだが、もしもひとりだつたらあまり落着いて見物はしにくいかと思ふ。それにしてもあんな傳說を迷信深く抱いてゐる人人が、たとひそれは二人連れであつた事が確でも、第一日によくまあここへ來たものだと言へる。いや、よくもここを擇ぶ氣になつたものだ。私はこの細い階段を戀人たちが互に寄りそひながらおつおつして、のぼつて行つた時を想像してみた。

私は世外民を振り返つて促しながら、階段を昇り出した。そこには私の想像を滿足させることには、ごく稀にではあるがここの

こを昇降する人間があることは疑へなかつた。といふのは、それは何も鮮かな足跡ではないのだが、寧ろ譬へば冬原の草の上におのづと出來た小徑といふ具合に、そこだけは他の部分より黑くなつて、白い塵埃のなかから、階段の板の色がぼんやり見えてゐるのであつた。二階には人のけはひはない。私は幽靈の正體は先づ見られさうにもないと思つた。二階へ出た。

案外にそこは明るかつた。その代りどうしてだか急に暑くムッとした。人影のやうなものは何もなかつた。氣が落着いて來たので私は何もかも注意して見ることが出來たが、床の上にもまた人の歩いたあとがあつて、それがまた一筋の道になつて殘つてゐる。L形になつた部屋の壁のかげから、光が帶になつて流れて來る。この部屋へ深山の明るさを供給してゐるのは、その窓で、人の歩いたあともまたその窓の方へ行つてゐる。壁のかげに誰かがピッタリと身をよせて隱れてゐるやうな氣もする。私はその窓の方へおのづと歩いて行つた。我我の足元から立つ塵は、光の帶のなかで舞ひ立つた。顏に珍しく風が當つて、明るい窓といふのが開いてゐること、その壁に沿うて一つの臺があることが、一時に私の目についた。臺といふのはごく厚く黑檀で出來たもので、四方には五尺ほどの高さの細い柱が、その上にはやはり黑檀の屋根を支へてゐる。その大きさから言つて寢牀のやうに思はれた。

「寢牀だね」

「さうだ」

これが私と世外民とが、この家へ這入つてからやつと第一に取交した會話であつた。寢牀には塵は積つてはゐなかつた——少くとも輕い塵より外には。さうして黑檀は落着いた調子で冷冷と底光りがしてゐた。私は世外民を顧みながら、その寢牀の上を指さした。私の指が黑檀の厚板の面へ白くうつつた。

世外民は頷いた。

その寢牀の外には家具と言へば、目立つものも目立たないものも文字通りに一つもなかつた。話に聞いたあの金簪を飾つた花嫁姿の狂女は、この寢牀の上で腐りつつあつたのではないだらうか。それにしてはこれだけの立派な檀木の家具を、今だにここに遺してあるのは、憐憫によつてではなく、やはり恐怖からであらう。

寢牀のうしろの壁の上には大小幾疋かの壁虎が、時時のつそりと動く。尤もこれは珍しい事ではない、この地方では、どこの家の天井にだつて多少は動いてゐる。内地に於ける蜘蛛ぐらゐの資格である。ただこの壁の上には、廣さの割合から言つて少少多すぎるだけだ。六坪ほどの壁に三四十疋はゐた。

世外民はどうだか知らないが、私はもう充分に自分の見たところのもので滿足であつた。歸らうと思つて、歸りがけにもう一度窓外の碧い天を見た。その他の場所はあまりに氣を沈ませたからだ。歸らうとして私はふと自分の足もとへ目を落すと、そこに、ちやうど寢牀のすぐ下に、扇子見たやうなものがある——骨が四五本開いたままで。私は身をかがめて拾つた。そのままハンケチと一緒に自分のポケットのなかへ入れた。なぜかといふのに世外民はいつの間にか歸るために、私に背を向けて四五歩も歩き出してゐたからだ。

世外民も私もドリる時には何だかひどく急いだ。表の入口を出る時には今まで臆へてゐた不氣味が爆發したのを感じて、我我は無意識に早足で出た。さうして無言をつづけてその屋敷の裏門を出た。

「どうだい。世外民君。別に幽靈もゐなかつたね」

「うむ」世外民は不承不承に承認はした

が、しかし、君、君はあの黒檀の寝臺の上に今出て來た大きな紅い蝶を見なかつたね。まるで掌ほどもあるのだ。それがどこからか出て來て、あの黒光りの板の上を這つてゐるのを一目は美しいと思つたが、見てゐるうちに、僕にはへんに氣味が惡くなつて、出たくなつたのだ

「え？ そんなものが出て來たか、僕は知らなかつた。僕はただ寝虎を見ただけだ。君、君の詩ではないのか、幻想ではないのか

――私は世外民があの寝牀の上で死んだ狂女のことをさう美化してゐるのだらうと思つた。

「いいや、本當だとも、あんな大きな紅い蝶を、僕は初めてだ」

私は歩きながら、思ひ出してさつきの扇をとり出してみた。さうして豫想外に立派なのに驚き、また困りもした。

その女持の扇子といふのは親骨は象牙で、そこへもつて來て水仙が薄肉で彫つてある。その花と葉との部分は透彫になつてゐる。それだけでも立派な細工らしいのに、開けてみると甚だ凝つたものであつた。表には殆んど一面に紅白の蓮を描いてゐる。裏は象牙の骨が見えて――表一枚だけしか紙を貼つてゐないので、裏からは骨があらはれるやうに出來てゐたのだが、その象牙の骨の上には金泥で何か文章が書いてある。

「君、」私はもう一度扇を見返しながら世外民に呼びかけた。「王秋螢といふのは名のある畫家かね」

「王秋螢？ さあ、聞かないがね。なぜ」

私は默つてその扇子を渡した。世外民が訝しかつたのは言ふまでもない。私もちよつと何と言つていいかわからなかつた――私は無難見ではあつたが、盗んで來たやうな氣がしていけないのだ。私はそのままの話をすると、世外民は案外何でもないやうな顔をして、それよりも仔細にその扇をしらべながら歩いてゐた――

「王秋螢？ 大した人の畫ではないが職人でもないな。不蔓不枝――僕はその畫贊を讀んだのだ。愛蓮說のうちの一句だね。不蔓不枝――だが女の扇にしちや不吉な言葉ぢやないか。蔓せず枝せざるほど婦女にとつて悲しい事はあるまいよ。どうしてまた富貴多子にでもしないのだらう――平凡すぎると思つたのかな」

「一たい幸福といふのは平凡だね。で、その富貴多子とかいふのは何だい」

「牡丹が富貴、柘榴が多子さ」世外民は[illegible]ら[illegible]見て、「[illegible]

「おや、これは[illegible]から、なるほど、下[illegible]不枝[illegible]な」

扇は案外に世外民の興味をひいたらしく見える。それを吟味して彼がそんなことを言つてゐる間に、私はまた私で同じ扇に就て全く別樣のことを考へてゐた。

その扇は、ちよつと見たところ、少くとも現代の製作ではない。さうしてその凝つた意匠は、その親が、愛する娘が人妻にならうとする時に與へるものに相當してゐる――恐らく沈家のものに相違ないであらう。昔、狂女がそれを手に持つて死んでゐなかつたとも限らない。その扇を、更に私は假りに、禿頭港の細民區の奔放無智な娘をひとり空想する。彼女は本能の導くがままに悽慘な傳說の家をも怖れない。また昔、それの上でどんな人がどんな死をしたかを忘れ果ててあの豪華な寝牀の上に、その手には婦女の道德に就て明記しまた暗示したこの扇を、それが何であるかを知らずに且つ弄び且つ翻へして、彼女の汗にまみれた情夫に涼風を贈つてゐる……。彼女は生きた命の氾濫にまかせて一切を無視する。――私はその善惡を説くので

はない、「善惡の彼岸」を言ふのだ……

六　エピロオグ

　あの廢屋はさういふわけで私の感興を多少惹いた。何ごとにもさう興味を見出さなかつたその頃の私としては、ほんの當座だけにしろそんな氣持になつたのは珍しいのだが、それらすべての話をとほして、私は主として三個の人物を幻想した。市井の英雄兒ともいふべき沈の祖先、狂念によつて永遠に明日を見出してゐる女、野性によつて習俗を超えた少女、——とでもいふ、ともかく、そんな人物が跳梁するのが私には愉快であつた。そいつを活動のシナリオにでもしてみる氣があつて、私は「死の花嫁」だとか、「紅の帳」などといふ題などを考へてみたりしたほどであつた。しかしさう思つてみるだけで、やらないと言ふかやれないと言ふか、ともかく實行力のないのが私なので、その私が前述の三人物の空想をしたのだからをかしい。意味がそこにあるかも知れない。さうして私自身はといふと、いかなる方法でも世の中を征服するどころか、世の力によつて輕蔑に押しつぶされ、見放されてしまつた。尤も私は何の力もないくせに精一杯の我儘をふるまつて、それで或程度だけのことなら押し通してもゐたのだ。それでは何によつて私がやつとそれだけでも強かつたか。自暴自棄。この哀れむべき強さが、他のものと違ふところは、第一自分自身がそれによつて決して愉快ではないといふことにある。私は事實、刻刻を甚だ不愉快に送つてゐた。それといふのも私は當然、早く忘れてしまふべき或る女の面影を、私の眼底にいつまでも持つてゐすぎたからである。

　私は先づ第一に酒を飲むことをやめなければならない。何故かといふのに私は自分に快適なことをしてゐるのはよくない。自分に快適でないだから酒を飲むのではない。無論、新聞社などは酒よりもさきにやめたい程だ。で、すると結局は或は生きることが快適でなくなるかも知れない惧れがある。だが、若しさうならば生きることそのものをも、やめるのが寧ろ正しいかも知れない……

　柄になく、と思ふかも知れないが、私は時時にそんなことをひどく考へ込む事があつた。その日もちやうどさうであつた。折から世外民が訪ねた。

　世外民はいつもより非常な興奮を以て[illegible]んだ。「君、知つてゐる？——禿頭港の首くくりはね……」

「え？」私はごく輕くではあるが死に就て考へてゐた折からだつたから少しいやな氣がした。

「首くくり？　何の首くくりだ？」

「知らないのか？　新聞にも出てゐるのに。」

「僕は新聞は讀まない。それに今日で四日社を休んでゐる」

「禿頭港で首くくりがあつたのだよ。——あの我我がいつか見た家さ。——誰も行かない家さ。あそこで若い男が縊死してゐたのだ。新聞には僅か一行ばかりしか出ない。僕は今、用があつて行つたさきでその噂を聞いて來たのだからよく知つてゐるが、あの黑檀の寢牀を足場にしてやつたらしいのだ。美しい若い男だ さうだよ、それがね、口元に微笑をふくんでゐたといふので、やつぱり例の聲でおびき寄せられたのだ、花嫁もたうとう婿をとつた……と言つてゐるよ、昔は。それかさ、やつぱりもう腐敗して少しくさいぐらゐになつてゐたのださうだ。僕は聞いてゐてゾクッとした。我我が聞いたあの聲やそれに紅い帷なぞを思ひ出してね」

　私もふつと死の惡臭が鼻をかすめるやうな氣がした。[illegible]い[illegible]間の空[illegible]身に追想

したつたら」世外民はその家の怪異を又新らしく言ひ出して、私がそこで拾つた扇を氣味惡がり私にそれを捨ててしまふやうに說くのであつた――この間はあんなに興味を持つて、自分でも欲しいやうなことを言つた癖に。尤も私がやらうと言つた時にはやはり、今と同じく不氣味がつて、結局いらないとは言つたが、私としてはまた世外民にやらうと思つた程だから、捨ててしまつても惜しいとも思はないが、私はその理由を認めなかつた。またいざ捨てよと言はれると、勿體ないほど珍奇な細工にも思へた。私は世外民の迷信を笑つた。

「大通りの眞中で縊死人があつてそれが腐るまで氣がつかない、とでもいふのなら不思議はあるだらうが、人の行かないところで自殺したり逢曳したりするのは一向當り前ぢやないか。――ただあんな淋しいところが市街のなかにあるのは、何かとよくないね」

私はその家の內部の記憶をはつきり目前に浮べてさう言つた。

同時に私にはこの縊死の發見に就て一つの疑問が起つた。といふのは、あの部屋のなかで起つた事は誰もそこに這入つて行かない以上は、一切發見される筈がない。あそこには開いた窓が一つあるにはあつたが、そこには青い天より外には何も見えない――つまり天以外からは覗けない。もし臭氣が四邊にもれるにしては、あの家の周圍があまりに廣すぎる。さう考へてゐるうちに、私は大して興味のなかつたこの話が又面白くなつて來るのを感じながら言つた。

「出鱈目さね。いや、死人はあつたらう。若い美しい男だなんて。もう美しいか醜いか年とつたか若いかも見分けがつくものか」

「いや、でも皆さう言つてゐる」

「それぢや、誰がその死人を發見したのだ？ あそこならどこからも見えず、誰も偶然行つてみるわけはないがな」ふと、私は場所が同じだといふことから考へて、この縊死人――年若く美しいと傳へられる者と、いつか私が空想し獨斷したあの逢曳とがどうも關係ありさうに思へて來た。そこで私は世外民に言つた。「いつでもいいが今度序に、その死人を發見したのはどんな人だか聞いてきてもらひたいものだ。それがもし泉州生れの若い女だつたらもう何もかもわかるのだよ。――いつか我我が聞いたあの廢屋の聲の主も。それから今度の縊死人の原因も。――本當に若い男だつたといふのなら、それや失戀の結果だらう。――幽靈の聲にまどはされて死ぬよりは失戀で死ぬ方が、まだしも、ある事實だものね。尤もどつちも自分から生んだ幻影だといふ點は同じだが」

私は大して興味はなかつた。しかし世外民が大へん面白がつた。罪を人に着せるのではない。これは本當だ。事實、世外民は先づ興味をもちすぎた。さうしてそれが私に傳染したのだ。世外民は私の觀察に同感すると早速、その場を立つて發見者を調べるために出かけた程なのだ。近所へ行つて聞けばわかるだらうといふので。

間もなく、世外民は歸つて來たが、その答を聞いて私は、臺灣人といふものの無邪氣なのに、今更ながら驚いたのである。彼等の噂するところによると、それは黃といふ姓の穀物問屋の娘が、――家は禿頭港から少し遠いところにあるさうだが――彼女が偶然に夢で見たといふその男がどうやら死んだ若者だし、それが這入つて行つた大きな不思議な家といふのが、どうも禿頭港のあの廢屋らしい。その暗示によつて、なくなつた男の行方を搜してゐた人人はやつと發見することが出來たといふのである。靈感を持つた女だといふ風に人人が傳へてゐると言ふ。

私は無智な人人が他を信ずることの篤いのに一驚すると同時に、そんな事を言つてうまうまと人をたぶらかすやうな少女ならば、いづれは圖圖しい奴だらうと思ふと、何もかもあばいてやれといふ氣になつた。私はまだ年が若かつたから人情を知らずに、思へば、若い女が智慧に餘つて吐いた馬鹿馬鹿しい嘘を、同情をもつて見てやれなかつたのだ。

「世外民君。來て一役持つてくれ給へ」

私は例の扇をポケットに入れ、それから新聞記者の肩書のある名刺がまだ殘つてゐるかどうかを確めた上で外へ出た。無論、その穀物問屋へ行かうと思ひ立つたからである。さうして娘に逢へば扇を突きつけて詰問しさへすれば判るが、ただその親が新聞記者などに娘を會はせるかどうかはむづかしい。逢はせるにしてもその對話を監視するかもしれない。世外民がうまくその間で計らつてくれる手筈ではあるが、それにしてもその娘が泉州の言葉しか知らなかつたらそれつきりだがなどと思つてゐるうちに、私はもうさつき勢ひ込んだことなどはどうでもよくなつた。自分に何の役にも立たない事に興味を持つた自分を、私は自分でをかしくなつた。

「つまらない。もうよさう」

世外民はしかし折角來たのだからといふ。それに穀物問屋はすぐ二三軒さきの家だつた。それから後の出來事はすべて私の考へどほりと言ひたい所だが、事實は私の空想より少しは思ひがけない。

まづ第一にその穀屋といふのは思つたより大問屋であつた。又、主人といふのは寧ろ私の訪問を歡迎した位だ。この男は臺灣人の相當な商人によくある奴で內地人とつきあふことが好きらしく、ことに今日は娘がそんな靈感を持つてゐる噂が高まつて、新聞記者の來るのがうれしいと言ふのであつた。さうして店からずつと奥の方へ通してくれた。

「汝來仔請坐」

と叫んだのは娘ではなく、そこに、籠の中ではなくて裸の留木にゐた白い鸚鵡である。

娘は、しかし、我我の訪れを見てびつくりしたらしく、私の名刺を受取つた手がふるへ、顏は蒼白になつた。それをつつみ隱すのは空しい努力であつた。彼女は年は十八ぐらゐで、美しくない事はない。私はまづ彼女の態度を默つて見てゐた。

「あ、よくいらつしやいました」

思ひがけなくも娘は日本語で、それも流麗な口調であつた。椅子にかけながら私は言つた——

「お孃さん。あなたは泉州語をごぞんじですか?」

「いいえ!」

娘は不意に奇妙なことを問はれたのを疑ふやうに、私を見上げたが、その好もしい瞳のなかに嘘はなかつた。私はポケットから扇をとり出した。それを半ばひろげて卓子の上に置きながら私はまたいつた——

「この扇を御存じでせう」

「まあ」娘は手にとつてみて「美しい扇ですこと」物珍しさうに扇の面を見つめてゐた。

「あなたはその扇を御存じない筈はないのです」私は試みに少しおこつたやうに言つてみた。

「ケ、ケ、ケツ、ケ、ケ」

鸚鵡が私の言葉に反抗して一度に冠を立てた。

みんな默つてゐるなかに、不意に激しく嗚咽く聲がして、それは鸚鵡の背景をなす帳の陰から聞えて來たのだ。涙をすすり上げる聲とともに言葉が聞えてきた——

「みんなおつしやつて下さいまし、お嬢さま。もう構ひませんわ。その代りにその扇は私にいただかして下さい」

…………――

誰も何と答へていいかわからなかつた。世外民と私とは目を見合した。

姿の見えない女はむせび泣きながら更に言つた。「誰方だか存じませんが、お嬢さまは少しも知らない事なのです。わたしの苦しみを見兼ねて下さつただけなのです。ただあなたが拾つておいでになつたその扇――蓮の花の扇を私に下さい。その代りには何でもみんな申します」

「いいえ、それには及びません」私はその聲に向つて答へた。「私はもう何も聞きたくない。扇もお返ししますよ」

「私のでもありませんが――」描寫しがたい女は口ごもりながら「ただ私の思ひ出ではあります」

「さよなら」私たちは立ちあがつた。私は卓上の扇を一度とり上げてから、置き直した。「この扇はあの奥にゐる人にあげて下さい。どういふ人かは知らないが、あなたからよく慰めておあげなさい。私は新聞などへに書きも何もしやしないのです」

「有難うございます。有難うございます」黄嬢の目には涙があふれ出た。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

幾日かで社へ出てみると、同僚の一人が警察から採つて來た種のなかに、穀商黄氏の下婢十七になる女が主人の世話した内地人に嫁することを嫌つて、罌粟の實を多量に食つて死んだといふのがあつた。彼女は幼くて孤兒になり、この主人に拾はれて養育されてゐたのだといふ。この記事を書く男は、臺灣人が内地人に嫁することを嫌つたといふところに焦點を置いて、それが不都合であるかの如き口吻の記事を作つてゐた。――あの廢屋の逢曳の女、――不思議な因緣によつて、私がその聲だけは二度も聞きながら、姿は終に一瞥することも出來なかつたあの少女は、事實に於ては、自分の幻想の人物と大變違つたもののやうに私は今は感ずる。

（大正十四年四月作）

ぢよかいせんきだん　あとがき

この作がすぐれてゐるかどうかを、作者はもとより知らない。知り得ない。

但、作者はこの作を愛してゐる。さうしてこの作を惡評した評家を甚だ輕蔑する氣持になつたことは事實である。

作者はだんだん年とともに、浪漫的色彩を失ひつつある。その代りには、何ものかが別に加はるだらうが、ともかくもこの作品は作者にとつて浪漫的作品の最後のものであるかも知れない。そんな氣もする。數數の不滿はあるけれども、それにしても作者自らはこの作を愛してゐる。この點でおそらく、この作は指折つてみて五つのうちに加はるだらう。

かういふわけで、かたがた手ごろではあり、多少筆を加へて、この物語だけ單獨に本にしてもらつた。我儘をよろこんで許してくれた第一書房主人に感謝する。

十五年二月十日夜

この書の作者

西班牙犬の家

（夢見心地になることの好きな人の爲めの短篇）

フラテ（犬の名）は急に駆け出して、蹄鍛冶屋の横に折れる岐路のところで、私を待つてゐる。この犬は非常に賢い犬で、私の年來の友達であるが、私の妻などは勿論大多數の人間などよりよほど賢い、と私は信じて居る。で、いつでも散歩に出る時には、きつとフラテを連れて出る。奴は時時、思ひもかけぬやうなところへ自分をつれてゆく。で近頃では私は散歩といへば、自分でどこかへ行かうなどと考へずに、この犬の行く方へだまつてついて行くことに決めて居るやうなわけなのである。蹄鍛冶屋の横道は、私は未だ一度も歩かない。よし、犬の案内に任せて今日はそこを歩かう。そこで私はそこを曲る。その細い道はだらだらの坂道で、時時ひどく曲りくねつて居る。私はその道に沿うて犬について――景色を見るでもなく、考へるでもなく、ただぼんやりと空想に耽つて歩く。時時空を仰いで雲を見る。ひよいと道ばたの草の花が目につく。そこで私はその花を摘んで、自分の鼻の先で匂うて見る。何といふ花だか知らないがいい匂である。指で摘んでくるくるまはし乍ら歩く。するとフラテは何かの拍子にそれを見つけて、ちよつと立ちどまつて、首をかしげて、私の目の中をのぞき込む。それを欲しいといふ顔つきである。そこでその花を投げてやる。犬は地面に落ちた花を、ちよつと嗅いで見て、何だ、ビスケツトぢやなかつたのかと言ひたげである。さうして又急に駆け出す。こんな風にして私は二時間近くも歩いた。

歩いてゐるうちに我我はひどく高くへ登つたものと見える。そこはちよつとした見晴で、打開けた一面の畑の下に、遠くどこの町とも知れない町が、雲と霞との間からぼんやりと見える。しばらく、それを見て居たが、たしかに町に相違ない。それにしてもあんな方角に、あれほどの人家のある場所があるとすれば、一たい何處なのであらう。私は少し腑に落ちぬ氣持がする。しかし私はこの邊一帶の地理は一向に知らないのだから、解らないのも無理ではないが、それはそれとして、さて後の方はと注意して見ると、そこに極くなだらかな傾斜で、遠くへ行けば行くほど低くなつて居るらしく、どこも一面の雜木林のやうである。その雜木林は可なり深いやうだ。さうしてさほど大くもない澤山の木の幹の半面を照して、正午に間もない優しい春の日ざしが、櫟や樫や栗や白樺などの芽生したばかりの爽やかな葉の透間から、煙のやうに、また匂のやうに流れ込んで、その幹や地面やの日かげと日向との加減が、ちよつと口では言へない種類の美しさである。私はこの雜木林の奥へ這入つて行きたい氣持になつた。その林のなかは、かき分けねばならぬといふほどの深い草原でもなく、行かうと思へば譯もないからだ。

私の友人のフラテも同じ考へであつたと見える。彼はうれしげにずんずんと林の中へ這入つてゆく。私もその後に從うた。約一町ばかり進んだかと思ふころ、犬は今までの歩き方とは違ふやうな足どりになつた。氣らくな今までの漫歩の態度ではなく、緊るやうないそがしさに足を動かす。鼻を前の方につき出して居る。これは何かを發見したに違ひない。兎の足あとで

あつたのか、それとも草のなかに鳥の巣でもあるのであらうか。あちらこちらと氣ぜはしげに行き來するうちに、犬はその行くべき道を發見したものらしく、眞直に進み初めた。私は少しばかり好奇心をもつてその後を追うて行つた。我我は時時、交尾して居たらしい梢の野鳥を駭かした。斯うした早足で行くこと三十分ばかりで、犬は急に立ちどまつた。同時に私は潺湲たる水の音を聞きつけたやうな氣がした。（一たいこの邊は泉の多い地方であるー犬は耳を癇性らしく動かして二三間ひきかへして、再び地面を嗅ぐや、今度は左の方へ折れて歩み出した。思つたよりもこの林の深いのに少しおどろいた。この地方にこんな廣い雜木林があらうとは考へなかつたが、この工合ではこの林は二三百町歩もあるかも知れない。犬の樣子といひ、いつまでも續く林といひ、私は好奇心で一杯になつて來た。かうしてまた二三十分ほど行くうちに、犬は再び立ちどまつた。さて、わつ、わつ！といふ風に短く二聲吠えた。その時までは、つい氣がつかずに居たが、直ぐ目の前に一軒の家があるのである。それにしても多少の不思議である、こんなところに唯一つ人の住家があらうとは。それが炭燒き小屋でない以上は。

打見たところ、この家には別に庭といふ風なものはない樣子で、また唐突にその林のなかに雜つてゐるのである。この林のなかに雜つて居るーといふ言葉はここでは一番よくはまる。今も言つた通り私はすぐ目の前でこの家を發見したのだからして、その遠望の姿を知るわけにはいかぬ。また恐らくはこの家は、この地勢と位置とから考へて見てさほど遠くから認め得られようとも思へない。近づいての家は別段に變つた家とも思へない。ただその家は草屋根であつたけれども、普通の百姓家とはちよつと趣が違ふ。といふのは、この家の窓はすべてガラス戸で西洋風な造へ方なのである。ここから入口の見えないところを見ると、我我は今多分この家の背後と側面とに對して立つて居るものと思ふ。その角のところから二方面の壁の半分づつほどを覆うたつたかづらだけが、言はばこの家のここからの姿に多少の風情と興味とを具へしめて居る裝飾で、他は一見極く質朴な、こんな林のなかにありさうな家なのである。私は初めこれはこの林の番小屋でないかしらと思つた。それにしては少し大きすぎる。又わざわざとこんな家を建てて番をしなければならぬほどの林でもない。と思ひ直してこの最初の認定を否定した。兎も角も私はこの家へ這入つて見よう、道に迷うたものだと言つて、暫く一杯ももらつて持つて來た辨當に、我我の空腹を滿さう。と思つて、この家の正面だと思へる方へ歩み出した、すると今まで目の方の注意によつて忘れられて居たらしい耳の感覺が働いて、私は流れが近くにあることを知つた　さきに潺湲たる水聲を耳にしたと思つたのはこの近所であつたのであらう。

正面へ廻つて見ると、そこも一面の林に面して居た、ただここへ來て一つの奇異な事にはその家の入口は、家全體のつり合から考へて、ひどく、贅澤にも立派な石の階段が丁度四級もついて居るのであつた。その石は家の他の部分よりも、何故か古くなつて所所苔が生えて居るのである。さうしてこの正面である南側の窓の下には家の壁に沿うて一列に、時を分たず咲くであらうと思へる紅い小さな薔薇の花が、わがもの顏に亂れ咲いて居た。そればかりではない、その薔薇の叢の下から帶のやうな幅で、きらきらと日にかがやきながら、水が流れ出て居るのである。それが一見どうしてもその家のなかから流れ出して居るとしか思へない。私の家來のフラテはこの水をさも甘さうにしたたか

に飲んで居た。私は一瞥のうちにこれらのものを自分の瞳へ刻みつけた。

　さて私は靜に石段の上を登る。ひつそりとしたこの四邊の世界に對して、私の靴音は靜寂を破るといふほどでもなく響いた。私は、おれは今、隱者か、でなければ魔法使の家を訪問して居るのだぞ、と自分自身に戯れて見た。さうして私の犬の方を見ると、彼は別段變つた風もなく、赤い舌を垂れて、尾をふつて居た。

　私はこつこつと西洋風の扉を西洋風にたたいて見た。內からは何の返答もない。私はもう一ぺん同じことを繰返さねばならなかつた。內からはやつぱり返答がない。今度は聲を出して案內を乞うて見た。依然、何の反響もない。留守なのかしら空家なのかしらと考へてゐるうちに私は多少不氣味になつて來た。そつと足音をぬすんで――これは何の爲めであつたかわからないが――薔薇のある方の窓のところへ立つて、そこから背のびをして內を見まはして見た。

　窓にはこの家の外見とは似合しくない立派な品の、黑ずんだ海老茶にところどころ青い線の見えるどつしりした窓かけがかけてあつたけれども、それは半分ほどしぼつてあつたので部屋のなかはよく見えた。珍らしい事には、この部屋の中央には、石で彫つて出來た大きな水盤があつてその高さは床の上から二尺とはないが、その眞中のところからは、水が湧立つて居て、水盤のふちからは不斷に水がこぼれて居る。そこで水盤には青い苔が生えて、その附近の床――これもやつぱり石で[illegible]一服[illegible]少ししめつぽく見える。このこぼれる水を[illegible]し薔薇のなかからきらきら光りながら蛇のやうにぬけ出して來る水なのだらうといふことは、後で考へて見て解つた。私はこの水盤には少からず驚いた。ちよいと異風な家だとはさきほどから氣がついて居たものの、こんな異體の知れない仕掛まであらうとは豫想出來ないからだ。そこで私の好奇心は、一層注意ぶかく家の內部を窓越しに觀察し初めた。床も石である。何といふ石だか知らないが、青白いやうな石で水で濕つた部分は美しい青色であつた。それが無雜作に、切出した時の自然のままの面を利用して列べてある。入口から一番奧の方の壁にこれも石で出來たファイヤプレイスがあり、その右手には棚が三段ほどあつて、何だか皿見たやうなものが積み重ねたり列んだりして居る。それとは反對の側に、今、私がのぞいて居る南側の窓の三つあるうちの一番奧の隅の窓の下に大きな素木のままの裸の卓があつて、その上には：：何があるのだか顏をぴつたりくつつけても硝子が邪魔をして覗き込めないから見られない。おや待てよ。これは勿論空家ではない、それどころか、つい今のさきまで人が居たに相違ない。といふのはその大きな卓の片隅から、吸ひさしの煙草から出る煙の絲が非常に靜かに二尺ほど眞直に立ちのぼつて、そこで一つゆれて、それからだんだん上へゆくほど亂れて行くのが見えるではないか。

　私はこの煙を見て今思ひがけぬことばかりなので、つい忘れて居た煙草のことを思出した。そこで自分も一本を出して火をつけた。それからどうかしてこの家のなかへ這入つて見たいといふ好奇心がどうもおさへ切れなくなつた。さてつくづく考へるうちに、私は決心をした。この家の中へ這入つて行かう。留守中でもいい這入つてやらう。若し主人が歸つて來たならば私は正直にわけを話すのだ。こんな變つた生活をして居る人なのだからさう話せば何ともいふまい。反つて歡迎してくれないとも限らぬ。それには今まで荷厄介にして居たこの繪具箱が、私の泥棒でないといふ證人として役立つであらう。私は蟲のいいことを考へて斯う決心した。

そこでもう一度入口の階段を上つて、念の爲め[illegible]をかけてそつと扉をあけた。扉には別に鍵もおりては居なかつたから。

私は這入つて行くといきなり一足二足あとずさりした。何故かといふに、入口に近い窓の日向に真黒な西班牙犬が居るではないか。頭を床にくつつけて丸くなつて居眠りして居た奴が、私の這入るのを見て狡さうにそつと目を開けて、のつそり起き上つたからである。

これを見た私の犬のフラテは、うなりながらその犬の方へ進んで行つた。そこで両方しばらくうなりつづけたが、この西班牙犬は案外柔和な奴と見えて、両方で鼻面を嗅ぎ合つてゐたが、向うから尾を振り初めた。そこで私の犬も尾を振り初めた。さて西班牙犬は再びもとの床の上へ身を横へた。私の犬もすぐその傍へ同じやうに横になつた。見知らない同性同士の犬と犬とのかういふ和解はなかなか得難いものである。これは私の犬が温良なのにも因るが主として向うの犬の寛大を賞讃しなければなるまい。そこで私は安心して這入つて行つた。この西班牙犬はこの種の犬としては可なり大きな體で、例のこの種特有の房々した毛のある大きな尾をくるりと尻の上に巻上げたところはなかなか立派である。しかし毛の艶や、顔の表情から推して見て、大分老犬であることは、犬のことを少しばかり知つて居る私には推察出来た。私は彼の方へ接近して行つて、この當座の主人である彼に會釋するために、敬意を表するために彼の頭を愛撫した。一體犬といふものは、人間がいぢめ抜いた野良犬でない限りは、淋しいところに居る犬ほど人を懐しがるもので、見ず知らずの人でも親切な人には決して怪我をさせるものでないことを、經驗の上から私は信じて居る。それに彼等には必然的な本能があつて、犬好きと犬をいぢめる人とは直ぐ見わけるものだ。私の考へは間違ひではなかつた。西班牙犬はよろこんで私の手のひらを舐めた。

それにしても一體、この家の主人といふのは何者なのであらう。何處へ行つたのであらう。直ぐ歸るだらうか知ら。這入つて見るとさすがに氣が咎めた。[illegible]たことは這入つたが、私はしばらく[illegible]に多少の[illegible]で佇立したままで居た。[illegible]外から見た通りで、高さは膝まで位しかなかつた。ふちの厚さは二寸位で、そのふちへもつて[illegible]、また細い溝が一方にある。こぼれる水はそこを流れて、水盤の外がいつぱいになつたらこぼれて仕舞ふのである。成程、かういふ地點では、かういふ水の引き方も可能なわけである。この家には必ずこれを日常の飲水にして居るのではなからうか、どうもたゞの装飾ではないと思へる。

一體この家はこの部屋一つきりで何もない[illegible]を兼ねて居るのだ。椅子、[illegible]二つ。[illegible]きりしかない。水盤の傍と、ファイヤプレイスそれに卓に面して各一つづつ。何れもただ腰をかけられるといふだけに造られて、別に手のこんだところはどこにも無い。見廻して居るうちに私はただただ大膽になつて來た。氣がついて見るとこの靜かな家の脈搏のやうに時計が分秒を刻む音がして居る。どこに時計があるのであらう。濃い褐色の壁にはどこにもない。ああ、あれだ、あの例の大きな卓の上の置時計だ。私はこの家の今の主人と見るべき西班牙犬に少し遠慮しながら、卓の方へ歩いて行つた。

卓の片隅には果して、窓の外から見たとほり、今では白く燃えつくした煙草が一本あつた。

時計は文字板の上に繪が描いてあつて、その玩具のやうな趣向がいかにもこの部屋の主[illegible]な様子に對照をして居る。文字板の上には一人の貴婦人と、一人の紳士とそれにもう一人の男

が居て、その男は一秒間に一度づつこの紳士の左の靴をみがくわけなのである。馬鹿馬鹿しいけれどもその繪が面白かつた。その貴婦人の裳の襞の多い笹べりのついた大きな裾を地に曳いた具合や、シルクハットの紳士の頬髯の樣式などは、外國の風俗を知らない私の目にももう半世紀も時代がついて見える。さて可哀想なはこの靴磨きだ。彼はこの平靜な家のなかの、その又なかの小さな別世界で夜も晝も斯うして一つの靴ばかり磨いて居るのだ。私は見て居るうちにこの單調な不斷な動作に、自分の肩が凝つて來るのを感ずる。それで時計の示す時間は一時十五分――これは一時間も遲れて居さうであつた。机には塵まみれに本が五六十冊積み上げられて、別に四五冊ちらばつて居た。何でも獨逸の本か、建築のかそれとも地圖と言ひたい樣子の大形な本ばかりだつた。表題を見たらば獨逸語らしく私には讀めなかつた。その壁のところに、原色刷の海の額がかかつて居る。見たことのある繪だが、こんな色はキミラアではないかし……私はこの額がここにあるのを賞嘆した。でも人間がこんな山中に居れば、誰でも見て居なければ世界に海のある事などは忘れて仕舞ふかも知れないではないか。

私は歸らうと思つた。この家の主人には何れまた會ひに來るとして。それでも人の居ないうちに入込んで、人の居ないうちに歸るのは何だか氣になつた。そこで一層のこと主人の歸宅を待たうといふ氣にもなる。それで水盤から水の湧立つのを見ながら、一服吸ひつけた。さうして私はその湧き立つ水をしばらく見つめて居た。かうして一心にそれを見つづけて居ると、何だか遠くの音樂に聞き入つて居るやうな心持がする。うつとりとなる。ひよつとするとこの不斷にたぎり出る水の底から、ほんとうに音樂が聞えて來たのかも知れない。あんな不思議な家のことだから何しろこの家の主人といふのはよほど變者に相違ない。……待てよおれは、リップ・ヴァン・ヰンクルではないかしら。……歸つて見ると妻は婆になつて居る。……ひよつとこの林を出て、「K村はどこでしたかね」と百姓に尋ねると、「えつ？ K村そんなところはこの邊にありませんぜ」と言はれさうだぞ。さう思ふと私はふと早く家へ歸つて見ようと、變な氣持になつた。そこで私は戸口のところへ歩いて行つて、口笛でフラテを呼ぶ。今まで一寢一顏を注視して居たやうな氣のするあの西班牙犬はずつと私の歸るところを見送つて居る。私は呆れた。この犬は今まで柔和に見せかけて置いて、歸ると見てわんわんと後から咬みつきはしないだらうか。私は西班牙犬に注意しながら、フラテの出て來るのを待兼ねて、大急ぎで扉をぴつしやり音を立てて閉めて出た。

さて歸りがけにもう一ぺん家の内部を見てやらうと、背のびをして窓から覗き込むと例の眞黒な西班牙犬はのつそりと起き上つて、さて大机の方へ歩きながら、私の居るのに氣がつかないのか、

「あゝ、今日は妙な奴に駭かされた」

と、人間の聲で言つたやうな氣がした。はてな、と思つて居ると、よく犬がするやうにあくびをしたかと思ふと、私の瞬きした間に、奴は五十恰好の眼鏡をかけた黒服の中老人になり大机の前の椅子によりかかつたまま、悠然と口には未だ火をつけぬ煙草をくはへて、あの大形の本の一冊を開いて頁をくつて居るのであつた。

ぽかぽかとほんとうに温い、春の日の午後である。ひつそりとした山の雜木原のなかである。

(大正五年十月作)

窓展く

電車通りから四五間奥まつた路地に、鳥籠のやうな恰好の揃ひの家が七八軒一廓をしてゐる。私の家はその一廓のうちで表に一番近いところにある。それでなくつてさへ小つぽけな貸家の、ましてや街の中のことだから、庭などといふもののあらう筈はない。でも、申しわけだけに裏に三坪程あるにはある。しかし、そこは、さる高貴な人のお邸に接してゐて、高い煉瓦塀で、ところがその煉瓦塀だけでもまだ不充分と見えてその上へもつて来てトタン塀をもう一層高くつぎ足して築いて、完全に日光を私の庭から遮つてゐる。おかげで立枯れになつてしまつた躑躅が二本、それにこれもやはり枯れ木の柘榴が一本。躑躅の方はひつこ抜いて、この片隅へ隠して置いたが、柘榴は厄介なことに、ちよつとした大木なものだから、どうにも仕方がない。手軽に抜き取る事もならず、抜いたにしたところが、それの捨場所もない。どこかへ持ち出さうにも、この家の雨樋はぴつしり隣家へくつついて、人ひとりがどうやら辛うじてといふほどの、空地とも呼べない空地なのだから、こんな枝を張つた木などは五十片にでも切り刻まなけや、外へ運び出せもしない。もともと腰かけに住んでゐるのではあり、それ程の面倒をするがものもないので、木は枯れたままで立つてゐる。その枯木がまた、表を自動車さも疾走する度にびくびくふるへる。それが側の煉瓦塀の上のトタン塀に、小枝が觸れてゐるものだから、ガタンガタン業業しい音を立てる。家の小屋組は地震ですつかりゆるんでしまつたところへこの物音だから、知らない客はまた地震かと目を見据ゑるほどである。かういふ困つた木のほかには、家主が縁日ででも仕入れて植ゑたらしいつまらない灌木がそれでも、不思議に枯れもせずにゐる。これが色も香もない私のところの庭である。私は時時故郷の田園の廣い庭を思ひ出して、自分の都會での居住を、屢自ら呪ふことがある。ついでに一般の都會居住者をも憐れむのである。……

現在、この家に住んでゐるのが四人——でも、ひとりに四疊以上の間を占めることが出来る。

その人人とは第一が私。

それからA。

それからR。

それからT。

最後の人物だけはちよつと紹介するが、これは私の内縁の妻である。半年ほど前からこの家にゐる。

で、大たいに於て私は幸福だと言つていい。即ち、平凡にもの事が運んでゐるの謂である。

そこでついこの間のことであつたか、——さう、まだ十日とは經つまい。或る雨あがりの美しい朝であつた。楊枝をつかひながら見てゐると、三坪ほどの空地を掃くためにRは、庭箒と塵とりを持つて、雪隠のうらへ出た……

—や！ どうもすみません。あとで掃除をします—

突然、さう言つたのは、背中合せになつてゐる豆腐屋のおやぢだつた。それが思ひかけないところから首を出してゐたのだ。おや！ 妙なところへ穴をあけやがつたな。私もその時初めて氣が付いた。それは私の家の雪隠の窓と向ひ合つて、豆腐屋では一つの新らしい窓を設けた

のである。いや、まだ出來上つてはゐない。出來上りつつあつた。大工も何もない、ただ男がふたりで、鋸をゴシゴシ操りながら家の背中へ無雜作に、穴をあけたのである。大きさはまづ二尺平方だつた。朝寢坊な私の家でまだ氣づかないうちに、大部分の仕事は已に終つてゐて、細部を工夫してゐるところだつた。

私は豆腐屋の言葉には返事もせずに部屋へかへつた。言葉數の少いRも何一つ答へた樣子はなかつた。

「今、ものを言つたのはうちへ言つたのぢやなかつたの？」Tがさう尋ねた。

「さうだよ」

「なぜなんとか返事をなさらないの？」

私はこの窓が氣に入らなかつた。それや、自分の家の背中へ自分で穴をあけるのは、こちらで文句はないが、私の家の雪隱とあまり近いからだ。彼の家と私の家との間はほんの二尺とはない。私の雪隱の窓から手を出せば、彼の窓に手がとどくところではない。手は窓をとほして彼の家の空氣をつかむことさへ出來るのだ――それよりも私はもともとこの豆腐屋を甚だ憎んでゐる。彼は、私の家から彼の屋根へ唾をするとか、ものを投げたとか、さては自分の家の背中で埃を燃したりして貰つては、ここにはいい布團が納つてあるから燻ぶるとか、さういふ抗議を持つて家主へ私のうちを排斥に行つたことがある。彼の屋根が汚くなることも本當ではあるし、埃を燃したので誤つて彼の家の板が少しこげたことも事實である。そのころ何しろ男ばかりの家でだらしなくはしてあつた。しかし私の家の誰もわざわざそのやうなことをしたことはないのである。私の家の二階の窓から何けなくやることが、みんな彼の家の屋根に落ちかかる。問題は家があんまり接近してゐることだ。なるほどまた、そんな市中で火を燃しては惡いとは云へ、たかが埃でせいぜい煙草の吸殼が落つて汚いからといふぐらゐのことだ。それを直接私の方へ注意をすることか、わざわざ家主へ言つて行く程のものはないのである。しかし言はれてみればこちらが惡いのだからあやまつては置いた。しかしこちらから喧嘩をするつもりなら、彼と同じぐらゐな言ひ分はあつたのだ。雨がふると彼の家の物置きの屋根のしぶきが私の家の廊下へはげしく飛沫をあびせかけて、そこを開けては置けない。それは向うの屋根が遠慮もなくこちらへ突き出して來てゐるからだ。また火を使ふ商賣である彼の家の煙突が非常に低くつて、風の工合でその煙が私の二階へ吹き込む。煙だけではない、その低い煙突のところへ鉋屑や紙屑を放り込むと見えて、その燃料の形をした火の子が盛んに舞ひ込む。夏のうち、白い干しものでもしてゐると、その爲めに汚れるほどである。それだけの低さの煙突ならば、きつと石炭を燃す筈で許可されてゐるに相違ない。だが、近所合壁で一一そんなことを言ひ合つてゐては仕方がない。私たちはただ相手が自分の受ける不快だけ知つてゐて、自分の與へる不快を一向氣づかない蟲のよさを苦笑してすましてゐた。

それだけならば何でもなかつたのだが、この春のころの事である。私は或る家から小犬を預けられた――轉居するに就て今度の家は新築で、隣家との間にまだ垣根が出來てゐない。直ぐに垣根をこしらへるからほんのしばらく預かれといふのであつた。（私の大好きな有名たつた）それはまだ二ケ月とは經たない小犬だつたので直に私の家に馴れた。それが或る朝見えなくなつたのだ。搜すと、近所の子供の話に、犬は豆腐やのおやぢに投されてどこかへ持つて行

かれたといふのである。理由は、小犬が豆腐やのひとりにじやれついて子供は大きな聲で泣いたのださうである。もう少し大きな子供の見聞では、おやぢがいきなり出て來て、鑑札も何もない奴だから殺してもいいのだ。狂犬かもしれないぞと言ひながら太い[illegible]の端で頭を打ち据ゑた。小犬はその場でクルッと一まはりするとそのまま打倒れた。そいつを豆腐やはつまみ上げて行つて、大通りの泥溝のなかへはふり込んだといふのである。そこへまたもうひとり別に近所のそばやの小僧が來て、犬はまだ死んではゐない、溝のなかでもがいてゐたのを小僧自身拾ひ上げて、泥だらけだつたから水をかけて洗つてやつて來たと知らしてくれた。飯たきを賴んでゐた婆やが、その事をまだ寢てゐる私に報告に來て、その瀕死の小犬を一たいどうしようかと相談をした。仕方がない、放つて置かう。死にさうになつてゐるのを動かすのも惡いし、それよりはそんなに苦しんでゐる者を見たくない。その代り死んでしまつたら、おれが自分で行つて豆腐屋の店さきへ投り込んでくれるからと言ひながら、私は起き直つた。婆やは自分のせゐのやうに詫びて、庭から外へ出さないやうに注意してゐたのだつたのに、犬は自分で出たのだと言つた。また、もう豆腐屋では二三日來[illegible]を[illegible]してゐたが、[illegible]——犬は[illegible]てやつた寢床を寒がつて、豆腐屋の床下へもぐつてそこに寢てゐた。時時鼻をならすものだから豆腐やでもうるさいと思つてゐた折からだつたのだらうとも言つた。婆や自身もうるさがつてゐたらしい口吻で私を一そう不機嫌にした。窓の外はじめじめした春雨であつた。私は豆腐屋のトタン屋根へ唾を吐つかけてやつた。さうしてこんなせせつ込ましいところへ犬なんど預けに來た人間まで腹立たしくなつて來た。

　通りには死にかかつてゐる小犬を見るために人だかりがしてゐた。とうとう來客のひとりが話した。それや私の家の犬だ。まだ死なないでゐるのかと問ふと、八分どほりは死んでゐたといふ事であつた。そのうちに私の家の前がどやどやと騷がしくなつて、近所の子供たちがうちの婆やを口口に呼びかけた——をばさん。犬が來たよ。をばさん。犬が來たよ。

　よろめいて辛うじて歩いてゐた。一心に地面を嗅ぎながら、目はつり上つて、呼んだけれども瞳を動かすことさへも出來ないらしかつた。不憫を感ずる前に物凄かつた。頭は腫上つて、ぐつしよりと泥に濡れた體は板のやうにつぶれてしまつてゐた。まだ精氣も[illegible]なかつたのである。食物を與へたがもとより見むきもしなかつた。二三日間、小犬は水さへ飲まなかつた。しかし回復した。[illegible]

よろめいて歸つて來た犬の[illegible]

[illegible]……俺は[illegible]

知れない。……俺のまはりのこの人たちは俺を見物に來てゐるのだな。……それにしてもここはどこだらう。さうだ。ここはどこかの[illegible]たちやないか。——俺は道ばたで[illegible]ゐる。みんなは俺を宿なしの野良犬だと思ひ込んでゐるに違ひないが、俺はそんな者ではない。ちやんとした家がある。家の人たちは俺の事を案じてゐるだらうな。然うだ。ここでこのまま死んだのでは俺は死恥を曝すのだ。ともかくも俺はどうにかして自家へ歸らなけやならない。これがこの際の急務だ。……そこで、犬を[illegible]て倒れてゐた私は、よろめきながら立つて——……それにしても俺の家は一たいどつち方角だつたらう。——犬の私は目を引きつらせて鼻を地面にすりつけてふらふらと歩き出した……

すべてはTがまだこの家へ來る以前のことであつたから、彼女は私が豆腐屋を憎んで口も利かない理由は知らなかつたのだ。實際、私は諸君が冷靜に考へるより案外この豆腐屋を憎んでゐるのだ。最初はただ身勝手な男とばかり思つてゐたのを、その後、花を愛するものは詩人だ。動物を愛するものは善人だ、といふ私の箴言によつて、私は豆腐屋を惡人の仲間へ入れてしまつた。又、鑑札を受けてゐないから殺してもいいといふ彼の正義觀がへんに私に氣に入らなかつた。私の家では彼から豆腐を買はない事にした。尤も豆腐を私はあまり好きではない。ところでこの男が私の家の便所や庭といふのも、前述のとほり滑稽だが、を唯一の眺望として勝手に窓をつくる。それから、いやどうも濟みませんなどと、自分の都合の惡い時にはなまなか温和さうに人並の口を利くのだ。そんな男に返事をする口は私は持たない。私は身分によつて人を侮蔑した覺えは一度もないだけに、相手を高が豆腐屋のおやぢとは思へないで、その厚かましさを憎むのである。そのくせ私は當の豆腐屋のおやぢの顏は別に見覺えてもゐない程である。この種の私の偏屈は實におとなげなくをかしいものであることを私は自分で氣がつく。どうも、をかしくつても仕方がない。

ともかくも、私は豆腐屋には返答をしなかつた。私のつもりでは、豆腐屋がそこへ窓を設けたことを、私が認めないのである。

窓と窓とはこのやうに向ひ合つて、私の家の便所からは隣の一室は見とほしになつた。先方でそんなへんなところへ勝手に窓をこしらへたのを、何もこちらで遠慮をしてやることはないといふので、私は敢て私の便所の窓をしめてやらない。先方ではガラスに紙を張つたものを嵌込むやうにこしらへてゐるのに、何故かそれを開放してある。かうして私の便所の窓も亦、一つの展望を持つことになつた。

その部屋といふのは、離れ座敷で——座敷といふのもをかしいが、ともかくも一つの獨立した屋根の下にある。そのトタン屋根は前に私たちがそこを汚くするといふので抗議されたところだし、その床の下に例の小犬がもぐつて行つたところなのだ。屋根の大きさから判斷すると六疊ほどある。しかし、便所の窓から見えるところによると押入れがあるやうだから四疊半だらう。そこにひとりの男が世帶を持つてゐる。どうも新らしくそこへ住む事になつたらしい。豆腐屋が部屋貸しをしたのだらう。さうしてあまり薄暗いとでもいふので、あんなところへ窓をきつたらしい。この同居人——私にとつて新らしい隣人は三十すぎの男だつた。それ以上には、どんな顏の、何をする男だらうといふ程な興味すらも私には持てなかつた。ただその新らしい窓に對する敵意もどうやら薄らいだ。豆腐屋のおやぢなら、もし間違つて紙屑一片でも投げたら吐鳴りつけてやらうぐらゐの氣持は、この窓に對してもう無かつた……

「男やもめに何とかと言ふけれども、一たいどんなことをして暮してゐるのでせうねえ」女には多少の興味があるらしくTはそんなことを言つてゐたけれども、その後、話題にならなかつたところを見ると面白い發見も別になかつたらしい。それが、一昨晩のことだつた——不意にTが下から呼んだ。

「Aさん！　Rさん！　おりて來てごらんなさい。珍らしいものがあるんだから——」

何か冗談らしいのだが、その聲がほんとうだつたからAもRも下りて行つた。それから梯子段のところで何か話し合つてゐる。客といふのは極く親しい人ではあり、私も何かと思つて、客をはふり放しにして下りて行つてみた。Tは樺

子段の中ほどにゐて、側の窓の方を指しながら性急に囁いた――

「いま、お嫁さんが來たんですよ――え、お嫁入りですよ。周旋屋がつれて來たの。周旋は兩方から十五圓づつとるのですね。金を受取つてゐたわよ。それから里がへりがどうのなんて、いろんなことを言つてゐるのが聞えたわ……。つまらない事を發見して來てTは子供のやうに珍しがつて喜んでゐる。一氣の早い。もう丸髷を結つて來てゐるのよ。ちよつと覗いてごらんなさい」

私もちよつとした興味に驅られて覗いて來てみた。なるほど丸髷の女二十五六のがひとり窓の正面に見える。しかし私はそれ以上に覗き込むほどの好奇心もなかつた。ただ、こんなところから、こんな結婚式を見ることが一種奇妙にをかしかつた。ユーモラスといふことの正當な意味はからでもあらうかと思へる。聞けば隣人はともかくも羽織にセルの袴をちやんと着用してゐるさうである。眞面目なめでたい結婚に相違ないのだ。その花婿に周旋屋が、お前さんもまあそのうち、それや一週間後でも半年後でもいい、懷の都合もあるだらうから工面のいい時に、一つ花嫁の實家へ二人づれで行つて安心もし安心もさせたがよからう」といふやうなことを云ひながら、十五圓受取つてゐたさうだ。外にも三四人ぐらゐの人がゐると見えて、酒氣を帶びた談笑の聲が手にとるやうに聞えて來た。

「さうさう」とTが思出したらしく言つた。「さう言へば、きのふお友達らしい人が來て話をしてゐたのはやつぱりお嫁さんの事だつたのね。十八九のがひとり、外にもうひとりあるがそれは少し年をとつてゐる。二十六七だから、若い方がいいだらう。とさう言つてゐたが、年とつた方がよかつたと見えるわね。歸りぎはにそのお友達のやうな人が、財布でも開けて云つたのでせう――つまらないな、一錢銅貨一つだつてありやしないといふと、だからさ、飯ぐらゐ食つて行けよ――と隣の人が言つてゐてよ。あれ新潟の人ぢやないか知ら。そんな言葉つきだけれど」

すると無口のRが言つた。「今、考へるとをとつひも面白いことがあつたのです――やつぱりそのきのふの友達かも知れない。ふたりでね、自由結婚論をしてゐたつけが――

「ふむ。どんな自由結婚論をね?」

「いや、何でもない、ただ、男は三十以上、女なら二十五以上、勝手に結婚することが法律上いいといふやうなことだけですけれどね」

「どんな男だい、俺はよく見ないが」

「さあね。わからないわ。髪を分けて眼鏡をかけて、ニコニコがすりの單衣などを着て、何を商賣にする人だか知らないが、夜なべに袋はりなど内職してゐたわ。きつとお嫁さんを貰ふのでかせいでゐたんでせう。簞笥見たやうなものもあるし、鼠入らずなども買つて來てありますよ」

隣の談笑は十一時半ごろまでつづいた。私たちもそのころまで隣の噂をした。それぞれ寢に就かうといふので便所へ這入ると、又新らしい發見をした。それは手まはしのいい丸髷の花嫁と思つたのは間違ひで、あれはいづれ世話をした友達の女房か何からしくもう歸つてしまつてゐて、その代りにはやはり昨日の話のとほり若い十七八の島田髷がひとり殘つてゐたさうである。――これもやつぱりTの發見である――

「ガスの着物にメリンスの帶で島田だけはでも結ひ立てよ」私はまた私で誰も見なかつたけれど男の聲だけを聞いた。それは何のことだかは知れないけれども「正直にやつてさへすれば」といふ一言だけだつた。

寝る前に二階の窓から首を出してみると十三夜のこの上なく靜かな月夜だつた。そのせゐもあるだらう、私は「正直にやつてさへすればね」と言つた新夫婦を祝福する好い隣人の心を持つてゐた。

次の日の朝になつて、——つまり昨日の朝だが、私は多少の好奇心を持つてそつと隣をうかがつて見た。男は窓の方をうしろにしてもつと明るい方に机に向つてゐた——そこに机があつたことは、少し意外だつた。男はその机によつて手紙を書いてゐるらしい。すでに書き上げたのが五六通ばかりもそのうしろに置いてある。女は？ 少しのび上つて注意してみると男のうしろに、お尻を向けあつて疊の上へこごみ込んでゐる。さういふ新境界に於かれた男女の自然な狀態として單にてれてゐるのだといふやうにも思へるし、また妙に不安のある靜かさのやうにもある。何か氣に入らない事があつたのぢやないかなと、人ごとながら少し氣がかりだつた。朝飯を了つてそれから新聞をのこりなく見てから、私は晴をほくために庭の方へ首を延べた。さうして何氣なくその方を見ると、あの小窓はここからも見えるので、そこへ深く肘をかけた女がむつつと横向いたまま私のすさまじい庭の土を見つめてゐる。この朝はその前夜のよい月夜にくらべて思ひがけない雨だから、そのやうな樣子をしてゐる女が少し陰氣すぎていけない。

それでも、そのうちに、私は隣から洩れたごく低い笑ひ聲を一度聞いた。

今日は昨日よりもよけいに話聲がするではないか。

今も笑ひ聲が聞える。又、鋸の音のやうなのがしてゐるが、今度はもう窓を展くのではあるまい。恐らくは閉すのであらうか——工合の思はしくなかつた障子をもう一度細工しなほして。それがいい。私たちはもう覗かないつもりだけれども、それでも、もう秋冷を覺えるではないか。

「秋ふかき隣は何をする人ぞ」

（大正十三年九月作）

よきひとよ

よきひとよ、はかなからずや
うつくしきなれが乳ぶさも
いとあまきそのくちびるも
手をとりて泣けるちかひも
わがけふのかかるなげきも
うつり香の明日はきえつつ
めぐりあふ後さへ知らず
よきひとよ、地上のものは
切なくもはかなからずや。

（「殉情詩集」より）

こころ通はざる日に

こころを人にさらせども
げにもとなげく人ぞなき、
こころのいたで血を噴けど
あなやと叫ぶ人ぞなき。
すまじきものは戀にして
苦しきものぞこころなる、
こころはいとし、すべもなし、
手にはとられず目には見られず。

（「殉情詩集」より）

一夜の宿

「私はこの間、八王子の方へ行つて來ましたよ……」

さう、私に話し出したのは無名の青年畫家S・Tであつた。

———

S・Tは私の好きな男だ。五六年前に一二度人につれられて私のところへ遊びに來たことがあつた。無口な朴訥な青年で、彼をつれて來た男のおしやべりなのといい對照をしてゐたが、しかし彼の一見地味な畫が彼の爲人を語るには相當に雄辯であつた。荒涼とした砂丘の畫が澤山あつた。何でもない村の風景があつた。どれもこれも畫學紙八つ切りほどのスケッチブックのなかに、水彩なので、もとより彼の畫才を十分に觀ふことは出來なかつたにしても、その小さな畫面には相當につつましい靈があつた。私はうまさは一とほりだと思つたがその心持が同感出來た。私は彼とは永い友情が結べさうな氣がした。彼の重厚な氣持が私に素直に感ぜられたのだ。それだのに私と彼とはさまざまな事情で逢はなかつた。それが四五年前のことなので、私も自づとS・Tのことを忘れてしまつてゐた。或る日——ついこの間の或る日、彼が突然私を訪ねた時には、私は全く思ひかけなかつた。彼は袂のなかや懐のなかなどにその後の習作をどつさりねぢ込んで、それを私に見せに來たのであつた。私は彼に會つた時に一度に二つの喜びを感じた。彼が私を忘れずにゐてくれた事、又、私自身が彼の爲人を觀察した目が間違つてゐなかつたこと。私たちは暫くぶりで逢ひながら每日逢ふ人のやうに話し合ふことが出來た。この時を最初にしてS・Tはその後、よく私のところへ遊びに來る。

彼は私の作品の「お絹とその兄弟」といふのを好きだと言つた。あの小説のために插畫風の繪を描いて見たいと言つた。そのためには一度、折からの陽氣でもあるし、八王子の方へ遊びに行つて見るとも言つた。私はS・Tがさう言つてくれるのを嬉しく思つた。何故かといふのに、彼は二人がかけへだてて逢はなくなつてから、私に逢ふことの代りに私の作品を讀んでゐてくれたらしいからである。それに彼が好きだと言つてくれたのは作者たる私自身にも氣に入つてゐるものではあり、S・Tのやうな性格の人にはいかにも同感されていい作だと自分でも信じてゐるからであつた。

「八王子の地方は私も知つてゐるのです」と彼は言つた。「五年ほど前にちよつとあの邊を歩いたことがありましてね。……あの近所は面白い。いかにも田舍田舍してゐて、私もあの平凡なところが好きです——さうだ。近いうちにもう一ぺん行つてよく見て來ませう」

S・Tがそんなことを言つてゐたのが、その次に訪ねて來た時には、ほんとうに八王子の方へ行つて來たと言ふのであつた。

彼はどこから話し出していいか戸惑ひしてゐたらしかつたが、やがて語り出した。

———

ふるい事に遡らなけやならない。もう五年の前のことである。そのころS・T自身は東京に近い或る小都會の中學校を出て、自分では畫

の修行をして見たいと思つてゐた。けれども父は自分に小學校の先生になることを求めた。父自身は小學校の校長で、自分は長男ではありながら、小學校長ぐらゐの俸給ではその長男ひとりを東京の學校へ修行に出すだけの資力がないのである。一たい自分のうちは家族が多かつたし、それに自分の修行したいといふことは物質的には望みの尠い學藝であつた。けれども自分は子供のころから繪描きより外には何にもならうとは思つても見なかつた。自分の父は田舍の古い校長などによくある型で漢學の素養などのある嚴格な人ではあつたけれども、それでもまだそんなに年はとつてゐなかつたから、さうわからずやといふほどでもなかつた。いやがる私を無理に教員にしようと命じもしなかつたが、事實、やつぱり私を東京へ出すのは物質的に苦しかつたのだ。それを看て取つて私は家から逃げ出した。東京に叔母があつたから、さうしてもしどうにかして自活の道を立てることさへ出來るなら父は、私に私が繪の修學をすることをさら拒みはしないだらうと信じてゐたからである。

　私は叔母の家へ來て、しかし自活をする方法などが、この大都會にさうやすやすと轉がつてゐよう筈もないし、私は仕方なくただごろごろしてゐた。私が思ひ切つて家を出て來た氣持を父も察してくれたものと見えて、別段に私を引摺りかへさうともしなかつた。それにつけても、自分がそんなにのらりくらりと一日一日を過してゐることが父に對しても亦、叔母に對しても心苦しくて仕方がないと思つてゐるやさきに、私は或る日ふと新聞の「人を求む」といふ欄で仕事の口を見つけ出した。それは八王子の或る織物會社で友染の下繪描きを募集してゐるのであつた。さうして相當澤山あつた同じ求職者のうちで、どうしたはずみだつたか自信も經驗も一向にない私が雇入れられることになつた。

　會社の仕事場は二子の渡しの手前の瀬田といふところにあつたので、私は新町の大工の二階を借りてそこから勤めてゐた。私はほんのしばらくその仕事にたづさはつたけれど、我儘な話だがその仕事はどうも私の肌合に合はなかつた。私には父譲りの頑固な性質があつて、それに私には許嫁もあるし、自分で吹聽するのも妙なことではあるが私は男女關係のことではトルストイアンでその主張を實行してゐた。私の周圍の人たちはそんな點ではごく自由なのが、私には放縱に感じられた。そんなことを考へてくると私は女の長襦袢などにするやうなそんななまめいた圖案などをしてゐることとすら、どうやら、幼時から父に受けてゐる感化と合致しないやうな氣持にさへなつた。そんな馬鹿なことを考へて見るうちに、私は、一そ、これはもうこの仕事はよした方がいいと思ひ立つた。思ひ立つと私はもうすぐにそのとほりにした——私はそんな氣質ではあつたし、また世間見ずで、年から言つても二十の時であつたから。

　四月の終りで、私はその月のさまざまな仕拂ひをすませると懷中には四十何錢か殘つてゐた。無駄のない生活をしてそれでその生活費を仕拂ふと私の手に自然殘つたのがそれだけなのだから、私がその時もらつてゐた給料はほぼわかるでせう。私は東京へかへつても仕方がないと思つた。それよりは京都へ行かうと決めた。全く無鐵砲なことであつたのは四五日すると直ぐにわかつたが、私はその四十何錢——たしか四十二錢であつた——を持つて、中仙道を京都の方へ拔ける計畫をしたのである。さうして出發した。

　その第一日である。一日中歩き通して日のく

れなかつたところは吉川といふ村であつた。私は長い坂道を下りて勞れ切つたところで、道ばたにあつた一軒の寺へ行つて宿を乞ふと、出て來たのは中年の坊さんであつた。私の話を聞くと急にうさん臭さうに私の樣子を見てから言つた

「今どきそんな馬鹿なことを言つてはいかん。若い者のくせに、京都へ行かうと思へば汽車になり何になり乘るものはある。それをせずにおまけに金も無しで行つて見ようなどとは、以つての外のことだ。ほんとうに金が無いなら、早く東京へ歸つたがいい。ここではそんな人間の宿は出來ない」

私はその次には、お寺から五六町も行つたところで或る水車小屋へ這入つて行つた。そこではまた、自分のうちへとめない代りには、もう少し行けば木賃宿のかたまつた場所があることを教へてくれた。――この水車小屋のところから少しばかり行くと、長さ二間とはない板橋がある。その橋を渡つてほんのしばらく行くと今度は長い橋がある。この橋のあるところが多摩川だが、そこを渡るには橋錢を三錢出さなけやならない。木賃宿はその橋を渡つたところに五六軒もあるといふのだつた。どの家でも泊めてはくれさうにもないのを見て私は仕方がなければ、もうその木賃宿へ泊るつもりでゐた。けれども四十何錢のうちから、旅に出ると早々、たとひ木賃でも宿錢を拂つてとまるのはもつたいなかつた。そんなことを考へながらよたよた歩いてゐると、これがさつき敎へられた短い板橋であらう、なるほど二間とはない。古くなつて手すりなどが朽ちてゐる。その下を水が四五尺、川原が四五尺、淺くて美しい流が夕闇のなかでせせらぎを立ててゐる。そのせせらぎが私の心持をほんとうに旅人にしたものである。

その橋を渡つた時、私はうしろから一臺の馬車に追ひ越された。この馬車は空つぽではあるがその構造から見て、礫を運ぶものだといふことがすぐわかつた。その馬車を見送るともなく見送つてゐると、私は自分の行く手の方に、白く暮れなやんでゐる夕方の川原道の中ほどに物置小屋が一軒あるのに氣がついた。

――これはいい具合だ――

と、私は思つた。言ふまでもなく私はこの小屋で一夜を明してやらうと思ひついたからである

しかし、私がその納屋のやうな建物の前へ來た時には、この小屋がやつはり人間の住家であつたのを知つて多少意外でもあつたし、それよりはがつかりした。さう言へば、さつきの荷馬車の男が、この小屋の前でちよつと車の早さをゆるめて、ここを素通りしなかつたやうな氣がしたが、この家のかいとの方は半分だけ開けられてあつた。私はそこから中をのぞき込んだ。中は眞黑で、けれども竈には火が燃してあつて、その前には女が彼女自身の焚く火で照し出されてゐた。

私はつかつかとその家のなかへ這入つて行つた。さうして第一の機會ではあのお寺で、第二の機會ではあの水車小屋で言つたのと全く同じ言葉を繰返して、一夜の宿を賴んでみた。

土間にある竈の前にゐる女は全くとり合ひさうにもなかつた。――私のうちはこのとほり、お寺や水車小屋のやうなきれいなところぢやないから――私が前に二軒の家でもことわられて來たことをも言つたものだから女はそんなことを答へた。女といふのは四十に手のとどきさうになつた醜い顏であつた。――焚火で照し出されて浮き出してゐる。家の外を折から荷馬車が通つた。それはさつき私を追ひ越したあの荷馬車が、もう一度引き返して來たのだが、女はその方へ目を向けた。それから馬車の男とかの女と

は通りすがりにちよつとした言葉のやりとりをした。田舍言葉でよくはわからないながら、今日一日の仕事がすんだことを喜び合つて、明日までの別れをのべる親愛の言葉であつた。

私は彼等の言葉を聞きながら、斷られてゐる自分だのに、どつかり腰を下してしまつてゐた。意地にも立つてはゐられないほどくたびれ切つてゐたから。この外から見て納屋のやうな家は中へ這入つても納屋のやうであつた。半分は土間で、自分の腰をかけた茣蓙敷の床は三疊とはない。彼女が言ふとほり全くこの廣さのなかへ男ひとり餘分に泊めることは出來まい。――言ひ忘れてゐたが、この醜い母親のそばには八つぐらゐの男の子と四つぐらゐの女の子とが纏りついて、私を不思議さうに見上げてゐた。

私は言つた。「實は、私は屋根さへあれば物置小屋のなかでも何處でも寢るつもりだつたのです。床のあるところぢやなくてもいい。土間へ、その竈のそばに寢させて下さい。藁を自分で搜してくるから……」

「さうまで言ふのなら、」と女は言つた。「どうにかすれば泊めて上げられるでせう。」さう答へながら、女は手を差しのべてそこらにあつた豆らんぷへ、竈のなかの火を一たん藁くづにうつしてその藁くづから豆らんぷへ灯をともした。さうして改めて私の顏を見た。

「あなたはきれいな着物を着てゐる」とその女は言つた。その言葉の意味を解きかねてゐると、女は言ひつづけた。「東京の人はみんなきれいななりをしてゐる。だからお金がないと言つてもいい。田舍者は本當にはしない」

彼女はその竈の上にかけてあつたお湯をばけつにうつしたがそれへ鹽を入れて、その鹽湯で私に足を洗へと言ふのであつた。それからこれとは別に湯吞へ鹽湯を飮むためにくれた。彼女が言ふには、いつか母と娘づれの巡禮をやつぱりこの家にとめた事があつたさうである。その女巡禮が這入つて來るとまつさきに彼女に求めて、自分の娘に飮ましたものは鹽湯であつた。それから足を洗ふ鹽湯であつた。鹽といふものは尊いもので、それで足を洗へばつかれは直るし、それを飮めば一時の飢ゑを忍ぶことも出來る――とさうその巡禮が言つた。「あの人たちは長い旅の經驗からそんなことをおぼえたのであらうが、あなたも」と、私にこれから長い旅に出ようといふのだから心得て置いたらいいであらう。「鹽湯ぐらゐなものはどこの家だつてもくれるから……」

私は彼女のすすめてくれるままに足も洗つたしお湯も吞んだ。そのお湯を吞みながら、私はさもしい事をちよつと考へたが、それはもしやこの家では鹽湯をくれただけで御飯はくれないのではないかといふことであつた。寢るところが決ると私はひどく空腹になつて來たのであつた。でも私はまもなく皆と一緒に御飯を貰つて食べた――南京米のつめたい麥飯がぼろぼろになつてゐた。さうしてそれを私にくれるために、彼女とその子等はいつもより少くたべたであらうことは言ふまでもない

女は、瀬田からこの立川まで、私の歩いて來た里程を十二里ぐらゐと言つてゐた。

私たちの坐つてゐる茣蓙敷といふのは、私がさつき足を洗つたりしてゐる間に見たのだが、それは土の上から一尺ぐらゐ高いところに薪にするやうな雜木の伐り倒したのを渡しならべて、その上に板をもう一つ敷き並べて、茣蓙を敷いてあるのである。その茣蓙敷の廣さはさつきも言ふとほりまあ三疊あるなしである。緣の端の上へちよこんと置かれてある綠しんの豆らんぷの光は、そんな狹いところをさへ、やつと照しかねてゐる――

御飯がすんだ時に、女は佛壇のやうな[illegible]の

やうなものへ御燈明を上げた――それまで氣がつかなかつたが、壁の隅の高いところにそんなものがあつたのである。さうして子供たちや私にはかまはないで、女は一心に御經を上げ出した。それは彼女の日課の一つであつたと見えて、慣れてゐる子供たちは音無しくそれを聞いてゐた。讀經が終ると彼女は立つて行つて御燈明を消してから、ふたりの子供たちの相手になつた。彼女は男の子に言つた――あした東京へ行つたらお前には二圓で袴を買つて來てやらうな。それからおみさには……――おみさといふのがその女の子の名であらう。その子の頭を撫でながら母は明日の土産を約束してゐた。その品物が何であつたか私は今思ひ出せない。ただその時私は、この貧しいうす暗いしかし情味には決して缺けてゐない團欒や、彼女の旅人をもてなす樣子や、讀經の日課などのことを思ひ合して、その醜い女が案外にも美しい心持を持つてゐる人に思へたのであつた。

　彼女は私の方を顧みて何をあきなひする人だとたづねた時には、私は正直に畫描きの修行をしてゐるのだと答へて、手輕に自分の身の上――と言つて何もむつかしいこともない身の上を話したりした。女は私に是非とも一つ描いて貰ひたいものがあると言ひ出した。私は承知したが、それは彼女自身が持つてゐるものを描き直すのだと言つて、彼女がそれを搜しに立つた時には、私はちよつと何か出てくるかといふ好奇心があつた。それは佛壇のなかに仕舞つてあつたが、見ると金毘羅さまの御神像であつた。それが彼女の御守りだけれども御神像は古くなつて拜みにくくなつてゐるから寫しなほしてほしいといふのである。なるほど煤びてもゐたし手擦れてもゐた。もともとさう複雜なものではなかつたから、丹念に書いてやつたけれどもわけなく出來た。私は秘藏してゐた墨をつかつて描いてやつた。彼女はひどく滿足して、一生大事に保存すると言つた。

　私はもう溫い季節だしそれに外套を持つてゐるからふとんはいらないと辭退した。それでも彼女は、ここはこんなところだから寢てしまふと川風の寒いのがまだ身に沁みると言つてどうしても私にふとんを一枚貸せないでは措かなかつた。親切は有難かつたが、そのふとんがまたそれをかつぐと垢がこびりついてゐるので膚のさはるところがひやりとして却つて寒い。何でももとはこの寡婦の夫の着物ででもあつたらうかと思はれるこまかい大名縞の布で出來てゐた。それもつぎはぎだらけで、またこの光つてゐる垢を落さうと洗濯でもして見たら今度にもうちぎれちぎれに切れ[illegible]いと思へるやうなもので出來た布團であつた。そのうち私は樣々の生活もしたし木賃宿にもとまつたし、また變なことを言ふやうだが私はそんな人たちに或る親しみを持てるので[illegible]貧民窟なども歩きまはつて見たこともあるけれども、そのどんな機會にも、あれほど――あの時私自身が着て眠つたものほどきたならしい布團はあとにもさきにも見たことはない。世間には無論布團のない人もたくさんあるだらうが、無いのは別として有る以上はあれよりきたないのがあり得るだらうとは、私もちよつと想像しかねる。

　それでも夜が明けて、私が出發しようとする時には彼女は私の爲めに握飯を二つ用意してくれてあつた。それから彼女は私に六錢くれようといふのであつた――

「これを持つて行きなさい。もつとあげたいが、どうもこれよりないのだ。子供が學校へ上るのでお金がいつた。東京へも行かなければならない。ほんの志だ」

そんなことを述べて、彼女は私に惠みをする

のではなくあの昨夜の御神像を描いたお禮のつもりらしかつた。私は無論受けようとはしなかつた。しかし女は私の拒むのを聞き入れなかつた――

「あなたはまだ貧乏は知らないのだ。たつた六錢だけれども、これからさきには今もう一錢だけ、たつた一錢だけあつたらなあと思ふやうな目を見ることが無いとは言へない。その時の用意と思つて持つて行つて下さい」

彼女はさうも言つた。それから私の着物がきれいすぎるといふことをもう一ぺん言つた。私はその六錢を受けて、それから女に名をたづねた。

「イタヤきよ」と女は答へた。

「どんな字です」

「木へんの板に谷です」と女は答へた。それぐらゐの文字を知つてゐたのである。

私はそれから大垂水峠を越して三日ほど歩いた。三十四五里行つたが、四日目にはもう到底これ以上つづけることが出來ないのを悟つて東京へ引返した。

東京へ來てから、私は板谷きよに御禮のはがきを出した。

「お絹とその兄弟」を讀んだ時、八王子の近所の田舍のことやら、それから自然に板谷きよのことなどを聯想したが、私にふと妙な不安があつた。それはあの時、あの物置小屋のやうな家を現に目の前に見た時には別に何とも考へなかつたことで、それだのに後になつて思ひ出した時に氣がついたのだが、あの川原のなかの家は、もし出水でもあつた時には流れてしまひはしないだらうか――ありさうなことだ。無いとは限らない……

それから五年經つた。

私はこの間八王子へ行つて來た。八王子までの切符を買つて、かへりがけに立川の方をまはつて來るつもりでゐた。ところが八王子へまだつかないうちに、――さう、八王子まではまだもう一つ間があるのだが、立川の驛まで來ると、私は古いあの苦しい旅の記憶が生生じて來た。私は豫定をまるで逆にして立川で汽車を下りると、八王子まで歩くつもりになつた――せいぜい三里ぐらゐの道のりであらう。私はその邊を歩いたことは前にも言つたとほりだけれども、停車場の方に知らなかつた。人にたづねながら古い街道の方へたどつて來た。あの邊の風景はほんとうに平凡で素直だ。何でもなくつて面白い。たうとう見覺えのある道へ出た。草や木などにでも馴染のあるのはうれしいものだ。ことに私はさういふものが好きだから、丁度人の顏つきやなどを思ひ出すやうに、時時はいろいろな樹の枝ぶりなどを思ひ出すほどの私である。

あの夕方に疲れた足でとぼとぼと辿つた道を、來て見ると私ははつきり知つてゐた。季節も偶然同じやうに晩春であつた。お寺のところは通らなかつたが、あの水車小屋の方へは出た。それから川のあるところへ通ふ道であつた。あの朽ち腐つてゐた小さな板橋は見事な石橋に變つてゐた。――その下をくぐつてゐる小さな流れは、あの夕方私がそれのせせらぎの爲めに足を留め、その次の朝私はそこへ下りて行つて、そこで口を嗽ぎ顏を洗つたところである。私は向うの方をながめてあの物置小屋のやうな板谷きよの家を搜して見た。搜すまでのことはない。川原のなかに一つぽつんと目につく筈である。それだのに、その家が無かつたからである。その家はなかつた。けれどもそれと同じ場所に一軒のもつと新らしくつてもつと見ばのいい小屋がある。

—やあ、新築をしたのだな—私は心のなかでさう思つたが、新築といふ言葉が新營のそれらの小屋に對して何となく自分ながらをかしかつた。で、私はひとりで微笑しながら—ひよつとすると、出水でまへの小屋が流れたのかも知れないと思ひながら、私はその家を見つづけながら歩いて行つた。と、不意にその小屋のなかから馬が首を出した。—あゝ、馬小屋であつたか—私はさう氣がついたがそれにしても、板谷きよの古い家よりも馬小屋の方がまだしも立派であつた。—さうしてそれははつきりと目の前にくらべて見ることが出來た。といふのはもう無いものと思つたあの古い小屋は、歩いてくるうちにその新らしい馬小屋のかげから見えて來たのである。—馬小屋の屋根の方がずつと背が高い。馬が首を出した時に、さうして板谷きよの家がこの馬小屋の隣にまだあることを發見した時に、私が直ぐに思出したのはあの礫を運ぶ荷馬車の男であつた。板谷きよは、なるほどあの馬車屋の女房になつたのであらう……ありさうなことだ。あつていいことだ。——私は晴やかに笑へたい氣持であつた。

私は彼女の家の前に立つて見た。障子は閉めてあつたし、その破れからちよつとなかを覗いて見ると、誰もゐないやうなけはひでもあつたし、またゐるらしい氣もした。私はわざわざ障子を開けてこの家を訪ふほどのことも無いと思つた。ふとふりかへつて見ると、そのあたりの川原は描いて見てもよかつた。スケッチブックをとり出して私は描き出した

氣がついて見ると自分のうしろに、私の描いてゐるのをしきりに見てゐる子供がひとりゐた。いつどこから來たのだか知らなかつた。私はちよつとふり返つて見た——十一二の子供であつた。この子だらうと私は思つた

—坊やは畫が好きだね？

—！—子供はうなづいたやうであつたが言つた。「好きだ」

—自分で描けるかい」

—描けないよ」

—坊や學校へ行つてるだらう？—

あ

—何年生だ？」

—一年生だよ

—えゝ？ 一年生だ、そんな大きな體をしてかい？—

—落第したんだ、落第したからやめちやつたんだ、また今年から行くやうになつたんだ—子供はこんなことを答へたが、突然大きな聲を張上げて叫んだ。おかあ、おとう見て、馬、描いてゐるよ——

見ると私のうしろに、あの小屋のなかから八つぐらゐの女の兒が顔を出してゐた。この子供たち兄弟は、五年前のあの子供たちにちがひなかつた——どこに見覺えはなかつたけれど、おみさといふ女の子の名は、東京からお土産を約束する母親の聲音と一緒に私の耳にはつきりとした思出があつた。私は描く手をやめて言つた。

—君たちは兄弟だね、あのうちの子だらう？

お母さんは板谷きよといふのだらう？

……男の子はしばらく考へてゐた。それから、さうだよ、と言つたのは、女の子と男の子と同じだつた。

—お母さんは今うちにゐるかい？—

—ゐないよ」と男の子が言つた。

「どこへ行つたの？

東京だ

—東京へよく行くのかな。親類でもあるのかい？」

—…………」

「いつ歸つてくるの？」

「夕方になつたら」女の子が言つた。

「用事に行つたのかい？」

「ゴミ上げだい！」男の子が叫んだ。

「ゴミ上げ？」

「うむ、さうだよ。なあ、おみさ。夕方になつたらお父つあんもお母さんも橋のところへ蒸汽で歸つて來らあなあ、蒸汽のなかで遊ぶんだなあ、面白いよ」

ゴミ上げといふのはどんなことだか尋ねて見たけれど、男の子も女の子も要領を得た返事をしなかつた。

子供たちは私の描くのを見るのに飽きたと見えて、ふたりで追つ驅け合つたりしてふざけ合つてゐたが、そのまゝどこかへ行つてしまつた。けれどもしばらくすると再び彼等は、手に蓮華草などを摘み集めて歸つて來た。男の子はその一束ねの草花を默つて押しつけるやうに私の方へ差出した。年の割にはずつと幼い人懐つこい仕方であつた。私にそれをくれようといふのであらう。

「有難う。坊やは一たい何ていふ名だい？」

「ハ……」

「ハ……原田……苗字だね、さうか、さ

もやつぱり原田か」

「うらん。ハラ――だ」

「原田ではない――原かい？」

「…………」

「お父さんの苗字だね――お父さんはいつ來たの」

「來やしないよ。前からあるよ」

「來たのはお父つあんぢやないよ――お母さんだ」女の子は男の子の言葉を補ふやうに言つた。

お母さんが來たんだ？ 私には子供らの言葉の意味がどうもよくわからない……

「うん、別のお母さんが來たんだ――もう先にだ」女の子の說明はもつと私をわからなくした……

「それぢや」と私は言つた。「お母さんは何といふのだ――板谷きよ、ぢやないのか？」

「お母さんも原だ！」と男の子が言つた。

「でも、さつきは板谷きよだと言つたではないか？」

……男の子は默つてしまつた――どうもこの子はいくらか低能兒である。

私は子供らの言葉をさまざまに自分で想像して見て、たうとうかう聞いて見た「そや、お母さんは二人あるのかい」

「さうだよ、二人あるのだ――前のお母さんと後のお母さんと……」女の子の返事である。

「然うか、それぢやその前のお母さんはどうした――板谷きよといふお母さんは？」

「死んぢやつたよ――もう先に……」

「もう先に……」

「なあ、おみさ、砂村に打ち上つたんだなあ」

男の子はそのことなら自分でも知つてゐるといふやうに言ひ放つた。

こんな子供たちを相手にして聞いて見てもわかりさうなことでもなかつたから、私はもうそれ以上は聞きもせずに歸つた。

――しかし、砂村に打ち上つたといふあの女は家ごと流れたのでないことだけは確だ。あの納屋のやうな家はそのわきに馬小屋が出來てゐる外は變つたこともなくもとのまゝに在つたのだから。

（大正十一年六月作）

年譜

明治二十五年（一歳）

四月九日、和歌山縣東牟婁郡新宮町に生る。豐太郎の長男なり。父祖はみな醫を業とす。

明治三十七年

縣立新宮中學校に入學す。將來の志望を問はれたるに對し、文學者たらむ事を答ふ。近視眼者なりしことを知る。また齲齒を病むこと頻なり。

明治三十九年

同校第三學級に於て原級に留めらる。代數幾何を解すること淺く、且、文學書を耽讀し、放縱にして不良性生徒として懲戒するの意あるものなり。奥榮一と相知り、日夕、共に文學を談ず。

明治四十一年

夏期休暇中、町内有志者の開催せる文學講演會の席上に於ける一場の談話は地方教育會の物議を釀し、無期停學を命ぜらる。この文學講演會に於て、生田長江、與謝野寛、石井柏亭の諸先輩を知る。校内に於て同盟休校の事あり、總數五百名の生徒のうち三百五十人の參加するものなり、この騷動の首領を以て擬せらる。しかも無期停學の懲戒は解かれしも、身邊の甚だ多事なるを煩はしとし鄉里を出奔せんとす。志成らざりしも母の同意を得て上京す。約一週間にして電報に接し歸鄉す。學校の特別教室に放火し、その一棟を燒失せしめたる者あるに因つてなり。偶上京中なりしをもつてこの事件に關係なかりき。

明治四十三年

三月、中學校を卒業し、四月、上京す。生田長江に師事し、又與謝野寛によりて詩歌の批評を受く。堀口大學と相知る。九月、堀口大學と共に慶應義塾大學豫科文學部に入學す。永井荷風の教を受けんことを願へるなり。以後三四年間に二三の散文小品及び若干の詩作あり。「三田文學」「スバル」「我等」―萬造寺齊の發行せるもの―等に掲げらる。當時の詩作中の一部分は後年の詩集のなかに採錄せり。

大正二年

慶應義塾を退學す。既に先年よりただ學籍を置きしのみにて全く通學せざりしなり。徵兵檢査を受く。近視眼九度、體重また甚だ輕く丁種なり。或るプラトニックラヴによりて身心甚だしく惱めり。慢性の不眠症に罹る。

大正四年

十二月、E・Y女（當時十八歲）と同棲す。無名の一女優なり。

大正五年

四月、E・Y女及び愛犬二頭、愛猫二匹と共に神奈川縣都筑郡中里村に轉居す。

九月、「病める薔薇」の腹案成る。

十一月、小品「西班牙犬の家」を江口渙等が

編輯するところの同人雜誌「星座」に揭ぐ。
十二月、再び出京す。

大正六年

五月、『病める薔薇』（『田園の憂鬱』第一稿）のうち四十枚成る。雜誌「黑潮」に揭げらる。
六月、M・K女（當時二十歲）と同棲す。
十月、『病める薔薇』後半五十枚、意に滿たずして破毀す。『或る女の幻想』を雜誌「中外」に揭げらる。生田長江の推薦するところなり。
十二月、鄕里に歸る。同月十四日再び新に『田園の憂鬱』の稿を起す。

大正七年

一月中旬、『田園の憂鬱』未定稿全部成る。
三月、上京す。
四月、『李太白』成る。「中央公論」に發表す。谷崎潤一郎の推薦するところ也。
六月、『指紋』成る。「中央公論」に發表す。
八月、谷崎潤一郎及び「中外」記者の勸めに從ひて「田園の憂鬱」第二稿を發表す。
九月、「お絹とその兄弟」成る。諏訪三郎と相知る。「中央公論」に發表す。

十二月、短篇集『病める薔薇』天佑社より出版せらる。

大正八年

四月、『どうして魚の口から一枚の金が出たかといふ神聖な噺』（後に『最もよき夕』と改題）、八月、『笛吹きと王樣との話』、九月、『海邊の望樓にて』、十月、『美しき町』（後に『夢を築く人人』）、他に『見失はれた白鳥の話』等の作あり。
二月、故富ノ澤麟太郎と相知る。短篇集『お絹とその兄弟』新潮社より出版せらる。
六月、長篇『田園の憂鬱』（定本）新潮社より出版。
十二月、短篇集『美しき町』天佑社より出版せらる。

大正九年

一月、『佐藤春夫選集』春陽堂より出版せらる。
二月、極度なる神經衰弱のため鄕里に歸る。
六月、臺灣及び支那福建に旅行す。
十月、歸來、M・K女と別る。

この年、作品殆んど無し。

大正十年

三月、『星』、八、九、十、十一月、『南方紀行』、十月、『その日暮しをする人』等、僅に三四の作あり。
五月、『殉情詩集』、七月、短篇集『幻燈』、『南方紀行』新潮社より出版せらる。
三月、谷崎潤一郎と交を絕つ。
十月、稻垣足穗と相知る。

大正十一年

一月より十二月まで長篇『都會の憂鬱』を「婦人公論」に連載す。四月、『佗しすぎる』、六月、『一夜の宿』、『厭世家の誕生日』等の作あり。
五月、感想集『藝術家の喜び』を金星堂より、八月、中篇『剪られた花』（『その日暮しをする人』を書きつづけたるものなり）新潮社より出版せらる。
五月、高橋新吉と相知る。

大正十二年

五月より八月まで『美人』を「新潮」に連載。

十月、『魔鳥』、『わが回想する大杉榮』、十一月、『あさましや漫筆』を發表。

二月、詩文集『わが千九百二十二年』、八月、支那短篇集『玉簪花』を新潮社より、七月、短篇集『佗しすぎる』改造社より出版せらる。

大正十三年

一月、『父の夢』、『對話』『退屈問答』、二月、『車窓殘月の記』、三月、『囚人』、『處女戯曲・暮春插話』、『評論・風流論』、六月、『賣笑婦マリ』、十月、『窓展く』、また十月より『秋風一夕話』等を發表す。

六月、『暮春插話』を明窓社より出版す。

三月、小田中タミ(當時二十二歳)を妻とす。敎坊の出なり。

十月、郷里に歸る。

大正十四年

一月、『役者誰』、『時計のいたづら』、三月、『霧社』、四月、『砧』、『マダム・ルックスの遺書』、五月、『女誡扇綺譚』、十月、戯曲『日光室の人人』等を發表す。又、七月より長篇『この三つのもの』を約二年半の豫定を以て「改造」に連載し初む。

大正十五年　昭和元年

一月、『F・O・U』、三月、『晩春』、四月、『東父犢に飲ふ』、九月、『新秋の記』等を發表す。又、一月より「新潮」に自傳の少年時代「回想」を連載、十一月より「報知新聞」に「警笛」を連載、翌年三月に到つて完結す。

二月、『佐藤春夫詩集』、『女誡扇綺譚』を第一書房より、三月、短篇集『窓展く』を改造社より出版す。

四月、報知新聞社客員となる。

昭和二年

二月、『惡魔の玩具』、三月、『春風馬堤圖譜』、『谷崎潤一郎、人及びその藝術』等を發表す。又、一月より『去年の雪いまいづこ』を「婦人公論」に連載す。

七月、支那に旅行し、八月上旬歸る。

少年の日

1

野ゆき山ゆき海邊ゆき
眞ひるの丘べ花を敷き
つぶら瞳の君ゆゑに
うれひは青し空よりも。

2

影おほき林をたどり
夢ふかきみ瞳を戀ひ
あたたかき眞晝の丘べ
花を敷き、あはれ若き日。

3

君が瞳はつぶらにて
君が心は知りがたし。
君をはなれて唯ひとり
月夜の海に石を投ぐ。

4

君は夜な夜な毛糸編む
銀の編み棒に編む糸は
かぐろなる糸あかき糸
そのラムプ敷き誰がものぞ。

(『殉情詩集』より)

昭和二年八月一日印刷

昭和二年八月五日發行

現代日本文學全集　第二十九篇

著者　里見弴

著者　佐藤春夫

發行者　山本　美
東京市麹町區内幸町一丁目參番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌　東京市麹町區内幸町一丁目參番地
幸ビルディング壹階
改造社
振替　東京八四〇二番
電話　銀座一七三三番
銀座四五五八番
銀座五〇四六番

株式會社秀英舍印刷

秀英舍製本

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03110 3435

改造社